

(完結)閃の軌跡 I ～鋼の意志 空の翼～

アルカンシェル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自身の中にある獣じみた《力》を畏れ、ユン老師に修行を打ち切られたリインは衝動に任せて家出をしてしまう。

新たに継りつこうとしたのはリベールにいる兄弟子。

しかし、そこでリインは思いがけない出会いを重ね、成長していく。《リベールの異変》、《影の国》を駆け抜け、自分の中に眠る《力》を受け入れたリインが今帝国の、トールズ士官学院の土を踏む。

*この作品は前作の《閃の軌跡0》

<https://syosetu.org/novel/1379>

30 /

の続編になります。

目次

1話	入学式	1
2話	オリエンテーション	19
3話	学生生活始まる	40
4話	その日の第三学生寮	58
5話	リインVSⅦ組	79
6話	舞台裏の大人たち	94
7話	リベールからの届け物	108
8話	実技テスト	124
9話	特別実習	139
10話	翡翠の公都Ⅰ	152
11話	翡翠の公都Ⅱ	163
12話	翡翠の公都Ⅲ	178
13話	翡翠の公都Ⅳ	191
14話	翡翠の公都Ⅴ	208
15話	火種	237
16話	魔都Ⅰ	251
17話	魔都Ⅱ	270
18話	魔都Ⅲ	285
19話	魔都Ⅳ	296
20話	後始末	306
21話	堕ちる女剣士	322
22話	剣の道	339
23話	第二回実技テスト	360

24話	特別実習 五月	372
25話	鉄道憲兵隊Ⅰ	380
26話	鉄道憲兵隊Ⅱ	391
27話	鉄道憲兵隊Ⅲ	404
28話	鉄道憲兵隊Ⅳ	414
29話	ミステイのお悩み相談	434
30話	親	444
31話	リインのとある一日	461
32話	第三回実技テスト	472
33話	鉄道	483
34話	ノルド高原Ⅰ	492
35話	ノルド高原Ⅱ	503
36話	ノルド高原Ⅲ	519
37話	ノルド高原Ⅳ	532
38話	ノルド高原Ⅴ	542
39話	ノルド高原Ⅵ	565
40話	帰郷く迷いの果てく	574
41話	その日のⅦ組	584
42話	妖精の事情	597
43話	妖精の旅 前編	608
44話	妖精の旅 後編	625
45話	作戦A	642
46話	新たな力	653
47話	対話	666
48話	第四回実技テスト	677

7 3 話	塩の大地 VI	997
7 2 話	塩の大地 V	988
7 1 話	塩の大地 IV	973
7 0 話	塩の大地 III	958
6 9 話	塩の大地 II	946
6 8 話	塩の大地 I	938
6 7 話	特別実習八月	929
6 6 話	第五回実技テスト	913
6 5 話	過去とこれから……	903
6 4 話	リベール V	889
6 3 話	リベール IV	873
6 2 話	リベール III	862
6 1 話	リベール II	850
6 0 話	リベール I	838
5 9 話	旅行前日	826
5 8 話	変わる日々、変わらない日々	815
5 7 話	それぞれの思惑	795
5 6 話	緋の帝都 VIII	784
5 5 話	緋の帝都 VII	762
5 4 話	緋の帝都 VI	751
5 3 話	緋の帝都 V	732
5 2 話	緋の帝都 IV	721
5 1 話	緋の帝都 III	712
5 0 話	緋の帝都 II	700
4 9 話	緋の帝都 I	691

7 4 話	塩の大地 VII	
7 5 話	塩の大地 VIII	
7 6 話	塩の大地 IX	
7 7 話	塩の大地 X	
7 8 話	塩の大地 XI	
7 9 話	塩の大地 XII	
8 0 話	特別実習を終えて	
8 1 話	クロスベルに向けて	
8 2 話	取引	
8 3 話	出立	
8 4 話	西ゼムリア通商会議 I	
8 5 話	ガレリア要塞 I	
8 6 話	西ゼムリア通商会議 II	
8 7 話	ガレリア要塞 II	
8 8 話	西ゼムリア通商会議 III	
8 9 話	西ゼムリア通商会議 IV	
9 0 話	西ゼムリア通商会議 V	
9 1 話	西ゼムリア通商会議 VI	
9 2 話	九月開始	
9 3 話	帰還	
9 4 話	動き始めた意志	
9 5 話	迷い人	
9 6 話	踏み出す者たち	
9 7 話	プロジェクト・テイルフィング	
9 8 話	親睦会	

99話 第六回実技テスト

100話 VII組VS特務支援課

101話 カレイジャス

102話 紺碧の海都I

103話 紺碧の海都II

104話 紺碧の海都III

105話 紺碧の海都IV

106話 紺碧の海都V

107話 紺碧の海都VI

108話 紺碧の海都VII

109話 紺碧の海都VIII

110話 紺碧の海都IX

111話 紺碧の海都X

112話 紺碧の海都XI

113話 紺碧の海都XII

114話 紺碧の海都XIII

115話 紺碧の海都XIV

116話 紺碧の海都XV

117話 紺碧の海都XVI

118話 紺碧の海都XVII

119話 火焰魔人

120話 謁見再び

121話 温泉郷I

122話 温泉郷II

123話 温泉郷III

1 2 4 話	温泉郷Ⅳ
1 2 5 話	プロジェクト始動
1 2 6 話	幕間 クロスベル炎上
1 2 7 話	欺瞞
1 2 8 話	執行者たちの日々
1 2 9 話	交渉と儀式
1 3 0 話	紅と琥珀
1 3 1 話	士官学院祭Ⅰ
1 3 2 話	士官学院祭Ⅱ
1 3 3 話	士官学院祭Ⅲ
1 3 4 話	士官学院祭Ⅳ
1 3 5 話	開戦
1 3 6 話	焰上
1 3 7 話	暗き想い
1 3 8 話	狂いし至宝
1 3 9 話	岐路
1 4 0 話	交渉
1 4 1 話	支援課の真実
1 4 2 話	大乱戦
1 4 3 話	《風の剣聖》
1 4 4 話	クロスベルの行方
1 4 5 話	相克のクロスベル
1 4 6 話	《零の至宝》
1 4 7 話	《碧の虚神》
1 4 8 話	それでも俺は。

あとがき

番外編

ラウラのアルバイト修行

戦術殻の日々、その1

B a d ルート注意 修羅に堕ちて

I F 閃の一步先へ(閲覧注意)

戦術殻の日々、その2 園芸部のリン・オーリオール

I F ■の軌跡

A P 来訪者

1930

1935 1943 1962 1968 1973 1986 1992

1話 入学式

三月三十一日。

帝都東部の小都市トリスタ。

白い花が新たな門出を迎える新入生たちを祝福するように出迎える。

「ライノの花か……こんなに咲いているのは初めて見たな」

トリスタの駅から街に出たリインは頭上に咲き乱れる花を見上げ、そのまま視線を巡らせる。

「ここで二年間、過ごすことになるのか……居心地の良さそうな街だけど……」

眩き、リインは居心地が悪そうにため息を吐く。

同じ新入生たちだろうか、緑と白の制服を着込んだ同年代の少年少女は物珍し気にリインを振り返る。

「……赤い制服が珍しいんだろうな」

トールズ士官学院において緑は平民を、白は貴族をそれぞれ示している。

しかし、リインが着ている制服はそのどちらでもない赤い制服。

この意味はすでにリインは知っているのだが、今日初めて見る新入生たちにはまだ知ることのないものだった。

「——と」

現実逃避をしながらもリインは背後に無造作に近付いて来る気配に、道を開けるように身体を動かす。

「あ……」

背後から頭上のライノの花に見入っていた歩いてきた少女は目前ですれ違ったリインと目が合い思わず足を止め、慌てて飛び退いた。

「リリリリリ、リイン・シユバルツアーツ！ どうしてここに!?!」

「どうしてって随分とご挨拶だな。試験に合格したからここにいるに決まっているじゃないか。君だってそうだろう?」

「それは……そうかもしれないけど……」

リインの指摘にアリスはしどろもどろになりながら頷く。

「この前はレンの誕生会に来てくれてありがとう……」

それにしても同じ列車に乗っていたんだな。俺は昨日帝都で一泊していたんだけど——」

「ご、ごめんなさい。急ぐからあたしは先に行くわ」

世間話を始めたリインの顔を見ることなくアリサは捲し立てて駆け出して行ってしまった。

「……………何か気に障ることもしたか？」

以前に会った時とはまるで違う反応にリインは首を傾げる。

「ふふ……お嬢様つたら初々しいですね」

立ち尽くすリインの背後から女性の声がかかる。振り返るとそこにはメイドがいた。

「また貴女ですかシャロンさん」

「お久しぶりですリイン様」

シャロンは長いスカートの裾を広げ、恭しく頭を下げる。

「何をしにきたんですか——って聞くまでもないですね」

その手の中にあるラインフォルト社製のオーバルビデオカメラを見てリインは肩を竦める。

「程々にしてあげてくださいよ……本当にそういうのは本人からしたら嫌な物なんですから」

とはいえ、リインもその時のイベントを写真に残しておきたいという親心が分からないわけではない。

「ふふ、それは御安心を……」

ところでリイン様、聞いたところによると写真が趣味だと聞いたのですが」

「趣味というよりも家族への近況報告に使っていたんですけど、それが何か？」

「でしたらこちらを受け取って貰えませんかでしょうか？」

そう言って差し出したのは新品の箱に収まったオーバルカメラだった。

「ラインフォルト社製の最新機種です。画質よりも持ち回りを優先した小型オーバルカメラ……」

「耐衝撃性に優れどんな攻撃でも壊れない——」

「ヴァルターの一撃でもですか？」

「……耐熱性に優れどんな炎にも耐える——」

「マクバーンの黒焰にも耐えるなんて凄いですね」

「……生活防水は当然として、水深50アージユの水圧にも耐えられる最新機種なんです」

「そこは普通なんですね」

「ともかく、これでリイン様の楽しい学院生活の記録を残してください」

「……アリサの、学院生活ですよね？」

「一枚につき、最低50ミラお支払います。それからできれば使い心地をラインフォルト社にレポートしていただけたら嬉しいですよ」

「本当に相変わらずですね」

リインは良い空気を吸っているメイドがやはり執行者の一人なのだと思えて実感する。

「ふふ、それではわたくしはお嬢様の後を追わせていただきますので失礼します」

シャロンは優雅に一礼して音もなくリインの目の前から消えた。

流石の速さだと思うが、その使い方にアリサを思わず同情してしまう。

「やれやれ……」

リインは肩を竦め、受け取った箱からオーバルカメラを取り出してスイッチを入れて、咲き誇るライノの花を撮るのだった。

・*

トリスタ駅の目の前には小さな公園があり、その周辺にはいろいろな店が並んでいた。

「一休みにはちょうど良さそうな公園だな……って……」

リインはそこで日当たりのよいベンチで寝転がる銀髪の女の子を見つけた。

「君は……」

見覚えのある女の子にリインは軽く驚く。

見れば、彼女も赤い制服を着ていてリインと同じ新入生だと分かる。

「もうすぐ入学式だし、一応声をかけておくか……」

そう考える、クロスベルでようやく知った彼女の名前を呼ぼうと近付くと、フィーは突然勢いよく跳ね起きた。

「っ——」

睡眠中に接近してきた不審者にフィーはどこからともなく小型の銃剣を薙ぐ。

「こらっ！… こんな人の往来がある場所でいきなり武器を抜くな」

首筋を狙った一撃が届くよりも速く、リインは刃を掴んで彼女の手から銃剣をもぎ取って窘める。

「——リイン・シュバルツァー……まさか本当に生きてたなんて」

遅れて攻撃した相手を認識したフィーがいつの間にか奪われた銃剣を睨み、不機嫌そうに眉を寄せる。

「久しぶりだなフィー」

リインは《影の国》で会った時の事を思い出しながら言葉をかけると、フィーは意外そうに目を丸くする。

「わたしのこと、覚えてたの？ それにどうして名前を？」

フィーは二年程まえにリベールのボースで戦った時のことを思い出して聞き返す。

あの時も、その後の《リベールの異変》の時もフィーはリインに名前を名乗った記憶はない。

「ああ、少し前にクロスベルでゼノさんとレオニダスさんの二人に会ってな。そこで聞いたんだ」

「ゼノとレオに会った……？」

リインの答えにフィーの視線の温度が下がる。

「フィー……いや、フィーちゃん？」

「呼び捨てでいい。それよりわたしの銃を返して」

「ここで暴れないって約束できるなら」

「ん、約束する」

フィーが頷き、リインは戦意が消えたことを確認して奪った銃剣を投げ渡す。

空中でそれを受け取ったフィーは流れるように後ろ腰のホルスターに銃剣を納めると、踵を返す。

「そろそろ行かなくちゃ」

公園の時計を一瞥すると、フィーはリインの存在を無視して駆け出した。

「はあ……いったいどんな教育をしていたんですか？」

そんな彼女の態度にため息を吐きながら、リインは背後の建物に向かって話しかける。

「すまんなボン。フィーも悪気があったわけやあらへんから勘弁したってや」

「悪気がなければそれで済まされる問題じゃないですよ……俺じゃなかったら大惨事でしたよ」

「いや、おそらくお前だということを確認してから斬りかかっていたな」

「余計にタチが悪いんですけど、それは」

特徴的な方言の男とドレッドヘアアの巨漢の言葉にリインは呆れる。

「で、《西風の旅団》の貴方達がどうしてここにいるんですか？ まさかとは思いますがフィーの入学式を見学に来たなんて言うわけじゃないだろうな？」

「ふ……何や分かつとるやないか」

「フィーの晴れ姿。団長に代わって見届けなければいけないからな」

自信満々に頷く二人にリインは呆れた眼差しを向けて、それを教える。

「トールズ士官学院は有力貴族の子女も通う学院ですから、部外者の立ち入りはできませんよ……」

父兄として参加するにしても、前もって手続きをしておかないと敷地に入ることさえできないですよ」

「何やと!？」

「くっ……だがたかが学院のセキュリティなど我ら西風にかかれば――」

「貴方達が騒ぎを起こせば、フィーに責任が及びますから自重しろ」
頭を抱える二人に白い目を向けてリインも踵を返す。

同じ保護者でもシャロンとは雲泥の違いだとしみじみ思う。

彼女のことだから来賓の許可証は正規の手順で抜かりなく取っているに違いない。

「そうやボン、今からでもボンの親族として口利きして――」

「帰れ」

名案を思い付いたと言わんばかりのゼノの提案にリインは一言で返して、フィーが向かった士官学院への道へ歩を進めた。

・*

七耀教会の前で褐色の肌の長身の男子とすれ違いながら、リインはトールズ士官学院に続く坂道を登っていると見知った気配を捉えた。

「それではラウラ、しっかりと励むが良い」

「はい、父上」

青い髪の女子が父親から大きなトランクを受け取って、踵を返すと颯爽と歩き出す。

「アルゼイド子爵閣下」

そんな彼女と入れ替わるようにリインは気配の主に声をかける。

「リイン君か。話には聞いていたが、無事に試験を合格できたようだな。入学おめでとう」

声を掛けられた男は振り返って相手の顔を確認するも、その顔が見知ったリインのものであると分かると破顔し、次いで祝福の言葉を贈る。

ヴィクター・S・アルゼイド。

帝国南東部の湖畔の町、レグラムを治めるアルゼイド子爵家の現当主。

帝国二大剣術の一つ、《アルゼイド流》の伝承者であり、《光の剣匠》と呼ばれる最高峰の実力者。

「ラウラの入学を見学に来たんですか？」

「ああ、それもあるが、今年はこの士官学院で武術指南をすることになったな」

「武術指南ですか……いくらアルゼイド流の伝承者だからといって、レグラムの当主自らがですか？」

「何も毎日と言うわけではないさ。こちらの都合が良い日に数度指南にくるだけだ」

「なるほど。定期テストや出稽古の一種で、と言うことですか」

「そういうことだ……それにしてもリイン君の制服も赤いのだな」

「ええ。遠目に見えてましたが、ラウラも赤い制服でしたね」

と、リインは先に行った彼女の方へと視線を送るとそこには坂道のアーチの柱の影に体を隠し顔半分を出してこちらをジト目で睨んでいる彼女がいた。

「えつと……」

「くくくつ……」

苦笑するリインに対して、ヴィクターは珍しい娘の姿に声を殺して笑う。

顔半分を隠して隠れているつもりなのかもしれないが、傾けた頭から下がるポニーテールの自己主張が激しく全く隠れていない。

ヴィクターはそんな微笑ましい娘に手を振って見せると、ラウラは慌てた様子で踵を返して駆け出した。

「見ての通り不器用な娘でな……まあ仲良くしてやってくれ」

「はい。分かっています」

「それにしてもリイン君……あの御前試合の日からまた強くなったかな？」

娘の話題を切り上げて、ヴィクターはリインの姿を品定めするように確認する。

「ええ、あれからオーレリア將軍に鍛えられましたから、少しは強くなっていると思います」

「それは重畳。できれば入学式の後にでも……と言いたいところだが、それはまた指南の日の楽しみとさせてもらおう」

・*

坂を登り切るとそこには石造りの立派な建物がリインを出迎えた。「ここがトールズ士官学院……かのドライケルス大帝が設立したときれる学校か」

正門の前には入学を祝う花が供えつけられている。

そして、その前には金髪の少年がリインを待っていた。

「リインさんっ！」

「クリスカ……ちゃんと迷子にならずに来れたみたいだな」

「子供扱いしないでください。流星に一人で列車くらいは乗れますよ」

「はは、そうか……」

無然として言い返すクリスにリインは内心で安堵する。

トールズ入学にあたり、リインは故郷から直接ではなく、前日は皇宮に呼び出され改めてクリス・レンハイムについて話し合うことになった。

彼の正体について知っているのは、学院内では学院長と極一部の教官しか知られていない。

「それで気付かれなかったのか？」

「ええ、自分でも驚いているくらいに誰も僕のことには気付いていませんでした」

いたずらが成功したようにクリスは楽しそうに笑う。

だが、それも無理もない話だろう。

ユミルでの特訓を経て、服の上からでも線が細いと分かる体格には厚みを感じさせる逞しさが制服の上からでも見て取れる。

それに伴い、それまでどこか気弱だった雰囲気も自信が伴った顔つきに代わり、それまでの彼とは異なった印象を与えている。

これなら例え、社交界で顔を合わせた相手であつても《暗示》でサ

ポートする必要はないかもしれない。

「ん……う？」

そこでリインは後ろを振り返ると、坂道を登ってきた導力車がクラクションを鳴らした。

リインとクリスは道を開けると、導力車は二人の前を通り過ぎて校門の前に止まる。

運転手が導力車から降りて、恭しく後部座席のドアを開く。

「——お疲れ様です。士官学院に到着しました」

「ご苦労」

クリスとは質の異なる金髪の男子が革張りのケースを携えて導力車から降りる。

「お荷物、お持ちいたします」

「無用だ。悪目立ちするつもりはない」

「で、ですが——」

「無用と言っている。後は適当に休憩してからバリアハートに戻るが良い」

「は、それでは失礼いたします。佳き学院生活を……お体にはお気を付けてください」

「ああ」

金髪の男子は頷いて踵を返す。

「ユーシス」

そんな彼にリインは手を振って声を掛けた。

「……………ふん……………」

ユーシスはリインを一瞥すると殊更無視するように鼻を鳴らして正門をくぐって行ってしまった。

「あれ…………？」

「今のはユーシスさんでしたよね？ リインさんも会ったことがあるんですか？」

「ああ、御前試合の時に控え室でな……その時は普通に受け答えしてくれたんだけど」

「何かあったんですかね？ でも一番僕のことには気付きそうなユーシ

スさんがあの様子なら安心ですね」

「こら、そういう油断をすると足元を掬われることになるんだぞ」

調子に乗るクリスをたしなめ、ユーシスの反応に首を傾げながらもリインはクリスを促す。

「俺達も行くか、のんびりし過ぎて入学式に遅刻するわけにはいかな
いからな」

「はいっ！」

二人は正門を潜る。

「ご入学、おめでとーございます！」

腕章をつけた小柄な少女と太ったツナギ服の青年がリイン達に近
付いて来る。

「うんうん、君たちが最後までいいだね。リイン・シユバルツァー君とク
リス・レンハイム君——でいいんだよね？」

「え……はい。そうだけど……君はいつたい……？」

飛び級をしているクリスよりも年下にしか見えない小柄な女の子
に名前を呼ばれてクリスは戸惑うが、リインがすかさずに応えた。

「はい。初めまして先輩。もしかして貴女が生徒会長のトワ・ハー
シエルさんですか？」

「え……うん、そうだけど……えへへ、聞いたジョルジュ君、初めて先
輩って言われちゃった」

「良かったね。それよりも早く仕事をしよう……」

それが申請した品かい？ いったん預からせてもらおうよ」

「はい。案内書にあった通りですね」

リインは頷き、肩に掛けていた刀袋を下ろす。

が、自分の前に立ったトワに思わず顔をしかめた。

「ん？ どうかした？」

「いえ、ちよつと重い得物なのでそちらの人に持つてもらった方が良
いと思うんですけど」

リインはクリスが持っていたケースを受け取る青年を指す。

「むっ……わたしはこれでも先輩なんだよ！ それにリイン君達より
も一年早く入学してちゃんと鍛えているんだから少しくらい重い武

器も——」

トワは先輩風を吹かせてリインの手から強引に刀袋を受け取ると、そのまま落とした。

「え……？」

「あ……大丈夫ですか？ 怪我はしていませんか？」

「う、うん……大丈夫だけど、ごめんね落としちゃってすぐに拾うから」

何が起きたのか今一つ理解できなかったトワは慌てて落としてしまった刀袋を掴む。

「ん……！」

頬を膨らませ、顔を真っ赤にしてトワはそれを持ち上げようとするが刀袋はわずかに持ち上がるだけだった。

「無理しないでください」

かわいらしく頑張ってる姿を応援したくもなるが、リインはトワの手から軽々と刀袋を取り上げる。

「あ……」

「ちよつと特殊な得物なんです。決して持てないことはおかしなことではないですから、気にしなくて良いですよ」

「ご、ごめんなさい」

トワは肩を落としてしよんぼりすると、詫びる様に小さく頭を下げる。

「それで貴方に預かってもらって良いですか？」

「落ちた音から察するにかなりの重さみたいだね」

リインは刀袋をしっかりと青年が両手でしっかりと掴んだのを確認して手を放す——のを不意に止めた。

「………以前、どこかで会ったことがありますか？」

「え、僕に？ 君みたいな有名な人に会った覚えはないんだけど」

「………そうですか」

青年の答えに腑に落ちないものを感じながら、刀袋から手を放す。

「っ——アルゼイドの大剣くらい重さがあるね。それにこの感触は太刀かな？ それにもしかして二本入っているのかな？」

「ええ、片方は普通の重さですが、もう片方が特別製なんですけど……大丈夫ですか？」

「うん、運ぶくらいはできるから安心して良いよ……」

「ちゃんと後で返されると思うから、心配しないでくれ」

「入学式はあちらの講堂であるからこのまま真っ直ぐどうぞ……あ、そうそう——」

トワは佇まいを直して改めてそれを言う。

「《トールズ士官学院》へようこそ！」

「入学おめでとう、充実した二年間になるといいな」

「ありがとうございます」

「これからよろしくお願いします。先輩方」

二人に改めて歓迎の言葉で迎えられ、リインとクリスはトールズ士官学院に踏み入った。

・*

入学式は滞りなく進む。

壇上に立つ、ヴァンダイクの祝辞が進んでいくのだが、士官学院という割には学院長の言葉に集中している者は少ない。

それもそのはず、壇上では学院長が話をしているが、脇にはヴァンダイク元帥の名に劣らない錚々たる顔ぶれが並んでいた。

《リベールの異変》から政界へと顔を出すようになったトールズ士官学院の理事長のオリヴァルト・ライゼ・アルノール。

四大名門、アルバレア公爵家の嫡子であり、常任理事の一人であるルーファス・アルバレア。

そして帝国で知らない者はいない《光の剣匠》ヴィクター・S・アルゼイド。

彼らの存在は否が応でも新入生の注目を集めていた。

「——最後に君たちに一つの言葉を贈らせてもらおう」

その一言、特に口調を変えたわけではない言葉に新入生たちは自然と散漫にしていた意識を引き付けられる。

『『若者よ——世の礎たれ』……』

「世」という言葉をどう捉えるのか。何をもって「礎」たる資格を持つのか。これからの二年間で自分なりに考え、切磋琢磨する手掛かりにして欲しい……

ワシの方からは以上である」

締めくくられた言葉を合図に講堂に拍手が鳴り響く。

『世の礎たれ』か……」

「クリスにとっては今さらな言葉か？」

「ええ、よく聞かされていたドライケルス大帝のお言葉です」

「さすがは《獅子心皇帝》と言うべきか。単なるスパルタなんかよりも遙かに難しい目標だな」

「そうですね？　すでにリインさんは《英雄》なのに」

「クリス、別に俺はそんな大層な人間じゃないんだけどな」

クリスの言葉にリインは苦笑を浮かべる。

「――以上で《トールズ士官学院》、第215回入学式を終了します……」

以降は入学案内書に従い、指定されたクラスへ移動すること。学院におけるカリキュラムや規則の説明はその場で行います。以上――解散！」

壇上上がったハインリツヒ教頭の言葉に、席に座っていた緑と白の制服の新生たちは次々に立ち上がって講堂から出ていく。

リインとクリスを始めとする深紅の制服を着た学生たちだけがその場に取り残される形になる。

「とうとう始まるのか……」

「そんなに気を張るな」

身震いするクリスの背をリインは叩く。

「で、でも……」

「これから二年間、ずっと肩肘を張って生活するつもりか？」

そんなのは疲れるだけだし、もう賽は投げたんだ。いつそ思う存分この学院生活を楽しむと良い」

「リインさん……」

「そうだな……まずは俺を呼び捨てにすることから始めてみるんだ

な」

「そんな畏れ多い」

「それはこっちの台詞なんだが……遠慮するな、これから同じクラスメイトになるんだから」

「い、いえ……やはり年上ですからリインさんと呼ばせてください」

「そうか……まあいつでも気が向いたら呼び捨てにしてくれ」

ため息を吐いてリインが視線を巡らせると、講堂から出ていくオリヴァルトと目が合った。

オリヴァルトは式中の真面目な顔を崩し、親指を立てて拳をリインに向けて良い笑顔を残して去って行った。

「はいはい。赤い制服の子たちは注目〜!」

声と共にリイン達の前に女の教官が立つ。

「サラさん。本当に教官になっていたんですね」

「リイン君は久しぶりね。ま、積もる話は後にしましょう」

元遊撃士のサラは軽くリインと再会を喜ぶと、残った十人の生徒を見渡した。

「どうやらクラスが分からなくなってる戸惑っているみたいね……」

実は、ちよつと事情があつてね。君たちにはこれから『特別オリエンテーション』に参加してもらいます」

サラに促されてリイン達は講堂を後にして、校舎には入らずそのまま外をぐるりと歩く。

辿り着いたのは綺麗な本校舎の裏手にある古びた旧校舎。

「~~~~~♪」

サラは鼻歌を歌いながら、扉を開いて中に入っていく。

「いかにも出そうな建物ですね……ってどうかしましたか?」

「いや……何でもない」

ここに辿り着くまでに感じた引き合う引力のような感覚にリインはここに《アレ》があるのだと察する。

「ん……?」

他の生徒たちが校舎へと入っていく中でリインは視線を感じて振り返る。

旧校舎を見下ろせる丘の上には黒いツナギを着た女性と銀髪の青年が立っていた。

「……………アンゼリカさん？」

見覚えのある女性にリインはその場から一礼して、旧校舎へと入っていった。

サラが壇上に上がり、その下に他の生徒たちが集まっっていく。

「クリス……………」

「はい。分かっています……………」

『漫然と眺めるな。状況そのものを俯瞰しろ。その上で、そこにある要素を瞬間的に掴み取っておく』ですよね」

「分かっているならいい」

クリスの答えに満足し、リインは彼の隣。他の八人からは数歩離れた場所からサラの事を見上げる。

「む……………まあいいか……………」

あたしはサラ・バレストアイン。今日から君たち《Ⅶ組》の担任を務めさせてもらうわ。よろしくお願いするわね」

《Ⅶ組》？」

「あ、あの……………サラ教官？」

この学院の1学年のクラス数は身分や出自に応じて分けた五つだったと記憶していますが」

眼鏡の女子が恐る恐るといった様子で尋ねる。

「お、さすが首席入学。よく調べているじゃない……………」

そう、五つのクラスがあつて貴族と平民で区別されていたわ。——あくまで“去年”まではね」

「え……………？」

「今年からもう一つのクラスが新たに立ち上げられたのよね。すなわち君たち——身分に関係なく選ばれた特化クラス《Ⅶ組》が」

「身分に関係ない……………って言われてもな」

サラの言葉に一同は驚きを示しているが、リインとしては集まった青少年少女たちが全くの無作為に選ばれたとは到底思えない。

身分を偽っているクリスは別にして。

貴族としては四大名門のユーシス・アルバレア。強い影響力を持っている家であるラウラ・S・アルゼイド。

平民としては帝都知事の息子のマキアス・レーグニッツ。第四機甲師団、師団長の息子であるエリオット・クレイグに、帝国最大の重工業会社の令嬢であるアリサ・ラインフォルト。

さらには元猟兵のフィー・クラウゼル。

他の眼鏡の女子と異国風の男子はリインは知らないが、どれも男爵家など比ではない影響力を持つ子女達ばかりだった。

「——冗談じゃない！ 身分に関係ない!? そんな話聞いてませんよ!？」

と、サラの言葉に眼鏡をかけた男子が激昂した。

「えっと、たしか君は——」

「マキアス・レーグニッツです！」

それよりもサラ教官！ 自分はとても納得しかねます！ まさか貴族風情と一緒にクラスでやって行けと言うんですか!？」

まるで一緒に空気を吸うのも嫌だと言わんばかりの態度にリインは眉を顰める。

「落ち着けレーグニッツ。それをこれから説明してくれるんだろ？」

そんなに噛みついたらサラ教官が説明をできないだろ」

「っ——裏口入学の卑怯者が偉そうなことを言うなっ！」

落ち着かせようとしたリインにマキアスは怒鳴り返す。

「裏口入学って……そんなこと俺はしてないんだけどな」

「ふん！ 口先だけではどうとでも言える。年末に生還したと報道された君がこの学院の生徒になっているのが何よりの証拠だ。これだから貴族は」

吐き捨てた侮蔑に、リインは確かにそんな見方もあると納得してしまふ。

「オリヴァルト皇子にうまく取り入ったからって、誰もが怯むと思ったら大間違いだぞ！ いいか、僕は絶対に——」

「はいはい、そこまで」

サラが手を叩いてマキアスの言葉を遮る。

「色々あるとは思うけど文句は後で聞かせてもらおうわ。そろそろオリエンテーリングを始めないといけないしね……」

リイン君——いえ、リイン。それからクリス、もうちよつとこつちに寄りなさい」

手招きをするサラにリインはため息を吐き、迷いを見せるクリスを促して境界線を踏み越える。

「それじゃあさつそく始めましょうか♪」

そしてサラは柱のスイッチを押す。

「みんな、足元に気を付けろ！」

「え——」

フィーとクリスは素早くリインの言葉に反応して傾いた床に這い、石畳の合間の窪みに指を掛けて体を支える。

「なっ!？」

「うわわっ……」

他の面々は忠告も虚しく突然傾いた足場に驚いて滑り落ちていく。

「きやあつ……!？」

その中で忠告に半端に反応してしまったアリサが大きく態勢を崩す。しかし——

「よつと……」

傾いた床を軽く蹴ってリインはアリサの下に近付き、頭から下へ倒れそうになった彼女を抱きかかえて、しゃがんで傾いた床にバランスをとって立つ。

「大丈夫か？」

「な……な……な……」

お姫様だつこで抱きかかえられたアリサは目の前に迫ったリインの顔に狼狽する。

「ちよつとあんた達、通用するとは思ってなかったけど一緒に落ちなさい。オリエンテーリングにならないでしょ」

「それは良いですけど、いきなり過ぎるんじゃないですかサラ教官？

誰がどれだけ動けるのか知らないでこんなトラップはやり過ぎです」

「仮にも士官志望が何甘い事言っているのよ。それに下にはちやんとクツションを用意してあるから安心しなさい」

「確かにそうかも——」

「い——いやっ!」

「んがっ!」

言葉の途中、腕の中で顔を真っ赤に染めたアリサがメイド直伝の掌底でリインの下顎をかち上げた。

助けた相手からの突然の攻撃など完全に想定外だったリインはもろにその一撃を食らいバランスを崩し——

「え……あ……きやああっ!」

アリサを抱えたまま転がるように落ちていくのだった。

「うわ……」

「リ、リインさん!?!」

そんな二人にフィーは呆れた眼差しで見送り、クリスは支えていた手足を放して二人の後を追う。

「ほら、フィー。あんたも行つて来なさい」

「はあ……メンドクサイな」

気怠いため息を吐き、フィーは観念して床から身を放すのだった。

2話 オリエンテーリング

・*

「クツ……何が起こったんだ……？」

「いきなり床が傾いて……」

マキアスと眼鏡の女子が身を起こす。

「やれやれ、不覚を取ってしまったな」

「ここは先程の建物の地下か……」

「フン……下らん真似を」

ラウラと長身の男子、そしてユーシスが立ち上がり、広い空間を見回す。

「はああくっ……心臓が飛び出るかと思った」

赤毛の男子、エリオットは胸を押さええて半身を起こす。

そこに滑り台となった壁面からフィーとクリスが危なげなく着地した。

「……ふう」

「大丈夫ですかリインさん……」

追い付いたクリスは派手に落ちたリイン達の身を案じるが、そこには仰向けになったリインに上から顔に胸を押し付けるように覆い被さるアリサの姿があった。

「こ、これは……やっぱりあの記事は本当だったのか！」

そんな二人の姿を見てマキアスが憤る。

「ううん……何なのよ、まったく……」

転がり落ちたものの怪我らしい怪我はなく目を回しただけのアリサはようやく顔を上げ今の自分の態勢に気が付く。

「なっ——」

慌ててアリサが飛び退くとリインは立ち上がる。

「今回は俺のせいじゃないと思うんだけど——」

「~~~~~」

一応の弁明をするが、顔を羞恥で真っ赤に染めたアリサはその衝動

を抑え切れる様子ではなかった。

ルーファスの教えを思い出しアリサに向き直る。

「いや弁解はしない。一発、張り飛ばしてくれて構わない」
「っ——」

リインの許可が出てしまったこともあり、アリサは我慢しようとしていた右腕を振りかぶって、リインの頬をいつかの夜の時のように叩くのだった。

・*

「災難でしたね、リインさん」

「俺もまだまだ未熟だったということだろ。ルーファスさんならきつとあの状況でも完璧な対応ができただろうしな」

「っ——」

慰めるクリスの言葉にリインはとりあえず自分の未熟のせいにしてその場を治める。

ルーファスの名前に反応している男子がいたが、リイン達は気付かずに爆発の気配を感じて彼の方を振り返る。

「アルゼイド!? 確か子爵家の名前じゃないか!?!」

リインの言葉はマキアスの叫びに掻き消される。

「私の父がその子爵家の当主だが、何か問題でもあるのか?」

自己紹介をしようというから名乗ったままでだが

「い、いや……」

毅然としたラウラの態度にマキアスは狼狽える。

「エマといます。エマ・ミルステイン。辺境出身で奨学金を頼りに入学しました」

「ガイウス・ウオーゼルだ……帝国に来て日が浅いから宜しくしてくれると助かる」

眼鏡の女子と、長身の男子がそれぞれ名乗り、赤毛の男子もそれに続く。

「僕はエリオット・クレイグだよ」

「どうした？ そなたらも自己紹介くらいした方が良いのではないか？」

ラウラ達はまだ名乗っていない者たちを促す。

「俺はリイン・シュバルツアード。顔見知りは何人かいるけど、改めてよろしく」

「僕はクリス・レンハイムと言います。これからよろしくお願いします」

「アリサ・R……ルーレ市からやって来たわ」

「フィー・クラウゼル……フィーでいいよ」

そして一同の目は未だに名乗っていないユーシスに向く。

「ユーシス・アルバレア……《貴族風情》の名前ごとき覚えてもらわなくても構わんが」

「し、《四大名門》!？」

「アルバレア公爵家……大貴族中の大貴族ね」

「っ——だからどうした!? その大層な家名に誰もが怯むと思ったら大間違いだぞ！」

ユーシスの挑発を含んだ名乗りにマキアスは過剰に反応して騒ぎ出す。

「また同じことを言っている」

その姿にクリスは顔をしかめる。

「気にするな。敵に話分かる相手もいれば、必ずしも味方が全員仲良くなれるわけじゃない……」

彼はああいう人間だという事だ」

リインは冷静にマキアスの人柄を分析して受け入れて彼の理不尽な罵倒を聞き流す。

平民と貴族で立場は違うが、リインの目にはマキアスが父を誹謗中傷して貶めた貴族と同じように映る。

「リインさんって……意外とドライですね」

「そうか？ 少なくとも友好的じゃない相手とはあまりお近づきになりたくないのは普通のことだと思うけどな」

現にリインだけではなく、平民であるエリオットやエマもマキアス

の暴言に顔をしかめている。

一見すれば、ユーシスの不遜な態度がマキアスの暴言を助長させているが、それを差し引いてもマキアスの態度は目に余る。

「これも《呪い》……いや、それは穿ち過ぎか」

リインの呟きを他所にマキアスはさらにヒートアップする。

「ぐっ——何様のつもりだ!? その傲岸不遜な態度は!?

君たち貴族はみんな同じじゃないか! 特にアルバレア公爵家といえ、帝国で一、二を争う大貴族……

さぞ僕たち平民のことを見下しながら生きているんだろう!?

勝手なマキアスの言葉にユーシスは肩を竦める。

「そんなことをお前に言われる筋合いはないな。リーグニッツ帝都知事の息子……

帝都へイムダルを管理する初の平民出身の行政長官。ただの平民と言うには少しばかり大物過ぎるようだな?」

「だったらどうした!?

父さんが帝都知事だろうとウチが平民なのは変わらない! 君たちのような特権階級と一緒にしないでもらおうか!?

「別と一緒ににはしていない。だが、リーグニッツ知事といえば、かの《鉄血宰相》の盟友でもある『革新派』の有力人物だ」

「っ……」

「そして宰相率いる『革新派』と四大名門を筆頭とする『貴族派』は事あるごとに対立している。ならば——」

「そこまでだ」

見兼ねてリインは二人の間に割って入る。

「それ以上は言い過ぎだ。それにリーグニッツもいい加減頭を冷やせ」

「なっ……何で君にそんなこと言われなくちゃいけないんだっ! 君には関係ないだろうっ!」

「さっきまで人を罵っておいて関係ないはないだろ。二人がいつまでもそうしているとオリエンテーリングが始まらないだろ」

「っオリエンテーリングなんて……僕は《VII組》なんて認めないぞ!」

「文句があるならサラ教官に直接言うんだな。ここで俺達に八つ当たりをしても何も始まらないぞ」

「偉そうに……たまたま貴族に拾われて、たまたま皇族の方の目に留まっただけで特別な人間になったつもりか!？」

「レーグニッツ……いい加減にしないと怒るぞ」

「ふん、凶星か……聞けばシュバルツアー家は皇族から特別扱いをされている男爵家みたいじゃないか……」

それに君の妹はアルフィン殿下と懇意にしている。一家揃って権力に取り入るのが得意みたいだな」

「あ……アリサさん、こっちに!」

「え……何……?」

「ん、緊急避難」

これ以上ない危険を感じてクリスはアリサの手を引いてとにかく少しでもその場から離れ、フィーがそれに同調する。

そしてリインは大きな息を吐くと、マキアスを睨み付けた。

「レーグニッツ……何様のつもりだ。その傲岸不遜な態度は?」

彼がユースに言った言葉をそのままマキアスに返す。

「ぎつが——か……からだか……」

「ぐっ……」

「これは——空間ごと束縛する魔眼の戦技!？」

リインに睨まれ金縛りでマキアスは体の自由を縛られる。

そして避難が遅れた者たちは直接睨まれた彼ほどではないが、そのとばっちりを受ける。

「なあ? どうして今日初めて会ったばかりの君に俺やユースはそんな暴言を浴びせられなくちゃいけないんだ?」

まあ、俺は別にどんなことを言われても良いが、親兄妹のことを話題に出すなんて余り品が良いとは言えないぞ」

「あ……あ……」

声を荒げて怒鳴り返されたわけではない。

あくまで穏やかにリインはマキアスに話しかけるが、蛇に睨まれた蛙のようにマキアスは竦み上がる。

金縛りに動きを縛られてなければ、もしかしたらその場にへたり込んでいたかもしれない。

「君がどうしてそこまで貴族を嫌悪して見下しているのかは知らないが、誰もが君の暴言に寛容だなんて思うなよ……」

君が否定しようが関係ない。君のその傲慢な態度は《鉄血宰相》や君のお父さんの権威を笠に借りたものでしかない」

「ふ、ふざけるな……そんなわけ——」

「君への評価を決めるのは君じゃない。周りの人間だ」

マキアスの反論をリインは切って捨てる。

「君はもう十七歳なんだろう？」

十七歳ということはその気になれば遊撃士にもなれるし、それより前からプロの現場で働いている女の子だっている……

まだ学生なんだから、子供だから大目に見てもらえるなんて思っているなら大間違いだ」

「い、言わせておけばぺらぺらと勝手なことを……貴族風情に言われる筋合いはない！」

せめてもの抵抗にマキアスは口だけで反抗するが、最初の時ほどの勢いはもうそこにはない。

そんなマキアスにリインはもはや呆れるしかない。

「貴族風情か……君はあれだな。自分の価値観だけが全てで絶対的に正しいと思っている。まるで《貴族》みたいだ」

「ぼ……僕が……貴族……だど？」

まるで突然水を掛けられたかのようにマキアスはオウム返しに繰り返す。

「まあ、そこら辺はどうでも良いんだけど……マキアス・レーグニッツ」

「っ……」

それまで穏やかに威圧していた気の質が変質する。

「父さんやエリゼが何だつて？ 権力に取り入るのがうまい？ はは、面白いことを言うじゃないか」

リインが浮かべた笑みにマキアスは震え上がる。

ようやく自分が虎の尾を踏んでしまったことを悟るがもう遅い。

助けを求めるように視線を周りの者に向けるが、たまたま視線が合ったエマやエリオットは関わり合いたくないと言わんばかりに目を逸らす。

「なあ、マキアス……もう一度言ってくれないか？」

「ぼ、僕は………僕は………」

いつもなら相手の威圧など気にも止めずに捲し立てるのに言葉が出て来ない。

「はいはい、そこまで」

しかし、そこに救いの女神が現れた。

「サラさん、どうしてここに？」

「どうしても何も、いつまでも貴方達がおしやべりしていて話が進まないから降りて来たのよ。ほら、とりあえずその魔眼をやめなさい」
滑り台で降りて来たサラはラインが放つ威圧感に物怖じせず現場を取り仕切る。

ラインは肩を竦め、息を吐いて魔眼を閉じ、エリオット達に頭を下げる。

「巻き込んですまなかった」

やれやれと肩を竦めて、サラは一同を見回す。

「説明は後でまとめてするつもりだったけど、このオリエンテーリングは貴方達が《Ⅶ組》に参加する最終テストでもあるのよ……」

その上で、貴方達の意志で参加するかを決めさせるわ。これは強制ではないから安心しなさい」

サラはちゃんと話を聞いているかを確認して続ける。

「オリエンテーリングの内容は至って簡単、各自この先のダンジョン区画を抜けて旧校舎一階に戻る……」

この部屋には貴方達から預かっていた武具と特別なクオーツを用意してあるから、それで戦術オーブメントを起動しなさい……はい、駆け足」

時間が押していると言わんばかりにサラは一同を急かす。

ラインは迷うことなく歩き出し、自分の太刀を回収し二本の太刀を

装備して、クオーツをポケットにしまう。

ラインに遅れ、クリス達もそれに続いて身支度を整えていく。

「ダンジョンには魔獣が徘徊しているから気を付けなさいよ……」

それからラインとフィー、貴方達二人はハンデとしてここで三十分待機してから二人で出発しなさい」

「分かりました」

「はあ……メンドクサイ」

即座に頷くラインに対してフィーは欠伸交じりに了承する。

「それでは、これより士官学院・特化クラス《Ⅶ組》の特別オリエンテーションを開始するわよ」

サラの音頭で身分に関係なく集められた彼らの最初の戦いが始まった。

・*

「待つてくださいい！ いきなりどこへ……まさか一人で勝手に行くつもりですか!？」

サラの言葉少ない説明に困惑の空気が流れている中、台座が一番ダンジョン区画への唯一の出入り口に近かったユーシスが我先にと動き出し、クリスが呼び止めた。

「馴れ合うつもりはない。俺は一人で十分だ」

「何を言っているんですか、魔獣が徘徊しているって言われたばかりなのに」

「フン……魔獣が恐いのであれば同行を認めなくもないがな……」

武を尊ぶ帝国貴族としてそれなりに剣は使えるつもりだ。お前はどうかやら貴族のようだが、力のない者に手を差し伸べてやらんでもないぞ」

「なっ——」

上から目線の不遜な態度にクリスは絶句する。

完全な上から目線の物言いに全く経験がないわけではないのだが、《聖女》や《黄金の羅刹》《赤の戦鬼》のような圧倒的なカリスマを持

つ者たちと違って侮辱としか取れない言葉にクリスは言葉を失う。

「フン……」

たじろぐクリスにユーシスは興味を失い、踵を返して進もうと歩き出す。

「待ってくださいっ！」

「何だ……？」

虫の居所が悪いと言わんばかりの表情で振り返るユーシスにクリスは思わず怯む。

「フン……」

そんなクリスを一瞥するだけでユーシスは今度こそ、先に進んでしまった。

「私も先に行かせてもらおう」

そしてユーシスに続いて動き出したのは大剣を腰に佩いたラウラだった。

「ラウラさんまで!？」

「この程度のダンジョン、私も一人で十分だ」

ラウラは後ろで待機するリインとフィーの二人を一瞥してから歩き出した。

「あ……」

背中から発せられる邪魔をするなどという気迫にクリスは呼び止めることができずにその背を見送ってしまう。

そしてそれはクリス達だけではなく、他の者たちも同じだった。

「……………えっと……」

「ど、どうしましょう……？」

魔導杖を抱えたエリオットとエマが途方に暮れた言葉を漏らす。

「ふむ……」

ガイウスは特に何も語らず、様子を見ている。

そして、先程までの激しさが嘘のように静まり返ったマキアスは俯いて何も言わず、アリサも特に動こうとはしなかった。

「っ——」

クリスはどうして良いか分からず、リインに顔を向ける。

しかし、返って来たのは首を横に振る否定。

フィーとサラも完全に傍観に徹していて宛にできそうにない。

「と、とにかく僕達も動きましよう。えつと……えつと……」

改めて行動しようとするが、いざそうになると何から始めれば良いのか迷う。

「クリス」

リインの名を呼ぶ声が耳に響く。

続く言葉はなく、振り返ってもリインはそれ以上動こうとはしない。

が、それでもクリスは我に返って深呼吸をする。

「まずは皆さんの武器を確認させてください」

まずは冷静に自分たちの状況を把握する。

「僕は見えての通り剣を扱います」

「俺の得物はこの十字槍だ」

クリスの行動にガイウスが倣う。それを皮切りにエリオット、エマ、アリサと続く。

「僕のは新しい技術を使った武器で《魔導杖》って言うんだって、入学時に適性があるって言われたから使用武具として選択したんだけど……」

「私もエリオットさんと同じです。でも形状が少し違いますね」

「あたしは導力仕掛けの弓を使うわ」

そして、一同の視線は残ったマキアスに集まる。

「ぼ、僕の武器はこのショットガンだ」

六人の武器を確認したクリスは改めて思考を巡らせて――

「すまないが、身分を聞いても構わないか？」

「はっ？」

先程のやり取りの後だというのに臆面もなくそんなことを言い出したマキアスにクリスは耳を疑った。

「いや……その含むところがあるわけじゃないんだ……相手が貴族かどうか念のため知っておきたくてね」

一応の恥を感じているようだが、全くのフォローになっていない言

葉にクリスは言葉を失う。

「えつと……ウチは平民出身だけど」

「同じく……そもそも故郷に身分の違いなど存在しないからな」

「なるほどそういえば留学生だったか……君の方は？」

応えてくれたエリオットとガイウスに気を良くしたのか、マキアスは不躺な眼差しをクリスに向ける。

その目が、尊敬するリインと兄を誹謗中傷したと思うとクリスは我慢をすることができなかつた。

「レンハイム家は男爵家だけど、皇族にシュバルツアー家よりも縁が深い家柄だ。これで満足か」

「つ……やっぱり貴族か」

含むところは無いと言ったはずなのに、その一言は兄から借りた《家名》を侮蔑されたようでクリスはマキアスを睨み付ける。

「その何が悪い！ 何が含むところはないだ！

そんな反応しておいて、そもそも聞くこと自体に含みがあるって言っているようなものじゃないか！」

「勝手に決めつけるな！ 僕はそんなつもりはないっと言ったはずだ！」

「本気でそれが通用すると思っているのか!?!」

マキアスが怒鳴る声に合わせてクリスも声を荒げる。

「はい、そこまでだ」

「ぐ……リイン・シュバルツアー……」

音もなく二人の間に立ったリインにマキアスは狼狽して後退るが、リインはそれを無視して強引に話を進める。

「罅が明かないから、班を二手に分けよう……」

クリスとエマとエリオットで組むといい。クリスの実力は保証するし、クリスは魔導杖を使う知り合いがいるから、色々とアドバイスが聞けるはずだ……

アリサは悪いがガイウスとレーグニッツで組んでくれ。ガイウスには身内の恥を押し付けるようで悪いんだけどこの中で前衛を務められるのは——」

「恥とは何だ!? だいたい何で君が勝手に――」

「うるさい」

「っ――」

「ここは安全な街の中じゃない。魔獣が徘徊している危険なダンジョンだ……」

君の勝手な行動は自分だけじゃなく仲間を危険に晒すんだ。それも分からないのか?」

「っ……ぐ……ぐ……そうやってお前達はいつも平民を見下して――」

「そんなことは聞いていない……分かっているのか、分かてないのか、どっちなんだ?」

「くそっ……勝手にしろ!」

睨まれたマキアスは逃げるように踵を返して駆け出した。

「あ、ちよつと!」

「ふむ……とにかく俺達も行くか」

「すまない二人とも、もしも手に負えないようだったら声を上げて呼んでくれ。すぐにフォローに行くから」

「え、ええ……分かったわ」

リインに話しかけられてアリサは身構えながら頷く。

そしてガイウスは特に気を悪くした素振りもなく鷹揚に頷いた。

「気遣い感謝する。それにしても帝国では身分はかなり重要らしいな」

「古い国だからな、それでもあそこまで敵愾心を持っているのは珍しいと思うけど……」

ダンジョンの構造はそれ程複雑じゃないし、徘徊している魔獣もそこまで強くはない。それでも油断だけはしないでくれ」

「重ね重ね感謝する……それにしてもどうしてダンジョンの構造が?」

「風の流れや音の反響で大まかに判断しているだけだ。それに滑り落ちている時間も然程長くはなかったからな」

「そうか……風か……」

ラインの言葉にガイウスは考え込む。

「ガイウス……どうかしたか？」

「いや、何でもない。ラインとはもう少し語り合いたいが急がないと彼に追い付けなくなってしまうな」

「はは、オリエンテーリングが終わったら話をする時間なんていくらでもあるさ」

「確かにそうだな……ではすまないが、行かせてもらう」

ガイウスは残った一同にそう言うと共に先に駆け出したマキアス達を追い駆けるために走り出した。

「……………風と音で……分かる？」

「い、いえ……全然分かりません」

残されたエリオットとエマはどちらともなくシンパシーを感じるのだった。

・*

「はあ……先が思いやられるわね」

「そう思うなら少しくらいフォローしたらどうですか？」

ようやく出発したクリス達を見送ってサラは疲れたため息を吐いた。

「調書には確かに貴族への偏見ありってあったけど、あそこまで誰彼かまわずに噛みつくのは予想外よ」

直前までのマキアスの態度を思い出してサラはげんなりと肩を落とす。

「ユーシスの方は相手を立てることをちゃんと知っているみたいだから、そっちは思っていたよりもマシだけど」

「え……あれで立ててるの？」

「あの程度の皮肉なんて貴族の世界じゃ挨拶みたいなものじゃないの？」

意外そうな反応をするフィーにサラは適当なことを言う。

「それはそうと、改めて久しぶりねライン。生きてまた会えて嬉しい

わ

「はは、その節は御心配をおかけしてすいませんでした」

「全くよ……おかげで後々の祝賀会は今一つ盛り上がらなかったんだから」

「それはみんなに言われました」

「それで、どうやって浮遊都市から生き延びたのよ。それに今まで何をしていたのかしら？」

「話してもいいですけど、良いんですか？」

「別に構わないわよ。この程度のダンジョン、あたしが本気を出せば一分で走破できるんだから」

「勝った……わたしなら50秒で駆け抜けられる」

「へえ……言うじゃないフィー」

「二人とも喧嘩しないで下さいよ」

とはいえ、ただ三十分を待つのは暇なのでリインはサラにこれまでのことを話す。

そして――

「ふくん……あの殲滅天使と一緒にクロスベルに行ってたんだ。この《ロリコン》」

「はは、いきなり人をロリコン呼ばわりしないでください。《ファザコン》のサラおばさん」

笑い合う二人の間の空気が帯電し、段々と熱を帯び始めると、その様子に危険を察知したフィーはこそこそと壁際まで退避する。

「……………」

サラは無言でブレードと銃を取り出す。

「……………」

リインは無言でゼムリアストーンの太刀を抜く。

「私はまだ二十五よっ！ ノーザンイクシードッ！」

「誰がロリコンだっ！ 終の太刀――暁っ！」

次の瞬間ダンジョンが激震した。

・*
*
*

ダンジョンの終点、日の光が差し込んだ扉が階段の先に見える広い空間では今まさに激しい戦いが繰り広げられていた。

「くっ——」

石造りの怪物——ガール。

その外皮はラウラが振り回す大剣でも毛ほどの傷しか付かず、その傷も瞬く間に修復されていく。

「なんて硬さだ！」

「ちっ——ARCUUS駆動……喰らえエア・ストライク」

共闘していたユーススは風の導力魔法を繰り出すのが、風の弾丸を物ともせずにガールは二本の角を突き出して突進した。

「——くっ！」

大剣を盾に受け止めるが、突進の勢いを止め切れずラウラは弾き飛ばされる。

壁に叩きつけられたラウラをガールは追い駆け、大きな顎を開いて噛みつく。

「させるかっ！」

ユーススはまだ動けないラウラを横から蹴り飛ばして、眼前に迫った顎に剣を噛ませる。

「——なんて力だっ！」

人間を遥かに超える膂力は少しでも力を緩めれば手から剣をもぎ取られてしまう。

しかも、大きな体躯がユーススに覆い被さり石造りの体の重量にユーススの腕に押し掛かる。

「はあっ！」

押し切られるその寸前、ガールは横から槍の一撃を受け、ユーススの痺れ始めた腕から剣をもぎ取りながらわずかによろめく。

「下がりなさいっ！」

声と共に矢が飛来してガールに迫る。が、石の翼が巻き起こした突風が真っ直ぐ飛んで来た矢を吹き飛ばす。

「導力銃のリミットを解除——喰らえ——《ブレイクショット》！」

「ARCCUS 駆動——当たってアクアブリード！」

マキアスのショットガンとエリオットの水の導力魔法が重なってガーゴイルを突き飛ばす。

「はあああっ！」

そこにすかさずクリスが剣を叩き込み、さらに突き飛ばしてユースとラウラからガーゴイルを放す。

「二人とも大丈夫ですか!？」

悔しそうに顔をしかめて膝を着いたユースと大剣を杖にして立ち上がったラウラにエマが駆け寄って治療術を掛ける。

「問題ない……」

「く……石の守護者……暗黒時代の魔導の産物がまさかこれ程とは」

呼吸を整えユースとラウラはエマの治療術を拒むように立ち上がる。

ユースはガーゴイルが捨てた剣を拾いに向かい、ラウラは気合いの籠った雄叫びを上げ、クリスとガイウスが並ぶ前線へと突撃する。

「最初の番人……侵入者迎撃用のガーゴイルがどうしてこんなに強化されているの？ まさか力のリミッターが故障している？」

そんな彼らを所在なさげに見送ったエマは七人の数の暴力を物ともしない石の守護者に訝しむ。

この旧校舎には特別な存在が封印されている。

そのガーゴイルはそれを持つ者を選別する最初の試練であり、相応しくないものを撃退する存在。

とはいえ、製作者も無用な殺傷は望まず、さりとして最初だからこそ簡単な試練ではいけないと、ある工夫をした。

それは簡単に言えば、侵入者の力量に合わせて、ガーゴイルの力量も変化するシステム。

「おばあちゃんが入った人達といい勝負ができるくらいに設定してあるって言ってたけど……」

ほとんど一方的に暴れているガーゴイルにエマはとてもそうとは思えなかった。

「このままじゃジリ貧だよ！」

ただたどしい手付きでARCSの導力を充填させるアイテムを使ったエリオットの泣き言が響く。

「こうなったら各々、全力の一撃を奴に喰らわせるしかないか」

「待て！ 何で君が仕切るっ！」

ユーシスが提案にすかさずマキアスが反発する。

「言ってる場合ですかっ！ 僕が奴を止めます！ 皆さんは準備をっ！」

クリスはマキアスに罵倒を返しながら、ガーゴイルに肉薄しギアを上げる。

焰を纏った連続突きと共に銃を抜き、《凍結》の弾丸をセットしている魔導銃を零距离から弾切れになるまで叩き込む。

その瞬間、クリスは淡い光に包まれ繋がる感覚を得る。

「今です！」

射線を開けるようにクリスは横に跳びながら叫ぶ。

「燃え尽きなさい！ファイア！」

まるでクリスがそうすると分かっていたようにアリサは炎を纏った矢を弓に番えて射る。

それを皮切りに残った六人が一斉に動き出す。

今日初めて会ったもの同士。

とても連携などできるわけがない。

できてそれぞれの一撃を無秩序に重ねるだけの攻撃になるはずだった。

しかし、何故かそうならなかった。

「我が渾身の一撃、食らうがよい！ 奥義・洗刃乱舞っ！」

アリサの炎の矢に怯んだガーゴイルにラウラの闘気を漲らせた大剣の剣舞がガーゴイルの身体を削る。

それを耐え切ったガーゴイルはすかさず目の前のラウラに攻撃を仕掛けようとするが、ガイウスの槍とユーシスの剣が計ったように同時に捉える。

「もう一度喰らえ——《ブレイクショット》！」

怯んだガーゴイルにマキアスが散弾を当て、さらにエリオットとエ

マが駆動を終わらせた導力魔法を放つ。

「これで——」

彼らの息を吐かせない猛攻の合間に、態勢を立て直したクリスは剣に焰を全力で込める。

「——終わりだっ！」

断末魔めいた咆哮を上げるガーゴイルの横からその太い首を狙ってクリスは全力の一撃を叩き込む。

「やったあ！」

一足早く勝利を確信したエリオットが歓声を上げる。

しかし、ガーゴイルの首を捉えたクリスの剣は驚くほどに軽い衝撃を手に伝え——その刃が折れ飛んだ。

「え……………？」

何が起きたのか理解できず、クリスは思考停止して剣を振り切った姿勢のまま固まる。

それは他の七人も同じだった。

勝利を確信した誰かの思考に釣られてしまったのか、残心を怠った一同は致命的な隙をさらす。

「あ…………」

呆然とクリスは目の前で振り上げられた石の腕、その先の鋭い爪を見入ってしまう。

そして凶刃は怪物の咆哮と共に振り下ろされ——

「まだまだだな」

前触れもなく現れたラインが片手でその腕を掴むように受け止めた。

「リ、ラインさん!?!」

「剣が折れたくらいで動揺し過ぎだ。敵はそんなことお構いなしに襲ってくるぞ」

「す、すみません」

辛辣な言葉にクリスは思わず恥じる。

互いに剣が折れた時、そこから立ち直る早さが勝敗を分けるとは知っていたが、知識で知っていたただけだったことをクリスは実感す

る。

「つて、そんなことを言っている場合じゃ——」

クリスが声を上げると、ガーゴイルはもう一方の腕を振り上げ——
何処からともなく小さな二本ナイフが飛来してガーゴイルの目に突き立つ。

「点火」

次の瞬間、ナイフが爆ぜてガーゴイルの頭を吹き飛ばした。

「え……」

振り返ったクリスに釣られて、アリサ達も振り返る。

「ブイツ」

眠たげな眼差しのフィーがそれでも誇らしげに胸を張る。

「いや、それはまだ早い」

そんなフィーにリインは苦笑して、頭を失ったガーゴイルを見据える。

「ん？ 浅かった？」

フィーはその指摘に特に動揺もなく聞き返す。

そしてリインの言葉の通り、ガーゴイルは頭を吹き飛ばされたにも関わらず、その傷はそれまでのものと同じように修復されていく。

「そんなっ！」

「頭が吹き飛んだのに……不死身なのか!？」

エリオットとマキアスが悲鳴を上げる。

一度勝利を確信し、気持ちを緩めてしまっただけに、彼らだけではなく他の者たちも直ぐには態勢を立て直すことができないでいた。

「いや大丈夫だ。任せてくれ」

が、慄く彼らに対して背中を向けたままリインは、無造作にガーゴイルの前に立つ。

「っ——」

「ちっ——」

その後ろ姿を前にラウラとユーシスは悔しそうに顔を歪めるが、御前試合とは違う、戦いの場でのリインの太刀を見極めるべく集中する。

「まさか斬るつもりか？ ラウラ君の大剣でも少ししか削れなかったのにそんな細い剣で!？」

「そんな無茶なっ!」

リインの無謀にマキアスとエリオットが狼狽する。

「あの剣……」

「何だ……風が……」

エマは刀が鞘に納められているにも拘らず感じられる異様な気配に警戒し、ガイウスは彼独特の感覚で感じ取った空気の変化を前に悪寒で体を震わせた。

「お手並み拝見」

何の心配もしていないと言わんばかりにフィーはその背中を見送る。

「ちよつとリイン……いくら貴方でも——」

アリサの制止の言葉は修復を終えたガーゴイルの咆哮に掻き消される。

衝撃波を伴った咆哮を間近で受けたにも関わらず、リインは余裕の表情を崩さない。

「八葉一刀流——」

その一瞬、彼に感じていた対抗心を忘れてラウラとユーススは唾を呑む。

そんな彼らの期待や不安を背負いリインは——

「八の型——破甲拳っ!」

そんな彼らの期待と不安を裏切ってリインは太刀に手を掛けることもなく——固めた拳でガーゴイルの胸を打ち貫いた。

「……………え……………」

誰かが間の抜けた声をもらす。

「お……? 思っていたよりも脆かったな」

そんな言葉をリインが漏らすと、胸を貫かれたガーゴイルはそこを中心にして全身に亀裂を走らせ——砕け散った。

「剣が折れたなら殴ればいい。そのために格闘術を教えたはずだろ?」

そうして振り返ったリインはクリスに向かって事も無げに言うのだった。

「流石ですリインさん」

音を立てて崩れたガーゴイルの末路に愕然とする一同を他所に、クリスは両手に拳を握って熱の籠った声でリインの言葉に応えた。

そして、数秒の間を置いて――

「「「「「えええええっ!?!」「」「」「」

一同の驚愕の音がダンジョンに響き渡るのだった。

3話 学生生活始まる

とある一年の男子生徒《P》は語る。

「リイン・シユバルツアーだと？」

ふん、神聖な御前試合を猟兵紛いの戦いで穢した浮浪児がたまたまオリヴァルト皇子の目に留まったから良い気になっているだけだ……

見ている。この僕がやつこの化けの皮を剥いでやる」

とある一年の女子生徒《V》は語る。

「Ⅶ組のリイン・シユバルツアー……」

普通の男の子に見えるけど《猟兵百人斬り》とか《雪山を赤く染めた鬼》なんでしょ……

人は見掛けによらないって言うか。剣を持つと殺人鬼の人格と入れ替わるって本当なのかしら？」

とある二年の女子生徒《A》は語る。

「リイン君の噂について知りたい？」

確かにリイン君はリベールで子供の世話をしていた《子連れ侍》だったことは間違いないよ……

それはもう可愛いらしい女の子でね。だが、試験の後に別の女の子とクロスベルへ旅行に行っていたそうじゃないか……

ふふ、女神が許しても私はちよつと許せそうにないかな」

とある二年の男子生徒《G》は語る。

「リイン君かい？」

あのラツセル博士の助手をしていたって話があるから、あまり工房には立ち入って欲しくないかな……

聞いた話だとリベールのツァイス中央工房では毎日のようにトラブルを起こしていたみたいだし……

サラ教官に言われて戦術殻を一機貸し出したけど、変な改造をされないといいな」

とある二年の男子生徒《C》は語る。

「リイン・シュバルツアー？」

ああ、知っているぜ御前試合の時にはがっぽりと稼がせてもらったからな……

確かに力量は学生レベルじゃねえかもしれないが、不意打ちがうまく決まったんじゃねえか？

ちゃんと顔を合わせてねえけど、そこまで強そうには見えなかったしな……

噂では、俺でも知っている伝説の《槍の聖女》に勝ったなんて話まであるけど、たぶん帝国政府の誇張だろ？

それに鉄血宰相のお気に入りだって話も聞いたことがあるから革新派の情報操作かもしれないけど、それにしたって盛り過ぎだろ」

とある二年の女子学生《D》は語る。

「リイン君について？」

むしろ私の方が教えて欲しいです。具体的にはクリス・レンハイム君との関係を！

リベールでは男性、女性構わず声を掛けては愛を囁き、老若男女合わせて百人斬りを果たして、子供まで作ったとか……

その話が本当だとしたら私は……私は……ぶはっ！」

とある生徒会長《T》は語る。

「リイン君？」

うん、最初はいろんな噂話があつてどんな子なのか分からなかったけどとっても良い子だよ……

私のことを一目会った時からちゃんと先輩扱いしてくれた子だし、この前生徒会の仕事で遅くなった時、夕食を御馳走になったんだけどデザートのアイスもすつごく美味しかったよ……

リイン君はきつといいお嫁さんになれると思うよ」

以上、生徒達のリイン・シュバルツアーに対しての意識調査から一部抜粋。

・*

第三学生寮に与えられたリインの一室では彼の話し声が響いていた。

「ああ。こっちは大丈夫だよ。そんなに心配いらないって」

馴染みがまだない者には受け応える声はないことに首を傾げるかもしれないが、戦術オーブメントに内蔵されている通信機による通話なので特に怪しいことはない。

「友達……？　まだ入学して一週間だからな、クラスメイト達も個人的でそれぞれ事情があるみたいだから、急ぐことはないだろ……」

そういうそっちはどうなんだ？」

会話の相手は義妹のエリゼ。

彼女にはクロスベルを出る時に普及し始めている導力通信機を買って上げたのだが、我ながら良い買い物をしたとリインは自画自賛する。

「はは、相変わらずみたいだなアルフィン殿下とミュゼは」

不満そうに、それでも何処か楽し気に友人たちのことを語るエリゼの声にリインは苦笑を返す。

「明日の自由行動日は荷解きや部屋の整理をするつもりだ……」

ああ、そうだな。帝都まで鉄道で一時間くらいで行けるからな、暇な時にでも——つとすまないエリゼ。誰か来たみたいだ」

ドアをノックされた音にリインは義妹との会話を切り上げる。

「ああ、エリゼも体に気をつけてくれ」

最後の一言を交わして、リインは通話を切る。

そして、この部屋に住むことになり最初に設置したドールハウスに目配せを送ってからリインは来訪者を迎えた。

「こんな時間に誰だ？」

「リ、リイン……エリオットだけど、ちよつと良いかな？」

「ああ、構わないが一人じゃないみたいだな。その気配はレーグニッツか？」

「えっ？」

「なっ!？」

ドアの向こうから二人が絶句する声が聞こえてくる。

「それで、どうしたんだ二人とも、こんな時間に？」

ドアを開けるとそこには気配で察した通り、二人が並んで立っていた。

何処か自分に余所余所しい態度のエリオットと自分を毛嫌いしているマキアスの二人が揃って訪ねて来たことにリインは少なからず驚く。

「くっ……」

マキアスの目がリインを見た瞬間に険しくなる。

「お、落ち着いてマキアス。今日はあの事を聞きに来たんだから喧嘩はダメだよ」

「分かっている」

エリオットに諷められてマキアスは堪えるように顔をしかめる。

「人を訪ねておいてそんな顔をするなんて、あまり態度が良いとは言えないぞ。どんな教育を受けているんだか」

「っ……そんなこと君にとやかく言われる筋合いはないっ！」

リインの棘を含んだ言葉にマキアスは自制をあつさり放棄して叫ぶ。

一言余計な言葉はリインらしくもないが、義妹との会話を邪魔された事はきつと関係ない。

「それで、二人が揃って俺に聞きたい事って何なんだ？」

片やオーラフ・クレイグ中将の息子、片やレーグニッツ知事の息子。

まさかとは思うが、エリオットがマキアスの思想に毒されてしまったのかと勘繰る。

「ぐぬぬ……偉そうに……」

普通に尋ねたつもりなのに、マキアスはそれだけで眦を上げる。

「マキアス……僕が言うから」

突けばすぐに爆発しそうなマキアスを後ろにしてエリオットはリインと向き合う。

「リイン……」

「ああ」

神妙な顔をするエリオットにリインは頷く。

「リインはヴィータ・クロチルダさんとどういう関係なの？」
「は？」

出て来た言葉にリインは間の抜けた声を返していた。

「惚けても無駄だっ！ 君がああ『蒼のディーバ』と知り合いだっということは知っているんだぞっ！」

「ああ、そっちな」

《結社》身喰らう蛇の使徒ではなく、帝都のオペラ歌手としてのヴィータ・クロチルダのことを指しているのだとリインは納得する。

「クロチルダさんと、どういう関係って言われてもな……」

「ま、まさか人には言えないような関係だと言うのか？」

「そもそもあの人のプライバシーに関わることだ。クラスメイトだからって簡単に教えられることじゃないだろ？」

「だいたい君たちこそ、クロチルダさんと知り合いなのか？」

リインは探りを入れるように尋ねる。

「そ、そんな知り合いだなんて……僕達は雑誌でしか見た事ないし、もしかしたらリインはサインを持っているんじゃないかなって思ってる」
「僕は別に……ただ君のような不埒な男にクロチルダさんは相応しくない」と忠告に来たんだ

「がたんつと階段の上の方から物音が響く。」

「そんなこと君に言われる筋合いはないし、そもそもクロチルダさんとはそんな関係じゃない」

「で、でも年初めにリインの故郷のユミルに行ってたんだよね？」

「よく知っているな」

エリオットの指摘にリインは呆れる。

「確かにうちの郷に来ていたけど、慰安旅行みたいなものだったただけだよ」

「その時の写真は？」

「流石にプライバシーだから答えられないよ」

気弱な印象の強いエリオットがぐいぐいと詰め寄って来ることにリインは思わずたじろぐ。

「くそ……これがヒエラルキーか……これだから貴族は」

「いや、貴族は関係ないからな」

マキアスの呟きにリインは冷静な言葉を返すが、その声はマキアスには届いた様子はない。

「リイン・シユバルツアーツ！ 僕は君になんか絶対に負けないからなっ！」

そう宣戦布告をしてマキアスは肩を怒らせて自分の部屋へと戻っていく。

残ったエリオットはバツを悪くしたように愛想笑いを浮かべて謝る。

「………えっと、ごめんね慌ただしくしちゃって、でも入学式の時からずっと気になっていたんだ。ところで——」

「うん？」

「本当にサイン、持っていないの？」

「ありません」

………

………

………

エマは息を殺し、足音を消して慎重に自分の部屋に戻る。

音を立てないように静かにドアを開けて、中に入りそこでようやく緊張を解く。

「『蒼のヴィータ』……クロチルダ……まさかリインさん達と姉さんが繋がっていたなんて」

「入学早々、ようやくあの女の尻尾が掴めたと喜ぶべきかしらね？」

エマの呟きに応えたのは毛並みの綺麗な黒猫だった。

エマは人語を喋るネコに驚くことなく当たり前のように応える。

「ええ……でもリインさんの異常なまでの強さの理由がこれで分かった。姉さんが関わっているなら納得ね」

リインとマキアス、エリオットの会話は断片的にしか聞き取れなかったが、彼らは共通の知り合いとしてヴィータのことを語っていた。

「でも、どうしようかとよ。」

まさかあいつが《蒼の起動者》だって言うつもり？ 確かにあの底知れない力なら納得だけど、それならどうして《灰》の試練を受けさせるのよ？」

「二重契約ができないと試したことはないけど……もしかしたら《蒼》の眷属にするつもりかもしれない」

「なるほど、《蒼》に《灰》を独占させるほどのお気に入りってことね

……

他の二人は《灰》の候補者だったってこと？」

「そう考えればマキアスさんのリインさんへの態度も説明がわかります
……

貴族への嫌悪としては度が過ぎてましたけど、本来自分が選ばれるはずだったものを横から掠め取られたことになりますから」

エマはため息を吐いて、改めて先程の会話を思い出す。

「マキアスさんのお父さんは革新派の重要人物……

エリオットさんのお父さんは機甲師団の元帥……

そして、リインさんはオリヴァルト皇子と懇意にされていますが、

《鉄血宰相》の期待を受けている」

そこから導き出される答えは一つ。

「姉さんは……革新派にいるっ！」

握り拳を作って自信満々に言い切るエマ。

その姿を窓の外から青い鳥が見ていることにエマは気付かない。

「……………放っておいて良さそうね」

その青い鳥と視界を同調させていた人物は慈愛に満ちた笑みを浮かべながら呟くのだった。

「どうせババ様の事だから伝え忘れていると思ったけど……ふふ、これはこれで面白そうだわ」

そして彼女は今見た景色を魔術で記憶クォーツへと転写して保存した。

・*

ライン・シユバルツァーの朝は早い。

日が登ると共に自然と目が覚める。

睡眠の時間としては第三学生寮の中でも一番短いにも関わらず、眠気を引き摺ることなくベッドの上で座禅を組む。

この平日は走り込みと素振りをしていたが、今日は授業のない自由行動日なのであえてそれらを休みにして精神統一だけで済ませる。

それを終わらせるとラインは着替えて、足音を消して階下へと降りようとする。三階から降りて来たラウラとばったりと遭遇した。

「おはよう、ラウラ。自由行動日だっていうのに早いな」

「ああ、おはようライン……だが早いのはそなたの方ではないか。もう走り込みと素振りは終わらせて来たのだから？」

「いや、今日は休みだ。週に一度はそういう日を作る様になっているんだ」

「……そうか」

ラインの答えにラウラは何かを言おうとしたが、それを呑み込む。「俺はこの後朝食の準備をするつもりだ。よかつたらラウラもどうだ？」

「いや私は良い。これまで通り朝食は外で食べる」

ラインの申し出を丁重に断ってラウラは大剣を担いで外へのドアを開いて走り込みに行ってしまった。

「……今日も空振りか」

ため息を吐きながらラインは食堂からキッチンに入り、気持ちを切り替える。

「今日は弁当の用意もいらないから、本格的な帝国風のブレックファーストでもやるか」

食べる相手は自分も含めて五人。

共同生活のためにいろいろな取り決めをしたのだが、そこでも当然の如く一騒動があった。

詳しくは割愛するが、食事の取り決めもその一つだった。

元々自炊する思考がなかったのか、それともその時間さえも鍛錬に

傾けたいと考えているのかユーシスとラウラはそれぞれ外で三食済ませると言い出し、他のマキアス、エリオット、アリサ、エマも同じだった。

ラウラとユーシス、それにアリサは言うまでもなく経済的に余裕があり、マキアスとエリオットも同じ。意外だったのはエマくらいだろうか。

もつとも自炊組と言っても、現状でキッチンを利用できているのはリインだけしかない。

クリスはユミルにいる時から皮むきなどを覚えたが、まだ料理を作るには至っていない。

ガイウスは最新の導力技術が使われているキッチンは扱い切れない。

そしてフィーに関してはサラの強制だった。

放っておくと、三食全てレーションで済ませようとするフィーを見兼ねての処置である。

ちなみに当のフィーはめんどくさいと文句を漏らしていたのだが、そこはリインのある一言で解決した。

「——つと、お帰りユーシス」

作業に没頭して気配を読み忘れたリインは開いたドアの音に顔を上げ、走り込みから帰って来たユーシスを迎える。

ユーシスはキッチンに立つリインを睨むように見て呆れたため息を吐く。

「休みの日だというのに朝早くから御苦労なことだ……」

自分だけならともかく他の者の面倒をみてやる義理はないだろうに?」

「別に義理や義務でやっているわけじゃないよ……」

料理は嫌いじゃないし、一人分を作るよりもある程度まとまった量を作る方が楽だったりするからな」

「ふん……そんなものか」

「何だったらユーシスも食べていくか? 流石にアルバレア家の食卓には及ばないけど」

「不要だ。水を飲みに来ただけだ。朝食もシャワーを浴びたら外で食べてくる」

「そうか……」

取り付く島もないユーシスの態度にリインは場所を譲る。

「ユーシスは料理はしないのか？ ルーフアスさんはすぐに覚えられたし、ユーシスもやってみないか？」

「何……？」

さっさと目的を果たして立ち去ろうとしたユーシスはリインの言葉に足を止めた。

「兄上が……料理だと？」

「ああ、ユミルにいた時に母さんに教わってな。すぐにコツを掴んで上達したけどな……」

良ければ俺が教えるけど、ユーシスもやってみないか？」

「……………気が向いたらな」

「そうか、その時はいつでも言ってくれ」

足早に食堂を出て行ったユーシスを見送ってリインは調理に戻るのだった。

・*

「はあ……何もしなくても食事が出てくるって楽ができていいわ」

あと五分と渋るフィーを起こす手間はあったものの、五人は揃って朝食に舌鼓を打ち、サラがだらしない感想をもらす。

「今日もうまい食事をありがとうリイン。俺も早く導力器具に慣れないな」

「ガイウスの場合は、オーブメントだけじゃなくて食材とかも勝手が違うだろ？ あまり急がなくてもいいんじゃないか？」

「そう言うわけにはいかないさ……」

リイン達には是非俺の故郷の料理を食べてもらいたいからな」

「それは楽しみだな」

「ぼ、僕も早く一人で作れるように頑張ります」

ガイウスの言葉に乗じてクリスも意気込んでみせる。

「うんうん、これぞ寮生活よね」

そんな彼らにサラは満足そうに頷き、フィーに言葉を掛ける。

「あんたも面倒くさがらないでちゃんとやりなさいよ」

「分かってる」

「本当かしら？ リイン食べてばかりだったら遠慮なくこき使って良いからね」

「はは、料理ができなくても後片付けをちゃんと手伝ってくれるなら、それはそれで構わないよ」

「ん、了解」

「あんまり甘やかさないでよ……ところであんた達、部活動はもう決めたのかしら？」

「俺はまだです。というか、部活の勧誘も俺だけ避けられているみたいで」

この一週間、在校生つまりは先輩たちは新たな部員を獲得するために、放課後は学院の至る所で部活の勧誘が行われていた。

二年制の学院だけに、新生の獲得が部の存続に直接関わっているのも、どの先輩達も積極的に新生に声をかけていた。

なのだが、リインを部活に誘ってくれた先輩はいなかった。

そもそもリインが廊下を歩けば、道が勝手にできるといふ不思議な現象が起きている。

「御前試合で派手に立ち回ったみたいだから無理ないか。それにリールでの《猟兵百人斬り》に《愛の狩人》とか噂話が絶えないからね」

「最後のがすごく不本意ですけど」

サラの言った《愛の狩人》という単語にリインはげんなりと肩を落とす。

信じ難いことにリールでのリインの行動には一部、オリビエの奇行が混入してリインの噂話に含まれてしまっていた。

なので一方では猟兵を虐殺した死神として畏れられ、一方では女の敵のように避けられるというのが今のリインの状態だった。

中にはそんな噂話を気にせずにはちゃんとリインのことを見て判断してくれる先輩達もいるのだが、噂話を鵜呑みにしてしまっている生徒たちの方が多かった。

そしてその噂話を信じた筆頭がマキアスだったりする。

「そういう理由で今は避けられているんですけど。トマス教官に自分が顧問をしている同好会に入らないかと勧誘はされています」

「あら良かったじゃない」

意外そうにしながらもリインが入れる同好会があったことにサラは祝福する。

「ええ……そうなんですけど」

「どうしたの？　っていうか確かトマスの部活って歴史研究会だったかしら？　あーそれだとリインにはちよつと合わないかもしれないわね」

「それもあるんですけど、トマス教官は苦手というか……つい身構えてしまうんです」

大きな丸い眼鏡の奥の人当たりの良いにこやかな目。

リインの噂を知っているはずなのに、普通に接してくれる物腰。

そして歴史を語る時の熱の籠った論弁。

どれもあの男を彷彿とさせ、どうしても警戒してしまおう。

「部活に関してはもう少し様子を見ようかと考えています……」

それに今は放課後にやらなくちゃいけないことがありますから」

「やらなくちゃいけないこと？」

「ええ……それについてサラ教官に聞きたい事があるんですけど、旧校舎には自由に出入りしても大丈夫なんですか？」

「鍵は学院で管理しているけど、今あそこはちよつと不思議な現象が起きているから生徒達は立ち入らないようにさせているのよね」

「《石の守護者》——ガーゴイルも普通では考えられない魔獣だったな」

「しかも放っておくといつの間にか元の石像に戻っているのよ……」

昔はそれを利用して生徒達の修練や腕試しに使われていたんだけど、一年くらい前からなかったはずの扉が現れたり、どこからともな

く声が聞こえたりって不思議な報告が相次いで出て来て閉鎖したのよ」

「一年くらい前……」

サラの説明に出て来た時間にリインは何とも言えない表情をする。

「一年前と言われると真つ先に思い出すのはリベールの浮遊都市事件だが」

「それとは関係ないわ。異変の少し前から変化があったらしいからたぶん無関係よ」

ガイウスの呟きへの答えにリインは申し訳ない気持ちになる。

「どうかサラ。そんな不確定な場所でⅦ組の試験をしたの?」

「扉が増えたり声が聞こえた程度で何だって言うのよ? それに実戦はいつだって不確定よ」

「それはまあ、そうだけど……で、リインはあそこで何をするつもりなの?」

「今、サラ教官が言っていた旧校舎の怪異に心当たりがあるんです。機密情報なので詳しい説明はできませんが、必要ならばオリヴァルト理事長を経由してから許可を貰ってきます」

「別にそこまでしなくて良いわよ……」

学院長にはあたしから説明しておいて上げるけど、リインあなた一人で潜るつもり?」

「ええ、この間のガーゴイル程度なら一人でも十分ですから」

「まあ、確かにあなたの実力なら何が起きても大丈夫でしょうけど……そうね、後で技術部に寄って行きなさい。一応の備えは用意しておくわ」

「分かりました」

首を傾げながらリインはサラの提案に頷く。

「それでそっちの三人はどうするつもり? フィー以外は強制参加じゃないから無理はしなくていいんだけど」

「解せない」

サラに名指しされフィーは拗ねるようにそっぽを向く。

「あんたは強制しておかないと何もしないでしようが?」

「そんなことはない……うん、最高の昼寝スポットを探す《昼寝部》なんてないの?」

「あるわけないでしょ」

自堕落な妹を躰ける姉の構図にリイン達は思わず苦笑する。

「俺もせっかくの機会なので参加してみようとは思っています……」

興味あるのは乗馬部と美術部なので今日はその二つを見学しようかと考えています」

「僕はまだ候補も決めかねています……」

将来、父上の後を継ぐことを考えたなら生徒会かとも考えたんですけどこんな機会は滅多にないので普通の部活動も魅力的で」

「来週いっぱいまでは仮入部期間だから、精々悩みなさい……」

それはそうとクリス、来週からは武術教練も始まるから折れた剣の代わりを用意しておきなさいよ」

「あ……そのことでちよつと相談したい事があるんですけど」

サラの指摘にクリスはバツを悪くしながら続ける。

「知つての通り、僕は実家に無理を言つて飛び級して入学させてもらつたんです……」

それで今月分の食費を差し引くともうそんなにミラが残つてなくて」

「なんだ、言つてくれれば別に立て替えておいても構わないのに……」

それに剣が折れたのは不可抗力だから、その分は必要経費で仕送りを増やしてくれるんじゃないのか?」

「入学早々に剣を折つたなんて言い辛くて、それにあまりリインさんに頼り過ぎるなどとも言われているんです」

「そうなのか?」

実験で作つた剣があるから、クリスさえ良ければそれを上げても良かったんだけど」

「え……?」

リインの言葉にクリスは目を丸くする。

「少なくとも耐久度のテストはクリアしているから実用には耐えられないはずだ。まあちよつと特殊な力を持っている魔剣なんだけだな」

「魔剣……」

その言葉に宿る魅了の魔力にクリスの心は揺れ動く。

「魔剣って、あんたそんな物まで作れるようになっていたの？」

「一から十まで全部を作ったわけじゃないですよ……」

知り合いのマイスターにセプチウムで武器の形を作ってもらって、

俺がしたのは最後に《聖痕》——法術の術式を刻んだだけです」

サラの質問に答えるリイン。

「それに魔剣って言っても、力は未だ導力魔法に劣るものですよ」

「ふーん……ってリインは言っているけどどうするクリス？」

「えっ？」

「別に専用の剣や武具を持ってないって子供は結構いるのよ……」

平民クラスには特にそういう人が多くて、必要なら貸し出しもしているわ」

「僕は……」

無難な選択をするなら、学院に申請して剣を貸してもらえばいい。

しかし、すでにクリスはリインが作ったという魔剣に心が惹かれて
いる。

「そんなにすぐに決める事じゃないけど、何なら今日、旧校舎と一緒に
来るか？ 試し切りをしてから考えてみても良いわけだし」

「お願いします」

甘えてはいけないと思いつつも気が付けばクリスはリインの提
案に頷いていた。

・*

リインとクリスが技術部から奇妙な機械の人形を受け取って旧校
舎へと入っていく。

その背中をエマは黒猫と共に見送った。

「どうやら選定が始まったようね」

程なくして黒猫が人の言葉を使ってエマに話しかけた。

「ええ、やっぱり《灰》はリインさんを候補者に選んだみたいです」

「確か第四拘束が解除されたら《第一の試し》が行われるんだっただわよね?」

「うん。それまでにおばあちゃんに来てもらえたら良いんだけど」

《魔女の眷属》として旧校舍に封印された《巨いなる力》の一端の導き手としてエマはツールズ士官学院に生徒として潜入したのだが、エマの予想を超えてリイン・シュバルツァーという存在は規格外だった。

一年前、《空の至宝》が復活した《リベールの異変》の中心にいて、一度は帰らない人となつたが年末に奇蹟の生還を果たした。

時の人なだけに図書館にあった帝国時報を読めば彼の大まかな出自と経歴は容易に調べることができた。

シュバルツァー家に拾われた出自不明の浮浪児。

《剣聖》カシウス・ブライトの弟子。

猟兵を百人斬り殺し、最強の二大猟兵団《西風の旅団》と《赤い星座》を半壊させ、そちらの世界でその名を轟かせた《白い悪魔》。それに愛を語る旅の演奏家。

御前試合において《光の剣匠》《雷神》《黄金の羅刹》を手玉に取り、皇帝陛下から直々に勲章を授かった最も若い英雄。

さらにはリベールの王太女、エレボニアの皇女とも親しく、クロスベルの有名アーティストのイリアとリーシャの二人とも関係が噂されている。

「出自不明っていうのがあからさまに怪しいわよね」

「それももう少し詳しく調べてみましょう……もしかしたら姉さんが関わって——セリーヌ?」

言葉の途中で黒猫は突然、森の中に駆け出した。

何事かと追いつめようとする、エマの背後から声が掛けられた。

「あら……もしかしてそこにいるのはエマ?」

「アリサさん……どうしてここに?」

振り返り、クラスメイトが近付いて来るのにエマは思わず小さく身構えながら尋ねる。

「えつと……ちよつと人を探していて……リインとクリスがこつちの

方に来たって聞いたんだけど見なかった?」

「その二人なら、先程旧校舎に入って行くのを見ましたけど」

「え……旧校舎に……ううん、あのリインなら平気よね」

「そういえば、アリサさんは昔リインさんと会っていたんですよね?」

「えっ!? ええ、確かにそうなんだけど……その……」

□ごもるアリサにエマは少しでもリインの情報を知るために《お願い》する。

「アリサさん……よろしければ、リインさんについて教えてくれませんか?」

「うん……いいわよ……」

リインと一番最初に会ったのは、家族でユミルに旅行に行った時——

エマの金色の光を宿す目にアリサは心ここにあらずと言った様子で頷いて語り始めた。

最初は出奔した姉の手掛かりに繋がっているのではないかと期待し、アリサの話が進むにつれてエマは首を傾げ、話が今に近付いてくるとエマは赤面しながら罪悪感で胸を一杯にする。

「ど、どうしようセリーヌ!?」

「知らないわよそんなこと……それより《超帝国人》って言うのが気になるわね。どういう意味かしら?」

乙女の秘密を魔女の術で暴露させてしまったというのに、相棒は人間の色恋沙汰など知らんとばかりに話を進める。

「うう……ごめんなさいアリサさん。アリサさんはここで誰とも会わなかった、本校舎に戻って部活動の見学に行ってください」

「うん……分かった」

アリサはエマの指示に頷き踵を返して歩き出した。

「ごめんなさいアリサさん」

「いつまでうじうじしているのよ。それより——」

その背中にもう一度謝るエマをセリーヌが一喝する。

その瞬間、二人は何かの波動を感じて息を呑んだ。

「セリーヌ、今のは?」

「分かんないわ……もしかしたら第一拘束が解けた兆しかも、エマ確認して」

「ええ……」

エマは試練の状況を確認できる術具を取り出して確認する。

「あ、あれ……う？」

霊力を込めても、その力は吸い取られるように何処かに消えていく。

「何してるのよもうっ！」

セリーヌが急かすがエマにも何がどうなっているのか分からない。

ラインが入った時には問題なく使えていたのに何故と考えていると、ようやく術具は起動した。

「よかった壊れたわけじゃなかった——え……う？」

「どうしたのよエマ——って、はあっ!？」

エマの手元を覗き込み、セリーヌは素っ頓狂な悲鳴を上げる。

「第六までの全て《拘束》が停止!？ 《試し》も全て機能停止……リインさんたちは今…… 《灰の騎神》の前にいる………え……う？」

「どうなってるのよいったいっ!？」
驚きのあまり言葉を失って思考停止するエマに対してセリーヌの咆哮が空しく響き渡った。

ちなみに余談ではあるが、その日トールズ士官学院は原因不明の《導力停止現象》に見舞われたのだった。

・*

「また怒られた。解せない」

「当然なの」

4話 その日の第三学生寮

四月十一日。日曜日。

その日はトールズ士官学院の新学期が始まって二度目の自由行動日。

リインはトリスタの駅で列車が来るまでの待ち時間にクリスと話をしていた。

「それじゃあクリスはフェンシング部に入部したのか？」

「はい。生徒会に入るよりもまずは自分の力をつけることを優先しようと考えたんです……」

今の僕に足りないのはとにかくいろんな人との対人戦闘だと思っ
んです。フェンシング部には時々ナイトハルト教官も顔を出すそ
うです、それにこんな機会でないと僕の鍛錬の相手はみんな遠慮して
しまいますから」

「そうか……」
クリスが自分で選んだというのならそれもありがとリインは納得
する。

ユン老師がリインに釣りを教えたように、剣一辺倒の鍛錬では培え
ないものもあるのだが、自分の時と違って楽しそうにしているクリス
にそれを言うのは無粋だろう。

「それでもしよかったらリインさんもフェンシング部に入りませんか
？」

「フェンシング部か……老師に教わる前は父さんに騎士剣術を教えて
もらっていたから、できなくはないけど遠慮しておくよ」

「そうですか……」

しゅんと残念そうに肩を落とすクリスにリインは改めて思う。

——オリビエさんの弟なのにまともだよな……

ユミルの合宿の時からそうだが、腹違いとはいえ彼の弟と思えない
程に素直だ。

もしも彼だったたらこんな風にあっさり引き下がったりはしない
だろう。

「でも旧校舎の探索はもう終わってしまいましたよね？ 《灰の騎神》は動きそうもなかったですけど」

「二応、ラッセル博士に見てもらおうかとは思ってるが、あの様子だと呼んでも調べることができるか分からないけど……来るんだろうな」先週のことを思い出してリインは唸る。

第一拘束の番人を倒したところまではよかったのだが、そこで《空の至宝》が気を利かせたつもりなのか封印機構を、かつてのデバイスタワーの機能を解除する要領で全ての拘束、並びに《試し》の機能を停止させてしまった。

例え、どんな裏技を使われても対処できるようにしてあったとしても、その力の源から干渉されてしまえば無力でしかない。

何より二つの至宝の力の一端でしかない《灰の試練》が過不足ない《至宝》の力に抗えないのは当然の結果だった。

しかし、そうした反則技で《試し》を無視したせいなのか、《灰の騎神ヴァリマール》は繋がっている感覚こそあるがまったく動く気配はなかった。

聞けば、内部の回路の損傷が激しく自己修復に専念しているらしく、そんな《灰の騎神》を《空の至宝》はゼムリアストーンの結果で覆い尽くし、修復を促進する場を整えてくれた。

リインからすれば有難いことばかりなのだが、必要な手順を考えると頭が痛い話だった。

学院長への説明に、オリヴァルト皇子を呼んでの実物を交えた話し合い。

ローゼリアの話ではいくらリインが最短で試練をクリアしても《灰の間》が開放されるのは数ヶ月先だと言われていたため、考えていた予定が完全に崩壊してしまった。

とりあえずヴァンダイク学院長を《灰の間》に案内して事情を説明し、旧校舎には一般生徒の立ち入りを禁止させ、さらには法術で施錠し旧校舎の管理はリインに一任させてもらった。

「今日はミュラーさんとクロスベルに行くことになったし、来週はオリヴァルト皇子が来ることになってる……」

それに合わせてラッセル博士も来ることになったし、再来週は特別実習があるから部活動をしている暇なんてないよ」

「ミユラーさんとクロスベル……」

たしか《ロラン・ヴァンダールの右手剣》が競売に出品するんですけどか？」

「ああ、本当は参加するつもりはなかったんだけど——」

先日、ブルブラン男爵から送られてきた《黒の競売会》の目録のページに載っていたその商品がリインが強制参加することになった決め手だった。

ただの事実確認のために連絡したヴァンダール家ではちよつとした騒ぎが起こった。

獅子戦役の頃から行方知れずとなっている双剣の片割れを取り戻すために、ヴァンダールは競売への参加資格を持つリインの外出届と、場合によっては外泊と翌日の授業の免除などの手を尽くし、その上——

「ヴァンダール家の当主直々に頭を下げられたら、男爵家としては領くしかないからな」

階級が絶対という訳ではないが、それでもオリヴァルト皇子の下に就いている立場に近いリインからすれば断り辛い要請だ。

おそらくそれを見越してブルブランは目録のそのページにわざわざ付箋を付けていたのだろう。

「そういうわけだから、帰りは遅くなるし場合によっては明日の朝一の列車で帰ってくることになると思う……」

だけど本当に大丈夫なのか？ 無理に今日にしなくてもいいんじゃないか？」

「大丈夫ですリインさん。包丁の扱い方も覚えましてし、導力コンロの使い方も完璧です」

拳を握って意気込んで見せるクリスに一抹の不安をリインは抑え切れない。

何度か一緒に料理した事はあるが、監修なしで任せるのは今日が初めて。

小さな子供ではないのだから無用な気遣いなのは分かっているのだが、それでも思ってしまうのは彼の本当の身分を知っているからだろう。

「これも経験か……くれぐれもレシピ通りに作るんだぞ。応用はそれができてからだからな」

それでも一応、最後に釘を刺す。

「はい、任せてください。あとクルトやロイドさん達によりしくお願いします」

「ああ、でも今日は行く場所が行く場所だから多分会えないと思うけどな」

そう言っってリインはクロスベル行き列車——ではなく、まずミューラーと合流するために帝都へイムダル行き列車に乗り込んだ。

・*

フエンシング部の練武場での活動時間は予定通りの四時で終わる。その後、クリスは真っ直ぐに帰宅して早速調理に取り掛かる。

「何だ、今日はクリスが食事を作るのか？ リインはどうした？」

「ユーシスさんお帰りなさい。リインさんは今日はクロスベルに行っています」

「ああ……今日だったか」

そんな話があったことをユーシスは言われて思い出す。

「ユーシスさんも部活動が終わったんですか？ 夕食がまだなら是非食べて意見を聞かせてください」

「いや、俺は部活には入っていないが……」

キラキラと期待に満ちた眼差しにユーシスは地元の子供たちを思い出し、その申し出を断り切ることはできなかった。

……

……

……

「あら珍しい」

帰ってきたサラは食堂に揃った面々を見て目を丸くした。

今日はリインがクロスベルへ行って、彼の代わりにクリスが夕食を作ることになっていた。

なっていたのだが、食べる人数は変わらないはずだったのに、そこにはリインを除くⅦ組の一同が揃っていた。

「どういう心境の変化よ？ リインがいないからってみんな揃うなんて担任としていじめは感心しないわよ」

「そんなんじゃないですね。ただクリスに誘われて断り切れなかったんです」

「右に同じです」

アリサの言葉にマキアスがしかめっ面で同意する。

「僕はその……帰ってきたらいい匂いに釣られちゃって」

「不覚……」

エリオットとラウラは空腹でお腹を鳴らしたことを思い出して頬を赤く染める。

「あの……サラ教官。クリス君の料理の腕前はどれほどなんでしょうか？」

「フィーとガイウスから聞いてないの？」

リインと一緒にっていうのは何度か経験してみたんだけど、クリス一人で作るのは今日が初めてよ」

「つまりこれがクリスさんにとって初めての料理ということですか……」

「貴族の初めての料理……覚悟しておいた方が良さそうだな」

緊張にエマとマキアスは蒼褪めるが、サラはそんな二人に苦笑して自分の席に着く。

「丁度いい機会ね……」

あんたたちが入学して二度目の自由行動日だったわけだけど、学院生活はどうかしら？

いえ、まどろっこしいことは抜きにして、あんたたちがリインについてどう思っているのか聞かせてもらえるかしら？」

サラの言葉に食堂が静まり返り、我先にとマキアスが反論する。

「ど、どうしてそんなことを教官に話さなければならぬんですか!」
「それはあたしがあんな達の担任教官だからよ……」

それに言ったはずだけど、Ⅶ組は新型戦術オーブメント《ARCU S》の試用テストもカリキュラムに入っているわ……」

「だけどリインはクリス以外と戦術リンクを結べていない。これはどうしてだと思おう?」

「それはリイン・シユバルツァーが僕達のことを心の底で見下しているからでしょう」

「その根拠は?」

「今日この場にいないのが何よりの証拠じゃないですか!」

「クロスベルで競売会に参加する? ふん、あからさまな貴族じゃないか」

「やれやれ、貴様は本当に人の話を聞いていないようだな」

侮蔑を口にするマキアスにユーススは呆れる。

「何だと!」

「リインはヴァンダール家の要請を受けて競売会に参加すると言っていたはずだ……」

「それも目的の品は獅子戦役で行方知らずとなった《ロラン・ヴァンダールの双剣の片割れ》……」

「ヴァンダール流といえば皇族の守護役であるが、平民にも人気の高い帝国の武の一角……」

「それを取り戻すことは帝国民として当然のことだと何故思わない?」

「そんな古い剣にいったいどんな価値があるっていうんだ!」

「そんなものを使うミラがあるならもつと平民に還元するべきだと僕は言っているんだ!」

「阿呆が……獅子戦役で紛失した《ロランの双剣》に《聖女の槍》、それに《偽帝》が隠した宝物を取り戻すことは帝国人なら協力して当たり前の義務だ」

「ふん、そんな義務なんて僕は初めて聞いたがね」

ユーススの主張をマキアスは鼻で笑う。

文化や伝統を蔑ろにするマキアスの態度に眉を顰めたのは直接話していたユーシスだけではなくラウラも同じだった。

が、彼女が何かを言う前にサラがその場を治める。

「ま、それぞれに思うことはあるでしょう……」

ユーシスやラウラだってリインに対して思うところがあるのは同じでしょ？

とりあえず今日の所はリインに関しての愚痴で盛り上がりましょう……

あの子はいろいろと規格外だし、リベールでのあの子が何をしていたのかあたしもある程度は知っているし、少なくともあの子の強さの一端に知ることはできるわよ」

サラの言葉にユーシスとラウラが体を揺らす。

「クリス、ここでの話はリインには内緒よ」

サラは厨房に立つクリスに向かって忠告する。

「え……で、でも……そんな陰口みたいなことは……」

「この話し合いをすることはリインに予め言っているから大丈夫よ」

「それなら了解しました」

渋ったクリスはリインの名前を出した途端、受け入れる。

「チョロいわね……それじゃあ出席番号順でアリサから行ってみようかしら？」

「あ、あたしっ!？」

「そ……そういえばリインがリベールに家出した時に、あんたも家出してツアイスで会ってたんだっけ？」

「ど、どうしてそれを!？」

サラが知るはずのない情報にアリサは狼狽える。

「そんなことは良いから、今リインと戦術リンクを結べないのはその時に何かがあったからなのかしら？」

「それは……」

促されてアリサは考え込む。

もつともアリサの場合は、その理由は自覚できていたが、それを口に出すことは憚られる。

なので別の話にすり替える。

「たぶん私はリインに劣等感を感じているんだと思います」

「劣等感？」

「二年前、ツアイスで会った時のリインは弱くて頼りなくて無礼で不埒な男の子だったんだけど……」

試験の時に再会したリインは見違えるように強くなっていて……なのに私は二年前から何も変わってなくて……」

「なるほどね……」

同じ家出した者同士なのに差をつけられたから、劣等感ってわけね……ま、とりあえずそういうことにしておくわ」

「それってどういう意味ですか？」

本音は別にある。

それを見透かしたようなサラの言葉にアリサは抗議するが、そんなアリサをスルーしてサラは次を指名する。

「それじゃあ次はエマね」

「私ですか……あのうまく説明できないんですけど、リインさんとリンクを結ぶのが怖いんです」

「怖い？」

「はい……」

アリサと同じように別の理由があるのだが、それを隠してエマは続ける。

「リインさんと戦術リンクを結ぶとリインさんの中に得体の知れない《何か》を感じてしまって、気付いたらリンクが切れているんです」

「俺も委員長と同じ理由だ」

曖昧なエマの言葉にガイウスが同調する。

「リインが人格者だということとは頭で分かっている。だが、その大きな《何か》に触れると体が恐怖に震えて拒絶してしまう……」

訳の分からないことを言っているとは思いますが、そんな風にしか説明できないんだ」

「ふーん……他に委員長とガイウスと同じ意見の人はいる？」

意味深に頷き、サラは一同を見回す。

その言葉に応える者がいないことを確認してサラは二人に向き直る。

「あなた達はこの中でも感受性が高い方なのね……」

たぶんあなた達がリンクして触れたのはラインの《鬼の力》の部分よ」

「《鬼の力》？ それはいったい何なんですかサラ教官!」

エマが眼鏡を光らせて興味深そうに聞き返す。

「流石にそれはあたしの口からは言えないわね……」

機会があればラインから話すはずだし、その力はしつかりとラインが手綱を握っているから安心していいわよ……

それじゃあ次はエリオットね」

有無を言わずに話を切り上げてサラは次を促す。

「ぼ、僕は………僕もアリサと同じでラインに劣等感みたいのを感じているんだと思います」

エリオットは表情を硬くして語り出す。

「みんな知っているかな？」

ラインが年末の御前試合で戦った相手は僕の父さんだったんだ」

「オーラフ・クレイグ中将の………そういえば同じ家名だが、あの中将の息子がエリオットだったとは………あまり似ていないから同姓なだけだと思っていたが」

エリオットの言葉にラウラが当時のことを思い出し、彼と似ていないエリオットに意外な眼差しを送る。

「僕は母さん似だから」

「たしかにクレイグ中将との御前試合は行われたが、それよりもその後の帝国三強との四巴の戦いばかりが報じられて、前座扱いにされていたな……」

エリオットが戦術リンクを結べない理由はそれが理由か？」

「ううん、違うんだラウラ……」

問題は御前試合じゃなくて、その後だったんだ……

今ここで言うべきじゃないかもしれないんだけど、僕は本当は帝都の音楽学校に進学したかったんだ……

でも父さんに反対されていて、御前試合の後にこう言われたんだ」
『あれこそが誇り高き帝国男児。お前もリイン・シユバルツァーのよ
うな立派な男になるんだぞエリオット』

「うわ……」

「あちゃー」

クレイグ中將の言葉を聞かされてフィーとサラは天を仰ぐ。

彼に悪意はないのだろうか、いろいろと規格外なリインと比較され
たエリオットに思わず同情してしまう。

「僕と同じ年なのに、リインはずっとすごくて強いし——」

「あまり卑下しなくて良いわよ。あれは修羅場を潜って来たからこそ
の強さだから、あの子を帝国男児の基準にするのは間違っているから
……」

むしろ真似したら死ぬから。次はガイウスは——さつき話してく
れたからフィーね」

「ん？ サラはわたしとリインの関係を知っているはずだよね？」

「まあね……あたしよりもここにいるみんなに一応説明しておきなさい
い」

「めんどくさい……」

と、言いながらもフィーは口を開く。

「わたしは二年前、リインに傷物にされた」

「……………え？」

「えつと……フィーちゃんは今十五歳で二年前だと十三歳ですよね
？」

「ん、お腹をあんな風に貫かれたのは初めてで、たくさん血が出て、す
ごく痛かった」

「ちよつとフィー」

「あの時……わたしはリインの獣じみた目で睨まれて怖くて動けなく
なって、そんなわたしをリインは乱暴に——」

「ストーツプツ！ それ以上はやめなさいフィー！ っっていうかわざ
とでしょ!?!」

「嘘は言っていないけど？」

フィーは首を傾げる。

「ちつ……やっぱり噂通りの下衆か」

舌打ちして悪態を吐くマキアスにサラはため息を吐く。

「あの、二年前ということはフィーさんもリベルにいたんですか？」
キツチンで話を聞いていたクリスが疑問を挟む。

「ん、依頼でリインと戦った」

「依頼？」

前触れもなく出て来た言葉にラウラは首を傾げる。

「二年前、うちの団がリインを半殺しにする依頼を受けた。そしてわたしは返り討ちにされた……」

ま、そんな感じでその時のリベンジをしようと思ってるからリンクが結べないんだと思う」

あまりにあっさりと言われた言葉に一同は黙り込む。

「それは穏やかではないな……」

この際だから教えてくれないか？ フィー、そなたはいったい何者なんだ？」

ラウラは真つ直ぐフィーを見据えて続ける。

「オリエンテeringの時も、そなたはリインと同様、サラ教官からハングデを付けられていた……」

それに爆薬を仕込んだナイフを精確的に当てる技量や武術教練でセーブしている身のこなし……ただ者ではないのだろうか？」

「隠すようなことでもないから別に構わないけど……」

士官学院に入る前、わたしは《猟兵団》にいた。爆薬も銃剣の扱いもそこで全部教わった。ただ、それだけ」

「りよ、猟兵団!？」

「聞いたことがあります。一流の傭兵部隊のことをそんな風に呼ぶ習慣があるって」

フィーの告白にエリオットが震え、エマが緊張する。

「信じられん、死神」と同じ意味だぞ」

こんな自分よりも小さな女の子がと、ユーススは思わずもらす。
「わたし、死神？」

聞き返したフィーの言葉に誰も答えない。

それを答えるには明らかにまだ互いのことを理解していないからだ。

「フィーに関してはもうその《猟兵団》は解散しているから、あくまでも元猟兵よ」

サラのフォローに一同の反応は薄い。

「それじゃあ次、マキアス。何かリインについて聞きたいことはあるかしら?」

「え、あ……」

フィーが元猟兵という情報を処理し切れないのか、マキアスはあれだけ毎日リインに対して文句を言っているのに口ごもる。

「ならあたしから言わせてもらおうけど、帝国時報とかに載っているゴシップの類の半分くらいはデマよ……」

それに今は一目置かれる立場にいるけど、シュバルツアー家はリインを養子にしたことで貴族社会から誹謗中傷を受けていた時期があるのよ……

それがリインが家出をした理由の一端でもあるし、シュバルツアー家は民に寄り添った慎ましい生活をして領民に慕われている貴族よ……

それでもあなたは特権階級を笠に偉そうにしている貴族だっていうの?」

「それだって浮浪児だっていうのも妾の子を引き取っただけって話じゃないか、それなら自業自得だっ!」

「その噂は根も葉もないゴシップよ」

「ふん……口ではどうとでも言える……」

大方妾にして愛するとか言っておいて結局捨てたんだろ、これだから貴族は」

「いい加減にしろ阿呆が……もはや聞くに堪えん」

「何だっ!?!」

もはや口論するのも嫌だと言わんばかりの態度でユーシスはマキアスに冷たい言葉を浴びせる。

それに食って掛かるマキアスに今度はガイウスが口を挟んで止めた。

「俺にはよく分からないが、貴族とはそこまで蔑まれなければいけないものなのか？」

「ガイウス？」

「俺は知つての通り外国人だ。故郷に身分はなかったため実感が湧かないのだが、何をもってマキアスは彼らを誹謗中傷して貶めるのか、説明してもらえないだろうか」

「そんなの決まっている！ 旧態依然の制度を笠にして平民を見下して生きているそれが貴族だっ！」

「それはおかしいな」

「な、何!？」

「少なくともリインもユースイスもラウラ、それにクリスも外国人の俺には礼を持って接してくれている……」

彼らがマキアスの言うような貴族とは俺には思えない。むしろ貴族だからといってみんな同じだと見下しているのはマキアスの方ではないのか？」

「ぐっ……」

声を荒げず、何処までも静かにそれでいて友を侮辱された怒りを秘めた言葉にマキアスは反論を忘れてたじろぐ。

「はいはい……マキアスの話はそこまでしておきましょう……次はユースイスね」

「俺か……あまり確証はないのだが、おそらくあいつが俺の弟になる可能性を考えてしまったが故の拒絶だろうな」

「え……?」

「は……弟? どういうことですかユースイスさん!？」

予想もしていなかった理由に真っ先に反応して声を上げたのはクリスだった。

「年の始めに兄上がユミルへの湯治旅行に行き、帰って来てからその時の話を楽し気に聞かされたのだ……」

兄上はアルバレア公爵家で二十七だがまだ婚約者もない……

シユバルツアー家は御息女もいるし、男爵位だがリインの影響を考えると一概に悪い相手ではない……

具体的に兄上がそうすると言ったわけではないのだが、いろいろと複雑な感情を奴に感じているのは確かだ」

「ユーシスのお兄さんって、たしか入学式に出席していた常任理事の人だったよね？」

「ああ」

エリオットの言葉にユーシスは頷く。

「ふーん……てつきりあなたとラウラは御前試合でリインに注目を奪われたからだと思ってたんだけど」

「そんなことでいちいち目をくじらを立てるつもりはない……」

人伝に聞いていたら、とても信じられないがこの目で御三方と戦った姿は見ているからな」

「それにしても部活も入らないで剣の鍛錬ばかりじゃない？ やっぱり意識してるんじゃないの？」

「さあな」

サラの茶化す言葉を適当に受け流してユーシスはそれ以上の追及を拒む。

「それじゃあ最後はラウラね」

「私は……」

思い出すのは御前試合で父、ヴィクターを一蹴したリインの姿。試合が始まり、次の瞬間には父は空を舞い。

彼の剣、アルゼイドに伝わる宝剣ガランシャルは弾かれて、目の前に迫っていたのにラウラはそれに反応することもできなかった。

自分に命中するかもしれない宝剣を空中で受け止めたのは、リインの知り合いらしき女性。

彼女は公衆の面前でアルゼイドを傍流と蔑んだ。

そのことが許せなかったが、同時に納得もいかなかった。「私はリインの戦い方が納得できない……」

あれ程の力を持ちながら、どうしてあんな不意打ち紛いの方法など使ったのか……

そんなことをしなくても父上たちと互角に戦える力を持っているのなら、正々堂々と挑めばよかつたはずなのに」

「えっと……ラウラさんが言っているのは御前試合のことですよね？」

私は帝国時報でしか知らないんですけど、どんな内容だったんでしょうか？」

「最初はラウラとユースと同じ条件で僕の父さんとリインが戦ったんだけど、その後にオズボーン宰相がリインの実力はそんなものじゃないって言い出したんだ」

当時、その場にいたエリオットがエマの疑問に答える。

「リインはアルゼイド子爵、ヴァンダール子爵、それからルグイン伯爵の三人から戦いたい相手を選べって言われたんだけど、リインが選んだのは四巴の総当たり戦だったんだよ」

「改めて聞くとあり得ないわね……」

《光の剣匠》に《雷神》、《黄金の羅刹》……三人共帝国を代表する最強の武人なのに」

アリサはリインが相手にした三人を思い浮かべて、改めてリベールで会った少年との印象の違いに頭を悩ませる。

「そうして始まった試合だったんだけど、開始と同時にリインが何かをしてラウラのお父さんが倒されたんだよ」

「何か、というのはいったい？」

「ごめん、その場にいたんだけど何が起きたのか僕には分からなかったんだ」

「だいたい直前に話した時、リインは自分のことを《初伝》と言っていたんだっ！」

おそらく父上たちを油断させるためにわざとそう言ったに違いない！」

「そんなの騙される方が悪いんじゃないの？」

悔しそうに吐き出すラウラの言葉に、馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの態度でフィーが呟く。

「何だど？」

「ふいっ」

ラウラに睨まれてファイはそっぽを向く。

そんな二人の様子にサラは頭を抱える。

ラインへの蟠りを吐き出させて心機一転させるつもりだった。

マキアスのように凝り固まった思想では今回だけでその蟠りが解けるとは思っていなかったが、もしかすればラインへのリンクどころか今まで繋げることができていた相手同士とのリンクも怪しくなってしまうかもしれない。

「便利なシステムもこうなると考えものよね」

もうどうにでもなれつと言わんばかりにサラは思考を放棄する。

「クリス、夕飯はまだできないの？」

「え、あ……もうできてます」

「それじゃあ、さっさと食べましょう」

最悪な空気を気にも止めず、サラは凶たく鼻歌交じりで料理を運ぶのを手伝うために席を立つ。

第三学生寮の本日の夕食のメニューはカレー。そしてデザートにはラインが作り置きしているアイス。

「ど、どうでしょうか？」

重苦しい空気の中で始まったラインを除いたⅦ組のメンバーでの食事。

誰も口を開かない食事にクリスは恐る恐る味の感想を求める。

「極めて平凡だ」

それがクリスの初めての料理の評価だった。

・*

「ただいま戻りました」

ラインが戻って来たのは結局、翌日の早朝だった。

「お帰りなさいラインさん」

朝食の後片付けをしていたクリスは帰ってきたラインに期待に胸を弾ませながら出迎える。

ラインの手には大小二つのトランクケースと背囊を担いでいた。

「ちゃんと落札できたんですか？　それが『ロランの双剣』なんですか？　見せてもらっても良いですか？」

「落ち着けクリス」

矢継ぎ早に繰り出されるクリスの様子にリインは苦笑する。

「あら、お帰りリイン。ちゃんとした理由があるんだから今日の授業はサボると思っていたんだけど」

「サラ教官、仮にも先生がそういうことを言いますか？」

「何はともあれ、何事もなく帰ってきたみたいで何よりね」

「ええ、一応は」

思わずリインは言葉を濁す。

招待されていたオズボーン宰相の代理として競売会に来ていたレクター。

カルバートに帰ったはずの元遊撃士協会の受付をしていたキリカとの再会。

さらにはレンから紹介状を譲ってもらって潜入して来たロイド達と会ったり、アリオスと密会していた女性、マリアベルにヨルグに作ってもらった人形を譲ってくれと迫られたりいろいろあった。

オークションもトラブルがあり、途中で中断されてしまったが、目的のものはオークションの前半に集中していたため問題なく落札できた。

「それが例の双剣の片割れ？」

帝国人ではないが、それでも歴史に語り継がれる人物の剣にサラは興味を示す。

「いえ、双剣はミュラーさんに持ち帰ってもらいました。これは俺が個人的に落札したものです……」

ところでラウラは――」

寮の中の気配を探ろうとしたところで、当のラウラが階段を下りて来た。

「リイン……今帰って来たのか？」

「ああ、朝早くすまないけど少し良いかな？　実はラウラに――」

「すまないが、私はもう学院に行くところだ。話は帰って来てからにしてくれ」

「え……でもまだ登校には時間が——」

「何か問題があるのか？」

「い、いえ……ありません。呼び止めて悪かった」

凍てついた眼差しを向けられてリインは思わず謝ってしまう。

そんなリインの顔を見てラウラは一瞬表情を曇らせるとバツが悪そうに足早に寮を出た。

「……………サラ教官、何をしたんですか？」

「何て言うか……地雷処理しようとしたら誘爆しちゃって学級崩壊の危機って感じ？」

「何ですかそれは？」

とりあえず昨晚の話し合いは失敗に終わったのだとリインは察する。

「あの、リインさん……それがロランの双剣じゃないなら、何なんですか？」

リインが持ち帰ったトランクケースが気になってクリスはもう一度尋ねる。

「たしか元々は結社の執行者に鑑定を頼まれていたのよね？ 宝石って聞いていたけど随分と大きいのね」

「いえ、そっちは彼が望むものではなかったので落札しませんでした」
幸いなことに《聖獣の涙》と名付けられた宝石はあくまでそう題名

が付けられただけの宝石で本物の聖獣とは何の関係もないものだった。

拳大の天然な蒼耀石はそのカットのから生み出される輝きから見ても見事の一言に尽きたが、ローゼリアやツァイトからもらった結晶石にあった凄みは感じなかった。

「じゃあいったい何を落札したわけ？」

「とりあえず、これはクロスベルのお土産のみっしい饅頭です」

食堂に場所を移して、背囊から取り出したのは箱詰めされたお菓子。

「そしてこっちは……」

小さい方のトランクケースに手を掛けたリインは不意にその手を止める。

「どうしたの？」

「サラさんは知らない方が良いと思います」

「どういう意味よそれ？ もしかしてお酒？」

どういう嗅覚をしているのか、サラは一瞬でリインの思考を看破してみせる。

リインは観念して首肯した。

「そうです。リベールでお世話になった人に贈ろうかと思つて……

ろくな挨拶もできてませんでしたし、入学祝いもいろいろ貰つてしまいましたから」

ミユラーと合流する前の帝都でいろいろ見繕つてみたが、それとは別にトラウマを刺激するものが出展されたので思わず落札してしまった。

「リベール産のワイン 《グラン||シヤリネ》 1183年物です」

「なっ!？」

出て来た高級ワインにサラは絶句する。

「あ……あの幻のヴェンテージワイン……」

「サラ教官」

無意識に伸ばされた手をリインははたき落とす。

「こ、こんな高級ワインをどうするつもりよ!? 一口飲ませてくださいつー!」

問い詰めながらも懇願するサラにリインは嘆息する。

「残念ですけど、一時的に俺が立て替えていますけど、支払いは帝国政府が出してくれることになってるんです……」

それに贈り物だつて言いましたよね？」

「くっ……こんな高級ワインを誰に贈るのよ？」

「サラ教官も知っている人ですよ。リベールのボース市長のメイベルさんにです……これでやっとあの悪夢から解放される」

「リインさん……」

万感が籠ったリインの眩きにクリスはいたたまれなくなり、話題を逸らすようにもう一つの大きなトランクケースに意識を向ける。

「こっちはいったい何を落札してきたんですか？」

「ああ、それは――」

リインはケースの留め具を外してそれを二人に見せた。

出て来たのは古ぼけ、傷だらけで半ばから先端がなくなった長大だったはずの騎兵槍。

「これは……まさか……」

クリスは目の前の槍と知識で知っているものを照らし合わせて言葉を失う。

「随分と年代物みたいね……というか全体に亀裂が走っているところを見ると武器としては使えそうにないけど」

「《ロラン・ヴァンダールの双剣》と同じ、獅子戦役の頃に紛失した《槍の聖女》が使っていたとされる純ゼムリアストーン製のランスです……」

飛び入りの商品で場を盛り上げるために用意されたサプライズ商品だったんですけど、つい落札してしまいました」

もはや武器として使うこともできず、朽ちたその姿は観賞用にもならない。

ある程度の盛り上がりはしたものの、武骨で壊れた槍よりも煌びやかな装飾品を好む者たちの方が多かった。

面白半分で値が釣り上げられていることも不快に感じ、リインは即席で教わった競売のマナーを無視して一気に値を釣り上げて落札させた。

「これが……《槍の聖女》が獅子戦役で使っていた槍……」

クリスは感激に目を輝かせる。

「ど、どうするんですか？ やっぱり帝国政府に返還するんですか？」

「まあ、それが筋なんだろうけど」

勢いで落札したものの、その後のことは何にも考えていなかった。

例えば、《黒の競売会》に参加していた有力者達がこの槍の価値を蔑ろにしたとしても帝国政府は違う。

しかし、本当の持ち主がいることを知っているだけに、どちらに渡せばいいのか悩んでしまう。

「それにアルゼイドも縁のある家ですから。ラウラに相談したかったんだけどな」

「そうですね。アルゼイド家と言えば、『鉄騎隊』の副長を務めていた祖先の家系ですから」

「ところでその槍っていったいいくらで落札したのよ?」

「その『グラン||シヤリネ』の十本分の値段です」

何気なく尋ねたサラの質問にリインは即答を返していたのだった。

5話 リインVSVII組

四月十四日。

その日のVII組の武術教練はあろうことかツールズ士官学院全校生徒の見学の下で行われることになった。

教室の窓や、屋上から貴族、平民の生徒たちは一様に彼らの仕合が始まるのを待っている。

校庭には左右に分かれてVII組の一同が分かれている。

しかしその数は均等どころか、片方はリインの一人。他方は残りのVII組の九人。

見学する際に教官たちに言われた時には耳を疑ったが、本当に一対九で戦うようだった。

「大丈夫かなリイン君」

作戦会議をするVII組達から離れて一人佇むリインを屋上で見下ろしてトワは彼の身を案じる言葉を漏らす。

「さて、どうだろうね……」

サラ教官が許可したのだから大事にはならないと思うが、リイン君なら決して無理ではないと私は思うよ」

「そういえばゼリカはあいつと共闘したことがあったんだっただか？」

「ああ、リベールの武術大会の時にね……その時は私と同じくらいだったけど、どれくらい強くなったのか楽しみだよ」

「まあ、アンの全力の拳を受けても倒れなかっただけでも彼の凄さは分かるけどね」

「もう、あの時はびっくりしたんだよ！」

リイン君と顔を合わせたら、いきなり歯を食いしばれって言って本当に驚いたんだから」

「しかもあの後輩は律儀に言われた通りにして、殴られた後に礼まで言っていたからな。あれはマゾだぜ」

「結局、あれはいったい何だったんだい？」

「ちよつとした八つ当たりと通過儀礼みたいなものさ」

アンゼリカはその日と同じように曖昧な言葉で言及を避ける。

「ところでどっちが勝つか賭けるか？」

「クロウ君、これは授業の一環なんだよ。それに賭け事はダメだっていつも言ってるでしょ」

「固い事言うなって、じゃああれだ。負けた奴がジュースを奢るって言うのは？」

「ふふ、それくらいならいいんじゃないかトワ……」

それにそれなら私が相手になろうじゃないか、負けた方がジョルジュとトワを含めて奢るといのでどうだい？

ちなみに私はリイン君に賭けさせてもらうよ」

「あ、ゼリカ手前っ！」

「おや、クロウ……」

君ともあろうものが大穴を狙わないと言うのかい？ それでもトールズの勝負師なのかな？」

「大穴って言っても、俺とお前の賭けじやリターンは同じじゃねえか」

「ふむ……ならばジュースなどケチ臭いことは言わない。君が勝ったら今日のディナーを君たち三人に奢らせてもらおうじゃないか」

「よし乗った」

アンゼリカの提示した条件にクロウはあっさりと飛びつく。

「もう……二人とも……」

「でもこの場合、どっちが本命でどっちが大穴なんだろうね？」

アルゼイドとアルバレアの二人はかなりの実力者だって有名だし、ノルドからの留学生は僕達と違って実戦慣れしている。それにクレイグ中将の息子さんもいるし」

「たしかフィーっていう去年サラの奴が預かっていたチビツ子は元猟兵だったか？」

「あとはアリサ君も、ラインフォルトお抱えのメイドから手解きを受けているから決して弱くはないよ」

「それだけ聞くといくらリイン君が強くても勝てると思えないんだけど……怪我だけはしないほしいな」

「はは、トワは心配性だな」

そんな談笑をしながら二年生たちは自分たちの後輩の戦いが始ま

るのを待つのだった。

・*

「とりあえず、いろんな蟠りがあるみたいだから一度ぶつかってみたらいいんじゃない？」

そんなサラの思い付きで行うことになったリイン対Ⅶ組の模擬戦闘。

作戦会議が必要ないリインは、Ⅶ組の準備が整うのを待ちながら、見物客たちを眺めて途方に暮れる。

「どうしてここまで大事になるんだろう」

御前試合の不正行為の噂の払拭のため、そして教官たちもリインの実力を見てみたいという理由で全校生徒の見学が決まってしまった。

「随分と弱気じゃない。御前試合じゃすごい大暴れをしたくせに」

「あれは不意打ちと《鬼の力》がうまく嵌っただけですよ」

Ⅶ組の作戦会議が終わるまでの暇つぶしにサラにリインは答える。

「現にあの後一対一でアルゼイド子爵と手合わせしましたけど、《鬼の力》を使って勝率は三割でしたから」

「帝国最強に三割の勝率って、あんた本当に強くなったわよね……クレアの胸に全力で飛び込んだあの時が懐かしいわ」

「ちよ、サラ教官それは！」

しみじみと懐かしむサラにリインは思わず狼狽える。

「一応言っておくけど、《鬼の力》は使わないですよ」

「分かってます」

リインは円陣を組んで作戦会議をしているクラスメイト達を見る。

クラスメイト達の中で最も注意するのはフィーだろう。

だが、実力差よりもクラスメイト達の半分の目に宿る、訓練の範疇を超えた本気の殺気が混じった眼差しにリインは頭を抱えなくなる。

「そんなに恨まれるようなことをしたかな？」

「ま、みんなまだまだ子供だって言うことよ。せいぜい油断しないことね」

「俺もまだまだ未熟ですからそんなことはしませんよ」

謙遜ではなく本気で言っているリインにサラは少し呆れてしまう。格下に対しても決して油断しない良い心掛けだと思うが、どこまでも上を目指そうとする姿に危うさを感じてしまう。

「リイン……あんだ——」

「お待たせしました」

問い質そうとしたサラの言葉にクリスの声が被る。

「……話はまとまったようね」

しこりはあるが、サラも具体的に何を指摘すべきか分からないためそれを先送りにする。

「それじゃ始めるけど、リインも良いわね？」

「ええ、いつでもどうぞ」

リインはⅦ組の配置を見ながら頷く。

クリスとラウラ、ユースにガイウスの前衛組がリインの前にいるに対して、アリサとエリオット、エマの後衛組の三人は校庭の端にまで距離を取っている。

そしてその間には中衛のマキアスと遊撃のフィー。

順当な配置を確認しながら、戦術リンクの組み合わせも確認する。

クリスはアリサと、ラウラはエリオットと、ユースはガイウスと、マキアスはエマと。

奇数だからあぶれる形になっているがフィーは特に気にした様子はない。

「やる気は十分みたいね。それじゃあ——始めっ！」

サラの合図と同時にラウラが大剣を振り振り斬り込む。

「はああああああああっ！」

気合い一閃の一撃はリインが後ろに跳んで空を斬り、地面を穿つ。すかさずユースがそれを追い駆け、フィーとマキアスが銃で狙う。が、それよりも早くリインは太刀を抜いて振り被る。

「なっ!？」

「回避っ！」

フィーが全員に向かって叫ぶ。

「六の型《孤影斬・極》」

螺旋の力を乗せた極大の剣閃をリインは縦に振り下ろした。

「へ………？」

「は………？」

「ええっ!？」

巨大な剣閃は十分な距離を取っていたはずのアリサやエマ達にまで届き、地面に叩きこまれた剣閃は衝撃を撒き散らしてアリサ達を吹き飛ばす。

「くっ」

「これ程とは」

「だがこれで奴は——」

フィーの声で何とか回避が間に合ったラウラ達は一瞬で後衛組を薙ぎ払われたことに戦慄しながらも、これだけの大技を放ったリインの隙を突くために——

「二の型《疾風》」

目の前にいたはずのリインが消え、舞い上がった土煙に紛れてリインが疾走する。

リインはすれ違い様にそれぞれの武器を弾き飛ばし、さらに一撃を加えて縦横無尽に駆け抜ける。

「っ——」

「がっ——」

峰を返した寸止めの一撃を武器を弾かれずに受け止められたのはフィーとクリスの二人だけだった。

「リヴァルトッ!」

クリスは魔剣に呼び掛け、戦技を使う要領で力を込める。

刀身に刻まれた《聖痕》が淡い光を宿し、風を巻き起こして土煙を一気に吹き飛ばす。

「リインさんは——」

その姿を探してクリスは周囲を見回し、フィーに腕を引かれて地面に押し倒された。

直後、背後から風を断つ音がクリスの耳を打った。

「ありが——」

クリスが言い切る前にファイーは双銃剣を突き出して連射する。

「リンクを」

「はい」

銃撃を難なく躲すリインに弾幕を張って寄せ付けないようにしながらクリスはアリサと切れてしまったリンクをファイーと結び直す。

「僕が前に出ます」

導力銃のエネルギーが切れる前にクリスは前に出てリインと切り結ぶ。

「怖くない。あの人の方がずっと怖かったんだっ！」

「はは、確かにそうだろうな」

自分を奮い立たせるクリスの言葉にリインは苦笑する。

——いける。打ち合える……

リインから貰った《風の魔剣リヴァルト》は長剣でありながら片手で振れる程に軽い。

それに対してリインの太刀はゼムリアストーン製の太刀ではなく、大剣並みに重い太刀。

ユミルで手合わせした時と比べて鈍い動きにクリスは手応えを感じ——次の瞬間、掌底を顔面に受けて仰け反った。

「がはっ！」

たたらを踏むクリスにリインは太刀を振り被り——クリスは目を瞑った。

次の瞬間、瞼越しに強い閃光が目を刺激する。

戦術リンクを通して感じたファイーの思念で閃光弾を察し、光の直視を避けたクリスはそのまま光が弱まるタイミング、つまりファイーの攻撃に合わせるために目を瞑ったまま剣を構え直す。

しかし、次の瞬間クリスとファイーは横薙ぎの剣閃に薙ぎ払われた。

「……………あれ？」

光が収まって目を開いたリインは手応えのなさに首を傾げた。

直後の二人はともかく、未だに立ち上がっていない後衛やラウラ達にリインは意気を挫かれる。

「いつまで寝転んでいるんだ？　まだサラ教官は終わりの合図は出してないぞ？」

呆然とする一同にリインは厳しい言葉を投げかける。

これがシグムントの訓練なら、いくらダメージがあつたとしても身構えてなければ容赦ない死体蹴りが待っている。

現に元猟兵のフィーと彼の薫陶を受けたクリスは痛みに顔をしかめ膝を着きながらも体を起こしている。

このまま続けるか、リインはサラに判断を仰ごうと踵を返す。

そこにラウラの咆哮が響き渡った。

「あああああああつ！」

数秒遅れて我に返ったラウラは気後れしてしまった自分を振り払う様に雄々しく叫び、校庭に突き刺さった大剣を取ってリインに突撃する。

「っ——まだ終われん」

「俺もまだまだのようだな。胸を貸してもらおうぞリイン」

そんなラウラに触発され、ユーシスやガイウスが続き、それに遅れてマキアスもショットガンを拾う。

「くそ……くそ……貴族なんかには負けてたまるかつ！」

そんな前衛組の姿を見て、ようやく後衛組が立ち上がる。

「ほらほら、リインに吞まれてないでちゃんと戦術リンクを意識しなさい！」

単独で行ってもあんたたちじゃ、リインに勝ち目はないわよ」

奮い立たせるあまりに前のめりになり過ぎている彼らにサラの忠告が飛ぶ。

一呼吸吐いて、頭を無理矢理冷静にしたユーシスはガイウスとリンクを結び直し、他の者たちも戦術リンクを結び直す。

「碎け散れっ！」

しかし、ラウラだけは戦術リンクの相手を探す素振りもなく、渾身の鉄碎刃を叩き込む。

「くっ——」

跳び上がって体重を乗せた一撃はリインの細い太刀で事も無げに

受け止められる。

そのまま地面に着地したラウラは怒涛の勢いで大剣を振り回す。両手で大剣を握り、全力で踏み込み勢いを乗せて繰り出される一撃はどれも必殺。喰らえばタダでは済まないというのにリインは顔色一つ変えずにラウラの渾身の剣戟を受け止める。

「くっ——あ……」

全力疾走の剣戟はいくらラウラが攻め気を失わなくても長くは続かない。

瞬く間に息が上がり、剣筋が鈍る。それを見逃さずリインの太刀がラウラに迫る。

「下がるがいい」

その太刀をユーススが受け止め、入れ替わるように前に出たガイウスが十字槍を突き出す。

リインはバックステップでその槍の間合いから危なげなく離脱した。

「距離を取らせるな。とにかく手を出してリインに余裕を与えるなっ！」

「了解した」

そのままユーススはガイウスと一緒に戦術リンクを駆使した連携でリインを追撃する。

一撃の重さではなくとにかく二人掛かりで手数で圧倒する。

そんな二人の怒涛の攻めをリインは太刀一本で捌きながら——見向きもせず左手で飛来した矢を掴み取った。

「なっ!？」

アリサが射た矢を受け止める神業にガイウスは目を剥き、そんなガイウスにリインは掴んだ矢をそのまま投げる。

「くっ——」

「え？ んがっ!？」

「しまった。マキ——」

咄嗟に身を振って矢を躲したガイウスだったが、その背後にいたマキアスの額に布で先端を丸くした矢が命中し、仰け反って倒れる。

そして、自分の失敗に動じたガイウスは隙を見せた瞬間に蹴り飛ばされた。

「ユーススさん！」

エマの叫び声と共に、ガイウスからリンク先がエマに切り替わり意図を知らせてくる。

「くらえっ！」

それまで手数を重視していた剣戟ではなく、冷気の戦技を使った渾身の一撃をリインに叩き込む。

リインはそれを受け止め、それを起点にして結界がリインを覆い尽くすと同時にユーススは後ろに跳ぶ。

「ファイヤボルトッ！」

「ファイヤボルトッ！」

二つの火球がすかさずリインに撃ち込まれる。

目前に迫った火球にユーススは当たると確信する。しかし例え当たったとしてもリインは落ちないと想定して、導力魔法を駆動する。

「四の型《紅葉斬り》」

結界に捕らわれているとはいえ、迫り来る火球に逃げる素振りを見せなかったリインは峰を返した太刀を振り抜いて、火球をユーススに向けて打ち返した。

「なっ!？」

導力魔法が剣で打ち返される。

そんなこと聞いたこともないユーススは絶句するが、咄嗟に駆動した導力魔法を目の前で暴発させて吹き飛ばされながら火球から逃れる。

「合わせるから行ってクリス」

「分かりました」

魔剣に風を纏わせてクリスが走り、その背後に追従しリインの視界から隠れたファイーは分け身を使って四方に跳ぶ。

クリスが剣を振るたびに鎌鼬が発生してリインを襲い、さらには四人のファイーが入り乱れて乱戦に持ち込む。

だが、分け身と無数の鎌鼬をもってしてもリインの守りは崩せない

い。

一人、二人と分け身が斬り伏せられて、クリスは叫ぶ。

「ファイさん。乗って下さい」

魔剣を返して構えてクリスは叫ぶ。

戦術リンクで意図を察したファイはとんでもないことを考えるクリスの思考に呆れながら、それに従う。

ふわりとファイはクリスの魔剣の峰に着地する。

「いっけえっ！」

そしてクリスは全力で魔剣を風と共に振り切った。

剣の魔法で作りに出した竜巻でファイを加速させる。

そのあまりの速度にリインは防ぐよりも回避を選択し、すれ違い様に振り切ったファイの一撃は空を斬った。

「躲かれた——でも行けるっ！」

リインが躲したという事実には確かな手応えを感じたファイは着地するや否や、振り返りクリスと挟撃を、と思考を共有して——

「あれ……？」

ぐらりと前触れもなく視界が揺れた。

「な……にが……」

頭を抑えてファイは呻く。

唐突な重度の酩酊感。

酒は飲んだことはないが伝え聞く思い付く状態がそれ以外になかった。

まともに立つこともできず、ファイは吐き気を堪えながら膝を着く。

見れば、リインの向こう側でクリスも同じように頭を揺らして倒れた。

いつの間にかクリスとのリンクは途切れ、ファイは意識を保ち切れずに視界が白く染まっていく。

最後に見た光景はリインが残心で太刀を鞘に納めた姿だったが、彼が何を斬ったのかファイは分からないまま意識を失った。

「洗刃乱舞っ！」

大剣に膨大な闘気を注ぎ込み、刀身を輝かせた一撃をラウラは繰り出す。

「一の型《螺旋撃》」

洗刃と焰刃が交差し、ラウラは押し負けて吹き飛ばされる。

「もらったっ！」

太刀を振り抜いたリインにマキアスがすかさずショットガンを撃ち込んだ。

「しまった——」

散弾を躲したリインだったが、逃げ遅れた太刀に命中したのか、リインの手から太刀は弾き飛ばされる。

「良しっ！ このまま畳み掛ける！」

導力銃が通じたことに気を良くしたマキアスは次弾を装填して、弾き飛ばされた太刀に向かって走るリインを照準して引き金を引く。

「くっ——」

リインは咄嗟に身を翻して射線から逃れ、それでも太刀を拾おうとするリインにさらにマキアスは銃撃を重ねる。

「弾切れか——」

マキアスは引き金を引いても反応がなくなったショットガンに遅れて弾を装填する。

そうしている間にリインは再度、太刀の回収を試みて疾走する。

だが、一瞬早くマキアスの装弾が完了し、散弾がリインの目の前を掠めた。

「ちよこまかと——だが見えているぞっ！」

太刀を回収できずに逃げ惑うリインだが、その姿をしつかりと捉えてマキアスはショットガンの引き金を引く。

「くそっ！」

悪態を吐くリインにマキアスは胸が梳くものを感じながら、攻め手を緩めない。

引き金を引く。

リインは地面を転がってあわやという様子で避ける。
引き金を引く。

またリインは無様な姿をさらして、必死な形相で仰々しく散弾を避ける。

引き金を引く。

「なっ——」

引き金を引く。

「なっ!? マキアス!？」

「やめて撃たないでっ!？」

「いい加減観念しろ!」

マキアスが引き金を引くたびに悲鳴が上がるが、リインしか見えていないマキアスの耳にそれは聞こえていなかった。

見えているはずなのに当たらない。マキアスが苛立ちを募らせながらとにかく弾が続く限り撃ち続ける。

そして——

「何のつもりだ。それはっ!？」

手を広げて差し向けてくるリインをマキアスが嘲笑する。

「命乞いの——」

「《ARCU》 駆動、ソウルブラー」

時の弾丸がリインの手から放たれ、油断し切っていたマキアスを直撃した。

その一発で意識を喪失したマキアスは仰け反って倒れる。

「ふう……」

息を吐いてリインはマキアスが好き放題撃ちまくった戦場を見回す。

そこにはさながら地獄絵図の光景が広がっていた。

大剣を握り締めたまま倒れるラウラ。

戦術リンクを強引に断ち切られた反動で気を失ったクリスとファイ。

勝利を確信した不敵な笑顔のまま気絶しているマキアス。

マキアスの流れ弾を受けて膝を着いているユース。

そして同じく流れ弾から後衛組を体を盾にして守り切ったガイウス。

そんなガイウスに後衛組は三人掛かりで治療術を掛けている。

「サラ教官、まだ続けますか？」

「あー……うん、もう良いわ」

サラは何とも言えない表情でリインに応える。

彼とⅦ組の間にかかなりの実力差があるとはサラも思っていた。

だが、ここまで一方的な展開になることは想定できていなかった。

「この勝負、リインの勝ちっ！」

どこか投げやりにサラは宣言するのだった。

・
*

運動着から制服に着替え、Ⅶ組の次の授業は模擬戦闘の反省会だった。

しかし、リインはその反省会に参加せず、サラにお遣いを頼まれて学生会館に来ていた。

「あ……くそ……」

リインの目的の場所には先約がいた。

銀髪の頭にバンダナを巻いた緑の制服を着た青年。

「たしか……アームブラスト先輩でしたよね？」

少し前にアンゼリカに紹介された青年、クロウ・アームブラストは振り返る。

「お、奇遇だな後輩。さっきは御苦労だったな」

「ええ、まあちよつとやり過ぎてしまったかもしれませんが」

「ちよつと……？」

苦笑して答えるリインにクロウは目を細めるが、すぐに気を取り直す。

「なあ後輩。いきなりで悪いんだけど、50ミラ貸してくれねえか？」

「本当にいきなりですね」

「いやこれには深く長い事情があつてだな。それにお前も無関係な話じゃねえんだよ」

「そんなわけないでしょ」

「まあ、聞けて……」

さっきの模擬戦闘を俺達も見てただけだな、そこでゼリカの奴とどっちが勝つか賭けたんだよ」

「賭け事ですか？」

「そう目くじら立てるなって、せいぜい缶ジュースと飯を賭けたただだ……」

それで俺が賭けに負けて、四人分の缶ジュースを奢ることになったんだが、運が悪いことに50ミラ足りなかったんだ」

「全く俺に関係なくて、深くも長くもない事情ですね」

クロウの主張にリインは呆れる。

「それにそもそも先輩は賭けに負けたってことは、みんなの方に賭けたってことですよね？」

「ふ……お前が勝つってのは分かっていたけど、あえて大穴に賭けてしまうのが賭博師って奴だ。お前もギャンブラーなら分かるんだろ？」

「ギャンブラーじゃないので分かりません」

ため息を吐いてリインは馴れ馴れしい先輩に呆れる。

「まあ、50ミラくらい良いですけど」

「サンクス」

クロウはリインから50ミラコインを受け取ると、目の前の自動販売機に投入して缶ジュースを購入する。

「ま、近い内に必ず返すから安心しな」

「別にいいですよ。50ミラくらい、大した額じゃありませんし」

「お、そうか？ だったらありがたく——」

「——こらこら幼気な後輩に厚かましくたかろうとするんじゃない」

「げ、何でお前が来んだよ？」

現れたアンゼリカにクロウは顔を引きつらせる。

「君が戻って来るのが遅いから様子を見に来たただだよ……」

やれやれ、トワの予想通りだったようだが、リイン君あまりこの男を甘やかさないでもらえるかな？」

「えつと……」

「はっ……今さら何を言ったって遅いぜ。すでにブツは買っちゃまったんだからな」

アンゼリカはクロウが抱えた四つの缶ジュースを見てため息を吐く。

「どうして四本も買っているんだ？ 三本で十分なはずだが？」

「何言ってるんだゼリカ、あのトワが俺の分を用意しておかなかったら受け取るはずないだろ？」

「……確かに」

クロウの言葉にアンゼリカは容易にその光景を想像して頷いた。

「えっと、ところで俺の用も済ませていいですか？」

「そういえばリイン君はどうしてここに？」

「サラ教官から全員分の缶ジュースを買って来いって頼まれたんです……」

教室に戻ってきつきの反省会をすることになったんですけど、誰も口を開かなくて」

「そりゃあ、あんだだけ一方的に蹂躪されりやトラウマにもなるだろ。サドだろお前」

「そんなんじゃないんですけど……」

バツが悪そうにリインは笑って誤魔化す。

「それならこいつをきつきの50ミラ分、荷物持ちとしてこき使ってやると良い」

「おい、ゼリカ。何を勝手に——」

「それなら大丈夫です。ちゃんと大きめの袋は用意して来ていますから」

「そ、そうか……」

「随分準備が良いんだな」

先程の仕合での悪鬼羅刹のような戦いぶりからは想像もできない所帯じみたリインのギャップにクロウとアンゼリカは微妙な顔をするのだった。

6話 舞台裏の大人たち

翌日。

各教室では昨日のⅦ組の模擬戦についての解説と評価をする授業が行われた。

多くの生徒達はリインの評価を改めることになったが、それでも一部の生徒達は受け入れることができずに虚勢を張る。

「ふ……ふん……馬鹿馬鹿しい……」

やはり正々堂々と戦うことができない卑怯者じゃないか！ 真っ先に女子供を狙うなんて帝国男児として恥ずかしくないのか！

「アルゼイドとアルバレアも実はそんなにすごいやつじゃなかったんじゃないか？ 現にマキアスが一番追い詰めていたじゃないか」

粗を探すように貴族が嘲り、平民はその嘲笑の矛先を名のある貴族の二人に向け中傷する。

「Ⅶ組なんて特別扱いされてるけど、あれなら俺の方がずっとうまく立ち回れるぜ」

これ幸いとⅦ組に感じていた不満を生徒たちが愚痴り、学院には最悪の空気が流れていた。

しかし――

「くっ……なんでこんなことに」

パトリック・ハイアームズは昨日と同じ時間に今度は校庭に剣を持って慄く。

「やってやるやってやる、やってやるぞ」

その隣では緑の制服のアランが体を震わせながら剣を構える。

そして並んでいるのはその二人だけではない。

一年生のⅠ組からⅤ組までの代表と二年生のⅠ組からⅤ組の代表。

そして彼らを率いるのは――

「みんな頑張ろうね」

我らが生徒会長トワ・ハーシエルは導力銃を片手に十人の仲間たちを激励する。

「やありイン君。一つお手柔らかに頼むよ」

他の生徒達とは違い、アンゼリカは楽し気にリインに声をかける。

「それは良いんですけど……」

他の生徒たちは良いのだが、トワには抵抗を感じてしまうとリインはため息を吐く。

目を改めて行われることになった二戦目。

今度はⅦ組ではなく、上級生を交えたそれぞれのクラスの代表に、彼らをまとめると立候補した生徒会長の計十一人。

「アンゼリカさん、アームブラスト先輩はどうしたんですか？」

クラスの代表ということで、二年生の中で一番の実力者だと思っていたクロウの姿をリインは探す。

「あいつはサボりだ」

「……そうですか」

学生レベルを超えているのではないかという予感を確かめられると期待しただけにリインは少し残念に思いながらも、切り替える。

相手はⅦ組よりも増えた十一人。

昨日はやり過ぎてしまい、ラウラ達の名誉を傷付ける結果に終わってしまった。

やはり鍛錬のためとはいえ、重い太刀では手加減もし辛かったので今回は竹刀を用意して来た。

「それではこれよりリイン・シユバルツァーと各クラス代表との模擬試合を行う……」

双方、準備は良いな？ それでは——始めっ！

ナイトハルトの号令で第二回の蹂躞劇が始まった。

その日を境に貴族生徒と平民生徒は少しだけ仲良くなるのだった。そして同時に生徒達は彼のことをこう呼んだ、《魔王》と。

・*

「ははは、リイン君は随分と派手なデビューを飾ったようだね」

「オリヴァルト理事長、笑い事ではないのですが」

トールズ士官学院の会議室。

そこでは一ヶ月に一度の理事会議が行われていた。

テーブルを囲むのはヴァンダイク学院長にオリヴァルト皇子。

それに常任理事のルーファス・アルバレアとカール・レーグニッツ、イリーナ・ラインフォルトの三人の姿があつた。

そしてⅦ組の担任教官のサラもそこに同席していた。

「失礼。とは言つても、噂の払拭のためにライン君との模擬戦を企画したのは学院側なのだから、これくらいは想定範囲だったのではないかな？」

それに聞けば、貴族生徒と平民生徒の衝突もその日を境に減つたそうじゃないか？」

オリヴァルトの言葉にルーファスが同調する。

「確かにライン君の実力は学生レベルを凌駕していますがただそれだけです……」

彼の生活態度はそもそも問題はなく、模擬戦闘も見方によつては相手の欠点を指摘する教導的なものだった……

確かに挫折を味わつた者も多いかもしれませんが、それもいい経験でしょう」

「それは一方的過ぎる意見ではないですかね？」

彼のせいで転校を希望する者も少なからず出ているというのに「

情けない話ですね。今でこそ校風が緩んだとは言えトールズ士官学院は仮にも軍学校……」

一度強者に敗北を味わつた程度でそれとは情けない限りですね。

文官上がりのレーグニッツ殿には分からない話かもしれませんがね」

レーグニッツの指摘にルーファスは痛烈な言葉を返す。

「少なくとも今回のことにライン君の落ち度はないでしょう……」

それともレーグニッツ殿はライン君を学院から追放するべきだと仰りたいのですか？」

「そんなことを言うつもりはありません……」

ただその子は学院で学ぶことがあるのか疑問に感じずにはいられません……」

これでは他の生徒の成長の妨げになってしまうのではないですか？」

「それこそ一方的だと私は思いますが？」

それにリイン君よりも、貴族生徒と平民生徒の対立を煽る素行の悪い生徒こそ他の生徒の成長の妨げになると私は愚考しますが、いかがでしょうか？」

「対立を煽るとは人間きが悪い……」

学院内でも貴族生徒と平民生徒は平等に扱われてないのは事実ですから、事実を指摘しているだけでしょう」

「ですが、ただ名乗っただけで暴言を向けられた……」

すれ違っただけであからさまに顔をしかめられた……

根も葉もない噂を真に受けて、その家族にまで誹謗中傷する……

その傲慢すぎる態度は些か行き過ぎているとしか思えませぬ」

容赦のないダメ出しにリーグニッツは押し黙る。

彼も彼独自の情報網で学院内の出来事を把握しているのだろう。

だからこそ何も言い返せない。

「更には上官の決定に異を唱える……」

帝都の士官学院ならよくて懲罰、最悪なら見せしめとして退学にしても良いくらいの暴挙です……

全くいったいどんな教育を受けているのでしょうかね、それとも平民の子供とはこんなものなのでしょうか？」

確かに帝国は今オズボーン宰相の方針で変わりつつありますが、だからといって平民が貴族に唾を吐いて良いと勘違いした者が出てくるのは困るのですよ」

「っ……」

「聞けばⅦ組の中でもそう言った勘違いをした差別主義の子供がいるようですね……」

どうですかオリヴァルト理事、これを機に改めてⅦ組の人員を再編するのは？」

最初のオリエンテーリングで口頭で厳しさを伝えていますが、やはり実際に体験して後悔している子供もいると思いますので」

押し黙ったレーグニッツにルーファスは柔和な笑みを浮かべてオリヴァルトに提案する。

「それは些か早計ではないかな？」

「いえ、むしろ早い方が良いでしょう……」

その子供も無理にⅦ組に参加せず、普通のクラスで普通の学院生活を送らせるなら早い方が良いでしょう……

担当教官であるサラ殿にお聞きしますが、その生徒は今後二年間Ⅶ組としてやっていける見込みはあるのでしょうか？」

「それは……」

「それからこちらは私の独自の調査でⅦ組の方針に合いそうな平民の生徒は見繕ってあります。どうか御一考お願いします」

言い淀むサラにルーファスは準備よく、ツールズを含め別の士官学院や高等学校に通う少年少女のプロフィールをサラだけでなくその場にいる全員に配らせる。

マキアスを擁護する言葉を考えていたサラに魅力的な提案が示され、心が揺れる。

先日の模擬戦闘の反省会でもマキアスの態度は酷いものだった。

最初こそ、視野狭窄に陥って味方を撃ってしまったことを謝った。

犬猿の仲であるユーシスにさえ、態度は悪かったがそれでも頭を下げて謝った。

しかし、問題はその後。

直前に太刀を弾かれたこと、わざとマキアスが捉えられる速さで動いていたこと、いつでもその気になればマキアスを倒せていたことも全てリインの演技で、味方を撃つように誘導されたと知ったマキアスはそれはもう烈火の如く怒り狂い、リインに殴りかかった。

リインがマキアスに殴られることはなかったが、そのまま勢い余ってリインを責め立て、他のⅦ組への謝罪を撤回してリインが全部悪いんだと言い出す始末。

まだあれから武術教練を行っていないが、果たしてマキアスが他のⅦ組と戦術リンクを結べるのか怪しいままに至ってしまった。

「御言葉ですがルーファス卿……いや様？」

「はは、この場では気安く呼び捨てで構いませんよ。ただその代わり公正な判断をお願いします」

貴族の対応に慣れないサラに嫌な顔一つ見せず受け入れるルーファスに、趣味とは違うはずなのに思わず心が揺らぐ。

——つと、いけないいけない……

たった呼び方一つを受け入れることで好印象を与えて、言葉とは裏腹に引きこもうとしてくるルーファスの意図を察してサラは気を引き締める。

油断すればあつという間に取り込まれる。

戦場で圧倒的な格上に挑む気持ちでサラは発言する。

「おそらくルーファスさんが仰っているのはマキアス・レーグニッツのことだと思えます……

確かに彼の素行はこの二週間、決して良いものではありませんでした——」

サラは言葉を止めて、レーグニッツの反応に注意する。

もしも彼がマキアスと同じような性格なら、この時点で罵詈雑言が飛んでくるかもしれない。

と、気持ちで身構えていたものの、レーグニッツは澁面を作るだけで何も言葉を発しなかった。

——マキアスと比べて理性的なのね……

カール・レーグニッツに向けていた警戒心を解いてサラは続ける。

「ですが、もうすでにマキアス・レーグニッツをⅦ組から外せば良いという問題ではなくなっていると私は考えます」

「ほう、理由を聞いても？」

「まず先日のリインとの模擬戦においてⅦ組の間では賛否両論の意見が上がっています……

リインがマキアスにとった戦法は確かに人として首を傾げることもかもしれませんが、士官になる者、軍人になる者からすれば経験しておくべき戦い方でもあります……

残念なことにⅦ組の中でその考えを受け入れることができているのは半分……

マキアスを始め、エリオット、ラウラ、エマ、以上の四名は今回のリインの戦い方を受け入れ難いようです……

ここでマキアスだけをⅦ組に不適格だったと弾いても、すでにリインへの忌避感伝染してしまっているので無意味でしょう。それに――

「それに？」

「彼の素行不良の問題であるリインやユーススへの暴言ですが……」

確かに最初は彼の言い掛かりとも言える言動が発端になっていますが、特にユーススの方は言われたからと言って皮肉を返して収拾をつかなくさせています」

「フム……その何が問題なのかね？ それを聞くと根本的な原因はやはりレーグニッツ君にあると思うのだが？」

「ええ……」

ですが、この二週間の間ユーススもマキアスに適應する素振りもなく、むしろ時間が経つにつれて程度が低いものへとなっています……

このままマキアスだけを処分した場合、それはマキアスの非を学院で認めることになり、ひいてはユーススの平民への偏見に繋がってしまわないかと考えています」

「うちのユーススに限って、とは言わないが……」

確かにあの程度の小物をどうにかできないようでは今後が危ぶまれるか」

痛烈な毒を吐きながらも、マキアスへの対応を妥協する素振りを見せるルーファスにサラは一先ず安堵する。

「ですが、このまま見込みなしのまま続けさせても良い結果になると思えません。オリヴァルト理事長とイリーナ殿はどうお考えですか？」

ルーファスはオリヴァルトとイリーナに意見を求める。

先に応えたのはイリーナの方だった。

「そうね。ラインフォルトとしてはこのままシュバルツアー君には学院に残ってもらいたいわ……」

戦術リンクを物理的な手段で断ち切られるなんて完全にこちらの

想定外。《ARCU S》のテストという名目でⅦ組を運用している以上、より高い完成度を目指すなら彼の協力は不可欠でしょう……

それに明日来訪されるラッセル博士との技術交流に関しても、彼が中心に行われるのでなおさらですね……

それから、天才というのは他者とは隔絶した感性の持ち主です……技術者としての感性で言わせてもらえば、特出した天才から技術を盗み出すのは凡人の義務ではないでしょうか？

現にシユバルツアー君に叩きのめされても、腐らずに奮起している生徒達もいるのですから排除する理由はないでしょう……

ただ愚痴を言うだけで満足している生徒はそれまでの話です」

「やれやれイリーナ殿は手厳しいな」

ルーファスとイリーナがラインの擁護をしてくれていることにオリヴァルトは安堵する。

「とりあえず僕もサラ君やヴァンダイク学院長に聞きたいことがあるのだけど、よろしいかな？」

それまでの話を区切るようにオリヴァルトは話を振る。

「率直に聞かせて貰いたいのだが、ライン君について御二人はどう思えますか？」

「ふむ……確かに実力や知識などについて学生レベルを超えている……」

一見すれば精神的な部分でも他の生徒とは比べ物にならない程に成熟しているとも見れるのだが、時折危うさを感じる時があるのう「学院長もですか？ 私もリベールで会った時と違って随分と強くなることに積極的な姿勢なことに違和感があったんですが」

ヴァンダイクの意見にサラも同調する。

「そうか……ライン君がⅦ組に対して大立ち回りを演じたところからおかしいと感じていたのだが、いやこの問題が見えたと考えればⅦ組に参加してもらった甲斐もあつたかもしれないか」

ラインの強さはオリヴァルトも良く知っている。

自分がエステルと同行して結社と戦っていた裏側であつた彼の数々の試練を執筆という形で追い駆けたのだから、自分以上に知って

いる者はいないという自負もある。

数多の《執行者》との戦い、教授が差し向けた悪辣な《試練》。

最強の猟兵の薫陶を受け、更には大切な者を失う哀しみまで経験した彼のリベールの旅路は《鬼の力》に怯えていた彼を大きく成長させた。

しかし、猟兵の戦い方を覚えたからと言って、それを一般人ではない学生に容赦なく使うほど、情け容赦ない人間ではなかった。

——改めて考えてみれば当然か……

ラインが《灰》を駆って戦った時、オリヴァルト達はどの戦いでも無力だった。

そして結社の《幻焰計画》が騎神にまつわるものならば、最終的にラインは《相克》に一人で挑むことが決まっている。

そうでなくても、外道揃いの結社と戦うことの意味をよく知っているラインがただの一般人を戦いに巻き込みたくないと考えるのは当然だろう。

「私としてはライン君には学院生活で掛け替えのない仲間を作ってもらいたいと思っていたんだけどね」

それは気安く言っただけ良い言葉ではなかった。

《影の国》で彼女と別れを告げることが出来たとしても、彼女の死はラインの心に傷として刻み込まれている。

元々責任感があり、思い詰めてリベールまで家出してしまった少年だ。

そして《騎神》と《鋼の至宝》を持つ者としての責任と重圧がどれほどのものなのか改めて考えさせられる。

強さを得ても根っこの部分は変わってなかったのだと思うと、それはそれでより一層愛おしさを感じてしまう。

「くっ……ライン君め……どこまでボクをときめかせれば気が済むんだ」

「オリヴァルト皇子？」

「いや、何でもないよ」

思わず口から漏れてしまった言葉をオリヴァルトは誤魔化す。

——ある意味、セドリックがⅦ組に入ってくれて正解だったか……
結社に関わらないで済む一般人とは違い、セドリックは次期皇帝として何らかの形で《結社》と相對することはリインと同じように決まっている。

彼がリインとⅦ組の架け橋となる重要な位置にいる偶然にオリヴァルトは思わず笑みを浮かべてしまう。

「我儘を言うようで申し訳ないが、リイン君についてはどうか長い目で見て上げて欲しい」

「元よりそのつもりです。どうやら彼にも未熟な子供らしい部分があるようで安心しましたよ」

多くを語らずともヴァンダイクはオリヴァルトの意見を受け入れてくれる。

「ではやはりレーグニッツ君ではなく、他の生徒をⅦ組に再編した方が良いのではないでしょうか？」

が、そこにすかさずルーファスが水を差した。

「それについてはルーファス卿の意見を支持します」

そしてそれにイリーナも同調した。

「イリーナ君、君までどうして？」

「Ⅶ組の構想はオリエンテリングで伝えていたはず……」

一度それを呑み込んだにも関わらず、未だに對抗意識だけで敵意を振り撒いてクラスメイトと協調できない子供にかけるコストは無駄でしかありません」

容赦のない損切の言葉でイリーナはマキアスを切り捨てるべきだと主張する。

「月末には最初の特別実習が控えています……」

ですから不和の芽は今の内に刈り取っておくべきでしょう」

「ちよ、ちよと待っててくださいっ！」

「何かしら、サラ教官？」

「それはあまりに早急過ぎるかと思えます」

「いえ、事が起きてからでは遅いのよ……」

もし彼が実習先で先方に迷惑をかけて悪評が広まってしまうば、以

後の実習にも差し支えるでしょう……

いえ実習だけならまだしもトールズ士官学院の看板にまで泥を塗る可能性も十二分に考えられます……

VII組の建前として平民を組み込んでおきたいというのなら、それこそ特別実習の前に入れ替えておくのが双方にとって良いことでしょう」

ぐうの音も出ない程の正論にサラはたじろぐ。

何事も初めては重要だ。

その初めてを失敗すれば、今後実習を引き受けてくれる場所はなくなってしまうだろう。

そうなればVII組を各地に派遣して帝国の現状を見せる目的である特別実習そのものが破綻してしまい、VII組を設立した意味が半減してしまう。

「そして仮にルーレを最初の実習地にしたとしても、私はマキアス・リーグニッツに仕事を任せることはしません」

「そこまで言いますか？」

「ええ、課題——与えた仕事を貴族との勝負事の物差しにして欲しくないですから」

そう指摘され、リインやユーシスと張り合って成果を求めてムキになるマキアスの姿が簡単に想像できてしまう。

「勘違いしないでもらいたいのだが、別に私たちは彼にトールズを退学しろとまでは言っていない……」

ただ彼にVII組が合っていないかつたと言いたいだけなのです……

そして最初の特別実習を必ず成功させるために不確定要素は排除しておきたいだけなのです」

イリーナの主張に合わせてルーファスは逃げ道を作る。

学院を退学させるわけではない。

あくまでもVII組から他クラスへ編入するだけ。

それだけならばと妥協してしまいたくもなる。

サラはマキアスの父親であるカール・リーグニッツを伺い見るが、サラが提出したVII組の素行調査のレポートを前に俯きフォローは期

待てできなかった。

「それとも彼のためだけに、四月の特別実習を取りやめますか？　あまり特別扱いは感心しませんかね」

サラ達が思っていたことをルーファスが制するように言葉を追加する。

マキアスの問題点を知るには彼が頑な過ぎる。

せめてもう少し時間があれば、とサラも考えていた。

しかしルーファスの提案を受け入れてしまうと、マキアスに変化の兆しがあつても、それを判断するのをルーファスに委ねてしまうことになる。

それだけは避けたかった。

「御二人の意見は了解した。だけど今編入を強制するのはやり過ぎだと私は思うよ」

二人の主張を受け止めてオリヴァルトが反論する。

「先程、サラ君が言った通りここでマキアス君を排斥したところで両者が得られるものは遺恨だけ、今は良いが根本的な問題を先送りにして互いの成長を妨げてしまうだろう」

「私からもどうかお願いします」

オリヴァルトの主張に合わせるようにサラは二人に頭を下げる。

「この二週間で感じたマキアス・レーグニッツは決して更生の余地がない程に歪んだ子供ではありません……」

私が責任をもって監督しますので、どうか彼の処遇を決めるのは特別実習の結果を見て判断して頂けないでしょうか？」

「ふむ……サラ教官がそう思う根拠は何か？」

「私の勘です」

目の前の青年に口では勝てないとサラは開き直る。

ルーファスもそんな曖昧な答えが返って来るとは思わず虚を突かれて目を丸くする。

それ幸いにサラは続けて感情だけの理屈で押し切る。

「そして私があの子たちの担当教官である以上、私にはマキアスを教導する義務があります……」

それを手を焼く生徒だからと放り出しては今後の残った生徒達への教導に差し支えてしまうでしょう」

言い切つてサラはルーファスとイリーナの反応を待つ。

サラも遊撃士として交渉事を経験したことはあるが、その時の経験が役に立つ相手ではない。

彼らの土俵で戦えば絶対に負けると分かっているのだから、サラは捨て身の覚悟で感情に任せた理屈を押し付ける。

「ふむ……」

サラの代案を提示しない暴論にルーファスは顎に手を当てて考える。

イリーナは目を伏せ、興味なさそうにルーファスに答えを任せる。

彼が答える数秒、あるいは数分。

その時間を永遠に感じるようなプレッシャーを感じながらもサラは真つ直ぐにルーファスを見据える。

「なるほど……」

確かに直接彼と接しているサラ教官の個人的な評価を蔑ろにすることはできませんね」

一理あると言わんばかりにルーファスは頷き、妥協の姿勢を見せてくれたことに安堵する。

「特別実習の今後と彼の進退ではリスクの釣り合いが取れてはいませんが、リーグニッツ常任理事の顔を立てると思つて呑み込むとしましょう」

「ルーファス卿の寛大な御心遣い感謝します」

カールはマキアスによく似たしかめ面をしながら頭を下げた。

「ですが無難な実習でお茶を濁してもらつては困りますので、リーグニッツ君の班にはバリアハートに行つてもらおうというのは？」

「バリアハート……《翡翠の公都》……貴族のための都市とも呼ばれている都市に貴族嫌いの彼を行かせるなんて正気ですか？」

「むしろだからこそ、意味があるのではないですか？」

サラの反論にルーファスは悪気を感じさせない笑みで応える。

「バリアハートはアルバレアの領地。そこならばもし彼が問題を起こ

したとしてももみ消すことができます……

それにレーグニッツ知事がいる帝都を最初の特別実習の先にするのは荷が重いでしょ？」

笑顔のまま容赦のないカードを出して来るルーファスにサラは顔を引きつらせる。

出来る事なら今すぐにでも度数の強いお酒を煽って何もかも忘れて寝入ってしまいたいときえ考えてしまう。

「御一考いただけるかなサラ教官？」

笑顔とは本来攻撃的なものだと言われているが、まさしくその通りだとサラは実感する。

そして貴族派きつての貴公子と彼が呼ばれていることに納得した。

7話 リベールからの届け物

四月十八日。自由行動日。

生徒会から引き受けることになった仕事を手早く終わらせ、リインは旧校舎にクリスと共に来ていた。

クリスは午後からフェンシング部の練習があり、それまで旧校舎の探索をすることになった。

「それじゃあ準備はいいなクリス？」

「はい」

だいぶ馴染んだ様子の《風の魔剣リヴァルト》を腰に携えたクリスは意気込む。

「アルファも前と同じようにクリスの護衛を頼むな」

そして技術棟から借りた戦術殻は電子音を鳴らしてリインの言葉に頷くように浮遊している体を上下にする。

「ノイも援護よろしくな」

「うんっ！」

リインの言葉に張り切って見せる人形型戦術殻のノイ。

これが灰の試練の第二拘束に挑むメンバーだった。

既に《灰》との試練は終わっているのだが、この施設は起動者を選別すると同時に鍛えるためのものでもある。

《魔女の眷属》——それもローゼリアが作り出した試練はまだまだ実戦経験が足りてないクリスにはいい経験になるだろう。

そしてリインにとっても、リインの実力に対応した敵を用意してくれるこの試練の場は《箱庭》とは別の意味で良い訓練場だった。

「それじゃあクリスは先行してくれ。十分後に俺達はクリスの討ち漏らしを掃討しながら追い駆ける」

前は初めてだったということと共に攻略したが、訓練が目的ならと別行動をすることにする。

危険があれば戦術殻に内蔵された警報器を鳴らせば音でリインに、救難信号で技術棟に合図が送ればいいのだが、それはあくまでも最低

限の安全を考慮しての手段。

「ところでリインさん」

「うん？ どうしたクリス？」

「最奥で待ち構えている番人ですが、リインさんが追い付く前に倒してしまっても良いんですか？」

自信に満ちたクリスの言葉にリインは虚を突かれ、笑顔を返す。

「随分と調子に乗っているみたいだな」

そしてリインはドヤ顔をきめるクリスの頬をつねる。

「いひゃい！ いひゃいれす！ ひいんさん！」

「自信を持つことは悪いことじゃないが慢心しているなら今日の旧校舎探索はなしにするぞ」

「ち、違います」

解放された頬をさすりながらクリスは弁明する。

「た、確かに今なら一人でも大丈夫かなって思っているかもしれませんが、僕が言いたいのは番人を倒せたら《ブリランテ》も僕に使わせてもらえませんか？」

「《ブリランテ》を？」

《炎大剣ブリランテ》。

クリスに渡した《風のセピス》を使って作った《風剣リヴァルト》とは異なり、《火のセピス》で造った魔剣の一つだ。

セピスの圧縮強度実験も兼ねていたものでもあり、それこそアルゼイドの大剣並みの両手剣になる。

「いきなりどうしたんだ？ ああ、もしかして《リヴァルト》の属性は《風》だから《火》の方が良かったか？」

クリスの戦技は火属性なのはリインも知っている。

が、何も意地悪でリインも《風の魔剣》をクリスに与えたわけではない。

単に片手剣がそれだけだったからなのだが、やはり彼の戦技の性質を考えると相性が悪かったのだろうか。

「それなら片手剣で作り直すか？」

「い、いえ、そうじゃないんです！」

リヴァルトが良い剣なのは間違いありません。でも他の魔剣に興味があるのが半分と、シグムントさんに言われた僕の武器を扱う才能を考えて大剣も使えるようになっておこうと考えているんです……
いえ、大剣だけじゃなくてそれこそいろいろな武具を相手によって使い分ける戦い方、それが僕が目指すべき《武》なんじゃないでしょうか？」

「それはまた大それた考え方だな」

確かにシグムントの目利きが全く的外れだとは思えないが、本当に大成するかどうかは結局のところやってみないと分からない。

もしかすればシグムントの評価を超えて、限界を超える事だつて決してありえないわけではない。

「あまりお勧めはしないぞ……」

一つの流派を修めるだけでも難しいのに、手を出し過ぎればどれも中途半端なものにしかないだろう」

「でも、リインさんやクルトと同じ方法を取っていたら僕はいつまで経っても追い付けません」

「だけど使い分けると簡単に言うけど、武器の持ち運びはどうするつもりだ？」

無駄な武器を背負って戦うなんて、本末転倒もいいところだ」

「そ、それはおいおい考えます」

そこまで考えていなかったのか、あからさまに目を逸らしてクリスはバツが悪そうに唸る。

そんなクリスの様子にリインは苦笑する。

「分かった。今回の攻略の結果次第で《ブリランテ》もクリスに使わせてやる」

「リインさん」

感激に表情を一変させるクリスにリインはただしと付け加える。

「ただし、いろいろな武具を使い分けると言うならその腰の魔導銃もしっかり使いこなすんだな……」

この前の模擬戦、《リヴァルト》を使うことにはしゃいでそつちを忘れてただろ？」

「う……」

嫌な指摘をされ、クリスは左手に魔導銃を抜き、剣と銃の二刀流になる。

「それからもう一つ、仮に番人を倒せたとしても危機管理がちやんと出来てなければ認めないからな」

「はいっ！ 分かりましたっ！」

ラインの承認を得てクリスは満面の笑みを浮かべる。

「行くよアルファ！」

言葉と共に駆け出したクリスの声に反応して戦術殻は電子的な音の声で返事をしてその後続いた。

「やれやれ……」

そんなクリスの背中を見送ったラインは微笑ましいと言わんばかりに苦笑する。

「弟がいたらあんな感じなのかな？」

と、そこまで考えて脳裏に浮かんだあの男の顔を思い出してすぐにその思考を掻き消す。

「むう〜」

「どうかしたのかノイ？」

「別に……何でもない」

不貞腐れたような態度にラインはこの子も随分と感情が豊かになったものだと感じる。

「今度、ノイの服でも探しに帝都のドールショップにでも行こうか？」

「はいです」

ラインがそういうとノイはすぐに上機嫌になるのだった。

・*

正午、無事に第二拘束の番人を倒した一同は旧校舎を後にする。

「あと少しだったのに」

半壊した戦術殻を背負いクリスは項垂れる。

「」

まるで謝罪するように戦術殻はノイズが混じった電子音でクリスに伝える。

「ごめん。別に君を責めているわけじゃないから」

言葉の内容は分からないが、あまりにタイミング良く応えたのでそれを謝罪と捉えてクリスは言葉を返す。

扉と一体化した奇妙な魔物。

その攻撃に態勢を大きく崩してしまったクリスを庇って戦術殻はその身を盾にした。

そのおかげでクリスは大した怪我もなかったが、戦術殻の援護がなくなつたクリスは攻め手に欠けてしまい、結局リインとの共闘の末に撃破できた。

「残念だったな。とりあえず『リヴァルト』一本を使いこなすことに集中するんだな」

「はい……分かりました」

クリスは項垂れてリインの意見を受け入れる。

「ところでこの戦術殻は直るんですかね？」

「胴体部分はほぼ無傷、腕部と浮遊ユニットを損傷しているだけだから大丈夫だろう」

破損状況を確認してリインは判断する。

「でも壊しちゃったわけですから、怒られるかな？」

「それは大丈夫だろ、故意で壊したわけじゃないんだから」

「まあ……そうですね」

それでもやはり壊してしまったものを返しに行くのには勇気が必要だった。

「それにしても来週は特別実習ですけど、どうするんでしょうね？」

「どうするって？」

クリスが振ってきた話題にリインは首を傾げる。

「レーグニッツのことですよ！ 何なんですかあいつは！」

相当ストレスを溜めているのか、クリスは普段の穏やかな性格を忘れて愚痴を吐き出す。

「貴族嫌いだからって限度がありますよ！ 知っていますかリインさ

ん、あいつは言い過ぎだつて同じ平民生徒に注意されても貴族に媚を売ることかなんて言い掛かりをつけているんですよ」

「そこまでなのか……」

伝え聞くマキアスの所業にリインは呆れてしまう。

「そこまで行くと筋金入りというよりも病気だな」

連日向けられる敵意の籠った眼差しと態度にリインもいい加減辟易していた。

意趣返しというわけではないのだが、視野狭窄による戦場の危険性を分からせるためにあえて友軍誤射になるように動いてみたら、思った以上に嵌って呆れてしまった。

「僕はあるな奴と一緒にの班は絶対に嫌ですよ」

「俺もレーグニッツと組まされてうまく行くとは思えないな」

あそこまで貴族を嫌う様になったことには同情するが、だからと言って何をしてでも許されるわけではない。

クラスメイトになった誼として少しでも更生の一助になるかと思つてしたことも裏目に出て、マキアスとの溝はもはや決定的なものになっていた。

「まあ世界には煮ても焼いても食えない奴はいるからな」

その最たる人物《身喰らう蛇》の使徒、《白面》のワイスマンのことを思い出す。

流星にあれ程ではない。

あれは病気のくせに能力があっただけに夕チが悪かった。

「わたし……ああいう人を知っているの」

リインの肩に座っていたノイがそんなことを言い出した。

「ただ相手を滅ぼせ、滅ぼせて何度も言っていた。わたしたちは言われるがまま、それをして……」

「大丈夫だノイ……あんな声に君は従わなくて良いんだ」

慰めるようにリインはノイの小さい頭を優しく撫でる。

「帝国の貴族派と革新派の対立って本当に深刻な問題だったんですね……」

皇宮——実家にいる時に話には聞いていましたけど、ここまで目の

仇にされているとは思ってませんでした」

「俺もだ。ユミルでもルーファスさんもクレアさん達も特にいがみ合ったりはしなかったからな」

マキアスに彼らのような大人の対応を望むのは無謀だろう。

だが、これから二年間あれが続くと考えると憂鬱になる。

「そういえばマキアスだけじゃなくて、ラウラとフィーも態度が余所余所しくなかったか？」

「あ……はい……」

どうやらフィーが元猟兵だったことに、ラウラさんに思うところがあ
るみたいで……

反省会の時もラウラさんは突出し過ぎたことを謝ってくれたんで
すけど、いろいろあって……

いえ、レーグニッツのように文句を言ったわけじゃないんですけ
ど、逆にそれが問題で」

クリスは直前のやり取りをラインに説明する。

一対九の状況に不満を漏らしたラウラ。

そんなラウラにフィーは何も言っていないのだが、フィーの呆れた
気配を感じ取ってラウラは次第に不機嫌になっていった。

何とか不満を呑み込ませて全員で戦うことを納得したラウラだっ
たが、実際に戦闘が始まってからはその意志を維持できずに単機突
撃してしまった。

ラウラもそのことについては反省して、みんなに謝ったのだが
フィーは別にどうでも良いという態度を取ったことで彼女たちの対
立関係ができてしまった。

「でもラインさんも、フィーには他の人たちと違って距離を取って
いませんか？」

「気付いていたのか？」

隠しているつもりだったラインはクリスの指摘に驚く。

「なんとなく違和感があっただけです……でもどうしてですか？」

フィーは確かにリベールでラインさんと戦っていますけど、ライン
さんは執行者の人達とは仲が良いのに」

「別に俺は執行者と仲良くしているつもりはないからな」

クリスの言葉を訂正しながらリインはため息を吐き、フィーへの気持ちをもたず。

「フィーはな……近い未来、フィーのお父さんと《相克》——殺し合いをすることは決まっているからな」

時期的に考えて、フィーが《西風の旅団》のスパイとして学院に送り込まれたとは思えない。

フィーも《獵兵王》が不死者として生き返ったことは知らされていないようだが、もし敵に回るかもしれないと考えると心を許すわけにはいかないのがリインの考えだった。

「《相克》……」

「クリスが気にすることじゃない……大丈夫だ。授業ではちゃんと合わせてみせるさ」

そう言うリインにクリスは壁を感じずにはいられなかった。

「それは僕も同じか……」

それにリインもクリスも本当の意味で腹を割って彼らと接することができているわけではない。

戦術リンクを繋げるからと、信頼関係がそこで止まってしまったようにクリスはこのままで本当に良いのかと悩む。

「そろそろ校舎だけど、どうするノイ？ まだ外にいたいなら俺の服の中に隠れているなんてこともできるけど」

「ううん、大丈夫」

ノイはそう言っただけでリインの肩から浮かび上がると《箱庭》への扉を開いて消えた。

「……あの子もあまり思い詰めないと良いんだけどな」

「リインさん、そのことで聞きたいことがあるんですけど、リーグニッツの行き過ぎた貴族嫌いはもしかしてクルトの時と同じ呪いが原因ではないんですか？」

「どうだろうな……クルトもそうだったけど呪いの元になる感情は間違いない本人のものなんだ……」

だから例え《呪い》が原因だったとしても、リーグニッツが貴族を

嫌ってることは間違いなく彼の本心なんだ」

「じゃあ《呪いの種》を取り除いても意味はないんですか？」

「それも分からないな……あの籠が外れている感じは確かに《呪い》だけど、あの太刀に触れさせて何が起きるか分からないから気軽に試して良いものじゃないだろ」

クルトがそれでどうにかなったからと言って試す気にはなれない。

ある意味《鬼の力》をクルトに発現させたようなものだったが、考えてみたら恐ろしい限りだ。

身体を鍛えていたクルトだからこそ後遺症がなかっただけで、これがマキアスのような貧弱な身体に《鬼の力》が発現したりすれば最悪壊れてしまうのではないかと考えてしまう。

結局、具体的にマキアスをどうすれば良いのか分からずに、リイン達は旧校舎から本校舎への敷地に戻って来た。

「あれ……？」

「何だか騒がしいですね」

自由行動日なのに校舎には多くの人の気配が溢れていた。

リインとクリスは首を傾げながら、技術棟へと向かうとそこには人だかりができていた。

「どうしたんでしょうか？」

クリスは何かあつたのだろうかと首を傾げる。

「まだ……約束の時間じゃないんだけど……」

リインは時計を確かめて、ラッセル博士の来訪予定の時刻にはまだ一時間あることを確認する。

しかし、嫌な予感が沸々と湧き上がる。

「すみません。通してもらえますか？」

リインが控えめに人だかりに声を掛けると一斉に技術棟の周りに群がっていた生徒達は両端に身を寄せ、リインの前に道ができた。

「流石 《魔王》」

「うるさいぞクリス」

感心するクリスをたしなめて、開いた道を観念してリインは歩く。
「失礼します」

ノックをして技術棟に入ると、予想した老人はそこにはおらずジョルジュがリイン達を出迎えた。

「お帰りリイン君達、待っていたよ」

「ただいま戻りましたジョルジュ先輩。もしかしてラッセル博士がもう来ているんですか？」

技術棟の事務所にいないのならば奥の工場か、それとも外の資材置き場にでもいるのだろうか？とリインは考える。

「うん……実はそうなんだけど……」

歯切れの悪い反応でジョルジュは資材置き場に繋がるドアを振り返る。

「すみませんジョルジュ先輩、戦術殻なんですけど——」

「ああ、壊れちゃった？ 大丈夫だよ。その戦術殻は武術教練でも使っているものだからそれくらいはすぐに直るから安心して……」

それよりオリヴァルト皇子も来ているから早く行ってもらえるかな？」

急かす言葉にリインは嫌な予感を大きくする。

しかし、この場を逃げ出したとしてもあまり意味はない。

リインは観念して奥へと進む。

「おおっ！ 久しぶりじゃなリイン君。ティータ達から話は聞いていたが生きていてくれて本当に良かった」

外に出るとそこにはラッセル一家にオリヴァルト皇子、ミユラー少佐。それにヴァンダイク学院長、そしてユリア大尉が勢揃いしていた。

「その節は御心配をお掛けしましたラッセル博士……ところでどうしてユリア大尉までこちらに？」

「年始の催し以来だな。例の指輪の件、陛下たちに代わって御礼を言わせて欲しい」

「それは良いんですけど、どうしてユリアさんまでここにいますか？」

リインは同じ質問を繰り返す。

「それは……」

ユリアは申し訳なきように視線を逸らす。

まさかクロスベルで手に入れたリベール王家の指輪の礼を言うために来たのだろうか。と山の存在を見ないふりして考える。

「ははは、実はラッセル博士たちはアルセイユで来てもらったのだよ……」

だからユリア大尉がここにいることは何の不思議もないことなんだ」

答えを洩るユリアに代わってオリヴァルトが満面の笑みを浮かべて答える。

「アルセイユって何でまた？」

「それはこれを選んでもらうためじゃ。ダン、ティータ」

ラッセル博士は二人に指示を出して、山に被せた布を取り払う。

「リイン君の入学祝いとしてリベールから《リベルⅡアーク》の残骸からサルベージした《トロイメライ》を持ってきたのじゃ……」

なんとあの崩落から五体満足で回収できた機体じゃぞ。はははっ！」

胸を張って笑うラッセルに対して同調するようにオリヴァルトも笑う。

「これはこれは素敵な入学祝いじゃないか。いやー羨ましいなリイン君」

「持って帰ってください」

《騎神》に匹敵する巨大な機械の人形など置き場に困ると言わんばかりにリインは拒絶する。

「おじいちゃん、ちゃんと説明しないと」

「うむ。そうじゃな冗談はこれくらいにしておくか」

「冗談のためにアルセイユまで持ち出したのか……」

相変わらずのバイタリテイにリインは懐かしむべきなのか、嘆くべきなのか頭を痛める。

「《トロイメライ》を持ってきたのはこいつの研究にリイン君の協力をしてもらいたいと思ったからじゃ」

「俺の協力ですか？」

「うむ……引き上げてはみたものの、こいつは何をしてもうんともすんとも言わんのでな……」

技術体系がそもそも違うから仕方がないが、解析にはほとんど手を焼いていたんじやが、クローディア殿下がゴスペルを持って呼び掛けた声にわずかに反応を示したのじや……

《リベル・アーク》に仮登録をされた殿下でそれなら、正式登録されているはずのリイン君なら十全に動かせるのではないかと思っただ」

「えつと……」

《空の至宝》と意識を交信できることを考えるなら、正式登録なんて関係なしに全機能を解放して動かせるのは間違いないだろう。

現に近頃は《箱庭》の一角に自分のスペースを確保している《空の至宝》の意志が期待に満ちた想念を送ってきている。

——頼むから今は出て来ないでくれ……

資材置き場の柵の向こうでは運び込まれた《トロイメライ》を一目見ようとする野次馬で溢れている。

ここで人形とはいえ彼女まで出てきたらどんな騒ぎになるか分からない。

「オリヴァルト皇子……どうして許可を出してしまったんですか？」

「ははは、そんなの面白そうだからに決まってるじゃないか」

「オリヴァルト皇子……」

リインはにっこりと笑って拳を握って見せる。

「まあそれは半分冗談で……」

先日、リイン君が援助金を出してくれたことで例の計画に余裕ができてね」

「それで……？」

《聖女の槍》を落札して残った資金はある目的のための資金繰りをしているオリヴァルト皇子に全額預けた。

「確かにあれはそれだけで抑止力になるとは思うのだが、地上で行動できるものがないのが悩みどころだと思っていたんだ……」

この《トロイメライ》を結社が改造したように使えるようになれば、

第三の翼の力はより盤石の物になるだろう……

それにリベールにとつても悪い話ではないのだよ」

オリヴァルトの言葉を引き継いで、ラッセルが説明する。

「サルベージできた《トロイメライ》はこれだけではなくての、まあ腕が無かったり足がなかったりしているが組み替えれば一機か二機は復元できるんじゃない……」

じゃから、この《トロイメライ》を研究することはリベールの国防に繋がるといっわけじゃない」

一理ある理由にリインは歯噛みする。

頼みの綱のミユラーとユリアは既に論破されてしまったのか、申し訳なさそうに目を伏せている。

「というわけで、リイン君が早速《灰の騎神》を手に入れてくれたことも渡りに船だと思つてラッセル博士をお招きしたんだよ……」

ちなみに博士には導力工学を教えてもらう臨時講師をしてもらうことになっている。それに――」

「まだ何かあるんですか？」

外堀をきつちり埋めて来られたことにリインは諦めて聞き返す。

「騎神の武器を作ってくれる技師も必要だろ？」

「それは……」

オリヴァルトの指摘にリインはぐうの音もでなかった。

旧校舎の地下、最奥にはそれらしい武具は存在していなかった。

今は修復中で騎神そのものを使えなくても、来るべき戦いのために武器を用意しておくのは必要なことだ。

そして、その分野でリインが頼れる伝手はラッセル博士しかいないのも事実だった。

「あのあのごめんなさいリインさん、お祖父ちゃんたちを止められないくて」

「ティータのせいじゃないよ……つてそういうえばエリカ博士は？」

ふと、リインはレンの誕生会に来てくれたティータの母親のことを思い出す。

アルバート・ラッセルに匹敵するバイタリテイの持ち主の彼女が

《騎神》と《トロイメライ》という餌があるのに食いついてこないなんてことがあるのだろうか？

「お母さんは……アルセイユに乗れてユリアさんとお話できたことが嬉しかったみたいで、その……まだアルセイユの中で余韻に浸っています」

「……エリカ博士も相変わらずみたいだね」

「恥ずかしそうに告げるティータにリインは思わず同情した。

・*

場所を変え、一同は旧校舎へと向かい昇降機で地下の最奥の広間に降り立つ

「これが……《灰の騎神》って——巨大な結晶の塊にしか見えないね」
巨大なゼムリアストーンの結晶体を前にオリヴァルトは困った声をもらす。

「すみません」

オリビエの感想にリインは肩身を狭くする。

「いや、もちろん責めているわけではないんだけどつくづくリイン君は面白いことをしてくれるね……」

それにアネラス君が見たら我を忘れてしまいそうな光景だ」

「はは、それは確かに……」

リインは周囲に浮かぶ三体の人形に視線を送り、その姉弟子の簡単に想像できてしまう姿に苦笑する。

ローゼンベルグ製戦術殻。

《聖痕》に宿る意志が外で行動するための端末は全部で三体。

桃色の長い髪の子、《鋼の至宝》の意志を宿し、ノイと名付けた存在。

赤い髪のシスター服を纏った女性、《箱庭》の管理人、ルフィナ・アルジエント。

三体目は予備で装飾のないパペットの状態だったのだが、いつの間にか《空の至宝》の受け皿となりその姿もリインと何度もコンタクト

を取った黒髪の女性の姿に変化していた。

「ううむ、結社の戦術殻とやらか……ちよつと見せてもらっても良いかの?」

「ひっ」

ラッセル博士の鋭い眼光にノイはラインの背中に隠れる。

「ダメです」

「ええ、そんなく」

「けちっ」

ラッセル博士の言葉に応えたはずなのに、ティータとエリカがそれぞれ落胆と非難の眼差しを送って来る。

それらを振り切るようにラインは話を進める。

「それでヴァリマールのことですが、まだ修復にどれくらいの時間が掛かるか分かりません」

「構わん構わん、この状態でも調べられることはいくらでもあるから
のう……」

それに戦術殻は技術棟にもあるようじゃし、ラインフォルトの戦術
オーブメントもなかなか興味深い」

「えつと……そこら辺の機密情報はどうなっているんですかオリヴァ
ルト皇子?」

「安心して良いよりイン君。それについてはイリーナ会長とすでに話
し合いは済んでいるから……」

ラッセル博士に戦術殻、《ARCU S》を見せる代わりに《トロイメ
ライ》と《灰の騎神》の解析にはルーレ工科大学の技師も参加させるつ
てね……

《トロイメライ》はともかく《灰の騎神》についてはあまりラッセル
博士にばかり頼り切るわけにはいかないからね。ライン君には事後
承諾になってしまうけど受け入れてもらえないかな?」

「ええ、それは分かります」

いくら気心が知れている仲とはいえ、ラッセル博士はその家族も含
めてリベールにとってなくてはならない人物。

それをラインに付きつきりになってもらうことができないのは最

初から分かっていたことだ。

「まあ小難しいことは後でいいじやろ……」

ところでリイン君、この騎神の武器を作るようにオリヴァルト皇子に頼まれておるんじゃないが、何かリクエストはあるかの？」

「作って頂けるのはありがたいですけど、まだヴァリマールは修復中ですよ？」

「大まかな大きさはテイータから聞いておる。それに図面を引くのは今からでもできるし、材料調達も考えなければならんからの……」

いつ修復が完了しても良いように、準備しておかなくてはの」

「そうですね……」

ラッセル博士の言い分に納得してリインは考え込む。

「やはり太刀が良いですけど。その大きさを太刀を再現することってできるんですか？」

「それはやってみないと分からん。他には？」

「強いて言うなら鞘も、それを吊るせる剣帯も欲しいです……」

それから太刀を作るに当たって俺も少し考えていることがあるんです」

「ふむ？」

「今、俺は《教授》の《聖痕》を武器に定着させる実験をしているんです……」

クリスに試してもらっているんですけど、魔導杖というよりも御伽噺にある魔剣みたいなものです」

「ほう、それは興味深い。詳しく聞かせてもらえるかの」

久しぶりに見るスイッチが入ったラッセル博士の目にリインは懐かしいものを感じて苦笑した。

8話 実技テスト

四月二十一日水曜日。校庭。

「それじゃあ予告通り、実技テストを始めるわよ。この一ヶ月の集大成、しっかりと評価して上げるからね」

校庭に並ばせたⅦ組一同を前にサラは意地の悪い笑みを浮かべる。

「サラ教官」

「ん？ 何かしらラウラ、質問？」

「ええ、父上——ヴィクター・S・アルゼイド子爵が月に一度来ると聞いていたのですが、どうなっているのでしょうか？」

「ああ、それは来月からよ……」

わざわざ忙しい中来てもらうわけだから、生徒たちの基礎体力がしっかり付いてからじゃないと大した教導はできないでしょ？

貴女には不服かもしれないけど、これに関しては他の生徒達に足並みを揃えて貰うわよ」

「いえ、そういうことならば良いんです」

ラウラは疑問が解消されてあっさりと引き下がる。

「他に何か質問はあるかしら？」

「………無いようね。それじゃあ進めるわよ……」

このテストは前もって言っておくけど、単純な戦闘力を測るものじゃないわ。《状況に応じた適切な行動》を取れるかを見るためのものよ……

その意味で、何の工夫もしなかったら短時間で相手を倒せたとしても評点は辛くなるでしょうね」

「いきなりそんなこと言われても」

「簡単よ。先週のラインがしたような立ち回りを貴方達もしてみなさいってだけだから」

不安げな言葉を漏らすエリオットにサラが応えると、不自然な沈黙が満ちた。

「……………それはシュバルツァーのような卑怯な手で勝てということ

ですか？」

怨嗟を吐き出すように尋ねるマキアスにサラはこれ見よがしにため息を吐く。

「また蒸し返すつもりマキアス？　さんざん反省会には付き合っただけだっていうのに」

「いくら説明されても納得できませんっ！」

人を弄ぶような戦い方なんて僕は死んでもごめんだ！」

「別にいきなりそんな難易度の高い事しろなんて言わないわよ。せいぜい貴方はラインと戦術リンクを維持して戦えってくらいよ」

「じよ、冗談じゃない。こんな男と戦術リンクなんて結べるか！」

唾を吐き散らすマキアスにラインは肩を竦める。

「残念だけど、そんな我儘は受け入れないわよ」

「サラ教官っ！」

「それとも何？　テスト問題が難しいからって易しい問題にしてくれなんて言い分が通ると思ってるの？」

「っ……」

サラの指摘にマキアスは言葉を詰まらせる。

「でもまあ最初からラインとのリンクは難しいでしょうから、クリス、ユース、マキアス。それからエリオットの四人でこいつと戦ってもらうわ」

サラが指を鳴らすと、彼女の横に戦術殻が現れる。

「あ……」

現れたその戦術殻にクリスは思わず言葉を漏らす。

「いや、形状は同じだけど俺達が旧校舎に同行してもらっているのは別の個体だな」

「何で分かるんですか？」

「え……何でって言われてもな。雰囲気かな？」

言われてみれば何となくとしか答えられないことにラインは言葉を濁す。

「むむ、《観の目》を鍛えると機械の個性も分かるんですね。もっと精進しないと」

「ほら、クリス、エリオット。さつきと前に出なさい」

「あ、はいっ！」

「うう、自信ないなあ」

戦術殻を観察しようとするクリスと弱気なエリオットはサラに言われて前にでる。

「あんなたちの条件は戦術リンクを一回にして連携攻撃を成功させること……」

言っておくけど、油断したら痛い目見るわよ」

「フン、たかが機械の人形風情に後れなど取るものか」

「先週の理不尽と比べればこの程度の相手、取るに足らん」

脅すサラに対してマキアスとユーシスは揃って強がった言葉を返す。

「………二人とも、実は仲が良いんじゃないですか？」

「はあ!? ふざけたことを言うなっ!!」

「こんな男と同列に扱われるのは心外だな。訂正しろ」

クリスが漏らした言葉にマキアスとユーシスは揃って猛然と抗議する。

「い、いや……何だかんだで息は合っているんじゃないか」

二人の剣幕に怯みながらもクリスは思わず言ってしまう。

そんな言葉に二人は顔を見合わせると同じタイミングでそっぽを向く。

「はいはい、じゃれ合っていないで本当に気を付けた方が良いわよ。ラインに合わせてスペックは最大に設定して来たから素のあんなたちじゃまず勝ち目はないわよ」

「ぐっ……それが何だっけ言うんだっ！」

あんな卑怯で汚い貴族に負けるものかっ！」

「………ある意味、ここまで対抗心を持てることも凄いなあ」

「宝の持ち腐れだな。この負けん気を他のことに向ければ大成できるだろうに」

あれほどこっぴどくやられたというのにラインへの対抗心を失くさないマキアスにクリスとユーシスは呆れながらも感心する。

もつともそんな風に認めることが出来る部分が見つかったとしても戦術リンクの構築に役立つことはなく、実技テストの結果は散々たるものだった。

・*

「それじゃあ最後にリインとラウラ」

「よろしくなラウラ」

「あ……ああ」

サラに呼ばれてリインとラウラが前の組と入れ替わるように前に出る。

「あんた達も戦術リンクを維持して戦術殻と戦うことが課題——つて言いたいんだけどちよつと趣向を変えさせてもらうわ」

「趣向を変える？」

「それはいったい……？」

突然のサラの申し出にリインとラウラは首を傾げる。

「取り合えず戦術リンクを繋ぎなさい」

言われるがままにリインとラウラの間で戦術リンクが構築される。

「ここまではうまくいくのだが、これで戦闘になると途端に維持が難しくなる。」

「その状態を維持したまま、あんた達二人で戦ってみなさい」

「それは……出来るものなのですか？」

霊的な繋がりを作り思考を共有することで高度な連携を補助する戦術リンクだが、それを繋げた者同士で相対するとなるとどうなるのかラウラは首を捻る。

「相手を攻撃する意志——害する意志に反応してリンクが切れるんじゃないですか？」

リインもまたサラの意図が計り切れず推測を口にする。

「普通ならそうだけど、ほら武術にはあえてゆっくり動いたり、打つ場所を教えながら打ち合う稽古があるらしいじゃない？」

その要領なら理論上は戦術リンクを繋いだままでもいけるとあ

しは思うんだけど、取り合えず試してみてもらえないかしら」
それなりの考えがあるということのでリインは納得してラウラに向
き合う。

「あ、そうそうラウラ——」

ラウラはサラに何かを耳打ちされると、顔をしかめサラに頭を下げ
てからリインと向き合う。

「とりあえず一手一手交互に打ち合ってみなさい。まずはラウラか
ら」

「征くぞリインッ！」

大剣を正眼に構えてラウラは気合いの籠った声を発し一気に踏み
込んでくる。

大剣を大きく振り被った唐竹割りの一撃。

戦術リンクで感じ取るまでもなく、リインは容易に見極め太刀で受
け止める。

「それじゃあお返しだラウラ」

大剣をそのまま受け流すように払いながら後ろに下がって声を掛
けたと同時にリインは身構えたラウラに肉薄して、横薙ぎの一撃を振
るった。

「くっ——」

戦術リンクでそれを察知したラウラは大剣を盾にして受け止める。

「——次は私の番だっ！」

リインの一撃に弾かれ、地面を両足で滑るように削ったラウラは戦
術リンクの恩恵に安堵しながら、お返しとばかりに斬り込む。

最初は交互に、仕切り直すように一撃ずつ打ち合う。

戦術リンクが攻撃の衝撃で途切れれば繋ぎ直し、維持状態が長く続
くとその切り返しは回を重ねるごとに早くなる。

そして入学式からずっと顔をしかめてきていたラウラはリインと
正面から打ち合うごとに、その表情から毒気が抜けて行くように晴れ
やかなものになっている。

「やっぱりあの子は一对一で思いつきりぶつけるのが一番だったか」
そんな彼女の姿を観戦していたサラは肩を竦めながら呟く。

ラウラのリンクブレイクの要因は単純に自分の枠組みの外の戦い方への忌避感に過ぎない。

マキアスと違って、何とか二人の在り方を呑み込もうとしているのは普段の生活の態度からも分かる。

模擬戦でのリンクの不具合も、正々堂々一対一を望む彼女の気質が原因であるならばラウラが望む戦いの場を用意すればいい。

まだまだ対等に戦うにはラウラの練度が足りないが、それでもリンクが合わせているのと戦術リンクがサラの思った通りに働き、良い感じに剣を交えることができている。

「リイン達はしばらく放っておいて良いとして——あら？」

今の内にへたり込んでいるメンバー達の反省会をしようとしたサラは振り返り、その横を何かが駆け抜けた。

「征くぞ、リインツ！」

ラウラは大剣に光を宿す。

模擬戦の時は力み、余計な力が入っていたが今はそんなことはない。

むしろこれまでで最高の闘気の練り込みが出来ているのではないかとさえ感じることにラウラは高揚する。

「焰よ……我が剣に宿れ」

そんなラウラにリインは正面から打ち合うと言わんばかりの思念を感じさせ、太刀に紅蓮の焰を宿す。

「……………感謝する」

ラウラはリインに聞こえないほど小さな声で呟く。

リインにはいろいろと思うことが多かった。

何故《初伝》と偽り実力を隠していたのか、何故御前試合で父を卑怯なやり方で倒したのか、何故そんな風に倒された父がリインと楽しそうに歓談しているのか。

いくら考えても分からない答えをずっと抱えていたが、正面から自分だけを見て剣を交えてくれたことでそんな悩みはどうでもよくなってくる。

——今の私ではリインには勝てない……………だがこの一撃を受けても

らえるなら私は……

模擬戦の時は片手間で処理されてしまったが、今のリインの意識は全て自分に向いている。

今のリインになら負けても納得ができる。

そうすれば様々な蟠りを呑み込めるとラウラは頭の片隅で考えながら、大剣に意識を集中する。

「おおおおおおおっ！」

雄叫びに呼応して大剣に宿る光は大きく迸る。

「奥義——洗刃——」

「リインッ！ シュバルツァーッ!!」

ラウラの声を掻き消して、《神速》が怒号と共にリインを横撃して吹き飛ばした。

「……………え……………」

ぶつける場を失った大剣を振り被ったまま、ラウラは視線を横にずらす。

「リイン・シュバルツァー。貴方という人は！ 貴方という奴はっ!!」

胸倉を掴んでがくがくと乱暴にリインを揺るのは白い鎧に身を包んだ女性。

「っ…………」

その時は鎧姿ではなかったが、忘れもしないその顔にラウラの中で忘れようとした焰が熾り始めた。

「ちよ——やめてくれデュバリイさんっ！」

激しく揺さぶれることに溜まらずリインはデュバリイの腕を乱暴に振り解く。

「何で貴女がここにいますか？」

「ふん。ブルブランから聞きましたわよ。《黒の競売会》で《聖女の槍》を落札したことを」

「何だどっ!？」

デュバリイに向けていた黒い感情はその一言で正気を取り戻す。

「それは本当なのか!？」

あの獅子戦役で行方知らずとなったリアヌ・サンドロットの槍が

あるというのはっ!? 何で教えてくれなかったんだっ!?
「ラウラまで……」

デュバリイと同じ剣幕で詰め寄って来るラウラにリインは嘆息する。

教えなかったのではなく、教えようとしても今は忙しいと距離を取っていたのはラウラの方だと言いたいのだが、その勢いに反論は押し潰される。

リインにとって《リアンヌ・サンドロット》は歴史の中の人物であり、今も騎神の力で生きている不死者であり超えなければならぬ壁なのだが。

聖女の話をして幼い頃から聞いて育ったラウラとはそこに宿る熱量に大きな差があるのは当然だった。

「私が来た目的はただ一つっ! 《聖女の槍》を私に渡しなさいっ!」
臆面もなく言い切ったデュバリイにリインは肩を竦め――

「デュバリイさん。それについては――」
「いきなり現れて何を言っているんだそなたは……」

《聖女の槍》は帝国の宝にして、聖女の名を汲むアルゼイド家を取り戻すと誓った品……

どこの誰とも知れないそなたにいったい何の権利があつてそのようなことを言う!?!」

「はっ! 傍流のアルゼイド如きがあの方の槍を持つ資格があると思っっていることこそ烏滸がましい。身の程を知りやがれですわ」

「っ――また傍流と言つたな! いきなり出て来て勝手なことを――名を名乗れっ!」

「ふふ……《身喰らう蛇》が第七使徒《鋼の聖女》の直属たる《鉄機隊》、筆頭隊士を務める《神速》デュバリイですわ」

「《鋼の聖女》……《鉄機隊》だと……かの《槍の聖女》が率いた《鉄騎隊》と関係が……!?!」

「フフン、気になりますか? 気になりますわよね?」

デュバリイはうんうんと神妙に頷いて、彼女の心情に同調し――

「――でも教えてあげませんわ!」

「なっ!?」

そのまま何かを言うと思っていたラウラはデユバリイの意外な言葉に面を食らう。

「アハハ、せいぜい悔しがるといいですわ!」

そんなラウラの顔を見てデユバリイは高笑いを上げて続ける。

「そして、気になって気になって夜も眠れなくなればいいのです!

ふんっ、ざまーみろですわ!」

「くっ……」

別にそこまで眠れなくなるほどに気になるわけではないのだが、アルゼイド流を傍流と貶めるデユバリイの言葉を聞き流せるほどラウラはまだ大人になれていなかった。

「そこに直れっ! 貴様のような無礼者、私がここで叩き切つてやる!」

「はっ! 傍流のアルゼイド如きが吠えたところで怯むとも思っているのですか? 身の程を知りなさい」

「それはこちらの——」

セリフだと言いかけてラウラは思わず大剣を構えて止まる。

小物のような言葉遣いだったが、剣を向けて対峙した瞬間に自分では勝てないとラウラは察してしまう。

漠然と測れる力量はリインよりも上に感じる。

今の自分の敵う相手ではないと察することができたとしても、アルゼイドを貶める目の前の無礼者に退くわけにはいかないとラウラは虚勢を張る。

「《聖女の槍》は渡さないっ!」

「ふん。弱い犬程良く吠えますわね」

ラウラの虚勢をデユバリイは鼻で笑う。

「二人とも……俺の意見は?」

リイン——《聖女の槍》の所有者が横から口を挟む。しかし、リインの声はそれぞれの耳に届くことなく二人は睨み合う。

リインと戦って自分から愚直な攻めでは格上には勝てないと学んだラウラは、後の先を取り差し違つても勝つという気概で身構え

る。

「どうした……来ないのか？」

慣れない挑発の言葉を使ってみるが、デュバリイはそんなラウラに肩を竦める。

「良いでしょう。身の程を教えて差し上げますわ」

そう言つて剣も抜いていないデュバリイはラウラの目の前から消えた。

「え——」

言葉を漏らした瞬間、甲高い音を立ててデュバリイの剣とリインの太刀がラウラの目の前で交差した。

「いきなり何をするんだデュバリイさん」

「ふんっ！ 傍流に身の程を教えて上げようとしただけですわ」

眼前に突き付けられるように止められた剣の切先をラウラは遅れて認識して粟立つ。

——全く見えなかった……

目の前のデュバリイが剣を抜く様も近付いて来る様も。

そして何の反応もできなかったラウラと違い、リインは当然のように割つて入つてデュバリイの剣を受け止めた。

「——ふん……」

呆然とするラウラをデュバリイは鼻で笑うと、剣を外して距離を取る。

「さあ、これで邪魔者はいなくなりましたわ」

「ま——」

待てと言葉を作ることではできなかった。

それ程までに合わせることでできなかった一合でラウラはデュバリイと——何よりもリインとの実力差を思い知らされた。

戦術リンクで打ち合えていたのは幻想に過ぎなかったのだと、分かっていたはずの事実が押し掛かつて何も言えなくなる。

「くそっ——」

それでも何かを言わなければと、ラウラは頭を振って、顔を上げる。

「え——？」

そこには鎧がいた。

意気揚々とリインに剣の切先を突き付けるデュバリイの背後に頭まで覆い隠した全身甲冑の誰かが気配もなく佇んでいた。

「リイン・シユバルツァー！ いぎ、マスターの槍を賭けて尋常に――」

背後の鎧に気付かず声を上げたデュバリイの頭に籠手に包まれた拳骨が落ちる。

ゴンツ！ と痛そうな鈍い音が響き、デュバリイは白目を剥いて前のめりに倒れた。

「授業の邪魔をして申し訳ありません。リイン、それにサラ・バレストアイン」

鎧の中から聞こえてきた声は妙齡の女性の声だった。

「アリアンロードさん……いえ、ある意味予想通りと言うか……せめて放課後だったらとか思いもしましたが、デュバリイさんですから」「何……またリインの知り合いなの？」

御伽噺に出て来そうな中世の騎士のような姿の女性にサラは呆れるが、抜いたブレードと銃を納めず油断なく近付いて行く。

「誰だか知らないけど、学院は関係者以外立ち入り禁止なの、その子を連れてすぐにお引き取り願えるかしら？」

「ええ、お騒がせしました」

アリアンロードは片手を上げて合図を送るとどこからともなく二人の女性が現れて気絶したデュバリイを両側から抱え上げる。

「それでは失礼します」

「あ……アリアンロードさん。槍の件で後で話が――」

踵を返したアリアンロードをリインは思わず呼び止める。

が、返答にはいつの間にか彼女の手に握られていた騎兵槍の穂先が突きつけられる。

「リイン!？」

「だ、大丈夫ですサラ教官」

突然のアリアンロードの攻撃的な行動にリインは驚きながら銃を向けたサラを止める。

「話は聞いていると思いますが、貴女が使っていた槍を手に入れたんです。まだ帝国政府に扱いをどうするか打診しているところなんですが——」

「不要です。槍は好きなように処分してくれて結構です」

「え……でも……」

「私には《盟主》より賜ったこの槍があります……もうドライケルスを守るための槍は私には必要ないのです」

「アリアンロードさん……」

そこに込められた想いの深さにリインは返す言葉が出て来なかった。

「それよりもリイン。馴れ合いはしなないと言ったのは貴方のはずです。些か緩み過ぎではないですか？」

「え……？」

次の瞬間、アリアンロードは突きつけた槍を引いて——突き出した。

「くっ——」

咄嗟に後ろに跳ぶと同時に槍を太刀で受け止め、大きく弾かれながらリインは着地する。

「そのような体たらくでは困ります……」

ですが事の真偽を確かめるためとはいえ、近付き過ぎたこちらの落ち度でもありませんね」

兜の奥でアリアンロードは申し訳なきように目を伏せる気配を滲ませる。

「構えなきいいリイン・シュバルツァー……貴方のその甘え、ここで断ち切らせてもらいます」

宣言すると同時にそれまで抑えていた覇気をアリアンロードは解放する。

「ひっ……ひいいいっ!?!」

「な、な、何なんだいったい!?!」

傍観していたⅦ組の悲鳴を聞いてリインはアリアンロードを止めようと声を上げる。

「待つてくださいい！　こんなところで——」

が、問答無用とばかりに言葉を遮る様に、殺意を漲らせた騎兵槍が高速で突き出される。

咄嗟に太刀で受け止めたリインだが、続けざまに繰り出される連続の突きを本来の得物ではない太刀では捌ききれずに大きく態勢を崩してしまう。

「あ——」

その隙を逃さぬと更に一步深く踏み込んだアリアンロードが腕を引き絞ると、無防備になったリインに必殺の一撃を繰り出す気配を見せる。

——まさか……

リインは引き延ばされた時間感覚の中で彼女の本気を疑う。

このような場で、関係ない周囲の人達を省みず、本気で命を取りに来る一撃を撃つつもりなのか。

彼女の人柄を知る身としては、そんな事はある得ないとの思いが強く、リインは殺気の籠った槍を前にしているというのに、命の危機の実感が持てず、暫し棒立ちしてしまう。

しかし——

——本気だ……

槍に込められた殺気。

突き刺さる視線。

ぶつけて来る覇気。

全てが本気で、只々リインをこの場で亡き者にしようという意志が込められているのを、この時ようやくよく認識するに至る。

「っ——」

それまで何処か気の抜けていたリインは、一気に意識を覚醒させるように気持ちを引き締めた。が——

「遅い——」

それよりも一瞬早く、叱責するようにアリアンロードは鋭く呟くと、そのまま容赦なく槍の一撃を繰り出した。

咄嗟に構えようとしたリインの手から太刀が弾き飛ばされる。

さらには突き衝撃を受け止め切れずに体が浮き上がる。

そこにさらにアリアンロードはダメ押しの一撃を繰り出すために騎兵槍を引き戻す。

訓練用の重い太刀とはいえ、自分を護る術をなくしたリインは——
「我が深淵に宿る——以下省略っ！」

《聖痕》の——それも別の人間から写し取ったものを自分の身に宿る別の力で再現し、《騎神の腕》を自身の右腕に降ろす。

鋼に変じた腕でアリアンロードの一撃を受け止めるが、威力を殺し切れず弾き飛ばされたリインは地面を滑るように着地する。

「くっ——」

アリアンロードの真に迫る気迫に圧され、隠しておきたかった手札を一つ切ってしまった事にリインは舌打ちをする。

「おや……取ったと思いましたが、まさか《騎神の腕》をその身に降ろすとは……それが《神気合一》の先にあるものですか?」

「さあ、どうかな?」

アリアンロードの質問をリインははぐらかす。

《騎神の腕》はとある守護騎士の《聖痕》を疑似的に再現した力。

もつともその守護騎士が使うものと違い、《騎神の腕》に特殊な力はないため、普段は精々全身に宿る《鬼の力》を腕に集中させる程度の効果しかない。

「緩んでいるかと思えば、どうやら唯の杞憂だったようですね」

と伝えては来るものの、その言葉とは裏腹にアリアンロードは未だ退く気配を見せない。

「リインッ！」

リインの頭上に現れた小さな人形が、学生寮に置いて来た太刀を投げ渡して来る。

「ありがとうございます。ルフィナさん」

目の前に落ちて来たゼムリアストーンの太刀を受け取りルフィナに対して一礼するとそのまま流れる様に構えをとる。と、それを待っていたかのようにアリアンロードが動きだした。

「聖技——」

大きくスタンスを取って深く槍を構える。

「七の太刀——」

《騎神の腕》から直接太刀に《鬼気》を宿し構える。

「——ナインライブズ」

「——暁天」

激突。大気を切り裂く刹那の九連撃がぶつかり合うと、一つの音と
なつて周囲の空間を大きくを震わせる。

同じ威力の技をぶつけ合った二人は互いを前にして硬直するが、先
に回復し次の攻撃に移れたのはリインの方だった。

「もらったっ！」

技後硬直で動きを止めているアリアンロードよりも一瞬早く動き
出し、左拳を固めて振り抜いた。

次の瞬間、リインが放った《破甲拳》を紙一重で躲しながら、ア
リアンロードの左の拳がクロスカウンターの要領でリインを捉え——
そのまま殴り飛ばした。

まるで導力トラックに撥ね飛ばされたように宙を舞ったリインは、
二度三度バウンドしながら地面を転がると、やがて勢いを無くし止
まった。

「ふふ……まだまだですね」

アリアンロードは何処か嬉しそうにしながらも踵を返して去つて
行く。

「ちよ……リイン!? 生きてる!?!」

地面に伏してぴくりともしないリインにサラは我に返って駆け
寄った。

「ふう……」

アリアンロードがいなくなり、緊張の解けた一同がそれぞれ脱力し
てへたり込む中でエマは思考を放棄して倒れるのだった。

9話 特別実習

トールズ士官学院の保健室。

「っ……」

全身にだるさを感じながら、リインは久しぶりとも言える気絶からの覚醒を果たす。

「あ、リイン！」

身体を起こしたリインにすかさず傍に控えていたノイが縋りつく。

「大丈夫？ いたいところはない？」

「大丈夫だよ。それよりもどれくらい気を失っていたんだ？」

例えリインの意識が途切れても、内蔵されている導力が尽きるまで自律行動が可能なノイが動いていることを考えればそこまで長い時間ではないと考えながら尋ねる。

「えっと……」

「だいたい一時間くらいね。時間としては最後の授業のちょうど真ん中くらいね」

言い淀むノイに変わってルフィナが答える。

「そうか……」

一撃を食らって気絶した。

それは紛れもなく敗北を意味している。

例えばリベールで彼女と初めて手合わせした時も、こんな感じだった。

「成り行きとはいえ、ルフィナさん達の姿を見られてしまいました。騒ぎになっていませんか？」

太刀を持って来てもらったこと。

それにおそらく気絶したリインを心配して付き添っていたノイのことを考えると多くの人に彼女たちの姿を見られてしまったと想像できる。

「心配しなくても大丈夫よ……」

直前に戦術殻を使った訓練をしていたから、言い訳は簡単だったわよ」

「ああ、それもそうだったか……」

ローゼンベルグ工房製の戦術殻。

それにリインの《聖痕》に宿る意志を乗せたのがノイであり、ルフィナダ。

なので彼女達の存在はリインが個人的に所有している戦術殻と言っただけで説明は事足りる。

「ふふ、随分と慕われているようね」

そんな彼女たちとのやり取りを見守っていたベアトリクスがリインに声を掛ける。

「見たところ体に問題はなさそうね」

「はい。すみません」

「謝らなくても良いわ……ただ今期の新入生で一番最初に担ぎ込まれて来たのが貴方だったことに少し驚いているけど」

「恐縮です」

トールズ士官学院の武術教練は厳しく、毎年授業中で気絶する者も少なからずいる。

もつとも、まだ体力づくりを重点して行われているので、それは五月からというのが毎年の恒例だった。

前回のリインがⅦ組や他のクラス達と戦った時は運び込む程の重傷者は出していない。

なので晴れて一年生で保健室の世話になったのはリインが初ということになる。

「お世話になりました」

リインは頭を下げてベッドから降りる。

「あら？ どこに行くつもりかしら？」

「教室に戻ります。まだ半分は受けることができますから」

まだ終業の鐘が鳴っていないのなら、それこそすぐに戻るのが筋だろう。

「その必要はないわ。ルフィナさん、申し訳ないけどリイン君が目を覚ましたとサラ教官に伝えに行っていただけですか？」

「はい。分かりました」

ベアトリクスへの指示にルフィナは頷いて保健室から出ていく。

「え……あの、もう体は大丈夫なんですか？」

「それは私が判断します」

優しい口調に柔和な笑顔のベアトリクスにリインは有無を言わせてもらえず、ベッドに戻されるのだった。

・*

「し、失礼します」

終業の鐘が鳴る少し前、恐る恐るといった様子で一人の少女が保健室を訪ねた。

「あら、Ⅶ組のアリサさん。まだ鐘は鳴っていないけど、授業はもう終わったのかしら？」

「はい。それでリインはどうなんでしょうか？」

ホームルームに出られるようなら来るように伝えるようサラ教官に言われたんです。今日は重要な知らせがあるそうなので」

「そうね……体に異常はないから

一応今日一日安静にして、何か異常を感じたらすぐに連絡してもらえるかしら」

「一日安静ですか……？」

思わずリインは聞き返す。

寮に戻ったらすぐにでも聖女との一戦を反芻したいと思っていた。

「そう一日安静です。ちゃんと守って下さいね」

「……………はい」

クローゼやアネラスに通じる、あるいはそれ以上の凄みを感じる笑顔にリインは早々に降参して諦める。

この手の相手には例え《箱庭》という隔離空間を使えたとしても、見抜かれてしまうことをリインは良く知っている。

よろしいと満足気にベアトリクスに頷かれてリイン達は保健室を出る。

アリサとリイン。そしてリインの肩にノイが乗って三人はⅦ組の教室へと向かう。

「……………」

「……………うう……………」

無言で歩くがアリサが居心地悪そうに唸る。

「アリサ」

「は、はいつ!?!」

リインが足を止めて呼びかけるとアリサは体をびくりと跳ねさせて振り返った。

「な、何よ?」

「いい加減、何が不満なのか教えてくれないか?」

旧校舎で彼女を助け損なって恥をかかせてしまった。

その時のことが尾を引いているのか、アリサのリインへの態度は他所他所しいものだった。

もつともそれだけではないだろう。

アリサ・Rと名乗った彼女の本当の家名を知っていることもあり、警戒心に満ちた眼差しでリインのことを睨んでいる。

しかし、それ以外にも感情があることは読み取れた。

《識》や《観の目》を使えば看破できるかもしれないが、人の心を読み解くのにそれらは使わない方が良くとクレアに忠告されているので自重する。

「べ、別に不満なんてないわよ」

「まだ旧校舎での事が引っ掛かるなら、何か改めてお詫びをするけど——」

「だからそうじゃないってっ!」

謝るリインにアリサは思わず声を上げて否定する。

「そうは言っても納得できてないんだろ?」

「それは……………」

言い淀むアリサにリインはさらに踏み込む。

「別に無理強いをするつもりはない……」

嫌いなら嫌いでも構わないさ。ただ一方的に嫌って何もかもに噛みつかれるのは正直疲れるから、線引きを決めないか？」

アリサならその辺りの妥協はできるだろうと考えての提案だった。

「あ……」

リインの提案にアリサはようやくこれまでの自分を省みて、さらには誰と比較されているのか気付いて頭を抱える。

「ごめん……確かに一方的過ぎたわ」

アリサにとっては違うが、リインにとっては旧校舎だけの問題。

それもリインに対して全く非がないことで突き放しているようなものだった。

それに気付いてアリサは謝罪する。

いきなり頭を下げたアリサにリインは面を食らい、そしていつかの時を思い出しながら言葉を返す。

「驚いたな……まさか君がそんな風に謝るとは思わなかった」

「……どれだけ私の評価は低いのよ」

「聞きたい？」

「……やめておく」

どちらともなくリインとアリサは苦笑し、それを見ていたノイは首を傾げる。

「言い訳になるけど、別に旧校舎のことを引きずっていたわけじゃないのよ」

歩みを再開してアリサは自分の心境を整理しながら話す。

「二年前……リインは私と一緒に、家出をした子供だったのに随分と差がついちゃったと思ってさ」

「というと、まだお母さんとはうまくやれてないのか？」

「うん……あれからシャロンと一緒に帰っても心配したなんて言葉もなくて……」

どれだけの人に迷惑をかけたのか、淡々と説明されただけで終わっちゃったから」

「そうか……」

「士官学院に入学したのも結局あの時と同じなのかもしれないって思ったら、貴方の顔を見るのがどうしても辛くて」

「そうか……」

心情を語るアリサにリインは相槌を繰り返す。

「買い被ってもらって悪いけど、俺だってアリサが思っているほど大した成長はしてないよ」

「とてもそうとは思えないけど？ 私たちどころか、各クラスの代表たちまで一蹴しちやったくせに」

「そんな武力の問題は大した違いじゃない……」

それにアリサにそう見えるのは俺だけが頑張ったからじゃない。リベールでたくさんの人に支えられたから今の俺があるんだ……

とても一人では答えを出すことなんてできなかつたよ」

「そうかしら……まあそれはそれとして、私はどうして貴方とシャロンが連絡先を交換していたのかが気になるんだけど？」

「レンの誕生会のことか？ あれは俺が直接したわけじゃないんだけどな……」

それにあれはレンとシャロンさんが知り合いだったから声を掛けただけだから、俺と関係があったわけじゃないんだけど」

これまでとは違う威圧感を持って睨むアリサの視線にリインは思わずたじろぐ。

「どうかしら……それにしても妙に親しげだったと思うけど……」

もしかして私が知らない所で会っていたりしたんじゃないの？」

「まさか」

内心で鋭いと思いつながらリインは惚ける。

「もしかしてアリサは俺とシャロンさんの仲を疑ってたから、あんな態度を取っていたのか？」

「えっ!? それは……」

リインの指摘にアリサは口ごもる。

そんなアリサの反応になるほどと納得する。

「アリサはシスコンだったんだな」

家族に急に異性の知り合いができたことに警戒する気持ちはリイ

ンもよく分かる。

「ちよ、ちよつと誰がシスコンよっ！」

「安心して良いよ。シャロンさんとはそういう仲じゃない。そもそもシャロンさんは俺の好みの女性じゃないから」

「好みの女性……ずばつと言おうわね」

アリサはリインの物言いに呆れながらも興味を示す。

「やっぱり年下の女の子が好きなの？」

「どうしてそうなるんだ？」

「だってレンちゃんの誕生日会を開いて上げるくらいだし、それにリベールで——あれ？」

ふと、アリサはクロスベルで招待された誕生日会に銀色の髪の子がいなかったのを思い出す。

あの時はヨシユアとの再会などでそれどころではなかったのだが、あのリインにべったりだった女の子があの場合にいなかったことに首を捻る。

「そういえばリイン。あの銀髪の女の子……名前はえつと……ナディアちゃんだったかな？ あの子はどうしたの？」

「アルティナのことか？ あの子はちゃんと元気になっているはずだよ」

笑顔で応えたリインにアリサは何故か、それ以上のことを追及することはできなかった。

・*

「戻って来たわね」

教室に戻ると、サラに席に着くように促された。

てつきり教室に入った瞬間にいろいろな質問攻めを受けると覚悟していたリインは拍子抜けしたように促されるままに席に着き、サラの横にいたルフィナはリインの元に戻って来る。

「さて、いろいろあって話そびれてしまったけど、かなり重要な伝達事項があるわ……」

君たちⅦ組に関する特別なカリキュラムに関してね」

サラは教壇から一同を見回して続ける。

「君たちに課せられた特別なカリキュラム……それは《特別実習》よ！」

勿体付けて言われた言葉にリイン達は沈黙する。

「と、《特別実習》……ですか？」

「……な、なんだか嫌な予感しかしないんだが……」

「名前だけだとそのままですよ？ 早く内容を説明してもらえませんかサラ教官」

困惑するエマとマキアスの言葉を流しながら、クリスが説明を要求する。

「君たちにはA班、B班に分かれて指定した実習先に行ってもらおうわ。そこで期間中、用意された課題をやってもらうことになる。まさにスペシヤルな実習なわけね♪」

そう説明してサラは一同にプリントを渡す。

A班：エリオット、ガイウス、クリス、ファイ、ラウラ。実習地は交易地ケルディック。

B班：マキアス、ユーシス、リイン、エマ、アリサ。実習地は公都バリアハート。

「冗談じゃないっ！」

それを読んで真っ先に声を上げたマキアスは机を叩いて立ち上がり、サラに食って掛かる。

「サラ教官っ！ これは何のつもりですかっ!? この二人と同じ班だということもそうだが、よりにもよってバリアハート!？」

《翡翠の公都》、貴族主義に凝り固まった連中の巣窟じゃないか!？」
「確かにそう言えるかもね。だからこそ君をB班に入れてるんじゃないか？」

「っ……」

「ま、あたしは軍人じゃないし命令が絶対なんて言わない……」

でも逆に聞かせてもらおうけど誰と、何処なら、君は納得できるの?」
「それは……」

「それに《特別実習》だけじゃない。学院内での君はリインやユーシスと組みたくないなんていつも言ってるけど、そんな子供の我儘がいつまでも通じると思っているの?」

「で、ですが腹の底で平民だと馬鹿にしているこいつらなんかと組めるわけないじゃないですか!?!」

マキアスの入学から変わらぬ主張にサラはため息を吐く。

「馬鹿にしているのはどっちなんだか……」

「え……?」

「リインのことは一先ず置いておくとして、ユーシスは貴方以外のVII組のメンバーとちゃんと戦術リンクを結べている……」

君が言うユーシスが平民を馬鹿にしているから戦術リンクが結べないって言うなら、君以外もそうでなくちゃ説明できないわよね?」

「サラ教官まで貴族の肩を持つんですか?」

「そんなつもりはないわよ。私は客観的な事実を言っているだけ……」

でも最初に言っただけはよね?」

VII組として君は選抜されたけど、やる気のない者や気の進まない者に参加させるほど予算に余裕があるわけじゃない。カリキュラムもハードなものになるって……」

貴族と一緒の班になって実習を行う……」

この程度のことできないって言うなら、今からでもVII組参加を取りやめてもいいのよ」

「ぐ……ぐ……ぐ……」

正論を返されてマキアスは拳を震わせてサラを睨む。

「まあ、いいわ……マキアス、君には話さないといけないことがあるから後で職員室にきなさい」

「……分かりました」

何とかその言葉を絞り出してマキアスは着席する。

「他に意見がある人はいるかしら?」

サラは一同を見渡して尋ねる。

文句があつたユーシスは先程のサラの言い分を受けて、異議を呑み込んでいた。

一同を見回して、意見はないと判断したサラは締めくくる。

「日時は今週末、実習期間は二日。A班、B班共に鉄道を使つて実習地まで行くことになるわね……」

各自、それまでに準備を整えて英気を養つておきなさい。以上——
解散といきたいところだけど。リイン」

ホームルームが締めくくられる前にサラはリインの名前を呼んだ。

「はい？ 何でしょうか？」

「何でしょうか、じゃないでしょ……」

さっきの実技テスト、乱入して来たのはどこの誰で、その人形たちは何なのか説明してもらえないかしら？」

「説明しろつて言われても……ここでですか？」

リインは自分に視線を集中させるⅦ組のメンバーを見回して聞き返す。

「説明するのは良いですけど、ここで話すような内容ではないと思います」

「そうは言つても授業妨害されたわけでしょ？ リインの身内なら説明するのが筋じゃないかしら？」

「身内ではありません。あの人達は俺が倒すべき敵です」

もしも彼女と刃を交える前に聞かれていたら曖昧に答えていただろう関係性をリインは断言して答える。

「ノイヤルフィナさんも俺が個人で所有している戦術殻です。それ以上の説明が必要でしょうか？」

そもそもノイは《鋼の至宝》の意志だと説明して理解と納得が得られるとは思えない。

《至宝》の存在にしても御伽噺の類で語られる存在でしかないのだから、説明したところで信じてもらえるだろうか。

「君はそんな言い訳が通用すると思つているのか!？」

拒絶の態度を取るリインにマキアスが眦を上げて口を挟む。

「それなら君はどうして貴族をそこまで憎むのか、話してくれるのか?」

「何で君なんかになんかそんなことを言わなければいけないんだ!？」

すかさず言い返された拒絶の言葉にリインは嘆息する。

「ならどうして俺が君の質問に懇切丁寧に答えないといけないんだ？」

「それは……」

「他の人達ならともかく君に俺はノイ達のことをこれ以上説明するつもりはない」

はつきりと口にした拒絶にマキアスはそれでも何かを言い返そうと口を開き、リインはそれを無視してサラに向き直る。

「ノイ達には今後、学院の中では出て来ないように言い聞かせます。それで良いですか？」

「はあ……まあ、あたしは別にそんなことで目くじら立てるつもりはないんだけど……」

それに話を聞きたがっているのはあたしじゃないのよ」

サラの疲れたため息にリインは首を傾げる。

「……………リイン……………」

それまで無言を貫いていたラウラが席を立ち、怒気で周囲を威圧しながらリインの前に立つ。

「ラ、ラウラ……………」

そういえば一番良い所でデュバリイの横槍が入ったことを今更ながら思い出す。

最後に戦術リンクで感じた彼女の感情には蟠りがなかったが、デュバリイとのやり取りを見るとそれも怪しく感じてしまう。

「リイン……………《鉄機隊》とは何だ？ あの槍使いはいつたい何者なんだ？」

「何者だって言われてもな……………」

彼女たちのことはノイ達と同じでどこまで話して良いのか悩む。

「一言ではうまく説明できないが、リベールで会った俺の敵になる人たちだ」

「何故《鉄機隊》を名乗っている？」

「それは知らない」

「あの槍使いと《槍の聖女》との関係は？」

「……………」

「答えられないか？」

「ここで答えたら俺の頭がおかしいって疑われるからな」

「なるほど……………しかし先程彼女たちはリインの敵だと言っていたな
……………」

「つまりいつかりインの前に立ち塞がると考えて良いのか？」

「ああ、それは間違いないよ」

「ラウラの考えをリインは肯定する。」

「ならばリイン。頼みがある」

「頼み？」

「私を鍛えてほしい」

「……………え？」

「予想外の申し出にリインは間の抜けた声をもらす。

「此度のことでは自分が井の中の蛙だったことを痛感した……………」

《神速》を名乗る女性もそうだが、《槍使い》に至っては父上すら凌駕する実力の持ち主……………」

アルゼイド流を傍流と蔑まれたが、悔しいが今の私にはそれを否定する力はない。そうだろうか？」

「……………ああ。ラウラには悪いが今のラウラじや、相手にもならないと思う」

「聞けばリインはクリスと旧校舎で秘密の特訓をしているそうではないか。私もそれに参加させて欲しい」

「ぐいぐいとこれまで余所余所しさが何だったのかと言わんばかりに迫って来るラウラにリインは冷や汗を掻いてたじろぐ。」

「異議ありですラウラさんっ！」

「そんなラウラにクリスが抗議の声を上げる。」

「次こそ単独でボスを攻略して《ブリランテ》を使わせて貰うんです」
《ブリランテ》……………名前からするとクリスが使っている《風の魔剣》と同じようなものだろうか？ リイン、大剣の《魔剣》はないのか？」

「っ——分かりました。ラウラさん、貴方に《ブリランテ》を賭けて決闘を申し込めますっ！」

「お、おいつ!? クリス!？」

「是非もない……実はそなたとも手合わせしたいと思っていたのだ」
宣戦布告をするクリスにラウラは生き活きとした様子で受け止める。

入学してからの約一ヶ月。

鬱屈とした表情ばかりだったラウラが初めて見せた笑みは彼女の姉弟子を彷彿とさせるものだった。

10話 翡翠の公都I

四月二十四日。土曜日。

その日は最初の特別実習の日だったが、リインは旧校舎にいた。「それじゃ俺は明日まで帰ってきませんが、くれぐれもくれぐれも問題を起こさないでくださいね」

「分かっておるわい」

ラッセル博士は邪険にするようにリインの過保護な言葉に応える。

「ティータ……無理だと思うけどラッセル博士やエリカ博士が無茶をしないように頼むよ……最終手段はリンを頼れば良いから」

「はい。任せてくださいっ！」

「リインは安心して特別実習に行くと良い」

両手に拳を作って気合いを入れるティータと彼女の頭の、帽子の上に座っている自分によく似た人形が応える。

《空の至宝》の意志が宿るローゼンベルグ製戦術殻《リン》。

《空の至宝》《輝く環》《オーリオール》と様々な呼び名はあったが、人形としての名前として《環》とは別の《輪》の単語と自分に似た姿から《リン》と名付けた。

本来はノイとルフィナの予備の体であり、二人と同様にリインの《聖痕》の力で仲介されて外で動けるのだが、リンはリインの力に依存して存在を保っているわけではないので今回のようにリインが近くにいないでも単独行動ができてしまう。

人形の方の機能を直接止める停止スイッチや、《聖痕》の力の紐付けはしてあるので、完全に野放しにしているわけではないのだが自由度はノイ達の比ではない。

「良いかリン、ティータの言うことはちゃんと聞くんだぞ……それから自衛するためなら《導力停止現象》を使っても良いけど、連鎖停止は駄目だからな」

「了解しました」

抑揚のない言葉でリンは頷く。

一抹の不安を抱きながら、トロイメライの解析にはリンの協力が不

可欠だということでもリンをティータに任せてリインは旧校舎を後にした。

「時間は……まだ大丈夫だな」

前日までに決めていた集合時間にはまだ十分時間があることを確かめてリインは寮へと戻る。

士官学院から真つ直ぐに駅に続く道を下りて、駅前の通りを曲がろうとしたところで背中を向けた建物から覚えのある気配が出てくる。

「ふあああぁ〜……」

むにや。朝日がまぶしい〜……コーヒーでも買ってこようかしら……」

ラジオ局から出てきた女性は大きな欠伸をして大きく伸びをする。パシヤ、パシヤ。

と、リインの横でカメラのシャッターを切る音が聞こえてくる。

「ルフィナさん……何をしていますか?」

いつの間にか出て来たルフィナが念動でオーバルカメラを浮かせてシャッターを切っている姿に呆れながらリインは尋ねる。

「ふふ……交渉材料を作るのはこういう地道な作業が必要なのよ」

「交渉材料って、そんな微妙な手札を手に入れても……」

ルフィナの言い分にリインは唸る。

女性に対してやってはいけないことだと思っただが、ルフィナにはいまだに口で勝てたことはない。

どう説得しようかと悩んでいると眼鏡と帽子を被った女性が寝ぼけまなこのままリインに振り返る。

「んん……?」

「……………おはようございます。クロチルダさん」

「ええ……………おはよう……リイン君……」

半覚醒状態のままミスティことヴィータ・クロチルダはリインに挨拶を返し、ルフィナとリインを交互に見る。

「それじゃあ私はこれで失礼するわ」

出て来た唐突さと同じようにルフィナは人形の身体ごと《箱庭》に戻り、ヴィータとリインの間に意味深な沈黙が流れる。

「リイン君、ちよつと良いかしら?」
「っ!」

ヴェータは目を金色に輝かせ、誰もが魅了される笑顔でリインに笑いかける。

唐突に掛けられた《金縛り》の魔術。

咄嗟に振り払うがその時にはもうヴェータは目の前に迫っていた。ヴェータはリインのネクタイを掴んで、壁際に引きずり逃がさないように壁に手を付いて顔を寄せる。

「今見たものは忘れなさい。感光クオーツも貴方が破棄させなさい。良いわね?」

「クロチルダさん……お、落ち着いてください」

「良いわね?」

「いや、だから……」

「良いわね?」

「……………はい」

笑顔のまま凄まれリインは頷くことしかできなかった。

・*
・*

リインは肩を落として寮のドアを開く。

玄関の広間にはユースとマキアスがすでにいたが、二人は互いに距離を取って顔を背け合っていた。

「おはよう。二人とも早いんだな」

リインが声を掛けるとマキアスは鋭い眼差しをリインに向ける。

「言っておくが、君の事を仲間だなんて認めたくはない。同じ班になったからといって馴れ馴れしくしないでもらえるか?」

「そうか……悪かったな」

マキアスの拒絶にリインはただ挨拶をしただけなのにと、顔をしかめて嘆息する。

「フツ……副委員長殿はずいぶんと粘着質のようだな」

しかし、リインが受け流した言葉にユースが嫌味を返す。

「なんだと……」

「ふん……」

「おはよう。みんな」

「おはようございます」

一触即発になりかけたところでアリサとエマが階段を下りてくる。

「委員長。アリサ……」

「あ、あはは……みんな揃ったみたいですね。早速、出発しましょうか？」

睨み合うユースとマキアスの様子から状況を察したエマは何事もなかったように一同を促し、リインはそれに便乗する。

「そうだな。まだ列車の時間はあるけど」

「別に構わないぞ」

「僕も異存はない」

ユースとマキアスは最初の時のようにそっぽを向きながらその意見に賛同する。

「はあ……激しく不安だわ」

そんな二人の様子にアリサはため息を吐く。

「……………あら……？」

不意にエマが漂って来た匂いに首を傾げる。

「ラベンダーの香り……」

そして匂いの方向を辿り、エマは顔をしかめる。

「これ香水の匂いよね？ リインって香水なんか使ってたの？」

エマの眩きを聞き取ったアリサが首を傾げる。

「いや……たぶん移り香だと思う。あんなに近くまで迫られたからな」

「……………リイン。貴方旧校舎に顔を出すとか言っていたけど、本当は——」

「待った！ 違うぞアリサ。ちょっと知り合いに会っただけだ。別に何もやましいことはないから」

「私はまだ何も言っていないんだけど……怪しい」「けっ……」

ジト目を向けるアリサの背後でマキアスが汚物を見るような眼差しをラインに向ける。

「ラベンダーの香り……………それに魔術の残滓も……………やっぱり……………」
そんな彼らを他所にエマは深刻な顔で一人頷いていた。

・*
・*

《翡翠の公都バリアート》は東部クロイツエン州の中心都市。
人口三十万人。

周囲に広がる丘陵地帯では毛皮になるミンクが多く生息し、領内にある七耀石の鉱山からは良質な宝石が採掘されることでも知られている。

このため毛皮や宝石を特産品としている。

四大名門のアルバレア公爵家が治めており、街全体が公爵家を中心とした貴族のために構成されている都市でもある。

トリストタから列車で五時間。

穀倉地帯を抜けて到着した列車から降りたB班は駅員達の過剰とも言える歓待を受けることになった。

が、彼らの到着を待っていたルーファスがそれを諫め、そして……

「むう……………」

宿泊場所へと案内するために乗せられたリムジンの中でユーシスは面白くないと言わんばかりに唸る。

「ほう……………中々楽しそうな学院生活を送っているようだね。羨ましい限りだ……………」

私の学院生活は張り合いがなくて、青春らしい青春もなくてつまらないものだったよ」

「そうなんですか？ でも楽しい学院生活って言っても、いろいろなことがあり過ぎて困っているんですよ」

一同への挨拶もそこそこにルーファスはユーシスが見たことのない上機嫌な様子でラインと、それこそ兄弟かと思えるような気安さで学院生活のことを話している。

手紙のやり取りで自分の近況こそ伝えているのだから、仕方がないのかもしれないがとにかくユーシスは面白くない状況だった。

「なんだかユーシスさんのイメージが……」

そんな様子を傍で見せられているエマが苦笑する。

「お兄ちゃんを取られた弟かしら？」

「信じられない。あの傲岸不遜な男が……」

アリサが生温かい目で、マキアスは驚愕の目で彼を見てみると、ユーシスは咳払いをして取り繕う。

「兄上、そろそろ実習について説明していただきたいのですが」

「ふむ、そうだな。ではこれを受け取ってくれたまえ」

リインとの会話を切り上げたルーファスは士官学院の紋章が捺された封筒を差し出した。

「君たちにはその中にある課題をこなしてもらおう。どう行うかは君たちが決めると良い……」

もともと正遊撃士の資格を持っているリイン君には簡単な課題だが、そこは他の者たちと足並みを揃えてくれるかな？」

「ええ。分かっています」

ルーファスの指摘にリインは当然だと頷く。

そう言った忠告はサラや学院長からも言われており、他のメンバーの成長の妨げにならないように一歩引くことを言われている。

「正遊撃士って……え？ リインが!？」

「そんな話初耳だぞ!？」

「資格を取ってすぐに休業届けを出しているから、肩書だけもらったようなものだよ」

そう答えて、革新派の筆頭であるオズボーン宰相が遊撃士協会を帝国から撤廃させたことを思い出す。

マキアスもその考えなら、また要らぬ言い掛かりをつけてくるかと身構えるが、予想に反してマキアスは閉口していた。

リインは何気なく答えたが、まだ学生だと自覚しているⅦ組達は改めてリインとの差を思い知らされる。

準遊撃士ではなく、正遊撃士。

その資格を持っているということはずで一人前だと認められ、相應の仕事を任されるだけの信頼と実績があることに他ならない。

「何もおかしな話ではないよ。遊撃士の資格は十六歳から取ることが出来る……」

帝国では遊撃士の活動はオズボーン宰相によつて縮小され活動は停止してしまっているが、リイン君が資格を取ったのはクロスベルだからね……

それにあの《リベールの異変》で中心となつて活躍した遊撃士も君たちと同じ年だったそうだね？」

「ええ、エステルさんとヨシユアさんは俺より一つ上で、ユーシス達とは同い年です」

ルーファスに振られた話のリインが頷くと、VII組一同は《英雄》と比べられて押し黙る。

「ふふ、君たちが恥じることはないが、思うところがあるのなら精進するのだね……」

この《特別実習》は君たちにとつて良い経験になるだろう……女神の加護を、実習の成功を祈っているよ」

ルーファスはそう言い残して去つて行くのだった。

・*・

「なるほど……やることは遊撃士の仕事と同じようなことか」

ホテルの一室に集まり、渡された書類に目を通してリインはそう結論付けた。

「あ……やっぱりリインもそう思う？」

先に書類に目を通したアリサはリインと同じ意見だったことに安堵する。

「導力灯の交換、領邦軍との戦闘訓練、手配魔獣の退治に他にも雑用がいくつか……」

遊撃士はこんな仕事をしているのか？」

「基本的にはどんな仕事もする感じだな……とは言つてもあまりに身

勝手な依頼は断りもするけど……

「このくらいの仕事量なら、夕方には終わらせられるかな?」

ユーシスの疑問にリインは頷き、大まかな見積もりを呟く。

「いつまでこんなところでおしゃべりをしているつもりだ?」

「実習内容の確認は済んだんだ。さっさと行動に移るべきではないのか?」

棘のある言い方でマキアスは一同を急かすが、流石に単独行動しようとするのではないことにリインは安堵する。

「いや、その前に一つ決めておきたいことがある」

「何だと?」

出鼻を挫かれたマキアスは眦を上げてリインを睨む。

「この班のリーダーを誰にするか? 基本的な指針を決める人を決めておくべきじゃないのか?」

「道理だな。だがそれならお前がやればいいのではないか?」

「さっきもルーファスさんに言われたけど、俺が先導してしまったら《特別実習》の意味が半減してしまうだろう? 俺は委員長を推すけど、どうかな?」

「わ、私ですか!?!」

「理由は?」

「本当なら地元のユーシスが一番良いんだけど、そうするとなリーグニッツが大人しく従うとは思えない」

「なっ! 馬鹿にするな! それが従うに値する命令なら従うのも吝かじゃない」

「そう言っているからダメなんだ。いちいち指示の意図を一から十まで納得しないと動けないような奴なんて言うことを聞かないのと同じだ」

「そうやって人を見下して、これだから貴族は」

「貴族は関係ないだろ……俺がリーダーに立候補しているわけじゃないんだ。それとも委員長長の指示もリーグニッツは聞けないか?」

「ぐ……卑怯者め。どうせそう言っておいてエマ君を誘導して自分の思い通りにするつもりなんだろ!?!」

成り立たない会話にリインは辟易とする。

かと言つてアリサに頼んでも同じ理由で勝手な言い掛かりをつけるだろうし、マキアスにリーダーを頼むのは無謀としか思えない。

どうしたものかと考えているとアリサが手を上げて提案する。

「ねえリイン。一度依頼ごとにリーダーを変えてやってみるのはどうかしら？」

こういう実習は初めてだし、最初からエマだけにリーダーを任せるよりも良いと思うんだけど、それにそうすればマキアスの溜飲も少し下がるんじゃないかしら？」

最後は小声でアリサはリインだけに言う。

「いや、それは……」

「良いんじゃないか？ それぞれの適正を見極めるということではないろいろ試す必要があるのは確かだ」

マキアスの指示を聞くことに抵抗があるのではないかと考えられたユーススがアリサの意見に賛同する。

「私もそれが良いです。突然リーダーをやれと言われても困ります」

「……分かった。みんながそう言うなら俺はそれで構わない。リーグニッツはどうする？」

「フン……僕もそれなら異議はない」

アリサからの提案だったおかげなのか、マキアスはそれ以上渋ることなく了承した。

現金なものだとリインは呆れる。

「何だその目は？」

「何でもない」

相も変わらずに敵愾心をたっぷりと含んだ目で睨まれてリインは肩を竦めた。

・*

『今回の特別実習の内容次第では君には他のクラスに移ってもらうこととなるわ』

『どういうことですかそれは!? 何で僕がつ!?』

『理由は《ARCU S》のテストに非協力的だからよ……』

この一ヶ月、事あるごとにユースとリイン、それにクリスの三人に突っかかって関係改善が認められない……

それどころか諫めようとしたガイウスや間を取り持とうとしているエリオットやエマに対しても言動が日に日に攻撃的になっていく上に、君と彼らの戦術リンクの精度まで落ちている』

『そんなの僕のせいじゃない! 彼らが貴族の権威に擦り寄ることが悪いんだっ!』

『マキアス……誰もそんなことしてないし、リイン達だってこの学院で貴族の権威なんてひけらかしてないわよ……』

君のそれはただの被害妄想よ。君の事情は一応知っているけど――』

『知っているならどうして教官は貴族の肩を持つんですか!?!』

『どこをどう聞いたらそうなるのよ……』

ともかく、これは君のお父さん、常任理事の一人であるカール氏も承認していることなのよ』

『父さんが……っ……』

『マキアス、悪いことは言わないから一度リインと腰を据えて話してみなさい。そうすれば――』

『何で僕の方から折れなくちゃいけないんですか? 頭を下げて許しを乞うのはあいつの方だっ!』

『マキアス……』

『どうして僕だけっ! リイン・シュバルツァーだって誰ともまともにリンクを結べていないのに!』

平等を謳っておきながら、学院も貴族と平民を差別するのか!?!』

『リインに対しての差別じゃなくて区別よ。あの子を基準にしたら他の生徒たちの大半がついて行けないわよ』

『っ……だったら証明してやる』

『は……?』

『僕の方がリイン・シュバルツァーなんかよりも優秀なんだってこの

《特別実習》で証明してやる！ そうすれば良いんでしょ!？」

『マキアス……Ⅶ組の、《特別実習》の目的は《優劣》じゃなくて——』

『失礼しますっ!』

『待ちなさいマキアスッ！ 話はまだ——』

「証明するんだ……」

誰もいない職員室に呼び出された時のサラとの会話を思い出しながらマキアスは昏い眼差しでマキアスはリインとユースの背中を睨む。

「貴族なんて……あいつらもどうせ一皮むいた本性は汚い貴族なんだ……」

マキアスは自分に言い聞かせるように繰り返す。

どんなに善人の顔をしていても二度と騙されるものかと、何度も何度も言い聞かせるのだった。

11話 翡翠の公都Ⅱ

「一先ず、これで課題は達成だな」

導力灯の交換をしたところで集まって来た魔獣たちは蜘蛛の子を散らすように去って行く。

「はあ……緊張した。ごめん、もうちょっと待ってて」

魔獣が去ったことに安堵したアリサはそのまま手を動かして、開いたパネルを元に戻していく。

「大したことのない相手だったな」

マキアスは気分を良くして逃げて行った魔獣たちを嘲笑う様にして振り返る。

「僕は十二体倒した、君たちは？」

聞いてもいなければ、課題とは関係のないことを尋ねてくる。

「四体だが、それがどうした？」

律儀にユーススが答えを返す。

「ふっ……大貴族ともあろう者がその程度か、エマ君にさえ負けているんじゃないか」

ふんぞり返って嘲笑するマキアスにユーススは激昂——などせず
に呆れたため息を吐く。

導力灯の交換。

それに伴って魔獣除けの機能が停止して群がってきた魔獣から作業者のアリサを護衛することが今回の戦闘の発端。

当然この状況は銃火器が得物のマキアスや導力魔法を主体としているエマにとって有利な条件だった。

それにユーススはエマの駆動のフォローをしていたこともあり、撃破率が伸びなかったのは当然である。

そしてただ寄って来る魔獣をひたすらに鴨打ちし、さらにはリインに譲るべきタイミングの魔獣を味方への危険を無視して強引に獲物を奪っていたマキアスの戦いぶりはとても評価できるものではなかった。

さらにはマキアスは魔獣の撃破数だけに気を取られ、一体しか倒さ

なかつたリインに不遜な笑みを向ける始末。

「この阿呆が……」

「落ち着けユーシス。アリサはもう少し待っていてと言ったんだぞ」
導力灯の交換は終わっても、まだアリサの作業そのものは終わっていない。

魔獣除けが機能しているとはいえ、切っ掛けがあればその範囲内にも魔獣が追って来る事例はある。

だから、残心を怠らないようリインは警戒を促すと、ユーシスは怒りを呑み込み周囲の警戒を続ける。

「……………よし。これでおしまい」

操作盤を閉じてアリサが立ち上がる。

その段階でようやくリインは残心を解いた。

「お疲れ様アリサ。手際よくできたみたいだな」

「これくらいはね。ただソケットの緩みが気になっちゃってそれを直していたから少し時間が掛かったけど大丈夫だった？」

「ふ、当然だ。あの程度の魔獣いくら来たって問題ない」

アリサの気遣いにマキアスが応える。

そんなマキアスの態度に突っ込む気にもなれず、ユーシスは憤りを紛らわせるように話題を変える。

「しかし、話には聞いたことはあつたが導力灯の機能が停止するとこれ程までに魔獣が寄って来るものなのだな」

「そうですね……改めて導力灯のありがたさが分かりましたね……」

これのおかげで街に魔獣が入ってこないわけですから」

マキアスの態度をスルーして、ユーシスは剣を納めながら呟くとエマがそれに頷く。

「それにしても意外でしたね……」

魔獣は強者の気配に敏感ですから、てつきりリインさんがいれば例え導力灯の機能が停止しても寄ってこないと思っていたんですけど」
「はは……威圧すれば確かに追い払うことはできるけど、それじゃあ意味がないからな」

「っ……………」

勝ち誇っていたマキアスはリインの言葉に顔を強張らせる。

「……だが、僕がこの中で一番魔獣を倒したのは事実だ。だから——」
「阿呆が、この仕事は魔獣退治などではない。貴様の言っていることは完全な的外れだ」

「なんだとっ!？」

ユーススの指摘に強がったマキアスはすぐに反応する。

「ああ、もう喧嘩しないっ！ 作業は終わったから撤収するわよっ！」
いがみ合いが起きる前にアリサ——リーダーは声を上げて強引に話を打ち切った。

・*

「あ……あのみなさん……」

その店を前にエマは顔を引きつらせた。

「この課題を受けるのやめませんか？」

「何を言ってるのエマ？」

アリサが不思議そうな顔をしてエマの顔を覗き込む。

「変なことを言っているのは分かっています。でも……でも……」

「落ち着いて委員長。気持ちは分かるからみんなに分かるように説明しよう」

「リインさん……」

肩に触れられて宥められ、その言動からリインが同じものを感じていることに安堵する。

「すみません。取り乱してしまって」

「それは良いけど、どうしたの？」

「珍しいな君がそんなことを言うなんて？」

「俺には普通の三級宝飾店にしか見えないんだがな」

「三級宝飾店？」

ユーススの呟きにリインは聞き返す。

「この店の格のことだ。バリアハートは職人の街と呼ばれているが、当然そこには序列が存在している……」

序列の高い店は優先的に質のいい七耀石を仕入れることができ、低い店はそれなりの質のものしか回ってこないというようになっていく」

「なるほど……三級っていうのは高い方なのか？」

「いや、店としての位は決して高くない……」

だがそういう店に腕の良い職人がいないわけではない。それに一級の店は課題にあった半貴石など扱わないだろうな……」

それでこの店にいったい何が不満だと？」

「いえ、不満があるとかではなくてこの店に異様な気配を感じるんです」

「異様な気配？」

エマの主張にユース達三人は改めてその宝飾店を見る。

「委員長の言っていることは本当だ。俺もこの店からかなりの力を感じる。ただ決して悪い力ではないと思うけど」

「リインは……まあ、納得できるけど……」

そういえばエマも《ARCUS》のことでも靈感があるみたいなのを言ってたっけ？」

「え、ええ……ちよつと人よりもあるかなあとは自覚していますけど」「なるほど、もしかすれば曰く付きの宝石があるかもしれないというわけか」

言葉を濁すエマにユースは納得する。

この世界には持ち主に死をもたらす呪いの宝石や、逆に幸福を呼ぶ宝石というのは真実存在している。

「どうする？ 課題は全てをこなさなくても良いと兄上は言っていたが？」

「……いえ。大丈夫です」

突然のことだったから驚いてしまったがリインの言う通り、宝飾店から感じる気配は悪いものではない。

「お手間を取らせました。それでは行きましょう」

エマは気持ちを引き締め、一同を促して宝飾店へと踏み入った。

「これは——」

そして店内に入るとユーシスは陳列されている色取り取りの商品を見て絶句した。

「もしかしてユーシスも分かったの？」

「いや……」

言葉を掛けて来たアリサにユーシスは首を振る。

エマやリインのように霊的なものを感じたわけではない。

「ここは本当に三級の宝飾店か？」

ユーシスが気付いたのは並ぶ商品の質の高さ。

精巧に造られた宝石の輝きは一級の店のそれと遜色ないものに感じた。

「いらつしやいませ……その制服……それにユーシス様も……」

ようこそ、いらつしやいました。実習の依頼の件でご来店のですね？ 申し訳ありません、依頼人が少し席を外しておりまして少々お待ちしてもらって構いませんか？」

「ああ、構わない……だが……」

人当たりの良い笑顔で店主に出迎えられてユーシスは頷く。

「この店は本当に三等級の店か？」

先程の疑問を店主に尋ねる。

「はい。うちは三等級宝飾店で間違いありません」

「それにしても並んでいる商品はどれも一級品に見えるが」

「はは、疑問は御尤もですが当店で扱っている石は全て三級品の七耀石なのは間違いありません」

「三級品でこの値段……一級品はどれだけの値段なんだ」

「言っておくが、値段は三級品のままだ。輝きは一級品と遜色ないがな」

マキアスの眩きにユーシスが補足を入れる。

「ユーシス様にそう言っ頂けて光栄です。うちのマイスターも喜ぶでしょう」

「……なるほど確かに委員長の言った通り、おかしなことになっていくような」

「それはどういうことでしょうか？」

ユーシスの眩きに店主は首を傾げる。

「実はこのお店に入る前から異様な気配を感じたんです」

ユーシスに変わってエマが自分から説明する。

「入って見て分かりました。このお店は一種の神殿のような聖域となつて清廉な空気で満たされています……」

おそらくその空気に当てられて七耀石の質が上がっているんだと思いますが何か心当たりはありませんか?」

「ああ、それは——」

答えようとして口ごもる店主にユーシスは首を傾げる。

「何だ。疚しいことでもあるのか?」

「いえ、そういうわけではなくてですね……」

心当たりはありませんが、あまり吹聴できることでもなくてですね。確かに店の売り上げは良くなって助かったんですが、一級店からそれを譲れと強引に迫られたことがあります」

「それ……と言うことは曰く付きの宝石か何かか?」

「ええ……実はうちのマイスターが去年リベールから流れて来た特大の金耀石の結晶をオークションで仕入れてきたんですよ」

「うん?」

店主の言葉にリインは首を傾げる。

「それが幸運の石ということか?」

「実際はその金耀石だけでこんなことになっているわけじゃないんです……」

むしろマイスターとは分不相応なものを購入してきたことに口論になってしまいましたし、購入した直後はこんなことにはなつてなかったんです……」

ですが今年の初めに同じクラスの紅耀石と銀耀石を購入したり預かることになってから、マイスター曰く店の石が活き活きするようになったと言っていたんです」

「んんん?」

「そして先日、新たに蒼耀石と翠耀石の二つが来てから私でも分かるくらいに顕著になったんです」

「ただの七耀石にそんな力があるのかしら？」

「ユーシス様だから話しますが、ここだけの話その七耀石の結晶は《女神の聖獣》が造ったものだと言われているんです」

「……………」

「《女神の聖獣》……なんだか途端に胡散臭くなったな」

店主の口から出てきた御伽噺の存在にマキアスは顔をしかめる。

「ええ、ですがうちの店が三級店でありながらこれだけの品を揃えられたのはまさに聖獣様の御利益のおかげでしょう……」

結晶石を手に入れてからは経営は順調で右肩上がり。先日もちち込みで一級の紅耀石を加工して欲しいというお客様も来たんですよ」胸を張る店主に対して、Ⅶ組の反応は三つだった。

興味深い話だと感心しているアリサとマキアスとユーシス。

深刻な顔をして何かを考えるエマ。

そして、全力で明後日の方を向いているリイン。

「特大の金耀石か……話だけは聞いた覚えがあるな……」

《リベールの異変》の時期に帝都のオークションに出て来た拳大の金耀石……

最終的には相場の倍の値段で落札されたとか。よくそんなものをこの店の格で落札できたな」

「うちのマイスターは腕は良いんですが頑迷な人で貴族様に……その賄賂とか渡すことを嫌がる人なんですよ……」

そのせいで店は三級止まりですが、その分貯えがあったみたいで完全にマイスターが自腹を切って落札したんです」

「そうだとしても残りの四つの七耀石も合わせたらとんでもない額になるのではないか？」

「そこは知り合いのブルブラン男爵という貴族の方に援助してもらっているそうです」

「げふっ」

Ⅶ組の一番後ろでリインは頭痛を感じて頭を抱える。

「それに残りの琥耀石と黒耀石もそう遠くない内に手に入れてくれるらしいんです……」

それらを使った作品を作るつもりみたいなのですが、まず間違いないくゼムリア大陸一の至宝になるでしょう」

VII組の一番後ろでリインは言葉も出て来ないまま首を横に振る。

「そこまで言うか……だがそれ程の七耀石を五つ、いや四つも持ち込んできた者はいったい何者なんだ？」

「さあ、ブルブラン男爵という方はあくまでも仲介しているだけとか聞いていません。マイスターは知っているらしいんですけど、教えてくれないですよね」

「となるとそのブルブラン男爵とやらの後ろ盾はもしかすればカイエン公かもしれないな」

「そうなんですか？」

ユーシスの想像から漏れた言葉にエマは聞き返す。

「ああ、来年にはセドリツク皇子殿下とアルフィン皇女殿下のお披露目が迫っているから……」

どの貴族も御二人の注目してもらおうための献上品を今から探し回っていると聞いている。かく言う俺の父もその一人だ」

「そ……それは考え過ぎじゃないかな？」

絞り出すようにユーシスの予想をリインは否定する。

「だが聞いた限りではとても値段が付けられるような物ではないだろう。とても家の調度品で収まるものとは思えないが」

「どうでしょうか？ 今の時点でこれだけの聖域を作り出していますから、家に飾れば無病息災などのミラでは買えない価値がありそうですけど」

「まあ、公爵家か。それに近い貴族が関わっているのは間違いないんじゃないかしら？ でないとそれだけのミラは用意できないわよ」

「そもそも《聖獣》から貰った七耀石を加工することは罰当たりじゃないのか？」

「いや、罰なんて当たらないと思うけど……」

口々に勝手な感想を言うユーシス達を他所にリインは遠い目をして眩き、どうにかして話題を逸らそうと思いを回す。

「遅れて申し訳ありません」

と、リインが何かをするよりも早く、店のドアが開いて依頼人が現れるのだった。

・*

彼の依頼の内容は単純でありながら難しいものだった。

彼は結婚指輪を求めてバリアハートに来たのだが、陳列されている七耀石の指輪は一番等級の低いものでも用意して来た資金では手が届かなかった。

それでも諦めきれずに店主に相談した結果、代替案として挙がったのが宝石と比べて価値が劣る《半貴石》を使うことだった。

《樹精の涙》。

北クロイツェン街道の樹木から採取されるらしく、リイン達が依頼人たちに見送られて街道に出たのだが、そこで途方に暮れてしまう。

「えっと……とりあえず右と左に分かれて街道を歩いてみましょう」
今回のリーダーであるエマがそう指示を出して歩いてみるが、それらしいものは見つけられなかった。

「それにしても随分と無茶な依頼だな」

木の周りを歩き、上下に眺めながらユーシスが呟き、リインは頷いた。

「ああ……この広い街道。それに街道の奥の森まで探すことになるなら時間はいくらあっても足りないだろうな。だけど……」

「何だ？ 店の時からそうだったが、何か言いたいことがあるのか？」

「いや……ちよつとな」

言葉を濁すと木の上を見に行っていた戻って来たノイを迎える。

「ダメなの。この木にも見つからないの」

「そうか、じゃあ次か……」

言いながらリインは鬱蒼を生い茂る木々を見てため息を吐く。

「意外だな……正遊撃士ならこの程度の仕事も楽にこなせるんじゃないのか？」

リーダーの顔を立っているつもりなのかもしれないが、策があるな

ら出し惜しみしないで何とかしてくれ」

「珍しく弱気だなユーシス」

「弱気と言うよりも、途方に暮れているという方が正しいだろうな……」

今回ばかりは視野狭窄でやる気になっっているあいつが羨ましく思える」

そう言っただけユーシスはエマ達と一緒に自分たちよりも早く見つけてやると息巻いているマキアスに視線を送る。

「まあ、その気持ちは分かるよ……」

遊撃士もこの手の仕事は多分受けないからな」

「そうなのか？ 遊撃士はどんな依頼でも引き受けるイメージがあるが」

「そんなことはないさ……」

遊撃士の人数だって限られているんだ。こういった依頼主の我儘だけの仕事はどうしても優先順位は低いし、クロスベルのような忙しい場所だと断られるんじゃないかな」

「依頼主の我儘か……そこまで言うことか？」

「これが初めての實習だから、俺達がどれだけのことが出来るかを試すための依頼でもあるだろうけど……そもそも不確定要素が多過ぎる。失敗することを前提にした依頼としか思えないよ」

稀少価値がある《樹精の涙》。

確かに北クロイツェン街道の木々から採取することが出来るかもしれないが、それがタイミング良く存在していると樂觀することはできない。

あるという確信があつたとしても、数日掛けて探すことを覚悟しなければならぬだろう。

「俺はこの依頼を聞いた時は依頼者のベントさんを護衛しながら探して、最終的には彼に諦めさせる仕事かと思つたくらいだから……」

それに仮に見つかったとして品質の保証は？ 《樹精の涙》は琥珀の一種だから中に虫のような不純物がある可能性だってあるだろう」

「……………確かに兄上がこんな不確定要素の強い依頼を用意するとは

「思えないが……」

「これが依頼主が探すのに同行して欲しいというなら彼の本気さを読み取れるけど、俺達にだけ探すのを任せるならそれは結局《樹精の涙》を購入しただけだろう？」

《樹精の涙》は七耀石に引けを取らないって言っても、それはそれ……

本人が探すならミラでは買えない価値や思い入れができるかもしれないけど、それがなければ結婚指輪を安物で済ませたなんて思われなくても仕方がないんじゃないか？」

「……………どうしてそれをこのタイミングで言う？」

ユーシスは頭を抱え、今の会話がエマ達に聞こえていないかを確認する。

マキアスもそうだが、アリサとエマも半貴石の結婚指輪を贈りたいという依頼主に感化されてやる気になっている。

リインの考えはそれに盛大に水を差している。

「ユーシス、俺達はベントさんの恋人がどんな女性なのか知らないんだ……」

半貴石で妥協したなんて思われなくて絶対の保証があるか？」

「まあ一理あるか……」

リインの考えにユーシスは頷く。

七耀石の指輪なら稼ぎという努力を示すことができる。半貴石ならリインが言ったように本人が努力した事実がなければそう言った誤解をされる可能性も決して零ではない。

「単純な依頼かと思えば、こんなにも深い依頼だったのか……流石兄上」

たった一つの依頼に込められた複雑な意図を感じ取ってユーシスはこの依頼を采配したルーファスの思慮深さを改めて感じ入る。

「あつたつ！ 見つけたぞ！ 《樹精の涙》！ これに違いはないっ！」
程なくしてマキアスの歓声が上がリ、《樹精の涙》は無事に発見できた。

・*

《樹精の涙》を手に入れて喜んでいる子供たちを望遠鏡を駆使して監視していた者は通信機に向かって報告する。

「こちらブラボー。Ⅶ組が《樹精の涙》を発見。これよりバリアハートに帰還する。ゴルティ伯爵に連絡しプランAを実行されたし」

・*

結果だけ語るなら、依頼は失敗に終わった。

《樹精の涙》を手に入れて意気揚々に戻って来たマキアス達を出迎えたのは依頼人の笑顔ではなく、彼から《樹精の涙》の権利を買い取ったという貴族だった。

その貴族はあろうことか、漢方薬として《樹精の涙》をリイン達の前で噛み砕き飲み込んだ。

あまりのことにリイン達が呆然としてしまい、いち早く再起動したマキアスが激昂してその貴族を《貴様》呼ばわりして不況を買ってしまったが、今回ばかりはユーススがマキアスを擁護して事なきを得た。

「なんなんだあの男は！ これだから貴族というものは！」

ユーススに睨まれて逃げるようにして去っていた貴族がいなくなり、マキアスは溜め込んだ鬱憤を爆発させた。

「落ち着けレーグニッツ」

「落ち着いていられるか！」

なんであんな貴族に邪魔されなきゃならないんだ！ せっかく僕が見つけた半貴石を……」

わなわなと怒りに震えるマキアスに依頼主のベントが頭を下げる。

「何の説明もなしにあんなものを見せてしまつてすまない。君たちがせっかく手に入れてきてくれたのに……」

「あの……さつき伯爵は正当な契約と言っていました、それは本当なんですか？」

エマの疑問にベントは頷く。

「ああ、もちろん正当は正当だよ。でもね、この帝国で暮らす以上、伯爵クラスの貴族に物申すことなんてとてもじゃないけどできやいな

い……

帝都なんかでは徐々に事情は変わってきているみたいだけど、オズボーン宰相の息が届きにくい地方の州では、これが実情さ」

「やはり、そうですか……」

やり切れないと俯くベントに同調するようにマキアスは言葉を漏らす。

「どう思う？」

「あまりにタイミングが良過ぎると思えるけど、とりあえずこれも因果応報かもしれないな」

ユーシスの問いにリインが答えると、それを聞き咎めてマキアスがリインを睨んだ。

「因果応報とは何だ！ シュバルツアーやはり貴様はあんな貴族の味方をするのか!？」

「リイン……」

「リインさん……」

マキアスに留まらずゴルティ伯爵を擁護するように取れる発言にアリサとエマも非難の眼差しをリインに向ける。

「勘違いしないでくれ、あの貴族が正しいなんて思っていないよ。不快にさせてしまって申し訳ありません」

ユーシスだけに聞かせるつもりだった言葉を追及されリインはベントに向かって謝る。

「いえ、何か僕に至らないところがあつたなら教えていただけないかな？」

話を打ち切ろうとしたリインだったが、ベントはリインの言った言葉に興味を感じて聞き返す。

仕方がなくリインは先程ユーシスに説明した今回の依頼がどれだけ不明瞭で曖昧なものだったのか説明する。

「結果的に見れば、ベントさんも俺達という労働力を雇って《樹精の涙》を見つけてくるのを待っていただけです……」

それはミラで全てを解決したさっきの貴族と大差ないことだと思いませんか？」

「そ、それは……」

「まだ学生である俺達について来ることは不安だったかもしれませんが、こういった探し物の場合は人手は一人でも多い方が良いでしょう。何よりも『俺達が見つけた樹精の涙』と『貴方が見つけた樹精の涙』では価値に雲泥の差があります」

「後からこんなことを言っても詮無いことだが、交渉の場に俺も同席できていたらあのような俗物の専横は跳ね除けることはできたな」

ラインの言い分に、ユーススがそんなことを付け加える。

「不躰なことを言っているとは思いますが、今回のことで貴方は『樹精の涙』を手に入れたとしてそれを胸を張って恋人に贈ることができましたか？

ミラを出すことを渋ったのに、そのミラで労働力を買って手に入れた安い『半貴石』に貴方はどれほどの思い入れを込めることができたんですか？

そこにちゃんと貴方の気持ちがある——本当に『愛』が籠っているんですか？」

「ちよつとライン……言い過ぎよ」

一方的なラインの言い分に黙り込んでしまったベントを見兼ねてアリサが口を挟む。

「いや……彼の言う通りだよ」

しかしベントはラインの主張を受け入れて顔を上げた。

「おかげで目が覚めた気分だよ」

先程までの陰鬱な表情を一変させ、晴れやかになった顔でベントは応える。

「ああ、全くもって君の言う通りだ……」

僕はただ美しい指輪を彼女へ贈ることだけに気を取られて大切なことを見失っていた……

ミラがないことを理由に七耀石の指輪を諦めたというのに、ミラだけで半貴石の指輪を手に入れて満足しようとしていた自分が恥ずかしい……

僕は彼女のために背負うべき苦勞から逃げていたんだね」

「分かってくれましたか……とところで委員長、それにブルック店長」

「は、はいっ!？」

「何でしょうか?」

突然話を振られた二人は驚いて思わず背筋を伸ばす。

「《半貴石の搜索》の依頼はこれで終わりと考えていいんでしょうか?」

「え……ええ、皆さんはやるべき務めを果たしてくれましたので……今回のことは不運だったと私からルーファス様にも報告させてもらいます」

「そうですか。それじゃあ委員長もこの依頼は終わりということでしょうか。いいよな?」

「ええ、そうですね」

ラインが何を言いたいか理解できずにエマは聞かれるがままに頷く。

「それじゃあベントさん。これを――」

ラインはベントに手帳のページを破いたメモを渡す。

「これは?」

「もし貴方が《樹精の涙》を諦めきれないと思ったら、魔が差す前にその番号に連絡してください……」

くれぐれも、二つ目があるんじゃないかと思つて一人で街道に出ないでください」

「っ……お気遣い感謝します」

ラインの言わんとしていることを察して、ベントは頭を下げた。

12話 翡翠の公都Ⅲ

オーロックス峡谷道。

オーロックス砦へと続く街道から外れた獣道に入ってしまったらしくしてリインは不意に一同を呼び止めた。

「みんなちよつといいか。何かおかしい」

「おかしいって何が？」

振り返ったアリサが聞き返す。

「何だか空気がおかしくないか？」

異様なまでに静まり返った山道。

魔獣はもちろん無害な獣まで何かに怯えるように息を潜めているようだった。

いくら討伐指定を受けた大型魔獣が出没している地域でも、おかしいと感じる程に。

「そう言われても……」

アリサは周囲を見回し耳を澄ませてみる。

「ユーシスさん、分かりますか？」

「いや、乗馬で何度かこの辺りに来たことはあるが、特に変わったとは思えないが」

ユーシスもアリサと同じように周囲を見回してエマの問いに答える。

「おい。シュバルツァー何のつもりだ？」

「いや、だから——」

「今のリーダーは僕だ。言い掛かりをつけて邪魔をする気か？」

「そんなつもりはないんだけどな」

ただの注意勧告のつもりだったリインはマキアスの言い掛かりに困った顔をする。

「フン……旧校舎の魔物を倒したからっていい気になるなよ。僕だつてこの日のために導力銃を新しくしたんだ。今ならあの石の化物だつて敵じゃない」

「何を言うかと思えば武器の自慢か……平民は良いな。それで強くなつた気になれるのだから」

「つ……剣術なんて時代遅れの武器に縋っている貴族なんかには理解できないだろうな」

マキアスの武器自慢にユーシスが嫌味を返し、さらにマキアスが言い返す。

二人は睨み合うと示し合わせたようにそっぽを向く。

「やれやれ……」

リインはそんな二人に肩を竦める。

「とりあえず、俺がそう感じただけの話だ。もしかすると手配魔獣が近くにいるか、この地域に棲息している魔獣よりも一段か二段強い魔獣かもしれないから気をつけてくれ」

「それならそうと言えばいいんだ。回りくどい」

むしろ最初からそう言っているつもりだったんだが、と思ったことをリインは言わないでおく。

《バスソルトの調達》の依頼。

貴族からの依頼ということもあり、満場一致でマキアスをそのリーダーから外そうとしたのだが、めんどくさいことにマキアスはそれに猛反発した。

バリアハートで学院のように貴族批判などすれば、その場で領邦軍の巡回兵にしょつ引かれることになる。

マキアスはそれくらいの分別は弁えているなどと主張し、それでもと諫める一同に対して意固地になってその依頼のリーダーとなった。

そして、案の定と言うべきか遊び感覚で依頼内容を話すことを勿体付けた貴族の態度にマキアスは激昂しそうになった。

ユーシスのフォローもあって、不遜な態度を取っていた依頼人は手の平を返して下手に出て、依頼内容を丁寧の説明してくれたのだがその事実が気に入らないのかバリアハートを出てからマキアスは苛立っていた。

マキアスはリインの忠告を意に介さず、我先にと獣道を進んでいく。

「はあ……うまくいかないものだな」

「大丈夫リイン？」

マキアスに遅れて歩き出したリインにアリサが声をかける。

「ああ、もう慣れたよ」

「まったく、何なのかしらねあいつは。いくら貴族嫌いだからってやって良いことの限度も分からないのかしら？」

「最近だとアリサも睨まれているんだったか？」

「ええ……どうやら立ち振る舞いでそっちの関係者だっと思われちゃったみたい。家名を隠しているのもあつて余計にね」

「聞いても良いかな？ どうしてわざわざアリサ・Rなんて名乗っているんだ？」

「大した理由じゃないわ。あたしの実家は貴族からは疎まれて、平民からは特別扱いされてるのが嫌だったのよ……」

リインには悪いけど、隠しておいて良かったと思ってるわ。うちは貴族じゃないけどレーグニッツにどんな言い掛かりをつけられるか分からないもの」

「そこまで言うか？」

「言うわよ。一ヶ月もあんな視線に耐えている貴方達を尊敬するわ」

「何かされそうになったら遠慮なく頼ってくれていいからな」

「え……ええ、その時は当てにさせてもらおう……」

と、ところでリイン……この特別実習が終わって帰った後なんだけど、私も——」

「雑談はそこまでだ。いたぞっ！」

鋭いマキアスの声がアリサの台詞を掻き消した。

「何よレーグニッツッ！ 今——」

「しっ——」

勇気を出した言葉を止められたアリサは声を上げてマキアスに言い返そうとするが、その口をリインが指で塞ぐ。

「っ……!？」

アリサは顔を真っ赤にして狼狽えるが、マキアスの声で戦闘に思考を切り替えたリインは気付かない。

「あれか……」

岩陰に隠れるマキアス達に追い付いて、覗き込み手配魔獣の姿を確認する。

「依頼にあった特徴と一致しているな。大きめの甲殻系魔獣のようだがおかしいところは見当たらないな」

「フン、やはりただの言い掛かりじゃないか」

「マキアスさん。でも道中に魔獣がいなかったのが不自然だったのは確かです……」

それにあの魔獣も十分に手強そうですよ」

「委員長はこう言っているが、どうするつもりだリーダー殿？」

《バスソルト調達》の延長として、ユーススは挑発を含んだ言葉で指示を出せと促す。

「そうだな……ならばシュバルツアーには周辺の警戒を行ってもらおう。それからユースス・アルバレア、《ARCUS》の戦術リンクは僕と繋いでもらう……」

いい加減成功させないといけないからな」

どの口が偉そうに言うんだ、と思いましたが言っている内容は妥当だと判断してユーススは反論を抑える。

「それで文句はないな」

そして攻撃的にマキアスはリインに言い放つ。

「ああ、それで構わない。ただくれぐれも最後まで油断しないでくれ」
見たところ甲殻系の魔獣は胸騒ぎを感じる程の脅威とは思えない。

そういう意味では周囲を警戒してられるポジションは願ったりでもある。

「え……リインは戦わないの?」

「危なくなったら助けるよ」

自分が戦わない。それだけで動揺して弱気になるアリサに苦笑する。

「よし……仕掛けるぞ」

「お前達も準備はいいな?」

「え、ええつ……」

「はいっ……」

ラインに見送られて、VII組B班は手配魔獣との戦闘を始める。

しかし、彼らの戦いを見守っているのはラインだけではなかった。

「悪いけど、あんたたちはお呼びじゃないのよ」

崖の上、下からは死角の位置を取って戦場を見下ろして呟いたのは黒い猫だった。

戦闘はVII組が優勢だった。

アリサとエマが戦術リンクを組み、矢とアーツの波状攻撃で魔獣の動きを制限する。

そこにユースとマキアスが連携を取って、確実にダメージを与えていくのだが……

「《ARCU》 駆動」

「ブレイクショット」

ユースが地点指定のアーツを駆動した次の瞬間、マキアスがショットガンを撃ち込み、魔獣はノックバックしてアーツの効果範囲から逃れる。

「貴様っ!?! ここはアーツを発動させてから効率良くダメージを与えるべきだろう!」

「なにぃ……? そんなことよりこの銃で撃つ方が効率的だ」

マキアスが銃弾を撃つたびに魔獣の甲殻は目に見えて削れているのだからあながち間違いではないのだが、それでもアーツを当てて態勢を崩させてから撃った方がさらに効率上がるだろう。

「ちっ……」

聞く耳を持たないマキアスにユースは舌打ちする。

魔獣は一番大きなダメージを与えてきたマキアスに狙いを定め、突撃する。

「邪魔だ。どくがいい」

迎え撃とうするマキアスをその突撃の進路から突き飛ばし、ユースは突進してきた魔獣を優雅に躲けてすれ違い様に斬りつける。

「何をすっ!?!」

「阿呆が、正面から迎え撃つ奴がいるかっ!」

文句を言ってくるマキアスにユーシスは怒鳴り返す。

「ちっ……」

そんなユーシスの態度にマキアスは舌打ちし、そして張り合う様に前に出ようとした瞬間、戦術リンクが断絶した。

以降の戦闘は泥仕合だった。

ユーシスとマキアスのバラバラな動きにエマとアリサの援護も散漫になり、ユーシスとマキアスの攻撃も互いに邪魔し合う。

決定打になる攻撃を入れることなく、魔獣は体力が尽きたように動きを止める。

そこによくやくマキアスの銃撃が当たって、魔獣は動きを止めた。

「どういうつもりだ……ユーシス・アルバレア……」

どうしてあんなタイミングで戦術リンクが途切れる？」

「こちらの台詞だ。マキアス・レーグニッツ……」

責めるマキアスにユーシスは抑え切れない怒りを言葉に滲ませながら、それでも理性的に言い返す。

「戦術リンクの断絶……明らかに貴様側からだろうが。何故後衛の貴様が前に出る？」

シヨットガンの特性を考えれば近距離の方が良いのかもしれないが、それを差し引いてもマキアスは前に出過ぎだった。

二人は向き直ると、示し合わせたように同時に相手の胸倉を掴む。

「協力すると言いなながら結局腹の底では平民を馬鹿にする。それが貴族の考えなんだろう！」

「っ……だから貴様は阿呆なのだ……」

協力をどちらか一方のことで成り立つと考えているマキアスの思考に辟易する。

「その決め付けと視野の狭さこそが全ての原因だとなぜ気付かないっ！」

「僕が悪いと言うのかっ!! ふざけるなっ！」

「二人ともやめなさいっ！」

「うるさいっ！ 君たちに関係ない！」

仲裁しようとしたアリサとエマにマキアスは怒鳴る。

エマは思わずその剣幕に怯む。が、アリサはむしろ眦を上げて言い返した。

「か、関係ないですって!? この一ヶ月、あなたのせいでクラスの空気がどれだけ悪くなったと思ってるのよっ!」

「それは——こいつやシユバルツァーが——」

「ユーシスとリインがあんたに何をしたって言うのよっ!」

口を開けば貴族が貴族が、あんたに何があったかなんて知らないけどあんたの八つ当たりをぶつけられる謂れは私にもリイン達にもないわよっ!」

「っ——家名を隠しているくせに偉そうに——」

「だから何よ!? 私の事情を何で会ったばかりのあんたみたいな差別主義者に懇切丁寧に教えて上げなくちやいけないのよ!」

それともいちいちあんたに許しがないと私はいちやいけないとも言おうの? 何様のつもり!」

苦し紛れの言葉に反論の言葉はマシンガンの如く返される。

「今回の特別実習だっってそうよ!」

口だけ協力するとか言っておきながら、あんたはリインやユーシスよりも目立とうとしてるだけじゃない!

戦術リンクが結べない理由も、最初から自分には非がないって決めて付けて二人に責任を押し付けてるだけじゃない!

人を馬鹿にしているのはいったいどっちよ!」

「あ、アリサさん……落ち着いて……」

「あんたみたいな陰險な奴に平民代表なんて顔されるなんて私の方が恥ずかしいわよ……」

これならさっきのゴルティ伯爵やヴォルテールの貴族の方がずっとマシよっ!」

「なっ——」

苦勞して見つけた半貴石を勝手に買い取り目の前で漢方として食べたゴルティ伯爵。

特別実習の課題を遊び半分、奉仕させて当然という尊大な態度で上から見下ろしてきたハサン・ヴォルテール。

マキアスが嫌う典型的な貴族を引き合いに出され比べられた挙句、それよりも下だと言いつつアリサの言葉にマキアスは黒い感情を滾らせる。

「訂正しろ……」

「イヤよ。だって全部本当のことだもの」

「ふざけるなっ!」

堂々と言い切るアリサにマキアスが激昂して掴みかかる。

「ふん——」

無遠慮に胸倉を掴みに来たマキアスにアリサは冷淡な眼差しを向け、その手を取ってマキアスを背負い投げで地面に叩きつけた。

「が!?!」

「言い返せなかったらすぐに暴力? 本当はどうしようもないわね」

侮蔑の言葉に見下ろされた目にマキアスは——

「アリサさんっ! 後ろっ!」

「ちっ!」

アリサの背後で、倒したはずの大型魔獣が突然起き上がる。

しかもただ起き上がっただけではない。

赤い魔力を纏わせ、狂化された魔獣はその凶悪な爪をアリサに向けて振り上げ——

「くっ——」

咄嗟にアリサは逃げようとするが、自分の背後に倒れたままのマキアスがいることを思い出して踏み止まり——

「うあああああああっ!」

マキアスが取り乱した悲鳴を上げてショットガンの銃口をアリサの背中に向けた。

「ぼ——」

目の前のマキアスの凶行にユーススは絶句する。

マキアスの目には魔獣の姿は映っていない。

ただ自分を完膚なきまでに言い負かして、貴族以下だと見下したアリサを目の前から排除したい一心でマキアスは黒い感情に突き動かされるまま、引き金を引いた。

同時にショットガンはマキアスの手から高く弾き飛ばされ弾をあらぬ方向へ吐き出す。さらには爪を振り上げた魔獣の頭に深々と太刀が突き刺さった。

「あ——」

気付けばアリサ達の中心にリインが立っていた。

「……………リイン・シュバルツアーツ！」

「破甲拳」

目の前に現れた怨敵とも言える貴族にマキアスが激昂した瞬間、リインの拳が黒いもやを宿した胸に叩き込まれた。

・*
・*

目を覚ますと、マキアスは見知らぬ演習場にいた。

「僕は……………いったい……………」

目覚めは信じられないくらいに爽快な気分だった。

「目が覚めましたか？」

領邦軍の制服を着た男、おそらく貴族が目覚ましたマキアスに声をかける。

いつもは聞いただけで癪に障る言葉に不思議と何も感じなかった。

「手配魔獣との戦闘で気絶したと聞いていますが、気分にお変わりは？」

「え、ええ……………大丈夫です」

領邦軍の兵士の丁寧な言葉にマキアスは戸惑う。

「あの……………みんなは？」

「ユーシス様ならあちらに」

促されて見ると、演習場の中央では領邦軍の兵士とユーシス達が戦っていた。

「あ……………」

ユーシスをリーダーにして立ち回る自分以外のB班達を見てマキアスは言葉を失う。

ユーシスの傲岸不遜な態度で出す指示にリインもエマもアリサも

嫌な顔せずに従っている。

一見すれば偉そうな態度だが、ユーシスの自信に満ちた物腰から発せられる指示には自信が満ちており、乗せられるように気分よく戦えている。

「戦術リンクも使えている……」

問題だったリインとの戦術リンクだが、ユーシスは最初から使えるいものとしてリインとのリンクは十秒以内で切るようにしているようだった。

そうすることで断絶から引き起こされるシステムのフリーズをやり過ぎしている。

それは即席の戦術なのか、それとも予め考えていた方法なのか、曲がりなりにも戦術リンクによる意思疎通は取り繕う様にできている。

「あんな方法があったなんて……」

考えもしなかった方法で戦術リンクを使った戦闘をクリアしたユーシスにマキアスは俯く。

「ひどいな……」

思わずマキアスは言葉を漏らす。

ユーシスは明らかにリインの使い方だけではなく、エマやアリサの得意分野などの下調べをしていたのだと分かる。

それに比べて自分が指示した戦闘はどうだっただろうか。

ユーシスはもちろん、アリサやエマも表面的な武器の特性だけしか考えず、ユーシスのように頻繁にリンクを切り替えて指示を出していなかった。

「なんてひどいんだ」

目の前の戦闘に比べれば自分が率いた戦闘は果たして戦闘だと呼べるのだろうか。

それだけではない。

今まで省みていかなかった自分の行動や言葉を思い出して、マキアスは頭を抱える。

「僕は……こんなにも……汚い人間だったのか……」

リインやユーシスへの支離滅裂な言い掛かりに誹謗中傷。

上流階級の立ち振る舞いが所々感じるアリサへの態度、果てには自分の意志で銃口を向けた事。

主席合格を狙っていたのに自分の上を行かれて首席を奪われたエマへの苛立ち。

友人を擁護しただけのガイウスをなじった言葉。

学力でラウラに勝っていることで感じていた優越感。

ラインの腰巾着なクリスを嘲笑っていたこと。

さんざん忠告してくれたサラをなじったこと。

『君はあれだな。自分の価値観だけが全てで絶対的に正しいと思っ
ている。まるで《貴族》みたいだ』

思い出すラインの言葉。

あの時は受け入れ難い怒りを感じたが、言い繕うことなどできない程にこの一ヶ月の自分の態度は嫌悪していた《貴族》そのものだった。

「あ……終わりました。流星ですねユーシス様は」

模擬戦に見入っていた兵士はマキアスを振り返る。

「あれ……？」

しかし、いつの間にかマキアス・リーグニッツの姿はそこになかった。

・*
・*

「……………何をしているんだろうな僕は……………」

何処をどう歩いて来たのかマキアスは分からなかったが、日が暮れて夜となりようやくバリアハートの街に辿り着くことができた。

「はは……………これじゃ退学は確定だな」

今回の特別実習の評価次第ではⅦ組から平民クラスへの移動が決まっていたが、おそらくはもう確定しているだろう。

それ程までに一日目の自分の態度は悪く、そして極めつけの単独行動。

どんな沙汰を言い渡されても文句は言えないほどの失態だったが、それを取り繕う気力はもうなかった。

「もう……いいか……」

貴族に負けないように勉強に勤しんでいたが、今となってはそこに何の意味があったのだろうかと思う。

マキアスが慕った姉を自殺に追い込んだ貴族達も、守らずに追い詰めたあの男が憎いのは今でも変わらない。

それでも、ユースもリインもラウラもマキアスが憎んだ《貴族》ではない。

そんなことはもうとづくに分かっていたはずなのに、それを認めずに子供のように駄々を捏ね続けていた自分が恥ずかしい。

「もう……疲れたよ。姉さん……」

張り詰めていた糸が切れてしまったかのようにマキアスはどうしようもない虚脱感に頭が回らない。

しかし――

「は……こんな時でも腹は減るか……」

空腹を訴えて鳴った自分のお腹にマキアスは自嘲する。

どうでも良いと、マキアスはそれを無視して宛もなくバリアハートの街を彷徨う。

ホテルに戻る気にはなれなかった。

さんざん迷惑を掛け、さらには単独行動という勝手極まることをしておいてどの面を下げて戻れるというのか。

いつそうこのまま消えてなくなればいいのではないかと、マキアスは自己嫌悪をしながら考える。

「あつ……」

おぼつか無い足取りだったマキアスは石畳の縁に足を取られて転ぶ。

夜になったとはいえ、こんな往来の真ん中で倒れていては通行の邪魔になる。

そう考えてもマキアスの体は思考に反して動いてくれない。

――このまま野垂れ死ぬのが僕にはお似合いか……

空腹や今日一日の疲労、だけではなくこれまで無理をしてきた反動が一気に噴き出したように体が重い。

少なくない人通りの中でマキアスに声を掛ける者は――

「あの……大丈夫ですか？」

呼び掛けてきたのは女性の声。

少しも似ていない別人のものなのに、マキアスはそれがとてもひどく懐かしいものを感じた。

「行き倒れ？ それとも食い倒れですか？」

「……………は？」

女性の――シスターの恰好をした女性の問い掛けにマキアスは意味が分からず首を傾げた。

13話 翡翠の公都Ⅳ

「それにしても意外だな」

夜のバリアハートの街を歩きながら、隣を無然とした様子で歩くユーシスにリインは声を掛ける。

「何のことだ？」

「わざわざ散歩なんて言い訳をしてレーグニッツを探すなんてユーシスが言い出すとは思わなかったよ」

「勘違いするな。俺はせっかく地元に戻って来たから、散歩をしているだけだ」

「そうか……」

リインは追及せずにユーシスの言葉に頷く。

その態度がまるで見透かされているようでユーシスは顔をしかめる。

「どちらにしろお前も探しに行くつもりだったのだろうか？」

あんな男でも今は同じ班員。ましてやバリアハートの市民に迷惑を掛けるのなら許すわけにはいかないからな」

「流石に今のレーグニッツはそこまではしないとと思うけどな」

「……この一ヶ月、散々絡まれてきた男の言葉とは思えないな」

リインのお人好しさにユーシスは呆れるが、何もリインは根拠もなくそう思っているわけではない。

マキアスの中にあつた《鋼の至宝》の《呪い》はあの瞬間リインが取り込んだ。

これまでは歯止めが利いてなかった言動もそれで少しは治まると思っていたのだが、クルトがそうだったようにマキアスは罪悪感に苛まれてしまったのだろう。

まだあれからちゃんと顔を合わせていないユーシス達がそれに気付かないのは無理もない話なのだが。

「まあ、確かに鬱陶しくは感じてたけど、だからって自殺なんてされたくはないからな。ユーシスだってそれは同じじゃないか？」

「否定はしない」

いくらソリが合わないからといって、死んでもらいたいと思うほどではない。

オーロックス峡谷道ではとりあえずマキアスが魔獣に襲われた形跡はなく、バリアハートでの聞き込みから街には戻ってきていることは分かった。

そしてマキアスはシスターに保護されていたということも聞き、リインとユーススは七耀教会に向かっていた。

「ところでリイン……話は変わるがオーロックス砦の侵入者について何を知っている?」

「いきなり何を言っているんだ?」

本来なら演習場から姿を消したところで、各所に見張りがある砦からマキアスが抜け出すことはできないはずだった。

しかし幸か不幸か、マキアスを探しているとオーロックス砦に侵入者を知らせる警報が鳴り響いた。

騒然とする砦で、部外者であるリイン達は一室で待つように指示されてマキアスを探すどころではなくなってしまった。

結局、賊には逃げられてしまったそうだが、その目撃情報には心当たりがあった。

「俺が兵士達から聞き出している時にわずかに動揺していたな。すぐに取り繕ってアリサや委員長は気付いた様子はなかったが」

「……はは、流石はルーファスさんの弟——ってこの言い方は失礼か」
「構わん。それで何を知っている? よもや特別実習を隠れ蓑に賊の手引きをしたんじゃないだろうな?」

「まさか……その子とは顔を知っているくらいだよ」

白い傀儡。姿を消すステルス。そして水色の髪の子供。

もしもそれが銀髪の子供だったとすれば、特別実習をその場で放棄していたかもしれないが。

「何より直接見てないから断言はできないし、領邦軍の中でそれを言うのは憚られるからな」

「訳ありと言っことか……」

この際だから聞いておくが、お前は貴族派なのか? それとも革新

派なのか？ それともやはり皇族派か？」

侵入者のことについて追及せず、ユーシスは踏み込んだことを聞いて来る。

「よく聞かれるけど、どこにも組していないよ……」

シユバルツアー家は貴族社会から距離を取っているし、ユミルは革新派の改革に影響があるような街じゃないから……

オリヴァルト皇子と懇意にしているのは確かだけど、あの人からは自分の思った道を進むと良いって言われているから」

意外なことにオリヴァルトはリインを傘下に入れて、ギリアス・オズボーンの野望を阻止する同士になってくれとは言わなかった。

VII組の参加も帝国の今の在り方を知って欲しいという考えによるもので、その中でリインにしか考えられない答えや道を見つけて欲しいと言われている。

それが例えリインがオズボーン宰相に組したとしてもそれでも構わないとさえ言われているくらいだ。

「どうしてああいう顔をいつもできないんだか……」

「何のことだ？」

思わず漏らした愚痴にユーシスは首を傾げる。

「こつちの話だ……」

ともかく貴族派、革新派だからどちらかにしか協力しないってことはないよ。学院でやっている実験のような常識の範囲内の協力ならどちらのものでも受けるつもりだ」

「常識の範囲内……あれが？」

他国から技師を呼び込み、旧校舎を実験場としてかなりの頻度で爆発が起きているのが常識の範囲だということにユーシスは困惑する。

「えっと……」

そんなユーシスの反応に思い返して、リインは何だか物悲しくなる。

「まあ良い。正直俺はお前が学院に通う必要があるのかと疑問に思っているがな……」

お前にどんな思惑があったとしても傍から見れば、お前はその学生

離れた実力とオリヴァルト皇子のお墨付きで好き勝手に振る舞っているようなものだ……

だからこそリーグニッツは男爵家でしかないお前に突つかかった。そして大なり小なり不満を感じているのはリーグニッツだけではない」

すでに正遊撃士の資格を持ち、一度は皇族親衛隊の推薦を受けたこともある。

名門であるツールズを卒業することで得られる箔という利点はあるがもしれないが、今の時点で各方面から引く手数多なラインに必要かと問われれば首を傾げてしまう。

確かに貴族は体裁を重視しているが、かと言ってラインと言う劇物はもう学院の括りには刺激が強過ぎるように感じる。

何よりも――

「そう言われてもな……」

俺もまだまだ未熟だし、それにノイヤリンにはできるだけ多くの人と接してもらいたいと思っているから学院生活は有意義なだけだな」

「お前のそういう《傲慢》な部分は俺も気に入らん」

「ユース……？」

「過ぎた謙遜は嫌味にしかならん……」

帝国の三強に認められ、兄上からも認められておいてその腰の低さは何だ？

踏ん反り返れとは言わないが相応の態度を取ってもらいたいものだ」

「いや……でも……」

いきなりな指摘にラインは狼狽えるが、ユースはラインの考えを見透かして続ける。

「確かにあの鎧の槍使いは《伝説の聖女》と比べても遜色のない使い手だろう。兄上が一蹴されたというのも納得だ……」

しかし、それはそれだ。

お前は今期の学院生の中で最強なのは間違いない……

そしてお前はもはやただの男爵家の嫡子で納まっていられるような器でもない。ならばお前には持つ者の責任が伴うはずだ」

「ノブレス・オブリージュ——貴族の義務か……」

ユミルでルーファスにも言われた言葉をリインは思い出す。

「そうだ。この特別実習でようやく理解できた……俺がお前の何が気に入らないのか」

足を止めて鋭い眼差しでユーシスはリインと向き直る。

「不躱なことを聞くが、お前はシユバルツァー家を継ぐ気はないな？」

「……………」

ユーシスのいきなりな問いにリインは沈黙を返す。

「やはりな」

それを肯定と受け取ってユーシスはリインを睨む。

「どうしてそう思う？」

「お前の日頃からの態度だ。兄上の薫陶を受けていたにも関わらず、お前はあまりにも『貴族らしく』ない……」

そんなお前の立ち振る舞いが、俺にはどうも認めることができない」

「……………参ったな……まさかそんな風に見抜かれるとは思わなかったな」

ユーシスの慧眼にリインは脱帽する。

「だけど当然のことだろう？」

そもそも俺は養子で血の繋がりはないんだから。エリゼが——義妹が婿を取って男爵家を継ぐのが筋のはずだ」

「帝国法でも養子の家督相続は認められているが？」

「それは引き取られた子供がしかるべき血筋だった場合だ……」

十二年前、ユミル領主である父さんが拾った吹雪に埋もれていた
《浮浪児》……

自分の名前以外は覚えておらず、どういった出自かも分からない。そんな子供を養子として迎えたばかりに社交界のゴシップの的になった」

「だが、今はその時とは状況は変わっているはずだ……」

お前はオリヴァルト皇子の信認を得た。そのお前を得体の知らない浮浪児だと陰口を叩く貴族はもういないはずだ」

「それはただ声を潜めているだけだ。本当の意味で俺を受け入れている貴族は果たしてどれだけいるか……」

皇族の他には、ヴァンダール家、アルゼイド家、ルグイン家などの縁が出来ているが他の州の貴族ばかり。

ノルディア州を治めるログナー侯爵家ともアンゼリカ繋がりでの縁はあるが、彼女は実家と折り合いが悪いらしく好意的とは限らない。

そしてマキアスの言った通り権力に取り入るのがうまいだけだと思っっている貴族も多いだろう。

「それに俺はリベールに家出してもっと大きな迷惑を掛けてしまったんだ……」

そして将来、俺は大きな戦いの中心に身を置くことになる。それこそ生きるか死ぬかも分からない大きな戦いだ……

「そんないつ死ぬかも分からない人間が男爵家を継いで良いはずがないだろう?」

「……………」

「もちろん死ぬつもりで戦いに望むつもりはない。だけど絶対に死なないなんて高を括って臨める戦いじゃないんだ」

ラインの極まっている覚悟にユーススは押し黙る。
ラインの言い分はユーススにはよく分かる。

兄の予備とはいえ、将来アルバレア家を支える人間としてユーススは勝手に死ぬことは許されない。

「やはり俺はお前を認めることはできそうにない」

たったの数歩。手を伸ばせば届く距離にいらぬというのにラインのことが遠くに感じずにはいられなかった。

決してユーススが超えられない線の先にいるラインにユーススはそれ以上何かを言うことはできなかった。

「それで良いんだ。無理に俺に付き合う必要はないんだから」

悔しそうに顔を歪めるユーススにラインは笑いかける。

「リイン・シュバルツァー……お前は——」

ユーシスがそれでも何かを言い返そうと口を開きかけたところで、リインの《ARCUUS》が着信音を鳴らした。

「もしもし?」

マキアスから直接の連絡か、それともアリサ達からの連絡か。

リインはユーシスとの会話を中断して通信に出る。

「ベントさん? はい……はい……いえ、大丈夫です。それでは北門の前で落ち合いましょう」

「リイン……今のはもしかして昼間の?」

「ああ、これから半貴石をもう一度探すために街道に出てくる」

「こんな夜中にだど? 明日まで待てば良いだろ?」

「それで大人しくちゃんと待っていてくれたらいいんだけど……」

その人にもよるけど、焦りや軽い気持ちで少しくらいなら大丈夫だって高を括って危ないことをする人もいる。それにただでさえ帝国は《魔が差す》ことが多い国だから……

悪いけど、レーグニッツを迎えに行くのはユーシスが一人で行ってもらえるか?」

「フン……何故俺がそんなことをしなければならん」

「え……?」

「俺はただ散歩をするため外出すると言ったはずだ……」

あいつが騒ぎを起こしていないのならどうなろうと知ったことではない。どうせ迎えに行ったところでまた難癖をつけてくるに違いないのだからな」

「それは——」

ない、と続く言葉をリインは呑み込む。

確かにマキアスから《呪い》を取り除いたが、そもそもの貴族嫌いは彼元来のもの。

クルトのように自己嫌悪から反省できるかどうかを判断できるほどリインはマキアスの事を知らない。

そう考えると、一晩くらい教会に預かってもらうのは名案だと思えてしまう。

「それじゃあユーシスは先にホテルに戻ってアリサ達にリーグニッツやベントさんの事を伝えてくれるか？ とりあえず朝までには帰るようにするから」

「いや、俺も同行しよう。課題のアフターケアなら俺も無関係ではないから……」

女子たちには先に眠っているように《ARCUUS》で伝えておけばいいだろう」

「いや、アフターケアは俺が勝手に引き受けただけだからユーシスが気にする必要はないんだけど……」

それに夜の街道は昼間と比べて危ないし、明日に響かせるのは良くないだろう？」

「それはお前にも言えたことだ。とにかく俺も行く。拒否は認めない」

一方的に言っただけでユーシスは北門に向けて歩き出す。

その胸にあるのはリインへの対抗心。

まるで自分のことを戦力として当てにしていなくて、一般人と同じように危険から遠ざけようとしている様は屈辱だった。

そして同時にここで尻込みをしてはいけないと聡明なユーシスは自分に言い聞かせる。

リインが語った《大きな戦い》。

その予兆はいくつも思い当たるものがある。

オズボーン宰相が口にするようになった《激動の時代》。

オリヴァルト皇子の主導で行われている旧校舎で行われている実験。

リインは巻き込まないつもりかもしれないが、どんな形になるか分からなくてもアルバレア家の次男である自分も何らかの形で関わる可能性は高いだろう。

その時に、ただ守られるだけの存在にならないためにもユーシスは自分が知らない場所へと踏み出すのだった。

・*

「それじゃあ結局、半貴石を見つけれなかったんですね」

ホテルの朝食の席で、夜の行動を改めて説明されてエマはその報告に喜ぶ。

「ああ……街道から離れた樹木、それも調べられた数は多くはなかったし、何よりも夜だからな」

日が落ちてから、日付が変わるくらいの時間を探し回ったが、望んだ半貴石は終ぞ見つけることはできなかった。

元々稀少価値のあるもので、昼間に一つでも見つけられたことの方が運が良かったのだから当然の結果だった。

「ベントさんには俺がたまたま見つけた綺麗な石を代わりに上げたんだけど、それで納得してもらったよ」

「代わりの石ですか……それはリインさんが疲れている様子なのか何か関係があるんですか？」

「どうしてそうなるんだ？」

内心で鋭いと思いつながらリインはエマの質問に惚ける。

実際は見つけたのではなく、聖獣がやったようにリインが見様見真似で作ってみた七耀石の結晶だったりする。

そしてエマの指摘通り、小指の先程の小さな結晶を作り出すだけでもかなりの消耗だった。

一眠りしたはずなのに倦怠感が抜けきらない程に疲労が尾を引いている。

リインが小石程度を作るので疲れ果てているのに、簡単に拳大の石を作り出す聖獣の凄さを改めて思い知らされた気分だった。

「へえ、そんな石があったの？」

アリサがリインの言う石に興味を示す。

「川の谷の壁面あたりで……もしかしたら山の方から何らかの理由で流れてきたものだったのかもしれない……」

黒のように濃い赤の石で価値は鑑定して貰わないと分からないけどね」

明言は避けるようにして、あくまでも推測を並べる。

「ちよつと見てみたかったかも……」

でも、二人ともそういうことなら私たちも呼んでくれればいいのに」

「そうは言ってもリーグニッツが戻って来た場合に誰もいないのはまずいだろ？」

それにどれくらい時間が掛かるか分からなかったから、女の子を巻き込むのはな」

「そう言われたら文句を言えないじゃない」

非難するようなジト目でアリサはリインを睨む。

「アリサさん、そんなに責めたら……ユースさんは大丈夫ですか？」

アリサを宥めながら、エマはいつもより覇気のないユースに声を掛ける。

「……ああ……問題ない……」

返事はどこかぼんやりしたものだっただけ。

日付が変わる前に戻って来れたと言ってもそこからその日のレポートをまとめたりして、結局眠れたのは二時間程度。

完全な徹夜ではないが、規則正しい生活をしてきたユースにとっては寝不足なのかもしれない。

「ユース、無理そうなら午前中だけでも休んでいたらどうだ？」

「いらん気遣いは無用だ」

まったく眠気を感じさせないリインにユースは理不尽なものを感じながらも、その提案を拒否する。

「これも経験だ。あまりに目に余るならそうするが」

「いや……そういう意味なら俺は構わない。自分の限界を知っておくのは悪いことじゃないから……ユースのフォローは俺がするよ」

「……感謝する」

複雑なものを感じながらもユースは素直に頭を下げる。

「それにしても結局リーグニッツは戻ってこなかったんだな」

リインは四人で囲むテーブルを見回す。

深夜にホテルに戻って来たリイン達だったが、部屋にはマキアスが戻って来た形跡はなかった。

「とりあえず今日の実習課題を受け取ったらまずは教会に行こうと思うんだけど」

「そうですね。レーグニッツさんも少しは落ち着いているでしょうし」

「好きにしる。今日は一日お前がリーダーだ。プロのお手並みとやらじっくり拝見させてもらうさ」

「私もそれで良いと思うわ——って、その必要はないみたいね」

ラインの提案に一同は頷き、入り口の方を向いて座っていたアリサがそれを否定した。

彼女の視線に一同が振り返ると、そこにはマキアスがいた。

マキアスは食堂の中でライン達の姿を見つけると、真っ直ぐに歩いて来る。

「レーグ——」

席を立とうとしたラインをユーススが手で制して、マキアスに向き直る。

「随分な重役出勤だな。今更どの面を下げて俺達の前に現れた？」

開口一番、容赦のない言葉をユーススはマキアスにぶつける。

棘が多分に含まれた言葉だったが、それを咎める者はいない。

アリサもエマも息苦しい学院生活を彼に強いられ、昨日も日が暮れるまで探し回った身としては文句の一つや二つは言いたいくらいだった。

もっとも目の前の男は注意に対して逆ギレして言い掛かりをつけてくることを知っているだけに二人は警戒を高めて身構える。

「勝手な行動をして、すまなかった」

しかし、踏ん返り返って開き直るかと思いきやマキアスは殊勝に頭を下げた。

「……………どうやら行かなくてはならないのは教会ではなく医者のような」

「そうね。すぐに手配しましょう」

「レーグニッツさん、気確かに。大丈夫です。すぐに元の嫌味なレーグニッツさんに治りますから」

「三人共、落ち着こうな」

リインは苦笑いを浮かべながら動揺した三人を宥める。

とはいえマキアスの変貌はリインにとっても意外だった。

《呪い》が祓われた直後のクルトと同様に少しは落ち込んでいるかと思っていたが、落ち着いた様子の子のマキアスに安堵する。

「いや、そう言われても仕方がないことを僕は今までしてきたのは事実だ」

「そ……そうだな」

マキアスが自分の非を認めたことにリインは思わず自分の耳を疑う。

「これまでの僕は確かにアルバレアの言う通り、視野狭窄が過ぎた……」

僕は自分の身に降り掛かった不幸に《敵》を求めずにはいられなかった。だがそれは八つ当たりして良い理由にならない……今まで、本当にすまなかった」

頭を下げたまま謝るマキアスに一同はひたすらに困惑する。

貴族と顔を合わせれば嫌な顔をし、家名を隠しているアリサにもその矛先を向け、果てには主席合格を取られたからとエマにも対しても勝手な対抗意識を持って張り合うのがリイン達が知っているマキアスだ。

そんなマキアスが上辺だけの謝罪ではない、本心からの謝罪をした事実は衝撃的だった。

「い……いったい何があつたのよ？」

「ふ……僕は女神に会ったのさ」

アリサがもらった眩きにマキアスは顔を上げて答える。

「いや七耀教会のシスターを女神と呼ぶのは失礼になるのかな？　ともかく僕はあのシスターに救われた」

「シ……シスターですか……」

どこか陶酔した様子の子のマキアスに引いた気持ちでエマが相槌を打つと、マキアスは語り出す。

「素晴らしい女性だった……」

絶望に打ちひしがれて倒れた僕に優しく手を差し伸べてくれて最初に僕にこう教えてくれた。《食は全ての基本》だと」

「ん……？」

「七耀教会のシスターの言葉なんですよね？」

思っていた言葉じゃないとラインとエマは首を傾げる。

しかし、マキアスはそんな困惑に気付かず続ける。

「食事はただ食べるだけじゃダメだったんだ。空腹を満たすと同時に心を満たさなければいけなかった。僕はそれをこの六年間ずっと忘れていた」

「すまん……俺には貴様が何を言っているのか理解できん」

「もしかしてラインに殴られておかしくなっただんじや」

慄くユースとアリサにやはりマキアスは目もくれずに拳を握って力説する。

「素晴らしい女性だった。三人前の食事を食べる健啖さ。健全な精神は健康な肉体に宿り、健康な肉体を作るには良質な食事が必要……」

まさに《食は全ての基本》を体現する人だった」

「シスター……三人前……あれ……？」

「食事を御馳走してくれた彼女はそのまま一晩中僕の告解に付き合ってくれた。あの人は僕を否定しない人だった」

「一晩中……レীগニツツさんに付き合ってくれたんですか、すごいシスターですね」

「ああ、全くだ……最初は転んでしまった僕に、行き倒れか食い倒れか、と尋ねてきた変な女性だとも思ってしまったがその時の自分を殴りたいくらいだ」

「行き倒れ……それに食い倒れ……」

「ともかく僕は彼女に出会えてようやく僕自身を許すことができた……もつとももう手遅れではあるがね」

マキアスは自嘲するように表情を曇らせる。

「手遅れってどういうこと？」

「僕はこの特別実習の結果次第でⅦ組から他のクラスに強制移動されるとサラ教官に言われていたんだ……」

昨日の実習の取り組み方、果てには勝手な単独行動。言い訳のしようがない程に僕個人の評価は最低だろう」

気落ちしたマキアスはそれでも顔を上げて、改めてリイン達に頭を下げる。

「だが、このまま汚点ばかりで終われない……」

今更惜しむ恥じはないが、それでも恥を忍んで頼む。

今日の特別実習に参加させて欲しい。虫の良いことを言っているのは分かっている。だがせめて最後までくらはいは胸を張って終わりにしたいんだ」

「レীগニッツ……」

その真つ直ぐな言葉にリインは《呪い》の影響がなくなりようやく素のマキアスが見る事ができて安堵する。

「俺は別に構わないけど、みんなは——」

「食事中に失礼するよ」

リインが他の三人に答えを聞こうとしたところで、邪魔が入った。声と共に食堂に入って来たのは兵士を伴い物々しい空気を纏ったルーファスだった。

「あ、兄上……おはようございます」

「ああ、おはようユース」

「実習の課題の件でしょうか？ 申し訳ありません。すぐに——」

「いや、まだ約束の時間には早いから気にしないでいい。それより——」

ルーファスは鋭い眼差しをリインに向ける。

「リイン・シユバルツァー。君をアルバレア公爵家邸宅侵入の容疑で逮捕する」

「……………え？」

突然言われた身に覚えのない容疑にリインは理解が遅れる。

「ルーファス様っ！ ありました。リイン・シユバルツァーが使っていたベッドの下に盗まれた兄弟剣の一つを発見しましたっ！」

まるで示し合わせたかのように兵士の一人が食堂に駆け込むなり、声高々に報告する。

「まさか本当にあるとは……リイン・シユバルツァー。詳しい話は領邦軍の詰め所で聞かせてもらおうとしよう」

そうしてユース達に口を挟む間もリインに反論する間も与えず、ルーファスは兵士たちに矢継ぎ早に指示を出してリインを拘束させると連れ出した。

「あ、兄上待ってください。今のは——」

「おそらくリイン・シユバルツァーのことを妬む誰かの犯行だろう……」

しかし、実際に盗まれた兄弟剣の片割れが出て来てしまったのなら事情聴取をしないわけにはいかないのだよ」

リインの潔白を訴えようとしたユースだが、ルーファスは分かっていると言わんばかりに答える。

「ともかく君たちはリイン君を抜きに特別実習に励んでくれたまえ、なに君たちが帰る頃にはリイン君の潔白を証明しておくから安心するといい」

そうしてルーファスは優しげな笑みを浮かべて今日の課題の書類が収められた封筒をユースに渡して去って行った。

「ど……どうなってるのよ……？」

マキアスの帰還から始まった怒涛の展開について行けず、アリサが呟く。

「分からん。だがリインは昨日俺達と行動を共にしていた。リーグニツツならともかく兄上が指揮をしているのなら、それこそ冤罪はすぐに晴れるだろう」

ユースも状況が理解し切れずに唸る。

「ちよつと待て、僕ならともかくとは何だっ!？」

「言葉の通りの意味だ。この中でお前だけが単独行動を行った。俺ならばリインよりもお前の方をまず疑うというだけだ」

「っ……だからと言って僕はやってないぞー!」

「そんなことは分かっている。リインならともかく貴様如きが俺の家に侵入して五体満足で戻って来れるとは思わないからな」

「ぐぬぬ……」

「えつと……レーグニッツさん。これまでの非は認めたんですよね」
今にも嘔みつきそうなマキアスにエマは恐る恐る声を掛ける。

「非は認める。態度も改めるように努めるつもりだ……」

だが、それは別にユース・アルバレアやリイン・シユバルツァーの
ことを認めたわけじゃない」

「ほう……」

「僕は尊大で傲慢な君の態度ははつきり言っ嫌いだ。その在り方は
僕が憎む貴族をまさしく体現しているからな」

「別に貴様に好かれたいとは思わんがな」

「ああ、僕も君のような人間に好かれたいとは思っていない。ただそ
れだけのことだ」

そう言っユースとマキアスは睨み合い火花を散らせる。

「だ、大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫じゃない？」

戦々恐々とするエマに対してアリサは肩の力を抜いて答える。

「人間どうしたっ合う合わないはあるものよ。その仲をどう折り合
いを付けるかが問題なだけよ」

これまでのマキアスの言動はとにかく貴族だからユースとリイ
ンを嫌っていた。

だが、彼の言葉を信じるなら貴族だからではなくユースの態度に
対しての言葉だった。

それならばもう後は当人達の問題だろう。

「言っおくが、僕に非が多かったのは認めるが君たちにだっ非が
全くないわけではないからな……」

例えばアリサ・R。家名を隠しておきたいと思うのは勝手だが、そ
んなものは問題の先延ばしに過ぎない……

半端な立ち振る舞いは無駄な諍いを招くだけだ」

「つ……余計なお世話よ」

反論しながらも凶星を突かれたようにアリサはそっぽを向く。

「それにエマ君……君も何か人には言えないことを隠しているのでは
ないか？」

「……え？」

「君は時々、僕やシュバルツァーのことを値踏みしているような目で
見ているだろ？」

「それは……」

マキアスの指摘にエマは思わず口ごもる。

「君たちが無意味に嘘をつく人間ではないことは分かっているが、そ
の行為そのものが人を不快にさせるのだ……」

卑しい人間だと思われたくないのなら控えることだ。その点あの
シスターは——」

確かにマキアスの言い分には一理ある。

これまで感情で物を語っていた人間とは思えない程に理知的で話
しやすいのだが——

「これはこれで鬱陶しいな」

「レーグニッツのくせに生意気」

「あ、あはは……まあ、以前よりかはマシだと思えますよ？」

聞いてもいないのに語り始めるマキアスに向けた三人の目は白
かった。

14話 翡翠の公都V

「やあ、よく来たねユーシス、VII組諸君」

与えられた課題をこなし報告を兼ねて領邦軍の詰め所に来たユーシス達は軍の詰め所でありながら豪華な装飾品が飾られた応接室にてルーファスに迎えられた。

「挨拶よりも兄上、リインのことですが——」

「まあ、落ち着きたまえ」

課題の報告をするよりも先にユーシスが切り出すが、ルーファスはそれを宥める。

ルーファスは紅茶を一同に振る舞い、一息つかせて状況の説明を行う。

「さて、どこから話そうかね」

そうして語り出した内容は至って単純だった。

昨夜未明にアルバレア公爵邸に何者かが侵入した。

賊を捕まえることはできなかったものの、警備隊の働きで賊を追い返すことはできた。

しかし、被害の確認をしたところで宝物庫が荒らされていることが分かった。

無くなっていたのはアルバレア家に伝わる兄弟剣の二振り。

幸いなことに当主であるヘルムート・アルバレアはその前日の夜から帝都へと向かい留守にしていたため、彼が知るところではない。

公爵邸警備隊、ひいては領邦軍はヘルムート・アルバレアが帰って来るまでに何としても盗まれた兄弟剣を取り戻さなければならぬのだ。

「それでどうしてリインが容疑者と疑われることに」

「警備隊の誰かが言ったのだよ。賊は黒髪の赤い服、そして太刀を持つ少年だったと」

「それは……あまりにも杜撰ではないでしょうか？」

仮に犯人がリインだったとしても、赤い服つまりはVII組の制服で公

爵邸に侵入したことになる。

そんな自分の身元を大々的に晒す泥棒が果たしているだろうか。

「私も同意見だよ……」

そう思つてその証言をした者から直接話を聞こうかと思つたのだが、実際に特定の誰か——リイン君を見たと言明した者はいなかったのだよ……

みんないつの間にか賊はリイン君だつたと思ひ込んでいた……

不自然ではあるが手掛かりがないということもあり、リイン君を調べてみたら盗まれた剣が本当に見つかつてしまつたということさ」

「明らかにリインを貶めるための策略だと思えないのですが」

「そうだろうね……」

しかし実際に盗まれた剣の一つが見つかった以上、彼を最有力の容疑者として扱わなければならないのだよ」

「……兄上は誰が犯人だと思われませんか？」

「さて、候補が多過ぎて何とも言えないね……リイン君の存在を疎む者は貴族、平民問わず多いからね」

「平民も……ですか？」

「思わずマキアスは聞き返す。

「おや？ 誰よりもリイン君を疎んでいた君がそれを言うかな？」

「それは……」

「それに警備隊や領邦軍の中にはアルゼイド流やヴァンダール流の剣を習つた者もいる。御前試合で両当主に恥をかかせたと息巻いている者も少なくはないのだよ……」

そしてその容疑者の中にはオズボーン宰相もいると私は考えているよ」

「オズボーン宰相が？」

意外な名前が出て来たことにユーシス達は驚く。

そんな彼らの前にルーファスは一枚の写真を差し出した。

「それは先日、オーロックス砦に侵入したとされる者の写真だ」

青い空に小さな点のように写っている何か。

目を凝らして見てみると、白い戦術殻とその腕に座っている水色の

髪の人影が見える。

「彼女は《帝国軍情報局》に所属しているエージェント。コードネーム《白兔》と呼ばれる《鉄血の子供たち》の一人だよ」

「《鉄血の子供たち》が何故オーロックス砦に？」

「さて、彼らの思惑は私には計りかねる……」

そして残念なこととその写真では証拠としても不十分で彼らを問い詰めることもできない。が、今はそれはひとまず置いておくとしよう……

ともかくオーロックス砦に侵入した彼女ならアルバレア公爵邸、そして君たちが泊まるホテルに侵入することも可能だろう。何と云っても彼女は姿を消すオーブメントを使うそうだからね」

「確かにそうかもしれませんが……」

ルーファスの言葉にユーシス達は納得する。が、それにマキアスが異を唱えた。

「待ってください。仮にオーロックス砦に侵入者が《鉄血の子供》だったとして何故オズボーン宰相がシユバルツァーを貶めるようなことをするんですか？」

「理由はいくつも考えられる……」

例えばリイン君とその後ろ盾になっている皇族家に貴族派への不信任を促し、リイン君を革新派に取り込む前準備の可能性も考えられる」

「そんな馬鹿な！ オズボーン宰相がそんなことを——」

「彼はそういう人間だよ……」

如何なる卑劣な手段も辞さない恐ろしい《怪物》。そしてこういったマツチポンプは彼の得意な政策の一つだ」

「それは彼のことを疎む反政府主義者が言う根も葉もない誹謗中傷です」

「君はリイン君のこともそうだが、帝国時報が報じる内容を鵜呑みにし過ぎているようだね……」

記憶に新しいところではジュライの併合。それに二年前の《リベールの異変》でも彼は似たような方法を取っている。もちろんこれは帝

国時報には記載されていない内容だが疑うなら後でリイン君に話を聞いてみると良い……

もつとも君にリイン君の話をちゃんと聞く意思があるとは思えないけどね」

「っ……」

痛烈な皮肉の言葉にマキアスは押し黙る。

そんな彼の姿を意外そうに目を丸くしながらルーファスは続ける。

「はつきり言ってしまうえば、ここでリイン君を逮捕するメリットはほとんどないに等しい……」

このまま真犯人を取り逃がせばアルバレア家の面子を穢すことになる。それでいてリイン君を裁けば皇家の不評を買うことになる……

どちらに転んだとしてもアルバレア家は損をして、鉄血宰相にとっては都合の良い展開になるだろう」

そう言っつてルーファスはため息を吐く。

「申し訳ないが、午後の実習は中止とさせてもらおう。そして君たちはこの後トールズに帰るといい」

「ですがそれではリインは？」

「現在領邦軍の総力を持って真犯人の搜索を行っている……」

少なくとも真犯人を確認するか、盗まれた兄弟剣のもう一振りを見つけるまでは釈放することはできないだろう……

だが安心したまえ弟よ。彼については私が何とかしてみせる」

安心させるような微笑みを浮かべるルーファス。

その微笑みには確かにこの人に任せておけば安心だという感情を思わせるものがあつた。

しかし、それを振り払いユーススは問いかける。

「俺達にできることはないのですか？」

「ない。むしろここにユーススが留まれば父上の怒りの矛先はお前にも向くことになるだろう。それともこの兄の事を信じられないか？」

「いえ……そういうわけではありません」

尻すぼみにユーススは顔色を窺ってくるルーファスの言葉を否定

する。

結局、ユーシス達は何も言うことはできずにルーファスの提案を呑むことしかできなかつた。

・*

「これでいいのかしら？」

領邦軍の詰め所から手荷物を取りにホテルへと歩く道中で一言も口を開かない一同の中でアリサがようやく口を開く。

「良いも悪いも、実際に俺達にできることはない」

無然とした表情でアリサの呟きにユーシスが答える。

「領邦軍が総力を上げて捜索している。それに比べて俺達はたった四人。いったい何ができる？」

真犯人の手掛かりもない。俺達がいたところで兄上の邪魔にしかならないんだ」

そう言うユーシスの声音には悔しさが滲み出ていた。

「確かにそうだけど……」

アリサは思わず口ごもる。

ルーファスは捜査網を広げる領邦軍からもたらされる情報をまとめ指揮している。

そんな多忙を極める中で、わざわざ状況の説明をしてくれたが本来はその時間さえも惜しかっただろう。

だからこれ以上、余計な負担を掛けないためにも特別実習の中断はやむを得ないことなのだ。

それに関してはアリサも異を唱えるつもりはない。

「だけどリインは無実の罪で捕まっているのよ！

どこの誰がリインを嵌めようとしているか知らないけど、このまま黙ってそいつの思惑通りにさせて良いの!？」

「アリサさん……」

「だが僕達にできることは本当に何も無いのは確かだ……」

この広いバリアハートで何の手掛かりもなく一人の人間を探すな

なんて不可能だ。それとも君には何か当てはあるのか？」

「それは……ないけど……」

マキアスの指摘にアリサは項垂れる。

結局どれだけ不平不満を上げても自分たちには犯人を探し出す術はないのだと思い知らされる。

「だったらいつそリインを私たちで奪還するっていうのはどう？」

「おいおいいきなり何を言い出すんだ？」

物騒なことを言い出したアリサにマキアスは狼狽えて周囲に領邦軍の兵士がいないことを確かめる。

「だって元々は冤罪なんだからリインを奪還して、そのままトリスタまで帰っちゃえば後はユーシスのお兄さんが上手くまとめられるんじゃない？」

ルーファス頼りの杜撰な計画にユーシスはため息を吐く。

「これが完全な言い掛かりでの冤罪ならそれで良いかもしれない。だが証拠の品が出て来ている以上、そんなことをすれば疚しいことがあると認めているようなものだ……」

そうなってしまうばいくら兄上でも底い切れん」

「そっか……」

ユーシスのダメ出しにアリサは肩を落とす。

「私たちにできることは本当に何もありませんね」

エマのその呟きに三人は押し黙る。

結局、それ以上に何か具体的な案は思い浮かばずホテルに辿り着く。

「あ、ユーシス様」

ホテルに入るやいなや、支配人が慌てた様子で駆け寄ってきた。

「どうした？ 何かあったのか？」

「実は先程ユーシス様達のお部屋の前にこのようなものが置かれていたんです」

支配人が差し出したのは一枚のカードだった。

『攫われた弟君を救い出したければ午後二時までに聖女を訪ねよ』だ
と？』」

「それはどういう意味だ？ 他に何も書いてないのか？」

「ああ、これだけだ」

裏を見てみても特に何も書いてない。

「攫われた弟君……確か盗まれたのは兄弟剣と呼ばれていましたよね？」

「ああ……だが、いったい誰がこんなものを」

素直に考えるなら盗まれた兄弟剣の手掛かりなのだが、誰がどういう意図でこんなものを残したのかが全く分からない。

「この際なんだっていいじゃない。とにかく手掛かりが見つかったんだから行ってみましょう？」

「そうですね。聖女というのは教会の前の像のことですよ」

「とにかく行ってみよう。時間も迫っている」

「待てお前達っ！」

ユーシスが止めるが、目の前にいきなり現れた手掛かりと差し迫った時間に三人はすぐに駆け出してホテルを出てしまった。

「ちっ」

思わず舌打ちしてユーシスは三人の後を追い駆ける。

——都合が良過ぎる……

まるで示し合わせたようなタイミングで発見されたカードにユーシスは作偽的なものを感じずにはいられなかった。

そして本来なら兄の指示を忠実に実行するはずだったユーシスは彼らを咎めることはしなかった。

・*

聖女像の足元にはホテルで見つかったものと同じカードがあり、別の場所に行けという指示だけが簡素に書かれていた。

それを何度か繰り返した末に手に入ったのは簡素な鍵だった。

鍵はバリアハートの地下水道を施錠しているものであり、一同は不信に感じながらも地下水路に入る。

「随分と広い水路ですね。どこまで続いているんでしょうか？」

「およそ街の東から西にかけて広がっているな。いざという時のための脱出路だと兄から聞いている」

「そんなにか……だけどいったいどっちに行けばいいんだ？」

右を見ても左を見ても似たような通路が広がっている。

通路そのものは見通しが良いが、バリアハートの規模を考えると相
当な広さだと分かる。

「皆さん……ちよつと静かにしてもらえますか？」

エマはそう言うとうと目を閉じて耳を澄ませる。

「……向こうの方から人の気配がします。それも一人や二人ではなく
大勢の争っている音でしようか？」

「大勢……？」

「おそらく領邦軍だろう。兄上も潜伏先を突き止めたということか」

耳を澄ませば確かにエマの言う通り、かすかな戦闘音が響いて来
る。

反響して正確な距離は分からないがどちらの方から聞こえて来る
かは判断できる。

「それじゃあ私たちって、もしかして無駄足？」

「そういうことだな」

アリサの呟きにユーススは肩を竦めて頷いた。

やはりルーファスに任せておけば万事うまく行くのだと顔が緩む。

「嬉しそうですねユーススさん」

「つ……それよりも事件が解決するのなら、これでリインと合流して
帰れるだろう」

「そうだな。僕達だけで先に帰ってしまったては、ばつが悪かったから
な。ともかく一安心か」

「それでどうする？ 領邦軍に任せて私たちは外に出る？」

「いや。我儘を言うようですまないが、犯人の顔を見ておきたい」

アリサの提案にユーススは首を振ってこのまま進もうと言いつつ、

「僕も異論はない。Ⅶ組の最後の活動にケチをつけてくれた犯人の顔
を見ておきたいからな」

ユーススの提案にマキアスが嫌な顔をせずに頷く。

「え……う？」

「は……う？」

「む……」

思わず三人はそんなマキアスの顔をまじまじと振り返る。

「何だ君たち!?!」

「す、すいません。何だかユーシスさんの言葉に反発しないリーグニッツが意外過ぎて」

「何て言うか……朝のやり取りは分かっているんだけど、本当にリーグニッツ？ 偽物だったりしない？」

「失礼だな君たちは……まあ、そう思われても仕方がない醜態を晒していたのは事実だが……」

エマとアリサの容赦ない言葉にマキアスは溜息を吐く。

「何でも良い。とにかく行くぞ」

そんな三人を促してユーシスは我先にと歩き出した。

散々振り回されたが犯人に近付いていたこと。

そして先回りされたがすでに領邦軍が真犯人と交戦していることから、ユーシス達はそれまで張り詰めていた緊張を緩めてそれに遭遇してしまった。

「なっ——」

「こ、これは……」

「う……」

「ひどい……」

むせかえる血の匂い。

地下水路の道を、壁を赤く染めた地獄絵図がそこにはあった。

「うう……」

壁際に頭から血を被ったように真っ赤に染まった領邦軍の兵士が呻く。

「おい！ 何があった!?!」

呆然としてしまったユーシスは我に返って兵士に駆け寄る。

「ユ……ユーシス様……どうし——ゴホゴホッ」

朦朧とした目を向けてくる兵士は次の瞬間、血の塊を吐き出し咳き

込んだ。

「っ——」

血塗れの姿から重傷を察するが、修羅場慣れしていないユーシスは思わず思考が止まってしまう。

「どいてください」

そんなユーシスを押し退けて、エマが兵士の前に膝を着いて手をかざす。が、その手を兵士が震える腕で掴んで止めた。

「無駄だ……お、俺はもう助からない……それよりも……すぐにここから脱出してください……悪魔が……悪魔が来る……」

「悪魔だと……お前達はいったい何と戦って——」

その瞬間、ユーシスは背後から剣に貫かれた。

「っ——」

「ひっ——」

「きゃあっ——」

「うわああっ——」

悲鳴を呑み込んだユーシスと同じタイミングでアリサ、エマ、マキアスが悲鳴を上げる。

腰を抜かして尻餅をつく三人とは違い、ユーシスはその場に膝を突いて刺された胸を検めるが、そこに刃など存在しなかった。

「っ——今のは……殺気という奴なのか？」

震える腕を抑え込み、ユーシスは強過ぎる殺気をぶつけられると死を想像させられると耳にしたことを思い出し、すぐにそれが正解だと声が響いた。

「フン、殺気を当てた程度でこの始末か」

通路の先の暗がりから何かを引きずる音と共に一人の男が現れる。

「貴様は……」

それは異様な風貌の男だった。

長く白い髪。

顔を覆い隠す鬼の面。

黒い軍服に白いマント。そして血が滴る異様に長い太刀。

一言で説明するならば《真・魔界皇子》がそこにいた。

「貴様は何者だ？」

男に睨まれただけで先程の死のイメージが脳裏に再生されるが、ユーシスは気丈にも男を睨み返す。

「フ……そんなこと聞くまでもないだろう」

男はこれ見よがしに左腕で鷲掴みにした兵士の頭を持ち上げる。

「っ——」

大の大人を片手で軽々と持ち上げるその膂力にユーシスは目を見開き、次の瞬間男は血塗れの兵士を横の水路へと投げ捨てた。

「我が名は《剣鬼》——結社《身喰らう蛇》に名を連ねる者。と言った所でお前達には何のことかは分からないだろうな」

「結社《身喰らう蛇》だと……？」

息苦しく、身体を恐怖で震わせる殺気に身動きできないユーシスは言葉を絞り出す。

「たしか……二年前にリベールで暗躍していた犯罪組織がそんな名前だったな……」

横目で背後を伺って見るが、アリサ達の様子は自分よりも酷い有様だった。

尻餅をついたまま身体は完全に竦み上がり、目尻には涙が浮かんでいる。

その気持ちはユーシスも理解できる。

目の前の《剣鬼》はそれだけの相手。自分たちが束になっても敵わない相手。

彼の背後で無造作に血の海に転がっている兵士たちの姿が次の瞬間の自分たちの姿だと嫌でも連想させられる。

「それで……《異変》を引き起こした犯罪者がバリアアハートで何を企んでいる？」

完全に戦意喪失している三人に見切りをつけ、ユーシスは膝を着いたまま尊大な態度で尋ねる。

「別に大したことではない。たまたまりイン・シユバルツァーがいたから少し遊んでやろうと思っただけだ……」

だが《怪盗紳士》のようにうまくやるのは難しいようだ」

律儀に答えてくれる《剣鬼》の言葉を聞き流しながらユーシスは必死に考える。

身体は殺気の重圧のせいで震えてうまく動かせない。

兵士たちには悪いが、せめて同級生の三人だけでもこの場から逃がす方法を会話で時間を稼ぎながら模索する。

「リインで遊ぶか……そのためにわざわざうちの宝物庫から剣を盗み出したというのか？」

「そのつもりだったがルーファス・アルバレアの手が思っていた以上に早く、思い通りにならなかった」

「そうか……それは残念だったな」

ユーシスは誇らしげに笑みを作る。

おそらくはユーシス達をここまで呼び寄せたカードはリインに宛てた物。

だがルーファスが指揮をしたため、リインは事態を把握する前に確保されてしまい計画が破綻したのだろう。

そう考えると危機的状況だというのに胸が梳く気持ちになる。

「代わりにこいつらで溜飲を下げるつもりだったが、とんだ期待外れだった」

《剣鬼》は背後を振り返る。

通路の先、広くなった場所には地獄絵図が広がっていた。

「貴様……」

どれだけの兵士が地下水路に派遣されたかは分からない。だがむせ返る血臭の濃さが惨劇の大きさを物語っている。

「さて、リイン・シユバルツァーと戦うことは叶わなかったが……お前達は奴の同級生だったか？」

仮面越しに向けられた目にユーシスは竦み上がる。

「お前達を殺せば、奴と戦うことはできるかもしれないな」

勿体付けるように未だ立ち上がることができないユーシス達に《剣鬼》は近付いて来る。

「抜かせ。貴様など俺がここで——」

竦み上がった身体を何とか立ち上がらせてユーシスは剣を——抜

こうとしてそこで固まった。

「っ——」

「どうした威勢が良いのは口だけか？」

これ以上動けば死ぬ。

剣を抜いた瞬間に自分の首が飛ぶことを幻視する。

一步後退れば、腕が落とされ二の太刀で同じように首が飛ぶ。

前に進めば胴体が一瞬で両断される。

——これがリインが経験した戦いなのか……

一周回って冷静になった思考でそんなことを考える。

昨夜に話した時には大袈裟と思っていた。授業に乱入した槍使いのことも直接対峙していなかったから実感が湧いていなかった。

そしてどこかで感じていた、自分が死ぬはずがないという無根拠な思考を完全に否定する殺気。

逃げる事さえ出来ない遥かな格上に、ユーススは戦意を保つことはできなかった。

「あっ……」

膝から力が抜ける。

心が折れる。傾く体を他人事のように感じながらユーススは己の死を——

「うああああああああっ！」

ユーススの思考はマキアスの悲鳴のような雄叫びと銃声によって遮られた。

ショットガンの乱射に《剣鬼》はユースス達の目の前から消えると一瞬でその射程から逃れていた。

「立てっ！ ユースス・アルバレアッ！ そしてアリサ君とエマ君を連れて逃げろっ！」

膝を震わせ、歯を鳴らしながらマキアスが叫ぶ。

「レーグニッツ……お前……」

「問答している暇はないっ！ こいつは僕が何としてもここで食い止める。だから行けっ！」

恐怖を感じていないはずはない。

そして一人残るといふ事がどんなコトになるかということも横たわる兵士たちの姿で分かっているだろう。

それでも奮起して三人を逃がそうとするマキアスの姿にユーシスは震える足を力任せに殴りつけた。

「阿呆が……貴様程度で奴の足止めなどできるものかっ！」

ユーシスは立ち上がり剣を抜いてマキアスの隣に立つ。

「ぼっ——何をしているこいつに勝てないのは分かっているはずだ！」

「フン！ そんなものは貴様とて同じことだ。貴様では三秒も持つまい」

「だとしてもだ！ 刺し違えたとしても石にかじりついて君たちが逃げ切る時間くらい稼いでやる」

「自棄を起こすな。ここを切り抜けるには誰かが犠牲になれば良いなんてものではない」

玉碎覚悟のマキアスをユーシスが諫める。

「アリサ、エマ、奴は俺達で何とかする。お前達は隙を見てここから脱出して兄上に報告してリインを——」

《剣鬼》を睨んだままユーシスは背後でまだ腰を抜かしている二人に言葉を投げかける。

「馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ」

そんな二人の背中にアリサは歯を食いしばって立ち上がり、導力弓を構える。

「わ……私も戦えます」

そしてそんなアリサに遅れてエマも立ち上がる。

「だが——」

「あれから生き残るためには戦うしかありません。そして私たちに勝機があるとしたら戦術リンクだけです」

「確かにそうかもしれないが……」

目の前の男に勝つためには戦術リンクに頼るしかない。

それも訓練で行う二人一組のものではなく、オリエンテーションで経験した複数人が同時に繋がるもの。

あの時は剣が折れるという不本意な結果に終わってしまったが、あの全能感はどんな敵にも負けなれないと思わせるものがあつた。

だが、午前中の実習でも完璧とは言えなかつた戦術リンクに都合よく命を預ける気にユーシスはどうしてもなれない。

「戦術リンクがうまくはまればリインとだつてもつと戦えてたつてサラ教官も行つていたでしょ！　なら戦えるはずよ！」

「くっ……それしかないか」

しかし躊躇うユーシスを他所にアリサとマキアスはエマの提案に乗る。

「ちっ……」

一縷の希望を信じて。聞こえは良いが無謀過ぎる。

とは言えそれを論してやめさせる余裕はない。

どんなに無謀でもやるしかないとユーシスは腹を括る。が、そんな彼らを《剣鬼》が嘲笑う。

「ククク……」

「何がおかしいっ!？」

「これが笑わずにいられるか……」

欠陥品に自分の命を預けるような馬鹿者がこうも雁首を揃えているとは滑稽だな」

「欠陥品ですって!？」

《剣鬼》の挑発にアリサが眦を上げる。

「人の感情によって作動するか曖昧なオーブメントを欠陥品と言わずに何と言う？　それにお前達は勘違いをしている」

「勘違いだと」

銃口を《剣鬼》に合わせながらマキアスはオウム返しに彼の言葉を繰り返す。

「フ……」

《剣鬼》は不敵な笑みを浮かべると、次の瞬間十数アージュ離れていたはずの《剣鬼》はマキアスのショットガンの内側にいた。

「なっ!？」

「その装置はお前達の地力を上げる物ではない……」

高度な連携を可能にするからと言って、でも使い手がお前たち程度では高が知れているというもの」

「どけっ！・ レーグニッツ！」

ユーシスが叫び剣を振る。

が、踏み込んだ唐突さと同じように《剣鬼》は音も立てずに後ろに跳んで、剣は伏せたマキアスの頭を掠めて空を斬る。

「さらに言えば、システムに頼り切っていて連携の初歩を分かっている……ない……」

思考や視野を共有しただけで成り立つ程、連携というのは甘くない。そしてこうなったら、お前たちはどうする？」

次の瞬間、一人だったはずの《剣鬼》が四人に増える。

「なっ!?!」

「分け身のクラフト!?! 本体は——」

本体を見極める間もなく四人の《剣鬼》は同時に動き出す。

誰を迎撃するか迷い、それぞれの思考がパートナーにさらに余計な情報を加えさせ、迷いを大きくする。

「くっ——」

咄嗟に盾にした剣でユーシスが《剣鬼》の一撃を受け止める。

「お前が本体かっ!?!」

吹き飛ばされるユーシスを横目にマキアスは自分に迫る《剣鬼》を無視してユーシスを弾き飛ばした《剣鬼》にショットガンを向け——そのまま殴り倒された。

そしてそのまま一人目の《剣鬼》は邪魔されることなくユーシスに追い縋り、太刀を振り下ろしユーシスを水路に叩き込む。

「はあっ!?! 本体が二人!?!」

「違いますアリサさん。実体のある高度な分け身のクラフトです！もしかしたら——」

最後まで言い切ることが出来ず、エマは自分たちに迫る二人の《剣鬼》に導力杖から衝撃波を撃ち出す。

二人の《剣鬼》は示し合わせたかのように左右に分かれて回避し、さらに距離を詰める。

「っ——」

「あ——」

戦術リンクで共有した思考がフォローを求め合い、どちらともなく動きが硬直する。

結果、アリサとエマは成す術なく太刀の一撃に沈められた。

・*

「この程度か……」

水の中から半身を通路に投げ出して喘ぐユース。ス。

眼鏡がひしやげ、鼻から血を流して仰向けに倒れるマキアス。

峰打ちとは言え斬りつけられて蹲るアリサとエマ。

彼らを睥睨して《剣鬼》はつまらなそうな言葉を漏らす。

「リイン・シユバルツァーのクラスメイトと聞いてどれ程のものかと思えば、とんだ期待外れだったな」

侮辱の言葉だが誰も何も言い返せない。

戦術リンクを使うどころか、まともな戦いになっていなかった。

「く……」

たった一撃を喰らっただけなのに芯に響く一撃はそれぞれの戦意を挫くほどに彼我の実力差を思い知らされた。

「お……俺達をどうするつもりだ？」

生殺与奪の権利が敵に握られている。その恐怖を実感しながらユースは尋ねる。

「……………」

その質問に《剣鬼》は沈黙を返す。

ユース達にとって永遠にも感じるたった数秒の沈黙を経て、《剣鬼》が口を開く。

「フ……そんなに怯えなくても良い。お前達は殺す価値もないからな」

そう言つて踵を返す《剣鬼》から息苦しくなる殺気が消える。

歯牙にもかけない見下された態度に屈辱を噛み締めながらもユース

シスは見逃されたことに安堵する。

それはアリサとエマも同じで消えた殺気に強張った身体を緩める。

「ふ……ふざけるな……」

しかし、マキアスはショットガンを杖にして吠えた。

「待てっ！ 僕はまだ戦えるぞっ！」

「ちよつとマキアスッ!？」

「この阿呆が!」

マキアスの暴挙をアリサ達が止める。

「自殺したいなら一人で死ね。俺達を巻き込むな」

「だったら……放せっ！」

ユーシスの手を振り払い、背中で隠そうとしたアリサとエマを押し退けてマキアスは前が出る。

「リイン・シュバルツァーと比べられて……はい、そうですかと引き下がってたまるか」

「こんな時にあんたはまた——」

「ああ、そうだよみつともない対抗心さ！ だけどここで引き下がったら僕はもう二度と貴族に立ち向かうこともできなくなるんだっ！」

目の前の男は絶対強者。

それはある意味マキアスにとって絶対的な権力を持っている帝国貴族と同じようなものだった。

「このまま情けで見逃されるくらいなら死んだ方がマシだ！」

「だからって——」

「だいたい君たちもそれで良いのか!？」

僕達はシュバルツァー以下だと見下されて！ その上見逃してやると言われたんだ！ ここで引き下がったら一生負け犬だっ！」

マキアスとて決して死ぬことが怖くないわけではない。

現に彼の体は小刻みに震えている。

虚勢を張るのはただ貴族に——リインに負けたくないという対抗心から。

「だいたい僕達は戦ってもいない。ただ蹂躪されただけだ！ そんなんじやシュバルツァーに合わせる顔がない！」

《剣鬼》の言葉を信じるならば彼はラインのことを敵と認めている。

だが《剣鬼》はマキアス達など歯牙にもかけていない。

それがラインと自分たちの差だと言われれば納得するしかないのかもしれないが、せめて一矢報いる気概もなくどの口でラインに勝つと言えるのか。

「貴様の言っていることは滅茶苦茶だ」

ただ感情に任せて死地に突き進むとうとするマキアスにユーススは呆れる。しかし、ユーススは萎えた心を奮い立たせて剣を構え直す。

「だが一理ある。ここは退くべきところではない」

アルバレアを継ぐ者としては第一に自分の生存を考えるべきだが、ここで命惜しきに見逃されたことに安心しては二度と強者に立ち向かうことはできなくなるだろう。

「……………私だって……………これ以上ラインに差をつけられてたまるもんですか」

ユーススに次いでアリサも歯を食いしばって立ち上がる。

二年前は同じ場所に立っていたはずなのに、再会したら遙か先にラインは進んでいた。

ここで退けば、彼は一生手の届かない場所に行ってしまう——そんな予感を感じてアリサは心を持ち直す。

「私は……………私もこんなところで退けません」

エマは三人とは別の理由で立ち上がる。

《剣鬼》が結社の人間だと言うのなら、そこには里を出奔した姉がいる。

ラインやマキアス達とは違い明確な手掛かりであり、姉を追うなら立ち塞がる壁。

ここで怖気づいてしまえばそれこそいつまで経っても彼女の下に辿り着くことはできないだろう。

「やれやれ……………そんなに死にたいのか？」

《剣鬼》は振り返り、再び殺気が重圧となって四人に押し掛かる。

「とは言ったものの、どうやって戦う？」

「そんなもの玉碎覚悟で突っ込むだけだ」

そう言うとマキアスはこれ以上は待てないと言わんばかりに駆け出した。

「うおおおおっ！」

突撃しながらショットガンを乱射するマキアス。

《剣鬼》は無造作に立っつていながら、左右に軽くステップを踏み散弾を躲す。

「ちっ……この考えなしが……だがそれで良いのかもしれないな」

後衛のアリサとエマに援護を頼むと言い残し、ユーシスはマキアスの後に続く。

戦術リンクを繋ぎながら、ユーシスは右側に回り込んで《剣鬼》が持つ太刀に向かって攻め立てる。

とにかく剣を振り、太刀が振られる隙を与えないように努め、ユーシスに守られる形で肉薄したマキアスが散弾を撃つ。

だが超反応で《剣鬼》は散弾の効果範囲から逃れる。

「くそっ……」

「口を動かしている暇があれば動けっ！」

悪態を吐くマキアスをユーシスが急かす。

まともに剣を交えれば三合持つかどうか。

打ち負ける瞬間、三人の援護のおかげで何度も助けられる。

「ふ……」

「こんな時に何を笑っている!?!」

「うるさい。そんなことよりも集中しろ」

絶望的な状況だというのに知らずの内にユーシスは高揚していた。

初めて経験する安全ではない戦いに対してか、それとも仲間の援護に頼り切っていることに対しての高揚かは分からない。

《貴族の義務》を勘違いした貴族が多くなっている現状。

自分はそうならない、他人の価値観に染まっつてなるものかと学院で孤高を貫いていたというのに、今はそれを忘れて仲間と肩を並べている。

「うるさいとは何だっ！」

悪態を吐きながら援護の手は緩めないマキアスにユーシスはやは

り苦笑を浮かべずにはいられなかった。

貴族ではないが《貴族》を勘違いしている筆頭がマキアスだろう。絶対に仲良くなることはできない。ソリが致命的に合わない相手。そんな相手に自分の命を預けて戦っている現状は信じがたいものだったが悪い気分にはならなかった。

「エマ、私のオーブメントの補給もお願い」

「はいっー!」

導力魔法を撃ち切ったアリサは《ARCUS》をエマに投げ渡し導力弓に矢を番える。

「っ……」

導力魔法を撃ち続けていた時もそうだが、ユースとマキアスの猛攻を裁きながら《剣鬼》の意識は決して自分たちから外れていない。

どんなに集中しても彼に矢が当たるイメージを作れない。

アリサができることはひたすらに前衛の二人の窮地を見極め、それを救う援護に徹する。

「情けない……本当に情けない……」

目の前の《剣鬼》は化物だ。

だがリインはリベールでそんな相手と戦っていたのだと思うと改めてその差を実感してしまう。

こんな相手に目を付けられるなどどんな修羅場を繰り返して来たのだろうか。

ただ成長したリインを羨むだけしかしていなかったアリサは自分が情けなくなる。

「負けたくない……」

戦術オーブメントから通して伝わって来るユースとマキアスの思念に同調するようにアリサは呟く。

それが目の前の《剣鬼》に向けたものなのか、リインに向けたものなのかは分からない。それでも思いは二人と同じだった。

思えばアリサはⅦ組の仲間たちに対して誰にも心をさらけ出していないかった。

家名を隠し、表面的に当たり障りなく接して決して本心を悟らせな

い。

それは貴族と平民両方から疎まれてきた彼女なりの処世術だった。故に表面的には戦術リンクはうまく機能しているが、リンクの強度は誰に対してもレベル1のまままで上がる気配はなかった。

そんな内心をさらけ出せないアリサに対して、前衛を担当している二人は柵を忘れて完全にアリサやエマの援護に命を委ねている。

「ここで踏ん張らなくちゃ女が廃るわよっ！」

グダグダ考えるのはやめ、男二人に同調するようにアリサは叫んだ。

「これが結社の力……こんなところに姉さんは……」

二つの《ARCU》の導力をアイテムで補給しながらエマは《剣鬼》から目を離さない。

導力魔法を主体をするエマにとって導力切れは即戦力外になるが、それでもできることはある。

エマが俯瞰して見ることで戦術リンクを通して危険を察知できる。エマの感覚は二人にとつても生命線でもある。

「……………魔女の力を使えば……………」

現状を打破できる可能性は思い浮かぶ。

エマが実行したことではないが、昨日の大型魔獣のように魔術で二人に《焔》の力を注ぎ込めば彼らの戦闘力は飛躍的に向上するだろう。だが、そんな場当たりの強化が果たして《剣鬼》に通用するから分らない。

何より異常な強化は導力魔法だったと誤魔化すことができない。正体を明かすつもりのないエマにはどうしてもそれを実行する気になれなかった。

「それに……………もしかしたら……………」

エマがツールズに入學した目的は二つ。

《灰の騎神》の監視とその近くにいるだろう《結社》に身を投じた姉との再会。

前者はリインの存在によっていろいろ破綻してしまっただが、後者に関しては今回の《剣鬼》の邂逅はようやく姉に繋がる手掛かりでもあ

る。

だが逆に考えて見ればリインと戦うことは口実で、《剣鬼》の目的は姉が遣わせたエマへの刺客の可能性を考えてしまう。

「エマッ!」

「はいっ!?!」

唐突にアリサに名を呼ばれ、エマは反射的に返事をする。

「いろいろ抱えているのは分かっているけど、お願い今は私たちに協力して」

暗示を掛けて彼女の心に無遠慮に触れてしまった負い目や、魔女であることを秘密にしているエマもアリサと同様に戦術リンクの強度は決して高くない。

さらに言えばこちらの思考が読み取れないように防壁を作って阻害し、逆に戦術リンクの繋がりを利用して記憶を読み取る方法を模索している身としては向けられる信頼が重く感じてしまう。

当然アリサはそんなエマの思惑など知らず、ましてやその被害を被っている事実を知りもしない。

「アリサさん……」

戦術リンクでエマの後ろめたさを感じたことはあるだろう。

だが、それを呑み込んだ純粋な懇願に応えずにはいられない。

「ごめんなさい。おばあちゃん……でも生き残るために必要なんです」

そう言い訳をしてエマは眼鏡を外し、瞳を金に染めて呟く。

「——剣よ——」

エマの周囲に靈力で編まれた白い剣が浮かぶ。

「ほう……貴様は魔女だったのか……」

ユースとマキアスを一閃で突き飛ばし《剣鬼》はエマを見る。

「《蒼の深淵》の妹が学院に潜入しているとは耳にしていたがお前だったのか」

「っ——」

《剣鬼》の口から出て来た渾名にエマは動揺する。

「エマッ!?!」

「大丈夫です！ それよりも何としてもここを切り抜けましょう！」
《剣鬼》に問い質したい事は沢山ある。

しかし、今は姉を追う魔女としてではなくⅦ組の一人として目の前の大きな敵を打倒するのだと決意を固める。

「剣よ踊れっ！」

エマの号令で四つの剣が縦横無尽に飛び、四方から《剣鬼》を襲う。踊る四つの剣にユースとマキアス、そしてアリサの矢。

四つの思考がひたすらに敵を倒すために純化する。

互いの柵も蟠りも関係ない。余計な思考を挟む暇などない程に戦いに没頭する。

「まだまだっ！」

生死が掛かった瀬戸際の戦いに《剣鬼》に対抗するかのよう意識が四人揃って研ぎ澄まされていく。

粗が目立った連携が時間が経つにつれ、より際どい高度な連携へと進化していく。

四つの意志を一つの思考で統一する。

それこそが戦術リンクによる真価。

目配せもなく、掛け声もなく、まるで長年の仲間たちであるかのように呼吸を合わせて《剣鬼》を攻め立てる。

「行けるっ！」

流星の《剣鬼》も息を吐かせない四人の猛攻に防戦に徹する姿に勝機を見出す。

「思っていたよりも粘る……どうやら再評価しないとイケないようだな」

「フン、そんなことを言っているのも今の内だ！」

感心する《剣鬼》の言葉にマキアスが強気な言葉を返す。

仲間との強い一体感が本人の実力を普段以上に発揮させる。

実力以上のものが出せている実感は全能感となって彼らの自信となる。

「調子に乗っているようだが、良いことを教えてやる……」

今の俺の力はお前たちが戦ったライン・シユバルツァーの三倍。そ

して俺にとってこの状態はまだ三割程度……この意味が分かるな？」
「っ——負け惜しみをっ！」

まだ本気じゃない。

それを負け惜しみと断じて四人が勝負に出る。

ユーシスの鬨気が込められた剣が、マキアスのとっておきの銃弾を装填した連射、エマが操る四つの剣が、アリサのオーバルエネルギーを最大に溜めた矢が、一斉に放たれる。

「鬼炎斬！」

殺到する必殺技を《剣鬼》は焔の一閃で薙ぎ払い、その余波がユーシス達をあつさり吹き飛ばした。

・*
・*

「馬鹿な……ここまで差があるなんて……」

最高のコンデイションで最良の連携を取ることが出来ていたはずなのに、一矢も報いる事ができなかった現実にユーシス達はそれまでの高揚が一転して絶望に侵される。

「もう終わりか？」

そう尋ねて来る《剣鬼》に誰も何も言い返せない。

「……………まあ良くやった方だ。胸を張ると良い」

「気休めは良い……殺せ」

絶望に相まって、それまでの反動で身体もまともに動かない。

もはや万策尽きたとユーシスは潔く諦める。

その言葉に答えたのは《剣鬼》ではなかった。

「やれやれ……無様を晒すよりも良いが、諦めが良過ぎるのも問題だぞ弟よ」

「兄上っ！」

悠然とした足取りでその場に現れたのはルーファス・アルバレアだった。それも——

「サラ教官も……来てくれたんですか！」

ルーファスの背後に従う様にいたサラは今にも吹き出してしまい

そんな顔をしていたが、絶望の中にいた彼らはそれに気付かない。

「兄上！ 気を付けてください奴は——」

「大丈夫だ弟よ」

注意を叫ぶユーシスの言葉にルーファスは柔らかな言葉を返して《剣鬼》の前に進み出る。

「随分と派手にやったようだね」

「それがどうした？」

親し気に話しかけるルーファスに対して《剣鬼》が返した言葉には嫌悪が滲み出ていた。

「次は貴様たちが相手か？」

「いや——その必要はない」

叩きつけられた殺気を軽く流してルーファスは無造作に右手を上げ——宣言した。

「これにてⅦ組B班の特別実習を終了とする」

「え……？」

「は……？」

「とくべつじっしゅう……？」

「どういうことですか？」

ルーファスの言葉に訳が分からないと呆然とするユーシス達を他所に周りが動く。

《剣鬼》は殺気を収めると同時に長い太刀を鞘に納める。

さらには血の海に横たわっていた兵士たちが何事もなかったかのように立ち上がり、汚れた姿のままルーファスの前に整列する。

「わざわざ学院の実習に付き合わせてしまって悪かったね。特別手当は最初に言っていた通りに支給するので各自後で受け取ってくれたまえ。以上、解散」

「はっ！——第二中隊——撤収っ！」

隊長の号令に兵士達は一糸乱れぬ動作で回れ右をして、駆け足で去って行く。

「《剣鬼》殿も御協力感謝するよ」

「ふん……」

親し気に話しかけるルーファスに《剣鬼》は不快さを隠さずに背を向けて歩き出す。

「やれやれ、つれないね」

そんな《剣鬼》の態度にルーファスは残念そうに肩を竦める。

「あ、兄上っ！ これはいったいどういうことですか!？」

ようやく我に返ったユーシスが地面に寝そべったまま顔を上げて叫ぶ。

「ふふ……見ていた通りだよ」

悪びれた様子もなく、むしろ楽しそうにルーファスはユーシスの叫びに答える。

「結社の《剣鬼》殿とはちよつとした縁があつてね。君たちを試すために協力してもらつたわけさ……」

この現場は君たちが危機感を持ったためのちよつとした演出さ」

事も無げに答えるルーファスに絶句する。

生きるか死ぬかの瀬戸際。

それが全てこの男の掌の上だったと知るが、怒る気力が湧いてこない。

「まさか……シユバルツァーを逮捕したことも……」

「そう……君たちはリイン君がいることで無意識に慢心していたようだから一芝居打つて分断させてもらったよ……」

彼にいてもらつては君たちに極限状態での戦いを経験してもらうことはできないからね……」

ついでに言えば、彼には君たちとは別の課題をこなしてもらつていいよ」

「……どこまでが兄上の策だったんですか?」

ユーシスは呆然とした様子のまま質問を重ねる。

そんな珍しいユーシスの顔にルーファスは自信に満ちた顔で答えた。

「当然、全部さ」

・*

「あー……」

「うー……」

トリスタに向かう列車の席でダルそうな声をマキアスやアリサがもらす。

「やれやれ、だらしないわね。確かに戦闘直後でそのまま列車に乗ったわけだけど、もっとしやきつとしなさい」

「無茶言わないでください」

「そうですよ……本当に死ぬかと思ったんですから」

二人の態度をサラがたしなめるが、マキアスとアリサは項垂れたまま疲れた言葉を返す。

「……さすがに今回は色々とありすぎましたから……」

エマも油断すれば寝落ちしてしまいそうな疲労を感じながらマキアス達に同意する。

「でも良い経験だったんじゃない？ あの手の修羅場を知らなかったとはいえ安全に経験できたわけなんだから、レベルアップできたのが実感できているんじゃない？」

「それはそうだが……もっと早く茶番だったと気付くべきだった」

これまでの行動を振り返り、気付くべき要素や疑うべき要素を思い出してユーシスは顔をしかめながら、リインに話しかける。

「それにしてもとんでもない強さだったな……《結社》の《剣鬼》……お前がリベールで戦ったというのは本当なのか？」

「ああ……い、一応……」

「ブフツ！」

リインが頷くと、突然サラが前触れもなく吹き出した。

「サラ教官どうしたんですか？」

「ごめん……何でもない……大丈夫よ、委員長」

口元を抑えて肩を震わせるサラは呼吸を整えて顔を上げる。

《剣鬼》はあたしも見たことがあるけど、結社の中でもかなりの使い手よ。どんな思惑があったとしても彼と戦って生きて帰って来れたことを誇りなさい……

そして負けたことが悔しかったら、この敗北で自分には何が足りなかったのか良く考える事ね」

サラの言葉に《剣鬼》と戦った四人は押し黙る。

「あんた達はまだ学生だから良いかもしれないけど、あれも一つの《現実》よ……」

この世界にはあたし達とは比べ物にならない化物がうようよ存在しているわ。ま、リインもその内の一人だけど」

「サラ教官……」

リインは咎めるようにサラの名を呼ぶ。

と、そこでサラから《ARCU S》の着信音が響いた。

「おっと着信ね。タイミングから考えるとA班かしら？」

リインの非難の目から逃れるようにサラは《ARCU S》を取り出すと通信を繋いで耳に当てる。

「もしも——」

『サラ教官っ！』

通信越しに聞こえて来たのはクリスの慌てた声だった。

「っ——いきなり大きな声で話ないですよ」

サラは逆の手に《ARCU S》を持ち替えながら文句を言う。

「そんなに慌ててどうしたの？ 説明はもつと分かり易く言いなさい………は？」

離れたリイン達にも聞こえて来るクリスのくぐもった声。

その様子は尋常ではない程に取り乱していた。

それを宥めながらサラはクリスから要点を聞き出して顔をしかめた。

「……………フィーが人を殺したですって…………？」

15話 火種

特別実習レポート 製作者クリス・レンハイム。
中略。

交易町ケルディック二日目の朝は一つの事件から始まった。前日に大市の店を出す場所で騒動を起こした二人の店が破壊され、商品が盗まれるというものだった。

しかし、これに対して領邦軍はろくな調査もしなかった。そこで自分たちが事件の調査を買って出た。

双方の言い分、そして領邦軍への聞き込みの末、領邦軍が窃盗事件の裏で糸を引いていると結論付け、犯人の捜索を行った。

犯人はルナリア自然公園に一時潜伏していた。

門前の鍵をフィーが携帯していた爆薬で破壊し、窃盗団を発見し戦闘になる。

無事に制圧できたものの、直後に大型魔獣の襲撃を受ける。

これを何とか撃退し安堵した瞬間、拘束を怠っていた窃盗団の一人から不意打ちを受け、ラウラが人質に取られてしまった。

彼女の頭に導力銃を突き付けられ、武装解除を求められる。

しかし、そのタイミングで調査を放棄していたはずの領邦軍が現れる。

窃盗団はあろうことか、犯人は自分達だと言い出し自分たちはそれを捕まえたのだと言い出した。

さらにあり得ないことに領邦軍はそれを鵜呑みにした。

僕達の言い分はまるで無視する領邦軍だったが、彼らに遅れて鉄道憲兵隊のクレア・リーヴェルト大尉が現れ自分たちに代わり弁明し、領邦軍の言い分を論破してくれた。

ここでラウラを拘束していた男が領邦軍に見捨てられると察して暴挙に出た。

錯乱したように叫んだ男はその勢いのままラウラの頭に突き付けた導力銃の引き金を引こうとした。

その瞬間、誰よりも速くフィーが隠し持っていたナイフを投擲し、

男の頭を射抜いた直後ナイフに仕込まれた爆薬が炸裂して男の頭を吹き飛ばした。

現場の状況からクレア大尉には正当防衛が認められ、体裁を取るということでファイーは自分達を残してクレア大尉に大人しく連行されて行った。

盗まれた商品は奪還できた。

犯人と明らかにグルだった領邦軍に憤りを感じるものの、それ以上に肝心なところで動けなかった自分の未熟さを痛感させられる実習だった。

・*

「いやー大変だったみたいですねえ」

トリスタの街酒場に三人の教官が一つのテーブルを囲い、トマスがテーブルに突っ伏しているサラを労う。

「全くよ。ようやくマキアスの問題が解決してルーファス理事からもとりあえず残留許可を取れたって言うのに……」

サラはテーブルに身を預けたまま応える。

「だが状況を聞いた限りではクラウゼルの判断は間違っていないかっただろう……」

一瞬でも躊躇っていれば犠牲になっていたのはアルゼイドだった」
嘆くサラにナイトハルトがそれとなくフォローする。

「そうなのよね。行為そのものは決して褒められたものじゃないけど、どうしたってこういう二択が迫られる時はあるんだから」

A班のレポート、それからファイーを引き取った時のクレア大尉からされた状況説明をサラは思い出す。

窃盗団を追い詰めたが、拘束する前に大型魔獣の乱入があつたこと。

それも無事に撃退したが、倒したはずの窃盗団が立て直す時間を与えてしまったことになる。

大型魔獣を撃退したところで不意打ちのスタングレネードを食

らってしまったこと。

他はともかくフィーがそんな不意打ちを食らったことは意外だったが、そんな時もあるだろう。

「つていうか、領邦軍の腐敗がそこまで酷かったのが完全に想定外だったわ」

ため息を吐きながら、奢りのビールに口をつける。

「トールズ士官学院の制服を着ている身元が証明されている者たちを一方的に犯人と決め付けるか……」

さらに言えば調査しないとっておきながらタイミング良く現れたことといい。クロイツェン州の中の事件だからと言って随分と舐めた真似をしてくれたものだ」

「それにどうやら学院内でフィー君の今回の噂を流したのは、その領邦軍の隊長の実家経由みたいですよ……」

今回の事件がうまくいかなかった腹いせでしょうかね？」

「はあ!? 何よそれ!? ぼつかじやないの。むしろフィーにあんたら救われておいて何言ってるのよ!」

トマスの言葉にサラは余計に頭が痛くなる。

フィーの行為を認めるわけではないが、フィーがそれを選ばなければラウラの方が死んでいた。

そうなればいくら領邦軍がしらを切ったとしても、その隙をあの手血宰相が見逃すことはないだろう。

しかも害したのは武の双壁アルゼイド子爵の娘。

貴族派と革新派に対して中立を保っている良識派の貴族の代表的存在だがそんな風に娘を殺されてしまえばどうなっていたことか。

想像するだけでも恐ろしい。

「今のトールズ士官学院は士官学院とは名ばかりの緩い校風ですからね……」

やはり人を殺したフィー君への忌避感が強くなっていますね」

「クラウゼルの謹慎期間は一週間だったな? 彼女のケアは大丈夫なのか?」

「あの子は元猟兵よ。そこら辺の心配は今更。本人は二度寝ができ

るって喜んでいくくらいだったわよ。問題は他の子たちよ」

「やっぱりですか？」

「頭からいろいろ被ったラウラとそれを目の前で見てしまったエリオットの二人が特に危ないわね……」

ガイウスは動揺はしていたけど今は持ち直しているし、クリスもその時は流石に動転していたけど大丈夫そうよ」

「B班の方は？ 直接見ていないとはいえ他の生徒達と同じように忌避感を持ってしまったのではないか？」

「そつちも確かに動揺しているけど受け入れられない感じじゃないわね……」

直前に、やらせだったけど本人たちにとっては生き死にかかった極限状態の戦いをやったおかげか、そこまで忌避感は強くないみたい」

「それは良かったですね……というのは不謹慎ですかね」

「良いわよ。そう言っておかないとやってられないわ」

「しかし意外ですね。アルゼイドと言えば帝国の武の双璧。そういうことに対しても教育は行き届いていると思っていたんですが」

「訓練と実戦では違うことはよくある話だ……」

ましてやアルゼイドが人質になってしまったこと、一番近くでそれを見てしまったこと。トラウマになっていなければいいんだがな」

「そこら辺はエリオット含めてベアトリクス教官にカウンセリングを頼んでいるわ……」

それに来週にはラウラのお父さんのアルゼイド子爵が武術指南に来てくれるから相談しようと思っているわ……」

ってなんだか人任せにしてばかりね……はあ……やっぱりあたしには教官なんて向いてないのかもしれないわね」

「珍しいなバレスタイン。お前がそんな弱気なことを言うなんて」

「言いたくもなるわよ。あたしはやっぱり斬った張ったをやっている方が楽だわ……」

たった十人で手に余っているのよ。これが本来のクラスだったら数十人になるんだからもうあたしには手に負えないわよ」

「まあまあそう言わずに、貴族と平民が混在するⅦ組のようなクラスを担当できるのは元遊撃士のサラさんにしかできませんよ。ほらもう一杯どうぞ」

弱気なサラのグラスにトマスが新しいビールを注ぐ。

「Ⅶ組は他の生徒達と比べて個性的過ぎるからな。特にシユバルツアーはな」

「まあね……リインと言えば、あんたどうやってリインを口説き落とすのよ？」

ナイトハルトの呟きからサラはトマスに話を振る。

「口説き落とす？ はて何のことでしょうか？」

「惚けなくて良いでしょ。あんたが今年度から作った歴史研究同好会に入部させたんでしょ？ てつきりどこの部にも入らないと思っていたんだけどね」

「はは……リイン君も歴史に興味があっただけですよ……」

リイン君の話は中々興味深いですよ。特にあの《リベールの異変》ではあの浮遊都市に乗り込んだそうじゃないですか？

それにあのルフイナ君という人形の方もなかなか深い見識を持っているようで話していて飽きないです」

「ふーん……まあリインが普通の学生みたいなことができるならあたしがとやかく言うことじゃないから良いんだけどね……」

確か来週に自由行動日に同好会で外出届を出しているんだっただけ？」

「ええ、ドライケルス大帝の足跡を追うという名目で、本来ならノルドからやりたかったんですがとりあえず近場の遺跡を探検しようと考えています」

「あんまり連れ回さないでちょうだいよ、あの子は入学してからクロスベルに行ったり、ラツセル博士たちを迎えたりって忙しく動き回ってばかりなんだから」

「ええ、心得ていますよ」

サラの忠告にトマスは本当に分かっているのか怪しい笑みを浮かべて頷いた。

.....

.....

.....

「あーうー」

「まったく明日が自由行動日だからと言って飲み過ぎだ」

肩を貸して歩くナイトハルトは弛緩したサラの姿に呆れる。

「まあまあナイトハルト教官。これまでサラ教官は頑張っていたから今日くらいは良いじゃないですか」

「それは分かっている。ただの愚痴だ」

トマスの言葉にナイトハルトは頷き、入学式から今日までのことを思い出す。

VII組全員とクラス代表達とリインの模擬戦。

ラッセル博士を招いての技術交換。

マキアスが起こす差別意識による学院内での空気の悪化。

特別実習ではそのマキアスの今後の進退が関わるものでもあり、それを無事に乗り越えることができたと安堵したところにファイの地雷が爆発した。

他の教官たちもできる範囲でのフォローはしているが、限度がある。

「しつかりしろ。もうすぐ寮に着くぞ」

業務を終えて夕方から始めた飲み会だったが、実際はまだ一時間も経っていない。

酒豪のサラがたったそれだけの時間でここまで酔いつぶれたという事実がある意味その心労の深さを表している。

「やーだーまだ飲むの！ 今日とはとことん飲むのー！」

「ええい駄々を捏ねるなっ！」

子供のように抵抗するサラにうんざりしながらもナイトハルトは見捨てずにそのまま歩く。

「飲み会なら明日改めて付き合いますから今日はもう休みましょう」

VII組が生活している第三学生寮に辿り着き、トマスがあやすようにサラに言い聞かせる。

「うー」

「トマス教官、シユバルツァーを……いや誰でも良い、中に入って――」

一時的に大人しくなったサラにため息を吐いて、早々に引き渡そうと考えたナイトハルトだったが、目の前で寮のドアが開いた。

「――っ、ナイトハルト教官にトマス教官。どうしてこちらに？」

大剣を携えて出て来たラウラは、扉の前に教官たちがいたこと、ばつを悪くしてそれを背中に隠す。

「サラ教官を送りに来たんですが、ラウラさんはこんな時間からどちらに？」

ラウラの疑問にトマスが答えて聞き返す。

「私は……日課の素振りを……その……」

「素振りか……それなら良いが、よもや街道に出るつもりではないだろうな？」

顔を逸らして言いよどむ姿にナイトハルトが指摘するとラウラはぎくりと体を震わせる。

隠し事ができない娘だと苦笑する。

「あまり夜遊びは感心しないぞ」

「よ、夜遊びではありません！」

ナイトハルトの言葉にラウラは声を荒げて反論する。

その声には目に見えた焦燥が感じられた。

ラウラとエリオット。

この二人は教官陣の中でも特に注意を払う様に指示されている。

「アルゼイド、気持ちには分からなくもないが今はやめておけ」

この一週間、ラウラは授業に出席しているものの常に上の空だった。

状況が状況なので様子見に徹していたが、ナイトハルトは今のラウラが何を考えているのか容易く察することができた。

「夜の素振りはまだ良い。だが朝帰りをする気だろうか？」

「あ、朝帰りっ!?!」

ナイトハルトから出て来た言葉にラウラは思わず狼狽える。

そんな風に初々しく動揺する姿にナイトハルトは彼女の姉弟子との違いに苦笑を浮かべる。

「お前たちの数代前の先輩の話だが、彼女は在学中、自由行動日の度に夜遊びと朝帰りを繰り返したらしくてな……」

それが原因で一時期はこの周辺の魔獣の生態系が狂う問題が起きたと俺が通っていた士官学院にもその話が聞こえて来るほどだった……

当時はだいぶ大事になったらしくてな、その前兆を見逃すことはできんな」

「い、いえ……そんな大それたことをするつもりはないんですが……」

恐縮して首を横に振るラウラだが、ナイトハルトは全く信用せずにラウラの前に立ち塞がる。

「とにかく今日は休め。特別実習からすぐに授業で落ち着いて心の整理がついていないのだろうか？」

剣が振りたいのなら俺が明日一日付き合ってもいい。今のお前の精神状態で夜遊びを認めるわけにはいかん」

「明日はラインとクリスと一緒に旧校舎の探索に行くんです……」

二人の足を引っ張らないためにも私は——」

「ならばなおのことだ。適切な休息を取らなければ本来の実力さえも出すことはできないぞ」

「そんなこと……分かっていきます。分かっていきます……しかし——」

ナイトハルトの言葉に頷きながらもラウラの表情は晴れない。

「アルゼイド。お前は十分に強い。従来のカラス編成なら間違いなくトップの実力を持っている。だから——」

ナイトハルトは慣れない慰めの言葉を掛けていたところで、寮の扉の向こうから慌ただしい足音が聞こえて来たかと思うと勢いよく扉が開いてラインが飛び出してきた。

「あつ——ラウラ……それに教官たち、丁度良かった」

扉の前にいたラウラに驚きながらラインはナイトハルト達を見て喜ぶ。

「どうした？ 俺達に何か用か？」

ラインの姿は制服ではなく私服。

だがその腰には太刀が佩いてあり、ラウラとは別の何かを感じる。「すみません。今からクロスベルに行くので外出申請をお願いします」

「それはまた突然ですね。理由を聞いても良いですか？」

突然のラインの申し出に驚きながらトマスが聞き返す。

ラインはすぐにでも駅に向かって走ろうとするが、トマスの眼差しに一度深呼吸して頭を冷静にして説明する。

「先程、クロスベルにいる友人たちから助けて欲しいと連絡がありました……」

今クロスベルでは《D∴G教団》の残党によって行方不明者が多数、その中にはその知り合いの弟とアリオス・マクレインの娘さんなどが含まれている状況です」

「《D∴G教団》だと！」

思わぬ名前が出て来たことにナイトハルトが声を上げ、トマスが目を細める。

「またベルガード門の警備隊がその司祭に操られ、街には幻獣とでも呼ぶべき物理的な方法で倒せない魔獣が現れて混乱しているようです」

「なるほど霊的なものと戦うと言うのなら確かにライン君の力は有効ですね」

「はい。そういうわけなので今から俺はクロスベルに行ってきます……」

いつ帰って来れるかは分からないのでもしかしたら来週の授業に遅れるかもしれませんか——」

「学院については私の方で何とかしておきますが、まずいですね……」「まずい、ですか？」

トマスの口からもれた言葉にラインは首を傾げる。

「今日、最後のクロスベル行きの大陸横断列車は十分前に出たばかりです……」

列車で四時間はかかる距離ですから鉄道を使えないとなると、今か

らクロスベルに行く手段がありません」

「……………いえ、十分前に出たなら今から走って追い駆ければ追い付けます」

「何を言っているシユバルツァー？」

当然のように言い切るリインにナイトハルトは呆れる。

「そうよ……………ばかなこといつてんじやにやいわよ」

と、それにサラが同調して項垂れていた顔を上げる。

「あ……………代案があるからちよつとそこで待ってなさしやい……………ひつく」

呂律の回らない言葉とフラフラした足取りでナイトハルトの支えから離れてサラは学生寮に入る。

数十秒後。

開け放たれたままの扉の向こうから嘔吐音が聞こえて来て、また数秒後今度は水音を被る音が聞こえて来る。

「ふう……………お待たせ」

そして頭からずぶ濡れになつてすっかり酔いを醒ましたサラが現れる。

「おい……………バレスタイン。何をしてきた？」

恐る恐るナイトハルトはサラに尋ねる。

「胃の中のもの全部吐いて、冷たい水を頭から被ってきただけよ」

「サラ教官……………そんなオリビエさんみたいなことを……………」

「あたしのことの良いのよ……………」

それよりもクロスベルに行くなら旧校舎に資材運搬用のトレーラーがあるからラツセル博士に言つてそれを使わせてもらいましよう」

「その手がありましたか」

「トマスは学院長にあたしとリインの外出届けと事情の説明をよろしく……………」

ナイトハルトは軍に掛け合つてガレリア要塞を通る許可とベルガード門の調査をするように連絡してちょうだい」

「分かりました」

「了解した」

「リインはラッセル博士が泊まっている宿に行つてトレーラーの鍵を借りて来て、あたしは先に旧校舎へ行っているわ」

「はいっ!」

矢継ぎ早に出すサラの指示に三人はすぐに動き出す。が、それに蚊帳の外になつていたラウラが声を上げた。

「待つてくれリイン! 今からクロスベルつて、それじゃあ明日の旧校舎探索は——」

「悪いラウラ。この埋め合わせは必ずするから、クリスに明日のことは中止だつてことを伝えておいてくれ」

約束を違えるのかと、責める言葉をラウラはぐつと堪える。

《D::G教団》なるものはラウラには分からないが、サラやトマス、ナイトハルトの反応を見る限り相当な事件が起きているのだと分かる。

子供が攫われたこと。

それだけでもどちらの方が優先度が高いかは明白だった。

しかしこの一週間、明日のために抑えてきた胸の内の昏い焔がそれをただでは呑み込ませてくれなかった。

「リイン、私も一緒に連れて行つてくれ!」

「ラウラ……?」

「よく分からないが、凶悪な犯罪者が相手なのだろう? だったら私の剣が役に立つはずだ。だから——」

「却下よ。どんな理由があつても今のアんたを連れて行けないわ」

「サラ教官!」

「ラウラ、あんたは何を一緒に一緒に行くつもり?」

「何をしに……そんなの敵を倒しに行くに決まっているではないですか」

「そう……ならやつぱり同行は許可できないわね。そもそもあたしたちは敵を倒しに行くんじゃないんだから」

「……何を言っているんですか? いったい何が言いたいんですか!」

いつの間にかサラが同行するのが前提で話が進んでいるのだが、リインは口を挟まずサラに任せる。

だがサラの言い分が全くラウラには理解できなかった。倒すべき敵がいるのなら、それを倒すことが何故間違いないのか。

「悪いけど悠長に説明している暇はないわ。帰って来たら答え合わせをして上げるからそれまで大人しく待っていていなさい」

「っ……………」

まるでお前など力不足だと言わんばかりの態度にラウラは反論できず歯を食いしばり、血が出る程にきつく拳を握り締める。

「ラウラ……………」

「気遣いは無用だ。邪魔をしてすまなかった……………」

全精力を込めてそれだけをラウラは絞り出し、踵を返す。

そんなラウラの背にリインは何と言葉を掛けて良いのか考える。

「リイン、行くわよ」

サラに促されてリインは後ろ髪を引かれながらも駆け出した。

「……………」

一人、学生寮の前に取り残されたラウラは初めて己の無力さに涙をこぼした。

・*

旧校舎。

そこはラッセル博士の実験場とも言えるその場で一台のトレーラーが緊急発進———することはなかった。

その代わり。

「システム正常に起動。問題ありません」

狭い運転席の中で、ティータの肩に乗る《空の至宝》の意志を宿したリンが淡々と報告してくる。

「こっちは問題ないそうです。リインさん、サラさんそちらは大丈夫ですか？」

スピーカーを通してティータが尋ねる。

「ああ、こっちは大丈夫だ」

「えっと……本当にこれで行くの？」

返ってきたのは二種類の声。

何の緊張も感じないリインの声と、腰が退けたサラの声。

「大丈夫ですよ。あのレオンハルト——ロランス少尉も同系統の機体に生身で乗って大立ち回りをしていたんですから、俺達にだってできるはずですよ」

「いやいやいや、あんなびっくり超人を基準に考えるのはおかしいから！」

「えっと……それならサラ教官は残りますか？　呼ばれたのは俺だけですし」

「……………そう言うわけにはいかないわよ……」

ミシエル——クロスベル支部とは連絡がつかないし、あの《殲滅天使》がリインに助けを求めたっていう事はそれだけ逼迫した事態っていうことでしょ？

あたしは確かに遊撃士を休業してるけど、だからって事件を見て見ぬ振りすることなんてできないわよ」

「サラ教官……」

身体を震わせながらも気丈に振る舞うサラの考えはリインにもよく分かる。

「あのあの、それならサラさんが中に入りますか？　わたしは外でも良いですけど」

「そんな情けないことするくらいなら降りてるわよ……ええい、女は度胸っ！　ティータちゃん！　やっちゃって！」

半ば自棄を起こしたようにサラは叫ぶ。

「えっと……」

「サラ教官のことは俺が何とかするから、ティータは操縦に集中してくれ」

「わ、分かりました。それじゃアリンちゃん、よろしくお願いします」

「了解しました。反重力術式の展開を完了。タイミングはティータ・ラッセルに移譲します」

呼びかけたリンはやはり淡々とした言葉を返して来るが、テイータはそれを気にする余裕はなかった。

いつもはもう寝ている時間。

しかし、今は胸が高揚して目が冴えている。

「今行くよレンちゃん。エステルお姉ちゃん……」

決意を胸に秘め、テイータは叫ぶ。

「トロイメライ・ルージュツ！ 発進しますっ！」

その日、帝国の空に深紅の竜機が舞い上がった。

16話 魔都I

《D∴G教団》。

それはかつてゼムリア大陸全土に存在していた、女神の存在を否定する狂気の教団だった。

各国から多数の子供を誘拐して《儀式》と称して非道な実験を行い、そのあまりにも凶悪な在り方に各国の警察や軍隊、遊撃士協会が共同戦線を張って殲滅作戦を行う程だった。

しかもそれだけにはとどまらず《結社》や《星杯騎士団》までも秘密裏にその作戦に協力する程にその教団はあまりにも度が過ぎていた。

六年前、ゼムリア大陸各地に点在する《D∴G教団》の拠点に対して一斉に襲撃作戦が決行された。

各拠点での戦闘は熾烈を極め、捕縛された信者の大半が自決し、更に《儀式》の犠牲になった子供達の無残な遺体が大量に発見される、まさに地獄絵図そのものの光景が繰り広げられた。

この作戦によって本体を崩壊させることができたものの、《教団》そのものは完全に潰すことは叶わなかった。

そしてその生き残った《教団》の司祭がクロスベルの地で再起を図っていた。

・*

「クルト、もう良いっ！俺達のことよりもキアを連れて逃げてくださいっ！」

「馬鹿なことを言わないでくださいっ！」

IBCビルの前、クルト・ヴァンダールは魔導剣を固く握りしめてロイドに言い返す。

「はははっ！逃げてても良いがそんなことをしたら彼女たちがどうなるか分かっているかな？」

ロイドの背後で警備隊の女性が自分のこめかみに導力銃を突きつ

けながら醜悪な笑い声を上げる。

女性は《D∴G教団》の司祭を名乗る男に何処からか操られてきた被害者。

そしてそれは彼女だけではなかった。

彼女の背後にずらりと並ぶ警備隊員は一樣に空ろな顔をしていつでも自害できるようにされていた。

「っ——っ……」

さらにはクルトの背後でエリイが導力銃を顎下に突きつけて抵抗するように体を震わせていた。

「クルト遠慮はいらない！ 俺達を倒せっ！」

そう言いながらランディがスタンハルバートをぎこちない動きでクルトに向けて振り下ろす。

「くっ——」

余裕をもってクルトはランディの一撃を避ける。

「もうやめてっ！ 行くからっ！ キーアが行くからもうやめてっ！」

「ダメですキーア！ 中に入ってください」

クルトの背後、IBCビルの玄関先でキーアが泣き叫び、ティオがそんな彼女を抱き締めて押し留める。

「っ——」

「おっと《風の劍聖》殿、不用意な行動は慎んでもらえるかな？ 私もこんな幼気な子供の手を血で汚させたくはないからね」

「貴様……シズクの声でしゃべるなっ！」

彼らの傍らに棒立ちすることを強いられているアリオスは自分の目の前に太刀を抱えるようにして立ち塞がる娘に目を伏せて呪詛を吐く。

シズクの身体や警備隊、さらにはクロスベルで暴れているマフィアに魔獣を操る者こそが《D∴G教団》の司祭、ヨアヒム・ギウンター。表向きは聖ウルスラ医科大学の准教授だった彼は《グノーシス》と呼ばれる《教団》が造り出した薬を使って、マフィアの《ルヴァーチエ》、ベルガード門の警備隊を傀儡にした。

しかし、それだけに留まらず。医科大学の職員たち。

そして裏の顔を知らずに《グノーシス》の成分を調べて欲しいとやってきたロイド達は飲み物に混ぜる形で《グノーシス》を摂取させられた。

ロイド達が摂取した量は微々たるもので、完全に自我を奪われているマフィアや警備隊と違って意識ははっきりとしていて、身体の自由も本気で抵抗すれば鈍くなる。

だが、それは気休めにしかならなかった。

逃げ込んだIBCで籠城戦を行うものの、圧倒的な数の暴力にロイド達は屈しかけた。

アリオスの援軍が来て窮地を脱したかと思ったところで、その仕込みと病院から行方不明になっていたシズクが使われて今の状況に至る。

この状況で自由なのは、その時留守番をしていたクルトと《グノーシス》に抵抗力があったテイオの二人のみ。

勝敗はヨアヒムが動き始めた時点で決していた。

「くくく……御安心をキア様。貴女を誑かした大罪人はもうすぐ裁かれるっ！」

キアの悲痛な叫びを無視してヨアヒムは愉悦の笑みを浮かべるのだった。

・*

クロスベルの住宅街。

マインツ山道に続く道からおびただしい数の軍用犬と大型魔獣よりも二回りも大きな幻獣が街に向かって雪崩れ込んできていた。

「うりやああああああっ！」

「はあああああああっ！」

先行する魔獣の群れにエステルとヨシユアは一切怯まずに飛び込んで、棒と双剣が乱舞する。

街に入り込んだ魔獣を押し返す怒濤の勢いで戦う。

日が沈む前からすでに夜は深くなっているというのにその勢いは全く衰えない。

「秘技——幻影奇襲っ！」

魔獣を片手間に屠りながらヨシユアが一際大きい幻獣を全方位から斬りつける。

「鳳凰烈波っ！」

態勢を崩した幻獣にエステルがすかさず焰の一撃を叩き込む。

断末魔の声を上げて崩れ落ちる幻獣だが、それで終わらないことをエステルとヨシユアはこれまでの戦いで良く知っていた。故に——

「レンツ！」

エステルは一時休戦している彼女の名前を叫ぶ。

「ゴルゴンブレスッ！　ダイヤモンドダストッ！」

時間差で駆動した二つのアーツが同時に下から石化のガスと上から凍てつく冷気が放たれる。

二つの導力魔法が重なり石と氷で復活しようとしていた幻獣を固める。

「うわっ!?　トヴァルさん並みの早さじゃない」

レンの導力魔法にエステルは驚く。

「そんなことよりも次が来るわよエステル！」

「ああ、もうっ！　本当に一息つく暇もないわっ！」

昼間から戦い続けているエステルは肩で息を整えながら棒を構え直す。

さらには赤い目を光らせた軍用犬が血を流しながらも起き上がり、エステル達を取り囲み、唸り声を上げて威嚇する。

「こいつらまで——まさか本当に不死身なのっ!？」

「原理は幻獣と同じよ！　《グノーシス》を投与されて操られてるけど、そっちは肉体があるからバラバラにすれば動けなくなるはずよ！」

「エステル、軍用犬は僕が相手をする。君はレンと一緒に幻獣をお願い」

「オツケーツ！」

エステルはその場にヨシユアを残し、山道から街に入つてこようにとする幻獣に向かつて駆け出した。

他の西クロスベル街道や東クロスベル街道、ウルスラ街道にもそれぞれ死なない幻獣が一体ずつ。

しかし、マインツ山道には計五体。

内の三体は《パテルⅡマテル》が抑え込んでいるが、まるでそれを見越した戦力配分のようにも考えられる。

まるで誰かの掌の上で踊っているような気がしてレンは苛立つ。

「あんた達と遊んでいる暇なんてないんだから……」

したくもないエステルとの共闘を呑み込んだのは行方不明になったコリンを少しでも早く助け出すため。

そして、その子の両親がいる住宅街に幻獣が入り込もうとしている事態も見過ごすわけにはいかなかった。

ただでさえクロスベルの街は至る所で操られた警備隊やマフィアが暴れ回っている。

ここで魔獣や幻獣の侵入を許したら、街はさらなる混乱に陥るのは明白だった。

「だから——レンの邪魔をしないでっ！」

レンの苛立ちが籠った一撃が幻獣の首を刈る。

これで数分の時間が稼げると、レンは次の敵を探そうとして衝撃に吹き飛ばされた。

「え——」

吹き飛ばされながら聞いたのは鳥の羽音。

いつの間にか上空には無数の、目に赤い光を宿した鳥型魔獣と幻獣が飛び交っていて、獲物を仕留めて油断したレンを急降下して爪で攻撃を浴びせたのはそれだった。

「レンッ!?!」

背中を切り裂かれ地面に転がったレンにエステルは眦を上げる。

「こんのおっ！ 邪魔っ！」

エステルは怒りの一撃をその幻獣に叩き込むが怯みはするがそれだけだった。

「っ……」

攻撃を喰らった痛みを切っ掛けにそれまで蓄積していた疲労が一気に噴き出しレンの身体を苛む。

しかし、それを押しして大鎌を杖にして立ち上がるが、目の前に石と氷で封じた幻獣がそれらを破ってレンの前に立つ。

「……あっ……」

巨大な腕がレンを押し潰すために振り上げられる。

「レンッ——がっ——」

「くっ——邪魔をするなっ！」

レンのフォローに走ろうとするエステルが幻獣の突進を食らう。

ヨシユアは群がる軍用犬の中に吞まれる。

《パテルⅡマテル》が反応するが拘束が緩んだ三体の幻獣が暴れて倒される。

誰もがレンに向けて、手を伸ばすが誰も駆けつけることはできない。しかし——

「うああああああっ！」

悲鳴のような雄叫びのような声と共に連続した銃弾がレンの目の前の幻獣に撃ち込まれた。

威力の低い導力銃なのか、痛痒も感じた様子もなく幻獣はレンからその男に視線を向ける。

「っ——」

レンと幻獣の間に立ち塞がるように駆け込んできたスミレ色の髪の毛は護身用の導力銃のマガジンを交換して幻獣に銃口を向けて乱射する。

「……………どう……………して……………」

レンは今の状況を忘れ、その背中に見入って呆然と呟く。
そして次の瞬間、懐かしい匂いに包まれ抱き締められた。

「っ——」

覆い被さるように抱き締められ、顔は見えない。

しかしそれでもそれが誰なのかレンはすぐに分かる。

彼が、彼女がここにいるはずはない。確かに戦場は彼らの家から近

いがそれでも見える範囲ではなし、魔獣が暴れているところに来るはずもない。

なのに彼らはまるで導かれるように現れた。

聡明なレンの頭脳をもつてしても、その疑問に対して答えを出せない。

「大丈夫だから大丈夫だから……」

目をきつく閉じ、レンに覆い被さるように抱き締める女性は身体を震わせながらもレンに安心させる言葉を投げかける。

「どうして……？」

繰り返す自問自答に答えは出ない。

導力銃を乱射する男は瞬く間に弾を撃ち尽くし、空打ちし震えながらも歯を食いしばって幻獣の前に立ち塞がる。

「何をしているの!?! レンの事なんて放っておいて逃げなさい!」

我に返ったレンが叫ぶ。

「あなた達には攫われた男の子がいるんでしょ!? だったらレンなんか放っておくべきなのよ!

レンはあなた達よりずっと強いんだからっ! だから——だから

……」

自分でも何が言いたいのかわからずレンは口ごもる。

「レンちゃんっていうのか……大丈夫だ。君は絶対に死なせないっ」

返って来たのは穏やかな言葉だった。

何故レンが二人に子供がいるのを知っているのか、それを彼らが疑問に感じている余裕はない。

攫われた子供のことを——殺してしまった子供への誓いを思えば、見ず知らずの子供など放っておいて自分たちが生き延びることだけを一番に考えなければいけないはずなのに彼らは危険と分かっているところに現れた。

「レンッ!」

「ハイワースさん」

ハロルドが割って入ってできた数秒でエステルは幻獣を押し返し、ヨシユアは軍用犬を切り払う。

だが、エステルは別の幻獣の攻撃に吹き飛ばされ、ヨシユアは首だけとなっても噛みついてくる軍用犬を振り切れない。

「やめて……」

きつく抱き締める抱擁からもがき顔を出すと、そこには懐かしい背中の中の向こうに改めて腕を振り上げた幻獣の姿があった。

次の瞬間にはその凶悪な爪を携えた腕が振り抜かれ、レンを諸共に三人纏めて薙ぎ払われるだろう。

わずかな刹那でレンは打開策を探す。

レン自身はまだ体が痺れて動けない。

エステルは余力を出し切る勢いで全力で目の前の幻獣を倒しにかかるが、一撃が致命打にならず幻獣を止めるには至らない。

ヨシユアは手足を首しかない軍用犬に噛みつかれながら、分け身だけを飛ばしてレン達の救援に走るがその速度はいつもの半分もない。

《パテルⅡマテル》の初動ではどうしても間に合わない。

ここにはない可能性を模索する。

ケビンやリインに救援を要請したのは二時間程前。

ケビンはタイミング悪く、アルテリア法国にいて例えメルカバを使ってもすぐには到着できない。

リインもトリスタからは鉄道で四時間。さらには《グノーシス》で汚染されているベルガード門を通ることを考えればさらに時間は掛かるかもしれない。

「……やめて……」

明晰な頭脳が無情な答えをレンに突きつける。

二人の身体を盾にして自分だけが生き残る。

そして例えこの瞬間生き残ったとしても、その後の追撃にレンが生き残る術はない。

「逃げて……お願いだからあなた達だけでも逃げてっ！」

レンの悲痛な叫びにハロルドは応えない。ソフィアはなお一層にレンを抱き締める力を強くする。

幸せになると誓っていたはずなのに、彼らには生きなければならぬ理由も執着もあるはずなのに、それでも彼らは躊躇うことなく自分

たちの身を盾にする。

「誰か——助けてっ！」

レンが執行者になってから初めて、嗚咽を交えて強く懇願する。

エステルとヨシユアは全力から更に力を振り絞り、それぞれ手に持つ棒と双剣を幻獣に投げつける。

棒の一撃は目の前の幻獣を仰け反らせ、双剣は二つの目に突き立ち視界を奪う。

妨害を受けた幻獣は怯んだものの、何の影響も無い上空の鳥たちは一斉にレン達に向かって降り注ぎ——焰の剣閃に纏めて薙ぎ払われた。

「え……？」

夜のクロスベルを焰が明るく照らす。

「何が——」

レン達が助かったことに安堵しながらも思わずエステルとヨシユアは呆然と空を見上げる。

焰に照らされた空。

まだ鳥型魔獣が多い空の中に一際大きな紅い影がエステル達の頭上を旋回して、何かを落とした。

「へ……？」

次の瞬間、白い髪の少年がレン達の前にいる幻獣の頭上に太刀を突き立てた。

エステル達の攻撃をいくら受けても再生を繰り返し、何度も立ち上がって来ていた幻獣は、断末魔の声を上げながらあっさりと霞となって消滅する。

霧散した魔獣の上から地面に危なげなく着地した少年はそのまま、赤い刀身の太刀を無造作に一閃すると、その剣風を受けた軍用犬たちは糸が切れたように倒れていく。

そして倒した魔獣たちを一顧だにせず、次の瞬間には一足でエステルの前に踏み込んで見せると、太刀を一閃しエステルの背後に迫っていた二体の幻獣を一息で斬り伏せる。

その幻獣も先程と同じように霞となって消滅し、周囲の脅威をとり

あえず排除した事を確認した白い少年——リイン・シユバルツァーは顔を上げた。

「お待たせしました、エステルさん達」

「いやいやいや……お待たせしましたって……」

エステルは状況を忘れて首を振る。

まだ彼に連絡を取って二時間ほどしか経っていない。

彼がいる帝国のトリスタからクロスベルまで鉄道を使っても四時間掛かる。

さらには帝国側の境界になるベルガード門が敵の手に落ちている以上、それ以上の時間が掛かるとエステル達は想定していた。

根性論でどうにかなるものではないとエステルも分かっていただけに、半分の時間でクロスベルに現れたリインに喜ぶ前に戸惑う。

「レンちゃん！ エステルお姉ちゃん、それにヨシユアお兄ちゃんっ！」

「その声はティータ——って紅いトロイメライツ!？」

リインに遅れて空から降りてきた機械人形にエステルは今度こそ驚く。

「トロイメライ……ヴァレリア湖からサルベージできたって聞いてはいたけど……」

そうか。確かトリスタで研究しているって話だった……いやでもたった一ヶ月でドラギオンの飛行ユニットを作ったのか？」

流石のヨシユアも思わぬ機体の登場に目を丸くする。

ふわりと重力を感じさせないほどに静かに着地したトロイメライの頭部ユニットが上に開き、その中から先ほどの声の主であるティータが顔を見せる。

そして同行していたのはリインとティータだけではなかった。

着陸したトロイメライの腕から地面に飛び降りると同時に安堵の息を吐いたサラが、顔をすぐに引き締めてエステル達に向き直る。

「救援要請を受けて来ました《A級遊撃士》サラ・バレスタインと《G級遊撃士》リイン・シユバルツァー、そして民間協力者のティータ・ラツセルよ……」

両名共に休職中の身ではありますが、一時的な復帰を認めてもらえますか？」

「あ……はい。エステル・ブライトとヨシユア・ブライト両名が証人としてお二人の復帰を認めます」

本来なら受付で復帰の手続きは必要になるが、エステルが承認する形で申請を口頭だけで済ませる。

正式な手続きは事後承諾になるが、これで二人は帝国の教官・生徒ではなく遊撃士としてこのクロスベルの戦いに介入する口実を固める。

しかし――

「《G級》……?」

思わずそう評されたリインの顔を見てエステルは首を傾げた。

それに釣られてサラとヨシユアもリインを振り返る。

「ええ……まだ正遊撃士になって何の依頼も達成してないから《G級》ね」

「うん……まあランクと実力は必ずしも比例するわけじゃないから」

微妙な顔をしたサラとヨシユアはエステルが感じた違和感に頷くのだった。

・*・

「ちっ……いい加減諦めたらどうだ?」

苛立ちが籠った声が他人の口を借りてクルトに向けられる。

いくら動きがぎこちないと言っても《グノーシス》によって肉体のリミッターを外されたロイドとランディの攻撃にクルトはいつまでも捌くことはできず一撃をもらったことを皮切りに徐々に追い詰められていた。

導力が切れた魔導剣は柄だけになっている。

導力が回復すればまた刃を展開することもできるかもしれないが、それを悠長に待っている余裕はない。

身体を血で染めながらクルトはそれでも刃のない柄を構えて、立ち

塞がる。

「クルト……」

「大丈夫です……ロイドさん……ランデイさん……もうすぐ……もうすぐですから」

不甲斐ない自分達を責めた顔をしているロイドとランデイにクルトは笑みを返す。

そうもうすぐ。

視界の端、クロスベルの西の空が一瞬だけ焰に照らされた瞬間、クルトはそれが何なのか直感で理解した。

彼が来ればこの絶望的な状況をひっくり返すことができる。

根拠はないがクルトはそう確信していた。

「ふん！ 何がもうすぐだ。勝敗は戦う前にすでに決しているというのに無駄な足掻きを……これだから居もしない女神の奇蹟を信じる愚か者は困る」

ヨアヒムがボロボロのクルトを嘲笑う。

——何とでも言え……

ヨアヒムの言葉に何も返さずクルトは息を整える。

そんな歯牙にもかけない態度が気に障ったのか、それともしぶといクルトに飽きたのかヨアヒムはロイド達に命令する。

「もういい、殺せ」

それまで曖昧だった命令と違い、明確な殺意を伴った言葉はそれまで以上の強制力でロイドとランデイの動きを縛る。

「ぐっ——がつ——」

「クルト——もう良い俺達を殺せ。これ以上はお前が死んじまうっ！」

勝手に動く体に諍えずただ抵抗するしかない状況にランデイが自分を殺せと叫ぶ。

「馬鹿なことを言わないでください……御二人もあの焰を見たなら分かるはず……」

だったら後少し持ちこたえるだけで僕の勝ちなんです……だからそんなこと言わないでください……

それに……今良い所なんです……何かが掴めそうで……」
場違いと分かっているにもかかわらずクルトは口元に笑みを浮かべてしまう。
相対しているのは敵ではなく仲間。

背中には守るべき少女。

勝つてはいけない戦いであり、同時に負けてはいけない戦い。

道場では決して知ることができなかった仲間の命を背負う責任の重さは途轍もなく重いのに、それ以上に体はどれだけ傷付いても決して倒れないという気概だけで動いてくれる。

それがとても心地よく感じられ、ただ速いだけのロイドとランディの攻撃をクルトは自分でも信じられないくらいに力まずに捌けていた。

「頃合いか……」

彼らの戦いを見守っていたアリオスは唐突に呟いた。

「っ——動くなよ《風の剣聖》。一步でも動いたらこの娘の命はないぞ」

呆然と立ち尽くすシズクに警備隊の男が見せつけるように銃口を突き付ける。

アリオスはそれを一瞥して、言われた通り動くことなくロイド達に話しかける。

「情けないものだな」

「ア、アリオスさん!？」

掛けられたのは罵倒の言葉。

ロイドは何も言い返せずに押し黙る。

「無警戒で《グノーシス》を飲まされたこと……これはまあ良い。だが今の体たらくは何だ?」

「あんたが言えることかよ!?! 娘を預けている病院の先公が教団関係者だったのに気付かなかったのはあんたも同じだろうが!」

「ああ、それに関しては返す言葉もない……」

「だがお前たちが今無様に操られていることは別問題だ」

「何だと……俺達だって必死に——」

「全力で諍つていると言うのなら、何故《ウォークライ》を使わない?」

「それは……」

アリオスの指摘にランディは息を呑む。

「お前が何を畏れているかは知らんが、お前に流れている《猟兵の血》は所詮はただの《力》だ……」

それを認めない限り、お前は今の場所から一步も進むことはできないぞ」

「それを使ってクルトに襲い掛かったらどうなるか、分からないオツサンじゃねえだろ!？」

「ふん……お前たち程度で潰されるような男か？ お前は結局、仲間も自分も信用していないだけだ」

「っ——」

「できないことを猟兵だったからと言いつてするのは簡単だ。だがそれではいつまで経っても先に進むことはできないぞ」

痛い所を突くアリオスの言葉にランディは押し黙る。

「それからロイド。兄の後を継ぐと言っておいてその程度か？ お前にガイと同じバニングスの血が流れているのならその程度の呪縛は振り払えるはずだ」

「バニングスの血?」

「ガイから聞いていないのか？ バニングス家に伝わる特別な力があることを……」

知らないなら知らないでそれで良いが、それがお前たちの限界だと言うのなら俺は何も言わん。後は俺達——遊撃士に全てを任せろんだな」

らしくもないアリオスの挑発の言葉に二人は押し黙る。

「っ——黙って聞いてりゃ好き勝手にべらべらと——」

スタンハルバートを振り被り、踏み出した足を強引に押し留めランディは歯を食いしばってアリオスを振り返って睨み付ける。

「どうなっても知らねえからなっ!」

ランディは内に秘めた闘気を爆発させ、《グノーシス》の強制力に諍う。

「兄貴……父さん、母さん……俺の血に本当にそんな力があるなら、み

んなの力を今ここで貸してくれっ！」

隣に立つランディの《ウォークライ》を真似してロイドもまた闘気を解放する。

「オオオオオオオオオオッ！」

「ハアアアアアアアアアッ！」

体力が一気に削られる。高めた力の反動で意識が飛ぶ。

それらを無理やり抑え込み、さらに力を絞り出す。

クルトがあれ程までに身を削り、身体を張ってくれている。

ならば自分たちもそうするべきだと、キアをこれ以上苦しませるなら死んだ方がマシだと言わんばかりに二人は命を燃やす。

「どうした？　それが限界か？　リインならその程度の軛、簡単に振り払うぞ」

「ふっ——ぎげんなっ！」

「ロイド、ここでガイを超えて見せろ」

「っ——はいっ！」

アリオスの発破に二人はさらに力を高める。

そして——何かが砕ける音が響き渡った。

二人はそのまま力尽きたようにその場に膝を着いて肩で息を吐く。

「はっ……あーやだやだ。こんなの俺のキャラじゃねえっての……」

「っ……そんな軽口を言っている場合か……」

生と死の境界を跨いだというのに真っ先に軽口を叩くランディにロイドは思わず笑みをこぼす。

そんな二人にアリオスもまた笑みを持って言葉を掛ける。

「ふっ……覚えておけ。それが《理》と呼ばれる極致の一端だ」

全てを出し切った二人をアリオスが称賛する。

「馬鹿なっ！　矮小な人間如きが《グノーシス》の軛を自力で解いただと！　あり得ないっ！」

対して想定外のことにヨアヒムは狼狽える。

「ロイドさん……ランディさん……」

「すまなかつたクルト。もう大丈夫だ」

身体に漲る力を感じながらロイドは警備隊に向き直る。

「もうこいつの好きにはさせない。エリイもすぐに解放する。だから——」

「だから何だと言うんだ？」

自信に満ちたロイドの言葉をヨアヒムが遮る。

「いい気になるなよ。確かに貴様らが《グノーシス》の軛を外したのは意外だったが、それは投与した《グノーシス》が少量だったからに過ぎない！

人質はまだまだたくさんいる。《風の剣聖》っ！ 娘を死なせたくなければ奴等を殺せっ！」

まだ自分の優位は崩れていないとヨアヒムはシズクを人質にしてアリオスをけしかける。

「……………八葉一刀流の四の型は《斬る》ことに特化した型だ」

しかし喚き散らすヨアヒムを他所にアリオスは前触れもなく語り始める。

「この型を極めればあらゆるものを斬ることができるようになる……岩だろうと鉄だろうと魔法だろうと斬ることができる。それが《四の型》の真髄だ。俺が極めたのは《二の型》だが——」

「そんなことどうでも良いさっさと言われた通りにしろっ！」

瘡癩を起したように叫ぶヨアヒムの声にアリオスは肩を竦める。

「斬る」

「どうやら娘の命はいらぬようだな。なら——」

「お前はもう何もできん。既に俺が斬っているからな」

シズクが抱えていたはずの太刀は気付けば鞘だけになっており、いつの間にかアリオスの手には太刀が握られていた。

「は……？ がはっ——」

アリオスが太刀を握っていることを遅れて理解したヨアヒムは次の瞬間まるで斬られたかのような悲鳴を上げ、操られていた警備隊たちは一斉に糸が切れたようにその場に折り重なって倒れる。

その中でアリオスは崩れ落ちるシズクを優しく抱き留めていた。

「なっ——」

「おいおい嘘だろ」

決死の覚悟で《グノーシス》の呪縛を打ち破ったロイドとランディは絶句する。

「そんなことができるなら勿体付けずにさっさとやってくれば良いじゃねえか」

「別に勿体付けたわけではない。俺は《四の型》を極めたわけではないから奴の霊体を見極めるのに時間が掛かったただけだ……」

そういう意味ではクルトの時間稼ぎは助かった。感謝する」

「あ……いえ……恐縮です」

格上の剣士であるアリオスに頭を下げられクルトは戸惑い、その場に崩れ落ちる。

「クルト!？」

「だ、大丈夫です……気が抜けて力が抜けただけですから」

精一杯の虚勢を張るが、痛めつけられた体はもう動かさそうにない。

「ロイドッ！ ランディッ！ クルトッ！」

そこにキアの声が響く。

一同が声に振り返るとIBCのビルから飛び出してきたキアがロイドに体当たりするように抱き着いた。

「ロイド……みんな……うう……」

「ごめん……心配かけたな」

ロイドのお腹に顔を埋めて泣くキアの頭をロイドは優しく撫でる。

その光景にクルトはこの上ない達成感に満たされる。

「まったく無茶をしますね。とりあえず治療術を掛けるので大人しくしててください」

キアに遅れてやってきたティオは解放されたエリイを診てからロイド達と合わせて範囲型の治療術を発動する。

「はあーとりあえずこれで一件落着か……」

治療術に体を癒されながらランディはIBCの坂に折り重なるように倒れる元同僚たちを見て複雑な表情を浮かべる。

自分たちが操られる前に連戦することになったが、酷いものだった

た。

身体が壊れることを厭わず、腕を折り、血反吐を吐きながら戦わされ続けていた。

もしかすれば死人がいるかもしれない。

嫌な予感にランディは顔をしかめる。

「いや、期待させてしまつて悪いがヨアヒム・ギユンターはまだ生きている」

「アリオスさん？」

「俺が《四の型》を皆伝していればあの場で終わらせることが出来ていただろうが、そこまで深い傷を与えることはできなかった……」

その証拠にこの周辺の傀儡の糸は切れたが、まだ街中では戦闘音が続いている」

「あ……」

確かに耳を済ませれば遠くからまだ銃撃戦の音が聞こえて来る。

「どうやら全く別の場所から操つていたみたいですね……わたしの知覚範囲外、クロスベルにはいないと思います……」

ただマフィアがこちらに目標を切り替えてくる様子はないので、最初に与えられた命令を続けているだけのようです」

「つまりどういうことだテイオすけ？」

「推測になりますが、アリオスさんに斬られたことで霊体にダメージを負つて命令を更新することができなくなっているのだと思います

……

どれくらいの間かは分かりませんが、今は彼らを人質に使われることはなく、ヨアヒム本人を直接捕まえる絶好のチャンスだということですよ」

「チャンスつて言つても、肝心のヨアヒムの居場所が分からないのに」「遊撃士の方では何か掴んでいないんですか？」

「ああ、行方不明者の搜索は行つていたが各地に出現した幻獣に掛かりきりになつて調査は進んでいなかった」

「ふふ……それについては私が教えて上げようじゃないか」

唐突にロイド達の会話に第三者の声が割り込んだ。

折り重なる警備隊達の身体を踏みつけて坂を上って来たのはロイド達を知る青年だった。

「ア、アーネストさん」

「やあ、エリイ……二ヶ月ぶりだね」

二ヶ月前、市長暗殺容疑で逮捕されながらも忽然と姿を消したアーネストは親し気に話しかけた。

「まずは賞賛の言葉を贈らせてもらえるかな……」

僅かな量だったとはいえ《グノーシス》の呪縛を自力で解いたのは見事だった……

それに《風の剣聖》の妙技、流石はあのリイン・シュバルツアーの兄弟子なだけある」

「アーネストさん……？」

余裕の態度でロイドやアリオスを褒めちぎるアーネストにエリイは違和感を覚える。

「さて、それではゲームの説明をさせてもらおう。役者も揃ったようだからな」

そんなエリイの眼差しを無視してアーネストは場違いとも思える言葉を口にして、坂の下からやってきた一同を嬉しそうに見下ろした。

17話 魔都Ⅱ

「それじゃあティータ、サラ教官。エオリアさん達への援護はお任せします」

リインは《聖痕》の力で造り出したグノーシスの力を破壊する効果を付与した《魔槍ロア》をティータとサラに預ける。

「ええ、すぐに片をつけておくからリイン達は特務支援課っていうのの援護に行つて上げなさい」

「それじゃあレンちゃん達、また後でね」

紅いトロイメライが飛び立つのを見送つてリインはエステル達に振り返る。

「二人共、大丈夫ですか？」

「うん……大丈夫だけど」

「何て言うか……」

歯切れの悪い言葉でエステルとヨシユアはリインに応える。

日が暮れる前からずっと戦つていて当然身体は傷だらけ、体力気力共に限界寸前だった二人は全快した体に唸る。

《空の至宝》でもあるリンが使う導力魔法の治癒術は彼女の体がゴスペルの役割を果たしているのか、通常のアーツの効力を何倍にも高めている。

以前リベルⅡアークでの最終決戦の時に経験したもののほどではないが、それでも疲れ切った身体が戦えるくらいに回復してくれたのは良いことなのだが同時に複雑な気分だった。

「あらあら、二人とも贅沢なことを言ったら女神の罰が当たるわよ」

「レン……もう良いの？」

そんな二人を笑うレンにエステルは聞き返す。

「ええ、あの二人にはもう今夜は外に出て来ちゃダメってちゃんと言い含めておいたわ……」

もうレンが普通の女の子じゃないって説得するのに苦労したわ」

大鎌を弄びながら文句を言うレンの言葉は何処か弾んでいた。

その気になれば暗示などで二人を意のままに操り、先程の出来事も

夢だったと思い込ませて帰すこともできただろう。

しかしレンはそれをせず、何か感じながらも追及せず、一人の女の子としてレンを心配するヘイワース夫妻を無碍にしなかった。

「ぐす……うぐつ……ひつく……」

「ちよ!? どうしてエステルが泣くのよ!?!」

「だって……だって……レンが捨てられたんじゃないんだって……ちゃんと愛されていたんだって分かって……うううう……」

ヘイワース夫妻の前では耐えていたエステルはこれ以上耐えられないと言わんばかりに泣き出してしまう。

「ばかみたい……ばかなんだから……」

そんなエステルからレンは顔を逸らし、ヨシユアは慰めるようにエステルの肩に手を置きながらレンの態度に苦笑する。

「だいたいまだ終わってないのよ……あの人達の子供を助けるためにエステル達と協力することにしたんだから泣いているなら置いていくわよ」

「そうね……まだ何も終わってないわよね」

レンの言葉にエステルは涙を拭って切り替える。

「よーしっ! リイン君も来てくれたし、誰が相手だろうと負ける気はしないわ! コリン君も失踪者も全部助けてこの事件を解決してやるんだからっ!」

そのエステルのやる気に満ちた声にリインは懐かしいものを感じながら今後の方針を尋ねる。

「それで《D::G教団》の潜伏先は分かっているんですか?」

「う……」

リインの質問にエステルが苦い呻きを返す。

「実は搜索を始めたところで幻獣が現れてそれどころじゃなかったんだけど——」

ヨシユアはそう言いながらレンを見る。

「ええ、レンはもう目星はつけてあるわよ……」

犯人の名前はヨアヒム・ギウンター。ウルスラ病院の准教授をしていた男よ……

潜伏先の候補は二つ、アルモリカ村の古戦場奥の《太陽の砦》とマインツ山道中腹にある《月の僧院》……

「どうやら失踪者を二つに分けて捕まえているみたいね。あの子どもどっちにいるかまでは分からなかったわ」

「《太陽の砦》と《月の僧院》か……どっちも入ったことはなかったけど、それならまずはアリオスさんや他のエオリアさん達と合流しますか?」

「あつ、それなんだけど今回の事件はロイド君達と共同戦線を張っているの。だから——」

エステルという言葉を遮るように装甲車が街中だというのに猛スピードで現れ、エステル達の前に急ブレーキをかけて止まる。

そして銃火器で武装した警備隊が表情の抜けた顔のまま装甲車から降りると、一斉に銃口を向けてきた。

「なっ——!?!」

突然、警備隊に銃口を向けられたエステルが固まる。

だが、引き金が引かれるよりも速くヨシユアがエステルを、リインがレンを抱えて射線から逃れる、物陰に隠れる。

「何なのよ。何で警備隊があたしたちに攻撃するのよ!?!」

「どうやら操られているみたいだ……《グノーシス》、まさかこんなことまでできる薬だったとは思わなかったな」

物陰から警備隊の様子を盗み見てヨシユアは肩を竦める。

「リイン君。《聖痕》を斬る要領で何とかできないかな?」

「やってみます」

レンを置いてリインは駆ける。

左右に駆け銃弾を散らし、警備隊に肉薄して目を凝らすと霊的な糸が見えた。

太刀を一閃し、一度にその糸を断ち切ると警備隊はまさしく糸が切れたようにその場に倒れる。

「フフ、流石リインね。エステルとは大違いね」

「ぐぬぬぬ……」

鮮やかな仕事ぶりにレンは賞賛しエステルと比べる。

「レン、これは教会の管轄の相手だから。エステルさん達が対処できないのは仕方ないことですから睨まないでください」

レンに煽られて対抗心を燃やすエステルの眼差しにリインは項垂れる。

「でも、リインは七耀教会の神父さんじゃないわよね？」

「法術に関しては時間がある時にルフィナさんから少し習っているだけだよ」

レンの疑問に答えながらリインは倒れた警備隊の女性に太刀をかざす。

「空の女神の名において聖別されし七耀、ここに在り」

紋章の代わりにした太刀が輝き、それに合わせて彼女を光が包む。

「識の銀耀——その力を我が元に」

光は治まり、リインは息を吐く。

「今のは？」

「この人の中の《グノーシス》の力を呪いの要領で俺の《識》の力に取り込ませました……」

思念の糸は切りましたが、元を断たないと繋ぎ直されてしまいますから」

「そっか………そういえばリイン君とヨシユアも《グノーシス》を使ったことがあったんだっけ？ それって大丈夫なのこの人達みたいに操られたりしないの？」

「俺は問題ありません」

「僕も大丈夫そうかな」

二人は特にその兆候も感じずにエステルの疑問に答える。

「う………ここは………私はいっただい………」

処置をした女性は頭を抑えながら起き上がる。

「ここはクロスベル市街です。貴女はとある薬を服用されて操られていたんですが、覚えていませんか？」

「薬………？」

確か司令に新しい栄養剤を配られて………それから夢を見ていたように………確か特務支援課を襲撃して」

女警備隊員は頭を振って、意識を整えリインに頭を下げる。

「ごめんなさい。どうやら迷惑をかけてしまったみたいね」

「いえ、それよりも覚えているなら話は早いです。俺達は首謀者を探しに行きますのでこの人たちの拘束をお願いしますか」

「え？ その人達も治しちゃえば良いんじゃないの？」

「それでも良いですけど、その場合俺は戦えませんよ」

「あ、そっか……」

治すことはできるが、まとめてできるわけではない。

一人一人の時間もそこまで必要と言うわけではないが、空から見た限り操られている人間は百を超えて千に届くかもしれない。

それを逐次治療してはキリがない。

「ええ。私たちの事は気にしないで良いわ……」

ここは私に任せてくれていいわ。それよりもIBCに行ってもらえないかしら？ ここに来る途中で誰かが頭の中で囁いていたの『IBCに行き、キア様を取り戻せ』って」

「キアちゃんが？ と言うことはロイド君たちもそこにいるっていうことかな……」

レン、悪いけどまずはみんなと合流することを優先しても良いかな？ コリン君を早く助けたいって焦っているかもしれないけど、確実にするために情報交換は必要だと思いの」

「異論はないわ。それにしても猪突猛進だったあのエステルがこんな風に成長するなんて」

「ちよつとレン、それってどういう意味よっ！」

感激した素振りを見せて揶揄うレンにエステルは声を上げて反論する。

緊迫した状況だというのにグダグダな空気でいられる二人にリインとヨシユアは顔を合わせて苦笑した。

・*

「特務支援課の諸君、そして遊撃士達、よくぞ試練を乗り越えてきた」

IBCに辿り着いたりイン達を出迎えたのはスーツ姿の青年、元市長秘書のアーネストだった。

まるで自分が首謀者だという不遜な態度。

ロイド達は唐突に出てきて行方をくらまして青年に面を食らっているが、そこに到着したりイン達四人は彼の顔を見るなり顔をしかめた。

「まさか……」

姿はもちろん、声も違う。

何よりも彼は《塩の杭》で滅され、《影の国》でもリインが斬って消滅したはず。

なのに《観の目》で出した答えは紛れもなく、蛇だと示していた。

「そういうことだったのね……」

「レン？」

不意に呟いたレンの言葉にエステルは首を傾げる。

レンもまたリインと同じ結論に達した顔をしかめた。

「各地で現れた幻獣……とりわけマインツ山道に偏らせた戦力配分をしたのはおじいさんの工房があったからじゃない……」

マインツ山道に近い住宅街、そこを攻めることでレンにリインを呼ばせるためだった。そうなんでしょ《教授》？」

「え……《教授》？」

レンの口から出てきた名前にエステルは首を傾げる。

そう呼ばれたアーネストは当然のようにその呼び名を受け入れて応じる。

「フフ……生半可な戦力では君はリイン・シユバルツァーを頼ることはないと思ったのでな。徹底的にやらせてもらったよ」

「まさかあの人達を唆したりしたんじゃない——」

「それは誤解だよ。誓って私はあの夫妻に何の干渉もしていない。彼らが君の下に現れたのは虫の知らせというものだろう」

まるでレンの事情を知っているかのような口振りにエステルは半信半疑で尋ねる。

「本当に《教授》——ゲオルグ・ワイスマンなの？」

「正確に言えば、ヨアヒム司祭が警備隊を操る要領で私もこの身体を乗っ取っているに過ぎないのだがね……」

《影の国》で《グノーシス》を大量摂取したことがこんな事態を引き起こすとは私も予想外だったが、これも女神の導きなのかもしれないね」

「乗っ取っている……」

「信じてもらえないかね？ それでは……リイン・シユバルツァー」

「何だ？」

警戒心を募らせながらリインは聞き返す。

「エステル・ブライトへの告白はうまくいったかな？」

「なっ!？」

完全な予想外の言葉にリインは絶句する。

「《リベルⅡアーク》で君の恋心を暴露してしまったことには私も心を痛めていてね……」

まあクロスベルのブライト姉弟の様子を見てると入り込む余地はないことは明白だが、やはりこういうことには区切りをつけないといけないと私は思うのだよ」

「大きなお世話だっ!」

アルバ教授の時のような笑みで諭して来るアーネスト——ワイスマンにリインは怒鳴っていた。

「そうよ！ あんたなんか言われなかったってちゃんとリイン君は告白してくれたわよ!」

「エ、エステルさん!？」

「ほうほう、ちなみにどんな告白をされたのかね？」

「え……それは——」

「わあああああああっ!」

聞かれたことに素直に答えようとするエステルの言葉を掻き消すようにリインは叫ぶ。

「おいおい、まさかあのエステルちゃんに告白するなんて何て命知らずな」

「流石はリインさんですね。ロイドさんと同じタイプの人だと思っ

いましたが、どうやら遙か先を行っている人だったみたいですね」

「そうね。ロイドはもう少しリイン君を見習うべきよね」

「え……何でこの流れで俺が責められているんだ？」

「これが若さか」

ワイスマンを挟んだ向こうで特務支援課の四人とアリオスがそんなことを呟く。

顔から火が出る程の羞恥にリインは狼狽し、取り繕うとして――

「そんなことはどうでもいいの」

大鎌の石突で地面を叩き、弛緩した空気をレンが元に戻す。

「コリン・ハイワースをヨアヒム・ギユンターに攫うように唆したのは《教授》、あなたね？」

「唆したとは人間が悪い……」

私はただ彼が心残りになっていた検体のことについて少し教えて上げただけさ」

「っ――」

「当時、教団を殲滅する作戦の裏で《結社》は表側の者たちが把握できていなかった拠点をいくつか殲滅した……」

レン、君がいた《楽園》と呼ばれるロツジは各地の有力者を取り込む資金源であると同時に、長期的に精神負荷を与え続けることを目的とした実験場だったのだよ」

「それは……」

「君はその中で天才的な適応力を開花させた……」

周囲にいた同じ境遇の検体の人格を《グノース》の投与を切っ掛けに自分のものとして取り込み、極限状態だった自分の人格を守るための贄としたのだから？」

彼はその実験データだけでも回収したかったと嘆いていたのでね。だから君と同じ血が流れている子供がいることを教えてあげただけさ……」

誓って私はそれ以上の事を言っていないよ」

「教授……あんたはっ！」

悪びれもせずに言い切るワイスマンにエステルが激昂する。

エステル達が知りたかったことを教えてくれたことに感謝する気持ちなど欠片も湧かない。

「そんなに邪険にしないでくれたまえ。むしろそうすることで彼が今回の事件で得た検体を使い捨てにしないように誘導して上げたのだから感謝してもらいたいものだ」

「検体を使い捨て？」

「分からないかな？」

君たちにとって、警備隊やマファイアよりも何の訓練も受けていない市民が、矢面に立たされ銃を持たせて暴れさせられる方が対処に困るだろうと思つての親切心だったのだがね」

妙な気遣いにエステルは思わず閉口する。

「貴様は先程、ゲームの説明をすと言つていたな。いい加減それを説明してもらおうか」

もう自己紹介は十分だと言わんばかりにアリオスが切り出す。

「ふふ……確かに旧交を温めるのはこれくらいにしておいた方が良いでしょうだね」

その言葉にワイスマンは頷き、アリオス達に向き直る。

「さて、特務支援課。そして遊撃士諸君、ヨアヒム・ギウンターの潜伏先を知りたいのだから？ ならば私が教えて上げようじゃないか」

「……………は？」

突然のワイスマンの言葉にロイド達は呆ける。

「ふむ……そんなに驚くことかな？」

六年前も私は《結社》の一部隊を率いてロツジの一つを落としたこととはあるのだから、ここで君たちに協力してもおかしくはないと思うのだが？」

「さっきまでの言動でそれを信じられると思つているのか？」

呆けているロイド達に代わつてリインが聞き返す。

「あれはヨアヒム・ギウンターがあまりにも小物過ぎたので見兼ねて助言をしてしまっただけさ……」

相手に《剣聖》の称号を持つ者がいるというのに、《グノーシス》の力を過信して自由にするのはあまりに無謀……

現に私が助言していなければ《風の剣聖》が現れた時点で大勢は決まっていただろう?」

一同は心を揃えて思った、余計なことしやがってと。

しかし、そんな侮蔑の眼差しを一切気にすることなくワイスマンは続ける。

「本来なら《結社》であつた私と彼は対立する関係……」

しかし、私は今《グノーシス》に依存して存在を保っている以上、彼の御機嫌を損ねるわけにはいかなかったのだよ。さつきまではね」

「俺が奴の霊体を斬り消耗している隙を突いて反旗を翻すわけか」

「その辺りは好きに想像するといいいさ……」

それとも何の労苦もなくヨアヒム・ギユンターの首を持ってきた方が君たちにとっては良かったのかな?

まあ君たちがリイン・シュバルツアーのように《壁》を乗り越える気概がないというのなら、確かに余計なお世話だったか……

すまなかつたね。君たちにはリイン・シュバルツアーと同じ難易度は荷が重かつたようだ。以後気を付けるよ」

殊勝に謝っているが、その言葉はむしろロイド達を煽っているようにしか聞こえなかつた。

「言つてくれるじゃねえか……」

「ものすごくくうざい人のようですね」

忌々しいと言わんばかりのランディとティオの眩きにワイスマンは嬉しそうに笑みを濃くして続ける。

「ヨアヒム・ギユンターはクロスベル北東、アルモリカ古戦場の奥地、《太陽の砦》に潜伏している……」

ただし失踪者の半分はマインツ山道中腹の《月の僧院》に送られている。そちらには《風の剣聖》を行かせることをお勧めするよ」

「生憎だが貴様の思惑に乗ってやるつもりは——」

「ならこうしよう。今君が抱えている娘には、ある薬を投薬しておいた。明日の日の出までにワクチンを接種させなければ発症するウイルスだ……」

そのワクチンは《月の僧院》の宝箱に置いて来た、と言つたらどう

するっ。」

「戯言を。そんな取って付けた言い訳が通用するとしても思っているのか?」

「信じないならそれでいいさ。結果は明日には分かるのだから」
「っ…………」

この場での思い付きとしか取れない発言。

しかし、そう一蹴することはできない凄みが彼にはあった。

「なるほど…………リベールでカシウスさんをやり込めただけはあると言
うことか」

「《剣聖》にそう言ってもらえるとは光栄だね…………」

《太陽の砦》にはリイン・シユバルツァー達を行かせると良い。そちらにコリン・ヘイワースもいるからね」

「そうだな…………貴様の思惑に乗るというわけではないが、エステル、ヨシユア…………」

お前達はリイン達と一緒に《太陽の砦》に行け、俺はエオリア達と合流して《月の僧院》に行く。ロイド達はここの守りを——」

「いえ、アリオスさん。どうか俺達に行かせてもらえませんか?」

アリオスの提案にロイドが待ったを掛ける。

「アーネストさん…………いや、ゲオルグ・ワイスマンだったか?」

あんたは肝心なことに触れていなかったな」

「ほう…………」

「ヨアヒムの狙いはおそらくキーアただ一人、アリオスさんやエステル達を分断させるのが目的じゃないのか?」

「……………続けたまえ」

「キーアを奪われればその時点で俺達の負けだが、逆に言えばキーアを守り抜いて彼を逮捕できれば俺達の勝ちだ」

「その意味じゃ、このビルは絶対に守り切る必要がある……………確実な戦力を残すべきだぜ」

「おそらくアリオスさんか、リイン君が残ればここは鉄壁の守りになるはず…………」

「それに警察隊の応援があれば完全に死角はなくなるでしょう」

ロイドに追従してランデイ、エリイ、ティオがそれに続く。
そんな四人にワイスマンは嘆息した。

「馬鹿馬鹿しい。アルカンシエルでアーネストに辿り着いたのはマグレだったようだな」

「なっ!?!」

返って来た言葉にロイドは絶句する。

「採点するならば、100点満点中20点と言った所かな。《風の剣聖》殿はどう思うかな？」

「む……」

ワイスマンに話を振られてアリオスは押し黙る。

「まず前提条件だが、君たちの勝利条件はヨアヒムを逮捕すること、この一点に尽きる……」

例えここでその少女が攫われたとしても、必ず彼が回収するのだから彼さえ逮捕できていれば挽回の余地はある……

むしろここでヨアヒムを取り逃がし潜伏された場合、君たちは常に襲撃を警戒しなければなくなる……

《グノーシス》を使えばいくらでも私兵を作り出せる相手に時間を与えれば、次の襲撃では以上の規模になることは間違いない……

ならば、この機会にヨアヒム・ギウンターを確実に捕らえるべきだと思わないかな？」

「それは……」

「そして君たちが《太陽の砦》に行って何ができると言うのかね？」

ヨアヒムの私兵に押し潰され《風の剣聖》に助けられた君たちが彼の下に辿り着けるといふ根拠は？」

「くっ……」

「気持ちしか取り柄のない捜査官、銃を撃てない元猟兵、《グノーシス》を克服できていない娘、教団にトラウマを持つ少女……」

さて、君たちはいったい《グノーシス》に対してどんな対処ができるというのか教えてもらいたいものだ」

「っ……」

ワイスマンの正論にロイド達は何も言い返せず押し黙る。

アリオスは思念の糸を斬れる。同門のリインも彼と同じことが出来るだろう。

対してロイド達には《グノーシス》で操られた人たちを制する技は持っていない。

まさか殴れば《グノーシス》の毒気が勝手に晴れてくれるなど考えるのはあまりにも希望的観測に過ぎるだろう。

「そもそも守るなら自分たちで守ると何故言わない？」

まるで自分達が残っても守り切れないと言っているように聞こえたが、そんな後ろ向きな気持ちの者が敵の総大将を逮捕できると思っているのかね？

ああ、すまない。現に守り切れていなかったね……

うん、それでそんな守り切れなかった者たちに何ができるのか教えてくれないかな？」

「それは……それは……」

容赦のないワイスマンの指摘にロイドは声を震わせる。

「はつきり言わせてもらおう。今の君たちは弱い……」

特にロイド・バニングス。君はアルカンシエルの時の方が強かっただろう……

原因はその少女かな？

守るべき者がいることで、思考が守りに入って臆病になってしまったのだろう……

悪いことは言わない。君たちが行った所で犬死するだけだ。大人しくここで待っていると良い」

優しく諭す言葉にワイスマン特有の暗示や認識の操作の力はない。ただの言葉だけでロイド達の心を折ろうとするその様にエステル達は改めて目の前のアーネストがワイスマンだと認識する。

「ああ、それとも警察官として遊撃士に手柄を譲りたくないと考えていたのかな？」

「そんなわけ——」

「微塵もないと本当に言い切れるのかな？」

絶妙なタイミングで反論を止められ、ロイドは言葉に詰まる。

もちろんそんなこと微塵も考えていなかったが、指摘されてしまえば雑念のようにヨアヒムを逮捕するメリットを考えてしまう。

「そこまでにしてもらおう」

見兼ねてアリオスが口を挟む。

「そうは言うが、これは君の失態だよ……」

《グノーシス》の軛を解いた程度で勘違いさせてしまったのだから……いや、それとも君にとってはそちらの方が都合が——」

「黙れと言っている！」

アリオスは苛立ちと共にワイスマンの言葉を遮る。

怒鳴りつけられたワイスマンは肩を竦める。

「親切心で言っただけだ。彼らはまだ若い。ここで無駄に命を散らせるべきではないと思わないか？」

ああ、そういえば病院の看護師達は《月の僧院》に送られているのだが、君たちは《風の剣聖》と共にそちらを助けに行ったら良いのではないかな？」

「看護師……セシル姉が!？」

目の前に与えられた餌にロイドは飛びついてしまう。

こうなってはもう駄目だとアリオスは目を伏せる。

ロイドの持ち味であるひたむきな真つ直ぐさを言葉だけで悉く潰された。

彼の持ち味である愚直なまでのひたむきさが損なわれれば、ワイスマンの言う通り彼らに任せるには不安が大きくなり過ぎた。

「ロイド、お前達はここに残れ」

「アリオスさんっ!？」

「そんなに心を揺らしてはどちらに行っても足手まといにしかならん。後は俺達に任せるといい」

「くっ……」

「そんな顔をするな。お前達はよくやった。胸を張れ」

そんな慰めの言葉にロイドはただ俯き、拳を握り締めることしかできなかつた。

▪
*

「これでいいんだよね」

誰かがそんなことを呟いた。

18話 魔都Ⅲ

「ロイド……」

IBCの一階エントランス、来客用の椅子に座って俯いているロイドにキーアは不安そうに声を掛ける。

「ん……？ どうしたキーア？」

顔を上げたロイドは作り笑いを浮かべてキーアに応える。

その笑顔にキーアは胸が締め付けられるような痛みを感じてしまう。

そんなロイドに何かを言わなくてはいけないと、思ってもうまく言葉は出て来ない。

そんなキーアにロイドは笑いかけて彼女の頭を優しく撫でる。

「もう大丈夫だ……アリオスさんやリイン君達は必ずヨアヒムを逮捕してくれるから」

それはキーアに言い聞かせるよりもまるで自分に言い聞かせているかのようだった。

「ロイド……本当はロイドが行きたかったんじゃないの？」

「そんなことはない。ここでキーアを守ることはヨアヒムを逮捕することと同じくらい重要なことだから」

ワイスマンの主張は認めたくないものだったが、一段落して緊張がほぐれるとロイドの体はこれまでの疲労を訴え始めた。

特務支援課を襲撃され、クロスベルの街をとにかく全力で逃げ回り、IBC総裁タワーのリムジンに拾われる形で追手から逃げ切ることが出来た。

時間にして一時間程度の逃走劇、そして一休みできたとはいえ籠城戦。

その消耗はロイドが思っていた以上に重かった。

「それに悔しいけど俺達が行っても何の役にも立たないからな」

ワイスマンの言っていたことは正しい。

相手の戦力も分からず、拠点としている《太陽の砦》の構造も知らない。

失踪者たちがどんな扱いを受けているのか、さらにはマフィアの最大戦力でもあるはずのガルシアの姿はこれまで確認していない。

薬で強化された警備隊に手こずっていたというのに、もしも彼が同じように薬で強化されて立ち塞がったら勝てるかどうか分からない。そしてその後に対峙するヨアヒムが素直に逮捕されることを受け入れるはずはない。

必ず戦闘になるだろうが、彼の情報が何一つない状況で勝てる断言できるほどロイドは自分の力を過信してはいなかった。

「役に立たないってそんなこと——」

「これまでがうまく行き過ぎていたんだ」

キーアの慰めを遮ってロイドは自嘲する。

特務支援課が設立して五ヶ月。

それなりの実績を積んで来たつもりだったが、思い返せば大きな事件はどれも自分達の力で解決できたわけではなかった。

不良チームの喧嘩、その背後にいたマフィアを退けたのは乱入してきたグレイスが口にしたアリオスの名声のおかげ。

各地の同じくマフィアが暗躍していた魔獣被害はツアイトの助けがあった。

アルカンシエルの脅迫状は名を騙られた《銀》が支援課に協力的だったから。

《黒の競売会》は偶然レンが招待状を譲ってくれたおかげ、そしてキーアを見つけて無事脱出できたのはレクターやリインが協力してくれたから。

そして今回の事件も犯人に良いように弄ばれた結果だった。

「俺がもっと早く気付いていれば……」

それまで何度も顔を合わせるころがあったというのに、ヨアヒムの裏の顔に気付きもしなかった自分を悔やまずにはいられない。

そしてそんな男にキーアを任せようとした自分を責めずにはいられない。

「そうすればセシル姉だって……」

夕方、重篤な患者を除いてほぼ無人となったウルスラ病院を思い出

す。

これまでそれを忘れていたわけではなかったが、改めて失踪者の一人になっていくセシルも自分に対しての切り札にされていた可能性を考えると、自分を責めずにはいられない。

「兄貴だったら……兄貴だったらこんなことになる前に何とかできていたはずなのに」

もしもここにガイ・バニングスがいればきつともっと早くヨアヒムの悪事に気付いて、この事件を未然に防ぐことができただろう。

それでなくても、ただ逃げ惑うだけではなくうまく立ち回っていたはずだ。

「あんまり思い詰めんなロイド」

ひたすらに自分を責めるロイドを見兼ねてランデイが言葉を掛ける。

「奴に一杯食わされたのは俺達も同じだ。お前だけのせいじゃない……」

ベルゼルガーを持ち出せなかったのは痛かったが、相手からライフを奪っても良かったんだ……

いや、あの状況なら何人か中に入れることになっても先にゲートを閉じておけばよかったんだ。そうすれば後続を断って楽に制圧はできていたはずだ」

「あの人の擬態はそれほど完璧でした。むしろわたしが出された飲み物に『グノーシス』が混ぜられていることに気付くべきでした……」

わたしだけがその味を知っていたんですから」

「テイオちゃんのせいでもないわ。それにロイド達は『グノーシス』を克服したのに、それが出来ない私がみんなの足を引っ張ってしまつてごめんなさい」

戦闘の高揚から落ち着いた一同はそれぞれ謝り合う。

誰もが自分を責め、至らなさを痛感して俯く。

「みんな……」

そんな彼らにキアはどんな言葉を掛けて良いのか分からずに涙

ぐむ。

それにロイド達は気付く余裕もなく沈み切っていた。

「……………何してるのロイド君達?」

そんなロイド達の姿にエステルが顔をしかめて歩み寄る。

「エステル…………」

「アリオスさんはああ言っていたけど、ロイド君達はそれで良いの?」

見るからに落ち込んでいるロイド達にエステルは、いつそ無遠慮と感じる程にはつきりと切り込んだ。

「良いも何も…………現に俺達の体力はあまり残っていないし、《グノース》を克服できたっていうのも遠距離だったお陰の可能性もあるんだ」

冷静に考えれば考える程に自分達がヨアヒムを逮捕できる可能性は低い。

「だからここで俺達はキアを守る。それが俺達にできる最善策なんだ」

「ふーん…………最善策か…………リン、それとリイン君お願い」

「了解しました」

「はい」

含みのある顔でエステルは頷くと二人に声を掛ける。

「え…………?」

何をするのかと思えば、リンが黒い光を伴った導力魔法がロイド達を囲む魔法陣を展開し、リインは赤い刀身の太刀を抜いてロイド達にかざす。

「これは治癒術…………? でも、この回復力は…………」

自分たちの治癒術では治し切れなかった体の痛みが瞬く間に引いていき、同時に重く感じていた体の疲労も抜けていく。

さらにはロイド達の体にリインの太刀の光が伝播して身体の奥に感じていた異物感が消える。

「これで体力は回復して、《グノース》の心配もなくなったわ…………それでロイド君達はどうしたいの?」

「それは……………」

同じ質問にロイドは答えあぐねる。

懸念とされている消耗は回復できた。近距離で《グノーシス》の強制力に諍えるかどうかの心配もなくなった。

「いや……駄目だ……」

それでもロイドは首を横に振る。

「俺達には《グノーシス》で操られている人達への対処手段がない。行っても足手まといにしかならないのは変わらない」

「そんなのあたしとヨシユアだって同じよ。だからあたしたちがロイド君達の代わりに残って、ロイド君達がリイン君とレンと一緒に《太陽の砦》に行っても良いんじゃないかな？」

「……………え？」

エステルという言葉の意図が分からず、そこでロイドはようやく顔を上げた。

「まあ……コリン君を助けるってレンと約束しているし、行方不明者を助けられないいけないんだけど……」

でもロイド君達も自分達の手でヨアヒムを逮捕したいんでしょ？」

「あ……ああ……」

呆けた様子でロイドはエステルという言葉に頷く。

「だけど駄目だ。エステルの申し出はありがたいけど、キアを置いて行くことはできない」

一度揺らされてしまったロイドは弱気になって項垂れる。

エステル達のことを信頼していないわけではない。

だが、安心感という点でアリオスと比べてしまうと一抹の不安が胸を刺激する。

まるで蛇の毒のように彼の言葉はロイドの胸を苛み、最悪の思考を想起してしまう。

「エステル……あまり無理は言わない方が良い」

ロイドの悔しさを察してヨシユアはエステルを諫める。

エステルが擁護する気持ちは分かる。

それ程までにロイド達の落ち込んでいる様は痛々しく見ていられなかった。

「それなら良い方法が一つだけあるわよ」

そんな一同を見兼ねてレンが意見を出した。

「その子も一緒に連れて行けばいいのよ」

レンはキーアを指差して言った。

「何を言っているんだレン！」

あまりの提案にロイド達が何かを言う前にリインが声を上げて反論する。

「良い考えだと思わない？」

お兄さんたちがその子のことが気になって戦いに集中できないのなら、自分達の手で守れるところに置いておけばいい……

そうすれば安心して戦えるでしょ？」

「……本気で言っているのか？ よりにもよって君が」

目を鋭くして睨むリインの視線にレンはバツを悪くして目を逸らしながら続ける。

「あの時とは前提条件が違うわ……」

ヨアヒムにとって、その子は無傷で手に入れたい存在なんだからあの子のようなことにはならないわ……

それに一緒に連れて行くだけで大規模なトラップや無差別攻撃はそれだけで封じることが出来る……と思うわ」

「いや……でもキーアを危ない所に連れて行くなんて」

「そうよ。いくら何でも危険過ぎるわ」

「ありません」

「そうだ……だいたいそれはキー坊を人質に使うってことと同じじゃないか」

レンの提案を考えるまでもなく拒否するロイド達。

しかし、支援課の反論にキーアはその目に決意の光を宿してレンにおずおずと聞き返した。

「本当にキーアがロイド達の役に立つの？」

「それはあなた次第よ」

「そっか……もしもキーアがロイド達の役に立てるなら、キーアもロイド達と一緒にいきたい」

キーアはロイド達に向き直るとはつきりと自分の気持ちを言葉にする。

「キーアはロイド達みたいに戦えない、応援することしかできないけど……さつきみたいにみんなが傷付いているのをただ待っているのは嫌だから」

「キーア……」

「それにあの人がキーアの昔のことを知っているなら、キーアはロイド達と一緒にそれを知りたい！

あと……今の格好悪いロイド達は見ていたくない！」

「あつ……」

キーアの言葉にロイドは視線を自分の手に落とす。

そのキーアの言葉は靄が掛かっていたロイドの思考を一瞬で晴らした。

「そう……だな……」

手を握り締めロイドは一人ごちる。

ロイド達が目を逸らそうとしたことを突き付けられ、無力だとなじられた。

改めて自分たちの未熟さを思い知らされ、もう何もできないのだと決めつけてもう終わった気でいた。

体力、気力が回復したからというのは関係ない。

例えば犯人逮捕に行けなくても、クロスベルに残ってやらなければいけないことはいくらでもあったはずなのに、俯くことしかしていなかった。

「情けない姿を見せちゃったな」

ロイドはソファから立ち上がる。

「だな……今まで遊撃士のお荷物だなんて散々言われていたんだ。だったら開き直るとするか」

それにランデイも続く。

「《壁》は高いかもしれないけど、それでもここで終われないわよね」「キーアにここまで言われたんです。格好悪い姿は見せられませんね」

そしてエリイとテイオも立ち上がる。

そして――

「盛り上がっているところで水を差すようで申し訳ないですけど、その子連れて行くのは俺は反対です」

そんな彼らの決意を戦力の要であるリインが言葉通り盛大に水を差した。

「おいおい、リイン……今の場面は全員で手を合わせるタイミングだろう？ 空気読めよ」

「そつちこそ、空気に流されないでちゃんと状況を見てください……」

その子連れて行って万が一が起きたらどうするつもりですか？」

「キーアのごことは俺達が必ず守る。リイン君の手を煩わせたりはしないから……」

「それにお前が言えたことかよ？」

リベールではお前だって小さな女の子を戦場に連れてきていたくせに」

「だから言っているんだ」

ランデイの言葉にリインは声に苛立ちを含ませて言い返す。

これまで何処か超然としていて常に余裕があるように見えていたリインの苛立ちが含んだ言葉にランデイは面を食らう。

「とにかく俺はその子が一緒に来ることは認めません。エステルさん達も何か言ってください」

「お、落ち着いてリイン君……気持ちには分かるけどキーアちゃんは当事者みたいだし、それに一般人に協力してもらっているって言うならテイータもそうでしょ？」

「自衛能力のあるテイータと全く戦闘力がないその子を一緒にしないでください」

キーアの同行を前向きに考えているエステルはリインに言い返されてたじろぐ。

そしてそのままリインはキーアを睨むような視線を送ると、キーアはその視線に体を震わせてロイドの後ろに隠れる。

「やっぱり貴方達は不要です。《太陽の砦》には俺達だけで行きます」

「待つてくださいいリインさん」

突き放す言葉をぶつけて踵を返したリインをロイド達ではない声が呼び止めた。

「キーアには僕とツアイトが直衛に入ります。それで認めてもらえませんか？」

「クルト、身体はもう良いのか？」

会話に入ってきた少年の姿を見て安堵しながら尋ねる。

ロイド達と共に戦い、ロイド達と戦わされ、キーアを最後まで守り切り気を失ったはずのクルトはツアイトを伴って現れ、ロイドの言葉に頷いた。

「御心配をおかけしました。良く分かりませんが目が覚めたら体は全快していたんですけど、リインさんが治療してくれたんですね？ありがとうございます」

不可解な現象はとりあえずリインだろうと言わんばかりにクルトは迷わずリインに頭を下げる。

「礼なら後にしてくれ。それにクルトの怪我を治したのは俺じゃなくてこの子だ」

リインは素っ気なくクルトの言葉を受け流し、肩の上に乗っているリンを指し示す。

「それに体が治ったからってまだ本調子でもないだろう？ そんな体でその子を守るっていうのか？」

「守ります。本調子でないから守れないなんて言い訳して良いと教えられていませんから」

睨みつけてくるリインにクルトは怯まずにはつきりと言い切る。

その様子にリインは二ヶ月前にはなかったクルトの胆力に思わず目を見張る。

「それに僕一人ではありません」

「グルルル」

クルトの言葉に答えるようにツアイトは喉を鳴らし、顎で手を出せと促す。

「何の——」

促されるままに手を出したリインの手にツアイトは啞えていた銀耀石を乗せた。

リインは嫌そうに顔をしかめた。

「……………」

大きさは以前に貰ったものと比べると半分にも満たない。しかしそれでも《グランシヤリネ》十本分に匹敵するだろう銀耀石だった。「グルルルルル……ウオン」

「えつと……遊撃士にそれを報酬に依頼する。我らの同行を認めろ……と、ツアイトは言っています」

「報酬の問題じゃない……だいたいロイドさん達の上司が認めるんですか？」

「ああ、別に構わんぞ」

苦し紛れのリインの言葉にいつの間にかそこにいたセルゲイがあっさりロイド達の行動を認める。

「課長！」

「アリオスには大人しくしていろと言われたみたいだが、別に今のあいつは警察官でもなければうちの上司でもないからな……」

「妥当な指示は聞き入れるし足並みだつて揃えるが、不当な命令されて大人しく従わなければいけない義務はないからな……」

「当然、お前さんがこいつらの同行を拒んだところで、独自に動くことまで止める権利はお前さんにはないぜ」

「つ……………」

ロイド達の意見を全面的に容認するセルゲイの、そしてリイン以外の態度に思わず閉口する。

「とは言え、お前さんの言うことももつともだ……何の策もなしに行かせてお前さんの負担を増やしたら本末転倒だからな……」

「そこんところはどうか考えているんだお嬢ちゃん？」

セルゲイはキアをけしかけたレンに尋ねる。

「ええ、もちろんちゃんと考えているわ……」

《太陽の砦》には正門の他に脱出用の裏道があるの、エステルとレン達は正門から失踪者たちを救出することを優先しながら派手に暴れ

るからお兄さんたちは裏道からこっそり侵入して犯人のところに行けばいいわ。それと……」

レンはおもむろにマントを取り出すと、それを被るように翻した。「あ……」

「おーそっくり」

次の瞬間、レンはキアへと変わっていた。

「ブルブランの変装術だね。確かにそれならヨアヒムの目をこっちに惹きつける事ができるか」

「フフ……どうかしらリン？」

キアの姿で妖艶に微笑むレンにリンはため息を吐く。

「意外だな。君がロイドさん達にそこまで肩入れするなんて」

「お兄さんたちにはいろいろしてもらったから、そのお返しってところかしらね」

そんなことを言うレンの変化にリンは感慨深いものを感じながら、一同を改めて見回す。

ロイド達は言うまでもなく、決意に満ちた目をしている。

エステルとヨシユアは最終判断はリンに任せると言わんばかりの態度を取りながら、すでにロイド達と一緒に戦うつもりのようにだった。

そしてキアは相変わらずロイドの影に隠れながら、少し怯えた目をリンに向けているが、そこには確かな意志が宿っていた。

「……………分かりました」

そんな集団の圧力に耐えかねて、リンは折れるしかなかった。

19話 魔都IV

「ふ……まさか向こうからわざわざキーン様を連れて来てくれるとはな」

外で砦の監視させているマフィアの視覚を通して見た光景にヨアヒムはほくそ笑む。

巨大な機械仕掛けの人形に乗って現れた遊撃士達は御子を連れて来てくれた。

「何のつもりか知らないが、命乞いのつもりか？」

その少女が教団の御子であることを微塵も疑わないヨアヒムは予想外の攻撃を受けた憤りを忘れて悦に浸る。

それは過信であり慢心でもあった。

例え《叡智》をその身に宿していたとしても、結局はその情報をどう捉えるかは本人次第。

人は信じたいものを信じる。

自分以上に《叡智》を理解している者はいないという思い込みが、主観でしか物事を見えない思想が《叡智の目》を曇らせていることに気付かずにヨアヒムはその間違いに気付くことはない。

「ふふ……砦の扉は複雑な仕掛けを施したもの。ただの人間に——ああ、なるほどこれを予期してキーン様を連れてきたわけか」

堅牢な砦の扉は複雑な操作がなければ開かないようになっていた。

しかし、キーンが三人の遊撃士によどみなく指示を出して、その仕掛けを解いていく。

瞬く間に石の扉が開くが、ヨアヒムは危機感を感じるよりも鮮やかに開錠してみせた凛々しいキーンの姿に見惚れる。

「流石ですキーン様」

したりとヨアヒムは頷く。

あの程度の仕掛け、キーン様の叡智ならば当然の結果だと。

そんな風に一人悦に浸っていると、侵入者たちは砦の城主の間へと一気に入り込む。

「やれやれ、図々しい侵入者たちだ。扉の番人たる悪魔よ。キーン様

「以外は始末して——」

『はあああああつ！ 桜花無双！ 鳳凰烈破つ！』

無数の突きに滅多打ちにされて突き飛ばされた悪魔は火の鳥を思わせる大きな焰を纏った追撃を受けて爆散した。

「ふ……《アカ・マナフ》は私の戦力の中でも最弱……」

「良いだろう。お前達には《グノーシス》の最終形、魔人の力を味わわせて——」

『魔技・雷光の牙』

魔人化しようとしたマフィア達は一斉に金縛りで身動きを封じられ、雷光を伴う牙が疾走して的確にマフィア達に脳震盪と電撃の負荷を与え魔人化を防ぎ、無力化する。

「……ふ……所詮《紅い叡智》で正気を保てずに堕ちたモルモット……少々惜しいが、奥の手を使わせてもらおうかな。三倍に濃縮した《紅い叡智》を注入したというのに人の姿を保っている傑物。これなら——」

『破甲拳っ！』

少年の拳に大の男がくの字に折れ曲がり、膝を着いて崩れ落ちた。

「——ええいつ！ アーネストッ！」

「お呼びでしょうか、司祭」

「ヨアヒムが苛立ちの声を上げて、部下にしてやった男に理不尽な罵倒をぶつける。」

「何なんだ奴等は!？」

「おや、司祭は彼らの事を御存知ないか？」

「アーネストは嫌味を含んだ笑みを浮かべて答える。」

「まずあの少女の名はエステル・ブライト。あの《D::G教団の殲滅作戦》において指揮を取っていたカシウス・ブライトの娘です」

「つ——あの《剣聖》の娘だど!？」

「そして双剣の少年はヨシユア・ブライト。あの《D::G教団の殲滅作戦》の影で各地の拠点を潰し回った《身喰らう蛇》の元執行者です」

「ちつ、あの新参の組織がまた邪魔をするか」

「そして太刀使い——いえまだ太刀は抜いていませんが、太刀を持つ

ている少年はリイン・シユバルツァー。あの超帝国人です」

「超帝国人？」

「おや？ 超帝国人を知らないと？ 《真なる叡智》に至った司祭ともあろう御方があの《超帝国人》を知らないと？」

「ば——馬鹿なことを言うな。それくらい知っている。《真なる叡智》はこの世界の総てを見通す力を持っているのだから！

まさか貴様、私の《グノーシス》を愚弄する気か？」

「いえいえ、滅相ありません……それで次は私の番と言うことですね？」

ムキになるヨアヒムにアーネストは彼が自分を呼んだ意図を汲み取る。

「ああ、どいつもも役に立たん失敗作だったようだからな。貴様が行ってキーア様を取り戻して来い」

「御言葉ですが、司祭……」

あそこにいるのは言わばアリオス・マクレインと同等の猛者ばかり、私一人では些か荷が重いでしょう」

「むっ……」

アーネストの反論にヨアヒムは霊体を斬られたことを思い出して唸る。

「ですが、付け入る隙はありません……」

彼らは遊撃士。何よりも民間人の安全と保護を最優先にする者たちです……

後の研究に使う予定だったモルモットに《グノーシス》を与えて戦わせれば、それだけで彼らの足を止めることはできるでしょう……

つきましては牢の鍵をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「ふむ……なるほど、良いだろう」

アーネストの献策に頷いてヨアヒムは牢の鍵を投げ渡す。

「モルモットがいくら壊れようが構わん。必ずキーア様を私の下に連れて来るんだぞー！」

「ええ、朗報を待っていてください」

アーネストは一礼して踵を返す。

「ふふ……」

地底湖の中に造られた祭壇。

その一角、かつての殲滅戦の経験から造られた脱出路を一瞥してアーネストは笑みを浮かべて歩き出した。

・*

「やあ諸君。さっきぶりだね」

目の前に現れたアーネストの顔をしたワイスマンにリイン達は一齐に顔をしかめた。

「おやおや、つれないね。せっかくヨアヒムからこの先の牢屋の鍵をいただいてきたというのに」

「あんですって!?!」

これ見よがしに鍵を手中で弄ぶワイスマンにエステルが叫ぶ。

「エステルうるさい」

その傍らで耳を抑えたキアアが半眼になってエステルを睨む。

「ふむ、やはり君は御子ではなくレンだったか」

そんなキアアにしたり顔でワイスマンは頷く。

「それが分かっていてどうして貴方がここに?」

「そうよ。牢屋の鍵をわざわざあんたが持つてくるなんて何を企んでいるのよ!?!」

まさか……失踪者に《グノーシス》を投与してあたしたちと戦わせようなんて考えてるんじゃないでしょうね?」

「おや、エステル君にしては良い所を突くじゃないか。準遊撃士の頃から君たちを見ていた者として中々に感慨深いものだ」

「そんなことはどうだって良いわよ。それより答えなさい!」

「安心したまえ、ヨアヒム・ギウンターにはそう言っておいたが、私にそれをやる気は毛頭ない。この鍵は君たちが好きに使うと良い」

そう言っってワイスマンはレンに向けて鍵を放り投げる。

「牢屋はこの先の通路を右に曲がった先にある」

そしてさらにレン達が欲しい情報をワイスマンは与える。

「どうしてあたしたちに手を貸すのよ？」

「街でも言ったが《教団》は《結社》にとつても忌むべき存在だからさ。だからこそ、確実に彼を滅するのために私は動いているだけだ……」

「これでも元は七耀教会の聖職者でね。悪魔を崇拜する《D∴G教団》は個人的にも相容れない存在なのだよ」

ワイスマンの言葉に嘘は感じない。

しかし、どうしても素直にそれを信じることはできなかった。

「レン、それにエステルさんとヨシユアさん、三人は先に行ってください。こいつは俺がここで見張っています」

「リイン君……」

「こいつが何を考えているかはともかく、失踪者の安否を確認しなければならぬのは変わりありません……それに——」

「それに？」

「ものすごく不服なことですが、一時期体を使われていた影響なのか、ワイスマンが本当に嘘を言っていないと分かってしまうんです」

「あー……」

「それは……」

「ちよつと同情するわ」

ワイスマンの思考が読めてしまうリインにエステル達は思わず同情する。

「えつと……それじゃあとりあえず失踪者たちの無事を確認してくるわね」

ため息を一つ吐き、エステルはワイスマンではなくリインの言葉を信じて切り替える。

言われた通りに先の通路を曲がって見えなくなるエステル。

そして目の前には相変わらず蛇を連想する笑みを浮かべたワイスマンがいて——

「やつと二人きりになれたな。リイン・シユバルツァー」

「破甲拳」

「ぐふっ!？」

まるでどこかの皇子みたいなことを言い出したワイスマンをリイ

ンはとりあえず殴った。

「気色の悪い事を言うな！」

「気色が悪いとは人聞きが悪いな。君と二人きりで話せるこの状況を作り出すためにいろいろと骨を折ったというのに」

「生憎だが、俺にはお前と話すことなんかない」

リインは話がしたいというワイスマンを睨みつけ拒絶する。

「まあ、私が過去にしたことを弁明するつもりはないが、問題は未来の事だよ……」

《黄昏》と《相克》。この二つについて君の今の意見を聞いておきたかったのだよ」

「っ——」

聞き流せない単語にリインは息を呑む。

そんなリインの反応にワイスマンは気を良くして口を開く。

「単刀直入に聞こう。私と手を組むつもりはなかなかりイン・シュバルツァー？」

「世迷言を、ありえないな」

リインは即答で答えていた。

「私には《黄昏》を回避するための具体的なプランがあると云ってもかな？」

「っ……」

思わぬ言葉にリインは押し黙る。

「そこまでにしてもらいましようか」

唐突に二人の間に第三者の声が響き、ルフィナがその場に現れる。

「これ以上、その淫らな舌でリイン君を誘惑するのは許さないわよ」

小さな人形の体軀からは不釣り合いな威圧感を放ってルフィナはワイスマンを睨みつける。

「誘惑ではなく提案だよ」

そんなルフィナの視線を気にも止めずにワイスマンは続ける。

「逆に聞かせてもらうが、君たちは《黄昏》に向けて何をしているのかな？」

「それは——」

「ただ戦う力を育てているだけだというのなら、それは甘すぎる……
その道はすでに《鋼の聖女》が通った道であり、確かに君と聖女殿
が《相克》を果たすことで新たな境地に至るかもしれないが、あるか
も分からないものを当てにするのは現実的とは言えないな」

ぐうの音も出ない正論にリインは押し黙る。

「相手は千年以上の時を準備に費やしてきた存在。盤上のルールを好
きに組み替えることが出来る相手にただ武力だけで挑むというのは
あまりに脳筋が過ぎると思わないか？」

「それは遠回しにリアンヌさんのことを侮辱しているのか？」

思わずリインは咎めるようにワイスマンを睨む。

「とんでもない……」

彼女は自分のできる範囲で考え模索してその道を選び、長い時間を
そのために捧げて来た……

だからこそ私はこう思うのだよ。君は聖女に追い付きこそすれ凌
駕する存在になれないと。それだけ彼女の250年の歳月は重いと
ね」

「っ——」

痛い所を突いて来るワイスマンにリインは顔をしかめる。

「目的を履き違えてはいけないよ。リイン・シュバルツァー……」

君が目指す目的は《鋼の聖女》の打倒ではなく、《黄昏》を《黒》を
超える事、聖女などその通過点でしかないはずだ」

「……………そんなこと分かっている」

苦し紛れにリインはワイスマンに言い返す。

そんなリインの様子にワイスマンは笑みを濃くして言う。

「その点、私は君に良いアドバイスができると思うのだよ。それこそ
ルフィナ・アルジエントなどよりもずっと役に立って見せようじやな
いか」

「あら、言ってくれるじゃない」

ワイスマンの言葉にルフィナの声音に冷気が宿る。

「人を貶める事しかできない策略家にいったい何をアドバイスできる
というのかしらっ？」

ルフィナはにつこりと笑顔を浮かべてワイスマンに尋ねる。

「だからこそだよ。対極の意見とすり合わせを行うからこそ議論に価値が生まれるのだよ……」

その点、君とリイン・シュバルツアーでは似た意見しか出せない。それでは議論を発展させることはできないだろうか？」

「そうね……それは認めるわ」

交渉事においてリインはルフィナの薫陶を受けた直弟子のようなもの。

今はまだそうでなくても、ルフィナが伝えることが全て伝えられた後は確かにルフィナがリインにできる助言などなくなり、その方面では補佐くらいしかできなくなってしまうだろう。

それを考慮すると、ワイスマンがルフィナを役立たずと呼ぶことは認めないわけにはいかない。

「というわけなので、体のいい駒として私を君の傘下に入れて欲しいと思うのだが、どうかね？」

裏切ることを心配するのならいくらでも暗示や法術で私の存在を縛ってくれて構わないよ」

「……どうしてそこまで……？」

生殺与奪の権利まで差し出して来るワイスマンにリインは不信を強める。

言動はリベールで相対した時と同じなのに、そこに含まれる熱の質は明らかに違っていた。

まるで別の人間かと思えるような印象にリインはひたすらに困惑する。

「今の私には生前の執着は何一つない……」

ただ今は君が《幻焰計画》において何を成すのか、それを特等席で見たいというだけさ」

やはりワイスマンの言葉には邪気を感じない。

純粋な研究者の眼差しはそれこそラッセル博士やテイータに通じるものがあり、認めたくないがあらゆる能力を駆使して彼を見ても本心だと判断している。

「とはいえ、すぐに答え出さなくても構わないさ。それだけのことを私はしているのだからね」

リインの迷いにワイスマンは鷹揚に頷く。

「なので、まずは君たちの役に立って私が有用だということを知ってもらおうか」

「何をするつもりだ？」

動く気配を感じてリインは身構える。

「大したことではない。今頃魔人化して特務支援課と戦っているヨアヒム・ギウンターを生け捕りにする手伝いをするだけさ」

そう答え、ワイスマンはやはり蛇のような笑みを浮かべるのだった。

・*

非公開資料 製作者：ロイド・バニングス。

三名の遊撃士と協力者が正面から陽動を仕掛けている間。

俺達特務支援課メンバーは協力者であるレンから提供された《太陽の砦》の見取り図より地底湖の祭壇からの脱出通路を逆に辿り砦の地下の《拠点》へ潜入した。

不意打ちを仕掛ける形で一度は制圧できたものの、彼が使役する人形兵器の反撃を受けて拘束に失敗、戦闘となる。

その戦闘の途中でヨアヒムは《グノーシス》の最終形と呼んでいた《紅い叡智》を服用し、魔人化する。

移動中に合流し、伏兵として万が一に備えていたノエル曹長。

彼女の参戦に加えて、正面から乗り込んできたエステルとヨシユアの二人が追い付き拮抗状態になるものの、その数分後に魔人化したヨアヒムは正気を失い暴走する。

それまで決してキアを攻撃したり、巻き込む素振りはなかったヨアヒムは無差別攻撃を行った。

幸いなことにクルトがキアと共に安全圏に逃れて事なきを得るものの、暴走した魔人ヨアヒムは手が付けられなかった。

防戦を強いられ、追い詰められたところまでヨアヒムは不自然に止まると、その体が塵となって崩壊し始めた。

消滅していくヨアヒムを俺達はただ見ていることしかできなかったが、遅れてそこに到着したリインと彼が伴って現れたルフィナとワイスマンの二人の法術によりヨアヒムは消滅を免れ人の姿に戻った。

しかし、その精神は壊れて廃人状態となっていた。

以上が《D∴G教団》の司祭ヨアヒム・ギユンターとの戦闘の一部始終である。

追記

廃人状態になったヨアヒムを逮捕しようとしたがそこでワイスマンがある行動を取った。

その時の憑依先だったアーネスト・ライズからヨアヒム・ギユンターに体を移し替え、その上で彼は司法取引を持ち掛けてきた。

ヨアヒムとして逮捕されることは前提として、彼の知識から《グノーシス》の治療方法、ゼムリア大陸に残存している《D∴G教団》の拠点についての情報提供。

クロスベルに求める司法取引はゲオルグ・ワイスマンがリイン・シユバルツアーの庇護下にあることを認めさせることだった。

また祭壇やヨアヒムと対面させることでキーアの記憶が甦るかと期待したが、残念なことにその兆候は見られなかった。

20話 後始末

クロスベルにおける《D∴G教団》による《教団事件》はゼムリア大陸全土に大きく報じられた。

《魔獣の大暴走》を意図的に起こし、さらには警備隊員を操り暴動を起こす。

用意周到に行われたクロスベルが滅ぶかもしれない危機を救ったのは警察で新設された特務支援課だった。

もつともクロスベルタイムズで大々的に取り上げられたのは彼らだが、それと同等に注目を浴びたのは紅い機械人形を伴って援軍に現れた遊撃士リイン・シユバルツァーの存在だった。

「……………なんだかすごいことになってますね」

自由行動日が明けた翌日。

トールズ士官学院の話題はクロスベル一色だった。

これが単なる事件ならそこまで大事にはならなかったのだが、その事件の解決にあのリインが関わっていることが騒がれた。

「ああ、しかも事件は一昨日の深夜だったにも関わらず、今朝戻ってきたのはサラ教官と機械人形に乗っていたティータの二人だけ……」

そして今日の限目は全クラスで自習となったか……」

クリスの言葉に頷き、ユーススは読み終わった帝国時報を閉じる。

「サラ教官はリインさんは大丈夫だって言っていましたけど……」

早朝に学生寮に帰って来たサラは多くを語らずに休む間もなく学院へと向かった。

「俺は六年前のことをよく知らないのだが、学院の授業を中止する程この《D∴G教団》というのは危険な集団なのか？」

ユーススから帝国時報を受け取ってその記事を読みながらガイウスが尋ねる。

「ああ……………当時、各国から多数の子供を誘拐して非道な人体実験を行っていた団体だ……」

六年前の殲滅作戦では、各国の警察及び軍隊と遊撃士協会が共同戦線を張ったが、捕縛された《教団》信者の大半が自決し、更に誘拐さ

れた子供達の無残な遺体が大量に発見されたらしい……

そしてこの作戦で《教団》本体は壊滅したが、大陸各地に残党が潜んでいるとまことしやかに囁かれ、各国がその有力情報には莫大な懸賞金を掛けている」

「無残な遺体……」

ユーシスの説明にエリオットは身を震わせ、口を手で覆う。

「っ——大丈夫ですよ。今回は初動の速さもあつて被害の規模に対して人的被害は皆無だったようですから」

慌ててクリスが取り繕う。

特別実習から二週間が経つのに、その時の凄惨な光景をエリオットはまだ振り切れないでいた。

「……………ごめん……士官学院に入学したつていうのに、こんな……」
「気にしなくて良いですよ。あの光景は確かに衝撃的でしたから」

エリオットに共感するようにクリスはエリオットを気遣う。

「すまん、つい口が滑った」

教団を語るには必要な言葉だったとはいえ、他の言い回しもあつたとユーシスは謝る。

「それにしても何だか騒がしいわね？」

教室の中の話題を変えるようにアリサは騒然とし始める廊下を覗き込み——

「えっ——?」

言葉を失った。

「ん? どうしたんだアリサ君?」

マキアスがそれを訝しみ廊下を覗き込むとそこにはクレア大尉を伴った鉄血宰相ギリアス・オズボーンがいた。

・*

「えっと……本日はわざわざこのような所に来ていただき——」

トールズ士官学院の会議室。

学院長や教頭それに同僚達、さらには呼び出したクレアを前にサラ

はかしくまった言葉で挨拶を述べる。

が、その言葉を向けた本人によって遮られることになる。

「ああ、堅苦しい挨拶は不要だバレストイン教官……」

私はクレア大尉に同行させてもらったただけなのだから置物とでも思ってくれたまえ」

帝国No. 2である鉄血宰相はサラの気も知らず不敵な笑みを浮かべて宣った。

——あんたみたいな置物があつてたまるかつ！

内心で悪態を吐き、サラは気合いで笑顔を保つ。

帝国の遊撃士協会を閉鎖に追い込んだ、サラにとっては怨敵でもある存在。

呼んでもいないのに来たのは《D∴G教団》に関わることだからだろうが、宰相にあるまじきフットワークの軽さにサラは頭痛を感じる。

それでも気を取り直して説明を始める。

「皆さんもすでに周知されていると思いますが、一昨日の夕方からクロスベルで起きた《D∴G教団》の事件はその明朝には犯人が逮捕される形で解決しました」

「それにしてはリイン・シュバルツアーは一緒に戻ってきていない所を見ると、クロスベルに残っているのかね？」

「彼は七耀教会の法術を修得しているため、霊的な治療を行うために残りました……」

何分《グノーシス》という薬で操られていた人間は千人を超え、潜在的な準キャリアも含めれば二千人規模の被害者がいるので教会の人手が足りていません」

ベルガード門警備隊にルヴァーチ商会のマフィア。

それにウルスラ医科大学。さらには《太陽の砦》の近くのアルモリカ村の水源に微量の《グノーシス》が混ぜられていたとのこと。

麻薬として手を出した一般人などそれこそ一握りしかおらず、自発的に服用した者たちなら自業自得と割り切っても良いのだが、自覚なく服薬させられていた者たちを見捨てることはできなかった。

「このことで遊撃士協会と七耀教会、それにクロスベル警察とマグダエル市長から正式にリインを貸して欲しいと学院への要請書を受け取っています」

サラはヴァンダイク学院長にミシエルから預かった書類を渡す。

「うむ……」

ヴァンダイクはそれを会議室にいる者たちに聞かせるように読み上げる。

まずはツールズ士官学院に在学している学生を緊急とはいえ招集してしまつたことへの謝罪。

続いて事件解決に大きく貢献してくれたことへの感謝。

そしてリインの力が《グノーシス》患者の治療に大きく貢献していること。

違法薬物の治療はまず体内に取り込んだ毒素を体外に排出させる必要がある。その間に毒素が体の神経を壊すことが違法薬物の脅威なのだが、リインにはその毒素を取り出す力があつた。

そうでなくとも病院の機能が停止している今、一人でも治療できる法術使いを手放したくないのがクロスベルの現状だつた。

「しかし、リイン君の本分は学生であるのだがな……」

書状に連なる名前にヴァンダイクは唸る。

能力があるからと言って、学生に背負わせるには逸脱した仕事の内容にヴァンダイクは難色を示す。

「よろしいではないですかヴァンダイク学院長……それだけ多くの者がリイン・シユバルツァーの能力を評価しているということなのですから」

そんなヴァンダイクにオズボーンはクロスベル側を擁護する発言をする。

「これで過労で倒れることにもなれば、それはそれで良い経験と言えるでしょう……」

それに属州国の民に手を差し伸べるのは当然のことであり、リイン・シユバルツァーの献身はまさしく《世の礎》となるでしょう」

まさかオズボーンの擁護があるとは思っていなかったサラは目を

丸くし、ヴァンダイクは彼の鉄面皮の下に抑え切れていない感情を察して白い目を向ける。

「それで？ わざわざクレア大尉を呼んだのはそれ以外に重要な案件があるからではないのかな？」

「え……ええ」

オズボーンに促されてサラは説明を再開する。

「逮捕した今回の事件の主犯である《D∴G教団》の司祭ヨアヒム・ギユンターですが、リイン以外に対しては話すことはないという態度を取られ……

そのリインを通すことでいくつかの《D∴G教団》の情報を得ることが出来ました……

まず現在帝国領内で活動が続いている二つの《拠点》の位置情報。これはナイトハルト教官にお渡しするので正規軍に対応をお願いします」

「ああ、任された」

「……それなら鉄道憲兵隊の方が——」

「落ち着きたまえリーヴェルト大尉。そちらを正規軍に任せるといふのなら君には別の案件があるということだ」

口を挟もうとしたクレアをオズボーンが諭し、サラはそれを肯定するよう続ける。

「鉄道憲兵隊にはこっちのブローカーの取り締まりをお願いできるかしら？」

帝国内で人材を確保するために人身売買しているような奴等などだけ、あんた達はそっちの方が適任でしょ？」

「っ——分かりました」

「それから歴史的文化財の価値を判断できる人を派遣してもらえないかしら？」

「それはどういふことかね？」

「レンが捕獲——いえ協力を申し出てきたレクター・アランドールからの要請です……

《D∴G教団》の拠点には、ルヴァーチエ商会から横流しされた物品

や金のインゴットなどがかなり蓄えられていました……

今彼に目録を作らせていますが、それを確認できる人を呼んで来いと指示を受けています……

本来ならクレア大尉にお願いするだけのつもりでしたが、せっかくなのでオズボーン宰相にお願いさせてもらいます」

「ほう……あのレクターを捕まえて働かせているのか……」

名目上、休暇を取っているはずのレクターの名前が出て来て、それをこき使っていることにオズボーンは感心する。

「とりわけ急ぎの案件は以上です。《D∴G教団》の帝国支部もクロスベルでの出来事はすでに把握していると思うので正規軍と鉄道憲兵隊には迅速な対応をお願いします」

「了解した」

「分かりました」

サラの言葉を受けて、ナイトハルトとクレアが席を立つ。

一礼して足早に会議室から出ていく二人を見送り、オズボーンは改めてクロスベルで起きた出来事の報告書に目を通す。

「一つ確認しておきたいのだが……」

「何か？」

会議が一段落して息を吐くも、鉄血宰相の言葉にサラは緊張した面持ちで応える。

「今のリイン・シュバルツァーは学生としてクロスベルでボランティアをしていると取って良いのかな？」

遊撃士としてはヨアヒム・ギウンターが逮捕された時点でその活動は終わっている？」

「え……えええ」

重ねられた質問にサラは身構えながら頷く。

改めて思い出すが、この鉄血宰相は帝国内での遊撃士の活動を締め上げた張本人。

今回の事はサラとリインは一時復帰という言い訳にしてクロスベルの事件に介入したが、彼にとっては見過ごせないものがあるのかもしれない。

「何か問題でもありますか？」

警戒を強め、続く言葉を何通りか考えながらサラはオズボーンに次の言葉を促す。

「いや、大したことではない。今回のリイン・シュバルツアーの働きに対する各国で設定した懸賞金の総額がどれほどになるのか気になっただけだ」

「へ……………」

「おや知らないのかね？ 一般人に対して、『D∴G教団』の情報に懸賞金を掛けて情報提供を募っていると」

「……………あ……………」

言われて思い出す。

六年前の殲滅戦で逃げられた残党に対して掛けられた懸賞金。

もつともこれは軍人や警察官、そして遊撃士には適応されないのだが、今のリインは遊撃士の立場から学生、一般人に戻っており変則的ではあるがその対象となっている。

「帝国での『拠点』の情報が二つ、ブローカーの団体が一つ……………」

正規軍と鉄道憲兵隊の成果次第だが、それに当然カルバート側にも情報提供を行っているのだろうか？」

「え……………ええ……………」

うわあつと内心で呆けながらサラは懸賞金の額を思い出す。

帝国だけで500万ミラは行くのではないかと簡単に計算して、それだけあればお酒を——ではなく、ノーザンブリアのことを思い浮かべるが、何も関係ないリインにたかるわけにはいかないとサラは自制するのだった。

ちなみにその懸賞金について知らされたリインはその権利を全てクロスベル市に譲渡し、そのおかげで賠償金や破壊された施設などの修繕費を何処が支払うか責任の押し付け合いが行われていた会議は円滑に進み、クロスベルの復興は想定よりも早く進むのだった。

そして余談ではあるが、『D∴G教団』から押収された物品には盗品や『黒の競売会』で偽物とすり替えられていた本物があることが判明した。

クロスベル警察は持ち主を調べたのだが、その競売で落札した者は風聞を気にして《黒の競売会》に参加したこと事態を否定した。

そんな経緯もあり《D∴G教団》が溜め込んでいた資金の多くがクロスベル市が管理することになった。

そしてリインがそれらの中で唯一興味を示していた七耀石の結晶が、一ヶ月後に感謝状と共に彼の下に届くことをこの時のリインが知る由もなかった。

・*

「それじゃあ皆さん、見送りありがとうございます」

クロスベル駅、帝国行の列車を前にリインはロイド達に頭を下げる。

「いや、御礼を言うのはこっちの方だよリイン君」

そんなリインにロイドは恐縮する。

この一週間リインがクロスベルにしてくれた貢献は並大抵のものではなかった。

ウルスラ医科大学のヨアヒムの研究室に寝泊まりし、《グノーシス》服用者の治療。

さらにはワイスマンから譲渡された生体認証から、《砦》や《僧院》の隠し扉などを開けるために駆り出されたり、拘留されたワイスマンにはリインでなければ話さないと主張され事情徴収に駆り出されたりもした。

それにワイスマンと取引したことで引き出した《D∴G教団残党》の情報の懸賞金の寄付。

もちろんロイド達やエステル達も頑張ってはいたのだが、代用できない仕事ばかりだったので焼け石に水だった。

クロスベル支部の受付であるミシエル曰く、以前のアリオスを超える過密スケジュールであり、リインでなければ途中で倒れていたというほどの激務だった。

事件当時の援軍にキーアを守るための装備、そして後始末。

クロスベルの人間としてすっかりリインには頭が上がりなくなっ
てしまった。

「できることなら大々的にリインの功績を発表するべきだと思うんだ
けど」

しかし貢献度の反面、市民にはリインの功績はあまり浸透していな
かった。

診察室か遺跡か取調室ばかりが仕事場だったのだから仕方がない
が、街で精力的に駆け回っていたロイド達の方が持ち上げられている
ことに複雑な気持ちを感じずにはいられなかった。

「良いですよそんなこと」

元々誰かに評価されたくてやっていたことではない。

《グノーシス》の治療も、遺跡の開錠も。ワイスマンへの面会に至っ
ては、彼の認識を操る力を警戒する意味合いもあった。

どれもリインにしかできないことなのだから適材適所だろう。

「だけど学院を休んでもらったっていうのに」

「それはまあ……」

ロイドの言葉にリインは言葉を濁す。

この一週間は公休として認められたが、今週はアルゼイド子爵が武
術教練に来る予定があり、週末には同好会の活動も予定していた。

特に入学式で楽しみにしていると言っていたアルゼイド子爵に対
して申し訳なく感じてしまう。

それに加えて、いくら公休扱いにされていても今後の自由行動日は
補習だと考えると憂鬱にもなる。

「でも俺が補習を受けるくらいで助かる人がいるなら良いじゃないで
すか」

「そう言われてもな……」

警察学校時代、補習とは無縁の学生生活だっただけに余計に心苦し
くなる。

「あの……リイン……これ……」

言葉に窮するロイドを見兼ねてか、キアがおずおずと緊張した面
持ちで持っていた紙袋を差し出した。

「これは……？」

リインは受け取った紙袋の中身を覗き見ると、それはあの日にキアに貸したジャケットなどが綺麗にされて入っていた。

「あのね……あ、ありが……とう……」

言い辛そうに、それでもちやんと御礼を言うキアにリインは苦笑を浮かべる。

どうしてキアに避けられているかは分からないが、それでもきちんと御礼を言えることに感心しながら、リインは受け取った紙袋をそのままキアに差し出した。

「リイン……？」

「良かったら貰ってくれないかな？　またあんな事件があった時にも使ってくれ」

「え……でも……」

「君にまつわる事件はきつとまだ終わっていないと思う。だからその時のために君に持っていて欲しいんだ。きつと役に立つから」

リインの言葉にキアは受け取って良いのか迷って振り返り、ロイドの顔を窺う。

「良いのか？　ペンダントとかは結構な値打ちものだと思うんだけど」

「構いません。元々俺のために作っていたものじゃないですから」

キアの姿にあの子を思い出しながらリインはキアに笑いかける。

「もちろん無理強いはしない。君がいらなら遠慮しないでいらな
いって言ってくれていい」

その言葉にキアは迷いを見せながら、それでもリインの手から紙袋を受け取った。

「ふふ……キアちゃん、リイン君に言うことがあるんじゃない？」

「キア、頑張ってください」

終始おっかなびつくりの様子の子のキアを微笑ましく見守りながらエリイとテイオはキアを促す。

「えつと……あ、ありがとうリイン」

「どういたしまして」

紙袋を抱え、言い辛そうにしながらもちやんと御礼を言うキアの頭をリインは優しく撫でる。

触れた瞬間にキアは肩を竦ませるが、それでも逃げることなくリインの手を受け入れた。

「……………おい、リイン……………」

と、そこでランデイが底冷えを感じる声をリインに投げかけた。

「何ですかランデイさん？」

キアの頭から手を放し、リインは首を傾げる。

「キー坊はやらんぞ」

「え……………」

「ランデイ、いきなり何を言っているんだ？」

「でも、言いたいことは分かるわね」

「ですね。すごい自然に頭を撫でましたから……………《超帝国人》恐るべし」

ランデイの言動にロイドは困惑するが、エリイとテイオはさもありませんと頷く。

「えつと……………」

「とにかくだ。俺は認めないからな！」

まるで三下の捨て台詞を放つランデイにリインは頭を搔く。

何となくだがランデイの言いたいことは分かる。

ようはリインがエリゼの周辺を気に掛けることと同じなのだろう。

そう考えると、軽薄な表情の下に血と鬪争を好む猟兵の影は感じなかった。

「ランデイさん」

「あん？ 言っておくがこれに関しては一切引く気はねえからな」

獰猛な目で威嚇して来るランデイにリインは苦笑する。

「もうすっかり貴方は人間みたいです。自信を持って良いんじゃないですか？」

「それは……………ちつ」

自分の言動を振り返りランデイはバツを悪くして顔を手で覆う。

「クルトはミユラーさんやクリスに伝えておくことはあるか？」

「いえ、大丈夫です」

リインの申し出にクルトは首を横に振る。

「そうか……」

胸を張っているクルトにリインはそれ以上何も言わずに、レンとエステル達に向き直った。

「レンは結局エステルさん達と行くことを選んだんだな」

《太陽の砦》でコリンを助けた時、レンは後の事はエステル達に任せて消えようとしていた。

それを諫めて諭し、エステルとヨシユアはクロスベルで知ったレンの全てを受け止めた上で家族になろうとレンを抱き締めた。

レンはそれに泣きながらも受け入れ、コリンをヘイワース夫妻に渡す時、彼らに《レン・ブライト》と名乗った。

何か言いたげだったソフィアだったが、ハロルドはそれを諫め、何も言わず何も聞かず、ただコリンを救ってくれた御礼としてエステル達を含めて食事に招待したとリインは聞いている。

「ええ、エステルがどうしても言うから仕方がなくよ」

ツンとそっぽを向いて答えるレンにはもう以前に感じていたリインが癒せなかった寂しさは感じなかった。

「僕達はあと一ヶ月くらいクロスベルの復興を手伝ってからリベールに戻るつもりだ。レンのことを父さんたちにも話さないといけないから」

「レンのことよろしくお願いします」

別にレンの保護者だったわけではないのだが、自然とリインはそんなことを言っていた。

「モチのロンよ！　これからレンは徹底的に幸せにして上げるんだからっ！」

元気良くエステルは答えて、レンを後ろから抱き締める。

「暑苦しいわよエステル」

それを鬱陶しそうにレンは突き放すが、本当に嫌がってはいない。

もう自分の役目は終わったのだとそんなエステルとレンのやり取

りを微笑ましく見ていると、おもむろにレンがリインに歩み寄る。

「リイン、ちよつと良い？」

レンはリインの服の裾を引っ張りしやがむように促す。

「ん……どうかしたの——むぐっ!？」

促されるままにしやがんだリインにレンは両手を伸ばし頬に手を添えると、背伸びをしてその唇を奪った。

「なあっ!？」

「あ……」

「おおっ！ レン、だいたん」

「キ、キアちゃん見ちゃダメ！」

口々に悲鳴が上がるがそれらをレンは無視する。

「——ん……」

閉ざされた口腔を押し開け、思考停止してされるがままのリインの舌に自分の舌を絡めて蹂躪する。

とても十三の少女が奏でるとは思えない妖艶な音がその場に響き、思わず一同は固まる。

たっぷりと十秒。

周りやリインにとっては永遠とさえ感じる時間を掛け、レンは余韻を残すようにリインの唇を最後に舐めるようにして顔を放した。

「……………」

静寂がその場に満ちる。

リインはしやがんだ姿勢のまま石像のように固まってぴくりとも動かない。

「——って何をしてんのよレンツ！」

「フフ、何ってタダの御礼よ。わざわざトリスタから来てもらって、あの人達やコリンを助けてくれたんだもの。ちゃんと御礼をしないといけないでしょ？」

「そうだけど……そうだけど……」

顔を真っ赤にしてエステルは何かを言おうとするが、うまく思考がまとまらない。

「フフ、エステルったら初心ね……キスくらいヨシユアとしたことが

——ああ、まだなかったのね」

「キスくらいしたわよ！ でも……でも……あんなキスは……その……」

直前の光景を思い出してエステルは声をすぼめて俯く。

そんなエステルの様子をこれ幸いとレンはいじり始める。

「リイン君、大丈夫か？」

そんな光景を前に微動だにしないリインを見兼ねてロイドが声を掛ける。

「ダメね。完全に意識が飛んでるわ」

大きく見開いた目の前で手の平を振っても無反応なリインにエリイは思わず同情する。

「超帝国人にもちゃんと弱点があったようですね。真似をするつもりはありませんが」

「って言うか、あれは獲物を狙う目をしていただけ。あの年の女の子がする目じゃねえぞ、御愁傷様」

「ごしゅーしよーさまっ」

手を合わせるランディをキアが真似してリインを拝む。

結局、帝国行きの列車の発車を知らせるベルが鳴り響いてもリインは固まったままだったので、ランディとロイドが無理矢理運び込んで席に座らせて、最後の別れを交わすことなく別れることになったのだった。

・*

トリストタに着く頃には流石に正気に戻ったリインは心頭滅却と念じながら第三学生寮に辿り着く。

寮の中に人気はない。

時間はまだその日の最後の授業が行われている。

「心頭滅却……心頭滅却……あ……」

そのまま自室の扉を開け、あっさりと開いたことでリインは鍵を掛けていなかったことに首を傾げる。

「そういえば鍵を掛けるのを忘れていたな……」

あの日の夜。

《ARCU》に突然レンから通信が入り、その後ろにエステルたちの声と戦闘音を聞いて鍵を閉めるのを忘れて飛び出していた。

ラインの部屋にあるのは東方の掛け軸や刀掛けにラジオ。

それからノイ達がこちらで過ごすための空間としてドールハウスが飾られているくらい。

ローゼンベルク工房製のドールハウスは価値があるが、盗られたり、見られたりしてまずいものは特にない……はずだった。

「しまった。そう言えば、あの時、この本を読んでいたな」

机の上に置かれた古びた本を見てラインは鍵を開けっぱなしにしていた以上に顔をしかめる。

その本はクロスベルの《星見の塔》で手に入れたたくさんの古書の一冊。

中世の錬金術師が残した魔導書であり、少しずつトマス教官に引き取ってもらっている本だった。

「……まあ、いいか」

放置してしまったものは仕方がないと割り切り、ラインはその本を《影の箱庭》の中に入れる。

盗まれたわけでもないのだからラインは気に止めずに、制服に着替える。

今日の授業にはもう間に合わないが、職員室に帰還報告をしなければならぬ。

とりあえず提出するように言われていた一週間の行動報告書の束を持って登校する。

通学路を歩いている内にその日の最後の授業が終わる鐘が響き渡り、ラインが学院に着く頃には、下校する生徒と部活に向かう生徒たちに分かれて学院は一時的に賑わっていた。

「あ……ライン……帰っていたのか」

真つ直ぐに昇降口から出て来た紅い制服の少女、ラウラがラインの姿を見て軽く驚く。

「ああ、きつき到着したばかりなんだけど……」

ラウラに答えたリインはそれに目を奪われる。

「ラウラ……それはいったい何だ？」

「ん……それとは何のことだ？ 何か付いているのか？」

頭を指差すリインにラウラは首を傾げて払って見せるが、それはラウラの手をすり抜けるようにしてそこにあり続けた。

まるで霊体のようなものだと思ったところで、周りの生徒達がラウラのそれを一瞥もしていないことに気が付く。

「なあ、ラウラ……もしかして俺の部屋に入ったか？」

リインの言葉に息を呑み、首を横に振る。が、ラウラの頭の上のそれは動揺するようにピンツと立つ。

「いいいいや、わわわたしはリインの部屋に何か入っていないぞお」

目を逸らし、言葉を震わせながら否定するラウラの言葉に説得力は微塵もない。

「ラウラ……もしかして——」

「わ、私はこれから部活なんだ。すまないリイン、話は後で聞くっ！」

ラウラはそう捲し立て、止める間もなく駆け出した。

そんなラウラの背中を見送りながらリインは頭を抱えた。

「どうしてこうなった……？」

ラウラの頭の上についているリインにしか見えていない犬の耳。

そして、リインが部屋に残っていた本のタイトルは《魔人化初級編

七耀石を利用した人体の魔獣化現象》だった。

21話 墮ちる女剣士

魔獣。

それは通常の動植物とは違い、七耀石を取り込み体内に結晶回路を作り出した存在の呼称。

そのため魔獣の中には、人間の場合はオーブメントを使わなければならない魔法を行使できる個体も少なからず存在している。

まだオーブメントが発達しておらず、法術が七耀教会に独占されていた頃。

その生態に興味を抱いた武人がセピスの欠片を魔獣に倣って食べてみたことがあるが、いくらセピスを食べても魔法を使うこともできず、さりとて魔獣に変貌することもなかった。

その経緯から、人がセピスを取り込んだことで魔獣にはならないという見解がゼムリア大陸に広がり、現在でも取り締まりされていないがそれをする者はいなかった。

「——ですが、この話にはまだ続きがあるんです」

自由行動日、生徒達が部活や課外活動を楽しんでいる中、リインは一人VII組の教室で補習を受けていた。

もつとも、授業の内容はこの一週間VII組で行われたものとは全く関係なく、加えて言うならば教室にいたはずなのに何も無い黒の空間でリインは講義を受けていた。

トマスは真剣な眼差しを向けてくるリインに対して、講義を続ける。

「結論から言ってしまうえば、セピスを食べることで人間を魔獣化させることはできません……」

ですが、最初に摂取する量の配合比に個体差が大きく、適量を摂取しないと変容は始まりません……

少な過ぎても多過ぎてもいけません。それに加えて人によって個人差もあります……

そうして厳選されたセピスを摂取することで初めて身体に結晶回

路が作られます……

そこからはとにかく多くのセピスを摂取し続けることで人は徐々に理性を失い、精神を変容させていき魔獣となります」

「魔獣化と魔人化にはどんな違いがあるんですか？」

「良い質問ですねリイン君……」

厳密に言えば、この二つは同じものと言えます……

そもそも魔獣化というのは獣が魔に堕ちたからそう呼ばれているわけで、人間の場合はそれこそ魔人と呼ぶのが正しいでしょう……ただ不思議なことに魔獣から採取したセピスを取り込むと、その魔獣の形質を引き継ぐことがあるそうです……

おそらく《グノーシス》によって起こる魔人化はそういった不純物の要素を取り除いているのかもしれないですね」

「ラウラのミミが他の人には見えてないようですが、これはどういうことなんですか？」

「私も専門ではないので正解かは分かりませんが……」

人の変異は霊体から起こっているのかもしれませんが。幸い気付いているのは私とリイン君にロジャー、Ⅶ組ではエマ君だけのようなですね……

あとは一年Ⅲ組に一人気付いていそうな子はいますが、おそらく今回の事には関わっていないでしょう」

「Ⅲ組にそんな子がいたんですか？」

「ええ、まあその子の事は今は置いておくとして問題はラウラさんです。正直まずいことになっています」

「そうなんですか？」

「不思議に思いませんか？ セピスを摂取することで人が魔獣化するのならそれを禁止する法を作っておいてしかるべきだと」

「言われてみれば、そうですね」

「昔はいろいろな宗派がセピスを使って術を使える体を作っていたんです……」

教会の法術、東方の符術や方術、魔術。後は身近なところでガイウス君の腕の刺青、あれは精霊術の名残ですね……

ですが導力革命以降、セピスは人の文化に密接に関わるようになり
ました……

そしてそれまで特別だった魔術や法術は導力魔法という形で万人
が使えるようになり、それを機に七耀教会はセピスを使った人体の改
造を隠匿するように働きかけたのです」

「あえて法として定めなかったのは、法を作ることによって邪推されて試す
人が出ることを防ぐためですか？」

「ええ、その通りです……」

わざわざ味もしない石なのですから、昔の知識が失われれば誰も好
き好んでセピスを食べようだなんて思わないでしょう……

例えいたとしても、一段階目の条件が厳しいので変異が起きる可能
性も低いですからね」

「七耀教会としては……ラウラのことをどうするつもりなんですか
？」

「……………第一段階を経過した人間が、完全に魔獣化するには個人
差もありますがおよそ一ヶ月掛かります……」

もしも彼女が魔獣化したのなら、私たちは彼女を外法と認定して滅
することになります」

「それは——」

「セピスによる魔獣化は今の導力文明において隠さなければいけない
ものです。それに人を害する獣になるのなら滅する理由としてはそ
れだけでも十分……」

そして彼女が子爵家の令嬢だったとしても私たちのやるべきこと
に変わりはありません」

丸い眼鏡の奥に冷徹な守護騎士の光を宿してトマス・ライサンダー
は言い切る。

「ですが、まだ彼女が完全に魔獣化するには時間があります。第一段
階の症状が確認できたのも一昨日からです。まだ猶予はありま
す」

「具体的には何をすれば良いんですか？」

「セピスをこれ以上摂取させないこと、それだけで良いんですがこれ

が一番難しいんです……

今のラウラさんは体の変容をわずかでも実感できてしまっているでしょうから、そうなればセピスは麻薬と同じであり、セピスに群がる魔獣の様に彼女はそれを求めずにはいられない」

「っ——」

「リイン君が責任を感じる必要はありません……

確かに魔導書を部屋に放置してしまっていたことは咎めるべきことですが、《箱庭》の利便性から私がまだリイン君から本を引き取っていないかった責任でもありませんから」

《星見の塔》で手に入れた魔導書は主に《人造人間》を造るための技術書だった。

当然、禁書でありリインは七耀教会に引き取ってもらおうと考えていたのだが、守護騎士と隠しているトマスの事情もあり本の大半はまだリインが《影の箱庭》で管理しているのだった。

「良いですか、リイン君これは不幸な事故です……

幸いなことに被害はラウラさんだけに留まっています。教会への報告は私がギリギリまで遅らせるので、くれぐれも内密に何としても一ヶ月の間でラウラさんを更生させます。でない——」

どこか切羽詰まった様子でトマスはリインに強く脅すように言い聞かせるのだった。

・*

五月九日、日曜日。

補習が終わってリインは早速ラウラに声を掛けるが、リインの姿を見た瞬間ラウラは逃げ出した。

その逃げ足は早く、《鬼の力》を解放していないリインでは追い付けない程に俊敏だった。

五月十日、月曜日。

意外なことにラウラの方からリインに話しかけてきた。

リインがクロスベルに行っている間に部屋の中に入ってしまったことを謝罪される。

リインはそれを許し、ラウラにセピスを摂取していることを尋ねた。

ラウラはそれを否定したが、目を泳がせての返答だったので嘘なのだろう。

五月十一日、火曜日。

旧校舎にG・シユミット博士がやって来たが、リインはラウラの監視を始める。

その日、ラウラは街道に出て魔獣と戦いセピスを集める様子はなかった。

五月十二日、水曜日。

根気よくラウラに話しかけるものの、そのしつこさにラウラはリインに怒りをぶつけて言外にそれを認めた。

「そなたには関係ない事だ。私に構うなっ！」

セピスのことは認めたもののそれ以上は聞く耳を持たないとラウラはリインを拒絶する。

今日は旧校舎の方で爆発が六回あった。新記録である。

五月十三日、木曜日。

クリスにある程度の事情を説明し、リインは協力を求めた。

《ブリランテ》を賭けた勝負を次の自由行動日に行うことをダシにして、クリスが勝ったらラウラに言うことを一つ聞いてもらおう事を条件にする。

ラウラはそれを承諾してくれた。

今日は旧校舎の方で爆発が五回あった。

・*

五月十四日、金曜日、夜。

第三学生寮の一室でラウラは灯りも付けずに小さなセピスの欠片を手の中で弄んでいた。

最初はただの興味本位と半信半疑だった。

《人体強化のためのセピスの配分表》と題されたメモ書きを見て、自分の未熟さを感じていたラウラは怪しみながらもその表通りにセピスを服用してみた。

それを数日続け、ラウラは効果のほどをようやく感じられるようになった。

まるで戦術オーブメントを始めて使った時のように、膂力や体力、剣速が少しづつ上がっていることを実感できる。

「私は強くなれている……」

実感があるのだからラウラはそれにのめり込む。

《魔獣化》のことなどラウラは知らない。

だが知っていたとしても、ラウラはこの方法に縋っていたかもしれない。

レグラムでは大人顔負けの実力と評価されていて、それを鼻にかけていたわけではなくても誇らしかった。

もちろん《光の剣匠》の父を始めとしたラウラにはまだ勝てない者たちもいたが、それでもそれは経験の差だと割り切ることができた。

そしてラウラの自信はレグラムだけの狭い範囲のものではない。

一年に一度行われる帝都での武術大会の未成年の部に出場して優勝した経験だつてある。

ラウラの自信はそんな裏打ちされた確かなものだった。

しかし、それが変わったのは去年の御前試合からだつた。

「リイン・シュバルツァー」

今の時点でもラウラが手も足も出ないのに、それでも全力ではないということに驚く。

異能者だということに文句を言うつもりはないが、断片的に知った《鬼の力》についてラウラが思ったことはずるいだった。

身体能力を劇的に向上させる《異能》。

そんなものがあるのなら自分だって欲しいと思う。

「フィー・クラウゼル」

元猟兵ということで戦い方そのものや、思考において何もかも合わない。

「剣士を《正道》とするならば猟兵は《邪道》、と心の片隅で少しだけあった蔑みの気持ちがあつたが、実戦で本当に貢献していたのは自分よりも彼女の方だった。

そしてラウラが窃盗団に人質に取られた時、逆の立場だったらラウラに何ができただろうか。

何もできるはずがない。

人質を救う術もなくせに、人の戦い方を《邪道》と蔑んでいた自分はいったい何様だったのだろうか。

フィーは確かに人を殺した。それと同時にラウラを救ったことも事実。

ならば《邪道》も受け入れて然るべきものだ。とラウラは自身に言い訳をする。

「クリス・レンハイム」

入学当初はラウラよりも弱かったのに、日に日に強くなっている少年。

学院からはリインの腰巾着、取り巻きなどと揶揄されているが蔑まれているのが分かっていないのかそんな陰口を聞いても嬉しそうでラウラには理解できない人種。

一つ気に入らない点を上げるとするならば、現時点では自分の方が強いのにクリスの目にはリインの姿しか写っていないこと。

それまで誰かに追われたことのないラウラにとってクリスの成長は焦燥感を初めて煽られる存在なのだが、同時に彼の眼中に自分がないという無視される苛立ちも初めてのものだった。

「……」

その三人の存在がラウラの心をかき乱す。

「強くならねばいけないんだ……」

《武の双壁》たるアルゼイド流の次期継承者として、弱いままではいられない。

そして何よりも、武を研鑽し高め合いたいと思える存在と出会えたのに、誰も自分の事を見てくれないことへの不満と不安がラウラを駆り立てる。

「強く……なるんだ……」

自分に言い聞かせるように、ラウラは最初の調合で買い溜めをしたセピスを齧る。

「……………足りない」

いつもと同じ量を摂取しているはずなのに、その日ラウラはセピスへの飢餓感を初めて感じた。

・*
・*

五月十五日。土曜日。

その日、朝起きたらすでにラウラは寮を出ており、そして学院にも登校していなかった。

「ごめんなさいリイン君」

「いえ、ルフィナさんのせいじゃないです。まさかラウラに出し抜かれるとは思っていませんでしたから」

自惚れのような言い訳だが、ラウラは気配を消す術に長けているわけではない。

そんな思い込みで傲慢になっていた自分の判断にリインは内心で激しく罵る。

「こんなことになるなら体面なんて気にせず縛り付けておくべきだった」

この一週間、ようやくラウラにセピスの常習をやめさせる切っ掛けを作れたと思っただけで、これである。

《武の双壁》のアルゼイドの一人娘が外法に手を染める。

その風聞を気にして、これまで強く諫めることをしなかったことにリインは悔やむ。

「まさかこんなに溜め込んでいたなんて……」

ラウラの部屋の扉を法術で開けて家探しした結果、彼女の机の引き

出しには大量のセピスが備蓄されていた。

同時に見つけたのは学生会館の購入証。

貴族生徒の特権の一つに、セピスを購入できることがあったことをリインは思い出す。

貴族生徒は戦術オーブメントの強化のために地道な魔獣退治をではなくミラでセピスを購入して済ませているのが主だった。

なのでその気になればラウラもこれを利用することができ、彼女ならセピスを集めるなら魔獣退治だろうという思い込みの裏を掛かれたことになる。

「今のラウラの目的は何だ？」

トリスタの街を当てもなく全力で走り回りながらリインは考える。

部屋には大剣がなかったが、まず最初に確認した東西の街道に彼女がいる気配はなかった。

ならば大量にセピスを保管している学院の資材置き場や、もしくはラッセル一家の工房となっている旧校舎かと思ったが、そこにも彼女が現れた形跡はない。

《識の目》も《観の目》も明確な答えを示してくれずにリインは焦燥を募らせる。

「くそっ……」

まるで何かに邪魔をされているように因果を見通すことが出来ない。

「どうすれば良い？」

ラウラが特別実習が終わってから焦っていたことは知っていた。

それを放置してクロスベルに行ってしまったことが間違いだったのかもしれない。

いざとなれば《グノーシス》や《呪い》のように能力に任せた治療ができるからと高を括っていたのかもしれない。

そのしわ寄せが来ているのだと思うといっそう責任を感じてしまう。

「こうなったら……」

リインは肌身離さず持ち歩いている薬のケースを取り出して《紅い

錠薬》を――

「落ち着きなさいリイン君」

それをルフィナが取り上げた。

「ルフィナさん、でもっ！」

「焦る気持ちは分かるわ。でもこれを使うような事態じゃないわ」

「だけドラウラがあんな事をしたのは俺の――」

「貴方のせいじゃないわ」

リインの言葉を遮ってルフィナは言い切る。

「どんな経緯があつたとしても、最後にそれをやると決めたのはあの子よ。リイン君がそこにまで責任を感じる必要はないわ」

「だけど、あんな外法を使うなんてラウラらしくない！ たぶんレীগニッツのように《呪い》に突き動かされているはずだ。それなら俺がやらないと」

「らしくないって……まだ一ヶ月ぐらいの……いえヴィクター子爵の娘ならそう考えてもおかしくはないか」

付き合いの短さでラウラの人となりはまだ判断しきれないが、あのヴィクター子爵の娘ならばと考えてしまうとリインの主張もあながち間違っていない。

もつともやはりそれは早計であり、リインが責任を背負うべきことではない。

「よくない兆候ね……」

仮にラウラの今回の暴走が《呪い》によるものだったとしても、それはリインが背負うべきことではない。

しかし、それを指摘しても今のリインは果たして聞き入れてくれるだろうか。

「リイン君、ここはみんなに話して協力してもらいましょう。もうラウラさんの名誉を気遣っていられる――」

魔獣化だけならまだしも、彼女が一般人を襲ってしまえばそれこそ取り返しがつかないことになる。

それだけは避けるべきだとルフィナは提案しようとして言葉を止めた。

「ルフィナさん、どうかしまし——」

突然言葉を止めたルフィナにリインが首を傾げると、その瞬間リインの視界は黒く染まった。

「だーれだ?」

背中から抱き着くようにして、両手で誰かがリインの目を塞ぐ。

「なっ——!?!」

一瞬、混乱するもその声を聞き間違えるはずもなくリインは驚きの声を上げた。

「ア、アネラスさん!?!」

「正解!」

嬉しそうな声でアネラスは手を外して、身体をリインから離す。

「レンちゃん誕生会以来だね弟君。ルフィナさんもお久しぶりです」

「ええ、そうね……でも、どうして貴方がトリスタに?」

「ラツセル一家の定期連絡と無事の確認に一ヶ月に一回、遊撃士の誰かが来るって聞いていませんか?」

「それは聞いています。てつきりアガツトさんが来るんだと思っただんですけど」

ルフィナの質問に答えたアネラスにリインは予想を外されたことに驚く。

「うん、そこはアガツト先輩と交代って言うことで……ところで何か事件があったの?」

挨拶を切り上げて、アネラスは顔を引き締めて尋ねる。

「それは……」

鋭いアネラスなのか、それとも簡単に見抜かれてしまう程に焦っているのか。

リインはラウラの事情を話すことを思わず躊躇う。

トマスには内密にと釘を刺されている。

それにアルゼイドの令嬢が外法に手を染めたことを明るみにする風聞の悪さ。

協力を仰いだクリスにもそこまで詳しい説明はしていないのに、完

全な部外者のアネラスに話すことは躊躇ってしよう。

「ほらほら、急いでいるんでしょ？ お姉ちゃんが手伝って上げるから遠慮なんてしなくて良いんだよ」

えっへんと胸を張るアネラスにリインはそれまで張り詰めていたものが解けていくように顔を緩めて、事情を説明した。

……………

……………

……………

「弟君の部屋に勝手に入って本を盗み見たラウラちゃんって子がセピスを食べて魔獣化……それはまた災難だったね」

「そんな言葉で済ませられることではないですよ」

リインはアネラスと肩を並べて第三学生寮に足を向けていた。

「事の発端が俺なんですから、ラウラがこのまま本当に魔獣化してしまつたら、ヴィクター子爵に何と申し開きをすればいいのか」

「うーん……確かにそこは難しい問題なんだけど。ある意味セピスを食べてみるなんてことは武術家なら一度はやってみる麻疹みたいなものなんだよね……」

実はわたしも一度、セピスを食べたことがあるんだよね」

「え……？」

意外な言葉にリインは耳を疑う。

「意外？ 弟君は目的が逆だったから、そんなことは考えたこともなかったかな？」

「確かにそうですね……」

自分を律するために武術を習つたリインと強くなろう武術の道へと踏み込んだ者。

比率としてはリインの方が少数派なのは間違いない。

差し迫つた理由もなく魔獣化してまで強さを求めるラウラの思考が読めないのはその差異のせいなのかもしれない。

「ところで弟君……もしかして調子が悪い？」

「え……？」

「何か顔色が——」

アネラスがリインの顔を覗き込んだところでガラスの割れる音が二人の耳に届く。

「アネラスさんっ！」

「うん、行ってみよう」

すぐにその音に反応してリインとアネラスは駆け出す。

音の発生源はすぐに分かった。そもそもラウラの行く先の痕跡を探しに彼女の部屋をもう一度探すために第三学生寮に戻っていたところだった。

「ここが弟君たちが寝泊まりしている寮なんだ」

「ええ、そうなんですけど」

時刻は正午に迫っている。

未だにこの寮生達は学院で勉強に励んでおり、無人なはずなのに第三学生寮の中からは酷い騒音が響き渡っていた。

「……………音の位置からすると……………俺の部屋か？」

「とにかく行ってみよう？」

第三学生寮に入るとその音は一回の玄関まで響いて聞こえてきた。

ドタバタとまるで子供が部屋で暴れ回っているように音が響き、天井が揺れる。

リインとアネラスはそこから音を忍ばせて、二階へと上がる。

音の発生源は一番端のリインの部屋から。

木製のドアは砕け散り、中で暴れ回る音が直接聞こえて来る。

「がああああああっ！」

獣のような声が響き、金属の何かが砕ける音が響く。

リインとアネラスはドアの左右に分かれ、手信号で合図をして部屋に突入した。

「っ——!？」

そこにいたのは獣の形相をしたラウラ。

ラウラはリインとアネラスが突入した瞬間、割れた窓から外に飛び出した。

「くっ——」

「追い駆けるよ弟君」

その後を追ってアネラスが我先にと窓の外へと身を躍らせた。

・*
・*

東トリスタ街道の一角。

常人離れた獣じみた速さだったが、元々国中をその足で歩き回る現役遊撃士とリインを引き離すことはできず、ラウラは街道を外れた袋小路に追い詰められた。

「ラウラ……」

改めて見る彼女の姿は酷いものだった。

大きく見開いた目。

追い詰められたのに背負った大剣を構えることなく、犬歯を剥き出しにして威嚇して来る様はまさに魔獣だった。

「あれが人の魔獣化なんだ……わたしにもイヌミミなんて見えないけど、本当にこんなことってあるんだ」

叩きつけてくる敵意にアネラスは身構えながら目を凝らす、件のミミはやはり見えない。

「トマ——教会の神父様は一ヶ月の猶予があるって言っていたのに」

もう変容が完了してしまっているのではないかと思うくらいにラウラの仕草は獣のそれだった。

「とにかく一度気絶させよう。わたしにミミが見えないならまだ間に合うのかもしれないから」

「……………そうですね」

動揺を抑え込み、リインは太刀を抜かずに歩み寄る。

「ラウラ……頼むから大人しくしてくれ。きつとまだ治せるから」

「があっー」

差し出した手は乱暴に振り払われ、ラウラはリインを蹴り飛ばす。

「弟君……」

「大丈夫です」

腕でラウラの蹴りを受け止めたリインはその勢いでアネラスの所まで戻される。

「情けない……それでもヴィクター子爵の娘なのか？」

「——っ」

「その背中の大剣は飾りか？ ああ、そうだな飾りだろうな。力が欲しいからって外法に頼って、それが君の限界だ」

「お、弟君……？」

先程までの相手を気遣う言葉が一転して、挑発に切り替わったことにアネラスは戸惑う。

が、そんな彼女の戸惑いを無視してリインは続ける。

「これならクルト・ヴァンダールの方がまだマシだったな。アルゼイド流も地に落ちたな」

「——ダメレッツ！」

背中の大剣を抜き放ち、ラウラは獣じみた速度で踏み込み大剣を真っ直ぐに振り下ろす。

「遅い」

が、大剣が振り下ろされるよりも速くリインは前へと一步踏み込み、拳を鳩尾に叩き込んだ。

「うえっ——」

的確に急所を打ち抜いた拳の衝撃にラウラは込み上げた衝動を抑え切れずに胃の中のをその場にぶちまける。

胃液に混じったセピスの欠片。

その量にリインは顔をしかめる。

「ラウラ……」

蹲り痙攣するラウラにリインは導力魔法のアクアブリードを軽く叩き込む。

「目が覚めたか？」

「……………」

過剰に摂取していたセピスを吐き出し、頭から水を浴びせられたラウラは獣の気配は薄くしたまま蹲る。

「君がやっていることがどれだけ危険なのか分かっただろ？ まだ獣に堕ちるには猶予がある。今から治療をすれば十分に人に戻れるんだ」

「……………」

「ラウラにはちゃんと剣の才能がある」

「っ——」

「だからこんな外法に頼らなくたって、もう数年もすれば立派な剣士になれるはずだ」

「——さい……」

「俺のようになるべきじゃない。なっちやいけないんだ。だから——」

「うるさいっ！」

リインの言葉と差し出した手を獣としてではなく改めてラウラ自身
の意志で振り払う。

「何が才能があるだっ！ 馬鹿にするな！」

勢いよく顔を上げたラウラの目尻には大粒の涙が浮かんでいた。

「こんなにも弱いのに、何の役に立ってもいないのに……誰から見
向きもされていないというのに……そんな私のどこに才能があるな
んて言えるんだ!？」

「ラウラ……」

「私はティータよりも劣っているのだから？」

ラウラは自嘲するように笑う。

「何が武の双璧のアルゼイドだ……私は……私は——」

「ラウラ、ティータをクロスベルに連れて行ったのはあくまでもトロ
イメライがあったからで——」

「私はアルゼイドなんだ……だから誰よりも強くならなければならな
い。強くならなければいけないんだ」

ラウラの周囲に黒い瘴気が溢れ出す。

「これは《呪い》！」

黒い瘴気は颯風となつてリインを吹き飛ばす。

「力が欲しい……」

黒い瘴気の中でラウラは虚ろな声をもらす。

「だから……私は強くなるんだ」

ラウラは掌に乗る程の大きさの銀耀石を見せつけるように手にし

て――

「それは――やめろラウラッ！」

見覚えのある銀耀石にリインは声を大にして制止する。

が、ラウラはそれを無視し大きな口を開いて、聖獣が造り出した銀耀石を飲み込んだ。

22話 剣の道

——アア、ココチヨイ——

熱に浮かされるようにラウラは湧き上がる力に酔いしれる。普段使っている大剣が小枝のように軽い。

ラウラの父のように、姉弟子であるオーレリアのように、それを片手で振り回すことに密かに憧れていたラウラはその事実には喜ばずにはいられない。

「フフ……」

子供のようにラウラは笑う。

女の身ではどうしても膂力で男に勝ることはできない。

オーレリアのような特異体質が例外として、女の身ではアルゼイド流を継承できても父には追い付けない。

歴代最高のアルゼイドの剣士と謳われる父の存在はラウラにとって強い憧れと同時にコンプレックスでもあった。

誰から、特に何かを言われたわけではない。

あえて言うならラウラの才能が父や姉弟子には決して追い付けないと言っていた。

それを実感する度に何度男の身に生まれたかかったと思ったことか。

「だが、もう関係ない……」

もはや男か女かなど些細なことに過ぎない。

「これでもう父上を落胆させないですむ」

武術指南の授業、リインがいないことに落胆していた父の剣に遣る瀬無さと憤りの無念を——

「これである女を見返すことが出来る」

アルゼイド流を傍流と蔑み、嘲笑した女剣士への屈辱を——

「これである人に見てもらえる」

たった数合だけで魅せられた槍捌き。《槍の聖女》と思われる女性に一瞥もされなかった不満を——

「これでリイン！ そなたに——」

気分を高揚させて叫んだラウラは思わず言葉を止めた。

ぞくりと感じた悪寒にラウラは身を固くして大剣を構え直す。

本能とでもいえば良いのだろうか、それまで感じたことのない強さの匂いに強くなったはずの体が委縮し、耳が伏せられ尻尾が脚の間で小さく丸まる。

「ラウラ——」

彼女の名前を静かに呟くリインは腰溜めに太刀を構える。

その体には灰色の《鬼気》が纏わりつき、ラウラに白髪の鬼を幻視させる。

「言いたいことは後で聞く。抵抗はするな。一撃で終わらせるから」

「っ——！」

まるで問答する時間すら面倒で煩わしい、それでいて憐れみを感じさせる態度にラウラは恐怖を忘れ、怒りを爆発させる。

「——けるな……ふざけるなっ！」

この期に及んでも歯牙に掛けてくれないリインの態度にラウラは涙を浮かべる。

そんなラウラの予想外の叫びにリインは虚を突かれたように目を丸くする。

そんな態度がいつそうラウラを惨めにさせた。

「私はそんなに弱いのかっ!? ここまでやっても見向きもする価値もないのか!？」

ラウラも半信半疑ながらもセピスを使って強くなることは悩んだ。

最後の一押しは父親の落胆だが、それでもリインへの対抗心も確かにあった。

リインが自分達に無関心なのはライバルとして鎬を削るに値しないから、そう思っただけならラウラは誇りを捨ててセピスを利用して強くなることを選んだ。

しかし思惑通り力を得ても、当のリインは全く変わらなかった。

「ラウラ、俺は別にそんなこと言っただけもりはないんだが……」

「私を見るリイン・シユバルツアーツ！ さもなければ——私は……」

私はそなたを殺すっ！」

「はあっ!？」

もはや後には退けない。その気持ちに突き動かされてラウラは突撃する。

「アネラスさんっ下がって！」

注意を飛ばすと同時にリインはその場から跳び退き、ラウラの一撃を受けた地面が爆発した。

「はあっ!!」

両手から片手に大剣を持ち替え、リインに追い縋り振り抜く。

「っ！」

咄嗟に太刀で受け止めるが、空中に浮いたリインは弾き飛ばされる。

「くっ……まるで《鬼の力》だ」

とんでもない力と速度に、今まで主観でしか感じたことのなかった《鬼の力》をリインは初めて客観的に感じる。

ラウラの場合はセピスと銀耀石から《獣の力》とでも呼ぶべきかもしれない。

さらに追撃して来るラウラの攻撃を避けながら、その姿にかつての自分を重ねる。

大剣の一撃を掻い潜り、リインは胸を押すように突き飛ばして間合いを取る。

「ラウラ、もうやめろ。そんな力に振り回されて後悔するのは君なんだぞ」

クルトやマキアスの事、そして自分の事を思い出しながらリインは呼び掛ける。

《呪い》に突き動かされ、恥の上塗りを繰り返して死ぬほどの後悔をしていた二人の記憶はまだ新しい。

ラウラもまたそうなるだろうと予想して声を掛けるが、返ってきたのは獣の咆哮だった。

「オオオオオオッ！」

わずかに残っていた理性が消え、獣性がラウラの思考を支配する。

そうなってしまうえばもう人の声は届かないことをリインは良く知っている。

「仕方がないか……」

リインは胸に手を当て、《鬼気》を解放——しようとして視界が大きく揺れた。

「なっ——!?!」

不意の衝撃にリインは頭を抑えるが、それで揺らいだ視界は元に戻らない。

足元はおぼつかず。揺れる視界は白く染まり、呼吸が荒くなる。何が起きているのか分からないリインは致命的な隙を晒す。

「シャアアアアアア！」

その隙を逃さず獣のような咆哮を上げ、ラウラが斬りかかる。

「くっ——」

精彩を失った体を何とか動かしてリインはラウラを迎撃しようとするが、握力が伴わない腕は太刀を抜くことさえできなかった。

——まずい……

眼前には間合いに入り、渾身の一撃を繰り出そうとするラウラの姿。

それに対してリインは完全に動作が遅れている。

一片の迷いもない殺意に満ちた一撃が振り抜かれる。そして——ラウラは空高く打ち上げられた。

「大丈夫。弟君？」

太刀を抜いたアネラスが振り返ってリインの身を案じる。

「え……ええ……」

頭を抑えながら、リインはその場に膝を着き、打ち上げられたラウラは獣のように着地して距離を取って警戒する。

何がどうなっているのか分からないが、とにかく体が思うように動かない。

それに少しでも気を抜けば瞼が落ちそうになる。

「大丈夫です……すぐに終わらせます」

呼吸を整え、集中力を研ぎ澄まし、一時的に体の不調を無視して

リインは太刀を抜く。

そんなリインにアネラスは――

「えい」

リインの額を指で小突いた。

「な――何をするんですか!？」

不意打ちで額を押されたリインは大きく仰け反ってたたらを踏む。

「フラフラじゃない。あの子の相手は私がするから弟君は下がっていい」

「でもアネラスさん。ラウラは《呪い》に――」

「いいからお姉ちゃんに任せなさい」

リインの言葉を遮ってアネラスは言い切る。

《呪い》に対してアネラスができることはないはずなのに、その背中にリインは言葉にできない頼もしさを感じてしまう。

「……………お願いします」

結局、葛藤しながらもリインはアネラスに任せた。

「任されました……………ところで弟君、女の子を泣かせたことについては後でお説教だからね」

「え……………」

背中越しに掛けられた言葉にリインは顔を引きつらせた。

その瞬間、ラウラは地面を爆発させるような勢いで踏み込み、目下障害物と認識したアネラスに迫る。

リインの《鬼の力》に勝るとも劣らない速度と力で踏み込み、正気を失っていても体に染みついた技えを繰り出し大剣を真っ直ぐに振り下ろす。

その一撃に――アネラスは吹き飛ばされた。

「アネラスさんっ!？」

自信满满だっただけにリインはその結果に目を剥いて驚くが、空中でアネラスは身を翻し危な気なく着地する。

「良し……………」

その結果にアネラスは満足そうに頷き太刀をラウラに向ける。

「さあ、お姉さんが相手をして上げるよ」

「オオオオオッ！」

雄叫びを上げてラウラはアネラスに向かって突撃する。

躊躇なく振り切られる大剣。

一閃されるたびに風が颯風を撒き散らす凶刃。

アネラスは躲すことが出来ずに太刀で受け止めて、その度に吹き飛ばされる。

しかし、大剣の一撃を太刀で受け止めているとはいえ何の痛痒も感じさせずにラウラと対峙し続ける。

「ラウラちゃんって呼ばせてもらうけど……」

大剣の一撃を掻い潜り、身を寄せたアネラスは太刀を振るよりも語り掛ける。

「があっ！」

大剣の間合いの内側。

それに構わず乱暴にラウラは大剣を、むしろ腕で殴るような勢いで横薙ぎに払う。

その腕にアネラスは手を添え、ふわりとまるで風に舞う花のように大剣を飛び越えて躲す。

「あれは……化勁なのか？」

アネラスの身のこなしをそれまで俯瞰してみていたリインは呟く。

武術の基礎であり、八葉にもその技術は組み込まれている技術。いわゆる相手の動きを制御してその方向を操る身法のことをいう。

先程から派手に弾き飛ばされているが、それは化勁によって剣戟の威力は完全に殺されている証左だった。

「貴女の気持ちは私も良く分かるよ」

「っ——！」

がむしやらに振られる大剣が造り出す嵐の中。

アネラスはその一撃を先程と同じように化勁で躲しながらラウラへと言葉を紡ぐ。

「偉大な家族……優秀過ぎる先達、自分の事を軽く追い越していく後輩……良く分かるよ」

「ガアアアアア！」

ひとえにラウラは間が悪かった。

それまで積み重ねていた自信が崩れ去り、価値観すら揺らぐ事件の中で己の無力を味わった。

そんな中で何の因果か、古の外法がその目に止まってしまった。

ラウラの気持ちはアネラスも良く分かる。

「でもね。それじゃダメなんだよ」

アネラス達がそれを知ったのは、その戦いが終わった後だった。

あの子にも、《鬼》に墮ちそうになっていた彼にも何もできなかった。

さらには続く最終決戦の時も、自分達のミスでリインさえも失った。

誰かの思惑があつたかなんて関係ない。実際は生きていたのも結論でしかない。

自分を殺したくなるほどの後悔をした。

もしもその時にそんな強くなる方法が降ってきたらアネラスも飛びついてしまっていただろう。

外法の力に苦しんでいた弟分を知っていたとしても、例え既に手遅れで何の意味もなかったとしてもラウラと同じ選択をしたかもしれない。

「だから止めるよ」

そうアネラスは、走り出してしまった少女に自分を重ねて宣誓する。

——何なんだ……

がむしやらにラウラは大剣を振り回す。

獣へと墮ちた中に残るわずかな思考でラウラは目の前の女性に困惑する。

大剣は太刀を捉えているはずなのに、手応えはなく空を斬るような感触ばかり。

年は一つか二つしか違わないというのに、剣を合わせて感じるのは偉大な父と同じ実力差だった。

——そんなわけない……

ラウラは否定する。

目の前の見知らぬ女性は父と比べれば力も速さも技も劣っている。そして力と速さに関しては今の自分が遙かに凌駕している。

だが、幾度大剣を振るい、彼女を弾き飛ばしてもまるで手応えはなく、痛痒を感じさせる素振りも見せない。

「アアアアアアッ！」

ヤケクソのようにラウラは咆哮し、理性を失いながらも体に染みつかせた技を繰り返す。

——洗刃乱舞——

銀色に輝く光を大剣に宿し、一閃二閃、そして全身を回転させた三閃をラウラは振り抜いた。

「——なっ……」

大剣を振り抜いた姿勢のまま、ラウラはあまりの出来事に絶句して我に返る。

息を吐かせない三連撃。

弾き飛ばされた態勢を立て直す暇など与えなかった。

最後の一撃に至っては衝撃を通した手応えも感じた。

にも関わらず、彼女はラウラが振り抜いた大剣の先に何事もなかったかのように着地した。

「——何なんだ……そなたは……?」

まるで重さを感じない事実にはラウラは愕然とする。

膂力が上がっているから彼女の体重を感じないのではない。

彼女が刀身に足を付けた衝撃さえもなかった。

「そういえば名乗ってなかったね」

ラウラの怯えから漏れた言葉に女性は大剣に乗ったまま明るく答える。

「私はアネラス・エルフィード。《八葉一刀流・中伝》……貴女にはリン君の姉弟子って言った方が分かりやすいかな?」

「……………」

何の冗談だろうか。

振り抜いた大剣に乗る妙技など、ラウラは生まれてこの方一度も目

にしたことがない。

そんな業を見せておいて《中伝》など、とても信じることができなかった。

が、よくよく思い出せばリインもあの御前試合の時まで《初伝》だった。

「ラウラちゃん。私はね、こう思うの——」

「うあああああああつー！」

話しかけてきたアネラスにラウラは大剣をかち上げる。

アネラスは空高く投げ飛ばされ、落ちてくる彼女に向かってラウラは大剣を弓を引くように半身を引き絞る。

斬って駄目なら突く。

大剣に宿した光は激しく迸り、ラウラは自らを矢に見立てて跳び、落ちてくる無防備なアネラスに大剣を突き出し——空を斬った。

「え……？」

次の瞬間、宙に跳んだラウラは横から峰打ちの一撃を喰らった。

「何で……」

アネラスはまるで空を舞うよう何もない空間を蹴るようにして空中を走り、ラウラを二撃、三撃と全方位から滅多切りにしてくる。

——そんな……

アネラスが使っている技にラウラは愕然とする。

敵を引き寄せる戦技。

それを逆に自分を敵に向けて飛ばすことでこの空中機動を実現している。

自分では考えもしなかった使い方。

彼女の《軽功》と《化勁》が合わさってラウラは着地することも反撃することも、落ちる事さえできずにアネラスの攻撃を受け続ける。

「落葉滅殺っ！」

「がっ——」

渾身の一撃を受けることもできずにラウラは地面に叩きつけられた。

『剣の道を志すならば、いずれ八葉の者と出会うだろう』

不意に昔、父に言われた言葉をラウラは思い出した。
ラインとアネラス。
ラウラはその言葉の意味を身をもって知ることとなった。

・*

「ここは……」

目を覚ましたラウラは体を起こす。

そこはこの一ヶ月を過ごしていた寮の部屋だった。

「あ……目が覚めた？」

ベッドの横に椅子をつけて座っていたアネラスが手帳を閉じてラウラに向き直る。

「気分はどう？　ベアトリクスさんとルフィナさんは特に問題ないって言っていたけど何かおかしいところはある？」

「いえ……特に何も——」

体を見下ろしながら、ラウラは直前の記憶を思い出そうと頭に手を当て、そこで違和感に気付く。

ふわふわとした柔らかな触感。

寝かす時に纏めていた髪は解かれたが頭のとっぺんの髪が二つ立っているような感覚にラウラは首を捻る。

それに腰の辺りにも違和感があった。

「何だ？」

手をシーツの中に突っ込んで、それを探り当て無遠慮に掴む。

「ひっ!？」

何とも言えない刺激がそれを伝ってラウラの全身に走る。

「何なんだ!？」

身体を震わせ、ラウラはシーツを跳ね除けるとそこには犬の尻尾があった。

「えっと……ラウラちゃん……落ち着いて聞いてね」

アネラスはそんなラウラに苦笑いを浮かべながら用意していた鏡を向けた。

「な、な、な……何だこれは!？」

鏡に映る白い犬の耳が頭についた自分の姿にラウラは悲鳴を上げるのだった。

……………

……………

……………

「そうですか……私はそんな危険なことをしようとしていたんですか……」

ベッドの上に正座して、ラウラはセピスが人体に与える悪影響を説明されて自分の状況を理解した。

「それにラインの部屋で暴れ回った挙句に貴女達を襲ったなんて……私は何てことを……」

「あまり思い詰めない方がよいよ。あの時のラウラちゃんは正気じゃなかったから」

「ですが、そうだったとしても許されることではない——そうだ。ラインは……?」

ようやくそこでラウラはラインの事を思い出す。

朧げに覚えている記憶ではラインは剣を交える前に不自然に倒れた。

「弟君のことは心配しないでよいよ。ただの過労みただから」
「……過労?」

出て来た十六歳に使うには不自然な言葉に、ラウラは思わず首を傾げる。

「うん……過労……」

クロスベルで睡眠時間を削って治療や調査や事情聴取に協力して、ツールズに帰ってからはラウラちゃんが夜中に変な行動をしていなか監視していたみたい」

「それは……」

ほぼ一週間前からこの事態を危惧されていたのだと思うと、散々無視して邪険にしていたことが申し訳なくなる。

クロスベルに行っていた期間を合わせると二週間のブラック労働。しかも監視をルフィナに任せても、彼女たちを外で活動させるとリインが寝ていても霊力が消耗して休めていなかったという事実が判明し、事実上二週間ほぼ完徹に近い酷使をしていた計算になる。

流石のリインもその消耗には耐え切れず、《鬼の力》や《識の目》もそれが原因で機能していなかった。

「とりあえず今は空き部屋のベッドで眠っているから安心して良いよ」

リインに大事がないことにラウラは安堵し何気なく視線をドアに向けて、その脇に立て掛けてある大剣に息を呑んだ。

それを切っ掛けに戦いの場面を鮮明に思い出していく。

「っ——」

「ねえ、ラウラちゃん。剣は好き？」

「え……？」

ラウラが己への呪詛を吐き出すよりも早く、アネラスが尋ねる。

「……………好きや嫌いなど関係なく、自分の一部のようなものでした……だからそれを蔑ろにしてしまった己に何よりも嫌悪を感じています」

落ち込む理由があつたとはいえ、剣の研鑽を疎かにして安易な道に飛びついた自分の愚行を恥じずにはいられない。

「その気持ちは分かるよ」

そんなラウラの内面に共感するようにアネラスは頷く。

「何も守れなかつた剣が、何もできなかった自分が憎くて仕方がなかった……私もそれは知っているし、たぶん弟君も同じだったと思う」

「リインが……あれ程の強さを持っているのに、守れなかつた？」

アネラスの口から出て来た言葉にラウラは驚く。

学院で《魔王》と呼ばれ、《光の剣匠》を始めとする帝国の最強とも渡り合えるというのにそれは信じられない言葉だった。

「弟君だって最初から強かつたわけじゃないよ……」

リベールに来たのだから《鬼の力》……今回のラウラちゃんが使っ

ていたような《力》を制御するのが目的だったんだから」
「力……」

「詳しく知りたいならこれを読むと良いよ。検閲が入っていて色々なところが変わっているけど弟君がどんな風にリベールで過ごしてきたのかだいたい分かるから」

そう言っただけでアネラスが差し出してきたのは見覚えのある本だった。よくクリスが読んでいる本。

先日新刊が出たと騒ぎ、その日の夜、彼が号泣していたことを覚えている。

「弟君には確かに才能はあったよ。でもそれだけであそこまで強くなれたりはしないんだよ」

「……それは分かっています……いえ、分かっているつもりでした」
結局リインの実力を受け入れられなかった子供だったと、落ち着いた今ラウラは自嘲する。

「申し訳ありません。リインにはすまなかったと伝えておいてください」
い

ベッドから立ち上がり、ラウラはアネラスに頭を下げる。

「……どうするつもり？」

「学院長の下へ行き、今回の事を報告して退学届けを出します」
器物損壊に加えて、古の外法に手を染めた証である魔獣の耳と尻尾。

子爵の娘としてこれ以上ない醜態。

そして何より今回の事で多大な迷惑を掛けたリインに会わせる顔がなかった。

「そこまで思い詰めなくてもいいんじゃないかな？」

元はと言えば弟君が部屋の中とはいえ、危ない魔導書を放置していたのが原因だし」

「魔導書……何のことですか？」

「え……？　だってセピスを食べる外法は弟君の部屋で見つけたんじゃないの？　机の上にあった古い本、覚えてない？」

「それは覚えています」

もはや隠すことはないというラウラはラインの部屋に勝手に入ったことを認めて続ける。

「ラインがどんな本を読んでいるかと思っただけ読んでみましたが、私には何が書いてあるか全く分かりませんでした……」

「かろうじてエマが読めた部分で中世の料理のレシピだったことが分かったくらいですが」

「あれ……？」

聞いていた話と違うことにアネラスは首を傾げる。

「それじゃあラウラちゃんはどこで外法のことを知ったの？」

「図書室でこのメモ書きを拾ったんです」

ラウラからメモ書きを受け取ってアネラスは眉をしかめる。

何処にでも売っていいそうな紙にラインのものとは似ても似つかない筆跡。

アネラスはそれを預かると言っ、話を戻す。

「でも退学までしなくても」

「いいえ、はじめはつけなければなりません」

アネラスの気遣いにラウラははつきりと首を横に振る。

「はじめ……はじめね……ちよつと厳しいこと言わせてもらおうよ」

「え……？」

「それはラウラちゃんの自己満足なんじゃないかな？」

「っ……ですが——」

「道を間違えないで進み続ける。確かにそうできれば一番良いと思うよ……でも現実はそのないうまくいかない……」

「どれだけ気を付けても、刃を振れば誰かが傷付くし、その気がなかったとしても事故だって起きる……」

「お祖父ちゃんたちみたいなの《理》に至っている人達なら間違いなんて犯さないかもしれない。でも私達はそうじゃない」

「現役遊撃士の言葉は重く響く。」

「一番大切なのは正しい道を進むことじゃないんだよ……」

間違えたって気付いたなら正して、踏み外したと思ったら戻って、墮ちてしまったのなら元の道に戻る方法を探す……

そうやって、時には進んだ時以上の距離引き返して、進んでいくことが《剣の道》——ううん《人の道》なんだと私は思うの……

ラウラちゃんにとって剣はたった一回失敗しただけで捨てられる簡単なものだったの？」

「……………」

アネラスの言葉にラウラは押し黙る。

「私が言いたいののはね、弟君を理由にしないでって事。大事なものはラウラちゃん自身がどうしたいかって事なんだよ」

「私が……どうしたいか……」

「本心からもう剣を握りたくないなら私たちは止めない……」

「だけど、少しでも自分を曲げてそんなことを言っているなら、弟君に迷惑を掛けたからなんて独り善がりの責任を感じているなら……」

「もう後戻りができないなんて思い込んでいるなら、それはただの“逃げ”だよ」

「……………」

「お祖父ちゃんから聞いた帝国の武の双璧、アルゼイド流の剣士はその程度なの？」

「……………」耳が痛いですね」

最後に付け加えられた厳しい言葉にラウラは俯いて、自分の手を見る。

剣ダコがついた固い掌。

年頃の少女には似つかわしくないものだが、それはラウラは積み重ねてきたものの証拠。

果たして本当に自分は剣を捨て、剣の道を諦められるか自問する。

「本当に……私はやり直して良いんですか？」

「うん、もちろん。弟君もここにいれば同じことを言ったと思うよ」

迷いなくリインの言葉を代弁するアネラスにラウラは眩しそうに目を細める。

気付けば固めていた決意がほぐされていた。

そして剣を捨てなくて良いと安堵している自分がいることに気付く。

「現金なものだ」

「こんなにも簡単に決意を翻して喜んでいる自分に思わず苦笑してしまう。」

「アネラスさんでしたね?」

「うん、そうだよ」

「ありがとうございます」

自分を倒してくれたことに、見失っていた道を照らしてくれたことにラウラは万感の思いを込めて頭を下げた。

「どういたしまして」

眩しい笑顔を返してくれるアネラスにラウラは思う。

——クロエ達はこんな風私に私のことを見ていたのだろうか……

故郷のレグラムで自分の事をお姉様と慕ってくれる三人娘の気持ちをラウラは少しだけ理解できて思わず苦笑する。

「ところでラウラちゃん。一つ良いかな?」

「はい。何ですか?」

「そのミニとシッポってどうなっているの?」

「……え?」

言われてラウラはピンっと元気よく立っている耳に触れ、振り返ってぶんぶんと嬉しそうに動く尻尾を見る。

頭の方は分からないが青と白の艶やかな毛並みはラウラの目から見てもさぞかし興味をそそられる。

「ちよつとだけで良いから触ってみても良いかな?」

「え……?」

振り返ったアネラスの目に、ラウラは先程までの尊敬を忘れて思わず腰が引ける。

「ちよつとだけ……ちよつとだけで良いから、ね?」

先程までの凜々しかった女剣士の面影はどこに行ったのやら、ラウラは思わず後退るが背後はベッドがあり逃げ道はない。

「お……落ち着いてくださいアネラスさん」

ジリジリと間合いを詰めてくるアネラスにラウラは本能的な恐怖を感じてしまう。そして——

「ラウラさんっ！」

「エマッ！」

アネラスの背後で勢いよく扉が開き、入ってきたエマにラウラは天の救いを感じる。しかし――

「何も聞かず、これを飲んでください」

エマはアネラスを押し退けて、ラウラにコップを差し出した。

「……………エマ……………これはいったい……………何だ？」

どす黒くキラキラと光る粘液で満たされたコップにラウラは背筋に冷たいものを感じながら尋ねる。

「虫下しのようなものです。詳しい事情は説明しづらんですが、今のラウラさんは病気なんです……………」

それを飲めば、とりあえず症状を緩和できる……………はずです」

「ど、どうして目を逸らすんだエマ？」

「と、とにかく私を信じて飲んでください。大丈夫です……………たぶん……………」

不穏な言葉を付け加えるエマにラウラは何とも言えない顔をする。

エマの言う病気とはおそらく魔獣化のこと。

何故彼女がその薬を持っているのかは分からないが、それが説明できないのは良いとしても、彼女を信じて目の前の黒い粘液を飲むのには勇気が必要だった。

「待ってラウラちゃん！ それを飲む前に一撫で！ 一撫でが良いからモフらせて！」

そしてまるで擁護してくれそうにないアネラスにラウラは途方に暮れるのだった。

・*

「――以上が事の顛末となります」

「そうですねか……………こんなに早くラウラ君の魔獣化が進行したのは予想外でしたが、おかげでライン君を滅する必要はなくて一安心です」

そんな呟きに、従騎士ロージーヌは顔をしかめる。

「ライサンダー卿、本当に今回のことは必要なことだったのでしょうか？」

「貴女が気に病む必要はありません……これは私の独断で行ったことですから」

まるで自分がしたかのように罪悪感に身を浸すロージーヌにトマスは毅然とした態度で言い切る。

「ゲオルグ・ワイスマンが復活した以上、七耀教会はライン君の処遇について改めて考え直さなければいけません」

報告を聞く限り、ラインとワイスマンは完全に独立しており、ラインを排除したところでワイスマンが消えるわけではない。

では何が問題かという点。

「ライン君にはワイスマンの《聖痕》を作る技術が受け継がれています……」

それを武器に使うならばまだ見逃しても良いですが、人に刻もうとすればそれを理由に強硬派が声高にライン君の存在を危険視するでしょう……

そうなる前に、ライン君が安易に人に《聖痕》を刻まない实例が欲しかったんです」

ワイスマンの《聖痕》はそれぞれ色々な問題が多いものだった。

人の人格を完全に再現するものもあれば、オリジナルを超えるものまである。

今でもまだなりふり構わずにラインのことを排除しようとしている者達が多い。

そしてワイスマンの復活の報は穏健派から強硬派に鞍替えをする者たちが出る程に大きな変化なのだ。

「これも全てライン君のためです。ラウラ君を巻き込んだのは心苦しくもありましたが、大事の前の小事と割り切りましょう」

およそ教官の言葉ではないのだが、それはトマス・ライサンダー教官としてではなく、星杯騎士団の副長としての言葉ならロージーヌに異を唱える権利はない。

「報告御苦労、では《匣》は閉じさせてもらおうよ」

「……………はい」

ロジャーが不満を呑み込んで頷くと、トマスは指を鳴らして繋げていた空間を閉じる。

「ふう……何とか誤魔化せましたね」

教員用の宿舎。

トマスは自分の一室で安堵の息を吐いた。

「あら？ 何を誤魔化せたのかしら？」

「っ!？」

一人だと思つて呟いた言葉に返事があり、トマスは体を震わせて振り返る。

かすかに開いた窓。

そこに腰掛けた小さな人形がトマスに優しい微笑みを向けていた。

「これはこれはルフィナ君、どうしたんですか？ もしかしてラウラ君のことで何か変化がありましたか？」

「いくつか気になっていたことがあるんだけど、ラウラさんにセピスの配合表を渡したのは副長、貴方ですね」

トマスの言葉を半ば無視するようにルフィナが犯人は貴方だと言いつ切る。

「いきなり何を言うんですか？ ラウラ君はリン君の部屋に忍び込んであの本を読んだのでしょうか？ だったら——」

「彼女に読めるはずないわ。それは同じ系列の本を読んでいる貴方が良く知っているはずですよね……」

それに何もセピスによる魔獣化は錬金術だけの専売特許でもないですし」

「っ…………」

ルフィナの指摘にトマスは押し黙る。

リンがクロスベルで手に入れてきた中世の魔導師が残した魔導書。

この手の魔導書や技術書には良くあることなのだが、一族の秘術を守るために本の内容は暗号化されている場合がある。

当然、錬金術の知識が全くないラウラにそれを読み解く術はなく、

古の術に理解がある魔女だったとしてもそれは同じこと。

ラインが冷静であればその事実気付いていただろうが、例え気付いていたとしてもやることはおそらく変わらなかっただろう。

「……………そうですね。ラウラ君に魔獣化の外法を教えたのは私です」

トマスはルフィナに向き直って認め、ロージーヌにした説明をルフィナに繰り返した。

「なるほど、全ては強硬派の機先を制するための策だったと」

「ええ、その通りです。ですから——」

「てつきり私は副長のうっかりだと思っただんですけど」

ルフィナの呟きにトマスは目を逸らした。

「ライン君に見せてもらった魔導書の山を早く読みたくて、禁書だと言うのに学院に持ち込み、解説作業に没頭して授業に遅刻しそうになって——」

トマスはルフィナから顔を逸らした。

「後でまとめるはずだったメモ書きの束を抱えた状態で廊下を走って、生徒とぶつかった挙句にその内の一枚を紛失した。ということはまさかないですよね？」

「は……………ははは……………そんな迂闊なことするわけないじゃないですか」

「そうですね……………」

てつきりラウラさんの魔獣化の兆候を見て、まずいと思っていたところにライン君が自分のせいだと言い出してくれたから、これ幸いに身代わりにしようとか、後付けでもっともらしい理由を付けたただけだと思ったのですが違ったようですね」

「そんな人間きの悪い……………それはルフィナ君の考え過ぎですよ」

「そうみたいですわ……………」

こんなことが教会や学院に知られたらどうなるか。減俸だけで済めば良いですけど……………」

ところで副長、先日導力ネットで注文していた書物のことですが——」

「すみません。出来心だったんです！」

全てを見透かしているかのようなルフィナにトマスは土下座をす

るのだった。

23話 第二回実技テスト

放課後。

エリオット・クレイグは一心不乱にバイオリンを弾く。

「——っ」

少しでも思考に空白を作ると思い出ししてしまいそうになる赤を振り払うため、ただひたすらに無心で音楽に没頭する。

しかしどれだけ音楽に集中しても、雑念がエリオットを蝕む。

『趣味程度ならともかく帝国男児が音楽で生計を立てるなど認められん！』

音楽院への進学を認めなかった父の言葉。

『あれこそが誇り高き帝国男児。お前もリイン・シュバルツアーのよくな立派な男になるんだぞエリオット』

さらに年が明けてからよく口にされるようになった言葉を思い出す。

その度にエリオットは心を軋ませる。

彼と同じ時を過ごせば過ごすほど、自分の至らなさを実感してしまう。

だがそれは彼だけではない。

VII組に集められた者たちはみんな特別なものを有している。おそらく今期の学生の中でもトップクラスの能力を持っているだろう。

そして何よりも彼らは明確な目的があつてトールズ士官学院に入学した。

——それに比べて僕は……

エリオットの第一希望は帝都の音楽院に進学することだった。

しかしそれに父が猛反発して、押し切られる形でトールズ士官学院に入学することになった。

そして流されるままに行きついたのがVII組だった。

——僕だけがみんなとは違う……

戦闘力においても学力においてもエリオットは凡人でしかない。

父オーラフに幼い頃から軍人になるべく英才教育を受けていたわ

けでもなければ、頭が特別良いわけではない。

《ARCUS》の適正だけが自分がⅦ組であると思いき知らされる程に、他のⅦ組のメンバーは優秀だった。

——軍人になる。それが父さんの考えだけど……

その意味をエリオットはこれまでちゃんと向き合っていないかった。音楽院に進学できなかったことで、言われるがままに思考を止めていた。

特別実習はそんなエリオットの《欺瞞》を暴くには十分な程に衝撃を与えた。

軍人になるということは突き詰めてしまえば人を殺すこと。

フィーのように息をするように人を殺せるようになってしまうのか。

ラウラのように死んだ人を悼むより、自分が殺せなかったことを悔やむようになるのか。

クリスマスやガイウスのように人の死を割り切れるようになるのか。

ただ音楽が好きなエリオットには難しい問題だった。

「——エリオット……エリオットッ！」

「っ——あ、はいっ！」

何度も呼ぶ声にエリオットは我に返って演奏を中断して振り返り——音楽室の入り口に立っているラインにエリオットは思わず身構える。

「もうすぐ下校時間だぞ」

「あ………ごめん……すぐに片づけるよ」

ラインに言われて見れば、窓から差し込む光は紅く染まり、時計は下校時間の十分前を指していた。

今日は部活動があったわけではない。

ただ気晴らしに音楽室を借りていただけ。

「慌てなくて良いぞ」

落ち着いた態度でラインはエリオットを待つ姿勢を見せる。

それは何もラインだけのことではない。

あの《特別実習》からそれとなく周りのみんなから気に掛けられて

いることはエリオットも分かっている。

エリオットも何度もカウンセリングを受けているし、日に日に荒々しくなっているラウラを見れば教官たちの懸念も分かる。

ラウラのように煩わしいと文句を言うこともなく、エリオットはそんな周りの気遣いに密かに安堵していた。

「リインは補習？」

音楽室の後片付けを終えて、エリオットは鍵を返すために職員室へと向かいながらリインに尋ねる。

「ああ、早く遅れを取り戻さないといけないからな」

真面目な答えにエリオットは苦笑いを浮かべる。

クロスベルの事後処理から帰って来たばかりだというのに精力的に勉学に励み、それでいていろいろと忙しなく駆け回った挙句に過労で倒れてしまったというのにすっかり回復している様子にエリオットはもはや呆れてしまう。

「それにしてもさっきエリオットが弾いていた曲は《星の在り処》だよな？」

「うん。よく知っているねリイン……あれは古い歌なのに」

リインから振ってきた意外な話題にエリオットは食いつく。

ラウラのように剣一筋の人間離れた雲の上の存在であり近寄りたがたいと思っけていても、そこに音楽が絡めば関係ないのがエリオットである。

それに先日のアネラスの来訪で、世話を焼かれて甘やかされるリインの意外な姿に親近感が芽生えていたこともそれを後押ししていた。《星の在り処》はちよつといろいろ思い入れがある曲なんだ……

それに俺もリユートを父さんから教わったことがあって、旧校舎で一日一回は触るようにしているんだ。《空を見上げて》っていう曲なんだけど知っているか？」

「うん、もちろん。今後聞かせてよ」

それまでであった抵抗が何だったかのようになりエリオットは自然にリインの言葉に応える。

「あれ……っ？」

そのまま他愛のない話をしながら昇降口から外に出ると彼女がいた。

「急がなくちゃ……急がなくちゃ」

「ティータ？ 何をしているんだ？」

出て行くリイン達とは逆に脚立を抱えて校舎に入ろうとしていたのはティータだった。

「あ、リインさん」

「ダンさんやエリカ博士は一緒じゃないのか？」

大きめの脚立に工具鞆。

女の子が一人で運ぶには大き過ぎる荷物にも関わらず、彼女を溺愛している両親の姿はない。

「えっと……実はさつきサラ教官から技術棟に職員室の導力灯が故障してしまったので修理して欲しいって連絡があつたんです……」

でもお祖父ちゃん達もシュミット博士はそれどころじゃないって、ジオルジュさん達もお祖父ちゃんたちに捕まっちゃって行けなくて、代わりにわたしがやることにしたんです」

「あの人達は……」

優先順位をブレさせないマッドサイエンティスト達にリインは顔をしかめる。

特にシュミット博士など、来たその日に授業をサボってセプチウムの武具を造れと言ってくるほどの我が道に行く研究者だった。

「でも意外だな。ティータが博士たちの実験に同伴しないなんて」

「大丈夫です。早く終わらせて起動実験までには戻りますから」

「そ、そうか……」

あまりにラッセルらしい返答にリインは苦笑する。

「なら手伝うよ。エリオット、そういうことだから夕食は先に食べていて良いって、みんなに伝えてくれ」

「うん、分かった」

ラウラのイヌミミ事件、そして特別実習を経て第三学生寮には新たなルールができていた。

各々、無理のない範囲で食事は揃って摂るようにすること。

それまで頑なにリインと距離を取ろうとしていたマキアスとラウラが自炊を始めたことで他のアリサとエマ、ユースもそれに加わった。

その機会にエリオットも自炊を始めることにしたのだった。

「……………ティータちゃんか」

校舎に入って行くリインとティータの背中を見送りながらエリオットは、クラスメイトではなくティータにその意識が向けれていた。

ティータ・ラッセル。

リベールから技術交流としてやってきたアルバート・ラッセルに付き添ってきた孫娘。

時折見掛ける彼女はいつも楽しそうにオーブメントを弄っている。

「……………羨ましいな」

家族に理解され、好きなことに何不自由なく打ち込めるティータにエリオットは暗い呟きをもらした。

・*

「それじゃあ良いのかラウラ？」

「ああ、私が壊したものを弁償できていないのに《魔剣》を賭けた勝負をする資格などないからな」

テーブルの上に置かれた赤いセピスの刀身の大剣を前にラウラは潔く身を引いて見せるが、大剣を見つめる目は興味津々な様子だった。

しかし、ラウラは誘惑を跳ね除けて《火の魔剣》を対面のクリスに向けて押す。

「むう」

しかし、当のクリスは差し出された大剣に不服な顔をする。

「本当なら勝って手に入れるつもりだったのに」

「安心しろ。おそらくその日の私だったらクリスに負けていただろう。だから例え不戦勝だったとしてもこれはそなたが使うに相応し

い」

ラウラの言い分はクリスも分かる。

力を求めるあまり暴走して、リインに返し切れない負債を背負ったラウラがこの期に及んで《魔剣》を使わせてほしいなど口が裂けても言えないだろう。

しかしリインに頼られ、ラウラとの決闘に向けて気合いを入れていただけにその結果はクリスにとって不完全燃焼となっていた。

「だから仕切り直せば良いと思うんだけどな」

「いや、すでに二回も流れてしまったのだ。私には縁がなかったということだろう」

ラウラの決意は固く折れそうにない。

「そういうことだけど、どうするクリス？」

「そうですね……」

「不服だって言うなら今度の自由行動日の旧校舎探索を戦術殻の同行はなしでクリス単独で攻略できたらっていうのを条件にしてみるはどうだ？」

「え……良いんですか？」

リインの提案にクリスは耳を疑う。

立場上、最低限の安全はどうしても備えておく必要があると弁えていただけに、リインの提案は信じられないものだった。

「クリスもだいたい立ち回りが良くなったからな。一人で戦うことを経験するのも良いだろう。どうする、やってみるか？」

「はい。お願いします」

クリスは拳を握り締めて頷く。

どんな形であっても一人で戦って良いと許可を得たことはある意味それだけ認められたということ。

ラウラへの不満など忘れ、クリスは改めて次の自由行動日に向けて気合いを入れ直す。

もともと彼には知らせずにステルスモードの戦術殻を同行させようとしてリインは考えていたりするのだが、それは言わぬが花だろう。

「やれやれ……」

純粹に喜んでいるクリスを前にリインは彼のためとはいえ騙していることに少しの罪悪感を覚える。

自然と使う様になった駆け引きの話術。

悪いことをしているわけではないのに、リインは居心地の悪さを感じずにはいられなかった。

「そうだ。ラウラが良ければこれからクリスに大剣の手解きをしてくれないか」

その居心地の悪さを紛らわせるようにリインはラウラに提案する。

「ふむ……それは構わないが、クリスは本気なのか？」

“一”を極める武芸者としては“多”を使い分ける戦い方など邪道。獵兵に近いイメージが感じてしまうが、ラウラはそれを呑み込む。

「はい。僕にはラウラさん達のように極める才能はありませんから、そういう方向で強くなろうと考えているんです」

「才能がない……か」

羨むクリスの言葉にラウラは今までどれだけ物事を見ていなかったのか自覚して自嘲する。

——レーグニッツのことは笑えないな……

クリスは今、ラウラに才能があると言ったが果たしてどうだろうか
と自問する。

未だ頂の父や姉弟子の存在は遠く、少し前までは何の疑問も感じずにただ邁進していた。

今は果たして偉大な先達に本当に追い付けるのか不安を感じているが、その不安に焦りは感じない。

「嫌なら断ってくれて構わないぞ。こんなことで負債を引き合いに出すつもりはないから」

「いや、むしろこちらから頼む」

気遣ってくるリインにラウラは首を振って了承する。

まだまだ未熟である自分がクリスに教えられることはそこまで多くはないが、そこは共に切磋琢磨すれば良い。

それに何よりもクリスの瞳の奥底に感じるものに共感を感じる。

「これからよろしく頼むクリス。リインに勝つためにも」

「こちらこそよろしくお願ひしますラウラさん。ええ、リインさんに勝つために一緒に頑張りましょう」

二人は頷き合つて固い握手を交わすのだった。

「解せない」

言葉少なく友情を確かめ合う二人にリインはぼつりと呟いた。

・*

最初の特別実習から一ヶ月。

クロスベルの事件。

そしてラウラのイヌミミ事件。

幸いなことに後者に関しては一度一般人にまで見える程に症状は進んでしまったものの、エマの処方した薬でひとまず元に戻り事なきを得た。

そして問題とされたファイが犯した殺人のことも他の生徒達には遠巻きに陰口を囁かれているようだが、本格的なトラブルに発展する気配はない。

過労で倒れたリインも復帰し、久方ぶりにⅦ組は全員が揃うことになる。

リインの補習のことも見直され、ひとまず授業について行けているということでも免除された。

しかし、それでリインの放課後が暇になったというわけではない。

シユミット博士とラツセル博士の二大博士により、毎日のように新たな実験と立案が試行されて呼び出される毎日。

セプチウムを使った新素材の開発。

ゴスペルと戦術リンクを利用した拡大導力魔法。

《ARCUS》のスロット数を増やす改造計画。

なまじリインと言う最高のテスターがいることに二人と一人の博士の暴走は留まることを知らなかった。

それ以外ではリンがトワ生徒会長と知り合い、彼女の仕事の一部を手伝う事になり、クロスベルでの願いの対価としてリインもそれに付

き合う事になった。

自由行動日ではクリスが単独で第三層を見事に突破して《ブリランテ》を見事手に入れて見せ、また《聖女の槍》について皇宮へ呼び出され帝都へ行くことになったりと忙しきではそれまでと大して変わらない日々をリインは過ごしていた。

そして五月二十六日水曜日。

「今日は実技テストか」

グラウンドでサラ教官が来るのを待つ中でユーシスが呟いた。

「前は散々な結果になってしまったが特別実習を経て戦術リンクを安定させた今の僕達ならリインとだって互角に戦えるんじゃないか」「マキアスさん、それはちよつと気が早いのではないでしょうか?」「そうかしら? あたしたちは何と言つても本物の修羅場を体験したんだから、今度は良い戦いができると思うわよ」

この一ヶ月、それまでの遅れを取り戻す勢いで戦術リンクを安定させ、その精密さを向上させて実力と共に確かに強くなっていると自覚しているマキアス。

そんなマキアスに同調するアリサにエマは苦笑いを浮かべるが、強く否定はしなかった。

バリアハートの地下水道での戦いは実習の一環だった安全な戦いだったかもしれないが、例えやらせだったとしても彼らにとつては死線を潜り抜けたことには変わりない。

その自負が気を大きくさせているが、彼らがそれを切っ掛けに実力を伸ばしているのは事実だった。

「確かにあの一戦は醜態を晒し過ぎたからな。できることなら挽回の機会が欲しいものだ」

ユーシスもまたマキアスの言葉に頷く。

リインとの再戦に向けて元B班だったユーシス達は前向きに考えているが、対する元A班は顔をしかめる。

「リインとの再戦か……私はまだその時ではないと思うのだが」

「僕もラウラさんに賛成です。まだリインさんに再戦を挑むのは早過ぎます」

「右に同じ……っっていうか確実に勝機がないのに手の内は見せたくな
いし」

「俺もまだその時ではないと思うが、エリオットはどう思う?」
「……………」

ガイウスはラウラ達の意見に頷き、エリオットに呼び掛ける。

が、エリオットは一同の話聞いていた様子もなく、ぼうつと空を
見上げていた。

「エリオット」

「え……あ、何ガイウス?」

「大丈夫か? 気分が優れないようなら見学していた方が良いのでは
ないか」

「あ……うん……大丈夫。大丈夫だよ」

ガイウスの気遣いにエリオットは愛想笑いを浮かべて答える。

明らかに無理をしているように見えるが、その虚勢にガイウスはそ
れ以上の追及はできなかった。

そしてガイウスの意識の矛先は胸を抑えるリインに向いた。

「リインも調子が悪いのか?」

先週に過労で倒れただけにガイウスはいつもと違うリインの様子
に訝しむ。

「いや……そうじゃなくて、嫌な予感がする」

「嫌な予感……?」

言われてガイウスは周囲を見回し、風を意識する。

「特に変わった様子はないが——む、サラ教官が来た……が、あれは誰
だ?」

「げっ…………」

校舎の方から歩いて来るサラは一人ではなかった。

アッシュブロンドの髪 of 青年の姿を見て、あからさまにリインは顔
をしかめた。

そんなリインの動揺を無視してサラはリイン達の前に立つ。

「さあ、先月に続いて《実技テスト》の時間よ」

「あの……サラ教官、そちらの人はいったい?」

何事もなく実技テストを始めようとするサラに対して、マキアスが彼女の後ろに付き従う青年のことを指摘する。

「今回の貴方達の相手よ……」

今日は戦術殻じゃなくて、この人と戦ってもらおうわ」

「ちよ!? サラ教官正気ですか!? っていうかどうして貴方がここにいるんですか!?!」

思わずリインは叫び、二人に食って掛かる。

「えつとね……校門の前で怪しい奴がいたからちよつと声を掛けたのよ……」

そしたらこいつで、リインに用があるって放課後まで待っているつもりだったらしいのよ……」

で、実力は折り紙付きでしょう? だから《実技テスト》に使えるんじゃないかって思ったのよ」

「だからって……どうしてそれを了承するんだ?」

半眼でリインは青年を睨み文句を言う。

「単に時間を持て余してただけだ。それに個人的にはお前のクラスメイトとやらにも少し興味があつたのも事実……もつとも期待外れだったがな」

青年のいきなりな失望の言葉にVII組はむっと顔しかめる。

いきなり出て来て、リインと親し気に言葉を交わしていたと思つたら期待外れ呼ばわり。

特別実習や二ヶ月に及ぶ教練で着実に実力を伸ばして自信を取り戻していた彼らに青年の不遜な態度は勘に障るものだった。

「サラ教官、誰がこの男と最初に戦えば良いんですか?」

「そうね……じゃあまずは——」

「選ぶ必要などない。全員で掛かって来い」

青年はサラの言葉を遮ってVII組を睥睨して言い切る。

「お前達に世界を教える」

青年、《剣帝》レオンハルトは金の魔剣を抜いて、VII組に突きつけた。

《特別実習》や教練を経て、戦術リンクを使いこなし始めて自信を持ち始めてVII組一同はこの日、リインの時以上の圧倒的な敗北を経験す

ることになるのだった。

24話 特別実習 五月

その日、まだ歴史の浅い鉄道憲兵隊に事件が起きた。

あまりの事件にミハイル・アーヴィングは言葉を失い立ち尽くす。その驚きは彼だけでは済まず、夜番からの引継ぎを行って賑わっている詰め所の中の同僚たちも仕事を忘れて固まった。

「おはようございます。皆さん」

そんな空気を珍しく察していないクレアは気持ち、高揚した雰囲気声を含ませて挨拶をする。

それは別段おかしいと感じる光景ではない。

普通の朝の挨拶とすれば誰もが交わす挨拶に過ぎない。

声に含まれる雰囲気も程度はあっても誰もがやっていることに過ぎない。

だが《氷の乙女》の異名を持つ彼女では話が違う。

士官学生時代からその優秀さによって頭角を現し、鉄血宰相の子飼いとすることもあり、多くの嫌がらせを受けてきた彼女は罪には罰をと言わんばかりに相手が貴族であろうと平民であろうと関係なく徹底的な報復を行い黙らせた。

その苛烈さはまさしく《鉄血の子供》に相応しく、帝都の士官学院に通っていたミハイルにもその勇名は届いていた。

鉄道憲兵隊に入隊した時からもその冷徹な態度は変わることもなく、彼女と同期として鉄道憲兵隊に入隊したミハイルはかつての彼女との変わりように言葉を失った。

だからこそ、杓子定規の感情の籠らない挨拶が常のクレアの声に感情が、それも楽し気な感情が乗っていることは鉄道憲兵隊にとって大事件だった。

「おいミハイル。お前何しやがった？」

「いきなり何ですか先輩？」

「惚けるな。クレアにいったい何をしやがった？」

「自分は……何もしていません」

鉄道憲兵隊の中でミハイルへの風当たりは良いとは言えない。

陰湿ないじめを受けているわけではないが、クレアとの確執を知る者ならば大半が彼女を擁護する。

それは当然だとミハイルは受け入れている。

自分の罪の隠蔽のためにクレアの家族を謀殺した父親。

運良く生き残ったクレアが叔父に——ミハイルの父に向けた感情が如何ほどのものだったのか、彼を処刑台に追いやった苛烈さを考えれば容易に想像できる。

非は明らかにミハイルの父親にあるはずなのに、当時のミハイルは家族と共にクレアを口汚く罵った。

『お前なんてエミルたちと一緒に死んでれば良かったんだ』

何て酷い言葉だろうか。

当時の事を思い出せば後悔ばかりが浮かぶ。

そのことを謝りたいと思っていたが憲兵隊で偶然再会した変わり果てた彼女を前にミハイルは何も言えなくなってしまうのが常だった。

「これはやっぱり……男が出来たのか？」

「クレアに……男だっ!？」

先輩の愉悦が含んだ言葉にミハイルは目を見開く。

「やっぱりあいつか？」

今帝国中で有名になっていく次の《鉄血の子供》の最有力、今日と明日に《特別実習》として受け入れる士官学生の生徒だったよな……

つまりクレアにとっては久しぶりの恋人との逢瀬ってことか」

「恋人……逢瀬……」

根も葉もない先輩の言葉の一つ一つにミハイルは殴られたかのような衝撃を受ける。

ミハイルにとってクレアは五つ歳の離れた妹のイサラと同様に九年前までは妹分として可愛がっていた従妹であり妹分。

兄貴風を吹かせる資格がないことは重々承知しているのだが、彼女の家族を殺してしまった男の息子として彼女の幸せを守る義務があるのだとミハイルは一人で決意を固めていた。

「だ、ダメだ。いくつ歳が離れていると思っっている。相手はまだ士官学生の一年だぞ」

「そんなこと言っていると行き遅れるぞ」
「くっ……」

先輩の指摘にミハイルは何も言い返せず唇を噛む。

八年の月日を経て、クレアはミハイルから見ても美しく成長した。そんな誰もが振り返る美女も《氷の乙女》の悪名が男を敬遠させる。それはそれで一安心なのだが、仕事が第一と言う彼女のスタンスは年頃の女性としてどうかと思う。

このまま時が経っても浮いた話の一つもなく、三十を過ぎても《氷の乙女》と呼ばれている未来が容易に想像できてしまう。

そう考えるとこれは千載一遇のチャンスなのかもしれない。

「まあ、クレアの本命がオズボーン閣下だから並の男には靡かないんじゃないかって噂もあるけどな」

「閣下に……まさか……いや、しかし……」

その可能性を考えてミハイルはあり得るのではないかと思っってしまう。

恩人であるオズボーンに特別な感情を抱いていないと誰が断言できるだろうか。

だが、それはリイン・シユバルツァーよりも遙かな茨の道。

「……………良いだろう」

長い葛藤の末にミハイルは呟く。

「リイン・シユバルツァー……私がこの目で貴様を見定めてやる」

一人で燃えるミハイルは堅物の珍しい姿と面白そうに見守る先輩達の眼差しに気付いていなかった。

・*

「トールズ士官学院、一年特化クラス《VII組》。担任のサラ・バレストアインです……」

今日を含めた二日間、“私の”生徒をよろしくお願いします。クレ

ア・リーヴェルト大尉」

「ええ、承りました。リイン君とクリス君の御二人は「私が」一時期家庭教師をしていた生徒でもありますから御安心ください、サラ・バレスタイン教官」

サラとクレアはにこやかな笑顔を浮かべて左手で握手を交わす。

「な……何だか寒くない？」

「あんな綺麗なお姉さんに家庭教師をしてもらったと……何て羨ましい……」

「……………へえ」

VII組の面々は二人が醸し出す雰囲気気押しされ、一部では二人が作る冷気に同調する者もいた。

「——というわけで、今月の《特別実習》は鉄道憲兵隊よ」

笑顔の挨拶を切り上げて、サラはVII組に振り返り改めてそれを宣言する。

サラの思惑では、両方の班の班の経験を等しくするために四月は共に地方都市にするつもりだった。

その地方都市でまず経験を積み段階を踏むことで帝国における社会体制を体験させ、次の実習では州都を実習先にするのが最初の計画だった。

しかし、ルーファスの提案を受けたことでサラの計画は最初の段階で修正が必要になった。

ならば今回は班をそのまま入れ替え、A班に公都、B班に地方都市と割り振れば均等が取れるのだが、前のA班のフィーを州都に行かせるとどんな問題が起きるか予想がつかない。

それに加え、先月やり込められた仕返しのももりなのか、クロイツェン州の領邦軍の誤解を槍玉に上げて会議の主導権を握ったカール・レーグニッツが実習先に意見を通してきたのが、今回の実習先を選ぶ決定打になった。

「貴方達にはA班とB班に分かれて、鉄道憲兵隊の任務に同行してもらうわ」

今や帝国には欠かせない交通手段となった鉄道網。

その帝国全土に張り巡らされた鉄道網の安全を確保、および鉄道沿線における治安維持活動を行っているのが鉄道憲兵隊である。

その性質上と生い立ちから、《革新派》の手先として領邦軍とは反目関係にあり、帝国の内情を体験するのならばこれ以上ない実習先と力説されその提案を呑まされた。

「A班には私が同行して帝国東部の巡回に、B班はミハイル大尉に同行して帝国西部の巡回を行って頂きます」

「よろしくお願いします。クレア大尉」

A班を代表してリインがクレアに挨拶をする。

VII組にA班はリイン、クリス、エリオット、ラウラ、フィー。

対するB班はガイウス、ユースス、マキアス、アリサ、エマ。

前回の班編成をリインとガイウスを入れ替えただけの簡単な変更だが、いざという時にフィーとラウラのストッパーになれるリインと一緒にするのはある意味当然の人選である。

「ええ、こちらこそよろしくお願いしますリイン君」

朗らかな笑顔を浮かべてリインに伝えるクレアに詰所がざわりと空気が動いた。

「笑った!?!」

「《氷の乙女》が!?! あり得ない!」

「年下が好みだったのか……」

小声で今の光景の感想を交わす憲兵隊員たち。

彼らの態度にリインは首を傾げる。

《氷の乙女》の顔を知らないリインには彼らが何故そんなに驚いているのか理解することはできなかつた。

「あらあら、クレア大尉は随分と人気者みたいね」

サラの揶揄う言葉にクレアは居心地悪そうに俯く。

「恥じらった!?!」

「あの《氷の乙女》が!?! あり得ない!」

「くっ……クレア大尉はクールでなければクレア大尉では——いや、これはこれで良い」

「皆さん、遊んでないで持ち場に戻ってください」

クレアが冷笑を浮かべて同僚たちに振り返ると、彼らは蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「こほん……改めて、Ⅶ組の皆さん、二日間よろしく願います」
そう取り繕ってクレアは改めて、Ⅶ組一同と向き直り――

「少し良いかなクレア大尉」

その出鼻をミハイルが口を挟んで止めた。

「何でしょうかミハイル大尉？」

「急な申し出で悪いが、担当の班を交換してもらいたい」

「え……？」

いきなりの提案にクレアは困惑する。

《特別実習》の受け入れはすでに先週の段階で話がついていた。

班分けも監督役もそこで決まったはずなのに、こんな場面で異を唱えた彼の意図をクレアは考え、一つの答えに行き着く。

――なるほど……流石ミハイル兄さん、気付いたんですね……

Ⅶ組のメンバーはその半数が国の重鎮に子息たちばかり。

だが、その中には身分を隠したやんごとなき御方が在籍しているのをクレアは知っている。

伊達メガネにわざと乱暴に乱れさせた髪形。

それに何よりも半年前にはなかった戦士としての風格が備わり始め、さらには堂々としたその姿に他の者達はその正体に気付いていない。

そんな中で唯一気付いた兄貴分の優秀さに心の中で賛辞を贈りながら、クレアはミハイルの提案を拒否する。

「ミハイル大尉の御懸念は分かりました。ですが御安心ください……彼のことは私は認知しています。そしてこの件についてオズボーン閣下とオリヴァルト皇子の両名の承認を得ています」
クレアはミハイルにだけ聞こえるように小声で話しかける。

と、ミハイルは目を剥いて驚愕した。

「何……だと……皇子はともかく閣下まで……しかも認知だと……すでにそこまで話が進んでいるというのか？」

わなわなと震えるミハイルにクレアは首を傾げる。

何かおかしなことを言ったかどうかと自分の言動を振り返るが、特におかしな点はなかったはず。

「クレア……君はそれで良いのか？」

「良いも何も私が適任です。彼の人となりは私が一番良く知っていますから」

鉄道憲兵隊の中で、とクレアは言うまでもないことを省略する。

だが、いろいろな誤解を重ねているミハイルにはその言葉はさらなる誤解を助長させるものでしかなかった。

「そうか……一番良く知っているか……」

まさか彼女の口からそんな惚気が出てくるとは想像もしていなかったミハイルは力のない笑みを浮かべる。

彼女が家族を失った日から、そして叔父を——ミハイルにとっての父を処刑台に送ってから、ミハイルが見てきたクレアの顔は《氷の乙女》だけだった。

だが、その氷はミハイルの知らない所で溶かされていた。

そのことに一抹の寂しさを感じながらも、ミハイルはようやく過去を振り切り、未来の幸せに目を向けて立ち直った妹分に喜びを感じる。

「……だがそういうことならなおさら、私が見極める」

感激の感情を胸に秘め、不撓の意志でミハイルはリインを睨み付ける。

「リイン・シュバルツアーツ！ 貴様がクレアに相応しいかどうか、この《特別実習》で見極めさせてもらう」

「……………はい？」

「兄さん！ いきなり何を言っているんですか!？」

ミハイルの宣言に名指しされたリインは困惑し、クレアは突然飛躍した話に混乱する。

「止めてくれるなクレア。私は君の家族の墓前で誓ったんだ。そして君から家族を奪った男の息子の贖罪でもある」

「本当に何を言っているんですか!？」

クリスのことを話しているとはかり思っていたクレアはリインに

向かってとんでもないことを言い出したミハイルに声を上げる。

「今更虫の良いことを言っていることは分かっている。だが君の兄貴分だった者として伯父さん達に代わって君の伴侶になる者を見定めなくてはいけないんだ!」

「は、伴侶!? 私とリイン君はそういう関係ではないんですけど……」
不撓なはずのミハイルが錯乱している様子にクレアは慌てるよりも先にひたすらに困惑する。

「恋人ではない!? ダメだクレア、このチャンスを逃したら君は行き遅れてしまう!」

「は?」

クレアの眼差しが絶対零度となってミハイルに突き刺さる。

「それともやはり本命はシュバルツアーではなくオズボーン閣下なのか!? それとも同じ《子供》のアランドールなのか!」

「……………アーヴィング大尉……ちよつとこちらに来てください」

その言葉には震え上がる程の冷気が含まれていた。

皆が体を震わせる中で、唯一怯まず、気付かないミハイルは促されるままクレアと共に会議室を出る。

ボタンつと頑丈そうな扉が閉まった直後。凄まじい衝撃が部屋を、詰所全体を揺るがした。

そして数秒遅れて、クレアが何事もなかったように一人で戻ってくる。

「申し訳ありません、皆さん……」

B班担当のアーヴィング大尉は体調が優れないようなので、すぐに代わりの人間を用意しますね」

誰もが魅了される美しく、それでいて冷たい笑顔に反論する者は誰もいなかった。

余談だが、その日鉄道憲兵隊内で《氷の乙女》の異名で敬遠されていたクレアのファンクラブが設立されたのだった。

25話 鉄道憲兵隊Ⅰ

鉄道憲兵隊が所有する特別列車に乗ってⅦ組A班が辿り着いたのは帝都東部の路線の一端の一つレグラムに到着した。

「まさかレグラムにこんなに早く到着するとは」

帝都を出発してわずか二時間。

トリストタから五時間は掛かるはずの道のりを半分以下の時間しか経っていないことにラウラは驚きの言葉をもらす。

「鉄道憲兵隊が使う列車は機動力を重視したつくりになっています。車両数も三両編成なので旅客用の列車と比べてその速度は体験してもらった通りです」

クレアの説明にリインはなるほど納得する。

先頭車両は当然運転席。第二車両は小さいが会議室として使える部屋と居住空間。第三車両は資材運搬用の多目的コンテナ。

いくつもの車両を連結して長く重い旅客列車と比べれば速いのは当然だ。

「それでクレア大尉、俺達はレグラムで何をすれば良いんでしょうか？」

ここに辿り着く車中ではクレアによる鉄道憲兵隊の成り立ちと大まかな仕事内容の説明を受けたが、肝心の特別実習の課題について触れることはなかった。

「それについては今から説明します。ついてきてください」

クレアは一同を促して後方の車両に向かって歩き出す。

「な……何をやるんだろう……」

「とにかく行ってみよう」

及び腰のエリオットの背中を軽く叩いて促す。

「安心しろエリオット。何が待ち構えていたとしても私たちならばきつと乗り越えられる」

「そうですよ。それに今回はリインさんも一緒ですから大丈夫に決

まっています」

「ま、ここで躊躇つても仕方がないから早く行こ」

ラウラ、クリス、フィーと次々に促され、エリオットは覚悟を決める。

一同も領き合つて、クレアの後に続いて第三車両へと踏み入れる。そこではクレアが貨物の扉を開き、搭載しておいた導力車の前で待っていた。

「今日の課題は貴方達Ⅶ組A班にはこのレグラムからガレリア要塞に向かつてこの導力車を運転して向かつてもらいます」

「え……でも僕達は導力車なんて運転したことはないんですけど」

いきなりなクレアの課題にエリオットが質問を返す。

「ええ、分かっています。ですが導力車が普及しつつある昨今、貴方達が導力車の運転する機会は出てくるでしょう……」

今回の課題は士官学院でも導力車の運転技能のカリキュラムを作るかと言うテストの一環でもあります……

それに安心してください。貴方達が運転するのは人通りのない街道です。街の中の運転は私がしますから」

淀みのない説明に反論の言葉は上がらない。

導力車の普及は確かに目に見えた社会の変化だが、まだ学生の自分たちがそれを運転する将来のことなど考えたこともなかった。

「また運転をするに当たって、道中の線路のどこかに赤い布を設置しておきました……」

それは仮想の線路の不具合ですので、発見できれば評価の加点となります……

あとは道中の手配魔獣。並びにバリアハート、ケルディックでの簡単な資材調達がありますが、そちらは必須ではありません……

それからのんびりしていたら今日中にガレリア要塞に到着できないので頑張ってください」

口頭で述べた課題の内容をまとめた封書をクレアはリインに渡す。

「拝見させていただきます」

封書から取り出したレポートを他のメンバーに教えるように読み

上げる。

「なるほど、概ねやることは前回の特別実習と大して変わりはないよ
うだな」

「そだね。せいぜい必須課題が鉄道憲兵の仕事を再現したものくらい
？」

「でもここから導力車でガレリア要塞までつて、どう考えても夜に
なっっちゃうと思うんですけど」

「はい。せっかくなので夜間走行も体験してください」

思わず漏らした危惧の言葉に返ってきた無慈悲な言葉にエリオツ
トは絶句する。

「……………クレア先生……………相変わらずスパルタですね」

「でもクレア先生のことだから救済処置もちゃんと考えてくれている
だろう」

クリスとリインは遠くを見て呟く。

「ではまずは導力車の起動から運転の仕方の講習を行いたいと思いま
す。最初は誰が運転しますか？」

「それじゃあわたしが」

そう言つて挙手したのは意外なことにフィーだった。

「珍しいな。面倒くさがりなそなたが率先して手を挙げるのは」

「まあね……………でも導力車の運転には少し興味があつたから……………」

団のみんなはわたしにはまだ早いつて、ずっと触らせてくれなかつ
たし」

「過保護そうだからな。あの二人」

《畏使い》と《破壊獣》の姿を思い出してリインが呟くとフィーがき
つい目を向けて来るが何も言わずに導力車に向かって歩き出した。

「それではフィーちゃん。まずは座つて椅子の下のレバーを下げて座
席の位置を調整してください」

促されるままに運転席に座つたフィーだったが、そこで問題が起き
た。

「あれ……………」

座席に深く腰掛けた目線の前にはちょうどハンドルが位置して、そ

の上の窓から外への視線が通らない。

それに加えて伸ばした足は足元のペダルに届かない。

「ん〜っ！」

フィーは座ったまま背伸びをしながら必死に足を伸ばす。

だがそんな必死な努力は空しく、できないと察したフィーはおもむろに導力車から降りた。

「運転は任せる」

「え、ええ……そうですね。フィーちゃんには後で別の課題を考えます。それでは最初に誰が運転しますか？」

何事もなかったようにクレアはもう一度一同に挙手を求める。

「ならば私からやらせてもらおう。レグラムの街道は私にとって庭のようなものだから適任だろう」

フィーに代わって手を挙げたのはラウラだった。

ラウラは導力車に乗り込むと難なく座席の調整を済ませてエンジンを起動させる。

そのまま指示に従ってラウラはゆつくりと操作して、貨物車両から導力車を外へと出す。

「えっと……残念だったねフィー」

その間、沈黙に耐えかねてクリスがフィーに励ましの言葉を送る。

「別に残念なんて思っていないし……」

そっぽを向くフィーは言葉とは裏腹に、態度が不貞腐れていた。

「でも、背の高さは僕も他人事じゃないからな……そうだ！ どうしても運転してみたいなら誰かの膝の上に座らせてもらえば——」

「ていつー！」

名案を思い付いたと言わんばかりのクリスの脛をフィーは蹴り抜いた。

「いつ——!?!」

悲鳴を押し殺し、蹴られた脛を抱えて跳び上がるクリスにリインはため息を吐く。

「余計なこと……」

ここで彼女にどんな言葉を掛けたところで神経を逆撫でする結果

は目に見えている。

ライン達にできることはそれこそ笑わず、触れずいつも通りにする
ことしかない。

「クリス……本当にオリビエさんに似て来たな」

余計なことを言うこともそうだが、その余計なことの内容の発想ま
で彼の兄に似て来たことにラインは頭痛を感じるのだった。

・*

「ふむ……運転してみると意外と簡単なものだな」

「ふふ、なかなか筋が良いですよラウラさん」

エルベ街道を北上しながら運転に慣れてきたラウラは眩き、助手席
に座ったクレアが朗らかに答える。

「あの……ラインさん……」

「耐えろクリス」

後部座席にはクリスとライン、エリオットの三人が座り、さらにそ
の後ろの荷台には非常用の座席に座るフィー。

クリスが居心地悪そうにしているのは座席の配置を決める際のや
り取りが原因だった。

人数の関係上一人が荷台の小さな座席を使わなければならなかつ
たところでその席を決める際にまたひと悶着あった。

「ふーん……わたしが一番小さいから荷台の席に？」

「え……べ、別にそんなつもりじゃ……それなら僕が荷台の席に座る
からフィーは後部座席に——」

「ふーん……わたしが一番小さいから三人でも窮屈じゃないってこと
？」

「あうあう……」

嫌味をたつぷり含んだ言葉にクリスは閉口させられて今に至る。

後頭部に感じる強い視線。

何故かクリスだけに留まらず、ラインまで睨まれていることになり
背後からの威圧感に戦々恐々とさせられていた。

「そ、そういうえばリインとファイってリベールで戦ったことがあるんだよね？」

そのとぼつちりに耐えかねてエリオットがよりにもよってその話題に触れる。

「え……ああ、ファイつと言うよりは《西風の旅団》と戦ったつて言うのが正しいと思うけどな」

エリオットの言葉に頷くと、何故か視線の圧力が増した。

その視線にリインはこれまでのファイとの間に感じていた壁が何なのかに気が付く。

「もしかして、あの戦いの時に誰か死んでいたのか？ だからファイは俺のことを嫌っているのか？」

これまで会った団長のルトガーやゼノとレオニダスはリインに向かってファイのような敵愾心を持って接してはこなかった。

しかし、ファイだけは彼らと違いそれを向けてくる。

考えられるのは《鬼の力》を暴走させて戦った時に誰かが犠牲になつていたこと。

「復讐か……あの時のことで俺は君たちに謝罪するつもりはないからな」

そこは退けない一線だと、ファイの眼差しに負けない威圧を含ませてリインは言い切る。

「復讐？ リベンジは確かにしたいと思つてるけど……」

リインの口から出て来た言葉にファイは首を傾げる。

「違うのか？ ボースではファイと同じ髪の色で同じ武器を使う男子と戦ったことがあるんだけど、ファイのお兄さんだったんじゃないのか？」

「……………へえ」

ファイが呟いた瞬間、車内の温度が下がった。

「えつと……ファイ？」

「ぶいっ」

先程はあえて突き放すように言ったのだが、予想外の反応にリインは困惑して振り返るがファイは頬を膨らませてそっぽを向いた。

「みんな、赤い布があったよ！」

車内の空気が悪くなる中で、エリオットは現実逃避するように窓の外を見つめ、それを見つけて声を上げた。

「ふむ、何処だ？」

導力車の速度を落としながらラウラはそれを探す。

しかし街道から見える線路の部分には赤い布は見当たらない。

「あそこ、線路に近い木の枝に括りつけてあるよ」

「はい、お見事です。流星はクレイグ中將の息子さんですね……」

あえて線路から離れた位置に括りつけていたんですが大した洞察力です……

では、あの木によって起こり得る鉄道への危険性は具体的に何が挙げられますか？」

「え……」

クレアの正解を認める言葉に安堵した瞬間、問いかけられたエリオットは思わず固まる。

「二つは倒木。何らかの自然災害で木が線路に倒れたら当然列車は停めないといけない……あとはトラップとか無賃乗車の人間かな？」

あの位置だと列車の速度次第だけど飛び移るのにちょうど良さそう」

「飛び移るのは想定していませんでしたが……なるほど猟兵にはそれができるといふことですか」

想定外の答えに面を食らうが、走行中の列車に飛び移られると言われてクレアは半ば感心する。

「それにしても抜き打ちテストまであるなんて……」

クリスは突然の問題にユミルでの授業を思い出して項垂れる。

「どうやら運転していない時もあまり油断していられないな」

そんなクリスにリインも神妙な顔をして頷いた。

「ところでもう少しすればバリアハートなのだが、そこで運転を交代することになっていたが……」

「ん？ どうしたラウラ？」

赤い布を回収し、バリアハートを目前にしたところでラウラは思い

出したようにそれを眩く。

「鉄道と言えばオーロックス砦へ向かう貨物用の線路もあったはず。そちらは今回の課題の範囲内なのだろうか？」

「さあ、どうでしょう」

ラウラの疑問にクレアは微笑みを浮かべ、答えをはぐらかした。

・*
・*

リインが運転する導力車がオーロックス峽谷道を進み、その中腹に差し掛かったところで彼は現れた。

「ひ、ひいー！ 誰か助けてー！ 女神様っ！」

旅行者だろうか、息も絶え絶えにして峽谷道を駆け下りて来る男性に一同は魔獣に追われているのかと判断するが、次の瞬間峽谷道に銃声が響き渡った。

「止まれっ！ 止まらなければ次は当てるぞ！」

銃声に勝るとも劣らない声が響く。

「みなさんはここで待機してください」

尋常ではない状況を察してクレアは素早く助手席からドアを開けて外へ飛び出した。

「む……どうする？」

「この先は領邦軍の砦しかないはずだね？ 観光客が近付く場所でもないし何処かのスパイ？ それにしては走り方は素人っぽい」

「とりあえず僕達はいつでも動けるようにしておきましょう。導力車の運転はこのままリインさんに任せて良いですね？」

「ああ、それで構わない。エリオットもそれで良いか？」

「え……あ……うん」

突然の事態にも関わらず、動揺もなく次の行動を決めていくクラスメイト達にエリオットは言われるがままに頷くことしかできなかった。

そしてリイン達が見守る中でクレアは逃げている青年を庇う様に領邦軍の前に立つ。

「……………つて……………あの人は……………」

その顔に見覚えがあったリインは思わず目を丸くした。

「鉄道憲兵隊、クレア・リーヴェルト大尉です。見たところ旅行者を追い回しているようですが事情の説明を求めます」

「《氷の乙女》……………」

「鉄血の子飼いがどうしてこんなところに」

「ふん、この地はクロイツェン州領邦軍が治安維持を行う場所、貴公ら正規軍に介入される謂れはない」

クレアの登場に隊長らしき男は怯まずに言い返す。

「ええ、本来なら鉄道網から離れたこの渓谷道では私たちに捜査権はありません……………」

ですが、丸腰の旅行者を銃で威嚇して追い立てるのは些かやり過ぎではないでしょうか？」

「その男はオーロックス砦を調べていた他国のスパイである容疑が掛けられている。同行を拒否して逃げ出したのだから疚しいことがあると判断したまでだ」

「ご、誤解です。僕は気分転換に街道の空気を吸っていたら珍しい蝶を見つけ追いつけて、渓谷の中腹辺りまで来ていて途中から魔獣にばったりと遭遇して、追われるがままに命からがらでこの先の砦に辿り着いたんだ……………」

それで助けてもらおうと思って近付いたらいきなり銃を向けられたんだ」

青年が一気に事情を捲し立てるが、流石に擁護できない内容にクレアはため息をもらす。

軍事基地でもある砦に不用意に近付いたこと。

しかも子供みたいなのとつてつけた理由では疑われて当然だろう。

ただでさえ、先月に侵入者が現れた騒ぎがあり、今月は戦車が運び込まれる予定だった。

おそらく砦の空気はいつも以上に張り詰めていたことは容易に想像できる。

そんな中で現れた旅行者を領邦軍が警戒しないわけがない。

「そういうことですか……ならば、えつと……」

「あ……僕の名前はアントンです」

「ではアントンさん。大丈夫ですから領邦軍にちゃんと話をして来て下さい」

「え……そんな……助けてくれないんですか!？」

「軍事基地に不用意に近付いた貴方の落ち度でもあります。最悪背中を見せた瞬間に射殺されていてもおかしくなかったんですよ」

「射殺……」

クレアの言葉にアントンはぶるりと体を震わせる。

領邦軍もクレアが協力的なことで構えていた銃を下ろし、事の成り行きを静観する姿勢を見せる。

「元はと言えば貴方の軽率な行動が招いた疚しいことが本当になら事情聴取を受けることもできるはずです……」

それともやはり疚しいことがあるんですか?」

「………分かりました」

アントンはがっくりと項垂れてクレアの言葉に頷いた。

「それでは彼のことを任せて良いですね?」

「ふん……協力感謝する」

クレアと領邦軍は穏便なやり取りをしてアントンを引き渡し――

「ちよつと待ってくれるかな?」

突然、アントンはそんなことを言い出した。

「何のつもりですかアントンさん?」

せつかく穏便に済みそうだったのに、アントンの一言で領邦軍たちが警戒心を引き上げ、いつでも銃を彼に向けられるように身構える。

「ちよつと橋の下に広がる谷に目が行ってね。それで……心を落ち着かせようと思って」

しかし、そんな領邦軍の変化に気付きもせずアントンは呑気な口調でそんなことを宣った。

「……何をするつもりですか?」

「すぐに済ませます……それから少しうるさくするので申し訳ありません」

そう言ってアントンは石橋の上に登る。

そして――

「生誕祭も記念祭も、大っキライだ――っ!! うおお――っ!! あばよ――っ!! 僕の青春――っ!!」

アントンの叫びが峽谷に木霊する。

「……………さあ、行きましょう」

爽やかな笑顔を浮かべてアントンは領邦軍の隊長に向き直る。

「う……………うむ……………」

隊長は何とも言えない表情で頷き、クレアに視線を移す。

「鉄道憲兵隊で連れて行ってもらっても構わないのだが――」

「申し訳ありません。私は現在、別の任務中なので、彼のことは領邦軍にお任せします」

縫るような目を振り切りクレアはアントンを領邦軍に任せてその場から退散するのだった。

26話 鉄道憲兵隊Ⅱ

バリアハートからケルディックへと向かう道中の運転はエリオットが担当することになる。

最初は緊張してハンドルにしがみつくように運転していたが、今では肩の力を抜いて運転できている。

「そういえば導力車の運転には免許が必要ではなかったのだろうか？」

今更といったところでラウラが質問する。

「ええ、ですが免許の交付も交通法に伴ってまだ完全なものとは言えません……」

資格試験も最低限の運動能力があるかを判断するものですし、それにこうして何処かで実際に運転をする訓練ができる施設もまだありませんから」

クレアは前を見たままラウラの疑問に淀みなく答える。

「導力車が一般の家庭でも普及されるようになってだいぶ時間は経ちますが、まだまだ見直さなければならぬ法案は沢山あります」

「そういえばクロスベルでは取り締まりが緩いせいで好き勝手に導力車を取り回して遊んでいる人達がいきましたね」

クレアの説明にクリスはクロスベルにいた時のことを思い出しながら頷く。

「本当なのかそれは？」

「ええ、クロスベルは帝国と共和国の二つを宗主国として成り立っている自治州ですので、両国の人達を厳しく取り締まることはできないんです……」

それを良いことにクロスベルでは貴族の子息が遊び場みたいに公共の場で導力車を取り回していたこともありました。共和国人はともかく同じ帝国人としていたたまれませんでした」

「その気持ちは良く分かる」

思わぬところで出て来たクロスベルの話にラウラは顔をしかめる。

ラウラも帝国貴族として恥じることはない振る舞いを心掛けているが、士官学院の中でも平民生徒に対して横暴に振る舞う貴族生徒は存在している。

「他国での振る舞いは自分だけではなく、帝国人全てに悪い印象を持たせてしまう。まったくもって遺憾なことだ」

「ああ、まったくその通りだ」

ラウラの言葉にリインは強く、強く頷いた。

「とは言ってもその問題はクロスベルだけではないんですよね」

クレアは鏡越しに後方を見るとエリオットに指示を出す。

「エリオット君、車を左に寄せて速度を落としてください。後ろから来た車を先に行かせます」

「え……？ はい」

突然の指示にエリオットは面を食らうが素直に言われた通りに速度を緩める。

すると後ろからやって来た導力車は目前になっていきなり速度を上げた。

「え——っ!？」

ぶつかると思った直後、導力車は急ブレーキを掛けてハンドルを切り、衝突するギリギリの軌道でその横をすり抜けて行った。

「帝国でも暴走車はいるんだな……貴族の権力が強いクロイツェン州だからこそなのかもしれないけど」

「すまない……同じクロイツェン州の貴族として恥ずかしい限りだ」

「っていうかあの運転手は馬鹿なの？ TMPの車を煽るなんて」

後部座席に並ぶ三人はすれ違った導力車を冷静に見送った。

「な、何でみんなそんなに落ち着いているの？」

衝突する恐怖に胸を抑えたエリオットは冷静なりイン達に振り返る。

「別に本当にぶつけないに来ても抜け出す自信があっただけ」

「殺気を感じなかったからな」

あつさりと言うフィーとラウラの言葉にエリオットは言葉を失う。

「クレア大尉、今の導力車を取り締まることはできないんですか？」

「ええ……明確な速度違反をしているわけではなく、実際に事故を起こしたわけではないので逮捕することはできません……」

「それに街道の治安維持は領邦軍の管轄です……」

「例え彼らが私たちの導力車にぶつけて来たとしても、過失をこちらに擦り付けてきます」

「それって……」

「言ってみれば領邦軍の遠回しな嫌がらせです……」

「とはいえこんなことをするのはクロイツェン州くらいですけど」

「先月の実習でも感じましたがここまで貴族のモラルが落ちているんですね」

「難しい顔をしてクリスは落ち込む。」

「彼が何を考えているのか容易に想像できるがリインもクレアも特に何も言わなかった。」

「ではエリオット君、気を取り直して行きましょう」

「は、はい……」

「クレアに促され、エリオットは止めてしまった導力車を発進させた。」

・*・

北クロイツェン街道の穀倉地帯を目前にしたところで先程追い越して行った導力車が停車していた。

「彼らは三人のグループの青年たちは先程のTMPのジープを着にして談笑していた。」

「見たかよさっきのTMPの車の運転手の顔、まじ傑作だったな！」

「俺らくらいのがきだったけど、TMPにはあんなのがいるのかよ。よっぽど人手不足なんだな」

「あいつだけすっげえビビリまくってたな。あの顔と来たら、思い出しただけでも笑えてくるぜ」

「三人は何一つ悪びれもせずに笑う。」

「それにしてもTMPの車を挑発するのも飽きて来たな。今度クロス

ベルにでも行ってみるか?」

「良いなそれ」

「こんな何もない街道よりずっと面白そうだな」

次の遊び場に思いを馳せて笑っていた内の一人は先程追い越したTMPの導力車が近付いてきたことに気が付く。

彼らにとって亀のような速度で走る導力車を指差して笑っていると、その内の一人が何かに気付いて突然その導力車の前に飛び出した。

「なっ!?!」

エリオットは急に目の前に飛び出してきた青年に面を食らいながらも急ブレーキを掛ける。

「何をしているんですか貴方は死にたいんですか!?!」

走行中の導力車の前に飛び出して行為にクレアが怒鳴りつけるが、その青年は意に介さず運転席のエリオットに近付くとその顔をまじまじと見る。

「もしかしてエリオット・クレイグか?」

「え……?」

見知らぬ青年から名前を呼ばれたことにエリオットは面を食らう。

「何だよ。そのビビりとお前知り合いなのか?」

「エリオットって……その顔で男かよ。はは、まじかよ。女かと思っただぜ」

一人目の青年に続き、エンジンが掛かっている導力車の前に無造作にたむろし始める。

「ちよつと貴方達——」

「何だ。たかが憲兵隊の分際で私たちの会話を邪魔する気か?」

「これだから平民は困る。それでどういう関係なんだ?」

「去年、帝都の夏至祭のジュニア部門のバイオリンコンクールにいたやつなんだけどき。これが笑えるんだ」

「いい加減に——」

「こいつは栄えあるコンクールに粗悪品を持ち込んでさ……」

それで優勝目指してるとか何の冗談かって思ったよ。しかも案の

定、予選落ちしてるし」

「っ——」

「は、まじかよそれ。あはははっ！」

「ま、貧乏人にはその程度の楽器しか持てなかったのだろうさ。笑ってやるな、ククク」

声を上げて嘲笑する三人に対して、リイン達は眉を顰める。

「最悪……貴族ってこんなのばかり？」

「一緒にするな」

フィーの弦きにラウラが嫌悪を滲ませて弁明する。

「音楽院にいないからどうしたんだと思ったけど、自分に才能がないって分かって逃げたのか？」

「お前達——」

「クリス、落ち着け」

荷台から乗り出そうとするクリスをリインが制止する。

「おい、そこのお前。貴様、今私に向かって『お前』と言ったか？」

「どうやら貴様も貴族のようだが身の程を弁えろ。私たちはクロイツェン州の子爵家の者だぞ」

身分をひけらかし、居丈高な物言いでクリスは見下され眈を挙げる。

「お前たちの方こそ——」

「クリスッ！」

先程よりも声を大きくしてリインはクリスを諷める。

「だけどリインさんっ！」

言い返すがリインに睨まれてクリスは口を噤む。

感情に任せてそれを暴露して目の前の不屈き者を這いつくばらせたいという思いをクリスは拳を握り締めて我慢する。

しかし、クリスの我慢に反して彼が漏らした名前に青年たちは顔を蒼くさせた。

「リインだと……まさかあのリイン・シュバルツァー!?」

「ああ、そのリイン・シュバルツァーだが、何か？」

穏やかを装って青年の言葉に応じると、それだけで青年たちは怯

む。

「おい、行こうぜ・リイン・シユバルツァーには関わるなって父上に言われているんだ」

「ちっ……分かってるよ」

先程までの傲慢な態度が一転して及び腰になる青年たちにリイン達は目を丸くする。

「覚えてろよっ！」

何を、と突っ込む間もなく青年たちは逃げるように彼らの導力車に乗り込むと急発進してバリアハートへ走り出した。

「……………流石リイン。男爵家なのに皇族に伝手があるからもしかして結構偉い？」

「うむ、当然だ。なんと言ってもリインだからな」

疑問符を挙げるフィーにラウラは我がことのように嬉しそうに頷く。

「俺としては、誰かの権威に借るつもりはないんだけどな」

苦笑してリインは運転席に視線を向ける。

「エリオット大丈夫か？」

呼びかけに対して応えはない。

「エリオット……………エリオット！」

「え……………あ、何……………？」

三度の呼びかけでようやく顔を上げたエリオットの顔は今にも倒れそうなほどに蒼褪めていた。

「クリスと交代だ」

いけるなど目配せして尋ねるとクリスは黙って頷いた。

「で……………でもケルディックまでは僕が運転するって——」

「そんな状態じゃ無理だ。とにかく今は少し休んだ方が良い。良いですよねクレア大尉？」

了承を求めてリインはクレアに尋ねるが、何故か彼女もまたエリオットと同様に反応は鈍かった。

「クレア大尉？」

「あ……………す、すみません。何ですか？」

エリオット程ではないが明らかに顔色が悪いクレアの様子にリインは前言を撤回した。

「すみません。どうやら車酔いをしたようなので、この辺で一度休憩を取ってもらえませんか？」

・*

「人里離れた街道か……ちようどいい」

街道の隅の広場に導力車を停め、長閑な穀倉地帯に吹く心地よい風をその身に受けながらラウラは一つ頷くとファイヤーに向き直った。

「ファイ、私と勝負をしてもらえないだろうか？」

「いきなり何を言っているの？」

突然のラウラの言葉にファイヤーはめんどくさそうに声を返す。

「失礼を承知で言わせてもらえば私はそなたの存在を認めることはできなかつた……」

その体格でリインに匹敵する実力、常に冷静で的確な判断力、そしていざとなれば人殺しも躊躇わない胆力……

それらは全て私の『武』の常識から余りにもかけ離れていた」

「リインに匹敵するって……嫌味？」

「違うのか？ 模擬戦では私や周りのみんなに合わせて力をセーブしていたらどう？」

足手まといがいなければ、そなたはもつとリインといい勝負ができると私は思っている」

「……………まあいいや。それで？」

「正直に言わせてもらえば、『獵兵』という存在、その在り方にも良い感情は持っていなかった……」

騎士を『正道』とするならば、獵兵は言わば『邪道』……

己の価値観に反しているからこそ、私はそなたと心が合わせられないのだと思った」

「ん……それは間違っていない」

「いや、それは間違いだった」

自分は闇の住人だと認めるフィーをラウラは否定した。

「力は所詮力でしかない。父上に言われた言葉なのだが、その意味がようやく理解できた……」

力に善悪はなく、騎士の剣も猟兵の技も突き詰めれば同じ目的に集約される」

「同じ目的……？」

「勝つ」ことだ……」

不意打ちが卑怯だ。正々堂々戦えと言う言葉こそ、戦場では卑怯極まる物言いだったと気付いた」

「それは当然だね」

ラウラの言葉にフィーは頷く。

「……それでどうして勝負なの？」

「私はどうやら筋金入りの馬鹿だったようだ……」

そなたを知るために、私を知ってもらうには剣を交える他ない。もちろんフィーが嫌なら断ってくれて構わない……」

ただ私の我儘を言わせてもらうなら、勝ってそなたに伝えたい言葉がある」

「そういうこと……報酬は自分の手で掴み取りたいってこと……でもわたしにメリットはないけど」

「それなら……ふむ……こういうことは初めてなので勝手が分からないのだが……」

こほんっとラウラは恥ずかしそうに咳払いをして大剣を片手でフィーに突きつけて言った。

「フィー、フィーのばーか」

恥ずかしそうに、らしくない挑発の言葉を使ったラウラにフィーは目を細める。

「あほ……お、おたんこなす……えつとチビ」

フィーのその眼差しの圧に思いつく限りの悪口を言ってみるが、まったく反応しないフィーにラウラは居たたまれなくなる。

「……オッケーその挑発乗って上げる」

慈悲の笑みを浮かべてフィーは双銃剣を構える。

「うむ、望むところだ」

ラウラはフィーの気遣いに気が付かず、挑発が成功して嬉しそうに大剣を構える。

「ところでラウラ、戦う前に一つ良い？」

「うむ、何だ？」

「この猪突猛進クソ雑魚へっぼこ剣士」

「何だどっ!？」

フィーの言葉にラウラは激昂し、それと同時にフィーが仕掛けた。

・*
・*

「それじゃあクリスはエリオットの方を頼む。俺はクレアさんの方に
行くから」

ラウラとフィーの決闘を尻目にリインとクリスは二手に分かれる。

「大丈夫ですかクレアさん？」

街道の脇の休憩所のベンチで俯くクレアにリインは声を掛けて、水筒を差し出す。

本来なら気分が悪いと言い出したリインこそが気遣われる立場なのだろうが、そもそも建前なのだからおかしくはない。

「ええ……ごめんなさい。気を遣わせてしまって」

恐縮してクレアは頭を下げ水筒を受け取る。

監督役としては失格なのだが、今のクレアにはそれを取り繕う余裕はなかった。

「いつもあんな風に貴族から因縁を付けられているんですか？」

「あそこまであからさまなのは珍しいですね」

そもそもあの程度の嫌がらせで動じるクレアではない。

やられたらやり返すのがクレアのやり方であり、《氷の乙女》異名を使つてあらゆる手を尽くして追い詰めると脅すことだってできたはず。

なのにそれをしなかったのは、自分に向けられたわけでもない言葉だった。

——粗悪品の楽器……

それが本当に自分と関係あるものなのかはあの会話の中では判別できなかった。

仮にもしもそうだったとしてもクレアが気に病む必要はないのだが、全ての発端となったものを簡単に割り切ることはできそうにない。

——それだけでこんなに動じてしまうなんて……

それ程までに緩んでいたのだろうかとかクレアは自問自答して、その通りだと自嘲する。

死んだはずのリインが生きて戻ってきてくれたこと。

そして彼とクリスに勉強を教えるという名目でユミルに滞在した日々は、家族の温もりを忘れていたクレアにとって心から笑うことができた日々だった。

《特別実習》でリイン達とまた会えることを嬉しく感じてもいた。

しかし、そんな風に浮かれていたクレアに過去を忘れるなど言わんばかりに、それは影をちらつかせてきた。

そう思えば今朝のミハイルの奇行も浮かれていた戒めだったのではないかと思える。

「クレアさんが落ち込む理由はエリオットの楽器ですか？ 帝国の楽器メーカーといえばリーヴェルト社ですけど、クレアさんの家名と同じですよね」

「……………流石ですね」

同じ系統の能力を持っているだけにリインはわずかな情報だけでクレアの消沈の理由に辿り着く。

それにリインには既に、リベールで自分の罪を告白している。

だからなのか、クレアは少しだけ心の軽さを感じながら、あの時説明し切れなかった自分の生い立ちを語り出していた。

クレアの実家が大手の楽器メーカーだったこと。

導力車の事故に巻き込まれて両親と弟を亡くして自分だけ生き残ったこと。

その事故が詐欺行為を隠蔽するために叔父によって仕組まれたこ

と。

オズボーンと出会い、復讐の仕方を教わり、あらゆる方法を駆使して叔父を極刑にしたこと。

「憎悪に取り憑かれ、一切の慈悲もなく叔父を極刑に追いやった血も涙もない《氷の乙女》……それが本当の私です」

あの時と同じ言葉で締めくくったクレアの言葉にリインは首を横に振った。

「それは違います」

「え……う？」

「慈悲はあつたじゃないですか。最初に問い詰めた時に叔父さんが罪を認めて自首すれば良かった……」

でもそれを振り払ったのはその叔父さんなんです。そこにクレアさんが責任を感じるのはおかしいじゃないですか」

「でも——」

「近くにいたミハイル大尉だって、父親の罪もクレアさんの苦しみにも気付いていなかった……」

復讐の仕方を教えたオズボーン宰相だって、もっと穏便に済ませることができたはずだ」

「リイン君……」

「クレアさんが悪くなかったとは言いません。もつと他にやり方はあったのかもしれませんが……」

でも、クレアさん一人だけが悪かったと責任を感じるのはおかしいです」

「そうかもしれない。でも私は……」

「知っていますかクレアさん？ 憎悪に取り憑かれるっていうのは本当にそれ以外考えられないんです」

リインは胸を押さえて、その時のことを思い出す。

「胸を焼く黒い焰が自分を焼き尽くしても構わない。あいつを殺せるならば後の事なんて知ったことじゃない、それこそ自分が死んだって構わない」

「っ……」

にじみ出すどす黒い威圧感にクレアは息を呑み、似つかわしくない
昏い笑みを浮かべるリインに自分の目を疑った。

「頭に浮かぶのはどうやってそいつをこの手で殺してやろうかという
考えだけ……」

一秒でもそいつがこの世で同じ空気を吸っていることが嫌で、一瞬
で殺すべきだと考える一方で、あの子が負った苦しみを少しでも分か
らせるように体の端から斬り刻むことを考える……

理性なんて欠片も残らない、それが憎悪に取り憑かれるっていうこ
とです」

次の瞬間、どす黒い気配は掻き消え、暗い笑みを浮かべていたリイ
ンは何事もなかったようにクレアに笑いかける。

《彼女》の死はクレアも知っている。

ユミルに行った時には、彼女の遺灰が埋葬されたお墓にリインと一
緒にお参りだった。

しかし、クレアは先程のリインの顔を見たのは初めてだった。

「クレアさんはちゃんと感情に流されず司法に判決を委ねることがで
きたんですね？」

なら、クレアさんはちゃんと憎悪をコントロールできていたという
ことになりませんか。俺なんて、カシウスさんに何度もぶん殴られて
も頭を冷やせなかつたくらいですから」

おどけた口調で事も無げに言うリインにクレアは眩しそうに目を
細める。

垣間見たリインの憎悪の片鱗。

それをどうやって呑み込めたのかクレアには想像できない。

「本当に……大きくなりましたね」

リベールの時と比べて改めてクレアは思う。

「白状すると貴方の事を弟と重ねていたんです。同じくらいの歳だつ
たんですよ」

年齢が近いことしか共通点などないはずなのに、弟が生きていたら
こんな風になっていたのではないかと思っていたが、それはあまりに
もリインに失礼だったとクレアは思う。

「ごめんな——」

「はは、それは光栄ですね。それじゃあ弟として一言良いですか？」
「え……？」

謝罪の言葉を遮られたクレアは目を丸くしてリインの顔を見る。

「お姉ちゃんのことを悪く言うのはやめてください」

「っ……」

「お姉ちゃんは確かに一度間違いを犯したかもしれない……」

「けど、お姉ちゃんの良い所は僕が良く知っている。お姉ちゃんのことを何も知らないくせに馬鹿にしたら僕が許さない。例えばそれがお姉ちゃんだったとしても」

「リ——エミ……ル……」

リインが弟の口調を真似たわけではない。

それでも真っ直ぐに見つめてくるリインの眼差しが亡き弟や両親たちのものが重なる。

「あ……」

気付けば涙が零れ落ちていた。

あの事故から枯れ果てたと思っていた涙がとめどなく溢れてくる。

そんなクレアにリインは手を伸ばす。

「クレアさん……本当に憎悪だけだったんですか？」

大好きだったから、大切だったから許せないという気持ちは憎悪とは少し違おうと俺は思います」

嗚咽を抑えて涙を流すクレアの頭をリインは優しく撫でて続ける。

「誰が何と言っても、クレアさんは家族のためにちゃんと怒ってくれる優しいお姉ちゃんですよ」

「っ——」

クレアはリインの言葉に答えず、顔をリインの胸にうずめる。

「……ごめんなさい……少しだけこのままでもいいさせてください」

「はい……」

それ以上何も言わず、リインはクレアが落ち着くまでその胸を貸すのだった。

27話 鉄道憲兵隊Ⅲ

ガレリア要塞。

エレボニア帝国の国土の最東端に位置し、東の国境門としても機能する山岳地に作られた要塞。

ガレリア要塞の常駐兵力は数千名以上にも及び、帝国正規軍の軍事拠点の兵力としては最大である。

それはクロスベルの向こうの大国カルバート共和国を意識しているからであり、軍人演習も牽制の意味合いもあり頻繁に行われている。

「はい。皆さん、お疲れ様でした」

夜の闇を掻き消すように数多の導力灯で照らされた軍事要塞の前にクレアはⅦ組A班を労う。

「よ……ようやく着いた……」

導力車から降りたエリオットは息も絶え絶えにその場にへたり込む。

交代で運転していたからと言っても、慣れない導力車に長時間座っていることも苦痛だったが、月明かりだけで課題の赤い布を探すことに集中していたこともあり、エリオットだけではなく体力のあるリイン達も疲労を感じずにはいられなかった。

「それにしてもケルディックからここまで一つも赤い布を見つけられなかったけど、大丈夫ですかね？」

クレアに聞こえないように声を潜めて呟く。

「ああ、日が落ちたからとはいえ、まさか一つも見つからないとは」

「夜目には自信があっただけだな」

「俺もだ……となると、クレア大尉。もしかして——」

「はい。ケルディックからガレリア要塞の間には一つも布は設置していません」

悪びれた様子もなくクレアは答えを明かす。

「ええ!? そんなどうして!？」

まさかの答えにエリオットは不満を叫ぶ。

「それが鉄道憲兵隊の仕事だからです……」

毎日、何かがあるわけではありません。むしろ何も起きない日の方が多いくらいです……」

それでも見回りはしなければいけないものですし、当然いい加減な気持ちでやって良いものではありません」

「それは……」

ぐうの音も出ない正論にエリオットは黙り込む。

「でも正直、何かがあつた方が気が楽だと思いましたがね」

「延々と代わり映えしない景色を動かずに見続けるといふのは意外と堪えるのだな」

「そう？ 要人を狙撃する場合ライフルを構えて半日じつとしてることもあるよ。わたしはやったことないけど」

「半日も!? 猟兵とはすごいものだな」

狙撃と言う戦い方の嫌悪感よりも、たった一発の銃撃のために半日も掛けるということにラウラは素直に驚く。

「ともかく今日の特別実習は終わりで良いんですね？」

話が脱線しそうな状況を見てクリスはクレアに尋ねる。
すでに夜は深い。

まだ日が変わるほどではないが、明日の実習のためにも体を休めたいと考える。

「ええ、今日の特別実習はこれで終わりです」

「それじゃあ、今日はガレリア要塞に泊まるんですか？」

「いいえ」

予想外の言葉に一同は目を丸くする。

東の最南端の軍事施設のため、近くに農村はない。

クロスベルへと続く線路が敷かれているが、軍施設故に関係者以外の降車は禁止されており、当然一般人に解放されている宿泊施設などない。

「まさか野宿ですか？」

「いいえ、皆さんにはこちらで今日は寝泊まりしてもらいます」

クレアの言葉と共に線路をゆつくりと進んできたのは、A班をレグラムまで乗せてくれた鉄道憲兵隊の特別列車だった。

「え……その列車に寝るところなんてありましたっけ？」

「ふむ、朝に乗った時には気付かなかったが。そもそも六人分のベッドなど並べるなら一車両丸々必要だと思うのだが」

クリスとラウラ、二人の貴族は揃って首を傾げる。

「二人とも、ブリーフィングの隣にあったレストルームが今日のベッドだぞ」

そんな二人にリインは苦笑を浮かべて答えを教える。

「レストルームって……あのカーテンで仕切られた三段の棚が左右にある物置ですよね」

「ははは、あんなところが寝床などリインは面白いことを言うな」

ベッドⅡ広い、という先入観がある貴族はその答えを冗談だと思つて笑う。

「はい。リイン君の言う通りです」

しかし、クレアは笑顔でリインの答えを正解だと認めた。

「へ……？」

「は……？」

「皆さんにはこれからこの列車で寝泊まりしていただき、鈍行で移動しながら帝都に向かってもらいます」

クレアの補足説明にクリスとラウラは絶句する。

「二人とも明日は寝不足確定かな？」

「あ、あはは……でも僕も寝台車で眠るなんて初めてだから眠れるかな？ リインは落ち着いているけど、やっぱりこういう経験もあるの？」

「流石に列車の中で寝るのは今日が初めてだな。ただ狭いベッドや寝袋で寝た事はあるから二人よりも抵抗はないな」

「今頃、B班のユーススやマキアスもクリス達と同じ顔しているのかな？」

「それはちよつと見てみたいかも」

エリオットが漏らした感想にフィーは同意した。

・*

ガタン——ゴトン——

昼間に乗っていた時よりも遙かに静かで間隔も長い揺れ方。

それに加えて寝台はそれなりに快適だが、ベッドと比べてしまえば雲泥の差の寝心地だった。

成人男性に合わせて作られたとはいえ、狭く短い寝台は窮屈な上に寝転んだ目の前にある天井は圧迫感に息苦しさを感じずにはいられない。

それに緩やかとはいえ、列車特有の揺れも睡眠の妨げになる。

とは言っても昼からずっと導力車に乗り続けていた疲労もあって、時間は掛かったものの眠ることはそこまで苦にはならなかった。

しかし、疲労を体にかけていてもエリオットは目が冴えていた。

「眠れないのか?」

天井越しにリインがエリオットに声を掛けてくる。

見えないはずなのに気付かれていることに今更驚きはしない。

「うん……」

「もしかして昼間の貴族たちが言っていたリーヴェルト社製の楽器の事か?」

「……うん」

まるで心を見透かしたかのような物言いにエリオットは素直に頷く。

「少し話さないか?」

リインのその言葉にエリオットは頷き、狭いベッドから抜け出してレストルームから隣のブリーフィングルームへと移動する。

そこでリインはクレアから許可された範囲でリーヴェルト社がかつて詐欺行為を働いたことを説明する。

「国外で製造された楽器を国内製と偽ったり……」

有名な職人の作品の贋作を作らせて、本物として富裕層に売りつけた……

たぶんエリオットの楽器はそのどちらかだと思う」

「……そんなことがあったんだ」

「当時のリーヴェルト社はかなり荒れたらしい……」

倒産を免れたのは、クレアさんが身内を断罪したからこそだったぞうだ」

当然のことだが、騙された貴族たちはリーヴェルト社に責任を追究し一族郎党にまでその責任を取らせるべきだと声を上げていたらしい。

それを守ったのはオズボーン宰相だった。

一度はクレアの復讐を止めなかったことに失望したが、彼女が手を汚すことで叔父の家族や会社の社員に累が及ばないように根回ししていたと聞かされれば、その評価を改めないわけにはいかない。

「一応今でも、リーヴェルト社にその楽器を持っていけば無償で交換してくれるらしいぞ」

「そう……」

ラインの言葉にエリオットは生返事をする。

「才能がないって言われたことなら気にする必要はないと思うぞ……」

エリオットの演奏はユーシスだつて褒めていたじゃないか」

四大名門としての教養の一つでユーシスも嗜む程度に楽器を扱える。

それに耳も肥えているから、彼の評価はあの貴族たちよりも信用に値する。

「うん……それは分かっているんだけど」

「何か思うことがあるなら話してみないか？ それだけでも気持ちは整理できるぞ」

昼間はクリスにフォローを頼んだが、エリオットの様子では蟠りが解けたようには見えなかった。

とはいえ武術ならともかく、音楽と言う芸術の分野でどこまで気の利いたことを言えるかは分からないが。

「ラインは知っていると思うけど、僕の父さんはあのオーラフ・クレイグなんだ」

「ああ、御前試合で世話になったからな」

「うん……僕もあの試合は見ていたからそれは知っているよ」

そう応えてエリオットは改めて話し始める。

「僕の父さんは軍人で、父さんは僕を軍人にしたみたいなんだ。トールズ士官学院に入学したのも僕が決めたわけじゃないんだ」

「そういうと、他に進みたい進路があつたのか？」

「帝都にある音楽院に通うつもりだったんだ……姉さんがその卒業生で、ピアノリストとしての道を歩き始めて、僕も当然のようにそれに続こうとした……」

でも、父さんはそれを許してくれなかった」

エリオットは天井を仰ぎ、その時に言われた言葉を呟く。

『趣味程度ならともかく、帝国男子が音楽で生計を立てるなど認められん』

「そんなことを言われたのか……」

「どんなに食い下がっても、首を縦に振ってくれないどころか、帝国にある軍学校や士官学校を一通り勧めて来て、結局僕は音楽院への進学を諦めるしかなかった」

「エリオットはもしかして、お父さんのことを恨んでいるのか？」

「うん」

ラインの質問にエリオットは間髪入れずに頷いた。

「父さんはあの御前試合の時から、『お前もライン・シユバルツアーみたいな立派な帝国男子になるんだぞ』なんて言っただけで僕とラインを比べるようになってさ……」

僕とラインじゃ全然釣り合わないっていうのに、ひどい無茶振りだよ」

「それは………すまない」

「ラインが謝ることじゃないよ」

恐縮して頭を下げるラインにエリオットは逆に申し訳なくなる。

「でも過大評価されているみたいだけど、俺はクレイグ中將が言う程の大層な人間じゃない……」

リベールの異変で活躍したように報じられているけど、俺がしたのはリベールの人達のつゆ払いをしただけに過ぎないんだ……」

それに俺自身、たった一人の女の子も守れなかったんだから」

「リイン……」

自分の手を見つめるリインにエリオットは言葉を失う。

常に超然とし余裕に満ち、Ⅶ組全員を相手に勝利するほどの強さを持つているリインが守れない戦いと言うものが想像できない。

「リインは——」

何があったのか、思わず尋ねそうになってエリオットは口を噤む。

ただのクラスメイトが触れて良い傷ではないと感じた事と、聞いたとして気の利いた言葉を言えるわけでもない。

とにかく好奇心で踏み込んでいいものではないと自分に言い聞かせる。

「俺がどうしたんだ？」

「えつと……リインは将来軍人になるの？」

誤魔化すようにエリオットはリインの将来について尋ねる。

リインの将来については様々な憶測や噂話が飛び交っている。

一度皇族親衛隊に推薦され、実力も帝国の三強に認められる程。

それこそ卒業後の進路は引く手数多だろう同級生の将来の展望はエリオットでなくても注目されている。

「軍人……どうだろうな。戦争が起きるとすれば軍に席を置いておくべきなのかもしれないが、それだと自由に動けないからな」

「え……戦争？」

思わぬ言葉にエリオットは目を丸くする。

「戦争って、何を言っているのりイン？ 不戦条約だって結ばれているのに」

「近々、帝国と共和国で戦争が起こる……」

それにリベールで起きた《異変》と同じようなことが帝国でも起きることになっているんだ……

だから将来俺がどんな道に進むかどうかは、それらを全部乗り越えてから考える事になるかな、正直今はそこまで考えている余裕はないんだ」

リインの言っていることの意味が分からずエリオットは呆氣に取

られる。

共和国との戦争に《異変》。

どちらもエリオットには現実味を感じない言葉だけにリインの妄言にしか聞こえない。

そんなエリオットの様子にリインは苦笑する。

「悪い、変なことを言ったな。あまり気にしないでくれ……」

その辺りの事は俺とオリヴァルト殿下で何とか被害を最小限に留めるように努力するつもりだから」

「え……あ……」

エリオットの戸惑いをリインは当然の反応だと頷き、これ以上の説明を切り上げる。

戦争もそうだが、表向き平和な帝国で《リベールの異変》のような事件が起きるなど、民間人が突然言われて信じられるものではないだろう。

だからこの話題を終わりにして、今度はリインが聞き返す。

「そういうエリオットはもし音楽院に通えていたら、どんな音楽家になりたかったんだ？」

「……………え……………」

あまりに普通過ぎる質問にエリオットは間の抜けた声をもらった。

「どんなって……………え……………」

「そんなにおかしいなことを聞いたか？」

まあ、無理矢理に士官学院に入れられたなら不躰な質問かもしれな
いか」

「いや…………それは良いんだけど…………」

リインの質問に答えようと思考を巡らし、何も答えられないことに愕然とする。

音楽家と言ってもその稼ぎ方はいくらでもある。

しかし、エリオットにはその展望はなかった。

ただ音楽が好きだから音楽院に行きたかった。

ただ漠然と姉や母が進んだ道だから音楽院に進学したかった。

それに気付くと、自分が音楽院に進みたいという言葉が酷く薄っぺ

らしいものを感じてしまった。

「エリオット……」

音楽に対しての情熱以前の問題に愕然とするエリオットにリインは神妙な顔をして呼び掛ける。

「な……何、リイン？」

自分の気持ちに整理がつかないままエリオットはそれに応える。

「エリオットが軍人に向いているかどうかは一先ず別として、俺はエリオットに音楽家を目指して欲しいと思っているよ」

「え……でも、僕には才能がないって——」

「あんな馬鹿貴族の言葉を真に受ける必要はないだろ。確かにその時のコンクールは落ちたのかもしれないけど、それなら次に向けて頑張れば良いだけの話だろ？」

「それは……そうかもしれないけど」

「だからエリオット。帝国の音楽家の悪いイメージを何としても払拭してくれ！」

「え……？ 帝国の音楽家のイメージ？ 何を言っているのリイン……？」

訳の分からないことを言い出したリインにエリオットは首を捻るのだった。

・＊

こうして鉄道憲兵隊での特別実習の一日目は様々な余韻を残しつつも無事に終了した。

続く二日目の実習は、A班B班ともに北部と南部の線路に分かれて同じことを行う——はずだった。

早朝、鉄道憲兵隊の詰め所に知らされた一報。

海都オルデイスで開発された、蒼の公爵の名を意味する《ブラウヘルツオーク》と名付けられた大型観光列車。

鉄血宰相の《アイゼングラーフ》に対抗してカイエン公爵が造らせた大陸横断鉄道の最西部と最東部の間を走るクルーズトレイン。

その初となるお披露目には数多くの有力者が招かれ、カルバードを往復する二泊三日の観光旅行が計画されていた。

その観光旅行としてオルデイスを出発した《ブラウヘルツオーク》をテロリストが占領したと声明が発表されたのだ。

それによりVII組の鉄道憲兵隊での《特別実習》は中断を余儀なくされるのだった。

28話 鉄道憲兵隊Ⅳ

「うわあ……」

ヘイムダル帝都駅。その屋根の上に伏せたエリオットは下を覗き見てあまりの高さに竦み上がる。

「ここから飛び移るのかフィー？ いささか高過ぎるのではないか？」

「他にちょうど良い場所はない……あつても鉄道憲兵隊がいるから」

「それにしたって列車の三倍くらいの高さがあるけど……本当にここから飛び移るの？」

目算で高さを計ってみたクリスは唸る。

駅の構造上、ホーム間の行き来は線路を跨ぐように造られている階段を行き来することになる。

なので建物の上に出てしまうと最低でも三階分の高さ。

それを今から飛び降りる。しかも走行中の列車に飛び乗るのだからエリオットの気後れも当然だった。

「怖気づいた？ なら今から戻れば」

端的なフィーの言葉にクリスは思わずため息を吐きそうになるのを堪える。

そんなことをすれば不機嫌なフィーは躊躇うことなくここで自分たちを置いていくだろう。

この場にはA班の中でリインだけがない。

憲兵隊にリインだけが協力を要請され、残ったA班は特別実習を中止して帝都で待機しているように指示された。

この観光列車乗っ取り事件で鉄道は全面的に運休してしまい、トリスタにも戻れない状況だった。

とりあえず、東部地区の憲兵隊詰所にいたB班と合流してサラに指示を仰ぐことになっているのだが、その命令を無視してクリス達は動いていた。

「ううん……やるよ」

素っ気ないフィーの言葉に真っ先に言葉を返したのは意外なことにエリオットだった。

本来なら命令無視を真っ先に尻込みする彼なのだが、突き動かすのは憲兵隊舎を追い出される直前に聞いた情報。

占拠された観光列車に楽団スタッフとして乗り込んでいた中にエリオットの姉がいたから。

エリオットがその事実には焦燥し、ならば自分たちで助け出そうとフィーが言い出したのがクリス達が屋上にいる理由だった。

「そ……ラウラとクリスはどうする？　このままリンのオマケだっと思われたままで良いの？」

「オマケはともかく私にできることがあるなら協力は吝かではない。もとよりこの剣は力無き者を守るためにあるのだから」

「僕も異論はないよ」

頷くクリスが思い浮かべるのは尊敬する兄の話。

兄はかつて空賊の飛行艇に潜入して、そのアジトを突き止めて攫われた民間人を華麗に救出してみせた。

その憧れに似た状況に彼が乗らないはずがない。

かくして、姉の安否に駆られるエリオット。対抗心を拗らせるフィー。義務と仲間意識を尊重するラウラ。そして冒険を求めるクリス。

彼らの無謀を諫めるブレーキ役はここにいない。

「ちようど来たけどクリス」

「ああ、行くよ」

仕切るフィーにクリスはリヴァルトを抜き、そして戦術オーブメントを構える。

クリスは《風》の導力魔法を魔剣と同調させ、導力魔法の域を超えた範囲で風を作り出す。

「オオオオオオオオッ！」

「ハアアアアアアッ！　洗翼陣っ！」

フィーは咆哮を上げて、黒い闘気をその身に纏う。

ラウラは呼気を解放し、白い洗をその身に纏う。

「ARCCUS 駆動——クロノドライブ」

エリオットは導力魔法を全員に掛ける。

「お前達、そこで何をしている!?!」

全ての準備が整い、蒼い列車が目前に迫った所で怒声が響く。

声は上から、空を見上げればいつの間にか飛行艇が滞空し、その中から鉄道憲兵隊の男がクリス達に銃を向けようとしていた。

「無視して走る」

フィーは短く言って駆け出した。

それにラウラがエリオットを横抱きにし、クリスが風を解放して後
に続く。

「いっけえっ!」

颯風を背中に受け、三つの影は駅の屋上を全力で駆け抜け、そのま
まの勢いで宙へと飛び出した。

「なっ——」

一部始終を飛行艇から見ていた憲兵隊——ミハイルは操縦者と共
に絶句した。

駅舎の屋根の上で怪しい人物がいたと思い、声を掛けたらあろうこ
とか駆け出した。

こちらの声を無視して走り出したところで、問答無用で銃撃を浴び
せようとしたが彼らが着る制服がトールズ士官学院のものだと気付
いて躊躇ってしまった一瞬での出来事だった。

「ちっ……クレア大尉と回線を繋げ!」

「は、はいっ!」

「ちっ……リイン・シユバルツァーといい、何なんだ今年の士官学生た
ちは……」

通信が繋がるまでの短い時間でミハイルは思わず愚痴を漏らすの
だった。

・
*

「あ……あはは……やればできるものなんだね」

蒼一色の列車の屋根の上でフィーに支えられたクリスは笑う。

駅舎の屋根から身を投げ出した瞬間に正気に返って馬鹿なことをしていると振り返ったが、後戻りはできず、怯みはしたがそれでもなんとか無事に飛び移ることができた奇蹟に興奮する。

「ま、これくらいは出来て当然。それよりもここからが本番。そつちは問題ない？」

ブレーキ代わりに屋根に突き刺した銃剣を抜いてフィーは落ち着いた様子でラウラへと声を掛ける。

「ああ、こちらは大丈夫だ」

「はああ……心臓がまだバクバクしてる」

抱えていたエリオットを降ろし、ラウラは代わりに背負っていた大剣を腰に付け直す。

「それでこれからどうする？」

「まずは人質の安全確保。そのためには一番後ろの車両から制圧していくべきだからとりあえず移動かな」

フィーを暫定のリーダーとして一同は方針を素早く決めて移動を始める。

風に煽られないように身を屈め、慎重に後部車両へと進んでいく。

「止まって」

不意に先頭を歩いていたフィーがその足を止めた。

「どうしたフィー……む……む……」

フィーの肩越しにラウラは前を見て、思わず顔をしかめた。

そこには異様な風貌の男が列車が巻き起こす風の中を物ともせず佇んでいた。

長く白い髪。

顔を覆い隠す鬼の面。

黒い軍服に白いマント。そして異様に長い太刀。

一言で説明するならば《真・魔界皇子》がそこにいた。

「その風貌はB班がバリアハートで戦ったという《剣鬼》……まさかこの列車を占領したのは貴様だったとは」

侵入を察知されたのか、伝え聞いたラインを超える実力の持ち主な

らあり得るとラウラは戦慄と共に大剣を構える。

「トールズ士官学院、Ⅶ組の片割れか……こんな所に何をしに来た？」
仮面越しに睨まれる気配に一同は心臓を掴まれたような威圧感に息を呑む。

「悪いことは言わん。今すぐこの列車から降りろ」

一方的な物言い。

太刀を抜いて問答無用で襲い掛かれれば、瞬く間にフィーたちを排除できるというのに《剣鬼》はわざわざ言葉で警告する。

「そ……そうはいかない」

その息苦しい威圧感を跳ね除けて真つ先に言葉を返したのは意外なことにエリオットだった。

エリオットは負けじと《剣鬼》を睨み付け、魔導杖を握り締める。

「こ、この列車にはぼ……僕の姉さんが乗っているんだ。お、お前たちの好きにはさせない」

膝を震わせながら言い切ったエリオットの姿に他の三人は萎えそうになった気持ち奮い立たせる。

「エリオットの言う通りだ。テロリスト風情の言葉で退くなら無茶を
して乗り込んでいない」

「リンよりも強いんだよね？ だったらここで乗り越える」

「貴方を倒すことは難しいかもしれない。でも、この列車から排除する
だけなら話は別だ」

それぞれ武器を構えて並び立つ。

目の前の男は確かに強いかもしれない。しかしそれでも列車から
突き飛ばせばそれだけで戦線離脱させられる。

そこに一縷の望みを掛けて言い切るが、強風に煽られないように身
を低くして武器を構える様と言葉のギャップは滑稽さを醸し出して
いる。

そして、的外れなことを言っている一同に《剣鬼》は呆れたと言わ
んばかりに肩を竦める。

「状況の把握が出来ていないようだな……」

もしも俺がお前たちの言うこの列車を占拠した一味だとしたら、お

前達は見つかった時点で負けているというのに」

「え……う？」

「俺がお前達を発見したと中に伝え、お前の姉が人質にされることを考えなかったのか？」

「あ……」

「お前達がすべきだったことは問答無用で俺に襲い掛かり排除することだった。だからこうなる」

「っ——!？」

いつの間にか抜き、喉元に突きつけられた大太刀にエリオットは息を呑む。

「遅い……反応も判断も何もかも遅すぎる。そんな体たらくでテロリスト達を退けられると本気で思っていたのか？」

「それは……」

「気持ちだけで貴様に何が守れると？ 軍人でもない貴様らに何ができろっ？」

「それは……」

《剣鬼》の言葉にエリオットは思わず目を逸らす。

ここまで姉を助けたいという一心で仲間の手を借りて来たが、ここから先は直接テロリストとの戦闘になる。

争いごとは嫌いで音楽の道を進みたかったはずなのに、それと矛盾する行動をしていたことに気が付いた。

「分かったら。さっさとこの列車から降りることだ」

「………僕達を捕まえないのか？」

突きつけた太刀を下げて鞘に納めた《剣鬼》にクリスは違和感を覚えながら尋ねる。

「貴様たちが勝手に誤解したようだが、俺はこの列車を占拠したテロリストとは無関係だ」

「じゃあ何故こんなところに？」

「逆に言わせてもらおうが怪しいという意味では貴様達も俺と変わらな
いぞ」

《剣鬼》の言葉に一同は言葉を詰まらせる。

冷静に考えればテロリストも走行中の列車の屋根の上を見回りさせるとは思えない。

ならば、自分達と同じ侵入者。

クリスマス達が《剣鬼》とここで戦う理由はない。

「それじゃあもしかして貴方も人質の救出に？」

ユミルで会った執行者たちのことを思い出しながらクリスマスは尋ねる。

どの執行者も個性的で決して人助けを率先して行う慈善を振り撒く者たちではない。

だが、同時に彼らは気まぐれでもあり、条件が合えばそれこそ誰が相手でも、仲間でも殺し合える者たちばかりだった。

そんな執行者の一人がこの場にいる理由を考える。

列車を占拠したのが《身喰らう蛇》ではないのなら、彼がわざわざ乗り込んできた理由は推測すれば目的は同じなのではないかと考える。

「生憎だが俺はそんなことをするために乗り込んだわけではない」

そう言うと《剣鬼》はクリスマス達の横をすり抜けて歩き出した。

「今は最後尾の資材車両にはテロリストは一人しかいない。せいぜいうまくやることだな」

悠然とした足取りで前の車両へと歩いて行く《剣鬼》をクリスマス達はただ見送ることしかできなかった。

「あれが先月B班が戦わされたという《剣鬼》か……確かにリインを超える使い手というのも納得だな」

「そだね……だけど……」

「どうしたフィー？」

「………何でもない。ところで《剣鬼》はああ言っていたけど、どうする？」

何故か震えていた腕を抑えてフィーは改めて一同にこのまま進むか尋ねる。

特に矛盾を指摘されたエリオットは姉を助けると息巻いていたのが嘘だったかのように消沈している。

「どうするって……ここまで来て何も成果を出せずに戻ったら……怒られるだけでは済まないよね？」

「う……うむ……そうだな」

「多少の問題は結果を出せばうやむやにできる。猟兵はそうだから」
そう言つてファイー達はエリオットの様子を伺い見る。

「……大丈夫。僕も行くよ」

深呼吸して顔を上げたエリオットは迷いを抱えながらも進むことを決めた。

「無理しなくても、ここで待つていてくれてもいいのに」

「そういうわけにはいかないよ。姉さんを助けたいって言い出したのは僕だし、そのためのクリスとファイーが案を出してくれたんだから」
明らかに強がつているが、それ以上ファイー達は何も言わずにエリオットの意志を尊重し、当初の目的通り後部車両へと移動を再開する。

「ん……どうしたファイー？」

ラウラは足を止めて背後を見ているファイーに首を傾げる。

「………何でもない？」

《剣鬼》の背を見て、震える腕を押さえつけてファイーは歩き出した。

・*
・*

「まさか叔父様がこんな手を使うなんて」

列車の中とは思えない豪華な内装の室内。

本来なら食事や楽団を招いた小さなコンサートなどを楽しむ憩いの場だったのだが、そこは今この列車に乗っている貴族と従業員が集められていた。

その中でこの催しのためにアストライア女学院から呼び出され、カイエン公爵の名代として賓客を持って成すように一方的に指示されたミルデイーヌは小さくため息を吐く。

「くそ……鉄道憲兵隊は何をしているっ！」

ミルデイーヌから離れた離れた位置で悪態を吐きながら何杯目かのワイ

ンを叩るバラッド侯爵。

彼の他にラマール州を代表する貴族が数名、家族ぐるみで招待された大陸横断鉄道のツアー。

どの貴族もそれぞれ大なり小なりカイエン公爵に含むところがある者達ばかり。

「それは私もですね……」

諦めたようにミルデイーヌは呟く。

おそらくこれはカイエン公爵がテロリストと共謀した策。

次期カイエン公爵の座を密かに狙っているバラッド侯爵。

ラマール州の貴族でありながら革新派の専横を領内で許している伯爵。

それに切った所で痛痒にならない男爵。

そして自分。

彼らを人質にした帝国政府への犯行声明など建前でしかない。

「本当の目的は双龍橋の爆破でしょうね」

自分たちをこの車両に軟禁してから、一度後部車両から物々しい荷物が前方車両に運ばれて行った。

中身は見えないが爆発物だと察してしまった。

列車の奪還の失敗による鉄道憲兵隊の失態を作り出すこと。

双龍橋を破壊してガレリア要塞を孤立化させ、今後の内戦への一手とすること。

カイエン公はこの事件で自分の領の貴族や姪を奪われた被害者として、鉄道憲兵隊から鉄血宰相の権威を少しでも削ぐつもりなのだろう。

「はあ……」

ミルデイーヌは諦めのため息を吐く。

いくら未来を見通す思考力があつたとしても、自分は所詮何の力もない小娘なのだと思います。

叔父の呼び出しに諍えず、お披露目もまだしていないというのに名代として持て成す役を押し付けられたことがその最たるものだろう。

「何だ？」

諦観した思考に没頭していたミルデー又はその声に振り返る。

後部車両に続くドアの向こうから怒鳴り声と銃声が一瞬だけ響き、静かになるとゆっくりとドアが開く。

「クリア……この車両にはテロリストはいないみたい」

銃身の下に刃をつけた銃を構えながら入って来たのは赤いツールズ士官学院の制服を纏った少女だった。

彼女に続いて三人が入って来る。

「姉さんっ！」

その中の一人が車両の中を見回し、楽団のスタッフに向かって声を上げて駆け出した。

「エリオット……どうしてここに？」

驚きながらも姉と思われる紅毛の女性が駆け寄って来た少年と抱擁を交わす。

「人質はここにるので全員？」

それを尻目に銀髪の女の子は油断なく前方のドアを警戒しながら従業員に尋ねる。

「え、ええ……後は運転手が二人いるが、それ以外は全員ここにいます」
「そう……」

「君たちは——」

「ふん、やっと来たか」

従業員の言葉を遮ってバラッド侯爵が酒に酔った顔で椅子から立ち上がり、金髪の少年に歩み寄る。

「さあ、早くここから出してもらおうか」

「申し訳ありません。僕達は正規の救出部隊ではありません。ですが安心してください。このままテロリストを制圧するので貴方達はここで——」

「ふざけるな！ 私を誰だと思っている!? 私はカイエン公爵に次ぐバラッド侯爵家の当主だぞ！」

バラッド侯爵と他の貴族や従業員に向けた安心させる言葉は一喝されて遮られる。

身分をひけらかし、今すぐこの列車から降ろせと騒ぎ立てるバラッ

ド侯爵に金髪の少年は困った顔をする。

「そ、そうだこんなところにいつまでもいられない。早く降ろしてくれ」

「ミラなら後でいくらでも出してやるだから——」

「あ……」

まずいとミルディーヌは察するが緊張が決壊してしまった他の貴族達もバラッド侯爵の言葉に同調し、現れた四人に縋りつく。

「何をしている騒がしいぞっ！ 静かにしろ！」

当然、騒ぎ出せば前方の車両からそれを聞きつけたテロリストが怒声を上げてやってくる。

「ひいっ！」

威嚇するように天井に向けて発砲した音に驚き、バラッド侯爵は金髪の少年を盾にするようにその背に隠れる。

「くっ——邪魔っ！」

「しまった」

「エリオット」

「姉さん放して！ 僕が——」

我先に逃げ、少しでも暴力から遠ざかろうとする貴族達の波に飲まれて二人の少女が動きを鈍らせる。

「何だ貴様らどこから入り込んだ！」

剣を持つ少年にテロリストは素早く銃口を向ける。

背中をバラッド侯爵に抑えられた少年は剣を構えることもできずに無防備な姿を銃口の前に晒すことになる。

「くっ——」

「ダメッ！」

咄嗟に、彼の正体を知っているミルディーヌはその銃口の前に割って入る。

「ミュゼツ!?!」

そこで金髪の少年——クリスは初めて彼女の存在に気付くがバラッド侯爵に張り付かれてろくな身動きなどできなかった。

引き金が引かれ、凶弾が発射される。

その様をミルディーヌは何とも言えない感慨で見る。

——お父様、お母様。今私もそちらに向かいます……

ゆっくりと見える凶弾にミルディーヌは覚悟を決めて目を瞑る。

しかし、胸を穿つ衝撃はいつまで経っても訪れなかった。

「やはりこうなつたか」

代わりに耳元で囁かれた言葉にミルディーヌは閉じた目を開く。

「怪我はないなレディ？」

「え……あ……」

間近の鬼の面に驚くよりも、身を抱き寄せた自分を庇う様にしている状況に顔を真っ赤にして、口を開いて閉じてと意味もなく繰り返す。

「あ……あわわ……な、なんで——」

異能じみた思考が彼の正体を教えてくれるが、それが余計にミルディーヌの思考に熱を宿す。

「お静かに、もう大丈夫だから落ち着いて」

名を口走ろうとしたミルディーヌの唇に指を押し当て、耳元で囁かれた言葉にミルディーヌは目を回す。

その能力からもう子供のような夢想をすることを忘れてしまっていたとしても、ミルディーヌはまだ年頃の娘でしかない。

そんな彼女が乙女なら一度は夢想する騎士に守られるお姫様の状況を体験してしまえば、平静でいられるはずがなかった。

腰砕けになりその場にへたり込みそうになるミルディーヌを小脇に抱え、《剣鬼》はテロリストに向き直る。

「な、何だお前は！ 変な格好して鉄道憲兵隊なのか？」

一見すれば軍服にも見える《剣鬼》の姿にテロリストは困惑する。「そんなこと貴様が知る必要はない」

素っ気ない《剣鬼》の言葉にテロリストは眦を上げるが、冷静に銃を構える。

「武器を捨てろ。さもなければ撃つぞ」

「好きにしろ」

舐めているとも取れる発言に激昂するよりも早く、テロリストは引

き金を引いた。

少女を右腕に抱え、腰に佩いているのは両手を使わなければ抜けそうにない大太刀。

そして彼我の距離は十アージュもない。

撃てば確実に当たると誰もが確信を持つであろう状況に、引き金を引いたテロリストは仮装した目の前の馬鹿が銃弾によって撃ち殺され倒れ伏す姿を目撃する——はずだった。

「どうした？ 俺を殺すのではないのか？」

悠然と《剣鬼》はミルディーンを抱えたままテロリストに向かって歩き出す。

「な、何をしたお前っ！」

もう一度導力銃を撃つが、その瞬間《剣鬼》の左腕が霞み銃弾が弾かれる。

「な……何でスプーンなんかで導力銃を防げるんだよ！」

銃を撃つ度に《剣鬼》が持つ武器とは言えない食器で銃弾が弾かれていることにテロリストは狼狽える。

「それはお前が下手糞だからだ」

そんなテロリストに《剣鬼》はそのスプーンを無造作に放り投げる。

「ひっ——」

それに過剰に反応したテロリストは慌ててそれを躲し、次の瞬間《剣鬼》が拾ったワインボトルで頭を打ちつけられた。

「がっ——」

「ふん……」

ガラスが砕け頭からワインを被り気絶したテロリストを一瞥し、《剣鬼》は振り返る。

「き、貴様なんてことをしてくれた！」

《剣鬼》が何かを言う前にバラッド侯爵が憤慨した声を発した。

「何だ？」

「貴様が今ぶちまけたワインは20万ミラもするヴァインテージワインだったんだぞ。それを——」

「くだらない」

文句を言うバラッド侯爵に《剣鬼》は鬱陶しそうに仮面越しに睨み付ける。

「グラン＝シャリネの半分にも満たない安物で騒ぐな。程度が知れるぞ帝国貴族」

「ぐっ……」

引き合いに出されたりレベル産のそれも厳選された高級ワインの値段を出されバラッド侯爵は押し黙る。

言い換えれば20万ミラなどはした金だと言い切る相手に対して、それを責めれば貴族としての器が知られるようなものと感じて口を噤むしかなかった。

《剣鬼》は押し黙るバラッド侯爵から士官学院生達に向き直り――

「お前たちは人質になりに来たのか？」

「くっ……」

呆れを含まれた言葉に一同は顔をしかめる。しかし何も言い返せなかった。

クリスマスだけではなく、テロリストが現れて取り乱した貴族たちに纏わりつかれて動けなかったのはフィーとラウラも同じ。

エリオットに関しては逆に庇われるように姉に抱き締められていた始末。

普通に戦えば勝てた相手だとしても、足手まといがいる戦場を楽観視し過ぎていただけに《剣鬼》の指摘は正鵠を射ていた。

「余計な仕事を増やして……」

溜息を吐き《剣鬼》はクリスマスにミルディーヌを押し付ける。

「お前たちはここで待っている。気は乗らないがすぐに済ませる」
踵を返す《剣鬼》をクリスマス達は呼び止めることはできなかった。

人質に足を引っ張られたのは醜態だが、それを予想していなかったクリスマス達の落ち度でもある。

「ま……待て、何者か知らんがお前を雇ってやる」

そんな風に苦汁を噛み締めているクリスマス達を他所にバラッド侯が懲りずにそんなことを言い出した。

「今すぐこの列車から私を降ろせ！ そうすれば褒美をくれてやる」

ぞ」

明らかに普通ではない彼に物怖じせずになんかことを言えるバラッド侯にある種の尊敬を感じながら、クリスは諫める言葉を掛ける。

「バラッド侯爵、彼は——」

「うるさいこの役立たずが!」

罵りの言葉にクリスは閉口する。

その物言いに苛立ちを感じるが、同時に何も言い返せない。

もしも《剣鬼》が割って入ってくれなかったらミルデーヌは凶弾に撃たれ、それが更なる混乱を呼び収拾がつかなくなっていたと想像すれば確かに自分たちは場をかき乱しに來ただけの役立たずだった。………良いだろう。この走り続けている列車からお前達を降ろしてやる」

唇を噛み締め俯くクリス達に《剣鬼》はもう一度ため息を吐き、バラッド侯爵の要請を受け入れる。

「あ……あの私たちは——」

そして恐る恐る遅れて他の貴族が機嫌を窺う様に口を挟む。

「ふん。お前達は——」

「安心しろ。まとめてどうにかしてやる……」

だが、今役立たずと罵った子供たちに感謝しておくことだ。そういったらがいなければ俺も手を出すつもりはなかったからな」

「おい。それはどういう意味だ!?!」

バラッド侯が聞き返すが《剣鬼》は無言で前の車両へのドアを開けてそのまま先に進む。

「お……おいっ……」

その直後、がくんと列車の速度が落ちた。

「何をした!?!」

慌ててクリスが《剣鬼》を追い駆けてドアを開け放つと、そこには次の車両はなかった。

「なっ!?!」

遠ざかっていく前方車両。

「まじか斬ったというのか!？」

分厚く見るからに頑丈な造りの連結部から、周囲の外装に至るまで一太刀で斬り裂いた通路の切り口にラウラは戦慄する。

自分がやれば斬るではなく破壊してしまう。

いくら斬ることに優れた太刀だったとしてここまで鋭利な切り口など見たこともない。

「お前たちはそいつらの面倒を見て、大人しく帰るんだな」

《剣鬼》はそう言って踵を返す。

「くっ……」

助走を付けて跳べば向こう側に飛び移ることはできるかもしれない。

しかし、それは身軽なクリスとフィーの二人だけ。

テロリストの本隊がいるだろう敵地に乗り込むには無謀だろう。

「あ、あのー」

向こう側の扉が閉まり切る前にミルディーヌが声を上げる。

「テロリストの本当の目的はおそらく双龍橋を破壊することです。こちらの車両に爆弾が運び込まれているのを見ました……」

だから……その……御気を付けてください」

一気に捲し立てるが、《剣鬼》は何も応えずにドアを閉めた。

改めて遠ざかっている列車を見送るⅦ組一同はそれぞれ己の不甲斐なさに拳を握り締めるのだった。

・*

その後——切り離された列車が止まり、残っていた制圧済みのテロリストたちをクリス達は改めて拘束し直していたところでクレア達が到着した。

《剣鬼》の言葉のおかげか。それとも鉄道憲兵隊を揶揄するためかバラッド侯爵たちは走行中の列車に飛び乗ってまで救出に来たクリス達を褒め称えた。

その場ではクレア達も解放された人質や捕らえたテロリスト達の事後処理を優先する。

《剣鬼》が残った前方車両に関しても双龍橋に辿り着くことなく制圧されたらしい。

もつとも停車した列車の中には、殴り倒されたテロリスト達だけで肝心の《剣鬼》の姿は何処にも確認できなかつたらしい。

そして――

「貴様ら……これは明白な命令違反だぞ！」

帝都の鉄道憲兵隊の詰め所にて独断専行で救出作戦を行ったA班はリインを含めて正座させられミハイル大尉の雷が落ちた。

そのミハイルの言葉にサラが同意するように頷く。

「確かに私は以前、せいぜい悩んで何をするべきか自分達自身で考えてみなさいって言ったわ……」

でもそれはあくまで自分たちの手に負える範囲での話よ……

溺れている人を助けるには正しい手順を知っておかないと、その要救助者によって助けに行つた人が溺れさせられたなんて事例があるくらいなの……

あんた達が要人救出なんて十年早い！」

「はい……」

「身に沁みました」

サラの真剣な怒りにエリオットとラウラはいっそう肩身を小さくして頭を下げる。

「できるって扇動したのはわたし。だから責任はわたしが――」

「フイー、最終的にみんなで決めたことだから全員の責任だよ」

「だがリインは鉄道憲兵隊の協力をしていて別行動を取っていたのだから――」

「連帯責任です。例え関わっていないなかったとしても貴方達の行動の責任は班全体に、ひいてはサラさんや学院長が取ることであってありえんです。それを良く噛み締めてください」

ラウラがせめて関係ないリインを逃がそうとするが、微笑みを浮かべるクレアの言葉に切り捨てられる。

三人の中で一番穏やかな顔をしているが、一番威圧感を醸し出しているのはクレアでもある。

「すまぬリイン。巻き込んでしまった」

また迷惑を掛けてしまったことにラウラは嘆くように謝る。

「やってしまったことは仕方がないさ。それにエリオットがお姉さんを助けたらいいという気持ちは分かるつもりだ……」

結果的には人質もみんなも大した怪我がなかったんだから怒られるくらいで済むならそれでいいさ」

「つてリインは言っているけど、今回は運が良かっただけで、次が無事である保障はないのよ」

「ええ、今回はたまたま《結社》の《剣鬼》がそこにおいて気まぐれを起こしてくれたおかげでどうにかなったようなものですから」

「それにしても《身喰らう蛇》の《剣鬼》が何故そこにいたかも問題だ」腕を組んで唸るミハイルだが、その両隣にいるサラとクレアはそれぞれ目を明後日の方角へ逸らす。

「それは後で調べるとしましょう。ともかく——」

「エーリオットオオオオツ!!」

その話題はいろいろとまずいとクレアが説教を切り上げようとしたところで、突然ドアが開き感極まった声が室内に揺るがした。

「へ……? 父さん?」

突然現れたオーラフ・クレイグ中将、父にエリオットは目を丸くする。

呆然とするエリオットにオーラフは真っ直ぐ突き進み、正座したままのエリオットを上から覆い被さるように力一杯抱き締める。

「フィオナから聞いたぞ! 走行中の列車に飛び乗りテロリストに立ち向かったと!」

士官学院に入学して二ヶ月。男子三日会わざれば刮目して見よ、という言葉があるがまさかそこまで遅く成長してくれていたとは!

涙を呑んでお前を士官学院に入れたことは間違いではなかった!

エリオットの成長にオーラフは感激して叫び、抱き締める力をさらに強くする。

「ちよ、ちよつと父さん……」

「クレイグ中將。そのような物言いは困ります。彼はまだ学生の身とはいえ重度の命令違反を犯しているんです……」

「正規の軍人ならば軍法会議を行って然るべきです」

「まあ、そう言うな」

ミハイルに肩を叩かれて我に返ったオーラフはエリオットを解放して咳払いを一つ。

中將としての風格を取り繕ってミハイル達に向き直る。

「確かに行動そのものは決して褒められたものではないが、結果として誰も犠牲にならずに事件を収めた切っ掛けになったことには変わりあるまい？」

それとも君たちが行おうとしていた作戦では絶対に人質全員を無事に取り戻し、かつテロリストの本来の目的だったとされる双龍橋の破壊を防げたというのかな？」

「それは……」

オーラフの指摘にミハイルは口ごもる。

「怒ることも大切だが、走行中の列車に飛び乗るといふ並外れた勇気と行動力をまずは賞賛しようじゃないか……」

なかなかできることではあるまい、できることならばその時のエリオットの雄姿をこの目に焼き付けておきたかった」

中將の顔の中に父親としての顔が混ざることにより一同は毒気を抜かれる。

「フィオナも褒めていた。エリオット、やはりお前には軍人になる才能がある」

エリオットを立たせて、オーラフは肩を力強く叩いて激励する。

「才能……？」

しかし、その言葉にエリオットは言いようのない黒い感情を感じずにはいられなかった。

喜んでいる父の考えが分からない。

確かにエリオット達が動いたから《剣鬼》が見兼ねて手を貸してくれたが、それだけだ。

列車から姉のいるところまで確かにテロリストと戦って退けた。

しかし、それにしても列車と言う狭い室内でエリオットにできたのは他の三人を補助導力魔法で援護していただけに過ぎない。

そもそも列車に飛び乗るのもラウラに抱えられて運ばれただけでエリオット自身の力ではない。

「胸を張れエリオット。お前はもう一人前の男だ」

何が一人前なのだろうか。

姉を助けたいという我儘でクラスメイトを振り回し、そのクラスメイトにおんぶにだっこしてもらった挙句、自分の行動が姉を危険に晒し多くの人に迷惑を掛けてしまった。

誰よりも責任を感じ、A班の——否、VII組の中で一番実力も意志もないのに何を誇れと言うのだろうか。

「VII組の諸君、これからもエリオットとは仲良くしてくれたまえ……」

まだまだ筋肉隆々には程遠く、頼りなく見えるかもしれないが必ずや君たちと肩を並べるに相応しい漢に成長——」

「いい加減にしてよ父さんっ!!」

先程のオーラフの感激の叫びを上回る怒声が響き渡る。

「……………え……………」

生まれてこの方、そんな風に愛しい息子に怒鳴られたことのないオーラフは何を言われたか分からず固まる。

「何が才能だ……何が軍人になれた……」

「エ……………エリオット……………」

戸惑うオーラフをエリオットは睨み付け叫ぶ。

「父さんなんてっ——大っきらいだっ!!」

言い放つと同時にエリオットは憲兵隊の詰め所を飛び出した。

あまりに唐突な出来事に呆然と固まっていたオーラフは糸が切れたように膝から崩れ落ちるのだった。

「エリオットに大嫌いと言われた……」

がつくりと項垂れるオーラフの姿には、中將としての威厳は欠片も存在していなかった。

29話 ミステイのお悩み相談

六月。

若葉の季節が終わりを迎えたトリスタでは入学で浮かれていた学生たちもこの時期を境に緊張感を持ち始める。

六月の中旬。

おおよそ二週間後に迫った《中間試験》。

それを控えた者たちの反応は様々だった。

まだ二週間ある、と気を楽に身構えている者。

もうすでに戦いは始まっているのだ、と勉強に勤しむ者。

特別な対策など必要ない、と普段と同じようにテストまで過ごすことを決めている者。

そんな一種のトリスタの風物詩となっている光景を他所に、喫茶店《キルシエ》では怪しげな邂逅が行われていた。

「ふふ……それで話って何かしら？」

雨が降る窓際の席でリインは妖艶な雰囲気を漂わせる女性と相席していた。

「相談だったらできればお便りで出して欲しいんだけど」

「別にそれでも構いませんが、ラジオ番組の中でちゃんと答えてくれるんですか？」

「さあ、それは質問次第かしら？」

「なら無理ですよ。話は貴女の妹のことですから」

「ああ、リイン君が事故物件って言ったあの子の事ね」

「うぐっ……」

かつて漏らした言葉を持ち出されてリインは呻く。

しかし、それをミステイは弄る素振りを見せず、むしろ困ったと言わんばかりに頬に手を当てる。

「でもあの子の学生生活を見ると、困ったことに否定できないのよね」

「そうなんですか？ 委員長は確かに魔女の力を一度は見せていまし

たけど、普段はちゃんと隠していると思いますが」

「それがそうでもないのよ」

そう言っつてミステイは厚めの封筒をテーブルの上に置いた。

リインは首を傾げながらその中身を検める。

中に入っていたのは写真だった。

明らかに盗撮と分かる写真にはエマとアリサが写っていた。

「一枚目は貴方達が改めて旧校舎に挑戦した時の写真よ」

それはエマとアリサが向き合っている写真だった。

しかし、アリサの方はどこか呆けた様子で視線を宙に彷徨わせている。

「貴方のことを不信に思っつて、下調べもしないで多少関係がありそうな彼女から情報を得ようと暗示をかけていろいろ聞き出したみたい」
「それは……」

「二枚目は《鋼の聖女》が現れて半ベそをこっさりかいている写真ね」
「……これ俺が見ても良い写真なんですか？」

まだまだあるエマの痴態が写されていそうな写真の束に、リインは一旦見る手を止める。

「とういか良いんですか？ 仮にもお姉さんなのに」

「あらか知らないのリイン君？ 姉と言うのは妹の恥ずかしい弱味を握るために早く生まれ来るのよ」

「そんなわけないでしょ」

意地悪な顔をするミステイにリインはため息を吐く。

「その写真は全部リイン君に上げるわ」

「いりません。こんなものを持つていたらなんて言われるか」

明らかに盗撮した写真。

それをリインが持つていればあらぬ疑いを掛けられる未来が容易に想像できる。

もつとも、どちらかといえばリインがエマをストーリーカーしている証拠ではなく、エマがリインをストーリーカーしている証拠だったりするのだが。

「エマには何も伝えていないんですか？」

「どうかしら？」

魔女の方針は何も聞いてないのよね。エマは毎朝泣きそうな顔でポストを確認しているようだけど……

エマに連絡することを忘れていた言い訳を考えていて、返事を出せないのかもしれないわね」

「それはないんじゃないですか？ 仮にも一族の長がそんなうっかりをするなんて」

「……そうね」

そういう人なのよ、という言葉を呑み込みミスティは別の可能性を上げる。

「もしかしたら、エマの自主性をこの期に鍛えるつもりなのかもしれないわね……」

トールズに潜入して、《灰》の導き手としての任を受けた以上、一から十まで長に指示を仰いでいるようでは導き手としては失格よ……

そう考えると、連絡をしないのはエマがどうするか自分で決めなさいって、いうことなのかもしれないわね」

「でも魔女の禁忌に関わることなんですよね？」

「私が言うのもなんだけど、その禁忌に拘って手遅れになるまで黙っていたら本末転倒よ……」

もしリイン君が正規の方法で旧校舎を攻略していったとしても、あの子の事だから最後まで騎神について何も言わずに試練が終わるのを静観していたんじゃないかしら？」

その様子を容易に想像できてしまいミスティは溜息を吐く。

「ならそれをエマに伝えればいいんじゃないですか？」

「そんなことをしたら意味がないでしょ？ あの子自身が気付かないといけないことなんだから。だいたい今の私は《結社の魔女》なのよ」

「だけど、日に日にエマの睨む視線が強くなっているんですけど」

最初は困惑するしかなかったが、バリアハートの実習を経てその理由を理解できたのだが、知った状況が状況だけにリイン側から歩み寄るのが難しかった。

「ごめんなさいね。奥手のくせに変なところで積極的な子だから。で

きれば見捨てないでもらえるかな？ 根はちゃんと良い子なのよ」

「それは分かっていますけど……エマまで《呪い》に侵されたりしませんよね？」

「例え魔女だったとしてもそれは保証できないわね。もしそうならちやつたらよろしくお願いね」

臆面もなく手を合わせてお願いして、丸投げして来るミスティにリインは半眼になって睨む。

「ミスティさんは手を貸してあげないんですか？」

「私が手を貸したらあの子が拗ねちゃうでしょ？」

優しいのだから厳しいのだから分らないスタンスに、リインはエマの苦労を察してため息を吐く。

「もちろんタダとは言わないわ。リイン君にはいろいろと苦労を掛けているから、報酬にこれを上げるわ」

そう言ってテーブルの上に出したのは一冊のアルバムだった。

「……………これは？」

猛烈な嫌な予感を感じながらリインは尋ねる。

「私の妹の選りすぐりの姿ばかりの写真集よ」

「いいません」

「あら残念」

クスクスと笑うミスティだが、どこまで本気なのか読み解こうとしても彼女の本心は分からない。

「冗談はともかく、それならこれはどうかしら？」

アルバムを引っ込めてミスティが次に出したのは二枚のチケットだった。

「これは…………？」

「今度帝都で公演するチケットよ。エマ以外の子を誘って一度観に来てくれると嬉しいわね」

「……………そういえば帝都でオペラ歌手をしていたんですね」

結社の使徒に人気絶頂のオペラ歌手。そしてラジオのパーソナリティと三足のわらじを履いていることを改めて思い出す。

何故秘密組織の一員なのにそんな目立つことをしているのか。

と疑問に感じるが、はぐらかされそうなのでやめる。

そもそも、女性の秘密は気になったからといって無闇に詮索するものではない、と教えられている。

「本当は知り合いに上げるつもりだったんだけど、興味ないって言われちゃったから遠慮しないで良いわよ」

「でも高いんじゃないですか」

「口止め料も兼ねていると思ってちょうだい。それに何だかんだ言ってもその時はちゃんと助けてくれるんでしょ？」

「それは……まあ同じクラスメイトですから」

リインの思考を読み取るようなミスティの言葉にリインは頷く。

「リイン君達の試験が終わった後の自由行動日の公演チケットだから、そこから辺も問題ないでしょ？」

周到にこちらの予定を把握しているミスティにリインは少し困った顔をする。

「何か予定があるの？」

「まだその日は未定なんですけど、明日の自由行動日はテスト前の最後の部活動ということで出かける予定だったんです……」

帝国各地にある精霊窟を巡ってゼムリアストーンを回収する。その成果次第で引き続き、探索しないとイケないですから」

一応、ゼムリアストーンがあればラッセル一家とシユミット博士によって騎神用の武器は作ってもらえる。

しかし、当のラッセル一家のトリスタに滞在する期間はトロイメライの運用が安定するまでと決まっている。

本人たちは《灰の騎神》を見て触って調査するまで帰るつもりはないのであまり気にする必要はないのかもしれないが、いつまでも凶面だけを引かせておくのはリインとしても心苦しくもある。

それに彼らが暴走しないように、そろそろ新しい餌が必要な頃合いだろう。

「あ……そう……」

そう説明されたミスティは呆れた眼差しを送ってため息を吐く。

「あそここの最深部に行くには魔女の封印を解かなければいけないんだ

けど」

「大丈夫です。一応ちゃんと対策も考えてありますから」

「でしようね」

導き手の存在を無視して武装デバイスを作ろうとしている起動者に呆れるべきなのか、怒るべきなのかミスティは悩む。

そしてミスティは改めてリインの顔をじつと見つめる。

——この子と《相克》なんて《彼》にできるのかしら？

決して自分が導いた起動者の実力を疑っているわけではない。

だが、何の力もないとはいえ《鋼の意志》をその身に宿しているリインが本格的に騎神と接触すれば何が起きるのか想像もできない。

《彼》には導いた代償として《疑似相克》を行ってもらうことは承諾させているが、騎神を得て敵なしと有頂天になっている彼では力不足なのではないかと考えてしまう。

「もう少し危機感を持って欲しいんだけどね……」

「ミスティさん？」

「何でもないわ」

安牌だと思っていた《灰》がとんだジョーカーになったことにミスティは嘆く。

《蒼》の起動者を導いたのは数年前。

確かに乗り回している時間は長いかもしれないが、騎神の性能を全開にした戦闘の経験は彼にはない。

むしろたった数回、しかも《影》にしか乗っていないというのにリインの方が騎神戦の戦闘経験は豊富かもしれない。

彼の目的と自分の目的が違うのだから無理を言っているのは分かるし、今は《彼ら》の計画が忙しいのも分かる。

だがこのままいけば《蒼》が《灰》に蹂躪される姿が容易に想像できてしまう。

「ねえ……リイン君……もしも——」

言いかけて、ミスティはその言葉を呑み込んだ。

リインが今一番《黄昏》に対抗する手段を持っているのかもしれない。

しかしだからと言って、ここでリインに乗り換えることはあまりに《彼》に不誠実だろう。

「もしも？」

「ううん……それよりも本当にエマのこと貰ってくれないかしら？」

「……何でそこに話を戻すんですか？」

「だってあの子は魔女の役目に真面目過ぎて融通が利かない子なのよ」

そう言ってみるが当然打算もある。

今はリインに乗り換えられなくても、エマがリインの恋人になれば巡り巡って自分も身内の判定を貰える可能性の目ができる。

敵に対してはきちんと一線を引いているが、身内に甘くなるリインならば自分の《幻焰計画》が失敗した後でも話を通し易いだろう。

それに彼ならば決してエマを不幸にはしないという信頼もある。

「きつと魔女の役目を優先して、折角の学院生活だって恋愛なんて二の次にして灰色に過ぐすに決まっているじゃない……」

それに小うるさいお目付け役もいるし、そうなると行き遅れるのはほぼ間違いないでしょ？

姉としては妹には幸せになって欲しいのよ。この気持ちはリイン君も理解できるでしょ？」

「それは分かりますけど」

妹がいる兄として、ミスティの言葉には頷かないわけにはいかない。

「きつきも言ったけど、エマは器量は良いし尽くす子よ……」

それに私が里を出てから八年。いろいろ大きくなっていくみたいだからきつとリイン君も満足できるわよ」

「ミスティさん、下世話過ぎますよ」

「でもあの子ってきつとこの手のことでは奥手だと思ふのよ……」

それにこのまま空回りが続けていたらどんどんリイン君に悪印象を抱かせるだけだから、ここは一つ姉として一肌脱いであげようと思ふの」

「本人が聞いたら余計なお世話だって言うと思いますよ」

極めて冷静にリインはエマの言葉を代弁する。

「身内鼻屑と自覚して言わせてもらうけど、エマは大陸一可愛いだよ。いったい何が不満なの？」

「いや。不満も何も、本人の——」

「それは聞き捨てなりませんね。ミスティ様」

リインの言葉を遮って、突然第三者が二人の会話に割り込んできた。

「ゼムリア大陸一かわいいのはアリサお嬢様一択です。異論は認めません」

につこりと笑顔を浮かべてミスティにそう言い切ったのはメイドだった。

「……………シャロンさん、どうしてここに？」

白い目を向けながらリインは尋ねる。

「お久しぶりですリイン様。実は学院に少し用がかりまして、その帰りに何やら見たことのある御二人が怪しげな取引をしていたので、つい聞き耳を立ててしまいました」

悪びれた様子もなくシャロンは答える。

「そうしたら何やら聞き逃せないことを話されていたようで、アリサお嬢様を差し置いて大陸一と称する愚かさを正すために口を挟んでしまいました」

「あら、ただお母さんに構って欲しくて家出中の小娘にうちのエマが劣ると？」

「ふふふ……………使命を大義名分に好き勝手やっている小娘の何処が器量が良いんですか？」

「分かっているいわね。そういうドジな部分もかわいらしいのよ……………癩癩持ちと比べたら遥かに常識的だと思うけど？」

「お嬢様のそれは癩癩ではなくツンデレと言うのです……………」

大好きな人たちに素直になれずについ強気に出してしまうこのいじらしさ。それが愛おしくて愛らしいのです……………」

「だいたい誰も気付いてないのを良いことに、自分の失態を隠しているのはドジの範囲では収まらないと思いますよ」

ミスティとシャロンは笑顔で言葉の応酬を繰り返す。

「言ってくれるじゃない。それじゃアリン君に決めてもらいましょうか?」

「ええ、構いません」

が、突然二人はその矛先をアリンに向ける。

「アリン君、エマの方がかわいいわよね?」

「アリン様、アリスお嬢様こそ、至高の存在ですよね?」

微笑みを浮かべているが自分の答え以外は認めない。そんなプレッシャーを掛け、答えにくい選択を迫る二人にアリンは息を吐く。

「二人とも間違っています」

しかし、アリンは二人からの圧力に屈さずにはつきりと否定した。

「何ですって……」

「アリン様、まさかお嬢様に魅力がないとも言うつもりですか?」

「そんなことはありません。エマもアリスも十分に魅力的な女性です

……

だけど!

世界で一番かわいいのはエリゼとアルティナ、ノイ。この三人の同点一位以外にありえません!」

「何を言い出すかと思えば……」

「ふ……愚かですね。アリン様……」

三人を至高と言うのなら貴方の愛は三分分していることに他なりません。そんな体たらくで私たちに異を唱えるなど笑止千万です」

「何とでも言えればいい。貴女達が何と言っても俺はこの答えを曲げたりはしません」

そんな答えを認めないと言わんばかりの凄みを利かせた二人の視線を真っ向からアリンは受け止め、睨み返す。

「良く言ったわアリン君。それなら貴方達にエマの可愛さを存分に教えて上げるわ」

「それは私の台詞ですミスティ様……ええ、貴方達にはお嬢様の素晴らしいさをその骨身に刻んで差し上げましょう」

「悪いけど、例え誰が相手でも譲る気はない」

こうして譲れない——しようもない戦いが始まるのだった。

30話 親

6月19日。

四日に渡る中間テストが終わったその日、全校生徒は校庭に集められた。

テストが終わった解放感に浸りたかった生徒達は何事かとざわめくが、彼の登場にさらに動揺が走る。

「何である人がここにいるんだよ!？」

「去年はこんなことなかったのに、いったいどうして?」

「やっぱりあいつのせいかな?」

生徒達の視線は戸惑い、VII組の列に向けられる。

「ふむ……言われているがどうなんだリイン?」

「まあ俺のせいと言われればそうなんだけど、理由はすぐに分かるよ」
ラウラの問いにリインが応えている間に、トールズ士官学院理事長にしてエレボニア帝国第一皇子であるオリヴァルトは設置された壇上にかかる。

「静粛につー!」

ヴァンダイク学院長の一喝によってざわめく生徒達は口を噤み、オリヴァルトの言葉に身構える。

「やあ、諸君。まずは四日間に渡る試験、お疲れ様」

気さくな言葉でオリヴァルトは生徒達の労を労う。

「まだ結果発表があるのだが、それを今指摘するのは無粋だろうね」

オリヴァルトの指摘に反応は様々だった。

自信がある者、現実に目を背けて嫌な顔をする者。

様々な表情にオリヴァルトは懐かしみながら続ける。

「さて、折角テストが終わったというのに、僕の長話で水を差すのも悪いから早速本題に入らせてもらおう」

そう言って改めてオリヴァルトは演説を始める。

「皆は知っていると思うが、私は貴族派と革新派の融和政策を行っている……」

今回はその政策の一つとしてここである催しを行わせてもらいたいと思う」

オリヴァルトが手を挙げると、それを合図に生徒達の背後の裏門が開き複数の導力トラックとそれに付き従う作業員が現れる。

導力車が停まると、彼らによって様々な荷物が荷台から降ろされる。

緑色の制服を着た作業員たちに遊撃士の紋章をつけた二人、それに加えて学院の教官たちや第一学生寮に勤めるメイド達、それにラツセル一家も協力して瞬く間に準備が整えられていく。

「僕はこう思うのだよ」

背後の動きに目を奪われていた意識を引き戻すようにオリヴァルトが話を演説を続ける。

「貴族派と革新派、つまりは貴族と平民が分かり合えないのは互いに触れ合う機会がないからだと……」

故にここに貴族と平民が接する機会を作らせてもらう」

貴族生徒はひたすらに困惑するが、平民生徒は導力トラックから降ろされる荷物を見てオリヴァルトの続く言葉に期待を膨らませる。

「ここに第一回ツールズ士官学院交流バーベキュー大会の開催を宣言するっ！」

そして今日は我が名、オリヴァルト・ライゼ・アルノールの名の下に無礼講とする。皆の者、存分に食べて飲んで、楽しむと良いっ！」
その宣言にテストを終えたばかりの生徒達は歓声を上げた。

・*

何故オリヴァルトがこのような催しを開いたかと言えば、切っ掛けはやはりリインだった。

一ヶ月前にクロスベルで起きた《D∴G教団事件》。

その解決に尽力して、後始末にも精力的に協力し、さらにはリインが受け取るはずだった報奨金は全てクロスベル復興資金に寄付された。

復興作業も落ち着き、先日クロスベルではその事件に尽力した者たちの表彰式が行われた。

マグダエル市長はリインを招待しなかったのだが、事件当時に学院を長期で休ませてしまったこともあり、返礼品を送るだけに留めた。

リイン本人はもちろん、大切な生徒を借りたことでトールズ士官学院にも御礼の品が贈られた。

学院に贈られたのは市長と理事長が協議した結果、オリヴァルトはクロスベルの特産品や貿易で得られる食料品を返礼の品として願い、今回の催しを企画した。

「ほら、バイト。きりきり働けっ！」

「くっ……偉そうに……」

「ふふんっ……実際に今はボクの方が偉いんだから。トリスタを経由してリベールに帰る運賃分、存分にこき使ってやるから……」

あ、ヨシユア。先にボク達は休憩しよ」

「ジヨ、ジヨゼット!？」

「ちよつと待ちなさいっ！」

オリヴァルトが雇ったのか、クロスベルの荷物を運んできた運送業者はそのままスタッフとして祭りに参加する。

生徒達と同年代のツインテールの髪の少女を働かせて、同じく同年代の黒髪の少年の腕に青い髪の少女が抱き着いたりしているが、それは余談である。

「おっしやあ肉だっ！」

最初は突然の催しに戸惑い、準備が整っていく様子を呆然と眺めている生徒達だったが、バンドナを頭に巻いた銀髪の二年生が漂い始めた匂いに歓声を上げて突撃する。

それを皮切りに他の生徒達も動き出す。

串が刺された食材など、自分達で焼けと言わんばかりに配り、校庭の各地で作られた竈へと籤で散らばされる。

それはリイン達VII組も例外ではなかった。

「……俺はエリオットと一緒に」

「うん。そうみたいだね」

VII組と分かれてリインとエリオットは割り振られた場所へと移動する。

「そういえばあれからお父さんとは話をしたのか？」

割り振られた班の場所に歩きながらリインはこれまで静観していた彼の状況を尋ねる。

「あ……うん……実はまだなんだ……」

何度か《ARCS》の通信があったんだけど試験勉強の邪魔をしないでって、突っぱねちゃって……

その試験も終わったから今夜にでもまた掛かって来るかもしれないけど」

「家出をしたことがある俺が言うのもなんだけど、ちゃんと親御さんとは話をした方が良さぞ」

「………良いよ。どうせあの人は僕の話なんて聞いてくれないんだから」

「エリオット」

「リイン……僕は……学院をやめようかと思っっているんだ」

エリオットはそれまで煮詰めていた考えを吐露する。

「それはどうして？」

「リインには言ったかな？　僕は本当は音楽院に進学したかったって」

「ああ、一応聞いているな」

「僕がツールズ士官学院に進学した理由は音楽院に入れなかった妥協案なんだ……」

VII組のこともただ流されるだけで参加を決めただけだし、みんなみたいにちゃんと目標があるわけじゃない」

「だからって学院をやめるのは気が早いんじゃないか？」

「……特別実習をやって分かったよ。僕はつくづく争いごとに向いていないって……」

このままじゃまたみんなの足を引っ張るだけだって、前の特別実習も僕の我儘が発端だったわけだし」

「でも列車を占拠していたテロリストとは戦っていたんだろ？」

「無我夢中だったただけだよ。剣鬼がいてくれなかったら僕達を含めて人質がどうなっていたか分からない……」

結局僕達がしたことは人質を危険にさらして、鉄道憲兵隊の作戦を邪魔しただけだったんだから」

後から聞いた話ではリインも列車に乗り込んでいたらしい。

鉄道憲兵隊がリインに頼んだのは偵察と潜入のみ、人質の解放は任務の範囲外だった。

いくらリインでも不特定多数の人間を無傷で助けるのは無理だと判断しての行動だったが、それを台無しにしたのは他でもないエリオット達の行動だった。

「確かに命が掛かった場面では失敗はまずい。だけど結果的にはみんな無事だったんだ……」

ならその時の失敗を反省して次に繋げることを考えるべきじゃないのか?」

「そうなんだけど……」

リインの指摘にエリオットは口ごもる。

彼の言う通り、あの失敗を糧にクリス達は前向きに論議を交わしている。

「学院に通うのだってタダじゃないんだ。軍人になる気がないのにもそのまま学院に通わせてもらっているのは不誠実だと思うんだ」

「それはそうかもしれないけど……」

エリオットの答えにリインは一定の理解を示す。

リインも事情があるとはいえ学院に通わせてもらっている身だ。

ノイや《黄昏》のことを差し支えない範囲で説明し、シユバルツァー家を今の段階では継ぐことはできないとテオには話した。

学費は七耀石を売った料金で賄うつもりだったが、学費は自分が払うとテオは譲らなかった。

その推しにリインは抗いきれずに学費は親に出してもらっている。

そのことに引け目を感じているのはリインも同じだった。

「だけどそう決めるのはやっぱり早いんじゃないか? それに進学させてもらったお父さんと話をしないで勝手にやめるっていうのも誠

「実じゃないだろ？」

「それは……だけど……」

エリオットはリインの言葉に唖る。

「良い機会だから、その辺りのことも教官たちや先輩に相談してみたらどうだ？」

リインは自分達の班の場所にいる小さな先輩の姿を見て促す。

自分では無理でも生徒会長である彼女ならエリオットの相談に良いアドバイスをしてくれるだろうと考える。

「テストお疲れ様、リイン君達」

「よう、後輩。お前もこの組か」

リインとエリオットを迎えたのはトワとクロウ。

他の生徒達もいるが、そちらには顔なじみはいない。

「お疲れ様です。トワ会長、それにクロウ先輩も」

「ありがとう。それより聞いたよ……」

このイベントの食材とかリイン君が提供してくれたんだって、ありがとう」

「いえ、クロスベルから学院への謝礼なので俺自身はあまり関係ないですよ」

「いやいや、そもそもお前がクロスベルに寄付したからなんだろう？」

「いったいいくら寄付したらこんな豪勢なイベントができるくらいの返礼品が贈られてくるんだよ」

謙遜するリインにクロウは呆れながら興味をミラに移す。

「細かい金額は聞いてませんが、グ——じゃなくて一千万ミラくらいになったそうですよ」

「一千万ミラ……だと……」

気軽に聞いたクロウは返って来た金額に絶句する。

「これが格差か、一千万ミラを軽く寄付するなんてこれだから貴族は……」

「そう言われても……懸賞金の権利をクロスベルに譲渡しただけだから俺自身は一ミラも触ってさえないんですけど……」

それよりトワ会長。実は相談があるんですけど」

「え……何かなの？」

「実は——」

リインはエリオットが学院をやめるかどうかで悩んでいることを説明する。

「そんなやつと中間試験が終わったばかりなのに」

「ま、気持ちは分かんなくてもないな」

表情を曇らせるトワに対してクロウはエリオットの悩みに肯定的な態度を示す。

「クロウ君……」

「別に不思議なことじゃないだろ？」

リインは別としてもⅦ組の連中はどいつもこいつも普通じゃねえんだ。ついて行けないって思うのは当然だろ」

「それは……そうかもしれないけど」

Ⅶ組の顔ぶれを思い出してトワは口ごもる。

四大名門の次男、帝都知事の息子、光の剣匠の娘、元猟兵、ラインフォルト社の令嬢。

「本当に学院をやめたいのエリオット君？」

「やめたいって言うか、どうすれば良いのか分からなくて」

軍人になれと言う父の思惑と、音楽の道を進みたいと考えていても将来どんな音楽家になりたいのかも分からない。

「ただどこそのまま卒業したら、父さんにまた無理矢理軍人にさせられるんじゃないかって思って」

「エリオットの親父ってクレイグ中将だよな？ 確かにそれくらいできる権力はあるし、Ⅶ組の中でなら一番軍人の適正があるのは確かだな」

「え……？」

クロウの思わぬ言葉にエリオットは首を傾げる。

「僕に軍人の適正がある……でもリイン達の方がずっとすごい軍人になれると思うけど」

「逆だ逆、こいつがⅦ組の中で一番軍人らしくねえって」

クロウは後ろ指でリインを差しながらエリオットの言葉を否定す

る。

「軍人に求められるのは突出した力じゃなくて規格化した兵士だ……
ラインじゃそこら辺の奴等と足並みを揃えることができねえし、四
大名門とかの坊ちゃんも帝都知事の息子だって人の命令を大人しく
聞くタマじゃない」

言われてみれば確かにユーススやマキアスが協調性が必要な軍人
には向かないだろう。

「だいたいお前の言い分だと、軍人はみんな争い事が大好きだつてこ
とだぞ。お前の親父は戦場が、血と硝煙が大好きな戦闘狂なのか？」
「っ——違うっ！」

咄嗟に怒鳴るようにエリオットは叫んでクロウの言葉を否定する。

「だろ？ お前に少しでも親父さんを誇る気持ちがあるなら、軍人に
なる理由はそれで十分じゃねえのか？」

それとも全く尊敬できない親父さんなのか？ とりあえず音楽に
進みたいっていう固定概念を取っ払って、本当に軍人になることが絶
対に嫌なのか一度よく考えてみたらどうだ？」

「……………」

クロウの言葉に啞然とエリオットは呆ける。

「クロウ君、あのクロウ君がこんなことを言えるなんて」

「ちやらんぼらん先輩かと思っっていました、ちゃんと考えていた
んですね」

そしてそんなクロウにトワは涙ぐみ、ラインは感心する。

「おいテメエら……」

せっかく良いことを言ったのに水を差しやがつてとクロウは毒づ
く。

「いえ……クロウ先輩の言う通りです」

そんな二人の反応を他所にエリオットはクロウの言葉を認める。

エリオットの悩みは第一に音楽への進路があることを前提にして
いた。

それが一番エリオットの好きなことなのだから当然だが、だからと
いって軍人である父を尊敬していないわけではない。

「ありがとうございます。クロウ先輩、今ならちゃんと父さんと話せると思います」

音楽の将来のこと、軍人への誤解。

蟠りが全て解けたわけではないが、それでも以前よりもちろん自分の意見を父に言えると感じたエリオットは――

「エーリオットオオオオッ!!」

「へ……………?」

校庭に響くその怒声にエリオットは固まった。

お祭り騒ぎの喧騒がその声でぴたりと納まり、校舎へと続く階段の上に仁王立ちしているオーラフ・クレイグ中將に注目が集まる。

「と、父さん……………」

どうしてここに彼がいるのか分からず、エリオットが言葉を漏らすとそれを聞き留めたのかオーラフは睥睨していた校庭からエリオットを見つけ出しぎろりと睨み付ける。

「っ――」

遠くから交わった視線にエリオットは身を竦ませる。

今まで見たことのないオーラフの形相はまさしく猛将と呼ばれるに相応しい覇気に満ちており、エリオットが初めて見る父の姿だった。

「あれは……………」

愕然とするエリオットの横でリインはオーラフが漂わせる黒い濺みに目を細める。

教官生徒たちの視線を意に介さず、オーラフは躊躇することなく校庭に踏み入って来る。

一直線にエリオットを目指す彼の前には自然と生徒達が道を開け、その道を真っ直ぐと突き進みオーラフはエリオットの前に立つ。

「と……………父さん……………」

威圧するように自分を見下ろす父にエリオットは体を震わせる。

「テストは終わったようだな」

静かな、怒りを抑え込んでいるようにも聞こえる言葉にエリオットは首を竦ませながら頷く。

「そうか……」

エリオットの答えにオーラフは頷くと、その周囲を威圧する態度のまま言った。

「ならばすぐに荷物をまとめて来なさい」

「え……？」

「お前を帝都の士官学院への転校させることにした」

「そんなどうして!？」

一方的な言葉に気圧されていたエリオットは声を上げて抗議する。

「私が甘かった。せめてもの慰みと思つてトールズ士官学院を勧めたおいたが、お前にとつて未練を増やすだけのようだった……」

今はただ勉強に集中し、音楽は将来が決まってから存分に趣味としてやるが良い」

「なっ……」

オーラフの言葉にエリオットは絶句する。

「とにかく今は心身ともに強くなることだけを考えろ」

「待つて、待つて父さん！ 話を聞いてっ！」

「もう私はお前に一生恨まれる覚悟はできた。これがお前のためなんだ」

オーラフはエリオットの訴えに耳を貸さず、彼の手を――

「待つてください。クレイグ中将」

エリオットの腕を掴もうとしていたオーラフの手をリインが横から掴んで止めた。

「邪魔をするな。リイン・シュバルツァー」

「リイン……」

オーラフの視線の圧力がリインに移り、エリオットは息を吐きながら弱々しく彼の名を呼ぶ。

「今の中将は正気ではありません。一旦目を改めてから話し合いをするべきです」

「話し合いなど必要ない。これからの時代に必要なのは力だ……」

私の息子でありながら世界の情勢に目を向けようとしなない馬鹿者にはもうこうするしかないのだ」

「父さん……」

自分を罵るオーラフにエリオットは愕然とする。

「ですが中将、エリオットは軍人になることを望んでいません。なのにそれを強制するのはいかがなものかと思いますが」

「それをよりにもよって君が言うか？」

「え……？」

オーラフの意外な言葉にリインは虚を突かれる。

「母君を殺されたからこそ、君はそれ程までに強くなろうと決意して、至ったのではないのか？」

「……………え？」

思わずオーラフの腕を掴んでいた手から力が抜ける。

言われた言葉が理解できなかった。

リインにとって母と呼べるのはルシアただ一人。

しかし、彼女が育ての親であり、産みの親が別にいることはリインも知っているが、リインにはシュバルツアー家に引き取られる前の記憶はない。

「っ——」

不意に胸の痣が疼き、紅蓮の焰とリンに似た女性の顔が脳裏に浮かぶ。

「オーラフ中将……………貴方は…………」

それを聞くことにリインは思わず尋ねそうになるが、同時に《あの子》の最後の瞬間を思い出し、動悸が激しくなり呼吸がうまくできなくなる。

「リ、リイン君っ!？」

突然胸を抑えて膝を着いたリインをトワが慌てて支える。

が、そんなリインを無視してオーラフは今度こそエリオットの手を掴んで踵を返す。

「行くぞエリオット。お前も自分の身はもちろん、フィオナを護れるほどに強くなって——ゴフッ！」

「ちよ、父さんっ！」

リインが意識を失う直前に見たのはスマイレ色の髪の子に一瞬

で意識を刈り取られるオーラフの姿と巨漢の父をぶつ飛ばされて狼狽えるエリオットの姿だった。

・*

それは焔の記憶だった。

威嚇するように外で響き渡る銃声。

自分たちを探す怒号。

怖くて恐ろしくて、ラインにできたことは母に言われた通り泣き叫ぶのを我慢することだけだった。

彼らは笑っていた。

ライン達が息を潜めて隠れていることを良いことに、金目のものを物色して略奪し、踏みにじり楽しんでいた。

ライン達を見つけられなかった彼らは業を煮やして家に火を放つ。

そして家を取り囲み、狙いも付けずに銃を乱射する。

火に焼かれて死ぬか、出て来て撃ち殺されるか選ばせてやると彼らは笑っていた。

焔から逃げて外に出れば、それを待ち構えている彼らに撃ち殺される。

だから母は必死に焔の中で耐えた。

あの人がきつと来てくれるはずだと、何度も何度もラインに微笑みかけ焔から護るように抱き締め続けていた。

そして、焼け落ちてきた建材にラインと母は共に刺し貫かれたのだった。

・*

「はっ——」

飛び起きたラインは建材に貫かれたはずの胸を確かめる。

が、そこには鼓動が早まった心臓が脈を打っているだけだった。

「あ、目が覚めた？」

「……………エステルさん……………」

保健室のベッドの脇の椅子に座っていた彼女にリインは一瞬何故ここにと疑問が浮かぶが、気を失う直前の催しを思い出す。

交流会のスタッフの一人として駆け回っていた姿は見ていたが、声を掛ける機会がなく頃合いを見計らってリインの方から声を掛けるつもりだった。

「急に倒れたってレンから聞いてびっくりしたわよ。大丈夫？ 気分が悪いなら先生を呼んでくるけど」

「……………大丈夫です」

深呼吸をして呼吸を整えながら、リインは起こした上体をベッドに投げ出す。

「リイン君？」

乱暴なリインらしくない振る舞いにエステルは首を傾げる。

「何があつたの？」

「……………俺を庇って死んだ母さんのことを思い出したんです」

リインは左腕で目を覆い隠し吐き出した。

「俺は……………心のどこかで父さんや母さんは何処かで生きているんじゃないかって思っていたんです」

「うん……………」

「俺を捨てたのには事情があつて、それでも何処かで生きてくれていると思っていた。だけど……………」

燃えた建材に共に貫かれたはずなのに自分が生きていることを考えれば、彼女も生きている一縷の希望を抱いても良いのかもしれない。

だが、思い出した記憶を反芻すればするほどに、《識》と《観》の目がそれはないと現実を突きつけてくる。

「忘れちゃいけなかったのに……………他の何をおいてもあの人のことを忘れちゃいけなかったのに俺は……………俺は……………」

よりにもよって《鬼の力》を疎んで捨てたのだと思った時期もあった。

だが、真実はただリインが想像していたよりも優しく、そして残酷

だった。

「リイン君……」

エステルは何も言わずにただ空いているリインの右手を握る。リインの痛みはエステルも良く分かる。

だからこそ、掛ける言葉は一つだけにする。

「リイン君、良かったね」

「……………はい」

……………

……………

……………

「みつともない所を見せてしまつてすみません。エステルさん」

ようやく心を落ち着かせることができたリインは改めてベッドから起き上がる。

「気にしないで良いわよ。リイン君の気持ちは良く分かるから」

屈託なく笑いかけてくるエステルにリインは複雑なものを感じながら改めて挨拶をする。

「お久しぶりです。エステルさん、でもどうしてトリスタに？」

「うん……クロスベルの復興が一段落したからリベールに帰るつもりだったんだけどね……」

それなら帰るついでにトリスタに寄つてラッセル博士たちの定期連絡を受け取つて来て欲しい頼まれたのよ……

それでトリスタに行くならついでに、リイン君へ寄付の御礼の品を渡して来て欲しいって依頼があったの」

「御礼の品って……それなら今日の交流会の食材がそれですよね？」

「あれはトールズ士官学院への御礼の品で、リイン君への御礼は別にあるわよ」

そういうとエステルは足元に置いていた旅行鞆を開ける。

その瞬間、リインは嫌な予感に体を震わせた。

「実は——」

「それよりもクレイグ中将はどうしたんですか!？」

エステルは行動を遮るようにリインは声を大にしてオーラフの安否を尋ねる。

「ああ、レンが後ろから殴り倒したあのオジサンなら安心して良いわよ。今はルフィナさんの法術でとりあえず《呪い》の暴走は抑えられてるみたいだから……」

今頃はちゃんと息子さんと冷静に話をできてるんじゃないかな？

ヨシユアが立ち会ってるから安心して」

「そうですか……」

エステルの言葉にリインは胸を撫で下ろす。

何故、オーラフ中將がリインの母のことを知っていたかは分からないが、《呪い》を除去する理由もあるので改めて問い質そうとリインは決意する。

「それでクロスベル市からリイン君への御礼の品だけ——」

「うっ……」

「《黒の競売会》に出展物が偽物とすり替えられて《教団》のアジトに横領されていたのは知ってるよね？」

「え……ええ。隠し扉とかを開けたのは俺ですから」

目を泳がせながらリインは頷く。

「本当ならそこで見つかった本物は《競売会》で落札した人か、盗品だったら元の持ち主に届けて上げるのが普通なんだけど……」

競売に参加した人の大半は《黒の競売会》に参加していた醜聞をさししたくないとかで所有者の権利を放棄されちゃったのよ」

「へ、へー……そうなんですか」

「それで帝国と共和国の文化的な財産は両国に交渉の上で返還されたんだけど、どちらでもないものはクロスベル市の物とすることが決まったの……」

で、リイン君の御礼の品はそこから《聖獣の涙》って言われる琥珀石がこれ」

「あ……あはは……」

差し出して箱を開けて中身を見せてくるエステルにリインは乾いた笑いをもらす。

琥珀のような色合いの拳大の七耀石から感じる凄みは例のあれである。

「……………《黒の競売会》の出品物なら蒼耀石だったと思うんですけど？」

「ああ、それはすり替える手頃なものがそれしかなかったんじゃないかってレクターさんが言ってたわよ」

「そ、そうですか……………」

がつくりとリインは肩を落として項垂れる。

リインにとつてはいらないと突き返したい物なのだが、それをしてしまえばクロスベルの感謝の気持ちを蔑ろにしてしまう。

「あまり気にしなくて良いんじゃないかな？」

クロスベルもなんか曰くがありそうな宝石だから扱いに困っていたみたいだし、リイン君の所ならうまく処理してくれるって思惑もあるみたい」

「ああ、そういうことですか」

エステルの説明にリインはため息を吐いて納得する。

《教団》が持っていた曰くありげな宝石を持っていたくないという忌避感があったのだろう。

「どうする？ やっぱりそれが嫌なら、別の物にして欲しいって掛け合うこともできるけど？」

「いえ、そういうことなら受け取らせていただきます」

観念してリインは琥耀石を受け取った。

「これで後一つか……………」

ローゼリアから始まった聖獣の石がわずか半年で集まるとは思ってもみなかった。

喜べば良いのか、嘆けば良いのか複雑な気持ちで琥耀石が宿す淡い光に見入っていると、リインの肩にエステルが手を置いた。

「ところでリイン君……………」

「え……………エステルさん……………何ですか？」

凄みを利かせた顔を寄せてくるエステルにリインは息を呑み込みながら、先程以上の悪寒に見舞われる。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど、良いかな？　良いよね？」

「は……はい……」

有無を言わせない口調でプレッシャーを掛けてくるエステルに
リインは冷や汗をかきながら頷く。

「うん。実はレンのことなんだけど……リイン君はレンのことをどう
思っているのかな？」

「どうって……」

詰問されてリインはこれまで努めて目を逸らしてきたあの瞬間を
思い出す。

「ようやくレンと家族になれたし、レンがどんな形でも前に進めたこ
とは良いことだと思おうしあたしだって祝福して上げたいと思ってる
わよ……」

でも、まだレンにそういうお付き合いをするのはまだ早いんじゃないや
いかって思うし、でもリイン君ならレンを任せても安心だって思っ
ているわけで——」

「お、落ち着いてくださいエステルさん」

まだ整理し切れてない気持ちを何とか言葉にしようとするエステ
ルだが、言わんとしようとするのを察してリインは止める。

これは何といういじめなのだろうか。

初恋の相手に自分の恋愛事情を心配されるといふ状況は《聖獣の結
晶石》に關することよりダメージが大きかった。

31話 リインのとある一日

リイン・シユバルツアーの存在は多くが謎に包まれている。
ノルティア州北部ユミルに吹雪の日に拾われた子供。

明らかに作弄的なものを感じるが、彼を引き取ったユミルの領主であるテオ・シユバルツアーは何も知らないとしか答えなかった。

当時はある宗教組織が暗躍しカルバート共和国を中心に被害が多かったものの、帝国でも多くの子供が行方不明となる事件が多発していた。

加えて南のリベール王国との戦争もあり、戦災孤児も多く出た。
それが重なり、リインの出生の記録を探し当てることは困難であり、それを良いことに様々な雑誌社は様々な憶測を書き綴った。

市民の中では彼の正体について賭け事の対象とするものまで現れ、その憶測はもはや收拾がつかない程に大きくなっていった。

そんな中でリインの出生を知っていると公言したオーラフ・クレイグ中將は注目されることになる。

だが彼はテオと同じく黙して何も語らなかった。

例えば、愛人の子なのではないかと根拠のない誹謗中傷の言葉をぶつけられたとしても、本人や彼の息子から詰問されたとしても彼は沈黙を保ち続けるのだった。

しかし、リインに一つだけ明かしたものがあつた。

「カーシヤ。それが君の母君の名前だ」

・*

6月21日月曜日。

「それじゃあ、今週末の《特別実習》について説明させてもらおうかしら」

授業が終わった後のホームルームでサラが連絡事項としてそれを言い出した。

「えつと、サラ教官。今ここで発表するんですか？　いつもは実技テストの日に発表するのに」

挙手をしてクリスが首を傾げて尋ねる。

「今回はちよつと事情があつてね。それに今回も誰かに乱入されそうな気がするし……今月は誰も来ないわよねリイン？」

「何で俺に聞くんですか。知りませんよそんなこと」

四月の《神速》並びに《鋼の聖女》に続き、五月は《剣帝》。

二度あることは三度あると警戒するサラにリインは心外だと言葉を返す。

「まあ、今回はアルゼイド子爵も来るから大事にはならないと思うけど。まあ良いわ……」

それじゃ、さつそく今月の《実習地》を発表するわよ」

そう言つてサラはプリントを配るのではなく、黒板に大きくそれを書く。

A班：ノルド高原

B班：ブリオニア島

「これって……」

《ブリオニア島》は確か……帝国西部の外れにある島だったな」

「ラマール州の沖合にある遺跡で有名な島だったはずだ」

エリオットの呟きに応えるようにマキアスが説明を加え、ラウラが領きさらに付け加える。

《ノルド高原》は帝国北部の先の方でしたよね？」

「ええ、ルーレ市の先……国境地帯の向こうになるわね」

「古くより遊牧民が住む高地として知られている場所だな」

エマの疑問にアリサとユースィスが頷く。

「ノルドと言えばドライケルス大帝が挙兵した地でもありますね」

「ああ、それにガイウスの故郷だったな」

「ああ、そうだ。A班には高原の集落にある俺の実家に泊まってもらうことになっている……」

だから俺だけはA班なのは決定している」

「え……それってどういふこと？」

実習地だけ書き、班分けを書かずにチョークを置いたサラにエリオットは首を傾げる。

「ここからは俺が説明しよう」

席を立って場所を譲ったサラの代わりにガイウスが教壇に立つ。

「ノルドでの移動手段は馬を用意してもらおう手はずになっている。なので必然的に馬に乗れる者がA班になってもらおうことになる」

なるほどと、一同はまだ班割りが決まっていなことに納得する。

「この中で馬に乗った経験がいる者はどれほどいるんだ？」

ガイウスの質問に、男子ではユーシスとクリス、ラインの三人。

女子ではアリサとラウラの二人だった。

「となると僕達はブリオニア島で決定かな？」

「ああ、そのようだ……はあ、やつとあの男と別行動か」

馬に乗った経験のないエリオットとマキアスは一足先に決まったことに安堵する。

「ま、わたしはどっちでも構わないけど……エマ？」

「ノルド……それにブリオニア島……」

目を細め深刻な顔をして俯くエマにフィーは首を傾げる。

「バランスを考えるなら、男子は誰か一人をブリオニア島に行ってもらった方が良いわけだが……」

「それなら俺かクリスのどちらかじゃないか？」

「そうですね。ユーシスは前二回でマキアスと組んでいますから……」

あ、でもそうなるならアリサとも三回目か……」

「それを言ったらエリオットとフィーだって三回とも同じ班になっちゃうけど」

「でもユーシスとマキアスだよ。いつまでも一緒にさせていたらまた爆発するんじゃないかな？」

「クリスさん。そんなにはつきりと言わなくても……まあ否定はできませんが」

勝手なことを言う一同の視線は示し合わせたようにユーシスに集中する。

「好きにしろ。どっちになったとしても、俺は、文句を言うつもりは

ない」

「それはどういう意味だ」

ユーシスの主張にすかさずマキアスは反発するが、その言葉だけでそれ以上言うことはなかった。

「それじゃあ公平に籤で決めるか？」

「あ、それなら私が作りますね」

リインの提案にすかさずエマがノートを取り出し、ページを破いて三つの紙片をつくり紙袋に入れる。

「——よ……では、どうぞリインさん」

小声で紙袋に何かを呟いてエマは笑顔で紙袋を差し出してくる。

「エマ……」

因果の魔術の気配を含んだ籤を差し出されてリインは何とも言いえない顔をする。

本人は気付かれていないと思っっているのか、なりふり構わないエマの行動にリインは思わず同情する。

「そうだな……」

魔術の種類は簡単の印象操作。

一枚の籤の気配を強くして一番最初に引かれるようにする類のものだとリインは分析する。

「それじゃあ俺から引かせて——」

何食わぬ顔でリインは差し出された紙袋に手を差し出し——同時にホームルームが終わる鐘の音と共に教室のドアが音を立てて開いた。

「リイイイン・シユバルツァーツ!!」

「げっ……」

そこには《鬼》がいた。

ライダースーツが見慣れた彼女だが、流石に学院内では貴族を示す白い制服を纏いながらも、両手にはスパイクの着いた凶悪なガントレットが装着されている。

昨日の自由行動日から始まり、今日も朝から休み時間の度に《鬼気》迫る形相で追い駆けてくるアンゼリカからリインは逃げるべく素早

く行動する。

「あつ——」

誰かが止める間もなくリインは窓を開いて教室から脱出する。

「逃げるなあつ！ リイン・シユバルツアーツ!!」

すかさずアンゼリカは躊躇うことなくリインの後を追って窓の外へと跳躍する。

「だから誤解です！ レンに何を吹き込まれたか知らないですけど誤解なんです！」

「貴様の悪行はこのアンゼリカ・ログナーが裁くつ！」

窓の外から聞こえて来る二人の声に残されたⅦ組達は朝から繰り返されていた光景だったが呆気にとられて見送った。

「すごいアンゼリカ先輩。リインと競争して離されないなんて」

「いや、追い付いた。そして当てただと……」

黒い瘴気を纏って襲い掛かるアンゼリカの拳をリインが躲し切れずに手で受け止めるが、アンゼリカの猛攻はそこで止まらない。

突如として繰り広げられることになったリイン対アンゼリカの戦いが校庭で行われることになる。

「えつと……」

唐突に始まったツールズ士官学院最強決定戦。

不動の《魔王》と呼ばれるに至ったリインにたった一人で挑むアンゼリカだがむしろ押していた。

リインが太刀を持っていないこともあるが、それでもある意味快拳である。

「はあ……あの子は全く……らしいと言えはらしいけど、ほらあんだ達、とりあえずブリオニア島に行くB班を誰にするか決めて頂戴」

サラは窓に並ぶ一同にため息を吐いて、それだけはさっさと決めてくれと促す。

「でもサラ教官、リインさんが——」

「そんなのあんたとユースが籤を引けば済む事じゃない」

「あ……そっか……それじゃあどっちから引く？」

「好きにしろ」

「じゃあ、僕から引かせてもらいます」

「え……ちよつと待って——」

アンゼリカが身に纏う黒い瘴気に気を取られていたエマは机の上に放置していた籤入りの紙袋に手を入れたクリスに向かって叫ぶが遅かった。

「僕がブリオニア島みたいだね。できればドライケルス大帝が拳兵したノルドを見てみたかったけど仕方がないか」

残念そうに肩を落とすクリスだが、それ以上に膝から崩れ落ちるエマだった。

「ちよつ!? アンゼリカ先輩、どうして《呪い》を《鬼気》に昇華できているんですか!?!」

「今の私は《羅刹》さえも凌駕するっ!」

その叫びと共にアンゼリカの拳が校庭にクレーターを作った。

「リイン・シュバルツアーツ!!」

やはり君はリベールに年下の美少女達ときやつきやうふふするために旅に出ていたんじゃないかっ!」

「人間きの悪いことを言わないで下さい!」

・*・

「それでは後はよろしくお願いしますベアトリクス教官」

体力の最後の一滴まで絞りつくし、立ったまま気絶したアンゼリカを保健室に運んだリインはようやく胸を撫で下ろした。

「あ、リイン」

保健室を出るとそこでサラと遭遇する。

「サラ教官、ホームルームは終わっただんですか?」

「ええ、あんたはA班ノルド高原の方に決まったからそのつもりでよろしく」

「分かりました」

「あんたも災難だったわね。《ロリコン》のリイン・シュバルツアーツ」

「ははは、いきなり何を言うんですかサラおばさん」

ぎしりと二人の間に火花が――

「二人とも、ここは校舎の中ですよ」

唐突に保健室のドアが開いて中から笑顔のベアトリクス教官が顔を覗かせる。

「じゃ、リイン。そういうことだからもう帰って良いわよ」

「分かりました。お疲れ様でしたサラ教官」

二人は示し合わせたように振り返って歩き出した。

教室に鞆を取りに行きながら、テストが終わってから数日で起きた出来事を思い返してリインはため息を吐く。

《カーシャ》という名前しか教えてくれなかった母の話はリインにとって良い出来事だったが、その日から学生たちがリインに向けてくる目に変化があった。

具体的にどんな視線なのかは表現しづらいが、暴走したアンゼリカの様子や小悪魔的な笑みを浮かべて別れたレンのことを思い出せばろくでもない噂が流れているのだろうと推測できる。

「レンの悪戯も困ったものだな」

クロスベルでの別れも含めて、リインはあえてそう結論付ける。

「良いだろ別に。欺瞞でも」

脳裏でそれは欺瞞だと指摘して来る青年を思い浮かべるが、精神衛生上そう思わないとやっていられないとリインは言い訳する。

「……………帰ろう……………そして今日は早く寝よう」

そう結論付けてリインは校舎を出て、校門に――

「やあ、待っていたよ。リイン・シュバルツァー」

校門では白い貴公子とも言える貴族の男がリインを待ち構えていた。

「……………何でいるんだよ？」

「ふ……………愚問だなリイン・シュバルツァー。六つ目の聖石が手に入ったのだろうか？ ならば私が現れた理由もおのずと分かるはずだ」

「ああ、そうだな」

何故それを、とは聞かない。

どうせまともな答えは返ってこないだろうし、こいつならどんな理

由でも納得できてしまう。

「さあ、今度の聖石は琥耀石かな？ それとも黒耀石なのかな？ 焦らさないで早く教えてくれたまえっ！」

「とりあえず落ち着け」

詰め寄って来るブルブラン男爵の腹をリインはとりあえずぶん殴った。

来訪手続きを取らせて、リインは先導するように旧校舎への道歩く。

「ふむ……てつきり君の部屋に保管していると思ったのだが、旧校舎とやらの保管しておくなどというのは些か不用心ではないのかね？」
「そこら辺はちよつと事情があつてな」

力を宿す石だけにまだ魔石中毒の治療中であるラウラの近くにおいておくのはまずいということで、クロスベルから贈与された《聖獣の涙》は旧校舎の工房の金庫に仕舞わせてもらった。

確かに校舎からも街からも離れているが、シュミット博士が来て彼がその旧校舎の二階を居住空間にしてからラッセル博士たちまで移り住んだため、常に人がいる状態になっている。

元々、様々な研究をしているので重要物など多くあるのだから、そこに便乗して保管してもらうのが確実だろう。

それに元遊撃士のダン・ラッセルがいるので防犯と言う意味でも安心できる。

「それにしてもついに後一つとなつたか……まさかこんなにも早く集まるとは思つてもみなかったよ」

「そうだな……とところで俺は《結社》とは馴れ合わないようになると決めているんだけど」

「ははは、固い事言わないでくれたまえ、この件に関しては馴れ合いではなくビジネス的な関係だと割り切るといい」

「……まあ、そうだな」

今ならともかく、あの時は確かに聖獣の七耀石はリインの手に余る存在だった。

その点に関しては業腹だが、引き取ってくれた職人を紹介してくれ

たブルブランに感謝しなくてはいけないだろう。

「おや……何か含みがある様子だが」

目ざとくブルブランはリインの内心を見透かして来る。

「大したことじゃない。今、七耀石を使って武具を造っているんだ……」

その技術を使って赤ゼムリアストーンの太刀に《聖痕》を刻むのに《聖獣の七耀石》は良い触媒になるってだけの話だ」

「おやおや、何とも贅沢なことを。あの太刀は《劫炎》の焰に概念の側から鍛えられた唯一無二の業物のはず……それ以上の太刀を君は求めていいるのかな？」

「あの太刀が最上級なのは分かっているさ。でもあの子がくれた《太刀》の方が数段優れていたと俺は思う」

「なるほど……」

リインが虚空を握り締める様をブルブランは茶化さずに納得する。

「それに今の太刀は確かに《劫炎》に鍛えられたけど、鍛えられたからこそあの人を凌駕しているわけじゃない」

「ふむ……確かにその通りだ」

続くリインの考察にもブルブランはしっかりと頷いた。

《劫炎の剣》も《聖女の槍》も外の理で造られた武具。

対してリインの太刀は外の理に鍛えられたと言っても元は内の理で造られたものに過ぎない。

打ち合うことはできるかもしれないが、そこまででしかない。

「なるほど……だからこそ七耀の加護を太刀に付与できないかと模索しているということか」

感心してブルブランはほくそ笑む。

学生生活などリインに不必要だと考えていたが、打倒《聖女》を目指してしっかりと牙を研いでいるリインにブルブランは笑みを抑え切れなかった。

「そういうことだ。聖獣の加護ならまだ俺が見ていない《劫炎》の本気にだって耐えてくれるかもしれないだろ？」

「彼の本気は私も見たことがないから何とも言えないが、確かにそれ

くらいの準備は必要だろう」

「とは言っても今は《聖痕》の技術の方が追い付いてないから、あまり意味がないけどね」

そうこうしている内にリイン達は旧校舎に辿り着く。

「そこで待っていてくれ」

玄関先にブルブランを待たせて、リインは旧校舎の扉を開ける。

「すみません。ラッセル博士。預けた七耀石のことで——」

「きやあああああつ！」

声を掛けて旧校舎に入ったリインを出迎えたのはティータの悲鳴だった。

「ティータッ!?」

ゆっくり開けた扉を一気に開け放ちリインは所狭しと様々な機械が設置された広間に駆け込み、悲鳴を上げた少女を探す。

しかし——

「すごいすごいっ！　こんなに小さいクォーツなのにアルセイユのエンジン並みの出力が出せるなんて！」

「ふん、私の手に掛ければこの程度の事、造作もない」

「ちっ……偉そうに……しかし元の七耀石の質だけでここまで変わるとはのう……」

アルセイユのエンジンはこれの三倍の大きさのクォーツを直列と並列を合わせて出力を維持したのに、それをこれ一つで補えるとは恐れ入る」

「ともかくこれでトロイメライのエネルギー問題は解決できるわよね……」

反重力装置による飛行や絶対障壁。リンちゃんのサポートがあつて使える機能だったけどこれなら単独で使えるはずよ」

「フフフ……漲ってきたぞ」

「フン、折角だ。艦体に付ける主砲を作り直して騎神サイズの導力砲でも作るぞ。ゼムリアストーンで銃身を作れば列車砲を凌駕する超兵器が作れるはずだ」

気合いを燃え上がらせるラッセル博士に新たな作品の案を考えて

実に楽しそうにしているシュミット博士。

彼らの前には覚えのある七耀石の気配を宿したクオーツが測定機に設置されている。

「へえ……楽しそうなことを話していますね」

そんな盛り上がりつつている彼らの背中にリインが声を掛ける。

びくりと四人の肩が仲良く揺れ、これまた仲良く恐る恐る振り返る。

「どうしました？ どうぞ話を続けてください」

リインは笑顔で彼らの話し合いを促す。

「あ、あ……あわわわ……」

興奮し切っていたティータはリインの顔を見た瞬間に正気を取り戻して顔を一気に青くする。

「ふん……」

「リ、リイン君……これはその……」

バツが悪そうにそっぽを向くシュミットに言い訳をしようとするラッセル。

「てへっ」

そして誤魔化すようにエリカが笑顔を返す。

「とりあえず全員正座」

「待てシュバルツァー。元はと言えばラッセルが——」

「なっ！ 何を言っている。最初にクオーツにしてみようと言い出したのはお前さん——」

ガンつとリインが踵で床を蹴つてもう一度言う。

「俺は正座しろと言ったんですよ、聞こえませんでしたか？」

その言葉に誰も逆らうことはできなかった。

32話 第三回実技テスト

6月23日水曜日。

その日、武術指南の名目でやってきたヴィクター・S・アルゼイドはトールズ士官学院の校庭で一人の少年と対峙していた。互いに剣を構えることなく棒立ちで開始の合図を待つ。

——いかな……

彼には娘の事で多くの謝罪をしたばかりだというのに、この手合わせに高揚を隠せない自分がある。

彼はそれはそれだから気にしなくて良いと言うだろう。

しかし、それに甘えてはいけなと思う反面でそれでこそだと笑いたくなる。

——また強くなったようだな……

年初めの手合わせから半年余り。

その間にどんな経験を積んだのか、これからの手合わせで分かることだが期待が膨らむばかり。

流石にこんな場所で全開の戦闘はできないが、それは彼も同じ。

「ではこれよりリイン・シュバルツァーとヴィクター・S・アルゼイド子爵の模擬戦闘を開始します」

教官が間に立って宣言する。

構えろとは言わない。

対外的に仕合なのだろうが、二人の間ではすでに探り合いは始まっているのだから。

だからサラは余計なことは言わずに、手を挙げて——

「——始めっ！」

その瞬間、ヴィクターの前からリインの姿が掻き消える。

——《疾風》か？ いや違うこれは……

目を見張る一瞬でリインはヴィクターの背後に回り込むと急停止する勢いを回転力に変え、まだ振り返らないヴィクターの背中に太刀を突き出す。

「見事だ……《疾風》とは違うようだが今の歩法はいったい？」

振り返らず大剣を背中に背負う様に構えてその突きを受け止めたヴィクターは嬉しそうにリインに声を掛ける。

「はは、流石ですね。今のはとある凶手に教わった《縮地》という技です」

自分が体験した時は何が起こったのかも分からず背中を刺されていた。

まだリインが彼の技を模倣するには未熟なだけかもしれないが、初見で対応してみせたヴィクターに感心する。

「ほう……凶手とはまた興味深い」

ヴィクターは笑みを濃くして、太刀を外してその場から離れリインと向き直る。

言いたいことは多くあるが、今は剣で語ることにする。

「征くぞ」

「望むところです」

仕切り直してリインとヴィクターは改めてぶつかり合った。

・*・

「ここままでしておこうか」

「ええ、そうですね」

授業時間の半分を過ぎたところでヴィクターが大剣を地面に突き立てて終わりを提案し、リインはそれを受け入れる。

「それではこの模擬戦闘は引き分けとすることですよろしいですか？」

「ああ、それで構わない」

サラの確かめる言葉にヴィクターは頷いた。

手に汗握って食い入るように父とクラスメイトの戦いを見ていたラウラはその終わりの合図に息を吐き出した。

「はあああ……あれがリインの本気……」

「何と言うか……」

「話には聞いていたが、よもやここまでとは」

「凄まじい颯風だった」

「《光の剣匠》を相手に、流石ですリンさん」

あまりの戦いぶりにⅦ組の男たちは呆けながら口々に感想を述べる。

「近代兵器どころじゃない戦いだっただわね……」

「起動者として強いことは良いことなんですけど……」

「……まあまあかな。これなら団長の方が強かったかも」

「む……それは聞き捨てならないぞフィー」

「嘘じゃないし」

睨み合うラウラとフィーだが、サラはあえて無視し手を叩いて注目を集める。

「はいはい。私語は慎みなさい……」

とりあえず今日の貴方達の相手だけど、また戦術殻と戦ってもらわ

「え……先月みたいにアルゼイド子爵との手合わせではないんですか？」

「今回は貴方達の戦いぶりを外から見てもらうことにしたのよ。きついダメ出しを覚悟しておくことね」

クリスマスの質問に答えたサラは指を鳴らして、四体の戦術殻を呼び出す。

「それじゃあ——」

「待ちたまえー！」

サラが班編成を発表した瞬間、それを遮る声が響いた。

まさかとⅦ組に戦慄が走り、振り返るとそこにはⅠ組のパトリック・ハイアームズとその取り巻きが校庭の入り口の階段に立っていた。

「Ⅰ組の……」

「な、何なんだ君たちは？」

マキアスの言葉を無視してパトリック達は校庭へ降りて、クリスマス達の前立つ。

「どうしたの君たち、Ⅰ組の武術教練は明日のはずだけど」

「いえ、トマス教官の授業がちょうど自習となりましてね……」

アルゼイド子爵が来ていることですから、I組とVII組の「交流」を見ていただけないかと考え参上しました」

「ほう……」

血気盛んなパトリックの申し出にヴィクターは面白そうに目を細める。

「よしっ！ 今月の乱入はパトリックだ。これなら勝てる！」

「うん、あの人達に比べればI組なんて全然怖くないよね」

サラとヴィクターの背後でマキアスとエリオットが拳を握り締めて勝利を確信する。

もつともそれは彼らだけではなく、他の者たちもパトリックの申し出にどこか緩んだ気配を滲ませていた。

——だけど増長はこつちも同じか……

VII組はリインを始めとする強者との戦いで自信を付けたから。

I組は貴族特有の上から目線。

サラはヴィクターに目配せして意見を伺うと、無言で頷かれ判断を任される。

「いいでしょう。だけど先に一つ聞いておくけど、それはリインを含めたVII組なのかしら」

「いや……それは……」

サラの質問にそれまで踏ん反り返っていたパトリックは急にしおらしくなる。

分かり切った質問だったが、授業に乱入して来た溜飲をそれで下げてサラはクリスに言う。

「——実技テストの内容を変更！」

《I組》と《VII組》の模擬戦とする。四対四の試合形式、アーツと道具の使用も自由よ。ラウラ——三名選びなさい」

「わ、私ですか？」

「アルゼイド子爵を前にするのなら貴女がリーダーをするのが当然でしょっ。」

「うむ、期待しているぞラウラ」

「父上……はい、分かりました!」

パトリックが何かを言いたそうにしていたがサラは無視する。そうして選ばれた三人はフィーとクリスとエリオット。

前回のリインを除いた特別実習のメンバーをラウラは選んだ。

「それじゃあ、双方とも位置に付いて——」

校庭の真ん中でそれぞれがサラの合図を待ち、それ以外の者たちは距離を取る。

「これより《I組》と《VII組》の代表による模擬戦を開始する。双方、構え——始めっ!」

先程と同じように掲げた手を振り下ろして、模擬戦の開始を宣言する。

その合図に重なって銃声が響き、観客となっていたリインが横に倒れた。

「え……?」

模擬戦は始まらず、銃声と共にリインが倒れた事実とその場が凍り付く。

そしてそれらを見無視してその場に紅い獣が哄笑を上げて乱入する。

「あははははははっ!」

用具倉庫の屋根に腹這いになってシートを被って隠れていた少女は大きく跳躍し、倒れたリインに向かって弾丸のように飛び掛かり巨大なチェーンソーを一閃、倒れたリインの胴体を両断する。

「やった!」

「何をだ?」

斬った手応えに少女が歓声を上げた瞬間、応える声は背後から聞こえて来る。

同時に目の前の幻惑の戦技が晴れて、両断したリインは丸太に変わる。

「幻術のクラフト!? まずいっ!」

奇襲が失敗したと悟るや否や少女はすぐに離脱しようとするが、撃たれ両断されたはずのリインが少女の後頭部を掴んで止める。

「くっ——」

すかさず少女は大き過ぎる得物を放して、ナイフを抜くがそれを背後に振るよりも早くリインが少女の頭を地面へと叩き込んだ。

「やれやれ……」

頭だけが地面にめり込んだ少女を見下ろしリインは肩を竦めて周囲を見回すが、予想に反して彼女のお目付け役もいなければ父親の姿もなかった。

そのことに首を傾げながらリインは少女に尋ねる。

「シャーリイ・オルランド……どうしてここに？」

リインはシャーリイの足を掴んで力任せに地面から抜いて逆さ吊りにしたまま尋ねる。

しかし、頭を打った衝撃に目を回していた彼女はその質問に答えることはできなかった。

・
*

《Ⅰ組》と《Ⅶ組》の模擬戦は中断され、その代わりに気を失った少女が拘束されていた。

「何なんだこの子は……それにこの武器はいつたい……」

「な、何か赤黒い染みが至る所に付いているんだけど」

「ま、まずいですよねパトリックさん」

気を失っていても尋常ではない危険を感じさせる彼女にⅦ組とⅠ組は遠巻きにする。

「起きろシャーリイ。とかいつまで狸寝入りをしているつもりだ？」

「あ、ばれた？」

リインの言葉に気を失っていたと思われていた少女は何事もなかったように目を開いて、後ろ手に腕を縛られたまま上体を起こす。

「ふむ……尋常ではない少女のようだが彼女はいつたい？」

「シャーリイ・オルランド……」

《赤い星座》の副団長、《赤の戦鬼》シグムント・オルランドの娘です」

「ほう……では彼女がああ《血染めの》……」

その名を聞いたことはあったが、まさか自分の娘よりも年下の少女だったことにヴィクターは軽く驚く。

「本当に何であんたがここにいるのよ」

「あ、《紫電》のおばさん。久しぶり」

「あ、っ!？」

「落ち着いてくださいサラ教官!」

ドスの利いた言葉を漏らすサラをクリスが羽交い絞めにしてブレードと銃を抜こうとしたサラを押し留める。

「それで、どうして君がこんなところに?」

「そんなのリインに会いに来たからに決まってるじゃない」

地面に座り込んだシャーリイはさも当然の事と言わんばりの様子で、上目遣いに答える。

そこだけ切り取って見れば、野性味のある元氣系の少女が見せた恋の熱を感じさせる可憐しい仕草の様なのだが、それを否定する爛々と光る目はリインの他にサラやヴィクターを油断なく値踏みしていた。「そうか……それでパパは今どこにいるんだ?」

自身に向けられる獰猛な目を無視して、小さな子供にリインは尋ねる。

「今、商談中……それで暇だったんだけど、リイン達がこの学院に通っていることを思い出して来ちゃった」

てへっと可愛らしく言うがやはり彼女の内面の獰猛さは誤魔化せない。

「あ……あはは、シャーリイさんらしいですね」

そんなシャーリイにクリスが相変わらずだと笑う。

リインはため息を吐き、この乱入者の処遇をどうするかサラに尋ね

「シャーリイ・オルランド」

しかし、その動きを遮るようにフィーがシャーリイの前に立った。

「わたしのこと、覚えてる?」

その質問にシャーリイはフィーの顔を見てから少し視線を下ろし

て答えた。

「知らないな。どっかで会ったことあったけ？」

「っ……」

シャーリーの答えにフィーは悔しそうに歯を食いしばる。

「それにしても、遠目に観察してた時から思ってたけどリインのクラスメイト達って中々美味しそうだね」

目の前のフィーを無視して、シャーリーは離れて事の成り行きを見守っているアリサ達に目を向けて舌なめずりする。

「ちよつと味見しても良いよね？」

言うやいなや、後ろ手に拘束されていた縄を引きちぎってシャーリーは駆ける。

放置している彼女の《テスト・ロツサ》に目もくれず、大きく開いた手掌をエマに向けて突き出す。

「え……？」

あまりの速さにエマは何の反応もできず、棒立ちのままシャーリーの手掌がエマに襲い掛かる。

「くらっ」

「ぎゃん」

シャーリーの手掌がエマに触れる寸前、リインはシャーリーの尻尾のような後ろ髪を引っ張ってその凶行を止める。

その様にフィーは拳を握り締めて唇を噛む。

「……………何のつもり……………わたしよりもエマの方が良いって言うの？」

「ええ、だって君って全然大したことないじゃん」

「っ——」

リインに次いでVII組では二番目の実力だと自負していたフィーは、シャーリーの言葉に歯を食いしばる。

「わたしが……………わたしがエマ達に劣っているって言うの？」

「あはは、そんなの一目瞭然じゃん。自分の身の程を弁えなよ。君は……………後三年、もう少し大きくなったら味見して上げるよ」

遙か格下とまるで歯牙にもかけない物言いに、フィーは胸を掻き抱

く。

ラインに遅れを取っているのは認める。

しかし、それでもⅦ組の中で二番目に強いという自負があったにも関わらず、シャーリイはそんな自分に目もくれずにエマの方が良いと言い切った。

胸を熱く焦がす怒りの焰。

自分の中にこんなに激しい感情があったとは思わなかったファイアは、その初めての激情に突き動かされるがまま、双銃剣を抜き放つ。

「ファイア!？」

「あああああああああつ!」

ラインが止める間もなく、ファイアは至近距離から銃を乱射する。

「ふーふーふー」

「ああ、思い出した。そういえば《西風の旅団》にそんな武器を使うお姫様がいたね」

先程、ラインにされたことをやり返すようにファイアの背後を取ったシャーリイはそのまま抱き着き、ファイアの耳元で囁いてその耳を甘噛みする。

「っ!？」

背筋を悪寒で震わせながらファイアは刃を背後に薙ぐ。

「あはは、遅い遅い」

シャーリイはそれを紙一重で避けて手を叩きファイアを挑発する。

「殺すっ!」

ファイアは全身に黒い闘気を纏わせ疾走する。

「へえ……」

その姿に笑みを濃くしたシャーリイは、前を向いたまま後ろに走りながらファイアの猛攻を躲し、まだまだ余裕を見せる表情でファイアに疑問をぶつける。

「っていうか、何で西風のお姫様がライン達と一緒に学院なんかに通っているのさ?」

「お前には関係ないっ!」

殺意が十分に乘った刃と弾丸の嵐の中、シャーリイは笑みを絶やす

ことはなかった。

「アハッ！ 小さいくせになかなかやるじゃない」

「一年前は敵わなかったけど、今日は殺す」

「一年前……あーそういういえば戦ったこともあったけ？ ごめんすつかり忘れてた」

「——っ！ シヤドウブリゲイドツ!!」

次の瞬間、フィーは無数の分け身に分かれて四方からシャーリイに襲い掛かる。

「何だ……その程度か」

シャーリイはその戦技を見てつまらなそうに嘆息すると、その身にフィーと同じ黒い闘気を纏い、刃が振り切られるより速く拳で打ち抜いた。

「くっ——」

霞となって消える分け身にフィーは更に速度を上げる。

だが、どれだけ速度を上げてもどれだけ死角を突いても、フィーの攻撃が届く前にカウンターで分け身は壊される。

「ほらほらどうしたの？ この程度でリインの仲間のつもり!?!」

シャーリイは分け身の中の一人に向かって叫ぶ。

その本体であるフィーはいつそう顔に悔しさを滲ませて、シヤドウブリゲイドから別の戦技に切り替える。

「リーサルクルセイドツ！」

高速に回転させた二つの銃剣をフィーは投げつける。

戦技の糸で繋いだそれはフィーの意志のままシャーリイの周囲を飛び回り、彼女を斬り刻む——はずだった。

「何これ？」

高速回転して鋭い円盤のカッターと化していた二つの銃剣をシャーリイは無造作にキャッチして見せた。

「え……?」

「まさかこれが奥の手？ ふーん、口先だけだったみたいだね？」

フィーの銃剣を指で回しながら心底失望したと言わんばかりにシャーリイは大きく溜息を吐く。

「この程度なら学院なんてぬるい処にいることにも納得かな」

「……………」

「ようするに捨てられたんでしょ？」

「……………え…………？」

「猟兵王がいなくなつて《西風》が解散したつて聞いたけど、こんな雑魚を抱えていたんじゃ当然だよな」

「ち、違う……………わたしは——」

「違わないよ……………」

弱い奴、使えない奴、役に立たない奴なんて必要ない。仲間だろうが家族だろうが、足手纏いになるなら背中から撃ち殺すのがあたしたち猟兵じゃないか！」

先程までの威勢はどこに行つたのか、シャーリイから叩き付けられたその言葉に酷く狼狽した様子のファイは、《西風》から離れて初めて、ずっと目を逸らし続けていた事実は無理矢理向き合わされる。

固まるファイにシャーリイは口角を釣り上げて、回していた銃を手にとって構える。

「お手本を見せて上げるよっ！」

黒い闘気を纏い、両手に銃剣を構えたシャーリイは全身に力を溜めて駆ける。

一条の矢と化したシャーリイは両手の双牙を広げて構え——

「そこまでだ」

割つて入つたラインに吹き飛ばされるのだった。

33話 鉄路

「本当に大丈夫か？ 何だったら今からでもサラ教官に連絡して俺が代わっても良いんだぞ？」

「大丈夫です。僕だって将来上に立つ者ですから、これくらい何とかしてみせます」

帝都へイムダル中央駅。

乗り換えのために降りたホームでリインはB班の様子を見兼ねて提案するが、クリスが無用だと断る。

「ク、クリス。できるならそうしてくれると僕達はありがたいんだけど……」

「何を言ってるんだマキアス。何でもかんでもリインさんに頼って解決してもらったら僕達は何のためにいるって言うんだい？」

マキアスなんて将来、政治に関わるつもりならこの手の事は避けては通れない道だろ？

エリオットも仮にも音楽家を目指している君が目目の前の落ち込んでいる女性を元気付けられないでどうするんだい？」

「そ、それは……」

「そうかもしれないんだけど……」

張り切るクリスにマキアスとエリオットはおずおずとエマとフィーを盗み見る。

実技テストと班決めの時からずっと消沈しているフィーとエマの二人の姿はとても痛々しい。

二人もこれまで何とか彼女たちの気持ちを立て直そうと気を使っ
て言葉を掛けて来たのだが、返ってくる言葉は全てが生返事。

正直、心が折れそうだった。

「意気込みは買うけどあまり無理をするなよ」

自分で何とかしてみせようと奮起しているクリスに成長を感じつつ、リインは彼の耳元で囁く。

「エマは魔女の一族だ。だからどうって言うわけじゃないが一応それ

を踏まえて気を付けて上げてくれ」

「魔女の……というとローゼリアさんのお孫さんってエマさんだったんですね」

「ああ、エマが落ち込んでいる理由は俺が原因なんだ。悪いな」

「いえ、原因が分かっただけでも一安心です」

安堵の息を吐くクリスにリインは苦笑して体を離す。

最初は飛び級で強引に自分と一緒に士官学院に通いたいと言っていたが、この半年で順調に成長している彼に頼もしさを感じる。

「とにかく僕達でやれるだけのことはやってみます……」

リインさん達は自分達の実習に集中してください。でないと評価点の勝ちがB班がもらいますよ」

「生意気な……」

リインは苦笑し、徐に振り返った。

「すまない。みんなちよつと良いか？」

「え……どうかしたのリイン？」

不意のリインの言葉にアリサが首を傾げる。

「大したことじゃないんだけど、妹が近くにいるみたいだから紹介させてもらえないか？」

「リインの妹？」

「それは興味深いな……乗り継ぎの列車が出るにはまだ余裕があるし、少しくらい問題はないだろう」

「やっぱリインの妹も超帝国人なのか？」

「マキアス、何か言ったか？」

「な、何でもない！ 僕は何も言ってないぞ！」

「あ、僕はちよつとトイレに行つてきます。みんなは先に行ってください。オルデイス行のホームで合流しましょう」

「え……クリス？」

リインの提案に乗り気になる一同だが、唐突にクリスは一人そう言つて集団から止める間もなく離れてしまった。

「どうしたんだろうクリス、あんなに慌てて」

「ははは、まあクリスはもう会つているから構わないよ」

おそらくエリゼと一緒にいるだろう彼女の存在を察して逃げ出したのだろう。

頼もしくなってきたと思いきや、まだまだな部分を見てリインは苦笑を浮かべる。

そうして、クリスとは一時的に別れて向かった先は駅の改札口だった。

「あら？」

「お久しぶりですクレア大尉」

今まさに駅に入ってきたクレアは予想していなかったリイン達に出迎えられて目を丸くする。

「ああ、今日から《特別実習》ですか？」

「はい。ノルド高原とブリオニア島に行くことになりました。それで――」

「ええ、分かっています」

リインに最後まで言わせず、クレアは場所を開けて背後にいる彼女たちに道を譲る。

「お久しぶりです。リインさん」

「お久しぶりですアルフィン殿下、それにエリゼも」

「え、ええ……お久しぶりです。兄様」

突然の再会に面食らうエリゼに対してアルフィンは流石皇族と言わなければならない素振りも見せずにリインに、そして彼の背後の《Ⅶ組》に笑顔で応える。

「初めましての方も多いので名乗らせていただきます。ツールズ士官学院《Ⅶ組》の皆さん……」

わたくしはアルフィン・ライゼ・アルノールと申します。どうかよろしくお願ひします」

「――お初にお目にかかります。リインの妹、エリゼと申します」

アルフィンに遅れてエリゼも名乗る。

「お、おい。リイン聞いてないぞ」

「あわわ、ここ皇女殿下におきましては、御機嫌麗しく――」
「二人とも慌て過ぎだ」

てつきり妹だけに会うと気楽に身構えていたマキアスとエリオツトは皇女殿下も紹介されて慌てふためく。

「ふふ……そんなに身構えなくても結構ですよ……あら？」

アルフィン是一回を見回して首を傾げる。

「話に聞いていましたが《Ⅶ組》の皆さんは十人ではなかったでしょうか？」

「ああ、クリスの事ですね。彼は所用で離れています。殿下がいらっしゃっていると知っていたら無理にでも連れて来ていたんですが」

「あらあら、別に構いませんよユーシスさん」

にこにこ笑ってアルフィンはユーシスの謝罪を受け入れるが、その笑顔の裏に隠れているものをリインは見ないふりする。

一通り、それぞれが名乗るとルーレ行きの列車が間もなく発車するとアナウンスが流れる。

「つと、申し訳ありません殿下。どうやら時間のようです」

「いいえ、リインさん、こうしてお会いできただけでも嬉しいです……ですがそうですね。クリスさんには一つ伝言をお願いしても良いですか？」

そう言うときアルフィンはリインの耳元に口を近付けて囁く。

「覚えておきなさい、つと伝えておいてください」

「承りました」

声に含まれている感情にリインは肩を竦ませて振り返ると、Ⅶ組一同は言葉を失った様子でリイン達に見入っていた。

「リイン……やっぱり……」

耳打ちをしたただけだと分かっている、それをするだけ親しく、見ようによって頬にキスをしたように見える行いにⅦ組一同は戦慄する。

「姫様……」

「あら、何かしらエリゼ怖い声を出して？」

惚けるアルフィんにエリゼはため息を吐き、リインに向き直る。

「ところで兄様、聞けば先月は過労で倒れたと聞きますが」

「それは……」

「いろいろと頼られているのは分かりますが、くれぐれもご自愛ください」

「ああ、分かっているよ。クロスベルの事件も落ち着いたから倒れるまで働くななんてことはしないさ」

過労で倒れた時を含め毎月なにかと保健室にお世話になっていることを言わずにリインは頷く。

「それから……」

「うん……?」

「先月のことですが、ミルディーヌと何かありましたか?」

「ミルディーヌと……確か先月の観光列車占領事件に巻き込まれた人だったよな? 俺に心当たりはないが……」

「……………そういうことにおきましよう」

エリゼは本気でそう言っている兄を半眼で睨み引き下がる。

「それでは皆さん、御機嫌よう」

「皆さん、こんな兄様ですがどうかよろしくお願いします」

「皆さん、特別実習頑張ってください」

そうして三人に見送られて、リイン達はヘイムダル駅から二手に分かれてそれぞれの列車に乗り込んだ。

・*

「ふう……やっと着いたか」

ルーレ駅に降り立ち、ユーシスが息を吐く。

「《ノルド高原》に向かうには貨物列車に乗り換えるんだったよな?」

「ああ、この後四番線から出る貨物列車に乗る手筈になっている

リインの言葉にガイウスは頷き、それならとアリサが答える。

「四番線というと、階段を登って左端のホームに下りる必要があるわね」

「それでは行くとするか」

アリサの説明を受けてラウラが歩き出しながら話を続ける。

「それにしてももう昼時か、どこかで食事でも買っていくべきだろう

か?」

「そうだな。時間があればお弁当を作つて来てもよかつたんだけどな」

「ここからさらに四時間の鉄路……何か買った方がいいだろう」

「流石に貨物列車では車内販売はないだろうしな」

「そういう事なら、一度改札を出しましょうか。ルールは私の地元だからおすすめのランチボックスを売っているお店を紹介できるわよ」

「それは——いや、その必要はなさそうだ」

「え……?」

アリサの提案をリインが否定し、彼の視線を追うとそこにはメイドがいた。

「む……」

「シャロンさん、何故ここに? 寮で見送られたはずでは?」

「ど、どうして貴女が先回りしているのよっ!」

ラウラの言葉を掻き消すようにアリサが叫ぶ。

「それはもう、お嬢様への愛が為せる業と言いますか……」

朝とは違い、腕によりをかけたお弁当を用意いたしました。どうぞお召し上がりください」

「ありがとうございますシャロンさん」

驚きに固まるアリサを他所にリインはシャロンからランチボックスを受け取る。

「……リイン。まさか知っていたんじゃないでしょうね?」

「いや知らなかったよ。だけどシャロンさんだから何か企んでいると考えておくのは普通だろう?」

「うぐぐ……」

リインの指摘はもつともだとアリサは唸る。

「しかしありがたいことは確かなのだが……」

「どういうカラクリなのか流石に気になってしまふな」

「フツ……ラインフォルト家のメイドは主人を驚かせるのが趣味らしいな……」

大方帝都で、定期飛行船に乗り込んだといつたところか?」

「ふふっ……そうでございます」

ユーシスの答えにシャロンは正解だと頷く。

「そ、そこまでして……」

まったくこのままノルド高原までついてくるつもりじゃないでしょうね?」

「いえ、実はこの後、別の仕事が入りまして、トリスタに戻るのも少々遅れそうな見込みです」

「別の仕事……?」

アリサが首を傾げると、答えは別の方向から告げられた。

「——私の仕事の手伝いをしてもらうことになったのよ」

そう告げて現れた女性にアリサは驚き、シャロンが出て来た以上の声で叫ぶ。

「か、か、か……母様っ!?!」

「久しいわね、アリサ。そしてそちらが《Ⅶ組》の面々というわけね」

アリサへの言葉を短く終わらせて、アリサの母イリーナ・ラインフォルトはライン達に向き直る。

「アリサの母、イリーナです……」

ラインフォルトグループの会長を務めているわ。よろしく願いまするわね」

「こちらこそよろしく願います。ライン・シユバルツァーです。御会いできて光栄です」

「初めまして……ラウラ・S・アルゼイドです」

「ガイウス・ウォーゼル。よろしく願います」

「ユーシス・アルバレア。見知りおき願おうか」

イリーナの挨拶にそれぞれが名乗る。

「まあ、せいぜい不肖の娘と仲良くしてやってちょうだい……」

それでは仕事があるのでこれで失礼させてもらおうわ。シャロン、行くわよ」

「かしこまりました。会長」

これ以上は時間の無駄だと言わんばかりに踵を返して歩き出すイリーナ。そしてそれに従い、一礼してからその後を追うシャロン。

「い、いい加減にしてっ!」

そんな母の態度にアリサは爆発した。

「いつもいつも、そうやって仕事ばかりを最優先して……」

勝手に家から飛び出した娘に何か一言くらいはないわけっ!」

その叫びにイリーナは足を止めて顔だけで振り返る。

「あなたの人生……好きに生きればいいでしょう。ラインフォルトを継ぐことを強制する気もないわ……」

あの人のように勝手気ままに生きるのも悪くはないでしょう」

「っ……」

「それに貴女の学院生活も最低限のことは把握しているわ。学院から月ごとの報告でね」

「……………え?」

「ああ、言ってなかったかしら……」

《トールズ士官学院》——貴女たちの学院の常任理事を務めさせてもらっているわ。入学式には忙しくて出席はしなかったけどね」

「なっ……」

「でもそうね……」

驚き固まるアリサを他所にイリーナは何かを思い出したかのように振り返ると、ラインを見た。

「貴方にはアリサが二度も世話になったわね。この場を借りて御礼を言わせてちょうだい」

「いえ、そんな……二度ですか?」

突然のイリーナからの言葉にラインは首を傾げる。

「一つはリベールに家出したこの子を保護してくれたこと、もう一つは八年前、貴方の故郷で迷子になっていたアリサを見つけてくれたことよ」

「なっ!」

突然の暴露にアリサは絶句する。

「八年前……すみません。観光客の子供が雪の珍しさに迷子になるのは毎年の恒例なので正直どの子がアリサだったかちやんと覚えてないんですけど」

「なっ!？」

イリーナの突然の暴露に続き、リインからの追い打ちにアリサはさらに言葉を失う。

「お嬢様……なんとお劳しい……」

そんなアリサにシャロンは涙ぐむのだった。

「ア、アリサ……」

「だ、大丈夫か？」

「気をしっかり持て」

ラウラ、ガイウス、ユーシスが次々にアリサに言葉を掛けるが、それに返事をする余裕は彼女にはなかった。

34話 ノルド高原I

「リインツ！ リインツ！」

——どうしてこうなった？

頭から血を流し倒れるリインに必死に治癒術を施しているアリサを呆然と見下ろしながらガイウスはその光景に呆然としていた。

アリサだけではなく、ユーシスとラウラも遅れてリインの傍らにつき、彼の容態を調べている。

だが、ガイウスは足に根が張ったように彼に駆け寄ることはできなかった。

「これを……俺がやったのか？」

爆撃があつたように深く抉れた大地に無造作に突き立った折れた太刀。

「違う……俺は……俺は……」

力が抜けて固く握りしめていた槍が地面に落ちる。

ただノルドの平穏を護りたかつた。

だからこそ、その平穏を脅かす様なことを言い出したリインを排除しなくてはいけないと衝動に突き動かされた。

「俺は何てことをしてしまったんだ……」

その行動に何の迷いはなかったはずなのに、実現したその光景にガイウスが感じるのは後悔しかなかった。

・*

ノルド高原。

帝国北東に位置する高原地帯。

遊牧民が独自の文化を持って暮らしている異境の地。

厳密には帝国領ではなく、帝国と共和国に接する係争地帯だが、かつてドライケルス帝が獅子戦役の際に挙兵した地でもあり帝国との関係が深い地として知られている。

ノルド高原南、ゼンダー門。

「おお、やっと到着したか」

長い鉄路の旅を終えて列車から降りたⅦ組を出迎えたのは隻眼の中将だった。

「ゼクス中将、ご無沙汰しています」

彼の言葉にガイウスが応える。

「うむ、数ヶ月ぶりになるか……」

士官学院の制服もなかなか新鮮であるな。《トールズ士官学院》

……深紅の制服は初めてみるが」

「これが自分達《Ⅶ組》の象徴である色だそうです」

「ふむ、そうか……」

そして久しぶりだなリイン・シユバルツァー。奇蹟の生還を果たしたと聞いていたがこうしてもう一度会えたことを嬉しく思うぞ」

「お久しぶりですゼクス中将、その節は生意気な口を聞いて申し訳ありませんでした……それにあの後、ろくな挨拶もできずに大変な失礼を」

「それについては気にする必要はない。むしろあの方の教育をした者の一人として謝罪するのは私の方だろう」

あの日のことは思い出してもただ哀れとしか思えなかった。

聞けば半年以上前から皇子はあの瞬間のために仕込んでいたというのだから言葉もない。

「それに聞けばヴァンダールの右手剣を取り戻すことに尽力してくれたそうじゃないか。むしろ頭を下げるのは私の方だろう」

「いえ、そんな……ミユラーさんにはお世話になっていましたから、気にしないで下さい」

中将から頭を下げられリインは恐縮する。

「御二人は知り合いだったのか？」

そんな二人の様子にガイウスは首を傾げて尋ねた。

「ああ、でもちゃんと話をしたのはこれが初めてだよ」

「うむ……」

二年前の《リベールの異変》の際に先駆けとして進軍した我が第三機甲師団にクローディア殿下と共に直談判に現れたのが彼だったの

だ」

「リベールの浮遊都市か……レグラムからもかろうじて見る事ができたが今でも信じられないものだったな」

「国中のオーブメントが使えなくなった挙句、大陸中の猟兵団が集まって略奪を働いたって聞いたことがあるけど」

「ああ、その猟兵団たちをリインが一人で百人斬りしたことで伝説を作ったらしいな」

「百人斬りって……別に俺一人でやったわけじゃないんだけどな……」

「百人と戦ったことは否定しないんだ」

リインの答えにアリサは身震いする。

猟兵と言えばフィーや先日シャーリイ、そして彼女を引き取りに来た彼女の父親が新しい。

それを百人と戦って勝ち抜いたリインの強さに改めて畏怖を感じてしまう。

もつともリインがリベールで蹴散らした猟兵のほとんどは三流であり、蹴散らすのに協力した一人がシャーリイだったり、リインは氣付いていないが蹴散らした百人の中にフィーがいたりする。

「ははは、武芸者としてリイン君とはじっくりと話をしたいものだが、流石に時間も時間だ」

リインの武勇伝に後ろ髪を引かれつつもゼクスは会話を切り上げる。

「今日中に帰るつもりならすぐに出発した方がいだろう」

「ええ、そのつもりです。すみません、お願いしていた馬の件は？」

「うむ、用意してあるぞ」

ガイウスの言葉にゼクスは頷いて、外に促すように出口の方へと歩き出した。

「こ、これは……」

目の前の光景にリイン達は言葉を失い、その反応にガイウスは嬉しそうに頷く。

そこには広大な高原が広がっていた。

彼方に見える山岳やストーンヘンジ。空を舞う何羽もの鷹。風に舞う草。

夕暮れの赤に染まった絶景にリインは思わずオーバルカメラを取り出して写真を撮っていた。

「ああつ！ 私もカメラ持って来れば良かった！」

「はは、帰ったらみんなにも上げるよ」

悔しそうな声を上げるアリサにリインは笑って応える。

「なんて……雄大な景色だ……」

「鉄路の果て、遙かなる蒼穹の大地……いや言葉は不要か……」

「フツ……気に入ってくれたようで何よりだ。さあ、日没までには集落に着きたいから出発するでしょう」

立ち尽くすリイン達にガイウスは用意された馬を受け取って促した。

夕暮れの高原を馬を走らせたリイン達はノルド高原の中央に位置する場所に造られた集落に辿り着いた。

ガイウスの家族に温かく迎えられた一同は用意されていた夕餉を振る舞われた。

挨拶や簡単なノルドのことを教えられ、ガイウスの父であるラカンに長旅の疲れを取るために早く休むように言われて、特別実習の一日目は終了した。

・*

六月二十七日。日曜日。特別実習二日目。

外に人の気配を感じてリインは目を覚ました。

「この気配はガイウスか……」

気配はガイウスだけではなく、まだ日の出前だというのにノルドの民はすでに動き始めていた。

リインは上着を着てゲルの外に出ると、初夏の季節にも関わらず冷たい高原の空気に身震いする。

「リインか……もしかして起こしてしまったか？」

「自然と目が覚めたただけだよ。遊牧民の朝は早いつて聞いていたけどまさかここまで早いとはな……それにその格好は？」

ガイウスが深紅の制服ではなく蒼い民族衣装を纏っていることにリインを尋ねる。

「これから羊の世話を手伝おうと思つてな。朝餉にはまだ時間があるからリインはゆっくりしているといい」

「いや、折角だから何か手伝わせてくれ。羊の世話は流石にできないけど水汲みならできるだろうから」

集落には井戸があつた。

オーブメントもなく吊るされた桶を見れば人力だと分かる。

井戸ではすでにガイウスの弟のトーマを始め、集落の人達がその日の水を汲みに集まっている。

「そうか。ならば頼らせてもらおう」

そうしてリインは井戸を囲う人達に声を掛け、彼らの代わりに桶を引き上げる作業を担当する。

それが終わる頃になると、アイゼンガルド連峰の山間から日の出の光が溢れ、夕暮れとはまた違った絶景に見とれていると羊の世話に行っていたガイウスが戻つて来る。

彼と合流したリインは一度、VII組に割り当てられたゲルに戻りユース達を起こしてウォーゼル家のゲルで朝餉を御馳走になり、そのまま今日の特別実習の課題を渡された。

「思ったよりも少ないわね」

ウォーゼル家のゲルから出て改めて課題を見直したアリサがそんな感想を呟く。

「いや、ゼンダー門への赴く依頼があることを考えればこんなものだろう」

「馬で片道一時間、往復で二時間……」

監視塔や薬草探しのことを考えれば南西部だけとはいえかなりの移動距離になりそうだな」

「ああ、今日はほぼ一日中馬に乗っていることになるだろう」

「これはこれで大変な実習になりそうだな」

みんなの感想を聞いてリインは肩を竦めた。
実習は滞りなく進む。

監視塔への配達、ゼンダー門から大型魔獣の討伐、それらの合間に薬草の採取。

それらを終えて集落に戻り、昼食を摂ってから午後の実習へとノルドの北部へ向かう。

最優先となった人探し。

帝国時報の記者で彼の護衛がリイン達の午後の実習だったのだが、彼は待ち切れずに一人で行ってしまったらしい。

・*

「よかった。何事もなく見つけることができてる」

夢中になって写真を撮っているノートンを見守りながらアリサは安堵の息を吐く。

「やれやれ人騒がせな」

「しかし、気持ちには分かるな……遠目に見ても大きいと思っていたがこれ程とは」

見上げる程に大きな巨像にラウラは感嘆の息を吐く。

崖に半身が埋まっついていて正確な大きさは分からないが全長百アージュはありそうな巨体の像は圧巻の一言に尽きる。

「この巨像はノルドでは《守護者》と呼ばれているんだ……」

古の時代、祖先たちが東からやって来た時にはすでに高原にあったらしい……

そして、その許しを得てこの地に根付いたという伝説が残されている」

驚きに固まっているラウラ達にガイウスは誇らしげに説明する。

「ふむ……俺はこの巨像を見たとき、《巨いなる騎士》の言い伝えを真っ先に思い浮かんだが」

「《巨いなる騎士》……帝国各地に伝わる謎の言い伝えだな……」

中世——かの《暗黒時代》から帝国各地に伝わる、『戦乱の世に』焔

と共に輝き甲冑をまといし巨大な騎士」が現れて、戦を平定する』
……

レグラムにも同じような話が伝わっているな」
ユーススの呟きにラウラは頷く。

「なるほど、確かにこの《守護者》の巨像にも通じる話ではあるようだ。
もしかすると、何か関係があるのかもしれないな」

「そう言えばリインって、トマス教官の歴史研究同好会に所属してい
たわよね。何か知らないの……リイン？」

アリサは自分達と同じように驚きに言葉を失っているリインに新
鮮なものを感じながら振り返る。

が、リインの表情はアリサが思っていたものとは違った。

「リイン……どうかしたのか？」

その様子に気付いたラウラ達も振り返り、声を掛けるがリインは巨
像を見上げるだけで全く反応しない。

そして……

「あつた……」

「あつた？」

ようやくリインの口から出て来た言葉に一同は首を傾げる。

「あつたんだよ！ 《黄昏》に挑む一手が！」

「ちよつとリイン落ち着いて」

普段の落ち着きぶりをかなぐり捨てて歓声を上げてリインは近く
のアリサの肩を掴んで顔を寄せる。

「なっ——!?!」

「これを使えば《黄昏》に對抗できるんだ！」

突然迫ったリインの顔にアリサが顔を赤くして狼狽えるが、リイン
はそれに気付かず捲し立てる。

「これを……使う？」

リインの言葉にガイウスは眉を顰める。

しかし、リインはそんなガイウスの変化に気付かずに自分の思考に
没頭する。

「確かにみんなが言っているようにこれは抜け殻で何の力もないかも

しれない。だけどまだ利用価値はあったんだ」

「利用価値……」

「オリヴァルト皇子にとにかく連絡を……ってここだと《ARCUS》の通信は使えないか。ならゼンダー門に行つてすぐにこの《ロストゼウム》を回収して——」

「リインッ！」

堪らずガイウスはリインとアリサの間に槍を差し込んだ。

「リイン……今、お前は聞き捨てならないことを言ったな……この《守護者》をどうすると?」

「ガ、ガイウス……?」

ようやく思考を現実に戻したリインはアリサの肩を放して、ガイウスに向き直る。

そして彼の殺意が宿った目に自分が軽率な言葉を口走ったことに気が付く。

「悪いちよつと興奮していた。今のはその——」

「その——何だ!? 《守護者》を使って何を企んでいる!」

ガイウスの顔はより険しく歪み、リインに向けた槍に力が籠る。

「ガイウスいつたいたいどうしたんだ? そなたらしくないぞ!」

これまで怒った様子を見たことがなかったガイウスの急変した態度にラウラは驚きながらも諫めようとする。

「お前は何を言っていたんだリイン?」

ガイウスが槍を向ける先、リインに先程の発言は何だったのかユースは問い詰めるように声を張り上げる。

「ガイウス誤解だ。俺は別にノルドの平穏を乱すつもりなんてないんだ」

「だったら先程の言葉は何だ!」

リインの説得に対してガイウスは声を荒げて反論する。

《守護者》に害をなし、このノルドの地の平穏を乱すと言うのなら、リイン……お前は俺の敵だっ!」

はつきりと目に殺意を宿してガイウスは言い切り、槍を突き出した。

「っ——」

突き出された槍を太刀を抜いて受け止め、その反動でリインは距離を取る。

「ガイウス……」

受け止めた衝撃は学院で受けていた彼の槍を比ではない。

「やめるガイウスッ！　今のそなたは正気ではない！」

「俺は正気だっ！　ノルドは俺が守るっ！　何人たりとも穢させはしないっ！」

ラウラが制止の言葉を叫ぶが、その程度では止まらない。

「風よ、俺に力を貸してくれ！　カラミティホークッ！」

槍に黒風を纏ってガイウスは渾身の一撃を繰り出す。

「ガイウス……」

リインは太刀を横に構え、十字槍を刃を受け止め、彼が纏う《陰の気》にリインは目を伏せ、遣る瀬無さに歯噛みする。

まさか彼ほどの人格者まで《呪い》に侵されるとは思っていなかった。

おそらくはガイウスのノルドを愛する気持ちにつけ込んだのだろう。

「俺のせいなのか？」

クルトから始まり、黒の《呪い》に侵された者達が多過ぎることにリインはそう思わずにはいられない。

「——すまない」

巻き込んでしまっている自分が果たして謝る資格があるのか迷いながらも、力任せに押し切ろうとする槍を化勁で受け流し地面に突き立てる。

「なっ——」

驚きに目を見開くガイウスの懐にリインは入り込むと、胸に宿す陰の気に掌打を叩き込む。

「ガイウスッ！　リインッ！」

「俺なら大丈夫だ。それよりも——」

殴るついでに奪った《呪い》を握り潰すように呑み込みリインはガ

イウスの身を案じる。

「だがリイン。今ガイウスが身に纏っていた黒い気が移されたのではないのか!？」

「ラウラ……もしかして見えていたのか?」

意外なことを言い出したラウラにリインは思わず振り返るが、ガイウスが起き上がる気配に前に向き直る。

「ガイウス……」

「……ぐ……風よ、俺に力を貸してくれ」

息を詰まらせ、槍を杖にしながらガイウスは右目を黒く濁らせてリインを睨む。

「っ——」

「ノルドを護る《守護者》よっ! 俺に力を貸してくれっ!」

「ガイウスッ! ダメだそれだけは——」

「どうか! どうか! ノルドを脅かす不屈き者を “滅ぼし” てくれっ!」

ガイウスの叫びに応えるように地響きが起きた。

「な……何……地震!？」

「そんなまさか……」

あれは抜け殻だったはず。

なのにガイウスの叫びに呼応して動き出そうとしている大地の至宝の抜け殻にリインは瞠目する。

意志であるノイがこの場にいるからなのか。

力である《呪い》に侵された言葉による願いだからなのか。

それとも祖先から巨像を信仰していたノルドの民だからなのか。

様々な憶測が頭を過るが、結論を決めるよりも早くそれは動き出す。

「な……」

それに一番近くで写真を撮っていたノートンは突然の出来事に呆然と立ち尽くす。

「巨像が……動いた……」

今まさにただの遺跡だと思っていた巨像が岩に埋もれた腕を力任

せに引き抜いた。

「ああ……俺の声に応えてくれた……やはり貴方はノルドを護る《守護者》……」

「っ——ラウラ、ユーシス、アリサ、すまないっ！」

咄嗟にリインは峰を返して、呆然と見入っている三人。そして感激しているガイウスをまとめて《孤影斬》でその場から弾き飛ばす。

同時にリインは《鬼気》を解放して疾走する。

巨像は半身を岩に埋めたまま、右腕を天高くぎこちない動きで掲げる。

「うおおおっ！ まさかこんな場面に出くわせるなんて！」

ノートンは降り注ぐ大小様々な石や岩の雨に目もくれず、腕を振り上げた巨像にカメラを向けてシャッターを切る。

「馬鹿野郎っ！」

その首根っこを掴み、リインは振り返って巨像の腕の範囲から逃げ出す。

——逃げ切れない……

ノートンを抱えたままでは巨像の破壊の範囲から逃げられないことを悟り、リインは叫ぶ。

「ラウラッ！ 受け取れっ！」

力の限り全力でリインはノートンを投げ飛ばし、次の瞬間遙か空から振り下ろされた巨像の腕にリインは薙ぎ払われた。

35話 ノルド高原Ⅱ

「やれやれ、途轍もない轟音が聞こえて来た様子を見に行ってみれば孫娘と再会することになるとはな」

ノルド北部。ラクリマ湖畔の小屋でグエン・ラインフォルトはテールを囲う三人を前におどけた口調で笑ってみせる。

しかしそれにつられて笑う者は一人もおらず、ガイウスとアリサ、そしてユーススは沈鬱な面持ちで俯いて微動だにしない。

古代の遺跡が突然動き出したことの衝撃。

そして喉けてそれが自分達の仲間を襲ったともなれば当然の反応だろう。

「安心せい、あの少年なら大丈夫じゃろ。見たところかなり頑丈そうじゃったしの」

頭を打った様子だったので絶対とは言えないが、それでも動いた巨像に殴られて五体満足な姿にグエンは驚いた。

「とりあえず死人は出なかった。まずはそれを喜ぶことじゃ」

「それについては同感だな。これがライン以外の誰かだったら大惨事だったが、誰も死んでいないのだから悲観に浸るのは早いだろう」

俯いたままのガイウスを横目で伺いながらユーススはグエンの言葉に同意する。

「ところで貴方はここに住んで長いようだが、あの《守護者》の巨像の来歴を知っているのか？」

「詳しいことは知らんよ。しかし想像はできる」

「お祖父様、それは本当ですか!？」

「ああ、お前さん達はブリオニア島にノルドの《巨像》とよく似た物があることを知っておるか？」

「先程の雑誌記者から聞いた話だな」

グエンの言葉にユーススは頷く。

「ならば話は早い。このノルド高原とブリオニア島の間には何がある

？」

「えつと……アイゼンガルド連峰にユミル、それにアルスターだったかしら？」

突然の質問にアリサは地図を思い出したながら上げていく。

「いや……オスギリアス盆地か」

それに補足を入れ、ユーシスは答えが分かったかのように顔をしかめる。

「どういうことなんだ？」

「あの《巨像》は本来ノルドとは縁も所縁もなく、ブリオニア島の《巨像》と争っていた。貴方はそう言いたいのですか？」

「ああ、その通りじゃ」

ユーシスの答えにグエンは頷く。

「ワシは考古学者ではないから確かなことは言えん……」

だが、かつてラインフォルトを束ねていた者として言わせてもらえば、二人の人間がいれば大小に限らず対立は起きるものじゃ……

ならばその二つの《巨像》が争っていたとしてもおかしくはないじゃろ」

「その争った跡地が今のオスギリアス盆地ということか……」

「で、でもあんな石の像が動くなんて普通は考えられないわよ」

「アリサよ。暗黒時代には石を生き物のように操り動かす技術があったという……」

ならば《巨像》が動いたところで不思議はなからう？」

それを言われてしまえばアリサは口を噤むしかない。

むしろアリサ達は四月にその石の怪物と戦っているのだから、グエンの言葉を認めるしかない。

「それにのう……アリサ達には分からんかもしれないが、導力革命を経た今の時代の技術もワシから見れば異質な技術じゃ」

「そうなの？」

導力技術の異常さを言われてみても、生まれた時からあるそれに対してアリサは何がおかしいのか首を傾げる。

「まあ、それは今は良いじゃろ。今は——」

そう言つてグエンは孫娘からガイウスに顔を向ける。

「改めて半年ぶりじゃなガイウス」

「え……ええ。お久しぶりですご隠居」

ここまで黙り込んでいたガイウスは名前を呼ばれて憔悴しきった顔を上げる。

「ふむ……その様子だと少しは落ち着いたようじゃの」

「……はい」

元の理知的なガイウスに戻っていることにアリサとユーシスは安堵する。

「俺は何ということを」

「そうあまり自分を責めるな。誰もあの《巨像》が動き出すとは思わなかったじゃろ」

「そんなことは関係ないんです」

慰めの言葉をガイウスは首を横に振つて否定する。

「俺は……あの時、本当にリインのことが憎いと思つて殺そうとしていた」

だが、リインとの間の実力差はそんな気持ちだけで覆せるわけもなく、最後にはまさしく神頼みだった。

あの時は無我夢中で、そもそも《巨像》が本当に動いて助けてくれるとは思つてさえいなかった。

しかし、それでもリインを排除したいという気持ちに偽りはなく、自分の中にそんな黒い感情があったことにガイウスは戸惑う。

「だが、あの時リインが口走つた言葉もあまり褒められたものではなかったな」

「そうよね。ガイウスが愛してやまないノルドに何かしようつて考えたリインにも悪いところはあつたと思うし」

「そんなことは言い訳にならない」

二人のフォローもガイウスは否定する。

「俺はきつと、どこかで甘えていたのだろう……」

このノルドの地を見れば誰もが褒めてくれる。だからきつと、これから訪れる誰もが俺と同じ気持ちになつてくれるものだと決めつけ

ていた」

現にリインも含めた仲間たちはノルドの地を絶賛してくれた。

「ま、人によつてはノルドの生活を不便だと嫌がる者もいるだろう」

「お祖父様っ！」

「いや、良いんだアリサ。人の気持ちは様々だということをお忘れていた。何よりも俺はこのノルドの事なら自分が一番良く知っているのだと自惚れていたのだろう」

先程グエンが語った考察などガイウスは一度も考えたことはなかった。

そういう意味では歴史研究同好会、すなわち考古学を自主的に学んでいるリインの方が知っている事は多かつたのかもしれない。

「情けないものだな……」

世界を知りたいと思ひ故郷を出たというのに、俺は今日までブリオニア島に同種の《巨像》があることさえ知らなかつたのだから」

「己の無知に気付けたのならそれだけで十分じゃろ……」

それに今回のようなことが今後絶対にならないと言い切れないから
のう」

「それはどういう意味でしょうか？」

「ノルドが帝国と共和国の間でありながら平穏であるのはこの土地を領地にする旨味がないからじゃ……」

だがひとたび旨味があると分かれば……そうじゃのう、この先の石切り場に七耀石の鉱脈が見つかつたとしたら、このノルドは第二のクロスベルとなるじゃろう」

「クロスベル……」

「帝国と共和国はこのノルドを己の領土とするために戦い、どちらが勝つたとしてもこの高原には新たな街が築かれる……」

もしそんな日が来たとしたらガイウス、御主はどうする？」

グエンの質問にガイウスは押し黙る。

「もしもその手に力があれば、御主は帝国と共和国、両方を滅ぼしても良いと思つていたのではないか？」

「……………少し前までの俺ならあり得ないと言つていたでしょう。で

すが今はやりかねないと考えています」

「ガイウス……」

「それを聞いて一安心じゃな。ラカン殿達も留学を認めた甲斐があったというものじゃ」

「留学する前のお前さんだったら躊躇わず敵に槍を向けていただろう……」

ラカン殿から聞いたぞ。お前さんが小さい頃、集落を訪ねて来た帝国の軍人が乗ってきた導力車を魔獣だと思って襲い掛かったそうじゃな」

「なっ!？」

突然暴露された自分の黒歴史にガイウスは絶句する。

「ほう……この男にもそんな微笑ましい過去があつたのか」

「へえ……何だか意外」

「こう見えて弟が生まれるまでやんちゃだったらしいぞ。ドライケルスの盟友になるのが子供の時の夢で槍の腕を鍛えていたの难道?」

「ご隠居……それ以上は後生ですからやめてください」

羞恥に顔を染めてガイウスは身を縮こませる。

そんな珍しいガイウスの姿にユーススとアリサはそれまで張り詰めていた緊張を和らげる。

「ガイウスが正気に戻ったのなら、俺達も集落に戻るとしよう……」

リインが倒れてしまった以上、特別実習は中止して医者へ――」

「その必要はないよ」

ユーススがこれからの方針を提案すると、奥の部屋の扉が開いた。

「俺なら大丈夫だ。心配を掛けてすまない」

「リインツ!?! ちょっと起き上がって大丈夫なの!?!」

《巨像》の一撃を受けて頭を打って気絶したはずの少年は、頭に包帯を巻かれたまま平然とそこに立っていた。

「お前は……」

いくらリインでもあの巨体の一撃を受けたのだから、当分目を覚ますことがないと思っていたユーススとアリサは絶句する。

「リイン」

ガイウスも同じようにリインの登場に目を大きく見開くが、すぐに席を立てリインの前に立つと深々と頭を下げた。

「すまなかった。リインッ!!」

ノルドの民に土下座の文化はないのか、あればそれをしそうな勢いと気持ち伝わって来る謝罪にリインは困った顔をする。

「顔を上げてくれガイウス。俺も言い方が悪かった」

「いや、全面的に俺が悪い。詳しい話を聞こうともせずに俺は本気でリインを殺そうとしていた……」

謝って済む問題ではないのは分かっているが、とにかく済まなかった」

「いや、本当にガイウスのせいじゃないんだ。あの時のガイウスが正気じゃなかったのは言ってみればあの《巨像》の空気に中てられたようなものだから、ガイウスの本心じゃないことは分かっているから」
「だが……」

「空気に中てられたか……まるであの《巨像》がなんなのか知っている口振りだな」

ガイウスの言葉を遮って、ユーススがリインの失言を指摘する。

「それは……」

「答えられないか？ それなら質問を変えるが、次は誰の番だ？」

「……質問の意味が分からないんだが？」

「マキアスにラウラ、そして今回のガイウス……」

この中の一人だけが暴走したと言うのなら偶然で済ませられるが、三回も続けば何らかの作為があると疑うのは当然だろう？

マキアスもあれから貴族への拒絶感はあるものの弁えた行動が出て来ている……

ラウラはアルゼイド子爵の娘だ。いくら追い詰められたはいえ強盗を犯すとは思えない……

そして今回のガイウス。いくらお前の言葉に危機感を持ったとしても具体的な話も聞かずに愚行に走るような男ではない」

ユーススは改めてリインを睨み付け、問い質す。

「三人が三人共、理性の箍が外れて暴走したことが偶然ではないとす

れば、当然次があると考えるのが妥当だ……

最有力候補はおそらくエマとフィーの二人だろうが、当然俺やアリサもその中に入っているのではないか？」

「参ったな……そこまで気付かれるとは思ってなかった」

理路整然としたユーシスの答えにリインは頭を掻く。

「ユーシスの言う通り、俺はみんなが暴走した原因について知っている……

だけど一言では説明し辛いことだし、何よりも信じてもらえるとは思えない……

それに俺にとっても今回のことは想定外のことだったんだ。考えをまとめる時間をくれないか？」

「……そうだろうな。それに話を聞くならラウラも同席させた方が良いだらう」

「そういえばラウラは何処に？」

「先にノートンを連れて集落に戻ってもらった。《巨像》が動いた音と地震は向こうも気付いているだろう。その連絡を兼ねて先行してもらった」

「そうか……」

冷静な対処だとリインは頷く。

「それよりリイン、貴方起き上がって大丈夫なの！ あの《巨像》に殴られたのよ！ どうしてそんなにピンピンしているのよ!？」

「いや……殴られたって言っても伸ばし切った拳だったし、太刀の一撃でだいぶ衝撃は減らせたから大丈夫だよ——そういえば俺の太刀は？」

リインが尋ねると申し訳なさそうにガイウスが立て掛けてあった二本の太刀を持ってくる。

「二本ともここにあるが、重い方の太刀は半ばから折れてしまっていた」

「………まあ流石に仕方がないか。それで《巨像》はあれからどうしたんだ？ まさかとは思うがあのまま動き出していたりしないよな？」

「それは大丈夫だ。動いた《巨像》は岩場から崩れて下の滝つぼに落ちた……」

そのまま瓦礫に埋まってしまったが動く気配はなかった」

「そうか、それは良かった」

あの時は咄嗟で何故《巨像》が動き出したのか結論を出すことができなかつただけに、最悪な状況になっていないことにリインは安堵する。

「リイン……謝罪する気持ちは変わらないのだが、改めて聞いて良いか？ お前は《巨像》を使って何をするつもりだったんだ？」

「それは……あれ……？」

ガイウスの質問に何と返答しようかと思つたリインは不意に首を傾げる。

「どうしたリイン？」

「いや……その……」

手で顔を押しさえて記憶を反芻するリインにガイウス達は首を傾げ、まさかと気付く。

「もしかして……」

「ああ、何を思い付いたのか忘れてしまったみたいだ」

あれだけの衝撃を受けて、頭まで打っているのだから当然といえば当然なのかもしれないが、何とも締まらないオチだった。

・*

「まず前提として皆さんは女神の至宝《セプトⅡテリオン》を知っていますか？」

夜、集落に戻つたりイン達はウォーゼル家のゲルに主要人物、Ⅶ組の他にはラカンとグエンを合わせた七人だけが集まつて顔を突き合わせていた。

「《セプトⅡテリオン》……」

古代人が女神から授かつたという力を秘めた《七の至宝》のことだね？」

「七耀教会の聖典にも記されている伝説じゃが、ここでその話が出て来たということはあの《巨像》は《七の至宝》の一つということか?」

ラカンの答えにグエンが続く。

「はい、その通りです」

すんなりと受け入れ、その上で言おうとした言葉を先に言ってくれた二人にリインは苦笑しながら頷く。

「あの《巨像》は、韌き力を秘めし大地の至宝、《ロストゼウム》です」「なるほど……しかし、至宝と言うにはもつと不思議な力を持っているものではないのか?」

「ええ、至宝もアーティファクトの一種なので本来なら超常の力を持っていますが、《ロストゼウム》と《アークルージュ》の二つに関しては事情が異なります」

「《アークルージュ》……それがブリオニア島にある《巨像》の名なのかね?」

「はい……猛き力を秘めし焰の至宝、《アークルージュ》……」

詳細は省きますが、それらを与えられた二つの眷属はそれぞれ繁栄していききましたが、争うことになり眷属の願いを叶える形で戦うことになりました……

結果は相打ち。力尽きた至宝の抜け殻はそれぞれ遠くの地へ、ノルド高原とブリオニア島に飛ばされたんだと思います」

もしかすればその衝撃でできたのが高原と孤島なのかもしれないと、リインは付け加える。

「嘆かわしいの、結局昔も人は争ってばかりとは」

「そうですね。当時の人達は至宝同士を争わせてしまったことに後悔したみたいですが、残念ながらそれで全てが解決したわけではありませんでした」

グエンの感想に頷きながらリインは続ける。

「二つの至宝の『力』が最後の激突で融合して、全く新たな『存在』がこの世に生まれてしまったんです……」

二つの眷属はそれを《巨イナル》と呼び《鋼の至宝》と名付けま

した……

この超越的な存在を持って余した二つの眷属は協力してそれを封じること成功しましたが、表向きには手を組みながらも裏では互いに出し抜こうとしていた眷属たちに至宝は絶望して「呪い」を残してしまっただけです」

「それが今回ガイウスを突き動かしたものの正体だと？」

「はい……過ちを越えた後も争うことを止めなかった眷属たちに、永遠に「争い」続ければ良いと当時の眷属たちに科せられた「呪い」……

そんな《黒い種》は影響力の大小はともかくとしても、このゼムリア大陸のほぼ全てに広がっているでしょう」

「何ともスケールのでかい話じゃな」

「帝国では信じられない愚行が時に突発的に起こることがあります……

今回のガイウスのことや俺達の知るところではラウラやマキアス、エリオットのお父さんであるクレイグ中将の暴走がそれに当たります……

って、みんなさつきから黙り込んでいるけど大丈夫か？」

そこでリインは話を切って先程から一言も喋らないクラスメイト達の様子を窺う。

「いや……」

「そのな……」

「分からない所があったら聞いてくれ、答えられる範囲でならできるだけ答えるから」

まるで授業での教官の様に気軽に言ってくるリインに一同は頭を痛める。

「いきなり至宝と言われても……正直実感が湧かずに困惑している……《七の至宝》はただの御伽噺ではなかったのか？」

「《七の至宝》は実在しているよ……みんなも見たのはそれぞれ違うと思うけど《リベールの異変》の時に現れた浮遊都市、あれも至宝の一つだったんだ」

「あれが至宝だと……？」

「にわかには信じられないが、受け入れるしかなさそうだな」

ラウラの質問から追加された情報にユースとガイウスは唖った。「むしろどうしてお祖父様とラカンさんはそんなに落ち着いていられるんですか？」

アリサはすんなりとリインの話を受け入れている大人二人に尋ねる。

「いやいや、ワシも十分に驚いておるぞ。長生きはするものじゃな」

「ええ、それに彼が語る『呪い』というのもノルドに代々伝わる『悪しき精霊』に通じるものがあるからな」

グエンとラカンは呑み込み切れていない若者たちに苦笑する。

「それにのうアリサ……ワシにはその『呪い』について心当たりがあるんじゃないよ」

「お祖父さま、それってもしかして——」

「《列車砲》を造った時から思っておったんじゃない……」

何故ワシらはあそこまで武器を造ることに熱中していたのだろうか……

おそらくワシとシュミットはあの頃から『呪い』に侵されておったのじゃ！」

「いえ、グエンさんはどうかは分かりませんが、シュミット博士とラツセル博士のあれは素だと思えます」

拳を握って断言したグエンにリインはきっぱりと言いつ切る。

「あ、やっぱりそうじゃったか？」

そんな答えにグエンはおどけた調子であつさりと言いつ下がつた。

「お祖父様っ！」

そんなふざけた態度にアリサが激昂する。

「話を逸らさないで！」

『呪い』が本当にあるのなら、その影響を受けているのは母様でしよっ！

リイン、お願い。うちに行つて母様から『呪い』を払つて、ラウラやガイウスにできたなら母様の『呪い』だつて消せるんでしよっ！」

「『呪い』は人の悪感情の背中を押すことだけなんだ……」

アリサとイリーナさんの間に何があったのかは知らないし、あの時見た様子では『呪い』に侵されている様子は——」

「違うっ！」

諭すようなリインの言葉をアリサは声を上げて拒絶する。

「全部『呪い』のせいよ……母様がお祖父様を裏切ったのも、お祖父様が黙ってそれを受け入れたのも、父様が亡くなったことも全部『鋼の至宝』のせいに決まってるわ！」

「アリサ、ちよつと落ち着かんかい」

捲し立てるアリサを落ち着かせるようにグエンはアリサの肩に手をやるが、それを振り払ってアリサはリインに縋りつく。

「ねえ、そうでしょ……？」

両手でリインの襟首を掴み、今にも泣き出しそうな顔でアリサは訴える。

「お願いだからそうだって言っつてよ、リイン……」

そんなアリサにリインは目を伏せて首を横に振る。

「もしイリーナさんを変えたものが本当に『呪い』だったとしても、俺にできることは何もない」

「っ——！」

「アリサッ！」

衝動的に振り上げられた手をラウラが背後から掴む。

「っ——返してよ……」

「アリサ……」

「あの優しくて温かだった……私が大好きだった母様を……返してよ
おとおおおッ——!!」

アリサの悲痛な叫びにリインは何も言葉を返すことはできなかった。

・*

「遣る瀬無いものだな……」

満天の星空を一人で見上げながらリインは一人ごちる。

あの場はそれ以上、話せる空気でもなくそれに必要最低限の事は伝えることはできた。

アリサはⅦ組に用意されたゲルに戻り、リインは彼女と距離を置いた方が良くということなどでグエンと共にウォーゼル家のゲルに泊まることになった。

が、リインは眠らずにそこから抜け出していた。

集落の垣根を越えて、散歩するように高原を歩く。

「アリサの事情か……」

思えばそこにちやんと向き合ったことはなかった。

同じリベールに家出した縁はあっても学院では積極的に言葉を交わしていたわけではない。

そして何とかして上げたいと思っても、アリサに対してできることは何もないと答えは出ている。

「わたしのせいだよね？」

いつの間にかリインの背後に付き従う様に浮かんでいたノイが呟く。

「ノイのせいじゃないよ」

リインは振り返り、浮かんでいるノイに手を差し伸べ彼女を肩に乗せる。

「何もかもが『呪い』のせいじゃない……当事者でもない俺が言えることじゃないかもしれないが、ノイが責任を感じることはないんだ」

気休めかもしれないが、はつきりと断言する。

「うん……」

ノイは頷きはするものの俯いた顔を上げることにはなかった。

「安心してくれ、過去を変えることはできないけど、必ず俺が『呪い』の因果は断ち切ってみせるから」

「リイン……」

「その様子だと、忘れてしまったというのは嘘みたいね」

二人の会話にルフィナが現れて割って入る。

「あの子たちに教えるメリットはないと判断したのかしら？」

「それもあります」

リインは憚ることなくあの時の言葉は嘘だったと認める。

「でも、あの時の俺は冷静じゃなかったのは確かです……」

思いついた案も、俺よりもノイの協力が不可欠だし、場合によっては今よりも悪いことが起きる可能性だってある。だから——」

「聞かせて」

ノイはリインの言葉を遮った。

「わたしにもできることがあるなら、何でもする。だからリインの考えを教えて」

「ノイ……」

はつきりと自分の意志を言ったノイにリインは驚き、思わず傍らのルフィナを見る。

「この子もそれなりに成長したということでしょうね。どうするリイン君？」

ルフィナの問い掛けにリインは顔をしかめ、深々とため息を吐いた。

「《鋼の至宝》を錬成する。それが俺が考えた《黄昏》の対抗策です」

「《至宝》を錬成する？」

「何を言っているのリイン君、そもそも《黄昏》が《鋼》を錬成する儀式のはずでしょ？ それじゃあ意味がないわよ」

リインの答えにノイとルフィナは揃って首を傾げる。

「正確に言えば、《未完成の鋼》を《完全な鋼》として錬成し直すんです……」

そうすれば《黄昏》の《鋼を錬成する結末》を先取りすることができるので、そこに至るまでの因果は崩壊させられるはずですよ」

「ちよつと待ってリイン君。《未完成の鋼》ってどういうこと？」

「ルフィナさん、どうして《ロストゼウム》の抜け殻はあそこにあるんですか？」

リインは《大地の至宝》の抜け殻を見た時に思ったことをそのまま口に出す。

「二つの至宝が一つになったのなら、《器》である抜け殻も錬成されて

いたっておかしくないはず……

いや、むしろ《器》が錬成されずに剥き出しの《力》だったから誰にも制御できなかったんじゃないんですか？」

《影の国》で自分の《器》から《意志》が抜け出た経験があるからこそリインは思う。

「1200年前、二つの至宝がぶつかり合って《力》と《意志》は錬成されて一つになった。だけど《器》が錬成するには至らなかった……《黄昏》は突き詰めて表現するなら《七の騎神》を《鋼の器》に至らせるための儀式……」

それなら《大地》と《焰》。この二つの《器》を錬成して《鋼の器》にしてノイに返せば《黄昏》を上書きできるんじゃないですか？」

「リイン君……」

「素人考えですけど、これが俺が思い付いたプランです」

「素人ね……」

説明を締めくくったリインにルフィナは何とも言えない顔を向ける。

確かに考え方は素人だ。

そもそも教会の人間は《アーティファクト》を未完成だとは考えない。その点は結社も同じだろう。

ましてや《鋼の至宝》は奇蹟の上で成り立った産物。

誰にも制御できなかったその存在が未完成だったからだと誰が想像できるだろうか。

「とりあえず、リイン君の憶測が正しかったとして問題が二つあるわね」

「二つもですか？」

「ええ、まずは一つ。至宝同士の衝突でも錬成されなかった《器》を錬成する熱量はどうやって確保するつもりかしら？」

「あ……」

「二つ、《器》を完成させても《力》は《七の騎神》に分割されたままだとするならば、できるのはただの木偶の坊だと思うんだけどそこはどうするつもり？」

「それは……その……」

ルフィナの指摘にリインは何も思いつかず狼狽える。

「でも考え方そのものは悪くないと思うわ」

そんなリインの姿に苦笑を浮かべてルフィナは助け舟を出す。

「《鋼の器》いえ、《鋼の騎神》を作り出すことは不可能でしょう……」

でも例えばあの抜け殻から武器を作って《相克》に紛れ込ませたらどうなると思う？」

「それは……」

「熱量の問題は丸ごと錬成するよりも必要ではないはず……」

そして《第一相克》で《鋼の武器》を錬成できれば、《黄昏》の因果は止められる……

仮に止められなかったとしても、《黒》への対抗手段として明確な切り札を作り出すことが出来る」

「でもそれにだって問題があると思います……」

これから命のやり取りをするのに、敵に用意してもらった武器を使って誰が戦ってくれるんですか？」

リインが知っている《起動者》はアリアンロードとルトガーの二人だけ。

猟兵であるルトガーがそんな甘いことをしてくれるとは思えないし、アリアンロードとは馴れ合いをしないと決めている。

「それに関しては問題ないわ。おそらく《鋼の聖女》はこの話に乗って来るでしょう」

「何を根拠に断言できるんですか？」

自信をもつて言い切るルフィナをリインは訝しむ。

「良いリイン君。これは馴れ合いではなく『取引』というのよ」

そう言うルフィナの表情は悪い顔をしていた。

36話 ノルド高原Ⅲ

「ラインの話をどう思った？」

Ⅶ組のために用意されたゲルに戻ったガイウスは就寝の準備をせずに尋ねた。

「おそろく嘘は言っていないだろう……」

だが、むしろそれを聞きたいのは俺の方だ。ラインの話を聞いて「呪い」によって駆り立てられたお前はどう思った」

「俺は……正直実感が湧かないな」

ラインの話とあの時の衝動を思い出しても「呪い」という曖昧なものに突き動かされたとは思えなかった。

「確かに今振り返ってみれば、あんなことをした自分が信じられない……」

そう考えると「呪い」は確かにあると思うのだがそれを素直に受け入れることはできない」

「私もガイウスと同じ考えだ」

ガイウスの言葉にカーテンの仕切りを回って二人の会話に入ってくる。

「ラウラ……アリサは？」

「とりあえず落ち着かせたら今日の疲れが出たのだろう。そのまま眠ってしまった」

「そうか……」

耳を澄ませば確かに寝息が聞こえて来る。

ならばと、少しだけ声を潜めてユーススは続けた。

「「呪い」に突き動かされたのはラウラも同じだが、やはりガイウスのように逆鱗に触れられたからか？」

「いや、私の時はそうではなかった」

できることなら思い出したいくない醜態だったが、それを噛み締めるようにラウラは語りだす。

「一回目の特別実習で不覚を取ってしまった事……」

リイン達と対等に鎬を削り競い合い高め合えると思っていたのに、私は井の中の蛙だったことがどうしようもなく悔しかった……

だから振って湧いた強くなる方法に飛びついてしまい、そのまま歯止めが効かずに外法で得た力の実感にのめり込んでいた」

「今はどうなんだ？」

「今はもうリイン達への劣等感はない。むしろ力は失ったはずなのに体は調子が良いくらいだ」

「それを信じるなら、再発の心配はないようだな。俺としてはリインが何故それだけ事情に詳しいかが気になるが」

「それはリインも呪われていたからではないだろうか？」

「何故そう思う？」

「ユースも読んでいるなら知っているだろう？ 《Rの軌跡》の主人公の家出の原因となった《鬼の力》のことを」

「ああ、人を獣じみた化物に変えてしまう《異能》か」

「《鬼の力》……以前サラ教官が言っていたリインとリンクを結べない原因のことか？」

今でこそ、多少の改善はされたがまだ制限がある戦術リンクしか結べていないガイウスは聞き返す。

「ああ、私たちの『呪い』が突発的なものだとするならば、リインのそれは常にあったようなものようだ」

「それは……大丈夫だったのか？」

「大丈夫なものか、あのリインが殺意の赴くままに人を襲っていた……」

前もってリインの話だと知っていなければ、とても主人公がリインだと思わないだろう」

「リインが人を襲った……にわかに信じられないな」

「だがアネラスさんがそう言っていた……」

しかし何故リインがそんなものを出すことを認めていたのか疑問だったが、こうして考えると『呪い』のことを帝国に周知させるための戦略の一つだったのかもしれない」

本人がその場にいたら全力で否定する答えにラウラは行き着く。

自分の失敗を含めた半生を演出過多で世に知らしめるなど、ラウラには到底真似できない。

「そうなる俺も一度読んでおくべきか」

クリスから勧められたが、やはり学業や部活を優先して読もうとは思っていなかったがこれを機に読んでみるのも良いかもしれないとガイウスは考える。

「しかし、これでガイウスもか……」

仲間意識というわけではないが、リインには借りばかりが増えていくな

「そうだな……この借りは大きいな。しかしあのリインに恩を返すには何をすれば良いのか見当もつかないな」

ラウラとガイウスは顔を見合わせて唸る。

そんな二人にユーススはため息を吐いて助言する。

「責任を感じるのには良いが、あまり気負い過ぎるなよ」

「ユースス？ いや、しかし……」

「リインにとつてはお前達の暴走は『呪い』による予定調和としか思っていないだろう……」

むしろあの態度からみれば、自分が近くにいたからとでも考えているような感じでもあった……

そこでお前達が『呪い』を言い訳にせずに恩返しを願ったところで、あいつも居心地を悪くするだけだろう」

「だがそれでは——」

「何も開き直って恩を踏み倒せと言っているわけではない。ただ入れ込み過ぎるなど言っているんだ」

「それはどういう意味だ？」

ユーススの言葉にラウラは首を傾げて聞き返す。

「俺達の間にはあくまでも卒業までのものと考えておくべきだ……」

お前達がリインへの恩返しを優先して自分達の目的を蔑ろにでもしたら、それこそ恩を仇で返しているようなものだ」

「う……それは……」

「返す言葉もないな」

ユーシスの指摘に二人は唖る。

真面目過ぎる二人にユーシスはため息を吐く。

同じ真面目でもマキアスの方はまだそういう点においては線引きができているだろう。

「だが、まあお前の場合はリインに嫁入りして借金を免除してもらう方法もあるがな」

「なっ!? 私がリインに嫁入りだと!? そんな——」

ユーシスの提案にラウラは声を上げて反論しようとしたところで、カーテンの仕切りの向こうで何かベツドから落ちる音が聞こえて来た。

三人は一斉にそちらに顔を向けるが、カーテン越しの向こうではそれ以上何か動く気配はない。

「そういうえば、リインは出身を理由にシユバルツァー家を継ぐことに後ろ向きだったな」

ユーシスは何事もなかったかの様に向き直ってそんなことを呟いた。

「む……それは本当なのか?」

「ああ、本人から直接聞いた」

そもそも家督を継ぐどころか、他家へと婿入りすることも考えていないだろうとは言わずにユーシスは続ける。

「まあ男爵家の養子ではあるが、それを差し引いても貴族にとっては喉から手が出る程の優良物件ではあるな」

「それは……」

ユーシスの指摘にラウラは押し黙る。

ラウラも貴族の娘なのだから伴侶を決めることは義務の一つでもある。

父からは好きにして良いと言われているが、ラウラとしては共にアルゼイト家を背負ってもらおう者にはやはり相応の実力者を伴侶にしたいと思う。

その点、リインはその父の信頼も厚く、ユーシスが言う通り理想の

相手だろう。

「ダメだ。そんな方法で借金を免除してもらおうわけにはいかん」

「まあ、これ以上俺がとやかく言うつもりはないがあまり悠長なことを言っていると誰かに先を越されることになるぞ」

ユーシスがそう言うのと再びカーテンの向こうで物音が立つ。

そして、そのカーテンを盛大に舞い上げてアリサが叫ぶ。

「ちよつとそれはどういう意味よ!? 私は別にリインのことなんて――」

「ほう、俺は別にアリサのことを指摘した覚えはないのだがな」

激昂して詰め寄ってくるアリサにユーシスは涼しい顔をして言い返す。

「俺は違うが、貴族生徒にとって学院生活は一種の婚約者探しの場でもある……」

リインはそんな貴族の娘たちにとってまたとない優良物件だというだけの話だ」

「ゆ、優良物件って……それは言い過ぎじゃないかしら?」

「さあな。俺の意見などあくまで一つの考えでしかないからそれ以上は何も言えないな」

含みのある言葉にアリサは不満そうに頬を膨らませる。

「どうやら落ち着いたようだな……」

家族と不仲な気持ちは分からないでもないが、都合の良い言い訳だからと安易に「呪い」のせいにするのは控えておくべきだろうな」

「何でユーシスにそんなこと分かるのよ?」

「分かっているわけではない。お前が遮って聞けなかったが《鋼の至宝》のことにはまだ話していないものがあると感じただけで……」

あいつがどんな思惑で《鋼の至宝》を擁護しているか分からないが、全てを聞かない内にどちらか一方を悪だと決めつけるのは早計だぞ」
「わ、分かっているわよ」

「果たして本当にそうか? 貴族の観点から言わせてもらえば、お前の母の立ち振る舞いには見習うべきところがあると思っっているのだが」

「え……？」

ユーシスの意見にアリサは耳を疑う。

「ど、どうしてよ？ 母様は家族をお祖父様を裏切ったのに」

「裏切ったのではなく、迷わなかったという話だろ？」

「迷わなかった？」

「人の上に立つ者は迷い揺らいではならない。常に自信を持った立ち振る舞いを心掛け、率いる民を不安にさせてはならない……」

「貴族の義務」だがこの場合は「上に立つ者の義務」と言い換えることができるだろう

「……何よ……それ……」

訳が分からないとアリサは首を振る。

「それじゃあ母様がお祖父様にしたことは正しいって言うの?!」

「場合によっては、家族の情よりも優先するものがある。それが上に立つ者が背負う義務だ」

激昂するアリサにユーシスは何処までも冷静な言葉を返して二人は睨み合う。

「二人とも、落ち着け」

「ああ、ここで俺達だけで議論しても——」

それぞれアリサとユーシスに分かれて、ラウラとガイウスが仲裁に入る。

と、そこでガイウスは言葉を切って天井を仰いだ。

「どうしたガイウス？」

「いま……何かが見えた……あれは監視塔？」

顔を押さえて今脳裏に映った緋色の光景を反芻する。

場所は監視塔だろうか。

砲撃を受けたのだろうか、燃え盛る炎にそれに対処しようと動き回る軍人たち。

そして離れた場所から導力迫撃砲から笑いながら監視塔に砲撃を行っている者達の姿が見える。

「ガイウス、大丈夫か？」

突然顔を押しさえて蹲ったガイウスに「呪い」の後遺症かと考えた

ユーシスだったが、次の瞬間ガイウスは駆け出していた。

「今のは……」

見えた光景が何なのかは分からない。

外は静かで平穏な星空が広がっていたが、ガイウスは居ても立っても居られずに走り出す。

すると休んでいたはずの馬がガイウスに並走して乗れと促す。

「すまない。感謝する」

一言、礼を言ってからガイウスは馬に飛び乗り、ユーシス達の声振り切つて一人高原へと飛び出した。

「いったいこの地で何が起きているんだ……」

馬を走らせながらガイウスは先程の光景を思い出す。

白昼夢にしては鮮明で、そして理屈を抜きにあれが現実のものだと感じさせる。

しかし、馬を走らせて監視塔に向かうものの、夜の高原は静かなものだった。

暗い夜の中、監視塔の輪郭を示す赤い誘導灯が見えて来るが緋色の光景はそこにはなく、肩透かしを食らった気持ちでガイウスは馬の速度を緩める。

その瞬間、監視塔が爆ぜた。

「なっ!？」

先程見た光景が目の前で再現される。

次々と撃ち込まれる砲撃に監視塔の炎はその度に大きくなっていく。

「くっ——」

まだ距離があるのに重く響いて来る破壊音にガイウスは歯を食いしばりながら馬を監視塔とは別の方向へと走らせる。

「確か奴等がいたのはこの先の丘のはず」

緋色の光景を思い出しながら、そこへ向かうとちょうどその武装集団は崖の下に止めてあった導力車に乗り込もうとしているところだった。

「貴様ら！　そこで何をしている!？」

ガイウスが叫ぶと武装集団は一斉に向き直る。

「ちっ、目撃者か……どうする?」

「はっ、何言ってるんだ。殺すしかないだろ」

当たり前のように武装集団はガイウスに向かって導力ライフルを構える。

「っ——しまった」

ガイウスも迎撃に構えようとするが自分が槍を持っていないことによく気が付く。

が、そんなガイウスの都合など構わず武装集団が引き金を引く、その瞬間馬が勝手に走り出して銃弾は虚空を貫いた。

馬はそのまま反転し、ガイウスの意志とは関係なく走り出す。

「逃げたぞ! 追えっ!」

武装集団の声を背後に、ガイウスは悔しさに歯を食いしばりながら手綱を握り直す。

「すまない。助かった……しかし、このまま奴等を集落に連れて行くわけには——っ」

どうにかして撒かなければと考えたところで右腕に鈍い痛みが走る。

「大丈夫だ。それよりもこのまま走り続けてくれ」

氣遣ってくる馬の気配に言葉を返しながら不甲斐ない自分にガイウスは内心で毒づく。

「不甲斐ない……」

自分が何故監視塔が砲撃される光景を予知できたかは分からない。しかしその衝動に任せて動いて窮地に陥っていることにガイウスは自嘲する。

だがそんな後悔と反省を嘲笑う様に導力車は瞬く間に疾走する馬に追い付き並走する、ガイウスは横から向けられた銃口に息を呑む。

「おい、どうせならゲームをしないか?」

が、不意に武装集団の一人がそんなことを言い出した。

「ゲームだと?」

「的当てゲームだ。後ろから一発ずつ交代で当てて行って、倒した奴

に今回の取り分を上乗せってな」

「は、良いぜ受けてやるよ」

ガイウスを無視して勝手に男たちは盛り上がる。

「おいおい、余計なことしてないでさっさと撤退するべきだろ……」

それに集落に逃げ込まれたらどうするつもりだ？」

「は、何をビビっているんだよ？ 銃火器も置いてない集落に何の脅

威があるって言うんだ？

俺達はあの《リベールの悪夢》を乗り越えた猟兵团なんだぞ」

「そうだ。それにどうせ帝国と共和国の戦争が始まるならあんな集落なんて一瞬で消えちまうだろ？」

ならいつそあんなちっぽけな集落でも俺達が略奪して有効に使ってやろうじゃねえか」

「下衆共が……」

ガイウスは悪態を吐かずにはいられなかった。

そんな態度に男は醜悪な笑みを浮かべる。

「は、威勢がいいな。お前が俺達を楽しませてくれたなら集落には手を出さないでやるぞ。ま、精々頑張るんだな」

そう言い残して並走していた導力車は速度を落として、ガイウスの後ろに着く。

「じゃあまずは俺からだ。一発で終わらせてやるぜ」

窓から半身を乗り出して銃を構える男。その顔は醜く歪んでいた。

「くそ……」

どれだけ忌々しくても丸腰のガイウスにできることは逃げることしかできない。

ましてや自分の迂闊な行動が原因で集落を、家族を危険に晒すわけにはいかない。ガイウスはただ言われるがままに逃げることにしかできなかつた。

……

……

……

どれだけの時間が過ぎただろうか。

ガイウスの背にはいくつもの弾痕が刻まれ、深紅の制服は彼の血で赤黒く染まっていた。

「……………ここまで……………付き合わせて……………しまつて済まない……………お前だけでも逃げてくれ」

最後に馬に語り掛け、ガイウスは手綱を手放して自分から落ちる。

「良っしやあ！俺の勝ちだ！」

「くそっ！」

上がる歓声と悪態をどこか遠くに聞きながらガイウスはまだ朝には遠い、黒い空を呆然と見上げる。

「ここまでか……………」

まさかこんな終わり方をするとは想像もしていなかった。

ましてやここまで自分が無力だったとも思っていなかった。

導力車が目の前で頭の上で停まる。

「くくく……………なかなか楽しかったぜ。何か言い残すことはあるか？」

「……………煉獄に堕ちろ、愚図が」

精一杯の虚勢を張り、ガイウスは武装集団たちを睨み付ける。

「は……………最後まで威勢の良いガキだ。それじゃあ死ね」

その言葉を言った瞬間、風が吹き男が持つ導力ライフルが両断されて地に落ちた。

「なっ！」

驚き何が起きたのか彼らが把握するよりも早く、それはガイウスと武装集団の間に唐突に現れると異様に長い太刀を一閃させ、それだけで五人いた武装集団たちをまとめて薙ぎ払う。

「……………だれ……………だ……………？」

痛む体を何とか動かしてガイウスが顔を上げるとそこには白く長い髪に、黒い軍服に白いマント姿の背中があった。

「……………《剣鬼》……………なのか？」

その姿はクラスメイト達から聞いていた服装だった。

おそらくは向こう側を向いている顔には片角の鬼の面があるのだろう。

「ちっ……………油断したか」

「どこのどいつか知らないがそんな仮装で俺達がビビると思つていたのか？」

「俺達は猟兵《バグベアー》……あの《リベールの悪夢》から生き残つた猟兵団だぞ」

武装集団は使い物にならなくなった銃器を捨てて、格好に反して弱そうに見える《剣鬼》に武器を構える。

それでも油断を最小限に五人は散らばって《剣鬼》を囲むようにじっくりと移動していく。

「《リベールの悪夢》……」

リン・シユバルツアーに一蹴されただけの有象無象が何を得意気に語っている？」

「なっ!？」

痛烈な言葉を返されて男は絶句する。

そして次の瞬間には憤慨して叫ぶ。

「ぶっ殺せっ!!」

取り囲んだ自称猟兵達は一斉に《剣鬼》に向かって襲い掛かる。

「危な——ゴフツ」

四方から襲い掛かる猟兵達にガイウスは思わず叫ぶが身体に走る痛みに咳き込む。

しかし、そんなガイウスの気遣いなど全く意味はなかった。

まさに一瞬、ガイウスの目には何が起きたのかも分からず、飛び掛かったはずの猟兵達は一斉に逆の方へと弾き飛ばされた。

「あ……」

音を立てて、草原に倒れて動かなくなった猟兵達にガイウスはそれまで保っていた緊張の糸が切れる。

——ああ、これでノルドの平穏が……家族は大丈夫だ……

できることなら救ってくれた《剣鬼》に礼を言いたいが、もはやガイウスは限界だった。

——彼をここに遣わせてくれた。風と女神の導きに感謝を……

その思考を最後にガイウスの意識は闇に落ちた。

「まったく……貴様らがここまで無能だったとはな」

眼鏡の男は猟兵達を失望を隠さずに罵る。

「闇夜に乗じて、帝国の監視塔と共和国の基地をこちらが用意した迫撃砲で砲撃するだけの簡単な仕事だと思っていたのだが、何か弁明はあるかね?」

「くっ……」

返す言葉もなく猟兵達は押し黙り、内心では眼鏡の男と同様に戻ってこない仲間のことを口汚く罵る。

「それでどうするつもりだね?」

「どうするとは?」

「契約内容は、帝国と共和国との戦闘を誘発させることだったはず。だが依然と両国に目立った動きはない。ではどうしてくれるのかな?」

「御言葉だが、策を用意したのはお前の方だ。それが失敗したのならお前の策が悪かったということではないのか?」

「ふ……子供でもできると騒いでいたのは誰だったのかな?」

「っ……」

責任の擦り付け合いは猟兵達の方が不利だった。

むしろそこにいる共和国の基地を襲った者達の方がリスクが高かったくらいなのだから、帝国側で失敗するとは全く想定していなかった。

「どうする? このまま何もしないつもりなら、前金を返金して違約金を払ってもらわないと困るのだが?」

「チツ……分かった。だが、迫撃砲に代わる装備は貸してくれるんだろうな?」

「ああ、もちろん……ダメ押しの一手をしてもらうためにも用意を……いや、ちよつと待ってくれるかな」

領きかけた眼鏡の男は妙案を思い付いたと言わんばかりに前言を撤回する。

「ん……何だ？」

「仕事を始める前に一旦落ち着こう、私も君たちも少々冷静ではなかった」

「あ、ああ……」

突然下手に出た依頼人に毒気を抜かれたように猟兵は頷く。

「私はこう見えて音楽を嗜んでいてね。ひとまず一曲披露させてもらって良いかな？」

「別に構わねえが、音楽の良し悪しが分かる奴等なんてここにはいないぞ」

「構わないさ。これは言わば私が頭を冷やすためのルーチンみたいなものだから」

「そうか、それなら聞かせてもらおうか」

ここで無理に依頼人の提案を拒み、機嫌を損なわせる意味はないと猟兵は眼鏡の男の提案に乗る。

「それでは……」

男は徐に古びた横笛と、黒く染まった七耀石を取り出す。

石を足元に置き、そして男は笛を吹く。

「なっ!？」

男の笛の音に合わせるように石から黒い何かが噴き出し、猟兵達を呑み込んだ。

「ククク……《獅子戦役》で《偽帝》オルトロスがこれを使い、帝都で《暗黒竜》を復活させたというのは本当のようだな」

ノルドの石切り場の奥地に封印されていた黒く染まった蒼耀石。

それは《暗黒竜》を倒した時に残った七耀石の一つ。

《獅子戦役》ではこれを含めた七つの七耀石を使って帝都に《暗黒竜》を復活させたと記されている。

少なくとも表の歴史ではそう伝わっており、真実は少し異なるがその七耀石が儀式に使われたものであることは事実だった。

「さて、君たちにはこれから私の言う通りに働いてもらおう」

笛を吹くのをやめた男は黒い瘴気に侵された猟兵達に向かって言った。

37話 ノルド高原Ⅳ

6月28日月曜日、特別実習三日目。

「生きてる……？」

見慣れたゲルの天井を目にして目を覚ましたガイウスは二度と来ないと思っていた目覚めに呆然としながら身を起こす。

「夢……だったのか？」

監視塔を砲撃した武装集団に的当てゲームの標的にされたはずなのに、翩り殺すように出力調整された低速弾を喰らった背中や腕、それに足などには外傷はない。

「いや……夢であるはずがない……」

痛めつけられた記憶ははつきりと残っている。

なのにその傷がないことに困惑するしかない。

とにかく起きて、状況を確認かめようとガイウスは寝かされていたベッドから降りる。

そこに丁度ラカンがゲルの中に入ってきた。

「ガイウス。目が覚めたか？」

「あ……父さん……」

入ってきた父の姿にガイウスは思わず安堵の息を吐く。

「どうした？」

「いや……悪い夢を見たようだ」

「悪い夢か……それは武装集団に追い立てられた夢か？」

「どうしてそれを……？」

自分の心の内を読み取ったラカンにガイウスは驚く。

そんな息子にラカンはため息を吐くと、それを差し出した。

「これは……俺の制服……」

一見すればボロ雑巾のようにも見えるそれは間違いなくガイウスの制服。
血塗れの上に穴だらけ。

これを見た者は十中八九、着ていた人間が生きているとは思わないだろう。

しかしガイウスの体には傷一つなく、これはいったいどういうことなのか首を傾げる。

そんなガイウスにラカンが彼が集落に戻って来た時の話をする。

「今日の早朝に《剣鬼》と名乗った怪しげな風貌の男がお前と拘束した武装集団と共に突然集落に現れた」

その時の事を思い出すようにラカンは目を伏せて、ガイウスが深夜に飛び出してからの出来事を大まかに話す。

「彼は監視塔の襲撃犯が彼らであること、そしてガイウスの手当てはしておいたと言いつつ残して去って行ったのだ」

「そう……ですか……」

簡単に説明されてもにわかには信じられない話だった。

覚えているだけでもかなりの銃弾を浴びせられた。かなりの出血をしていたはずなのにその後遺症すら感じない。

感謝しないといけないことなのに、余りにも常識からかけ離れた技に狐につままれた気持ちになる。

「それよりもガイウス、身体に問題がなければ手伝ってくれ」

「手伝う……それは何を？」

「ゼクス中將が知らせてくれたことなのだが、基地が攻撃を受けたことを理由に共和国が攻めてくる可能性が高いらしい」

「そんな……あれは俺を襲った武装集団が犯人のはず！ どうしてそれが戦争の口実になるんだ!？」

「どうやら共和国がそれを信じてくれなかったようだ……」

ライン君が何とかしてみせると言っていたが、流石に個人でどうにかできることではない。私たちは戦争に備えてラクリマ湖へと移動することにした」

「そんな……」

ノルドが戦場になることにガイウスは愕然とする。

そして犯人の一部は捕まっているというのに、聞く耳を持つとしない共和国に強い憤りを感じる。

「こうなったら俺が直接、共和国の基地に行つて直談判を——」

「行つてどうする？ お前の言葉など聞いてもらえらると思うのか？」

「だけど父さん！ このまま黙ってノルドの平穏が脅かされるのを黙って見ていろと言うのか!？」

ガイウスは激昂してラカンに言い返す。

「そうは言っていない。だが、本格的に帝国と共和国の戦争が起きれば我々にできるのはその嵐が過ぎ去るのを待つだけしかできん。それはお前も分かっているはずだ」

「くっ……」

「それにおそらく共和国にとって真実などどうでも良いことなのだろう」

「そんな理不尽が罷り通るなんて……」

ガイウスは自分の無力を噛み締める。

こうならないように無理を言ってトールズ士官学院に通わせてもらったというのに、結局何も学ぶことができていなかった事実打ちひしがれる。

「お前がこのノルドを愛している気持ちは私も十分分かっている……」

だが、皆が無事であることが何よりも重要なのだ。分かってくれ、ガイウス」

「父さん……」

覗き込まれた目を見て、ようやくガイウスはラカンの中にも憤りがあることに気が付く。

しかし族長としての立場からそれを呑み込んで皆を導こうとしている。

「……………分かりました」

血を吐く思いでガイウスが応えると、そこにリイン達が戻って来た。

「ただいま戻りました。ラカンさん……あ、ガイウスも目が覚めたのか?！」

「ああ……心配をかけてすまなかった」

ガイウスはリイン達に頭を下げてから、一同を見回す。

「みんな……俺は——」

今の内にトールズへ帰るべきであり、自分はノルドに残るつもりだ

とガイウスは言おうとすると、そこにラインの言葉が被る。

「ラカンさん、ひとまず共和国側には条件付きで話を付けました。なのですぐに戦争になることはないので安心してください」

「……………うむ……………ん？」

てつきりゼクスからの開戦時間の伝言だと思っていたラカンはラインの言葉が理解できずに首を傾げる。

「……………それは本当なのか、ライン？」

同じように絶句しながらもガイウスは確かめるように聞き返す。

「ああ、状況はまだ厳しいけどこっちの結果が出るまでは待つてくれることになった」

「いや……………しかし……………いったいどうやって、君のような子供が軍を説得できたと言うのかね？」

我に返ったラカンは思わず尋ねる。

ラインが普通ではないことは《巨像》の一件から分かっていたことだが、戦争を調停することができるかどうかは話が別だ。

こんな時に嘘を言っているとは思えないが、自分の息子と同年代の少年がそれをしたというのはとてもではないが信じられることではなかった。

「俺はただ仲介しただけで、説得は他の人に頼んだだけです」

あつさりと言いつ返す。

「他の人…………？」

「ああ、遊撃士協会と——」

「遊撃士——そうかその手があつたか！」

ラインの答えにガイウスは納得する。

帝国では活動できず目立たないが、カルバード共和国側はその限りではない。

そしてラインは遊撃士の資格を持っている。

協会を通しての説得ならば共和国も無碍にはできないだろう。

「父さんっ！ 共和国の飛空艇がこっちに降りてくる！」

ガイウスとラカンが安堵したところに今度はシーダが駆け込んできた。

思わずガイウスは身を固くするが、リインは何の心配もないと言わんばかりに微笑みを浮かべて応える。

「大丈夫だよ。その飛行艇は悪い奴等を捕まえに来てくれた人たちだから怖がらなくて大丈夫だ」

そう言いながら、今にも泣きそうなシーダの頭を撫でてリインはゲルを出ていく。

「……………ガイウス……………」

「はい……………」

「帝国の貴族とは凄いのだな」

「いえ、リインが特別なだけです」

ラカンに訂正をしてガイウスはリインの後を追って外に出る。

日はすでに高く、正午を回っているだろう。

ノルドの空は地上の争乱とは無縁に蒼く澄み渡っており、そこに飛行艇がアリサの誘導に従ってゆっくりと降下してくる。

そして――

「また一ヶ月ぶりねリイン君」

白いスーツに身を包んだ長い黒髪の女性が着陸した飛行艇から出て来た。

「呼び付けてしまってすみません。だけど来てくれて助かりましたキリカさん」

「気にしなくて良いわ。こういう事態を想定して連絡先を交換しておいたのだから、まあこんな早く活用されるのは想定外だったけど」

「リイン、この人はいったい誰なの？ ………………つてあれ？ どこかで見たことがあるような？」

「ふむ……………なかなかの達人とお見受けする」

リインに親し気な黒髪の美女の登場にアリサは顔をしかめて首を傾げる。

ラウラは彼女から感じる気配から実力を読み取ろうとする。

「この人はキリカ・ロウランさん。カルバード大統領直属の情報機関《ロックスミス機関》の室長を務めている人です」

「カルバード……………」

「大統領直属……?」

「驚いたな。まさか共和国にまでコネがあるとは」

絶句するアリサとラウラ。そしてユーシスは出て来た重要人物に呆れる。

「ようリイン。現実で会うのは《リベルIIアーク》以来だな」

「おうおう相変わらず派手にやっているみたいだな」

キリカに続いて現れたのは熊のような大きな体躯の武道家然とした大男と礼服を身に纏った赤毛の青年が続く。

「ジンさん、それにレクターさんも?」

「リイン……彼らは?」

次はどんな重要人物が来たのか身構えながらガイウスは尋ねる。

「大きい男の人がジン・ヴァセックさん、カルバード共和国のA級遊撃士……」

赤毛の人は帝国軍情報局のレクター・アランドール特務大尉だ」

「A級遊撃士……」

「それに帝国軍情報局って……たしか正規軍の……」

出て来た者たちはキリカ程のインパクトはないものの一同を絶句させるには十分だった。

「俺は偶々クロスベルにキリカを尋ねに行った所で、キリカに遊撃士代表として連れて来られたってわけだ」

「俺もこの件で帝国政府から交渉役に呼び出されてな。飛行艇で戻ろうとしたら空港でかち合ったからついでに乗せてもらったってわけだ」

「そうなるともう交渉は済んでいるんですか?」

レクターの言葉にリインは尋ねる。

「ま、お前さんがほとんど下準備をしてくれてたから俺がすることなんてほとんどないんだけどな」

「とりあえずカルバードの主戦派はロックスマス大統領が抑えてくれるから安心して良いわ……」

再来月の《通商会議》に向けて無用な対立は避けたいのは両陣営の意向だからなおさらね」

「ま、帝国政府が犯人を捕縛しても自作自演だと押し通そうとするかもしれないから犯人の捕縛は遊撃士の役目ってことだ」

「ありがとうございます。皆さん」

キリカとジンの頼もしい言葉にリインは安堵する。

ガイウス達は先程まで悲壮感を抱いていたはずなのに、それを忘れて呆然と立ち尽くした。

………

………

………

「尋問が終わるのを待っている暇はないわね。猟兵崩れへの依頼内容を推測するなら帝国と共和国で戦争させること……」

そう考えると残りの猟兵崩れはまだノルド高原の何処かに潜伏している可能性は高いでしょう」

「地図を見た限り、ノルドには大人数で潜伏できる場所は限られている……」

その中でも見晴らしの良い場所は除外して良いだろう。それに監視塔より向こう側だということも考慮する必要があるな」

「それなら安心して良いぜ……」

実はうちの諜報員が別件でノルドに派遣されていてな。今通信で確認したら猟兵崩れ共の根城を見つけたらしい。奴等は石切り場にいるってよ」

「ゼクス中將から犯人を確保した時のための導力車を借りています……」

《バグベアー》の練度から考えれば俺とジンさんで制圧は可能だと思えます」

ウォーゼル家のゲルで、みんなに説明するように地図を広げながらも瞬く間に情報をまとめていく四人にガイウス達は置いてけぼりにされていた。

「んじゃ、うちの諜報員にはその場で監視してもらおうとして、とりあえず飛空艇は目立つから移動は導力車で良いな？」

レクターは早速まとめにかかり、その提案にも異論を挟む者はいなかった。

「そういうわけなので、俺達はこれから監視塔と共和国軍基地を襲った武装集団の捕縛に行ってきます」

「あ、ああ……」

彼らを代表するようにまとめるリインにラカンが気押しされながら頷く。

特別実習を引き受けるに当たり、一人だけ別格な子供とは聞いていたがまさかここまでだとは思っていなかった。

「みんなはここで待っていてくれ、夕方までに終わると思うから」

「ま、待つてくれリイン」

自然と自分たちを置いて行こうとするリインをガイウスは咄嗟に呼び止める。

「俺も一緒に連れて行ってくれ」

「ガイウス……」

「これはノルドの……俺の故郷に関する問題だ。だから——」

「ガイウス、これはノルドの問題じゃなくて帝国と共和国の問題だ……」

仮にも猟兵を名乗る様な奴等と戦うのにただの学生を連れていくことはできない」

「だが——」

「それに昨夜、その猟兵達に殺されかけたのは誰だ？」

「っ……」

リインの指摘にガイウスは押し黙る。

「俺達は足手まといだと言うことか？」

押し黙ったガイウスに代わってユースが聞き返す。

「そこまで言うつもりはない。だけどガイウスには自覚がないかもしれないけど、本調子じゃない者を連れて行くわけにはいかない」

「確かにあれだけの傷を負っていたのだから、高度の治癒術を使われていたとしてもガイウスは安静にしていた方が良さだろう」

血塗れになった彼の制服を思い出し、ラウラは一理あると頷く。

「だからってリインだけに行かせるのは……」

それでもとアリサが渋る。

「別に良いんじゃないか、ついて来てもらったって」

「レクターさん？」

「遺跡の規模や抜け道の可能性を考えれば潜入する班と、入り口に待機しておく班に分けるのが良いだろう……」

「こいつらだって士官学院の生徒、いわば軍人の卵なんだ。協力してくれるって言うなら利用させてもらおうぜ」

「だけど……」

「気持ちは分からないでもないが、過保護はよくないぜ。それに本調子じゃないのはお前も同じだろう？」

「っ——」

レクターの指摘に今度はリインが押し黙る。

「え……リインが本調子じゃない？」

「レクター殿、それは本当か？」

「うまく隠しているが俺の勘は誤魔化せないぜ」

「……レクターさん、どうしてこんな時だけ真面目になるんですか？」

「はははっ！ 何を言うかなリイン君、俺はいつだって真面目なできる男じゃないか」

リインに半眼で睨まれてもレクターは笑って受け流す。

そしてガイウス達がリインが本調子ではないと聞いて、思い浮かぶのは昨日の《巨像》の一件。

やはりいくらリインが人間離れしていたとしても、《巨像》の一撃を受けて無事で済むはずがなかったのだろう。

「そう言うことならなおさらリインだけを行かせるわけにはいかないな」

「ラウラ、別に俺だけじゃなくてジンさんとキリカさんもいるんだけど」

「そうよ。だいたいリインだって私たちと同じ学生じゃない」

「アリサ……」

「ふん。アルバレアの名に懸けて、ここで引き下がるわけにはいかないな」

「ユーススまで」

「頼むリイン。この地に住むノルドの民としてこの事件の結末を見届けさせてくれ」

「ガイウス……」

真摯に頭を下げて懇願するガイウスにリインはため息を吐き、キリカとジンに振り返る。

「民間人を事件に巻き込むのはあまり推奨しないけど、人手が足りないのは確かだね」

「俺は構わないぜ。良い、仲間じゃないか」

肯定的な二人にリインはため息を吐き、ガイウス達の同行を認めるしかなかった。

38話 ノルド高原V

軍用の導力車を運転するジンの助手席に座ったガイウスは石切り場までの道のりを案内する。

「浮かない顔だな？」

「え……？」

運転の片手間にジンはガイウスに話題を振る。

「リインもお前さん達の事が邪魔だから置いて行こうとしたわけじゃないんだがな、あまり気を悪くしないでくれ」

「それは分かっています」

俯いてガイウスはジンに応える。

「ただ自分が不甲斐ないと感じたんです」

バックミラーで馬に乗ってついて来る者達、その中でリインを一瞥してガイウスはその心内を吐露する。

「俺はこの地の出身です……」

誰もがそうだと思いますが、オレは故郷の地を愛しています」

目を伏せて、ガイウスは自らが育ったノルドへの思いを反芻する。

「風渡る高原、高き山々、蒼き穹、日の出の神々しさ、夕日の切なさ、全てを許してくれるような綺羅の夜空……」

ノルドの地の全てを愛しているんです」

「ほう、そいつはまた大きく出たな。しかし、そうするとそれがお前さんを士官学院に進学させた理由なのか？」

「おそろく……」

オレ自身、明確な答えを出せているわけではなかったんですが、共和国の基地が築かれ、帝国軍が監視塔を建ててから……

そして教会の巡回神父から大陸の歴史を教わって思ったんです

……

このノルドの地が平穏であり続ける保証はないと。だからその平穏を護るために《外》に、トールズ士官学院に進学したんです」

「その年でそこまで考えられるのは大したものだな。だがその様子だ

とまだ答えは見つかっていないようだな?」

ジンの指摘にガイウスは押し黙る。

「馬鹿な話ですよね……」

都会に出ただけで、たった数ヶ月過ごしただけで成長できた俺は思っていたんです……

だけど、実際に事が起これば俺は無力で、クラスメイトのラインは瞬く間に両国の橋渡しをしてみせた……

俺はいったい何をしていたんでしようね……」

「そう卑下するな。ラインも一人で今回の事件を仲裁したわけじゃない……」

俺やキリカとの伝手、それにアランドール特務大尉とのコネがあったからこそできたことだ。普通の学生が同じことをするには荷が重い話だ」

「しかし——」

「こんな話を知っているか?」

自分を貶めることをやめないガイウスにジンは別の話題を振る。

「ここ数十年、ゼムリア大陸東部の環境は砂漠化や干ばつが悪化して多くの土地が人間の居住に適さない環境になっている……」

その荒廃によって大陸西部の東側に位置するカルバード共和国には大量の東方人移民が流入している」

「その話は授業でも聞いたことがありますか、それが何か?」

「ノルドは一見すれば確かに占領する価値の少ない土地だが、多くの移民を抱えている共和国にとっては広大な土地というだけでも十分に占領する価値があるんだ」

「なっ……それは本当ですか!?!」

昨夜グエンから指摘されたこととは違う意見にガイウスは驚く。

「お前さんがノルドを出て知ったのは帝国から見たノルドだけだ。それで世界を知ったつもりになるには早いぞ」

「……仰る通りです」

ジンの話にガイウスはつくづく自分の未熟さを思い知らされる。

「まあ共和国の俺がこんなことを言っても何を言っているんだと思

わせちまうかもしれないがな」

「いえ、そんなことはありません。貴重な話をありがとうございます」
《外》を知るならば当然一方では済まない。

「それにしてもこの地の平穏を守りたいか……だったら遊撃士に興味はないか？」

「遊撃士……俺が？」

「遊撃士の理念は地域の平和や安全を護ることだ……」

まあ仕事内容はそれこそネコ探しや落とし物探しなんかもあるし、
国家権力には不干渉の規約もある……

だが、今回みたいな仲裁ならその限りじゃないし、リインが今回利用したように後ろ盾があるっていうことは何よりの力だ……

今の帝国は遊撃士の活動は止められているが、ノルドは厳密には帝
国領じゃないからな」

「遊撃士……」

「ま、今すぐ決めろなんて言わないさ。卒業後の進路の一つとして考
えてみてくれ。お、あれが石切り場か？」

「あ……はい。あれが石切り場です」

ジンの言葉を反芻していたガイウスはそれを確認して頷く。

「よし、それじゃあここらで一旦止まって最後の打ち合わせとするか」
ジンは窓から手を出して、後方から馬で追走してきているリイン達
と集落にあつた導力車に乗っているキリ力達に合図を出す。

・
*

石切り場。

千年以上前の巨石文明の遺跡と呼ばれ、巨像の《守護者》に《悪し
き精霊》が封じられた場所だと言い伝えが残っている。

警戒しながらそこに入ってリイン達は周囲を見回すが武装集団の
気配はない。

「静かね……」

「フン……人の気配があるとは思えないな」

緊張した様子で周囲を見回すアリサの呟きにユーシスが頷く。

「いえ……そうでもないわ」

が、彼らの感想をキリカが否定する。

「石切り場から遺跡の入り口までにくつか不自然に踏みつけられて戻された草木の跡があつたわ……」

今いるかはともかく、ここを拠点にしていたのは間違いないわ」

「っ……………」

「くっ……………」

自分たちが見過ごした痕跡を挙げられて二人は押し黙る。

「それでアランドール特務大尉。そちらの作業員はどちらに？」

「それなただけどな、わざわざ人数が揃っているんだ。ここは合流しないで伏兵として潜んでもらったままにしておくのを提案させてもらうぜ……」

と言うわけでここは声だけで勘弁してくれ」

そう言うのとレクターは反論が上がる前に通信機をかぎした。

『やつほー！ 初めましてボクはミリアム。ミリアム・オライオンだよ』

通信機から聞こえて来たのは無邪気な子供の声。

「この声って……………」

「うむ、子供のようだな。それも私たちよりも幼い」

「信用できるのか？」

「ああ、まあ確かに見た目も性格もガキンチョだが——」

『ぶーぶー、ガキンチョ言うな』

子供らしい反応に益々アリサ達は不安になる。

「…………大丈夫だ。みんな…………彼女の能力については俺が保証する」

『んん…………？』

「何だまたお前の知り合いなのか？」

口を挟んだリインにユーシスが呆れる。

「知り合いと言う程会ってはいないんだけどな。ミリアム、覚えているか？ リベールの学園祭で会ったリイン・シユバルツァーだ」

『あ！ もしかしてリーちゃん？ ひさしぶり、よくボクのこと覚え

てくれてたね!』

「……………りーちゃん……………」

ガイウスがその言葉を繰り返し、一同の視線はリインへと集中する。

「その呼び方はやめてくれ」

その視線に耐え切れずリインは顔を背けて訴える。

「ミリアム、今はそれよりも武装集団のことだ」

「レクターさんっ!?!」

こんな時、ここぞとばかりに弄つて来るはずのレクターが仕事を優先したことにリインは驚愕する。

「それでお前は、この石切り場のどの辺りで武装集団を見掛けたんだ。

りーちゃんを基準に方角を示すが良い」

「そんなことだろうと思つたよっ!」

『えつとね……………今のりーちゃんから三時の方向の高台の入り口に一時間くらい前に入っていくのを見掛けたよ』

「ふむ……………りーちゃんから三時の方向……………あの入り口の事か」

ミリアムの言葉に従つてラウラはその方向を見上げるとそこには確かに岩場の中へと続く入り口が見える。

『入っていた人数は四人だったけど、実際に中に何人いるかは分からないかな……………』

でも武装集団つて言つても練度はそこまでじゃないからりーちゃんなら余裕だよ』

「そうか、りーちゃんなら余裕なのか……………ククク……………」

ミリアムの言葉を繰り返して、ユーシスが珍しく声を殺して笑う。

「つ……………ちよつと見てきます」

居たたまれなくなつたリインはミリアムが示した方向へと踵を返すと駆け出した。

「待つてりーちゃん! いくらりーちゃんでもその高さは——」

アリサの制止の声を振り切つてリインは跳躍する。

しかし、十アージュくらいはありそうな壁の半ばでリインは失速する。

珍しいリインの失敗にアリサ達は思わず笑みをこぼし――

次の瞬間、リインは何もない空間を蹴って、空中で二度目の跳躍をした。

「へっ……？」

「あら、あれは東方の暗殺者が使っていたという飛空脚か？　いつのまにあんな技を会得したんだ？」

「いいえ、二段目の跳躍の時に足元が光っていたから純粋な体術ではないわね」

「おいおい、また超帝国人が超進化したのかよ」

驚くVII組一同を他所にゲストの三人は当たり前のようにその現象を受け入れるのだった。

しばらくすると当たり前のようにその十アーヂュの壁の上からリインは飛び降りて危なげなく着地する。

「ミリアムの言った通り、上に複数人が通った真新しい痕跡がありました。それとザイルが上に設置されていたので回収しておきました」「そう……ならもう相手は袋の鼠ね……とここでさっきの方法で全員を運ぶことはできる？」

リインが差し出したザイルを何の疑問も抱かずにキリカは受け取って導力車の中へと投げ込む。

「二人ずつならできますけど……ジンさんやガイウスは流石に無理です」

「でしょうね。ならばあの石の扉をどうにかしないといけないわけだけど。どうやって開閉するのかしら？」

キリカはガイウスに尋ねる。

「申し訳ない。この石切り場の遺跡の事は昔から知っています、父さんの代からその扉が開いているところは見たことがないそうです」「なるほど……それじゃあ気は進まないけど――」

「あ、キリカさん。それは俺に任せてもらっても良いですか？」

「あら？　できるの？」

「一応、ヴァルターから教わったので」

「そう、なら任せるわ」

キリカは道を譲り、リインは石切り場の最奥にある石の扉の前に立つ。

「何をするつもりだ……?」

「もう私は何が起きても驚かないわ」

無造作に扉に触れるリインにユーシスは訝しみ、アリサは頭痛に顔をしかめて唸る。

「ふむ……」

「これは……」

「ゴオオオオオオオ……」

深い呼気の音が大きく響く。

リインは石の扉に触れたまま、次の瞬間地響きのような音が響いたかと思うと石の扉に亀裂が走り音を立てて崩れた。

「おお、これが破甲拳なのか!?!」

「なん……だと……」

「まさか……」

「嘘でしょ……」

崩れ落ちる分厚い石の扉にⅦ組一同はただ啞然とするしかなかった。

・*・

遺跡の内部にはジンとリイン、そしてキリカの三人が突入し、残ったⅦ組の四人とレクターは石切り場の入り口で待機していた。

「あ、あのレクターさん……こんなのにのんびりしていて良いんですか?」

「あん?」

石切り場の入り口付近の広場で緊張感なく寝転がるレクターにアリサは恐る恐る近付いて尋ねると胡乱な声が返って来た。

「って言っても元々後詰で来てんだから、俺らがやることなんてないだろ?」

「そうかもしれないですけど……」

「リインの奴が行ったからって私たちも特別実習なんだから——
なんて考えているなら的外れも良い所だぜ。こんな戦争の仲裁が
学院の授業のプログラムに組み込まれてたまるか」

レクターの言い分にアリサは言い返すことはできなかった。

ゼクスにラカン。

ノルドでの課題を取り仕切る二人が揃ってアリサ達は帰るように
提案し、リインには何も言わなかった。

その理由はアリサ達も分かっている。

ガイウスを探して高原を右往左往している内に、帝国と共和国が一
触即発の状況になっていた。

集落に一度戻ってから、今度はリインを追ってゼンダー門へと行け
ば、そこでは基地の通信機を使ってカルバードの基地と交渉をしてい
たリインがいた。

普段の穏やかな態度とは打って変わった強気な態度で交渉を行っ
ていたリインにアリサはある人物を重ねてしまい、さらに複雑な気持
ちを抱えていた。

「悪いことは言わねえ。あいつにあんまり深入りしないことだ」

「レクターさん？」

「あいつが何を抱えているかは俺も全部を知っているわけじゃねえ
……」

「ただどあいつが進もうとしている先が茨の道なんて生易しい道
じゃあないってのだけは分かる……」

「お前達は地獄までリインに付き合う覚悟なんてないだろう？」

レクターの言葉はアリサだけではなく、遠巻きに石切り場を監視し
ていたガイウス達にも聞こえていた。

「ましてや色恋沙汰に現を抜かすつもりは微塵もないみたいだから、
バラ色の学院生活を期待するだけ無駄だぞ」

「な、な、何をいきなり言い出すんですか!？」

「ははは、なに人生の先達としてのアドバイスって奴だ。ところで一
つ重要な事に気が付いたんだが……」

愉快に笑っていたレクターが突然口調を真剣なものに変え、声を潜

める。

「何ですか?」

アリサは動揺した気持ちを切り替え、声を小さくしたレクターの言葉を聞くために寝そべる彼に一步近づく。

「このアングルでそこに立たれると……見える!」

「え……なっ!」

レクターの言葉を反芻し、彼の視線がどこに向いているのか気付いてアリサはスカートを押さえその場から飛び退く。

「ははは、ピンクの縞々か。もうちよつと色気のある下着じゃないとあの鈍感を誘惑できないんじゃないか?」

距離を取ったアリサにレクターは体を起こして振り返る。

「貴方は——!」

激昂したアリサは手を振り被るが、レクターは素早くアリサの攻撃範囲から離れる。

「ふ……甘いなそんな右じゃあ世界を取ることは——」

言葉の途中、頭上から振って来た糸が彼の四肢に絡みついて雁字搦めにする。

「うお!」

「レクターさんっ!」

そのまま一気にレクターは崖の上へと釣り上げられた。

「なるほど、いつまで経っても帝国と共和国が動かないと思ったら貴様が邪魔をしていたのか《かかし男》」

レクターが吊るされた崖の対岸から声を掛けて来たのは学者然とした眼鏡の男だった。

男は笛を下ろして糸で拘束されたレクターに不敵な笑みを浮かべる。

「くっ……()いついつの間……」

「おいおい、お前らどこに目をつけてんだよ。まさかりインが確認した入り口だけが遺跡の抜け道だとも思っていたのか?」

話しかける男を無視してレクターは焦ることなく眼下の悔しがるユーシス達に呆れた声を投げかける。

「ちっ……使えない連中だったが最後に役に立ったな。帝国と共和国の紛争よりも貴様をここで亡き者にできれば“あの男”の鉄面皮も少しは歪ませられるかな?」

「さあ、それは無理じゃないか?」

余裕に満ちた顔でレクターはようやく男を見る。

「で、お宅が今回の事件の首謀者か? 見たところ《バグベア》の団長って感じじゃないから依頼人つてところか?」

「フツ……御想像にお任せるよ」

「そう言うなよ。冥土の土産に名前くらい教えろつて」

「……我が名はギデオン。もつとも同志たちからは《G》とだけ呼ばれているがね……」

しかし驚いたな。まさかカルバードの要人どころか貴様達が締め出した遊撃士を頼るとは“あの男”の片腕とは思えない程に柔軟な思考をしているようだ……

それとも面の厚さは親譲りなのかな?」

「ははは、恐れ入ったか?」

的外れの賞賛を指摘せずレクターは縛られたまま踏ん反り返る。

「む……何を言っているのだ? 一連の根回しは全部——」

「ラウラ、少し黙っている」

そのことを訂正しようとしたラウラの口をユーススが塞ぐ。

その様子にうむとレクターは頷く。

ラインを含めて素直な人間ばかりのⅦ組にちゃんとブラフを理解してくれて動ける奴がいることに内心で安堵しながらレクターは会話を続ける。

「だが、それも今回は裏目に出たな」

ギデオンが勝ち誇り、懐から小さなオーブメントを取り出すとそのまま見せつけるようにスイッチを押しした。

次の瞬間、遺跡の方から轟音が響いた。

「なっ——!?!」

「遺跡の方からだ。まさか……」

「まさか遺跡を崩落させたのか!?!」

「外道が」

「カルバードの要人と遊撃士には武装集団と共にこの地で果ててもらう……」

そして当然お前達も生かして帰すわけにはいかん。それに良い機会だ。ケルディックの仕込みを邪魔してくれた報いを受けてもらおうか」

そう言うのとギデオンは場違いにも笛を演奏し始める。

するとギデオンの傍らで大人しくしていた巨大な蜘蛛が咆哮を上げ、アリサ達の前に飛び降りる。

「巨大な蜘蛛!? まさかレクターさんを捕まえたのはこいつなの!?」

「クク、どうやら太古からこの石切り場で生き残っていた魔獣らしいな……」

目覚めたばかりで空腹らしいから君達はエサになってやりたまえ」

「クツ……まさか言い伝えの『悪しき精霊』!?」

「この石切り場のヌシということか……」

ガイウス達がそれぞれ武器を構えて巨大な蜘蛛と対峙するが、相手はそれだけではなかった。

「ちよつと……」

ガサガサという音にアリサは顔を上げれば、左右の岩場には目の前の蜘蛛を小さくした蜘蛛がいた。

それも一匹や二匹ではない。

数え切れない数の蜘蛛達がアリサ達を囲み、威嚇の鳴き声の大合唱が石切り場に響く。

「数が多過ぎる……」

「くそっ！ 俺はまた何もできないのか……」

「狼狽えるなっ！」

その圧倒的な数の差に動揺する一同をラウラが一喝する。

ラウラもまた視界を埋め尽くす魔獣の群れに震えながらも気丈に振る舞って仲間たちを、自分を鼓舞する。

「この程度の相手に怯んでまたラインに助けてもらおうつもりか！」

遺跡が爆破され、生き埋めにされた彼らの安否を疑わずにラウラは

叫ぶ。

「っ……」

ラウラの一喝に戦意を折られそうになっていたアリサ達は何とか気持ちを立て直す。

「ユーシスとアリサは中央で広範囲の導力魔法を駆動！」

ガイウス、そなたと私で二人を護るぞ！ 蜘蛛は倒さなくて良い、とにかく二人に近づけさせな！」

「分かったわ」

「任せるがいい」

「了解した」

「ならばⅦ組A班、これより蜘蛛退治を開始する！」

ラウラの号令に戦端は切つて落とされた。

そして――

「さて……どうするかな……」

糸で身体を縛られ、空中で身動きが取れないままにされているレクターはやはり緊張感なく呟く。

どうやら操作された蜘蛛達は見せつけるつもりなのか、レクターよりも先にⅦ組達を攻撃目標にしている。

一匹くらい、来る可能性も覚悟していたが大した統制力だとギデオンの笛の力に感心する。

もっとも、蜘蛛が糸に捕まったレクターに襲い掛からないのは別の理由があることを察していた。

「それで、あんたはこの状況でどうするつもりなんだ？」

レクターは戦うⅦ組達から視線を挙げて空に向かって話しかける。だが、その言葉に返事をする者はいなかった。

・
*

リインを除いたⅦ組A班の実力は決して低いものではない。

ユーシスにガイウス、ラウラはそれぞれ士官学院において上級生と相対しても決して引けを取らない実力の持ち主である。

だが、この状況において優秀であることは意味をなさなかった。

「くっ……次から次へといったいどれだけののだ!？」

小蜘蛛を大剣で一刀両断したラウラは息を整える暇もなく、その場を飛び退くと四方から吐き出された糸が斬り伏せた蜘蛛に殺到して糸玉と化す。

さらにラウラの後を追って糸が殺到する。

空中で身を振り、大剣の一振りでも斬り払う。

「くそ……」

威勢よく啖呵を切ったものの状況は悪いとしか言えなかった。

だが、そこで思考を止めずにラウラは必死に考える。

——圧倒的な数の差……リインなら、父上ならどう戦う？

想像の中での二人はラウラにとって危機的な状況でも難なく対処していた。

他には——

『ふふんっ！ その程度の相手に苦戦しているなんてやはり傍流のア
ルゼイドはその程度ですわね！ ざつまーみろですわ！ あーはっ
はっはっ！』

指差して笑う女騎士を想像し、ラウラは苛立ちを晴らすように飛び
掛かってきた蜘蛛たちをまとめて横薙ぎに斬り払う。

「っ——上だっ、ラウラ！」

ユーシスの声に思考に意識をラウラは顔を上げると空中に浮かんで
いた——否、左右の切り立った岩場に張り巡らせた糸の上に乗った
小蜘蛛たちが糸を吐き出した。

「くっ——」

躲し切れない糸だったが、ラウラの眼前で忠告を飛ばしたユーシス
がそれを斬る。

「すまない」

「礼なら不要だ。それよりも集中しろ！」

「すまないっ！ アリサ上の蜘蛛を射抜けるか!？」

「できるけど、一匹や二匹射抜いても意味ないわよ！」

ガイウスに守られながらアリサは弓で糸の上の小蜘蛛を射貫いて

行くが、彼女が射ち落す速度よりも新たな小蜘蛛が出てくる数の方が早い。

「ユーシス、戦術オーブメントの導力はどれくらい残っている?」

「もう大したアーツは使えん」

小蜘蛛を斬り伏せながら帰って来た答えはさらに状況の悪化を示していた。

「くっ……私の《ARCU》ももう空っぽだ」

剣を振る合間に導力魔法を放っていたが、元々適正が高くないラウラの《ARCU》ではそこまで多くの魔法を撃つことはできない。

「そうだ……高原に出れば——」

「無駄だ。もう遅い」

切り立った崖が左右に並び、上も取られた状況を打開しようとラウラが提案するがユーシスが背中を合わせたまま否定する。

「何故だ!? ここで何の遮蔽物もない高原ならまだ戦い易いはずなのに」

「ああ、そうだろうな……」

だが、すでに石切り場の入り口には蜘蛛の糸が張り巡らされている」

「なっ!?!」

言われて振り返ると確かに大きな蜘蛛の巣が何重にも石切り場の入り口に張られていた。

「俺達とはつくに蜘蛛の巣の中にいたということだ……くそっ! 俺としたことが判断が遅過ぎる」

苛立ちながら、それでもユーシスは降り注ぐ糸の雨を確実に躲す。「ハハハッ! 随分と頑張るじゃないか! だが無駄な足掻きという

ものだ」

ギデオンはそんなVII組を嘲笑い、笛を吹く。

音に乗せられた黒い瘴気は蜘蛛たちに染み込むように呑み込まれ——複眼を赤く染めて咆哮する。

狂暴性を増した蜘蛛たちにラウラ達は思わず後退り、四人が背中をぶつけ合う。

「……………どうやらここまでのようだな」

「ユーシス、そなた何を言う!?!」

「どうしようもない事実だ。時間を稼ぐ手段も俺達にはない」

自然と時間を稼げば何とかなると思っているのは、遺跡が爆破された程度で彼がどうにかなるはずがないという信頼だろう。

だがそれでもユーシスの言う通り、ラウラ達の戦いは限界に近かった。

EPが尽きた《ARCUS》と同じくアリサの導力弓もオーバーヒート寸前。

ラウラ達の武器には拭っても次から次へと纏わりついて来る糸によって動きが鈍り始めている。

「……………ならばガイウス」

「何だラウラ?」

「私をあの男がいる上まで槍で投げ上げてくれ」

「ラウラ……………それは」

「蜘蛛を操っているのは、親蜘蛛ではなくあの男の笛の音。ならば奴を倒せば済む話だ」

「待ってラウラ危険よ!」

「勝算はある。剣の間合いに持ち込めば一撃で倒してみせる」

「……………分かった」

逡巡している間もなく、小蜘蛛を突き殺しながらガイウスは頷く。

「ユーシスとアリサは援護を頼む」

「ちつ…………やるからには必ず仕留めて見せる」

もはや聞く耳持たずにやろうとしている二人にユーシスは舌打ちをする。

だが代案が浮かばない以上、反論する資格はないと割り切ってユーシスは剣に氷の戦技を纏わせる。

「クリスタルセイバー!」

地面をひっかく様に斬り上げた一閃。

そこを起点に氷柱が地面から一直線に折り重なって足元の広がった蜘蛛の巣を引き裂き道を作る。

「行けっ！」

ユーシスの声に背中を押されてラウラとガイウスは氷が作り出した道を駆ける。

「これでもう本当に最後よっ！」

更にアリサがファイヤボルトを駆動して空中の巣を焼き払う。

「来いっ！ ラウラ！」

ラウラの前を走っていたガイウスは壁際まで寄ると振り返って槍を下に構える。

その槍の柄にラウラは飛び乗ると、そのタイミングに合わせてガイウスが槍を振り上げる。

「オオオオオオオッ！」

雄叫び一閃。

ガイウスの膂力によって打ち上げられたラウラはその目論見通り石切り場の壁上に着地する。

「むっ！」

笛を吹いていたギデオンは顔をしかめて振り返る。

彼我の距離は十アージュもない。

「もらったっ！」

「くっ——」

大剣に洗刃を宿し、ラウラは疾走する。

しかし、突然大蜘蛛がギデオンを護る様にその間に割って入る。

「そこをどけっ！」

構わずラウラは渾身の一撃を込めた洗刃を大蜘蛛に叩き込み——弾かれた。

「なっ——!?!」

小蜘蛛は洗刃を使うまでもなく両断できていたからこそ、大蜘蛛にも通じると思い込んでいた油断。

外殻で弾かれラウラの体がその反動で宙を泳ぐ。

「あ……」

その光景をラウラはゆっくりと振り上げられた大蜘蛛の腕を見入る。

無情にもその丸太のような腕はラウラに叩きつけられた。

「がつ——」

血反吐を吐きながらラウラは体をくの字に折り曲げ、吹き飛ばされる。

「——ラウラッ!?!」

ラウラが壁上に飛び込んでわずか数秒、固唾を飲み結果を待っていたアリサは投げ出されたラウラに悲鳴を上げる。

「くっ——」

壁の真下にいたガイウスが槍を投げ捨てて頭から落ちてくるラウラを受け止め——その背に小蜘蛛の体当たりを受け壁に叩きつけられる。

「ラウラッ! ガイウスッ!」

そのまま襲い掛かる蜘蛛にユーススは剣を投げつけて串刺しにする。

アリサはそれを払い除けてラウラに駆け寄り、口を覆った。

「ラウラ……」

深紅の制服がさらに赤黒く染まっていく。

「す……まない……へた……をうって……しまった……」

「喋らないでラウラすぐに治療術を——」

かなり深い傷。

導力魔法で塞げるのか、弱気なことを考えながら《ARCUS》を掲げるが導力を使い切ったそれは何の術も発動しない。

慌てて腰のポーチを探るが、それをひっくり返してもティアアの薬もEPカプセルもそれまでの戦いで使い切り、何も見つからない。

「ユースス! 何か道具は——」

「俺の方も打ち止めだ」

返って来た無常な答えにアリサは言葉を失う。

自分達を庇う様に立つユーススの背中の方にはまだ多い小蜘蛛の群れがじりじりと威嚇の声を鳴らしながらじりじりと間合いを詰めてくる。

「……………私たち……………ここで蜘蛛の餌になるの?」

「っ……」

アリサの眩きにユーシスは滅多なことを言うなど反論したかったが、無責任なことは言えずに黙り込む。

ガイウスは壁に叩きつけられた時に頭を打ったのか動かない。

「早く来てよりインッ！」

絶体絶命の状況にアリサの悲鳴が空しく石切り場に木霊する。

——情けない……

そんな仲間たちの姿を薄れる意識の中で見ていたラウラは声にならない言葉を呟く。

アリサの叫びはラウラも同じだった。

しかし、そう思うと同時にリインに頼らなければならない自分が情けなく恥ずかしい。

ギデオンに接近できたあの場面、リインならば容易く大蜘蛛を斬り裂いていただろう。

父、ヴィクターも同様に歯牙にも掛けずに叩きのめしていただろう。

——だけど……それでも……私は……

ラウラは震える手を無理矢理伸ばす。

「女神よ。私はどうなっても良い。だから仲間を護らせてくれ……」

ラウラはそう呟くと、アリサがこぼした手荷物の中にあつたセピスを飲み下した。

「ぐっ——」

胸の奥に鎮火したはずの焰がそれを切っ掛けに再び燃え上がる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

胸を押さえ、堪え切れない衝動をそのまま咆哮する。

ラウラの体から赤黒い闘気が噴き出て、碎けて潰れた体が驚異的な速度で治癒していく。

「グルルルルッ！」

まるで獣のように喉を鳴らすラウラの頭には白い獣の耳が現れ、腰の辺りからは尻尾が現れる。

そして、琥珀色だった彼女の瞳は蒼く染まる。

「ラ、ラウラ……?」

「ミンナ……フセロ……」

湧き上がる衝動を無理やり抑えつけ、ラウラは何とかそれだけ口にする。洗刃が迸る大剣を片手で一闪。

目の前にいた小蜘蛛はもちろん、十アージュ圏内にいた小蜘蛛の群れはその一閃で全て両断された。

「なっ!?!」

その結果に絶句する一同を置き去りにしてラウラは駆ける。

地面の小蜘蛛はその一撃で一掃したが、壁にへばりついた小蜘蛛はまだまだいる。

ラウラはあろうことか、壁を走りそれらの小蜘蛛をすれ違い様に次々と両断していく。

もはやそれは蹂躪だった。

ラウラの疾走にまるで反応できていない小蜘蛛達はただ叩き切られるのを待つだけのかかしでしかなかった。

壁から壁へと跳躍してまさに縦横無尽に駆け回るラウラに誰もが絶句して思考を止める。

そうしている内に小蜘蛛は狩り尽くされ、ラウラは先程辿り着いた壁上に改めて着地する。

「な、何なんだお前は!?!」

ラウラがやった殺戮にギデオンは顔を蒼白にしながら導力銃を突きつける。

「グウウウ……」

だがラウラが返したのは獣の唸り声だった。

「シヤアアアアアッ!!」

その威嚇に対して大蜘蛛も負けじと威嚇の声を張り上げ——次の瞬間、大剣が右側の腕をまとめて斬り裂いた。

耳をつんざく大蜘蛛の悲鳴を無視してラウラは今度は左側の腕をまとめて叩き斬る。

自分の体を支えられなくなった大蜘蛛が地面に転がり、壁上から落ちる。

「きゃあつー！」

目の前に落ちて来た大蜘蛛にアリサが悲鳴を上げ、直後に大剣を下にして落ちて来たラウラがそのままの勢いで大蜘蛛の腹に剣を突き立てる。

大蜘蛛がさらに悲鳴を上げる中で、ラウラは大剣を引き抜くと、そのまま無造作に振る。

滅多切り。

動けなくなってもまだ生きている大蜘蛛に何度も何度も斬りつけるラウラに一同はただ体を硬直させて見入ってしまう。

気付けば大蜘蛛は原型を留めないほどにミンチにされ、何度も乱暴に叩きつけて折れた大剣を片手にラウラは血の海の真ん中で立ち尽くす。

「ラ……ラウラ……？」

ようやく大剣を振るのをやめたラウラにアリサは恐る恐る声をかけると、ぐるんとラウラは口元に笑みを浮かべた状態でアリサに振り返った。

「ひっ——」

ラウラは腰を抜かしてその場にへたり込んだアリサに向かって踏み出して——

「もう良い。もう大丈夫だ」

その前に何処からともなく現れたリインが割り込む、ラウラの眼前に手をかざす。

「水の蒼耀——この者に一刻の安らぎを——」

かざした手から発せられた光を受けてラウラの体から力が抜けてリインに倒れ込む。

それをリインは抱きかかえて受け止める。

「リイン……」

「遅くなってすまない。みんな、大丈夫か？」

既視感のある光景にリインは顔をしかめながら、ラウラをそのまま横抱きにしてアリサ達に振り返る。

「だ、大丈夫じゃないわよ！ 本当に死ぬかと思ったんだから！」

涙目になりながらアリサは緊張が解けて叫ぶように抗議する。

「すまない」

もう一度リインは謝る。

決して遺跡に突入していたリイン達がサボっていたわけではなく、彼もそれなりに危ない目にあっているのだがそれをおくびに出さず謝罪を重ねる。

「すまないじゃないわよ！ 私たちが——」

「黙っているアリサ」

生死に関わる緊張から解放された反動で口を滑らせているアリサをユーススが止める。

「それよりもまだ上に蜘蛛を操っていた男が残っている。そいつが今回の犯行の主犯だ」

ユーススも言いたいことはあるが、元々は無理について来た身。

後詰としての役割を全うできなかったことを恥じる気持ちの方が強かった。

「そつちにはジンさんとキリカさんが行っているから——」

リインが答えると同時に漆黒の飛行艇が空を駆け抜けた。

「あつ……あいつー」

その飛行艇にワイヤロープでぶら下がるギデオンにアリサは声を上げる。

だが、そうしている内に飛行艇はあつという間に西の空に消えていった。

「逃がしたの……あれだけ苦労したのに」

アリサはぺたんとその場に座り込む、呆然と言葉をもらす。

「どうやらお前達が来たところで逃げに徹したようだな……そういえばアランドールは……」

「おおい、いい加減下ろしてくれよー」

潔い逃げっぷりにユーススは感心しながらも、宙吊りにされたままのレクターのことを思い出す。レクターは縛られた状態のまま元気がそうだった。

「情けない。結局俺達は——」

「ユーシス！ 後ろだ！」

「何……？」

ラインの叫びにユーシスは振り返るとそこにはラウラの猛攻から生き延びた小蜘蛛がいた。

「ちっ——」

一度鞘に納めた剣を抜き放つよりも早く糸を吐かれてユーシスは縛り付けられる。

だが、小蜘蛛はそこでユーシスに襲い掛からず糸を繋げたまま逃げ出した。

「くっ——ガイウス、ラウラを頼む！」

抱えていたラウラをガイウスに押し付けてラインは一目散に逃げようとする小蜘蛛を追い駆ける。

小蜘蛛が目指すのは崩落した遺跡の入り口。

人間では進めなくなった通路も蜘蛛ならば通れるそこで餌を抱えて逃げるつもりなのだろう。

「くそっ……これ以上足を引つ張つてたまるかっ！」

渾身の力でユーシスは糸を振り解こうとするが、鋼に匹敵する強度の糸はびくともせず空しい抵抗にしかならない。

ユーシスが引きずられ身動きが取れない状態にさせられているため、ラインも遠距離攻撃で小蜘蛛を仕留めることを躊躇う。

その躊躇いの隙に小蜘蛛は遺跡の小さな穴に飛び込み——

「がーちゃんパンチッ！」

その進路を塞ぐように突然虚空から現れた銀の人形の腕の一振りが小蜘蛛の頭を殴り潰した。

「なっ!？」

引きずられていたユーシスは小蜘蛛の慣性に従って空中に投げ出され、縛られた無防備な体で地面に叩きつけられると覚悟する。

しかし、水色の髪の少女がその幼い体躯でありながら飛んできたユーシスの身体を受け止めた。

「っ——」

「大丈夫？ 怪我はない？」

顔を間近にして尋ねて来る少女の声は先程通信越しで聞いたもの。ユーシスは体を縛られ、お姫様だっこされている屈辱を呑み込んで応える。

「ああ……感謝する。お前が——」

「ミリアムッ！」

ユーシスがそれを尋ねようとしたところでラインが追い付いて来た。

「っ……」

ラインは背後の銀の傀儡に目を見開くと、首を振って雑念を振り払う。

「リーちゃん、久しぶり！」

「だからその呼び方はやめてくれ」

緊張感のないミリアムにラインは項垂れるのだった。

39話 ノルド高原VI

帝国上空、漆黒の飛行艇内。

「はっ……どうやらしてやられたようだな」

顔に傷のある強面の男がギデオンに嘲笑の笑みを浮かべる。

「ああ、《かかし男》……想定以上に厄介な男のようだ」

男の挑発を受け流し、ギデオンはその指摘に真面目に頷く。

「だが、今回の事で《かかし男》の能力は把握できた。次はもっとうまくやるさ。しかし——」

ギデオンは船内を見回し意外だと息を吐く。

「まさか総出で助けに来てくれるとは思わなかったな」

ギデオンの前には三人の男女。

「ふん、勘違いするなよ。こんなところでお前に脱落されたら俺達の苦勞が台無しになるからだ」

男はギデオンの言葉に好きで助けたわけじゃないと言い張る。

そんな彼にギデオンは肩を竦めると、石切り場で手に入れた七耀石が熱を持っているのに気付く。

取り出すと、なんとなくだが目の前の三人に引かれているのが分かる。

「その様子だと君たちも『魔石』を見つけることができたようだな」

「ええ、ブリオニア島で翠耀石を見つけたわ」

ギデオンの問い掛けに女が翠色の石を差し出す。

「オーロックス峡谷の廃道には琥耀石があったぜ」

傷持ちの男が琥珀色の石を差し出す。

「パルムでは紅耀石が見つかった」

フルフェイスヘルメットの男が深紅の石を取り出す。

「それは重畳、ノルドの石切り場にあったこの蒼耀石にルナリア公園で見つけた金耀石……」

残りは二つの目途もついている。夏至祭には全ての『魔石』を揃

えることができるだろう」

「しかし信じられねえな。こんなちつぽけな七耀石で本当にあの伝説の暗黒竜を蘇らせることができるのか？」

男は手の中の七耀石を弄びながら半信半疑に呟く。

「この『魔石』はヘクトル帝が暗黒竜を倒した時に残ったもの……」

これらと暗黒竜の骨から造り出した『魂を縛る』ことができる『降魔の笛』を使いオルトロス偽帝は暗黒竜を復活させたと文献にあったと何度も説明したはずだが？」

「そう言われても、暗黒竜なんて御伽噺としか思っていなかったからな」

ギデオンの説明に傷面の男は頭を掻く。

「真偽はともかく、この七耀石が普通ではないのは確かだろう……」

こうして互いの石が引かれ合っているのもそうだが、『G』が言った通りヘクトル帝やドライケルス帝が破壊できずに封印することしかできなかったのは確かなようだからな」

「『C』……その口振り……まさか……」

「ああ、俺の得物を叩きつけてみた。まさか傷一つ付けることができないとは思わなかったがな」

ヘルメットの男の言葉にギデオンは呆れる。

「それで壊れたとしたらどうするつもりだ？」

「その時は偽物だっただけの話だろ？」

「そうかもしれないが……」

返された正論にギデオンは押し黙る。

「ねえ……本当に『暗黒竜』を復活させるの？」

そんな彼らの会話に眼帯の女が不安そうに弱気な言葉をもらった。

「なんだ『S』？ まさか怖気づいたのか？」

「別に……ただ『暗黒竜』についてはあたしも教会で少し教えてもらったことがあるから」

「フン……だから良いんじゃないか。花火は派手に限るぜ」

躊躇いを見せる女に男が笑う。

「もし本当に伝説の通りの『暗黒竜』が復活したら80万人の人口の

帝都が生都と化するのよ。その意味がちゃんと分かっているの?」

「当然だ。あの男を殺すためならその程度の犠牲は致し方あるまい」

女の不安にギデオンは必要な対価だと割り切る。

「流石のあいつも帝都を滅茶苦茶にされたら顔色を変えるはずだ……」

ククク、想像するだけで面白くなつてくるぜ」

元猟兵だからなのか、人が死ぬことにまるで抵抗を感じていない男に女は顔をしかめる。

「《S》何が気に入らない?」

そんな女の様子を見兼ねて仮面の男が覚悟を問う。

「気に入らないと言うか……ただ無関係な人を巻き込むのは本意じゃないだけよ……」

それに「暗黒竜」を復活させると知ったらあの「魔女」が何を言うか……」

「無関係……はっ、帝国であの男を支持している人間が無関係なわけないだろ」

女の意見を仮面の男は鼻で笑う。

「それに「魔女」は無関係……」

確かにあいつとは契約を交わしているがだからと言って魂まで売り渡したつもりはない……

「だいたいあいつを全面的に信じない方が良いだろう」

「同感だ。あの女への協力は最低限で留めるべきだ」

仮面の男の主張にギデオンは頷く。

「何だったらここで降りたつていいんだぜ。ようは今回の一件で死人が出てビビってんだろ?」

男の言葉に女は眉をひそめる。

「そんなんじゃないわよ」

「だったら、構わないよな? 今更善人を気取ってんじゃねえよ」

「……ええ、そうね……その通りだわ」

男の言い分を認めて女は頷く。

「だが《S》の言い分も一理あるだろう……」

「暗黒竜」が制御できるならそれで良いが、できなければ程々に暴

れさせてから《C》の「アレ」で倒せば良い……

そうすれば《C》は帝都を救った英雄となり、スポンサーが後ろ盾になればあの男の力を削ぐ一手になるだろう」

「英雄だと……何だその自作自演は？」

「気に入らないかな？」

自作自演はあの男の専売特許ではないだけの話だと思っただが」

ギデオンの提案に仮面の男は笑みを漏らす。

「なるほど……確かにあの男の吠え面をかかせるには言い手かもしれないな」

「くくく、それなら《C》だけじゃなくて俺達もあれを使うか？ お披

露目に使うなら絶好のタイミングだろうよ」

「考えてみれば、「暗黒竜」が猛威を振るった時代と比べていろいろ技術も発展しているのだから意外と簡単に滅することができるとも思えないわね」

男の提案に、先程苦言を呈していた女も同調する。

すでに彼らは「暗黒竜」を蘇らせることの危険性を忘れて、その先を夢想する。

それは千年以上の技術の発展から来る自信によるものなのか、それとも――

・＊

ノルドにおける帝国と共和国の緊張は、襲撃犯の捕縛によって幕を閉じた。

彼らに依頼を出した主犯を取り逃がしてしまったものの、互いに矛を納めるには十分な成果だった。

キリカとジン、そしてレクターは早々に飛行艇で捕縛した犯人たちを連行して共和国へと帰って行き、リイン達はゼクス中將に報告のためゼンダー門へと訪れた。

戦争回避が確約され、ゼクスは胸を撫で下ろしてリイン達を労った。

全ては滞りなく進み、ノルドの平穩は護られた。
しかし、一つだけ問題が残った。

本来ならその日の夕方の貨物列車でトリスタに帰る予定だったが、万が一に備えた戦闘配備による影響で貨物列車は運休となってリイン達は帰ることができなくなっていた。

学院への事情の説明などはゼクス中將に頼む形となり、リイン達は集落でもう一泊することになった。

そして、戻った集落ではささやかな宴が催されてリイン達は感謝されて労われるのだった。

「アリサ……？」

その宴の席で人目を忍ぶようにゲルから抜け出したアリサにリインは首を傾げて、その後を追った。

「どうしたんだアリサ？」

「リ、リインッ!？」

俯いていたアリサは突然呼ばれて慌てた様子で振り返る。

「ど、どうしたのよ？ 私に何か用？」

「用って言うか……フラついているみたいだから気になってな」

「べ、別にちよつとぼうつてしてただけで、疲れてなんか——」

反射的にリインから距離を取ろうとアリサは後退るとその動きでバランスを崩す。

倒れそうになるアリサにリインはすかさず進み出て仰け反った身体を受け止める。

「ほら、言わんこつちやない……」

途中で仮眠を取っているとはいえ、昨日の夜からずっと動き続けて、石切り場での戦いもある。かなり体力を消耗しているはずだ」

「それは……貴方も同じはずでしょ」

本調子ではないと言われたはずのリインの腕の中はそれを感じさせない安定さがあった。

同じくらい動いているはずなのに、全く疲れた様子を感じさせないリインに理不尽なものを感じながらアリサは体を離す。

「ごめんなさい」

「これくらい大したことないよ」

「ううん、それだけじゃなくて、石切り場でも私は助けてもらったのに酷いことを言ってた」

振り返ってみると頭を抱えなくなるほどの醜態だった。

無理を言って同行したというのに後詰の役割を果たせていなかった。

確かに命を落とす瀬戸際だったかもしれないが、リインだって石切り場の奥で戦っていたのだから非難していいはずがない。

「別に構わないよ。それよりアリサ少し良いか？」

リインはそれを責めずに話題を変える。

「っ——何かしら？」

気にも留めない態度にアリサは顔をしかめる。

リインなりに気遣ってくれているのは分かるが、全く違う態度のはずなのにリインのそれはアリサが良く知る人を彷彿させる。

もつともそう感じながらも、不安を呑み込んでアリサは先を促した。

「昨日はちゃんと話せなかったけど、《鋼の至宝》のことなんだけど」

「それが何……？」

「確かに《鋼の至宝》はアリサ達から見たら諸悪の根源かもしれない。

だけど《鋼の至宝》も被害者なんだ。だから——」

「だから、何よ!？」

冷静に話を聞こう。

そう思っていたはずなのに、アリサはリインから出て来た言葉に先程の殊勝な態度を忘れて激しく反発していた。

「リインはウチの会社が何を作っているか知っているわよね？」

鋼鉄や鉄道、戦車や銃のような兵器。《死の商人》と揶揄されるだけのモノ作りをしてきたのは認めるわよ……

「だけど、この数年でウチが作ってきたものは度が過ぎているわよ!」

「この数年で作ってきたもの？」

「クロスベルに行った時に見なかった？」

帝国東部、ガレリア要塞に二門設置されている《列車砲》を」

「ああ、覚えているよ。何でも世界最大の長距離砲なんだってな」

「私もスペックしか知らないけど恐ろしい破壊力よ……」

共和国との領有権争いをしている《クロスベル自治州》の全域をカバー……

たった二時間で人口五十万人ものクロスベル市を壊滅できるらしいわ……ねえ、こんな虐殺の兵器を母様が本当に本心から作らせたって言うの？」

「それは……」

「確かに母様は昔から怖い所があったし、厳しかったけど、そんな兵器を作って平然としているような人じゃなかった……」

これが「呪い」のせいじゃないなら何だって言うの!？」

アリサの言葉にリインは口を噤む。

イリーナの考えなど、一度しか顔を合わせたことのないリインに分かるはずもない。

かといって何もかもを「呪い」のせいにされるのはリインには認め難いものだった。

「貴方はどうなのよ!？」

「俺……?」

「貴方だって「呪い」のせいで家出をする程に追い詰められたんでしょ!?! なのにどうして貴方は《鋼の至宝》を恨まないのよ!?!」

「それは……」

痛い所を突かれてリインは唸る。

今でこそ《鬼の力》には感謝しているが、二年前まではそれこそ理不尽なその異能に恨みつらみを感じていた。

「確かに恨んだことはある。だけど今は俺を守ってくれていた《力》には感謝している」

「やっぱり……貴方は強い人みたいね」

リインにアリサは自嘲する。

「ようやく分かった」

「分かった……何のことだ?」

「二年前、私は貴方の事は私と同じだと思っていた……

でも違った。貴方は強くて正しいことばかり言う、母様と同じ人間なのよ」

「アリサ……俺は——」

「そう……母様と同じ……私が初めて好きになった男の子はもういないのよ」

「初めて——え……?」

アリサの突然の告白にリインは思わず固まる。

「ごめん……勝手なことを言っているのは分かってる……」

でも、明日にはちゃんとするから……今は……とにかくごめん……」

自分でも何を言いたいのか分からないアリサはそのままリインを置き去りにしてその場から足早に去って行く。

「アリサ……」

その背中をリインは呆然と見送ることしかできなかった。

「お嬢様、お劳しや」

リインの背後で気配もなく、オーバルビデオカメラを片手に構えたシャロンが呟いた。

「シャロンさん」

「見損ないましたよ。リイン様、あそこは優しく慰めるシーンでしょう」

「………確かにそうかもしれないですけど……アリサはヨシユアさんのことが好きだったはずじゃないんですか?」

「それは複雑な乙女心と言うものです」

「そんなこと言われても、アリサが俺のことを好きになるなんて思っ
てなかったし……八年前のことなんて……」

振り返ってみてもその時の自分がどんな子供だったのか、力に覚醒する以前の自分のことはちゃんと覚えてはいるはずなのに何処か他人事のように感じてしまう。

「ですが、これも一歩前進とでも言うのでしよう……」

どんな形であれ、お嬢様は美化した初恋に決着をつけたわけですか

「それからのお嬢様に乞うご期待ですわね」

「せめてその手のカメラを下ろしてから言って上げて下さい」

「アリサも大変だな、とリインは独り言ちて空を見上げる。

「リイン様……？」

「憂いを帯びた気配にシャロンは首を傾げる。

「俺は……アリサが言うほどに強くはないんだけどな」

「遠くを見つめて呟くリインにシャロンは口を噤んだ。

「時間にして数秒。」

「物思いに耽っていたリインはおもむろに踵を返す。

「リイン様、どちらに？」

「野暮用です。昨日、途中で中断してしまったことがあるんです……」

「みんなには適当に誤魔化しておいてください」

「分かりました」

「集落の外へと歩いて行くリインをシャロンは一礼して見送った。

40話 帰郷く迷いの果てく

七月四日、自由行動日。

その日、エマ・ミルスティンは決意した。

トールズ士官学院に入学したその日から実家に再三に渡って出した手紙は三ヶ月経った今でも返事はない。

流石におかしいと思ったエマは里で何かがあったのではないかと今更に気付き、外出届けを提出した。

——手紙の返信が来ない理由を確かめに行く……

申請の際の外出理由も優等生であるエマは特に疑われることもなく認められた。

「そういえば里に帰るのは半年ぶりになるのか……」

姉の痕跡を探して帝国中を歩き回り、何の成果も出せなかったエマに長が手紙により指示を出したのは二年前。

リベールで《空の至宝》が現出した時期に重なるように発生したトリスタ周辺の霊脈異常の調査。

旧校舎に封印されている《騎神》に何かがあったのではないかと監視していたが、それから何も起きず外からでは分からないと判断して進学を決めた。

そこまでしなくていい、と長は言っていたがエマにとって指示されて調べたとはいえ巡回魔女としてようやく目に見えた仕事ができただけでエマはそれを拒んだ。

それに打算もあった。

《蒼》を目覚めさせたらしい姉が《灰》に何もしないと考えられなかった。

《灰》の近くにいればいずれ姉が現れるのではないか。

そう考えて、エマは長の指示を無視して奨学金の制度を利用してトールズ士官学院への入学を勝手に決めた。

「……………やっぱり怒っているのかな？」

振り返ればまるで反抗期の子供みたいなことをしていたのではな

いかとエマは汗をかく。

それによくよく考えてみれば手紙の返事はエマが勝手に受験を決めた年末辺りからなかったかもしれない。

「……………どうしよう……………」

今までどうして返事をくれないのか憤りを感じていたが、帰郷を決めて冷静になると自分の落ち度が次々と思ひ浮かんでいく。

普段の生活態度はだらしなく、里に居た時はいつも小言を言っていた側だがそれでも長である。

怒った時はそれはもうとても怖いのだ。

「いや、でもそんなこと言ってられない」

震える体を押さえてエマは自分に言い聞かせる。

同行はできなかつたが、先日の特実習でノルド高原にある至宝の抜け殻が反応して動いたと報告会の時に聞かされた時には悲鳴を上げそうになった。

そして流星にそのことを報告しないわけにはいかない。

「……………勢いで誤魔化そう」

拳を握り締めてエマは決意する。

手紙の返事をくれなかつた長の落ち度をとにかく追及し、自分の独断専行を誤魔化す。

少なくとも、タイミングよく《騎神》に選ばれた起動者は現れて情報収集という意味では進学に意味があつたのだから利は自分にあると言ひ聞かせる。

『まもなくセントアークに到着します』

列車のアナウンスが流れ、エマは決意を胸にセントアークの駅で降りて西サザーランド街道へと迷いなく出る。

外出届けは出したが外泊届けではない。

夕方までにはトリストタに戻らないといけないため、余計な寄り道をしているわけにはいかないととにかく急ぐ。

西サザーランド街道の横道からイストミア大森林へと入り、祭壇を隠した洞窟から魔の森へ転移し、そして懐かしの故郷に辿り着く。

「……………よかった。里に変わりはないみたい」

巡回魔女として里を発った時から何も変わっていない穏やかな故郷の風景に、一抹の不安を抱いていたエマはほっと胸を撫で下ろす。

「あれ……もしかしてエマ?」

「ニーナ久しぶり」

最初にエマを出迎えたのは年下の見習い魔女のニーナだった。

「うん、久しぶり……だけどどうしたの突然? 半年前に外の学校に進学するって言ったきり何の連絡もなかったから心配したんだよ」

「う……それはごめんなさい」

連絡はしたつもりだが手紙は届いてなかったのか、それとも長がそれを里に知らせていなかったのか。

後者だとしたら相当怒っていると今すぐ回れ右してトリスタに帰りたくなる。

「実は外で重大なことが起きたから報告に戻ってきたの、お婆ちゃん——じゃなくて長は家にいる?」

「うん。ローゼリア様なら御自宅にいらっしやるよ。でもさつき外からお客さんを連れて来ていたんだけど」

「お客さん? それも長が連れてきた?」

エリンの里はイストミア大森林の中にあるとはいえ普通の方法ではまず辿り着けない場所にある。

それに外界との交流を制限しているだけに客人を招くことなどエマが里にいた頃にもなかった。

「ううん……」

タイミングが悪いとエマは唸る。

筆無精しただろう長を責めて主導権を得ようと考えていたのだが、客人の前でそれをやるのは流石にまずい。

「あのニーナ……私が外の学校に通うって知らせた時のお婆ちゃんは……その……怒っていた?」

「それは……」

目を逸らして言い淀むニーナの態度が雄弁にその時のことを語っていた。

最悪、客人の前だというのに怒られ恥をかくのは自分の方だと怖い

想像をしてしまう。

「……………よっ」

頭を抱えてその場にへたり込んだエマは覚悟を決めて立ち上がる。最初の予定通り、逆ギレして主導権を握ろう。

確かに学院への進学は巡回魔女の役割から逸脱しているし、いるかも分からない起動者を生徒という狭い括りの中で見つけることは効率が悪く。

しかし、結果論だが長が考えていた懸念よりもエマが無理を押し通して学院に進学した価値はあった。

出奔した姉の存在を匂わせ、《灰》を眷属にしようとしている《蒼の起動者》。

むしろ褒められて然るべき情報を持ち帰って来たのだから怒られる謂れはないと自己弁護を完了させる。

「ごめんニーナ。私はこれから長の所に行かないといけないから——」

「あつ！　もしかしてエマってお見合いするのために戻って来たの!？」

「——え…………？」

「さっきローゼリア様とその人とすれ違った時ローゼリア様がその人に言っていたの、里の誰かと結婚する気はないかって!」

「ちよ——ニーナ何を言っているの?」

突然のことにエマは狼狽えて聞き返すが、彼女の叫びは里中に響き渡っていた。

「何っ！　エマがお見合いのために戻ってきただど!？」

「だとするとさっきの少年がエマの御相手だと言うことか!？」

「きゃあああ！　良いなエマ!」

ニーナの叫びで里中の人達がエマの帰郷に気付き、さらにはニーナの勘違いが感染して大騒ぎになる。

何分閉鎖的で娯楽の少ない里であり、暇を持て余した里人たちがただでさえ珍しい外の客人に憶測を重ねていたところにエマの帰郷が重なり暴走は留まることを知らない。

帰郷したエマを迎える言葉をそこそこに見合いの話が何故か既に

結婚する話にまで飛躍する。

そんな里人たちに囲まれて混乱を来しながらもエマはその輪から抜け出して、長の——自分の家に逃げるように駆け出した。

「おばあちゃんっ!」

乱暴にドアを開け放ちエマは叫びながら約半年ぶりに我が家と帰った。

「おお……エマではないか。なんじゃ帰って来たのか?」

「あ、エマ。お邪魔しているよ」

リビングのテーブルに向かい合って座っていたローゼリアとリインは勢いよく開いたドアに驚いた様子で振り返る。

エマはさつと室内を見回して、見知った二人以外に見知らぬ人間がいないことに眉を顰める。

「リインさんいらっしやい……」

すみませんがおばあちゃんに話があるんで失礼します。おばあちゃんどういふこと!? 私に見ず知らずの人とお見合いしろって!?!「うん? いきなり何を言っておるのだ?」

リインへの挨拶もそこそこにエマはローゼリアに詰め寄るが、当のローゼリアは訳が分からんと首を傾げる。

「惚けないで! 里のみんなが言っていたんだから。今日来ている客人を《魔女の眷属》に迎え入れるつもりだって、そのために私を——」

「良く分かんが、とにかく落ち着かんかエマ」

「落ち着けるわけないじゃない! どうしてそんな勝手なことを!」

「えつと……エマ。込み入った話なら俺は席を外した方が良いかな?」

「リインさん、折角来てもらったのにすみません」

「いや、俺の用事はもう済んでいるからもうお暇させてもらうよ。それじゃあローゼリアさん失礼します」

「ちよ! 待てリインよ!」

「エマへの手紙の返事をしなかった罰が当たったんじゃないですか?」

「これを機にちゃんと二人で納得いくまで話し合った方が良いでしょう」

論すようにリインは言つて踵を返す。

一刻も早くこの場を去らなければひどいことが起きる予感からリインはエマを刺激しないように自然に振る舞う。

「それじゃあエマ、また学院で」

「はい。気を付けて帰つて下さいねリインさん……………リインさん？」

ぐりんと、ローゼリアに固定されていた顔が振り返る。

背中に突き刺さる視線の圧にリインは息を呑み、振り返らず神速に迫る速度で駆け出してドアのノブに手を掛ける。

「リインさん？」

しかし、ドアを開くよりも早くエマに追い付かれて肩を掴まれた。

「エ、エマ…………？」

ぎりぎりと万力で締め上げてくるような痛みを肩に与えながらエマはリインを振り向かせ、互いの息が掛かるくらいにエマは顔を近づけてリインを凝視する。

「ふー」

顔を離れたエマは一息ついて眼鏡を外してもう一度リインを睨む。

「……………どうしてリインさんがここにいるんですか？」

感情の一切籠らない声でエマは尋ねる。

「えっと…………ローゼリアさんにちよつと用事があつて始発の列車で来たんだけど…………」

エマ、もしかしてその眼鏡は伊達メガネなのか？ 素顔は初めて見

たけど思つていた通り美人なんだな」

「ありがとうございます…………」

このメガネは魔力を抑えるためのものなんです。それよりもおばあちゃん、リインさん。二人はいつから知り合いだったんですか？」

咄嗟に褒めるリインの言葉をあつさりを受け流してエマは尋ねる。

「こ、今年の初めにユミルに温泉旅行に行った時にヴィータに紹介されてのう」

背中越しに話を振られ、ローゼリアは思わず背筋を伸ばして答える。

「……姉さんに……紹介されて……」

「ひいっ！」

エマの底冷えする声で繰り返され、ローゼリアは悲鳴を上げる。

「二人とも、ちゃんと説明してくださいよね」

「魔女の事情については俺は何も知らないんだけど……」

「なっ!? リインよ! 妾を見捨てるつもりなのか!」

「見捨てるも何もローゼリアさんが最初からエマに話を通してあげれば良かったことじゃないですか!」

「仕方なからう! エマは反抗期を起こして外の学院に通うなど言い出してプチ家出したようなものだから!」

魔女の長として、まずその謝罪もなしに都合よく泣きつかれても受け入れる訳にはいかないのじゃ!」

当時も今もまだ未熟なエマをトリスタに駐在させることにローゼリアは難色を示した。

最終的にはエマの頑なな意志にヴィータの二の舞を案じてローゼリアが折れたのだが、そこでもう一つ問題が起きた。

学費を払うと主張したローゼリアに対して、奨学金で通うから良いとエマが拒絶したことだった。

親心としてエマの世話をしたいと主張するローゼリアと、長の意志に反したことをしているのだから甘えるわけにはいかないと主張するエマ。

二人は見事にすれ違った。

結果論とは言え、エマは自分の想定が正しかったことをまず手紙に綴ってしまったこともまずかった。

そうして謝罪がなかったために更新された情報をどう伝えていいものか、この数ヶ月真面目に悩んでいたローゼリアからすればエマの怒りには理不尽さしか感じない。

「だからって返事を一度も出さないのはどうかと思いますよ」

「だったら全てが済んでいるのに、プチ家出娘が得意気にリインがヴィータと通じている証拠を掴んでみせると手紙に書かれてどうしろと言うのじゃ!」

「それは……………何とか微笑ましいですね」

あえてリインはそういう表現をしてお茶を濁す。

リインに生温かい眼差しを向けられてエマは顔を朱に染めて目を逸らす。

「な、何でも良いですから。ちゃんと説明してください！ いったい何がどうなっているんですか!？」

そう叫ぶエマに先程の迫力はもうなかった。

・*

「……………つまり姉さんはリインさんにとって恩人だったんですね」

「ああ、ただクロチルダさんは結社の使徒だから馴れ合うつもりはないけどな」

事情の半分を説明され、魔女の中でも限られた人しか知らされていない《焰の眷属》の罪を教えられることになったエマは頭を抱えた。

旧校舎とリインの監視にセリーヌをトリスタに残してきたのが悔やまれる。

そもそも間抜けなことになりインが出発していた後でセリーヌにそれを頼んでいたのだから余計に滑稽だった。

「はあ……………」

リインさんの規格外は今に始まったことじゃないですけど、もしかして最初から私が魔女だと言うことにも気付いていたんですか?」

「それは……………ああ、そうだよ」

おくびにも出さずにリインはエマの質問に肯定を返した。

正直、エマの魔女としての気配はそれと予め注意していないと分かり辛い程に小さい。

これはヴァイータとローゼリアが基準だったための弊害によるもので、リインは一番初めの特別実習で起きたある事がなければエマが魔女だと言うことに気付くことはできなかった。

が、それを正直に言うといういろいろと差し支えるのでリインは嘘を吐くのだった。

「あああ……」

ラインの肯定にエマはこの数ヶ月の自分を思い出して頭を抱える。

「えつと……今日はこれくらいにしておきますか？」

「そうじゃの……これ以上話したら発狂してしまうじゃろ」

ラインが《鋼の至宝》を宿していることはまだ話していないが、それを受け止められる状態ではないのはラインも同感だった。

「それじゃあ俺はこの辺で失礼します、トリスタに戻る前に寄りたいたいところがあるから」

「はい……あ、ラインさん一っだけ良いですか？」

テーブルに突っ伏して頭を抱えていたエマは席を立つラインを呼び止める。

「何か分からないことがあったか？」

「はい。ラインさんはいったいどうやって《灰の起動者》になったんですか？」

「ああ、それか……」

「私は二年前からトリスタを中心に活動して旧校舎も定期的に監視していました……」

ラインさんが行方不明になっていた間であっても、貴方が旧校舎に立ち入ったことはなかったはずです。それなのにどうやって《試練》を超えたんですか？」

「俺の導き手になってくれたのはリンなんだ」

「リン……え……あのラインさんが所有している戦術殻が導き手？」

答えの意味が分からずエマは聞き返す。

「ああ、身体は戦術殻を端末にしているけどあの子は《空の至宝》の意志なんだ」

「……………え……………？」

エマの頭はその答えが理解できず間の抜けた声をもらす。

その横でうんうんとローゼリアはそんなエマの心境に頷いていた。

「リンも《鋼の至宝》と同じように高位次元に封印されていたんだ。それでゴスペル——《至宝》の端末から俺の願いを叶える形で《騎神》に巡り合わせてくれたというわけなんだ」

「《空の至宝》が導き手……《空の至宝》の意志がリンちゃん？」

エマは呆然とその答えを繰り返す。

「封印されていた高位次元の中で《鋼》に直接アクセス……？」

「あつついでに言えば、ノイが《鋼の至宝》の意志なんだけど」

「……………」

「えっと……エマ？ 大丈夫か？」

固まったエマにリインは恐る恐る近付くと、

「……………ふしやああああっ！」

許容範囲を超えたエマは奇声を上げ、目には大粒の涙を浮かべてリインの顔面にぐーを叩き込んでいた。

そしてエマは仰け反って倒れたリインの上にマウントを取り、ローゼリアの制止を振り払ってノイとルフィナが顕現して実力行使に出るまでリインを殴り続けるのだった。

後にリインは語る。

その右はリインの目をもつてしても捉えることのできない一撃だったと。

41話 その日のVII組

七月四日、自由行動日。

トールズ士官学院には部活動というものがある。

それは上級生や他クラスとの交流の場でもあると同時にもう一つの目的があった。

七月。

新入生が学院生活に馴染んできた時期だからこそ行われる学外行事。

トールズ士官学院を始め、帝都の士官学院などの各地の高等学校の各部で行われる交流会。

文学に関する部活なら発表会。武芸に関する部活なら競技会。

所詮は学園行事だが、やはり目標はモチベーションに関わる。

その日のフェンシング部は来週の交流試合の新人戦に向けて最後の試合が行われていた。

「ふん、実戦ならともかく競技での勝負ならパトリックさんが遅れを取るわけないだろ」

「パトリックさん！ リイン・シュバルツァーの腰巾着に格の差を思い知らせてやってください！」

「男爵風情が生意気なんだよ」

「貴方達、静かにしなさいっ！」

部長のフリーデルの一喝でクリスに向けられた野次は鳴りを潜める。

そんな野次にクリスは耳を傾けパトリックと対峙しながら思う。

——笑つちやダメだ……

自分の目論見通りことが運んでいることにクリスは笑みを浮かべそうになるのを必死にこらえる。

彼らの罵倒はある意味でクリスが望んでいるものではあるのだが、彼らが自分の正体を知った時にどんな反応をするのか想像するだけで顔が緩む。

——兄上の気持ち分かるな。これは癖になりそうだ……

「何がおかしい？」

クリスの思考に被せ、パトリックは苛立った様子で声を掛ける。

「え……？」

「僕が相手だと退屈だとしても言いたいのか？」

抑え切れない激情を何とか抑え込みながらパトリックはクリスを睨む。

「退屈だなんてとんでもない」

クリスはパトリックの言葉を否定する。

入学してからもそうだが、半年前までは練武場のように整備された平らな空間で剣を構えての稽古ばかりだった。

そのことに少し懐かしみながらも、クリスは油断なくパトリックを見据える。

実戦ではまずあり得ない状況

遊びでしかないと猟兵に一笑された一方で、羅刹にはだからこそ誤魔化しが利かない戦いだとも教えられた。

虚実を作るのはあくまでも剣の中で行わなければならない。

武器の差も状況も、搦め手も使えない。故に地力だけが勝敗を決める戦い。

それにクリスにとって、剥き出しの敵意を向けてくる部活仲間たちでさえも楽しみの一つだった。

「パトリックやみんなと剣を交えるのは楽しいですよ」

純粹に褒め言葉のつもりの感想だったが、その言葉にパトリックは眦を上げる。

「舐めるなっ！」

クリスの言葉を挑発と受け取ったパトリックは探り合いをやめて間合いを詰める。

息も吐かせない連続突き。

その剣捌きは流石大貴族の子息であり、良く鍛えられている。

現に入部した四月にはクリスに慢心があったとは言え、負けてしまったくらいなのだから弱いわけではない。

「舐めてなんかいないさ」

怒涛のパトリックの攻めにクリスは正面から立ち向かう。

以前に負けた事。そして前回の特別実習で感じたリインとの差。

緊迫状態に陥った二大国の調停をしたこと、果たして自分がリインの代わりにノルドに行つて何ができたのだろうかと考える。

それに加え、ブリオニア島でも《S》と名乗った女性と交戦することになった。

名乗り方から考えてノルド高原で戦争を誘発させようとした《G》の仲間だろう。

撃退はできたものの、特別実習で行つた夏至祭に向けて作つた祭壇は壊され、Ⅶ組の中にはないが怪我人も出た。

都合よく《剣鬼》が助けに現れることもなく、クリスの胸に残つたのは敗北感だった。

——もう二度とあんな気持ちになるのは嫌だ……

自分の周りには凄い人達ばかりだったから負けて当然だと受け入れていたが、今回の違う。

あれが負けた悔しさなら、二度とごめんだと。

そう決意しながらも、貪欲に強さを求める。

パトリックの剣は宮廷剣術を基礎として、パワーよりもスピードと手数を重視した戦い方を好む。

それは半年前にクリスが習っていた剣であり、ならばとクリスはそれに正面から対抗する。

「これくらいできないでリインさんに追い付けるものかつ！」

「っ——僕を踏み台扱いにするなっ！」

クリスに負けじと叫び返してパトリックはさらに剣戟を速める。

足を止めて剣を突き出す。

二合、三合、十合、十数合。

息が続く限り、両者一步も退かずに剣をぶつけ合う。

剣速も剣腕も互角。

意地を張る様な全力のぶつかり合いだったが全力故に長くは続かず、わずかな失速が勝敗を決した。

「そこまでっ！」

フリーデルの号令にクリスはパトリックの眼前に突きつけた剣を引き戻す。

「勝者、クリス」

その宣言にクリスは拳を握り締める。

「そ、そんなパトリックさんが負けるなんて」

「あり得ない。リイン・シユバルツァーならまだしも」

パトリックの取り巻きは口々にその勝敗に不満を漏らす、フリーデルの一睨みがそれを黙らせる。

それを横目にクリスは立ち尽くすパトリックに声を掛ける。

「いい勝負だった。今日、僕が勝てたのは運が良かったからだと思う」

言いながらクリスは握手を求めて手を差し出す。

それにパトリックは呑み込もうとしていた衝動を爆発させ――

「貴様――」

「クリス、こっちに来い」

その寸前、二年のロギンスがクリスの首根っこを掴んで練武場の隅へと連行する。

「ロ、ロギンス先輩？」

「つたく、何を言おうとしていたか知らないが。勝者が敗者に声を掛けてんじやねえよ」

「でも……」

「これが試合だったなら礼は必要かもしれない……」

だが、新人戦の大将を決める勝負だったんだ。ならお前は胸を張って勝ち誇っていけば良いんだよ」

「それで良いんですか？」

「なら逆に聞くが、お前は負けていい勝負だったなんて相手にフオーローされたらどうする？」

「それは……すごく嫌ですね」

例えば幼馴染の双剣士に僅差で負けたと想像してクリスは顔をしかめる。

激昂しそうになっていたパトリックは反発して叫ぼうとした言葉

を何とか呑み込んで踵を返す。

「というわけだから来週の新人戦の大将はクリスで決まりね」

部長のフリーデルが締める。

そこに異論を挟む者はいなかった。

.....

.....

.....

「僕が大将か.....ふふふ.....」

部活動が終わり、更衣室で運動着から制服に着替えながらクリスは顔をにやつかせる。

所詮は学生レベルの中での話でしかないのだが、確かな成長の成果に喜びの感情を抑え切れなかった。

「あーあ、ついにパトリックに勝っちゃったのかよ」

クリスの横で同じく着替えていたアランはクリスとは対照的に嘆く。

「そういうアランだってパトリックの取り巻きを押さえて選抜の一人になれたじゃないか」

「それが何の自慢になるんだよ。油断していた奴から運よく一本取れただけだっていうのに」

「その油断を本番で突けたんだから自信を持って良いと思うけどな.....」

そもそも貴族生徒の大半は幼少期から武術を学んでいるんだから、差があるのは当然だよ」

「そんなことは分かってる」

そう言いながらもアランの顔は晴れない。

「お前は良いよな。そんな才能があって」

「.....え？」

羨む愚痴の言葉にクリスは目を丸くする。

「何だよ？」

そんなクリスの反応にアランは首を傾げる。

「才能がある……僕が……？」

そんな言葉を向けられるとは微塵も思っていなかったクリスは呆然と繰り返す。

「いや……僕程度で才能があるなんて、クルトやリインさんと比べたら全然なのに」

「クルトって奴は知らないけど、リイン・シユバルツァーはバグだろ」
「バグって……」

あまりの言い方にクリスは思わず苦笑する。

「リインさんだつて相応の努力をしたから今の強さなんだから妬むのは筋違いだよ」

「だから妬んでねえよ。ただ俺もあいつみたいに強くなりたいとは思
うけど、そうすれば——」

「そうすれば？」

「な、何でもない」

何かを言いかけたアランは慌てた様子で首を振る。

「ところでクリス、やっぱり女子つてリイン・シユバルツァーみたいな
奴が好きなのかな？」

「さあどうだろ？ どうして突然そんなことを？」

「何かクラスの女子がな……」

双子の女子なんだけど、その内の妹の方がイタズラ好きでシユバル
ツァーにも何か仕掛けたらしくてな……

俺もやられたことがあるんだけど、妹の方が姉になりすますってイ
タズラなんだけど、どうにも見抜いた上に反撃くらったみたいでな
……

それで女子が騒いでいるんだよ」

「むむ、それは気になる話ですね。パトリックは何か知らないの？」

「どうして僕に振る？」

話しかけたクリスにパトリックは嫌な顔をしながら返事をする。

「いや、貴族クラスの方でリインさんはどんな風に噂されているか気
になつて」

「そんなこと僕は知らん……」

ただドレスデン男爵家の令嬢が奴のことを褒めちぎっていたな」

「ドレスデン男爵家の令嬢って、あのデブの——」

「アラン、女性に対してその言い方は失礼だよ」

「ふん、これだから平民は」

「つ——えつとあの太ましいドレスデン嬢がどうしたんだって?」

嫌味を含んだパトリックの言葉に対して、不満を呑み込んでアランは尋ねる。

「何でも階段を踏み外して落ちそうになった彼女をシュバルツァーが助けたらしい。それもお姫様だつこで」

「あの巨体を受け止めたって言うのかよ!?!」

「リインさん、やっぱりすごい」

パトリックの話に二人はいろいろな意味で驚く。

「ふん、同じ部活の仲間だからと言って軽々しく話しかけないでもらえるかな……」

クリス・レンハイム。今日はたまたま一本取られたが、まだ大会の編成は本決まりじゃないことを忘れるなよ……

そっちの平民も同じ選抜に選ばれたからと言って僕と対等となつたと思うなよ」

「はいはい、分かりましたよ……ちつシュバルツァーに手も足も出なかつたくせに」

「つ——何だと貴様つ!?!」

「やんのか! 剣ならともかく喧嘩なら負けねえぞ!」

「二人とも、こんなところで喧嘩しないで」

睨み合う二人に挟まれてクリスは仕方がなく仲裁する。

どうして副部長のロギンスが更衣室のロッカーをこの三人で並ばせたのか、クリスは思わずため息を吐いた。

「そういえば二人とも、強くなりたいたいなら今日VII組のみんなで旧校舎での特訓をやるんだけど二人も来る?」

「ふん、言ったはずだ。僕はお前なんかと馴れ合うつもりはないと」

クリスの提案をパトリックはあっさり拒絶し、着替えを済ませた彼はそのまま颯爽と去って行く。

「悪い、誘ってくれたのはありがたいけど、今日は午後からブリジットと帝都に行くことになってるんだ」

その瞬間、更衣室の中の至る所から舌打ちの音が連打される。

もつともそれにアランは気付かず、約束の時間が迫っていることに気付いて挨拶もそこそこに更衣室を出て行った。

「うーん」

後に残されたクリスは二人を見送り、新人戦の暫定大将として前途多難だと唸るのだった。

・*

「お待たせしました」

フェンシング部の活動を終えたクリスは待ち合わせの校庭に行くところにはすでにⅦ組のだいたいのメンバーは集まっていた。

部活動との兼ね合いもあり、メンバーはユースとガイウス、エリオット、アリサとラウラ。そしてクリスを合わせた六人だった。

しかし、そこにはまだラウラがいなかった。

「あれ？ ラウラは？」

「ラウラは今、キルシエでのアルバイトが終わってこっちに向かってるって《ARCUUS》に連絡があったわ」

ラウラの不在の理由をアリサが答える。

「それよりもお前……その格好であるダンジョンに挑むのか？」

ユースはやって来たクリスの装備を見て顔をしかめる。

「はい、そうですけど？」

翠耀石の片手剣が腰に、紅耀石の大剣と金耀石の槍が交差するように背中にあつた。

「武器を三つも持ち歩くなんて、正気か？」

「しかし金耀石の槍は初めて見るな。やはり空属性の魔法を使えるのか？」

顎に手を当てて、ガイウスが興味深そうにその槍を観察する。

「この槍は翠耀石と金耀石を混ぜて作ったもので雷の魔法を使えるん

です」

流れるような動作で背中から槍を取るとクリスは構えて見せる。すると帯電するように槍が音を立てる。

「武器が三つって、それで本当に戦えるの？」

構えは様になっているが、見てくれが不格好過ぎてアリサは心配になる。

「えっと、まだ僕の戦い方は検討中なんで……みんなには迷惑を掛けないようにするから」

「いや、私たちが無理を言っただけで付き合わせてもらっているだけだから文句を言うのは筋違いなんだけど……」

普段もその格好でダンジョンに挑んでいるの？」

「いえ、この前まではリヴァルトとブリランテの二つだけで、先日エリクスルはできたばかりなんです……」

それでも武器の持ち運びは戦術殻に任せていたんですけど、今日はみんなと行くわけだから、自分で持ってみようって考えたんです」

「そ、そう……」

あまりにもあつさりと答えが返ってきて、アリサは困惑して引き下がる。

「しかしクリスは槍も使えたんだな」

「武器になるものなら一通り使い方を教わっているんだ……」

でもどの武器も極める才能がないって言われたから、こういう風にいろんな武器を使い回す戦い方をしてみようと考えているんだ」

「たしかにブリオニア島では剣と大剣を使い分けて、凄いい方をしていただけど。それ以上持つつもりなの？」

ブリオニア島で遭遇した《S》と名乗った特殊な剣を武器にした女性と敵対した時のことを思い出してエリオットは尋ねる。

「とりあえずは三つまでかな。それ以上は運搬の問題や、状況にに応じて持ち替えるつもりだよ」

独特な戦闘スタイルだが、二つの武器を使いこなしている姿を知っているだけにエリオットはそれ以上何も言えなくなる。

「せっかくだからガイウス。ラウラが来るまで一手相手をしてくれな

いかな?」

クリスは剣と大剣を携えたまま槍をガイウスに向ける。

「俺は構わないが……いや、手合わせは後にしよう。そのラウラが来たからな」

クリスの申し出を受けようとしたが、校舎の方から走って来るラウラの姿を見つけてガイウスは気持ちを抑える。

「すまない。待たせてしまったか?」

「ううん、待ち合わせの時間には間に合っているから気にしないで良いわよ」

駆け寄って来て謝罪するラウラにアリサが答える。

「では全員が揃ったところで行くとするか」

そしてユーススが急かす様に促す。

クリスは肩を竦めて槍を背中に戻して、一同に向き直る。

「残念……それじゃこれから旧校舎のダンジョン攻略に行きたいと思えます……」

階層は《第四層》。オリエンテリングの時から結構強くなっていくけど、それで良いんですね?」

「ああ、今お前が挑んでいるレベルで構わない。ところで——」

「ちよつとまったー!」

言い掛けたユーススの言葉は突然の叫びに遮られた。

振り返るとそこにはクリスにとっては見慣れた戦術殻達がおり、それ以外には誰もいなかった。

「あれ……ティータちゃん?」

たしかに聞こえた声に首を傾げると、戦術殻が自己主張するように腕を上げて先程の声でしゃべり始めた。

「異議あり! 異議あり! クリスくんのパートナーはボク役割のはずだよ」

「そうだそう。ボクたちだって順番を待ってたんだから、無視するなんてひどい」

「え……?」

目の前で流暢に人の言葉をしゃべり出した戦術殻たちにクリス達

は揃って目を丸くする。

「今の声って……君たちの？ どうして喋れるようになってるの？」

困惑しながらクリスは聞き返す。

「リン姐さんにお願いで経験値の並列化をしてもらって、ティータに声をサンプリングしてもらいました」

そう答える声は確かにティータと同じだが、彼女のそれと比べれば抑揚は少なく機械的だったがそれ故に独特な声音になっている。

「どうしてそんなことを？」

「リン姐さんやノイにルフィナさん、あの人達みたいに話せるようになった方が戦闘効率が上がるんじゃないかって考えたんだ」

「あ……うん……確かにあの人は戦術殻なんだろうけど……」

似て非なるものだと説明するにはクリスは戦術殻のことについて知らなかった。

「それにほら——」

戦術殻α型はこれ見よがしにその場で回って、今までなかった装置をクリスに見せる。

「エリカ博士に頼んだ武器収納ラックも用意して来たから準備万端だよ」

自分の有用性をアピールする仕草。

ティータの声も相まって何とも言えない気持ちになる。

「ごめん、準備をしてきてくれたことはありがたいけど、今日はクラスメイトのみんなまで——」

「ボク……もういらぬ子？」

「ぐっ——」

ティータの声で言われた言葉にクリスは胸を押さえる。

機械的で彼女との違いは分かるはずなのに、その言葉にはとてつもない罪悪感を胸に湧き上がらせる。

「ボク知ってるよ。こういうのを寝取られたって言うんだよね」

別の戦術殻β型が手を挙げ、例の如くティータの声でそんなことを宣った。

「ちよ!? 何でそんな言葉を知っているの!？」

「導力ネットの中にそういうお話があったよ」

「導力ネット……」

授業でも触れることになったゼムリア大陸中に張り巡らせた多様な情報ネットワーク。

まさかそんなところにそんな言葉があるとは思ってなかったクリスは頭を抱える。

「ともかくボクたちの方が役に立ってみせるから、だからボクたちと一緒に旧校舎のダンジョンに行こう」

「ふむ、それは聞き捨てならないな」

自分たちを、と主張する戦術殻にラウラが待ったをかけ、ユーシスも同調する。

「同感だ。授業で何度かお前達の相手はしているが、あの程度の性能で俺達よりも役に立つとは随分と下に見られたものだな」

「むむむ、ボク知ってるよ。こういう時は決闘をして白黒つけるんだよね?」

「それは知識が偏っているから」

思わずクリスは戦術殻の主張にツツコミを入れてしまう。

「いや良いだろう……」

この数ヶ月クリスのパートナーを勤めていた者たちだ。相応の實力を示すのが筋と言うものだろう」

が、ラウラは意気揚々と戦術殻の提案を受け入れる。

「え、本当にやるのラウラ?」

「旧校舎での戦いの準備運動だと思えば良いだろうか?」

私たちがクリスの足を引っ張らないか試すには丁度いい相手だと思おうが」

「なるほど、確かにその通りだ」

ラウラの言い分にユーシスは頷き、剣を抜く。

「やれやれ、おかしなことになったものだ」

ガイウスも苦笑を浮かべながら槍を構える。

「うーん……授業の一環と思えば良いのかな?」

「ありえない……どうなっているのよ」

エリオットとアリサは現実について行けないながらも戦闘態勢を取る。

「クリス、そなたは下がって立会人をしてくれ……」

ところでそちらは四体で私たちは五人だが、良いのか?」

「問題ないです」

ラウラの指摘に戦術殻は気軽い口調で答える。

「えーっと、それじゃあⅦ組対戦術殻チームの仕合を始めたいと思います」

とりあえずどんな結果になるにしても双方がやる気になっている以上止められないとクリスは投げ槍に仕切る。

「それじゃあ——始めっ!」

クリスの号令に四体の戦術殻が一斉に動く。

両腕を前に突き出すと同時にそれは光を伴って変形し姿を変える。

「ダブル・インパルス・カノン」

「なっ!」

「へっ?」

一体二門、それが四体、計八門のガトリング砲の銃口を向けられたラウラ達は思わず固まる。

「やああああああっ!」

一斉掃射。

ティータの声から似つかわしくない凶悪な弾幕がⅦ組に襲い掛かった。

その日、Ⅶ組一同は予定していた旧校舎の探索には望めなかったものの、当初の目的であるレベルアップは果たされたのだった。

42話 妖精の事情

「失礼します」

リインは一言断って、職員室に入る。

「サラ教官、次の自由行動日の外出届けを持ってきました」

「はあ……またなのね」

最早恒例となりつつあるリインの外出届けにサラはため息を吐く。

「あのね、リイン……」

確かに自由行動日に何をするかは個人の自由だけど、毎週のように申請されても困るのよ」

睨んでくるハイソリツヒ教頭の視線を感じながらサラは教官らしく説教を始める。

「確かに毎回ちゃんとした理由があるし、政府からの要請だから断れないかもしれないけどあんたはまだ学生なのよ……」

それに最近は旧校舎に入り浸って夜も遅いし、学業に影響が出てないから見逃してあげているけどあんたまた過労で倒れるつもり？」

「そんなつもりはありません。ちゃんと休んでいます……」

ただ今度の自由行動日までに用意しておきたいものがあつて徹夜しただけで、でも仮眠はちゃんと取ってますから大丈夫です」

「どうだか……」

事、無茶無謀に関してリインの右に出る者はいないと思っているサラは半眼で睨む。

「はあ……で、今回はどこに行くつもり？」

肩を小さくして恐縮するリインにため息を吐き、サラは尋ねる。

「クロスベルです。目的は収監されているワイスマンの事情聴取とちゃんと大人しくしているかの確認……」

それから聖ウルスラ医科大学でのグノーシス患者の検査です」

「ああ……もうそんな時期なのね」

リインの答えに教頭の嫌味な視線が途切れる。

本来なら月の自由行動日の半分以上に外出することなど認められない。

しかし事は《D∴G教団》に関わることのため、事後処理の名目ですつと前から一度はクロスベルに行くことは決まっていた。

そしてこのことに関しては帝国政府や法国、遊撃士協会など数多くの団体からの要請であり、人命に関わる事ともなれば学院側も強く諫めることはできないのが現状だった。

「すみません。でも——」

「良いわよ。リインにしかできないってことは分かっているから」

せめてもの救いは教頭がそれに関して小言を言わないことだろう。

リインも活動が学生の域を逸脱しているだけで、行動そのものに不穏なものがない以上、強く言えない。

むしろ、問題があるとするならば他の者たちの方が余程である。

「ねえリイン」

「何ですかサラ教官？」

リインはいきなり神妙になったサラに首を傾げる。

「話は変わるけど、あんたエマとアリサに何かした？」

「え……？」

突然の質問にリインは首を傾げる。

「あんたとその二人の戦術リンクの数値が六月から著しく落ちているのよ……」

アリサとはノルドで何かあったのは知っているけど、エマの方はどうしてかしら？」

「それは……」

思わずリインは言葉を濁す。

彼女がしていた誤解が解けて戦術リンクへの蟠りはなくなったのだが、今度はノイがエマとの戦術リンクを拒否するようになってしまった。

それをそのまま伝えて良いのもかと逡巡していると、サラは呆れたように肩を竦めた。

「大方原因はノイかしらね？」

「……どうしてそう思うんですか？」

「そんなの一目瞭然じゃない……」

エマがあんたに近付こうとするたびに牽制するように出て来るんだから」

「すみません。何とか説得しているんですけど」

困ったようにリインは頭を掻く。

エマが言うよりも、原因は彼女の使い魔である黒猫のセリーヌだったりする。

エリンの里からリインは寄り道をして遅れてトリスタに帰って来た時にエマに紹介されたのだが、その時にちょっとしたいざごぎがまた起こってノイは総じてエマまで拒絶するようになってしまった。

「リイン……」

あんたが特殊だって言うのは分かっているけど、ちよつとノイやリンを甘やかし過ぎてないかしら？」

「そうですね？　確かに自由にさせていますが、また何かやらかしましたか？」

「そういう意味じゃなくて、あの子たちを優先して自分の事を二の次、三の次にしてないかって聞いているのよ」

「もちろん度が過ぎることは叱ってますよ……」

むしろシユミット博士やラッセル博士たちよりもずっと聞き分けは良いくらいですよ」

「それは比較対象が悪いんじゃないかしら？」

「逆に言わせてもらおうと、トワ会長に教官たちが頼んだ仕事の何割かをリンが授業中に処理していることに関してどうお考えなんですか？」

「うっ……それは……」

リインの鋭い切り返しにサラは言葉を詰まらせる。

「リンは授業に参加しないのでトワ会長が授業中でも仕事を進められます……」

それに加えて特にリンの拾得物を見つける能力は格別だと思えます……」

本人の記憶を読み取りどこで失くした物かを判別し、時には空間転移で引き寄せる。サラ教官以外にもリンに世話になっている人は多いと思いますが？」

そう言っただけリンは職員室を見回すと、サラ以外にも顔を逸らす人間が数人。

トワが率先して仕事を引き受けることもあり、ちよつとしたことを気軽に任せてしまう経験はサラ以外の教官たちにも心当たりがあった。

そのためトワのサポートをしているリンの存在は教官たちもあまり強く非難できなかった。

「それにサラ教官こそ、フィーのことを放任し過ぎじゃないですか？」
「な、何よいきなり？」

「今のフィーは明らかに心身のバランスを崩しています。このままだと良くないことが起きるかもしれません」

「そう思うならリン、あなたが何とかしてあげなさいよ」
「俺はフィーと因縁があるから無理ですよ……」

それよりもサラ教官が身元引受人の保護者のはずですよ？」

「わたしはほら……教官だし、フィーを特別扱いするわけにはいかないでしょ？」

それにあの子だって、子供じゃないんだし自分のことは自分で決められるわよ」

「何を言っているんですか？ 決められないからフィーはここに通っているんじゃないですか」

「む……」

「犬や猫を育てるのは違うんですから、もう少し保護した責任をですぬ——」

「あれ？ 何でわたしの方が説教されているわけ？」

「なら率直に言わせてもらいますけど、フィーはこのままツールズを卒業した後の進路は《猟兵》や《凶手》だと思えますよ。それについてはどう考えているんですか？」

「それは……」

「そもそもフィーみたいな特殊な子供はそれ以外の生き方を知らないんですからある程度は道を示して上げないといけないと思うんです……

そここのところはどう考えているんですか、お母さん？」

「誰がお母さんよー」

とんでもない呼び方をしてきたリインにサラは思わず言い返すが、彼の言いたいことも分からなくもない。

リベールで特殊な事情の女の子の保護者になった経験からなのか、口うるさいお父さんになっているんじゃないかとサラは考えるが口には出さずに押し留める。

「あたしとしてはまず何かをさせるよりもまずは人に慣れさせるのが良いと思っっているのよ……

あの子は団の中の閉塞的な関係だけで生きていたわけだから、まずはその部分を改善させるために士官学院に入学させたの」

「そうですか……そういうえばよくフィーの学力で入学試験をパスできましたね」

「あの子は地頭はそんなに悪くないのよ……

それに団が解散したばかりで何もしていないことが苦痛だったみたいだから、そこで勉強っていうやることを与えておいたのよ……

まあ今はその効力が切れちゃってるけどね」

当時のフィーは親を失い、家族に置いて行かれたことから何に対しても無気力だった半面、命令すれば苦手な分野であってもその通りに従った。

命令されたことには従う。

今もフィーを動かすならサラがそれをすれば良いだけの話なのだが、それは本当に最後の手段にしたいのがサラの考えだった。

「あまりあたしがフィーに指示を出しても、あの子の依存先が《団》から《個人》に変わるだけだからそれだけは避けたいのよ……

だから無責任かもしれないけど、あたしはあの子に対して放任を貫くって決めているの」

「そうだったんですか」

「そうだ。リインあの子を誑し込みなさい」

「何をいきなり言っているんですか？」

「少しだけ尊敬した瞬間の発言にリインは白い目を向ける。」

「だって良く言うじゃない。愛が人を変えるって……」

「現にエステルがヨシユアを救い上げているんだから、あんたにもできるわよ……」

「うん、あの子が欲しがっていた家族もできるわけだし考えてみたら結構良案じゃない？ 保護者であるあたしが許可する」

「馬鹿なことを言わないで下さい」

リインはため息を吐いて肩を竦める。

「でも、とりあえず最低限にまで立ち直らせないとやばいのよね」

「それほどですか？」

「ええ、銃が的に当たらないくらいに使い物にならなくなっているわ……」

「放課後はずっと射撃場に入り浸っているけど、どんどん命中率が落ちていくくらいにね」

「それは……」

「当たり前のことだが、銃は引き金を引けば必ず当てられるものではない。」

「点で目標を捉えることから、例え熟練者であつても動いているものに百発百中とするのは難しいのだ。」

「やっぱり先月の実技テストの時のことが尾を引いているんですかね？」

「それ以外に考えられないわよ」

著しく落ちた戦術リンクの数値。

「前回の特別実習では猪突猛進になつて敵を我先に倒して自分の力を証明しようと躍起になつていた。」

「というわけだから、何とかしなさいリイン」

「そんな無茶な……」

「俺とフィーは将来的にもあまり近付き過ぎない方が良いでしょうよ」
「どうしてよ？ ボースでの因縁ならあの子だつて一応割り切つてい

るわよ」

「そうじゃありません。俺は近い未来、フィーのお父さんであるルトガー・クラウゼルと戦うことになりますから」

「は……？」

リインの口から出て来た言葉にサラは意味が分からずに呆ける。

ルトガー・クラウゼル。

フィーが所属していた猟兵团《西風の旅団》の団長であり、フィーの育ての親とも言える存在。

彼は一年程前に《赤い星座》の団長との決闘の際、相打ちという形で命を落としている。

そのことが切っ掛けで《西風の旅団》は解散した。

埋葬の現場にはサラも立ち会ったので、彼が死んだことは間違いのないにリインは彼が生きていると言いつつ切った。

「待ちなさい。《猟兵王》が生きているってどういうこと!？」

「サラ教官、声が大きいです。フィーが近くにいないから良いですけど落ち着いてください」

リインとしてもフィーにこの事をどう伝えるべきか悩んでいる。

「あんたねえ……」

「ともかくフィーはルトガーさんが生きていたと知ったらおそらくその日のうちに学院を出奔するんじゃないですか？

それだけで済めば良いですけど、俺とルトガーさんの戦いが避けられないのなら今の内に暗殺してくる可能性だってあると思います」

「そうね……その可能性はあり得るわね」

残念なことにフィーもそれなりに学院生活を楽しんでいるように見えるが、今の様子から判断すれば心はまだ《猟兵》のつもりでいることが見て取れる。

そんな中でルトガーの生存を知り、再び父親を奪う脅威が傍にあると知ればフィーが凶行に及ぶ想像は容易くできてしまう。

「でもこのままフィーを放置するわけにはいかないのよ」

せっかく堅気になれるチャンスなのだから、これを機にフィーには真つ当な生き方をさせたいというのがルトガーの遺言でありサラも

同意見だった。

「何かないのフィーを慰める方法とか、前向きにさせるものとか」

「……………そんなこと急に言われても」

「ちよつと待ちなさいリイン」

言い淀むリインの顔にサラは待ったを掛ける。

「その顔は何かあるわね。そうよね？ 急にって言っても、あんたのことだからプランの一つや二つは考えてはいるのよね？」

「っ……………それは……………」

一時期共に過ごしていただけあってサラはリインの顔色を的確に見抜く。

「一応、現状に変化を与えられるプランなら一つ、いや二つ考えがあります……………」

そのためにはフィーの外泊届けを作ってもらっても良いですか？」

「内容によるわね」

「フィーと一緒にクロスベルに来てもらいます……………」

今、拘置所には元西風の旅団だったガルシア・ロツシが服役しているので彼と話をさせて見るのはどうでしょうか？

それから《赤い星座》から退団しているランディさんとも話をさせてみるのもありかもしれません」

「あーなるほど。確かにそれは良いかもしれないわね」

すでに猟兵団を抜けていたとしてもルトガーを知っている者と話をさせること。

そして同じく猟兵から足を洗った経験者の話を聞くことはフィーにとつて意義があるだろう。

しかもランディに至っては、彼の親族がやらかしてくれたことなのだから尻拭いをしてもらうには丁度いい。

「セツティングはできるの？」

「ガルシアさんの方は面会を申請すれば良いだけなので問題はないと思います……………」

ランディさんの方に関しては予定を聞いてみないと分かりません。後、もう一つですが……………」

「ん？ ガルシアとランディに話をさせるので二つじゃないの？」
「それは一括りだったんですけど、ちよつと失礼します」

そう断ってリインは《ARCS》を取り出すと淀みのない動きで番号を入力してサラにも聞こえるようにスピーカーモードにする。

『はい、こちら劇団アルカンシエルです』

「その声はリーシャさんですね。お久しぶりですリインです」

『リイン君でしたか、お久しぶりです』

「ぶほっ!？」

「実は折り入って頼みたいことがあるんですけど、イリアさんかアバン劇団長はいますか？」

『分かりました。少し待っていてください』

そう言つてスピーカーからは保留を示すメロディーが流れ始める。

「リイン、アルカンシエルつてあのアルカンシエルよね？」

「はい。クロスベルの劇団アルカンシエルです」

「うん……いろいろツツコミたいけど、そこでフィーに何をさせるつもりなの？」

「公開練習でもあればそこに混ぜてもらおうかと。フィーには銃を捨てられる道もあるんだと教えて上げるべきだと思うんですけど……」

フィーの容姿や身のこなしは絶対に舞台映えすると思いますから」

「いや……だからつてあの子がアーティストだなんて」

「これはあくまでも視野を広げるための切っ掛けですよ。もちろん向こうが良いと言ってくれたらですけど」

『はいはい、久しぶりリイン君。もしかしてうちに就職する決心でもついたのかしら？』

「イリアさん、お久しぶりです。その話は断ったはずですよ」

『あはは、でもそれじゃあ何の用かしら？』

「実はですね……」

リインはかいつまんでフィーの事情を説明する。

『ふんふん、ちなみにその子をうちに就職させても良いの？』

「それはイリアさん達がフィーを舞台の魅力の虜にできるか次第だと思えます」

『オツケーオツケー。あと練習にはリイン君も参加するのが交換条件だけ』

「分かりました。それでは今度の日曜日、よろしく願います」
イリアの提案にリインは躊躇うことなく頷いて通話を終了する。

「と、いうことになりましたので俺とフィーの土曜日から日曜日に掛けての外泊届けをお願いします」

「はいはい、分かったわよ……だけどフィーを何って言って連れ出すつもり？」

「いくつか釣れるネタはありますが、やはりガルシアさんとの面会が一番効くと思うんですよね……」

クロスベルにいた時に会ったんですけど、ルトガーさんとフィーのことで昔良く話していたみたいですから」

「そうなの？　なら確かに適任かもしれないわね。それにしてもフィーをアーティストにね……」

私としては外国で遊撃士にでもさせようかと思っていたんですけど」
「それも今のフィーだと難しいと思います。自分は猟兵なんだと言い聞かせているように見えますから」

「フィーが時々流儀とか言うのはそれが原因か……はい、外泊許可証」
「ありがとうございます。サラ教官、それでは失礼します」

リインは一礼して職員室から出て行った。
「これでフィーも少しは変わればいいんだけど」

かなりの荒療治だがフィーにはそれくらいの衝撃がなければ変わらないのかもしれない。

「サラ教官」

「っ——はい！　何ですかハインリツヒ教頭？」

ともかく一段落して伸びをしようとしたサラはハインリツヒに名前を呼ばれて思わずかしこまった返事をする。

「さっきの……リイン・シユバルツァーなのだが」

「ええ、また外出を許可しました……」

今回はクロスベルの事件の経過観察と聞いていらした通り、フィー・クラウゼルの更生のため外出なので、どうか見逃して上げて

ください」

「う、うむ……それは良いのだが……彼はアルカンシエルとどのような関係が？」

「さあ？ 入試と入学の間にクロスベルにいたらしいですけど詳しいことは分かりません」

「ううむ……」

腕を組んで唸り出すハインリツヒにサラは首を傾げる。

いつもならこのまま小言が始まるのにその気配がない。そのことにサラは安堵していると次にベアトリクスが声を掛けた。

「ところでサラ教官。あれは良いのかしら？」

「良いって何がですか？」

「リイン君が最初に申請したのは外出届けだったけど、最後に申請していたのは外泊届けよ。そしてあなたが渡した許可証もね」

「へ……？」

ベアトリクスの指摘にサラは間の抜けた言葉を返した。

「まあ、あの子に下心はないんでしょうけど。アルカンシエルで職場体験するならそっちの方が効率が良いと判断したのかしら？」

「……………ああっ！」

サラは自分がリインに渡したのが外泊届けだったことを思い出して振り返るが、当然リインはもう職員室にはいない。

「あのガキ……こういうところまで小狡くなりやがって」

出し抜かれたことに言いようのない敗北感をサラは噛み締めるのだった。

43話 妖精の旅 前編

7月10日、土曜日。クロスベル。

「リインって……」

「ん……？ どうしたフィー？」

土曜の授業が終わってすぐに列車に乗り込み、夜も半ばにクロスベルに着いたフィーは宿泊先のホテルを前に珍しく呆けた顔をした。

「リインってもしかしてユーシスよりも偉い貴族だったの？」

「そんなことないよ。シュバルツアー家はユミルっていう小さな領地を治めているだけだからアルバレア公爵家と比べたら全然格が違うよ」

「だったらどうしてこんな高そうなホテルに泊まれるの？」

「それは……うん。エリイさん本当にここに泊まって良いんですか？」

リインも半信半疑で駅から案内してくれたエリイ・マグダエルに尋ねる。

「もちろんよ。むしろクロスベルの恩人を適当なホテルに泊まらせるわけにはいかないわよ……」

今回来てもらったのも、こちらの事情なわけだから」

「泊まり掛けになったのは完全にこっちの事情なんですけどね」

恐縮するようにリインは頭を下げる。

正直、一泊するだけには過ぎた計らいなのだが、それを無碍にすることは相手に悪いと思って受け入れる。

「折角の好意ですからありがたいがたく泊まらせてもらいます。フィーもここで大丈夫だよな？」

「まあ……わたしは別に何でも良いけど」

「ふふ、可愛らしいお嬢さんね。もしかしてリイン君の彼女かしら？」
「残念ですが違います。どちらかと言えばガルシア・ロツシの娘的なものです」

「……………え？」

リインの返答にエリイは目を丸くしてフィーをまじまじと見る。

「なに？」

「本当にあのガルシアの娘さんなの？」

「ちよつと違うかな。昔同じ猟兵団にいただけ。それにわたしはちやんと覚えてないし」

「猟兵団……たしか《西風の旅団》だったわよね？ 何か複雑な事情があるみたいね」

「ええ、あまり詮索はしないで上げてください」

「そうね。ごめんなさい。フィーちゃん」

「別に……」

謝るエリイにフィーはそつぽを向く。

そんな反応を微笑ましく笑いかけてエリイはリインに向き直る。

「それじゃアリン君、明日は車を手配してあるから八時にこのホテルで待っていてもらえるかしら」

「はい。分かりました」

一通りの連絡事項を終えたエリイはそのまま去って行く。

「……………今の人…………」

「うん？」

「きれいな人だったけど、どういう関係？」

「エリイさんのことか？ あの人は警察の人だよ」

「警察…………？ 制服も着てなかったしそうは見えなかったけど？」

「まあちよつと特殊な部署でな…………」

それより夕食は何が食べたい？ ホテルのサービスを頼んでも良いし、外の飲食店でも良いけど」

「それなら外で、夜の街の様子も確認しておきたいし」

「そうか…………」

猟兵の習慣かと聞かずにリインは頷く。

「なら折角クロスベルに来たんだから東方の——」

「リインッ！」

まずはホテルに手荷物を預けようと歩き出そうとしたその背中に呼び止める声があった。

振り返ると頬に傷痕のある赤いコートの男が息を切らせた様子で

立っていた。

「アリオスさん。どうしてここに？ 明日こちらから遊撃士協会に顔を出すって知らせておきましたよね？」

「あんな話を聞いて明日まで待っていられるか」

呼吸を整え、佇まいを直したアリオスは努めて無表情を取り繕う。

「リイン、誰？」

「アリオス・マクレイン。《風の剣聖》と呼ばれる俺の兄弟子だ……

アリオスさん、こちらは俺のクラスメイトのフィー・クラウゼルです」

「クラウゼル？ もしや《獵兵王》の？」

「団長を知っているの？」

「ああ、しかしまさかあの男にこんな大きな娘がいるとは思わなかったな」

「拾われただけだから血の繋がりはないけどね」

「そうだったのか。しかしそうなる……」

罰を悪くしてアリオスはリインとフィーを見る。

「リイン？」

「アリオスさんには昔事故で体が不自由になった娘さんがいるんだ。話はそれについてなんだけど」

なるほどとフィーはアリオスの気まずさを察する。

「わたしなら一人でも大丈夫だけど」

「いや、そういうわけにはいかないだろう。やはり明日改めて——」

「なら、代わりに団長の話を聞かせて」

「俺が知っていることはそう多くはないがそれで良いのなら……」

どうやら食事はまだのようだな。ならば俺に奢らせてくれ」

「アリオスさん、でも——」

「お前が持つて来てくれた話のことを考えれば安いものだ。それに兄弟子のメンツもあるからな、大人しく奢られておけ」

「……………はい、御馳走になります」

ため息を一つ吐いて、アリオスの提案を受け入れるリイン。

その姿にフィーは少し驚く。

学院では超越者のように君臨しているリインがまるで普通の少年のように見えたことにフィーは首を傾げるのだった。

・*

クロスベル東通りの宿酒場《龍老飯店》。

色とりどりの東方料理に舌鼓を打ちながらアリオスは語る。

「ルトガー・クラウゼルか……」

彼はある意味、猟兵を体現している男とでも言えば良いだろうか「
「猟兵を体現している？」

アリオスの表現をフィーはオウム返しに繰り返す。

「ああ、一見すれば理知的だがその本性は《赤い星座》と遜色ない血に
飢えた獣だ」

「獣……」

「気に障ったのなら謝罪するが」

「ううん、大丈夫。そういう所があるのを思い出しただけ、続けて」

「そうか。俺はそれこそが二大猟兵団が他の猟兵団の追従を許さない
圧倒的な差だと思っている」

「確かに名前を轟かせているという点に関しては《赤い星座》と《西風
の旅団》が一番目立っていますね」

アリオスの物言いにリインは頷く。

「他の猟兵団は必ずリスクと報酬を天秤に掛ける……」

だが《星座》と《西風》は時に採算を度外視したはした金で依頼を
受けることがある……

負け戦であっても楽しむ。生粋の戦狂い、あの男はまさしくそれを
体現した《王》と呼ばれる男だった」

「うん……」

静かに頷くフィーはどこことなく嬉しそうだった。

「しかし、君はあの男の娘とは思えないな」

が、続くアリオスの言葉に顔をしかめた。

「ああ、悪い意味ではない……」

《獵兵王》の娘と聞いて《赤い星座》の娘のような子供かと勝手に考えていただけだ」

続けてフオローするが、フィーは顔をしかめたまま聞き返す。

「それはわたしが獵兵らしくないってこと？」

「そうだな……《西風》に限らず《星座》の団員も大なり小なり血に飢えた獣を飼っている……」

だが君からはそう言ったものは感じない。君は戦いに享樂を感じたことはないのだから？」

「っ……」

アリオスの指摘にフィーは押し黙る。

「俺にも娘がいるからこそ、《獵兵王》の気持ちは少なからず分かるつもりだ」

「あなたに団長の何が分かるっていうの？」

言い返せない代わりの強がりです。フィーはアリオスを睨む。

「君を《獵兵》としてではなく《人間》として育てた事だな……この意味を良く考えてみるといい」

「《獵兵》じゃなくて……《人間》……」

言われるがまま素直に俯いて考え込むフィーにアリオスは苦笑し、表情を引き締めてリインに向き直る。

「リイン、それで例のものは？」

「はい……これがそうです」

促されてリインはテーブルの上にそれを出す。

「あれ？ それってこの前、化学の実験で作った《ティアの薬》？」

緊張感を出して何事かと身構えたフィーは出て来たものに拍子抜けした様子で言葉を漏らす。

「いや、確かに瓶はその時の物を使ったけど中身は別物だ。これは《大地の靈薬》のレプリカだ」

「《大地の靈薬》？」

「っ……以前文献でそんなものがあると見たことはあったが、本当に実在したのか」

首を傾げるフィーに対して、アリオスは動揺を隠し切れていなかった。

あくまでも文献でしか知らないアリオスと、何も知らないフィーに対してリインは説明をする。

「《大地の霊薬》はかつて《大地の眷属》が至宝より授かっていた薬でね……

これを服用すればどんな大きな怪我も癒え、病気にもならない。しかも飲むだけで身体が鍛えられる。さらには長寿の効果もあった薬なんだ」

《大地の至宝》は《魄》を——つまりは肉体のような《器》を司る至宝。

この手のことは得意分野でもあるが、当然この《霊薬》は至宝の力の一端でしかない。

「これはあくまでも俺がその《霊薬》を真似て作ったレプリカです……ただ原型の《霊薬》は瀕死の成人男子の傷をたちどころに治してみせました……

ですからこれを病院に預けて、効果や安全性を調べて完成度を高めればシズクちゃんを治すことはできると思います。絶対に、とは言えませんが」

「そ、そうか……」

声を震わせてアリオスは無表情に頷く。

「期待させてしまってすみません。これを一本作るだけでもかなり消耗するんで、無理をすればもう二つずつ作れますから——」

それを落胆と受け取ったリインは謝り、これからの展望を語ってみせるがアリオスはそれを遮る。

「いや、無理をする必要はない」

自分では何もできなかった寂寥感はあるが、それ以上に娘の治療に光が見えたことに喜ばずにはいられない。

しかし、一方で浮かれる気持ちを押し込めてアリオスはリインを諫める。

取り繕っているがリインから疲労の気配を感じる。

おそらくこの数日、その霊薬を作るのに相当の無理をしたのだろう。

何故リインが《大地の霊薬》を作れるのかを問うつもりはない。だが、それを完成させたいと思う原動力はおそらくシズクに向けたものではないのだろう。

「古代の霊薬を蘇らせる。並大抵のことではないのは分かっている……」

そしてそれができるのはお前だけなのだから決して無理はするな」「アリオスさん。でも——」

「お前が倒れば、それだけ霊薬の完成は遠ざかる……」

気持ちはあるがたいが、焦るな。例えお前にとつて今すぐに必要なものだったとしても優先するべきことを間違えるな」

「……………はい。分かりました」

リインは言い返そうとした言葉を呑み込み頭を下げる。

「それは俺がするべきことだ。霊薬のこと、よろしく頼む……………ありがとう、リイン」

恐縮して頭を下げる弟弟子にアリオスは深々と頭を下げた。

・*
・*

7月11日、日曜日。クロスベル拘置所。

午前中にウルスラ医科大学病院に行き、そこからクロスベル拘置所に来たフィーは一人で狭い面会室でガルシア・ロツシと対面した。

「ほう……………面会人が来たと聞いて誰かと思えば、お前だったかフィー」「うん……………久しぶりって言って良いのかな？ わたしはオジサンのことあんまりよく覚えてないけど」

強化ガラス越しにバツが悪そうにするフィーにガルシア・ロツシは苦笑を返す。

「いや、俺が団を抜けたのは八年前。お前とは二年くらいしか付き合いはなかったのだから無理もない」

「でもそっちはちゃんと覚えてくれてたんだよね？ 入学祝いにこれ

も贈って来てくれたんだし」

フィーは胸元に飾ったエヴァーグリーンのブローチに視線を下ろす。

「たまたまだ。ゼノとレオが団に戻って来いと押し掛けて来た時に聞いただけだ」

「ゼノとレオが……」

ガルシアから出て来た言葉にフィーは唇を噛む。

自分のことは置いて行ったくせに、団を抜けた彼に戻れと迎えに行っただけなのに憤りを感じてしまう。

「どうした？ 何か聞きたいことがあるからわざわざこんなところに来たんだろ？」

俺に話せることなら何でも答えてやろう」

「うん……」

話したい事、聞きたい事はいくつも考えて来たはずなのにいざそれを尋ねる機会になると尻込みして口がうまく動いてくれない。

そんなフィーを見兼ねてガルシアは自分から話題を提供する。

「学院での生活は楽しいか？」

「え……うん……まあ悪くないかな」

戸惑いながらもフィーは頷く。

そして聞かれるがままにフィーは答える。

勉強が大変だったこと。

園芸部に入って団にいた時にもらった種を植えて育てていること。

他愛のない話にフィーの緊張が解れて、ガルシアが振ってくる話題を無視してフィーは尋ねていた。

「わたしは団のお荷物だったのかな？」

「フィー」

「みんな、団長がわたしを娘として扱ってくれていたから優しくしてくれていただけだったのかな？」

だから団長がいなくなったらわたしのことなんてどうでも良くなって、足手纏いだから置いて行っただけかな？」

「あのバカ共が……」

フィーの吐露した気持ちにガルシアはここにいない団員達を忌々しく罵る。

ルトガーを中心にして成り立っていた《西風の旅団》にとって、彼の死の衝撃はフィーに限らず他の団員達にとっても衝撃的だったのだろう。

彼らは団長の遺言に従ったつもりでフィーをサラに——遊撃士に託したつもりなのだろうが、傍から見ればフィーの言った通りの意味に感じてしまっても無理もない。

「団長はお前の事についてはいつも悩んでいた……俺が団を抜ける時もお前を連れて行ってくれと言いつくすくらいにな」

「それはやっぱりわたしに猟兵の才能がないから？」

「そうだな……お前に猟兵の才能はない……」

他の猟兵たちは知らんが、《西風》や《星座》の団員にある獣臭さ、それがお前にはなかった……

正直俺は猟兵の訓練も途中で音を上げると思っていたくらいだ」

「そう……」

肯定の言葉にフィーは項垂れる。

「だが、その何が悪い？」

「え……う？」

「フィー、お前はいわば狼の群れの中にいた羊だ……」

生きるために捨てられないために必死に狼になろうと生きている。

それがお前だ」

「違う……わたしは——」

「違う……」

おそらく団長が健在だったとしてもお前は一度、団から離れるように仕向けていただろう……

だがそれはお前のことを疎んでだからじゃねえ……

お前を育てることで団長は“人の親”になれた。だからお前は“人”として胸を張って堅気の世界を生きってみろ」

「でも……わたしは……わたしだって猟兵の生き方しか知らない」

「ならば今の学院でいろいろな経験をすることだ……」

それでお前が今の学院を卒業してどうしても堅気の世界で生きられないと言うなら、その時はうちで用心棒として拾ってやってもいいぞ」

「うちでって……捕まっているのに?」

「ふん、いつまでもこんなしみつたれた所にいるつもりはねえ……」

会長だつてこのまま終わらせるような人じゃねえからな」

「マフィアか……遊撃士よりかは馴染めそうかな?」

前向きな言葉にガルシアは苦笑する。

「しかしフィー」

呼んでからガルシアは口を噤む。

「ん? 何?」

小首を傾げて聞き返してくるフィーにガルシアは目を伏せて考える。

——果たして団長が蘇ったことを教えて良いものか……

ガルシア本人が確認していないので確定情報として伝えても混乱させるだけだろう。

ゼノとレオニダスが話した内容だけでも厄介事としか思えない。

だが、どんな厄介事だったとしても娘であるフィーに何も伝えないのは筋が通らない。

故にガルシアは躊躇った口を開いた。

「これは確定情報ではないが、団長は生きているかもしれん」

「……………え?」

「ゼノとレオが蘇ったと言っていただけで俺は団長に会ったわけではないから確かなことは言えん……」

だがお前をここに連れて来たリイン・シュバルツァーはそのことについて何かを知っているようだった」

「リインが……」

死者が蘇るなんてことはありえない。

しかし、昨日リインが見せた《大地の霊薬》のことを思い出す。

この世には自分の常識では測り切れない不思議な現象が存在して

いる。

ならば決して死者蘇生があり得ないとは言い切れない。

「でもどうしてそれをわたしに教えてくれたの？　ゼノとレオに口止めされていたんじゃないの？」

「ああ、だがそれは筋が通らない話だ……」

あの二人は団長を取り戻すと言っていた。それを聞いてお前はどうかする？」

「現実感がなくてあんまり想像できないけど、団長が捕まっているならわたしも助けたい」

「だが、あいつらはお前に真実を告げなかった……」

団長の遺言もあるだろうが、結局は奴等にとってお前は対等の仲間じゃない。守るべき《お姫様》だったということだ」

「む……」

「強くなれフィー。そして団長とあのバカ二人の鼻を明かしてやれ」

「……………そだね。そんな大事なことを教えてくれなかったゼノ達は一発殴らないと気が済まないかも」

「ふ、その意気だ。ついでに餞別もくれてやる。今から言う旧市街の住所に寄って行け」

「そこに何があるの？」

「俺が猟兵時代に使っていた武器を保管してある……」

代理人を使って購入しておいたセーフハウスだから警察のガサ入りはされていかないはずだ……

鍵は裏通りのアンティークショップの婆さんに預けてあるから俺の名前を出して受け取れ」

「それを今ここで言って良いの？」

それにわたしはスピード型だし、そもそも体格が合わないと思うけど」

「それを使いこなしてこそ一流の猟兵だ。なんならばらして組み替えても構わん……」

それに西風の時の戦い方のままなら奴等に通用しないと思え」

「む……」

ガルシアの指摘にフィーは唖る。

双銃剣を始めとしたフィーの戦術は彼らから教えてもらったもの。その手の内は全てゼノ達にはとっては周知の戦術でしかない。

「どうしてそこまでしてくれる？」

申し出はありがたいが、何故ガルシアがそこまで良くしてくれるのか分からずフィーは尋ねる。

「大したことじゃない。たった二年とは言え俺もお前を世話したことがあるからこそのお節介だ」

ぶつきらぼうにガルシアは答える。

その本心は決して口には出せない。

フィーの存在が切っ掛けで“人間”になれたのは何もルトガーだけではない。

それまでの自分に疑問の一石を投じたのはフィーの存在があつてこそ。

そこで“獵兵”を続けられたのがルトガーであり、“獵兵”をやめることができたのがガルシアだった、それだけの話。

だからこそ、ルトガーは何も咎めずにガルシアの退団を認めてくれた。

「あえて言うならお前に負けたゼノ達に団長の悔しがる顔を見るのも一興だろうな」

「ん……サンクス。ガルシアおじさん」

・*

その頃、クロスベル拘置所の中でも特別な囚人が収容されている地下深くでリインはその男と面会していた。

「ふふ、よく来てくれたねリイン・シユバルツァー」

精神が壊れたヨアヒム・ギウンターの身体を乗っ取ったゲオルグ・ワイスマンはリインの来訪を嬉しそうに迎える。

「その様子だとちゃんと大人しくしているみたいだな」

「疑われているのなら心外だな。そもそも罪を犯したのはこの体の持

ち主であり、私自身は君達に協力的だったはずだが？

もつともこんな牢屋など今の私には何の意味もないがね」

「本当に厄介な存在になって……」

リインは何度目か分からない嘆きを漏らす。

その気になればこのワイスマンは外にいるグノーシス服用者に体を入れ替えることもできる。

単に牢屋に入っているのはヨアヒムの体がワイスマンにとって一番馴染むものであり、クロスベルへの善意でしかない。

「それでわざわざ君が訪ねてきたのは、私の顔を見に來ただけではないのだから？」

お互いに機微は察せる者同士、余計な挨拶はなしに本題に入りたまえ、面会時間も決まっているのだから」

リインの内心を見透かしたようにワイスマンは本題に入るよう促す。

「……お前は以前俺に言ったな。《黄昏》と《相克》、その二つにおいてどんな準備をしているのかと」

「ああ、言ったな。ではその答えを持って来てくれたのかな？」

「まだ全部を決めたわけじゃない……」

だが元七耀教会の司教にまで上り詰め、蛇の使徒だった《白面》の意見を聞いておきたい」

「ふむ……拝聴しようじゃないか」

ワイスマンは目を細めて佇まいを直してリインが考えた案を聞く姿勢を取る。

——ふふ……どんな甘いプランを考え付いたことやら。わざわざ私に意見を求めに来るということは自信のない証拠か……

真面目な顔をしながらもワイスマンはリインの提案に徹底的なダメ出しをして愉悦に浸るつもりで鷹揚に構える。

そして語られるリインの計画。

「俺は二つの至宝の《器》を錬成して《未完成の鋼》を《真なる鋼》に錬成しようと思っている」

「ふむ……なるほど《真なる鋼》か………ん？」

余裕に満ちた態度を取っていたワイスマンはそれを聞いて首を傾げる。

「そのための《大地の至宝》と《焰の至宝》の空の器はすでに回収してある……」

その二つを錬成するための熱量の確保についての具体的な方法はまだ見つかってないが、それを主軸に俺は《黄昏》に対抗するつもりだ」

「……………正気かね？」

何とか感想を絞り出してワイスマンはリインの提案を吟味する。

「確かに《黄昏》は《鋼の至宝》を現世に戻す儀式……」

《大地》と《焰》の器ならば《七の騎神》の代替には丁度いい……いや、むしろ相応しいというべきか」

想念の偽物とはいえ《黒》と繋がったことがあるワイスマンはリインよりも多くの知識を有している。

それを元にリインの提案を考えてみればそれは決して無理ではない。

「ルフィナ・アルジェントの入れ知恵かね？」

「いやノルド高原に行った時に、放置されている《器》を見て俺が思いついた」

事もなげに言うリインにワイスマンはぞくりと背中を粟立てる。

「自分が言っていることの意味は分かっているのかね？」

《鋼の至宝》がまだ未完成だと言う君の説が正しかったと仮定するが、君がしようとしていることは二つの眷属が封じた災厄を蘇らせるようなものだ」

「このまま《黒》の錬成を見過ごせば同じことだ……」

制御できるかはノイとそれを支える俺の《聖痕》をどこまで拡張できるか次第だと思う」

「ノイ？ いやそれよりもあの《聖痕》がまだ成長しているのだ」

初めて聞く名前よりもワイスマンはその事実に驚く。

「ノイは《鋼の意志》に付けた名前だ。今は戦術殻と同期させて外の世界で過ごさせている」

「は……？ まさかあの時君が選んだ何の力もないゴミクスが……」
「今のは聞かなかったことにしてやる。だが二度とあの子をゴミ呼ばわりするな」

「おっと失礼……」

睨んでくるリインに首を竦め、ワイスマンはすぐに謝罪して質問を返す。

「しかし七耀教会に知られれば外法と認定されてもおかしくないぞ」

「それはルフィナさんにもう言われた……」

だからその教会を説得して協力を得るためにはそれなりの成果を見せなければいけない」

「ふむ……何かプランはあるのかね？」

「いざという時に《鋼の至宝》の受け皿になれるように俺の《聖痕》を強化する……」

そして《鋼の至宝》をこの身に宿して俺を殺せば、《至宝》もろとにも消滅できるようにしておけば教会も納得するはずだ」

「ほう……つまり私に《聖痕》の調律をしろということかね？」

ワイスマンは抑え切れない笑みを手で隠して聞き返す。

「そうだ……」

俺には確かにあなたの《聖痕》の知識はあるし、《識》の力もある……
だけどそれでも《聖痕》の細かな調律ができるわけじゃない。その点あなたは俺に《聖痕》を刻んだ張本人。それが出来ないとは言わないだろう？」

「ああ、もちろん。私にはそれが可能だ」

「もちろんタダでは言わない。あなたが喜びそうな報酬も考えてある」

「ほう……それはいったい何だね？」

すでに答えは決まっているのだが、リインの用意した報酬の内容にワイスマンは興味を示す。

——大方、ノーザンブリアの塩化対策といったところか？

ミラや地位、名声で動くことはないというリインも分かっているだろう。

ならば自分の記憶を知り、お人好しのリインならば考えそうなことを予測する。

——妥協するには良い取引か……

かつて塩化現象をどうにかするために教会の門を叩いたことをワイスマンは懐かしみながらリインの答えを待つ。

「報酬は——ネタ晴らしの権利だ」

「そうかやはりノーザンブリアの——ネタ晴らしの権利？」

鷹揚に頷いて引き受けようとしたワイスマンはリインの口から出て来た報酬の意味が分からず間の抜けた顔をさらした。

「えっと……うまく表現できないんだが……」

俺が勝った時に《黒》やその眷属に対して、いろいろ言っただけで良い権利をあんたに譲るっていう意味だ……もちろんタイミングが合えばだけだ」

「それはつまり……自分の計画が完璧だと疑わず、踏ん返り返って上座に居座っている《黒》が負ける瞬間を特等席で見たいということかかね？」

「そうだ」

《黄昏》を塗り替える計画を懇切丁寧に説明して、悔しがる《黒》を指差して笑って良いと言うことかな？」

「ああ、そうだ」

《黒》の打倒だけを考えて研鑽を重ねた《聖女》や故郷を捨てて《黄昏》に挑もうとしている《魔女》に愉悦して良いと言うことかかね？」

「まあ……結社で敵だから許可する」

「素晴らしいっ！」

三度の確認の末、ワイスマンはその報酬に歓喜する。

最初からリインに協力することは決めていたが、提示された報酬はワイスマンにとってこの上ない報酬だった。

「リイン・シュバルツァー！ その契約、喜んで結ばせてもらおう！」

「言っておくが、民間人に迷惑を掛けたらこの話はなしだぞ」

「もちろん、分かっているよ……ふふふ、まさか《聖女》と《魔女》に愉悦できる日が来るとは夢にも思わなかったよ……ははは……ハ」

ハツハツハツハツ!!」

声を上げて笑い出すワイスマンにリインは一抹の不安を感じずにはいられなかった。

「……………早まったかな?」

しかし、彼の協力なくして《聖痕》を完璧に仕上げることはできないのだからリインは目を瞑る。

——ごめんなさい、アリアンロードさん、クロチルダさん……

ただ今のリインにできることは来る日に向けて《教授》の標的にロックオンされた二人に心の中で手を合わせて謝ることだけだった。

44話 妖精の旅 後編

「どうだったガルシアさんとはちゃんと話せたか？」

一足先に面会を終えて待合室で待っていたリインはやつて来たファイーを出迎える。

「うん……一応……」

「そうか良かったな」

微笑んで我がことのように喜んでくれるリインにファイーは顔をしかめる。

「何かあったのか？」

「……………何でもない」

頭を抱えなくなる気持ちを抑えてファイーはリインから顔を逸らす。

「ファイー？」

「何でもない」

拒絶を口にするファイーにリインは首を傾げる。

戻って来た足取りも、それに顔色も来た時よりもずっと復調している。

——まあ、俺に対しての態度もいつも通りに戻っただけか……

ガルシアの面会で釣ったとはいえ、ここまで従順についてきてくれたことがそもそも普段のファイーからは考えられないくらいに協力的だった。

そのことを少し残念に思いながら、リインは素っ気ないファイーに苦笑をする。

「それじゃあ行こうか。ここからは悪いけど俺の用事に付き合ってもらうことになるけど」

「ん、了解。クロスベルに戻ったらちよつと行きたいところがあるんだけど……」

裏通りのアンティークショップと旧市街の住所なんだけど分かる？」

「ああ、大丈夫だ……でもそうなるにあんまりのんびりしてられないな

いな」

「この後の予定は？」

「グノーシス被害が多かったベルガード門の訪問、それからクロスベルに戻って劇団アルカンシエルに行くことになってるな……」

アルカンシエルでの用事がどれくらいで終わるか分からないから、街に戻ったらフィーの用事を先に済ませよう」

「ん、じゃあそれで」

「車を手配してくれていたエリイさんに感謝しないとな」

そんなことを呟いてリインとフィーはクロスベル拘置所を後にするのだった。

・
*

「それじゃあフィーはそこで少し待っていてくれ」

「何か手伝えることがあればやるけど？」

「大丈夫だ、ここの司令官と会ってくるだけだから」

「そう……分かった」

ベルガード門の待合室でフィーはリインを見送ってため息を吐く。

「聞けなかったな……」

一人になって呟くのは嘆きの言葉。

道中の車の中で何度も、ルトガー・クラウゼルのことについて聞くとしたが終ぞ尋ねることはできなかった。

尋ねられなかった原因は覚悟が決まらなかったこともあるが、少なからずプライドが邪魔をしていた。

「リインがわざわざガルシアおじさんと会わせてくれたのは、それくらいわたしが使い物になっていなかったからなんだろうけど……」

近頃の不調を振り返ってフィーは唸る。

アリオスやガルシアと話すまで悪い思考ばかりが頭の中をぐるぐると巡っていたが、今は普通くらいに落ち着けている。

銃の的当ても今やればずっとマシな成績を出せるのではないかと思える。

「大方、サラに言われたんだらうけど……」

そうでなければリインが積極的に自分に関わることはない。

学院でも話しかけられれば、互いに言葉を返すがそこまでの仲ではない。

一向にレベルの上がない戦術リンクの状態が自分達の関係を示している。

そんなリインがわざわざ時間と手間をかけて立ち直らせようとしていたことに恥じる気持ちがあった。

「リインがどうして引き受けたかは分かるけど……」

チーム一人の不調が全体に及ぼす影響は馬鹿にできないことをフィーは良く知っている。

前の実習はたまたまみんな大きな怪我もなくやり過ぎせたが、次もそうなるとは限らない。

だからこそ早くフィーの中の蟠りを解決するために今回の機会を作ったのだろう。

そして、その思惑の通り彼とアリオスの話を聞いて、重くなっていった心の枷が少しだけ軽くなった。

「たぶん団長のことを聞けば話してくれる……でも、それで良いの？」
フィーは自問自答する。

リインと自分の関係はただのクラスメイト。

たまたま同じクラスになったが故のチームであり、それ以上の関係ではない。

強いて上げるなら二年前のリベルで殺し合いをした間柄。

「一回目は互角に戦っていた……二回目は……」

苦い記憶を思い出す。

刻み込まれたトラウマを晴らすために、猟兵にあるまじきリベンジに燃え、依頼を切っ掛けに挑んだ戦い。

いや、戦いと言うのはおこがましい一方的な結果だった。

まさしく一蹴。

見向きもされずに湖に叩き落とされ、その後の数日は何も考えることができずに膝を抱えていた。

「あれ……？　もしかしてあの時からわたし何も成長してない？」

先日のシャーリイを当時のリインと置き換えれば、全く使いものにならなくなっていた事実には、リインは気付いてしまう。

「このままじゃダメ」

お人好しのリインのことだから尋ねればちゃんと答えてくれるだろう。

しかし、果たしてそんな施しで団長の下に辿り着いて何が言えるだろうか。

仕方がない奴だと笑われるならいい。

しかし、失望されるのは嫌だ。

「わたしは……どうすればいいんだろう？」

天井を仰いでフィーは呟く。

と、そこに軽薄な言葉が投げかけられた。

「お、そこにいるのはもしかして《妖精》か？　何でこんなところにいるんだよ？」

自分を《妖精》と呼ぶ言葉にフィーは迷走していた思考を切り替え、いつでも銃を抜けるようにしながら振り返る。

そこには長大なブレードライフルを担いだ赤毛の青年が立っていた。

「……誰？」

「誰とは御挨拶だな……」

ま、考えてみればリベールでもほとんどすれ違ったただだから無理もねえか」

フィーの態度に赤毛の青年は苦笑して名乗る。

「ランディ・オルランドだ」

「リベール……オルランド!?　まさか《闘神の息子》……どうしてこんなところ？」

「それはここが俺の今の職場だからな。今の俺は《猟兵》じゃなくてもこれでも警察官なんだわ」

「警察官……？」

ランディの言葉にフィーは胡乱な目を向ける。

「その目は疑ってるな。ほれ、警察手帳」

手帳を差し出されるも、それが本物なのか判断する材料はフィーにはない。

「もしかして潜入工作？」

「じゃねえって、俺は猟兵から足洗ってクロスベル警察に再就職したんだよ」

嘘を言っているようには見えないランディの言葉にフィーは信じられない顔をする。

《闘神の息子》ランドルフ・オルランド。

先日のシャーリィ・オルランドの従兄であり、《赤い星座》の団長の息子。

フィーが欲してやまない猟兵の才能がある人間のはずなのに、その道を捨てたランディにフィーは困惑する。

「どうして……」

「ん……？」

「《闘神の息子》って呼ばれていて、リベルでもSウエポンなしでゼノとレオを退けるくらいに強いのに、どうして猟兵をやめたの？」

「ま、当然の質問だな」

待合室のテーブルにランディはブレードライフルを置き、フィーの向かいの席に座る。

「どうしてって言われても一身上の都合としか言えないな。どうしても知りたいって言うならベッドの中で——んがっ!？」

突然、ランディは壁から噴き出した衝撃波に殴られて悶絶する。

「何今の……？」

思わずフィーは周囲を警戒するが、追加の攻撃の気配はない。

「き、気にすんな……それで……猟兵をやめた理由だったか」

寒気を感じているのか、ランディは顔を蒼ざめさせ咳払いをし改めてフィーの質問に答える。

「ちよっと猟兵の生き方に疑問を感じてな……で、気付いたら団を飛び出して流れに流れてクロスベルに来たって寸法だ」

「そんな簡単に……」

「簡単って言うか、ライフルが撃てなくなっちゃったからな」

おどけて言うが、それは猟兵にとって死活問題であり、的に当てられなくなってしまうたフィーにとっては何人事ではなかった。

「それはどうして……」

「さあ……俺にこんなセンチな感情があることに驚いたくらいだが、結局のところ俺には人殺しを楽しむ才能はなかったんだろうな……」

今はまあ、何とか撃てるようになったけどな」

「それなら団に戻るの？」

「いや……それはねえ」

フィーの問いにランディは即答した。

「どうして？ 団は家族のはずなのに……どうしてそんな簡単に捨てられるの？」

「うちはそんな仲良しこよしでやっている団じゃないんだけど……」

足を引っ張るなら容赦なく後ろから撃ち殺す奴ばっかだぞ」

いつかそんな夢を見たなどランディはその時の悪夢を思い出して唸る。

「そういうお前さんはやっぱり団に戻りたいのか？ もう『猟兵王』

はいないのにそんな『西風の旅団』に拘る価値があるのか？」

「それは……」

「なんつーか……お前は猟兵の仕事を美化し過ぎてないか？」

「そんなつもりはない……」

「確かに『西風』は他と比べて不必要な略奪とかしてはなかったらしいが、それでも猟兵だ……」

この世に『良い猟兵』なんて存在しない。猟兵はどこまで行っても人殺しの『死神』だ」

「わたし……『死神』？」

「それが世間一般の認識だ」

首を傾げるフィーにランディははつきりと言い切る。

「だがまあ、そんなろくでなしでも受け入れてくれる気の良い奴等と俺は出会えた……それは女神に感謝しているんだが、お前はどんな

だ?」

「どうって……何が……?」

「たしか今は帝国の学院に通っているんだよな?」

「うん」

「昔の仲間が恋しいかもしれないが、今いる仲間のことも少しは意識を向けてみたらどうだ?」

「リインみたいな奴が一人いるだけでも、だいぶ気が軽くなってるんじゃないか?」

「………誤解しているようだから訂正するけど、わたしとリインは別に仲良くない」

「ま、そういうことにしてやるか」

「むっ……」

苦笑するランディにフィーは面白くなさそうに顔をしかめる。

「わたしからも一つ……ううん、二つ聞いて良い?」

「お、何だ?」

「猟兵の技で警察官なんて務まるの?」

「意外とどうにかなるもんだぜ。骨の髄まで染み込んだ人殺しの技、案外人助けにもできるって知ったのはあいつのおかげだろうな」

「あいつって……リイン?」

「いや、うちのリーダーだな。リインの奴に似て “人誑し” な奴だが」

「リインと同じ……」

フィーは学院でのリインの噂を思い出して身を震わせる。

「それでもう一つは?」

「……ランディは……もしお父さんが生き返ったらどうする?」

「別にどうもしねえよ」

緊張して尋ねた質問の返事はあっさりとした即答だった。

「そういう生き死にを生業にしていたんだ。いつかそういう日が来るとは思っていたから……」

あの殺しても死にそうにない親父が死んだことには確かに驚きはしたが、だから悲しいっていうのはあまり感じなかったな……

仮に生き返って顔を見せて来たからって、感動の再会をしようって

「いう歳じゃねえからな」

「そう……」

「だがま……一つ言うことがあるとすれば、俺はもう『猟兵』には戻らないって言わないといけないだろうな」

そう言つて苦笑するランデイの顔がファイーには眩しく見えた。

・*

そしてリインの最後の用事と言つて赴いたその場所で——ファイーは拉致された。

そして気付けば絢爛な衣装を着せられて、広い舞台の上に立たされていた。

「よく似合っているよファイー」

観客席で待つていたリインはそんなファイーを褒めて出迎えた。

「リイン……これはどういうこと？」

「実はサラ教官と話して、ファイーの将来のことを踏まえて職場体験をさせてみないかって話になったんだ」

「……それでどうしてここなの？」

ファイーは周囲を見回して困惑する。

劇団アルカンスィエル。

ファイーも名前くらいは知っているクロスベルにおいて有名な興行施設。

「アルカンスィエルは俺が少しの間、遊撃士として仕事をしていたコネがあつたからだよ……」

それにファイーの容姿と軽業は舞台映えすると思つたから」

「だからって……」

ライトアップされた舞台にファイーは居心地悪そうに身じろぎする。

「完全にわたしには場違いな場所だよ。悪いけど——」

「ところでファイー、今回のガルシアさんとの面会だけど、これは貸し一つだよな？」

「……………何が言いたいの？」

「大したことじゃないよ。ただ報酬だけを前払いで受け取ったことになるよな？ それは猟兵の『流儀』に反するんじゃないか？」

「わたしはもう『猟兵』じゃないし」

「それならサラ教官から『特別実習』の追試として扱って良いって許可を取ってるから『学生』として大人しく体験するんだな」

「むっ……」

フィーの逃げ道を前もって潰してくるリインに思わず舌打ちししうになる。

「なんでこんな回りくどいことを？」

「こうでもしないとフィーは自分から動かないだろ？」

それにこのまま何もしなければツールズを卒業してどうするつもりなんだ？」

「それは……」

「とりあえず軽い気持ちでやってみるといい、この際気分転換のつもりでも構わないからさ」

「リインって……お節介だつて言われぬ？」

「自覚はしているよ」

微笑ましい眼差しを送って来るリインにフィーはとりあえず彼の足を蹴る。

当然びくともしないが、そうして溜飲を下げてみるとフィーにこんな格好をさせた張本人たちが来た。

「うんうん、衣装合わせの時も思ったけど中々様になっているじゃない。リイン君、グツジョブ」

舞台衣装に身を包んだイリアはフィーの姿を見て満足そうに頷く。

「どうかどうしてフィーに合う衣装がすでに用意されているんですか？ しかも自分の衣装まで……」

「リイン君の衣装はあれからいろいろ考えていたものよ……」

フィーちゃんのは衣装担当が一晩でやってくれたわ」

舞台袖から親指を立てて良い笑顔を向けてくるスタッフがいた。

背格好を口頭で伝えただけなのに対応してみせるのは、流石としか言いようがない。

「わたしはまだやるなんて言ってないんだけど」

イリアに向かってファイアはジト目になって言う。

「まあまあ、そう言わずに……何もいきなり演じろなんて言わないわよ」

「それじゃあ何をさせる気なの？」

「ふふん、リイン君から聞いたけど、君って分け身と隠形を使えるのよね？」

「そうだけど」

「なら、一つ勝負をしましょう」

そう言うといリアはファイアから距離を取る。

「時間はそうね一時間くらい……」

この舞台の上で鬼ごっこをしてあたしを捕まえられたら、〃特別実習〃はそれで終わりにして上げるわよ」

「正気？ わたしはこれでも元猟兵なんだけど」

「それがどうしたの？」

脅すようにファイアは睨むが、全く動じずにその視線をイリアは受け流す。

「それとあたしに勝ったらリイン君に何でも一つだけ言うことを聞かせる権利を上げるわよ」

「それは本当？」

ファイアはリインに振り返り尋ねる。

「ああ、無理矢理連れて来たようなものだからそれで構わないよ。ただしあんまり度が過ぎるのはなしにしてくれるか」

「それで良い」

イリアの提案はルトガーのことをどう切り出そうかと悩んでいたファイアにとって大義名分になるものだった。

「言っておくけど、手加減はしないから」

「ふふ……それじゃあリイン君、合図を——」

イリアの言葉の途中でファイアが動く。

腕に付けられた装飾の布を翻してイリアの視界を隠し、逆の手でイリアの腕を掴みに行く。

が、その手は空を切り、次の瞬間フィーは宙を舞っていた。

「なっ!？」

設置された塔のセツトに着地してフィーは何が起きたのか分からずに困惑する。

「ふふ、気合いは十分みたいね」

「……………上等」

余裕に満ちた表情で見上げてくるイリアにフィーは気を引き締める。

ただの踊り子だと思わず、戦闘のつもりでフィーはイリアに襲い掛かった。

「ふふ……………」

イリアは跳び上がったフィーの突進を上を躲す。

それを追ってフィーは素早く切り返して跳躍してイリアに迫るが、そこからは先程の焼き直しだった。

腕の飾り布をはためかせてイリアはフィーの腕に絡ませると、そこを起点にフィーの進行方向をずらして派手に宙を舞わせる。

「くっ……………」

先程と同じように塔に着地したフィーは自分を投げた反動で向かい側に着地したイリアを睨む。

「ほら、どうしたのまだ始まったばかりよ」

「……………調子に乗るな」

手を叩いて囃し立てるイリアにフィーは顔をしかめて塔を蹴った。

「……………リーシャさん」

「はい、何ですかリン君?」

二人の勝負を見上げながらリンはいつの間にか並んで同じものを見上げているリーシャに声をかける。

「イリアさんに何を教えたんですか?」

「えっと……………軽功と化勁を……………少々……………」

「……………イリアさんが戦技を覚えたのが三月だから四ヶ月であのレベルの化勁……………もしかして俺よりも……………」

「まあ、イリアさんですから」

全速で襲い掛かるフィーをイリアは闘牛士のように空中でいなして舞う。

片方が素人にも関わらず、見ている者には二人の舞だと思わせる程にイリアはフィーの動きを支配していた。

「……シャドウブリゲイド」

その支配から逃れるようにフィーは分け身を出して四方からイリアに迫る。

が、四方から突撃したフィー達はイリアの身体をすり抜けただけに終わった。

「こつちよこつち」

「違うわよ、こつちが本物よ」

「残念、そつちも分け身よ」

「なっ……」

塔の上の三ヶ所から見下ろしてくるイリア達にフィーは絶句する。

「何で……何でただのアーティストが『分け身』を使えるの？」

『分け身』は戦技の中でもかなりの高等技術。

それを修得する苦労を知っているだけに、イリアが使えていることが信じられない。

「どうしたの、まだ準備運動にもなっていないんだけど」

分け身を消したイリアが挑発するように手招きをするが、たった十数分のやり取りで実力の差を痛感してしまったフィーは尻込みしてしまう。

「あら……？ リイン君のクラスメイトだって聞いていたけど、この程度で諦めるの？」

「っ……誰が」

リインの名前を出されてフィーは萎えかけていた心を奮い立たせる。

「そうこなくつちや」

そんなフィーにイリアは楽しそうに笑うのだった。

・*

「えつと……惜しかったなフィー」

帝国行の列車の中、膝を抱えて落ち込むフィーにリインは慰めの言葉を掛ける。

結局、フィーは時間内にイリアを捕まえることはできなかった。

途中からアルカンシエルで下働きをしていたシュリという女の子も参加し、即席のコンビを組んでの二人掛かりになってもイリアの支配を振り解くことはできず、時間切れよりも先に彼女たちの体力が尽きた幕引きとなった。

「何なのあれ？ “分け身”に“化勁”とかいう技、本当に一般人？」

「武芸は舞踊に通じるものがあるからな……」

もしイリアさんが武芸者を目指していれば“達人級”になってもおかしくない才能の持ち主だ……

捕まえられなかったとしても決して恥じやない。俺だってあの条件でやっていたら絶対に捕まえられる自信はないから」

「そんなふうには割り切れるわけない」

ため息を吐いてフィーは日が落ちた車窓を眺める。

「リインは酷いね……落ち込んでいたのに止めを刺しに来るなんて」

「俺は“西風”のあの二人と違ってフィーを甘やかす理由はないからな。それとも甘やかして欲しかったのか？」

「別に……」

非難の眼差しをあつさりを受け流すリインにフィーは拗ねたようにそっぽを向く。

「それに勝負には負けたけど、イリアさんにはツールズを卒業したらアルカンシエルに来ないかって誘われたんだろ？」

「少なくとも舞台に立つ才能は認められたわけだから自信を持って良いと思うぞ」

「あんなのただのお世辞に決まってる」

フィーは拗ねたようにリインの言葉を否定する。

終始、イリアに弄ばれるように踊らされた一方的な展開を思い出す。

銃や武器を使わない条件だったとしてもただの一般人を制圧することは簡単だと考えていたフィーにはいろいろな自信が砕かれる勝負だった。

「そんなことないよ……」

舞台についてイリアさんがそんな評価をするはずがない」

「だったら猟兵も気にしないって言うのはどうなの？ “死神” のわたしにそんな言葉を掛けるわけない」

勧誘して来るイリアに対して元猟兵だからと言いつつ拒絶しようとしたのだが、だからどうしたと言わんばかりの態度を取られた。

「いや、それも本気だと思うけどな」

元猟兵だろうが、元犯罪者だろうが、殺し屋だろうが、孤児だろうが、才能が有り舞台に真剣に向き合うならアルカンシエルは誰でも拒まない。

そう言い切ったイリアの背後で思う所があつて黙り込んでいた者もいたが、それは余談だろう。

「とはいえ、俺やイリアさんができることはここまでだ……」

結局、フィーがツールズを卒業して何をするのか選ぶのはフィー自身だ」

「……………どうしてリインはわたしにそこまでしてくれるの？」

ただのお節介では説明できない、“西風” の家族とは違う過保護な扱いにフィーは尋ねる。

「フィーのように生き方を選ぶことさえ知らない子を俺は知っている……………」

だから……………たぶんこれはその代償行為なんだろうな。フィーには悪いけどただの自己満足だよ」

自嘲するようにリインは笑う。

「フィー、俺からも一つ聞いて良いか？」

「何……………？」

「二年前、リベールのボースで俺は《西風の旅団》と戦った」
「……………」

突然降られた話題にフィーは息を呑む。

「あの時……俺はフィーの仲間を……お兄さんを殺したのか？」

今までずつと考えないようにしてきた問題だった。

ボースを護るために、『鬼の力』を限界以上に引き出して意図的に暴走させた戦いの記憶はリインの中に残っていない。

あの時の戦いを恥じるつもりもなければ、『鬼の力』を意図的に暴走させたことにも後悔はない。

その後の戦いでも相手の生死を確かめている余裕のない戦いは幾度もあったが、やはり自分がすでに“人殺し”なのかはリインにとつて気になるものだった。

そしてどんな理由があつたとしても、身内を殺されることの辛さもリインは分かっているつもりだ。

「お兄さん……？」 あの戦いは確かに被害は大きかったけど死人は出なかつたよ」

リインの言葉にフィーは首を傾げながら答える。

「そうか……」

その答えにリインは緊張していた息を吐く。

そして安堵している自分にリインは思わず自嘲する。

——情けない。剣士のくせに……

リインは自分の手を見つめて考える。

まだ『理』に至っていないと考えるリインはそれこそが至るための最後の線だと考えていた。

剣を持つ者として決して避けては通れない道であり、同時に安易な覚悟と気持ちで踏み込んではいけない線。

そして『聖女』に勝つたためにはそのことに対しての答えは必要な心構えとなるだろう。

ちなみに想念の世界でワイスマンを斬つたのはリインの中ではノーカウントである。

「ねえリイン……あの時のわたしは……強かつた？」

考え込むリインにフィーは気付けば尋ねていた。

「え……？」

虚を突かれたように顔を上げるリインにファイはさらに言葉を重ねる。

「正直に教えて、あの時のわたしと今のわたし、どっちが強かったと思う？」

「どっちだって……悪いがボースでファイと戦ったことは覚えてないんだ」

「っ……そう……」

リインの答えにファイは落胆する。

「あの時の戦いで覚えているのは《破壊獣》にボコボコにされたことくらいで、後は最初に戦っていたファイと同じ髪の色の子と戦ったことくらいしか覚えてないんだ……他の奴等は一気に蹴散らしたから」

「男の子……へえー……」

心なしかファイの眼差しから冷たくなった気がした。

「その男の子は強かったの？」

「まあ苦戦したのは確かだけど、ヨシユアさんの下位互換だったからそこまで脅威には感じなかったな……」

ゴーグルで顔は見えていないけど、髪の色といい、戦い方といいファイのお兄さんじゃないのか？」

「それがわたし」

返って来たファイの短い答えにリインは固まった。

「……………え？ いや……だってファイは女の子じゃないか」

「そだけど、リインはわたしのこと男だと思ってたんだ……心外……」
「いや、だって男物のジャケットを着ていたし。それにあの時は女の子が猟兵をやっているなんて想像してなかったし……えっと……」

目に見えて狼狽えるリインにファイは気分を良くする。

「それに……あの時の男の子がファイだったとしたら……もしかして縮んだのか？」

「嫌味？ そっちが伸びたくせに」

ゲシゲシとファイは対面に座るリインを蹴る。

「わ、悪い。というかスカートで足を上げて蹴るな」

リインはうまく回らない思考でフィーを何とか窘める。

「貸し一つにしてあげる」

「はあ……分かった」

がつくりと項垂れるリインは改めて自分の未熟さを痛感する。

「それでイリアさんとの勝負の時にも妙に拘っていたみたいだけど、俺に何をさせたいんだ？」

「それは――」

団長のことを尋ねる大義名分。

しかし、やはりいざとなるとそれを尋ねるには躊躇してしまう。

今回のクロスベルでフィーはいろいろな事を知ることになった。

アリオスとガルシアから教えてもらった娘の未来を憂う親の気持ち。

ランデイから教わった今、自分を受け入れてくれる仲間がいることの幸運。

そしてイリアから誘われた未来。

それらに対してまだ何の答えも出せてない自分が果たして胸を張ってルトガーに会っていいのだろうか。

「わたしは……」

仕方がないと笑われるのは良い、だけど失望されることは望まない。

「帰ったらラッセル博士とシュミット博士を紹介して」

「それで良いのか？」

「うん……今はそれで良い」

「そうか……」

リインは特に何も言わずに頷いた。

「せっかくだから空を飛べるSウエポンでも作ってもらおう」

「それは流石に博士たちでも無理じゃないかな？」

無茶振りを言い出すフィーにリインは苦笑するのだった。

45話 作戦A

「よく集まってくれた同志諸君」

彼女は集まった同志達を前に厳かに語り始める。

「——時は至った。今こそ我らの鉄槌をもって罪深きあの男を断罪する刻っ！」

『……応っ！』

拳を握り締め、抑え切れない焰を胸に宿して叫ぶ言葉にいくつもの声が同調する。

「同志《E》……全ての準備は完了しているよ」

「よろしい同志《A》」

女の報告に彼女は満足そうに頷き、改めて同志たちに向き直る。

「静かなる怒りの焰をたたえ、度し難き咎人に鉄槌を下す……頼もしき同志たちよ。力を尽くしてくれたまえ」

「おおっ！」

同志《E》の演説に男女が入り乱れたその集団は雄叫びのような声を返す。

高まる士気。

「ここに作戦Aの開始を宣言するっ！」

・*

「リインさんっ!!」

事件は彼女、ティータ・ラッセルが第三学生寮に駆け込んで来て始まった。

「ティータちゃん？ どうしたんだいそんなに慌てて？」

その日、エリオットと一緒に夕食の当番だったクリスは尋常ではない様子に目を丸くしながら落ち着いた様子で聞き返す。

「また博士たちが何かを爆発させたのかい？」

「えつと……確か今日はあの大きな機械人形のテストをグラウンドでやるって掲示板に張られていたよね？ やっぱり何か爆発したの？」
何もティータがリインに助けを求めて第三学生寮に駆け込んだきたのは初めてではない。

なので全く動じた様子もない二人にティータは場違いながら故郷のことを思い出して申し訳ない気持ちで一杯になる。

「えつと……たしかにお母さんが原因なんだけど……とにかくリインさんは!？」

「リインさんは今日の昼休みにクレアさんが迎えに来て、帝都に行っているんだけど」

「え……」

頼みの綱がないことにティータは固まる。

「ど、どうしよう……」

おろおろと狼狽えるティータにクリスは苦笑して落ち着かせるように声を掛ける。

「よかつたら僕達が話を聞こうか？ リインさんほど頼りにならないかもしれないけど」

「クリスさん……えつと……」

氣遣った言葉を掛けてくるクリスにティータが逡巡して口を開いたその瞬間、爆発の音が地響きと共に響き渡った。

「……今日のはまた一際大きな爆発だな」

「うん……でもまだ爆発は続いているみたい……っというか銃声？」

窓を開けて耳を澄ませるエリオットは爆発に続く炸裂音に首を傾げる。

士官学院の性質上、授業で銃声が街に届くことは珍しいことではない。

しかし、爆発の音に重なって聞こえて来るのは重なり合った銃声。今までの博士たちが起こしていた騒ぎとは様相が異なる印象があった。

「ま、まさかつ！」

「何か知っているのクリス？」

「いや……確証はないけど、新型のオーブメントの実験での戦闘といえば、テロリストによる新型奪取イベント!」

「……えつとそれはお話の中だけの事じゃないかな?」

「そうかもしれないけど、現に襲撃されているみたいじゃないか、ティータちゃんがリインさんに助けを求めに来るほどの事態——はいつものことだけど何かが起きているのは確かだよ!」

目をキラキラさせるクリスは徐に彼女を呼ぶ。

「シャロンさん」

「はい、ここに」

クリスの呼び声は何処からともなくシャロンが現れる。

「ちよつと学院を見てきます。リインさんが戻ってきたら事情の説明をお願いします」

「承りました。お気をつけてくださいクリス様」

恭しく頭を下げて飛び出して行くクリスをシャロンは見送る。

「あ、待ってください。クリスさん!」

「待つて僕も行くよ!」

そんなクリスの後をティータとエリオットは慌てて追い駆けるのだった。

・*・

「これはひどい……」

トリスタから士官学院へと続く道はまるで嵐が通り過ぎたかのよう荒れ晴れていた。

床石から突き出した折れた槍。

煙を上げている街灯の支柱に取り付けられた自動機銃。

爆発の後を思わせる焦げた塀。

そして死屍累々と横たわる生徒達の無残な姿。

「うう……」

「レックスッ! 何があつたんだ!?!」

導力ライフルを手に呻いたレックスにクリスは駆け寄って抱き起

こす。

「っ……ひどい……」

その顔にくっつきりと残る殴られた青痣にクリスは息を呑む。

「ク……クリス……俺はもうダメだ……」

「弱気なことを言うんじゃない！　すぐにベアトリクス教官を呼んでくる。だから、だから……」

「お、俺達のことの良い。それよりもグラウンドのエリカ博士を助けてやってくれねえか」

「人のことよりも自分の心配を——」

クリスの言葉を掻き消すように校舎の方から爆発が上がる。

「俺たちは……大丈夫だ……だから早くエリカ博士を、あの男を——俺達の死を無駄にしないでくれっ！」

クリスの胸倉を掴んで最後の力を振り絞って叫んだレックスはがっくりと崩れ落ちる。

「レックス……くっ……」

クリスは涙を呑んで、レックスの身体を静かに下ろして立ち上がる。

「待ってクリス……っ！　これは」

「あああう……ごめんなさい。ごめんなさい」

そこで追い付いたエリオットとティータはその光景を前に、エリオットはクリスと同じように言葉を失い、ティータはひたすらに恐縮して謝る。

「ティータちゃんが謝ることじゃないよ。全部テロリストが悪いんだから」

「えっと、クリスさん。実は——」

「行こう！　まだエリカ博士が戦っている。まだ間に合うはずだ！」

野次馬根性ではなく、クリスは純粋な気持ちで改めて戦う覚悟を決め、そして——

「死ねえええええええええっ！　アガット・クロスナーツ!!」

グラウンドでは紅いトロイメライが中のエリカの声を響かせながら赤毛の男に襲い掛かっていた。

「エリカてめえっ！ 学生巻き込むなんて何考えてやがるっ!?」

対する赤毛の男は大剣の手にトロイメライが叩きつける剛腕を躲しながら抗議の言葉を叫ぶ。

「だいたいさっきのティータの声を使った傀儡は何だ！ 悪趣味にも程があるだろ！」

「それを容赦なくぶっ壊しておいて何言っつてやがるのよこの人でなし！」

「あれ？」

思っていた状況と違う光景にクリスの足は思わず止まる。

そこでようやくティータが説明を始める。

「えっと、実は今日、リベールへの定時連絡でアガットさん、遊撃士の人が来ることになっていたんですけど……」

アガットさんとお母さんはちよつと仲が良くなって

「仲が悪いだけでトロイメライを持ち出すのはやり過ぎじゃないかな？」

「ごめんなさい……」

「いや、ティータちゃんが謝ることじゃないと思うけど」

まるで我がことのように申し訳なさそうに頭を下げるティータにクリスは逆に自分の方が悪い気がしてしまう。

「それより、どうする？」

魔導杖を展開しながらエリオットが尋ねる。

「どうするって言われても……」

グラウンドでたった一人でトロイメライに立ち向かう赤毛の男の背中にクリスは目を向ける。

「そういえばどうしてレックス達は殴り倒されていたんだろう？」

「よく分からないんですけど、お母さんがみんなに協力してもらったみたいですよ」

前情報でティータに手を出したロリコン野郎と言う風評を吹聴されていたことを知らないティータは不思議そうに首を傾げる。

「あのお願いです。アガットさんを助けてください」

改めてティータはクリスとエリオットに助けを求める。

そんな懇願にクリスは気を取り直して頷いた。

「分かった。確かにこれは見過ごせないよ」

エリカとアガットにどんな因縁があるのかクリスには分からないが、それでもトロイメライは個人に向けるには行き過ぎている。

もしかしたら呪いの影響を受けて籠が外れているのかもしれない。

ならばここにいないリインの代わりにエリカを治めるのは自分の役目だとクリスは意気込む。

「で、でもあんな大きな人形とどうやって戦えば……」

「リインさんはこれと同じ機体とリベールで戦っていたんだ。なら僕達にだって戦えない相手じゃない」

尻込みするエリオットを励ますようにクリスは言う。

「それにエリオットの援護があればきつとできる」

「クリス……」

真っ直ぐに自分の力が必要だと言ってくれたクリスにエリオットは覚悟を決めたように顔を引き締める。

「僕が先制するよ。ハイドロカノンッ！」

水砲の導力魔法を駆動してエリオットがトロイメライを撃つ。

「何っ!？」

突然の援護に驚くアガットにクリスが素早く隣に駆け込む。

「トールズ士官学院Ⅶ組のクリス・レンハイムです。エリカ博士の制圧に協力します」

「っ!？ レンハイム……だと……」

返ってきた反応にクリスは首を傾げる。

「まあ良い……おい、エリカ。これで四対一だ。いい加減観念しろ！」
首を振ってアガットはその思考を放棄し、ティータを含めたクリス達の援軍を受け入れてエリカに降伏を促す。

「はっ……甘いわね赤毛。赤毛が一人増えたくらいでもう勝ったつもり？」

「え……僕だけ名指し？」

「こんなこともあるうかってこっちは露払いの用意はしてあるのよ！
あんた達っ！」

「ふっ！ 任された——ドラグナーハザードッ！」

エリカの声に応える声は空から降って来たと同時に龍気を纏った蹴撃がグラウンドを穿った。

「ほう……躲したか。やるじゃないか」

「ちっ……今の殺気……マジで殺すつもりだったな……」

「ふっ……当然だ」

アガツトの言葉に応えるのは異様な人間だった。

全身を頭まで覆い隠す鎧。

しかもただの鎧ではなく所々にオーブメントの装置が搭載されている真紅の全身鎧。

「そして、君に鉄槌を下すために集まった精銳は私だけではない」

徐に彼女が手を挙げると、それに合わせて彼女の横に四人の全身鎧が校舎の屋上から跳んで着地した。

「ちっ……また奇抜なもん造りやがって」

「最新の導力鎧というものだ。そして我が名は《ロスヴァイセ・レット》とでも名乗らせてもらおうか」

そう言つて、真紅の導力鎧を着込んだ彼女は鎧とは異なる趣のガンレットを装着した腕で拳法の構えを取る。

「ふっ……我が名は《ジーク・ブラック》」

彼女に続いて名乗ったのは二丁拳銃を装備した漆黒の導力鎧。

「私は《オルトリンデ・ホワイト》」

次に名乗りを上げたのは双銃剣を装備した純白の導力鎧。

「《グリムゲルデ・ピンク》！」

ヤケクソに勢い任せに叫ぶのは巨弓を装備した桃色の導力鎧。

「わ、私は……シ、《シュヴェルトライテ・ブルー》」

そして最後の一人は羞恥心を捨て去れずに尻すぼみに名乗った大剣を装備した青い導力鎧。

「度し難き犯罪者（ロリコン）に鉄槌を下す……そのために集まった集団だよ」

「誰が犯罪者だ！」

レットの言葉にアガツトがすかさず反論する。

そして、彼女たちの登場に呆けていたクリスは我に返って口を開く。

「つて言うか、アンゼリカ先輩ですよね？」

それにフィーとアリサとラウラ……黒はクロウ先輩ですか？」

「アンゼリカとは誰の事かな？ 私は《ロスヴァイセ・レッド》だ」

クリスの指摘にロスヴァイセは臆面もなく言い切った。

「いや、どう見てもみんなだよね？」

隠すつもりがあるのかと言うくらいにそれぞれの武器を装備している彼女たちと彼にクリスはひたすら困惑する。

「何でこんなことを……」

「何故と言ったか、クリス・レンハイム……」

君もその男の罪深さを知れば、我らの同志となるはずだ」

ロスヴァイセはアガツトを指差して高らかに叫ぶ。

「幼気な少女をかどわかして手籠めにする！ これが罪と言わずに何と云うっ！」

「そうだそうだ！」

「やっちゃってくださいアン——《ロスヴァイセ・レッド》！」

「このロリコンがっ！」

ロスヴァイセの言葉にグラウンドを遠巻きにしているレックス達が野次を飛ばす。

「……………アン——《ロスヴァイセ》の理由は分かったけど、みんなもまさか同じ理由じゃないよね？」

「ふっ……俺はこいつにいくつか借りがあるだけだ」

「私はこの鎧を改造してもらったことになっているから、その代金みたいなものかな」

《ジーク》と《オルトリンデ》は特に動じた様子もなく答え、クリスはそのまま《グリムゲルデ》と《シユヴェルトライテ》に視線を向ける。

「わ、私だって本当はこんなことするつもりはなかったわよ。ただオーバルギア製作の見学をしいって言ったなら、なし崩しでこんなことに」

頭を抱える《グリムゲルデ》。

そして《シユヴェルトライテ》はそっぽを向いて、小さく答えた。

「ゼムリアストーン製の太剣……」

「……………つまり買収されたんですね」

「し、仕方ないだろ！ 純ゼムリアストーンの武具だぞ！ 武芸者な

らいつかは握ってみたい最高の武具なんだぞ！」

「だからって仮にも子爵の娘がそんな簡単に買収されるなんて…………」

「……………子爵の娘とは誰のことだ？ 私は《シユヴェルトライテ》だ」

ロスヴァイセと同様に惚けるシユヴェルトライテにクリスは何も言えなくなる。

そして、微妙になった空気の中でエリカの笑い声が響く。

「対リイン用に準備していた同志たちの中でも最も強い精鋭よ！ 露払いには任せたわよ！」

「いいやあの赤毛は私が直々に処す」

エリカとロスヴァイセの意見が真っ向からぶつかり、二人はそれぞれの装甲越しに睨み合う。

「では早い者勝ちと言うことで」

「そうね。恨みっこなしよ」

ロスヴァイセの提案にエリカは頷き、二人はアガットに向き直る。

「ええっと…………」

「ククク……………ま、そういうことだからお前達は俺達に付き合ってもらうぜ」

漆黒のジークはそう言ってクリス達をアガットから分断するように銃弾を撃つ。

「悪く思わないでね」

背中に搭載されている推進器を使ってオルトリンデは後衛のエリオットとティータに一瞬で接近して牽制する。

瞬く間に戦闘の主導権は奪われ、クリスはそのままジークとシユヴェルトライテの二人と対峙し、エリオットとティータはオルトリンデとグリムゲルデの二人と対峙する。

「くっ——」

最早時代遅れの鎧だが、彼らの速度はむしろ通常時よりも速い。オーブメントの装置の恩恵なのだろうか、奇抜な格好からは信じられない速度と膂力にクリス達は反撃することもできなかつた。

特にトロイメライとロスヴァイセに攻撃されているアガットは見る間に傷だらけになっていく。

しかし——

「調子に乗ってんじゃねえっ！」

絶望的とも言える状況だと言うのにアガットの眼光は衰えない。

「喧嘩は気合いだっ！」

そう叫ぶとアガットは重剣に炎の龍気を走らせて放つ。

「無駄よ！ あんたの技は全部研究済み！ このトロイメライには対火術式を搭載しているんだから！」

トロイメライはアガットが放った竜気を正面から受け止める。

「そんなこと——知るかつ！」

理屈などどうでも良いと言わんばかりにアガットは足元を砕く勢いで地面を蹴る。

背負う様に構えた重剣に放ったはずの龍気の炎を再び纏わせてトロイメライに飛び込むように跳躍する。

「ちよ——あんた何を——」

トロイメライは未だにアガットが最初に放った龍炎を受け止めたまま、その竜をなぞる様にしてトロイメライに二の太刀を繰り出す。

「双龍烈波ッ!!」

アガットは《八葉》を修めたわけではないが、カシウス・ブライトから剣の基本を教わった時期がある。

故にその基本の部分には《八葉》の影響が強く存在しており、その技は三の型を原型にしたアガットの奥義とも言える技となる。

二つの龍炎はトロイメライの腕を噛む様に上下から喰い合って砕く。

「どうだっ！」

トロイメライの腕を破壊したアガットは着地しその手応えに拳を

握る。

彼の脳裏にはかつて一撃で同じものを粉碎した剣聖の姿が浮かんでいた。

そして、ロスヴァイセはその隙を逃さない。

「大したものだ。だがこれで終わりだ！」

残心を怠ったアガットの背中を取り、ロスヴァイセは拳が振り上げる。

「しま——」

アガットが遅れて気付くが遅い。

無防備になった背にロスヴァイセの鋼鉄の拳が突き刺さる——ことはなく割って入った掌に止められた。

「これは……何の騒ぎですか？」

ロスヴァイセの拳を片手で受け止めたのは昼から帝都へ行っていたはずのリイン・シュバルツアーだった。

「トロイメライの最終テストをするとは聞いていましたけど、これは何ですか？ アンゼリカ先輩？」

「ふっ……私はアンゼリカ・ログナーではなく《ロスヴァイセ・レッド》……」

この導力鎧は耐刃耐弾耐衝撃、そして耐術式を備え身体能力を倍加させえるSウエポン！ もはや君に負ける要素は——ゴフツ!？」

鎧の性能を自慢していたロスヴァイセはリインに拳で脇腹に触れられたかと思うと、次の瞬間膝から崩れ落ちた。

「た、泰斗のゼロ・インパクトを何故君が……がくり……」

「さて……エリカ博士。そこから出て来て説明をしてもらえますか？」

リインは崩れ落ちたロスヴァイセに一瞥もくれずに片腕を失い、その衝撃で機能不全に陥ったトロイメライに向けて笑いかけた。

こうしてエリカ博士の作戦Aは幕を閉じるのだった。

46話 新たな力

7月17日

トリスタの街は初夏を迎え、士官学院では学生服が夏服へと切り替わっていた。

学生たちも学院のハードなスケジュールにも慣れてきた。

夏の盛りの前、まだ暑すぎず過ぎ過ぎしやすい気持ちのいい日々、そんな季節ならではの授業が士官学院では始まっていた。

「えっとみんな、そんなに注目されたら流石に気恥ずかしいんだけど」
ギムナジウムのプールサイド、Ⅶ組のメンバーとサラの注目を浴びたリインは気まずそうに頭を掻く。

「いや……これは気にするなって言うのは無理があるだろ」

「うん……腕の傷は夏服になって知っていたけど、他の傷は……」
マキアスとエリオットの言葉にリインは自分の身体を見下ろす。

「その腹の傷は相当深いようだが、大丈夫だったのか？」

「いや、内臓がはみ出るくらい重傷だった」

グランセル城への橋の上で《剣帝》と戦った時の傷を指摘され答えると、ユーシスは顔を引きつらせる。

「右肩の抉れたような傷は？」

「それはアリアンロードさんと初めて会った時に付けられた傷だな」

「左肩の銃創は？」

「小物に撃たれた時の傷だな」

「両腕の傷はもしかして……」

「ああ、斬り落とされて繋いだ時の傷痕だ」

「えつと……その胸に刻まれている刺青なんですか？」

「どこぞのマッドサイエンティストに刻まれた《聖痕》——導力魔法用の結晶回路みたいなものだ」

矢継ぎ早の質問に答えるたびにⅦ組の表情はどんどん曇っていく。

「クリスは知っていたの？」

「ええ、ユミルではリインさんと一緒に温泉に入ったこともあるから」

特に動じていないクリスにエリオットが尋ねると平然とした肯定が返ってくる。

確かにクリスもその時には驚いたが、シグメントやヴァルターといったリインの身体に負けず劣らずの肉体と傷痕を持つ者達もいて衝撃そのものはあまりなかった。

「ふむ……これぞまさしく歴戦の戦士の体だな」

動揺から立ち直ったラウラはリインの身体に刻まれた戦いの記憶を想像して満足そうに頷く。

「傷痕ならわたしのお腹にもリインに付けられたのがあるけどね」

フィーは水着の上から自分の腹をさすり、意味深なことを言う。

「リイン……」

「それは間違っていないけど誤解されるような言い方をしないでくれ」

フィーの言葉に過剰に反応したアリサに睨まれリインは肩を竦める。

「はいはい、いつまでもリインの身体に見惚れてないで授業を始めるわよ」

ぱんぱんっと手を叩いてサラが動揺していた生徒達を促す。

「なっ!? み、見惚れてなんていないですよサラ教官っ!」

するとアリサが声を上げむきになって抗議する。

「あらあら、軽い冗談のつもりなんだけどもしかして凶星だったのかしらっ。」

にんまりと人の悪い笑みをサラはアリサに向ける。

「し、知りません! それよりも早く授業を進めてくださいっ!」

「はいはい……」

急かすアリサにサラは苦笑して生徒達に向き直る。

「士官学院におけるこの授業はあくまでも『軍事水練』……」

溺れないこと、溺れた人間の救助、蘇生法なども学んでもらうわ。とりあえず今日はあんた達がどれくらい泳げるか確認させてもらおうわよ」

「そういえば、リインはどれだけ泳げるのだ?」

サラの説明が終わり、ふと思いついたようにラウラが尋ねるとⅦ組

の視線が再びリインに集中する。

「そうだな……ユミルに川があるから夏場に少しだけ父さんから教えてもらったくらいでこんな広いプールで泳ぐことは初めてだな」

「そうか……」

リインの答えを聞いたラウラは静かに頷く。

「水泳部に入っていた甲斐があったな……」

めらりと静かにラウラは闘志を漲らせる。

そして、同じように意気込んでいるのは彼女だけではなかった。

「モテモテねリイン」

「あまり嬉しくないモテ方ですね」

からかってくるサラにリインはただ苦笑を浮かべる事しかできなかった。

・*

7月18日、日曜日。自由行動日。

グラウンドではリインとクリスの立ち合いの下で二人の少女がぶつかり合っていた。

「ふっ！」

フィーの踏み込みに合わせて足に装着したオーブメントの具足から圧縮空気が噴き出し彼女の小さな体を弾丸のように飛ばす。

「はあっ！」

全身が乗った足蹴りをラウラは大剣で受け止めて空中に投げるように払う。

宙に投げ出されて無防備な体を晒すことになったフィーだが、先程の跳躍と同様に具足のオーブメントから風を噴出させその勢いで大剣の切り返しを避ける。

「フィーの新しい武器は靴のオーブメントなんですね」

「ああ、ガルシアさんのSウェポンは背中に推進力をつけた全身鎧のワードスーツだった……」

その機構を具足にまで縮小軽量化して旧導力魔法の《シルファリオ

ン》を常時起動、短時間なら風を噴出して飛ぶこともできるか」

「後は新しい導力銃ですけど……」

フィーは一回り大きくなった導力銃を一つはラウラに向けて構え、もう一つはその銃に対して垂直に腕を交差させて同時に連射する。

前に構えて撃った弾丸は当然ラウラに向かって撃ち出され、在らぬ方向に向けて撃った弾丸は弧を描き回り込んでラウラの背後へと回る。

「戦術リンクを応用した弾道制御か……たった一週間でこんなものを造ったのは流石なんだけど」

先日の騒ぎを思い出してリインはため息を吐く。

フィーが思い付きで提案したSウエポンに求めた二つの機能。

空を飛ぶこと。不意打ちできる弾丸。

かなりの無茶振りだったにも関わらず応えて見せた博士たちの技術力に改めてリインは彼らの偉大さを実感する。

「でもラウラも負けてませんよ」

真新しいゼムリアストーン製の大剣を盾に正面からの銃撃を防ぎ、背後に回り死角から飛来してきた銃弾をラウラは見向きもせず紙一重のタイミングで身を翻して躲した。

「さつきから死角からの攻撃を全く見ないで避けていますけど、どうなっているんですかね？」

「ラウラが言っていたことから考えると所謂『共感覚』だろうな」

「『共感覚』ですか？」

「俺も詳しく知らないが音や匂いに色を感じたりするものらしいな……」

ラウラのは周囲の音や匂いを視覚に変換して全方位が見えているみたいなんだ。たぶん俺やレンとは違う方向性の『識』の力だろうな」

幻の聖獣が作った銀耀石を摂取した影響なのだろう。

意図せずに得てしまった『異能』にラウラは複雑な顔をしていたが、その有用性をフィーとの実践訓練で実感し、今では気持ちよく新たな大剣を振り回している。

「そういえばラウラの剣って少し長くなってませんか？」

「気付くのが遅いぞ」

クリスの感想にリインは注意して頷く。

「あの大剣を作ってもらった時にラウラは『ガランシヤール』と同じ刃渡りと刃幅を頼んだみたいだな」

元々使っていた大剣とは一回り大きくなったそれをラウラは今までの様に、むしろ軽々と振り回す。

もしかすれば闘気の質も変化して臂力が上がっているのかもしれない。

『《鬼の力》が安定して基礎能力が上がったみたいなものか……』

自分の経験に当てはめてラウラのレベルアップの原因に当たりをつける。

ノルドで見せた『暴走』の兆候がないことに安堵し、評価はもう十分だと言わんばかりにリインは徐に二人から視線を逸らした。

「とりあえず、あの二人にはスカートの下に何かを履かせた方がいいな。特にフィーは」

「そ……そうですね」

考えないようにしていたクリスは顔を赤くして俯きリインの意見に頷いた。

・*

「それじゃあ今日はこのメンバーで旧校舎攻略を始めようか」

「はいっ！」

元気な声を返してきたのはクリスでもフィーでもラウラでもなく、テイータの声を使った戦術殻だった。

「だけど一つ提案して良いか？」

そんな感情表現が豊かになった戦術殻にリインは苦笑して受け入れながら、提案をする。

「今回はクリスの指示で俺は動こうと思う。できればラウラとフィーにもそういう風に動いてもらいたいんだけど」

「ふむ……リインがそういうなら私は構わないけど」

「とりあえず理由を説明して欲しいかな」

「単純にクリスに人を指揮して戦う経験を積みませようっていうだけの話だよ……」

VII組でリーダーの資質が高いのはクリスとユーシス、それとマキアスの三人だと俺は考えている……

それにクリスには新しい魔導杖があるからそのテストも兼ねての提案だ」

リインは戦術殻に搭載されている新しい魔導杖に目を向ける。

銀耀石を使った新しいタイプの魔導杖《ミスタリレ》。

これまでは近接武器に魔導杖のような効果を付与するものだったが、魔導杖には別のコンセプトとして外付けの導力タンクと既存導力魔法を拡大・強化させる機能を持たせている。

これによりクオーツの配置がエマやエリオットに劣るクリスでも彼女たちと同等の威力の導力魔法を撃つことが可能になる。

そうなるとう当然、近接武器を主体にしていたクリスはこれまでと違う立ち回りをしなければならなくなる。

「どうするクリス？」

「リインさん……」

答えを求めてくるリインにクリスは少しだけ迷う。

近頃のリインは忙しく一緒に旧校舎攻略に行くことはなかった。

彼と肩を並べて戦うことはクリスにとって密かな楽しみであり、久しぶりということもあり今日の期待はより強かった。

何よりもまだまだ未熟な自分がリインに指示を出すなどと恐れ多いと考え——クリスは首を振った。

「やります」

弱気な思考を振り払い、力強く頷いてクリスは魔導杖を装備する。

「クリスがその気ならわたしはそれで良いけど、リインの攻撃力じゃ指示なんて関係ないんじゃない？」

「それなら大丈夫だ。今日はこれを使うから」

そう言っつてリインは腰に佩いた竹刀を見せる。

「それって確かわたしたちの後でクラス代表をしばき倒した武器だよね?」

「確かにそれなら一撃で魔獣を倒すことはないと思うが……そういうえばリインの太刀はノルドの実習の時に折れていたが直してもらっていないのか?」

ふとラウラは《守護者》に破壊されたリインの太刀の事を思い出して尋ねる。

「実は特殊な造りで導力技術で修復するのは難しいらしい……」

まあ、貫い物だから壊れたままにしておくのは心苦しいけど、鍛錬用の太刀だから気にしないでくれ」

そう答えて、リインはクリスを促した。

「それじゃあ、ここから先はクリスが仕切ってくれ」

「は、はいっ!」

場所を譲られたクリスはリイン、ラウラ、フィー、Ⅶ組の中でも最も高い戦闘力を誇る三人を前に号令をかける。

「これより旧校舎攻略を開始する。各自、僕の指示に従ってください——従ってもらおうっ!」

「「おおっ!」」

「おーっ!」

普段の口調を改めて命令するクリスにリイン達は声を揃えて返事をして、戦術殻の返事がそれに重なった。

・*

旧校舎攻略は概ね、問題なく終わった。

元々戦闘能力が高い三人だったこともあり、多少のミスは個人がフオローする形となったがそれでも戦術リンクもうまく回り十分な成果だった。

「魔導杖の戦い方もちょっと面白いですね」

「そんなもの? 相手の立ち回りを知りたいから今度わたしにもそれ使わせてよ」

「それなら代わりにフィーの新しい銃を撃たせてもらっても良いかな？ 弾丸を曲げるってどんな感じなのか気になるから」
「ふむ……相對した時の立ち回りか。確かに知っておくべきかもしれないな」

和氣藹々と意見を交換しながら歸路に着く三人をリインは微笑ましく見守る。

——もう大丈夫だな……

樂しそうなクリスの背にリインは安心する。

特別扱いしなくいいと言われていたが、帝国政府にとって自分はクリスのお目付け役。

だがその役割ももう必要はない。

入学当初に感じていた危なっかしさはなくなり、Ⅶ組を始め友人たちも増えた。

既にリインが気に掛ける必要はなく、学院内で問題が起きててもクリスは自分の力で解決することができるだろう。

——これならあの計画を実行しても良さそうだな……

クリス達と何気ない会話をしながらもリインは暗い思考に浸る。

これはクリスは当然としてオリヴァルト皇子やオズボーン宰相の意志に反するリインの身勝手な欲望による暗躍。

例えクリス達の気持ちも踏みにじることになったとしても心を鬼にしてやらなければならぬ使命なのである。

つまり——

——みんなにそれとなくクリスがセドリック皇子だと気付かせる。まだ取り返しがつく内に……

そんな決意を固めるリインだった。

「——あれ、どうしたんだろう？」

正門に辿り着くとそこには人だかりができていてクリスは首を傾げる。

「どうしたんですか……ってユースス？」

先にその人ばかりで立ち尽くしていたクラスメイトを見つけてクリスが声を掛ける。

「ああ、お前達か。丁度良かった。リイン、お前に客人のようだ」
「え……俺……？」

ユーシスの言葉にリインは首を傾げると、人だかりはリインに気付いてぎつと一斉に道を開ける。

「あ、久しぶりに見た……」

そんなことを呟くクリスを他所にリインは人だかりが作った道の先に目を向け、息を呑んだ。

「お久しぶりですリインさん」

優雅に一礼して言葉を掛けて来たのは金髪の少女。

そして少女は一人ではなく、同じ紺色の制服を着た二人の付き人と護衛を一人従えていた。

「これはアルフィン殿下、御機嫌麗しく」

リインは動揺を隠して彼女の前に進み出て頭を下げる。

横目で確認した付き人の二人はエリゼとミルディーヌ。そして護衛のクレアは申し訳なさそうな表情をしている。

「わざわざ殿下にお越しいただかなくとも、御呼び立て下さればこちらから帝都に出向いたのですが」

「ふふふ、そんなお気になさらないでください。リインさんに用があるのはエリゼですし、わたくしは以前会えなかったⅦ組の最後の一人の顔を拝見したくて訪ねさせてもらっただけですから」

にこやかに笑いながら、アルフィンの目はクリスに向けられていた。

「貴方がクリス・レンハイムさんですね。初めまして」

「は、は、はい。初めましてアルフィン殿下」

蛇に睨まれた蛙のように震えるクリス。

——やられた……

それとなくアルフィンがクリスと似ていることを噂として流そうかと計画していたリインはそれを潰されたことに歯噛みする。

衆人環視の中でアルフィンはクリスと初対面だと周知させた。

これではリインが噂を流しても効果は半減してしまう。

「そんなにかしこまらないで下さいリインさん。それにわたくしのこ

とはあの時のように呼び捨てで構いません」

「アルフィン殿下、場所を弁えてください」

周りの野次馬に聞こえないように音量を調整してリインはアルフィンを窘める。

「ふふ、残念……」

ここでは落ち着いてお話もできませんから、クリスさん達が暮らしている学生寮に案内していただいてもよろしいですか？」

「ええ、もちろん」

差し出された手を恭しく取る瞬間、妹からの眼差しが痛いほどに強まるがリインはぐつと堪える。

この衆人環視の中で男爵家のシュバルツアー家がアルフィン殿下の申し出を断ることはできない。

それが分かかっていてエリゼは黙っているのだが、アルフィンの背後に控えている彼女を正面から見ていることになる野次馬たちは能面の様にも見える彼女の顔に理解不能な悪寒を感じずにはいられなかった。

「アルフィン殿下、あまりエリゼを揶揄わないでください」

「あら、何の事かしら？」

小悪魔な笑みを浮かべてリインの指摘にアルフィンは惚ける。

そんなアルフィンの確信犯的な態度にリインはため息を吐きたくなるが、衆人の前なので堪える。

——くっ……とにかく一秒でも早く学生寮に……

とにかく人の集まっている正門から離れたい一心でリインは歩き出そうとして——古めかしい鐘の音が響いた。

「あら……？ この鐘の音は何処から？」

目の前の本校舎からではなく遠くから聞こえてきた鐘の音にアルフィンは首を傾げる。

「よりによってこのタイミングか」

一回だけなった旧校舎の鐘の音にリインは頭を抱えなくなる。

学院側にも言っているが、《騎神》の修復が完了した際に鳴る様に設定しておいたもの。

なので普段なら問題ないのだが、アルフィンやエリゼ達にはいろいろと刺激が強いことが起きる予感が湧き上がる。

「リン、ヴァリマールの修復完了しました」

と、そこにリンの苦悩を察することなくリンが転移で現れる。

「あら、初めてお会いするお人形さんですね。わたくしはアルフィンと申します。あなたの御名前を窺ってもよろしいでしょうか？」

「この個体はリンと名付けられました。よろしく願いますアルフィン」

皇女を呼び捨てにしたことに野次馬たちがざわめく。

もつとも当のアルフィンはそれに気を悪くする素振りはない。

「申し訳ありません。殿下、どうやら急用ができてしまったので案内は 크리스 に代わってもらってもよろしいですか？」

「あら、そうですか。残念」

「事はオリヴァルト皇子にも関わることなので御容赦ください」

背後で 크리스 の慌てふためく気配を感じるがリンは無視して大義名分で理論武装する。

「それじゃあ、エリゼもまた——」

とりあえず一刻も早くこの場をやり過ぎたい一心だったリンは最後に妹に声を掛けようとして固まった。

「兄様……そちらのリンさんとはどのような御関係ですか？」

「エ、エリゼ……？」

アルフィンがいたことで静かに盛り上がっていたその場の空気がその一言で冷たくなる。

「どのような関係って……いきなり何を言っているんだ？」

突然不機嫌になったエリゼにリンは困惑し、最終手段である《識》を使ってその原因を探る。

無秩序な情報から瞬時に答えを見つけ出すその力はリンの期待に応えて答えを導き出す。

父が持っていた黒髪の少女の写真。

それによく似た容姿のリン。

両親には誤解を解いていたが、その場にエリゼは同席していなかつ

た。

つまりエリゼは両親と同じ誤解をしたままである。

「待て、落ち着くんだエリゼ。それは誤解だ」

「ええ、分かっています兄様……リンさんの元になった女性がいらつしやるんですよ？」

できればそちらの方を紹介して欲しいのですが」

「あらあら、それはエリゼ先輩が以前仰っていたリインさんの想い人のことですか？」

エリゼの質問にミルディーヌが楽しそうに、そして少し拗ねたように更なる爆弾をその場に投下する。

ざわりと先程とは別の意味で野次馬たちが騒然となる。

「それは詳しく聞きたい話ですね」

さらにはアルフィンも食いつく。

「想い人に似せた人形……姫様、これはあれですよね？」

「ええ、そうねミルディーヌ」

頷き合う二人にリインの思考はさらに追い込まれる。

「違うから、リンの姿は俺の母さんの姿を模したものだから」

「嘘をつかないでください、兄様。母様とその人形の方は全くの別人です」

野次馬たちがマザコンなどと囁いているが、リインは無視する。

「いや、ルシア母さんじゃなくて俺を生んでくれた、もういない母さんだ」

「え……？」

リインの言葉にエリゼからの氷の威圧感が霧散する。

「兄様……まさか……以前の記憶が……」

「ああ、少しだけ——」

「ああっ！ リンって誰かに似ていると思ってたら女装させたリインにそっくりだったわね！」

エリゼを落ち着かせることに成功したと思った矢先、サラの声が響いた。

「女装させた……」

「《魔王》が……女装……」

「いやいやありえないだろ……いや結構いけるか？」

「サラ教官、あなたが勇者だったのか！」

最後の爆弾に野次馬たちのテンションは頂点に達するのだった。

「……………どうしてこうなった……………」

そしてリインはがっくりとその場に膝を着くのだった。

47話 対話

7月18日、日曜日の夕方。

部活動などに勤しんでいた生徒達が帰路に着く時分。

とある理由でその生徒達が騒然としている中、リイン・シユバルツァーはクリスとシユミット博士たちと旧校舎の地下にいた。

目的はそのある理由のほとぼりが冷めるまでの避難。

真つ先に旧校舎が疑われて追手が訪ねて来たが、それはエリカ博士にうまく対応してもらった。

もつとも旧校舎のシステムを掌握しているリインが地下構造を操作して入り口を塞げば全く問題なかったりするのだが、彼女たちには学院中を駆け回って疲弊してもらうことにする。

例え、相手に皇女がいたとしてもリインはそうすることに一片も躊躇いはなかった。

「うむ、いよいよよじやな」

最奥、《灰の騎神》が安置されていた場所を前にラツセル博士は嬉しそうに呟く。

その輪の中に来ると思っていたエマの姿はない。

どうやら他の人達に《魔女》だと明かすことを割り切れていないようなので立ち会いは部屋の隅にさり気なくいるセリーヌ越しだった。

「リインさん、早く早く」

「ああ、今行く」

ティータに急かされリインは前へと進み出る。

最初にここに来た時に安置されていた《灰の騎神》はリンの力により霊脈から造られたゼムリアストーンの塊に覆い尽くされた。

最初は輝きを宿していたのだが、今では内包する力を使い切ってしまったせいなのか輝きはない。

「やっ……」

そのゼムリアストーンだったものにリインが触れば、その慣れ果ては崩れ落ちて中から《灰の騎神》が完全な形で目を覚ます。

臆することはないのだが、強いて上げるとすれば果たして彼が自分のことを正式に《起動者》と認めるかどうかがいんには分からなかった。

——繋がっている感覚はある。だけどそれはリンが作ってくれた繋がりでからな……

やはり正式な試練を乗り越えていないことが懸念である。

出来る事ならこの時までには第六層全てを攻略し直しておくつもりだったのだが、忙しくてできなかったのだ。

「まあ、なる様になるか」

最悪、《騎神》と一対一で戦うことを考えながらリンはゼムリアストーンに触れる。

それを合図にするように大岩に亀裂が走る。

音を立てて砕け、岩はまるで砂になるかのように細かく崩れ落ちて行き、足元の地脈へと吸収されていく。

そして、その崩れていくゼムリアストーンの中から膝を着いた状態の《灰》が現れる。

「おおっ！　これがティータが言っておった《灰の騎神》か！」

「帝国に伝わる巨大な騎士の伝承……その正体……」

ラッセル博士が歓声を上げ、クリスは感激に体を震わせる。

「ヴァリマール。俺が分かるか？」

背後の声に苦笑を覚えながらリンは《灰》に声を掛ける。

『ウム……今代ノ起動者、りいん・しゅばるつあー』

「喋ったっ!?　って戦術殻も話すようになったからおかしくはないか」

ヴァリマールの返事にクリスは驚くが、すぐに大したことではなかったと割り切る。

その眩きの内容にリンは再び苦笑しながらヴァリマールとの対話を続ける。

「俺を《起動者》として認めてくれるのか？」

『ウム……繋ガリハ確力ニアル……シカシ……』

言い淀むヴァリマールにリンは首を傾げる。

「不満があるなら何でも言ってくれ、正規の試練をやり直させて言うならそれに従うつもりだ」

『イヤ、ソウデハナイ……ソコニイル存在ハ我ラの母ナノカ?』

「え……? わたしのこと?」

ヴァリマールの視線を感じてノイが困惑しながらリインの後ろに怯えたように隠れる。

「ああ、そうだな」

ノイを背中に感じながらリインはヴァリマールの言葉を肯定する。

「彼女はノイ……本体は高位次元に封印されたままだけど、意志だけをここに繋いでいる《鋼の至宝》の意志だ」

『鋼ノ至宝……』

「ヴァリマール……?」

『記憶データニ破損ヲ確認……《鋼ノ至宝》ニ関スルデータヲ読ミ取りニ失敗』

「データの破損……ヴァリマール。俺と一緒に戦ったことは覚えているか?」

『肯定……湖畔ノ地ニテ影ヲ使イ五人ノ戦士ト戦闘、敗北シタ』

「《影の国》の戦いは?」

『該当スル記憶ハ存在シナイ』

ヴァリマールに《影の国》での記憶がないことにリインは首を傾げるが、すぐに仮説を考える。

元々はリインの想念で組み上げた存在だった。本物と干渉していなかったと考えるもおかしくはない。

『りいんヨ』

「ん……? どうしたヴァリマール?」

『我ハ「巨イナルカ」ノ一端、小サキ者ニ敗北スル道理ハナイ。起動者ヨ——更ナル練達ヲ期待スル』

無感情な言葉の羅列に過ぎないがどこか不満を感じさせる辛辣な上から目線の言葉。

《七の騎神》としての自負。

後は歴代の起動者たちと比べられているのかもしれない。

それ程までに生身の人間を相手に敗北したことは屈辱だったのかもしれない。

棘を感じる言葉をリインは静かに受け止める。

「ああ、そうだな……」

お前のことはまだ良く分からないけど、俺なんかじゃ釣り合わないほどの存在だというのは知っている」

『フム……？』

「お前の力を完全に引き出せるようにもつと強くなってみせる。その時に改めてお前の《起動者》として認めてくれ」

言外にまだ認めないという言葉に対してリインはそう答える。

「差し当ってはこれからの作業を我慢してくれよな？」

『……ナニ？』

友好的な笑顔を浮かべてリインは手を挙げて合図を出す。

「良しっ！　まずは導力波を当てて内部の結晶回路を見るぞ」

「何を言うラツセル。先に装甲を外してフレームの調査だ」

「そっちこそ何言ってるのよ、先にコックピットに入れてもらって内部システムの調査よ！」

『ナ、ナニヲスルツモリダ？』

目の色を変えて自分に迫り、目の前で口論を始める三人の博士たちにヴァリマールはたじろぐ声を出す。

「何って、武装デバイスを作るためにもお前の身体を色々調べないといけないだろ？」

笑顔のままリインはヴァリマールの疑問に答える。

『《騎神》ニツイテノ知識ハ《起動者》トナツタ時点デ汝ノ中に入力サレタハズ』

「それはあくまで基礎知識だろ？」

お前の重心の位置は？　体の重量配分は？　出力は？　どれくらいの重さまで持つことができる？　関節の可動域はどれくらいある？

『ソ、ソレハ……』

矢継ぎ早にぶつけられる疑問にヴァリマールは答えに窮する。

「俺が不甲斐ない《起動者》なのは認めるさ……
だけど、それならお前はどれ程のものなんだ？」

元々お前は《鋼の至宝》を封印するための重石として造られて、戦闘力はオマケみたいなものだったはずだろ？」

『イ、イヤ……我ハ……我ハ……』

「『大いなる』って言ってもパテルⅡマテルの半分くらいの大きさだし……」

『ム……』

「ダメージに関しても、機体のダメージを致命傷のレベルまでフィードバックするんだよな……パテルⅡマテルは回復してくれるのに」

『ムウ……』

「メイン武装は人それぞれだからないのは仕方ないが、もしもの時のために副武装くらいは搭載していて良かったんじゃないか？」

丸腰で戦わされて辛口の戦闘評価を言われても、お前が目覚める前に予め武装も造っておけても言うつもりなのか？

せめてパテルⅡマテルの腕みたいに頑丈な手だったら良かったんだけどな」

『……………』

リインの容赦のないダメ出しにヴァリマールは閉口する。

目覚めたばかりで記憶は定かではないが、ここまでダメ出しをしてきた《起動者》は彼が初めてだろう。

「ああ、それから俺が気に入らないならその時ははっきり言ってくれ……」

まだ《起動者》が決まっていない《騎神》は二つあるから、遠慮しないでもいいぞ」

言外に自分には選択の余地があると匂わせるリインにヴァリマールは人で言う所の悪寒を感じる。

本来なら騎神が起動者を選定し、逆はあり得ない。

が、リインの言葉には本気だと言う凄みを感じてしまう。何よりもリインの傍らに控えている《空の至宝》と《鋼の至宝》の意志がリインに説得力を与えていた。

「とりあえずこれからよろしく頼む。ヴァリマール」

『ア、アア……コチラコソ……』

先程までの高圧的な態度は鳴りを潜めてヴァリマールはリインの言葉に静かに頷いた。

この短いやり取りで格付けは決まったも同然だった。

……

……

……

ファーストコンタクトを乗り切ったリインはヴァリマールの事を博士たちに任せて離れて彼らの作業を見守る。

「あ、あのリインさん。触ってみても良いですか？」

「それは本人に聞いてくれ」

感激した様子のまま尋ねてくるクリスにリインはヴァリマールの意志を尊重する。

恐る恐ると言った様子でヴァリマールに声を掛けるクリスに苦笑している、セリーヌが話しかけて来た。

「あんだ、騎神を使って生身の人間に負けたんですって？」

「ああ……」

ヴァリマールと同様に非難が籠った言葉にリインは静かに頷く。

「ふん…… 彼〃の力を借りておいて情けない。今からでも遅くないから《起動者》を辞退したらどうなの？」

「悪いけど、俺は降りないよ」

ヴァリマールにはああ言ったが、ノイを通して知った起動していない二機が自分を認めるかどうかの保証はない。

そもそもその内の一機は血筋によるロックが掛かっているのです、実質は一機しか枠は残っていない。

《灰の騎神》は《黄昏》に食い込むための重要なカードである以上、リインがそれを辞退することはできない。

「だったら精々力を付ける事ね……」

騎神の目覚めにはいつも戦乱がついて回るんだから、二つの《至宝》の加護があるからって調子に乗っていたらいつか痛い目を見るわよ」

「ああ、分かっているよ」

セリーヌの指摘する《至宝の加護》にリインは何の事だと首を傾げながらも彼女の忠告を素直に受け止める。

「ふん、どうだか……」

言いたいことを言ったセリーヌはもう用はないと言わんばかりにリフトへと乗り、勝手に起動してそこから立ち去った。

「リイン、わたしあいつ嫌いっ！」

去って行ったセリーヌを指差してノイが叫ぶ。

「まあまあ、セリーヌも悪気があるわけじゃないから、魔女としてのプライドからの忠告のつもりだろ」

そんなノイを宥めながら、リインは博士たちに群がられるヴァリマールを改めて見る。

「分かっているさ……俺が未熟だって言う事くらい……」

ヴァリマールが指摘した力不足、セリーヌが指摘した不甲斐なさ。

どちらもリインが一番痛感していることだった。

「強くなってみせるさ」

二人の言葉にリインは拳を握り締め、何度目になるか分からない決意を固めるのだった。

・*

その頃、地上では一週間の強制禁酒撤回と引き換えに騒動の鎮静化に奮闘するサラがいた。

・*

女装の危機がなくなつたと《ARCUUS》に連絡が来て戻った地上はすっかり日が落ちていた。

リインとクリスはヴァリマールの事を博士たちに任せて学生寮へと帰り、そこで事の元凶となったアルフィン、エリゼ、ミルディーヌの三人と改めて顔を合わせた。

「もうリインさんだったら本気で逃げることはないじゃないですか、ほんのちよつとしたお茶目だったのに」

「いいや、あれは本気の目だった」

「あら？ 何ですかクリスさん？」

「い、いえ……何でもありません」

アルフィンに笑顔を向けられてクリスは身を竦ませて首を振る。

「はは、それよりもどうしてアルフィン達はこちらに？ クレアさんに護衛してもらってまで」

エリゼ一人が自分を尋ねて来たのなら分かるが、皇女であるアルフィンと公爵家の娘であるミルディーヌまで揃ってしまえば護衛を付けないわけにはいかない。

皇族の思い付きに振り回されることになったクレアに目配せでリインが労うと、返って来たのは疲れたというよりもどこか嬉しそうな笑顔だった。

「兄様……」

「ん？ どうかしたのかエリゼ？」

妹が呼ぶ声にリインはすぐに反応するが、エリゼが向けてくる眼差しの温度は冷たかった。

「今日、リインさんを訪ねさせてもらった理由はですね」

睨んでくるだけで口を開こうとしないエリゼに代わってアルフィンが徐に語り出す。

「一緒に帝都で買い物をする日を楽しみにしているのに、いつも忙しそうにしている構ってくれないお兄様に甘えに来たんですわよね」

「ひつ姫様っ！ 適当なこと言わないでくださいっ！」

「あら、でもこの数週間のエリゼ先輩っただらとリインさんに買っていたいただいた導力通信機とにらめっこしていたじゃないですか」

「ミルディーヌッ！」

「ごめんエリゼ、そんなに寂しい思いをさせていたなんて」

「兄様っ……違うんです。これは姫様とミルディーヌが勝手に言っていることで決してそのようなことは……」

だいたいツールズに行こうと言い出したのは姫様じゃないですか

！」

矛先を向けられたアルフィンはその追及を軽く流して続ける。

「それにミルデーヌも五月にテロリストによる列車占領事件に巻き込まれてから、ふとした拍子に物憂げに遠くを見るようになったそうで……」

その事件に関わったと聞くⅦ組の皆さんとお話できればその時に負ってしまった心の傷も癒せるのではないかと思って」

「ひ、姫様っ!？」

アルフィンの言葉を想定していなかったのか、ミルデーヌは突然話を振られてあからさまに狼狽える。

「かく言う、私はクロスベルの観覧車でお誘いしたダンスの相手の御返事を頂きたくて来てしまいました」

てへっと可愛らしくアルフィンは言った。

「その件については返事が遅れてしまって申し訳ありません……」

お誘いはありがたいのですが、その日は学院の特別実習が組まれているので断らせていただきます」

「あら、そうでしたか残念」

丁重に断るリインにアルフィンは気分を悪くすることなくそれを受け入れた。

「どう思う?」

「あれは社交辞令じゃなくて、本当に残念に思っている顔だよ」

ユーシスからの質問に何故か、クリスは確信を得ているようにアルフィンの感情を断言する。

「くっ……皇女殿下に、公爵令嬢、それに義理の妹……やっぱり噂は本当だったんじゃないか」

「クロスベルではアルカンシエルのイリアとリーシャとも仲良さそうにしてたしね」

マキアスの呟きにフィーが付け加える。

そんなⅦ組の感想を他所にアルフィンは手を合わせてリインに質問を重ねた。

「ああ、ひよっとしてもう心に決めた方がいらっしやるとか?」

それとも既にお付き合いなさっている方がいらっしやるのでしょうか？」

「ひ、姫様っ!？」

突然のアルフィンの質問に狼狽えた声を上げたのはエリゼだった。そんな彼女を真っ先からかうだろうミルデーヌはエリゼよりもリインの顔を見る事に集中していた。

そして、その話題にⅦ組の女子数名は身を固くするのだった。

「はは、それはありません。今は次の恋に目を向けている余裕はないですから」

「え……リインが恋……?？」

彼とは縁遠い言葉が出て来たことにエリオットは自分の耳を疑う。

「あのリインが……」

学院内での彼の素行を思い出しガイウスは戦慄する。

「次の恋……リインが失恋していた……つまりリインが振られたのか！」

超が付くほどの優良物件であるリインを振った女傑がいることにラウラは驚きを隠せなかった。

「いや……みんな人を何だと思っているんだ？」

俺だつて人を好きになつたことくらいあるぞ。初恋の経験なんてそれこそみんなにもあるんじゃないのか？」

「ま、まあ初恋くらいはあるわよね」

アリサはリインの言葉に頷いてⅦ組に同意を求める。が、Ⅶ組一同は一様に沈黙を返した。

「えつと……ごめん……」

「ふふふ、皆さん仲がよろしいんですね」

そんなⅦ組の様子にアルフィンは安心したように微笑む。

「ちよつとうらやましいですね……」

ラウラさんもアンゼリカさんもツールズに行つてしまふし……こうなつたらわたしも来年そちらに編入しようかしら」

「うえっ!？」

そんなアルフィンの提案にクリスが奇妙な悲鳴を上げる。

「こらクリスマス不敬だぞっ！」

そんなクリスマスの反応にマキアスが顔を蒼くして慌ててその口を塞ぐ。

「ふふふ、そんな気になさらなくて結構ですよ。ここは公式の場ではないんですから」

気を悪くした素振りもなく許す皇女にマキアスは安堵し、その寛容な態度にこれがあるべき貴族の姿なのかと感激している。

「くっ……」

オリビエを感じさせる眼差しでマキアスに微笑みかけるアルフィンにリインは思わず目を伏せた。

「ふふ……リインさん、ダンスの件ですが『今回』は諦めます」

「えっ……」

「ですが、来年はわたくしも妹さんと同じく16歳——正式に社交会にデビューするのでその時の御相手を考えていただけると嬉しいです」

「……………分かりました。前向きに検討させていただきます」

一度断った以上、リインはそう答えるしかなかった。

48話 第四回実技テスト

7月21日、水曜日。

ヴァリマールが復活を果たしたが、帝都で一ヶ月遅れの夏至祭の準備に忙しかったオリヴァルトがすぐにやって来ることはなかった。

そうして迎えた実技テストの日。

武術指南として毎月来てもらっているヴィクター・S・アルゼイドがやって来るのだが、その日は彼一人ではなかった。

「オーレリア・ルグインである。Ⅶ組の諸君今日はよろしく頼む」

威風堂々たる佇まいで名乗る彼女に慣れを感じていたはずのⅦ組は気押されてしまう。

「オーレリア・ルグイン……ってあの《黄金の羅刹》？」

「領邦軍きつての武人が何故ここに？」

その名を知るマキアスとユーシスは今月のゲストは彼女かと半ば呆れた気持ちで唸る。

「そんなに有名なの？」

「簡単に言えば私の姉弟子に当たる人だ」

「納得……相当できる人だね」

ラウラの説明にフィーは早速オーレリアの佇まいから戦闘力を読み取ろうと観察を始める。

そんな不躰な視線を無礼とは言わず、むしろ楽し気にオーレリアは笑みを浮かべる。

「特化クラス《Ⅶ組》。話には聞いておりましたが中々有望な若獅子たちのようですね。師よ」

「ああ、実に将来が楽しみな若者たちだ」

オーレリアの言葉にヴィクターは頷く。

最初はリインと手合わせの機会が増やせる下心で引き受けた武術指南だったが、来るたびに成長を感じさせるⅦ組の若者たちの成長を見守るのは楽しみになっていった。

「ふふ……では、仕合うとするか」

顔を綻ばせるヴィクターにオーレリアは期待を膨らませ、それ以上の言葉はいらないと深紅の宝剣を構える。

叩きつけられた覇気。

だが、Ⅶ組は体を震わせながらもしつかりとそれぞれの武器を構える。

そして、オーレリアの放つ覇気に負けないように睨み返す。

「良い目だ……」

その反応に満足そうにオーレリアは頷き、そのまま仕合が始まると思いきやリインに言葉を投げかける。

「ところでリイン、今日のゲストはいつ来るんだ？」

「どちらかというところとオーレリアさんが今日のゲストです」

どこかそわそわとした様子で周囲を窺うオーレリアにリインは苦笑しながら答える。

「……………そうか、来ないのか」

オーレリアの耳に入って来た情報では四月から毎月、猛者が訪ねて来るということなのでリインと戦えることと同じくらいに期待していたのだがそれがないと分かって落胆する。

「まあいい……………今はお前達と存分に戦うとしよう」

しかし、すぐに気を取り直してオーレリアは獰猛な笑みを浮かべる。

「Ⅶ組総員、敵は《黄金の羅刹》っ！一瞬の油断が命取りになると思えっ！」

『おおおおっ！』

クリスの激励にⅦ組は声を揃えて応じて、その日の実技テストが始まった。

「ほう……………今月はルグウィン伯爵が来られていたんですか」

そして授業時間が半ば過ぎ、小休止が取られたタイミングで彼、ルーファス・アルバレアが現れた。

「あ、兄上っ！」

地面にへたり込み、リインが用意していた疲労によく効くレモネードを飲んでいたユーシスは突然現れたルーファスを見て慌てて立ち

上がる。

「はは、そのまま休んでいて構わないよユーシス」

貴族にあるまじき振る舞いだったにも関わらず、ルーファスは特に注意することなくユーシスを労う。

「ほう……」

校舎へと続く階段から降りてくるルーファスにオーレリアは目を光らせる。

「あ、兄上……どうしてこちらに？」

楽にしている良いと言われながらも、やはり佇まいを直したユーシスは緊張した様子で尋ねる。

「不思議かね？ 私はトールズ士官学院の常任理事の一人、学院に顔を出すのは当然のことだと思っただが」

「それは……そうかもしれないませんが」

「それにせっかくそういう立場なのだから、一度くらいかわいい弟の指南を上げたいと思ったのだが、嫌だったかな？」

携えた剣を見せて笑いかけてくるルーファスにユーシスはたじろぐ。

「そんなわけはありませんが——」

「それに実はリイン君に聞きたいことがあってね」

「っ……」

その何気ない兄の言葉はユーシスの心を逆撫でた。

「兄上は——」

果たしてどちらが本命なのかユーシスは確かめようとして——

「リイン達の試験勉強以来だなルーファス卿」

ユーシスの言葉はオーレリアによって遮られた。

ルーファスがリインのトールズに入学するための勉強を見ていたことは知っている。

だが、改めて突き付けられた事実によりユーシスは自分でも理解できない程に動揺していた。

「ええ、お久しぶりですルグイン伯爵。壮健そうで何よりです」

「互いにな……それよりも先程の言葉だが」

「ええ、私もⅦ組の設立に関わった者として彼らの成長を確かめる機会を頂きたいのですが、よろしいですかサラ教官、アルゼイド子爵閣下」

「あ……はい……」

ルーファスの登場に呆気に取られていたサラは呆けた顔で頷いた。

「ああ、多くの者と戦うことは彼らの良き経験になるだろう」

ヴィクターも異論はないとルーファスの参加を認める。

「ではどちらからやる?」

「ふふ、授業時間も少ないので二人で、というのはどうでしょうか?」

「ほう……そなたと肩を並べて戦うか……あの時は一瞬で終わってしまったが、果たしてついてこれるのか?」

「それはこちらの台詞ですよ」

オーレリアとルーファスが並び立ってそれぞれ剣を構える。

「さあ、休憩は終わりだ。疾くと立つが良いっ!」

オーレリアの一喝して再開を促す。

「ラウラの上位互換とユーススの上位互換、そんなのあり!」

「体力も少なくなっているのに、まずいですよね」

ある者はその事実には慄き。

「くそっ! これがリイン補正なのか!」

「よかった後半はリインと一緒に班で」

ある者はその事実には嘆き。

「ふむ、フィーよ。次は私はこう動くから援護を頼めるか」

「ん、オツケー」

「僕はブリランテでオーレリア將軍を三分は抑えるから、ガイウスとユーススはエリクシルとリヴァルトを貸すからルーファス卿を速攻で決めてくれるかな?」

「ああ、任された」

「良いだろう。だが、兄上を落とせる保証はないぞ」

ある者は前向きに状況の打開を考える。

一言で表すなら、実技テストの後半戦の結果は控えめに言って煉獄だった。

・*

「さて、実技テストも無事に終わったことだし、今週末に行ってもらおう
《特別実習》について説明するわよ」

実技テストが終わり、教室に戻ったサラは机に突っ伏している一同
を見回しながら切り出した。

とりあえず、疲労が限界のようだが話を聞くことはできると判断し
てサラは続ける。

「今回の実習先は《帝都ヘイムダル》……」

班編成についてはちよつと趣向を凝らすことにしたわ」

「趣向を凝らす……どういう意味ですか？」

サラの含みのある言葉にエマが聞き返す。

「ふふん、あんた達入ってきなさい」

教室の外に向かってサラが呼び掛けると、扉が開き四人の生徒達が
Ⅶ組の教室に入ってきた。

「トワ会長？」

「アンゼリカ先輩？」

「あと……クロウ先輩とジオルジュ先輩でしたか？」

「あはは、みんな久しぶり」

朗らかな笑顔でトワがⅦ組に応える。

「それじゃあ、後の説明は任せたわよ」

そしてサラは教壇をトワに明け渡して説明を丸投げし、サラの代わ
りに教壇に立ったトワは三人の先輩達を横に従えてコホンと咳払い
を一つして話し始める。

「みんな知っていると思うけど、生徒会長をしているトワ・ハーシエル
です……」

今回のⅦ組の《特別実習》の部隊長に任命されたのでよろしく
お願いします」

「ぶ、部隊長!？」

「口を慎めレーグニッツ！ トワ隊長の説明はまだ終わってないぞっ

！」

狼狽えたマキアスが漏らした言葉に過剰反応するようにアンゼリカが一喝する。

「そうだぞ後輩共っ！ トワ隊長のありがたい御言葉を心して聞け！」

そして返事はイエス・マムだっ！」

「二人とも落ち着いて、それじゃあトワ隊長が話せないだろ」

「アンちゃんっ！ クロウ君っ！ ジョルジュ君まで、それに隊長はやめてよ」

悪ノリする三人にトワは頬を膨らませて抗議する。

「ははは、まあ少し悪ノリをしたことは認めるが、トールズは士官学院、卒業して軍に進むのならこういったやり取りを覚えておいても損はないさ」

「そんなこと言って、からかってるだけでしょ？」

「ふ……それもこれもトワが可愛すぎるからいけないのさ」

「アンちゃん……」

ジト目で睨まれてもどこ吹く風と言わんばかりにフリーダムなアンゼリカは改めてⅦ組に向き直る。

「改めて名乗らせてもらおう。《特別実習》の第一小隊長を勤めることになったアンゼリカ・ログナーだ」

「同じく、第二小隊長のクロウ・アームブラストだ」

「第三小隊長のジョルジュ・ノーム。みんなよろしくね」

次々に名乗る先輩方に最初の言葉もあり、Ⅶ組は黙り込む。

そんな沈黙にトワが慌てた様子で取り繕う様に説明を再開する。

「え、えつとね……今度の《特別実習》のヘイムダルはこれまでみんなが行っていた都市と比べると規模が大きいから人員を増やしてやることになったの……」

私たち、二年生にとっては部下を持って行動する実習、Ⅶ組のみんなにとっては突発的な上官に従うことを主眼にしたカリキュラムになります」

「な、なるほど……」

トワの親切的説明に先程の一喝で固まっていたマキアスは息を吐

き出すように言葉を漏らす。

「でもそれだと先輩達とは戦術リンクは使えないですよね？」

「それは大丈夫だよアリサちゃん……」

私達は去年、『ARCU』のプロトタイプ試験導入をやっているからみんなの『ARCU』とも問題なく繋がれるよ」

アリサの疑問にトワは淀みなく答え、話を進める。

「『特別実習』は24日から26日の三日間、ただし23日、授業が終わったら移動して前日に現地入りします……」

宿泊先は旧遊撃士ギルドの支部をみんなで見えます。何か質問はありますか？」

「班編成はどうするんですか？」

エマが挙手をして尋ねる。

「今回の『特別実習』では固定の班は作りません。ジョルジュ君、あれをみんなに配ってくれるかな」

「了解」

トワの言葉にジョルジュは頷いて、用意していたクォーツとオーブメントを各人に配る。

「これはクォーツと耳飾りのオーブメント？」

「そのクォーツを戦術オーブメントにセットしてもらおうと、そのオーブメントに繋がる仕組みでね……」

それを使えば『ARCU』を開かずに導力通信ができるんだ」

「ふーん……両手を塞がれずに通信ができるなんて便利だね」

「うん、それでね……その通信機を利用して今回の実習は行うことになったの……」

実習依頼を導力ネットを使って随時更新するから増えた依頼は私が逐次みんなに割り振ります」

「つまり導力ネットと通信を利用した部隊運用が今回の実習の目的ということか」

「会長の班が作戦本部、他の三人が実働部隊。今回の実習は質より量をこなすということか」

マキアスが呟くとラウラが頷く。

「そうなる三班編成は三日間で入れ替えていくか、もしくは依頼毎に組み替えるのか」

「うう、何だかすごく大変そう」

ユーシスの推測にエリオットは泣き言をもらす。

「はい。ユーシス君が言った通り、VII組の皆さんには状況に応じてアンちゃん、クロウ君、ジョルジュ君の三人の班を行き来してもらいます……」

人手が必要な依頼があれば一時的に人数を偏らせることも考慮しているからそのつもりで頑張つてね」

「しっかりしろよ後輩共。お前達の仕事ぶりは俺達の単位にも関わって来るんだからな」

「クロウ君、そういうこと言わないの」

脅すようなクロウの言葉をトワがたしなめる。

「ともかく私から言えることは一つだ」

そして最後にアンゼリカが締めくくる様に提案した。

「実習中はトワ隊長と呼ぶことを厳命する。異論は認めない」

「アンちゃんっ！」

・*

放課後、リインは部活棟の歴史研究同好会に割り当てられた部室にルーファスを案内した。

「どうぞ狭い部屋で恐縮ですが、すぐにお茶を淹れます」

「いや、構わないよ。突然押しかけたのは私なのだから」

リインの気遣いにルーファスは気にしなくていいと言いながら、部屋を興味深そうに見回す。

多くの部活が存在しているツールズにおいて同好会である歴史研究会の部室は小さい。

新設された同好会であり、部員はリインを含めてたった二人だけであり、そもそも活動自体が緩いため何の問題もない。

「部員はこの時間だと、教会に行っているのでここなら誰にも気にせ

ずに話せます」

「ありがとう……それにしても歴史研究会と聞いていたが、何を調べているのだね？」

壁に貼られているトリスタ周辺の地図、七色の色で不規則な線が引かれているものにルーファスは興味を示す。

「あれはこの周辺の七耀脈の書き記したものです」

「ほう……これが七耀脈の……良く耳にする言葉だがこのようになっているのか……」

しかし、些か線の流れが不自然に見えるが

「流石ですね。ルーファスさん、トリスタの霊脈はその土地に悪影響がでない程度に人の手によって加工されています。不自然さはそれが原因ですね」

ルーファスの慧眼をリインは褒める。

「なるほど、その歪みとはもしかして《旧校舎》とそこに眠っていた《騎神》が関係するのかな？」

「………耳が早いですね」

探りを入れてくるルーファスにリインはそんな言葉を返す。

「話というのはやはり『大いなる騎士』のことですか？」

その存在を大っぴらにしているわけではないが、《騎神》のことも以前にユーシスに話しているのだからルーファスが知っていてもおかしくはない。

「まあ、気にならないと言われれば嘘になるがね。ああ、ユーシスからの情報ではないから安心してくれ……」

だから、今後もあの子を仲間外れにしないようお願いするよ」

「別にしませんよ、完全な情報統制ができるとは思っていませんから」
「だろうね。おそらくルグイン伯爵が今日、来たのはその探りのためでもあったのだろう」

実技テストが終わって名残惜しそうにしていたオーレリアのことを思い出して、果たしてそれだけだったのだろうか？とリインは首を傾げる。

彼女の意向は一先ず置いておくとして、リインはルーファスと向き

合った。

「……………単刀直入にお尋ねします。ルーファス卿は俺を貴族派に勧誘するために来たんですか？」

雑談を切り上げてリインは彼が持つてきただろう本題を切り出す。

「いや、そちらはまだ良い」

が、ルーファスはリインの予想を否定した。

「今日の用事は極めて個人的な理由でね。ユミルで社交界での立ち回りを教導した私が君にこんなことを聞くのはおかしいかもしれないが一つ聞きたいことがあつたのだよ」

「はあ……………」

ルーファスの意図が読み切れずにリインは首を傾げる。

何でも高水準にできるルーファスが自分なんかの何が聞きたいのだろうか。

自分にあつてルーファスにないものといえば、《騎神》や《聖痕》のことだがその辺りのことは教えるつもりはないことはルーファスも分かつているはずだろう。

「リイン君、人を愛するということはどういう気持ちなのかな？」

警戒心を強めたリインに対してルーファスはそんなことを尋ねて来た。

「……………え？」

「自慢するつもりはないが、私は見た目が良く能力もあり家柄も良い……………」

社交界に出れば貴族諸侯たちが自分の娘を紹介してきて、彼女たちも積極的に私に己を売り込んでくるくらいだ」

「そ、そうでしょうね……………」

「しかし、先日ある理由で私が預かることになった少女に呆気なく袖にされてしまったね」

その時のことを思い出したのか、ルーファスはくくくつと声を殺して笑い出す。

「私としては、そんなつもりはなかったのだけ……………」

まさかいきなり「不埒」だとあんな虫を見るような目を返された

のは初めての経験だよ」

「……………え……………」

「ん？　どうかしたのかなリイン君？」

目を見開いたリインにルーファスは涼し気な表情で首を傾げる。

「いえ……………何でもありません」

一瞬、頭に過った「彼女」をリインは振り払うように頭を振る。

そんなリインの苦悩を分かっているとばかりにルーファスは微笑み、続ける。

「『彼女』とは仕事上の関係なのだが、あそこまで無碍にされると逆に気になってしまっただけ……………」

これが巷で良く言われる「恋」に落ちたということなのか？」

「いやいやいや、いきなり話が飛躍し過ぎですよねルーファスさん！！」

真面目な顔をして天然ボケを全力投球してきたルーファスにリインは声を上げて突っ込んでいた。

「ふむ……………違うのか」

残念そうにするルーファスの顔はどこまで本気なのか分からない。

「まあ、『恋』というのは冗談だが、少々彼女の事が気になっているのは事実だよ……………」

以前の私ならこんなことは思わなかっただろう。だから少し戸惑っているのだよ」

少し前までの自分なら無感情に従う「彼女」に人間性を感じずに「道具」として扱っていただろう。

それが変化したのはユミルでの生活があつたからか、それとも写真の中で見た彼女が彼に向けていた眼差しに羨望を感じてしまったのかルーファスには判断がつかない。

その判断できない自分がいるという新たな発見もルーファスには新鮮だった。

「そうですね……………」

対するリインの心情は混乱を極めていた。

開示された情報は少ないが、『識』を使えばルーファスの言う彼女が

「彼女」であるか確かめることはできるかもしれない。

しかし、それを確かめたところでどうなるわけではない。

今の「彼女」はリインが知っている「彼女」ではない。

——何より、今会ってどうするつもりなんだ……

「っ……」

会わない理由を探そうとした自分の思考に思わずリインは顔をしかめる。

「実はリイン君」

そんなリインの葛藤を知ってか知らずか、ルーファスは話を続ける。

「私は『愛』というものを知らないのだよ」

「それはどういう意味でしょうか？」

「これはユーシスも知らない話なのだが、私は現アルバレア当主のヘルムート・アルバレアの息子ではないのだよ」

「……ちよつと待ってください」

ルーファスの突然のカミングアウトにリインは思考を止め、深呼吸してから徐に立ち上がり、廊下への扉を開ける。

そこに誰もいないことを確認して、鍵を閉め、さらに指を鳴らす音を使って部屋を「匣」で隔離する。

顧問のように空間ごと切り離すことはリインにできないが、防音くらの効果しかないが重要なことである。

「手間を掛けさせるね」

ルーファスには何が起きたのかは分からない。

しかし、人払いに近いものをしたと判断して礼を言う。

「いえ……ですがそれは俺が聞いて大丈夫な話なんですか？」

「アルバレア家としては身内の汚点を晒すことだからまずいのだが……」

そうだね……私はこの話を誰かに聞いてもらいたかったのかもしれないな」

どこか遠くを見るようにしてルーファスは自分を、歪んだアルバレア家のことを語り出す。

ルーファスがヘルムートの弟と彼の妻の間にできた不義の子供だということ。

事情を知らなかった幼少期には、ユーシス以上にヘルムートから冷遇されていたこと。

ユーシスがアルバレア家に迎えられてからはヘルムートの最低限だった感心もユーシスに移ってしまったこと。

その時に感じた自分の胸の内は明かさず、ただ淡々とルーファスは事実だけを並べていく。

リインはただ彼の話に相槌を打ち、聞き役に徹する。

「シユバルツァー家での生活は本当に楽しかったよ」

そこまで事実を述べるしかなかったルーファスは不意に彼の心情をもらった。

「血の繋がりがなくても君は確かにシユバルツァー家の家族だった……」

そしてただの客人でしかない私たちをテオ殿とルシア殿は温かく受け入れてくれた……

私はそこで初めて知ったよ、*「家族の団欒」*というものを」

ルーファスが尊敬する*「彼」*への思いが揺らいだわけではない。

ただシユバルツァー家には*「彼」*とは別の形で惹きつけられるものがあつた。

だからなのだろうか、*「貴族」*の家柄に縛られていた自分の様に、*「道具」*である役割に縛られている彼女に興味を抱いたのは。

「……………もうこんな時間か……………」

気付けば窓の外は日が落ちて暗くなっていた。

「長話に付き合わせてしまつてすまなかつたね。この件はユーシスには内密にしておいてくれるかな？ あの子が受け止めるにはまだ重過ぎる真実だからね」

「ええ、分かっています」

リインはルーファスの願いに静かに頷く。

「ところでリイン君、今度の特別実習が終わったらバリアハートに来ないかね？」

件の「彼女」と会う気はないのかな？」

「それは……」

突然の申し出にリインは心を揺らす。

「いえ……今はまだいいです」

葛藤の末にリインはそう答えるのだった。

49話 緋の帝都Ⅰ

7月24日、土曜日。

特別実習一日目は早朝、ギリギリと本気かぶりなのか分からない悔しさにアンゼリカが歯ぎしりする。

「ぐぬぬ……トワと二人きりで作業なんて」

「アンゼリカ先輩、今日はふざけている暇はありませんよ。これがアンゼリカ先輩のチームがこなしてもらおう課題です」

昨日の内にまとめておいた十枚ほどのレポート用紙を手渡し、リインは同じ量のことをクロウとジョルジュに渡す。

「随分あるな……」

「これが今日の分かい？」

「はい。大まかな依頼をまとめておきました。概要だけを手帳に写して、まずは依頼人に話を聞いて、詳しい内容などを本部に連絡してください……」

その依頼の内容、掛かる時間などの見積もりなどを報告してください」

聞き返して来るクロウとジョルジュにリインは頷く。

「それではトワ隊長に代わって班編成を発表させてもらいます」

「リ、リイン君まで!？」

「いえ、ですが学院ではないので会長と呼ぶのはおかしいと思うんですが」

「それは……確かにそうだけど……」

親友たちと違って真面目な答えにトワは唖る。

「今回の特別実習は軍事行動の一環を想定していますから、慣れてください……」

それとも隊長が嫌なら司令や、それともこの実習の間だけでも俺た

ちの中だけの階級でも作りますか?」

「もう隊長で良いよ」

ため息を吐いてトワはリインの言い分を認めた。

アンゼリカたちの悪ふざけはともかくリインの言う通り、この集団の長であることは正しいのだから。

「では続けて、班編成を発表させてもらいます……」

今日、司令部としてここに残るのはトワ隊長と俺になる……

主に導力ネットから更新される依頼の整理や小隊長から上げられる経過報告の処理などが担当になる……

明日までに俺がサポートのマニユアルを作っておくから、交代した人は後でそれを確認して明日以降はトワ隊長のサポートをしてくれ」

「リイン君、私とトワ隊長が二人きりになる場合はあるのかね?」

「ありません……」

アンゼリカ小隊長の班はラウラ、ユーシス、ガイウスの三名。最初に西地区の帝都博物館へ行ってもらいます」

「うむ、了解した」

「続いてジョルジュ小隊長の班はマキアス、エリオット、フィーの三名……」

ジョルジュ班には東地区で多発している置引きやスリに関しての聞き込みをしながら、実習依頼を消化してください」

「なるほど、聞き込みなら地元の僕達が適任ということか」

「最後にクロウ小隊長の班はクリス、エマ、アリサの三名……」

クロウ班は南地区で起きている「辻斬り」の調査。各地の武芸者が集まる交流試合の参加者を狙って連日「辻斬り」が出没しているそうです……

依頼をこなしながら巡回してもらいますが、「辻斬り」が襲ってくれば撃退、捕縛してください」

「ねえ、リイン……それなら腕つぶしが必要よね? ラウラとフィーじゃないの?」

割り当てられた仕事に感じた疑問をアリサが尋ねる。

「「辻斬り」の被害は主に男性が多いことが理由の一つ、後はフィー

に街中で銃撃戦をさせるつもりはないからな」

アリサの質問にリインは淀みなく答え、一同を見回す。

「他に質問はありますか？」

質問を促すが沈黙が返って来る。

「では最後にトワ隊長、一言をお願いします」

場所を譲られてトワは一同の前に立つ。

「えつと……今日から三日間、たぶんこれまで経験してきた《特別実習》の中で一番大変な実習になると思うけど、みんなで頑張ろうっ！」
こうして七月の《特別実習》は幕を開けた。

・*
・*

緋の帝都へイムダル。

人口80万人を超えるエレボニア帝国の首都だが、三日後の夏至祭を目前としたこの時期は地方や外国からの観光客も合わせり、現在の延べ人数は100万人に届いていた。

帝都へイムダルは十六の街区に分かれており、それぞれが地方都市並みの規模を持つこともあり、祭りで浮かれるこの時期はトラブルが絶えなかった。

時間はあつという間に過ぎ、正午。

「むう……」

旧ギルド支部に戻って来たラウラは頬を膨らませて、あからさまに不機嫌になっていた。

「何かあったのか？」

昼食の準備をしてアンゼリカ班の帰還を迎えたリインはそんな彼女の様子に首を傾げた。

彼女たちの班に任せた仕事は帝都博物館での開放前の交通整理。

博物館の今回のテーマはリインがクロスベルで入手した《聖女の槍》の展示をメインにした《槍の聖女祭》が行われている。

展示にはレプリカだけではなく、アルゼイド子爵とヴァンダール子爵からそれぞれ本物の宝剣を貸してもらった豪華な催しに連日、開館

前は長蛇の列ができるほどの人気だった。

「何があつたも何も……あの女が来ていたのだ」

ため息を吐いて答えるユース。

彼が言うあの女にリインは心当たりはあるのだが、まさかという思いもあつた。

「あの女って……まさか……」

「四月の実技テストの時に最初に現れた女性だ」

ガイウスの補足説明にリインは思わず天を仰ぐ。

何故、昨日でも明日でもなく、《特別実習》が始まった今日なのか、結社の休日も一般的に共通な土曜日曜なのか問い詰めた気持ちはなる。

「それで、まさかその場で喧嘩を？」

通信による報告では滞りなく開館して、アンゼリカ班は次の依頼に取り組んでいたはず。

「多少の言い合いはあつたが、何とか自制してくれた……もつともそれからずつとあの調子だがな」

「私だって……私だって……『特別実習』さえなければ……」

悔しそうに同じことを何度もラウラは呟いていた。

・*

続いて戻って来たのはジョルジュ班だったが、その中にも一人、肩を沈ませ全身で落ち込んでいると訴えている男がいた。

「マキアス……何があつたんだ？」

「うん、そのことで報告なんだけど」

ジョルジュは困った顔をして事の成り行きを語り出した。

東地区を中心に起きていた置引きやスリ、それらはどうやら地方から出て来た貴族を狙った犯行だった。

犯人は意外なことに子供でマキアスの顔見知りだった。

そして《黒猫》と名乗り、杜撰な変装をしたその子供は盗んだミラを貴族が寄り付かない旧市街でばら撒き『義賊』を名乗っていた。

さらに面倒なことにその子供は士官学院に入る前のマキアスの影響を強く受けた子供だった。

「え……それってあの時のマキアスが小さくなって増えていたんですか？」

「いや、流石に入学当時のマキアス君みたいに狂犬みたいに正面から噛みついたりはしてなかったみたいだね」

「おふっ」

「リイン、ジョルジュ先輩、そんな追い打ちを掛けしないで上げてください」

二人の言葉に胸を打たれたように痙攣するマキアスにエリオットは思わず同情してしまう。

「犯行の動機は入学式のマキアスみたいに貴族憎しで魔が差して、一回うまく行ったから調子に乗って犯行を重ねている感じだったよ」

「それはまずいな」

フィーの補足説明にリインは顔をしかめた。

「何かあったの？」

「今日の午前中にまた被害が出たらしくてな……今回の被害者は怒り心頭で犯人を見つけて縛り首にするって息巻いているらしい」

「午前中……それって今日僕達が見たのがその人のミラだったってこと？」

「待ってくれリインッ！ 縛り首っていつの時代の事を言っているんだ！」

それにその子はまだ日曜学校を卒業していない本当に子供なんぞぞ

「だったら責任はその子の親が取ることになるだろうな。ともかく俺達にできるのはここまでだ」

「ここまでって何を言っているんだリイン!?!」

「最初から犯人を捕まえることじゃなくて、調査依頼だと言ったはずだ……」

その調査を元に犯人を捕まえるのは依頼を出した帝都憲兵隊の仕事だ。何か間違っているのか?」

「ぐっ……見損なつたぞリイン。相手は子供だと言うのに」

「マキアス、子供でも犯罪は犯罪だ」

「違うつ！ その子はそんなことをするような子供じゃなかった！
そうだ、これもきつと『呪い』の——」

「マキアス・レーグニッツ！」

それまで淡々とした口調でしゃべっていてリインはマキアスからも
らした言葉に苛立ちを含んだ声を上げる。

「何でも『呪い』のせいにするな！ その子が犯罪に手を染めたのは
元々はお前の行き過ぎた貴族への偏見が原因のはずじゃなかったの
か」

「それは……」

怒りのこもった眼差しで睨まれてマキアスは思わず口ごもる。

「はいはい、そこまで。リイン君も言い過ぎだよ」

「……そうですね。すみません、トワ隊長。マキアスも悪かった」

「あ……いや……僕の方こそ失言だった」

トワに諫められ、頭が冷えたマキアスは感情的になつたことを謝罪
する。

「でもリイン君が言った通り、私達に求められているのは犯人の調査。
本来ならもうこの依頼はマキアス君がその子のお家の住所を報告し
てくれればそれで終わりなんだけど、どうしたいかな？」

「どうしたいって……え……？」

「リイン君、今日被害にあつたのはどういう人なの？」

「クロイツェン州の伯爵貴族です。帝都に来たのは夏至祭の間にバル
フレイム宮で行われる社交界に出席するためです」

「それなら今日一日くらいは大丈夫かな？」

リイン君。ジョルジュ君の班の今日の予定だけど、さつき隊長であ
る私を差し置いて勝手に依頼完了を決めようとした……ば、罰でジョ
ルジュ君たちの班の仕事を一人でやることを命令します」

「イエス・マム！」

理不尽な命令されたリインは反抗を一切口から漏らさずに、敬礼し
て出て行ってしまった。

「え……へ……は……？」

「それじゃあ暇になったジョルジュ君達の班だけど、追加の調査をしなくてもいいです」

「あ、あの……トワ隊長……？」

「まだ報告には犯人の詳しい潜伏先などは発見できていないので、ちゃんと調査して来てね？」

あとその子の年齢で単独で置引きやスリを何度も成功させているのもちよつとおかしく感じるから、周辺の調査ももう少しやって欲しいかな？」

どこか引きつった笑顔でトワはジョルジュ達の調査の延長を促す。

「もしかして、さっきのは仕込み？」

「そ、そんなことないよー！」

フィーの指摘にトワは明らかに狼狽えて否定する。

「こほん……それともマキアス君はその子をちゃんと更生させる気はないのかな？」

「つ……やります。やらせてください」

今更ながらマキアスは落ち込んでいる暇はないのだと気が付く。

例え嘘吐き、裏切り者と罵られたとしても、マキアスにはその子に向き合わなければならぬ義務がある。

「それじゃあジョルジュ君達はマキアス君のサポートをお願いね」

「うん、了解」

トワの指示にジョルジュは素直に頷いて、彼らは午後の実習に向かうのだった。

・*

「何だトワ一人だけか？」

休憩と昼食を摂りに旧ギルド支部に戻って来たクロウ班は室内にトワしかいないことに首を傾げる。

「うん、ちよつとジョルジュ君達の班でトラブルができちゃってリン君にはそのフォローに行ってもらったんだ」

「おいおい、そんな気軽に単独行動させて良いのかよ?」

「ちよつと想定外の事件が起きちゃったから……」

でも元々これくらいは想定してたから大丈夫だよ。でもリイン君一人だと心配だからこの後クロウ君達の班と——」

言いかけたところでトワの《ARCU S》が鳴り、トワは通信回線を開く。

「はい、こちら本部——あ、リイン君……え?」

もう最初の依頼を終わらせちゃったの? うん……それじゃあ次はアルト通りの依頼に行ってくれるかな?

うん……うん、よろしくね。でも無理はしないでいいから、リイン君はそのまま依頼をやっていて、今クロウ君の班が戻ってきているからお昼休憩を取ったら合流してもらおうから。うん、それじゃあまた後で」

「今のリインからか?」

「うん、さつき出たばかりでもう依頼を達成しちゃったみたい……」

クロウ君、戻ってきてもらってばかりで悪いんだけど、お昼休憩は十分で済ませて、それからエマちゃんにはリイン君と交代ということ本部に待機してもらいます」

「は、はい。分かりました」

トワのいきなりな提案にエマは頷く。

「となると午後はリインと一緒になのね……」

「リインさんと一緒に心強いですね」

そしてアリサとクリスはそれぞれの反応をする。

「休憩は十分だけって、人遣い荒いな」

「あ、それからクロウ君はお昼食べながら、午前中の詳細報告をしてくれるかな?」

愚痴を漏らしたクロウにトワはさらに追い打ちをする。

「うえ!? まじかよ……」

いや待て、後輩共俺の代わりに——」

「ダメだよクロウ君。隊長なんだからクロウ君が報告してくれないと……ね、クロウ隊長?」

笑顔に有無を言わせない圧力をかけてトワにクロウはがつくりと肩を落とすのだった。

50話 緋の帝都Ⅱ

「これまですまなかった」

特別実習が終わったその夜、マキアスはラインとユース、ラウラ、そしてアンゼリカに対して頭を下げた。

「何だレーグニッツ？ 悪いものでも食べたのか？」

そんなマキアスを気持ち悪そうに顔をしかめてユースは気味が悪いと言わんばかりに顔をしかめる。

いつもならここで激昂して言い返すのだが、マキアスはそれをせずに頭を下げたまま微動だにしなかった。

「マキアス、それじゃあ何があったか分からないから、ちゃんと顔を上げて説明した方がいいと思うぞ」

「あ、ああ。そうだった」

ラインの指摘に顔を上げたマキアスの顔はどこかやつれた様に見える。

「今日、僕達の班が行った実習課題の内容なんだが……」

帝都で置引きやスリの被害が多発していた。その犯人は僕の日曜学校の後輩で、僕が歪めてしまった子供だった」

そうしてマキアスが語り出したのはレーグニッツ家が抱える事情。

姐と慕っていた従姉の姉が貴族から嫌がらせを受け、果てには婚約者から手酷い裏切りを受けて自殺した事。

その時からマキアスは姉の死に「敵」を求めた。

それがマキアスの貴族を憎む理由だった。

「何とも因果な話だね……その婚約者の男をフォローするつもりじゃないが、貴族の間で『愛妾』というのは別に珍しいことじゃないんだよ」

「そうなんですか、アンゼリカ先輩？」

「ああ、貴族はまず『血』を残すことが義務付けられている……」

かく言う私もいつか不本意だが、子を産まなければならぬ時が来

るだろう……

だが、だからと言って私とその男を愛するかは別の話だ。はつきり言えば私はその男が愛妾を作っていたとしても全く問題ないと思っ
ている……

いや……もしもその愛妾が私好みの女の子ならむしろ……いや待
てよ……

例えば私の婚約者がリイン君だったとする。そして私がリイン君
にハーレムを作れることを認めれば、それはすなわち私のハーレムでも
ある？」

「アンゼリカ先輩、今は真面目な話をしているんです。自重してくだ
さい」

馬鹿なことを言い出したアンゼリカにリインは冷めた目で脅しを
かける。

「おっとそうだったね……」

まあ、何が言いたいかと言うと、平民にとっては時代錯誤とも取れ
る文化かもしれないが、私たちにとっては先祖が繋いできた大事な
伝統”でもあるんだよ”

「貴族と平民の価値観、そこに差があることは分かっていたはずなん
ですけど」

アンゼリカの言葉を聞いてマキアスはようやく少しだけ相手の男
を許す気持ちが芽生えた。

「それで、今回の実習課題と貴様の貴族嫌いがどう繋がる？」

「ああ……」

ユースに促され、マキアスは話を続ける。

今回の発端になった強盗事件。

その犯人はマキアスの日曜学校の後輩であり、ツールズに入学する
前のマキアスはその子に何度も貴族がいかに汚い存在かを語り続け
ていた。

その偏見に満ちた教えがその子を犯罪に走らせた。

が、その話はそこで終わりではなかった。

マキアスが植え付けた貴族憎しの思想に目を付けたのが街の不良

ともいえる者達だった。

彼らは貴族を憎むその子を持ち上げて置引きやスリの技術を教え、さらにはその貴族への悪感情を煽りその子を犯罪に走らせた。

「そういえば、その《黒猫》という子はどんな子だったんだい？」

「歳は先日来たミルディーヌさんと同じくらいの女の子ですね」

「よし、そいつらを殺そう」

「あ、アンちゃん!？」

「落ち着いてくださいアンゼリカ先輩、それでその黒幕たちはちゃんと捕まえたのだろうか？」

トワとラウラがいきり立つアンゼリカを抑えながらマキアスに確認する。

「ああ、もちろん……ただその時に言っていた奴等の言葉が……」

『ここは帝都だ。例えいくら貴族が騒いでもオズボーン宰相やレーグニッツ知事が俺達、平民を護ってくれるんだよ』

その言葉を思い出すだけでも吐き気がする。

「まさかと思うが、そいつらの罪を革新派は有耶無耶にするつもりじゃないだろうか？」

「そんなはずはありません！ 父さんもオズボーン宰相が貴族と対立しているからといって手心を加える様な半端な真似はしません」

その信頼は揺るいではない。

むしろマキアスがショックだったのはそんな風に革新派の権力を勝手に笠にしている存在が平民にいたことだった。

「結局、平民だろうが悪人は悪人だし、貴族の中にも尊敬できる人はいる……」

そんな当たり前のことに僕はずっと目を逸らして、今まで君たちに“八つ当たり”をしていた。本当にすまなかった」

マキアスはもう一度、頭を下げる。

そこにユーシスは鼻を鳴らしてどうでも良いと言わんばかりに肩を竦める。

「何を言うかと思えば下らん」

「なっ下らんだと!？ 僕は真面目に自分の非を——」

「例え平民にも愚か者がいたとしても貴族にその手の人間が多いことも事実だ。貴様に謝られる筋合いはない」

「いや、しかし……」

「私もユースと同じ意見だ。それに私もこれまで多くの間違いを犯した身、マキアスを責める資格はない」

「ラウラ……」

「まあ、私は君達とは学年が違うから被害を被ったことはないから良いのだが……」

それよりも《黒猫》ちゃんはいったいどうしたのかな？ 利用されたいといえ被害者の貴族は相当怒っていたと聞くが？」

「それは……まあ……」

マキアスはバツを悪くして頭を掻く。

《黒猫》は盗んだ財布や荷物からミラだけを取りばら撒いていた。

そして荷物の方、社交界用の衣装や装飾品は《黒猫》自身がその価値を良く分からずに不良たちに渡していた。

当然ばら撒いたミラも、不良たちが換金してしまった装飾品も取り戻すことはできず、犯人を捕まえたところで被害者の貴族達の怒りを治めることはできなかった。

そして追及は黒幕の不良たちだけに留まらず、実行犯の《黒猫》にも及んだ。

「一言で説明するならリインに助けられました」

マキアスの答えに一同の視線がリインに集中する。

「ふむ、何をしたんだいリイン君？」

「大したことじゃありません。買い戻せる物は買い戻して、足りないミラは倍にして返しただけです」

「いや……そんな簡単に言われても、そんな金額のミラをリイン君は持っていたのかい？」

「IBCの口座を持っているんです。それに献上するつもりだった《聖女の槍》を買い取るってオズボーン宰相に押し切られてしまった戻って来たミラがあったから使えた手ですよ。ミラで解決してしまったのは不本意ですが」

「まあ確かに誑かされていたとは言っても自分の意志で犯罪に手を染めた以上、安易に救いの手を差し伸べるのは良くないだろう」

「そこら辺は将来ちゃんと働いて返す様に言い聞かせました……僕にも責任の半分があるということ。半分は肩代わりするつもりです」

「マキアス。俺は別に——」

「いいや、これだけは譲れない……」

どんな理由があってもあの子がしたことは犯罪であり、そんな風に歪めてしまったのは僕の責任でもある」

リンとしてはレンの様な例もあるからその年頃の犯罪を責めるつもりはないのだが、それをマキアスはそれを聞き入れようとはしなかった。

「ということはラウラに続いて、お前もリンに借金をすることになったのか……ククク……」

「くっ……事実だが君に笑われると腹が立つ」

「むう……」

ユーシスの言葉にマキアスとラウラはそれぞれ顔をしかめる。

「それにしても地方都市とは違って随分と平民の気が大きいみたいですね」

これ以上は面倒なことになると察したエマは話題を切り上げて、今日の実習の感想を口にする。

「ジョルジュ先輩の班の《黒猫》の事件……」

私たちが請け負った《辻斬り》の犯人も正規軍の人でしたから」

「正規軍の人にしては随分と血の気の多い人だったけどね」

二刀流の剣士にしてリンの拳で空を飛んだ《辻斬り》を思い出してアリサは唸る。

「あの人も憲兵隊に引き取ってもらったわけですが、騒動を起こすこと事態は初めてじゃなかったみたいですし」

「まあ、あの人は平民の中でも特に粗暴なタイプだろうな……」

今回の《辻斬り》の件も人死を出していなかった上に、交流試合の出場者を闇討ちしたわけじゃなく正面から倒したみたいだから被害者も被害届を出していないらしい……

たぶんそこまで計算してやっていたと思う」

「〃辻斬り〃の人は例外ですけど、そもそも帝都を統治しているのは貴族ではなく帝国中央政府、つまりオズボーン宰相ですからね」

クリスはリインの意見に頷きながら、帝都の事情を考える。

「何だか情けないですね……ずっと帝都に住んでいたはずなのにこんなことになっていたなんて今日まで知りませんでした」

「そういえばクリスは帝都出身だったんだっけ？」

帝都に住んでいる貴族って珍しいけど、どこに住んでいるの？ もしかしたらすれ違っていたことがあるかもしれないよね？」

「え……あ……それは……」

エリオットの何気ない質問にクリスはどもる。

「クリスが住んでいるのは富裕層が住んでいる地区だからエリオット達とすれ違うことはまずないだろう」

油断していて咄嗟に設定を答えられなかったクリスに代わってリインが答える。

「まあ、そうなるよね」

「僕としては話を通じる貴族が帝都に住んでいたことが意外だったな」

「え、ええ……僕も近くに住んでいる人にあそこまで貴族を憎んでいる人がいるとは思っていませんでした」

「うぐ……」

「ええっと、そういえばクリスはどうしてツールズに一年早く入学したの？」

呻くマキアスを見兼ねてエリオットが話題を進める。

「え………？」

「言われてみればリインが進学を決めたのは年が明けてからだから、クリスが進学を決めていたのはそれよりも前のはずだよね？」

「いや、僕もリインさんと同じ時期にツールズに行くことを決めました」

「そうになると試験勉強の期間は一ヶ月しかなかったのか、それなのに中間テストも上位ってすごいな」

「何か不公平……」

クリスと同一年であり、同じ受験勉強を一年かけて行ったフィーは思わず愚痴を漏らす。

「それじゃあやっぱリインが進学の決め手だったんだ」

「ええ、まあ……でも今はリインさんは関係なく進学を早めてよかったですよ」

予定通り来年にツールズに進学していたら、そうでなくても本名を名乗っていたらきつとこんな楽しい学生生活は送れなかっただろう。

クリスの言葉の裏に隠れた意図を知らないエリオット達はただ首を傾げる。

「兄上や、オズボーン宰相、リインさんにただ憧れるだけだった僕がこんな風に自分に自信を持てるようになったのはみんなのおかげだから……」

「だから、ありがとう……」

「い、いきなりどうしたのさ？」

突然礼を言い出したクリスにエリオット達は戸惑う。

「大した意味はないよ。ただこんな僕と仲良くなってくれたことにお礼を言いたくなっただけさ」

臆面もなく恥ずかしい台詞を言うクリスのせいかそこには微妙な気恥ずかしさに戸惑う空気が漂う。

が、そんな青春の空気を読まずにクロウは悪態を吐いた。

「はっ……馬鹿馬鹿しい」

「クロウ？」

普段と雰囲気が変わったクロウにジョルジュは不信を感じるが、そんな声は届かずクロウは誰に言うでもなく毒を吐く。

「まさか貴族の坊ちやまがよりによって《鉄血宰相》に憧れているなんて世も末だな」

「それはどういう意味ですかクロウ先輩？」

侮蔑の言葉にクリスはクロウを睨む。

「知らねえのかよ。あの男について回る黒い噂を？」

「貴族派が吹聴しているデタラメな噂ならもちろん知っています……」

まさかそんな誹謗中傷を信じているんですか？ 意外ですね。クロウ先輩が貴族派の肩を持つなんて」

二人は睨み合い、空気が軋む。

「先輩に向かって随分と生意気な口を利くじゃねえか後輩」

「急に先輩風を吹かせないでくれませんか。それとも凶星だったんですか？」

「んだと……」

挑発じみたクリスの言葉にクロウは眦を上げクリスの胸倉を掴もうと手を伸ばし、咄嗟にクリスも同じように動く。

「二人とも落ち着いてくれ」

が、その手が互いの胸倉を掴むよりも先にリインが横から掴んで二人の腕を止めた。

「ちつ……」

クロウは舌打ちをして掴まれた腕を強引に振り払い、まるで親の仇を見る様な目でリインを——その向こうのクリスを睨む。

が、その視線はすぐに弛緩した。

「わりの、ちよつと言い過ぎた」

視線と共に強張った肩から力を抜くと、いつものクロウに戻る。

「ちよつと頭を冷やして来る」

そっとうと徐に席を立つ。

「クロウ君！」

「大丈夫だって、すぐに戻る」

どこか物憂げな雰囲気を滲ませる背中を見せつけながらクロウは安心させるように言う。

「そんなこと言って、本当は夜遊びするつもりなんじゃない？」

が、そんなクロウにトワはジト目を送る。

「……………はは、まさか……」

言いながら振り返ることなくクロウは足早に外へ出て行った。

「こらあ！ 待ちなさいっ！」

「やれやれ」

声を上げて追い駆けるトワに肩を竦めて慣れた様子でジョルジユ

がそれに続く。

「えつと……」

「ああ、気にしないでくれ。いつものことさ」

残ったアンゼリカは慣れた様子で戸惑うエマに笑いかける。

「何て言うか、クロウ先輩が急に怒り出してびつくりしました」

「さあ、どこまで本気だったんだろうね？　あまり本心を語りたがない男だから何とも言えないな」

「それにしてもオズボーン宰相という人はそれ程までに評判が悪い人物なのか？」

これまで何度か帝国時報で彼の記事を読んだことはあるが、立派な政治家と感じていたのだが」

クロウが言った黒い噂を知らないガイウスは首を傾げて尋ねる。

「そうだよ！　黒い噂なんてデタラメだ……」

今年の《帝国交通法》の導入だって反対勢力を押し切って強引に踏み切ったのは確かだけど、それ以来導力車の事故は激減しているんだ……

他の政策だってどれも素晴らしい結果を導いているんだから、黒い噂なんて的外れも良い所だ」

「そうよね。後は鉄血宰相と言えば帝国全土に鉄道網を巡らせてくれたおかげで私たちはこうしているんな場所に《特別実習》に行けるのよね」

「そうだな。鉄道のおかげで俺も留学することができたという意味ではオズボーン宰相の恩恵を受けているだろう」

「しかし、僕達は気にしないがやはり貴族からしたらオズボーン宰相のやり方は受け入れられないものなのか？」

「そうだね……」

その鉄道網を敷くことだって、既存の野畑をいくつも潰さなければいけない問題が当時にはあつたくらいだ……

そういう意味では彼がいろいろな所から恨みを買っているのは変えられない事実だろう……

だが、その反面今ではその鉄道は様々な恩恵を与えてくれた、帝国

にとつてなくてはならない存在になりつつある」

マキアスの質問にアンゼリカは淀みなく答える。

「彼に全てを任せて従ってしまえば、それまで先祖から代々受け継いできた『伝統』の全てを打ち壊して新しいものに刷新され自分達の居場所を奪われるのではないか……」

そんな怖さを貴族達は感じているんだよ」

アンゼリカの言葉にユーススは特に付け足すことはない黙って瞑目する。

「レグラムもユミル程ではないが田舎だから、改革の影響は少なく何とも言えないな……」

そもそも父上は仕方なく領主をやっている節があつて、遊撃士の方が性に合っているとさえ言っているくらいだ」

アンゼリカ、ユースス、ラウラの三人は貴族としてオズボーン宰相に少なからず考えるところがあるようだが、それ以外の平民、アリサ達は一般市民と同様に好意的だった。

リインも二年前、リベールに家出をした時にはその鉄道を利用して便利だと感じたことしかなかったのだが、今はアンゼリカ達とは違う危惧を感じていた。

—— 《結社》との繋がりがあるか……

政治が綺麗ごとで済むものではないということは教わっているが、《結社》との関りはおおよそ一国の宰相にとつて相応しい振る舞いとは思えないというのはオリヴァルト皇子の弁だ。

リインとしても、《リベルⅡアーク》出現に合わせた蒸気機関の戦車ででの侵攻を見ているだけに、アリサ達のようにオズボーン宰相を安易に支持する気にはなれない。

「リイン、どうかしたの？」

黙り込んでしまったリインにフィーが言葉を掛ける。

「いや、何でもない」

「そう……ところで気になっていたことが一つあるんだけど」

フィーは徐に手を挙げてそれを話題に出す。

「ラウラが会った女剣士だけど、えつと……」

「デュバリイさんだな。それがどうした？」

名前を言い淀むフィーに補足を入れてリインは続きを促す。

「うん……《結社》が帝都に来ているってことはもしかしたら《剣鬼》もいるのかな？」

「……………え？」

フィーの言葉にリインは間の抜けた言葉を漏らしたが、一同はそれに気付かずそのことを失念していたと焦り始める。

「しまった。その可能性を失念していた」

「確かに《結社》の剣士がいたならそれもいる可能性は高いわね」

「リベールで《異変》を起こした犯罪組織、帝国で暗躍していてもおかしくはないか」

「俺としては命を助けられた恩があるが、何か大それたことを計画しているのなら止めなくてはならないな」

「そういえば帝都の地下が上位三属性の影響が出る程に場が歪んでいましたから、あり得ない話ではないと思います」

「それは本当かいエマ君？　なら憲兵隊に報告しておいた方が良いでしょうな」

「《剣鬼》と戦うなら僕達の手に残るからやっぱり憲兵隊に任せるべきじゃないかな？」

「何を弱気なことを言っているんだエリオット。あれから僕達も腕を上げているし、今はリインさんもいるから十分に戦えるはずだ」

「ふむ……前三回の特別実習に出て来た《結社》のエージェントという男か……」

《結社》には同門の兄弟子がいると師匠から聞いているから一度は会ってみたいものだ」

呆けるリインを他所にⅦ組とアンゼリカは《結社》——《剣鬼》対策を本格的に考え始めるのだった。

こうして帝都での特別実習一日目は終わった。

そして、特別実習二日目。

最初の依頼課題の内容を聞いたリインは大いに困ることになった。

場所はトワの実家であるハーシエル雑貨店。

昨夜、泥棒に入られその犯人を捕まえる、ないしは盗まれた商品を取り戻して欲しいとの依頼だった。

それだけならリンもそこまで困りはしないのだが、問題は手掛かりとして残った一枚のカード。

『怪盗B参上っ！』

51話 緋の帝都Ⅲ

「ヴェスタ通りに店を構える《ハーシエル雑貨店》

そこは両親を亡くしたトワを引き取った彼女の叔父夫婦が営む店だったが、昨夜泥棒に入られた調査依頼が出ていたにも関わらず店は何事もなかったかのように営業していた。

「あれ……？」

実家から出された依頼を見て動揺したトワはジオルジュに隊長を代行してもらって駆け付けたのだが、通常営業している実家の姿に肩透かしを食らってしまう。

「ここがトワ隊長の実家ですか……見たところ普通に営業していますね」

「うん……そうだね。でも依頼が来たのは確かだから話を聞いてみよう」

ひとまず被害が目に見えてないことに安堵してトワは後輩たちを促す。

「あ、それと叔父さん達の前で隊長って呼ぶのはやめてね」

「分かりました」

「あ、はい」

「うむ、了解した」

ラインとエリオット、そしてラウラはトワの忠告に頷いてハーシエル雑貨店に入った。

「いらっしやい——あら、トワじゃない。お帰り」

「お帰りじゃないよ。泥棒に入られたって依頼が来た時にはびっくりしたんだからね」

朗らかな笑顔で出迎えてくれたマーサにトワは安堵しながらも答える。

「え……どうしてトワがそのことを？」

トワが現れることを考えていなかったマーサはバツが悪そうに目を泳がせる。

「学院の実習で憲兵隊の仕事をいくつかを請け負っているの……
その依頼の中にうちからの依頼があつて急いで来たんだけど」
改めて店内を見回しても荒らされた形跡はない。

そこに不信を感じる前に、マーサはトワに向かって頭を下げた。

「ごめんなさい。トワちゃん」

「お、叔母さん？」

突然謝られてトワは狼狽える。

「こんなことになってしまって本当に何て言つて良いか……せめてあなたに知られる前に解決してもらおうと思つていたんだけど本当にごめんなさい」

「落ち着いてください。マダム……」

そんな突然謝られてもトワ先輩も困っています。とりあえず経緯を教えていただけますか？」

「え……あ……そうね。ごめんなさい」

リインに諭されてマーサは顔を上げ、リインを見て顔をしかめた。

「貴方は……」

「申し遅れました。俺はトワ先輩の後輩のリイン・シユバルツアールと申します。こちらは同じクラスのエリオットとラウラ……」

以後、お見知りおきを」

「え、ええ……御丁寧にどうも」

名乗ったリインに対してマーサはより警戒心を強める。

「リイン、何かしたの？」

「いや、心当たりはないんだけどな」

耳打ちして来るエリオットにリインは首を傾げる。

マーサによつて説明されたのは昨日の夜の出来事。

その日はたまたま外に食事に出掛け、帰ってきたら裏口の鍵が壊されていた。

警戒して調べてみれば、店内には不審者たちがいてマーサ達の声を聞くなり、店側の出入り口を中から開けて逃げて行った。

憲兵隊に通報し、調べてみれば店が少なからず荒らされ、導力レジのミラが抜き取られ、さらには二階の居住スペースのトワの部屋から

天体望遠鏡が無くなっていた。

そしてその代わりに残されたのが一枚のカードだった。

そこに書かれていたのは――

『怪盗B、参上っ!』

『《怪盗B》って、あの――』

「ふむ、エリオットは知っているのか?」

「う、うん……帝都では結構名の知れた盗賊だから」

「そうだね……」

『美の解放活動』って自称して数年前から世間を騒がせてるんだけど……

帝国軍から、導力戦車を盗み出したことがある凄い盗賊だよ」

「いや、今回の犯人は名前を騙っているだけの偽物ですね」

『《怪盗B》のカードを見て深刻な顔をするトワ達にリインは迷いなく言い切った。

「そんな、どうしてそんなこと言い切れるの?」

「まず鍵を壊されていたこと、彼に掛ければ壊さないで錠前を開けることくらい簡単にできる……」

年代物の天体望遠鏡が彼の琴線に触れた可能性は確かにあるけど、ミラに手を出している以上、彼の犯行じゃないって断言できる」

リインからすれば名を騙るならもう少し努力しろと呆れているのだが、エリオットは自信満々に言い切るリインに思わず言葉を返していた。

「随分詳しいんだねリイン」

「ああ……まあいろいろあってな」

「でもそっか……リインって《怪盗B》のファンだったんだ」

「……………は?」

『《怪盗B》の手口は大胆かつ華麗。一部には熱狂的なファンがいるらしいけど、リインがそうだったなんて思いも――』

「エリオット……」

「ひっ!?!」

同い年らしくないリインによく見つけた人間らしさに喜んだ

のも一瞬、エリオットはこれまでにない殺意を叩きつけられその場に
竦み上がる。

「誰が……誰のファンだって？」

「あうあうあう……」

微笑みを浮かべるリインに感じるのは命の危機。

言葉足らずだったとしても決して間違ってはいけないことがある。

「次にそんなことを言えば、どうなるか分かるな？」

「こくこくこく……」

壊れた人形のようにエリオットは何度も頷く。

「《怪盗B》とはリベールで敵対したことがあるだけだ」

それに数ヶ月前に来たブルブラン男爵がその正体だということは
黙っておく。

「とにかくこの件は《怪盗B》の犯行の可能性は低いと思います……」

盗まれたのが天体望遠鏡というのほらしいですけど、そもそも一般
人に気取られている時点で奴の可能性はありません」

「そうなんだ……でもどうして叔母さんは謝ったの？」

「ほら、荒らされたのはトワの部屋で盗まれたのは天体望遠鏡だった
からトワに知らせない内に犯人を捕まえて欲しかったのよ……」

でも、来たのがトワだったから。本当にごめんなさい」

「そんなこと気にしなくていいのに……それより叔父さんとカイ君の
姿が見えないのは」

「ああ、あの人は泥棒を追い払う時に腰を痛めちゃってね。今はお医
者さんに診てもらいに行ってるよ。カイは……」

「ただいま」

噂をすれば影というようにその子の名前を話題にしたら男の子が
帰って来た。

「カイ君」

「あ、トワねーちゃん……」

消沈した男の子はトワを見ると目に涙を浮かべる。

「ごめん……おれ……トワねーちゃんが大事にしている望遠鏡……取
り戻せなくて……ぐす……」

「泣かないでカイ君……大丈夫。お祖父ちゃんの望遠鏡は私が取り戻すから」

「でも……」

「大丈夫。お姉ちゃんには頼もしい仲間もいるんだから」

トワはカイに笑いかけて、リイン達に視線を向ける。

「特にリイン君は遊撃士の資格を持っている凄い子なんだよ」

後輩を自慢するトワだが、彼女の意に反してマーサとカイはリインに胡乱な眼差しを向ける。

「ちよつとトワ。こつちに来なさい」

「叔母さん？」

手招きされたトワは首を傾げながらマーサに近付き、耳を寄せる。

「あの子、大丈夫なの？」

「あの子ってリイン君のこと？」

「トワは知らないのは無理もないけど、リイン・シユバルツアーって言ったら帝都で有名な——」

「フン……お前みたいなのペテン師にトワねーちゃんをわたせねーかな」

「え……ペテン師？」

突然カイから向けられた罵倒の言葉にリインは目を丸くする。

「カイ君っ!?! それに叔母さんまで何を言ってるの?」

慌ててトワがその場を取り成すが、帝都の市民の中では年末の御前試合においてリインの噂は悪い方向へ尾ひれがついていた。

・*

「うう……ごめんね。リイン君」

ハーシエル雑貨店での聞き込みを終え、犯人の目撃情報を探しに歩きながらトワはリインに謝った。

「良いですよ。聞けばあの人達が言いふらしたわけではないですから」

噂とは良くも悪くも面白く、そして信じやすい出来事の方が伝わり

やすい。

帝国三強との試合、その中で《光の剣匠》を不意打ちして秒殺してしまったことで、彼のファンたちからの響感を買ってしまったことも原因だろう。

「それよりも今は泥棒のことですが。ここまでの聞き込みによると怪しい四人組を見掛けたと証言がありましたけど……」

「ああ、白い貴族風の男に黒いスーツでサングラスの男も一緒だったらしいね」

「それから東方の着物みたいな服の女性もいたらしい」

「あと、フリルがたくさんついた女性の四人だね」

「……………何だろう。凄く嫌な予感がする」

目撃情報を聞くたびにリインの中で嫌な予感が大きくなっていく。

「マーテル公園でその四人組の目撃情報は途切れているが、とにかくその公園を調べてみよう」

そうして見つかったのは地下道に続く隠し扉。

中に入って探索を続けると、そこには――

「ほう、よくぞこの場所を突き止めた。この《怪盗紳士》が褒めて遣わそう」

白い貴族風の服に目元を仮面で覆い隠した男がリイン達を出迎えた。

ただし、貴族風の服はサイズが合っていないのか、鍛え上げられた体によって突っ張っていた。

「ククク、わざわざこの《痩せ狼》の餌になりに来るとは命知らずな奴だ」

黒いスーツにサングラスの痩せた男は獰猛な笑みを浮かべ両手にダガーを握ってリイン達を威嚇する。

「ふふ、大方若さゆえの蛮勇かしら？　良いわ。この《幻惑の鈴》が現実を教える」

東方の着物を身に纏った女性が導力ライフルを肩に担いで舌なめずりする。

「リベールで王国軍を蹴散らしたこの《殲滅天使》の力、見せて上げる」

そしてフリルがたくさんついたゴスロリ服の女が大剣を手に粋がる。

「あー」

敵を前にしたのにリインは思わず天井を仰いだ。

「《怪盗紳士》……《怪盗B》じゃなかったの？」

「ふっ……《怪盗B》は数ある名前の一つに過ぎん」

聞き返したエリオットに《怪盗紳士》は自信満々に言い切る。

「リベールの王国軍を蹴散らした……まさか貴様たちは《結社》という組織の者達か!？」

そんなリインを他所に彼らの言葉を真に受けたラウラは緊張した様子で大剣を構える。

「ククク……俺達のことを知っているか……」

そうだ。二年前の《リベールの異変》で王国軍の雑魚共をちぎっては投げ、ちぎっては投げて壊滅させたのは俺達だ」

自信満々に《痩せ狼》は言い切る。

「それよりあなたたちがお祖父ちゃんの望遠鏡を盗んだの!？」

「フフ……まさか憲兵隊ではなくあの店の者に追いつかれるなんて。だけど悪いわねお嬢ちゃん、ああいう骨董品は貴族様が良い金額で買ってくれるから返して上げるわけにはいかないの」

激昂するのを抑えたトワの言葉に《幻惑の鈴》は妖艶な笑みを浮かべながら答える。

「お前達が結社……」

「ふふふ、貴方は私達の恐ろしさが理解できたようね……」

私たちの事を見なかったことにしてすぐに帰るなら見逃して上げるわよ」

一人、身構えずに呆然とするリインに《殲滅天使》は派手に大剣を床石に突き刺し、委縮させるように大きな音を立てて提案する。

自信満々な四人の盗人たちにリインが思ったことは一つ。

「こいつら自殺志願者なのか?」

「リ、リイン君?」

盛大にため息を吐いて気力を低下させたリインにトワが振り返り

その名を呼ぶ。

と、それまで粹がっていた泥棒達は揃って固まった。

「リイン……?」

「まさか……リイン・シユバルツァー?」

「ぎゃあああああああああつ! 何で!? 何でこいつがここにいるのよっ!」

一瞬前まで威勢よく吠えていた泥棒達は一斉に壁際まで後退って悲鳴を上げる。

「リ……リイン?」

「……この者たちにいったい何をしたのだ?」

「……………まあ、色々」

彼らの反応に大まかな事情をリインは察する。

おそらく彼らは《リベールの異変》の時にリインを始めとした遊撃士の首に掛けられた賞金目当てにやってきてリイン達が蹴散らした猟兵団の内の一つ。

ブルブランに限らず、他の執行者達の真似を曲がりなりにもできているのは、あの時王国軍が彼らにやられる光景をどこかで見ていたからと説明がつく。

「ひいひいひいっ!」

「謝るから、もう武器はないから殴らないでっ!」

「女神様っ! お助けをっ!」

「取り乱すんじゃない!」

異様に怯える三人に《怪盗紳士》は声を上げて一喝した。

「冷静に考えてみろっ!」

ここは帝国で、リベールの遊撃士だったリイン・シユバルツァーがこんなところにいるわけがないだろ!」

「お、親分っ!」

「それによく見たら赤毛も《死神》じゃないわ」

「フッフ、よくも脅かしてくれたわね」

《怪盗紳士》の一喝により戦意を取り戻した泥棒達は我に返って武器を構え直す。

「だが、これはチャンスだ。リイン・シュバルツァーの偽物を倒してあの日のトラウマを乗り越えるチャンスを女神さまが授けてくれたに違いない!」

「おおー。言われてみれば。それにリイン・シュバルツァーの首を取ったと猟兵に返り咲けるっ!」

「貴方に恨みはないけど、リイン・シュバルツァーと同じ顔をしていた己を恨むのねっ!」

「ま、まあ……泣いて命乞いをするなら見逃して上げないこともないけど」

先程の無様をなかつたように振る舞う泥棒達にようやくラウラ達もリインの気持ちを理解する。

「これがフィーと同じ猟兵なの?」

「何と言うか……哀れだな……」

「というか、エリオット。これとフィーを比べてやるでない。流石に失礼だ」

「何でも良いけど、やるっていうなら私も相手になるよ。私だって怒っているんだからね」

戦意を漲らせる元猟兵の泥棒達にトワ達もそれぞれの武器を握り締め――

「ドラグナーハザードっ!!」

別の依頼課題により、トワ達とは別の入り口から地下道に入り手配魔獣を探していたアンゼリカ班の班長による怒りの一撃が泥棒達に背後から襲い掛かるのだった。

52話 緋の帝都Ⅳ

聖アストライア女学院。

貴族の子女が通う有名な中等・高等学校。

二日目の実習が終わり、サラからの呼び出しを受けてそこに集まったⅦ組と先輩達を迎えたのはリインの妹のエリゼだった。

「トールズ士官学院・Ⅶ組、そして先輩の皆さん……」

ようこそ《聖アストライア女学院》へ。それでは案内させていただきます」

女学院に入ると、外部と接する機会の少ない女子生徒達は好奇心な眼差しをⅦ組達に向けてくる。

「くぅ〜これだよこれっ！ こういうのが欲しかったんだよ」

囁かれる好意的な言葉にクロウは感激して女子生徒達に手を振ってみせる。

それだけで黄色い声が上がリ、クロウは士官学院では得られなかった自尊心が満たされることに気を良くする。

「クロウ君、恥ずかしいことしないでよ」

「トワ……クロウだけじゃないよ」

ジョルジュに指摘されて振り返るとそこにはいつの間にか列から抜け出したアンゼリカが女生徒に迫っていた。

「どうだい小猫ちゃん達、この後学院を抜け出して夜の帝都で私とデートをしないかい？」

「……………リイン君、お願い」

「はい、分かりました」

トワの声にリインは頷き、横道に逸れた先輩二人の首根っこを掴んで引きずって連行するのだった。

案内された薔薇園でリイン達を待っていたのはアルフィン殿下と金髪の青年だった。

「あれ……もしかして、貴方は——」

身に纏っている服は白い旅装束だが、その顔にトワ達は見覚えが

あった。

「ふっ……士官学院のみんなは六月の交流大会以来だね」

手にしたリユートを掻き鳴らして青年は名乗る。

「時には異国の地で愛を囁く旅の演奏家……」

時には皇族ゆかりの伝統ある士官学院の理事……

そしてある時には女学院の音楽教師にして、穢れなき乙女の園に迷

い込んだ愛の狩人——」

「へえ……それは初めて聞きましたね」

出迎えた青年に固まる一同を他所に、リインは一人前に進み出て青年の頭を掴んでいた。

「オリビエさん、ちよつと話をしましょうか？」

「ああっ！ この感触、その視線、何もかもが懐かしい」

ギリギリと力を込められているにも関わらず嬉しそうな声を出す。

「良いからこつちに来い」

「あゝれ〜っ！」

一同がそんなやり取りにさらに固まるが、リインは青年の頭を掴んだまま奥へと慣れた様子で引きずって行った。

「あらあら、お兄様ったら楽しそう」

朗らかに笑うアルフィンに一同は何も言葉を返すことはできなかった。

・*

「改めて名乗らせてもらおうか……」

オリヴァルト・ライゼ・アルノール——通称『放蕩皇子』さ……

そして《トールズ士官学院》のお飾りの理事長でもある」

饗応の席に座り、白い旅装束から赤の礼服に着替えた青年は先程の出来事がなかったかの様に改めて自己紹介をするのだった。

「えっと……先月の交流会を開いていたさき、トールズ士官学院の生徒会長として改めて御礼を言わせてください」

先程のイメージを振り払うようにトワが一同を代表して話すが、そ

れに対してオリヴァルトは苦笑を返す。

「そんなに肩肘を張らなくて結構だよ。ここは公式の場ではないのだから……」

「それにあの企画はリイン君の功績に便乗して行わせてもらったものだから、僕が御礼を言われる筋合いはないくらいだ」

「で、ですが……」

「それよりもトワ、今は食事を楽しもうじゃないか」

生真面目に恐縮し切っているトワにアンゼリカが助け舟を出す。

「はは……今の緊張し切っているトワをもう少し愛でていたいが、本題に入りましょう。オリヴァルト殿下……」

私たちを呼び出し、この場を設けたのはずばり《Ⅶ組》を設立した理由についてですね？」

未だ緊張の解けない一同を代表するようにアンゼリカが真面目な顔をして尋ねる。

「鋭いねアンゼリカ君……ああ、その通りだ……」

トールズの理事長職は皇族の人間が務めることが慣わしでね……

私も名ばかりであったんだが一昨年のリベール旅行で心を入れ替えたのさ」

「一昨年のリベール旅行……」

《リベールの異変》ですね」

オリヴァルトの言葉にエリオットとエマが反応し、一同の視線は当事者だったリインに集中する。

「あれ？ でも《リベールの異変》ではオリヴァルト皇子がオブザーバーとして浮遊都市にリインと一緒に突入したと聞いていたけど、旅行？」

「それは——」

「オリヴァルト皇子は《異変》の解決後に一ヶ月ほどリベールに滞在していたので、その時のことを言っているんだよ」

オリヴァルトが何かを言う前に、リインがエリオットの疑問に答える。

一年近くもの間、自国の皇子がお供を付けずに遊び歩いていた事実

は刺激が強過ぎるとリインは判断しての言葉だった。

「ふふ……あの危機における経験が帰国後の私の行動を決定付けた……」

そして幾つかの「悪あがき」をさせてもらっているんだよ。そのうちの 하나가、士官学院に「新たな風」を巻き起こすことだった」

「新たな風……」

「それに「悪あがき」というのは？」

フィーの呟きに乗ってラウラが尋ねる。

「知っているだろうが、皇族は「権威こそあっても権力はない」だから直接帝国の政治に関わる事はできないのが僕の現状だ」

「では、身分に関係なく、様々な生徒を集めたのはどうして？」

「私の発案でね。もちろん《ARCU》の適正が高いというのも条件だったが、今の帝国で起きている実情……」

だが貴族派と革新派の対立だけじゃない……

帝都と地方、伝統や宗教と技術革新、帝国とそれ以外の国や自治州までも、この激動の時代において必ず現れる《壁》から目を背けず、自ら考えて主体的に行動する――

そんな資質を若い世代に期待したいと思っているのだよ」

「……あ……」

「それは……」

「正直、身に余る期待だけど……」

オリヴァルトの見据える眼差しに思わず気後れを感じてしまう一同。

しかし、そこに水を差す言葉が発せられた。

「大層なことを言っているが、俺は《Ⅶ組》にあんまり意味があるとは思えないな」

「ク、クロウ君!？」

「クロウ、不敬だよ」

どこか喧嘩腰にオリヴァルトを睨むクロウにトワとジョルジュが慌てる。

「いや、構わないよ。それで君はどうして意味がないと言い切れるの

かな？」

「こいつらの前任で去年、いろいろな場所に行かされたのは、まあそれなりに楽しかったけどね……」

「たかが数人の意識を変えるだけで何が変わるって言うんだ？」

「見識を深める意味は確かにあるだろうけど、それだけじゃねえのか？」

「俺やガイウスやフィーみたいな奴がそんなこと言われたって正直、どうしろって話だ？」

「それは……」

「そだね……別にわたしも帝国にそこまで愛着なんてないし」

「ノルドからの留学生であるガイウスと根無し草のフィーはクロウの指摘を否定することはできなかった。」

「はは、手厳しいね」

「クロウの辛辣な言葉にオリヴァルトは苦笑を返す。」

「だが、その通りだよ……」

「私ができることは若者の見識を広げることだけで、その子たちの進路を決めるわけじゃない……」

「『新たな風』という第三勢力を作りたいというのも僕の我儘であり、その中に君たちを強制的に引き入れようとするものではないことは保障しよう」

「だろ？　だからこんな特科クラスなんて俺には無意味にしか感じないんだよ」

「しかし、無意味だからと言って、何もしないで良いと言うのは違うだろう？」

「我が意を得たりと得意気になるクロウにオリヴァルトは穏やかに言い返した。」

「それは……」

「『Ⅶ組』の運用は既に私を離れて常任理事の三名に委ねられている……」

「そういう意味では無責任な期待をしているとしか言えないが、何事も最初の一步を踏み出さなければ何も変えられないだろ？」

それに君たちを前にこの話をするかどうかは迷ったのだが、僕にとって《Ⅶ組》は踏み台でもあったんだよ」

「踏み台ですか？」

先程までの話と矛盾しそうな言葉にユーシスが眉を顰める。

「君たちも知っていると思うが、我が弟セドリックが来年、君達の後輩としてトールズ士官学院に入学することになっている」

「っ……」

「セドリック皇子って……あの今は病床に伏して療養生活を送っているって噂の？」

「ああ、『寮用生活』を送っている我が弟だ」

聞き返したジョルジュにオリヴァルトは笑みを濃くして頷く。

「クロウ君が先程言った通り、たかが数名の意識改革をしたところで大勢に影響はないだろう……」

しかし、次期皇帝とされているセドリックに今の貴族派と革新派の対立を教えることの影響は大きい……

まだまだ何も知らない、学ぶべきことが多い弟を先輩として引張ってもらおう、《Ⅶ組》にはそんな思惑もあるんだよ」

「確かにそれなら僕たちよりもずっと大きな影響があるかもしれない」

「というか、皇子様が僕達の後輩になるのか……何か今から緊張して来た」

オリヴァルトの言葉に一理あるとマキアスは頷き、エリオットは気が早く今から焦り出す。

「はは、そんな肩肘張らなくても大丈夫さ」

意味深な笑みをさらに深くしてオリヴァルトは笑う。

「しかし、何故殿下はそこまでして『新たな風』に拘るのでしょうか？」

そんなオリヴァルトにユーシスは尋ねる。

「それについては僕の在り方を少々語らないといけないね」

オリヴァルトはユーシスに意味深な微笑みを浮かべて続ける。

「私は今の帝国——腐敗した貴族勢力をあまり好きになれない……い

や、憎んでいると言っても良いだろう」

「つ……つまりオリヴァルト殿下はオズボーン宰相を支持しているということですか？」

明かされたオリヴァルトの心情にユーシスは動揺しながらも聞き返す。

「貴族派を憎んでいると同時に、私はオズボーン宰相のやり方が恐いのだよ」

「……………」

オリヴァルトの語る話に一同は、特に政治に将来関わろうと考えている面々は固唾を飲んで続く言葉を待つ。

「彼のやり方はおそらく、ある種の幻想を作り上げることによって国家全体を熱狂に巻き込むことだ……」

その熱狂の焰を使って彼は旧体制を打倒しようと考えているのだろうが、その焰が際限なく成長し、何を成すのか私には分からない」
行き着く先はおそらく帝国を「呪う」ものなのだろうが、それはあえて言わずにおく。

「『新しい風』などと聞こえは良いかもしれないが、結局のところ私はオズボーン宰相に対抗する何かを作りたいだけだと言われてしまえばそれまでだ……」

申し訳ない。私の身勝手な理由を君たちに押し付けてしまった」

「いえ……あ——オリヴァルト皇子にそれほどまで深い考えがあったとは露知らず……」

告白されたオリヴァルトの心情にクリスは一同を代弁するように何とか言葉を返す。

「フフ、だがそれは私の勝手な思惑さ」

そんな固まってしまった一同にオリヴァルトはおどけた調子で明るい言葉を送る。

「こんなことを言ってしまった後で言っても説得力はないかもしれないが、君達は君達であくまで士官学院の生徒として青春を謳歌すべきだろう……」

恋に、部活に、友情に、甘酸っぱい青春なんかをね」

そう言つてウィンクするオリヴァルトによつて緊張した空気が緩む。

「……………もしかしてリインはこの話知っていたの？」

息を吐いたアリサはリインに尋ねる。

「ああ、一通りのことは……………」

そもそも俺はみんなと違って、殿下に《Ⅶ組》に参加して欲しいつてお願いされたんだ」

「そ、そうだったんだ」

「それで俺は俺で士官学院の旧校舎を調べるために丁度良かったから引き受けたんだ」

エリオットの言葉にリインは付け加える。

「旧校舎と言えば例のモノの修復が完了したそうじゃないか？」

ただこの通り、今月は夏至祭、来月にはクロスベルでの通商会議が控えていてあまり時間は取れないんだよ」

「それは仕方がないですよ。『アレ』は逃げたりしませんからしつかりとお勤めを果たしてください」

「それはもちろん……………」

ところで通商会議にトワ君が随行団として同行するという話なのだ……………」

「あ、はい。まだ返事はしていないんですけど、前向きに検討しています」

突然振られた話にトワは自分の意志をはっきりと伝える。

「それは重畳。しかし悪いね。本題は君の事ではなくリイン君でね……………」

実はリイン君にオズボーン宰相付きの護衛官として同行してくれないかという話が出ているんだよ」

「俺がオズボーン宰相の護衛官ですか？ それはまたどうして？」

「事の発端は通商会議に向けて各国との細かい事前調整をしていた際に問い合わせられたのだよ。リイン・シュバルツァーは通商会議に同行するのかとね」

「各国と言うのは？」

「会議の場となるクロスベル自治州、カルバード共和国、それからレミア
フェリア公国の三つからだね……」

クロスベルは《教団事件》のことがあるから分かるんだけど、他の
二国に心当たりはないかな？」

「共和国の方は心当たりはありますが、公国の方には……」

共和国はノルドでの一件で目を付けられたのだろう。

帝国内ではレクターの功績にしているが、カルバードにまで情報操
作の手は及ばない故だろう。

「公国は何か言っていますでしたか？」

「ふむ、ウルスラ医科大学で研究している『薬』の事で是非会いた
い」としか

「ああ、あれか」

オリヴァルトの答えにフィーが心当たりを呟く。

「あの……オリヴァルト殿下、問い合わせはその三つだけなんでし
ょうか？ その……リベール王国は？」

「ああ、それは来月俺がリベールに行くことになっているからじゃな
いか？」

エリゼが尋ねた質問にリインが答える。

「兄様……どういうことですか？」

聞いていませんと、非難するような眼差しでエリゼはリインに拗ね
た眼差しを送る。

「トールズ士官学院は貴族生徒はその特権で領地経営を学ぶ名目で夏
季休暇を取れるんだ……」

それを利用して、リベールでお世話になった人達に挨拶回りをしよ
うと思っていたから、その許可もオリヴァルト理事に既にもらってい
るんだ」

「むう……」

至極真つ当な理由にエリゼは頬を膨らませる。

「ああ、そのことなんだがリイン君、実は一つ提案をしても良いかな
？」

「何ででしょうか？」

「来月の《特別実習》の行き先をリベールにすることを常任理事の御三方に提案しても良いかな？」

「それは……」

「もちろん先方の都合もあるだろうが、他国を見る事は《Ⅶ組》にとつていい刺激となると思うんだ」

「オリヴァルト皇子、その《特別実習》ですが我々も参加できるでしょうか？」

オリヴァルトの提案にアンゼリカは真つ先に挙手をして自分達もと提案した。

「おいおい、これから暑くなるっていうのに何でさらに暑い南の小国に行くんだよ？ 俺は嫌だぜ」

そんなアンゼリカの主張にクロウがだらけた拒絶を返す。が、アンゼリカはそれを鼻で笑う。

「これだからクロウは」

「やれやれ、クロウ君は事の重大さを分かっていないようだね」

オリヴァルトとアンゼリカは揃ってそんなクロウに肩を竦める。

「な、何だよ……？」

「クロウ、来月の季節は？」

「そりゃあ……夏だろ？」

「クロウ君、リベールは確かに帝国と比べて温暖な土地だ」

「それが何だって言うんだよ？」

勿体付ける二人にクロウは早く答えを教えろと急かす。

「そう……つまりその時は絶好の海水浴シーズンだと言うことだった！」

拳を握ってオリヴァルトは言い切った。

「トワを含めて《Ⅶ組》には綺麗所が揃っているからね。グフフ……」
そしてアンゼリカはその時の光景を夢想して怪しい笑みを浮かべる。

「はっ……何を言い出すかと思えば——」

そんな二人をクロウは鼻で笑い——

「是非、次の《特別実習》は俺達も一緒に行かせてくださいっ！」

躊躇わずオリヴァルトにクロウは懇願するのだった。

53話 緋の帝都V

7月26日、月曜日。特別実習三日目。
夏至祭初日。

病床に伏せていることになっているセドリツク皇子を除いた皇族が帝都各地の行事に参加するためにリムジンでバルフレイム宮から出発する。

そのパレードの光景は帝都の各所に設置された大型導力モニターによって中継されていた。

ラインフォルト社が開発した音と映像を記録する導力カメラ。

これを用いて、これまで選ばれた貴族だけが皇族と接するしかなく、かつた行事を衆目にも共有させることを目的としたこの新しい取り組みはオズボーン宰相によって取り仕切られていた。

ユーゲント皇帝は《ヘイムダル大聖堂》へ。

オリヴァルト皇子は《帝都競馬場》へ。

そしてアルフィン皇女は《マーテル公園》へ。

ドライケルス広場には三つの大型モニターが設置され、そんな彼らの様子を映し出し、市民の注目を集めていた。

しかし、華やかな催しは唐突に終わる。

『帝都ヘイムダルにおられる皆さん、初めまして』

マーテル公園を中継していたモニターに学者風の男が現れる。

『我らは《帝国解放戦線》』

帝都競馬場を中継していたモニターに強面の男が現れる。

『静かなる怒りの焰をたたえ、度し難き独裁者に鉄槌を下す』

ヘイムダル大聖堂を映していたモニターに眼帯の女が現れる。

『あえて言わせてもらおう、義は我にあると』

学者の男がそう言うと、帝都の各地で地下回廊へと繋がる扉が彼らの同志たちの手によって次々に開け放たれる。

そこから現れたのは無数の魔獣たち。

華やかな夏至祭の初日は一転して、混乱の坩堝と化するのだった。

・*

「街中に魔獣を放つなんてっ!」

旧ギルド支部で報告を受け取ったトワは絶句する。

昨夜、鉄道憲兵隊のクレアから夏至祭初日の警備において「遊撃」として市内巡回を頼まれたからある程度は覚悟していた。

しかし、《帝国解放戦線》はトワやクレア達の予想を遥かに上回る規模でテロを実行した。

およそ人がやることではないとトワは思考停止していると、通信にクレアの声が届く。

『ハーシエルさん、市内の魔獣は憲兵隊が対処します。貴方達は周辺の魔獣を排除しながら皇族の方たちの安全を確保に努めて下さい』

「りよ、了解しました」

通信からのクレアの指示にトワは我に返って、それぞれの班に指示を伝達する。

『ジヨルジュ班、了解——大聖堂に向かうよ』

『クロウ班、了解——ここからだ競馬場が一番近いな』

「……クロウ君？ たしかクロウ君の班の巡回場所は別の場所だったはずだけどどうしてそこにいるのかな？」

『おおっと！ 魔獣が襲い掛かって来た！ おら後輩共っ、行くぞっ！』

「もうっ！ 事件が終わったら詳しい話を聞かせてもらおうからね！」

おそらく競馬場に行こうとしていた同級生の行動を想像してトワはため息を吐く。

クロウの勝手な行動はともかく、結果的にはオリヴァルト皇子がいる競馬場に近い位置にいたことは不幸中の幸いだろう。

「あれ……アンちゃん？」

返事がない最後の班にトワは首を傾げる。

『……………アンゼリカ班、了解。マーテル公園に向かうけど、問題が起きた』

「問題……っ？」

遅れて届いたアンゼリカの声にトワは首を傾げる。

今日のアンゼリカ班にはリインがいる。

ならば多少の問題など簡単に振り払えるはずとトワは考える。

『襲撃を受けたんだ。おそらく足止めだと思う。敵の目的はリイン君だけで私達は見逃された』

「……それならアンゼリカ班はそのままマーテル公園に向かつて」

指示を出しながらトワは端末を操作してリインの《ARCUS》に通信を試みる。

だが、いつまでも回線は繋がらない。

「リイン君のことだから大丈夫だと思うけど……」

リインには信頼を寄せるだけの実績がある。

しかし、嫌な予感が拭うことができなかった。

・
*

「リインさん……大丈夫かな？」

マーテル公園への道走りながらクリスは残してきたリインの心配をする。

「あの放送が切れると同時に襲い掛かって来た《焰》……なんか尋常じゃなかったけど……」

思い出すだけでも背筋が凍る火球にエリオットは体を震わせる。

一見すれば導力魔法によるもののだが、その焰には言葉に言い表せない凄みがあった。

それこそ導力魔法とは違う何か。

それが誰の焰なのか知っているクリスはエリオットの眩きに何も言葉を返さずに黙り込む。

「ふ……心配はいらないさ。リイン君が先に行けと言っていたのだから」

「そうかもしれないませんが」

「それよりも君達、これはチャンスだよ。囚われのお姫様を颯爽と救い出す。ハハハ、燃えてきたね」

緊迫した状況にも関わらず軽口を叩くアンゼリカにクリスとエリオットは苦笑する。

言葉こそ不謹慎だが、その表情は真剣そのもの。

マーテル公園を目指しながらも、周辺の魔獣を殴り倒すその様は頼もしかった。

「それはそうとクリス君？」

「何ですかアンゼリカ先輩？」

「君はこのままテロリストと対峙して大丈夫なのかな？」

「……………問題ありません」

意味深な質問にクリスはわずかに逡巡して頷いた。

突入したマーテル公園も酷い有様だった。

広い公園には魔獣が徘徊し、アルフィン皇女の姿を一目でも見ようとしていた観客たちは悲鳴を上げて逃げ惑う。

「ここは俺達に任せて、お前達はクリスタルガーデンに突入しろっ！」

憲兵隊の隊長がアンゼリカの顔と制服を見るなりに指示を飛ばす。

それに従ってアンゼリカ達はクリスタルガーデンに突入し、そのままの勢いで中で暴れていた二匹の大型魔獣を倒す。

しかし、アンゼリカ達が辿り着いたそこにはアルフィン皇女とその付き人として同行していたエリゼは攫われた後だった。

ガーデンの守りをそこに居合わせたパトリックに任せ、アンゼリカ達は地下道に突入するのだった。

「帝都の地下にこんな場所が……………」

「聞いたことがあります。《暗黒時代》の遺跡の地下墓地……………ヘクトル大帝が討伐した《暗黒竜》を封じた場所だとか」

エリオットの呟きにクリスが答える。

「《暗黒竜》って800年前の話だよね？ でもそんな魔獣を帝都の地下に封じているなんて」

「むしろ帝都の地下だからこそだよ……………」

帝都に限らず大半の都市や街は地脈の上に造られる。むしろ《暗黒竜》の死骸なんて劇物を適当なところに捨てるわけにはいかないさ「確かにそういう曰く付きの地下遺跡というのはルーレにもあるな――

―と……」

クリスの言葉にアンゼリカが頷くとそのタイミングで彼女の《AR CUS》が鳴る。

アンゼリカは耳に付けたオーブメントを操作して回線を繋げる。

「こちらアンゼリカ」

「サラよ。知事閣下から連絡があったわ……」

こっちは今、鉄道憲兵隊と合流してそちらに急行しているから、可能な限り先行して足止めをして、ただし人質の安全を最優先に行動すること」

「分かっているよサラ教官。このアンゼリカ・ログナーの名に誓って彼女たちに傷一つつけさせたりしませんよ」

通信を終えたアンゼリカはクリスとエリオットを見て激励する。

「ではこれより、美少女二人の救出に向かう。覚悟は良いかな」

「ええ、絶対に追い付きましょう」

それにクリスは頷いて、三人は地下墓所の奥へと駆け出した。

……
……
……

「それにしても随分と長い地下道だな」

「本当にこっちであつてるのかな？」

いくら進んでも追い付く気配がないことにエリオットが緊張を保ち切れずに愚痴を漏らす。

「足跡は続いているから、こっちに進んでいることは間違いないよ」

エリオットの呟きにクリスは再び屈んで床の状態を観察し、勢いよく立ち上がる。

「ど、どうしたのクリス？」

「静かに……」

指を立てて口を閉じさせ、クリスは耳を澄ませます。

「この先の分かれ道……誰かが来ます」

「なるほど、ようやく追いついたわけか」

三人が頷き合って静かに臨戦態勢を取る。しかし――

「むっ……その匂いはクリス達か？」

分かれ道に辿り着く前にその向こうから聞き覚えのある言葉が掛けられた。

「その声はラウラ？」

警戒を解いて進み、分かれ道に出るとそこには頭のとっぺんに犬の耳を生やしたラウラを始めとしたクロウ、マキアス、フィーがいた。

「ようお勤め御苦労さん」

「こっこれが噂のイヌミミラウラ君っ!？」

声を掛けて来たクロウを無視してアンゼリカはラウラの姿に衝撃を受けて思わず膝を着く。

「ぶれねえな……」

そんなアンゼリカにクロウは呆れる。

「アンゼリカさん、ふざけている場合はないですよ……」

それよりラウラ、もしかしてまた七耀石を？」

「いや、この地下道に入ったらこうなってしまった……」

だが、せつかくなので利用して《V》と名乗ったテロリストの匂いを追って来た」

この状態になると五感の性能が著しく上がる。

それこそ、匂いを糸のように視覚に共感させて追跡ができるほどに。

「競馬場は鉄道憲兵隊の働きで誰かを攫われることなく撃退することはできたんだ」

ラウラの事情は一先ず置いておくと前置きをしてマキアスが事情の説明をする。

「それで僕達は君達が攫われたアルフィン殿下を救出するために地下道に入ったと聞いて、奴等が競馬場に開けた穴から地下に入ったということだ」

「それにしてもアルフィン殿下を攫うこともそうなんだろうけど、よりによってリインの妹も攫うのは命知らずだね」

フィーの呟きに一同は思わず押し黙る。

「やっぱり……犯人は漏らさず煉獄行きか？」

「もし傷付けていたらリインは《鬼》になると思う」

「なるでしょうね……」

《鬼の力》を知っているフィーとクリスの説得力ある言葉にその場の空気が重くなる。

そして、そんな空気を読まずにふてふてしい声が投げかけられた。

「ほう、てつきり鉄道憲兵隊が来ると思っていたが来たのはガキ共か」

「その制服……これまで散々こちらの仕込みを邪魔してくれた《トルズ士官学院》のⅦ組ね」

通路の奥から余裕に満ちた足取りで歩いて来たのは強面の男と眼帯の女。

「君たちは大聖堂と競馬場を襲撃したテロリストだね……」

「どうやら道を間違えていなかったようですね。安心したよ」

わざわざ出迎えに来てくれたテロリスト二人にアンゼリカは安堵する。

「フフ……威勢の良い小猫ちゃんね。あたし好みだわ」

「そっちは《シルフィード》か。こんなところで会うとはな」

「フィー、そなたの知り合いか？」

「ううん、知らない人」

強面の男が口にしたのはフィーの猟兵時代の二つ名だが、フィーの方には彼への面識はない。

「お前のことは色々聞いているぜ。お前の兄貴分達にな」

「っ……」

強面の男の言葉にフィーは目を細める。

「落ち着いてフィー。気になるのは分かるけど今は——」

「分かっている。リインの妹の救出が最優先」

兄貴分達への手掛かりだが、フィーは優先順位を躊躇わず低めに設定した。

「いや、それも重要だがアルフィン殿下をそこは優先しような」

あっさりと言い切るフィーにマキアスはため息を吐いて訂正を促す。

「フフ……冷静で頼もしいことだ……」

ならば君達の隊長として命令しよう。この二人は私とクロウが担当する。君達《Ⅶ組》は隙を見て二人を突破して先に進みたまえ」

「アンゼリカ先輩っ!？」

「異論はないなクロウ？」

「ああ、俺は構わねえぜ」

驚くマキアスに対して、クロウは二つの拳銃を構えてアンゼリカの提案に乗る。

「しかし——」

相手は見るからに強そうな二人の敵にマキアスは思わず尻込みをしてしまう。

「はは、おかしなことを言うね……彼らがリイン君よりも強い。君にはそう見えるのかな？」

「え……？」

マキアスは間の抜けた言葉を漏らし、二人のテロリストを改めて見る。

見るからに凶悪なガトリング砲を抱えた男に、鞭のようなしなやかな剣を携えた女。

どちらも堂に入った構えは強者の雰囲気醸し出しているが、近頃分かって来たリインを前にした時に感じる恐怖は感じない。

「間違ってはいけないよマキアス君……」

私たちの最優先事項はアルフィン殿下とエリゼ君を救出すること。ここで彼らの足止めを仲良く全員で受ける謂れはないはずだ」

改めて命題を突き付けられ《Ⅶ組》の五人は気を引き締める。「というわけだからナイト役はお前達に任せるぜ」

「分かりました。でもリインさんよりも弱いとは言っても油断して良い相手じゃありません。先輩達もくれぐれも気を付けてください」

「おうよ」

「ああ、分かっている」

クリスの助言にクロウとアンゼリカは頷く。

「フフ……作戦会議は終わったかしら？」

「ま、どの道お前達の行き先は女神様の下だけだな」
こうして《帝国解放戦線》の幹部《S》と《V》とアンゼリカとク
ロウの戦いは始まった。

・*

地下墓所の最奥。

一際大きな広間に連れて来られたアルフィンとエリゼは異様な儀式を目撃することになった。

「フフフ……古文書の通りだ」

広場の中央でギデオンは怪しい笑みを浮かべる。

彼の周囲に浮かぶ黒い光を宿して浮かぶ魔石がその怪しさを増長させる。

「おおおっ！ 悪しき帝国に正義の鉄槌をつっ！」

「ついに『あの男』を殺せる日が来たのか」

ギデオンの周りに集うテロリスト達は気が早く、すでに宿願を果たした気になっていた。

「貴方達はここで何をするつもりですか？

わたくし達を攫って何を考えているのですか!？」

「皇女殿下におかれましてはしばしのご辛抱を……」

その問い掛けにギデオンは広場の中央からアルフィンの前にやって来て慇懃無礼に答える。

「我々はエレボニアの伝統と秩序を重んじる憂国の士。その象徴たる血筋に仇なすことはありません」

「その物言い……」

「フフ、別に貴族に親近感を持っているわけではありません……」

ただこれから始まる浄化に貴女様を巻き込まないためにはこうする他なかったというだけです」

「浄化……貴方はいったい何を……」

男の目の奥に宿る黒い狂気にアルフィンは身を震わせる。

「妄言はそこまでにしてください」

そんなアルフィンを庇う様にエリゼが二人の会話に毅然とした態度で口を挟む。

「大層な題目を述べたところで貴方達がしていることはただのテロリズムです」

「ほう……これはこれは、このような状況でなかなか気丈なお嬢さんだ……」

皇女殿下のお付きならばそれなりの身分とお見受けするが」

「エリゼ・シュバルツァー。北部ユミルの領主、テオ・シュバルツァーの娘です」

「シュバルツァーだと……まさか『かかし男』の部下、リイン・シュバルツァーの妹か」

「それが何か？」

「はははっ！ これは良い！ ノルドでの仕込みを邪魔してくれたあの男に復讐するのに丁度いいっ!!」

勝手なことを叫んで喜ぶギデオンにエリゼは蔑みの眼差しを送る。

ノルドと言えば、先月兄のリインが《特別実習》で向かった地。

そこで何があったのかエリゼには想像することしかできないが、目の前の男の野望を打ち砕いたことは察しがついた。

「何がおかしいっ!?!」

そんなエリゼの態度にギデオンは癩癩を起してその頬を殴りつける。

「っ——」

両手を縛られたままのエリゼは衝撃に抗うこともできずに倒れ膝を着く。

「エリゼッ!」

「大丈夫です、姫様」

口の端から血が流れるが、エリゼは毅然とした態度を貫いてギデオンを睨む。

「ちっ……」

その眼差しに不快感を示したギデオンはエリゼの手を踏みつける。

「おやめさないっ！ 貴方達……帝国男児として……いえ、人として

「恥ずかしくないのですか!？」

「皇女殿下、これは躰というものですよ。自分の立場というものが分かっていない愚か者へのね」

ギデオンは悪びれた様子もなく言い切り、彼の仲間たちはその光景を笑みを持って見守る。

「っ……」

その醜悪さにアルフィンは思わず身を震わせてたじろぐ。

「だ、大丈夫です。姫様……すぐに兄様や《Ⅶ組》の皆さんが——っ！」
安心させるようにアルフィンに話しかけるエリゼの顔をギデオンは足蹴にして黙らせる。

「ふん……あの男の妹だけあって不愉快だ」

ギデオンは舌打ちをした後エリゼの髪を掴み、乱暴に広間の中央へ引きずって行く。

「やめなさいっ！」

アルフィンの悲鳴が空しく広間に木霊して消える。

「お前にはこれから復活する『暗黒竜』の生贄になってもらう」

「『暗黒竜』ですって……」

広間の中央の手に乱暴に投げ出されたエリゼは竜の頭蓋骨を見せつけられる。

『暗黒竜』。

エリゼも帝国史でその名前の存在は知っている。

暗黒時代、突如として現れ百年の間、帝都に居座っていた災厄の魔獣。

ヘクトル大帝に打ち倒されたその存在の亡骸をエリゼは目の前にすることになった。

「くくく……」

ギデオンは徐に懐から《降魔の笛》を取り出して吹き鳴らす。

不気味で耳障りな音色が広間に響くとそれに呼応するように周囲に浮かぶ七つの魔石が光を讃えたかと思うと黒い泥のような光となり、周囲に散らばった魔獣の骨を呑み込んでいく。

「はははっ！」

これで《降魔の笛》の力っ！ 暗黒時代の帝都の「魔」すら従わせる古代遺物だっ！」

黒い泥が蠢動し、粘土で造る様にその姿を形にしていくこと数秒。泥の表面はいつの間にか生物的な質感に入れ替わり、その存在は復活を遂げたことに歓喜の咆哮を上げる。

「っ——」

耳をつんざく咆哮にエリゼとアルフィンは身を震わせる。

「暗黒竜」の復活など信じていなかった二人だが、目の前の竜の存在はそれが事実だったという現実を否が応にも突きつける。

「さあ！ 暗黒時代の魔物よ！ まずはその「贄」を喰らい本来の力を取り戻すが良いっ！」

ギデオンの言葉に従う様に暗黒竜はその長い首を動かし、エリゼ——ではなく、ギデオンの背後で暗黒竜の復活に感動していた仲間らに食らいついた。

「え……う？」

「なっ!? え……そんなどうし——」

悲鳴の途中でその男は暗黒竜の巨大な顎に食い千切られる。

肉を咀嚼する音が、骨を噛み砕く音が静寂に満ちた広間に何度も響き渡る。

「ど、同志《G》っ！ これはどういうことだっ!?!」

我に返ったテロリストがギデオンの肩を掴んで叫ぶ。

「し、知らない。何故……言うことを利かないっ!?!」

半狂乱になってギデオンは男の言葉に応える。

種を明かせば単純なことだ。

《降魔の笛》は確かに魔獣を従わせる力を持つ古代遺物だが、その能力には上限が存在している。

そもそも「暗黒竜」を従えるほどの力があるのなら、暗黒時代の当時にその存在が猛威を振るうこともなかっただろう。

これが骨だけの不完全な存在としてならば《降魔の笛》で御することはできたかもしれないが、「暗黒竜」が残した魔石を使って受肉させ生物として完全な復活をさせた「暗黒竜」に通用しないのは当然の結

果だった。

そして、〃暗黒竜〃に一番近い位置にいたエリゼではなくギデオンの背後の男を喰らったことには大した意味はない。

ただ首を伸ばしてちようどいい位置にいたのが彼だっただけの話だ。

「くそっ！ 話が違うぞっ！」

「いや、落ち着け……別にこれでも構わないだろう」

ギデオンは冷静さを取り戻し、動揺が広がるテロリスト達を諷める。

「見たところこいつは食事に夢中のようだ。ならば予定通り、その小娘に食事になってもらっている間に我々はここから退避すればいい……」

後は勝手にこいつが帝都を浄化してくれるのを待てば良いさ」

「そ、それもそうか……」

「何てことを……」

ギデオンの言い分を間近で聞くことになったエリゼはその醜悪さに吐き気を覚える。

「正直、君にそこまで恨みはないが……君の兄が〃あの男〃に協力している時点で同罪と思っていただこう」

さらにはこの期に及んでそのような自己弁護。

エリゼは絶体絶命の窮地だというのにギデオンの厚顔無恥さに呆れてしまう。

「おい！ いつまで喋っている。そうと決まればこんなところさつさと——」

逃げようと動き出したテロリスト達は暗黒竜が無造作に振った尻尾によってまとめて吹き飛ばされた。

「……………は……う？」

先程と同様に暗黒竜に近過ぎたため、その一撃から難を逃れたギデオンは呆けた言葉を漏らす。

一瞬で屍の山が作られたことにギデオンは呆然としてその場に尻もちを着く。

「アルフィンッ！ エリゼさんっ！」

そこによくやくクリスを先頭にして《Ⅶ組》が現れる。

「こ、これは……」

「ド。ドラゴンッ!？」

テロリスト達の屍と巨大な魔獣の姿にマキアスとエリオットは思わず足を止める。

その二人を置き去りにしてクリスとラウラ、フィーは駆ける。

「フィーは僕とエリゼさんの救出っ！ ラウラはアルフィンを確保っ！」

「承った」

「ラジャー」

ラウラが逸れて、クリスとフィーは真っ直ぐ暗黒竜に向かって突撃する。

「エリゼッ！」

暗黒竜が動き出したことでアルフィンは思わず声を上げる。

しかし、彼女の心配は杞憂で済んだ。

暗黒竜は何を思ったのか、すぐ近くにいるエリゼとギデオンではなく、その首をアルフィンに向けた。

「ひ、ひいいいいいっ！」

暗黒竜の一睨みでアルフィンを捕まえていたテロリストは一目散に逃げ出した。

幸い壁沿いだったからか、それとも暗黒竜の興味はアルフィンしかなかったのか、そのテロリストは逃げることに成功する。

が、取り残されたアルフィンは震えてその場に尻もちを着く。

「何っ!？」

「そっち!？」

巨体が動き、それだけでクリスとフィーは大きな回避を強いられる。

「ちっ——」

アルフィンに向かって駆けていたラウラはすれ違うテロリストを無視して暗黒竜に斬りかかり——尻尾の一撃を受け壁に叩きつけら

れた。

「ラウラツ!？」

「ぐっ……私は大丈夫だっ! それより殿下を!」

壁に叩きつけられ息を詰まらせながらもラウラは叫ぶ。

だが、そんな彼女の言葉も虚しく、暗黒竜は震えて身を固まらせることしかできないアルフィンとその腕で掴んだ。

「ひっ……」

そのまま握り潰すことなく、むしろ丁重にアルフィンを引き寄せる暗黒竜だが、それは彼女に危害を加えないためではない。

この場の中で一番おいしそうな餌だから、ぞんざいに扱わないだけだと間近で見る事になった暗黒竜の目を見てアルフィンは悟る。

「姫様っ!」

エリゼの悲鳴が上がる。

その間にもクリスが放った風の刃やファイが連射する銃弾が暗黒竜の背中に降り注ぐ。

だが、暗黒竜は何の痛痒も感じないと言わんばかりそれらを見無視し、掴んだアルフィンをその顎に――

その瞬間、白い影がクリスとファイを追い抜き、紅蓮の焰を纏った一太刀が暗黒竜の腕を斬断した。

「え……きやつ!？」

突然の浮遊感を感じたのは一瞬。

暗黒竜の腕から解放されたアルフィンは何者かに抱えられるようにして、暗黒竜から遠ざけられる。

「御無事ですね。アルフィン殿下?」

半ばから折れた深紅の刀身の太刀を片手に、アルフィンを左腕だけで抱きかかえたリインが確かめるように言葉を掛ける。

「……………リインさん……………」

黒だったはずの髪が白く染まっている彼を確かめるようにアルフィンはその名を呟く。

「はい。リイン・シュバルツアアです」

そんなやり取りをしている間に、再び浮遊感に見舞われる。

しかし、アルフィンを抱えながらもリインは危なげなく着地する。
「リインさん！」

クリスはエリゼの確保をフィーに指示して、リインの下に駆け付ける。
「すまない遅れた」

「いえ、僕達も今来た所で……危ないところをありがとうございます」
「礼は良い……それよりも……」

リインは話しかけてくるクリスに顔を向けず、その目はフィーに助け起こされるエリゼの姿を注視していた。

「リインさん………？」

「そうか………万死に値するなギデオン」

張れた頬に口の端から流れて固まった血。

綺麗に梳かれていたはずの髪の毛の乱れに、足跡が残る手。

それらを《識》の目で見たリインは静かに呟いた。

「ギャアアアアアアッ！」

リインに斬り落とされた腕を再生させた暗黒竜はリインに向かって怒りの咆哮をぶつける。

「うるさい、黙れ」

静かなその言葉に暗黒竜は咆哮を止め、たじろぐ。

「クリス、アルフィン殿下を頼む」

「あ………はい」

左腕で抱えたままだったアルフィンをクリスに預け、リインはあろうことか暗黒竜に背を向けてエリゼの下に悠然とした足取りで歩き出す。

「に、兄様………」

「エリゼ、よく頑張った」

乱れた髪を整えると同時に頭を撫でリインはエリゼを労う。

「フィー、エリゼを頼む。安全な場所に着いたらこれを使ってくれ」

「ん、了解」

リインから見覚えのある薬を受け取ってフィーはエリゼを抱き上げる。

「さて……」

そしてリインはその近くで腰を抜かしたまま動かないギデオンに目を向けた。

「お前は——」

リインが口を開いたその瞬間、無数の剣片と銃弾がリインに殺到した。

その全てを折れた太刀で斬り、弾く間にギデオンはフルフェイスヘルメットの男に抱えられて死地から脱した。

「同志《C》……それに《S》と《V》も……」

「話は後だ……それよりもここから離脱する」

ギデオンは予想していなかった仲間の援軍に喜ぶが、《C》はそれを無視して元来た通路に脇目も振らず駆ける。

「早くして！ そんなに持たないわよ！」

「馬鹿っ！ リイン・シユバルツァーじゃない。あの小娘を狙えっ！」

導力魔法を連射する《S》に《V》は反論し、ガトリング砲をフィーとエリゼに向ける。

「フィー」

「問題ない」

フィーはエリゼを抱えながらも銃弾の雨を難なく置き去りにする。

「よしっ！ 良いぞお前たちっ！」

リインの意識がわずかに逸れ、その隙に通路へと駆け込んだ《C》は合図を叫ぶ。

《S》と《V》はそれに素早く反応し、《C》の後を追って通路へと逃げ込み、次の瞬間その天井が爆発して瓦礫に通路を塞がれる。

「なっ!？」

「閉じ込められたっ！」

壁に叩きつけられたラウラを回復させていたマキアスとエリオットは逃げ道を塞がれて悲鳴を上げる。

「ちっ……」

リインは舌打ちを打って、次の瞬間無造作に折れた太刀を振るい、その衝撃で瓦礫が重なった通路を抉った。

「へ……う？」

武骨ながらもあつさりど瓦礫を開通させたリインにマキアスは間の抜けた声をもらした。

「クリス。殿下とエリゼを連れて先に逃げてくれ」

そんな反応を他所にしてリインはクリスに逃げることを促す。

「分かりました……でも、リインさんは？」

「あれをこのままにしておくわけにはいかないだろ？」

背後の暗黒竜を親指で指してリインは言った。

「そうですけど……その太刀で……」

クリスはリインの右腕にある刀身が半ばから無くなっている太刀を見て不安に瞳を揺らす。

リインの太刀は普通のゼムリアの武器ではない。

それが無残な姿になっていることからどれだけの激戦があったのかは分かる。

リインは太刀がなかったとしても戦えるが、それは戦えるだけであつて著しく戦力が低下していることには違いない。

しかし、目の前でリインを警戒して睨んでくる巨大な魔獣と戦える者はこの中でリインしかないのは事実だった。

「大丈夫だ……」

そんなクリスの心配にリインは不機嫌な言葉を返して背を向ける。

「不本意だが……出し惜しみをされていられる状況じゃない……」

リインは折れた太刀を左手に持ち替え、右手を虚空へと突き出した。

すると空間が割れ、黒い亀裂の中にリインは無造作に手を入れ、それを引き出す。

「リ、リインさんっ!？」

「早く行けっ! お前達は邪魔だ!」

言葉に隠し切れない苛立ちを込めてリインはクリスに、Ⅶ組に言い切り、虚空から取り出した赤黒い魔剣を暗黒竜に向ける。

《魔剣アングバル》。

《外の理》で造られた結社、《身喰らう蛇》の執行者の武器。

ラインの太刀を焼失させてしまった詫びと、ある理由の《試し》として貸し出された魔剣を手にラインは《暗黒竜》と対峙することになった。

54話 緋の帝都VI

「お前、何で使わねえ？」

《鬼の力》を開放しているにも関わらずマクバーンはリインにそんな言葉を投げかけた。

「使わない……何のことだ？」

肩で息を整えながらリインは聞き返す。

《鬼の力》は使っている。

太刀も折れた重い太刀ではなく、赤ゼムリアストーンの太刀を使っている。

時間を掛ければ確かに《自己相克》をできるが、敵を前にしてそれをやるにはタメが長過ぎるため論外である。

「惚けんな。レーヴェの阿呆と同じ力、お前にもあるんだろ？」

「それは《空の至宝》の力の事を言っているのか？ それなら勘違いだ。俺にそんな力は——」

「あるだろ」

否定しようとしたリインの言葉を遮ってマクバーンは断言する。

「確かに今はねえ……だが、お前が一言頼むと言えば《空の至宝》は喜んでお前に力を与えるはずだ。違うか？」

「それは……」

マクバーンの指摘にリインは押し黙る。

その指摘は正しい。

リンは常にリインからの願いを待ち望んでいる。

一言力が欲しいと頼み込めば、それこそレーヴェが偶発的に手に入れた力以上のものをくれる準備をしてくれている気配は察していた。

だがそれはしてはいけないものだ。リインはリンの思惑を無視して気付かないようにこれまで振る舞っていた。

「俺達に勝ちてえと思っっているなら、どうしてその力を求めない？」

まさか表の世界でちやほやされて俺達に並べたと思っっているんじゃないだろうな？」

「そんなわけないだろ」

「だったら、さっさと本気を出しやがれっ！」

膨れ上がる殺気にリインは太刀を盾にして間合いを詰めて来たマクバーンの剣撃を受け止める。

「シヤアアアッ！」

弾き飛ばしたリインを追撃して三つの火球を軽く振った腕で放つ。

「《ARCUS》駆動、ファイヤボルト」

素早くリインは導力魔法を駆動し、似て非なる火球をぶつけて誘爆させる。

そこで生じた爆炎を突っ切ってマクバーンは迫り、リインもまたそれを迎え撃つ。

「それにしても俺の焰で鍛えたゼムリアストーンの太刀か……」

重ねた剣撃。

しつかりと自分の攻撃を受け止める太刀にマクバーンは感心する。

しかし、同時に失笑する。

「そんな過ぎたおもちゃがあるからお前はそこで満足しているのか？」

「何が言いたい!？」

苛立ちを含んだ声でリインはマクバーンに言い返す。

「ああ……確かに周りくどかったな……死ぬなよっ！」

これまでデタラメに、それこそ無頼の型で剣を振り回していたマクバーンは正眼に剣を構え、彼が纏っていた荒れ狂う焰が消えた。

「っ……」

次の瞬間、マクバーンはリインの間合いに踏み込んでいた。

剣術の基礎とも言える真っ直な唐竹割り。

見切れることは容易く、太刀を合わせて受け流すのはそれこそ容易な一撃。

しかし、感じた危険にリインは逆らわず太刀を盾にしながらその場から横に身を投げ出す。

マクバーンの魔剣は残った太刀の切先を抵抗なく焼滅させた。

「どうだこれで——」

「鏡火水月の太刀、桜花残月ッ！」

勝ち誇るマクバーンに対し、リインは太刀を燃やし尽くすはずだった焔の力をそのままマクバーンに叩き返す。

折れた太刀から繰り出された連続斬撃。

余すことなく全てをその身で受けたマクバーンは全身を燃やされて家屋に突っ込む。

「ああ……くそ！ そうだったな。お前にはこれがあつたな」

しかし、身体を燃やす焔を呑み込むようにして何事もなく立ち上がったマクバーンは突き破った家屋の壁から顔を出して戻って来る。

「だが、これで判つただろ？」

その太刀は俺が鍛えてやった太刀に過ぎない。そんな太刀じゃ俺は倒せない」

「っ……」

容赦なく言い切るマクバーンにリインは切っ先が焼滅した太刀を構えて歯噛みする。

マクバーンの指摘は尤もだ。

赤ゼムリアストーンは《影の国》で彼が全力を出せない状況でその焔を何度も浴びて概念強化された太刀に過ぎない。

いくら通常のゼムリアストーンよりも耐火性に優れていても、彼の本気の焔の前では普通のゼムリアストーンと何の違いはなかった。

もっともマクバーンも流石にゼムリアストーンを焼滅できたのは意外だった。

「しかし、やっぱ鍛えるもんじゃねえな……これじゃあまともに剣を合わすこともできやしねえ」

リインの太刀を焼滅させたマクバーンは嘆く様に頭を掻く。

「おい、リイン。お前、盟主に会え」

《火焰魔人》の状態をやめたマクバーンは唐突にそんな提案をしてきた。

「いきなり何を？」

「赤ゼムリアストーンだか何だか知らねえが、今のお前にはそれでも役者不足だ……」

俺から盟主に話は通してやるから《外の理》の武具を貰って来い」
「……………は？」

続く言葉にリインは呆氣に取られる。

どこの世界に敵対を表明している相手に武器を提供する秘密組織がいるのだろうか。

「安心しろ。嘘じゃねえ。執行者にはありとあらゆる自由が約束されているからな」

「それでもそれはあまりにも自由過ぎないか？」

組織としてそれはどうなのだろうかと言葉を返すが、ブルブランを始めとして変人の多い結社だからあり得ると思ってしまう。

「さっきも言ったが、お前が用意できる太刀じゃ俺は倒せない…………」

当然、《影の国》からレベルを上げている《鋼》にすら勝てやしないだろうよ」

「……………」

はつきりと言い切るマクバーンにリインは唇を噛む。

「別にこれは善意じゃねえ。お前には期待してんだよ。お前が俺を最高に「アツく」させてくれることをな…………」

だから《幻焰計画》が本格的に始まる前に相応しい武器を用意してくれなきゃ困るんだよ」

「そんなことのためにこのタイミングで仕掛けてきたのか？」

「今回のテロリスト達とは《深淵》が契約を結んでいてな…………ま、あいつの思惑とだいぶ違う方向に進んでいるみたいだが…………」

マクバーンは足元に視線を下ろすと黙り込む。

隙だらけな体を晒すマクバーンにリインは首を傾げる。

「時間稼ぎの義理はこの程度で十分だろ…………ほらよ」

顔を上げたマクバーンは徐に持っていた魔剣をリインの前に投げた。

「…………何のつもりだ？」

「せっかくだ使ってみろ」

「……………は？」

マクバーンの言葉に再びリインは呆氣に取られる。

「貸してやる。お前の太刀を燃やしちまった詫びだ。そして実感しろ《外の理》の武具の力を。そうすれば《空の至宝》に頼り易くなるだろう？」

「っ……」

言外にまだまだ物足りないと言うマクバーンの言葉にリインは唇を噛む。

「ほら、さっさと行け。それとも妹の危機よりプライドの方が大事か？」

マクバーンがそう言った瞬間、リインは躊躇いを捨て突き立った《魔剣アングバル》を握っていた。

「言っておくが、馴れ合うつもりはないし、礼は言わないぞ」

「構いやしねえよ」

捨て台詞しか言えないリインにマクバーンは余裕の笑みで答える。

「っ……」

言い様のない敗北感を感じながらリインはマクバーンに背中を向けて駆け出した。

・＊

悔しいことに《魔剣アングバル》はリインが想像していた以上に力をくれた。

それこそ太刀と剣の違いなど問題にならない程に。

《鬼の力》と重なり、油断すれば向上した身体能力に振り回される程の力を御して暗黒竜と戦う。

手配魔獣を超えた見上げる程の体躯。

暗黒時代に存在していた竜はそれこそ軍隊規模で討伐された幻獣だと聞いている。

戦うなら生身ではなく《騎神》を呼び、身体の大きさとどうしようもない部分を補って戦うべき相手なのだが、それをせずに済んでいた。

「はあっ！」

押し潰そうと振り下ろされた腕を弾き返し、返す刃に孤影斬を乗せて斬る。

しかし刻まれた斬痕は瞬く間に周囲の地脈から力を得て復元される。

本来なら暗黒竜を復活させない術のための霊力だが、復活した今では逆に活力を与えるエネルギー源となってしまうていた。

「暗黒竜は地脈から霊力を供給している……」

800年前は地脈との繋がりをローゼリアさんが断ち切ったらしいけど」

ユミルの受験勉強の合間に教えてもらった雑学を思い出す。

その気になれば気まぐれにゼムリア大陸を飛び回ることができたが、それをしなかったのは帝都へイムダルが七耀脈の集中心点であるから。

そこを陣取り巣とすることで暗黒竜は半永久的な霊力を確保し、無限の再生能力を持って《緋》の騎神と大地の聖獣を苦しめた。

「魔法の助けはない……」

近くにいる《魔法》はエマとこの事態に関わっていると思わしきヴィータの二人。

それぞれの理由でかつてローゼリアが行った補助を望める状況ではない。

「斬るのもまずいだろうな」

今の力とアングボールなら霊脈を断ち斬ることは可能かもしれない。

が、それをやると地脈に悪影響が出る。

「消耗戦しかないのか」

尻尾の薙ぎ払いを躲し、続いて振り回された腕を、匣の足場を蹴って暗黒竜の眼前に跳ぶ。

「螺旋撃っ！」

力の一撃で竜の頭を叩き、這いつくばらせ、さらに空中を蹴り追い続ける。

「螺旋撃っ！」

床に頭を投げ出した状態で二度目の強撃を受けて暗黒竜の頭は床石の中に陥没する。

「もう一撃——」

ダメ押しに螺旋撃を繰り出そうとしたところにリインの死角から黒い焰の火球がリインに襲い掛かる。

魔獣特有の魔法。

その規模は暗黒竜の身体に相当して大きい。

咄嗟にその場から大きく跳躍して火球の射線から逃れる。

が、リインの目の前で火球は直角に曲がり、直撃する。

「くっ……」

アングバールを盾にしたリインは火傷を負った腕に歯噛みする。

しかし、次の瞬間《魔剣》と《聖痕》が結びつき《鬼の力》を増幅させリインの治癒力を高めて瞬く間に体は修復される。

「……………あまり時間は掛けられないな……………」

傷を負う度に《魔剣》は《聖痕》に干渉してリインの身体に影響を与えてくる。

体が修復されるたびに体が変質していることを感じるが、今アングバールを手放すわけにはいかない。

手持ちのまともな武器がそれしかないのもあるが、それだからこそリインは災厄の幻獣の攻撃を受けても生きていられることでもあった。

ゼムリアストーンの太刀では早々に詰んでいただろう。

「くそっ……………」

その事実にはリインは毒吐く。

マクバーンの言っていることは正しい。

おそらく《聖女》も《劫炎》、そして《剣帝》も目の前の《暗黒竜》など問答無用で斬り伏せる力を持っているだろう。

その証拠にレーヴェは単独で古竜レグナートを叩きのめしている。

「自分の弱さくらい分かっているや……………」

それでも退けない理由はある。

ここで背を向ければ、地下墓所を破って暗黒竜が地上に出ることは

容易に想像できる。

そうなれば800年前の災厄が再現されることになる。

「……………どうする……………」

リインは自問自答する。

今のリインには暗黒竜を倒す具体的な方法が《叡智》を持って出せない。

しかし、出てくる答えは二つある。

一つはリン、《空の至宝》に力を願う事。

もう一つはヴァリマールを呼ぶこと、つまりは《鋼の至宝》に頼ること。

「これは人が生み出した業だ……………至宝に頼ってどうする……………」

それはつまらない「意地」かもしれないが、譲りたくはない親心でもある。

それに「暗黒竜」が生み出された理由をリインは《識》ってしまった。

何の変哲もない魔獣が過剰な《呪い》を受けて変質したもの。

それはある意味ではリインが行き着く未来の姿の一つでもあった。

原因は人の業が生み出した《黒》のせい。

《至宝》の力は決して個人が振るってはならないものだど戒めているリインにとって、《灰の騎神》も相克以外では持ち出さたくない力なのだ。

「……………よし……………」

千日手の状況にリインは覚悟を決める。

「だいぶ無茶をするが、付き合ってくれ」

何となしにリインはアングボールに話しかけ、呼吸を整え《鬼の力》を全開にする。

「二の型——《疾風》」

床石を砕く勢いでリインは疾走し暗黒竜に斬りかかり——

「七の型——《暁》」

《疾風》の一刀を《暁》にして一瞬七斬を暗黒竜に刻み込み、走り抜けて——切り返す。

一度の斬撃を全て《暁》にして怒涛の勢いで攻める。
一度、二度、三度、《疾風》の速度を緩めず、交差の度に七斬を繰り出して暗黒竜を斬り刻む。

「ぐっ——」

《魔剣》と《鬼の力》で強化された体が軋みを上げるが、痛みを雄叫びで誤魔化してリインはさらに速度を上げる。

暗黒竜の血しぶきが渦を巻いて舞う。

その中を突っ切り、さらに斬撃を重ねて行く。

腕を斬り、羽を裂き、尻尾を断ち、首を落とす。

再生される兆しがあればさらに斬撃を重ねて傷を広げる。

「っ——!?!」

不意にリインの体が意思に反して強張り、匣を蹴り外す。

その隙を暗黒竜は逃さず、再生途中の傷だらけの尻尾でリインを薙ぎ払った。

「がっ——」

直撃を受けて壁に叩きつけられたリインは息を詰まらせる。

「これは……」

そして《鬼気》を体に巡らせようとして、思うようにそれが動かないことに気が付く。

暗黒竜は動きを止めたリインに勝ち誇る気配を感じさせ、身体を再生させながらリインににじり寄る。

「そうか……これが《緋》とヘクトル大帝を蝕んだ……暗黒竜の血の呪いか……」

アングボールを杖にリインは自身を呪い殺そうとする呪詛に蹲る。

その姿に暗黒竜は勝利を確信し、動かなくなったリインを喰おうと口を開き——

「で、それだけか？」

わざわざ首を差し出して来た暗黒竜にリインは横からアングボールを叩き込んだ。

思わぬ横撃を無防備に喰らった暗黒竜はそのまま横に倒れて困惑する。

「そんな理由のない『憎悪』で俺を惑わせると思っているのか？」
呪毒がもたらす怨嗟の声を聞き流しながらリインは倒れた暗黒竜を見下ろす。

《呪い》の瘴気と共に育ったリインにとって、起源を同じくする《力》は毒であると同時に薬にもなる。

「だが感謝する……おかげで勝ち筋が見えた」

呪いによってできた繋がりによって、光明をリインは見出す。

「我が深淵にて煌めく蒼金の写し身よ……大いなる腕となりて我が左手に集えっ！」

詠唱の言葉に重なってリインの左腕が白い騎神の装甲に覆われる。

その腕に本能的な恐怖を感じた暗黒竜は身を起こそうとするが、それより速くリインが駆け——呪いの繋がりの先——竜の胸板に騎神の腕を突き刺した。

「これが——お前の心臓っ！」

本来の《聖痕》とは違い、精々霊体を掴むしかできないその腕でリインは暗黒竜から受肉の核となって肉体に溶け込んでいたそれを物質界に現出させて掴む。

勢い良く引き抜いた騎神の腕には七色が交じり合った結晶が握られていた。

それを奪い返そうと暗黒竜はデタラメに腕を振るうが——

「滅びろっ！」

暗黒竜が絶叫を上げる中、リインは無慈悲にその結晶を握り潰して砕いた。

眼前に迫った鋭い爪が止まり、塵となって崩れ始める。

「……………勝った」

リインはアングボールを放り出し、力尽きて仰向けに倒れた。

霊体のコアを失った暗黒竜の身体が崩壊していくのをリインは呆然と見守り、哀れさを感じずにはいられなかった。

「せめて生まれ変わったら——」

「ガアアアアアアアアアッ！」

消えていく暗黒竜に慰めの言葉を掛けようと言葉は最後の力を振

り絞った暗黒竜の断末魔によって掻き消された。

「もう良い……もう楽になるんだ」

《黒の呪い》に突き動かされるように体を崩しながらもリインに向かって攻撃をしようとするが、身じろぎをするたびにその体は砂の様に崩れ落ちていく。

そんな姿に一層の憐憫を感じるリインだが——次の瞬間、空気が変わった。

「何だ……？」

「ガアアアアアアアアアッ！」

暗黒竜が咆哮を上げる。

それは断末魔でもなく、敵を威嚇するものでもない。

ただ生きたいという意志を乗せた咆哮。

そしてそれに応えるものがあつた。

『——よかろう』

崩れ落ちていく暗黒竜の背後に光が結実する。

現れたのは《緋》。

崩れ落ち、砂となっていく肉体と魂の全てを光に変えて、暗黒竜

だったものは《緋》に吸い込まれていく。

「そんな……まさか……」暗黒竜が起動者になつたつていうのか!?」

予想もしていなかった展開にリインは声を上げる。

その間にも暗黒竜の全てを呑み込んだ《緋》はその体を内側から膨張させ、肥大化する。

竜の名残を残して変形する《緋》。

騎神の倍となったその体躯は天井を突き破り、地下墓所を崩落させた。

ここに《終末の緋》——エンド・オブ・ヴァーミリオンが顕現した。

55話 緋の帝都Ⅶ

「なん……だと……？」

バルフレイム宮の一室、テロリストへの対処のために作られた即席の司令部にいたギリアス・オズボーンは窓の外に現れたその姿に立ち尽くした。

「エンド・オブ・ヴァーミリオン………何故、貴様がそこにいる？」
鉄血と揶揄される傲岸不遜な鉄面皮は剥がれ落ちる。

もつとも彼の動揺に気付く者はいない。

室内に詰めた憲兵隊はギリアスと同じように窓の外の「竜」に目を奪われていた。

「何だあれはっ!？」

「Ⅶ組」が報告してきた「暗黒竜」という奴なのか!？」

「何て巨大な………いったい何アージユあるんだ!？」

混乱する司令部を他所にギリアスは彼らの勘違いを正す余裕はなかった。

「どういうことだ、イシユメルガ………こんな預言は史書にはなかったはずだ」

虚空に向かって呟くが返事はない。

「預言では暗黒竜が復活する切っ掛けだけだったはず………」

バルフレイム宮の前の運河から飛び出して来たその存在は一見すれば竜にも見える。

巨大な翼に刺々しい尾。何よりもその身に纏う禍々しい気配が否応なく人智を超えた存在だと見る者を畏怖させる。

「このタイミングで帝都を滅ぼすつもりなのか………」

やはりその問いに答える声はない。

「くっ………」

あえて手を出さず、クレア達憲兵隊を主体にして「子供」や部下たちの働きを見守っていたギリアスは突然現れた前世の怨敵を睨み付ける。

「オオオオオオオオオオオオオオッ！」

《緋》はその翼を大きく誇示するように広げ、獣のような咆哮を上げて紅い波動を放つ。

「むっ——」

「何だ!？」

「空間が歪む!？」

「女神様っ!」

《緋》の波動を受けて司令部が——バルフレイム宮の空間が歪み、その姿を変える。

・*

その変貌を外で見っていたヴィータは自分の目を疑った。

「煌魔城……それにどうして《エンド・オブ・ヴァーミリオン》まで顕現しているの?」

地下から戻って来て「暗黒竜」を復活させたと笑って宣い、これからそいつを倒すからサポートしろと馬鹿なことを言った起動者をぶん殴って単身、地下墓所へと突入しようとした足は完全に止まってしまった。

幻覚や夢ならどれほど救いがあるか、本来なら「魔王の凱歌」と《緋》の力によって出現させるはずだった《煌魔城》は《紅き終焉の魔王》の影響で逆流するように出現してしまった。

「っ——」

降り注ぐ紅い波動が帝都へと広がる。

それに触れた者たちは次々に体から靈力を強制的に奪われ、その場に崩れ落ちる。

「どうしてこんなことに——いけないっ!」

簡易結界で身を護り、ヴィータは見上げた《緋》の周囲に様々な武器が出現するのを見た。

・*

「あ……………」

突然体から力が抜けよろめいたクレアは改めて空に、バルフレイム宮だったものの前に浮かんでいる存在に目を向ける。

「竜」のような体躯の人型。

それが何なのかクレアにはその知識はないが、本能的に人の身では諍うことのできない超常の存在だということとは分かる。

その超常存在は周囲に紅い霊力を使って武具を顕現する。

剣、槍、斧、矢、槌。

およそ中世の頃に使われていた武具が合わせて十。

その切先が一斉に地上へと向けられ――

「いけない伏せてっ！」

咄嗟に声を上げるが、それにどれ程の意味があるかクレアの明晰な頭脳でも分からなかった。

何よりも自分も含めてその声に反応できる余力がある者は誰もいない。

武具を飛び道具に、無慈悲な鉄槌が帝都を爆撃する。

その瞬間、剣閃が運河を割り「竜」を武具ごと薙ぎ払う。

そしてそれに遅れて「竜」と同じように運河の中から《灰》が飛び出した。

・*・

「あれは――《灰の騎神》……リイン君か!？」

その光景を競馬場から見ていたオリヴァルトは安堵の息を漏らす。

「くっ……たかが場末のテロリストだと思っていたが、ここまで大それたことをするとはな」

身体から抜ける力に諍う様にミユラーは丹田に力を込めて立ち上がり、オリヴァルトと同じように空を見上げる。

剣閃を受けた《緋》は空中でよろめき、そこに《灰》が体当たりをして帝都から西へ飛び去る。

それにより空気に溶け込むように広がっていた紅の波動が薄れ、虚脱した体に力が戻る。

「また……見ていることしかできないのか」

空の彼方へと飛び去って行く灰と緋を口惜しそうにオリヴァルトは見送り、ふいに影が差したのに振り返る。

「ミュラー」

「どうした……むっ」

遅れて振り返り同じものを見たミュラーは顔をしかめ、すぐに周囲に向けて声を上げる。

「総員、衝撃に備えろっ！」

飛来してくるのは《灰》の剣閃によって弾かれた巨大な槍。

空中で構えられた時の紅い波動こそ掻き消されているが、まだ状態を維持したそれらの武器は無秩序に帝都に降り注ぎ、その一つが競馬場の中央に突き立った。

「やれやれ……夏至祭の催し物とすればいろんな意味で過去最高だね」

「言っている場合か」

軽口を叩く皇子をミュラーは戒めるが、同時に普段と変わらない様子に安堵する。

「他は大丈夫かな？」

「分らん。とにかく一度バルフレイム宮——ではないがドライケルス広場まで戻るぞ」

錯綜した状況にミュラーは少しでも情報が欲しく、そして一刻も早くオリヴァルト皇子を安全な所へ移動させることを決めて——

「待てミュラー」

「今度は何だ」

呼び止めたオリヴァルトに振り向くと、オリヴァルトは競馬場の中央に突き立った槍を指差していた。

「何が来る」

アーツ適正が高いだけあって、オリヴァルトはそこに生じた変化にいち早く察知し、彼の言葉の通りそれは起こる。

顕現した紅い槍から黒い瘴気が流れ落ち、そこから魔獣と魔煌兵が次々と生み出されていく。

「くっ……お前は下がれっ！」

「いやいや、ここは市民を守るため私も戦わせてもらうよ」

「何を言っているお前は丸腰——」

「何の、こんなこともあろうかと。導力銃は忍ばせてあるよ……うん、このセリフ一度言ってみたかったんだよね」

「お前という奴は……」

ミユラーは思わず呆れるが、それ以上は無駄だと悟る。

「お前は後ろから援護だ。憲兵隊っ！ 奴等を競馬場から出すなっ！」

ミユラーの号令に現実感を置き去りにされて呆然としていた憲兵隊員は我に返り、新たに出現した魔獣、そして魔煌兵と対峙した。

余談だが、弾き飛ばされた武具の内、人が密集する場所に落ちそうになっていた武具は地上から立ち昇った黒い焰に焼き尽くされていた。

・*

帝都近郊。

目指したオスギリアス盆地まで辿り着くことなく《灰》は力任せに《緋》に振り解かれる。

「くっ……できればもう少し人里から離れたかったが」

帝都を囲う城壁がまだ見えるが、ひとまず人が密集する場所から遠ざけられたことにリインは安堵する。

『起動者ヨ……説明ヲ求メル。コレハイツタイドウイウコトダ？』

「そんなの俺が聞きたい」
困惑した様子を声音に乗せて尋ねて来るヴァリマールにリインは肩を竦める。

バルフレイム宮の地下に封印されているはずの《緋の騎神》テスト
|| ロツサ。

本来ならアルノールの血筋だけを選ぶように設定されているはずのそれはあろうことか《暗黒竜》を起動者にして目覚めた。

元々はその「暗黒竜」の血によって呪われていたため、理屈は納得できるが理不尽にリインは文句を言いたかった。

しかも、ただの《緋》ではなく、獅子戦役の頃、《灰》と《銀》の二騎掛かりでようやく倒したときされる《紅き終焉の魔王》エンド・オブ・ヴァーミリオンと化している。

「論議は後だ。それよりも今は目の前の敵に集中してくれ」

『……………了解シタ』

「怖いのか？」

『ソノヨウナ感情ハプログラムニナイ』

「そんなことはないだろ？　こうして話して受け答えできている……」

俺に対して不満を感じていたのは感情がある証拠だ」

『ム…………』

「すまないな。本来ならお前にはできるだけ戦わせたくはないが、力を貸してくれ」

「暗黒竜」には使うことを躊躇ったが、相手が「騎神」ならば理論武装をしてリインは《灰》に持たせていた太刀を構えさせる。

「問題はこの太刀でどこまでやれるか、か……」

構えられた太刀はゼムリアストーンの太刀ではない。

材料こそすでに確保しているが、ラッセル博士たちも七アージユの巨人の武器を造るのは初の試みになる。

刀身に掛かる負荷などや強度の問題を洗い出すために通常の鉄鋼で造った試験用のブレードが今持っている武器だった。

「油断だな……まだ戦いが起きるわけないと決めつけていた」

反省を口にして、リインは意識を切り替える。

「できれば様子見をしたいが、時間はない」

周囲の草木が急速に枯れていく様を目の当たりにしてリインは短期決戦を決める。

そもそも太刀に不安があり、「暗黒竜」からの連戦で消耗したリインにはそれ以外の道は選ぶ余裕はない。

「ヴァリマール、あれを使う」

『了解シタ』

弧を描く様に《灰》は《緋》に対して横に動く。

タイミングと間合いを測るようにゆっくりとした足取りで少しずつ位置取りを変える。

その動きに《灰》の二倍の大きさになっていた《緋》は徐に腕を上げ、振り下ろす。

それを合図に《緋》の背後に無数の光が煌き、矢となって《灰》に降り注ぐ。

「っ——いくぞっ！」

リインは臆することなく矢の雨に正面から突っ込む。

逃げ場のない集中攻撃にリインは太刀を振り被りもせず、背面の推進ユニットを全開にする。

無数の矢はそのまま《灰》に突き立ち——霞となって消え、その左右に二体の寸分変わらない《灰》が現れる。

「——ッ!?!」

突然二体が増えた《灰》に《緋》は驚愕してたじろぐ。

その隙に二体の《灰》は太刀の間合いに《緋》を捉える。

「双覇十文字切りっ！」

分け身の騎神と共に繰り出した不意打ちの二つの無想覇斬が《緋》を斬り刻む。

「——っ! 浅いつ！」

しかし、騎神越しに感じた手応えの甘さにリインは声を上げる。

矢の掃射から及び腰だったから、さらには《灰》の間合いを詰められた瞬間《緋》は脇目も振らずに全力で後ろに逃げたから。

ともかく《灰》は絶好のチャンスをものにできなかつた。

「——」

《緋》はその手に魔弓バルバトスを顕現させ、《灰》を狙い撃つ。

放たれた矢は遥か後方まで射貫くと察して《灰》は太刀で斬り払い、再び間合いを詰めようと踏み込む。

が、《緋》は再び弾幕を張って《灰》の接近を阻害するとあからさまに距離を取る。

「お前……それでも由緒正しい『王』の機体なのかっ!?!」

逃げ撃ちを決め込む《緋》にリインは思わず叫ぶ。

しかし返礼は矢の雨だった。

「暗黒竜」の経験からか、とにかく《灰》の間合いに入ることが嫌う《緋》は《千の武具》を駆使して距離を取る。

「くっ——」

思うように接近できないことにリインは歯噛みする。

遠距離攻撃なら《六の型》がリインにもあるのだが、それを騎神でやると余波の被害が尋常ではないため気軽に使うことはできない。

追う《灰》に、倍の体躯を持ちながら逃げ回る《緋》。

騎神戦の初戦にしては何とも無様な追いかけっこになっているのだが、その合間に繰り出される攻撃の数々は凶悪だった。

「千日手か……」

距離を取って安全策を取っている《緋》にリインは何とも言えないものを感じながら呼吸を整える。

体力を回復させたいリインにとってそれは好都合なのだが、とにかく逃げて距離を取りたがる《緋》のせいで戦場が広がってしまっていることに危惧を感じる。

「ヴァリマール……防御結界を展開する。多少の被弾は無視して間合いを詰めるぞ」

方針を決めリインは法術による結界の準備を始め、次の瞬間《緋》は横から砲撃を受けた。

「何だっ!?!」

霊力を溜める体勢を取った《灰》は予想しなかった砲撃に振り返る。「そこまでだっ!」

そこには最新の導力戦車《アハツエン》が横隊を組んでその砲口を《緋》に集中させていた。

「クレイグ中将っ! 第四機甲師団っ!?!」

その戦車の上に仁王立ちに佇むオーラフ・クレイグにリインは目を疑う。

「その声は……その巨人に乗っているのはリイン君なのか!?!」
騎神越しに聞こえて来た覚えのある声にオーラフは驚く。

「その巨人はいつたい……………」

いや、今はいい。それより退くが良い。ここからは我が第四機甲師団、主力部隊に任せるが良いっ！」

雄々しく言い切ったオーラフは部隊に一斉砲撃を号令する。

流石の騎神も戦車の集中砲火に防御の姿勢を取る。

だが、リインはそれを見逃してはいなかった。

「ダメだ。貴方達が敵う相手じゃない！ 逃げてくださいっ！」

リインの叫びも虚しく、《暗黒竜》の名残とも言える尻尾が伸び、戦車部隊を無造作に薙ぎ払う。

「ぬおっ!？」

「クレイグ中将っ！」

戦車の上で仁王立ちしていたオーラフはその衝撃に吹き飛ばされ、《灰》は慌てて彼を空中で受け止める。

「御無事ですか？」

「あ…………ああ、すまない…………」

呆然とリインの呼びかけにオーラフは頷き、リインは乱暴な手付きでオーラフを地上に戻す。

「とにかく離れていてください。あいつは戦車でどうにかなる相手じゃありません」

「しかし、リイン君——っ」

反射的に言い返そうとした言葉をオーラフは呑み込む。

《暗黒竜》の出現と言う眉唾な報告で出動し、実際にそうと言える存在と対峙したが精鋭と謳われたはずの第四機甲師団はその存在に對してあまりにも無力だった。

「すまない…………帝都を頼む」

意気揚々に戦場に駆け付けておいて何もできなかつた恥に体を震わせながらオーラフは《灰》に向かって頭を下げた。

「最善を尽くします」

オーラフの言葉に応え《灰》は《緋》に向き直り、リインは眉を顰めた。

「何を…………」

《緋》はオーラフを助けていた《灰》を無視して、薙ぎ払った戦車の前に佇んでいた。

操縦士達が慌てて逃げていく姿に目もくれず、《緋》は徐に手に持った剣を戦車に突き立てた。

戦車は焔に包まれて塵も残さずに消えた。

それで満足したのか《緋》は《灰》に向き直り、その魔力を解放する。

「なっ——」

《緋》の目の前に靈力で編まれた武具を見た瞬間、リインは咄嗟に《灰》の身体を振り——左肩が爆散した。

「うぐっ！」

機体の損傷を痛みとして共有したリインはその激痛に呻く。

新たに《千の武具》に取り込まれた戦車砲。

吹き飛んだ《灰》の左腕に《緋》は笑みを気配を滲ませ、さらに同じものを展開する。

《緋》の目の前に十数の戦車の“砲”が宙を浮いて横隊を組む。

「グラールスファイアツ！」

一斉射撃をリインは防御結界を展開して防ぐが、怯んでいる間に《緋》の手の一振りで砲は消え、次の瞬間《灰》を取り囲むように再び現れる。

「っ——」

間髪入れずに砲が火を噴く。

一撃の威力を弱くし、連射性を上げた砲撃の雨を全方位から受けることになった《灰》は見る間にその身を削られていく。

太刀は折れ、右腕は手首を失い、足は二つとも粉々に散り、顔が抉られ、胸には風穴も空く。

一種の工芸品とも通じる《騎神》は見る間にただのガラクタに成り果てた。

「なっ……」

それを間近で見るとなったオーラフは絶句する。

「リイン君……」

薙ぎ払われた戦車から中将として部下を救うことも忘れてその場に立ち尽くす。

それは偉そうなことを言っただけと負けただけのことへの呆れではない。

《緋》と《灰》の戦いに無智に入り込み、どんな原理か分からないが「砲」を与えてしまった失態にオーラフは自分への怒りに震える。

「リイン君っ!」

部下のことを放り出してオーラフは朽ち果てた《灰》に向かって駆け出す。

「中将っ! ダメですっ!」

が、そんな彼を部下達が抱き着く様に止める。

「ええいっ! 放せっ!」

身体を張って止めようとする部下を振り解こうとするが、《緋》が歩き出した地響きにオーラフ達はもつれるように転ぶ。

「——くっ……待て、やめろっ!」

胴体だけで立っている《灰》の前に《緋》は立つとその手に魔剣を顕現させる。

刀身だけでも騎神に匹敵する長剣を《緋》は振り被り、止めの一撃を——

「神鬼合一」

その声は異様なほどにその場に静かに響き渡った。

振り下ろされた長剣が《灰》が盾にするように差し出した「左腕」を斬り飛ばし、「右腕」によって下から殴り飛ばされ空を舞った。

「なっ!?!」

目の前で起きた現象にオーラフとその部下たちは目を剥く。

靈感のないオーラフ達でも分かる目に見える程の霊力の迸り。

《緋》を殴り飛ばして転がった《灰》からゼムリアストーンが結晶が繁殖するように蠢いて人型を作る。

一瞬、全身をゼムリアストーンで結晶で覆い尽くされた《灰》は次の瞬間、結晶は砕けて無傷の《灰》が復活する。

「機体が再生した! どういう存在なんだっ!?!」

驚く外野を他所に、リインは額から流れる血を拭い、折れた腕に応急処置を施す。

「まだやれるな、ヴァリマール?」

『起動者ヨ。ワレニ何ヲシタ?』

返ってきた困惑の言葉にリインは簡潔に答える。

『《騎神》が本来持っている自己修復機能に《自己相克》で作った霊力を使ってオーバーロードを起こさせて無理矢理直した。ほとんど賭けだったが成功してよかった』

リンがゼムリアストーンの結晶でヴァリマールの修復促進をしていたのを見ていたからこそその荒業だが、リインが負った怪我まではその範疇ではない。

『……………何故、汝ハ生きテイル?』

「酷い言い草だな…………」

はつきり言って体は死ぬほど痛い。《聖痕》の霊脈がなかったらそれこそ死んでいただろうな」

『通常、人ヒトリニ対シテ霊脈ハ一ツナノダガ…………』

よくよく調べてみれば確かにリインの中には二つの霊脈があり、一つは瀕死と言って良い程に消えかけている。

今更ながら今代の起動者の異常さにヴァリマールはようやく気が付く。

確かにリインの説明は理論上可能な話だ。

安置される場所も霊脈の良し悪しで修復に掛かる時間は変化するので、相応の霊力を流し込めば機体は瞬く間に修復することができる。

だがそれはあくまで理論上の話であり、それを実行した起動者をヴァリマールはリイン以外では知らない。

そもそも最初の分け身さえも、騎神で行った者はいないほどだ。

『リインヨ…………戦域カラノ離脱ヲ提案スル…………』

「何だと…………?」

『汝ノバイタルガ急速ニ低下シテイル…………コレ以上ノ戦闘ハ危険ト判断スル』

「却下だ。俺達の後ろには帝都80万人の人達がいる。ここであいつを倒さなければみんなが犠牲になる」

『ココデ《テストアロツサ》ヲ撃破デキル可能性ハ零ダ……
博士ニゼムリアストーンノ武器ヲ製造シテモライ仕切り直スノガ最善……」

「コノ場合ノ犠牲ハ必要ナ犠牲ダ」

「っ……」

ヴァリマールの提案にリインは唇を噛む。

彼の言葉は正しい。

試験用とはいえ武器を失い、機体を修復させる程に霊力を消耗させたリインは意識がいつ途切れてもおかしくない程に疲弊している。

対して《緋》は大きなダメージを負っているわけではなく、新たに得た「魔砲」に万全ではないリインは対処できる自信はない。

しかし、それでも犠牲になる80万人。その中に自分の大切な者が含まれている以上、リインに退く選択肢はなかった。

「………勝算があれば良いんだな？」

『リイン……？』

リインはヴァリマールに乗り込む際に一緒に持ち込んだ《魔剣アングバール》に視線を送る。

その持ち主が指摘した通り、自分の力は誰かを守れる程に強くなかった。

諦観を胸に抱きながらリインは姿はないが、見守っているはずのリンの名前を呼ぶ。

「リン……っ……」

その先を言うのに思わず躊躇う。

クローゼの祖先が《至宝》に頼らない英断をしたのに、それを自分が破ってしまうことの抵抗。

リンもノイも超常存在であることは認めるが、その特別を忘れて普通の人間の様に過ごして欲しかった。

一度の切っ掛けは二度目の選択をハードルを下げる。

だからと言って、80万人を見捨てる選択をリインが選べるはずも

なかった。

「リイン……」

そんな葛藤をするリインの傍らにノイが不安そうな顔をして現れる。

「ノイ、危ないから《箱庭》に戻っていなさい……」

大丈夫だ。ちゃんとするから」

ノイにとって自分は異界と現世を繋ぐ唯一の窓。

その繋がりを失うことは永劫の闇の中でまた一人になること。

それをさせないために、リインは勝手に死ぬわけにはいかない。

「そうじゃなくて……」

「話は後で聞く、だから早く《箱庭》に——」

一秒でも彼女を戦場にいさせたくない。

そんなことを考えながら、リインはいつそ強制的に《箱庭》へ押し込もうと手を伸ばす。

「わたしはっ！」

しかし、そんなリインをノイは声を上げて拒絶した。

「わたしには戦える力なんてないけど、でもわたしだってリインの力になりたいんだよ」

「ノイ……」

「わたしもリンも、ルフィナもみんなリインに感謝している……」

リインはわたし達に沢山のものをくれた。だからわたしたちにリインを助けさせて」

「あ……」

初めての、こちらの意志を無視する我儘にリインは唾然とする。

「……………そうか……」

それはノイだけでなく、リンの意志でもあるのだろう。

その事実に関心は胸に込み上げてくるものを感じずにはいられない。

ただ乞われるだけの存在だった彼女たちが、自分の意志で与えたいと言うことの意味。

その成長に喜ばずにはいられない。

「そうだな……」

強張った肩の力を抜いてリインは笑う。

「では、何が必要ですか？」

すかさずノイとは逆側にリンが現れて、無表情のまま待っていたとばかりに顔を近づけてくる。

「いや、今は必要ない」

しかし、リインは迫ってくるリンの要求を拒絶した。

「え……？」

「あの程度の相手、俺だけで十分だ。リンの『力』は《銀》や《黒》、《劫炎》と戦う時までとっておいてくれ」

先程まで必死の形相で戦っていたリインは嘘のように晴れやかな表情で言い切った。

「ですが、勝算は——」

「あるよ……リンに頼らないで済む『力』がまだ俺にはある」

《空の至宝》の力を使うことを受け入れたが故に開けた選択肢。

何とも皮肉なことだとリインは苦笑して、目の前の端末に手を伸ばす。

「第一オーブのデータを破棄」

『リイン!』

突然のリインの暴挙にヴァリマールは声を上げる。

ギリギリの戦いをしているのに、オーブによる機体の強化を捨てるリインの暴挙を理解できずに困惑する。

「《匣の聖痕》をベースに《空の至宝》の秘蹟プログラムを限定再現——
—第一オーブへと転写」

自分の中の《聖痕》を書き換え、同時に端末に指を走らせリインは即興でプログラムを組む。

脳裏に思い浮かべるのはリベールで旅をした時に事件の中心に存在していた黒のオーブメント。

プログラムを組みながらリインはヴァリマールを操作して、その腕を天高く掲げる。

『——』

復活した《灰》を理解できず遠巻きにしていた《緋》はその動きに身構える。

「オーバルアーツ——《ゴスペル》」

ヴァリマールの掌の上に生まれた黒い球体から黒い光の波紋が広がり、それは帝都にまで届いた。

・*

「なっ——!?!」

突然晒された見覚えのある黒い光にオリヴァルトは驚愕する。

「オリビエツ！」

同じくそれを知っているミュラーは最悪のタイミングで起きたその現象に振り返る。しかし——

使えないと思っただけでも咄嗟に引いてしまった引き金により、導力の銃弾は何の問題もなく銃口から発射され、魔獣を撃ち抜いた。

「あれ……?」

「《導力停止現象》ではなかったのか?」

「違うようだね……あれ?」

ミュラーの言葉に頷いて、オリヴァルトはもう一度首を傾げる。

槍の瘴気から生み出され続けていた魔獣や魔煌兵の増援が止まった。

それどころか、黒い光にさらされた魔獣たちは不自然に体を硬直させ、魔煌兵は膝を着いて元の瘴気へと霧散していく。

そしてそれは競馬場の真ん中に突き刺さっていた槍も同じ様に霧散して消えた。

・*

「これは……何が起きているの?」

大通りに突き立った剣が黒い光にさらされた瞬間、垂れ流していた瘴気が止まり、大通りを埋め尽くしていた魔獣たちも同じ光を受けて

次々に倒れていく。

現れた「暗黒竜」から始まり、導力コンピューター並と呼ばれていた頭脳でも何が起きているのかクレアにはまるで分からない。

ただ一つ言えることは帝都の魔獣、魔煌兵の問題はこの瞬間、解決したと言うことは確かだった。

「私たちはいったい何を見ているの？」

その場に彼女の同僚がいたら、意気揚々にこう答えていただろう。

『これが超帝国人の真の力だ』、と。

・*

「何だと……？」

今日で何度目になるか分からない驚きをギリアスは感じていた。

建築物を透過し、先の「紅の波動」がバルフレイム宮を「煌魔城」に塗り替えた様に「黒の波動」が「煌魔城」をバルフレイム宮へと塗り替える。

「今のはレクターの報告にあった《導力停止現象》の光のはず……」

しかし、そのことに気付いているのはその場ではギリアスだけで導力通信からは帝都中の魔獣が突然消滅したという報告が矢継ぎ早に送られてくる。

そして一番気になる主戦場からは、第四機甲師団が全滅したと報告が入って来ただけで、その後の報告はない。

「これがお前の預言の通りだと言うのかイシユメルガ？」

やはりその呼びかけに答えは返ってこない。

出来る事なら今すぐにでも宰相の立場を降り出し、《灰》と《緋》の戦いを自分の目で見届けたいギリアス・オズボーンだった。

「む……あれは……」

と、郊外の空を眺めるしかなかったギリアスは視線を下ろして、それを見つけた。

・*

「これはどういうことなの？」

とある民家の屋根の上でヴィータ・クロチルダは更なる混乱に見舞われた。

「あれは《ゴスペル》の光のはず……なのにどうして《導力停止現象》が起きてないの？」

「おやおや、使徒ともあろう御方が不勉強だね」

その眩きに答えたのは、気配を感じさせずにそこにいた《怪盗紳士》だった。

「ゴスペルが《導力停止現象》を引き起こしたのはあくまで結果に過ぎないのだよ……」

現に我々はオーブメントの性能を向上させる実験を行っているからね……

いやそもそも《リベル・アーク》があつた時には導力の概念すらなかったのだから、当然の話だ」

「それなら今の光は何だつて言うのよ？」

「ふむ……たしか《博士》曰く、《導力停止現象》は至宝が外の脅威を排除するための防衛機能として“導力”を奪うように設定したに過ぎないと考察していたな……」

ならば話は簡単だ。その設定された“導力”の部分の別のものに置き換えれば、それは別の《停止現象》となるということだ」

「別の《停止現象》……まさか——」

「くくく……ああ、わざわざ帝都に戻って来た甲斐があつたというものだ！

さあ、リイン・シュバルツァー！ 君は私にどんな奇蹟を見せてくれるというのだっ！」

帝都の至る所から、黒い光にさらされて受肉できず不安定な姿しか保てなかった魔獣たちは、その体が元の“瘴気”へ還って行く。

立ち昇った“瘴気”はうねりとなって、一つの方角へと流れていく。

「これ以上何が起るって言うのよ……」

「フッフ、そんな顔をしてはせつかくの美しい顔が台無しというものだ……」

ああ、安心すると良い。『暗黒竜』と『超帝国人』との素晴らしい戦いはこの私が六台のオーバルカメラを使ってしっかりと記憶してある……

なのでせつかくだ。この後魔女殿の仕事場で上映会と洒落込もうではないか」

「いやあああつ！ 見たくない！ 助けておばーちゃんっ！」

ブルブランの提案にヴィータは耳を塞いで悲鳴を上げるのだった。

・*

『ムウ……』

「どうしたヴァリマール…… 『巨大なる騎士』の力はその程度か？」

『呪いの瘴気』を設定して駆動した導力魔法《ゴスペル》によって集められた帝都に蔓延していた『瘴気』はヴァリマールの頭上に巨大な球体の塊となって押し掛かっていた。

リインの挑発の言葉にムキになる様にヴァリマールは全身の霊力を振り絞り『瘴気』を支える。

もともとヴァリマールに掛かっている負荷はリインも感じている。

挑発的な言葉はやせ我慢でしかない。

そして当然『瘴気』を集めて終わりではない。

「第二オーブのデータを破棄……」

《腕の聖痕》をベースに《焰の至宝》の秘蹟プログラムを限定再現、オーブへ転写……

『瘴気』の一部を浄化してヴァリマールの霊力へ変換」

膨張を続ける『瘴気』を無害化してヴァリマールの活力に変える。

「第三オーブのデータを破棄……」

《槍の聖痕》をベースに《大地の至宝》の秘蹟プログラムを限定再現、オーブへ転写……

『瘴気』を物質素子に変換。形状を太刀に固定」

大きく腕を広げて「瘴気」の塊を支えていたヴァリマールは叩き潰すようにその腕を頭上で合わせる。

両側から潰された黒い「瘴気」は漆黒の刃となり——何故か太刀をイメージしたはずなのに「漆黒のアングバル」がヴァリマールの手に握られる。

「これで……文句はないな、ヴァリマール？」

熱を持つ《聖痕》の痛みを歯を食いしばって耐えながらリインは尋ねる。

『ウ、ウム……』

「リ、リイン……」

「無茶をし過ぎと判断します」

「大丈夫だよ」

不安そうな顔をするノイとリンにリインは笑顔を作って応える。

正直、彼女たちに向ける優しさの一割でも自分に向けて欲しいとヴァリマールは思った。

「さっさとこいつを倒して終わらせるぞ。ヴァリマールッ！」

『……応っ』

意気込むリインにヴァリマールは気持ちを切り替えて強く頷く。

対する《緋》は恐慌状態に陥っていた。

原型を留めない程に壊してやったのに何事もなかったように復活してきた《灰》。

そして帝都に残した霊力確保の端末はどんな原理なのか全て潰され、「黒い波動」によつて魔王の姿を維持することも難しくなる。

さらには一目でやばいと思わせる「暗黒剣」を作り出した。

『オオオオオオオオッ!!』

臆する気持ちを奮い立たせるように《緋》は咆哮を挙げて、その両手に魔剣を顕現させる。

先程のような逃げ撃ちはもはや通用しないと悟ったのか、顕現させていた「魔砲」を霊力に戻して二つの剣に集中させる。

『オオオオオオオオッ!!』

《緋》に張り合う様に《灰》もまた咆える。

記憶データに蘇った前回の屈辱。

《銀》に守られてたまたま生き残ってしまった前任者の無念を晴らすために、何よりこれ程の御膳立てをしてくれた起動者に相応しい騎神であるようにプログラムの感情を昂らせる。

《灰》と《緋》の霊力が迸って立ち昇る。

『ッ——！』

「っ——！」

動いたのは同時。

そしてその巨体から《緋》が先手を取り、二つの魔剣を振り下ろす。対する《灰》は振り下ろされる巨大な剣に真つ向から「暗黒剣」を迎え討つ。

「七の太刀っ！ 暁天」

一瞬九斬の連撃が二本の魔剣を砕き、その刃は《エンド・オブ・ヴァーミリオン》の身体を斬り刻む。

『ウオオオオオッ！』

しかし、《緋》は魔王の体を脱ぎ捨てて跳躍し、《テスト・ロツサ》の姿で最後の魔剣を振り下ろす。

《灰》は振り抜いた「暗黒剣」の刃を返し——

「——二連っ！」

二度目の「暁天」で《テスト・ロツサ》を迎撃する。

一刀が魔剣を叩き折り、二刀が右脚、三刀が左脚、四刀が右腕を斬り、五刀が胴体に寸断——半ばで残った左腕を「暗黒剣」を体に埋めながら止めた。

そして刃が止まったその瞬間、《テスト・ロツサ》の背後から「魔王」の名残の剣尾が伸びて、《灰》の胸を貫く。

「うぐっ！ 肉を斬らせて骨を断つか……トカゲのくせに」

胸に走る痛みを歯を食いしばってリインは耐えるが、《緋》は最後の力を振り絞る様に自分と《灰》の周囲に八振りの魔剣を顕現させて一斉に《灰》に突き刺した。

「っ——この程度で……負けられるか……」

魔剣によって体を地面に固定された《灰》は「暗黒剣」を振り抜く

ことはできない。

ならばとリインは「暗黒剣」に焰を宿して《緋》を焼く。

それに負けじと左腕以外を失った《緋》もまた突き刺した剣尾や全身を刺し貫いた魔剣に焰を宿して《灰》を焼く。

点された二つの焰は瞬く間に燃え上がり、互いを呑み込み合ってより大きな「焰」へと化する。

「守るんだ……今度こそ……俺が——っ！」

焰は《灰》を熱して、焼いて、溶かす。

焰は《緋》を熱して、焼いて、溶かす。

その熱量が際限なく高まり、地表さえも焼き一帯を溶岩の大地へと変貌させる。

「退避っ！ 総員、退避っ！」

負傷者を抱え、無事な戦車に全員を乗せたオーラフはその焰から一目散に逃げる。

限界まで膨れ上がった焰は巨大な火柱となって極大の爆発を引き起こした。

そして焦土と化した大地には《灰》だけが残った。

56話 緋の帝都Ⅷ

7月26日。

その日は帝都の夏至祭の初日。

三日間の内、皇族が参加することもあり初日が最も盛り上がるその日に起きたのは帝都史に残る程の大事件だった。

《帝国解放戦線》と名乗るテロリストによる皇族の襲撃。

アルフィン皇女殿下を誘拐した彼らが続けて引き起こしたのは一昨年の“リベールの異変”に勝るとも劣らない災厄だった。

およそ1000年前、ヘクトル大帝に討伐され、250年前の獅子戦役の際、オルトロス偽帝によって復活しドライケルス大帝によって討伐された《暗黒竜》ゾロアグルーガ。

その二度目の復活に華やかなはずの夏至祭は一転して“死都”と化した。

生気を奪われ倒れる市民。

“瘴気”によって溢れかえる魔獣に巨人。

正規軍が奮闘するも、途切れることなく発生する魔獣に押し切られる寸前にまで追い込まれた。さらには“暗黒竜”が撒き散らした“瘴気”に当てられて発狂する者もいた。

それはまるでかつて北の大地に降り掛かった災厄“塩の杭”に勝るとも劣らない災害。

もつとも“塩の杭”は天災であり、帝都に降り掛かった厄災はテロリストが起こした“人災”だった。

しかし、死都と化した帝都を救ったのもまた、伝説の存在だった。

『焰と共に輝き甲冑をまといし巨大な騎士』

それは何処からともなく現れ、《暗黒竜》を打ち倒し光を持って帝都に溢れた魔獣を消し去った。

まさしく帝国の各地に伝わる“巨いなる騎士”。

役割を終えて動かなくなった“巨いなる騎士”は第四機甲師団基地の一角に運び込まれ、二日目の夏至祭はその雄姿を一目見ようと帝

都中から人が集まっていた。

・*

「押さないでくださいっ！ 押さないでくださいっ！」

本来なら三日、夏至祭の初日で終わるはずだった《特別実習》は夏至祭終了までに延長され、ツールズ組は戦後処理に駆り出されていた。

“灰の騎神”を一目見ようと長蛇の列を作る民衆にアリサは何度も叫ぶ。

彼らの気持ちは分からないわけではない。

成す術なく生気を奪われて死を身近に体感してしまった民衆がそれを救ってくれた救世主の存在に焦がれるのは当然の帰結であり、今もドライケルス広場に設置されたモニターにループして放映されている昨日の騎神戦の映像がそれに拍車を掛けていた。

「こちらの誘導に従って、ゆつくりと進んで、立ち止まらないでください」

もしかすれば夏至祭の初日、それぞれの行事に参加する皇族達を観ようと集まった時よりも多いかもしれない人数。

エマが目印の旗を担いで長蛇の列を誘導している。

ラウラが声を上げて、押し合う人達に呼びかける。

フィーが人の合間を縫って駆け回る。

本来なら騎神を人目に付かないようにするのが最善なのだろうが、肝心の起動者であるラインが意識を失った状態だったことと、騎神を隠して置ける場所が帝都になかったことがこんな状況を作っていた。

「フェンス越しだって言うのにすごい人ね……」

人を誘導しながらアリサは“灰の騎神”を横目で見る。

今回の特別実習の前に旧校舎で見せてもらった暗黒時代に作られた大型機械人形“灰の騎神”ヴァリマール。

見せてもらった時はただの大きな人型の作業機械程度にしか思っていなかった物が、実際はここまでの存在だとは思ってもみなかった。

た。

それこそ本の中から飛び出て来たのではないかと思う「英雄」。
それに乗って「暗黒竜」を倒したのがリインだと言うのがアリサ
にはまだ信じられなかった。

「……………街に溢れた魔獣だつてリインが全部倒したようなものだし
……………私、何してるんだらう……………」

ヴァリマールを回収することでも一騒動があり、その存在を隠すこ
とはできなかった。

テロが起きた夕方に戦闘は終わったというのに、回収できたのは今
朝の明け方。

一晩中燃え続けた焰に魔獣への対処が必要なくなり駆け付けた憲
兵隊は成す術なく、溶岩と化した大地を遠巻きに見守ることしかでき
なかった。

煌々と燃え続けた焰は一晩掛けてようやく静まり、その中央に残さ
れたのはリインが乗っていた《灰》だけだった。

その中から、何故かできたエマによる外部操作で騎神から降ろされ
たリインの有様は酷いものだった。

夏服の白いシャツを真っ赤に血で染めて、折れていた腕を縛って固
定して、生きているのが不思議なくらいの重症だった。

今頃は帝都病院でテロで負傷したアンゼリカとクロウの二人と一
緒に入院しているだろう。

「本当に……………私は……………」

一昨年のリベールで会った時は同じ家出をした者同士だったはず
なのに、自分は何も変えられず、リインは英雄となってしまうた。

「別に私は英雄なんかになりたいわけじゃないけど……………」

どうしてここまで差ができてしまったのか、何度目になるか分から
ない自問自答を繰り返す。

「あの、すみません。列の最後尾はこちらでしようか?」

「……………はい。ここに並んで……………」

話しかけられたアリサは慌てて顔を上げ、息を呑んだ。

その人物はアリサが見間違えるはずもない……………」

「父様……」

8年前に事故で亡くなったはずの父がそこにいた。しかし……

「ふむ、どなたかと間違えているんじゃないかな？ 私はアルベリヒ・ルーグマン。まあ、確かに妻と娘がいるがね」

驚いて固まるアリサに彼はそう答えた。

・*

一時避難所での支援を行っている女性陣に対して、男子陣は帝都を巡回して残敵が万一にも残っていないか見回っていた。

「いったい僕達の戦いは何だったのだろうか？」

ただ黙々と歩いてきたマキアスが唐突にそんなことを呟いた。

「そうだね……結局リインが全部解決しちゃったんだよね」

半壊した家屋や、魔獣が横転させたトラムに視線を移しながらエリオットはそれに頷く。

その後、アルフィン皇女殿下とエリゼを無事に地上の憲兵隊に引き渡したが、その後程なくして「暗黒竜」ではない「竜」が現れ、「灰の騎神」も現れた。

VII組ができたことはリインへの援軍ではなく、憲兵隊に混じったの防衛線だった。

だが、それも無限に湧いて来る魔獣に成す術なく押し切られるところで「黒い波動」によって救われた。

「それに君も見ただろリインのあの姿を」

「うん……普段と纏っている気配が全然違っていて……まるで結社の「剣鬼」みたいだった」

マキアスの言葉にエリオットは頷いて、あの時の恐ろしい覇気を纏っていたリインのことを思い出して身震いする。

「とういか間違いないか」「剣鬼」の正体はリインだろ……僕達は騙されていたんだっ！」

「あ、あの……マキアス……」

ヒートアップし始めたマキアスにクリスは恐る恐る声を掛ける。

が、罰が悪く小声になった声は簡単に無視される。

「舐められたものだな……俺達は今までずっと手加減をされていたというのか」

「いや……ユースス……」

不愉快そうにユーススは吐き捨てるが、そもそもゼムリアの太刀を抜かせることが出来ていなかった時点で手加減されていたのは分かっていたはずではとクリスは思う。

「でもリインの正体が結社の『剣鬼』なら『リベールの異変』ももしかしたらリインが……」

皇族に近付いたのも帝国で『異変』を起こすためだったら、これってまずいよね？」

「エリオット……それは……」

確かにそう考えてしまっても仕方がないが、邪推が過ぎるというものだ。

「考え過ぎではないのか？」

「『剣鬼』の行動を思い出してもユーススの兄上に雇われていたらしい、鉄道的事件も助けてくれた……」

かく言う俺も『剣鬼』には助けられている」

「ガイウス、良かった……」

不信感を大きくする三人に対して落ち着いているガイウスにクリスは安堵する。

「だが、それならどうしてリインはそのことを言わなかったんだ？」

言うタイミングは今までいくらでもあったはずだ……

それにあの時の『剣鬼』は僕達を本気で殺そうとしていたぞ！」

頑なに疑うマキアスにクリスは顔をしかめて言い返す。

「そんなのリインさんから信用度が足りてないだけの話じゃないか……」

本気で殺そうと仕向けたのはルーファス卿のはずだし、そもそも殺す気の実践訓練なんて当たり前のことだろう？

それに僕はあの時点で正体を明かされていたら、余計に足を引つ張っていたよ」

鉄道ジャックの際に遭遇したのが「剣鬼」ではなくリインだったら。

おそらく大義名分を得たと嬉々として自分たちはリインに同行して足を引つ張っていただろう。

「それは……そうかもしれないが……嘘をつくような人間は信用できないだろう？」

「なら僕もマキアス達に嘘を吐いていることがあるよ」

クリスの返事にマキアスは虚を突かれたように口ごもる。

「だけど別にそのことは必要だと思っっているし、僕が抱えている事情をまだみんなに説明することはできない……」

ならマキアスは僕を信用できないって言うの？」

「そ、そんなことは……ないが……」

「リインさんが「剣鬼」だったことは確かに驚いたけど、だからって僕達が陰口を言うのは筋違いだよ……」

特別実習の時もそうだけど、今回だってリインさんは帝都を護ったんだ。それとも「剣鬼」だったというだけでリインさんを君たちは信じられなくなるの？」

「……そうだな。すまなかった……いろいろあり過ぎて混乱していた」

クリスの指摘にマキアスは重いため息を吐いて自分の非を認めた。

それを切っ掛けに漂っていた重い空気がわずかに晴れる。

「それにしてもお前はリインの「変身」とやらには驚いていなかったようだが、それなら「剣鬼」のことはすぐに気付いたんじゃないの？」

ユーシスの指摘にクリスはぎくりと肩を揺らした。

「い、いや……それはその……髪が白くなるのは知っていたけど……」

長くなるのは知らなかったと言うか。今思えばどうして気付かなかったのか僕も不思議なんだけど」

「剣鬼」という名前を拝命したことは教えられていなかったが、そもそもその名前を送られた原因が自分にあるためクリスはしどろもどろに言い訳を探す。

「それにこのことで僕はリインさんに何も言えないから」

「それってどういうことなの？」

「い、今はそんなことよりも魔獣の残党探しに集中しよう」

聞き返して来るエリオットにクリスは取り繕って歩き出して――
そこに声が掛けられた。

「ああ、その制服。丁度良かった」

「むっ……確か帝都美術館の館長だな」

慌てた様子で声を掛けてきた男にユースは一日目の実習課題で
会った男性だと思いつく。

「何かありましたか？」

「ええ、実は今回の事件で『聖女の槍』が盗まれてしまったんです」

「『聖女の槍』が……？」

「憲兵隊に連絡はしたんですが、帝都はこんな有様ですぐに動けない
と言われて、どうしたらいいか困っています」

「火事場泥棒か……最有力の容疑者は『帝国解放戦線』だろうか……」

一同が思い浮かべたのはとある女剣士。

「いや、まさかそんなデユバリーさんがそんなことを……」

「クリス、僕達はまだ何も言っていないが……まあ、彼女は『槍の聖女』
の熱烈なファンのようだからもしかしたら……」

「き、決め付けは良くないよ……まあ、あそこまで熱狂的なファンは珍
しいけど」

「確かに彼女は聖女グッズのほとんどを購入していったが……まさか
……」

「元々獅子戦役の時もこんな火事場泥棒が現れて紛失したらしいから
な……あり得ない話ではないだろう」

クリスがフオローするもマキアス達はあり得ると納得してしまう。

「何か手掛かりになるようなものはないんですか？」

「それが『聖女の槍』以外にもいくつか盗難があつて……」

「とにかく博物館に行ってみましょう」

そうしてクリス達は乞われるがまま盗難事件の犯人探しを行うこ
とになった。

「聖女」の槍以外にもいくつかの武具が盗難されていた。

中にはアルゼイド家の《ガラシヤール》もそこに含まれていたのだが、それは帝都に来ていたヴィクターが事件の際に持ち出していたためといった顛末があったものの、「聖女の槍」を始めとした盗難品は無事に見つけることが出来た。

・*

「ええいつ！ ドライケルスの亡霊が忌々しいっ！」

バルフレイム宮の一室でクロワール・ド・カイエンは憤慨してテールを叩く。

夏至祭で行われる帝都を中心にした大貴族の社交界に出席する名目でカイエンは夏至祭の初日の夜、「暗黒竜」が程良く暴れた所に駆け付けるはずだった。

自分の指揮の下で、《蒼》を旗印に新兵器をお披露目して颯爽と「暗黒竜」を討ち滅ぼし、帝都の求心力を得る。

それがテロリストと決めた計画だった。

だが蓋を開けてみれば、帝都は目立った破壊の痕もなく、目覚めた《灰》によって「暗黒竜」と巷では言われている《緋》が討伐されただけだった。

「竜殺し」の武勲は掠め取られ、得られるはずだった名誉を取りこぼしたクロワールは憤慨する。

「何が「灰の英雄」だっ！ 愚王の器風情がカイエンの覇道を邪魔するか！」

叫ぶことで苛立ちをクロワールは紛らわせる。

今もなおドライケルス広場では《灰》と《緋》の戦いが上映されているが、その様もカイエン家が持つべき器を晒し物にされているように苛立ちを募らせる。

「心中お察しします閣下」

人払いをしていたはずの室内にクロワール以外の声が唐突に響く。

「おおっ！ アルベリヒか、してどうだった？」

自分以外の人が現れたおかげなのか、クロワールは荒げていた息を一瞬で整え、威厳に満ちた風格を纏ってその男に尋ねる。

「ええ、近くで見えてきました。思った通り《緋》は《灰》の中に封じられているようです……」

ですが閣下のお考え通り、分離は可能でしょう」

「そうか、そうであろう」

望む答えが返って来たことにクロワールは先程までの憤りを忘れて満足そうに頷く。

「ですが、やはり儀式には“城”を使って場を整える必要があるでしょう」

「そうか……ならばこのまま予定通りか……」

元々今回の策はテロリスト達が上伸してきたもの。

当たろうが失敗しようが、クロワールにはどちらでも良かった作戦でしかない。

「奴等も目を掛けてやったが、この程度だったか……元々は使い捨ての駒に過ぎないのだから構わんがな」

考えようによっては今回の事件も悪くはないかもしれない。

憂国の士を気取るのは良い。

だが、限度を弁えない“籠”の外れた思考にクロワールは呆れていた。

奴等は“鉄血宰相”を殺せるならば帝都を死都にしても構わないと思っっているのだろう。

その思考はこの次の作戦でも容易に読み取れる。

しかし、クロワールの考えはそこからずれている。

“鉄血宰相”と“アルノールの血筋”は排除したい。だが、全てが終わった後に自分が統治する帝都を滅ぼされては困る。

「彼らについては問題ないでしょう……今回の失態で狂犬に首輪をつけられたと思えば良いでしょう。元々、こちらが失うものなどないのですから」

「ふむ……」

「それにこれはまだ確定した情報ではありませんが、《緋》から“暗黒

竜”の呪いが取り除かれている可能性も出てきました……

つまり閣下が乗ったとしてもその尊き御命を削ることなく、起動者になれるかもしれません」

「おお、そうか」

アルベリヒの推測にクロワールは今度こそ機嫌を直す。

皇帝家の血筋はクロワールにも流れており、《緋》の起動者になる資格は存在している。

だが、それをするには《緋》を蝕む“暗黒竜”の呪いが邪魔だった。起動者になって莫大な“力”を得ても“命”を削られてしまえば本末転倒。

故にクロワールは自分が起動者になることは考えず、皇族の子供を利用するつもりでいた。

が、その“命”を削る懸念がなくなったのならば、回りくどいことをせずに帝国の支配者となれる。

「フフフ……どうやら運が向いてきたようだな……」

ほくそ笑むクロワールはアルベリヒの愉悦を含んだ笑みに気付くことはなく、皇族誘拐計画から《灰》誘拐計画を考えるのだった。

「ああ、それから閣下。後でこちらを“彼”に渡しておいていただけるとでしょうか？」

そう言ってアルベリヒが取り出したのアタッシュケースに納められた三つの宝珠だった。

・*

「まさか、このような奇蹟が起きるとはな」

揺蕩うまどろみの闇の中、厳かな声が聞こえて来る。

「かつて《黒》により汚され、自らを星杯に封じ込めていたが……

よもやあのような形でその穢れを払うことが出来ようとはな。これが人の子の可能性というものか」

一方的な語り掛ける言葉には深い尊敬の念が込められていた。

「フフ、この体はすでに腐り切ってしまったが……」

よくぞ、我が存在を解放してくれた。おかげで“力”だけでもこの世に残すことはできそうだ」

その声は力こそ弱々しいが満足そうに言う。

「このような物で感謝の気持ち伝わるか自信はないのだが、小さき者よ……受け取るが良い」

そう言うとその存在から何か温かな“力”が右手の中に集まる。

「さらばだ……超帝国人よ」

「ちよつと待てっ！」

語り掛けるその存在に声を上げて抗議した瞬間、リインは目を覚ます。

そして、そこには目を閉じて近付いて来るオリヴァルト皇子の顔が視界一杯にあった。

「破甲拳ツ!!」

右手で持っていた“琥耀石”を握ったままリインはその横面を殴った。

「ぎゃふん！」

「貴方という人はっ！ 貴方という人はっ！ 二年前からほんつとうに何も変わってないなっ！」

殴った勢いのまま体を起こしたリインは叫ぶ。

と、オリヴァルトがリインの目覚めに次の言葉を言うよりも早く、病室の扉が勢いよく開いた。

「兄様っ！」

病室に飛び込んだエリゼは目を覚ましたリインの姿を見るとその場にへたり込む。

「ああ……」

泣きはらしたその顔にリインはバツを悪く頭を搔く。

「また心配をかけたみたいだなエリゼ。ごめん」

57話 それぞれの思惑

7月30日。

夏至祭が終わった翌日。

トールズ士官学院、特別実習班は教官のサラを含めてバルフレイム宮の謁見の間に呼び出されていた。

絢爛でありながら重厚極まる空間に列席しているのはリイン達だけではない。

右を見れば、オズボーン宰相、レーグニッツ帝都知事、クレイグ中將、アルゼイド子爵。

左を見れば、カイエン公爵、アルバレア公爵、ログナー侯爵、ハイアームズ侯爵、ルグイン伯爵。さらにはルーファスの姿もある。

そして正面の玉座に座るのはもちろん、現皇帝ユーゲント三世。その隣にはプリシラ皇妃。そして少し下がった位置にアルフィン皇女とオリヴァルト皇子が控えている。

帝国の頂点に立つ者達の顔ぶれに、特別実習班は身内がいるラウラやユーススでさえも緊張に身を固くしていた。

「この度の諸君らの働き、誠に大義であった」

厳かな声で緊張し切った彼らにユーゲントは語り掛ける。

「もつたいない御言葉です」

しかし、返って来たのは堂に入った言葉。

本来なら隊長であるトワが代表として受け答えをするべきなのだが、事前に無理だと継りつかれ皇帝陛下への受け答えはリインに一人することになっていた。

「我々が果たした役割は微々たるものでしょう……」

憲兵隊や近衛隊の方々、彼らの働きなしでは市民にもっと大きな被害が出ていたでしょう」

年始に会った時も感じたが、周りを立てるリインの物言いにユーゲントは気分を良くする。

普通の貴族なら声高に成した偉業をここぞとばかりにアピールし

て来るのだが、それをしないリインはある意味ユージェントにとっては新鮮だった。

「だが貴殿が行ったことは誰にも真似できたものではない……」

何か望むものがあれば褒美としてくれてやろうと思っているが、何かあるか?」

ユージェントの提案に謁見の間の空気が張り詰める。

個人を名指しし、皇帝直々に褒美を問う。

地下墓所から現れた『暗黒竜』の討伐。

それに加え、その暗黒竜を取り込んだ『緋の騎神』の討伐。

ヘクトル大帝とドライケルス大帝の偉業を同時に達成したリインへの報償を考えれば当然の言葉だった。

「そのことについて、陛下には先に謝らなければならないことがあります」

リインは顔を伏せたまま、そんなことを言い出した。

「ふむ……言ってみよ」

ユージェントは心当たりがなく促す。

「先の戦いで自分は陛下より賜った太刀を折られ、さらには戦闘の最中で紛失してしまいました……」

それをまず謝罪させていたきたたく存じます」

「あ……ああ、そうか……うむ、許す」

ユージェントはオズボーンを一瞥し、リインに許しの言葉を与える。

太刀一本の犠牲で帝都80万人が救われたと考えれば、責める理由などないのだが律儀なその性格はやはり貴族らしいとは言えなかった。

「しかしそういうことなら我々も君に謝罪しなければならぬことがある」

「陛下が謝罪ですか?」

予想外の言葉にリインはむしろ戸惑う。

「うむ。そなたが献上してくれた『聖女の槍』が何者かの手によって盗み出されてしまった……」

そなたの学友たちが無事に取り戻してくれたとは言え、そなたの功

績に泥を塗る様なことになってしまったことを謝罪させてもらおう」

「いえ、それはテロリストと同様に盗人にこそ責められる罪、陛下が心を痛める必要はありません」

「そう言ってももらえると助かる……して、望みは代わりの太刀か？」

太刀の話題を出したことからリインが望む褒美がそれかと考えてユージェントは尋ねる。

「いえ、太刀の代わりは考えておりますので大丈夫です……」

褒賞については、畏れながら進言させていただきました

てつきり謙虚な彼のことだから、褒賞は辞退すると言い出すと思っ
ていた。

しかし正当な褒賞を与えなければ周りに示しが付かないのでどう
説得しようかと考えていたが、その手間がなくなり安堵する。

しかし同時にテオの息子にしてはすんなりと受け入れたことに意
外なものを感じる。

——年始の時はまだ場慣れしていない様子だったが、見違えたな

……

「うむ、申して見よ」

リインの申し出にユージェントはどんな願いを言うのか期待して促
す。

同時に謁見の間の空気がより一層張り詰める。

リインが建てた功績はそれこそ誰にも真似できない偉業として褒
め称えられる程のもの。

それこそ無茶な難題でなければ、どんな願いでも受け入れられるだ
けの功績。

シユバルツアー家の爵位を上げることも、リイン個人に貴族の位を
与えることも、望めばアルフィンの伴侶に立候補することさえ叶うか
もしれない。

特にアルフィン皇女の伴侶の座を得ようと画策していた貴族派の
者たちからすれば、男爵家風情に出し抜かれるのではないかと戦々
恐々に固唾を呑む。

「今、私が望む事……」

それはトールズ士官学院を休学させていただきたいということですよ」

「リ、リイン君？——っ」

予想もしていなかったリインの願いにトワが驚き、場を思い出してすぐに口を噤む。

「ふむ……それを叶えるのは容易いが理由を申してみよ」

対するユーゲントもまた予想外の提案に虚を突かれながらも説明を促す。

「此度の事件、確かに脅威を払うことはできましたが皇女殿下を誘拐し暗黒竜を復活させた大罪人はまだ逃げおおせたまま……」

本当に解決したとは言えません……

ですので、今回と同じことが起きることも考え、軍の捜索隊に私も加えて欲しいと思う所存であります」

それは褒賞に望むには場違いとも取れる願いだが、学生の身分であるリインが捜索隊に加わるには確かに権力を利用するしかない願いでもあった。

「それを褒賞と扱うかはひとまず置いておくとして、そなたはまだ何も終わっていないと言うのだな？」

「はい。彼らを捕えぬ限り、第二、第三の『暗黒竜』が現れないと言えないでしょう……」

またアルフィン殿下を狙って動くかもしれません。皇女殿下に安全の生活を送って頂くためにも、テロリストの捕縛は急務のはず……どうか彼のテロリスト共を捕えるための大任を私に担わせて頂きたい所存であります」

頭を垂れた背から感じる凄み。

皇女に危害を与えたテロリストを決して許さないと言わんばかりの振る舞いはまさに皇帝家の忠臣だった。

「リインさん……」

傍らに控えていたアルフィンがその真剣な言葉に思わず言葉を漏らす。

「父上、発言をよろしいですか？」

「オリヴァルト？ 何だ申してみよ」

果たしてそれを褒賞として扱って良いものかと悩むユーゲントにオリヴァルトが介入してくる。

「リイン君、君のアルフィンを想う気持ちはありがたいがたく思う……だが君の本音はそこではないだろう？」

「何を仰いますか……」

私は本心からアルフィン殿下を害したテロリストに誅を下したいと思っております……

まあ、私の妹に手を上げた罪もついでに思い知らせるつもりではありませんが」

——こいつ、絶対に妹の方が本命だ……

その時、謁見の間にいる全ての者たち——特に革新派と貴族派は——珍しく心を一つにして思った。

「それともう一つ、部隊をお借りしたいのはテロリストの搜索と同時にある調査を行いたいからです」

「調査？」

「私が乗っていた『大いなる騎士』《灰の騎神》ヴァリマールと同じ存在が、帝国にはまだ六つ存在しております……」

既にその内の五つは起動者を選定されていますが、残る最後の一つがテロリストの手に落ちないよう先に確保したいと考えております」

「騎神……帝国の各地に残る『大いなる騎士』の正体か」

リインの進言にユーゲントは何とも言えない気持ちになる。

果たして今回の出来事はどこまでが『黒の史書』の預言通りだったのか。

大樹こそ現れていないが、煌魔城は出現し《終焉の紅き魔王》も預言通りに顕現した。

あの戦いは諦め切っているユーゲントにとって眩しく感じる程に活力があつたが、反面リインの戦いも予定調和なのではないかと疑ってしまう。

「そなたの言い分は分かった。宰相」

流星に軍の事情は自分の強権で済ませられるものではないとユー

ゲントはギリアスを呼ぶ。

「ここからは陛下に代わって私が話させてもらおう……」

君の申し出は確かにありがたいが、君を軍に入れることはできない相談だ」

「それは何故ですか？」

「今回の事で君の存在は名実共に帝国に知れ渡ることとなった。そんな目立つ存在を連れて潜伏したテロリスト達を搜索しても逃げる隙を与えるだけだろう」

「ですが、もしも今回のテロリストが単純に帝都の破壊が目的ではなかった場合はどうでしょうか？」

「ほう………続けたまえ」

言い返して来たリインにギリアスは笑みを濃くする。

「今回の事件の目的が名乗りを上げる事とは別に『暗黒竜』を討つて武勲を得るつもりだった場合、それに対抗できる存在を所有していた可能性があると思います……」

誰とは言いませんが、そういった自作自演を好む者がいると耳にしたことがあります」

「なるほど、その理屈ならばテロリストと通じていると真っ先に疑われるのは君ということになるな」

「その通りです。ならばこそ『騎神』という危険物を持っている自分を監視する必要があるのではないですか？」

ギリアスの指摘にリインは動じずに言い返す。

あまりの尊大な物言いに謁見の間の空気が張り詰めていく。

「ちよつとリイン……」

小声でサラが諫めて来るが、リインは引くつもりはない言わんばかりにさらに言葉を重ねる。

「それにテロリストの言葉もあからさま過ぎて、鵜呑みにするのは早計なのではないでしょうか？」

「ふふ………頼もしい限りだ」

言外にお前を疑っていると言いながら、その反応をつぶさに観察して探りを入れてくるリインにギリアスは苦笑を浮かべる。

「どうでしょう陛下。条件付きで彼の意見を受け入れるのは？」

「宰相がそう申すなら構わぬが、その条件とは？」

「まずは君を軍に編成することは認められない……」

君が良くても、君を素直に受け入れてくれる軍人はいないからな……

《帝国解放戦線》に関しては既に全土に手配を出している。背景の洗い出しも進んでいるからまずはその調査報告を君に渡そう……

そして彼らの動向が掴めたら臨時戦力として君を招集するというのはどうかね？」

「はい。それで構いません。ありがとうございます」

最初から軍に入れると考えていなかったリインはギリアスの提案を素直に受け入れる。

「そして君が言った“騎神”の調査についてだが、先に聞かせてもらうが当てはあるのだろうか？」

「はい。詳しくここで説明はできませんが方法はあります」

「ならば——」

「ならばその部隊は私の私兵から出そうではないか」

ギリアスの言葉を遮って、そう主張の声を上げたのはオーレリアだった。

「できればルグイン伯爵の息が掛かっていない者達でお願いします」

「ふむ……確かにその方が良いだろう」

阿吽の呼吸で頷き合うリインとギリアスだが、そこでオーレリアは退かない。

「連れないことを言わないでもらいたいな……」

正規軍はテロリスト共の捜査で手一杯になるのだから、自由に動かせるうちの者なら気兼ねなく動かせるではないか」

「各地のテロリスト対策でむしろ都市の警備を強める意味でも領邦軍の手を煩わせるわけにはいきません……」

それに州を跨いでの調査になりますので、陛下の許可と正規軍に協力して頂いた方が効率が良いと考えます」

「む……」

正論で返されオーレリアは唖る。

「何よりもルグイン伯爵は自分を出し抜いて、『金の騎神』の起動者になろうと考えているんじゃないですか？」

「ほう……残っている『騎神』は『金』なのか……それはまた……」

リインの指摘にオーレリアはしかめた顔を満面の笑みに変える。

答えは返さなかったが、その表情が何よりも答えを雄弁に物語っていた。

「しかし、君はその『騎神』を手に入れてどうするつもりかね？」

テロリストの手に渡さないとしても、オーレリア将軍程のものに預けるのは悪いことではないと思うが？」

「いろいろと試したいことがあります」

ギリアスの質問にリインはそれだけ答える。

もしもここで全てを説明すれば必ず抗議の声が上がってしまうだろう。

——今の段階でできることと言えば……

リインはいくつか『金』で試したい実験を思い浮かべる。

『緋』と同じようにヴァリマールに同化させる。

『核』を抽出して体は解体する。

コンクリートで全身を固めて海の底に沈める。

ノーザンブリアに持っていき塩漬けにして錆付かせる。

とても帝国の伝説に対する扱いではなく、反感を買うことは考えるまでもない。

しかし『黄昏』を回避する、もしくはその時を少しでも先延ばしにするためにも失敗を前提に試すことはいくらでもある。

さらに言えば、結社のようなアーティファクトに通じる技術力のバックアップがないリインにとって可能性を模索するための試験物の確保は重要な案件なのだ。

もちろん、『金の騎神』の意志はある程度配慮するつもりだが。

「……あまり無茶な要求は承諾できないが、そのことについては場を改めて話をするでしょう」

あえて追及せずギリアスは話を保留にする。

「ところで一つ聞いておきたいのだが……」

おそらく《帝国解放戦線》はそれなりの地位を持つ者たちの支援を受けていると私は考えているのだが、君はその支援者に対してどうするつもりかね？」

「そうですね……」

実行犯、特にギデオンに関しては死など生温い報いを与えてやるつもりだが、協力者にまで同じ目に遭わせてやると言うほどリインも鬼ではない。

「ヴァリマールの腰に括りつけて帝都一周の空中散歩でもすれば改心するんじゃないでしょうか？」

「なるほど、かの『大いなる騎士』によって晒し者にするというわけか。くくく……中々愉快な罰だ」

強面の顔でギリアスは楽し気に笑う。

「しかし、それを褒賞とするには帝国政府にとって承諾しかねるな……」

君個人への褒賞はそれとは別に考えさせてもらおうとしよう」

「はっ……御配慮、痛み入ります」

リインもそれ以上の反論はせず、ギリアスの提案を受け入れた。

そしてギリアスの眼差しはリインからⅦ組一同に移る。

「諸君らも、此度の働きは見事であった……」

これからどうか健やかに、強き絆を育み、鋼の意志と肉体を養って欲しい……」

これからの『激動の時代』に備えてな」

「……………あ……………」

「……………っ……………」

「——っ——」

凄みを感じさせるオズボーンの言葉に一同の反応は様々だった。気押される者。顔をしかめる者。眉を顰める者。そして内なる激情を必死に押し隠す者。

「最後に私個人から一言言わせてもらおう……二年後。私が言えるのは……ここまでであり、これ以上のことは何も言うことはできない」

そして付け加えられた言葉に一同は首を傾げる。

「二年後……」

クラスメイト達が首を傾げる中で、その言葉から様々なものを汲み取ったリインは「二年しか」ないと気持ちを引き締める。

「二年後か……」

オリヴァルトも全てを察していないにしても、期限を提示され「二年も」あると安堵する。

こうして皇帝陛下への謁見は様々な思惑を残して終わる——はずだった。

「それにしてもしばらく見ない間に随分と遅くなったものだ」

退出を促そうとしたところでユーゲントの言葉が謁見の間に響く。

「そうは思わないかプリシラ」

「ええ、本当に。良きクラスメイト達にも恵まれたようで安心しました」

ユーゲントの言葉にプリシラ皇妃は嬉しそうに頷く。

「あ……えつと……」

「Ⅶ組諸君、そしてその教官のサラ殿と先輩方。これからも我が息子のことをよろしく頼む」

「は、はいっ！……息子？」

反射的に頷いたトワは遅れてその意味に首を傾げる。

ユーゲントの後ろに控えていたオリヴァルトとアルフィンはため息を吐いて天井を仰いでいた。

「息子って……オリヴァルト殿下のことか？ それともセドリツク殿下のことなのか？」

困惑はトワだけではなく、マキアスは小声で疑問を囁き周囲を見回すと、目が合った父があからさまに明後日の方を向いた。

「どういうことだこれは？」

同じくルーファスを見て、意味深な笑みを返されたユーシスは謁見の間に漂った微妙な空気に困惑する。

「ねえ、リイン……何か知っているの？」

エリオットが小声でリインに尋ねるが、彼は手で顔を覆って感激に

震えていた。

「よかった……流石皇帝陛下……本当に良かった……」

「リ、リイン？」

再度呼び掛けるとリインは振り返り、優しい慈愛と憐れみに満ちた笑みを一同に向けて告げる。

「気をしっかり持つんだ、みんな」

脈絡のない言葉に一同はさらに困惑していると、さらにユーゲントが言葉を重ねる。

「何だ。まだ本当の名を明かしていなかったのかセドリツク？」

「ええ……はい。その通りです父上」

「……………は……………」

「……………へ……………」

ユーゲントの呼びかけに困ったように苦笑して応えたクリスにVII組と先輩達が固まる。

膝を着いて頭を垂れていたクリスは徐に立ち上がって前に進み出て振り返る。

「改めて名乗らせてもらうよ。クリス・レンハイムは世を忍ぶ仮の名前……」

本当の名前はセドリツク・ライゼ・アルノールって言うんだ。改めてよろしく」

事情を知っている大人たちの見守る中、その告白に固まった一同はそこが謁見の間だと言うことを忘れて絶叫するのだった。

・*

「……………アルグレオン」

レグラム某所。

アリアンロードは目の前の何も言葉を返してくれない『銀』に困り果てていた。

こんなことは250年の間で初めてのこと。

あまりの事態に普段の超然とした佇まいはどこか弱々しい。

「大丈夫です、アルグレオン。そのぐらいの損傷などすぐに直るはず
です」

『……………』

励ましの言葉にやはり言葉は返って来ない。

右腕が肩からもげる程の損傷を負っているが、《核》は無傷のため受
け答えはできるはずなのに何も答えてくれない。

「謝りますから、機嫌を直してください」

その右腕をもぎ取った張本人は何度目かの謝罪をして頭を下げる。

事の発端は部下が先日撮ってきてくれた《灰》と《緋》の戦い。

彼女の目から見ても見惚れる程の激しい戦い。

その最中に見せつけられた騎神の可能性にアリアンロードは昂り、
自身の騎神で試してみた。

結果はもげて取れてしまった右腕と拗ねて口を聞いてくれなく
なったアルグレオンである。

「もう一度やりましょう。ヴァリマールにできたんです。貴女ができ
ないはずありません」

『……………』

やはりアルグレオンから返事はない。

250年の付き合いだがこんな反応は初めてであり、アリアンロー
ドはどうしたものかと困り果てる。

——こんなことがロゼに知られたら……

魔女に頼れば修復は早く済む。

しかし、結社の魔女には連絡が付かず、自分の導き手だった彼女を
頼るのは憚られる。

都合の良い時だけ頼ることもそうだが、自分で壊してしまったと説
明した場合の彼女の怒りを想像するとどうしても内々で済ませたい
と思ってしまう。

「ほう、これが聖女殿の《騎神》ですか、噂には聞いていたが実物はや
はり美しい」

途方に暮れていたアリアンロードに不躰な言葉が掛けられる。

「何様ですかブルブラン？」

振り返ったその時にはもう、右往左往していたことなどなかったかのように超然とした立ち姿でアリアンロードは振り返った。

「お久しぶりです。鋼の聖女殿……」

この度は貴女に一つお願いがあつてこうして訪ねさせて頂きました」

普段の慇懃無礼な態度ではなく、礼儀正しい言葉で頭を下げてくるブルブランにアリアンロードは珍しいものを見たと思ひながら素っ気なく対応する。

「申し訳ありませんが、今は貴方に構っている暇はありません。お引き取り下さい」

「そういうわけにはいかないですよ」

その言葉と共に叩きつけられたのは敵意。

アリアンロードは目を細めて尋ねる。

「何のつもりですか？」

「一手、御指南承りたく存じ上げます」

そう言つてブルブランはトランクケースから見覚えのある、ひび割れ半ばから折れた騎兵槍。

「何のつもりですか？」

湧き上がる怒りを抑え、アリアンロードは同じ声音で尋ねる。

「言葉の通り、一手指南して欲しいのですよ」

「貴方に武芸の心得があつたとは意外ですね……」

しかし、どうして貴方がその槍を持っているのでしょうか？」

「無論、帝都博物館から頂いてきた……」

ああ、心配は無用。偽物とすり替えて来たから誰も盗まれたことに気付いてはいないだろう」

臆面もなく言い放つブルブランにアリアンロードは普段あまり感じない苛立ちを覚える。

「今すぐ返して来なさい。そうすれば今回は目を瞑りましょう」

「まあ、そう言わずに話を聞いてくれたまえ」

そう言つてブルブランは徐にそれをアリアンロードの前に投げた。

「これは……」

半ばから折れた太刀。

しかし、赤の刀身は以前に見た時よりも一層深い色彩の深紅となつて凄みを感じさせる。

「それは《劫炎》殿の本気の焰から燃失を免れた彼の太刀だ」

「それは……」

あつさりと言われた言葉の中にある事実にはアリアンロードは驚き、同時に納得する。

折れていても一目で判るほどに凄みを増した太刀。

《劫炎》から生き残つたとすれば、当然のことである。

「見ての通り、その太刀は以前よりも美しい深紅に染まつた……」

だが、問題はそれで太刀を打ち直すことができないことだ」

「……………そうですね」

太刀の惨状を改めて見てアリアンロードはブルブランの言葉に頷く。

どんな偉大な博士であっても、無から有を作り出すことはできない。

この折れた太刀に新たなゼムリアストーンを継ぎ足す必要がある。

それはこの奇蹟の産物の力を薄めることになり、以前の太刀以下の武器に成り下がってしまう様が容易に想像できる。

「劫炎殿は彼を盟主に会わせ、《外の理》の武器を持たせようと考えているようだが」

「それは名案ですね」

騎神戦のことを思い出してアリアンロードは頷く。

本来なら敵同士だが、彼にはそれだけの価値がある。

「名案？・ とんでもない。それは愚策だと言わせてもらおう」

しかし、ブルブランの考えは違った。

「彼の力に《外の理》など邪道！ 彼にはもつと相応しい武器がある！」

言い切るブルブランにはアリアンロードは顔をしかめる。

「この世界において、これ以上の武器は存在しないと思えますか？」

「ならばそれを証明するためにも、一手手合わせ願えるかな？」

ブルブランは不敵に笑い、壊れた槍を構える。

彼の意図が全く読めずアリアンロードは肩を竦める。

「付き合い切れませんね。そんなもう死んでいる槍で何かを成すことなどできるはずありません」

アリアンロードは踵を返し――

「鉄血より賜り劫炎の焰で鍛えられた太刀。それに見合うのは同じく『最強』の闘気で鍛えられたものだけだと私は思うのだよ」

その足が止まった。

手応えを感じたブルブランは捲し立てる。

「今、死んだ槍と貴女は仰ったが私はそうは思わない……」

私の手の中でこの槍はまだ生きています。戦いたいと訴えている……

例えその身がすでに朽ちていたとしても、武具は飾られて満足するものではない。私はそう思うのだよ《槍の聖女》殿

「……………貴方の意図は理解できました」

深紅の折れた太刀を修復させるためにはそれに見劣りしない同等の変異したゼムリアストーンを用意すれば良いだけの単純な話。

ブルブランは《鋼の聖女》を使ってそれを造ろうとしている。

言葉にすれば単純だが、そこに生じるリスクが分からないブルブランではないはず。

「ですが、何故そこまで彼に肩入れするんですか？」

「私が拘る理由はただ一つ……」

そこに盗む価値がある美しいものがあるかどうかだけだ」

「盗む価値があるもの……それはいったい？」

「それは貴女だよ。聖女殿……」

250年積み重ねてきた研鑽、至った『至高』の煌き、そう！それはまさしく高嶺の花の如き『美』の極致……

それが砕け、地に伏せる様を私はその瞬間を見てみたいのだ！」

本人を目の前にしてブルブランは言い切った。

「だが残念なことに貴女を下すことは私には無理だ……」

しかし私がプロデュースしたりイン・シュバルツァーがそれを成し

遂げたとすれば私はその感動を共に分かち合うことができるだろう」
本人がその場にいたらふざけるなど叫んでいるだろうことを抜け
抜けとブルブランは言う。

「私はそれ程大それた存在ではないのですけどね」

鉄機隊とは違った意味で自分を絶賛するブルブランにアリアン
ロードは苦笑する。

「そのために貴方は命を賭けると?」

「ふふ……私という『美』が砕けるのならそれもまた一興というもの
だよ」

ブレないブルブランの言葉にアリアンロードは呆れる。

「……………仕方がないですね」

アリアンロードは徐に抱えていた兜を被り、その手に盟主より頂い
た騎兵槍を顕現させる。

「執行者にはあらゆる自由が盟主より約束されていますが、これは明
らかに度が過ぎています」

言いながら、こんな言葉でこの怪盗が止まるとは思わない。

故に退かないというのならさっさと完膚なきまでに倒せばいい、と
アリアンロードは結論付ける。

「ええ、これは仕方がないのです」

アルグレオンの修復のこともあるのでこんなところで時間を使っ
てはいられない。

だから手早く済ませようと全力で迎え撃つのは当然だと自分に言
い聞かせる。

決して、《鉄血の太刀》と《聖女の槍》を混ぜ合わせることが琴線に
触れたわけではない。

決して、自分の半身だった槍が新たに生まれ変わって『あの子』の
武器として蘇ることに乗り気になつたわけではない。

「降り掛かる火の粉は振り払わないといけませんから、ええ……これ
は仕方がないことなのです」

誰に向けた言葉なのか。

理論武装をする彼女は兜の中でどんな顔をしているのか、それは誰

にも分らない。

「どうやら本気になってくれたようだね」

まだいくつか説得のための話題を用意していたブルブランはあっさりと乗って来たアリアンロードに笑みを浮かべる。

そして彼の闘気が槍に呼応するように励起し力場が折れた穂先を補う。

「……………本当に……………私もまた未熟でしたね」

その様を見たアリアンロードは感慨深く、自嘲する。

騎神の可能性を見せてくれたヴァリマール。

死んだと思っていた《槍》が示す闘争の意志。

250年の歳月を経て高みへと至り、知らずの内に増長していたのだとアリアンロードは思い知らされる。

だが思い知らされても不快には感じない。むしろ清々しい。

「あなたが再び戦場に立ちたいと言うのならこの一撃に耐えてみせなさいっ！」

かつての愛槍に向かってアリアンロードは高らかに叫ぶ。

「はははっ！ 至高の御業っ！ 得と堪能させて頂こうっ！」

ブルブランは高まる闘気に臆することなく哄笑を上げる。

「聖技——グランドクロスッ!!」

その一閃は《聖女の槍》を完膚なきまでに粉碎した。

・*

「やあ、呼び立ててすまないね」

バリアハートの貴族御用達の店でルーファスは待ち合わせの相手を友好的な笑みで出迎える。

「本当は面倒だったんだが《深淵》も《神速》も《怪盗》も野暮用で出ちまったからな」

迎えられた男は気だるい素振りを隠しもせずルーファスに応え、ルーファスの対面の席に座る。

「私が聞きたいのはまさにそのことだよ……………」

《結社》は先日的一件をどう捕えているのかね？　まだ私たちと協力関係を保っていると考えて良いのかな？」

「さあな。肝心の《深淵》が頭を抱えているからまだ何にも決まっちゃいねえよ」

「やはり一連の事件は《結社》の想定外だったということかな？」

「ああ、その認識で間違つてねえな……」

まさかあいつがあそこまで化けるとは俺も思つてなかったぜ」

くくくつと喉を鳴らしてマクバーンは笑う。

叩けば叩くだけ伸びる極上の逸材。

まさか騎神サイズの《魔剣》を、一時的とはいえ自分の力で複製してみせるなど、全く予想もしていなかった。

「楽しそうだね？」

「まあな」

ルーフアスの言葉をマクバーンは素直に認める。

剣術を覚え、焰の制御を覚えたことで周りへの影響力こそ減ったものの「アツク」なれる戦いが遠ざかつてしまったことに不満を感じていた。

だからこそ、もっとも可能性がある聖女を焚きつけることを目的でリインにちよつかいを掛けに行ったら、まさかの本人が更なる発展を遂げたのは嬉しい誤算だった。

「だから悪いことは言わねえ。あいつに手を出さない方が身のためだぞ」

あいつは俺の獲物だと言わんばかりにマクバーンはルーフアスに釘を刺す。

「さて、何のことを言っているのか分からないな」

はぐらかす返事にマクバーンは溜息を吐く。

「やっぱテメエとは合わないな。お前はつまんねえ」

ルーフアス・アルバレアは確かに優秀だ。

しかし、様々な達人の中でも一番そられない、そんな人物だった。一を十にする才能に長けていても、零を一にする才能がないというべきなのか。

勝つべくして勝つ、負けるなら被害が少ないようにと、とにかく勝率の数字しか考えていないルーファスはマクバーンにとって興味の対象にはならない。

「ところで《結社》の進退が保留だということは了解したが、個人的に君を雇うことはできるのかな？」

「あん？」

突然のルーファスの言葉にマクバーンはうろんな眼差しを送る。

「単刀直入に言おう。《騎神》に興味はないかな？」

「生憎だが俺はこの世界にとつて異物でね。そう言ったもの選ばれるような高尚な存在じゃねえんだよ」

「《騎神》には準起動者というシステムが存在しているらしい……」

それを介せば君にも騎神に乗れるのではないかな？

そして聞くところによれば騎神は《至宝》の力を封じるためのもの、ならば世界を壊しかねない“力”も騎神ならば緩和されないだろうか？

「てめえ……」

「もちろんこれはただの素人考えでしかないけどね」

どうしてマクバーンの事情を知っているのか。

それはあまり重要ではない。

問題は提示した言葉の数々。

どれも確証はない、まさしく素人考えの机上の空論。

しかし、試してみる価値はあるのではないかと一考の余地がある。

「てめえ、何が目的だ？」

「これから帝国で起きることを考えて彼に勝てる“駒”を用意しておきたいだけさ……」

仮に私が《騎神》を手に入れたとしても彼に勝てると思うほど自惚れてはいない。だが君ならば勝てるだろう？

「よく言うぜ」

ぬけぬけと言う過小評価にマクバーンは笑う。

「俺を喰うつもりのか？」

「私にそのような趣味はないよ」

熱を感じさせず、獰猛な笑みを涼し気に受け流すルーファスにマクバーンは笑みを深くする。

冷めた人間だと思っていたが、その奥底にひた隠しされぐつぐつに煮込まれた「闘争心」は実にマクバーンの好みだった。

「前言を撤回するぜ」

謝罪の意味も込めてマクバーンはルーファスに最大の賛辞を送る。

「お前の要求は《結社》を使って、あいつよりも先に《騎神》を見つけて来いってことで良いんだよな？」

「ああ、よろしく頼むよ」

どちらも互いの存在を喰らい尽くす意図を察しながら、互いにそれを了解し合って二人はここに契約を結ぶのだった。

58話 変わる日々、変わらない日々

帝都を狙った未曾有のテロ事件。

その影響はトールズ士官学院にも起きていた。

「申し訳ないけど、お茶会については全部断らせてもらうことにしているんだ」

声を掛けて来た貴族クラスの同級生からの誘いを角が立たないように断り、彼女たちを見送ってからリインはため息を吐く。

「何と言うか……」

実習に行く前までは遠巻きにされていたのが嘘みたいだね」

休み時間の度にリインに声を掛けてくる少女達にエリオットが感想を呟く。

「どうやら先日の夏至祭には学院から見物に来ていた者達も多くいたようだな」

「あれを見たのなら当然だろう……もつともあれだけの功績を打ち立てておいてこの程度で済んでいることが不思議だがな」

ガイウスの言葉にユーススは頷き、リインが学院に持ち込んで来た手紙の山を詰め込んだ袋を見下ろす。

特別実習から戻ってきたⅦ組を出迎えたのはリインのポストが手紙で溢れた光景だった。

入り切らない手紙はシャロンが箱で保管しており、退院は許可されても安静にしておくように釘を刺されたリインはその手紙の山の処理で早速無理を強いられることになった。

「あれで少ないのか？」

「聞いた様子では『お見合い』を薦める類の手紙はないらしいな……」

だが、あれを機にこれまでリインにどういう風なスタンスを取るか決め兼ねていた貴族達が一斉に縁を作ろうと躍起になっているのだらう」

前回のお披露目ではアルゼイド子爵を下したからこそ、彼の信者による反発があったものの今回の『竜殺し』は誰に憚れることのない

功績である。

この様子だと彼の実家にも社交界の招待状を含めた大量の手紙が送られているだろう。

「やれやれ、これだから貴族は——」

「リイン、クライスト商会を是非シュバルツァー家の御用達に——」

「こらっ！ 抜け駆けはさせんでっ！ リイン君、実は良い儲け話があるんやけど——」

「……………貴族が何だって？」

「いや……………何でもない」

いつもの憎まれ口を叩こうとしたマキアスは教室の中まで乗り込んで来た緑の制服、平民生徒の二人の姿に居たたまれなくなる。

「それにしても貴族って大変なんだね」

「ああ、今回のリイン程ではないが私もお披露目などが終わった時はこういった顔繋ぎのための手紙を出したり返したりしていたな」

フィーの呟きにラウラが頷く。

「領地の経営はその土地だけではなく、色々な都市との交流や協力で成り立っている……」

もちろん家を大きくしたいという思惑もあるが、これも「貴族の義務」の一つだ」

「ふーん……………めんどくさそう」

「ああ、実際ものすごく面倒だ。中にはどうしても合わないと言う者もいるからな」

もつともラウラの場合は「見合い」に関する提案は父が止めてくれているのでまだマシな方で、女子からのファンレターの方が多くらいだった。

「あのリインさん、今そこで先輩達からこの手紙をリインさんに渡して欲しいと頼まれたんですけど」

クリスが分厚くなった手紙の束を持って教室に戻って来る。

「ああ、ありがとう。悪いなクリス」

ため息を吐きながらリインはそれを受け取る。

「……………次期皇帝陛下をメツセンジャーに…………」

「言うなエリオット……言うな……」

「俺は何も見っていない」

「みんな、気にし過ぎではないか？」

現実逃避をしている男三人を他所にリインは袋から新たな手紙を取り出して――

「あれ……？」

まとめて取り出した手紙にそれまで処理していた手紙とは違う手応えを感じてリインは首を傾げる。

違和感があった手紙の差出人はヨルグ・ローゼンブルグだった。

・*
・*

どうしてこうなったのだろう。

リインはどこか遠い目をしながら彼らを遠巻きに見守る。

「ふん、同じ事を何度も言わせるな……三高弟と天狗になっている二流だと言ったのだ」

長いひげをたくわえた老人、ヨルグはラッセル博士とシュミット博士の二人に対して上から目線で言い切った。

「ほう、どこの誰だか知らんが随分な口を叩くのう」

「私たちに意見をする者がいるとはな……良いだろう。貴様の意見を聞いてやる」

ヨルグに対してラッセルとシュミットは顔をしかめながらも負けじと上から目線でヨルグに言葉を返す。

「フン、既存のものをただ再利用することしかできん奴等を二流と言って何が悪い」

ヨルグの視線の先には天井から吊るされている人型の人形。

それは《緋》との戦いから沈黙しているヴァリマール――ではなく、旧校舎の第一の試しの番人である魔煌兵《オルⅡガディア》。

だが、騎神とほぼ同じ大きさでありながら吊るされているその姿は無残の一言に尽きる。

全身の装甲は外され、剥き出しにされた《核》や《骨格》。

そしてその中でも異彩を誇っているのは無理矢理取りつけたと言わんばかりの左腕の《灰》と右脚の《緋》。

「何よりこんな不格好な様で喜んでいようでは程度が知れると言うものだ」

「む……確かに勢いに任せたことは認めるが」

「これはあくまでも調査目的の段階に過ぎん」

ヨルグの指摘にラッセルとシュミットは顔をしかめながらその言い分を認める。

「あの……リインさん。あのおじいさんはいったい誰なんですか？」

そんな彼らを他所にティータが当然の疑問をリインに尋ねる。

「あの人はヨルグ・ローゼンブルグ……」

結社の技術者で《パテルⅡマテル》の基礎部分を作った人だよ」

「レンちゃんの《パテルⅡマテル》を!？」

ティータの声が広間に響く。

「ほう、お主がああ《パテルⅡマテル》を……」

「フン、資料は読んだが。偉そうな口を叩く割りにはあんな欠陥品に満足している二流か」

「なんだと……」

シュミットの挑発に今度はヨルグが顔をしかめる。

「まあ確かに欠陥品じゃな。自重を支え切れない程に大きく造ってしまったのはコンパクトにまとめる技術がなかったからじゃろう?」

「操縦方法も欠陥だらけだな。外部の人間と戦術リンクに近い方法で操作しているようだが、被験者の負担を度外視したシステムは私でも流石にそこまではしないというのに」

「あれはわしの弟子が勝手にやったことだ」

「弟子の不出来さは師の責任じゃろうが」

「責任転嫁とは程度が知れるな」

容赦のないラッセルとシュミットのダメ出しにヨルグは激昂することはなかった。

「そこまで言うなら良いだろう」

落ち着いた声でヨルグは徐に荷物を下ろす。

「《パテルⅡマテル》は数年前に造った作品。それで今のわしの技術を計ったつもりかもしれないがそうはいかん」

「こんなこともあろうかと持って来ていた図面をヨルグはその場に広げる。」

「これがわしの今の技術の全てを注ぎ込んでいる《白の騎神》だ」

「ほう……」

「これは……」

「ぐぬぬ……」

「うわああああ」

ラッセルにシュミット、そしていつの間にかエリカとティータがその設計図にそれぞれ感嘆をもらす。

「フン、やはりこの程度か。私ならここのフレームはこうする。これで関節周りの耐久性は二割増しにできるはずだ」

「情報制御ユニットの造りが甘い、わしならもつと三割……いや五割増しのスペックの集積回路を作れるぞ」

しかしシュミットとラッセルはティータとエリカが完璧とも思える設計図にダメ出しして止める間もなく書き込みを加える。

「馬鹿者が、それではこの部分の装甲の見栄えと可動域が悪くなるだろう……」

集積回路も無暗にスペックを上げてしまえば操縦者の負担になるだけだ」

シュミットが書き込んだ線にヨルグが別の線を書き込み、さらにラッセルに言い返す。

三人の博士たちは無言で睨み合う。

「あの……」

一触即発の空気に恐る恐るリインはそこに声を掛けるが、返事はない。

「ゼムリアストーンの太刀は……」

「それならもう出来ておるぞ」

「勝手に持っていき」

話題を変えようと切り出した話は雑にあしらわれる。

「でもでも、せっかく魔煌兵の《核》と《騎神》のパーツがあるんですよ」

「むう……その気持ちは分からないでもない」

ティータからの上目遣いの指摘にヨルグは渋々と認める。

「おじいさんならこの材料をどう使いますか？」

「そうじゃの——」

喧嘩腰だったヨルグはティータにせがまれて氣勢を緩めて質問に答える。

それを切っ掛けに喧嘩腰だったラッセルとシユミットも肩から力を抜いて、二人の会話に混じり出す。

「ええいつ！ 私も混ぜなさいっ！」

その輪の中にエリカが突撃する。

「……………ラッセル博士たちは今月いっぱいまで帰国するはずでしたね？」

リインがこぼした質問は議論を白熱させる博士たちには届かない。

その代わりにダンがリインの肩を優しく叩いて答える。

「ああなったエリカさん達が大人しく帰るはずがないよ」

「ですよね…………」

がつくりと項垂れるリインは膝を着く。

そして博士たちはそんなリインに構わず、提案する。

「リイン君、次に《騎神》と戦う時は左腕と右脚以外の部分を持ち帰って来てちょうだい！」

「いや、待てたしかヴァリマールは機体を修復できたはず…………」

それを利用すればわざわざパーツを奪って来る必要はないだろう」

「だが《騎神》一つ一つの差異も気になるのじゃろ？」

「《七の騎神》から新たに一つの《騎神》を作り出すか…………それはそれで興味深いか」

「わ、わたしもお手伝いします」

リインの返事も聞かずに科学者たちは好き勝手に自分の欲望を口にする。

「いい加減にしろっ！」

そしていつものようにリインの雷が今日も落ちるのだった。

・*

「まったく……」

ため息を吐きながら、リインは旧校舎の一教室に入り鍵を閉める。そこはリインが利用するようになった研究室。

“大地の霊薬”など寮では取り扱いに注意が必要なものを作るために使う様になった一室でリインはようやく一息吐く。

寮に帰れば手紙に追われ、そうでなくても注目を浴びているリインにとつてその一室は心休める空間だった。

「やることが多い」

愚痴りながらリインは手紙をまとめた鞆を机に放り出す。

「えっと、まず先週送れなかった“霊薬”を用意して、それからクレアさんに渡す地質調査の概要書を作って……」

それに加えて手紙の返事も早く書かなければならない。

そして、なくした太刀の代わりも用意しないといけない。

ヴァリマールの状況も博士たちに任せるだけでなく、自分でも詳しく調べたい。

やることは多く、それに対して圧倒的に時間が足りない。

そのことのため息を吐き、リインは元教室には似つかわしくない金庫を開ける。

中には夢の中で邂逅した《大地の聖獣》が押し付けて行った琥耀石と瓶に入っている紅い錠剤《グノーシス》があった。

「……………これを飲めば、眠らないで良い体質になれるんだよな」

「早まらないでよりイン君」

「分かってますルフィナさん」

唐突に現れて諫めるルフィナにリインは苦笑を返して、金庫の扉を閉める。

「ノイとリンは？」

「ノイは写真部に、リンはいつも通り生徒会の仕事を手伝っているわ」

「そうですか」

「ふふ、寂しいの？」

「まさか……」

からかう口調のルフィナにリインは苦笑する。

「二人とも俺以外の人付き合いができるようになってむしろ安心してますよ」

リンの方はともかく、ノイの人見知りには激しく外で行動するにもリインから離れようとはしなかった。

そんな彼女がオーバルカメラに興味を持ち、その繋がりで人と交流ができたのならそれは喜ばしいことである。

写真部の先輩はノイを預けて大丈夫だと思える人格者であり、ノイを盗撮に利用した不届き者についても二度とやらせないように強く言い含めているので問題はない。

「忙しいのは分かるけど、ちゃんと休まないとまた倒れるわよ」

「分かっています……でもせめて太刀だけでも作らないと」

「それなんだけど、やっぱり博士たちに任せの方が良いんじゃないかしら？」

「そういうわけにはいきませんよ」

そう答えながら金庫とは別の棚に仕舞っておいた二つの太刀を取り出す。

「至宝の《器》にはまだ闘争の残留思念が残っています。それに触れたらあの人達だってどうなるか分からないんですから」

「考え過ぎじゃないかしら？」

あの人達なら「闘争」の呪いなんて無視して自分たちのしたいようにすると思うけど」

「それは……そうなんですけど、だからこそどこに行くのか分からなくて怖いと言うか……」

「気持ちには分かるけど……」

小言を言いながらもルフィナは現状では他の案がないことに口を噤む。

「俺なら大丈夫です。それより始めますからサポートをお願いします」

す」

二つの欠片を手にリインは精神集中するように目を閉じ、太刀を両手に自然体で立つ。

「《大地の聖痕》の秘蹟プログラムをブート。《大地の太刀》と同調……」

リインの《聖痕》が輝き、胸から右腕へと紋様が蠢くように伸びて太刀にまでその光は浸食する。

「《焰の聖痕》の秘蹟プログラムをブート。《焰の太刀》と同調……」
同じように《聖痕》が輝き、しかし今度は胸から左腕へと紋様が広がり、太刀に浸食する。

《ロストゼウム》と《アークルージュ》の欠片から造り出した二本の太刀。

元々は人々の願いにより巨人という形に固定されていたもの。

その全ては無理でも落剥した欠片程度なら、今のリインでも干渉して変化させ直すことができ作り出したもの。

「くっ……」

二つの《聖痕》の同時起動と急速に抜け落ちていく靈力にリインは眩暈を感じる。

だが、それはこれまで繰り返してきた実験で体験済み。

身体の虚脱感に耐えリインは二つの太刀を振り被り、交差させるように太刀を打ち合わせた。

「っ……」

次の瞬間、二つの太刀はまるで磁石が反発するように、リインの手から弾き飛ぶ。

「ダメか……」

ようやく進んだ実験の結果にリインは痺れた両手を振りながらため息を吐く。

「でも前は二つの《聖痕》を同時に起動しただけで倒れていたんだから十分な進歩よ」

ルフィナの慰めの言葉に礼を言ってリインは《聖痕》の力を止める。

「これだと先が思いやられるな」

「それなんだけど、この二つの太刀は代わりにならないの？」

リインが片方の太刀を拾い、ルフィナはもう一方の太刀を持ち上げながら尋ねる。

「ちよつと実戦で使うには心許ないですね」

仰々しい名前を付けているが、二つの太刀に至宝の力は残ってなければ、その造り方も鍛造ではなく鑄造と表現するべきもの。

見た目こそリインのイメージ通りに太刀となっているし、素材としてはゼムリアストーンでも金属でもないよく分からない物質だが強度も申し分はない。

しかし、中身を失っているせいなのか、それとも風雨にさらされ続けたものを鑄直しせいなのか。

試し斬りの手応えは赤ゼムリアストーンの太刀に劣っているというのがリインの印象だった。

「確かにこの二つの太刀を融合させてできる太刀が必ずしも優れているとは限りません……」

「だけど、騎神の武器で試す前に実物を先に造っておきたいんです。そうすればアリアンロードさんとの交渉も優位に進められるはずですから」

とはいえリインが考え付く限り、アングバールを始めとした《外の理》の武器に対抗できる可能性は至宝の欠片くらいしか思い至らない。

「それよりもルフィナさんの目から見てどうでしたか？」

「そうね……やっぱりまだ至宝の中には互いを『滅ぼせ』という願いが残っているように見えたわ。そのせいで互いの欠片は反発している……」

その反発を押し切って『鋼の力』を錬成したのは相当な圧力があつたということでしょうけど……」

「そこから考えられるのは、まだノイの中で『自己相克』は静まっただけということですよね」

「ええ、いわばノイの人格は『鋼』の表層意識……」

深層意識下では『自己相克』は続いていて人への『憎悪』も消え

ていない。騎神への影響が見られないことがその証拠ね」

「やっぱりルフィナさんもそう思いますか」

「だけどあまり思い詰めない事ね」

ふわりとルフィナはリインの目の前に浮かび、人形の小さな手でリインの頭を慰めるように撫でる。

「実情はどうあれ、ノイは——リンもだけど最初の時よりもずっと感情が豊かになっている……」

これはリイン君が為した紛れもない実績。これが何をもたらすかはまだ分からないけど、きつと信じて良い希望よ」

「ルフィナさん……そうですね」

その言葉にリインは逸りそうになる気持ちを抑えて頷く。

「とりあえず、作れない『鋼の太刀』は一先ず置いておいて、博士たちに頼んで七耀石の太刀を作ってもらいましょう」

「……………そうですね」

「それにあまり思い詰めていると来週のリベール旅行でまたみんなからお説教されるわよ」

「うぐ……………」

ルフィナの指摘にリインはそれを想像して体を震わせる。

「ル、ルフィナさん。先日の騎神戦についてはどうか内密にお願いします」

「ふふ……………さあ、どうしようかしら」

意味深に笑うだけのルフィナにリインはため息を吐くことしかできなかつた。

59話 旅行前日

八月初旬。

本格的な夏が始まる時期、帝都から帰還し、五日間の夏季休暇を明日に控えたリインは旧校舎にいた。

「それで何か分かりましたかローゼリアさん？」

ヴァリマールの顔を覗き込んでいたローゼリアはリインの呼びかけに我に返る。

「はあ……全くよもやこのようなことが起きるとはな」

小さく愚痴りながらローゼリアはヴァリマールから飛び降りる。

「リインよ。ちよつとこつちに来るが良い」

手招きをしてローゼリアはリインを呼ぶと、そのまま屈ませて額を合わせる。

「ローゼリアさん？」

「抵抗せず、しばし待て……」

一方的な言葉だがリインは言われたまま、されるがままに任せる。

「……どうやら《灰》と《緋》の意識は《箱庭》の聖痕に紛れて何かと繋がってしまったようじゃの」

リインの中に感じる三つの力にローゼリアは顔をしかめる。

「御主……《箱庭》に何を入れている？」

ローゼリアの質問にリインは額を合わせたまま惚ける。

「何のことですか？」

「惚けるでない。《灰》と《緋》の力の受け皿になっている何かが存在しておる……」

今のこの騎神はヴァリマールであり、テストールロツサでもある。本体は御主の《聖痕》の中にある何かと混ざり合っておるようじゃ」

ローゼリアの指摘にリインは心当たりがあった。

特別実習の時にノルドで回収した《大地の至宝》の器。

エリンの里から帰る寄り道で向かったブリオニア島で回収した《焔の至宝》の器。

《鋼の至宝》の分体である騎神が干渉するとしたらその二つ以外は

考えられない。

「答えられないか？ まだ妾達のことを信用できないということか」

「いえ、そういうことじゃないんですけど」

肩を竦めて額を離すローゼリアにリインは何と説明すれば良いのか迷う。

「まあ良い。とりあえず要望通り、転移術式はこのクオーツに組み込んでやったぞ」

ローゼリアはそれ以上の追及をやめ、作ったばかりのクオーツをリインに渡す。

「ありがとうございます」

「それにしてもヴァリマールがこんな姿になってしまおうとはのう」

リインにマスタークオーツを投げ渡したローゼリアは振り返ってヴァリマールを見上げて呟く。

旧校舎の地下。

元々ヴァリマールを安置していた場に膝を着いて座るその姿はかつてローゼリアが封印に立ち会った時とは見る影もない。

意匠を凝らした装甲は溶けて固まったように、原型を留めていない。

その姿は戦闘の激しさを物語っており、ローゼリアは驚きを通り越して呆れてしまう。

「自己修復で直せないことはないんですけど、ヴァリマールの意識がない状態ということで一応様子を見る事になっているんですけど」

「ううむ……そんな機能はついてないはずなのだがのう」

思わずローゼリアは唸る。

騎神に自己修復機能があるのは確かだがそれは長い時間を掛けて行うものであり、機体のゼムリアストーンの合金を瞬間的に増殖させてするものではない。

「それよりも、魔女の方で何か分かりましたか？」

「いや、あれから色々調べてみたがそんなことについての記録は何も残っておらんんだ……」

やはりお主の推測通り、《黄昏の相克》は《黒》が造り出した儀式だ

ろう」

先祖たちの不始末とこれまでの自分の怠慢にローゼリアはため息を吐く。

「《黒》についても里には書き記した古文書は一つとして見つかることはできなかつた……」

共同開発だったとは言え、他の騎神についてのものは残っていたというのだ。ああ、これが頼まれておった他の騎神の資料じゃ」

ローゼリアはリインに古びた本を渡す。

受け取ったリインはその場で軽く流し読む。

「へえ……《蒼の騎神》は飛行能力に優れていて、《紫の騎神》は臂力に優れているんですか……」

こうして見ると騎神にも個性がちゃんとあるんですね」

「そこら辺は地精の趣味じやの。ヴァリマールが一番最後に造られ手を加える暇もなく《鋼》の封印作業に移ったから素の機能しかないらしいが……」

この程度しか情報提供できなくてすまんろう」

「いえ、これだけでも十分です」

全くの未知の敵と戦うことの大変さは《緋》と暗黒竜の戦いで身に染みた。

ローゼリアが用意してくれた資料は多くはないが、《蒼》の奥の手など有益な情報がないわけではない。

「ところでリインよ」

「何ですかローゼリアさん？」

「あれは……何をしておるのじゃ？」

ヴァリマールの隣、天井から鎖で吊り下げられている魔煌兵だったものにローゼリアは視線を向ける。

「あれは第四層を攻略した時に試しとして用意しておいたオル・ガディアのはずじゃが……」

かつてこの旧校舎を造る時にドライケルスと話し合ってた考えた思出を頭に浮かべながらローゼリアは尋ねる。

中世の錬金術師が騎神に対抗するために作り出した魔煌兵。

そして旧校舎の試練に利用した魔煌兵は獅子戦役の頃にローゼリアが外部操作して《灰》と《銀》と並び立たせて戦わせたもの。

弾避けや壁役程度に利用したものを修復して試練の守護者にしたのだが、ローゼリアの魔煌兵はヴァリマール以上に無残な状態だった。

装甲は全て剥がされ、《核》にはいくつものケーブルが張りつけられて計測器に繋がれている。

愛着があつたわけではないのだが、その姿にローゼリアは複雑な気持ちになる。

「えっと……あまり気にしないで下さい」

そんな彼女の事情を知らないリインはそんな言葉で誤魔化す。

「そう言われてものう……」

周りを見回しても誰もいない。それがいつそう不気味に思える。

「それよりもエマとセリーヌのことなんですけど、どうします?」

ローゼリアを呼ぶ前にエマとセリーヌにもヴァリマールの診断を頼んだが、ローゼリア以上に何をしても良いか分からずに謝らせてしまった二人のことを思い出しながら尋ねる。

「二人とも、魔女の使命を背負うにはまだまだ修行が足りんからのう

……

巡回魔女として最低限の水準を充たした途端にヴィータの奴を追うと出て行ったのだから仕方がないと言えば仕方がないことなのだが……」

それ以上に目の前の規格外の少年が起動者になったことにローゼリアはため息を吐く。

今回のヴァリマールの診断もリインは最初エマ達に頼んだのだが、エマとセリーヌは何も分からないと白旗を上げてローゼリアを呼び出した。

それも無理もない話である。

長である自分でさえ、未知の領域のことに四苦八苦しているのに半人前がどうにかできる問題ではない。

「というか暗黒竜とエンド・オブ・ヴァーミリオンを単機で倒すとは、

どこまで妾達を驚かせれば気が済むのじゃ？」

「暗黒竜はこちらの能力がうまく嵌ってくれたおかげです……」

《緋》に関してはアリアンロードさんならできたんじゃないですか？」

「……………まあ、今のあやつならできるだろうな」

それを想像してローゼリアは頷く。

250年前の私と一緒にするなと叫んで元気にグランドクロスをぶち込んでいる姿を容易に想像できてしまう。

「しかしいくら何でも至宝の力を騎神に下ろすのは反則ではないか？」

「そう言われても使えるものは全部使わないと《相克》を勝ち抜くなんてできませんよ。俺はただでさえ出遅れているんですから」

「まあアリアンヌと戦うことを視野に入れたら、それくらいせんと勝てないと思うのは分かるがのう」

「ええ、だけど即興でプログラムを組んだせいとか、それとも力に耐えられなかったのか……」

オーブに至宝の力は定着しなかったので造り直さないといけないんですよね。なかなか思う通りには行きませんよ」

「焦る気持ちは分かるが、無茶だけはするでないぞ」

ずっと前を見据えるリインにローゼリアは肩を竦めて忠告する。

「分かっています。だけど後二年しかないんです」

拳を握り締めるリインにローゼリアはため息を吐く。

——エマでは足を引つ張るだけのようじゃな……

リインとヴィータから聞かされた《黒》が引き起こそうとしている《黄昏》。

ローゼリアはリインの導き手としてエマを成長させるつもりだったが、それはリインの覚悟を損なわせると考えを改める。

実力の差はまだ良い。

だが、姉を捕まえることが一番の目的になっているエマではリインと向いている方向が違う。

「のうリインよ。良かったら妾がそなたの“導き手”になってやろう

か？」

「いえ、間に合ってます」

ローゼリアの提案にリインは即答した。

「ちよ!? セっかく魔女の長自らが『導き手』となると言っているのに即答で拒絶はあんまりではないか!？」

「そう言われても……目標は決まっているので今更『導き手』と言われても……」

それに具体的にローゼリアさんは何の役に立つんですか？」

「ほ……ほれ、今回の様に騎神の術式をいじって出力調整ができるぞ。妾と一緒に乗れば三割増しは固いのう」

「ヴァリマールの操縦席は一人用ですよ……」

まあローゼリアさんの身体の大きさなら膝の上に乗ってもらってというのもできそうですが」

「妾はそれで構わぬぞ……」

御主はともドライケルスに似たところがある……

一人にするとどこごまでも突き進んでしまいそうな危うさ。どれだけ妾達が振り回されたことか……

《灰》の起動者だからといってそんなところまで似なくても良いと思うのだが」

「えつと……ドライケルス大帝と似ているなんて光栄です？」

「褒めとらん」

困ったように誤魔化すリインをローゼリアは半眼で睨む。

「それに本気でリアンヌに勝とうと思っっているのなら、利用できるものは全て利用するのだろうか？」

「それは……」

「妾も『呪い』という魔女の領分にも関わらず妾を頼ろうとしないリアンヌの阿呆には言いたいことがある……」

それに《鋼》となった焰の行く末を見届けるのは『聖獣』として使命であり、《黒》を作り出してしまった焰の眷属の長として——いやこれは言い訳だな」

頭を振ってローゼリアは言い直す。

「『聖獣』として『魔女の長』としてよりも先にリアンヌとドライケルスの『友』として妾は戦いたいと思っておる」

「それがローゼリアさんの『根拠』ですか？」

「エマやヴィータが御主と先に友誼を深めていたのなら妾も裏方に徹していたかもしれんが、今ならそこまで遠慮しなくても良さそうであるからな」

むしろ事あるごとに泣きつかれるくらいなら、その方が良いのではないかとさえ思う。

「まあ、今すぐ決めてくれとは言わん。だが考えてもらえるとありがたい」

「……分かりました」

押し付けずに引いたローゼリアにリインは頷く。

「失礼します」

と、そこに第三者の声が響く。

「あら……ローゼリアさんも来ていたんですか？」

旧校舎の広間に入って来たクレアはリインと並んでいるローゼリアに目を丸くする。

「御主は確かクレアだったの。久しぶりじゃの」

クレアの登場にローゼリアは話題を切り上げて応える。

「ええ、半年ぶりでしょうか……まだ話が途中ならば私は外で待ちますが」

「大丈夫です。もうそんな時間ですか？ すみません、出迎えもせず」

「いえ、私が少し早く到着しただけですから気にしないでください
……

ところでリイン君、ちゃんと休んでいるんですか？」

慌てるリインを宥め、クレアは持ち前の能力を駆使していろいろ察する。

「え、ええ……それはもちろん……」

「嘘ですね」

リインの答えをクレアは切り捨てて、その首根っこを掴む。

「え……クレアさん？」

「この時間なら学食がまだ開いていますね。話はそこでしましょう。ローゼリアさんも一緒にどうですか？」

「う……うむ、せっかくだから一緒に行かせてもらおうかの」

クレアに妙な既視感を覚えながらローゼリアは頷く。

そしてクレアに引きずられていくリインを見てローゼリアは呟くのだった。

「案外エマとの相性は悪くないのかもしれないの」

・＊

「良いですか。まだリイン君は病み上がりなんですから、しっかりと栄養を摂って休まないといけませんですよ……」

確かに《騎神》の事もあってやることは沢山あるかもしれませんが、それで体を壊したら元も子もないんですから」

「はい……すみません……」

クレアの小言にリインは肩を小さくして頭を下げる。

その様子に学生食堂で談笑していた生徒達は珍しいものを見たと言わんばかりにざわめく。

「本当に反省していますか？」

「はい……」

経験則から、解せないと思っても反論せずリインはクレアからのお叱りを黙って受け入れる。

リインの殊勝な態度にクレアはため息を吐き、訪ねた用件を切り出す。

「それで《騎神》の調査についてですが」

「はい。資料は作ってありますので後でお渡しします……」

ここで簡単に説明させてもらうとクレアさんには帝国の各地で地図に記した場所に用意した杭のオーブメントを地面に刺してもらうだけです」

「それだけで良いんですか？」

「はい。後は導力ネットを通じて、オーブメントが観測したデータはここに届く様に設定されていますから」

「魔女の秘術でも似たようなことはできるが、導力文明も随分と進んだものだろう」

あまりに簡単な作業に拍子抜けしてしまうクレアに対して、ローゼリアは感心する。

「分かりました。それでは地図とオーブメントは後で受け取るとして、私からはこれを渡しておきます」

そう言つて鞆から取り出したのは二つのファイル。

「こちらが《通商会議》で行われる会議の議題についての内容をまとめたファイルになります……」

それからこちらがリイン君に頼まれた閣下の経歴についてまとめたファイルです」

「ありがとうございます」

差し出されたファイルを受け取るリインだが、クレアは手を離さずに質問を重ねる。

「ですが、どうして閣下の経歴の資料も？」

「護衛官が護衛対象について何も知らなかったら恥ですし、オズボーン宰相に恥をかかせることになりますから、深い意味はありません」

「本当にそうですか？」

「他にどんな理由があるんですか？」

疑いの眼差しを向けてくるクレアにリインは聞き返す。

要求した資料は何も部外秘になるものではなく、調べれば誰もが知ることができるレベルのもの。

出来る事なら部外秘の情報も調べたいのだが、今の忙しさからそこまで手を伸ばす気はない。

「……………明日から特別実習班でリベールに行くようですが、いつもの資料を読むつもりですか？」

「えっと……………移動中の国際船の中で読むつもりですが？」

妙なプレッシャーに慄きながらもリインは素直に答える。

「……………リイン君、ちよつとりベールでの予定を教えてくださいませんか

か？」

ラインの言葉に含みを感じてクレアは尋ねる。

「ク、クレアさん？ いったいどうして？」

「いいから教えてください」

笑顔で生まれ、ラインは渋々といった様子で答える。

「一日目はほぼ移動になります」

「そうですね……」

リベールの高速巡洋艦なら半日足らずでグランセルまで到着できますが、定期飛行船だとほぼ一日掛かりますね」

「到着したら、帝国大使館に顔を出してからアリシア女王陛下に謁見

……

その後はルーアンに用意してくれた宿泊施設に移動して一日目は終わりです」

「では二日目を教えてください」

「二日目からは俺だけみんなと別行動を取ります……」

朝一定期船でツアイスに行つて、マードック工房長にラッセル博士から預かった残留についての手紙と定期報告を提出する予定です……

その後はレイストーン基地に行つて、カシウス准将と面会した後にヴァレリア湖に船を出してもらうことになっています」

「軍事基地に帝国の学生を……いえ、それは良いとして船……ですか？ それはまたどうして？」

「ヴァレリア湖に沈んでいるリベルⅡアーク——浮遊都市の探索をしようかと考えています」

「浮遊都市は水の中に沈んでいるんですよ？」

「大丈夫です。中に入る当てがありますから……」

それが終わったらボース側の岸に降ろしてもらつて、ボース市に行つてメイベル市長と面会してボースで一泊する予定です」

「……三日目はどうするつもりですか？」

「まずラヴェンヌ村、古竜の被害があった村を見に行くつもりです。その後は霧降りの谷という所でその古竜を探すつもりです」

「む？ レグナートに会ってどうするつもりじゃ？」

「実はリベールにいた時に俺は彼と会っていないんですよ……」

彼には「大崩壊」の時の話を聞いてみたいのと、あとはカシウス師兄のように一度腕試しに胸を貸してもらおうかと考えています」

「『聖獣』に腕試しとは」

「先日『暗黒竜』の件がありますから。俺がもつとうまく立ち回れたら『テスタロツサ』を使われずに治める事はできたはず……」

あのサイズの魔獣と戦う経験はなかなかできませんから、ただまだ霧降りの谷にいるかは分かりませんが」

「……………それで四日目はどうするつもりですか？」

「四日目はロレントに行ってエステルさん達と会うつもりです……」

その後はルーアンに戻ってみんなと合流してからグランセルの祝賀会に行くつもりです。それで次の日はそのまま帰りの国際船に乗るだけです」

締めくくったリインの予定にクレアとローゼリアは押し黙る。

「それで……………移動中はこの資料を読み込むのか？」

過密スケジュールに呆れながらローゼリアはテーブルの中央に置かれた薄くない二つのファイルを見下ろす。

「エマからは修学旅行の名目ではぼ遊びに行くと言っていたのだが？」

「ええ、Ⅶ組のみんなには俺の挨拶回りに付き合わせるの悪いですから、リベールでは完全に別行動ですね……」

みんなの予定は二日目にルーアンで海水浴をするつもりみたいです」

「その予定を本当にこなすつもりなのか？」

「大丈夫です。兄弟子のアリオス師兄から効率の良い時間の使い方を実地で教わりましたから、何の問題もありません」

「問題しかありませんっ！」

胸を張って言い張るリインにクレアを思わず声を上げて反論していた。

「ク、クレアさん…………？」

「リイン君……」

クレアは冷笑を浮かべてリインに言う。

「たしかサラ教官が引率という形で同行するんですけどよね？　いますぐここに呼んで下さい」

「え……いや、でも……」

「呼んで下さい」

「……………はい」

有無を言わせない圧力に屈してリインは《ARCUS》を取り出すのだった。

60話 リベールI

リベール王国。

エレボニア帝国の南に位置する小国。

首都ヘイムダルからの国際船には旅行者に混じってトールズ士官学院Ⅶ組と、先輩四人、そして引率者という形でサラが乗っていた。

「何やってんだよお前ら……」

広く造られた船内には長時間の空の旅に備えた様々な施設が造られている。

子供のための遊具広場。

大衆向けの娯楽小説を揃えた図書施設。

日を跨ぐことから食堂も当然完備されており、街の宿以上に充実した施設の数々が旅行者をもてなしていた。

そんな中でクロウは一同を見回して顔を引きつらせた。

「お前ら……せつかくの旅行なのに何してんだよ!?!」

その施設の一角。

多目的ホールに備え付けられたテーブルや椅子を並べて勉強会を始めようとしている一同にクロウは抗議の声を上げる。

「それでもお前らは年頃の男女なのか! もっとあんだろこう……青春みたいなのがっ!?!」

よりによって俺に何言わせるんだと考えながらクロウは叫ぶ。

「ご、ごめんね、クロウ君。アンちゃんやっぱりみんなを付き合わせちゃうなんて悪いよ」

「ふ、トワ。そんな気遣いはあのバカを付け上がらせるだけだ」

クロウの指摘にトワが申し訳なきような顔をするが、アンゼリカがその必要はないと言い切る。

「元々ライン君のおこぼれに預かってのリベール旅行。その彼がこの間にも勉強に励むというなら私たちもそれに倣うのが筋というものだろ?」

「そんな無理に付き合わなくてもいいんですけど、勉強の内容も授業

のものとは違いますし」

「いや、アンの言う通りだよ……」

それに学院の授業と全く無関係だとは言えないし、それに何も一日中勉強しようと言っているわけじゃないんだから」

恐縮するリインにジョルジュは気にしなくて良いと返す。

「くそつ、味方がいねえ……後輩たち、お前達もせっかくの楽しい旅行なのに勉強なんて嫌だよな!」

「いえ、将来父の跡を継ぐ身として通商会議を通して見る世界の知識を深めることは当然のことです」

偽名クリスなセドリツク皇子は当然とばかりに今の状況を受け入れていた。

「右に同じだ。将来クロイツエン州を治める者として通商会議の議題は無視できない」

「私もそうだな」

クリスに同調するのはユーシスとラウラの貴族組。

「僕も似たような理由で勉強会は歓迎だな」

「私も貴族だからとは違うけど、ラインフォルトとして気になるわ」

そしてマキアスとアリサもそれに頷く。

「元々、俺は世界が知りたくて故郷を飛び出してきた身。それを学べるのなら異論はない」

「そうですね。巡り巡って私たちの生活に影響を及ぼすものですから知っていて損はないと思います」

義務ではなくても真面目な性格からガイウスとエマは反対することとはなかった。

「真面目過ぎるだろ。お前達はここまで来て勉強なんて嫌だよな?」

一縷の望みを抱いてクロウはバイオリンを持ち込んでいるエリオットと、VII組の中で最もものぐさなフィーの二人を見る。

「えつと僕は……」

「わたしは別に構わないかな?」

数学とかなら遠慮したけど、社会情勢とかは重要だし猟兵に関する議題もあるらしいから」

「ちつ……よしエリオット。ちよつと付き合え」

「え……僕？」

このメンバーの中で唯一明確な理由を示さず、流されて勉強会に参加しようとしていたエリオットの肩にクロウは腕を回す。

「娯楽室にはビリヤードとかあったからな。それに俺は今ブレードっていうカードに嵌ってるから付き合えって」

「え、え……ええっ!？」

拒絶する間も、周りが止める間も与えずクロウはエリオットを連れて出て行った。

「クロウ君ったら、もう……」

「止めなくてよかったんですかサラ教官？」

「別に授業の一環ってわけじゃないんだから私が口を挟む事じゃないでしょ？」

エリオットはエリオットでもう少し自己主張することを覚えた方が良いしね」

頬を膨らませるトワの横で、ジョルジュがサラに尋ね興味なさそうな言葉が返って来る。

「だから旅行中は教官なんて呼ばなくて良いわよ」

そう言っつてサラは一同に背を向ける。

「クロウじゃないけど勉強も程々にしておきなさい。つていうか私もこんなところまで来て授業をするのは遠慮させてもらうわ」

真面目な生徒達だということは良いことなのだが、リインを含めて真面目過ぎないかとサラは思う。

全員に言えることだが少しくらいクロウの遊び心を見習って欲しいとも思える。

「とりあえずクロウとエリオットは私が見ておくから——」

「とか言っつて、ラウンジのビールが目的じゃないんですか？」

大人の体裁を取り繕って出て行こうとしたサラの背に、リインの一言が突き刺さる。

「リイン、いくらサラ教官——サラさんがお酒好きでもこんな朝から飲むわけないだろ……ないですよね？」

「しかし最初の特別実習の時は昼前からケルディックの地ビールを堪能していたな」

マキアスの不安に頷く様にラウラは過去のことを思い出して呟く。

一同の猜疑に溢れた眼差しを背に受けてサラは――

「じゃ、そういうことで」

ラインの指摘も、マキアスの確認も、ラウラの非難の全てをスルーしてサラは出て行くのだった。

「逃げたな」

ラインの呟きを否定する者は誰もいなかった。

・*

《西ゼムリア通商会議》

八月末日にクロスベルで開かれる初の国際会議。

経済だけではなく、安全保障を含めた総合的な議論が交わされるその会議。

ラインはそれに出席する帝国政府代表のオズボーン宰相の護衛官として参加することになったが、その仕事はただ漠然と彼の身を護れば良いというものではない。

会議に参加するわけではないが、会食などの場で他国の要人から話しかけられる場合もあるだろう。

そこで無知を晒せばそれはそのまま帝国の恥となる。

ラインだけではなく、随行団の手伝いとして帝国政府に誘われたトワもまた恥をかかないための知識を学ぶ必要があった。

そして無関係ではあるが、世界の情勢ということもありVII組とその先輩たちは彼らの勉学に参加することに抵抗はなかった。

その勉強も一段落して、それぞれが改めて飛行船の船旅を満喫しようとして雑談が始まるのだが、ラインは険しい顔をして目の前のファイルの一文を凝視していた。

――百日戦役の直前から数ヶ月に渡り行方をくらまし、その後皇帝陛下に拝謁し、百日戦役の全権を任される……

普通の人なら不信に感じる出来事だけの空白の期間だが、その空白期間はリインにとって特別な日を含んでいた。

——オズボーン宰相は既婚者……

ページをめくったリインは既に何度も繰り返して読んだ一文を読む。

——百日戦役の直前に自宅を猟兵に襲撃されて妻子は死亡……

クレアが用意してくれた資料にはその妻子の名前はなかったが、それでも点と点を結び合わせることは《識の目》を使わなくても容易だった。

あと二年と忠告し、《黒》との繋がりを示唆したオズボーン宰相。

《鬼の力》の正体である《鋼》の——《黒》の呪い。

オズボーン宰相が行方をくらました時期とリインがテオに拾われた時期の一致すること。

加えてリインの過去を知っているオーラフ・クレイグの上官だったこと。

それらに明確な証拠があるわけではないが、その可能性をリインは確信してしまう。

「——イン君……リイン君？」

「え……？」

自分の名前を呼ぶ声にリインは我に返って顔を上げた。

「どうかしたのリイン君？」

「トワ会長……」

「もしかして疲れちゃった？ ごめんね、私の勉強に付き合わせちゃって」

「いえ……」

リインは首を振って、それまでの思考を呑み込む。

「オズボーン宰相の護衛官を引き受けて通商会議に参加するのは俺も同じです……」

むしろ俺の方こそ、付き合わせてしまってますみません。聞けばトワ会長も夏季休暇は自習するつもりだったそうですね」

「私はぜんぜん構わないよ。むしろ一人でやるよりも捗っているくら

いだから」

「それは俺も同じです」

トワの主張にリインは苦笑しながら同意する。

「それでやっぱリイン君は向こうでは一緒に行動できないのかな？」

「そうですね。予定は立ててみましたが挨拶回りに各地方を巡るとどうしても時間が足りないですから」

「せっかくだからやっぱみんなで遊びたいんだけど」

「その気持ちは嬉しいですが、リンにリベールの今の姿をじっくりと見せて上げたいんです」

「みんなと一緒にじゃダメなの？」

「ええ、挨拶回りの他にもやることはあるので、すみません……」

「そういえばラウラ、今朝アネラスさんから手紙が来ていたけど手合わせの件は受け入れてくれるって」

トワに申し訳ないと謝罪してリインはラウラを呼ぶ。

「そうか。感謝するリイン」

その報告を聞いてラウラは嬉しそうに頷く。

「その話だけど、わたしも一緒に行つていい？」

「フィー？」

「前にトリスタに来た時にはあまり話さなかったけど、リインの姉弟子にはちよつと興味ある。それから……」

「それから？」

言い淀んだフィーにリインは首を傾げて続きを促す。

「できたらで構わないけど、遊撃士の仕事を体験してみたい」

「フィー……」

「別にサラに義理立てするわけじゃない。ただわたしたちが特別実習でしてきたことはあくまでも『遊撃士の真似』だから本職の動きを見てみたいだけ……」

それにこっちの都合で手合わせしてもらうんだから、対価は体で支払う」

何も言っていないのに言い訳をするように言葉を並べるフィーに

リインは苦笑する。

何に対してもあまり興味を示さなかったフィーの主張に、彼女の成長を感じずにはいられない。

「ふむ、遊撃士の仕事か……言われてみれば確かに私たちはちゃんとそれを知っているわけではないな……」

フィー、もしアネラス殿の承諾が得られたら私も一緒にやらせてもらっても構わないか?」

「それは良いけど」

「二人とも、それなら俺も一緒に行かせてもらっても良いだろうか?」

「ガイウスも?」

意外な人物が名乗りを上げたことにフィーは首を傾げる。

「ああ、ノルドでの特別実習の時に遊撃士と会って少し興味があったんだ」

「それなら——」

「えっと……あまり大人数で押し掛けるのは……」

ガイウスに便乗してさらに誰かが声を上げるのをリインは止める。

「とりあえずリベールに着いたら連絡してみる。日程は三日目以降で構わないか?」

「いやできることなら二日目からが良いが」

「そだね。二日目から四日目までリベールの遊撃士は凄腕ばかりって聞くからじつくりと見ておきたい」

「俺はどちらでも構わないが——」

「異議ありっ!」

意気込むラウラとフィー、そしてガイウスの意見にアンゼリカが異を唱える。

「二日目はみんなで海水浴に行く予定だったじゃないか!? そんな急がなくても——」

「え、ええ。海での遠泳には興味はあるのですが……」

「何か身の危険を感じるからやっぱり遠慮しておく」

言い淀むラウラに対してフィーは歯に衣着せずにはつきりと言った。

次の瞬間、アンゼリカは膝から崩れ落ちた。

「フィー君にサンオイルを塗りたくる私の野望が……」

口から漏れた欲望にフィーはアンゼリカから距離を取る。

「えっと元氣を出してください。僕は海水浴に参加しますから」

「男たちはどうでも良い」

フォローしようとしたクリスにアンゼリカはきっぱりと言い切った。

「そういえばみんなは三日目以降はどうするつもりなんだ？」

二日目の海水浴はアンゼリカの発案と強硬な姿勢で無理矢理決定したのだが、他の日程についてリインは改めて尋ねる。

「三日目からはちょうどその日に開催されるらしいジェニス王立学園の学園祭に行こうかと考えている」

「十月にはトールズでも学院祭があるからな。せいぜい参考にさせてもらおうとしよう」

答えてくれたユースとマキアスの言葉にリインは目を細める。

「……………そういえばそんな時期か」

偶然に重なった日程にリインは思わず当時のことを思い出す。

「もう二年か…………」

「リイン？ どうかしたのか？」

「いや、何でもない」

マキアスの呼びかけにリインは笑顔を取り繕って応える。

「そういうリインさんは本当にあのスケジュールでリベールを巡るんですか？」

「ああ、市長たちは今月の通商会議や来月の女王生誕祭に向けて多忙らしいから、それに市長の他にも顔を見せにいかないといけない人が多いから」

各都市の市長の他の例を思い浮かべれば遊撃士協会の受付の人達が思い浮かぶ。

「ですが本当に古竜に会うつもりなんですか？」

「帝国時報でも載っていたわね。《異変》の直前に現れてボース地方で暴れ回った暗黒時代の魔獣って」

恐る恐る確認するエマに聞きかじった情報をアリサが呟く。

「実際のところ、彼は結社に操られていただけで魔獣じゃなくて女神が遣わした『聖獣』なんだけどな」

「『聖獣』……至宝と共に語り継がれる聖なる守護獣のことか……」

いや『暗黒竜』が存在していたのなら実在しているもおおかしくはないのか」

リインの答えにマキアスは考え込む。

すでに別の聖獣と会っていることをリインはあえて指摘しなかった。

「とは言っても、今レグナートが何処で何をしているか分からないから会えるかは分からないけどな」

「しかし、伝説にうたわれた聖なる竜か……一度見てみたいものだな」そんな呟きをユーシスが漏らすと、不意に飛行船が揺れた。

「何だ？」

『ご、御搭乗の皆さんに連絡します……』

緊急事態のため、本飛行船は最大船速でこの空域を離脱します……お客様は係員の指示に従い、体を座席に固定してください』

緊張をはらんだアナウンスが船内に響き渡る。

「緊急事態って、まさか墜落するのか!？」

「いや、エンジントラブルなら最大速度を出すはずがない。だとしたら積乱雲にでも遭遇したのか……」

それとも空賊でも出たのかもしれない」

「空賊か……ふふ、この飛行船を狙う賊は随分と運はないな」

ジョルジュはいち早く可能性を模索し始め、アンゼリカは落ち着いた様子で笑う。

「……………まさか……………」

騒然とする一同の中でリインは近付いてくる気配に顔を引きつらせる。

「どうかしたのリイン君？」

そんなリインにトワが首を傾げる。

「いや……………もしかしたら——」

「大変だよみんなっ！」

何と説明しようかと考えながらの言葉は部屋に飛び込んで来たエリオットの叫びに遮られた。

「エリオット、どうしたんだそんなに慌てて」

「外……窓の外っ！ 魔獣がこの飛行船を追い駆けて来ているんだよっ！」

「馬鹿なっ！ いくら魔獣でもこの高度を活動圏にしている種は存在しないはず」

エリオットの言葉を否定しながらもユーシスは雲海を望める窓へと近付き、それを見た。

「なっ!?!」

絶句するユーシスと同時に窓が遮られて部屋が暗くなる。

「ひっ——」

窓を覆い隠したそれは大きな目で船内を覗き込んでくる。

「ああ……やっぱり……」

リインは予想が当たったと肩を竦め、固まってしまった一同を他所に窓に近付く。

「初めまして、俺の名前はリイン・シユバルツァー。貴方のことはエステルさん達から聞いています」

窓に触れ、ガラス越しにリインは語り掛ける。

「貴方が来た理由は想像できます……」

ですが、ここで話をするのは多くの人に迷惑がかかるので、二日後貴方が二年前に遊撃士と戦わされた場所で話をしませんか？」

『……いいだろう』

リインの呼びかけに厳かな人の言葉が返って来ると、その存在は飛行船から離れていずこかへ飛び去って行くのだった。

「リ……リイン……いい、今は……」

腰を抜かしたアリサが声を震わせて説明を求めろ。

「ああ……うん、彼がさっき話していた『聖獣』のレグナートだ」

バツが悪そうにリインが簡単に紹介する。

おそらくリンの気配、つまりは『空の至宝』の気配を察知して様子

を見に来たのだろう。

「とりあえず俺はレグナートが襲ってくることはないってスタッフの人に――」

バンツ！ とリインの言葉は勢いよく開かれた扉の音に掻き消された。

「あんたって子はどうしてこう次から次へと厄介事を呼び寄せるのよっ!？」

紫電の速度を持って駆け込んできたサラはリインの胸倉を掴んで激しく振るのだった。

・*

リベール王国。

ゼムリア大陸の南西部に位置する伝統ある小国。

エレボニア帝国と比べれば国土も人口も遥かに劣っており、二つの大国と国境を接しながらも高い導力技術と優れた女王の外交手腕によって、対等の関係を保っている。

「ここがリベール……」

飛行船から降り、トランクの中から解放されたリンは周囲を見回して呟く。

「ああ……ここが君の眷属たちが地に降りて築いた国だよ」

リンの呟きにリインは肯定を返す。

が、リンは周囲を歩き交う人々の顔に釘付けになって微動だにしないかった。

「リン……」

呼びかけにもリンは応えない。

彼女が見ている光景は特に珍しいものではない。

夕暮れに染まった街並み。

様々な人々がそれぞれの表情で日々を過ごしている穏やかな日常の風景。

もつともその光景の一部にはとても日常とは言い難い部分もあつ

た。

多くの人が行き交うはずの空港だが、そこには空白があり、その飛行船を出迎える二人の女性が民衆の注目を浴びていた。

その内の一人が進み出て、もう一人が付き従う。

「ようこそ、トールズ士官学院の皆さん。それに初めまして貴女がリンさんですね」

リベール王国王太女であるクローディアは笑顔を浮かべてリイン達を出迎えた。

「お久しぶりです。クローディア殿下、それにユリア准佐も」

「こ、この方が……」

「リベールの至宝……」

マキアスとラウラが一同の驚愕を代弁する。

「ふふ、まさか殿下にお出迎えされるなんてね」

「やあ久しぶりだねクローディア姫、それともこの場ではクローゼ君と呼んだ方が良いのかな？」

「サラさんとアンゼリカさんもお久しぶりです」

動じずに言葉を掛ける二人にクローディアは微笑む。

「初めまして、私はリベール王国王太女クローディア・フォン・アウスレーゼと申します。皆様、どうかお見知りおきを」

61話 リベールⅡ

「はあ……まさか初日からお城に泊まることになるなんて」

宛がわれた大きな部屋にエリオットは感嘆のため息を吐く。

一目で豪華だと分かる造りの大部屋。

男子達、Ⅶ組と先輩二人の分のベッドを用意されているのにそれでも十分に広い部屋と感じる部屋は流石グランセル城の一室と言えた。

「最後は王宮に泊まることになっていたので、それが早まったと思えば良いんだが……やはり何だか落ち着かないな」

「確かにこれまでの特別実習ではいろいろな所に泊まったが、これは極めつけだな」

広々とした空間に落ち着かないとマキアスは眩き、ガイウスも同意する。

最初の予定では女王陛下への謁見が済んだら宿泊地となるルーアンへ移動するはずだったのだが、レグナートの出現により定期飛行船は運休してしまったため一同はグランセル城に泊まることになった。

「やれやれ、動揺し過ぎだ」

「こういうのは慣れですよ」

そんな庶民を丸出しにして怖いという三人にユーシスとクリスはそれぞれの苦笑を浮かべる。

「坊ちゃんたちの言う通りだぜ。俺達はお客様なんだから堂々としていればいいんだよ」

「クロウ、僕達はあくまでもリイン君のオマケなんだからもう少し弁えようね」

開き直るクロウにジョルジュはため息を吐く。

そしてそのリインは宛がわれたベッドに腰掛けて、肩を落として疲れた様に項垂れていた。

「えっと……リイン、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

その声は言いようのない疲れが滲んでいた。

「それにしてもリインって本当にクローディア殿下と仲が良かったん

だね」

「女王陛下も帝国の皇族とは違った意味で気さくな方だったな」

「リベールは身分制度は象徴的な意味の方が強いから、その違いだろうな……」

それより今日は一日中空の上だったから明日に備えて早く休もう。

明日はルーアンに移動しないといけなんだから」

「そう急ぐなよ……ところで後輩の明日からの予定はほとんど空いたんだよな？」

「ええ、まあ……」

クローディアからのお説教を思い出しながらリインは頷く。

「リベールでは九月に《女王生誕祭》があるんです……」

八月のクロスベルの《通商会議》も迫っていますから、この時期はみんな忙しいと思っていたんですが」

だがリインの気遣いはむしろ無用で、通商会議という新しい試みに対して綿密な話し合いをするために週一で各都市の市長が集い会議が行われている。

帝国では考えられない頻度とネットワークの軽さだが、それはリベールが小国だからこそできる強みでもある。

「四日目の祝賀会の日には挨拶はすれば良いと言われたので、だいぶ時間には余裕は出来ましたね」

「なら明日の海水浴はお前も参加か？」

「いえ、それはどちらにしても俺はみんなとは別行動するつもりです」

「おいおい、何でだよ？」

「市長たちの挨拶回りは省略できましたが、各地の遊撃士協会やお世話になった人達は沢山いますから」

「こいつはどこまで真面目なんだ……」

せっかく遊ぶ時間ができたのにそれを棒に振るリインをクロウは理解できない生き物のように見る。

「酷い言い掛かりですね。それに正直、遊ぶ気持ちにはなれないんですよ」

「ちっ……お前がいればナンパが成功する確率が上がるって言うの

に」

「おい」

漏らしたクロウの言葉にリインは白い目を向ける。

しかし、そんな侮蔑の眼差しを向けられてもクロウは気にも留めずに一同に向き直る。

「時に後輩共。この際だから聞いておきたいんだが、お前達は誰が好みなんだ？」

「こ、好みって……」

「い、いきなり何を言い出すすか先輩っ!？」

クロウの言葉にエリオットとマキアスがあからさまに狼狽える。

「はっ、惚けんなよ……」

特科クラスVII組、あれだけの綺麗どころが揃っているんだ。そういう風にお近づきになろうって少しくらい考えたことがあるんだろ？」

「何を言うかと思えば下らない」

「お、何だアルバレア公爵様は逃げるのか？」

「安い挑発に乗るつもりはない。そもそも俺はお前達のように伴侶をえり好みする立場にはないのだから興味などない」

「はっ、つまんねえ返しだな。誰がそんな重い話しろって言った？」

俺はお前達にどんな女がタイプなんだって聞いているだけだぜ？

将来の伴侶じゃなくてお前は女のどの部分に魅力を感じるのか話そうぜって言ってるんだ」

「フン、だから下らないと——」

「あれあれ、ユーシスお坊ちゃんは意外と子供だったんだな？」

「ちよつとクロウ——」

流石に言い過ぎだとジョルジュが親友を止めようとする。

「なっ、クリスも興味あるだろ？」

「はい！ 何だか如何にも学生の旅行って感じの話題ですよね！」

目をキラキラさせて振ってきたクロウにクリスは楽しそうに頷く。

「ほれほれ、次期皇帝陛下は乗り気だぞ？」

それとも何か？ お前らは異性よりも同性の方が良いっていうタイプなのか？ もしそうなら以後俺の半径五アージュ以内に近付い

て欲しくないんだが」

「そんなわけないでしょっ！」

「くっ……卑怯な……」

煽るクロウにマキアスとユーシスは忌々しいと言わんばかりに歯噛みする。

「クロウ先輩……どうしてそんなことを？」

クリスを味方に付け、逃げ道を塞がれたがそれでもエリオットは何とか逃げ道を探すために尋ねる。

「後輩共は知らないだろうから教えてやるが……」

去年は女子の人気をゼリカの奴に独占されちまって野郎どもは寂しい灰色の青春を送るはめになっちまったんだ」

「確かにアンゼリカ先輩の人気は凄いらしいな。一年生の間でもお姉様と慕っている者たちも多いそうだ」

クロウの哀愁を漂わせた言葉にガイウスが頷く。

「なら分かるだろ！　これからの学院生活をバラ色にするためにこの一夏のバカンスで女子の誰かとお近づきになるのは最大の好機……好機……」

「クロウ？」

握り拳を作ってまで力説していたクロウは何を思ったのかがつくりと肩を落とした。

「ダメだ……事故物件しかいねえ。グツバイ俺の青春……」

「何なんだこいつは？」

「先輩、まさかとは思いますがお酒を飲んでないですよね？」

勝手に盛り上がって、勝手に消沈したクロウにユーシスとマキアスは得体の知れないものを見るようにドン引きする。

「ちくしょうっ！　こうなったら明日はリベールの砂浜でかわいい女の子をナンパするぞ付き合え後輩共」

「馬鹿馬鹿しい勝手にやっている」

「同感だ。そんなナンパなんて男として不誠実なことするわけがない」

付き合っていられないとユーシスとマキアスはクロウに背を向け

て――

「何だ逃げるのか？」

その背にクロウは挑発の言葉を投げかける。

「何………？」

「ま、ここは帝国じゃないからアルバレアの威光が通用しないから仕方ねえか……」

クールを気取っているが、実際は女の子に声を掛ける勇氣もない恥ずかしがり屋なんだろう？」

「ユーシスが……」

「……恥ずかしがり屋……」

クロウの言葉をオウム返しにして繰り返したエリオットとガイウスは次の瞬間、吹き出した。

「あははっ！ ユーシスが恥ずかしがり屋って………そんな――あははっ！――」

「クロウ先輩、それはあまりにも――ククク……」

女子に声を掛けようとしておどおどしているユーシスを想像してエリオットとクリスは堪え切れずに声を上げて笑う。

「ふ、二人ともそんなに笑ったらユーシスに悪いだろ………くっ――」

声を上げて笑う二人をガイウスは宥めようとするが、彼も堪え切れずに吹き出す。

「それからマキアスは……お前、入学式の頃から太っただろ？」

「なっ!? 何をいきなり!？」

「そんな贅肉がついた体に自信がないから適当な言い訳をして逃げるんだろ」

「ち、違うっ！ 僕は――」

「でも確かにマキアスって二つの意味で丸くなったよね？」

「確か最初の特別実習から食事の量が増えていたみたいだけど運動量はそこまで変わってないし」

「ああ、普段はあまり気にしていなかったが言われてみるとクロウ先輩の言う通りだな」

三人の視線が集まってマキアスはたじろぐ。

「くっ……太った……くくく……」

そしてユーシスはそんなマキアスに顔を伏せて体を震わせる。

「まあ、自分に自信がないなら無理強いはいしねえよ……何と言ってもこの俺がいるんだから隣に立つのも覚悟がいるだろし」

「ふん、アンゼリカ先輩に負けたくせに随分と大きな顔をするのだな」
「先輩って本当に地元でモテていたんですかね？ 見栄を張っているだけじゃないんですか？」

勝ち誇るクロウに対してユーシスとマキアスの辛辣な言葉が突き刺さる。

「言っではならんことを……上等だ！ お前達には先輩の偉大さを思い知らせてやるっ！」

「望むところだ」

「返り討ちにしてやる」

売り言葉に買い言葉。

まんまとクロウに乗せられたというべきなのか、ユーシスとマキアスははらしくもなくナンパ勝負を受けてしまう。

「……………ジョルジュ先輩」

「うん、ごめんね。本当に……………」

遠い目をするリインにジョルジュは申し訳なささと恥ずかしさを混ぜて謝る。

「クロウ先輩、ナンパをするなどは言わないですが、くれぐれも節度を持って遊んでください」

「わーってるよ。ところでリイン、改めて聞くがお前の本命って誰なんだ？」

「何でそこに話を戻すんですか？」

「いや、深い意味はないぞ。ただ先輩として旅行での話題を提供——」
「賭けているんですか？」

言い訳を並べるクロウだったが、リインの鋭い切り返しに言葉を詰まらせるのだった。

凶星を刺されて固まるクロウにリインはため息を吐いた。

なお男子陣に宛がわれた対面の、女子の部屋では——

「さて、みんなせっかくこうして集う機会ができたのだからここは一つ好みの女の子について存分に語り合おうじゃないか」

「アンちゃん、それを言うなら好きな男子じゃないかな?」

女子部屋も男子達とやっていることは変わらなかった。

・*
・*

早朝、まだ日出には少し早い時間に目を覚ましたリインはクラスメイト達を起こさないように静かに部屋を出た。

多少の罪悪感を覚えながら、リインは人目を避けて城の奥へと進み、空中庭園へと辿り着く。

「……………割り切ったつもりだったんだけどな」

二年前の光景を思い出しながらリインは自嘲するように苦笑して手摺に触れる。

今でも鮮明に思い出せる彼女が初めて名乗ってくれた場所。

彼女がいるはずなんてないのに、気付けば目が覚めて、そしてこの場所に足を向けていた。

ただ何をするでもなくリインはそこに佇み、日が昇るのを眺める。

「早いですねリイン君」

そんなリインの背にクローディアが声を掛けた。

「クローゼさん……………すみません」

「謝らなくて良いですよ」

頭を下げるリインに苦笑をしながらクローディアはリインの横に並んで湖を眺める。

「昨日は夜遅くまで楽しそうでしたね」

「本当にすみません」

「リイン君にちゃんと友達が出来ているようで安心しました」

「いや、クローゼさん。俺をどういう風に見ているんですか?」

「ふふ、さあどうでしょう。とりあえず私は二年前のリイン君を知っていますから」

「むう……………」

それを引き合いに出されてしまえばリインは唸るしかない。

「実は少しだけ心配だったんですよ。セドリツク殿下とは年始の行事で会っていましたが、オリビエさんもトールズ士官学院に通っていた時期があったそうですから」

「お願いですから、その偏見だけはやめてください」

恐ろしいことを言い出すクローディアにリインは狼狽する。

トールズ士官学院を卒業したらみんな、ああなると想像するだけでもげんなりする。

「ふふ……ところでリイン君、何かあったんですか？」

「……………別に何もありません」

「それじゃあどうしてここに？」

「ここはあの子が初めて名前を覚えてくれた場所です。丁度こんな風に朝日が昇る時に」

リインはクローディアから視線を移してヴァレリア湖から昇ってくる太陽に顔を向ける。

「そうでしたね……でも何かあったことは確かですよね？」

クローディアの指摘にリインは押し黙る。

顔を逸らしたリインの横顔を見つめるその眼差しは確信を得ているように強く、言い逃れはできそうになかった。

「……………どうして分かったんですか？」

「どうしてでしょうね？」

「アネラスさんやエステルさんになら気付かれても仕方ないと納得できるのに、まさかクローゼさんに気付かれるなんて」

「あら、それはどういう意味ですか？」

「二年前に会ったクローゼ・リンツさんからは想像できないというだけですよ」

先程の意趣返しをしてみると、クローディアは苦笑をしてそっぽを向く。

「……大丈夫です。確かに衝撃的な事実には気付きましたが、ちょっと気持ちの整理に手間取っているだけですから心配いりません」

「そうですね、それは良かった——なんて納得すると思いませんか？」

「え？」

「話して下さいリイン君……」

私には聞いてあげる事しかできませんが、このまま気持ちの整理が終わってしまったら一人で抱え込んでしまうんじゃないですか？」

「それは……」

クローディアの指摘にリインは目を泳がせる。

「でも、ほら……クローゼさんは今月末の通商会議に参加するんですよ？」

「なら、俺なんかのことで変な心労を掛けるわけには——」

「リイン君、次に、自分なんかで卑下したら怒りますよ」

笑顔で凄まれたリインは言葉を詰まらせて黙り込む。

一歩も引こうとしないクローディアにリインは頭を抱え、唸り、熟考して、ため息を吐く。

「本当にどうなっても知りませんよ」

「ええ、構いません」

「後、まだ俺の推測だけで確定した話じゃないですから他言しないでください」

「分かっています」

躊躇わず領いたクローディアにリインはもう一度ため息を吐いて空を仰ぎ、それを漏らした。

「帝国の宰相、ギリアス・オズボーンのこととは知っていますね？」

「ええ、二年前にオリビエさんがリベールを発つ前日にリベールに訪問されましたから」

「どうやらその鉄血宰相が俺の實の親みたいですよ」

「え……？」

リインの口から知らされた事実にくローディアは固まる。

「主観を排した《観の目》と混在する情報から正解を導き出す《識の目》の両方の視点から今ある情報を照らし合わせてみれば、あの人が一番その可能性が高いんです」

「それは……それは確かに衝撃的な事実ですね」

驚きながらもクローディアは呆ける前にリインの言葉に頷く。

「……………あ、はい……………そうです」

しかし、リインは同意したクローディアの言葉に一瞬虚を突かれたようにするとすぐに取り繕って頷いた。

「俺がまさかあの『鉄血宰相』の息子だったなんて驚きですよ。あははは」

「リイン君、もしかして今の話じゃないんですか？」

誤魔化そうとするリインに惑わされずクローディアは踏み込む。

「そんなことないですよ。俺があんな強面の髭面になると将来約束されたことに落ち込んで——」

「リイン君っ！」

強い口調でクローディアはリインの言葉を止める。

その眼差しにリインは捲し立てた言葉を止めて、力のない笑みをこぼす。

「そうです……………『鉄血宰相』の息子だった……………それ自体は別にあまりショックではないんです」

今のリインは胸を張ってシュバルツアー家のリインだと言える。

だからこそ『鉄血宰相』の息子だったとしても、リインはそこに驚きは感じて動揺はしていない。

「彼は『あと二年』だと言っていました……………」

おそらくそれが帝国で結社が《異変》を起こす時期であり……………その二年は俺にとって残された時間だと言うことです」

「……………えっ？」

リインの口から出て来た言葉は、先の誰の息子だったかを明かす以上にクローディアを固まらせた。

しかし、リインはそんなクローディアに構わず、自分の中の思考を口にする。

「俺は十年前に胸に致命傷を負っていた……………」

生き永らえたのは《黒の騎神》が俺を『不死者』にしたから、《鬼の力》はその副産物でしかなかった」

リインは胸に手を当て、本体から独立してもなお細い糸で繋がっているその存在に自覚する。

厳密には「不死者」とは少し違いかもしれないが、その在り方はおそらく大差ないだろう。

「俺がこうして生きているのは《黒の騎神》の力があつてこそ……
《黄昏》を止めるために《黒の騎神》を倒せば、それは同時に俺の命を終わらせるということになるはずですよ」

《贄》や《予備》から外れても、《黒》に生かされている事実は消えない。

「それは……つまりリイン君は……」

「二年、それがどんな結末だったとしても、俺の最後は決まっているでしょう」

はつきりと答えたリインにクロードディアは言葉を失った。

ギリアス・オズボーンが実の親であるということと同じように状況証拠だけの推論だが、おそらく間違っていないとリインは確信していた。

「そんな顔をしないで下さい」

何も言葉を返せず呆然と立ち尽くすクロードディアにリインは苦笑する。

「確かに今は戸惑いの方が大きいです。だけど今気付いて良かったと思っと思っています……」

直前で知らされたらきつと揺らいでしまったでしょうし、「聖女」のように背水の陣で《相克》に臨めるなら悪いことばかりじゃありません」

条件はそれこそアリアンロードと対して変わらない。

違いがあるとすれば彼女は《銀》の力を基礎にして「不死者」となっているため、勝ち抜けばそのまま生き永らえることができる。

しかしリインは《黒》の力を基礎にして「不死者」となっているため、勝つても負けても結末は変わらない。

《灰》にその力を引き継がせれば良いのかもしれないが、《黒》の力が染みついた自分の体では《灰》の力で「不死者」になり直すのも不可能。

「それにあと二年、それだけあれば覚悟だつてできます」

「リイン君……貴方はそれで良いんですか？」

声の震えを隠せずクローディアは言葉を絞り出す。

「良い訳ないですよ」

そんな言葉にリインは当然の答えを返す。

「母さんや、あの子」から譲ってもらった命……

このまま黙って終わるのを待つなんてできるわけないじゃないですか」

“不死者”を蘇生する。

方法について全く当てがないわけではない。

“空間を司る”リンでは“不死者”は専門外であり、頼る力はまだ何の“力”もないノイの方になる。

「……教材にするなら丁度良いか」

今は自由にさせているが、二年後ノイも《黒》や己の“力”と向き合う時が来るだろう。

もちろん我が身可愛さに“至宝の力”に頼ることに迷いはある。

だが、それを踏まえてちゃんと話をする——いや助けて欲しいと頼るべきなのだろう。

「うん……」

言葉にして、方針が固まったリインはそれまで鬱屈としていた心情が晴れるのを感じた。

「未来のためにやるのが一つ増えただけでやることは何も変わらない……」

話を聞いてくれてありがとうございます。おかげで迷いは晴れました」

晴れやかな顔を見せるリインにクローディアは初めに言うつもりだった、もつと自分を労われという忠告を最後まで言うことはできなかった。

62話 リベールⅢ

ルーアン飛行船発着場。

浜辺で海遊びに興じる生徒達を残してサラはツアイスに向かう飛行船を前にリインに言葉を掛けた。

「それで心の整理はついたのでかしら？」

「……サラさん、何のことですか？」

「別に誤魔化さなくて良いわよ。周りにはあの子たちはいないんだし……」

楽しい旅行に水を差さないように気を使っていたんでしようけど、私だって“あの子”とは一緒に過ごしていたことがあるのよ」

「サラさん……」

「大方、スケジュールを詰め込んでいたのもそこから目を逸らすためだったんでしようけど、何か踏ん切りがついたわけ？」

「ええ、とりあえず」

サラの言葉にリインは肩を竦めて認める。

“あの子”の墓と言えるものは全部で三つ存在している。

遺灰を納めたユミルのもの、王都グランセルに作られた《異変》の際に不幸にも亡くなった者達を悼む慰霊碑。

そして遊撃士達が戒めとして“あの場所”に作った中身のない墓標。

各都市の市長に会いに行く必要がなくなつて、それでもリインがクラスメイト達と離れる目的はその三つ目の墓参りだった。

「一人で行くつもり？ 私も行くつもりだったから一緒に行く？」

「いえ……今回は一人で行かせてください」

「そ……なら私は明日行くことにするわ」

サラはあっさりと引き下がる。

「ありがとうございます」

礼を言うリインにサラは黙り込むと徐に間合いを詰める。

「しゅきつとしなさいっ！」

「っ——」

そしてリインの背を力一杯叩く。

「慣れないかもしれないけど、そんな顔をして『あの子』に会いに行くつもり？」

「……………そこまでひどい顔をしていますか？」

「ええ、それはもう」

先月の特別実習が終わり、この日が近付くにつれてリインにはどこか張り詰めた緊張をサラは感じていた。

クラスメイト達はもちろん、一部を除いた教官陣も気付かなかつたわずかな変化。

サラが確信を得たのは、リインから行動予定表を提出された時。

遊ぶ暇どころか、余裕さえないスケジュールにサラはリインの危うさを久しぶりに思い出した。

「愚痴ならここで吐き出して行きなさい」

「……………」

サラの提案にリインは沈黙を返し、ためた息を吐いて空を見上げて言葉をこぼす。

「今でも思うんです……………」

やれることはあつたはず……………」

今くらいに《鬼の力》をあの時使えていれば、ヴァリマールをもつとうまく使えていたら、気付けばそんな事ばかり考えているんです」

「馬鹿ね」

「分かっています」

「貴方はその時、出せる全力を振り絞って諍った。だけどダメだった……………ならそれは仕方がないのよ」

「サラさん、それは——」

「貴方が感じている憤りは『終わってしまったこと』への後悔よ……………そこにいることさえできなかった私からしたら、羨ましい悩みだわ」

サラもあの時のことは後悔している。

古巣の猟兵団を問い詰めにリベールを離れたこと、もつと早く戻つ

てアネラス達と合流していれば、あの子”は死なずに済んだのではないか。

そして浮遊都市に自分も乗り込んでいけば良かったのではないかと後悔した。

「リイン、今の気持ちを忘れない事ね……」

また同じ状況に陥った時、その気持ちは超えられなかった《壁》を乗り越える力になってくれるはずよ」

「……………はい」

神妙な顔をして頷くリインにサラは苦笑してもう一度その背を叩く。

「ほら、そんな顔しない……………」

こつちのことは気にしないで良いわよ。羽目を外し過ぎないようにちゃんと見ておくから……………」

あとそれから久しぶりのデートなんだから花を忘れないことね」

「デートって……………はい、ありがとうございます」

離れて行く飛行船を見送ったサラはやれやれと肩を落とす。

「随分と大きくなったと思っただけど、根っこの部分は相変わらずか……………」

二年前の数ヶ月、リインの面倒を見ていた時のことを思い出してサラは苦笑した。

・*

ツアイス地方。

レイストン基地、リベールの軍施設でありリインにとっては兄弟子のカシウスが勤める職場。

しかし、挨拶もそこそこにリインは用意してもらっていた船に乗り込んでいた。

「それじゃあ向かう先はリベルIIアークでなくて良いんだね？」

「はい……………お願いします」

シード中佐の確認にリインは頷く。

船は浮遊都市が沈んだヴァレリア湖の中央を目指すのではなく、北西の湖岸を目指す。

「それじゃあ私たちはここで待っているから、終わったら声を掛けてくれ」

「ありがとうございます、シード中佐」

礼を言っただけで振り返る。

そこはかつて「結社」の研究所があった場所。

「随分と様変わりしているな」

あの時訪れたのは日が沈んでからだだったため周囲の景色は記憶にあるものとは印象が違う。

そもそも整地されているのだからと施設は一度解体され、ツアイス工場の第二工場として活用されている。

船着き場の他にも飛行艇が着陸できる発着場も造られており、あの頃の面影はない。

オーブメントが稼働している工場を一瞥し、リインは踵を返して歩き出す。

工場から少し離れた丘の上。

ヴァレリア湖を一望できる見晴らしの良いそこには綺麗に整えられた墓石があった。

「アネラスさん達が定期的に来ていたみたいだから綺麗にされているんだな」

墓の様子と周りの景色を見て、良い所に作ってもらえたのだとリインは安堵する。

「久しぶり……と言うべきなのかな？」

その墓にリインは苦笑を浮かべながら持ってきた花を供える。

彼女の遺灰はユミルに納められている。

故にここには何も無い。

だが、ここは「あの子」が命を散らした場所であり特別な何かを感じずにはいられない。

「俺は——」

ユミルの墓と同じように語り掛けようとして言葉に詰まる。

結局別れを済ませ、未来に繋がる約束を交わしたというのにリインはまだその「痛み」を感じずにはいられない。

「いや、このままじゃダメか」

叩かれた背中の感触を思い出してリインは思いつく言葉をそのまま口にする。

「君と出会ってから二年の時間が経ったんだな」

訥々とリインは記憶をなぞる様に話しかける。

「最初に出会ったのはルーアンからボースへ戻る定期船の中、君はトランクケースに入れられていたな」

一度口を開けば自然と言葉が続く。

「誘拐された恐怖で喋れなくなった女の子として遊撃士協会で保護することになって、俺が世話をすることになって——」

時間を忘れ、一つ一つの思い出をリインは語り続ける。

唯一の持ち物だった戦術オーブメントを調べるためにツァイスに行ったこと。

武術大会に出場するアネラスを応援するために王都へ行ったこと。

初めて名前を呼んでくれて、名前を覚えてくれたこと。

試練の度に秘密を知り、同時にその成長を喜んでいたこと。

そして——

「この先の《黄昏》に向けてワイスマンと手を組むことにした……」

懺悔するようにそれを報告して、リインは「あの子」が何を言うか想像してみる。

裏切り者と怒るか、罵るか、それとも恨まれるか。

未来のためと言い訳をして、過去の溜飲を無理矢理呑み込んだのは果たして本当に正しかったのか。

「二度決めた決断に今更迷って……君には本当に申し訳ないと思ってる」

当然のことだが墓石はリインの告解に何も応えない。

「あと二年……勝っても負けても、もしかしたらそっちに行くことになるかもしれない……」

その時にちゃんと謝るから、今は見逃してくれ」

もちろんクローディアに答えたように簡単に命を諦めるつもりはない。

しかし、同時に死んでも構わないという気持ちがあるのも否定できない事実だった。

すでに一度経験しているからなのか、それとも無意識にでも “彼女を死なせてしまった罰を欲しているのか。”

リインは《識》の力を持つてしても自分の中の感情に答えを定めることはできなかった。

「おかしな話だよな……二年前はいなくなりたいって思っていたのに」

自分の中の矛盾にリインは自嘲する。

「だけど約束するよ。君の妹の未来は俺が必ず守る……」

あの子だけじゃない。父さんや母さん、エリゼ、それにノイやリン……他にも沢山の人達が幸福に過ごせる未来を得るために俺は戦う」

ものを言わぬ墓石に向かってリインは誓いを立てるのだった。

「さてと、随分と待たせてしまったな」

すでに太陽が湖に沈み始めている。

この場に到着したのが正午を過ぎていたとはいえ、数時間延々と語り続けていたことに我ながら呆れてしまう。

「シード中佐に悪いことをしたな」

本来なら墓参りの後でリベル・アークへ行くこうと考えていたのだが、今回は見送るのが賢明だろう。

もつともクラスメイト達に伝えていた帰宅時間を大幅に遅刻することは今の時点で確定している。

「それじゃあ、またな。今度はユミルでちゃんと話すよ」

最後に墓石に向かって語り掛け、背を向けてリインは歩き出す。

「あ……」

しかし、その足取りはすぐに止まることになった。

丘の墓から船着き場に戻る道の途中、そこにスミレ色の髪の少女が所在なさげに立っていた。

「レン……君も “あの子” の墓参りに来てくれたのか？」

「ううん、レンにその資格はないから」

久しぶりに会った少女はいつもの小悪魔な雰囲気は鳴りを潜め、リインの顔を直視することができずに視線を彷徨わせていた。

「……………そう言えばレンにはちゃんと喋っておかなければいけないことがあつたな」

「な、何……………」

びくりと肩を震わせてレンは聞き返す。

「許す」

「え……………」

「君が『あの子』を殺した片棒を担いだこと。そこに悔やむ気持ちを感じているなら俺は許すと言うだけだ……………」

だからもうこれ以上『あの子』のことを引き摺らなくて良い」

戸惑うレンにリインはこれまで有耶無耶にしてきた答えをはつきりと言う。

「……………それで良いの？」

「ああ……………」

恐る恐る聞き返して来る言葉にリインは頷く。

エステルがレンの手を取り、明るい未来へとレンを闇から救い上げたかもしれない。

しかし、それでレンの過去が全て清算されたわけではない。

現にこうして過去の所業を悔いているのがその証拠だろう。

だからリインは目の前の少女がいつか気付く罪の意識に押し潰されないように明確な言葉で楔を入れておく。

そう考えながらも、リインは自嘲に口元を歪めた。

「それに本当なら『あの子』に顔を見せる資格がないのは俺も同じだ」

「そんなことは——」

『黄昏』に向けて俺はワイスマンと手を組むことにした」

「なっ!？」

告げられた予想もしていなかった情報にレンは絶句する。

「だから本当は『許す』なんて言うことも烏滸がましいんだ」

悲劇の元凶と手を結んだ以上、共犯者に過ぎないレン達のことを責める資格はリインには最早ない。

「ああ……だけどエステルさん達には内緒にしておいてくれるかな」
クローディアに告げた余命の話といい、隠し事ばかり増えていくのにリインは遣る瀬無い気持ちになる。

少し困ったような顔をするリインにレンは今日まで考えていた謝罪の言葉を言うことはできなかった。

・*

海港都市ルーアン。

観光業に力を入れることでメーヴェ北海道を開拓され街は二年前よりも少し大きくなっていった。

砂浜に面した場所に建てられたコテージ。

かつて裕福層に売りつける計画の一環として建てられた別荘街なのだが、二年前の《リベールの異変》の煽りを受けて大半が買い手は付かず紆余曲折の末に国が管理することになってしまった。

そんな訳あり物件がツールズ士官学院生の宿として利用されることになった。

その宿において、一人の少女が荒ぶり、八つ当たりするようにみんなで用意した料理をぱくぱくと平らげていた。

「ちよつと、アリサ。そんな勢いで食べたなら……」

「ぶつちやけ太るよ」

目に見えて苛立つアリサを宥めようとしたエリオットだったが、ファイの歯に衣着せぬ言葉にアリサの手が怯む。

「ぐっ……少しくらいいいわ！ ちゃんとダイエツトしてるし！」

「だからといって暴飲暴食はどうかと思うぞ……」

あるシスターが言っていたが食は全ての源、食事は幸せになるために行うものだ」と

「まあ、明日からは海に行かないから良いのかもしれないけどな」
「むう……」

ムキになったアリサにマキアスとクロウの言葉が畳み掛けられてアリサは唸る。

「というか、アリサはどうしてそこまで苛立っているのだ？」

「料理している時はいつも通りでしたよね？」

アリサの不機嫌の原因が分からずラウラは首を傾げ、エマは切っ掛けはなんだったのか考える。

「アリサ君はあれだね。リイン君と一緒に食事ができなかったことに怒っているんだね」

「違います！ 勝手なことを言わないでくださいアンゼリカさんっ！」

アンゼリカの推測にアリサは声を大にして否定するが、その態度が肯定しているようなものだった。

「リイン君が戻って来れなかったのは仕方ないよ。いくら約束していたからって、元々いろんなところに回る予定で忙しかったんだから」
「そうそう、それに明日はあの古竜と会うだけみたいだから大丈夫だよ」

フォローするトワとジョルジュだが、そんな二人の言葉にアリサはため息を吐く。

「どうだか」

やさぐれた言葉を漏らしてアリサが思い浮かべるのは仕事にかまけて娘とまともに相手をしてくれない母のこと。

通信一本で約束を反故にするその在り方はまさしく彼女と重なり、アリサの苛立ちを余計に募らせる。

「クローディア殿下の好意で挨拶回りをしなくて済んだのに、別の仕事を入れるなんてふざけているわ」

「それは……でも……」

「確かに独断行動が過ぎるな。しかし……」

「本当にそうなのだろうか？」

アリサの文句にクリスとユース、そしてガイウスは表情を曇らせるが、砂浜で見送ったリインの背中を思い出して言い淀む。

あれは挨拶回りに行く雰囲気ではなかった。

そんな言葉にはし辛い何かをあの背中に感じてしまった。

「サラ教官はラインが誰に会いに行つたのか知つているみたいですけど?」

「ん〜」

アリサに睨まれたサラは間延びした返事をする。

昼間から酒を飲んでいたサラは良い感じに出来上がつていて夢見心地のままアリサの質問に伝えてしまう。

「りーんならでーとに行つたわよ〜」

「へえ……」

夏場だというのに部屋の空気が冷たくなる。

「わざわざ誘つた私たちを放り出して、自分はデート……良い御身分なこと」

「アリサ君、そのくらいにしておきたまえ」

苛立ちを最高潮にしたアリサに、サラの一言で概ねの事情を察したアンゼリカが窘める。

「珍しいですね。アンゼリカさんがラインを庇うなんて」

「まあライン君が誰に会いに行つたのかは概ね予想はついている……」

時にアリサ君。《Rの軌跡》は何処まで呼んだかな?」

「何ですか藪から棒に?」

「不思議かね? 多少の脚色が多いとはいえリベールは《Rの軌跡》の舞台になつた場所なのだから聞いてもおかしくないと思うのだけど」

「意味が分かりません。まあ二巻までしか読んでませんけど」

「なら来月発売する新刊を含めて読んでみると良い。そうすればライン君が今日、何処に行つたのか見当が付くはずだ」

「はあ……」

要領を得ない説明にアリサは首を傾げる。

そしてアンゼリカの言葉にユースが聞き返す。

「それにしても新刊ということはやっぱりそういうことなのか……」

「でもどうしてアンゼリカ先輩がそのことを? アンゼリカ先輩がリ

ベールにいたのは二巻まででしたよね?」

「ふっ……何を隠そう《Rの軌跡》の執筆に当たりオリヴァルト皇子か

らインタビューを受けてね……

そのこともあつて発売前の新刊は一ヶ月くらい前に送られて来るんだよ」

「なん……だと……」

アンゼリカの言葉にクリスが雷に打たれたかのように固まった。

「ア、アンゼリカ先輩っ！ その新刊は持つて来ているんですか!？」

「ははは、残念ながら寮に置いて来たよ。しかし、まさか——」

「わああああああっ！ ネタバレはやめてくださいっ！」

喋ろうとした言葉を掻き消すようにクリスが叫ぶ。

「ははは……まあいろいろと覚悟が必要だと忠告しておくよ」

アンゼリカの軽い言葉に対して一同は重く黙り込む。

「つて言つても、あの話つてどこまで本当か怪しいけどな」

重い空気の中、クロウがおどけた感想を漏らす、それに頷く者はいなかった。

「何なのよもう……」

そしてそんなクラスメイトたちから自分だけがそれを理解していない疎外感にアリサは唇を尖らせるのだった。

63話 リベールIV

リベール旅行三日目はいくつかの班に分けて行動することになった。

古竜レグナートに会うリインとそれに同行すると立候補したエマ。ボースの遊撃士支部で遊撃士の体験をすることになったラウラ、ファイ、ガイウスの三人。

サラは生徒達には言わないが知り合いに会うと言って、「あの子」の墓参り。

そして残りはジェニス王立学園の学園祭に行く予定だった。

しかし――

「リシャル大佐を紹介して欲しい？」

改めてその日の予定を確認しているとところでクリスが言い出した言葉にリインは首を傾げた。

「はい。そうですけど、大佐？」

ルーアンに来てリイン達が滞在することになった別荘宅に案内してくれたのが元王国軍のリシャルだった。

その時には軽い自己紹介で済ませ、何か滞在中に不具合があれば彼を頼ることになっていた。

そういう意味ではクリスの思い付きは突拍子のないものとは言えないのだが、唐突でもあった。

「いや、それは忘れてくれ。それでどうしてリシャルさんに？」

「リシャルさんは調査会社を営んでいるんですよね？」

だからリベールから見た帝国の在り方を教えてもらえないかと思っただけです」

「それは適任かもしれないけど……」

「い、意外だなクリスの事だから聖地巡礼だっ！ ってもっと騒ぐと思っただけだ」

「そうだよ。今日も竜と会うためにリインと一緒に行くって言い出

すと思っていたけど、それは良いの?」

「酷いな二人とも……」

僕だって前回の特別実習の時から色々と思うことがあったから、いつまでも子供みたいにはしゃいでいるつもりはないよ」

意外だと呟くマキアスとエリオットにクリスは心外だと言わんばかりに口を尖らせる。

その顔つきにリインは思わず感心する。

あえて言うならば悪ふざけではない時のオリビエの顔。

帝都での特別実習で何を感じたのか分からないが、このまま兄の悪い部分ばかり似ていくのではと危惧していたリインは思わず安堵する。

「そうだな。そういう理由ならリシャルた——さんも快く引き受けてくれるだろうな」

リシャルは王国の未来を考えてクーデターを起こしたが、だからこそクリスとの対話は互いにとって有益になるだろう。

「そうなるかとクリスだけ別行動か? あまり一人で行動しない方が良いと思うんだが」

「それをリイン君が言うかな?」

「そうだぞ後輩。お前が言うな」

リインの呟きにアンゼリカとクロウがすかさず反論する。

「いや……確かにそうなんだけどな……」

クリスはまだマシだがレンハイムの男を野放しにすることにリインは抵抗を感じてしまう。

それを何と説明すれば良いのか迷っているとユーススが名乗りを上げた。

「それなら俺が同行しよう」

「ユースス?」

「クリスの言うリベールから見た帝国には俺も興味がある。学園祭よりは楽しめそうだ」

「ユーススが付いてくれるなら安心だな……」

それでレンはどうするつもりなんだ?」

全員の方針がまとまった所でリインは昨夜泊まることになった少女に質問をする。

「レンは……」

リインに話しかけられてレンは少し考えて答える。

「そうね。エステルが心配していると思うからうるさくなる前にロレントに帰るわ」

「それじゃあ送っていくよ。悪いんだけどエマ、ロレントによってからボースに行くことになるから」

「はい、分かりました」

リインの寄り道にエマは快く頷く。

「ところでリイン君、その箱はどうしたのかな？」

「ジョルジュはリインの傍らにある見慣れない一抱え程の導力仕掛けの箱を指す。

「俺も気になっていた。帝国を発つ時にはなかったはずだが」

「ジョルジュの言葉にガイウスが首を傾げる。

「昨日ツアイスに寄った時に受け取って来たんだ……」

「ティータにお願いして、導力冷蔵庫を人が持てるくらいに小さくしてもらったんだ」

「導力冷蔵庫を？ 何でまたそんなものを？」

「別に大したことじゃないですよ」

苦笑しながらリインは携帯型導力冷蔵庫をテーブルの上に乗せると金具で留めていた上蓋を外す。

白い冷気が箱から漏れ出し、その中にはいくつもの容器が敷き詰められていた。

「アイス……？？」

生徒会への差し入れとして良く見る容器にトワがその中身にいち早く気付く。

「ええ、俺の姉弟子のアネラスさんの好物でリベール滞在中には良く作っていたんですよね……」

アネラスさんがトリスタに来た時には何の持て成しもできなかったので、フィー達がお世話になることもあって作って先にツアイスに

送っておいたんです」

「むう……言ってくれば私も手伝ったのだが」

フィーと同じく世話になることになっていたラウラは顔をしかめる。

「それにしても作り過ぎじゃない？」

「ああ、明日の祝賀会にでも出してもらおうかと思って多めに作っておいた」

フィーの疑問にリインは頷く。

祝賀会の目的はリインの生存を喜ぶものであり、本来ならリインは主賓なのだからそんなことをする必要はない。

しかし迷惑をかけてしまった負い目もあり、持て成されるだけなのは居心地が悪いと思いついたアネラスへのお土産のついでに張り切ってしまった結果である。

「そんなことしているから前日まで慌ただしかったんじゃないの？」

「う……」

アリスに凶星を突かれてリインは唖る。

全くの正論で返す言葉もない。

「あ、あはは……それはともかくリイン君は今日はこちらに戻って来れるんだよね？」

「ええ、それは大丈夫だと思います」

トワの確認にリインは頷く。

「それでフィーちゃん達はボースに泊まるんだったよね？」

「ん、定期便の最終便を気にして半端なことはしたくないから」

「私たちは明日、午前中まで遊撃士の手伝いその後は直接グランセルに行くつもりです」

フィーの言葉にラウラが補足を加える。

「うん、了解……」

それじゃあみんな、それぞれ行くところは違うけど、リベールの人に迷惑を掛けないように気を付けて行動するように」

改めて一通りの予定を確認したところでトワがそうまとめるのだった。

・*

「わざわざすみません。シエラザードさん。忙しいはずなのに」

霧降り峡谷の山道を歩きながらリインはボースから同行することになったシエラザードに謝罪をする。

「気にしないで良いわよ……」

昨日お姫様から直々にリイン君の道案内の依頼が出されたから」

「クローゼさんから？」

「そ、案内とリイン君がレグナートとどんな話をするのか聞いてきて報告して欲しいってね」

「そんなことだったら自分で報告しますけど？」

「あたしもそう思ったんだけど、お姫様にリイン君はヨシユアみたいに肝心なところで一人で抱え込むって言われて何も納得しちやったのよ」

「………そんなことしませんよ」

心当たりがいくつもあるリインは思わず目を逸らした。

「案外的を射ているんじゃないかしら？」

この前の帝都もそうだけど、クロスベルにノルド、いろいろなところで活躍しているみたいじゃない……」

聞いた話だと随分無茶をしたみたいだけど」

「はは、そんな無茶なんて……少ししかしていませんよ？」

「少しね……」

実は特例でリイン君の遊撃士のランクを上げる話が上がっているのよ」

「俺のランクをですか？　でも俺は遊撃士としては休職扱いのはずですけど」

「やっていることがGランクの範疇じゃないっていうのと、今言ったクロスベルとノルド、それから帝都での活躍……」

実績だけ見るならS級に昇格してもおかしくないんじゃないかしら？」

「S級って非公式のランクですよね？」

国家を揺るがす大事件を解決した者にしか与えられないっていう話じゃないですか」

「体の良い、広告塔にするつもりなんでしようね……」

クロスベルで《D∴G教団》の残党を捕縛、その後の事後処理に多大な貢献……

ノルドでは一触即発の緊迫状態となった二大大国の橋渡しをして見事に戦争を回避させた……

そして帝都では伝説の“暗黒竜”を倒して帝都そのものを救った……

功績として数えればどれも十分に評価される事件ばかりだもの」

シエラザードはリインの功績を順に上げ続ける。

「総本部はカシウス先生の代わりを揃えておきたいっていう思惑があるのよ……」

その点、リイン君は先生の弟弟子、実績も今言ったように周りが認めるものもある……

それに若くて将来性があって、《七耀教会》にも顔が利く……

そしてあわよくばリイン君の功績を利用して、帝国での活動復活の足掛かりにしたいのかもしれないわね」

「それは……」

遊撃士は慈善事業ではあるが組織である以上、そういった側面があることを否定するつもりはないが何とも言えない気分になる。

「だからもしもリイン君に直接そんな話を持ち掛けてきたら突っぱねて良いわよ」

「え……良いんですか？」

しかし、続けて出て来た言葉にリインは目を丸くする。

「当然よ。そもそもリイン君に遊撃士の資格を取ってもらったのは帝国内での有事が発生した時に遊撃士が介入する理由を作るため……」

『リイン君自身が非公式のようなものだから非公式のSランクもちようどいい』

なんて馬鹿げた考えでリイン君の意志を無視して良いはずないで

しよ?。」

「そう言ってもらえて安心しました」

祭り上げられることがないと分かってリインは安堵の息を吐く。

真面目に遊撃士の活動をしているシエラザード達を差し置いてという感情もあれば、畏れ多いという気持ちもある。

それに加えて英雄扱いされているリインとしてはこれ以上の重荷は増えて欲しくないのが本音だった。

「その様子だと学校も大変そうね……」

あたしはそういう高等教育に縁がなかったし、オリビエの弟がいるからやっぱり振り回されているの?」

「いえ、クリスはオリビエさんと違ってまともだからそこまで大変じゃないですね……」

まあ悪ふざけがないわけじゃないですけど、故意犯じゃないからまだ微笑ましいくらいですけど」

あれは突っ込まれることを計算してやっているからタチが悪い。

その点、クリスはまだそういう計算した悪ふざけにまで至っていないのが救いだらう。

「ふふ、楽しそうで何よりね。ところでそろそろ休憩でもしましょうかしら?。」

シエラザードは振り返って黙々とリイン達の後をついて来るエマに話を振る。

「いえ、私のことなら気にしないで下さい」

エマは素気ない返事でシエラザードの提案を断る。

「でもここから山道はもっと険しくなるし、霧も濃くなるから無理はしない方が——」

「お気遣いありがとうございます。でも私も歩くことは慣れているので大丈夫です」

取り付く島のないエマの様子にシエラザードは肩を竦めて前を向く。

「ちよつとリイン君。この子とはどういう関係なの?。」

そして声を潜めてシエラザードはリインに尋ねる。

「どういう関係って言われても……」

エマはクラスメイトであり、Ⅶ組の委員長でありそれ以上の関係を築いているわけではない。

エリンの里で互いの秘密を明かし、監視の目を隠すことをやめて開き直った態度で起動者に相応しいのか見定めると宣言された。

しかし帝都での特別実習以来、エマの態度はよそよそしくなった。避けられているわけではないし、用事を頼めばヴァリマールの診断やローゼリアへの仲介も嫌な顔をせずにしてくれる。

今日の同行もローゼリアの名代としてレグナートに会うことと、リインの監視とエマは言い張っている。

「ただのクラスメイトですよ」

考えた末に出て来た答えは無難なものだった。

・
*

「ただのクラスメイトですよ」

そう女遊撃士に答えるリインにエマは何とも言えない気持ちになる。

《灰の起動者》を見極める。

それが長の意志を無視してエマがツールズ士官学院に入学した理由だった。

しかし、蓋を開けてみればエマが介入する余地などどこにもなかった。

ヴァリマールの調整を頼まれてみても、学んだ知識はまるで通用せずエマができたのはローゼリアへの連絡を付けることだけだった。

それに関してもリインは仲介など挟まずにローゼリアと直接連絡を取る術を持っている。

「ただのクラスメイト……」

前を歩く二人に悟られないようにエマはため息を吐く。

ローゼリアはこのまま学院に通って良いと言ってくれたがエマはそれを喜ぶことはできなかった。

導く必要もなく、それでいて自分の半端な知識と魔術の技量では補佐することもできない。

追い付こうにも、彼の相方にローゼリアが立候補したためその理由もなくなった。

それどころかリベールに来る前にローゼリアから授けられた新たな役目がエマは悩む。

『エマよ。お主とセリーヌの役目は生き残ることじゃ』

まるで自分はこれからいなくなると言わんばかりの言葉。

その眼差しはエマの予感を肯定するように強く、その場でエマはローゼリアを問い詰めることはできなかつた。

おそらくはそういうことではなく保険という意味なのだろう。

「おばあちゃんの言い分は正しい……」

まだ新米の巡回魔女でしかないエマはローゼリアはもちろん、ヴィータにさえ及んでいない。

それどころか《鋼の眷属》であるリインにさえ劣っている。

それを証明するように、帝都での戦いでエマは何もすることができなかつた。

「私にできることなんて何もない……」

エマにできることはローゼリアにもできる。しかしローゼリアにできることでエマができないことは沢山ある。

「何をやっているんだろ私……」

自己嫌悪にエマは自嘲する。

土壇場で我儘を言ってレグナートとの会合に同行させてもらったところでエマができることはこれまでの様に何もない。

それでもリインの後ろを歩いているのは、ヴィータを探すために《灰の起動者》を利用するつもりだった負い目だとエマは自分に言い訳をするのだった。

・*

「……………リイン君、この子本当に大丈夫なの？」

「何とかしたいと思うんですけど、こればかりはエマの事情ですから」
思い詰めた顔で黙々と後ろを歩くエマに聞こえないようにシエラ
ザードとリインは声を潜めて言葉を交わす。

自分の中で行っているつもりだった自問自答は全てエマの口から
漏れ出て、その鬱屈した彼女の心情は全て二人に筒抜けになってい
た。

もつともその眩きがなくても思い詰めた彼女の表情で二人は気付
いていただろう。

「エマにできることか……」

彼女がもらった眩きをリインは考える。

実を言えばエマに頼みたいこと、つまりは利用価値はあるとリイン
は考えている。

しかし、彼女の精神状況とローゼリアがエマに課した役目を考える
と頼むことを躊躇ってしまう。

何より――

「ちっ――」

そんな思考をしている自分にリインは思わず舌打ちする。

人を利用価値があるかどうかで判断する思考はリインの生来のも
のではない。

おそらく《影の国》でのワイスマンに体を使われた影響なのだろう。

ふとした拍子にそんな考えが浮かんで来てその度にリインは自己
嫌悪に苛立つ。

「リイン君……」

「っ――何ですかシエラザードさん？」

呼びかけられてリインはすぐにその苛立ちを押し隠して表情を取
り繕う。

「何に悩んでいるか言ってくれなくちゃ分からないわよ」

「それは……」

「確かにあたしたちは帝国に入れないからリイン君を直接サポートす
ることはできないけど、いつだってリイン君の力になるつもりでいる
ことは忘れないでちょうだい」

「……はい、それは分かっているつもりです」
果たして、頼ろうとしている思考と利用しようとしている思考。
どちらの比重が大きいのかリインにはそれを測る術はなかった。

・
*

『よく来たな人の子よ』

かつてエステル達が彼と戦ったその場所にはその時と同じように
レグナートがリイン達の訪問を待っていた。

「頭の中に声が……これは貴方が喋っているんですか？」

『私は、おぬしらのような発声器官を持っていない……』

故に『念話』という形で語らせてもらっている。おぬしはそのまま
声に出して語りかけるがいい」

「分かりました」

リインはシエラザードとエマにその場で待つように促し、肩にリン
を乗せたままレグナートの前に進み出る。

「初めまして、俺はリイン・シユバルツァーと言います……」

そしてこの子はリン。おそらく貴方が確かめようとしているのは
この子についてですよね？」

『……いいや』

しかし返って来た言葉は否定だった。

『こうして相対して分かったが、私の懸念はそのリンという機とリイ
ン・シユバルツァー、お前自身だ』

「俺も？」

『お前達からは消えたはずの《輝く環》の気配を感じる。改めて聞かせ
て欲しいお前達は何だ？』

その言葉にクロスベルで会った聖獣のことを思い出す。

「それについては順に説明させてもらいます。まずはリンのことです
が、この子は《輝く環》が外の世界を見るための端末です」

そこからリインは一通りの事情を説明する。

『………にわかには信じられない話だな』

全てを語られたレグナートはひたすらに困惑していた。

「ツアイトにもそんな風に言われました」

『神狼とも既に接触していたか』

懐かしい名前が出て来てレグナートは嘆息する。

『リンと呼べばいいのか？ 我が名はレグナード、こうして相対して言葉を交わすのは初めてだな』

「ええ、そうですね」

ここまで沈黙を保っていたリンはレグナートの呼びかけに静かに頷く。

二人の間に奇妙な沈黙が流れる。

互いによく知っている相手だが、明確な言葉を交わすことは初めてだった。

「レグナート、私はあの時どうすることが正しかったのでしょうか？」
『むう……』

流暢な言葉で、曖昧な質問をしてきたリンにレグナートは戸惑う。

《輝く環》には明確な意志はなく、故に際限のない奇蹟を与え続けてリベルⅡアークに住む人々を墮落させた。

しかし今は自分の行いを疑い反省しようとしている。

ただ機械的にリベルⅡアークを管理していた存在だったとは思えないくらいの変化。

『人の子よ。お前は《輝く環》に何をしたのだ？』

「特別なことは何もしてません……」

ただ俺達の行く末を見守って欲しいって頼んで、後はたくさん話して、いろんなものを見せて上げただけです」

『そうか……』

事も無げにリインは言うが、それがどれほど難しいことレグナートは知っている。

いくら毅然な態度を取っても、奇蹟の味を知っていたセレスト達は本心から《輝く環》を否定する願いを口にするにはできなかった。

故に、騙し討ちに近い方法で《輝く環》を封印した。

『セレスト達を恨むか？』

「そんなことをするつもりはありません。ただ今のこの地を見て思うのは……」

私が間違っていて、セレスト達が正しかったということだけです」
リンによって案内されたリベールの地。

かつて浮遊都市で生きていた彼らの末裔たちはどの都市でもその顔には生気が満ちて、たくさんの笑顔があった。

リンの記憶にある《リベルIIアーク》に住んでいた人達にはなかったものがそこにあった。

故にリンが当時のことを悔いる。

『果たして本当にセレスト達は正しかったのだろうか？』

しかし、レグナートは空を仰いでそんな言葉を返した。

『セレスト達もまた、《輝く環》を封じたことが本当に正しかったのか最後まで悩んでいた』

浮遊都市から地上に降りた彼女たちの生活は決して楽なものではなかった。

《輝く環》があれば救えた命もあった。

封印を解こうと、浮遊都市を取り戻そうとする争いもあった。

どんなに今が正しく見えたとしても、彼女たちの選択で失われたものがないわけではない。

『我はこの地でこれまでの1200年の時の流れを見て来た……』

今こそ平穏となっているが、そこに至るために多くの血が流れ、その度にセレスト達も自分達が選んだ道が間違いだっただのではないかと悩み続けていた……

「セレスト達が……」

『彼女たちもこうしておぬしと言葉を交わすことができたことを知れば、あの時とは違う道を模索することができただろうな』

「ですが——」

『そもそも竜でしかない我が論じることではない』

反論を切って捨てるリンは俯いてしまう。

まるで人間と変わらないその仕草に本当に《輝く環》の意志なのかと疑ってしまう。

『人の子——いや、リイン・シユバルツァーよ』

「何ですか？」

『よくぞここまで、《輝く環》を——いやリンを育ててくれたことに礼を言わせてもらおう』

「礼を言われるようなことじゃありませんよ」

『《人の答え》が出された今、古の盟約も解かれ、本来ならもう我には《至宝》を見守る役目はない……』

だが、リンがこれから見つける《答え》には興味がある。故におぬし達のことを見守らせてもらいたい』

「それは構いませんが、どうやって？」

流石に貴方の巨体に直接近くにいられるのは困るんですが」

『そうだな……我が子に行ってもらっても良いがあれはまだ子供……こんな大任を任せることはできないか』

代理にするには丁度いい者がいる。

しかし、その子に任せるには不安が大きい。

どうしたものかとレグナートは思索するように首を持ち上げ、目に入った彼女に声を掛ける。

『その人の子、おぬしはローゼリアの眷属だな？』

「え……は、はいっ！ エマ・ミルステインと言います」

突然話しかけられたエマは慌てながら名乗る。

『ふむ、ではエマよ。我と契約を交わしてもらえないだろうか？』

「え……う？」

『難しいことではない。おぬしが見聞きしたものを我にも見えるようにさせてもらうだけだ……』

もちろん相応の対価は支払わせてもらう』

「対価……それはいったい？」

『見たところ、おぬしとリインの間には隔絶した力の差がある……
それでは見届け役になることも難しいだろう。故に我の力の一端をおぬしに与えよう』

「レグナート、それは——」

「分かりました。その契約、結ばせてもらいます」

エマを利用しようとするレグナートの言い分をリインは諫めようとするが、それを遮ってエマは承諾する。

「エマ？」

リインの呼びかけを無視してエマは前に進み出る。

振って湧いた提案だが、エマにはこの上ない魅力的な提案だった。どこまで行っても姉や長の下位互換にしかねない。

しかし、ここでレグナートと契約を結べば、魔女の枠を踏み越えることができる。

それは今の現状に思い悩んでいたエマにとって抗い難い魅力的な提案だった。

「待ってくれ、レグナート。それはエマを巻き込むことに——」

「リインさん……邪魔しないで下さい」

金に光る双眸でエマはリインを睨みつけて反論を封じる。

『では我に触れてもらおうか』

差し出された竜の腕にエマは言われた通りに触れる。

『ふむ……どうやらおぬしは使い魔を持っているようだな。ならばそれにあやかるとするか』

接触から霊的な繋がりを作り、そこから読み取った情報を元にレグナートは“使い魔”を構築する。

光が結実してエマの目の前に小さな小猫が現れる。

「この子は……」

『おぬしの中にあるローゼリアの因子を我の力で再現させてもらった……』

もつともローゼリアの“使い魔”とは違う部分もある。おぬしの力になるだろう』

「ありがとうございます。レグナート」

礼を言いながらエマはその場に膝を着いて真っ白な毛並みの小猫に手を差し出す。

「じゃあ」

白猫は小さく鳴いて差し出されたエマの指を一舐めして、その手に飛び乗り身軽に彼女の肩に乗ってエマの頬にマーキングするように

体を擦りつける。

「ふふ……セリーヌと違って甘えん坊みたいですね」

人懐っこい白猫にエマは思わず笑みをこぼす。

しかしどこにでもいるような猫だが、霊的な繋がりと拡張された感覚、与えられた力は紛れもない本物だった。

嬉しそうにするエマにリインは諦めた様にため息を吐く。

「そんな顔をされたら何も言えないじゃないか」

「どうやら振り回されているのはオリビエの弟だけじゃないみたいね」

愚痴るリインにシエラザードは苦笑する。

シエラザードの言葉にリインは今までのことを思い出してなんとも言えない表情を浮かべて、話を逸らす。

「ところでレグナート、俺もいくつか聞きたいことがあるんだけど尋ねても構わないか？」

『うむ。とはいえ我が語れることは多くはないが』

「聞きたいのは帝国の至宝について、《黒の騎神》について何か知らないか？」

『《黒の騎神》……確か《鋼》を封印するために眷属たちが造り出した封印機構の一つだったか？』

……すまないが我はそれ以上のことは何も知らない』

「そうか……それじゃあもう一つ、貴方が良ければここで俺と手合わせをして——」

「はい。ストップ」

「ぐえっ」

腰に佩いた太刀に手を添えて戦闘態勢に移行しようとしたリインだったが、シエラザードの鞭がリインの首に巻き付いて止められてしまふのだった。

64話 リベールV

「この度は自分のためにこのような祝いの場を作っていただきありがとうございます」

グランセル城、空中庭園。

女王宮へと続く階段の上、庭園を見下ろせる場に立ちリインは集まってくれた者達へと頭を下げる。

「ちゃんとした生存報告ができず、遅くなってしまったことを深くお詫び申し上げます」

堂に入った礼儀正しい言葉は流石帝国の貴族とも思うが、当時の普通の少年でしかなかったリインを知る者たちはその堂々とした振る舞いに思わず笑みを作る。

「正直に告白させてもらうと、俺はこのリベールに逃げて来ました……」

捨て子だったこと、得体の知れない力を持っていたこと、半端な形で授かってしまった《初伝》のこと……

家族とちゃんと向き合うことが恐くて、多くの《欺瞞》を抱えていた俺をリベールの人達は支えて立たせてくれました」

階下を見下ろせば、そこにはリインが出会った人たちの顔がある。

あの時リベールで出会った全員がいるわけではないが、そこにいる者もいない者も一様にリインの壮健な姿に喜んでいた。

「俺は……」

不意に用意していたはずの言葉に詰まる。

緊張して台詞を忘れたわけではない。

しかし、言いたいことが多過ぎて言葉が出て来ない。

「俺は……リベールに来て本当に良かった……：……ありがとうございました」

言いたかった言葉をその短い言葉に集約させてリインは階上から頭を下げる。

決して全てが良い経験だったわけではない。

失ったもの、消し去りたい汚点もある。

しかし、全てをひつくるめて出てくる言葉はやはり感謝しかなかった。

そんな風に頭を下げるリインに招待客の拍手が送られるのだった。

・*
・*

リインの挨拶が終わり、デュナン公爵が音頭を取って祝賀会が始まる。

しかしリインはそのままⅦ組に割り当てられたテーブルに戻らず、それぞれのテーブルに挨拶回りを始めていた。

「何と言うか……学院の時とイメージが違うね」

「ああ、それに他国だと言うのに随分と慕われているみたいだ」

エリオットの呟きにマキアスは頷く。

「どうやらあれがリインの素顔のようだな」

ユーシスは挨拶回りをするリインを遠目にしながらそんなことを思う。

別に学院にいる時や自分たちに対しての接し方に壁があったと感じたわけではない。

が、今のリインの姿を見ると学院での態度は他所行きのものだったと良く分かる。

それは咎めるようなものではなく、ユーシスや他の誰もが自然と使い分ける処世術でしかない。

「ふん……何よ。デレデレしちゃって」

「くっ……これがヒエラルキー……くっ年上のお姉さんたちにちやほやされやがってっ！」

学院では見えないような笑顔を振りまいて楽しそうにするリインにアリサとクロウが面白くなさそうに愚痴を漏らす。

「アリサちゃん、それにクロウ君もそんな風に言っちゃダメだよ」

そんな二人をトワが窘めるが、彼らのやり取りを無視してユーシスは続ける。

「どうやら俺達はリインにとってまだ他所様だということなのだろう」

「他所様か……考えてみたら僕達はリインに迷惑ばかり掛けていたからな」

マキアスの呟きに心当たりがある一同は押し黙る。

「それに僕達はまだリインさんに信頼されるようなことを何もしていませんから」

クリスの呟きにさらに沈黙が満ちる。

「ふん。とりあえず次の実技テストでは絶対にぎやふんって言わせてやるんだから」

「アリサ。随分自信があるのだね？」

鼻息を荒くするアリサにフィーが尋ねる。

「まあね。実はおじ様に最新の導力武器をもらったの。それを使えばリインなんて目じゃないわよ」

「大した自信だね。でもたしかにまずはリインに一矢報いるくらいに強くならないと認めてくれないかも」

「うむ。私たちはまだ未熟……せめて露払いくらいはできるようにならないとな」

「ああ、答えてくれなかったがリインにはノルドで命を救われているからな」

「うん……目標を持つのは良いことだと思うけど、三人共その格好はどうしたの？」

意気込むフィー、ラウラ、ガイウスの三人にジョルジュは頷き、改めて三人の服装を尋ねた。

祝賀会ということで今日まで私服で過ごして来た彼らだが、ジョルジュ達はトールズ士官学院の制服を着ている。

しかし、そんな中でフィーとラウラはフリルがふんだんに使われたドレスを纏い、髪はリボンで結われ、極めつけにはそれぞれぬいぐるみが抱えられている。

ちなみにガイウスは紅の学生服なのだが、普段無造作に紐でまとめられている髪は女もののリボンに代わっており意外と似合っていた。

「これはその……アネラス殿には今回いろいろしてもらって……」

「そのお詫びに何でもするって言ったたら、こうなった」

がつくりと項垂れ、抱えたぬいぐるみにフィーとラウラは顔を埋めて恥じらう。

動き易さを重視した服を重視する傾向が強いだけに、可愛さだけを追究したその服装は二人にとって露出のある服以上に羞恥心を掻き立てていた。

「うむ……流石だアネラスさん。グツジョブ」

そんな恥じらう二人の乙女の珍しい姿をノイから借りたオーバルカメラでアンゼリカは写真に収めていく。

「あ……あのアンゼリカ先輩、あまり写真を撮られるのは……」

「正直、こんな格好わたしたちには似合わないと思うけど……」

「何を言う二人とも。さつきリイン君も褒めていたように良く似合っているのだから胸を張りたまえ……」

いや、こうして恥ずかしがっている姿もそれはそれで……」

恥じらう二人にアンゼリカはさらにテンションを上げる。

「そ、それより三人共。そんな感じだけど遊撃士を体験してみようだったの？」

そんな彼女たちにアリサは助け舟を出す様に話題を振る。

「ああ、いろいろ考えさせられる内容だった」

「俺達は遊撃士の仕事を少々甘く見ていたようだ……」

チームで行っていたことをアネラスさんたちは一人で軽々と達成していた」

「実力の差っていうよりも手際の良さが違ったね……」

でもいろいろ良くしてもらったよ。アネラスさんだけじゃなくて他の遊撃士の人達からもいろいろ教わったし」

「うむ、次の実技試験までには教わったものを見せられると思うから楽しみにしていると良い」

どこか自信満々に誇るラウラだが、抱えたぬいぐるみで台無しになっていることは指摘しないことにする。

「それはちよつとうらやましいな」

「そういうクリス達はとうだったんだ？」

聞けばリシャルという人はリインと同じ八葉一刀流の使い手だったそうじゃないか」

「ああ、中々おもしろい話を聞いたことは確かだ」

「そうだね。オフレコだからこそ話せる世界情勢とか、帝国では発禁された政治の本とか見せてもらったり……」

もちろん手合わせもさせてもらって、とても充実した時間だったよ」

「ううむ。これなら僕達もどちらかの班に行くべきだったか」

「そうだね。何だか学園祭で遊んでいたのが申し訳なくなってきた」

それぞれ分野は違えど自分たちを高めることにこの旅行を活用している彼らに対してマキアスとエリオットは居心地悪そうに反省する。

「別に卑下する必要はないと思うが、リベールの学校では何かなかったのか？」

「そうだな……まず驚いたのは研究発表で『異変』のことが詳しく発表されていたことだな」

ユーススから振られた話にマキアスが答える。

二年前にヴァレリア湖の上空に現れた浮遊都市が何だったのか。

リベール建国の歴史を紐解く形で詳細に調べられて発表されていた。

「王族の後ろ盾があったらしいが、大々的な情報公開をするなんて思い切ったことをしたものだ」

「他にも演劇とかいろいろ凄かったよ。男女の配役を逆転させたものとか」

「な、何て恐ろしい出し物を……僕達の出し物は絶対にそれはなしにしよう」

「うん、それは絶対に」

クリスとエリオットは力強く頷き合う。

「でもリベールの学校はツールズと違ってみんな仲が良さそうなのは羨ましかったな」

そしてトワがそんな感想をもらった。

「去年の学院祭といい、生徒会選挙といい、うちは事あるごとに貴族と平民で揉めるからね」

トワの呟きにジョルジュはその時の事を思い出して苦笑する。

「それにしても随分と楽しそうだな」

そんな会話に入らずクロウは挨拶回りにいろいろなテーブルに回っているリインを遠目に眺めて、悪態を吐く。

「ああいう奴が女神の寵愛を受けたって言うのかね」

生い立ちこそ不幸だったかもしれないが、その後の彼の経歴は順風満帆とも言えるだろう。

真つ当な貴族の養子にしてもらい何不自由ない暮らしを与えられ、剣の才能にも恵まれた。

根も葉もないゴシップと本人は否定しているが、「帝国の至宝」と「王国の至宝」との良縁に恵まれ、極めつけには「女神の至宝」まで所有している。

どれだけの幸運の星の下に生まれたのか、どんな道に進んでも明るい未来が約束されている《灰の英雄》にクロウは思わず暗い眼差しを向けてしまう。

「……………負けるかよ」

魔女からの忠告を思い出してクロウは呟く。

「こんなチャホヤされて頭が幸せなぬるい奴に俺が負けるはずねえだろ」

そんな呟きは誰の耳にも届かずパーティーの喧騒に消える。

「あれ……………」

ふとアリサはパーティーの光景に違和感を覚え、周囲を見回して呟いた。

「……………あの女の子はいないのね……………」

あれだけリインのことを慕っていた少女がいないことにアリサは首を傾げる。

「やつほーⅦ組のみんな。ツールズではちゃんと挨拶できなかつたけど、あたしはエステル・ブライト。よろしくね」

「アリサとはクロスベル以来だね。あの時はレンの誕生会に来てくれてありがとう」

そこにエステルとヨシユアがやって来る。

「ヨ、ヨシユアさん……」

突然現れた二人、特にヨシユアに話しかけられてアリサは狼狽える。

「アリサってヨシユアと知り合いだったの？」

「ええ、まあ……リベールに来た時にちよつと助けてもらったのよ」

フィーの質問にアリサは何とか頷いて見せる。

別に疚しいことはないのに、クラスメイト達から一斉に向けられる好奇の眼差しにアリサは思わずたじろぐ。

ここに至ってアリサの頭の中には先程の疑問は残っていないかった。

・
*

「お疲れ様、弟君」

一通りの挨拶を終わらせたリインをアネラスが労う。

「本当に疲れました……でも、自業自得ですから」

リベルⅡアークの戦いから行方不明となつて心配させ、ここまで挨拶をするのに遅れてしまったのだから当然の報いだと受け入れるしかない。

「だけど、やっぱりリベールは良い所ですね」

改めてリインはパーティー会場を見渡して感想をもらす。

リインの生存を心から喜んでくれる者達ばかり。

対する帝国では純粹にリインのことを喜んで受け入れてくれる人は一握りしかいなかった。

帝都での騎神戦を経てようやくリインに向けられる眼差しに負の感情が薄れてきたものの、それも完全に消えたわけじゃない。

——もしも俺が死んでも、帝国だと喜ぶ人間の方が多いただろうな

……

思わずそんなことを考えてしまう。

「それで……弟君は何を悩んでいるの？」

「えっ……!?!」

唐突にアネラスに振られた言葉にリインは息を呑む。

「そのくらい分かるよ。また一人で抱え込もうとしているでしょ？」

「………はあ、本当にアネラスさんは時々鋭くなりますよね」

「何って言っても私は弟君のお姉ちゃんだからね。さあ観念して白状しなさい」

お姉さん風を吹かせて命令して来るアネラスにリインは思わず二年前のことを思い出して苦笑する。

「そうですね……強いて上げるとしたら——」

別に優劣をつけるつもりはないが、クローゼが気付いたのだからアネラスも気付くだろうと予測していたリインは動じずに用意していた言葉を作る。

「今、老師はどこにいますか？」

「おじいちゃん？ どうして？」

「実はあれから『無刃剣』と『八葉一閃』を一度も使えてないんです」

「あー」

アネラスは《影の国》でのリインの戦いの事を思い出して唸る。

『無刃剣』、一から七の型の終の太刀を連続で叩き込み、敵の内部に蓄積させた闘気の焰を最後に爆発させる技。

『八葉一閃』、一から七の型を一閃に集約させた一太刀。

アネラスもまたリインが使ってみせた技を自分でも研究して練習してみたのだが、どれもあの時見たリインの一振りには遠く及ばない。

「『無刃剣』の方は途中で息切れしてしまうし、『八葉一閃』の方は半分くらいの型しか混ぜられなくて」

「私も試してみたけど、同じ感じだね」

「だから老師の意見を頂ければ、完成形に近づけるんじゃないかと悩んでいるんです……」

この先の戦いには必ずこの技が必要になると思います。それに――

」

「そ……それに?」

「俺は見せてもらってないんですが、やはり『八葉一刀流』には《劍聖》と《劍仙》を分ける《奥義》があるんじゃないですか?」

アネラスは思わず言葉を失う。

己の力を畏れていた少年の成長ぶりは嬉しく感慨深いものがある。しかし、同時に珍しい年相応のリインの期待に輝いている眼差しが痛く感じる。

《劍聖》と《劍仙》の違い。

孫のアネラスもこの二つの差を説明することはできない。

「えっと……『無刃劍』も『八葉一閃』も凄い技だと思うけど」

「でも老師ならもっと凄い奥義を編み出しているんじゃないでしょうか?」

「……………」

おじいちゃんならあり得るとアネラスは思っただ押し黙る。

「ちよつと聞くけど、弟君にとってその二つの奥義はこういう位置にあるのかな?」

「どういう位置って……所詮は『初伝』が思い付きで作った技ですけど?」

それを奥義なんて言ったらユン老師にまたどやされると思いますか?」

「おふ……………」

首を傾げるリインにアネラスは思わず唸る。

「ですから、できれば近いうちに老師と一度会っておきたいと考えているんです」

「うん。弟君の気持ちは分かったよ……」

「ただどおじいちゃんが今どこにいるかは分からないんだ……そうだ。ちよつとカシウスさんに聞いて来るね」

「あ……………」

アネラスは止める間もなくその場にリインを残して走り出すのだった。

その背中をリインは苦笑を浮かべて見送り——ふと踵を返して空中回廊の端へと一人喧騒の輪から抜け出して虚空に向かって尋ねる。

「それで何か用か《道化師》？」

「あはは……気付いてたんだ。うまく隠れていたつもりなんだけど。気を使わせちゃったかな？」

リインの冷めた声に無邪気な返事が虚空から流れ、目の前の空間が歪みそこに怪しげな少年——カンパネルラが現れる。

「何の用かって聞いているんだ？ まさか今日の祝賀会にちよっかいを出すと言うのなら——」

「そんな怖い顔しないでよ。今日の僕はただの運び屋なんだから」

そう言っただけでカンパネルラは指を鳴らすとリインの目の前に一振り太刀が現れる。

「ブルブランから君に届けて欲しいって……」

帝都で回収した君の折れた太刀と博物館からすり替えた《聖女の槍》の欠片を合わせて東方の刀匠に造ってもらった新しいゼムリアストーン太刀だっけさ

「ブルブランからの……？」

その名前が出て来てリインは嫌そうに顔を歪める。

しかも《聖女の槍》をすり替えたという穏やかではない言葉に早速頭痛を感じる。

「……そう言えば彼はいったい何をしているんだ？」

とある事情から琥珀石を手に入れたというのに未だに引き取りに来ていない彼に不信を感じていたが、精神衛生上の理由でリインはこれまで無視していた。

「実は《槍》を君の太刀と同じように色彩を帯びたゼムリアストーンにするため《鋼の聖女》に喧嘩を売って見事目的を果たして、返り討ちにされて全治三ヶ月の重傷を負って入院中なんだよ」

だからこうしてブルブランの代理に自分が太刀を届けに来たとカンパネルラは付け加える。

思わずその報を聞いてリインは拳を小さく握りしめた。

「それでこの太刀か……」

「そ、中々の一品だと思うよ。まだ『外の理』の武具には及ばないけどこの世界で作られる最高傑作なのは間違いない……」

これに『七の聖獣』の加護を合わせればそれこそ『外の理』の武具と遜色ない一振りになるだろうね」

「そうだな……」

浮かんでいる太刀を手を取って鯉口を切って刀身を見る。

以前のものよりも濃くなった黒に近い赤の刀身。そして縁取りするように線を引いた金の刃紋。

一目見るだけでも以前の太刀よりも存在感を増したと分かる太刀。それを確認してリインは静かに鯉口を戻す。

「それでその太刀とは別件なんだけど、君が『風の剣聖』から貰ったアーティファクトを譲ってくれないかな？」

まあ、譲ってくれなくても目の前で処分してくればそれで構わないんだけど、もちろんタダとは言わないよ。この——」

「勝手に話を進めないでもらえるか」

リインはカンパネルラの言葉を遮って、無造作に手にした太刀を投げ返した。

「何か気に入らなかつたかい？」

「生憎だが、代わりの太刀の当てはあるんだ。そうでなくてもお前達『結社』に施しを受ける理由はない」

明確な拒絶を示すが、この言葉は嘘である。

『鋼の太刀』の錬成ができていない現状ではブルブランが用意した太刀は確かに欲しい。

マクバーンは『外の理』を持たせたがっていたし、どうにも『結社』は自分に対していろいろ干渉して来るがここで言われるがまま受け取ってしまえば後が怖い。

何より、向こうから持ち掛けて来た取引を利用しない手はない。

「どうしても受け取って欲しいなら、こちらの要求を二つ飲んでもらう」

「意外だな。それはもしかして『千の手』の薰陶かな？ それとも『教授』の影響？」

「さあな。まず一つ、交渉相手を《鋼の聖女》にしてもらおう。《道化師》に要求するものはないからな」

「確かにそうだね。それじゃあもう一つが本題かな？」

リインの毅然とした態度にカンパネルラは楽し気に頷く。

「ああ、だがこつちも何の準備もしていないから後日改めて交渉の席を作って欲しい」

「それは構わないけど、少しは何を企んでいるのか勿体付けずに教えてくれないかな？」

うちの聖女様を説得し易くするためにさ」

建前半分にカンパネルラは情報を引き出そうと渋ってみせる。

リインからの交渉なら今の《鋼の聖女》は十中八九、嫌な顔せずに乗って来るだろう。

譲歩を求めたのはカンパネルラの楽しみから。

目の前の少年が何を考えて、何をしようとしているのか、興味をそそられたから。

「『黒の騎神』を倒すための切り札について、それだけ伝えてくれれば良い」

「へえ……」

たったそれだけの言葉にカンパネルラは笑みを深める。

「了解、確かに伝えるよ」

それ以上は何も言わずにカンパネルラは指を鳴らすとその場から消える。

「……………はあ」

周囲の気配を探り、カンパネルラの気配が完全に消えたことを確認してリインは深々と息を吐く。

最後の最後で疲れる交渉が不意打ちで来たことに思わず愚痴りたくなる。

「劫炎と聖女に鍛えられたゼムリアストーンの太刀か……」

しかし同時に差し出された太刀に思いを馳せる。

使われている材料もさることながら、リインは詳しいわけではないが触れただけで工業加工とは一線を画す匠の技に心が震えた。

カンパネルラには拒絶を返したものの、太刀の魅力にリインは折れそうになっていた。

「あの太刀に聖獣の加護を付与するのか……」

いけないと分かっているでもそれを夢想してしまう、

錬成した『鋼の太刀』に行う予定だったが見直す必要があるかもしれない。

「……………とにかくこれでリベールでの用事は全部終わったか」

意識を太刀から切り離してリインは改めて息を吐く。

生存報告を始め、レグナートとの話し合いや、自分の現状についての発見など実りの多い旅だった。

「また明日から帝国か……」

リベールの夜景を眺めながらリインは目を伏せて、気を引き締め――

「リイン君、主役が一人で何してるのよ！ こっちに来なさいっ！」

「は、はいっ！ 今行きます」

大きな声で呼ばれたリインは祝賀会の喧騒に戻っていくのだった。

・*
・*

トリストタ。第三学生寮前。

「お帰りなさい皆さん」

リベールから帰った一同をシャロンは玄関先で待ち構えていたように出迎える。

「実は皆さんが旅行に行っている間に、おそらくリイン様のお客様が訪ねて来られました」

「俺に客ですか？ それに何だか妙な言い方ですね？」

シャロンの珍しく歯切れの悪い説明にリインは首を傾げる。

「ええ、少々困惑しております」

「あなたにしては珍しいわね。どうやらそのお客様っていうのは中にいるみたいね」

「ええ、とにかく入ってみましょう」

サラの言葉に頷きながら、リインは学生寮の扉を開ける。その扉を開いた先の玄関には魔獣が寝そべっていた。

「なっ——」

「お前は……」

思わず臨戦態勢に入るサラ達だったが、リインは身構えもせずその魔獣の前に進み出る。

「どうしてお前がこんなところに？」

リインが話しかけると寝そべっていた魔獣は顔を上げて唸り声で答える。

「ガウ、ガウ……ガア……」

「いや、そんなことを急に言われても困るんだけど」

「リイン、その魔獣の言葉が分かるの？」

普通に言葉を返すリインにアリサが尋ねる。

「ああ、何となくだけだな」

リインは困ったように頭を搔く。

「良く分からないが、その飛び猫は魔獣じゃないのか？」

「ガアアアアアアッ！」

要領を得ないリインの言葉にマキアスは首を捻って尋ねると、魔獣は突然威嚇するようにマキアスに向かって吠える。

「ひっ……」

小さな体躯だというのに体の芯を震わせる咆哮にマキアス達は思わず竦み上がる。

が、それを好機として襲い掛かるのではなく、魔獣は飛び猫との違いを示す様に背中を向けて羽と尻尾を見せつける。

「えっと……リインさん。私、とっても嫌な予感がするんですけど」

エマは白猫を抱えたまま顔を引きつらせて、自分は偉いんだぞと言わんばかりに胸を張る魔獣を凝視する。

「その勘は正解だよ」

リインはため息を吐いて、彼の言葉を通訳する。

『私の名はゾロアグルーガ。二代目『大地の聖獣』……飛び猫などという下等な魔獣と一緒にしないでもらおう』

65話 過去とこれから……

「それで何だって君は俺の所に来たんだ？」

リベールから帰ってきたその日、明日から学院が始まることもあつて場所をリインの自室に移して小さな竜に尋ねた。

『モグツ？』

しかし、暗黒竜だったその小竜は口一杯に食べ物頬張りながら顔を上げた。

『モガモグ、モゴゴゴ！』

「ちゃんと待つてるから、ゆっくり食べると良い」

話をすることをそつちのけにしてシャロンが用意してくれた夜食に喰いつく小竜にリインは苦笑する。

『モグモグモグ〜♪』

リインの許しを得て小竜は嬉しそうに食べる速度を早める。

食欲旺盛なその姿にリインが自分の分の夜食を差し出し、さらに買い置きしておいたクツキーなどを出して上げると小竜はさらにペースを上げる。

『ぷはあ〜！ 満腹満腹！』

夜食と備蓄した菓子をあらかた喰い尽くしたところで小竜は満足そうにお腹をさする。

「それはよかった。それにしても……」

改めてリインはかつて暗黒竜だった小竜の姿を観察する。

見上げる程あつた巨大な体軀は見る影もなく、薄い桃色の体には暗黒竜の名残はなく、知らなければ同じ存在だったとは誰も思わないだろう。

そして何より――

「まさか暗黒竜が女の子だったとは……」

てつきり雄だとばかり思っていたリインにとって一番の驚きはそこだった。

『むふふ……驚いた？ でもま、真実は物語より奇なりっていうじゃ

ない?』

耳に聞こえる声は魔獣の鳴き声だが、そこに込められた声音は女の子のそれ。

『どう?…ときめいちゃった?』

「あり得ないから」

軽薄なノリをリインは既視感を覚えながら聞き流す。

『むふふ……でもま、ありがとね。1200年ぶりのまともなご飯だったから食べ過ぎちゃったよ』

「それは構わないけど……」

1200年という時間にリインは首を傾げる。

暗黒竜が帝都へイムダルに現れたのは270年頃。それを考えれば1000年振りの食事のはず。

「ゾロアグルーガ」。君は——」

『あー、悪いけどその名前で呼ぶのはやめて。《黒》や人間がつけた名前だから、その名前で呼ばれたくない』

「それじゃあ君の事は何て呼べばいいんだ?」

『むふふっ!』

リインの質問に小竜は勿体付けるように笑い、ポーズを取って名乗る。

『アタシは“調停者”——名前はイオ……イオ・ライゼ・アルノールだよ。よろしくね超帝国人のおにーさん』

「その呼び方はやめてくれ——って、ライゼ……アルノール?」

『そだよ。焔の眷属と大地の眷属の間の架け橋になったアルノールとはアタシの事だよ』

「いや……待ってくれ」

最初からもたらされた答えにリインは頭を抱える。

「君が初代皇帝?」

『あ、それは違うよ。アタシがアルノールの長だったのはエレボニアが建国する前……』

初代皇帝のアストリウス君が即位していた頃、あたしはバルフレイム宮の地下に幽閉されてたんだ』

「幽閉とは穏やかじゃないな。その話が本当なら300年近く君は幽閉されていたことになるんだけど」

『そうだよ。って言ってもその時のアタシは正気じゃなかったからどれくらい時間が経っていたかなんて分からなかったけどね』

そう付け加えてイオは語り始める。

『全てが狂い出したのは、〃七の騎神〃を用意して〃鋼〃を封じようとした時……』

はつきり言ってしまうば、〃七の騎神〃による封印は表向きには成功していたけど、本当は失敗だったのさ』

「それぞれの眷属が協力するふりをしながら、互いを出し抜こうとしていた……」

その結果、《鋼》の呪いは《黒》に引き継がれたことですね」

『その通り……調停者なんて呼ばれていたけど、情けないことに彼らに出し抜かれた間抜けな長がアタシさ』

「それは仕方がないと思います。騎神を造り、封印するにはそれぞれの陣営を信頼するしかない貴方にはそれ以上のことができたとは思えません」

『ふふ……もつとも当時のアタシは何が起きたのかさえ分かってなかったよ……』

《鋼》を封じる儀式が終わった途端、アタシには得体の知れない力が宿って、二つの眷属の長達はアタシを殺せと叫んだ……

てつきり争う理由がなくなった眷属たちがまた争い始めたかと思っただけ違った……

二つの眷属たちだけじゃない。アタシの家族も、協力をしてくれた他の部族たちも、全てがアタシの敵となっていた』

「……魔女が《黒》に与えた因果を操る力……」

『アタシは与えられた〃力〃を使って必死に逃げた……』

必死に逃げたが、生き延びるためには与えられた〃鬼の力〃に縋るしかなかった』

「〃鬼の力〃……」

『髪は白く染まって、瞳は魔獣のように変わって、自刃しても死ぬこと

もできず、正気でいられる時間は日に日に短くなっていった』

遠い目をしてイオは寂しそうに続ける。

『アタシが覚えている記憶は二つ、不死者となっていたアタシを生け捕りにして笑ってさらし者にしたアストリウスの姿……』

もう一つはアルベリヒ君に連れて来られたローゼリアを喰らい――

――アタシは『暗黒竜』となった』

「っ……気にはなっていたんです……」

人と融合していたとはいえ、特別な方法を用いなければ屠る事ができない聖獣がどうやって殺されたのか」

『たぶんだけど憎悪に満ちたアタシを触媒にして『鬼の力』を300年かけて熟成させて馴染ませて『聖獣』という概念に匹敵する『幻獣』を造り出したんだらうね』

「でもいろいろ合点がいききました。『暗黒竜』が帝都に現れた理由が歴史書に残っていないなかったのは、それが理由なんですか?」

『さあ、そこまでは分からないよ』

おどけた明るい口調から語られる重い話。

何よりリインにとっては他人事ではないことだった。

セピスを摂取することで人が魔獣へと変貌するように、『鬼の力』を使い過ぎれば人ではなくなるというのはリインの在り得たかもしれない未来。

『《鬼の力》を使い過ぎれば、俺も『暗黒竜』になるんでしょうか?』

『それもアタシにも分からない。ただあの『力』は人には過ぎたものだということは君も分かっているんじゃないかな?』

イオは取り繕うこともせずに答える。

『もちろんアタシと同じように魔獣に変貌するまでに300年掛かるかもしれない……』

『聖獣』を喰らわなければそうはならないかもしれない……』

悪いね。アタシは所詮、『黒』に良いように使われた敗北者だから大したことは知らないんだよ。だけど――』

「だけど?」

『君に知って欲しかったのは何も『過去』のことだけじゃない……』

本当に伝えたいのは「今」——そして「未来」のことだよ』

「今と……未来……」

イオの言葉をリインはオウム返しに聞き返す。

『そう、《黒》に諍うってことは世界に諍うに等しい……』

アタシの身に降り掛かった出来事が君にも降り掛かるってことさ』

「あ……」

『いつもと同じ朝が明日もやって来るとは限らない……』

ある日、当然のことが当然でなくなる時がやって来る……』

共に困難に立ち向かった友が、それまでずっと一緒に生きて来た親
兄妹が憎悪に満ちた目で刃を向けてくる……』

《黒》に諍うって言うのはそういう事なんだよ』

「そう……ですね……改めて俺の敵の大きさを思い知らされた気分
です」

『まったく酷い話だよね……』

こんなことにならないようにアタシは頑張ったのに、いったいどう
することが正解だったんだろうね』

「イオ様……」

リインは肩を落とすイオに何を言っただいのか迷う。

が、それを言葉にするより早くイオは顔を上げて笑う。

『むふふ、イオ様』だっ……』

堅苦しいのは苦手なんだよね。アタシのことは気軽に「イオちゃ
ん」でお願いしたいかなあ』

「いや……そんな畏れ多い」

『そんなこと気にする必要はないよ。何だったらお婆ちゃんでも良い
んだよ?』

「ですから……ん?」

『それにしても愚弟の末裔がまさか《鋼》を御する器になっていたなん
て、こればかりは蘇った朗報だね』

続く言葉にリインはイオの勘違いと、自分がまだちゃんと名乗って
いなかったことに気付く。

「イオさん……名乗り遅れましたが、俺はリイン・シユバルツァーと言

います」

『おや？ 君はアルノールの血筋の者じゃなかったのかい？』

「はい、俺はアルノール家とは縁も所縁もない、平民の生まれです。高貴な血筋の出ではありません」

それだけは認められないとリインはイオの勘違いを力強く、そして根気強く訂正するのだった。

・*

8月16日、月曜日。

誰よりも早く、教室に来ていたリインは旅行中に溜まった手紙の処理に手を動かしながら考える。

——今日は授業が終わったら帝都の鉄道憲兵隊に行つて……

イオがリインを訪ねて来た理由は鉄道憲兵隊に追い駆け回されていたから。

先月の帝都での事件以来、帝国解放戦線のメンバーを搜索するため、鉄道憲兵隊の搜索活動が強化され、そこでイオは見つかってしまった。

導力ネットに記載された情報を思い出しながら、イオの間の悪さにリインは同情する。

——クレアさんに何て説明するかな……

イオの証言から、おそらく彼女を追っていたのはクレアだとリインは当たりをつける。

消耗し切っていたイオは帝都近くの小さな霊場に身を寄せていたのだが、そこはリインがクレアに調査を頼んだ地点でもあった。

不幸な遭遇をしてしまったイオはすぐにその場から逃げるが、次の霊場でも同じようにクレアと遭遇してしまい、その都度追い駆け回された。

それが数度あり、魔獣除けの街灯を無視して逃げてしまったことからクレアはイオを手配魔獣として登録した。

——導力ネットの手配情報を見る限りは、瘴気から生まれた魔獣の

生き残りみたいな認識らしいからな……

普通の魔獣ではないことを見抜いたクレアの慧眼も今回ばかりは間が悪いと言わざるを得ない。

何と説明してイオの手配を撤回させるかリインは悩む。

——クレアさんは「鉄血の子供」と呼ばれている……

《黒》との繋がりを示唆したオズボーンの手勢にこちら側の手札を知らせるようなことはしたくない。

「《金》の搜索を軍に頼ったのは早計だったな……」

オズボーンの手勢がそのまま《黒》の手勢になるのなら、今後の付き合い方も考えなければいけないかもしれない。

できることならクレアなどの優秀な人材は今の内に引き抜きたいと思うのだが——

「いや……ダメだ」

頭を振ってリインは唸る。

「全てが敵になるか……」

イオが教えてくれた「最初の贄」の壮絶な過去。

《黒》が因果を手繰るだけで友の、家族の、全ての絆が意のままに操られる。

リインは試しに想像してみる。

『私にリインという兄はいません』

「ぐはっ！」

胸を抉られる痛みにリインは手紙を薙ぎ倒して机に頭から落ちた。

「リ、リインッ?!」

「突然なんだっ?!」

それまで黙々と尋常ではない気配を纏って集中していたリインを遠巻きにしていたクラスメイト達は慄いた。

「いてて……あれみんな、どうかしたのか?」

打ち付けた額をさすりながらリインは顔を上げる。

「それはこっちの台詞だ。さっきから何度も呼んでいるというのに……」

「それはすまなかつた」

マキアスの言葉に時計を見れば、もう始業の鐘がなる直前だった。教室を見回せばそこにはクラスメイトのほとんどがそれぞれの席に着いている。

「あれ？ エマはまだ来てないのか？」

「エマなら——」

自分の前の空席にリインが首を傾げると同時に教室にエマが駆け込んできた。

「よかった。間に合った……」

教室にまだサラ教官がいないことにエマは安堵し、同時に始業を告げるチャイムが鳴り響く。

「おはようエマ。珍しいなエマが遅刻ぎりぎりなんて……」

「え、ええ……実はキリシヤのことでセリーヌと口論になってしまつて……」

キリシヤとはレグナートから授かった白猫の名前。

己の使い魔に相談せずに、新しい使い魔を増やしたことにセリーヌは激怒していた。

それを宥めるためにエマはギリギリまで話し合いを試みたのだが、結局セリーヌの機嫌は直らなかつた。

「俺が言うことじゃないかもしれないけど、エマは御主人様なんだからもつと強気に言つても良いと思うんだけど……」

今のエマとセリーヌだと主従が逆転しているように見えるよ」

「うう……はい、それは分かっているんですけど……」

リインの指摘にエマは里にいた時にローゼリアに言われていた言葉を思い出す。

押しが弱く、流され易いエマがセリーヌに振り回されていることは以前から指摘されていた。

「わ、私のことよりもリインさんはあれから『ゼロIIアグルーガ』と何を話されたんですか？」

「『暗黒時代』の黎明期のことをね……」

それからこれはみんなにも言っておきたいんだけど、今後あの子のことは『イオ』と呼んで上げてくれ。それが彼女が人間だった頃の

名前なんだ」

「え……う？」

「『暗黒竜』って雌だったの？ でも昨日リインは彼って言ってたよね？」

「ああ、俺もすごく驚いた」

エリオットの驚愕にリインは頷く。

「人間だった頃の名前ということは、もしかしてイオ殿も私がしたことを？」

「ああ、ラウラが考えている通り……方法は違うけどイオは人が魔獣になった例だ。それから——」

リインはクリスに目を向ける。

「な、何ですか？」

「——いや、何でもない」

言いかけた言葉をリインは呑み込む。

イオがアルノール家の始祖だということをクリスに伝えるべきか悩む。

《黒》の意志で友人たちはいつ心変わりをして敵になるか分からない。

それはクリスも同じだが、彼には歴史の真実を知らせておく必要があるかもしれない。

何にしてもこんな誰が聞き耳を立てているか分からない教室で話す内容ではないだろう。

「それにしてもサラ教官、遅いな。もうホームルームの時間だけど」

「そういえば……十分も過ぎているな」

「まったくあの人は……まさか寮で寝坊してたりとかしてないわよね？」

「いかにもありそう」

リインが振ったサラ教官の遅刻にガイウス達の気が逸れる。

「うーん、否定できないのがちょっと厳しいけど」

「そういえばいつもリインが声を掛けているようだが、今朝は随分早く出ていたらしいがどうしたんだ？」

「あ……」

ユーススの指摘にリインは冷や汗を流す。

イオの話に熱中するあまり、ほぼ徹夜だったリインはクラスメイト達と顔を合わせる気にもなれず朝一番に登校していた。

そして日課に近いサラへの呼びかけを忘れていたことに他ならぬ。いい。

「ここら、人をリインがいないと起きれないダメ人間みたいに言うんじゃないわよ」

と、ちやうどそこにサラが教室に入ってきた。

「サラ教官」

「おはようございます」

「おはよ、みんな……」

で、遅れたのにはちゃんとワケがあつてね——今日はみんなに新しい「仲間」を紹介するわ」

「え……？」

「編入生……」

「ほ、本当ですか!？」

「それじゃあ入って来て」

「はーいっ!」

サラに促され、場違いと思える程の元気の良い子供の声が響き、士官学院の制服を着た少女が教室に入ってくる。

「えへへ」

楽しそうな笑顔を浮かべてサラの隣に立ったのはリイン達がノルド高原で会った少女だった。

「うん、お久しぶりだねー。初めてのヒトもいるからあらためて自己紹介するねー……」

ボクはミリアム。ミリアム・オライオンだよ。そして——」

ミリアムはおもむろに右腕を上げると、その背後の空間が歪んで白い戦術殻が現れる。

「こつちがガーちゃん。正式名称は《アガートラム》……よろしくねー、VII組のみんなっ!」

66話 第五回実技テスト

ミリアム・オライオン。

若干13歳でありながら《帝国軍情報局》のエージェント。

レクターやクレアと同じ《鉄血の子供達》と呼ばれている一人であり、コードネーム《白兔》、もしくは《銀色の傀儡使い》として名が知られている。

「オライオンか……」

校舎から中庭を見下ろし、そこでフィーやラウラと一緒に昼寝をしている少女を見ながら呟く。

ラウラとしては珍しいことなのだが、近頃よくフィーと鍛錬していることもあり、付き合いの一環なのだろう。

外で横になって眠ることに挑戦してみたは良いものの、緊張で目が冴えてしまったのかラウラが寝入る気配はない。

しかも両脇をフィーとミリアムに固められて起きることもできずに途方に暮れてしまっている。

そんな平和で微笑ましい光景を前にしながらも、ラインの表情には陰りがあつた。

「割り切ったはずなんだけどな……」

古傷が痛むような感覚にラインはため息を吐く。

確かにあの戦場にはミリアムに似た女性がいたが、彼女たちの生まれの特殊さから別の個体だということは分かっている。

もつと言えば、彼女とミリアムには接点はないに等しい。

故にミリアムを問い詰めることに意味はないのだが、別の意味でラインは警戒心を強くしていた。

「このタイミングで《鉄血の子供》が編入して来たって言うことは……探りを入れに来たのか？」

先日、イオの手配を解くためにクレアと会った時には特に話題にならなかったが、そう考えるのが妥当だろう。

別の理由を考えるなら、《帝国解放戦線》と遭遇率が高いVII組に参加

させることで捕えるための足掛かりにするつもりなのかもしれない。
「どちらにしても注意しておいた方が良さだろう」

天真爛漫であつという間に学院に馴染んでしまったその性格は
リインも好感がもてる。

《友人》として仲良くできるかもしれないが、できることなら敵対する
ことがないことを願う。

「まさかこっちの剣を鈍らせるために……何て邪推のし過ぎかな？」

物騒な思考に行くことにリインは頭を振って、その考えを払う。

ルフィナ達に言われているが《黄昏》に向けて焦り過ぎている思考
はリイン自身も良くないことは自覚している。

もつとも味方造り、二年後に向けての地盤固めもできない状況を考
えるととても樂觀視できない。

「あら、リイン。こんなところで何しているの？」

「あ……エリカ先生」

呼びかけられてリインは振り返る。

「珍しいわね。アンタがこんな距離に近付いても気付かないなんて」

「そうですか？ でも珍しいって言うならエリカ先生も昼休みのこの
時間に校舎にいるのは珍しいですね」

「ここに置いてもらう条件が先生だからね。最低限のことはしておか
ないと教頭がうるさいのよ」

「あはは……」

サラと同じ愚痴をもらすエリカにリインは愛想笑いで誤魔化す。

ちなみに余談だが、彼女の夫であるダン・ラッセルは用務員として
働いている。

「そういうえば急ぎで作ってもらいたいものがあるんですけど」

「ん？ 何々？」

リインのその一言にエリカは気怠げだった雰囲気を一瞬で取り
払って活き活きとし始める。

「騎神用の武器を二つ、この設計図通りに作って欲しいんです」

「ふむふむ……材質はクレダレゴン？ それに内部に空洞って、こん
なんじゃ武器として成り立たないわよ？」

「分かっています。武器として使えるのは一回で十分です……」

空洞に関しては中に入れる物があるので、後で実物は見せます」

未だに《鋼の太刀》の錬成ができないのは変わらないが、それぞれの至宝の欠片から十分な性能を持たせた武具を作り出すこともできていない。

ゴルディアス級のフレーム素材を外殻にして欠片を中に容れた武器というのがリインが出した妥協案となった。

「何を入れるのか……それは近頃リイン君が使っている部屋でやっている実験と何か関係があるのかしら？」

「それは……」

「ま、良いわ」

言い淀むリインにエリカはすぐに追及をやめる。

意外なエリカの反応にリインは目を丸くする。

「良いんですか？」

エリカを始めとする博士たちが自分の実験をしていることを知っていた上で放置している事態にリインは思わず警戒する。

「気にはなるけど、他人がやっている研究を興味深いからって勝手に首を突っ込むのは技術者としてマナー違反よ」

「エリカ先生……」

「もちろんリイン君が発表してくれたり、アタシたち——アタシに相談してきてくれた場合は手加減するつもりはないけどね」

「エリカ先生……」

わざわざ自分だけを個別に頼れと言わんばかりの強調したエリカの言葉にリインは一瞬感じた尊敬の念の行き場に困る。

「とりあえず騎神の武器については了解したわ……」

一つ確認しておくけど、ゼムリアストーンの太刀に不満があったわけじゃないのよね？」

「はい。それとは別の理由で必要なものになります」

「オツケー、それじゃあ今週末までに作っておくわ」

「え……？ 流石にそこまで急がなくても——」

「フフフ、そうよね。そういえばあっちの機体も本体を作る事ばっか

り考えていたけど、どんな武器を持たせるかも考えないといけないよね」

踵を返して背中を向けたエリカが今どんな笑顔を浮かべているのか容易に想像できる。

「よーしー・ 漲って来たわよっ!」

そして止める間もなくエリカは駆け出して行くのだった。

「ははは、ラウラから聞いていたが彼女がリベールから来ている先生か」

「アルゼイド子爵閣下……気配を断つて後ろを取るのはやめてください」

特に驚きもせずリインは振り返る。

「子爵閣下はどうしてこちらに？ 確か武術指南は来週のはずでしたよね?」

「ああ、本来ならその予定だったのだが学院側で予定が変わって、その話し合いをすることになったのだよ」

「それは……俺が聞いても大丈夫なことなんですか?」

「なに今日の放課後にサラ教官から聞かされるだろうから構わないさ……」

今月末に行われるはずだった《特別実習》。その候補地がレグラムだったが、君がクロスベル通商会議に護衛官として同行することになっていくつか調整をすることになったのだよ……

今日はその話し合いと、ついでに武術指南と実技テストが明日に変更されたというわけだ」

「それは……申し訳ありません」

「君が謝ることではないさ」

「そうかもしれないませんが、先週はリベールに付き合わせて特別実習も変更……なんだか俺が皆を振り回しているみたいで」

「フ……それも良い経験だろう。物事は往々にして予定通り進むとは限らないのだから」

レグラム領主だからこそ感じる実感のある言葉にリインは苦笑する。

「そうなると通商会議当日はラウラ達はここにいるんですね？」

「いや、今日の会議でその日は前日から一学年全体での《特別実習》としてガレリア要塞での軍事演習の見学を行うことが決定した」

「一年全体での《特別実習》ですか……」

もちろんリインはその日はクロスベル入りしているはずなので例外だろう。

「前日とは言え、通商会議の直前にそんなことをして大丈夫なのでしょうか？」

「おそらく示威行為の一環なのだろう……」

カルバード側の軍事基地でもこちら側と同じように軍事演習が予定されているらしい」

「何と言うか……結局どちらにも変わらないですね」

暗黒時代では“焰”と“大地”の眷属が、現代では帝国と共和国。何も進歩していない人間たちにノイヤイオが何を思うのか心配になる。

「ところで子爵閣下はどうして俺の所に？」

以上のことはわざわざヴィクターがリインに話をしなくても放課後のホームルームの時間にサラが教室で教えてくれただろう。

「もしかしてラウラに用ですか？ ラウラなら今、あそこで——」

リインは窓の外へと視線を促す。

そこには中庭の木陰で気持ちよさそうに昼寝をしている三人の姿があった。

先程まで横になっても起きていたラウラはいつの間にかフィーとミアムと同じように寝入ってしまった。

「ふむ……」

「使いますか？」

そんな娘の姿にヴィクターは意味深に頷き、そんな彼にリインはどこからともなくオーバルカメラを取り出して差し出す。

「かたじけない」

ヴィクターはそれを受け取る。

「あ、そのオーバルカメラには望遠機能がありますから——」

「ああ、大丈夫だ。分かっている」

最新のオーバルカメラだというのにヴィクターは慣れた手付きで機能を操作して、一枚シャッターを切ってカメラをリインに返す。

「……………もしかしてリベール旅行でのラウラの写真が欲しいから、何て言いませんよね？」

まさかと思いつつ、リインはヴィクターに尋ねる。

リベールで撮った写真はみんなにそれぞれ配っている。

ラウラが写っている写真は当然彼女が持つており、彼女が実家に送らない限りはヴィクターがそれを見る事は叶わないだろう。

「ははは、そんなまさか。そんな娘のプライバシーを侵害するつもりはないさ」

今、その娘のお昼寝姿を激写したことをリインはあえて突っ込まないでおいた。

リインもノイやリンのプライバシーは尊重するが、そういう無防備で微笑ましい光景は写真に収めておきたい衝動に駆られることもあると理解している。

「実は先月の帝都で聞きそびれていたのだが……………《箱庭》の中で『暗黒竜』と戦うことはできるのかな？」

「それは……………」

直前までの緩んでいた空気が一気に張り詰めて、ヴィクターは心なしか期待を含んだ眼差しをリインに向けてくる。

ヴィクターは帝国内でも数少ないリインの《箱庭》の性能を知っている者の一人。

それを使えば過去にリインが相対した敵と疑似的に戦えることを知っているからこそ、伝説の魔獣に挑める好機に心を逸らせていた。

「できると言えばできるんですけど、できないと言えはできません」
「そうか……………まあ無理強いするつもりはないが」

歯切れの悪い否定的な答えにヴィクターは残念そうに肩を落とす。

『お？ アタシは別に構わないけど？』

『いや、君はまだ病み上がりだろ？』

『氣遣つてくれるのはありがたいけど、アタシも今の自分に何ができるのか知りたいからね……』

外ではまだほとんど何もできないけど《箱庭》の中でならその限りじゃないよ。それにリイン君で試すわけにはいかないから』

『確かにそうですね……』

《箱庭》ではリインがこれまで戦つて来た相手と疑似的な戦闘をすることができるとは、これは全く制限がない機能ではない。

元々の力がリインから供給されているため、力の強い敵を再現すればリインの霊力が消耗されてしまう。

仮想敵もそうだが、ルフィナとの手合わせも彼女の術の消耗は巡り巡つてリインの消耗になるため、自己鍛錬にはあまり向いていないのが欠点である。

もつともそれはリイン側の問題であり、他人が利用する分には何の問題もない欠点ではある。

「どうかしたのかね？」

《箱庭》の中にいるイオと思念で会話していたリインにヴィクターは首を傾げる。

「何でもありません。ちょっと新しい住人に話しかけられて……」

それで子爵閣下がよろしければ「暗黒竜もどき」と戦ってもらうことはできます」

「何やら込み入った事情があるようだな……しかし戦えると言うならば非もない」

嬉しそうに笑うヴィクターにこの「闘争本能」はどこからくるのだろうか？とリインは悩む。

——これも「闘争の呪い」の……いや、何でもそのせいにするのはよくないか……

「ふむ……」

「どうかしましたか？」

「いや、暗黒竜と戦うのは日を改めよう……それよりも何か悩みを抱えているのかね？」

「っ——何のことですか？」

「取り繕わなくても構わんさ。君には娘が迷惑を掛けている……
いや、そうだな。やはり「暗黒竜」との戦いはやらせてもらおう
か」

「子爵閣下？」

再び前言を撤回するヴィクターにリインは困惑する。

「これで私はラウラと共に君への貸しはさらに大きくなってしまった
な……」

私としてはすぐにでも恩を返したいのだが、何か悩みはないかな
リイン君？」

「……恩返しへの押し売りはどうかと思えますが？」

「だがこうでもしなければ君のような人間は一人で抱え込んで、自分
の中で答えを出してしまうのではないかな？」

「それは……」

「ふふ……では今日の夕方にでも寮に訪ねさせてもらうとしよう」

では、とリインの制止を聞かずにヴィクターはその場から立ち去っ
てしまう。

「………何だか強引に決められてしまった……」

こちらが悩みを話すことを前提にことを進められてしまったこと
にリインは言いようのない敗北感を突き付けられた気持ちになる。

質実剛健で知られるアルゼイド子爵だが、帝国貴族の一員である以
上腹芸ができないわけではない。

もつともその腹芸も豪快に踏み込んでの一刀両断という力技。

ある意味らしいのだが、これまでの交渉経験にはない相手だっただ
けに押し切られてしまった。

「まだまだだな……」

未熟さを痛感するように肩を竦めるリインだが、重く沈んでいくば
かりだった気が少しだけ軽くなった気がした。

・*

8月18日、水曜日。

一週間早まった特別実習の影響を受けて、実技テストも一週間早まったその日。

一通りのテストが終わった最後、リインはある男と対峙することになった。

「ではサラ教官、立ち合いの合図を頼めるかね？」

その男は慇懃無礼な態度で呆然とするサラに尋ねる。

「え……ええ……」

誰に対しても物怖じしないサラは苦虫を噛み潰したような顔で頷き、リインと向き合う男の間に立つ。

「すまないな。このようなことに付き合わせてしまって、愚かしいことに君の力を騎神頼りのものだと言口を叩く輩がいるものでね」

「いえ……」

男の謝罪にリインは短い言葉を返しながら、校舎への階段の上に並んでいるギャラリーを一瞥する。

「そういう名目で陛下達が授業参観に来たんじゃないですよね？」

「フフ、それは御想像に任せるとしよう」

はぐらかす答えにリインは思わずため息を吐きたくなる。

観客は《西ゼムリア大陸通商会議》に参加する随行団。

その中にはオリヴァルト皇子を始めとしたリインの顔見知りもいるのだが、それ以外にエレボニア帝国皇帝ユーゲント三世とプリシラ皇妃までいた。

彼らもまた、リインへの不満を払拭させるために立ち会うことを名目としてここにいるのだが、それはどこまで建前なのだろうか。

授業開始から皇帝陛下達に見学されることとなったVII組達、クリスを含めて場慣れをしていない者達は普段とは精彩を欠いたぎこちない動きをしていた。

「さて、では陛下達を待たせるのもこれくらいにして、ここから先は剣で語り合おうでしょうか」

男は軍刀を抜き放ち構える。

「百式軍刀術でしたね」

「フフ、昔とった杵柄、君の眼鏡にかなうかは分からぬが……胸を貸し

てもらおうとしよう灰の英雄殿」

「それはこちらの台詞です」

「フフ、楽しませてくれたまえ」

「えー……それじゃあこれよりリイン・シュバルツァーとギリアス・オズボーンの『手合わせ』を行います」

サラが観客に向き直って宣言し、振り返る。

リインは開始の合図に向けて意識を集中させつつ、ギリアスに尋ねる。

「そういえばこれに勝ったら俺の質問に一つ答えてもらって良いですか?」

「ほう……良いだろう」

リインの提案にギリアスは興味深そうに頷く。

「それでは——始めっ!」

・*

「蒼き焰よ——」

「黒き焰よ——」

いつかの戦いと同じように蒼と黒の焰がぶつかり合い互いを喰い合って消滅する。

「ほう……《影の国》からさらに腕を上げたようだな」

鏢迫り合いに負けないリインにギリアスは楽しそうに言葉をもらす。

「やはり貴方は覚えているんですね」

レクターは薄々察している様子だったが、他の者達は《影の国》での出来事を一夜の夢程度にしか考えず、すでに忘却してしまっている。

しかし、男はその中の例外としてその時の経験のことを語る。

「中々に楽しい夢だったよ。おかげで久しぶりに剣を振りたくなった程だ」

あの時にはなかった鋭さで切り返される刃をリインは紙一重で避

けて切り返す。

鏑落としがされたギリアス・オズボーンの剣はあの時よりも強く速い。

「さあ、どこまで付いてこれるかな？」

「っ——」

徐々に剣戟の圧力と密度を上げていくギリアスにリインは必死に食らい付く。

「鉄血宰相……これ程とは……」

「頑張つてリインさん」

「あはは、オジさんってこんなに強かったんだ」

観客たちはその戦いを手に汗握り、声援を送る。

「ふふ……これだけ見せれば彼らも納得してもらえたようだ」

上段からの唐竹割りを受け止められながら、ギリアスは横目で観客の様子を確認してリインに話しかける。

「そうですね——っ！」

太刀で受け止めた姿勢のまま、前蹴りでギリアスの胸を蹴り突き飛ばす。

「螺旋撃・焰っ！」

こじ開けた隙にリインは業炎の焰を宿した螺旋の一撃を叩き込む。

「ぬおっ！」

軍刀に走る衝撃にギリアスは大きく弾かれて膝を着く。

「……………まさか私が膝を着かされるとはな」

「嫌味ですか？ まだ本気を出していませんよね？」

油断なくリインは太刀を構えてギリアスの呟きに答える。

「一つ聞かせてもらおうが、私と聖女、君はどちらが強いと思っているのかな？」

「『鋼の聖女』ですね」

「……………そうか……………」

即答された答えにギリアスは目を伏せ、立ち上がる。

「それでは少し本気を出させてもらおうとしよう」

ギリアスは笑みを深くして、おもむろに左手で自分の胸を掴み、吠

える。

「オオオオオオツツツ!!」

「っ——まさか……」

ギリアスの雄叫びにリインは胸に走った痛みを顔をしかめる。

その身体から漆黒の鬼気が迸り風が荒れ狂う。

「鬼気解放っ!」

そしてギリアスの髪が白く、瞳が真紅に染まる。

「魂に刻むがよいっ!」

掲げた軍刀に黒い焔が天高く伸びる。

黒き焔はもはや刃と言うよりも、雲に届かんとする黒き柱。

振り下ろされた一撃は校舎を激震させ、校庭を二分にする深い傷を

生み出した。

「むっ……やり過ぎてしまったか」

舞い上がる土埃に視界を奪われたギリアスはその結果に、いつかと

同じことを呟いて我に返る。

しかし——

「壺の型《螺旋撃》」

「っ——」

土埃のカーテンを切り裂いて迫る一撃をギリアスは咄嗟に軍刀で受け止める。

ギリアスと同じように《鬼気》を解放したリインはその反動で距離を取り、助走をつけて太刀を一閃する。

「式の型《疾風》」

声を頼りに振り向いた瞬間、神速の風が吹き抜け、疾き一撃が軍刀を震わせる。

ギリアス・オズボーンが《黒》の起動者であることは確定した。ならば今の全力がどこまで通じるのかリインは試すつもりで斬撃を重ねる。

「参の型《業炎撃》」

渾身の力を込めた上段からの焔の一撃を軍刀に目掛けて叩き込む。

「肆の型《紅葉斬り》」

ギリアスの目は白い影を捉えるが、抵抗することもできずに鋭い斬撃を軍刀に受ける。

「伍の型《残月》」

溜まらずたたたらを踏んだギリアスに追い縋り、力を溜めた居合の一閃が叩き込まれる。

本来なら全ての型を「終の太刀」で繰り出す技だが、今のリインには息が続かない。

しかし「鏡火水月の太刀」へと繋がらない、基本の型ならそれに当てはまらない。

「陸の型《孤影斬》」

「オオオオオオオオオオツツツ!!!」

腕の痺れが限界に達しながらもギリアスは鬼気で身体を満たして剣閃を力任せに迎撃する。

「漆の型《無想覇斬》」

ダメ押しと言わんばかりに連続剣をギリアスは受け止める。

「耐えたぞ。リインよ」

八葉一刀流は無手の型を別にして七つの型によって成り立っていることをギリアスは知っている。

その全てを息も吐かせない連続攻撃として使ってきたスタミナと最後まで衰えない剣撃の精度にギリアスは舌を巻き――

「《金剛撃》」

「なっ!?!」

七つの型にない突きの一撃が気を緩めたギリアスの眼前に迫る。

咄嗟に仰け反り、その突きを倒れるように避ける。

だが――

「壱の型《螺旋撃》」

伸び切った突きが軌道を変え、螺旋の力が乗った強撃へと変化する。

突きの一撃を死に体になっても躲したギリアスにそれを受ける余裕はなく、その一閃は軍刀を砕いた。

「これが超帝国人同士の戦いと言うものなのか……凄まじいものだな」

立ち昇った土煙にユーゲントは慄く。

「ええ、まさかオズボーン宰相がこれ程の力を持っていたとは思いませんでした」

そんな父の呟きに同意するようにオリヴァルトは頷く。

「ところでミユラー。僕の中にはオズボーン宰相が技を放つ直前、髪が白く染まったような気がしたんだけど」

「ああ、黒い闘気に遮られて見え辛かったが、あれはシュバルツァーと同じ《鬼の力》だった」

親友からの同意を得られてオリヴァルトはため息を吐く。

「もはや隠すつもりはないと言うことか」

《鬼の力》は騎神に由来する力。

ならばそれを使ったギリアスは自分からその関係者と認めたいようなものだった。

「それにしてもリイン君は無事なのか？」

「それは——」

ユーゲントがリインの身を案じる言葉にオリヴァルトは我に返り

——剣戟の音が土煙の中から響き、目を剥いた。

「まさか……」

剣戟の音はさらに重なり、まだ戦いは続いていることを示す。

甲高い音が響く度に風が坂巻き、濃い土煙は徐々に晴れていく。

オリヴァルト達の目に二つの人影が見えたところで、片方の人影が後ろに倒れ込み、剣が折られて手から弾き飛ばされる。

そしてもう片方の人影が倒れた相手に剣を突きつけて、そこで剣戟の音は止まった。

徐々に晴れていく土煙に、オリヴァルト達は緊張した面持ちで微動だにしない二人を見守り、土煙が晴れるのを待つ。

そして——

「さて、随行団の皆さん」

その結果にオリヴァルトは満足そうに頷き、リインが護衛官としてクロスベルに同行することに難色を示していた随行団員達に振り返る。

「リイン君の力は今、皆さんが目にした通り。決して『騎神』頼りの英雄ではないことは分かってもらえたでしょう」

これまで何かとリインについて粗を探す様に文句を呟いていた者達は一様に言葉を失って呆然自失となっている。

「確かにリイン君はまだ年若く、経験不足な面はあるでしょう……」

ですが、少なくともオズボーン宰相を護るに足る実力があることは証明できたはず。そして彼は誰よりも護衛と言う仕事の大切さを理解していることはボクが保証しよう」

オリヴァルトの言葉に反応は返ってこない。

「どうやらクスリが利き過ぎてしまったようだね」

呆然とする彼らにオリヴァルトはしたりと頷くのだった。

・*

「見事だ、リイン・シュバルツァー。それで私に何を聞きたいのかね？」

喉元に突きつけられた刃が引かれ、ギリアスはリインに向けて最大の賛辞を送り、戦う前にリインがした勝利の報酬を尋ねる。

「ミリアムのことですが……」

リインは亀裂が入った太刀に顔をしかめながら尋ねる。

「あの子は『鉄血の子供』と呼ばれているみたいですが、カーシャ母さんから浮気をして、他所でできた子供ですか？」

「ぶっ!？」

自分を正面から打倒してみせたリインの実力に表情を緩めないように努めていたギリアスは不意打ちの問いに巷で評判の鉄面皮を崩して吹き出した。

「冗談です」

ギリアスが何かを答えるより早くリインは笑って訂正する。

「本当の質問は俺が《黒》に勝ったら、俺の命はそこで終わりなのかどうかです」

「な、何故それを!?!」

思わずギリアスは聞き返し、しまったと顔を歪めた。

「やはりそうでしたか……おかげで改めて覚悟が決まりました」

「リイン・シユバルツァー……君は……いや、何も言うまい」

機先を取られ、動揺を抑え切れずに素直に反応してしまったことにギリアスはしてやられたと肩を落とす。

問いに対して教えてやると言う上から目線でいたが、良いように情報を抜き取られてしまい、手合わせで負けた以上の敗北感にギリアスはため息を吐いた。

67話 特別実習八月

「と言うわけで、今月の《特別実習》は一週間繰り上げて今週末に行ってもらうことになったわ」

実技テストを終えたその日のホームルーム、サラはⅦ組の一同を前にそう報告した。

「今週末なんてそんないきなり……」

「急に言われても……」

突然の予定変更にマキアスとエリオットが不満をもらす。

が、そんな不平不満は想定内だとサラは淀みなく言い返す。

「この程度の予定変更なんてかわいいものよ。大人になれば当日にだって急な仕事が入ったりするものよ」

「それはそうかもしれないけど……」

サラの言い分にマキアスは渋々と言った様子で引き下がる。

「ですが、この場にナイトハルト教官が同席しているのはどういう意味があるんでしょうか？」

「もしかして今回はナイトハルト教官が《特別実習》に参加するんですか？」

帝都では先輩達と共に特別実習を行ったため、今回もその類なのではないかとアリサは考える。

「いや、俺がいるのはそちらの《特別実習》についてではない」

「そちらの？」

含みのあるナイトハルトの言葉にアリサが首を傾げると、サラが説明の続きを話し始める。

「今月の《特別実習》は二回行うことになったのよ……」

一回目はさつきも言った通り、今週末の三日間。これまでと同じようにⅦ組で実習地に行つて課題をこなしてもらうわ……

そして二回目は最初に予定していた月末の日程でリインを除いた一学年全体での《特別実習》として《ガレリア要塞》に行つてもらおう事になったわ」

「ガレリア要塞……」

「共和国側に備える帝国正規軍の一大拠点……」

「しかも一学年全体って……」

「VII組には各クラスの取りまとめ役を行ってもらおう」

サラの説明を補足するようにナイトハルトが口を挟む。

「今では緩んでいるとは言えツールズ士官学院は軍学校だ。軍事施設の見学は当然のカリキュラムだ……」

当然、お前達にはあの場所ならではの特別なスケジュールをこなしてもらおう」

「特別なスケジュール……」

「へー、なんだか面白そう！」

脅すようなナイトハルトの言葉に慄くアリサとは対照的にミリアムは言葉通り、楽しそうに笑う。

「フフ、とにかく気を引き締めておきなさい。ガレリア要塞にはあたしも合流するつもりだから……」

かわいい生徒たちが、頭の固い軍服のお兄さんにイジメられたりしないようにね」

「……自分はカリキュラムを逸脱した理不尽なしごきをする予定はない……」

どこかの気分屋な教官と一緒にしないでもらいたい」

「ふん、そこは柔軟って言って欲しいわね……」

あんたみたいな堅物がこの子達の担当教官になったら一週間も持たないわよ。ええ、それはもう……」

「む……」

嫌味を返したかと思うと遠い目をするサラにナイトハルトは閉口する。

が、慰めの言葉を掛けられるよりも早くサラはその思考を振り払って、説明を続ける。

「それじゃあガレリア要塞の特別実習の話はこのくらいにして、今週の《特別実習》の方の実習地を発表と行きましようか」

ガレリア要塞の実習から意識を切り替えさせて、サラは一同にプリ

ントを配る。

A班：ラウラ、マキアス、ユーシス、ガイウス、エマ、ミリアム。実習地：湖畔の町レグラム。

B班：リイン、クリス、エリオット、アリサ、フィー。実習地：ノーザンブリア自治州ハリアスク。

「これって……」

自分が割り当てられた班員、そして実習地にアリサは顔をしかめる。

「A班の《レグラム》は確かラウラの故郷だっけ？」

「ああ……クロイツェン州の南部に位置する湖畔の町だ。年中濃い霧に包まれ、多くの伝承が残る中世の古城などもある」

フィーの疑問にラウラが頷いて軽く説明をする。

「B班のノーザンブリアって……あのノーザンブリアですか？」

「そのノーザンブリア以外にどこがあるのよ？」

恐る恐る聞き返して来るマキアスにサラは苦笑して、肯定する。

ノーザンブリア自治州。

ゼムリア大陸北部に位置し、かつては『ノーザンブリア大公国』という大きな国家だった。

しかし七耀歴1178年に『塩の杭』と呼ばれるアーティファクトの出現により、国土の半分が塩化して総人口の三分の一が失われた大惨事に見舞われた。

さらに当時の大公が国外逃亡したことによりその権威は地に落ち、市民革命により大国は崩壊して、自治州となった。

《塩の杭》は七耀教会の専門家によって封印・回収されたが、その傷痕は深く浸食こそ広がっていないが塩化した大地は不毛の大地として20年以上経った現在でもそれは変わっていない。

「そんな土地、しかも外国なのに《特別実習》を行っても大丈夫なんですか？」

「《特別実習》って言っても今回は現地の遊撃士協会の手伝いをしてもらうことになっているわ……」

それに一応あたしも案内役として同行するから安心しなさい……

ま、今までの《特別実習》とは違って観光半分でいられるのは困るけど、通商会議でも議題に上がるみたいだし、ラインとクリスは見ておく価値があるでしょう」

努めておどけた口調でサラは補足説明を加える。

「それにしても『塩の杭』か……わずか三日でノーザンブリアの半分以上を塩に変えたと言うが」

「恐ろしいな。確か触れた物全てを塩に変える代物だったらしいが……」

ユーシスの呟きにガイウスは頷き、ふと思ったことをそのまま口にする。

「やはりラインでも触れたら塩にされてしまうのだろうか？」

「ガイウスさん、いくらラインさんでも流石に——」

「ああ、あれはきつかったな」

ガイウスの呟きにエマが苦笑を浮かべて否定しようとした言葉は当の本人の言葉によって遮られた。

「え………え………？」

「体の芯から塩に変わって、痛みもないのに体が崩れて行く感覚……正直二度と体験したくないよ」

とはいうものの、ラインの中には二度『塩の杭』に刺された記憶が存在している。

一度目はカンパネルラがレプリカと称するものを刺された時。

二度目はワイスマンの記憶で矢に加工したオリジナルを突き立てられた時。

後者に至っては、本当に絶命した記憶なのでラインとしては極力思い出したくない事柄なのである。

「ラインさん……まさか……」

「あれ？もしかしてあの時のことは本に書かれていないのか？」

確かめるようにクリスに振り返るが、彼は首を横に振って否定する。

「どうやら検閲対象になったのか、例の本では事実と異なる描写がされているらしい。」

それに気付き、リインは失言だったと察するが、すでに時は遅くVII組一同からはドン引きした眼差しが送られる。

「ちよつと待ちなさいリイン! 『塩の杭』に刺された経緯はともかくどうして生きてるのよっ!」

「それはまあ『鬼の力』のおかげです。それに刺されたのはレプリカでしたからオリジナルと比べて塩化能力は低かったですよ」

「そういう問題じゃない!」

オリジナルと比較できていることに気付かずサラは吠える。

「じゃあ何? もしかしてあんたには今も塩化した不毛の大地を元に戻せるって言うの!?!」

「それは試してみないと分かりません」

リインの答えにサラは口を噤み、直後大人であること、教官であること、それらのプライドをかなぐり捨ててその場で土下座した。

「お願いします。ノーザンブリアを救ってください」

「なっ!? サラ教官!?!」

「あたしにできることは何でもするわ。だから——」

「気持ちに分かりますが、落ち着いてください」

真摯に土下座するサラ。そしてVII組とナイトハルトの視線に居たたまれなくなつたリインは土下座をやめるように説得する。

頑なに土下座をやめないサラを説得するのだが、ホームルームの間が終わっても土下座を続けるサラを見兼ねてナイトハルトが呼びに行ったベアトリクス教官の雷が落ちるまでリインは針の筵だった。

・*

クロイツエン州。

夜のルナリア公園最奥に彼らは集まっていた。

「やっぱりクロスベルに行くのは俺だろうな」

傷面の巨漢——『V』はその話し合いに自分こそがと名乗りを上げる。

「どうやら奴は護衛に『赤い星座』を雇ったらしい。それにあのリイ

ン・シユバルツアーも奴の護衛に駆り出されているらしいからな」
「しかし、捨石になる可能性を考えたら戦闘力が低い私が行くべきだろう」

《V》の提案に《G》が異を唱える。

「それに君たちは私と違って直接引き金を引きたいのではなかったのかな？」

「それは……」

「否定はしないわ」

《G》の指摘に《V》と《S》は口ごもる。

「それに帝都での汚名を返上するという意味でも私に譲ってもらえないだろうか？」

「だが、あんたにはまだ《笛》が残っている。それはどうするつもりだ？」

「《笛》は《S》、君に譲ろう。元七耀教会のシスターなら私よりもうまく使えるはずだ」

「あら良いの？」

差し出された《降魔の笛》を《S》は何のためらいもなく受け取る。

「それに《C》の話ではリイン・シユバルツアーは私を目の仇にしているそうじゃないか……」

ならばこそ奴等の目を引くと言う意味でも私が適任であり、合理的なはずだ。我らの目的を達成するためにもな」

「あんた……」

「……まったく。生真面目すぎるでしょう」

自分の死を厭わない覚悟を見せる《G》に二人は感銘を受けたかのように言葉を失う。

「フツ……君たちも似たようなものだろう。そうでなければ、こんな闘争にわざわざ身を投じてはいまい」

「フフ、そうね」

「クク、違いねえ」

《G》の指摘に二人は何処か誇らしげに笑みを浮かべて頷く。

そこに新たな声が増える。

「――揃っているな」

「同志《C》」

「来たわね、リーダー」

「これで全員揃ったかよ」

仮面の男は自分を迎える三人を見渡し続ける。

「同志たちよ、よくぞ集った。既に我らは走り出し、止まる事も、顧みることもない。求めるのは『結果』のみだ」

「同意する」

「異議ナシね」

「言わずもがなだぜ」

《C》の言葉に三人は一様に頷く。

「その上で、あえて聞こう……同志《G》。本当にいいのだな？」

「フツ……」

呼ばれた《G》は満足そうな笑みを浮かべる。

「私の思想と理念は《解放戦線》に息づいている……」

ならば、例えクロスベルでこの身が果てようとも構わない。あの男がもたらすであろう恐るべき反理想社会の到来……

誰かが食い止められれば我らの勝利となるのだから」

「そうか……だが、何か策はあるのか？ それがなければ捨石にすんなれないぞ」

「それについては考えている……」

所詮は子供、君の情報が確かならまだ人を殺したこともない臆病者。己の手を汚す覚悟もない相手ならこの命を盾に使えばいい……

それこそ、この体に爆弾を撒きつけた特攻ならば、奴もあの男も同時に討つことが出来るだろうさ」

「そこまでの覚悟か……」

命を捨てる《G》の覚悟を《C》は認める。

「分かった。女神の――いや、悪魔の加護を……」

事が成ったら四人で祝杯を上げるとしよう。願わくば帝都へイムダルでな」

「ああ……」

「そうね」

「ふ……」

《C》の軽口の提案に三人はあり得ないと分かっているも頷く。そこには確かな絆があった。

例え他人からどんな罵りを受けても、そこにいるのは同じ志を持った仲間。

思えばその付き合いも長くなったと《C》は仮面の下で苦笑をして

「おや、邪魔をしてしまったかな？」

その輪の中に無遠慮な言葉が割って入って来た。

「アルベリヒ……カイエン公の相談役が何の用だ？」

「おやおや、そう邪険にしないでもらいたいな……折角君たちに耳寄りな情報を持ってきて上げたというのに」

「あら、何かしら？」

「《C》もそんな怖い声を出すなって」

「ふむ……クロスベルに行くこのタイミングで持ってくるとは重要そうな話のようだ」

すんなりとアルベリヒの事を受け入れた三人に《C》は仮面の下で表情を曇らせる。

彼には「アレ」の整備について日頃から世話になっている。

「魔女」からも決してこの男には気を許すなど言われている。

もつともそんな忠告がなかったとしても、《C》はアルベリヒという男が苦手だった。

「ふふ、リーダーはやはり私の事を認めてくれてないようだ」

「良いから用件を言え」

粗暴な返答にアルベリヒは嘆かわしいと肩を竦め、それを彼らにもたらしした。

「とある筋からの確定情報なのだが、リイン・シュバルツアー。彼はギリアス・オズボーンの実子だそうだ」

それが告げられた瞬間、自然公園の空気が変わった。

四人が四人共黙り込み、アルベリヒがもたらしした新情報を吟味して

呑み込む。

「ああ、そうか……そういうことかよ」

その眩きは他の三人と同じ気持ちを表したものだっただ。

「フフ……気力が充実したようだなによりだ……」

ところでリーダー。一つ提案があるのだが、手すきの者を集めてノーザンブリアに行ってくれないかな？」

「ノーザンブリアだと？」

「そこにある〃とある残留物〃を取って来てほしい。それを使えば君の〃アレ〃の武具を強化できる……」

彼を、ひいてはあの男を確実に殺すために役立つだろう」

「良いだろう……《S》《V》……」

「おうよ。どうせ仕込みの大半はもう済んでいるんだ。構わねえぜ」

「そうね。あの男を確実に煉獄に叩き落とすためならその程度の労力は厭わないわ」

「やれやれ、私はこれからクロスベル入りすると言うのに仲間外れか」

呼ばれなかった《G》は残念だと言わんばかりに肩を竦める。

「それで我らは何を取って来ればいい？」

そう返す《C》の頭にはアルベリヒへの嫌悪はなくなっていた。

それが彼らが望んだ女神の加護ではない、悪魔の加護だということに誰も気付くことはなかった。

68話 塩の大地Ⅰ

ノルドよりも遠い実習地ということもあり、Ⅶ組B班は前日の夜行列車でノーザンブリア州都の国境線となるドニエプル門から首都への移動はそのまま徒歩による行軍となった。

「地図で知っていましたけど、ノーザンブリアの首都まで鉄道は整備されてないんですね」

クリスの質問にサラが先頭を歩きながら答える。

「十年くらい前に帝国からジュライに鉄道を伸ばす話に便乗してハリアスクにもって話はあったのよ……」

「けど今も残っている塩域に鉄道を敷くことはできなかったのよ」「それはどうして?」

「理由はいくつがあるわ……」

「鉄道に限らず、塩化した大地は建物を建てることができないのよ……」

地盤からしてダメになっているっていうのもあるけど、塩自体が特殊で鉄とかの経年劣化がとにかく早いのよ……」

「だから鉄道網を敷くことはできなかったのよ」

「『塩の杭』の影響は26年前の話なんですよね?」

「その影響が今でも続いているのはおかしくないですか?」

「んー……どういう意味?」

「気を悪くしないでくださいよ……」

「そう断ってからクリスは自分の考えを口にする。」

「当時の混乱や国土の消失により国民の半数が亡くなっているんです……」

「その後の貧窮した生活事情でさらに犠牲者は増えていたそうですし、その事件を生き残ったノーザンブリアの人間全てが先の見えない国に留まっているとは考えづらいんです……」

「悪い言い方をすれば淘汰され、正常な土地に住める人間の数は間引

きされて、当時の人口よりも今のノーザンブリアの人口は更に低くなっています」

「本当に嫌な言い方ね……それで？」

「すみません。ただ今の正常な国土に対してノーザンブリアの人口は決して飽和し過ぎているとは思えないんです」

「そうね……まず基本的にノーザンブリアでは作物はほとんど育たないのよ……」

風は常に塩を含んだ風だからとにかく農作業には向かないし、さっきの理由で施設一つ建てるのも苦労しているのよ」

「でも26年ですよ。それだけの時間があったのに経済対策の一つも立てずに未だに猟兵の稼ぎに頼っていると言うのはどう考えても健全ではないと思います」

「経済対策ね……」

「先日サラ教官はノーザンブリア産のお酒を買っていましたよね？」

お酒を造る余裕ができたなら、どうしてまだ猟兵で外貨を稼がないといけないんですか？」

「あれはスピリタスだから作れるのよ」

踏み込んで来た質問にサラは苦笑して答えを教える。

「そうなんですか？」

「さつきは農作物は育たないって言ったけど、全く育たないわけじゃないの」

ただ土地の影響もあって奇蹟的に実ってもだいたい塩味になるのよ……」

「けどスピリタスは何度も蒸留して作るからその工程で塩分を取り除けるってわけ」

「へえ……そうだったんですか……すみません。変なこと言って」

「良いわよ。そういう疑問を持つのは悪いことじゃないから」

「そういう戦うこと、ミラを稼ぐことばかりを意識して故郷が何をしているのか気にも留めたことはなかった。」

26年掛けても一向に進まない復興作業。

食べ物に困っていることは常だが、未だにノーザンブリアを蝕む」

塩化現象”についても改善の計画についてはサラは聞いたことはなかった。

「……………例えばクリスならどんな経済対策が思いつく?」

誤魔化す様にサラは質問に質問を返す。

「え……………それは……………“塩”を外国に売るって言うのはどうでしょうか?」

「いや、ないわー」

逡巡して出て来た回答にサラは呆れて否定する。

「そうですか? なんかアーティファクト由来の“塩”なんですから霊験あらたかなありがたい“塩”になると思うんですけど?」

別に毒ってわけじゃないですよね?」

「そうかもしれないけど、クリスは知り合いだった人間の“塩”を売り物にできるの? 売り物にされて食べたいと思う?」

「あ……………すみません」

失言だったと気付いてクリスは頭を下げる。

「でも悪くない着眼点ね。ノーザンブリア出身にはできない発想よ」

サラはクリスの成長に笑みをこぼす。

——入学したばかりは浮かれた皇子様だったけど、随分逞しくなつたものね…………

ノーザンブリアの情勢もこの数日でそれなりに予習して来たのだろう。

それにサラの酒のことに気付くなど、目端も効くようになっていて流石はオリヴァルト皇子の弟だと感心する。

「ねえ、サラ。ノーザンブリアといったら“北の猟兵”の本拠地だけどリインが入っても大丈夫なの?」

「何よフィー、リインの心配をしてるの?」

話しかけて来たフィーにも同様のものをサラは感じる。

「別にそんなことないけど、リインはリベールで“北の猟兵”ともやり合ってたんでしょ? その時の遺恨はないのかなって思っただけ」

「大丈夫よ。“北の猟兵”はほとんどノーザンブリアに帰って来ないし、あいつらだって依頼もなしに喧嘩を売るにはリインは割に合わない

い相手だつて分かっているはずよ」

リベールでのリインが行ったとされる「獵兵百人斬り」。その直後に死亡したことになったこともあり、獵兵界ではある種の伝説のようになりインの存在は祭り上げられた。

そう祭り上げたのは他でもない「北の獵兵」。

彼らはリインの首を討ち取れず彼が死んだと報じられたことを良いことに、リインから二度も生き残った獵兵団として宣伝して知名度を上げる事に成功した。

さらに言えば、その事件を切っ掛けに解散した獵兵団も多く、競合相手を排除してくれたという意味でも「北の獵兵」は総じて利益を得ている。

だから「北の獵兵」には今更リインを襲う理由はない。

サラはそう思っていた。

・*

首都ハリアスクに近付くにつれて景色には白が混じり始める。

「まるで雪化粧みたいだけど、これが全部塩なのか」

「ええ……久しぶりに見ただけど、変わらないわねこの景色は」

リインの呟きにサラは感慨深くその光景を眺め、ため息を吐く。

「綺麗ですけど……あまり言わない方が良いんですよ」

それは幻想的な光景だが、物悲しさを秘めた寂寥感に胸を締め付けられる。

「そこまで気を使わなくて良いわよ。一応こんな光景だからこそ観光客だつて完全にいなくなつたわけじゃないんだから」

サラにとつては物心着いた時からそうだった光景。

以前を知らないサラにはむしろリインが気遣つた機微を感じる側ではないことに少し寂しきを感じてしまう。

「とはいえ、治安はあまり良くないからスリや置引きには気を付けなさい……特にへばっている二人はね」

「そ、そんなこと言われても……」

「五時間も歩き通しじゃないですか……」

「ふふ、何言ってるの。宿に荷物を置いたら早速今日の《特別実習》を始めてもらおうわよ」

息も絶え絶えに疲れ切っているアリサとエリオットにサラは馴染みの封筒を見せびらかす。

その言葉に二人は言葉を失うのだった。

・
*

元国家元首バルムント大公邸。

そこは今、市長邸として装いを新たにしてサラ達を受け入れた。

元公国軍のバレストイン大佐の義娘であるサラは市長を始めとした議員たちが勢揃いする形で歓待を受けることになり、サラはリイン達に特別実習の封筒を渡して別行動となった。

「それじゃあ確認しよう」

受け取った封筒を開けて、馴染みに用紙をクリスは読み上げる。

「一つ目の必須課題はレミフェリア方面の街道の安全確保だね」

「安全確保？」

オウム返しに聞き返すアリサにクリスは頷いて続ける。

「明日僕達が炊き出しの手伝いをする事になってる遊撃士の輸送車両のための経路確保だね……」

ノーザンブリアの魔獣は気性が荒く飢餓状態に陥りやすいせいで、導力灯を設置しても魔獣除けの作用よりも結晶回路の誘引性が勝つて、設置しても壊されてしまうらしい……

だから定期的に周囲の魔獣は間引く必要があるみたいなんだ」

「魔獣退治なら気は楽だね。他には？」

魔獣除けが意味をなしていないことにそんなこともあるのかと頷きながら、フィーは続きを促す。

次の用紙を見てクリスは顔をしかめた。

「どうしたのクリス？」

固まったクリスをいぶかしみエリオットが声をかける。

「いや……二つ目の課題は旧ノーザンブリア基地に赴いて、少年兵たちとの模擬戦闘をすること……今日の課題はこの二つだけみたい」

「そう来たか」

クリスが読み上げた内容にリインは唸り、そんな彼にアリサが聞き返す。

「そう来たかってどういうこと？」

「ある意味、ノーザンブリアの現状が一番良く分かる課題だってことだよ」

そう答えを濁すリインにアリサとエリオットは揃って首を傾げた。

・＊

魔獣の間引きと言っても、ハリアスクからレミアア方面の国境線までと無茶な範囲ではなく、これまでの特別実習の様にその範囲はおよそ200セルジュ内と定められていた。

整備された街道はあるが、そこを我が物顔で居座る魔獣たちの姿はリイン達にとって新鮮に映る。

「魔獣が多いみたいだけど、あれは食べないのかな？」

「ノーザンブリア産の魔獣の肉は『塩化』の影響があつて食べられたものじゃないらしいな」

フィーの呟きにリインは予習して得た知識で答える。

「何だか理不尽だね……」

戦闘が一段落して一息吐いたエリオットがその会話に嘆きをもたらす。

「それだけ『塩の杭』の傷痕が深いってことだろう」

倒したばかりの魔獣が消滅し、残されたセピスをリインは拾って観察する。

「文献にあつた通りセピスにまで塩が混じっているんだな」

軽く力を入れれば普段以上に脆いセピスにリインは溜息を吐く。

「何か分かった？」

「ここだけだと何とも言えない……できれば国が指定している禁足地

の特異点を調べたいんだけど、そこは後でサラ教官と相談だろうな」
元凶の「塩の杭」は教会によって回収され、「塩化」の浸食は治まったものの完全に停まったわけではない。

禁足地というのは踏み入れれば人体が「塩化」してしまう危険地域のこと。

これは教会関係者でも長く耐えられるかどうかだけで、26年経った今でもその中心点に何があるのかは調査されていない。

それがどんなものなのか分ければ、その対処手段も講じることができようになる。

「とりあえず今日はひたすら魔獣退治かな……と、今度のは大きいね。あれは指定魔獣かな？」

会話を切り上げて、岩と見間違える程の大きさの魔獣をフィーは発見する。

「硬い魔獣だね。ならクリスのブリランテの出番かな？」

「そうだね。まずは僕が崩すから、みんなは——」

「ちよつと待ってもらえるかしら」

フィーの提案に頷き、クリスが簡単に方針を決めたところでアリサが待ったを掛ける。

「先駆けは私にやらせてもらえないかしら？」

「アリサが？ でもアリサの弓じゃ。あの甲殻は貫けないと思うけど？」

「ふふん、実は新兵器があるのよ。本当はこの前の実技テストの時に使うつもりだったんだけどね」

鼻を鳴らしてアリサは指を鳴らして、その名を呼ぶ。

「出て来なさい。ダインスレイヴ」

それを合図にアリサの背後に戦術殻が現れる。

「え……それって授業で使っている戦術殻だよね？」

「ええ、だけどオジ様からもらった特別製よ。ダインスレイヴ、セットアップ」

どこか誇らしげにアリサは答えると、指示を出して戦闘準備をさせる。

アガートラムのように機械的な返事をするわけではなく、元々そう造られていたように戦術殻は変形し巨大なボウガンのような形へと変形する。

「いくわよ」

戦術殻が現れると同時に背中に装備された五本の鉄杭の内の一本をアリサは引き抜き、ボウガンに装填して、弓の様に構える。

ボウガンが作動して、内部で何かが回転するモーター音が響く。

「これが私の切り札よっ！ 砕けなさいっ！ エレトリックアローツ！！」

引き金が引かれ、導力によって発生された超磁力によって加速させられた鉄杭が矢として解き放たれる。

電磁加速され赤熱した矢は音を置き去りにして、一瞬で大型魔獣に着弾——魔獣はその衝撃に消し飛んだ。

貫通した矢はその先の岩場を爆散させた。

「ふふん、どうよ」

得意気にアリサは振り返る。

しかし返事はなく、その武器のあまりの威力に言葉を失っている仲間たち——リインの驚いている顔にアリサは満足そうに笑うのだった。

69話 塩の大地Ⅱ

「双剣魔法フレア・テンペストツ！」

右手に剣、左手に杖を構えクリスはそれらを触媒にして二つの導力魔法を同時起動する。

炎が立ち昇り、周囲の魔獣は風の竜巻に体を斬り刻まれながら吸い込まれるように炎へとくべられる。

そして風によって膨れ上がった炎は爆発を起こして魔獣たちに止めを刺す。

一方――

「セット――」

二つの銃が上空に弾丸をばら撒く。

導力の弾丸はその中空で不自然に停止し、フィーが引き金を引く度にその数を増やしていく。

「リリース――シルフィード・レインツ！」

百の弾丸がフィーの合図によって一斉に上空から発射される。

一発一発は小さくても雨のように降り注ぐ弾丸は容赦なく魔獣の群れを蹂躪し、硬い甲殻を持つ魔獣さえも圧倒的な数の暴力には諍えなかった。

一方――

「僕の演奏、聴かせてあげる」

導力杖をバイオリンに変形させ、演奏を触媒にしてエリオットはオリジナルのアーツを展開する。

「セブンラプソディツ!!」

七つのエネルギー球を作り、同時に撃ち出した七撃で魔獣を倒す。

「ぐぬぬ……」

新兵器のお披露目して上機嫌だったアリサだが、続く三人の先駆けに悔しさを顔を歪ませる。

三人が三人共、今まで見せたことのない新技を披露したことで自分の新武装のインパクトが減ってしまったことに頬を膨らませる。

「みんなやり過ぎだ」

アリサの事を含め、普段は出来ない派手な技をここぞとばかりに試し打ちする彼らにリインは肩を竦める。

「ちえ……私だけだと思っていたのに」

「三人共、帝都の地下で『暗黒竜』を直接目にしているからな……それぞれ思う所があったんだろう」

二人の明らかに巨大な敵を意識した新しい必殺技にリインは感心する。

《ARCCUS》と銀耀石の魔導杖から使う導力魔法と風剣《リヴァルト》の剣魔法を同時に起動した全く新しい複合魔法は彼に武器を与えたりインも予想していたなかつたものだった。

フィーに関してても弾道を操作できる銃の特性を利用して物量攻撃と、新しい導力銃の性能に合わせた技を編み出したようだった。

威力や効果範囲という面ではエリオットも魔導杖を楽器に変形させるように改造してあり、彼なりの努力が良く分かる。

「アリサ、さっきの君の新しい武器だけど」

「何よ。そりゃあみんなのと違って私のは地味だけど文句ある？」

不貞腐れた口振りでアリサは卑下する。

「いや、十分派手だったと思うけどな……」

それよりその戦術殻は誰から貰ったんだ？ さつきオジ様って言うていたけどどこの誰なんだ？」

アリサの背後に無言で浮いている戦術殻。

学院の授業でも使っているモデルでありクリスも利用しているため、アリサが持っているのは決して不自然じゃない。

「そんなの貴方には関係ないでしょ。それとも私の行動を貴方にいちいち報告しないといけないのかしら？」

「そういうわけじゃないけど……」

棘を含んだ返答にリインは怯む。

「じゃあ何だっけ言うのよ？」

威嚇するように睨んで来るアリサにリインは困ったように頬を掻く。

ノルドで拒絶されてから不安定になっていたが、帝都での実習以来落ち着きを取り戻したことはひとまず安堵していた。

こういう風に強気な彼女に安心しながら、それでも尋ねる。

「これだけは教えて欲しい。オジ様っていうのはちゃんとオジ様なんだよな？」

どっかの博士たちが自分の犯行だって誤魔化すためにアリサにそう呼ばせているんじゃないよな？」

「はあ？ 何それ？」

リインの質問にアリサは訳が分からないと訝しむ。

「いや、そうじゃないなら良いんだ。その可能性は俺も低いとは思っているから」

仮にあの博士たちの誰かの作品だったとしても、彼らが我が身可愛さでそれを隠すとは思えない。

そもそもツールズ士官学院の導力器はラインフォルト社から支給されているものが多い。

戦術殻もその範疇に入り、その令嬢であるアリサが社員の誰かと密かに交流をしていたとしてもリインにそれを咎める権利はない。

「ただちよつと破壊力が高過ぎる武器じゃないかって思っただけだ」

「それを貴方が言う？ クリスに持たせた七耀の武具も、フィーの新しい導力銃もどっちも貴方が用意したくせに」

「それは……」

痛い所を突かれてリインは言葉を詰まらせる。

「ま、リインが言いたいことも分かるけどね。私だってこの子を借りるだけで終わるつもりはないわよ」

アリサは背後のダインスレイヴを撫でながら続ける。

「オジ様が教えてくれたの。母様が私を見てくれないのは私が何も成してないから……」

だから母様に目を向けてもらうにはそれなりの実績を作らなくちゃダメだった」

何処か陶酔したような眼差しでアリサは語る。

「ダインスレイヴは戦術殻の特殊な導力機構が合って初めて使える武

具なの……

だから私はダインスレイヴの機能をオーブメントに造り直して、ラインフォルトの商品に提供する……

それをして初めて私は母様と話し合う資格ができるんだって」

「あれを量産化する？」

先程の光景を思い出してリインは顔をしかめる。

威力は大型の導力砲を大きく超えていて戦車の大砲に勝るとも劣らない、いやそれ以上の破壊力だったかもしれない。

年々近代兵器はその利便性や携行性、そして殺傷能力を高めている。

その観点から見れば武器の性能向上を求めるその姿勢は何も間違っていない。

ラッセル博士たちが《パテルⅡマテル》に対抗するように《オーバーギア》や《トロイメライ》を開発したのもそういう思想があつてこそなのだから非難する筋合いはない。

「アリサはあれを造ることの意味を分かっているのか？」

「誰に言っているのよ？ 私はこれでもラインフォルトの娘よ。武器を造ることの意味くらいちゃんと分かっているわよ」

胸を張って堂々と言い切るアリサにリインはそれ以上の追及をすることはできなかつた。

・＊

「それにしても驚いたね」

市長邸への帰路を歩きながらクリスが直前の課題についての感想をもらす。

「うん……少年兵って言うから僕達と同じくらいの歳だと思っていたけど」

「ええ、まさか本当に子供が出てくるとは思わなかつたわ」
相手として出て来たのは十歳程の子供達。

ナイフと拳銃で武装した子供たちの練度は決して高いものではないが、ツールズで軍事訓練を受けている同級生たちよりも遥かに勇ましく攻めて来た。

「二人とも気にし過ぎ」

そんな少年少女に尻込みし、消極的な戦いで試合を長引かせたアリサとエリオットにフィーがダメ出しをする。

「武器を向けて来たからには年齢は関係ない。本当の戦場なら二人とも死んでいたよ」

「そうは言われても……」

「どうしてそんな風にフィーは割り切れるのさ？」

「わたしだってあれくらいの頃からナイフと銃の使い方を教わってたから」

首を傾げて答えるフィーの言葉に、エリオットは彼女が元猟兵だったことを改めて思い出し、誤魔化す様に視線をクリスとリインに向ける。

「俺は以前にも経験があるし、事前にある程度予想はできていたから」
「僕は不思議と動揺しなかったな。シグムントさんの薫陶のおかげかな？」

物怖じせずに小さな子供を難なく捌いた二人にエリオットはもう何度目になるか分からない劣等感に苛まれる。

いや、二人以上に幼子たちが真剣な顔をして戦う術を覚えようとしている様を見て、嫌々ながらツールズに進学したことに恥ずかしくなる。

それこそ生きていくのに必死なあの子たちの顔を思い出すと、音楽を学んでいる余裕があることさえも贅沢に感じてしまう。

「エリオット、あまり気にしない方が良い。その悩みはキリがないから」

「うん……分かってるけど……」

クリスの慰めの言葉にエリオットは頷くが、その表情は晴れない。代わりに話題を逸らす様にアリサがホームルームでリインが言っていた話題を上げる。

「ねえリインは本当にこの状況を変えられるの？」

「アリサ。あまりその話を往来でするのはやめてくれ」

アリサからの質問にリインは周囲の目を気にしながら窘める。

「ごめん……でもできることがあるならやって上げた方が良いんじゃないかしら？　だってリインにはそれができるんだから」

「言い分は分かるけどな……」

リインもこうして知識だけでしかしらなかったノーザンブリアの現状を見せつけられると、決めた決意が揺らぎそうになる。

だが、同時にかつてルフイナに言われた言葉も思い出す。

『諦めなさい。それとも誰彼かまわず背負い込んで一番気に掛けているあの子の手を掴めなくなっても良いの？』

すでにノイやリンの存在を抱え、他にもいろいろなことに手を伸ばしている。

ただでさえ一杯一杯な状況なのにノーザンブリアの問題にも手を出せば、いつかのように過労で倒れてしまうだろう。

「少なくとも今は無理だ。それに——」

言葉を切つてリインは振り返る。

「リイン？」

「いや……何でもない」

訝しむアリサにリインは背後から周囲へと視線を移しながら答える。

「何でもないってことはないでしょ？　何があったのよ？」

「………今、誰かに見られていた気がしたんだ」

「誰かって……誰よ？」

リインに倣つてアリサ達は周囲を見回すが、不審な人物は特に見当たらない。

「それは俺も分からないけど……何だか妙な違和感が……」

視線に感じた悪意。

ハリアスクの街の人通りは決して多くないというのにリインが特定することはできなかった。

——ヨシユアさんレベルの隠形……でもいったい誰が？

考えられるのは「北の猟兵」だが、それにしても違和感がある。

「確かに場所は分からないけど、何かおかしい視線があるね」

「リインとフィーに気付かれないって余程の手練れということだよな？　もしかしてまた《結社》とか？」

フィーがリインに同調し、信憑性が出て来た何者かの存在にエリオットが身震いする。

「その可能性は高いかもしれないね。市長邸に戻ってサラ教官に報告した方が良くもしいないね」

「そうね。少し急ぎましよう」

アリサがそう促して、一同は市長邸への帰路を急ぐのだった。

・*

「ただいま戻り——」

「あんたたちっ！　特別実習は中止！　今すぐノーザンブリアから脱出っ——」

滞在先の市長邸に戻ると、聞こえて来たのはサラの途切れた大声だった。

「今のは……」

「サラ教官の声だった」

途切れ方からして殴られて無理矢理黙らされたのか、続く言葉は耳を澄ましても聞こえない。

「サラ教官はああ言っていたが、どうする？」

理由は分からないが、突然の特別実習の中止の宣言と、脱出の指示。声の質からも切羽詰まった状況だけは感じ取れた。

「これって……バリアハートの時みたいなのやらせじゃないのよね？」

「それって確か最初の《特別実習》でアリサ達がルーファスさんが用意した特別課題のことだよな？」

「もしそうなら……」

別の班だったエリオットとクリス、そしてフィーはアリサから順にリインへと視線を集中する。

「ああ、俺が別の課題をさせられていたから知らないけど、ルーファスさんが何かを仕掛けていたらしいな」

「知らないって……剣——」

「あの時のことも、今回の事も俺は何も知らないぞ」

フィーの言葉を遮ってリインは釘を刺す。

「それよりもどうする？」

話を逸らす様にリインは今どうするべきか、周囲の気配を読みながら尋ねる。

「状況は不明、これが僕達を試す突発的な《特別課題》の可能性もありますが……」

まずはサラ教官と合流しましょう。逃げるにしても教官と一緒にす

「そうだね……」

「異議なし」

「サラの事だから放っておいても大丈夫だと思うけど……了解」

「俺もそれで構わない」

クリスの案に一同は頷き、異様に静まり返った市長邸を歩き出す。

「声は二階から聞こえて来たよね？」

「ああ、もつと正確に言えば、俺達が最初に案内された市長室からだな」

「良く分かるわね」

エリオットの呟きに淀みなく答えたリインにアリサは呆れる。

途中にあつたりリイン達に割り当てられた部屋を覗いてみればそこは無残に荒らされていた。

「ひどい……」

「物取りの類かな？」

「何を取られたのか調べている暇はない。とにかく急ごう」

絶句するアリサと冷静に部屋を見聞するフィー。

二人を促してクリス達は進む。

「結局、誰ともすれ違わなかったわね？」

ノーザンブリアの行政を担う施設に関わらず、ここまで誰ともすれ

違わなかった異常な状態にうすら寒いものを感じてアリサは身を震わせる。

「鍵が閉まっている部屋の中に気配はあったから、拘束されているのかもしれないな」

リインの言葉も気休めにしかならない。

「尋常ではない事態なのは確かみたいだね。サラ教官、無事だと良いけど」

市長室の大きな扉を前にクリスは声をすぼめて振り返る。

「エリオット。僕の合図で扉をアーツで破壊して、ファイは僕と一緒に中に突入して銃で威嚇、場合によっては鎮圧。リインさんはサラ教官の確保、アリサは後詰をお願い」

魔導銃を抜きながらクリスは流れるように役割を決め、一同は領く。

「3……2……1……ゼロッ！」

合図と共にエリオットの放ったアーツによって扉が吹き飛び、同時にクリスとファイが突入する。

何故かそこには市長や、この施設で働いていた従業員たちが導力銃で武装していたが二人は構わず銃口を彼らに向け――

「っ――動くな！ こっちには人質が――げふっ」

市長が素早く身を翻し、椅子に縛り付けられて猿轡を噛まされたサラを盾にするが、そうしている間にもリインが距離を詰め椅子ごとサラを確保する。

「教官を確保。ファイッ！」

「ヤー」

短い言葉にファイが答え、スモークグレネードを落として市長室の中央へと蹴り飛ばす。

瞬く間に市長室に煙が立ち込め、リインはその中からサラを抱えて戻ってくる。

「よしこのまま外に――」

もうそこに用はないと一同は振り返り――

「ご、ごめん……みんな……」

後詰で最後尾にいたアリサが謝った。

その背後には廊下を塞ぐ程に密集した事務員たちが横隊を作って導力ライフルの銃口を彼女の背中越しに突きつけていた。

「鍵を掛けた部屋にいた人達？」

「市長の部屋にいてサラ教官を拘束していたのも市長たちだった……」

「ど、どういうことなの!?!」

冷静に状況を見極めようとするフィーとクリス。

そして何が起きているのか分からずに狼狽えるエリオット。

「ああ……そういうことか」

ここに至ってリインはようやく街中で感じていた視線が誰のものだったのか気付く。

——誰かじゃない。全員だったのか……

リインは抱えていたサラを下ろし、猿轡を解く。

「リイン、ごめん。ごめんなさい」

口の拘束を解かれたサラは開口一番、憔悴した様子でリインに謝る。

「これはどういうことなのか説明してもらえますか。ハリアスク市長」

背後を振り返り、煙を掻き分けて廊下に出て来た市長にリインが尋ねる。

「ふん……よくもやってくれたな。リイン・シュバルツァー」

最初に挨拶した時にはにこやかな態度で歓迎してくれた市長は忌々しいと言わんばかりにサラの導力銃を突きつけてくる。

「俺を名指しか……俺は貴方達に恨まれる心当たりはないんですけど」

その一言で市長を始め、廊下を塞いでいる従業員たちが怒声を上げた。

「ふざけるなっ!」

「お前のせいで何人死んだと思ってやがる!?!」

「この悪魔がっ!」

口汚く罵って来る彼らに一同は思わず気後れする。

「サラ教官……？」

リインも何故そこまでノーザンブリアの人達に恨まれているのか分からず、事情を知っているサラに説明を求める。

が、彼女が答えるよりも先に市長がその疑問に答える。

「忘れたとは言わせないぞ。お前は二年前、我らの『英雄』の邪魔をした」

「は……？」

市長の憎悪を含んだ言葉にリインは間の抜けた言葉を返していた。

二年前と言えばリベールにいた頃。

確かにリインは彼らが『英雄』と呼ぶ『北の猟兵』と戦った。

「貴様が『英雄』の邪魔をしたせいで何人の餓死者が出たか知っているか？ 全部お前が殺したようなものだ！」

「……………何だ……………それは……………」

呻く様にリインは市長の言葉に困惑し、呆然とするリインに市長は続ける。

当時の《リベールの異変》は《塩の杭》の再来ではないかとゼムリア大陸中に緊張が走ることとなった。

そのため、周辺各国は貿易を一時的に止め、その結果物価は上昇。《異変》が解決した後もリベール復興の煽りを受ける形で上昇した物価はそのまま続き、まだ雪が深いノーザンブリアにとっては死活問題だった。

それでもミラがあれば終わりが近かった冬を越せたかもしれない。

しかし《異変》の直前にリイン・シュバルツァーに仕事を邪魔される報酬を得られなかったことでノーザンブリアでは多くの餓死者が出る結果となった。

「何それ……………言い掛かりじゃん」

「本気で言っているのか？」

市長の言い分にフィーとクリスは呆れる。

「ふん……………こいつのせいで百人の罪のない市民が飢えて死んだのは紛れもない事実……………」

その謝罪もなしに新しい「滅塩計画」のための対価を差し出せだ
と？ ふざけるのも大概にしろっ！」

サラからどう聞いたのか、ラインの善意は歪んだ形で彼らに受け止
められていた。

ラインはエレボニア帝国やリベール王国では「英雄」かもしれな
い。

しかし「北の猟兵」を「英雄」と崇めるノーザンブリアにとって、
ラインはその邪魔をした「悪魔」でしかなかった。

もつともそれを差し引いたとしても、ノーザンブリアはこれまで他
国から黙認してもらっていた「北の猟兵」に関する一線を踏み越え
てしまったのだった。

70話 塩の大地Ⅲ

「どうしてこんなことに……」

武装を取り上げられ、ハリアスクの軍事基地その牢屋に入れられることになったアリサは人生初めての経験に悲観する。

「うわーリインさん。牢屋ですよ牢屋。僕、牢屋に入るの初めてです」

「はは、そうだろうな。俺も二回目だけどまさかまた投獄されるとは思ってたよ」

「……………」

アリサと同じように両腕を縛られているにも関わらず、状況が分かかっていないかのようににはしゃぐクリスとそれに気の抜けた苦笑を返すリインにアリサは苛立つ。

「ふわ……とりあえずあたし寝るから」

「……………」

さらにはファイは欠伸をしたかと思うと剥き出しの石畳に無造作に寝転んで寝息を立てる。

「もっと深刻になりなさいっ！」

「ア、アリサ落ち着いて！」

マイペースな三人にアリサが吠え、エリオットが慌てて宥める。

「悪い。何だか俺の事情に巻き込んだみたいで」

「まったくよ……随分恨まれていたみたいだけど。いったい何をしたっていうのよ？」

盛大に肩を竦ませて感情を落ち着かせアリサは尋ねる。

「彼らの話から推測すると、俺が二年前のリベールで『北の猟兵』と戦ったことが気に喰わなかったみたいだな」

「『北の猟兵』ってノーザンブリアが外貨を稼ぐための傭兵稼業のことだったわよね？ は……何それ？」

「当時彼らと対峙したのは二回。最初は俺が世話をしていた女の子を殺す仕事……」

次は《異変》の際、リベールをさらに混乱させるために俺や遊撃士

の首に掛けられた賞金を狙って来た時だ」

「はあっ!? 完全な言い掛かりじゃない!?」

「それってリインに死ねって言っているようなものじゃないか!」

予想もしなかったあまりに身勝手な理由にアリサとエリオットは激昂する。

「彼らの中ではそうなんだろうな……」

俺やあの子の命でノーザンブリア数百人の命と安寧が買えるなら、お前達は俺達のために死ぬべきだったんだ……そう言いたいんだろ
うな」

らしくない蔑みの嘲笑をリインは浮かべる。

そんなリインの顔を見ながらクリスは厳しい顔をして自分の考えを述べる。

「それは到底許されないことです……」

確かに一人の命と大勢の命を天秤に掛け、恨まれることになったとしてもより多い方を選び、小を切り捨てるのは上に立つの者の役目かもしれない……

他国を脅かしてでも自国の富を優先する姿勢も理解できる……

だけど彼らのリインさんへの言葉はとても容認できるものではないでしょう」

「そのところはどうかですかサラ教官。聞いていた話と随分と違うんですけど?」

クリスの言葉に頷き、アリサはサラに説明を求める。

しかし、一緒に牢へと入れられたサラは壁に向かって膝を抱えた姿勢のまま微動だにしない。

「ちよつとサラ教官っ! しっかりしてくださいっ!」

声を上げて呼び掛けるがやはり反応はなく、耐えかねてアリサは縛られた手をサラに伸ばして――

「アリサ、今日はもう休もう」

「リイン。だけど――」

「今日は朝から歩きっぱなしで食事も昼に食べたきりだ。今の状態で話し合いをしても冷静ではいられないだろうし、サラ教官にも時間を

上げるべきだ」

「っ……だけど、こんなところで休んだって疲れは取れないわよ」

六人が押し込まれた牢屋はとてもではないが全員が横になれる程
広くはない。

「やっぱりノーザンブリアですから、今日の獄中食は期待できないの
かな?」

「お黙り」

能天気なことを呟いたクリスをアリサは睨み付け、タイミングよく
空腹の腹の音が牢屋の中に響く。

「ご、ごめん」

音の発生源をアリサが睨み、バツが悪そうにエリオットが謝る。

「あーもうっ! 何なのよ!? ——ッ!」

頭を抱えて絶叫するも、次の瞬間にアリサからも空腹の音が鳴り響
き、そのままの姿勢で固まった。

「……………仕方がないか」

そんな彼女の様子を見兼ねリインは《方石》を出現させる。

「クリス、《箱庭》をアリサ達に案内して上げてくれ」

「良いんですか?」

「状況が状況だからな。ちゃんと休んでいざという時に動けるように
しておく必要はある……」

中にはイオがいるから、彼女に預けてあるセピスで大樹から食料を
交換してもらおうと良い」

「でも……」

「看守なら大丈夫だ。俺とサラ教官がここに残るし、一人二人程度の
認識は誤魔化せるから」

「分かりました」

リインから方石を受け取りクリスはまずフィーに呼び掛ける。

「起きてフィー」

「ん……何?」

先程までの騒ぎに動じずに寝入っていたフィーはクリスの呼びか
けに目を開く。

「ちよつと移動するよ。温泉と食べ物があるところに」

「何を言っているのクリス？」

突然のクリスの言葉に意味が分からないとアリサ達は首を傾げる。

「あはは……説明は中ですよ。それじゃアリンさん、後は頼みます」

クリスの手の中の《方石》が光を溢れさせると、つぎの瞬間に彼ら四人は牢屋から消え去り、リインとサラだけがそこに残った。

「サラ教官」

リインは二人きりとなったサラを呼ぶ。

しかし、膝を抱えたままのサラは何の反応も返さない。

「サラ教官」

徐にリインは両腕を縛っていた縄を解き、もう一度呼ぶ。

しかし、膝を抱えたままのサラはやはり何の反応も返さない。

「サラさん」

三度の呼び掛け、リインは《方石》の要領でそれを手元に呼び出し、反応を返さないサラの肩を掴み無理矢理を顔を上げさせ、それを彼女の口に押し込んだ。

「むぐっ!？」

そしてそのまま《影の箱庭》の大樹の力で作った酒瓶を垂直に立て、その中身を直接流し込む。

「ぐばば——って何しやがるのよこのクソガキツ！」

酒で溺れかけたサラはリインの手を振り解き、酒瓶を口から抜いて抗議する。

「目が覚めましたかサラ教官？」

「——ええ、おかげさまでねっ！」

何事もなかったかのように聞いて来るリインにサラはこめかみに青筋を立てながら言い返し、流し込まれた酒を改めて呷る。

「ぶはーって……あらクリス達は？」

「クリス達は今、《箱庭》……俺が所有しているアーティファクトの中にいます。持ち運びできる別荘地だと思ってください」

「アーティファクト……」

それ大丈夫なの？ 七耀教会が黙ってないんじゃないの？」

「問題ありません。守護騎士公認ですから」

正確には《聖痕》に繋がる力の一端なのだが、それを細かく説明すると面倒なのでそういう物と言うことにして欲しいと守護騎士からの要請でもあるので全く問題ない。

「それで改めて聞きますが、話はできそうですか？

できないなら気分転換にアリサ達と一緒に温泉に入ってからでも良いですよ。それに食事もできますよ」

「温泉に食事……何でもありなのね」

そんな破格のアーティファクトを持っていたことにサラは呆れ、手の中の酒を飲む事でその誘惑を跳ね除ける。

「あたしは元北の猟兵なのよ」

「ええ、知っています」

「当時のあたしは、本気で自分がノーザンブリアを救う『英雄』だっ
て思っていたのよ」

「それは今の彼らもそうなんじゃないんですか？」

「たぶんね……あたしが団を抜ける前から年々あたしみたいに『英雄』
に憧れて入団を望む子供達は後を絶たなかった……」

もしかしたら今の実働部隊なんて、あたしよりも年下が多いかもしれ
ないわね」

そう思うと思わず自嘲してしまう。

「我ながら馬鹿よね……猟兵家業なんかで滅び行く国を何とかするな
んて本気で思ってたのよ……」

もしかしたらあの人はこうなるって判っていたのかもしれない」

「あの人……？」

「私の初恋の人よ。といっても父親なんだけどね」

苦笑しながらサラは訥々と懐かしむ様に語り始める。

「26年前の《塩の杭》異変……」

国土の大半が塩で覆われた異変で親を失った赤ん坊を引き取った
人……

元公国軍大佐で《北の猟兵》を立ち上げた一人」

「もしかしてカシウスさんみたいな髭がある、丁寧な口調のサラさんの好みの渋いダンディな方ですか?」

「そうそう……って何でリインが知っているのよ?」

「それは今度説明します。それで?」

リインは誤魔化して先を促す。

「あの人はあたしが獵兵をやることに最初から最後まで良い顔をしながら……」

もしかしたらノーザンブリアがこんな風に歪んでしまうことも分かっていったのかな?」

虚空に投げかけた問いに答えてくれる者はいない。代わりにサラはそのままリインに質問を投げかける。

「って……あたしよりもあんたは大丈夫なの?」

「俺ですか?」

唐突に昔語りを切って、思い出したようにサラはリインに尋ねる。

「そうよ。あのバカたちの言葉を真に受けてないでしょうね?」

あんたが二年前のノーザンブリアの餓死者に責任を感じる必要はないのよ。あれはいろいろと間が悪かっただけだから——」

「大丈夫です。あんな言い掛かり気にしてませんから。むしろためになる経験を見せてもらったとも思っておきます」

「ためになる経験?」

「ええ、これまで俺はそれぞれの眷属達の末路を伝聞でしか知りませんでしたから……」

それに「呪い」に関係なく人はここまで愚かになれるという、業の深さを実感できました」

「うちの民族が本当に……ごめん」

16歳の子供にこんなことを言わせてしまった身内にサラは恥じる。

「リイン……ノーザンブリアを救う方法があるって話だけど」

「ええ。それがどうかしましたか?」

「あれはもう良いわ」

「サラさん……」

「ノーザンブリアは一度滅びるべきなのよ……」

獵兵家業で稼いだミラで国を支えても、国民が血と硝煙に塗れたミラだつてことに恥を忘れてしまったこの国はもうダメよ」

「それは言い過ぎじゃないですか？ まだノーザンブリアの中にもまともな人はいるかもしれません」

「例えそうだったとしても、国を動かしているのがあんな奴等じゃ遅かれ早かれ事を起こして、潰されることが目に見えているわよ……」

なら戦争を起こす前に私が引導をくれて上げるわ」

「早まらないで下さい。サラさん。これを飲んで落ち着いて下さい」

黒い怪しげな空気を纏い始めるサラにリインは新たな酒を取り出して落ち着かせる。

「む……んぐ……んぐ……ぶはー……」

あんたこれどうしたのよ？ かなり上等なお酒——へっ？」

酒瓶から直接ラツパ飲みしたサラは一息吐いて、そのワインのラベルを見て固まった。

「グランⅡシヤリネっ！ しかも1183年物ですって!? リベールのオークションで出た幻のヴェンテージワインじゃない!？」

味わうことなく水のように半分ほど一気飲みしてしまったことにサラは顔を蒼くする。

「本物じゃないですから気に病まなくて良いですよ」

「本物じゃないって……」

改めてサラはワインの香りを確かめ、舐めるようにそのワインを口に含む。

「鼻腔をくすぐる馥郁たる香り。喉元を愛撫する芳醇な味わい……これが『グランⅡシヤリネ』……」

この前の祝賀会でも『グランⅡシヤリネ』はあつたけど、それを軽く上回っているわよ。これが本物じゃないなんて信じられない」

「オリヴァルト殿下曰く、後一步足りないって言って悔しがっていましたけどね」

「何でオリヴァルト殿下が？」

でも偽物でこの味なら本物はどんな味なのかしら………つてそ

うじゃない!」

「御代わりですか?」

「だからそうじゃない!」

「いらないんですか?」

「いるっ! ってああもうっ!」

年下の子供に良いようにコントロールされている屈辱にサラは頭を抱えて身悶える。

「はは……随分にぎやかなお隣さんが入って来たみたいだね……」

だがもう少し静かに話すといい。ここは人手不足が理由で看守が常駐しているわけではないが、だからと言ってあまり騒ぎ過ぎればその限りじゃない」

不意に響いた第三者の声。

初老の老人を思わせるその声は隣の牢屋から聞こえて来る。

「お世話になります」

リインはその声に物怖じせず挨拶を返す。

「はは、こんな場所ではお構いもできず申し訳ない……」

ずっと隣に誰もいないから人と話すのは久しぶりでね。君達さえよければ話相手になってももらえないか?」

「あなたは?」

「君と同じ囚人だよ……名乗るのはやめておこう……」

理由はどうあれ、ここにいるのは名誉なことではないからね」

リインの質問をはぐらかして隣の囚人は話を一方的に続ける。

「私が捕まった理由はそうだな……敵前逃亡みたいなものといったところかな。君達はどうかんだい?」

「どうやら殺人罪みたいです。ほとんど言い掛かりに近いですが」

「ほう……では君たちも冤罪で捕まったということかね?」

「君たちも?」

囚人の言葉にリインは首を傾げる。

「このハリアスク収容施設は五年程前からそう主張する囚人たちが増えてね……」

看守は治安が悪くなった影響だなんてもらしていたが、果たしてど

「こまでが本当なのか」

「随分とお詳しいんですね」

「はっはっ、かれこれ25年くらいここで生活をしているからね」

「ちよつとリイン、なごんでいる場合じゃないわよ」

「楽しそうに話す囚人に苛立ちを感じてサラが口を挟む。

「でも今は少しでも情報が——」

「そんなのは良いから、よく聞きなさい……」

「このハリアスク基地は中世の要塞だね。この先の通路には外に通じる隠し通路があるのよ……」

「それを教えるからあんたはアリサ達に戻ってきたら、すぐにここを脱出してレミフェリア方面に逃げて明日来る予定だった遊撃士と合流しなさい」

「……サラ教官はどうするつもりですか？」

「あんた達が逃げられるように派手に暴れて上げるわよ」

「……死ぬ気ですか？」

「リインの問いにサラは黙り込む。

「そんなことをしても誰も喜びません」

「これはケジメなのよ。『北の猟兵』だった者として、道を踏み外してしまったこの国を終わらせるならせめて私が……」

「ノーザンブリアは最悪な形で一線を越えてしまった。

「今『英雄』として注目されているリインの他に、身分を隠した皇太子。」

「そんな二人に冤罪を掛けて不当に拘束したとなれば、これを機に鉄血宰相はこれ幸いとノーザンブリアを呑み込むだろう。」

「猶予はそれこそリイン達が帝国に戻り、事の次第を学院か政府に報告するまで。」

「今ならまだ首謀者たちを吊るし上げれば、最低限の国の形が残るかもしれない。」

「そんな淡い望みを持ちながらサラは遊撃士の『紫電』から猟兵の『紫電』へと意識を切り替え、禁じていた技を使う覚悟を決める。

「盛り上がっているところ悪いですけど、そんなヨシユアさんみたい

なことはさせません……

サラ教官も、あの時は散々いなくなったヨシユアさんをなじつていたのに同じことをするつもりですか?」

「え……あー」

リインの口から出て来た名前と今の状況を照らし合わせて唸る。

確かに今の状況はかつてエステルの前から姿を消したヨシユアと酷似している。

「いや……でもね。女にはやらなくちやいけない時って言うのがあつてね……」

「どうしても一人で行くっていうなら《箱庭》に隔離して無理やり連れて帰りますよ……」

幸い、アリサの戦術殻は取り上げられていませんし、それに——
「お待たせリイン君、取り上げられたみんなの装備と牢屋の鍵を回収してきたわ」

音もなく牢屋の中に現れたルフィナがそう報告をしてくれる。

「——ということですよ。はつきり言つてサラ教官の陽動なしでも脱獄することはできます」

「ぐぬぬ……」

「ははは、どうやら君の負けのようだねサラ君」

隣の囚人がやり込められたサラに朗らかな声を掛ける。

「はあ……本当にあの時から強かになったわね」

「何にしても一人で決めないでまずはみんなと話し合ひましょう。決めるのはそれからでも良いはずですよ」

「はいはい、分かりました」

サラはリインの言い分に負けを認めて、グラン||シヤリネを呷つた。

・*
・*

夜も更け、巡回の看守が見回ってしばらく。

並ぶ牢屋の一角の扉が音もなく開いた。

「まさか私たちが温泉に入っている間に脱獄の準備を全部終わらせているなんて……」

開いた格子の扉を潜り抜けてアリサは何とも言えない顔をする。

「牢屋に入れられたのに温泉に入って、不思議な樹が出してくれた食べ物を食べ……そして脱獄。もう何が何だか……」

「まあリインだし」

「流石リインさん」

複雑そうな顔をするアリサとエリオットとは対照的にフィーとクリスはリインだからと納得する。

「お喋りは後だと……それより——」

「どうして貴方が……」

気の抜けている一同にリインが注意を促そうとした言葉はサラの驚きの声にかき消される。

「サラ教官、あまり大きな声は……」

アリサに注意され、サラは自制をしながらリイン達が入られた牢屋の隣の囚人を格子越しに睨む。

「知り合いですか？」

「いいえ。会うのは初めてよ」

エリオットの質問にサラは首を横に振る。

「でも写真で知っている……ノーザンブリアがまだ公国だった頃……」

《塩の杭》が現れて真っ先に逃げ出した国家元首、バルムント大公……どうして貴方がこんなところに」

「元大公だよ。サラ・バレストイン君……ふふ、こうして大きくなった君と会うことができるなんてこれも女神の思し召しなのかな？」

眼鏡をかけた初老の男性、バルムントは懐かしそうに目を細める。

「これはいったいどういうことなの!? この国でいったい何が起きているの!?!」

「ちよ——サラ教官」

怒鳴りそうになるのを必死に堪えるが、それでも激しい感情は声は自然と大きくなってしまふ。

「申し訳ないが私は何も知らない。ここに入れられているのは、まあ

いろいろな事情があつてのことだ」

「はぐらかさないで、ちゃんと——」

「サラ教官っ！」

「落ち着いて」

その自制も虚しく、格子を掴んで叫ぼうとしたサラをアリサが口を塞ぎ、エリオットが後ろから抱き着いて牢屋から引きはがす。

引きずられて牢屋から離されたサラに代わってリインがバルムントに提案する。

「一緒に逃げませんか？　どうやら複雑な事情をお持ちのようすが」

「はは、申し出は有難いが、私では足手まといになるだろう」

バルムントは朗らかに笑い、リインの提案を断る。

穏やかな気性。

社会学で習ったノーザンブリアを見捨てて逃げた国家元首とは思えない知性と人柄をこの短いやり取りだけで感じ取ることが出来る。

「私の事は心配無用だよ……この生活はなかなか気に入っている」
笑ってそういうバルムントにリインは何も言えなくなる。

それだけでリインの人柄を察したのか、バルムントは柔らかな笑みを浮かべて助言する。

「外に出られたら『ダンデリオン』という名の宿酒場を訪ねるといい。きっと君たちを助けてくれるはずだ」

「『ダンデリオン』……」

「脱獄はこの瞬間から看守に気付かれるまでの間が勝負だ……」

私が君達と会うことは二度とないだろう。それでも君たちが無事に帰れることを祈っているよ」

・*

「ああ、もう訳が分からない」

看守の目を掻い潜り、地下の武器倉庫まで辿り着いたところでサラは頭を抱える。

「あたし達を捕まえたこともそうだし、どうしてバルムント元大公が捕まっているのよ……」

そりゃあノーザンブリアを見捨てて逃げ出したろくでなしだけど、終身刑になったなんて聞いてないわよ」

「どうやら外に報じられた情報と真実は違うみたいですね……」

もしかしたら逃げ出したんじゃないかと、逃がされたのかも」

「それって同じ意味じゃないの?」

クリスの推論にエリオットは首を傾げる。

「全然違うよ。まあ僕が言っても説得力はないかもしれないけど」

「当時ノーザンブリアも貴族制を廃するか議論がされていたのよね? そうなると嵌められたってこと?」

「かもしれない。まあ真実がどうだったにしても、今は僕達が考えても仕方がないことだけど」

「——開いた」

不意にファイの小さな声が武器庫に響く。

「流石ファイ。さあみんなもう少しだ」

武器庫の奥の立ち入り禁止の鉄格子の錠前を開けたファイを労い、ラインがみんなを促す。

「サラ教官、今はまずこの基地から脱出することに集中しましょう」

「……………ええ、分かっているわ」

クリスの気遣いにサラは混乱を極める思考を一時的に放棄して頷き、かつて訓練生時代にこっそりと街へと抜け出すための使っていた地下道へ踏み入れた。

そして――

「久しぶりだな。サラ」

魔獣が生息する地下道を突破して先の広間には一人の女性がライン達を待ち構えていた。

黒いフードに羽の肩当て。

それだけでも異様な雰囲気を持っているのだが、何よりも目を引くのは左半身の義手と義足。

もつともそれ以外の剥き出しの肌にはいくつもの傷痕がある。

「サラ教官の知り合いですか？」

「まさか……何であんたが……」

「何だ私の顔を忘れてしまったのか？」

黒い女はおもむろにフードを外してその素顔を晒し、ゆっくりとサラに歩み寄る。

「父さんが死んで以来だな……」

お前はあれからミラを送って来るくせに手紙の一つもなくどれだけ心配をかけたか……

今は帝国で先生をやっているんだったな？　あの御転婆だったサラが帝国で先生をしているとは世も末だな」

「アプリリス……」

懐かしむように女性は笑いかけ——左手の義手が銃を抜き放つと同時にサラの胸に押し当てて引き金を引いた。

「なっ!？」

「サラ教官っ!？」

銃声が地下道に鳴り響き、撃たれたサラはその場に崩れ落ちる。

「貴様——」

「よくも——」

サラの知り合いと言うことで油断してしまったりインとクリスは同時に斬りかかるが、黒装束の女は後ろに跳んでそれを回避する。

当然それを見越して追撃に走るが、黒い光が走ったかと思うと黒装束の女は遠く離れた壇上に瞬間移動していた。

「くっ……アプリリス……どうして……」

撃たれたはずのサラは胸を抑えながら彼女の名を呼ぶが、そこで力尽きて意識を手放す。

「サラ教官っ!？」

「安心しろ。あの弾丸は殺すためのものではない」

叫ぶリインに黒装束の女は抑揚のない言葉を投げかける。

「っ——お前はいったい何者なんだ？」

その質問に黒装束の女は名乗る。

「私の名はアプリリス・バレストライン……」

「バレスタイン？ まさか——」
「サラに伝えておけ、ノーザンブリアの真実が知りたければ私を追って来いとな」

71話 塩の大地Ⅳ

「ここがダンデリオンか……」

昼下がりのハリアスクの街に白髪の少年が一人いた。

「クリス達が無事に辿りつけていると良いけど」

基地から脱出した際に倒れて意識を失ったサラをリインはクリス達に任せてハリアスク駐屯の憲兵隊に陽動を行った。

黒髪のまま身体能力を抑えて家屋の屋根を駆け回り、帝国側への門へと目立つように追い駆け回されて、頃合いを見て撒き、髪と目の色を力を使って変えてマントを羽織って服装を簡単に隠して今に至る。

「体は……大丈夫か……」

イオから聞いた《鬼の力》の副作用に関しては今のところ目に見えた変化はない。

そもそも自分の《鬼の力》は純粹な《黒》の力ではなくなっているのだから取り越し苦勞の可能性の方もあろうだろう。

「それにしても……」

駆け回っていた時に見た街の様子をリインは思い出す。

「ここはクロスベルで言う所の旧市街だろうか？」

昨日歩いた中央通りから離れたその場所はお世辞にも管理が行き届いているとは言えない家屋が並んでいた。

中央の街並みはそれなりに整備されているというのに、荒れるがままにされたその光景はノーザンブリアの貧富の差を如実に表していた。

「ダンデリオンは……中央広場にあるって言ってたな」

後ろ髪を引かれる気持ちを抑えながらリインは歩き出す。

「さて、大通りに出たけど——ん……？」

「あ……」

リインは前から舌足らずな声を上げて近付いて来る女の子に首を傾げた。

「……ん」

女の子は手に下げた籠の中から一輪の花をリインに向けて差し出

した。

「……………どうしたのかなお嬢ちゃん？ お花を買って欲しいのかい？」

言葉を発せずには訴える眼差しにリインは胸の痛みを感じるが押し隠して女の子の意を汲む。

「ん……………」

リインの言葉に女の子はその通りだと頷く。

「いいよ。いくらだい？」

「んっ……………」

女の子は嬉しそうに顔を綻ばせながら籠を掛けた手を開いて見せる。

「5ミラだね……………はい」

ミラと交換する形でリインは花を受け取る。

「じー……………」

それで終わり、すぐに離れて行くと思いきや女の子はリインをじっと見つめると徐にマントを掴んで引っ張った。

「どうしたんだい？」

「ん……………」

尋ねると女の子は先程とは違う花をリインに差し出した。

「……………これも買って欲しいのかい？」

「んんっ」

「もしかしてオマケしてくれるのかい？」

「んっ」

こくりと女の子は頷いてリインにその花を渡す。

「はは、ありがとう」

「んっ……………」

御礼を言っリインは彼女の頭を撫でると嬉しそうに笑ってくれる。

「マヤ」

女性の呼ぶ声に女の子は反応すると満面の笑顔を浮かべて、その声の方へと駆け出した。

が、女の子は一度振り返るとリインに向かって大きく手を振った。
「こんな場所なのに元気な子供だな……」

ふりではなく本物の失言症なのだろう。

一言も話さなかった女の子は「あの子」とは似ても似つかないの
だが思わず懐かしさを感じてしまう。

「……………それにしても……………」

リインは顔をしかめて女の子がくれた花に視線を落とす。

塩害の中でも咲く強い花なのかもしれない。真っ白な純白の花は
確かに観賞用として美しい。

しかし、リインの記憶が確かならその造形は《グノーシス》の材料
となる《プレロマ草》に他ならない。

「いったいどうなっているんだ。この国は……………」

・
*

まだ準備中という札が下げられたその店に入ると風変わりな男が
リインを出迎えた。

「ごめんなさい。まだ準備中なの——っでもしかしてあなたがリイン
ちゃん？」

「……………え？」

「黒髪の男の子って聞いていたけど……………まアまア、聞いていた以上に
かわいい顔をしているじゃない」

風変わりな男はリインに近付いてじつくりと顔を見ると満足そう
に頷く。

「とくにこの鎖骨のラインがとっても……………ス・テ・キ！」

「……………」

——ミシエルさんの同類……………変人であつても変態ではなさそうだ
な……………

しなを作る動きに口調はクロスベルの知り合いによく似ている。

言動も軽薄で独特な馴れ馴れしさはあるものの、こちらの意志を無
視する「彼ら」のような雰囲気もなければ市長邸で向けられた悪感

情もない。

わずか一秒にも満たない時間でリインは彼を安全と判断する。

「初めましてリイン・シュバルツァーと言います。その様子だとサラ教官たちを匿ってもらえたようですね」

「あら……？」

動じずに握手の手を差し出して来たリインに男は目を丸くする。

大抵の人間は自分のこの仕草や口調に驚き呆然とする。

現にリインの前にやって来た彼のクラスメイト達はそうだった。

「ふふ、どうやらさっちゃん生徒の中でも貴方は特別みたいね」

「買い被り過ぎです。あなたのような知り合いがいるから驚かなかつただけです」

「あらそうなの？ その方とは是非会ってみたいものね……」

と、失礼。自己紹介が遅れたわね」

男は一步リインから離れ気取ったポーズを取って名乗る。

「アタシの名前はシャンテ。この店、《ダンデリオン》の店長を務めさせてもらっているわ」

「申し訳ありません。こんな形で押しかけてしまつて」

「良いのよ。バルムントおじい様の紹介なんでしょ？」

それに、むしろ謝るのはアタシの方よ。うちの国がとんだ迷惑を掛けちゃったわね」

「いえ、貴方のせいではないですから気にしないでください。ところで……」

リインはおもむろにシャンテから視線を外して店の奥へと視線を向ける。

「もう何ですよ。今度こそリインが驚き慌てふためく顔が見れると思つたのに」

「やつぱりすごいやリイン。あれくらいできないと帝国男児じゃないのかな？」

「リイン、鉄壁過ぎ」

「だから言ったじゃないか。リインさんはミシエルさんって言う同じ属性の人と知り合いだから驚いたりしないって」

奥から聞こえて来る小声のにぎやかな声にリインは少しだけ居た
たまれなくなつた。

・*

「それじゃあシャンテさんはサラ教官と同期なんですか？」

「ええ、アタシとさっちゃんとは同じクラスだったのよ」

お腹を空かしているだろうと貴重なはずの食料を振る舞ってくれ
たシャンテはそのままサラの昔話をしてくれる。

「さっちゃんもバレスタイン大佐に引き取られたとはいえ、あの人は
“英雄”として外で活動していたからね……」

ノーザンブリアでは“獵兵”として鍛える前に、国に残つた憲兵団
の候補生と一緒に訓練するの……これが当時の写真よ」

「うわ……サラ若い」

「フィー、そこはせめてちっちゃいって言って上げようよ。それじゃ
あまるで今は若くないみたいに聞こえるよ」

壁に飾られた当時の写真を見てフィーが率直な感想をもらし、エリ
オットが窘める。

「でも本当にちよつと見違えたかも……こんな真面目そうでかわいい
子が今は……」

寮での彼女の生活を思い出してアリサは時間の流れは残酷だと嘆
く。

「サラ教官の隣にいるのはもしかしてアプリリスっていう人ですか
？」

クリスはサラを含めた七人の男女の中から、サラの隣に立っている
黒髪の少女を指して尋ねる。

「あら？　もしかしてもうあっちゃんと会つたのかしら？」

「え、ええ……」

あっちゃん、それにサラのことをさっちゃんと呼ぶシャンテに違和
感を抱きながらクリスは頷く。

「アタシたちの班ではさっちゃんとかっちゃんのみ二人だけが “北の獵

兵”への参加を認められてね……

他の子たちは憲兵団、アタシは訓練中に膝を壊しちゃって今じゃさびれた宿酒場の店長っていうわけ」

「膝を壊したって、そんなに厳しい教練だったんですか？」

「ええ、そもそも”猟兵”志望の子を振るい落とすための訓練でもあったから、才能がないと思いい知らすためにバレストイン大佐は特に厳しくしごかれたものよ……」

例えばさっちゃんがあたしたち六人との多対一をやって負けて泣いちちゃった写真が——」

「やめなさいシヤンテ」

楽しそうにアルバムを引っ張り出そうとするシヤンテを店の奥から出て来たサラが止める。

「あら、さっちゃん。おはよう、相変わらずお寝坊さんね」

「さっちゃんはやめてって言ってるでしょ……」

げんなりと項垂れてサラはテーブルに着く。

「サラ教官、もう立って大丈夫なんですか？」

「銃創はなかったけど、アーツみたいなのを撃たれた感じだったよ」

「そうみたいね。ったく何をしてくれたんだが」

撃たれたはずの胸を、大胆にもその場で服をめくって確かめるサラに男たちは明後日の方角を向く。

「ちよつとサラ教官!？」

「はいはい、それより状況は？」

諫めてくるアリサを適当に流してサラは尋ねる。

「今日は脱獄した翌日です。サラ教官はあれから半日ほど眠っていました」

「憲兵を攪乱するついでに街の様子を見てきましたが、あまり騒ぎになっっていないませんでした」

クリスの説明に続いてリインが付け加える。

「それからサラ教官、悪い知らせが一つあります」

そう言っリインは女の子がくれた花をテーブルの上に置く。

「あら、ティアちゃんのところの花じゃない。もしかしてマヤちゃん

から買ったの？」

ノーザンブリアにとつてありふれた花なのか、シャンテは特に驚いた様子もなく口を挟む。

「失言症の女の子がマヤっていう子ならその通りです……」

シャンテさんはこの花のことを知っているんですか？」

「知っているも何も、塩の大地にも咲くお花よ……」

見ての通り綺麗だから飾るのも良いし、何よりも食べると元気になれる花だから重宝しているのよ。アタシのお店でもいくつかメニユーに——」

「すぐにやめてください」

思わずリインは声を大にしていた。

「え……何どういうこと？」

「ちゃんと説明してリイン。ノーザンブリアでは雑草だって貴重な食糧なのよ。いきなりそんなこと言われても困るわよ」

突然のリインの反応にシャンテは目を丸くして、サラが追及する。

ちなみにその横で……

「雑草が食料……」

「もしかしてさっき食べたのも……」

「意外と美味しかったですね」

「何を気にしてるの？」

VII組一同はそれぞれの感想を呟いていた。

「この花は『プロレマ草』と言って、色違いですがとある宗教団体の麻薬の原料になっていた危険な植物なんです」

「なっ……!!？」

「麻薬……」

「それってまさか『グノーシス』？」

シャンテ、この花はいつからノーザンブリアに咲き出したの？ あたしはこんな花見たことないわよ？」

「いつって……五年前よ……」

当時、偉い学者様がノーザンブリアに来て塩の大地でも咲くものだって種をくれたことが始まりだって聞いているわ」

「五年前……」

「教団殲滅作戦が六年前ですから、そこからコアヒムの様に落ち延びたのかもしれない……」

ワイスマンが語らなかつたのは、知つた上で黙っていたのか、本当に知らなかつたのかは分かりませんが……

シャンテさん、他に五年前から変わったことはありませんか？」

「そうね……《塩化病》で死ぬ人が減つたことくらいかしら？」

「《塩化病》って何ですか？」

聞きなれない病名にクリスが首を傾げる。

「《塩化病》はノーザンブリア特有の風土病よ……」

ある日、体が端から塩の結晶になって砕けて死に至る病のことをそう呼んでいるの……

この病気も貧困と同じくらい、ノーザンブリアを苦しめているものよ」

「そんな病気が……」

「《塩化病》はずつと前からあるわよ。それより、よりによつて《D∴G教団》の残党……」

新たに発覚した情報にサラは頭を抱える。

六年前、ゼムリア大陸の各国の軍隊や遊撃士、非公式ながらも《身喰らう蛇》と《星杯騎士団》が総出になつた掃討作戦。

本体こそ壊滅させることができたが、その残党はまだその全容を把握し切れていない。

身を隠すという点ではノーザンブリアはうつつけかもしれない。

しかし、政府の暴走と“北の猟兵”との繋がりを認める発言、それに加えて《D∴G教団》の残党を匿っていた事実。

「終わった……このことが全部他国に知られたらノーザンブリアは確実に終わる」

「ちよつとさつちちゃん!」

「何でこんなことになつてるのよ!」

思わずサラは激昂する。

「アプリリスはっ! シャトラールはっ! クレドはっ!

あいつらは憲兵団に残ってこの国の治安を守っていたはずでしょ?!? それがどうしてこんなことになっているのよ?!?」

「……………ごめんさないサラちゃん、みんなあの日からこのお店に来てくれなくなっちゃたから、アタシは何も知らないの」

「あの日、ですか?」

「ええ……バレストイン大佐が亡くなって、さっちゃんが『北の猟兵』をやめた時……」

ねえ、さっちゃん。どうして貴女は『北の猟兵』をやめたの?」

「それは……」

シヤンテの質問にサラは水を掛けられたように黙り込む。

「安心して責めるつもりじゃないの。バレストイン大佐はアタシたちにとってもお父さんだったみたいな人……」

貴女の気持ちはアタシだって分かるつもりよ……」

「違う……あたしは……あたしは……」

「サラ教官……」

「サラ……」

情緒不安定になるサラにアリサ達は言葉を失った。

こんなに弱々しいサラを見るのは初めてであり、何と声を掛けて良いのか迷う。

「サラ教官——」

そんな中、リインが口を開いた瞬間——

「邪魔するぜ」

鍵を掛けてあった店の扉が何者かによって蹴破られた。

「なっ?!?」

「——っ!」

素早くVII組一同はそれぞれの武器を乱入者に向けて身構える。

「よう……久しぶりだな。サラ」

二本の剣を携えた紫髪の青年はサラを見つけると獰猛な笑みを浮かべる。

「あ……」

「クレド!? あなたどうして!?!」

サラよりもシャンテの方が反応するが、それに構わず青年——クレドはサラに向けて剣を突きつける。

「随分と腑抜けた顔してるじゃねえか？　どうやら喝を入れねえとダメなようだ——なっ！」

挨拶もせず青年は戸惑うばかりのサラに向かって襲い掛かる。

その振り下ろされた凶刃は——リインが抜いた太刀によつて受け止められる。

「いきなり出て来た何なんだお前は!？」

まじかで見えた彼の顔は先程シャンテが見せてくれた写真に並んでいる一人だと気付く。

「ほう……俺の剣を止めるか……良いじゃねえか」

割つて入ったリインの反応にクレドは口角を釣り上げて獰猛な笑みを深くする。

リインはその笑みを良く知っている。

その笑みは戦闘狂が獲物を見つけた時の喜びの笑みだと。

「動かないで、それ以上動いたら撃つわよっ！」

横から矢を番えた弓を構えてアリサが警告を発する。しかし——
「遅え」

クレドは鏢迫り合いをやめると一瞬でリインから離れつつ、剣を突き出しその衝撃破をアリサに向けて繰り出す。

「——っ」

「させない」

迫りくる突きの剣閃にアリサは無防備に立ち尽くし——クリスがその一撃を防ぐことを見越して、矢を放つ。

「へえ……随分と良い度胸してるじゃねえか……いや今の連携、何か仕掛けがあるな」

危なげなく矢を切り払ったクレドはアリサの胆力を褒めつつ、タイミングが良過ぎるクリスの防御をクレドは冷静に分析する。

「随分余裕だね」

そこにフィーが追い継り、双銃剣を縦横に振る。

「クカカツ！　サラの生徒だけあってやるじゃねえかつ！」

「うぎん」

フィーは一言そう漏らすと身を翻し、剣を躲しながらその場でバク宙をして、体を使ってクレドの視界を塞ぐ。

直後、フィーの背に隠れるように身を屈め跳んだフィーを掻い潜る様にリインがクレドを強襲する。

「ちっ」

クレドから見えたのはリインの足元だけ、しかしそれでも斬撃の軌道に当たりを付けて双剣を盾にする。

しかしリインはクレドの視界に入った太刀をおもむろに手放して

「破甲拳っ！」

リインの手から離れて落ちていく太刀に目を奪われたクレドはその一撃に貫かれた。

・*

「やったあ！」

リインの拳の一撃を受けて吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられたクレドにエリオットは歓声を上げる。

「いや、まだだ」

リインは太刀を拾い直し、拳に感じた手応えから倒し切れてないと判断する。

「派手に飛んだけど、自分から跳んでいた？」

「ああ、そうみたいだ」

フィーの言葉にリインは頷き、一同は警戒を緩めずにクレドを包囲する。

「クカカ……良いぜ。テメエら……」

壁に背中を預けたクレドは堪え切れないと言わんばかりに震え出す。

「これなら——本気を出しちまっても構わねえよなっ！」

そう言うところクレドは胸を抑えて、吠える。

「オオオオオオオッ！」

リン達の目の前でクレドの姿が変わる。

紫の髪は金色に、服装も鳥を思わせる青い装束へと変化する。

「変身した。まさかりインさんと同じ超——」

「さあっ！ お楽しみの時間だ！」

青の鬨気を纏いクレドは剣を振る。

彼が剣を突き出す度にそれを取りまく青い鬨気の剣閃の刃が一同に襲い掛かる。

「きゃあっ!?!」

「うわあああっ!?!」

「こいつで最後だっ！ 消し飛び——」

「させるかっ!」

最後の一閃が振り切られるよりも早くリンが間合いを詰めてその刃を抑え込む。

「っ——」

腕に走る凄まじい衝撃は変身前の比ではない。

「クハッ……まさかこの状態の俺の一撃を受け止められる奴がいるとはな」

「それはどうも……褒められても全然嬉しくないけどな」

剣を止めながら器用に肩を竦めたリンはロックオンして来る視線に嘆く。

「確か帝国の英雄様だったか？ ガキだと思っていたが良いじゃねえか。テメエはここで俺が斬る——と言いたいところだが、おいサラッ！」

「な、何よ……?」

「腑抜けたテメエにはやってもらわなくちゃならない役目があんだよ！ いつまで間抜け面さらしてやがる!」

「なっ!?!」

あまりに一方的な罵倒にサラは絶句する。

「さっさとッ力に目覚めやがれっ!」

「何を言ってるのよアンタ?」

「でない俺がこいつらを皆殺しに——」

「お前、はしやぎ過ぎだ」

「は……？」

目の前の予想していなかった変化にクレドは間の抜けた言葉をも
らす。

鏢迫り合いの向こうで黒い髪は一瞬で白く染まり、瞳は血の色へと
変化する。

「っ——」

本能が告げる警告にクレドは迷いなく従ってその場から飛び退く
が、クレドが逃げる速度にリインは余裕で先回りして太刀を一閃す
る。

「がっ——」

先程までの比ではない峰打ちの一撃にクレドは威力を殺す余裕も
なく吹き飛ばされる。

「終わりだ」

壁に叩きつけられてバウンドしたクレドにリインはさらに追い縋
り太刀を振るう。

「——っ」

しかしその一撃はクレドの前に突然現れた障壁に弾かれた。

「ちっ——」

クレドはその一瞬の隙を逃さずに窓を破ってその場から脱出する
のだった。

「……………どうやら術士が隠れていたみたいだな」

取り逃がしてしまったことにリインは溜息を吐き、彼女の名前を呼
ぶ。

「フィー」

「ん、了解」

その呼び掛けにフィーは迷わず頷くとクレドが破った窓から外へ
出て追い駆ける。

リインはそのまま周囲を見回ると言って外に出て、取り残されたク
リスは剣を納めてシャンテに尋ねる。

「……シヤンテさん、今の人はサラ教官の昔の写真と一緒に写っていた男の人ですよね？」

「ええ、バレストイン班の一人のクレドよ……」

「さっちゃんと一緒に『獵兵』として合格を貰った子なんだけど、一身上の都合でノーザンブリアに残って憲兵団に入った同期なんだけど……」

「その時から彼は超——じゃなくてあんな『力』を持っていたんですか？」

「いいえ、アタシが知る限りあんな風に変身するのは初めてよ」

「そうですか……」

荒れた店内を見回し、クリスはエリオットに保護させたサラの下へと向かう。

「サラ教官、大丈夫ですか？」

「………また情けない姿を見せちゃったわね……」

自嘲するようにサラは項垂れる。

流石にクリスもこのサラを取り巻く状況に同情する。

故郷の暴走に、姉妹からの銃撃、果てにはかつての仲間からの要領を得ない発破。

目まぐるしく変わる状況は第三者のクリス達からしても混乱を極めている。

「シヤンテもごめん……あたしのせいでお店を滅茶苦茶にして」

「水臭いこと言わないでよさっちゃん、悪いのは人の知らない所で何かを始めているあのバカ達よ……」

それよりも貴方達はここから早く離れた方が良いわね……

クレド達が憲兵を抱え込んでいるかもしれないけど、あれだけの騒ぎを起こしたんだから」

「いえ、おそろく何処に行っても同じだと思います……」

「ここでは僕達は余所者。どれだけ注意を払っても痕跡は消し切れないと考えた方がいいとでしよう」

「それじゃあどうするの？」

「さっスキの剣士を追ったファイの成果次第です……」

このまま逃げるのか、それとも打って出るのか、二人はそれで良いかな？」

「ええ、それで構わないわ」

「うん、正直……もう一杯一杯だけど」

翻弄されるがままのアリサとエリオットはクリスマスの提案に頷くのだった。

72話 塩の大地V

「それじゃあこれからどうするか決めよう」

ダンデリオンの地下倉庫に場所を移し、クリスはそう切り出した。「今、僕達がやれることは大まかに三つある……」

一つは今、レミフェリアから支給品を届けてくれている遊撃士に保護してもらおう事……

そこには憲兵隊がいると思うし、正直彼らが遊撃士相手にまで敵対をするのか分からないけどどう転んでも孤立している僕達の味方になんてくれるはずだ」

ノーザンブリアの人達が配給の手伝いをするはずだった自分達がないことを彼らにどう説明しているの分からないが、相手が遊撃士ならば必ず自分たちの話も聞いてくれるはずなので期待はできる。

「二つ目は、僕達だけで帝国へ脱出すること」

遊撃士の助けを借りず独力で帝国へ戻る事。

これもそこまで難しいことではない。

何を考えているのか、ハリアスクの門の警備が強化されたわけではなく突破しようと思えば簡単に突破できる。

もつとも、門にクレドのような「達人級」がいる可能性もあるので絶対とは言えない。

「この二つは結局、共通して言えるのはノーザンブリアの中に渦巻いている「陰謀」から目を背けて、解決を他国に丸投げすることになるね……」

そして三つ目は説明するまでもなく、ノーザンブリアで行われている陰謀を暴くこと。当然僕は三つ目を推すね」

「本気なのクリス？ これはもう明らかに《特別実習》の範囲じゃないよ」

クリスの要約にエリオットは気弱な発言をする。

これは何もエリオットが臆病だからではない。

ノーザンブリアの不特定多数の市民から向けられる悪意の眼差し。

そのストレスはクリスも感じている。

「そうよ！ だいたいクリスは皇子様なのよ。そんな危険に突っ込むような真似していいの!？」

今更な話なのだが、学院ではこれまで通りに接することに慣れ始めていたアリサはそれを持ち出してクリスを止めようと試みる。

「あはは、アリサ。何を言うんだいクリス・レンハイムはしがない男爵家の次男だよ」

「っゝゝリインッ！」

「覚えておくといいアリサ。アルノールの一族がこんな面白そうな場面で逃げるわけがないって」

リインに助け舟を求めるが、諦めて何かを思い出すように遠い目をしている彼の姿にアリサは絶句する。

「で、でもお忍びとは言え帝国の皇子が他国の騒動に首を突っ込んで良いの?」

「エリオット、それも前例があるからダメなんだ」

それでもと食い下がるエリオットにリインはやはり諦めた様に項垂れる。

「わたしもクリスと同意見……」

「やられたらやり返す。それが 〃猟兵の——ううん、やられっ放しはわたしの性に合わない」

「フィーまで」

悟り切った様子のリインは宛にならないと察し、せめて三人で結託しようと考えたアリサだったがフィーはクリスに同調してしまう。

「まあ、アリサ達の言い分はもつともだ」

「でもリインさん、僕は学院に通っている間は——」

「リベールの時とは違うんだ……」

暗躍しているのは《結社》じゃなくて、ノーザンブリアの国そのもの。武器を持ち出してきたのは向こうだったとしても市民と戦う覚悟はあるのか?」

「それは……」

「だけどそれはひとまず置いておくとして……」

みんなに一つだけ聞くけどサラ教官を置いて自分達だけ逃げるか、それともサラ教官に協力するのか、結局はその選択だと俺は思うんだけど」

「ちよつと何でそうなるのよ？」

自分に矛先を向けられたサラが抗議の声を上げる。

「サラ教官は最初から俺達だけを帰して自分だけで行くつもりなんでしょうが、そうはいきません」

「そうよね……いろいろ問題はあるけど、今のサラ教官を一人で行かせるわけにはいかないわよね」

「サラ教官がこんな状態じゃ仕方がないですよね」

「ぶつちやけ今のサラは簡単に死にそう」

「うん……怖いけど、サラ教官を見捨てることはできないかな」

「あんたたち……」

先程まですぐに帝国に帰りたいた言っていたアリサとエリオットの二人も前言が撤回して残る意志を固める。

「ふふ、良い生徒達じゃない」

「そうね……あのサラがこんなに生徒に思われる先生になって安心したわ」

地下室に降りて来たシャンテと見知らぬ女性が言葉を失っているサラに嬉しそうな言葉を投げかける。

「シャンテ……それにティア」

「久しぶりねサラ。帰って来てるなら教えてくれれば良いのに」

蒼く長い髪の女性は嬉しそうに顔を綻ばせる。

「サラ教官の知り合いですか？」

「もしかしてさっきの写真の一人？」

「初めまして、ツールズ士官学院のみなさん。私はサラと一緒にこの国で育ったティアと言います……」

いつもこの子がお世話になっていました」

クリスとアリサの呟きに答えるようにティアは名乗って心配そうに尋ねる。

「やめて、あんたはあたしのおかんか。というか私にも教官としての

「威厳が——」

「威厳って……そんなのありましたっけ？」

「結構な頻度でラインやシャロンにお酒のつまみを作ってもらってるわよね」

「たしか反面教師っていう奴だっけ？」

「み、みんな……たしかにサラ教官は自由行動日はお昼まで寝ているけど……ちゃんと僕は尊敬していますよ」

「ノーコメント」

取り繕おうとするサラに生徒達は無情のダメ出しを送る。

「あんたたち……って言うかティア、あんたまだ生きていたの？」

「サラ教官、久しぶりに会った友達にそれは……」

サラの言葉にアリサが顔をしかめるが、その言葉を向けられた本人は気を悪くした素振りもなく微笑む。

「良いんですよ。サラと最後に会った六年前から病気で今日まで生きていられたのが奇蹟ですから」

「病気？ それってまさか……」

思わず聞き返したクリスに答えるように、ティアは腕に巻いた包帯を取って見せる。

「っ……」

「それってまさか……」

包帯の下の皮膚はまるで岩塩の塊の様に白い結晶となっていた。

「はい。私は《塩化病》に侵されています……」

今は薬がありますが、それも進行を遅らせるだけ、お医者様には今年一杯が限界だと診断されました」

悲観した様子もなく笑顔で自分の末路を語るティアに一同は絶句する。

「ねえリイン。もう国家間の情勢とか言っていないで、できるなら本当に直して上げた方が良くないじゃないの？」

国土の問題はともかく、《塩化病》だけでも……」

「……ああ、どうやらあまり悠長にしてられる時間はないみたいだ」

アリサの指摘にリインは頷く。

《塩害》による二次被害ならともかく、目の前で失われようとしている命まで見捨てる程にリインは非情になれない。

「何の話ですか？」

「いえ、こつちの話です」

首を傾げるティアにリインは咄嗟に誤魔化す。

「とにかく、今はサラ教官の同期の人達の話です……」

このままだとノーザンブリアは《塩害》よりも先に他国から見放されます」

「そうね。さっちゃん達の話やクレドの様子を見る限り、このノーザンブリアで何かの計画が行われていたのは確かみたいね……」

ティアは何か知らないかしら？ 治療で基地に定期的に行っているわけだからアタシより何か知っているんじゃない？」

「いえ、私もアプリリス達とは顔を合わせていませんから……でも信じられません。アプリリス達が本当にサラを襲ったなんて」

「……ティアさん、五年前にノーザンブリアにやって来た学者と、この方の名前は分かりますか？」

「え、ええ……ゾラ先生のことですよね」

「ゾラ……」

「リイン、もしかして……」

「はい。教団事件の時に指名手配リストの中にあつた名前です」

サラの確かめようとする呼び掛けにリインは頷く。

「確定ね。もはや言い逃れはできない」

サラは諦めた様に自嘲するように小さく笑う。

「これが……これがあたし達がやって来たことの結末か……」

もしかしてバレなければ何をしても良いつとでも思ったのかしら？ ああ、そう思わせちゃったなら『あたし達』の不始末よね」

「サラ教官……」

「大丈夫よりイン。あたしは冷静よ」

「そんな顔で何を言ってるのよさっちゃん」

「だからさっちゃんはやめてって言ってるでしょ」

暗い目をしたサラはその呼び方にすぐに抗議するも、シャンテは構わず続ける。

「ねえさっちゃん、今のノーザンブリアの政権がおかしいって言うなら、バルムント大公を助けるって言うのはどうかしら？」

「え……？」

「バルムント大公が逃げ出したんじゃないかって、今の国会議員に嵌められて弁明の機会も与えられず、不当に拘束させられているわけでしょう？」

なら大公をお救いして、26年前の真実を白日の下にさらすの……

そして今の議員たちの不正を明るみにして彼らを失脚させることができれば、ノーザンブリアはまだ生き残ることができると思うの」

「シャンテ、それは——」

「優しいさっちゃんはこの国のみんなが滅んで死んでしまえなんて考えていないでしょ？」

「むう……」

シャンテの言葉にサラはやり込められたように唸り——

「滅んでしまえば良いんです。こんな国」

「え……？」

新しい声にサラは振り返る。

階段から降りて来た少女はリイン達に近い背格好の少女だった。

「シャンテ、誰？」

「うちの従業員の一人のヴァレリーちゃんよ……」

バルムント大公のお孫さんらしくて、*「悪魔の子」*なんて言われてイジメられていたからうちで雇っちゃったの」

「初めまして、サラさん。お噂は店長やティアさんから聞いています」

ヴァレリーは礼儀正しくサラに頭を下げる。

「お願いです。サラさん、この国を終わらせてください」

「ちよ……え……」

それを覚悟したサラだったが、面と向かって年端もない少女にそれを懇願されると気持ちが引ける。

「この国は腐っているんです……だから……」

「ちよつと落ち着きなさい」

懇願する少女の肩を掴んで顔を上げさせ、サラが見たのは絶望に澱んだ瞳だった。

「知っていますか？」

私のことを「悪魔の一族」と蔑んでいる人達は真面目に働かず、「北の猟兵」が外で人を殺して手に入れたミラを使って手に入れたお酒を昼間から飲んで遊び歩いているんです」

「っ——」

「こんな恥知らずな国なんてさつさと滅んでしまえば良いんです」

自分以上の憎悪を宿した言葉にサラは同調するよりも言葉を失った。

「ヴァレリーちゃん、そんなことを言つてさつちゃんを困らせないの、さつちゃんは遊撃士なんだから」

「ですが、店長」

「ヴァレリーちゃんだつてお祖父様の無罪を証明したいでしょ？」

「どうでも良いです。そんな会つたこともない人のことなんて」

取り付く島もなく憎悪を——というよりも無関心な嫌悪を滲ませるヴァレリーにシャンテは肩を竦め、ティアに付き添わせて一階に戻す。

「ごめんなさい。あの子は先日「猟兵」の試験に落ちたばかりでね。だいぶ落ち着いたんだけど、その……」

「死に場所を求めている？」

サラの言葉にシャンテは静かに頷く。

「あの子は物心着いた頃から「悪魔の一族」なんて蔑まれてきたの……」

「猟兵」に志願したのもおそらく汚名を濯ぐためなんかじゃなくて死んで楽になりたかつたからなんでしょうね」

「……………なんだか、本当に複雑な国なんですネノーザンブリアは」
ヴァレリーの生い立ちにクリスは複雑な気持ちになる。

昨日までは一方的な悪意を押し付けられ、ノーザンブリアに住む全ての人間に悪感情を感じていたが、実際はそうではなく様々な事情が

折り重なった末の状況だと分かる。

現議長たちの様に悪い者もいれば、シャンテやティアのように真面目に生きている者、絶望に暮れて疲れてしまった者だっている。

それらはきつと他人事ではないのだとクリスは考える。

「みんな、僕の意見を言っても良いかな？」

最初の面白そうだからという理由ではない真剣な眼差しにアリサ達は固唾を吞んで彼の言葉を待つ。

「結局僕達がここで話し合いを続けても事の真相は何も分かりません……」

26年前の陰謀も、今行われている陰謀も僕達は結局彼らにとってサラ教官のオマケに過ぎないんだと思います」

「オマケ……確かにそうよね」

「この際、善悪については一先ず置いておいて、ノーザンブリアは《塩の杭の異変》から何かを起こそうとしていることは間違いない……」

僕達は所詮、外国人で余所者で口を出す資格はないかもしれない。でも巻き込んできたのは向こうですから僕達はもう無関係じゃないと思うんだ……

だから僕はノーザンブリアの人達が何を考え、何を成そうとしているのか。自分の目で最後まで見届けたいと思うんだ……

例えばサラ教官が拒んでも、僕は僕達を利用しようとしている真実を知りたい」

「クリス……あんた……」

「それに僕達がいることで助けられる人が一人でもいるのなら、それで十分に意味はあるはずだ」

「そうね……このまま逃げ帰っても後味が悪いわよね」

「こんな僕でも役に立てることがあるなら」

サラが残るなら仕方なくと、消極的に決めたアリサとエリオットはクリスの言い分に前向きに考える。

「だってさ、どうするサラ？」

「あんた達の言い分は分かったわ。だけどあたしは教官として無事にあんた達を帰す義務が——」

「そんなことより戦闘になった場合、サラ一人でどうにかできるの？」
「うぐ」

フィーの指摘にサラは唸る。

ただでさえクレドは生身でサラと同等の戦闘能力を持っている。それに加えて“変身”する異能まであるのだからサラの勝ち目は薄い。

「サラ教官にとって僕達は背中を任せられない程に頼りないですか？」

「……………分かった……………分かったわよ」

クリスの押しにサラは観念して頷いた。

「フフ……………本当に良い子たちに巡り合えたのねサラは」

肩を落として生徒に説得されたサラを微笑ましいと、シヤンテは安堵の息を吐く。

「シヤンテさん……………」

「ん、何かしらリインちゃん？」

「貴方はもしかして……………」

シヤンテに感じた不信を尋ねようとするが、意味深なウインクにリインは肩を竦めて口を噤むのだった。

73話 塩の大地VI

8月22日日曜日。21:00。

ハリアスク地下道。

初日に基地から脱出した通路とは別の、フィーが追い駆けてクレドが入って行った入り口から地下道に入ったサラ達は魔獣の出迎えを受けていた。

「ノーザンイクシードツ!!」

紫電が迸り、剣を振るたびに魔獣は両断され雷に焼かれる、さらには斬撃の合間に至近距離からの銃弾を穿たれ、サラの突撃の跡には無残な魔獣の死骸が散らばる。

「……………これがサラ教官の本気……………」

「戦技教練の時とは比べものにならないんだけど」

魔獣相手とは言えあまりに一方的な蹂躪にアリサとエリオットはサラの戦いぶりに慄く。

「そっか……………二人はサラの本気を見るの初めてなんだ」

「遊撃士でも猟兵でも『紫電』という二つ名を持っているくらいだからね。本領は乱戦の方が得意なのかも」

啞然とする二人にフィーとクリスは冷静だった。

「サラ教官、飛ばし過ぎです」

周囲の魔獣を一息で殲滅し、肩を激しく上下させて息を整えるサラにリインは指摘する。

「これくらい……………どうって……………ことないわよ」

「そんなわけではないですよ」

ため息を吐き、リインは周囲の気配を読み取る。

「どうやら俺達が脱出に使った地下道とは違って、この地下道は上位三属性の影響があるみたいです」

「上位三属性って……………それって確か帝都の地下みたいになっているってこと?」

ラインの言葉にエリオットの脳裏には『暗黒竜』の存在が浮かぶ。「帝都ほどの澱みはないけど、どんな魔獣が出てくるか分からないから注意はした方が良さだろうな……」

だからサラ教官、逸る気持ちは分かりますがペースを落としてください」

「……………分かったわよ」

固く握りしめた剣と銃を納めてサラは深呼吸をして息を整える。

「さあ、行くわよ」

「え、もう?」

「何だか自信なくすわね。私たちって一緒に来た意味があるのかしら?」

すぐに回復して進んで行くサラの背中にアリサは思わずため息を吐く。

「基礎体力の差は気にしても仕方がないさ。それにアリサやエリオットにだってできることはあるさ」

「そうは言うけど……」

「敵の人数にもよるが、サラ教官のサポートはアリサ達に任せることになると思うから」

クレドのようなタイプはアリサとエリオットには身に余るだろう。

頼みの戦術リンクも、彼の速さの前ではあまり機能しないだろう。

「それにしても都市の地下にこんな魔獣がいるんだね」

新しい魔獣の姿を通路の奥に見つけたエリオットが疑問をこぼし、ラインが答える。

「ハリアスクに限らず、帝国やリベールの都市でも地下水路には魔獣が住み着いているのはよくあることだ」

「そうよ。あんた達が普段住んでいるトリスタの街の下にも魔獣はいるんだから」

「ほ、本当ですか!?!」

サラのおどけた口調から知らされた真実にエリオットは驚愕する。

「ほんと、ほんと……」

定期的に生徒会を経由して二年生に間引かせているから、来年はあ

んたたちにもやってもらおうよ」

「めんどくさそう」

「そうかな？　僕は面白そうだと思うけど？」

　フィーがもらった感想にクリスが応える。

「大丈夫だよ二人とも、トリスタの魔獣はそこまで強くはないから」

　リインが慰めの言葉を掛けてくれるが、アリサとエリオットはリインの評価で素直に安心することはできなかった。

「——と、ここから先がハリアスク基地かな？」

　地下道の壁が天然の洞窟から石造りのものと変わり、格子の扉が行く手を阻む。

「あまり時間を掛けていられないから爆破する？」

「爆破って、フィー爆弾を持つてるの？」

「乙女のたしなみ」

　驚くエリオットにフィーは平然と答える。

「いや……その必要はないみたいだ」

　クリスが近くの壁を探り、隠してあるスイッチを見つけて押すと重い音を立てて格子扉は開く。

「この先に……ノーザンブリアの真実があるのよね？」

　ぐくりと緊張にアリサが唾を飲み、リインはサラに声を掛ける。

「大丈夫ですかサラ教官？」

「ええ、問題ないわ。行くわよ」

　サラを先頭にして、基地の内部に入るとそこは大きな広間だった。

「随分広い場所に出たけど……私たちの侵入は気付かれていないのかしら？」

「それはないと思うよ。わざと振り切らなかったようにも感じたから」

　クレドを追い駆けてこの通路を見つけて来たフィーはアリサの眩しさに首を横に振る。

「みんな、あれを見て」

　広間の向こう、基地の中へと続く階段の前に鎮座している大きな石像。

「……ねえみんな。私、あの石像に見覚えがあるんだけど」

「奇遇だねアリサ。僕も見覚えがある気がするよ」

アリサとエリオットがそんな言葉を交わすと、二人が思い浮かべた通りにそれは動き出す。

「リインさん、フィー、それにサラ教官。手を出さないで下さい」

「クリス？」

「アリサ、エリオット。丁度いいオリエンテーリングの時のリベンジをしよう」

「リベンジって、あの時よりも何か凶悪な見た目なんだけど!？」

「僕達三人でやるの!？」

「いつまでもリインさんやフィーに頼ってばかりではいられないだろ？　アリサ、エリオット。僕に続けっ!」

「ああ、もうしようがないわね」

「あ、危なくなったら援護、お願いね」

動き出した白いガーゴイルに突撃するクリスを追い駆けてアリサとエリオットがそれに続く。

「やれやれ、少しは成長したと思ったんだけどな」

「いいんじゃない？　この後はあれよりメンドウな相手が待っているんだから」

「むう……」

「サラ教官、せっかくだから少し休んでください。クリス達のこと俺達が見ておきますから」

「ええ……分かってるわよ」

・*

「オーバルエネルギー充填、出力40%っ！　砕けなさいっ！　エレトリックアローツ!!」

「セブンラプソディツ!!」

鉄杭の矢がガーゴイルの身体を抉り、七つのエネルギー球が畳み掛

ける。

「炎よ唸れ、全てを喰らい尽くせ——プルガトリーセイバー!!」

そして風を纏った焰の刃が白いガーゴイルの首を落とした。

「やった!」

首を落とされたことでガーゴイルは再生が止まり、全身に亀裂が走ったと思うと白い粉になって崩れ落ちる。

「やりましたよ。リインさん!」

「ま、当然よね」

「本当に僕達だけで倒せた……」

それぞれが勝利を喜ぶが、サラはそれを労いながら注意を促す。

「お疲れ様、だけどここからが本番よ」

「その通りだ」

サラの言葉に肯定を返したのはクリス達ではない第三者の声。

振り返ればガーゴイルが守っていた階段の上には銀髪の男が佇んでいた。

「あれは……」

「サラ教官の写真に写っていた一人?」

「シャトラール……」

生徒達の疑問に答えるようにサラはその男の名前を呟く。

「久しぶりだなサラ」

「ええ、そうね。それよりもこれはいったいどういう事?」

アプリリスといい、クレドといい、このノーザンブリアであんた達はいったい何をしようとしているの?」

「その質問は30点だな……君たちは私たちの成果を今しがた体感したはずだ」

「成果……?」

シャトラールの言葉にクリスは視線を落としてガーゴイルだった白い塊を見る。

「とは言え、まさか学生にそれもたった三人に倒されてしまうとは、その健闘はプラス10点だな」

「……相変わらずみたいね」

勝手に採点するシャトラールに苛立ち、サラは導力銃の銃口を突きつける。

「さっさと答えを言いなさい。あんた達は何を企んでいるの!？」

「ノーザンブリアから帝国への宣戦布告の準備と言ったところですか?」

答えはサラの背後、リインからもたらされた。

「え……?」

「ほう……」

「帝国に宣戦布告って……そんな無謀などれだけ国力に差が——」

「その差を埋めるのがさっきの『塩のガーゴイル』……」

術式に関しては中世の物からだいぶ変わっているから『塩』に合わせて作り替えたんだろうな……

そして『塩』はノーザンブリアではいくらでも手に入る。つまりいくらでもガーゴイルは錬成できる。それこそ軍隊だって作れるだろう」

「素晴らしい90点あげようじゃないか」

リインの答えにシャトラールは笑って頷く。

「シャトラール……あんた本気で言っているの!？」

「ああ、私たちは本気だ。ノーザンブリアはもうこれ以上耐えられない所まで来ている」

悪びれることなくシャトラールはサラの激昂に涼し気に応える。

「本気で帝国に勝てると思っているの?」

「エリオット・クレイグ。40点だな……」

何も全面戦争をしようというわけではない。力を示し、ノーザンブリアの領土を広げる、それだけで十分なのだから」

「だからって……御自慢のガーゴイルは私達三人で倒したのよ。その程度の魔獣なんてどうってことないわよ」

「アリサ・ラインフォルト、10点……君は何を聞いていた?」

シャトラールが指を鳴らすと左右の壁が突然音を立てて沈んだ。

「な、何?!？」

「これは……」

壁が消えた奥の通路から咆哮を上げて先程と同じガーゴイルが広間に次々に雪崩れ込んで来る。

「な……な……な……」

「この数は……」

あつと言う間に周囲を白いガーゴイルに囲まれる。

「リインツ！」

「はいっ！」

サラの声にリインが応え――

「おっと、てめえの相手はオレだ」

白いガーゴイルの群れに紛れて肉薄した金髪のクレドの一撃がリインを彼らの輪から突き飛ばす。

「くっ……」

「クカカ……今のも受け止めるか。だがうちの大将の話が終わるまで大人しくしてもらおうぜ」

「まだ語り足りないって言うのか？」

クレドに剣を向けられ、リインはその言葉からひとまず抵抗することをやめる。

「無限の兵隊である “塩のガーゴイル” ……」

それを指揮するのは “塩の花” と適合した “怪人”。彼らは寿命を引き換えに《達人級》の力を得た将だ……

だが帝国を相手にするにはおそらくまだ足りないだろう」

「それが分かっているならどうして？」

忌々しいと言わんばかりに睨むサラにシャトラールは笑みを浮かべて、こう言った。

「私たちはこの地に “塩の杭” を蘇らせる」

「……………は？」

シャトラールの口から出て来た言葉をサラは理解することができなかった。

「判断が遅いな……まあいい……」

呆けるサラに点数をつけずにシャトラールは改めて宣言する。

「“塩のガーゴイル” “怪人” そして “塩の杭” ……」

この三つを使ってノーザンブリアは領土を広げるため帝国に戦争を仕掛けるということだ」

「……………それは……………本気で言っているの?」

「ああ、本気だとも。私たちは『塩の杭』によって全てを奪われた。ならばそれを使って全てを取り戻すことの何が悪い?」

感情を押し殺したような声で聞き返すサラにシャトラーは得意気に語る。

「『塩の杭』は教会に回収されたはず! どうやって——」

「それはここでは明かすことはできない。だがこれは机上の空論ではなく、すでに我々は『塩の杭』の制御に成功しているとだけは言っておこう」

「なっ——」

シャトラーの言葉にサラは絶句する。

「そんなことしたら七耀教会だって黙ってないわよ」

「それがどうした?」

サラの苦し紛れの反論をクレドが吐き捨てるように否定する。

「あいつらが何をしてくれるって言うんだ?」

止まった『塩の杭』を持って行っただけでふんぞり返っている間抜け共に何で下手にでなくちやなんねえ?

いもしねえ『女神』なんて知ったことか。ノーザンブリアを救いたければオレ達がやらねえといけねえんだよ」

「『女神』を否定するなんて、なんてバチ当たりな」

「なら何だって言うんだ?」

クリスの呟きにクレドは逆に聞き返す。

「お前はなぜ『女神』に祈る? 日曜学校で教わるからか? はっくだらねえ」

クレドは吐き捨てて続ける。

「この荒廃した大地で、どれだけの人間が『女神』に祈りを捧げて来たと思ってる?」

だが『女神』は一度だってノーザンブリアの誰かを救ったことはねえ……………ま、それでも馬鹿みたいにあいつらは祈っているが……………オレ

は祈らねえ……」

クレドははつきりと告げる。

「祈りなど……祈りなんてモンは……弱者であることの証明だ」
「っ……」

はつきりと断言するクレドに「女神」を信じないと言ったことに顔をしかめたクリス達は気押されたように黙り込む。

「……アプリリスもそれを認めたって言うの？」

気押されて何も言い返せなくなってしまうたクリス達を横目にサラはシャトラールにここにはいない姉妹の思惑を尋ねる。

「その通りだ……」

そしてここにバレスタイン大佐の娘であり「北の英雄」であるお前が旗頭がなればノーザンブリアの市民の士気も上がることだろう
「そんな馬鹿げたことに誰が——」

「五年前、あの時あえて言わなかった言葉をここで言わせてもらおう
そう前置きをしてシャトラールはその言葉を口にした。

「俺達の「英雄」バレスタイン大佐を……先生を死なせた責任を取
れ、サラ・バレスタイン」

「っ——」

シャトラールのその言葉はこれまでずっと目を逸らし続けていた
サラの「欺瞞」を貫いた。

「先生が死んだことは確かに君にとって辛いことだっただろう。だが
モラトリウムももう十分ではないか？」

「モラトリウムですって……」

「そうだ。俺達はこの場所で共に過ごし「英雄」となりノーザンブリ
アを救う戦う夢を語り合った……」

例え誰かに後ろ指を指されることになっても、例え友が道半ばで力
尽きたとしても故郷のために戦い続けると俺達は誓い、血と硝煙に塗
れるその生き方を選んだのではなかったのか？」

「それは……」

「それとも君は私達の「英雄」のこれまでの戦いが間違いだったと否
定するのか？」

「っ……………」

容赦なく畳み掛けてくる言葉にサラは閉口してしまう。
シャトラールの言ったことは全て正しい。

血と硝煙に塗れる覚悟は「猟兵」となる訓練生の時点で何度も問われてきた。

隣にいる誰かが死んだのもあの時が初めてだったわけじゃない。

「戻って来いサラ…………君の中にまだ故郷を憂う気持ちは残っているはずだ…………」

「塩の呪い」を脱し、この地を豊かにし、誰も飢えて死ななくて済む国を実現するのだ…………

そして「北の英雄」をノーザンブリアから解放するんだ」

演説を終えたシャトラールはサラの答えを待つ。

「サラ…………」

「サラ教官」

微動だにしないサラに生徒達の不安をもらす。

「シャトラール…………確かにあたしは。パパの死から、猟兵の業から逃げていたわ」

突き付けていた銃を下ろしてサラは自嘲する。

「そうね…………確かにあたし達はこの基地で共に学び、支え合って厳しい訓練を乗り越えて来た」

瞼を閉じればあの頃のこととは鮮明に思い出すことが出来る。

「厳しい訓練を乗り越えて…………」

いつかパパやみんなと肩を並べてノーザンブリアのために戦うんだってはいやいで…………我ながらガキだったのよね」

教官たちには何度も教えられた。

人を殺すことの意味を、そして人を死なせることの意味を。

あの瞬間が訪れるまでサラはどこかで自分や仲間たちが死ぬわけがないと、自惚れていたのかもしれない。

「あんた達からしたらあたしは半端なんでしょうね…………」

故郷を捨て切ることもできず二束三文のミラを送って自己満足を満たしているだけの愚かな女…………

そんなあたしが故郷のために本気で戦おうとしているあんた達に意見を言うのは間違ってるんでしょうね」

「我ながら愚かな道だということとは理解している……」

だが例え人の道を踏み外したとしても、これ以上私たちはこの26年を繰り返すわけにはいかない……」

だからこそ手に入れるのだ……理想を実現するために必要な力を」
「力の行使は否定しない。帝国だって決して綺麗なだけの国じゃないのは分かっているから。でもね——」

サラは息を深く吸い込み、その身に紫電を纏わせた。

「何の関係もない人々に『塩の呪い』を振り撒く非道を働くのは元遊撃士として、いえ人としても見過ごすわけにはいかない……」

それにこの子達の担当教官として情けない姿をこれ以上見せるわけにはいかないのよ」

「そうか……残念だよ」

サラの拒否をシャトラールは目を伏せて受け入れる。

「ならば君はもはや私の障害ということになる」

その言葉に場の空気の緊張が一気に張り詰める。が、彼が剣を抜くよりも速くサラが動いた。

「サラ教官っ!?!」

雷となったサラは一瞬で階上に佇むシャトラールの目の前に移動してブレードを振り被る。

「あんたさえ倒せば——」

「ふっ……20点、落第だな」

無造作に構えた腕でサラのブレードを受け止めたシャトラールは不敵な笑みを浮かべる。

「——今の手応え……シャトラール。あんたまさか——」

「クレド、ここにはもう用はない。行くぞ」

「は……だから言っただる時間の無駄になるってな」

ラインに剣を突き付けていたクレドはシャトラールの呼ぶ声に応じて、飛んで彼の下へと戻る。

「私たちはこれより『始まりの場所』で『塩の杭』の錬成を行う。止

めたければ追って来るが良い」

「馬鹿言ってんじゃないわよ。あんたたちはここであたしが倒す」

「それは無理と言うものだよ」

シャトラールの言葉に応じるようにそれは広間の高い天井から降って来る。

「あ、あれもガーゴイルなの!？」

「なんて大ききヴァリマールよりも大きい?」

周囲を埋め尽くす群れのガーゴイルとは比べものにならない程に巨大なガーゴイルの登場に一同は息を呑む。

「シャトラール……あんたこんなものまで」

「龍神兵《ソル・ガルヴァ》……暗黒時代の錬金術師が造り出したときれるゴーレムの一種さ」

「シャトラール様、クレド様、乗ってください」

龍神兵の肩に乗った少女が二人を促し、それに応じて二人は龍神兵の手の上に乗る。

「待ちなさい」

「ああ、《始まりの場所》で待っているよ。そこにはアプリリス達もいるから我ら全員で歓迎しよう」

「クカカ、オレたちを止めなければ殺す気で来るんだな」

「ごめんなさいサラ先輩、でもこうするしか私たちには時間が——」

「余計なこととは言わなくて良い。それよりも」

謝ろうとする少女の言葉をシャトラールは遮って、促す。

「は、はい。申し訳ありません。ソル」

恐縮したように少女は謝って龍神兵の名を呼ぶと、それに呼応して龍神兵は翼を広げて上昇する。

「くっ……」

上昇していく龍神兵をサラは悔しそうに睨み付けることしかできなかった。

だが、そんなことをしていると階下にひしめき合っていたガーゴイルたちが一斉に咆哮を上げた。

「まさか——」

慌てて下を見ると、それまで威嚇するだけだったガーゴイルの群れが一齐にクリス達に襲い掛かる。

「ちっ……」

サラは舌打ちをして階上から身を投げ出し、すでにリインとファイが駆け回っている戦場に参戦した。

・
*

8月23日月曜日。9：00。

かつて災厄が現れたその場所に、その日再び『塩の杭』が現れた。

74話 塩の大地Ⅶ

「あのダメ教師っ！」

ハリアスク基地の地下に存在する最も頑強な特別監房にアリサの叫び声が木霊する。

《ARCU》の文字盤のかすかな光が照らす鉄扉を叩くが、びくともしないことにアリサは苛立ちを募らせる。

「やられたね」

狭い室内で余計に大きく感じるアリサの叫びを耳を塞いでやり過ぎ、フィーもそれに同調して閉じ込められた部屋の壁を叩いてみる。

「ん……爆破は無理そう。まあ爆薬を使ってもわたし達が隠れられないから意味ないけど、リインの力でも無理？」

「流石にな。それに手がこれだと本気で技を使うわけにもいかないからな」

肩を竦めながらリインが視線を下ろすのは自分の左腕。

そこには武骨な手枷が嵌められ、逆側にはアリサの右腕が嵌っている。

サラに隙をつかれて嵌められ、アリサ越しに押し込まれて、リインは呆気なくサラの目論見通りに牢屋に押し込まれることになった。

「いったいサラ教官は僕達をこんなところに閉じ込めてどうするつもりなのかな？」

まさか僕達が知らない間に向こうの人達と取引をしていたんじゃないか……」

「いや……それはないだろ。おそらく——」

不安に震えた言葉を漏らすエリオットにリインはサラの考えを説明しようとして——

『あーテストス。聞こえてるあんた達？』

暗くて狭い牢獄の中に当のサラの声が《ARCU》から流れる。

「サラ教官っ！ これはいったいどういうことですか!？」

声を張り上げて抗議するアリサだったが、続いて聞こえて来たサラの言葉に無意味だおどけた声が返って来て眦を上げる。

『ま、窮屈な思いをさせて悪いけど、あんた達はそこでちよつと待つてなさい』

「サラ教官……まさか一人で行くつもり？」

「そんなさつきはちゃんと僕達の同行を認めてくれたのに」

クリスとエリオットがそれに続くが、サラはその通りだと頷く。

『状況が変わったのよ……』

シャトラールが言っていた「始まりの場所」っていう「塩の杭」が現れた場所よ……

そこは禁足地として七耀教会に指定され、人が踏み込めば今でも「塩化」させられる危険な場所よ』

「それはそうかもしれませんが、だからって——」

『そんな生還の可能性が低い場所にあんた達を連れて行けるわけないでしょ。自分たちの立場をちゃんと考えなさい……』

あんた達の命はこんなところで安く売りして良いものじゃないのよ』

「それを言ったらサラ教官だって同じのはずです」

『これはあたしの身内が仕出かしたことよ。なら止めるのはあたしの役目よ』

「だからって、一人で行って教官に何ができるって言うんですか？」

他のみんなはともかく、塩化に耐性がある俺をアリサに縛り付けてまで教官が一人で行く必要はないはずですよ」

『それは慢心よりイン。『塩の杭』の力から生き残った経験があるからって次も大丈夫なんて保障なんてないでしょ？』

それに、だからこそ貴方は『塩の杭』の対抗手段として残るべきなのよ』

「それは……」

『リベールの時と同じよ。貴方にはここで戦わなければいけない『根拠』はないでしょ？ 貴方の命の懸け所はこんな所じゃないはずよ』

その言葉にリインはルフィナに以前言われた言葉を思い出す。

——誰彼かまわず背負い込んで一番気に掛けているあの子の手を掴めなくなっても良いの?——

『貴方が退けば、クリス達もそれに従うでしょ? それとも君はクリス達を“あの子”の二の舞にするつもり?』

「つ……」

『貴方達がやるべきことはあたしと一緒に特攻をするんじゃないで、この“人災”を帝国に伝えることよ……』

『勝手なことを言わないで下さい。そもそも人を閉じ込めておいて何を言っているんですか?』

『その達人用の特別監房でも貴方なら時間を掛ければ破れるでしょ?』

「人を何だと思っているんですか? それにヨシユアさんみたいなことはしないで下さいって言ったはずですよ」

『言ったでしょ状況が違うって、死ぬことを厭わなければまだ“塩の杭”を使うことを止められるかもしれない……』

「ここから先は進めば死ぬ。これは比喻でも何でもない。さつきも言ったけど貴方達はここであたしの意地に付き合う必要はないのよ」

『だったら教官も私たちと一緒に帝国に戻りましょうっ!』

「そうですよ。サラ教官が一人で行かなくても良いじゃないですか!」

「帝国政府に軍を出してもらいましょう。サラ教官が辿り着ける可能性が低いんですからそっちの方が合理的なはずですよ!」

「リンでは止められないと悟ったのか、アリサとエリオット、そしてクリスが声を上げて引き留める。」

『短い間だったけど、あんた達の教官をやれて楽しかったわ……』

「あんた達のこれからを見守れないのはちよつと心残りだったけど、あたしがいなくてもあんたたちは自分の進む道くらいちゃんと見つけられるでしょ?」

「が、サラは苦笑した気配を返して別れの言葉を言い始める。」

「待ちなさいサラ教官! 待ってって言っているでしょ! 話を聞きなさい!」

「考え直してくださいサラ教官！」

「サラ教官っ！」

『それじゃ……元気でね』

アリサ達の言葉を無視し、サラは最後に一言を残して通信を一方的に切ってしまった。

「っ……リイン！ 貴方ならこんな手枷くらい簡単に斬れるでしょ!？」

「無茶言わないでくれ、こんな体勢でしかも手元で『斬鉄』をするなんて流石に無理だ」

「だったらダイーン——」

「ダメだアリサ。それをこんなところで呼び出したらみんな押し潰されるぞ」

戦術殻を呼び出そうとしたアリサの口をリインは慌てて塞ぐ。

「むぐ……」

「でもこのままサラ教官を行かせて良いの？」

エリオットの言葉にリインは押し黙る。

「そうよ！ このままサラ教官を一人で行かせたら——」

「だけどわたし達が行っても無駄死にが増えるだけ」

興奮して捲し立てるアリサの言葉を遮ってフィーが冷静な言葉を投げかける。

「無駄死について私たちだってちゃんと戦えていたじゃない」

「そこじゃない。禁足地に入ればわたし達も『塩化病』に侵される可能性が高い……」

サラを助けに行ってわたし達が不治の病をもらうのは割に合わない」

「だからって見殺しにするの!？」

「アリサ、怒鳴らないでうるさい」

顔をしかめてフィーは耳を塞ぎ、その場に座り込む。

そんなフィーの態度にアリサは矛先をリインへと変えた。

「っ……リインも同じ考えだって言うの!？」

アリサの言葉にリインは内心を押し殺して答える。

「……サラさんの言い分は間違っていない」

フィーは合理的に割り切ってしまったているが、他の三人は感情的になつて暴走しようとしている。

だからこそ、例え憎まれ役になることになつてもリインは冷静に皆を無事に帰すことに努める。

「サラさんには命を懸けるだけの理由がノーザンブリアにある。それに対して俺達にはここで無理を押し通す『根拠』はない」

浮遊都市に乗り込むのとは違い、常人なら近付くだけで死の病に侵される禁断の地。

「それにノーザンブリアが領土拡大戦争を仕掛けることを決めたとしても、それを俺達が口を挟むことは内政干渉になる」

遊撃士の価値観から考えてもノーザンブリアの行為そのものを止める資格はリイン達にはない。

「サラ教官の言う通り、俺達が『塩の杭』の存在を帝国にいち早く知らせるかで損害は大きく変わる……誰かがやらなければいけないことだ」

憤りを押し殺してリインは自分達がすべきことを口にする。

「サラ教官を見殺しにするって言うの？」

「……………そうだ」

「——つ……最低、貴方がそんな薄情な人だと思わなかつたわ」

「そうだな」

アリサの罵倒を甘んじて受け入れる。

「でもリイン——」

「何よりも俺達の中には身分を隠したやんごとなき御方がいるんだ。そんな人を連れて行くわけにはいかないだろ」

何かを言おうとしたエリオットにリインはそれを指摘して黙らせる。

「僕の事はそういう風に扱わない約束だったはずですけど」

「限度がある。浮遊都市に突入するのは違うんだ、弁えろ」

言い返して来たクリスをリインは無情な言葉で切り捨てる。

本来ならクリスとして扱うが、流石に死地への無謀な突撃まで見過

「ごすことはできない。」

「フィーもそれで良いな？」

「ん、特に文句はないかな」

フィーは特に反論せずリインの意見を受け入れる。

「アリサだつて君が死んだら悲しむ人がいるだろ？」

「いないわよそんな人」

リインの指摘にアリサは即答を返す。

「いないことはないだろ。イリーナさんやシャロンさんだつてアリサが死んだら悲しむはずだ」

「どうだか、あの人のことだから『そう……』の一言で済ませるに決まっているわよ」

「そうかもしれないけど、だからってそれだけであの人の本心が分かるわけじゃないだろ？」

「リインにあの人の何が分かるって言うのよ？ 母様の冷血ぶりは私が一番よく知っているんだから」

「それはいくらなんでも言い過ぎだ」

「リインは知らないからそんなこと言えるのよ！ どうせあの人は父様が死んだ時だつて何も感じてなかったに決まってる！」

「アリサ……」

「いつそうここで私が死ねば少しは——」

「アリサッ！」

ヤケになったように思考を飛躍させるアリサにリインは一喝して発言を止める。

「ラインフォルトの家庭環境が複雑なことは分かっているけど、言つて良いことと悪いことがあるだろ」

「何も知らないくせに……」

私はもう母様に何の期待もしないって決めたの、シャロンだつて腹の底では何考えているのか分からないんだから信用できるはずないでしょ」

「何を言っているんだ？ アリサらしくない」

あまりにらしくないアリサの物言いにリインは困惑する。が、アリ

サはそんなリインの眩きに眦を上げる。

「何よそれ？ 貴方が私の何を分かるって言うの？」

「それは……」

「ただのクラスメイトの貴方が私の何を分かってくれて言うのよ！？」

「アリサ……？」

痲癩を起すアリサの様子に違和感を覚えてクリスが呼び掛け、肩を掴む。

「触らないでっ！」

アリサはその腕を振り払い、頭を抱えるようにして続ける。

「私の事を分かってくれるのは母様でもシャロンでも貴方でもないわ……」

「そうよ……私の事を本当に分かってくれるのは……あの人だけなんだから」

「アリサ……」

拒絶されたクリスは呆然とした様子で彼女の名前を眩くが、アリサの耳には届いていないのか澱んだ眼差しをリインに向ける。

「良いわよ……貴方がやらないなら貴方ができないことを私がやってみせるわ！」

「……勝手にしろ」

リインは投げ槍に言い捨てると、その場に座り込む。

手枷で繋がれたアリサは必然的に半身を傾けることになるが、そんな自分にアリサは苛立ちそれを呼ぶ。

「ダインスレイヴ」

「アリサ——むぎゅ」

「わわっ」

「はあ……」

その呼び声に戦術殻が現れるが、狭い監房が突然現れた戦術殻に圧迫され一同は身動きできなくなる。

「何をやっているんだ。早く戻すんだ」

位置的にアリサから体を押し付けられることになったリインは動

揺を示さずに促す。

「ぐぬぬ……ダインスレイヴ」

アリサの言葉に反応して現れた戦術殻はその場から消え去る。

背中を押されていた力から解放されたアリサは、いつかのように胸をリインの顔に押し付けてしまい慌てて距離を取ろうとして体を離す。

が、繋がれた手枷のせいであれに失敗して改めてリインに覆い被さる。

「一応言わせてもらうが、今回は謝らないぞ」

「わ、分かっているわよっ！」

精一杯の虚勢を張ってアリサは冷静なリインに言い返すのだった。

・
*

狭い監房に膝をつき合わせて座る一同の空気は最悪だった。

クリスやアリサ、それにエリオットが何度もサラを追い駆けるべきだと言葉を変えて主張してもリインは頑として聞かず静かにそれぞれの主張を論破していく。

そして説得に三人が疲れて沈黙が監房に満ち、それまで黙っていたファイが質問をする。

「そもそもリインは本当にこの鉄扉を破れるの？」

「どうだろう？ やってみないと分からないな。そのために今は闘気をじっくりと練り上げているところだけど」

「試すつもりはあるんだ」

リインのできないと言わない答えに半ば呆れる気持ちでファイが納得する。

「ねえファイ。君はサラ教官が一人で行くの止めようとは思わないのかい？ この中ではリインさんと同じくらい付き合いは長いはずだよね？」

クリスは一縷の望みを託すつもりでファイに話を振る。

「別に……確かにサラにはいろいろ借りが多いけど、だからこそサラ

の意志を尊重するつもりだけど」

「でもサラ教官は一人で死に行くようなものなのよ。敵だつて多いんだから私たちにだってできることはあると思うんだけど」

その会話の中にアリサが口を挟む。

「リインがさつきから言っているけど、そのために死病に侵されるのは割に合わない」

「で、でも『塩化病』が流行ったのは26年前なんですよ？」

「だから何？　もしかして自分たちは運良く大丈夫なんて思っているの？　それはノーザンブリアを甘く見過ぎ」

「っ……」

フィーの歯に衣着せぬ物言いにアリサとクリスは押し黙る。

「だけどリインさんが一緒なら——」

「そのリインが無理だつて判断しているのにどうして駄々を捏ねるの？」

フィーの純粹な眼差しにアリサ達は今度こそ黙り、その判断を受け入れるしかなかった。

「僕達は……サラ教官を見殺しにするしかないのか」

悔しそうに呟くクリスの言葉に応える者は誰もおらず監房に沈黙が流れ——唐突に大きな音が響いた。

「何の音？」

「扉のロックが開いた？」

不安そうな声をもらしたエリオットの呟きにリインは警戒心を上げて立ち上がる。

そうしている間に重い音が次々と鳴り響き、幾重のロックが外されて重く厚い鉄の扉がゆつくりと開く。

「お迎えに上がりましたお嬢様」

開いた鉄扉の先にはにこやかな笑顔を浮かべたメイドがいた。

「シャ、シャ、シャ、……シャロンッ!?　ど、どうしてここに!?!」

「それはもうひとえにお嬢様への『愛』が為せる技です……」

このシャロン。お嬢様のためなら例え火の中、水の中、どこへでも馳せ参じましょう」

一瞬偽物を疑ったが、まさしくシャロンの言動にアリサは思わず閉口する。

「まあ良いわ……ある意味丁度いい所に来てくれたわ……」

早速で悪いんだけど、これをどうにかしてくれないかしら？」

アリサはシャロンにリインと繋がっている手枷を見せる。

「あらあらあら」

それを見てシャロンは目を輝かせるが、次の瞬間にはそれを隠して謝罪する。

「申し訳ございませんお嬢様、その枷の鍵は特殊な仕様なのでここで外すのは難しいでしょう……」

ところで皆さま、外が大変なことになっておりますので急いでここから出ましょう」

「それって……」

「まさか『塩の杭』がもう……」

エリオット達は思わず戦慄するが、それを気にせずシャロンはリインに迫る。

「ですのでリイン様、ここはお嬢様を抱えて——具体的にはお姫様抱っこでお嬢様を運んでいただけませんかでしょうか？」

「シャ、シャロン!? 貴女いきなり何を言っているのよ!?!」

とんでもないことを言い出したシャロンにアリサはこれまでで最大の声量で反論するのだった。

こうしてサラから大幅に遅れてⅦ組B班はハリアスク基地から脱出するのだった。

・*

「いつそう殺して……」

ダンデリオンに戻り、シャロンによって手枷を外してもらったアリサは顔を赤面させて身悶えていた。

「そう……シャトラール達はそこまで思い詰めていたのね」

リイン達が見て来たものをシャンテに報告すると、彼は嘆く様にた

め息を吐く。

「サラ教官はこちらに顔を出していませんか？」

「ええ、こつちには来てないわ。きつと直接あの場所に行ったんでしようね」

「やつぱり……」

「リイン君達が閉じ込められていた時間から察すると、もうさつちゃんは禁足地に入ってしまったでしょうね」

「シヤンテさん。『禁足地』というのはそれほど危険なものなんですか？」

クリスの質問にシヤンテは頷く。

「ええ、禁足地は七耀教会が定めた当時最も塩化が激しかった場所ですね……」

今でも不用意に踏み込めば人は塩にされてしまう危険な場所なの

「そんな場所にサラ教官は……」

「追い駆けるつもりならやめなさい……」

普通の土地なら安全は保障されているけど、禁足地は今言った通り

——つ……」

忠告の言葉を不意に止めてシヤンテは胸を抑えて蹲る。

「シヤンテさん!？」

「だ、大丈夫……どうやら始まったみたいね」

苦し気な声でシヤンテが応えると彼の身体にほのかな光が宿ると、それはシヤンテの身体を離れて足元の地面に吸い込まれるように消えた。

「今のはいったい……?」

「あ……みんな窓の外!」

エリオットの叫びで外を見れば、雲を衝くがごとき白き巨柱が遠い大地からそそり立っていた。

「ねえ、見て。街の人達が」

アリサが指したのは同じく外。

道を歩いていた市民たちは先程のシヤンテと同じように苦し気に次々に倒れて体から光を抜け出ていく。

「……………シヤンテさん、ちゃんと説明してもらえますか？ 貴方はシヤトラールさん達の仲間ですよね？」

「あら、気付いちやった？ 流石さっちゃんの教え子ね」
「誤魔化すことなくシヤンテはリインの指摘を肯定する。」

「リインさん、それはどういうことですか？」

「俺はシヤトラールさんに帝国への宣戦布告が目的だと言ったけど、さっきの光景を見るに別の目的も——」

「シヤンテさんっ！ ティアさんは来ていませんか!？」

リインの説明を遮って、大きな声を上げて店に入って来たのは小さな女の子を背負ったヴァレリーだった。

熱病に侵されたように苦しそうにしている女の子もだが、ヴァレリーの方も体調を崩しているのか顔色は良くない。

そしてその様子は今のシヤンテと同じだった。

「ヴァレリーちゃん、落ち着いて——」

「ティアさんが起きたらいなかつたみたいで、マヤちゃんを頼むって手紙だけが残っていて……………それでそれで……………っ——」

「大丈夫か？」

苦しそうに体を傾けるヴァレリーを女の子ごとリインが支える。

「シヤンテさん……………」

余程慌てているのか、リインに体を支えてもらいながらもヴァレリーはシヤンテに詰め寄ろうとする。

そんな彼女にシヤンテは目を伏せて首を横に振る。

「ティアちゃんはもうここにはいないわ」

「いないって……………それじゃあどこに？」

「あの子は最後の命を使いに行つたわ」

「それはどういう意味ですか？」

「あう……………」

ヴァレリーの言葉に同調するように彼女の背中にいる女の子もシヤンテに声を上げて説明を求める。

彼女たちに偽るつもりはないのか、シヤンテは包み隠さず真実を二人に告げる。

「貴女達も外の『塩の杭』を見たでしょ？」

あれはね、ノーザンブリアに住んでいる全員の『塩化病』をまとめ上げて錬成したものの……

この儀式が完遂すれば貴女達はもう『塩化病』で苦しむことはないわ」

「え……それって……」

「『塩の杭』は帝国への宣戦布告のために錬成するんじゃないんですか？」

「それは建前よ」

意外な答えにエリオットとクリスは目を丸くする。

「例えノーザンブリアから『塩化病』をなくすためだとしても周辺諸国が『塩の杭』を錬成することを認めるはずがない……」

かと言って秘密裏に行える小さな儀式ではなかったし、儀式を行えば他国からの非難は避けられない……

だから『帝国への領土拡大戦争』を名目にしたのよ」

「でもそれじゃあ本末転倒じゃないですか？」

シヤンテが語る新たな真実にクリスは困惑する。

『塩の杭』の錬成を強行する理由が必要なのは分かっていたが、例えふりでもそれを使って戦争を仕掛けたとなれば非難は免れない。

「ええそうよ……シヤトラール達はノーザンブリアを滅ぼすつもりだから」

「ノーザンブリアを滅ぼす？」

「そんないったいどうして？」

「今のノーザンブリアは君達が思っている以上に腐ってしまっているのよ……」

『北の猟兵』による支援を当たり前と考えてしまっていること、怪しげな犯罪組織を匿っていること……

六年くらい前まではある宗教団体に人身売買をしていたらしいわね……

そして『北の猟兵』が外で血を流して稼いで来てくれた外貨を横領して私腹を肥やす議員たちも現れてしまった」

「そんな……」

シヤンテが語るノーザンブリアの裏側にクリス達は絶句する。

「みんなはバレストイン先生が亡くなった時に気付いちやったのよ……」

このままではアタシ達の『英雄』はノーザンブリアの民衆に殺されてしまうって……

バレストイン先生のようにさっちゃんやがっちゃんが死ぬ時がいつかやって来る……

その前に『北の猟兵』をノーザンブリアから解放させるべきだと考えたの」

「そのために帝国に併合されるのも辞さないって言うんですか？」

「この国で面倒だったことは26年前にバルムント大公を蹴落として議会を設立させた現議員たちなのよ……」

彼らは『北の猟兵』と同じくらいに市民に英雄視されていて、いくら裏であくどいことをしていてももみ消せる権力を持っていた……

そんな彼らを権力の椅子から引きずり下ろすために帝国を利用させてもらうことにしたのよ」

「それじゃあサラ教官を嫉けたのは……」

「さっちゃんの役目は暴走した愚民の代表であるシャトラー達を殺すこと、そうすることでさっちゃんに帝国での発言権を持たせて残されたノーザンブリアの人々を守ってもらうつもりよ」

「そんな……サラ教官に友達を殺せって言うことですか!？」

「ひどい……」

「アタシ達は生きるために外の人達の血をたくさん流させた……これはその報いなのよ」

悟り切ったシヤンテの眼差しにクリス達はそれ以上の言葉が出て来なかった。

シャトラー達達の計画は要約すれば盛大な心中自殺。

ノーザンブリアの負の面を生贄にして、サラを英雄に仕立て上げる壮大な計画。

自分達が慌てて彼女を追い駆ける理由も戦う理由もなくなっ

まい、肩透かしをくらったように途端に気持ちが悪えてしまった。

「あの……そんなことよりもティアさんは？」

押し黙るⅦ組一同を他所にヴァレリーがその問いを繰り返す。

「その話が本当ならティアさんの『塩化病』も治るはずですよね？」

「……………」

その問いにシャンテは目を伏せて沈黙を返す。

「あう……………」

そんなシャンテの足に女の子が弱々しく縋りつく。

「シャンテさん……………」

「……………安心して貴女の事はティアちゃんから任されているから膝を着いてシャンテは女の子に安心させるように笑いかける。

しかし、女の子は後退ると踵を返して駆け出した。

「マヤちゃん!？」

制止の声を無視して女の子は店の外へと出て行ってしまふ。

ヴァレリーが女の子の突然の行動に驚き慌てて店の外に出る。

女の子は現れた『塩の杭』に向かって駆け出して——転んだ。

「あう……………あう……………」

女の子はすぐに立ち上がろうともがくが、身体から『塩化』が抜け出た負担のせいなのかうまく立ち上がることはできなかつた。

「マヤ……………やめて……………ティアさんはきつともう……………」

追い付いたヴァレリーは背中から女の子を抱き締めて言い聞かせる。

「あうあうあう」

女の子はヴァレリーの抱擁に力の弱い抵抗をする。

「あうあう……………」

涙を目に浮かべて遠く離れた『塩の杭』に手を伸ばす女の子は何を思っているのか。

「……………ねえリイン」

部外者のアリサでも簡単に想像できる。

ティアがどの勢力に属していて、何をしているのか、そしてその結末も。

既にアリサの気は抜け、先程まで燃えていた気持ちは茶番だったことを知って消沈してしまった。

しかし、それでも泣く女の子に遣る瀬無い気持ちを抱いてアリサは振り返る。が、そこにリインはいなかった。

「あれ……？」

首を傾げてリインの姿を探すと、すぐに見つかった。

「大丈夫だ。ティアさんは俺が連れて来てあげるから」

いつの間にかリインは女の子の前に膝を着いてあやす様に頭を撫でていた。

「あう……？」

「ああ、本当だ。シャロンさん」

涙目で訴える女の子にリインは笑いかけて、メイドの名を呼ぶ。

「こちらが『塩化病』の拮抗薬になります……」

ノーザンブリアに流通しているものと比べて強力になっていますので服用すれば六時間ほど禁足地でも問題なく行動できます」

音もなくシャロンがリインの背後に現れると、瓶に入った白い錠剤を差し出した。

「ありがとうございますシャロンさん」

当然のようにリインはそれを受け取って、立ち上がるとアリサ達に向き直る。

「アリサ達はこのまま帝国に戻って今の話を伝えてくれ」

「な、何言ってるのよ!? さっきは散々サラ教官を追い駆けることに反対していたくせに！」

「まあ、そうなんだけど……」

リインは頬を掻き、言い訳する。

「シャロンさんが薬を持って来てくれた事もあるけど、俺に戦う『根拠』ができたからかな」

「根拠って……」

「たくさん考えて、たくさん悩んだ……」

ルフィナさんに言われた通り、俺の手で守れる者には限度がある……

だから俺とは何の関係もないノーザンブリアの人達は俺が助けるべきじゃない……

シャトラールさん達はちゃんと自分達で決められる人だから、あの人の意志を尊重するなら俺は手を貸すべきじゃないと思った。だけど——」

リインは振り返って女の子を伺い見る。

「泣いている女の子を見捨てることは俺にはできそうにない」

「……………何よそれ。全然意味が分かんないんだけど」

自分勝手なリインの物言い、初めて見たと思えるリインの穏やかな笑みにアリサは何故か直視できずに顔を背けてしまう。

「クリス達はさつき決めた様に先に帝国に——」

「その事ですけどリインさん僕も一緒に行きます」

「クリス。いくら薬があつてリスクが減ったとしても君は——」

「お言葉ですけど、リインさんはこれから全てを救いに行くつもりですよね？ だったら僕は役に立ちますよ」

リインの拒絶を遮ってクリスはそう言い切った。

「それならわたしも。死病のリスクが減ったならやられた分をやり返したい。リインのおまけの雑魚扱いは納得いかない」

そしてクリスに便乗してフィーもこれまで抑え込んで来た欲求を口にする。

「フィーまで……………」

「アリサとエリオットはどうする？ まだサラ教官を助けに行きたい？」

「それは……………」

クリスに話を振られてアリサとエリオットは思わず口ごもる。

「だいたいここまで人を好き勝手に利用して振り回しておいて、逃げ帰るなんて二人は納得できるの？」

焚きつけるようなクリスの言葉にエリオットとアリサは今日までのノーザンブリアでの出来事を振り返り、顔をしかめた。

「なんか思い出したらムカムカしてきた」

「そうよね。何で私達はこんな目に合わないといけなかったのかし

ら」

普段温厚なエリオットまで、ノーザンブリアからされた様々な理不尽な仕打ちに剣呑な眩きをもらす。

「そうよね。サラ教官も含めてちよつとやり返したって良いわよね」

「そうそう。だからここは僕達が全部を救ってみんなを見返して上げようじゃないか」

「おいクリス——」

「リインさんも、ですよ……」

さつき言っていましたよね。リインさんの手で守れる人には限度があるって……

なら、リインさんが届かない部分は僕達が補ってみせます」

「クリス……」

「今はまだ兄上くらいに頼れる力はないですけど、そこに行くための道を閉ざすことだけはしないで下さい……」

それが僕の「根拠」です。それとも僕達はそこまで頼りないですか?」

はつきりと言い切り、最後に不安そうに窺ってくるクリスにリインはため息を吐く。

「そこまで言われたら、止められないだろ」

いつの間にかそこまで言えるようになっていたクリスにリインは折れる。

未熟であつても前を向かなければいけない気持ちはリインは良く分かってるから、クリスの「根拠」を否定することはできない。

何より、自分を補ってくれるという言葉はリインの心を動かした。

「それじゃあ……」

認めてくれたリインにクリスは拳を握って喜び、振り返る。

「トールズ士官学院、VII組B班——」

これよりノーザンブリアの「異変」に介入する……

悲劇に泥酔している馬鹿たちを一人残らずぶん殴って、みんなを救ってみせよう！」

『おおっ!』

クリスの号令にⅦ組B班は声を揃えて応じた。

75話 塩の大地Ⅷ

「っ……」

ずれたマフラーを口元に直しながらサラは塩が降り積もって固まった道を全力で駆ける。

次の瞬間、サラの左右に衝撃波が通り過ぎ、背後の辛うじて原型を保っていた家屋が粉碎された。

「紫電一閃っ！」

鋭い爪から繰り出された五条の衝撃波の隙間を掻い潜って接近したサラは雷輪を巨大なガーゴイルの足に向けて放つ。

「鳴神っ！」

同時に雷の闘気を込めた弾丸を連射する。

大型魔獣と戦うセオリーとしてまずは足元を崩すために攻撃を集中させる。

「ソルッ！」

龍神兵の肩に乗る少女が指示を出すような号令を出すと、龍神兵は翼を広げて風を巻き起こし接近したサラを吹き飛ばす。

「くっ」

塩を含む風に突き飛ばされ、せつかく詰めた距離を無駄にされサラは歯噛みする。

「無駄ですサラ先輩。ソルは私達の最高戦力です。貴女には倒せません」

「言ってくれるじゃない新兵の分際で」

偉そうに自慢する少女にサラは苛立ちを感じながら言葉を返す。

「あんたはシャトラール達は何をしようとしているか分かっているの!？」

「もちろん分かっています」

「帝国に喧嘩を売って本気で勝てるつもりだって言うの!？」

「そのためのこの子と“塩の杭”です」

少女は背後の壁とも思える巨大な「塩の杭」を一瞥して答える。

「……ふざけんじゃないわよ」

嘆く様に押し殺すようにサラは躊躇わずに言い切られた答えに反論を絞り出す。

「戦争を仕掛ける……「塩の杭」を使う……どれだけの悲劇が生まれるか分からないって言うの？」

「私も志願兵です。煉獄に堕ちる覚悟はもうとつくにできています……」

サラ先輩だって、その覚悟があつたから「北の猟兵」に参加したはずです」

「それは……」

「ノーザンブリアはもう限界なんです。貧困の問題だけじゃありません……」

「塩化病」という死病が少しずつ広がっているこの大地で、もうみんなは生きる希望を失っている。だから私たちは立ち上がらないといけないんです」

言い淀むサラに少女は捲し立てる。

「サラ先輩はこのままノーザンブリアのみんなに滅びを受け入れろって言うんですか!？」

先達のこれまでの戦いを貴女は否定するんですか!？」

「そうやって血と硝煙にまみれたミラで生き永らえても行き着く先は滅びよ」

「ノーザンブリアはそうやって生き永らえて来た。これからも、この先も。もうそれ以外の方法を選ぶなんてできません！」

頑なな態度に思い出すのはサラが団を抜けようとした時の事。

引き留める同期。志を失った落伍者と後輩に罵られた。

「それでも私は——」

「安心してください。「塩の杭」は示威行為にしか使うつもりはありません……」

「このソルがあれば、どんな軍隊でも一網打尽にできます」
「……大した自信ね」

「はい。大きさはそれだけで力です……」

大型魔獣でもここまで大きいものは滅多に現れませんし、この子の飛行能力なら飛行艇にだって負けません」

「確かにそうだけど……」

情報が古いとサラは少しだけ呆れる。

龍神兵《ソル・ガルヴァ》は確かに魔獣と比べれば遥かに大きな体躯を持ち、独自の導力魔法に似た能力も有してその戦闘力は既存の戦車や飛行艇を凌駕している。

しかし、今の帝国には残念なこととその巨大な魔物に対抗できる“力”が存在している。

「その証拠にあの『紫電』と呼ばれたサラ先輩をこうして圧倒出来ているのが何よりの証拠です」

しかしサラの心情を知らずに少女は勝ち誇る。

「慢心が過ぎるわよ……」

小さくサラは呟く。

とてもではないが龍神兵が騎神に勝てる姿を想像することはできない。

ほとんど人間と変わらない動きをする騎神と比べてしまえば龍神兵の動きは遅い。

躯体そのものの差もあるだろうが、操者である少女の練度もリインと比べてしまえば多くの部分で劣っている。

それに何度か攻撃を仕掛け、サラの中ではすでに攻略方法を一つ見つけている。

——隙だらけなのよね……

剥き出しの操縦者である少女を見ながらサラは何とも言えない気分ですら考える。

サラが気付かない防御結界でも用意しているのかもしれないが、それにしてはこうして話している最中に導力銃を動かしてみても警戒する素振りはない。

——倒すのは簡単だけど……

左手に握った導力銃に視線を落として考える。

遊撃士になった時から導力銃の出力は絞って殺傷能力は抑えてある。

せいぜい自分が殴ったくらい衝撃を与えるだけの威力だが当てることは容易い。

しかし、下手に当たって落ちれば下がいくら塩が降り積もった地面と言っても最悪死に至るには十分な高さがある。

「そ、それにしてもあの『紫電』がこの程度だったんですね」

「生憎だけど挑発に乗るつもりはないわよ」

「悪いことは言いません。ノーザンブリアのことは私達に任せて貴方は帝国に帰ってください」

「はい、そうですね。退くわけにはいかないのよ」

「意地を張っても貴女はソルに勝てません。遊撃士なんかになって人殺しができなくなって日和った貴女にいったい何が護れるって言うんですか!？」

「っ——」

少女の指摘にサラは思わず息を呑む。

「儀式が完了するまであと三時間、絶対にここを通すわけにはいきません」

「三時間……」

少女が漏らしたタイムリミットにサラは目を伏せる。

あと三時間。

悠長に戦い方を選んでいいる時間などないと突き付けられた気持ちになる。

「……………それでもこんな愚行を見逃すわけにはいかないのよ」

「りよ、猟兵を引退したロートルは引っ込んでろ——です……………サラおばさん」

「あんっ!？」

申し訳なさそうに最後に付け加えられた言葉にサラは目に力を込めてリーザを睨む。

「ひっ」

たったそれだけで居丈高な態度を取っていたリーザは竦み上がり、

龍神兵に縋りつく。

「随分と生意気な口を叩くじゃない後輩」

殺さないで無力化を考えていた思考は一瞬で彼方へと飛び去った。
「ええ、そうよね。今この時に至ってまだあんた達を殺さずに説得しようとしていたあたしが甘かったわ」

“塩の杭”を実際に錬成させたこと。

そこから察することができるとシャトラール達の本気度。

サラはまだ心のどこかで説得できると考えていた。

「あんたとクレド、シャトラール、そしてアプリリス……移動時間を考えて、ついでにそれ以外もいると考えれば三時間は短過ぎるわよね。それに——」

白く染まり始めている指先を一瞥して、サラはゆっくりと確かめるように導力銃のリミッターを外す。

それに伴い、意識もスイッチを変えるように“遊撃士”から“猟兵”へと切り替える。

「良いわ。特別に見せて上げるわ……これが“北の猟兵”サラ・バレスタインの《紫電》よ」

おもむろにサラは導力銃をあらぬ方向へ向けて引き金を引き、少女の視界から消えた。

「えっ——？」

一つ目の銃声が続いて二発、三発の銃声が鳴り響く。

そして次の瞬間、サラは十アージュはある龍神兵の肩——少女の目の前に現れた。

「ソ——」

「遅いっ！」

彼女が叫ぶより速くサラがブレードを一閃。

だが、彼女の叫びよりも速く動いていた龍神兵の手が少女を覆い隠す様にサラのブレードから彼女を守る。

「ちっ——」

舌打ちするサラに龍神兵はもう一方の手で拳を作りサラに向けて振る。

空中にいるサラにはその一撃から逃れる術はないのだが、サラは焦らずに再び導力銃をあらぬ方向へと向けて銃撃をするとその場から消えた。

「こゝ、これが《紫電》の由来……」

龍神兵の指の隙間からかつては家屋だった塩の塊の上に着地したサラを見つけて少女は戦慄と共に眩く。

「大した技じゃないわよ。撃った弾に紐をつけて引っ張ってもらうだけの移動用の戦技よ」

サラはそれを示す様に導力銃を適当な方向に向けて撃つ。

銃声と同時にサラの姿が消えて、導力銃を向けた先にサラが現れる。

「本当に雷の速度で移動しているわけじゃないし。あたしを引っ張っているから弾速も結構落ちる。直線でしか動けない欠点だらけの技なんだけど——」

銃声が鳴る。

それも一発ではなく、立て続けに何発も。

少女の目に捉えることができたのは《紫電の道》の残光の軌跡だけ。

難なく少女の背後に現れたサラは恐ろしく冷めた目で彼女を見下ろす。

「あたしからは何人たりとも逃れられない」

「あつ……」

眼前で叩きつけられた殺気に少女はそれだけで腰を抜かす。

しかし同時に自分の役割を達したことに安堵する。

——やりました。第一段階クリアです……

自分を終わらせる刃に少女は取り乱すことなく受け入れようとする。しかし——

——やっぱり死ぬのは怖いよ……

そんな思考が唐突に過る。

遠からず自分が《塩》になって死ぬことは分かっていた。

それでなくても儀式が完遂すれば《怪人》となった自分がどうな

るかの保証もされてない。

むしろ“あの人”と同じ所に行けるならと“死”を望みさえしていた。

それでもせめて意味がある“死”を望み、この役割を貰った。しかし、いざその時になると恐怖が湧いて来る。

「……………リーザ姉さん、わたしは——」

思わず出て来てしまった素の自分の言葉。

だが、サラはそれを聞く素振りも見せずに凶刃を振り下ろし——少女が見れたのはそこまでだった。

「何をやっているんですかサラ教官！」

少女の視界を遮ったのは黒い髪の少年の背中。

「リイン、何であんたがここに!?!」

少女を背中に庇ってブレードを受け止めたリインにサラは目を見開く。

「俺の事はどうでも良いでしょ。それよりも今の一撃、本気で殺すつもりでしたね？」

「っ——ええ、そうよ。シャトラールもこいつも死んでも止まる気はないなら殺してでもあたしが止めてみせる。それが故郷を捨てたあたしのケジメなのよ。それよりも何で来たのよ」

リインの登場もあって冷徹な思考は一度鳴りを潜め、サラは彼の身体を気遣う。

この場は七耀教会が禁足地に指定した“塩化の中心地”。

しかも錬成された“塩の杭”の影響で自分でさえいつ“塩”になっっていないか分からない危険な場所。

すでにその兆候が出ているサラは例え今から退いたとしても、遠くない内に“塩”となる未来が待っている。

それに巻き込ませたくないと思ったからこそサラはリイン達を置いて来たというのに、自重して他のメンバーを抑えてくれると思っていたリインが真つ先に来るとはサラは思っていなかった。

「その事ですが、シャロンさんが持って来てくれた塩化病の拮抗薬を服用して来たから大丈夫です」

「へ……？ 拮抗薬？ あのクソメイドが来てる？」

龍神兵の上でするには場違いなことを言い出したリインにサラは虚を突かれて間の抜けた言葉を返す。

「よ、余計なことしないでくださいっ！ ソル！」

サラが再起動を果たすより先に我に返った少女が叫び、龍神兵は大きく動いてリインとサラを振り落とす。

「っ——」

「ちっ——」

十アージュ程の高さから落とされたリインとサラは危なげなく着地して、そこに一台の導力車が到着する。

「サラ教官——」

「あんた達まで……」

シャロンが運転する導力車から降りて来た生徒達にサラは思わず呆然とするが、すぐに気持ちを立て直してリインに向き直る。

「改めて聞くけど、これはどういうつもり？」

サラはリインの胸倉を掴み上げて続ける。

「分かってるの？ あんた達は『戦場』に足を踏み入れたのよ！

ここは軍人でも猟兵でもない、あんた達が来て良い場所じゃないのよ！」

「サラ教官……」

「クリスやアリサにも言いたいことはある……」

フィーもエリオットも危険だって分かっているのにどうして止めなかった？

それに何よりリイン……何であんたまで一緒になって暴走してるのよ!?!」

「サラ教官、実はシャロンさんが塩化病の——」

「拮抗薬のありなしじゃない！ あんたは“あの子”の死に何も学ばなかったって言うの!?!」

思いの丈を叫び、息を荒くするサラの言葉をリインは静かに受け止めて——

「……………ふざけるな」

次の瞬間、リインはサラの腕を乱暴に振り解いて、自分がされたようにサラの胸倉を掴み上げる。

「だから黙って『大切な人』が死に行くのを見送れって言うんですか!?

『それじゃ、元気でね』なんて……そんな言葉だけで俺達が納得できる薄情者だと本当に思っているのか!？」

ここまで我慢していた鬱憤をリインがサラに爆発させる。

「くっ……あ、あたしは……あたしはそもそもあんた達に尊敬されるような教官じゃないのよ」

二年ぶりに見たリインの激しい感情、そして真っ直ぐな眼差しにサラは思わず目を逸らしてたじろぐが、それでも言い返す。

「あたしの手は血塗られている……」

戦場で兵士を殺しただけじゃない。罪もない人を殺したことだってある……

そんなあたしが誰かを教え導く『教官』になるなんて『欺瞞』だったのよ」

サラはリインの手を振り払い、俯いて言葉が続ける。

「貴方達の目の前にいるのはそういう救いようのない人間なのよ……おまけにこの『災厄』を繰り返そうとしているノーザンブリアの人間」

「それは教官のせいじゃないでしょ」

思わずアリサが口を挟むが、サラは頭を振ってそれを拒絶する。

「あたしはパパを死なせた責任を取らなくちゃいけないのよ！

お願いだから……これ以上あたしをそんな目で見ないで……そんなことをされたら……あたしは……」

「盛り上がっているところ悪いけど、わたしはあまりサラのこと尊敬してない」

懺悔するように言葉を絞り出すサラにフィーが容赦なく水を差した。

「……………」

固まるサラ。気まずい空気が流れる。

「ちよつとフィー」

「わたしが来たのは散々振り回してくれたあいつらに落とし前をつけるため……」

『猟兵の流儀』で言えばやられたら徹底的にやり返す。サラは関係ない……だいたいサラは基本的に不真面目だし」

「………休息日はいつも昼まで寝ているよね」

「………それにさつきは良くも閉じ込めてくれましたね」

フィーに便乗してクリスとアリサは普段のサラの生活態度を思い出して呟く。

その言葉に反応するように固まったサラは一回、二回と痙攣するように体を震わせる。

「本来なら教官がやる仕事をトワ会長やリンに押し付けていますよね」

「ふ、二人とも……リインまで……」

フィーに便乗する三人にエリオットが必死にフォローの言葉を考える。

「エリオットもこの際だからサラに何か言ったら？」

「え……うーん……共用のシャワールームで下着を忘れて行くのはやめて欲しいかな」

フィーに促され、もらったエリオットの言葉をきっかけにサラはその場に膝から崩れ落ちた。

「えっと……」

言い過ぎたかと思うもサラの生活態度にそれぞれ思うところがあつた一同はここぞとばかりに言う。

もちろん、自分を除いた問題児たちばかりのⅦ組をまとめている重労働を思えば、多少のだからしなさも十分に挽回されるのだが何となくそれを直接口にするのを憚ってしまるのがサラへの評価だった。

「あんだ達ねえ……」

せつかくシリアスに極めて猟兵の時のものに切り替えていた思考から毒気を抜かれてしまったサラは嘆く。

「それは一先ず置いておくとして、サラ教官。僕達は何も教官の援護

に来たわけじゃありません」

「は……？ 何言ってるのよ？」

「教官は彼らを殺してでも止めるつもりなんですよけど、僕達の考えはサラ教官もシャトラールさん達も全て救うつもりです」

「全部救うって……そんなこと……」

「サラ教官の意見は聞くつもりはありません。教官が選べるのは――」

「シャロンに縛られて私達の戦いが終わるのを待ってるか、私達に全面協力するかのどっちかです」

クリスの言葉を引き継いでアリサが条件を提示する。

「『死線』のクルーガー」

「ふふふ、今のサラ様なら簡単に無力化できそうですわね」

護身用と言うには不気味なダガーを携えてシャロンは不敵な笑みを浮かべる。

「さあ、選んで――」

「私を無視しないでくださいっ！」

クリスの言葉を遮って少女の声が響く。

「リインさん」

「そうだな。あれは俺が適任だ」

クリスの呼び掛けにリインは頷く。

「リイン、まさか『アレ』を呼ぶの？」

サラの問いに応えずリインは会話の輪から外れて一人で龍神兵の前に進み出る。

「貴方はサラ先輩の教え子ですね……」

貴方に用はありません。死にたくなかったら引っ込んでいてください」

「気遣いありがとう。そっちこそ、そこを通してくれるなら手荒なこととはしないよ。お嬢さん」

戦場に場違いな気安さでリインは少女に話しかける。

まるで子供扱いするような口調に少女は顔をしかめて言い返す。

「本気ですよ！ ソルに掛かれば貴方なんて一瞬でぺったんこなんで

すから！ サラ先輩を——」

「悪いがここから先は俺達トールズ士官学院Ⅶ組が相手になる……」

サラ教官を利用した君達の自殺を俺達は容認するつもりはない」

「——っ、ソルツ！」

こちらの事情を知っていると匂わせる言葉に少女はムキになって龍神兵に命令を出す。

『オオオオオオオオツ！』

少女の本気の命令を受け、龍神兵は先程のサラとの戦いよりも速く、そして強い力でその腕を叩きつける。

龍神兵の一撃は塩の大地を放射線状に割り、地震と遜色ない地響きを起こして周囲の建物だった残骸を倒壊させる。

「ふ、ふん……関係ないのにしゃしゃり出てくるから」

少女は気丈に振る舞って言い訳じみた弁解を口にする。それに対する応えはすぐ近くから。

「四の型《紅葉斬り》」

サラと違い、音もなく目の前に現れたリインは鞘から太刀を抜き放ち一閃する。

「あ……」

驚く暇もなく振り抜かれた一閃は、目測を誤ったのか少女の眼前を空振った。

「お、驚かせないでください。というか今のを当てられないなんて程度が知れて——」

強がった言葉は唐突に途切れた。

「あれ……っ？」

唐突に龍神兵との霊的な繋がりが途切れ、それに伴って少女の「怪人化」が解ける。

金髪から桃色の髪へ、そして一回り小さくなった体に変身——元に戻った姿に女の子は困惑する。

「どうして『怪人化』が……あ……」

そう呟くが、考える思考は保つことはできずに女の子は全身から力が抜けていく強烈な虚脱感に意識を保つことができずに気を失う。

糸が切れた様に仰け反って後ろへ轟音を立てて倒れる龍神兵。

その光景にサラは呆然として、その彼女たちの前にリインは女の子をお姫様だっこして音もなく着地する。

「えっと……とりあえず聞くけど、リイン」

「何ですかサラ教官？」

「あたしはてつきり《騎神》を呼ぶのかと思ったんだけど？」

サラの質問にクリス達は一様に頷く。

「必要ありましたか？」

仰向けに倒れて動かない龍神兵を振り返って一瞥したリインは首を傾げて聞き返す。

「いや……確かにあたしも操縦者を潰せたけど……何て言うか……」

突入前の騎神戦と言うお約束が………つて言うかそもそも何をしたのよ？」

「この子と龍神兵との霊的な繋がりを切っただけですよ」

そう言えばそういうことができたんだったとサラは頭痛を感じた。

「それでサラ教官、どうしますか？」

そんな風に頭を抱えるサラにクリスが薬の瓶を見せて尋ねる。

ちなみにその背後ではシャロンが鋼糸——ではなく荒縄を手にして良い笑顔をして微笑んでいた。

76話 塩の大地IX

「これが『塩の杭』の内部……」

「まさか中に入れるなんて思わなかったわ」

龍神兵を操っていた女の子をシャロンに任せ、一同は巨大な『塩の杭』の側面に開いた大穴の中に入る。

「よく誤解されているが、この大きい杭全てが『塩の杭』ではなくて、教会が回収した2・5アージユくらいの大きさの杭が本体だったんだ」

「へえ、詳しいのね」

ラインの呟きにアリサは関心する。

「ただ当時の記録にはこんな内部構造は記録にない……」

「というか、そもそも三日で巨大な杭の方は消失しているから正確な記録はなかったんだ」

ワイスマンから得た七耀教会でまとめられた知識をラインは語る。

「だからここから先は何が起きるか分からない……拮抗薬を飲んでい たとしても異常を感じたらすぐに撤退するんだぞ」

「それはラインにも言える事じゃない?」

「そう言うからにはラインもちゃんと撤退するんだよね?」

フィーの指摘に続くエリオットの疑問にラインは曖昧な笑みを浮かべて頬を掻く。

「ラインさん。とりあえずどういう方法で現状を打破するつもりなのか、サラ教官に説明をした方が良いんじゃないですか?」

「そうよ。あれだけ大口を叩いたんだからそれなりのプランがあるんでしょ?」

クリスの提案にサラが同意する。

「そうですね」

ここに来る道中で仲間たちには話しておいたが、サラに知ってもら うためにもう一度説明する。

「『塩化現象』をこの太刀に刻んだ《聖痕》に封印します」

「……………それで？」

「それだけです」

「…………いや…………それだけって…………他になんかすごい儀式みたいなことはしないの？ お手軽過ぎない？」

「本当なら今回の実習でノーザンブリアの『塩』を採取して封印に適した武具を造るつもりでしたし、『聖痕』の調整だって時間を掛けてやるつもりだったんですよ」

「それは…………えっと…………急場しのぎの器で大丈夫なの？」

痛い所を突かれ、誤魔化す様に前向きな姿勢でサラは懸念事項を確かめる。

「元々クリスに造っていた武具の理由の一つはこの『塩化』を封じる『聖痕』を作ることを目的もあつたんです……」

この太刀は幸いなことに七つのセピスを均一にして造った太刀ですから、あとはぶつけ本番でなんとかします」

「それでできなかつたらどうするの？」

「……………方法はもう一つあります。ただこれはあまり使いたくない方法です」

自分の『聖痕』の容量が後どれくらいなのか具体的な指標が分からない以上、それを行うのは最後の手段にしたい。

「場合によつてはクリスの武具に負担を散らすために使わせてもらうことになるが」

「ええ、構いません。武器なんて代わりを造れば良いんですから」

愛着がある武器だがラインが必要と言うならクリスは躊躇ず、リヴァルト達を差し出すつもりで頷く。

「まずは特異点に辿り着きましょう。話はそこからです」

そう締めくくって一同は『塩の杭』の内部への進行を始めた。

・*

白く染まった魔獣を蹴散らしながら進んだ先、長い登り坂の通路から唐突に広い空間に出る。

「ようやく来たか」

そこには憲兵団の隊服を纏った青年がサラ達を待ち構えていた。

「クレド……」

「意外だな。まさかお前がガキ共を引き連れて来るとはな……分かってるのか、ここに来ることの意味を？」

「『塩化病』のことなら薬を飲んでいるから大丈夫よ！」

「はっ……」

言い返して来たアリサにクレドは鼻で笑う。

「おめでたい頭をしてるな。お前達がどんな薬を使ったかは知らねえが、この『塩の杭』の中に来ておいて安全だと思っっているのか？」

「何ですって!？」

心底見下した眼差しにアリサは激昂して弓を構える。

「落ち着きなさい」

それをサラは手で制してクレドに尋ねる。

「クレド、あんた達が『塩の杭』と一緒に消えようとしているのは本当なの？」

「ちっ……シヤンテの奴か」

「直接聞いたのはこの子達よ。あたしはさっきまであんた達の思惑通り、あんた達を全員殺して止めるつもりだったわ」

「その言い方、カンリリカは殺さなかったか……随分温くなったなあ

『紫電』のバレストアイン」

「そういうあんたの方こそ、こんな馬鹿げた心中に付き合うなんて、随分と付き合いが良くなったじゃない……」

『怪人化』……そんな人体実験まで受けて……他人のための献身するなんて似合わないわよ」

「は……抜かせ」

言い返して来るサラにクレドは自嘲するように鼻で笑う。

「別に大したことじゃねえ……」

俺の目の前でいなくなったレーザーの遺言って言う理由もあるが

……一番はお前と決着を着けるためだ」

「決着ですって？」

「対戦成績の話だ。お前が一位で俺が二位……」

一位のお前は猟兵に、二位の俺は憲兵団にそれぞれ行くことになった。あの時の勝負、俺はお前に負けを認めたつもりはねえ」

「何年前の話よ」

「だが勘違いするなよ」

呆れるサラにクレドはおもむろに手を胸に当て、全身に闘気を漲らせる。

憲兵団の隊服から翼を模した蒼い装束へと装いは変わり、紫の髪は金色へと変化する。

「シャトラールとアプリリスの奴はお前にわざとやられるつもりだろうが、俺は違う」

クレドは双剣を抜いて獰猛な笑みを浮かべる。

「どつちにしろここでいなくなるんだ。なら派手に散ってやろうじゃねえか」

血気盛んなクレドの物言い。

戦場で華々しく散りたいと言う狂戦士にサラは呆れたため息を吐く。

「前言撤回……あんたは変わってないわ」

「月並みだがここを通りたければオレを倒して行くんだな……」

だが、まあ条件によつては通してやってもいいぜ」

「どういう風の吹き回しよ」

胡乱な眼差しを向けるサラにクレドは剣でリインを指す。

「リイン・シユバルツァーって言ったなあ……」

お前の方が今の腑抜けたサラよりも断然そそるぜ」

「……はあ」

分かりやすい獰猛な目を向けられてリインは思わずため息を吐く。

「どういう理屈か知らないがお前も“怪人”になれるんだろ？」

「俺のそれは貴方達の“怪人化”とは違うんだけど」

「クカカ……別に何だって構いやしねえ。“塩化病”が進むから怪人同士でやり合うことはなかったからなあ……」

まあ、聞くまでもなく相手をしてもらうつもりだがツ……！」

そう言うやいなや、クレドは突撃する。

「っ——」

リインはすぐにそれに反応して太刀に手を掛け——

双剣は双銃剣によって受け止められた。

「フィー!?!」

「みんなは先に行つて、こいつの相手はわたしがする」

「あん……?」

双剣を止められたクレドは怪訝な顔をして一旦離れて、不機嫌を隠さず言葉をぶつけてくる。

「引つ込んでろテメエのようなチビガキはお呼びじゃねえんだよ」

「むっ……」

興味ないと言外に言われフィーは顔をしかめながら、リイン達に提案する。

「わたし達には制限時間がある……ここで全員で戦つて足止めされるよりも、一人残つてリインとサラを先行させるべき」

「そうかもしれないけど……」

「一人じゃ戦術リンクが使えないんだよ。それであんな人と戦うなんて無理だよ」

その提案にアリスとエリオットは渋る。

「問題ない。あの程度すぐに倒して追い付くから」

「は……言ってくれるじゃねえか。雑魚の分際で」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

そう言い返すとフィーは徐に腕を交差するように構え——

「はあああああつ!」

その小さな体に翠の鬨気を溢れさせた。

「これはもしかしてウォークライ!?!」

「いや……それをベースにした気法。軽功を取り入れているな?」

「正解。リベルでアネラスに教えてもらった」

体格、そして気質から猟兵のウォークライをフィーに合わせて改良したフィー専用のウォークライ。

「へえ……」

雑魚と見縊っていたクレドは変わったファイアの気配に舌なめずりをする。

「前言撤回だ……ここを通りたければお前達全員でオレをどかしてみせろ！」

「じゃ、遠慮なく」

そう叫ぶクレドに応える声は彼の目の前から。

十分に保っていた間合いにも関わらず、クレドが構え直すよりも速くファイアは一瞬でその間合いを詰めて脚甲を纏った回し蹴りでクレドを横に蹴り飛ばす。

「行つて」

クレドの背後にあつた奥へと続く通路への道をこじ開けたファイアは短く一同を促す。

「——行くわよ」

「みんなここはファイアに任せよう」

逡巡はわずか、サラとリインはすぐに判断して駆け出した。

「え……でも……」

「せめて僕だけでも——」

「行こう。二人とも」

アリサとエリオットは初めて見るファイアの本気の速さに驚きながら躊躇うが、クリスがそんな二人を促して走らせる。

「任せた」

「……………え？」

すれ違つたリインが掛けた言葉にファイアは困惑して振り返り、リインの背中を呆然と見送る。

「はっ……やってくれるじゃねえか」

そしてリイン達が行くのを待っていたと言わんばかりに壁に叩きつけられたクレドはダメージを感じさせずに立ち上がる。

「それにしてもウォークライか……」

猟兵が使う技だと聞いたことはあるが………こう、か？」

深く息を吸つたかと思うと、クレドはその身に紅い鬨気を纏う。

「っ——」

容易くウオークライを真似してみせたクレドにフィーは思わず目を見張る。

「クカカ……俺に一発入れた褒美だ。ひとまずテメエで我慢してやるよ。せいぜいオレを楽しませろチビガキ」

「上等……」

敵の強大きさを改めて思い知るフィーだがその口元には小さな笑みが浮かんでいた。

「言っておくけど、今は誰にも負ける気がしない」

任せる。と言ってくれたことに気持ちが高揚する。

兄達にも、父親にも言われたことのない初めての言葉。

猟兵としてなら一つの戦場を任せるといふ一人前と認めた、フィーが終ぞ言われたことのなかった言葉。

ラインにそんな思惑はなかっただろうがそれでも認めてもらえたようで、フィーは静かな闘志を練り上げる。

「ひゅう……言うねえ」

強気なフィーの発言にクレドは気を良くして双剣を構える。

「速攻で潰す」

「こっちの台詞」

翠と紅の闘気が立ち昇り《妖精》と《鷹》の戦闘が始まった。

・*

「フィー、大丈夫かな？」

走るエリオットは何度も背後を伺いながら、一人残ったフィーの心配をする。

「そうよ。何で教官もラインもフィーを一人で戦わせたのよ。確かにフィーがあんなに速く動けるのは驚いたけど何も一人で戦うことないじゃない」

エリオットに同調するようにアリサもフィーを残した不満を口にする。

前を走るサラとラインには聞こえていないのか、それとも意図して

無視しているのか二人は何も言っていない。

「ねえ教官、リインも——」

「アリサ、フィーが残ったのは戦略的に見ても正しいよ」

愚痴るのではなくはつきりと言ってやろうと声を上げたアリサをクリスが止める。

「何ですよ？ 私達みんなで戦った方が確実に勝てるじゃない。そりや一人にこの人数はちよつと気が引けるけど綺麗ごとと言っている場合じゃないでしょ？」

「僕達の勝利条件はクレドに勝つことじゃないよ……」

儀式が完遂するまでにリインさんを特異点に辿り着かせるのが最低条件だ。その上で条件を付け加えるならどれだけリインさんを消耗させずに送り届けることができるかが重要なんだ」

リインがいくら凄くても、全力で戦える回数は限りがある。

“塩の杭”の封印にどれだけの手が必要か分からない以上、できる限りリインを戦わせないとするのは間違った判断じゃない。

「それともアリサはリインさんと一緒じゃないと戦うのが怖い？」

「なっ!？」

「別に僕達はそういうことを言いたいんじゃないよ、フィーだけじゃなくせめて僕達の内の一人居ても残るべきだったんじゃないかって思うんだ」

「それこそ必要ないよ」

エリオットの反論をクリスは一蹴する。

「フィーのあの速度について行けるのはここではリインさんとサラ教官だけだよ……」

下手に誰かが残っても戦術リンクのデメリットでフィーの動きを鈍らせることになる」

フィーの目にも止まらない動きを思い出して二人は口を噤む。

「どうする？ 僕としてはこの後に出てくる三人の内一人を引き受けて、リインさんを先に行かせるつもりだけど」

「クリス!？」

「でも僕はフィーと違ってまだ一人で彼らと戦うには力不足だ……僕

が用意した「奥の手」も君たちがいなければ役に立たないものだしね」

「本気なのね？」

「肩を並べて仲良く戦うことが仲間じゃない……」

少なくとも僕は最終局面をのんびり見物するくらいなら「礎」になつて戦つていたいよ」

本音を言えばクリスもリインの戦いを特等席で見たい。

だが、彼の仲間として振る舞うなら少しでもリインが戦い易くすることが自分の役割だとクリスは割り切る。

「それで君たちはどうする？」

クリスの提案にアリサとエリオットは――

・*

「辿り着いたか……」

次の広間で待っていたのはシャトラールだった。

「シャトラール……」

「その様子……どうやらシャンテから話を聞いたようだな」

「ええ、この先にアプリリスとティアはいるのね？」

シャトラールが護る様に立つ背後の奥へと続く道を一瞥してサラは眩く。

「その通りだ。儀式は滞りなく進んでいる」

悪びれた様子もなくシャトラールは微笑みを浮かべてサラの言葉に応える。

「本気みたいね……だけどちよつと杜撰な計画じゃない？」

あたしを「英雄」に祭り上げるつもりだったみたいだけど、それで他の国が本当に黙ると思つているの？

特に「塩の杭」なんてアーティファクトを使ったことを七耀教会が黙っているとは思えないわ」

「私としても百点満点と言える計画だとは思っていないさ……」

だが26年分の膿を切り取ることは誰かがやらなければならない

ことだ」

「それにしたって急ぎ過ぎじゃない」

「計画を早めた要因は二つ……」

年々過激になっていく『北の猟兵』の仕事ぶりを考えての判断だ」

「……どういう意味よ?」

「難しいことではない。稼ぐことを目的として仕事を選ばなくなってきた彼らをいつか、どこかの国が疎ましく感じ、対処に乗り出す日が来るだろう……」

『北の猟兵』の滅びはノーザンブリアの滅びに繋がる。そうなる前に『北の猟兵』をノーザンブリアから解放する必要があったただけだ」

「だからって……やって良いことの限度があるでしょ!」

しかも後始末をあたしに全部押し付けるつもりとか無茶なこと言ってるんじゃないわよ」

「その事についてもある程度は手助けを残してある」

「何ですって?」

「七耀教会の不正の証拠。これをあの『鉄血宰相』に渡せば少なからずの譲歩を引き出せるだろう」

「なっ!?!」

予想していなかった劇薬にサラは絶句する。

「鉄血宰相は領土拡大主義者だ。ならば七耀教会の権威を地に落とすこの情報に良い値を付けてくれるだろう」

「ちよつと待ちなさい!」

思わずサラはシャトラールの言葉を止める。

鉄血宰相、ギリアス・オズボーンはサラにとって帝国の遊撃士協会の活動を止めた不?戴天の敵。

そんな男と取引しろと言い出す旧友の神経に文句を言いたくなるが、七耀教会の不正と言う言葉は聞き流せない

「不正の証拠っていったい何の事よ?」

「サラ……26年前にノーザンブリアから回収された『塩の杭』の本体は今どうしていると思う?」

「そんなのアルテリア法国で嚴重に封印されているに決まっているじゃない」

「残念ながらその答えは0点だ」

「は……？」

「七耀教会はあろうことか『塩の杭』を女神の恩寵と捉え、暗殺の道具として利用している」

「は……？」

シャトラールがもたらした真実にサラは間の抜けた言葉を繰り返した。

「そ、そんな馬鹿な！」

「残念ながら真実だ。その証拠もある……それにサラ、君の後ろにいる人物こそ、その生き証人だ」

シャトラールの指摘にサラは恐る恐る振り返り、そこにはリインがいた。

「あ……」

実習先を公表した時、リインが語った『塩の杭』に貫かれた経験のことがサラの脳裏に過る。

あの時リインはレプリカだと言っていたが、話を振られた彼は否定せずに言葉を返す。

「情報源は『身喰らう蛇』ですか？」

「ふ……胡散臭い組織だが信じるに足るだけの証拠を見せられてしまっただけだよ」

どうしたものかと、リインは思案する。

教会が自分を害したことへの口止め料はもらっているのだが、ワイスマンを『塩の杭』で暗殺した記憶についてはその範疇ではない。

そもそもリインのは記憶だけで物証もないので、余計な波風を立てないためにもあえて黙秘していたことでもある。

この場合は迂闊に結社に証拠を握られた教会の落ち度としか言いようがない。

「これは許されざる裏切りだ。この事実を公表すれば七耀教会に非難の矛先は向かうだろう……」

何だったら今回の錬成は教会が行ったことだと公表しても良いだろうか？」

「七耀教会に罪を擦り付けると言うんですか？」

堪らずクリスが口を挟む。

「先に世界を欺いていたのは七耀教会だ。それとも君たちは国を滅ぼせる災厄を聖なる武器と崇めている彼らに何も感じることはないか？」

「っ……」

そう返されてしまえば黙るしかない。

この短いやり取りでクリス達も七耀教会への不信感を否定することはできなくなっていた。

「それにこの『塩の杭』は儀式が終われば消滅する……」

人は消えた物よりも目に見えた脅威の方に自ずと目を向ける。矛先をすり替えるには実に都合のいい相手だ」

「そんなやり方で本当に良いと思っっているの？」

理不尽に振り回された恨み言をぶつけてやろうと思っていたアリスは気付けば、その感情を忘れて尋ねていた。

「もちろん、私たち自身も出来る限りの努力はしてきた……」

だが、ノーザンブリアが26年の澱みはもう普通の方法では排除できない程に腐っている」

「だとしても——」

「バルムント大公を蹴落として設立した議会もその時の流れによってかつての高潔さはない……」

何の進展もしない話し合い、責任の擦り付け合い。果ては『英雄』が稼いできてくれた外貨で私腹を肥やす……」

そんなことばかりしている議会では例えノーザンブリアが『塩化』から解放されたとしても遠からず滅亡するだろう」

シヤンテから聞いていた話だが、シヤトラールの口から語られる言葉には抑え切れない程の怒りを感じた。

「そんな故郷の腐敗を知らずに今なおこの地のために献身を捧げられている『英雄』達のためにも、私はノーザンブリアの現状をこれ以

上見過ごすわけにはいかない……

サラ達が外で血を流して私たちを生かしてくれたように、今度は私達が血を流す番だ」

「シャトラール……」

「例え人の道を踏み外したとしても、私達はこれ以上同じ過ちを繰り返すわけにはいかないのだ」

計画の是非はともかく、シャトラールの想いの強さに一同は反論を挟むことはできなかった。

それだけ彼が語る言葉には熱があり、そこに向けた真摯な思いを否定することなどできはしない。

「……………貴方がただの悪人だったら良かったのに」

反発心だけでなんとかその言葉をクリスは絞り出す。

「君たちを不当に扱ったことは申し訳なく思っているよ……」

君達には現政権がおかしいことを知ってもらい、バルムント大公に会って欲しかった……

もつとも、いくつか用意した扇動の材料の中からあれを引き当て、あそこまで醜態をさらしたのは私にとっても予想外だったがね」

自嘲するようにシャトラールは笑い、サラに改めて視線を送る。

「終焉は近い——サラ、剣を取れ」

「……………あたしにあなたを殺せって言うの？」

「それがノーザンブリアを存続させる唯一の方法だ」

はつきりと断言するシャトラールにサラは黙り込む。

「殺せないと言うのなら、もう一つ理由を作ってやろう」

そう言うシャトラールは懐から白い錠剤を取り出した。

「それはまさか《グノーシス》？」

リインがその正体をすぐに言い当てるが、シャトラールはサラ達に見せつけるようにそれを飲み込む。

効果はすぐに現れる。

シャトラールの体が見る間に白く染まり、それに応じて闘気が高まっていく。

「オオオオオオオッ！」

結晶化した体は膨張するように広がり、一回り大きくなり異形の存在へと移り変わる。

「これも怪人化なの……?」

「いや、その原型の魔人化だろう」

慄くエリオットの言葉にリインは冷静に訂正を加える。

『さあ、始めようか。サラ・バレスティンとトールズ士官学院Ⅶ組。私の最後の戦い、付き合ってもらおうぞ!』

巨大な体躯にそれに見合う大剣を携えた魔人が戦意を漲らせて咆哮を上げる。

「……………っ」

サラは歯を食いしばり、ブレードと導力銃を抜いて――

「待つてください、サラ教官。彼の相手は僕達がします」

「クリス……だけどこれはあたしの……」

「まだ諦めるには早いです。ノーザンブリアのどうしようもない事情は分かります……」

「けどまだ希望はあります。そう僕達には“超帝国人”という希望が――あいたっ!」

神妙に説得しようとしたクリスの頭にリインの拳骨が落ちる。

「悪いがその提案は却下だ。あの魔人化はクレドのものとは違って一方通行のものだ。その分力の増幅も段違い……」

とてもじゃないがクリス達三人で抑え込める相手じゃない

「これを見てもそう言えますか? アリサ、エリオット」

クリスは彼女たちの名を呼ぶ。

「ええ!」

「戦術リンク、オン」

クリスの合図でアリサとエリオットは二人の間に戦術リンクを繋げる。

そこにクリスは自分の《ARCU》を手に叫ぶ。

「導力魔法《オーバーライズ》」

クリスの《ARCU》を触媒に二つのラインをクリスはアリサとエリオットとの間のラインを維持したまま、自分とのリンクを成立さ

せる。

「……………よし」

ぶつけ本番になったが確かな手応えにクリスは拳を握る。

《ARCU》を使った最初の戦いで全員の意識がリンクした現象を何とか再現できないものかとシユミット博士に相談して組み上げた導力魔法。

まだ未完成ではあるが、ペアからトリオでの連携を可能とするその力はこれまでの戦術リンクでの戦闘の一步先に行くことは間違いない。

「クリス……………いつの間にそんなものを……………」

《鉄機隊》の“星洗陣”と同等のリンクを成立させていることにリインは驚く。

「僕だって毎回リインさんから施しをもらうだけじゃ情けなさ過ぎますから」

「そういう事よ。私達だって戦えるって証明してやるわよ」

「ここは任せて、リインと教官は先に行ってください」

クリスの“奥の手”に便乗したアリサとエリオットがリイン達を促す。

「ああっ！ そのセリフ僕が言いたかったのに！」

そんなエリオットの言葉にクリスが声を上げて嘆く。

「真面目にやれ……………」

そんなクリスにため息を吐いてリインは考える。

三人で構築した戦術リンクの力は未知数。

ぱつと挙げられる欠点はクリスの《ARCU》の導力魔法を使う領域にリンクのプログラムを並列させているため導力魔法を使えなくなっていること。

もつともこのメンバーで考えるならクリスは前衛であるため《ARCU》を介した導力魔法を使うことはないのであまり欠点にならないだろう。

「……………サラ教官。ここはクリス達に任せましょう」

「リイン？」

「少なくとも一方的な展開にはならないはずですよ。ならば信じましょう」

「……………」

「ここが終点じゃありません。儀式はこの上で行われているんです。だから——」

「分かったわ」

リインが並べる説得の途中で遮ってサラは彼らの提案を承諾する。

『ふ……そう言われて道を譲ると思ってるのか?』

「それが僕達がここにいる役目。貴方がそれを阻むならその道を切り拓いてみせます!」

クリスは《ブリランテ》を構えて啖呵を切る。

「舐めないでよね。私達はリインとサラ教官のオマケじゃないって思い知らせてやるわ!」

「援護は任せて!」

それぞれが自身を奮い立たせ《魔人》との戦いが始まった。

77話 塩の大地X

空気が痛い。

シャトラールが待ち構えていた広間を抜けた先から明らかに空気の質が変わる。

良くある上位三属性が働いている霊場とは違う空気にリインは息苦しさを感じる。

「大丈夫ですかサラ教官？」

「……あまり大丈夫そうじゃないわね」

サラは顔をしかめながらリインに返事をする。

「だけど体が“塩化”している様子はないわね。あのメイドが持ってきた薬のおかげって言うのが凄い不満だけど」

「あはは……」

その薬の出所を考えるとリインも同じ気持ちになる。

「そういうあんたこそ大丈夫なの？」

「ええ、俺は特に問題ありませんね」

カンパネルラにやられた時の外側から“塩”になる感覚もなければ、ワイスマンの記憶にあった内側の芯から“塩”になる感覚もない。

もつともそれが拮抗薬のおかげなのか、正確なところは分からないが問題なく動けることに安堵する。

「それにしても最悪な場所ね……塩気が多過ぎて体がベタベタするわ」

「まあ……塩の杭の内部ですからね」

「とつとと終わらせてシャワー浴びたい……ギンギンに冷やしたビール飲みたい」

「ビールはともかくシャワーは賛成ですね」

最奥に近付いて行くにつれて軽口が多くなってくるサラにリインは付き合う。

「でもシャワーよりも温泉に入りたいですね」

「良いわね。それ……そう言えば東方じゃ温泉に入りながらお酒を飲む素晴らしい文化があるらしいわね」

「確かにありますね。ユン老師もユミルで良く父さんとやっています」

「ふむふむ……ところでリイン」

「何ですか？」

猫撫で声のサラにリインは二年前のことを思い出しながら聞き返す。

「クリス達は《影の箱庭》ってところで温泉を堪能したらしいじゃない？」

「……分かりました。これが終わったら場所の提供と《グラン||シヤリネ・レプリカ》を出して上げます」

「よしっ！」

隣を歩くサラの鬨気はさらに一段階凄みを増す。

現金な物だと思いながら、悲壮感が完全に消えて普段のサラらしきを見て苦笑する。

「まあ未来を見据えてやる気になることは悪いことじゃないな、うん」
場違いなやる気の出し方だが、前向きなことは良いことだとリインは目を瞑る。

「それじゃあ、仕事上がりの一杯のためにもさっさと終わらせるわよ」

「……………軽口ですよね？」

意気込み、ペースを上げて前に出るサラにリインは思わず呟いた。

・*

「アプリリス、ティアッツ！」

塩の杭の最奥で“それ”の準備が整うのを待っていた二人は自分達を呼ぶ声に思わず息を呑んだ。

「来たかサラ」

「ついにこの時が来ましたね」

サラの声を聞いて二人は複雑な気持ちになる。

六年前から試行錯誤を繰り返した計画の成就。

本来ならもう数年は先に決行するはずだったが、ティアの事情とサラの帰国が合わさり運命を感じて強行した。

「これで終わりか……」

「犠牲になつてくれた人たちのためにも必ず成功させましょう」

儀式の成就是自分達の消滅と決まっているのに二人は臆することなく振り返る。

「……驚いたな」

「え……ええ」

最初に目に入ったサラと彼女に付き従つてこの広間に駆け込んできた少年の姿を見て二人は驚愕した。

「来てやったわよアプリリス、ティア！ 良くもここまで振り回してくれたわね！」

「それはすまなかつたと思つている。だがノーザンブリアを解放させるには必要なことなのだ」

怒るサラにアプリリスは申し訳なさそうに謝る。

その顔はかつて共に過ごしていた時と何も変わらず、勢いに任せて罵つてやろうと思つていたサラは毒気を抜かれてしまう。

「ごめんなさい、サラ。元々は私がみんなに無理を言つてこの機会に儀式を早めてもらったの」

「ティア……ダンデリオンでクレドを逃がしたのはあんただだったのね？」

「はい……あそこでクレドさんが振り返ちにされると計画に支障が出ると思いましたから……それにしても……」

ティアはこの場に来るとは思わなかつたリインに目を向けて話しかける。

「貴方はリイン君でしたよね？ ここは特に“塩化”が激しい場所なのに大丈夫なんですか？」

「私達やサラの様に耐塩化処置を受けていない者にとってこの場の空気は毒でしかないはず……そなたはいつたい……」

シャトールやクレドもこの“塩の杭”の中心とも言えるこの場

には長くいられず、自分達でさえ息苦しさを感じているというのに
リインは平然とした顔でそこに立っている。

「ちよつとあたしはそんな『処置』なんて受けた覚えはないわよ」

聞き捨てならない言葉にサラは突っ込む。

「地下道で私がサラに撃った弾丸は、お前と私の間に霊的なリンクを
作り出すものだ……」

これによりお前は『塩化』のデメリットを受けることなくその恩
恵を身に宿すことになった……

お前がここに平気でいられるのもそのおかげだ」

「勝手なことを……」

「だがまだそれでは足りない」

不満をもらすサラの言葉を無視してアプリリスは続ける。

「本来ならあの三人をぶつけることで覚醒させるつもりだった『ギフト』。その様子ではまだ発現させていないようだな」

「生憎だけどあたしはあいつらみたいにくすプレする趣味はないわ
よ」

「ふむ……そうなのか？　うちのタンスの奥に随分とファンシーな――」

威嚇射撃の銃声がアプリリスの言葉を掻き消した。

「安心すると良い。お前に与えた『ギフト』は既にこちらで方向性は
決めてある……『塩の刃』、私達を殺すための力だ」

「あんた……自分を殺す力をあたしに渡したって言うの？」

「ああ、そうしなければお前はティアを殺すことはできないからな」

アプリリスは振り返り、背後に控えているティアに視線を送る。

ハリアスクの街で会った時の何処にでもいる服装ではなく、露出の
高い民族衣装。

しかし剥き出しの肌の大半は白く染まり、その上にはいくつもの紋
様が描かれている。

それだけではなく、白い部分は見ている間にも正常な肌を侵食して
いく。

「ティア……その姿は？」

「今の私の身体は『グノーシス』という薬を使ってノーザンブリア中の人達と繋がっています……」

この紋様でなんとか人の形を保たせていますが、私はもうすぐ『塩』の化物になるでしょう」

「言ってみればティアはノーザンブリアに散らばった『杭の欠片』を集めて『塩の杭』そのものになる……」

そして第二の『塩の杭』となったティアは『魔獣』となってその体が崩壊し切るまで暴れ回るだろう……」

それこそ26年前と同等の被害と汚染を撒き散らしてな。その『魔獣』を倒すための武具がお前の『ギフト』になる」

「アプリリス、あんた正気なの？ 友達を、一緒に育った家族を『魔獣』にするですって!?! そこまで堕ちたって言うの!?!」

「サラ、私は全部納得しているの……
私一人が犠牲になるだけで、ノーザンブリアの人々から『塩化病』を無くすことができる……」

この大地全ての塩をどうにかできるわけじゃないので一時しのぎにしかありませんが、あの子たちの未来が護れるなら私はこれで良いんです」

ティアの悲壮な決意にサラは俯き、弱々しく反論する。

「ふざけんじゃないわよ。だからってあたしにあんた達を殺させるなんて……」

「いいや。お前にならできる」

拒絶するサラをアプリリスは否定する。

「甘えるなサラ。お前は外で、私達は中で何のためにこれまで命を賭けて戦ってきた？」

故郷の貧しさを、誰かの空腹を、ほんの少しの間紛らわせるために、子供たちを少しでも笑顔にできる……」

そんな二束三文のミラのために、血と硝煙に塗れる生き方を選んだはずだ」

「っ……」

「そこに生じる『欺瞞』から私たちは逃げて良いはずがない……」

そうじゃなかったら、大佐の……父さんの死は無駄死になってしま
うだろ」

「アプリリス……」

「どちらにしろ私たちはもう長くない。ならばせめてお前の手でノー
ザンブリアのために活用してくれ」

「……………」

「それはあまりにも一方的じゃないですか？」

黙ってしまったサラに代わってリインが口を挟む。

「確かにノーザンブリアは非公式とはいえ猟兵家業で生き永らえて来
た国かもしれません。だからってその責任をサラ教官一人に背負わ
せるのは筋違いではないですか？」

「君も見ただろう？」

今のノーザンブリアの民の姿を。施しを受けるのが当然だと墮落
し傲慢になってしまった彼らを……

これは彼らの目を覚まさせるためでもある」

「それは……あのマヤという女の子も含まれるんですか？」

確かに猟兵の外貨に縋らないと生きていけないかもしれないけど、
あの子は喋れなくても懸命に生きようとしていたはずじゃないんで
すか？」

「その懸命に生きている子供達から搾取する腐った大人たちがこの国
には多過ぎるのだ」

問題はいくらでもあるとアプリリスはリインの反論に動じること
なく言い返す。

「それにただ “塩化” を解決してしまっても問題はあある」

「それはどういう意味ですか？」

「君たちの国、エレボニアは領土拡大主義を唱えていながらノーザン
ブリアを積極的に取り込もうとしないのは汚染された大地と疫病の
おかげに他ならない……」

忌々しいことにこの二つは軍事力のないこの国を守る最後の砦に
なっている

アプリリスはため息を吐いて続ける。

「北の獵兵」というこの国にとっての弱味をあゝの鉄血宰相が見逃すことはないだろう……

結局どう足掻いてもノーザンブリアはもう詰んでいるのだ。ならば少しでも争いが少ない終わらせ方を選んで何が悪い？」

「……………塩の杭」を鍊成させたのは市民の心を折る目的もあつたんですね？」

「ああ、これで彼らは思い知った——いや思い出しただろう。私達の国が薄氷の上に立っていることを」

揺るがないアプリリスに意志を見てリインは彼女からその背後に控えているティアへと視線を移す。

「ティアさん……………貴女も同じ考えですか？」

「はい……………」

「貴方達はそれで良いかもしれないけど、残された人達は思うか考えたんですか？」

「……………」

続くリインの言葉にティアはあからさまに動揺する。

「マヤ、それにヴァレリーの二人は泣いていましたよ」

「……………そんなこと分かってます。だけど私はマヤの前で死ぬことはできないんです」

リインの指摘にティアは弱々しい声で反論する。

「マヤの両親はあの子の目の前で『塩』になっっていなくなっちゃった……………」

その時にあの子は『声』を失った。だから私はあの子の目の届かない所で死なないといけない。あの子はそうしないと壊れてしまうから」

「友達をサラ教官に殺させることは良いんですか？」

「サラは私達と志を同じにした仲間ですから……………」

悩んで苦しんだとしても、サラは正しい選択の結末ならちゃんと折り合いを付けられる強い子だから」

買い被りとも取れるサラへの絶対の信頼をティアは言葉にする。

「だからって残された——」

「——ふざけんじやないわよっ!!」

リインの言葉を遮ってサラが吠えた。

ここに突入する直前にリイン達にされたが、サラもここに至るまで溜め込んでいたものはリイン達と同じ。

過大な期待を向けてくる彼女たちにサラはここまでの不満をぶちまける。

「どいつもこいつも二言目には殺せだ！ ノーザンブリアのためだ！
いい加減にしなさいっ!!」

「サ、サラ教官?」

「そうよあたしはもう猟兵じゃないのよ。今は教官つまり先生、教育者。ついでにあたしは今でも遊撃士のつもりなのよ!」

「サラ、お前の本質は猟兵のはずだ。ならば命の取捨選択は——」

「ああそうですよ！ あたしは所詮猟兵上がりの遊撃士ですよ！

わざと戦火を広げて追加報酬が出るように立ち回ったり、〃守銭奴のバレストアイン〃なんて影で言われてるくらいにいろいろやってやったわよ」

「お、落ち着いてください」

すわった目で叫び出したサラにリインは腰を引かせながら宥める。

「リイン、もう良いわ」

「え……? 良いって何が?」

「あいつらはもう何を言っても聞く耳なんて持たないわ……」

「だったら説得なんて無駄よ。無駄！ 言いたいことがあるならば
ぶっ飛ばしてから説教すれば良いのよ!!」

「そ、それはそうかもしれないですけど」

「ふ……流石に話が早いサラ。だが間違ってるぞ。私達はこれで——
——」

「うっさい!」

今生の別れの言葉をサラは遮る。

「あんた達の事情なんて聞いてやるもんですか!」

「あたしよりも頭が良いあんた達が考えたんだから確かにそれが最善なんですよ。だけどあんた達は間違ってるわ!」

根拠のない言葉を叫びながらサラは不意に理解する。彼女たちはかつての父と同じことをしようとしていると。

「あんた達はやり遂げたみたいなきもちで逝けるでしょうけどね！命を捨ててまであたしは助けて欲しくないわよー！」

あの時はただ泣き叫ぶしかできなかった自分振り払うようにサラは家族たちにあの時の後悔の答えを叫ぶ。

感情に任せて叩き返された言葉にアプリリスは目を丸くするが、次に微笑を浮かべる。

「それでこそサラだ……だがもう私たちは賽を投げてしまった。今更後には退くことはできないのだ」

「ごめんなさいサラ。私達の事は恨んでくれていいわ」

申し訳なきように笑ったティアは彼女たちの背後に鎮座していた龍神兵を振り返る。

外で戦った龍神兵よりも重厚な体躯。そして尋常ではない力が集まっているそれにサラは顔をしかめる。

「それがあんたの『異能』ってわけね？」

「ガルヴァ・ロア。カンリリカちゃんが受け継いだソルの兄弟みたいなものです。ただ私の場合は――」

龍神兵の胸が開くとそこに現れた《核》にティアは光になって吸い込まれる。

「見ての通り、カンリリカとは違って術士を狙うことは不可能だ……それからこの龍神兵はティアとリンクしていて儀式が完了すれば

『塩の魔獣』となる……」

ティアを止めなければ『異能』の刃を使うしかない」

龍神兵と融合したティアに代わってアプリリスがサラに攻略方法を授ける。

が、それを無視してサラはリインに話しかける。

「任せて良いかしら？」

「そうですね………本来なら気軽に使うべき『力』ではないですが、相手が『塩の杭』なら仕方がないでしょう」

「悪いわね。あたしはアプリリスの方をとりあえずぶっ飛ばすから、

大物は任せたわ」

サラはそう言つてリインから距離を取つて空間を開ける。

「何を——」

後ろに下がったサラをアプリリスは訝しむが答えはすぐに示される。

「来いっ！ 《灰の騎神》ヴァリマルツ!!」

リインの背後に光が生まれ、それはすぐに大きくなって人の形を取る。

「……………は？」

突然現れた巨大な騎士にアプリリスは目を大きく見開いて間の抜けた声をもらす。

そんな彼女を無視してリインは先程のティアと同じように現れた巨人に光となつて取り込まれる。

「な、何だそれは!？」

「ちよ、ちよつと待つてくださいいっ！」

アプリリスとティアの焦った声が広間に響く。そんな二人の様子にサラは思わず口元に笑みを浮かべてしまう。

彼女たちが優位だと思つていたのは、龍神兵の力にそれだけの自信があつたからだろう。

本来なら戦車や飛空艇のような兵器を使つて戦わなければならぬ巨大な体躯。

サラが勝つためにはそれこそ『塩』を祓う特効の武具が必要になり、最終的にはそれに縋らなければいけないと高を括つていたから。

だが突如として現れたのは龍神兵と同等の体躯の騎神。

アドバンテージはなくなり、計画を根本から崩す存在の登場に動揺した隙を二人は逃すはずもない。

「ノーザンライトニングッ！」

「八葉一刀流、七の型——無想霸斬っ！」

雷撃の一撃と、一瞬七斬の斬撃がアプリリスと龍神兵に襲い掛かった。

・*

「思ったより呆気なかったわね」

アプリリスを縛り、手足を斬り落としてダルマにして転がした龍神兵の上に登って来たサラはそこにいるリインに声をかける。

「どう？ 行けそう？」

「……………ええ、これで——」

剥き出しの「核」に触れていたリインは水面に手を突っ込む様にその中に手を入れる。

「っ——」

「リイン!？」

顔をしかめたりインにサラは声を上げるが、それに応えるよりもリインは見えない「核」の中でそれを掴んで一気に引き出す。

されるがまま、気を失っていたティアは腕を掴まれて「核」から引きずり降ろされた。

「ティア……」

改めて近くで見る彼女の姿は痛々しいものだった。

露出した肌のほとんどが塩のように固まっていて、いつ崩れてもおかしくない。

「大丈夫です」

息を呑むサラにリインはそう一言返して、《鬼気》を使った焔で彼女を一瞬だけ包む。

それだけで白かった肌は元の人の肌に戻る。

「……………もしかして治ったの？」

「表面だけです。流石に全部を治すことはできません」

簡単に言っただけのけるリインにサラは改めてリインが「塩の杭」から生き残ったのが事実なのだ実感する。

「それよりも彼女をお願いします」

抱えたティアをサラに押し付けてリインは改めて「核」に触れる。

「どうするつもり？」

「見たところこの龍神兵はティアさんと繋がった特異点のようです。」

だから俺が代わりに中に入って《塩の聖痕》を作ります」

「大丈夫なんでしょうね？」

「……………やるだけのこととはやってみます」

「そのことですが、一つプランを提案します」

緊張をはらんだリインの答えに被せる形で、突然現れたリンがそんな提案をしてきた。

「《四輪》を解析して時間・空間凍結が私には可能です……………」

力が十分に集まった《塩の杭》を以上の術で停止させ、異空間に封印するのはどうでしょうか？」

「それってつまり《リベル・アーク》みたいに封印するってことか？」

「はい。リインの身体を貸して頂けるなら《力》の行使ができますので、この場にデバイスタワーを呼び出すことは可能です」

「……………その手があったか」

「いやいや、何言ってるの？」

ぽんつと手を叩くリインにサラは思わず突っ込む。

「あ……………確かにいきなり《四輪の塔》を借りるのは無理ですよ」

「違う……………そうじゃない」

ズレた言葉を返して来るリインにサラは頭痛を感じる。

「冗談です。流石にそれはクローゼさん達に迷惑が掛かりますから」

「そうですか……………」

しよんぼりと肩を落とすリンに、サラは突っ込みを何とか堪える。

「とにかくやってみます。もしかしたら案外簡単にできるかもしれませんから」

あえて楽観的に言っただけでリインは龍神兵の中に入る。

「っ——これはきついな」

中に入った瞬間、身体に掛かった負荷にリインは顔をしかめる。

見れば指先から《塩化》が始まっている。

「もたもたしてられないな」

周囲を見回してみてもヴァリマールの中のように操縦席があるわけではなく、ただ暗い空間が広がっているだけ。

リインは徐に太刀を抜き、精神を集中する。

「彼は我、我は彼……」

龍神兵とリンクしている「塩の杭」とノーザンブリアの民との繋がりを把握。

「なれど汝は我等に非ず……」

「塩の力」を把握して、それを「聖痕」として太刀に刻む。

「八葉一刀流——つなっ!」

次の瞬間、太刀は音を立てて砕け散った。

「これは「塩の杭」の力じゃない——まずいっ!」

それを察した瞬間、リインは龍神兵の中から脱出し、外で待っていたサラをティアごと抱えてその場から逃げる。

「ちよっ! リイン!」

「話は後です。来ますっ!」

驚くサラを一喝してリインは注意を促し、それは来る。

ダルマにされ「核」を剥き出しにされた龍神兵の下に変わらず流れ続ける「塩の力」。

凄まじい霊力が集まり、龍神兵は塩の結晶を内側から増殖させて埋もれていく。

「もしかして失敗したの?」

「それ以前の問題です」

龍神兵を中から見て触れた分かったこと。

「あれは「塩の杭」を作るためのものじゃありません。「塩の杭」はそれを錬成するための通過点に過ぎなかったんです」

今まであった気に留めてなかった符号がようやく繋がリインは理解する。

目の前でゆっくりと塩の結晶で埋め尽くされた龍神兵は起き上がる。

「グノーシス……これが目的だったのか」

かつて《D∴G教団》のアジトを整理していた時に知ったグノーシスの原材料プレロマ草のことを思い出す。

プレロマ草は《幻の至宝》の眼となる依り代。

つまり《幻の欠片》がそこに含まれており、薬として国民に撒き散

らされた「幻の因子」は「塩の杭」の錬成に伴い集束させられた。

「サラ教官……教官は二人を連れてここから降りてください」

「リイン？」

「ここから先は俺の領分です」

緊張を孕んだリインの横顔にサラは息を呑み、事態の深刻さを理解する。

龍神兵は中から食い破られるようにその姿を変貌させる。

「これが《D::G教団》が追い求めた「神」」

《輝く環》と融合したワイスマンのような異形によく似た風貌。

《白の虚神》——デミウルゴスがここに産声を上げた。

78話 塩の大地XI

8月23日月曜日。

その日、ノーザンブリアに26年前の災厄が再び現れた。

否、その猛威は26年前のものを遥かに超えていた。

大気が塩化して雪のように振る穏やかなものではない。

白く巨大な竜巻。

杭が現れた時間差はあったものの、それまでの静寂は嵐の前の静けさだったと言わんばかりに天災としてそれは現れた。

塩で飽和した大気が為す颯風は結晶化した塩を津波の様にハリアスクの街に押し寄せ、それまで築いてきた人々の営みを容易く呑み込む——ことはなかった。

塩の津波は何処からともなく現れた《灰の巨人》によって斬り裂かれハリアスクの街はひとまず護られた。

「もう終わりだ……」

しかし誰かがそんなことを呟いた。

直前の津波でも絶体絶命の危機を感じたが、その向こうに現れた“白い巨人”を目にして安堵は一瞬で消え去った。

まるで“神”のような神々しさ。

困窮したノーザンブリアに降臨してくれた“救いの神”だと思うよりも、その姿から感じてしまうのは人々を滅ぼす“荒ぶる神”。

ノーザンブリアの人々は我先に逃げ出す——ことはなかった。

むしろようやくこの煉獄のような苦しみから解放されると安堵する者さえいた。

“神”はそんな人々の願いに応えるようにその力をハリアスクに向けて——《灰の巨人》がそれを阻むのだった。

・*
・*

「何とか間に合ったか……」

騎神の中でリインは息を吐き、ヴァリマールを通して前に浮かぶ《白の巨神》を睨む。

“塩の杭”の錬成を下地にし、グノーシスに含まれる因子を治療と言う名目で細分化してばら撒いたものを集めることで錬成した失われた《幻の至宝》。

「まさかこんなところで《幻の至宝》が復活するなんて……」

結社が関与していないから意識の外にあったとはいえ、前回の帝都での一件に引き続いての失態にリインは齒噛みする。

「リン、ゴスペルのオーブを作ってあいつが振り撒いている“塩化”を中和することはできるか？」

「可能です。ですが、ヴァリマールの霊力の二割を使うことになりませんがよろしいでしょうか？」

「構わない。やってくれ」

リインの要請を受けてリンはオーブを生成する。

導力魔法として起動したゴスペルの波動はヴァリマールを中心に広がって、塩化した大気の広がり抑制する。

「行けるなヴァリマール？」

『……………』

返事はない。

テスタロツサと同化した影響によるものだが、彼の意志がない分の性能の低下、そしてゴスペルを起動していることを考えると苦しい戦いになるだろう。

それに――

「今度は一人か……」

目を伏せて思い出すのはリベル・アークで《環》と融合したワイスマンと戦った時。

あの時とは違い、至宝と対等に戦える《騎神》があるのに何故カリインの胸には頼もしさはなかった。

「そんなことを言っている場合じゃない――ん……？」

気持ちを切り替えようとしたところで胸の《聖痕》が疼き、モニターに見慣れぬ表示が映る。

「戦術リンクの要請？ 接続先はクリス達と——アーク・ルージュとロストゼウム……」

クリス達の後に並んで出て来た選択肢にリインは顔をしかめた。既存のシステムを取り込んで騎神のものに落とし込んだことは軽く驚くが、その要請はとも認められるものではない。

「戦術リンク拒否——準起動者のシステムは凍結」

モニターを操作して戦術リンクのシステムを丸ごと停止させる。

《聖痕》を通して感じる破壊衝動はそれだけでひとまず大人しくなってくれる。

「今、お前達を外に出すわけにはいかないんだ」

抜け殻だと思っていたが、《灰》と《緋》に触れたことで生まれた変化は予想もつかない。

そんな不確定要素に頼るわけにはいかないとリインは今度こそ気持ち切り替えて虚神に向き直る。

「オオオオオオオオッ！」

虚神は咆哮を上げるとその周囲にいくつもの魔法陣が浮かび上がる。

「っ——」

導力魔法の「クラウド・ソラリオン」に似た導力波による砲撃。

《灰》に狙いを定めず乱れ撃った砲撃は白く染まった大地を削り、山を粉碎し、街を破壊しようとする降り注ぐ砲撃は《灰》によって切り払われる。

「六の型、孤影斬・三連！」

後手に回れば守るものがある分不利になると考え、三つの剣閃を放つ。

三つの剣閃は虚神の目の前でぶつかり合って大きな竜巻を引き起こし、それが纏っていた塩風の竜巻を無理矢理引きはがす。

さらに《灰》は空を疾走して己が作った竜巻の中に飛び込み、動きを止めた虚神との間合いを詰めて剣を一閃する。

「——躲された!?!」

剣閃からの波状攻撃を虚神は紙一重で躲し、カウンターの拳を振

る。

「遅い——っ!？」

躲したと思つた直後、龍神兵の名残の尻尾が《灰》を横殴りにした。操縦席で激しく揺さぶられたリインは追撃の砲撃を切り払いながら今の攻防を分析する。

「動き自体は決して速いわけじゃない……かと言って動作が洗礼されている巧さがあるわけじゃない。むしろ隙だらけ……」

虚神の間断ない攻撃を捌きながら違和感の正体はすぐに理解する。

「これは未来を見ているのか……」

的確な砲撃で反撃の暇を与えようとしない虚神にリインはそう結論付ける。

リインが扱う《識》とは比べ物にならない精度。

もはや未来予知とも言えるその力は《灰》のあらゆる動きを見透かし、さらには——

「剣……?」

虚神の腕から真っ白な刀身の剣が突然生えるように現れる。

それを握ると虚神は見覚えのある構えを取り、次の瞬間三つの剣閃が飛んできた。

「なっ!？」

それはリインが使う孤影斬。しかも三つの剣閃をぶつけ合わせることで竜巻を生じさせるもの。

一目見るだけでその技の構造を理解した虚神は当然剣閃を放つだけに留まらず、その嵐の中を突っ込んで来る。

「舐めるなっ!」

迫る刃にリインは応戦して太刀を振る。

が、螺旋の力を乗せた一撃に《灰》は太刀ごと吹き飛ばされる。

「螺旋撃まで……何て奴だ……」

まだ見せていない技まで模倣されたことにリインは戦慄する。

しかも今のは《螺旋》に加えてリイン以上の「怪力」から繰り出された一撃だった。

さらには突然《虚神》の姿が揺らいだかと思うと、目の前に真っ白

なヴァリマールが現れる。

「何の冗談だこれは……」

思わず愚痴を零してしまう。

だがリインの動揺を他所に《虚神》は《灰》に襲い掛かる。

「っ——」

堂に入った剣戟。

しかも自分のそれと寸分違わない太刀筋に加えて未来予知、《騎神》の鈍さも相まってリインは防戦を強いられる。

「このままじゃ……押し切られるか………すまないヴァリマール」

《紅葉斬り》の一閃が《灰》の左腕を斬り飛ばし——直後《虚神》の左腕も宙を舞った。

「——っ！」

予知していなかった痛みにも声なき悲鳴を上げて《虚神》は身悶える。

「ぐっ……どうだ当てたぞ」

フィードバックされた痛みを歯を食いしばって耐えながらリインは強がるように呟く。

ネタは簡単、《虚神》が攻撃を当てた瞬間にカウンターで太刀を振るっただけ。

攻撃を当てる未来と攻撃を躲す未来を両立できるかどうかは賭けだったが、リインはその賭けに勝つことができた。

しかし——

「——」

周囲の景色にノイズが走り、斬られた腕の因果がなかったことにすり替わる。

「——鬼気解放」

その光景を前に《灰》はリインが出力を上げた霊力によりゼムリアストーンのを合金を増殖させて左腕を修復させる。

その様子に《虚神》はわずかに怯むが、咆哮を上げて《灰》に襲い掛かる。

《灰》の右腕を断ち切る。《虚神》の右腕が拳に打ち砕かれる。

《灰》を袈裟切りにする。《虚神》の胴体が真っ二つに斬り裂かれる。

影を渡り《灰》の背後から連撃を浴びせる。技が終わるその瞬間を狙い澄ましたように《灰》の一突きが《虚神》の喉を貫く。

「まだだっ！」

肉を斬らせて骨を断つ。

我慢比べではノーザンブリアの霊脈に繋がっている《虚神》の方が圧倒的に有利であり、人の器程度の霊力しか持たないリインが負けるのは自明の理だった。

だからこそ《虚神》は困惑する。

すでに《虚神》は《灰》が負ける姿は見えている。なのにその未来が揺らぐ。

「――」

斬られる度に走る痛みが《虚神》の動きを鈍らせる。

「オオオオオオッ！」

騎神越しに聞こえてくる雄叫びに《虚神》は身を竦ませる。

身を逃がすようにして半端に振った太刀は必中だったにも関わらず、躲され《灰》の反撃に腕を斬り飛ばされた。

そこからはもう一方的だった。

最初の攻勢が嘘だったかのように《虚神》の攻撃は躲され、一方的に《灰》の攻撃が《虚神》の身体を削っていく。

未来が見えても、最適な行動が解かっているにもかかわらず、わずかな怯みによるズレを《灰》はこじ開けて《虚神》が見ている未来を強引に変えてしまう。

「――」

ついには《虚神》は写し取った《灰》の姿を捨てて《灰》から距離を取る。

「逃がさない。鳳凰烈波っ！」

逃げようとする《虚神》に追い縋り焰の一撃を叩き込む――が、その一撃を《虚神》は白羽取りで受け止める。

「っ――」

それだけに留まらず、《虚神》に触れられたゼムリアストーンの太刀はその刀身を白く染められ、塩となって崩れ落ちる。

「く——」
さらには眼前で《虚神》の目が光ると、それは光線となって《灰》を吹き飛ばした。

「——」
追い打ちを掛けるように《虚神》の腕に炎が宿り、鳳凰となって《灰》に向けて撃ち出す。

「まだだっ！」

リインは咆える。

それに呼応するように刀身を失った太刀を補う様に霊力の刃が生まれる。

「鬼炎斬っ！」

リインの太刀筋から読み取れなかった知らない技。

しかも霊力の刃を伸ばして間合いを無視した一撃は完全に《虚神》の意識の範疇外。

横薙ぎの炎の一撃を《虚神》は躲すことはできず——光の壁がその一撃を受け止めた。

「くっ……」

渾身の力を込めた一撃が防がれたことにリインは歯噛みし、息を整えた瞬間——

光の壁——鏡に映った《灰》は横薙ぎの剣閃を受けて胴から両断された。

・*

意識が暗い闇へと堕ちていく。

負けたのだと自覚して、それを否定しようとして体に力を込めても意志に反して体はまるで重い鉛になったかのように応えてくれない。

「俺が……戦わないと……俺に……俺しか……」

うわ言を繰り返しながら、意志だけで身体を動かそうとするがどれだけ精神論で気力を振り絞っても最早彼には体を動かす力は残っていない。

それでも戦わなければいけない。

ただそれだけを念じるリインに見知らぬ声が掛けられる。

「違う……そうじゃないの……」

「……………誰……………だ……………」

顔を上げる。それだけでも重労働な動作をしながらリインは声の主を探す。

霞んだ目に見えるのは暗くなった騎神の操縦席。

その暗い闇を照らしているのは胸を突き破って生えた白い結晶の淡い光。

「っ——塩化……」

いくら拮抗薬を飲んでいても「塩の杭」となった《虚神》による塩化はそれを上回ってリインを侵す。

「まだ……まだ……死ねない」

身体の芯から塩になっていく感覚。

ワイスマンの経験でしかしらなかった終わりの気配にリインは抵抗するが、それも虚しくリインは白い結晶に呑み込まれ——ノイズが走った。

「かはっ——」

全身が塩になって砕ける経験から引き戻されたリインは詰まった息を吐き出す。

「今のは……っ——」

生々しい白昼夢だったが、胸には白い結晶が生え出して来る。

「くそっ……」

先程よりも意識ははつきりしていたが、それで事態は何も好転しない。

「塩化」に對抗できる力はもうリインにはない。あるのは……

「……………どうしてこれがここに……」

いつの間にか右手に握っていた瓶に目を落としてリインは訝しむ。紅い錠剤が詰まった瓶。

それは旧校舎の金庫に保管していた《紅い叡智》に他ならない。

耳鳴りが何かを訴えるようにリインの耳朶に響く。

「……………いいだろう」

逡巡は一瞬、リインは器用に片手で瓶の蓋を取り、塩化でまともに動かない体を無理やり動かして《紅の叡智》を全て飲み込んだ。

「っ——」

即効性の薬の効果はすぐに現れ、リインの身体は大きく痙攣し意識が遠のく。

気付けばリインは一人荒野に立っていた。

見渡す限りの“塩の大地”が広がった景色。

一見穏やかな光景に見えるが、澱んだ泥がその下にあるのを何となくに察してしまう。

——いたい……………くるしい……………おなかすいた……………

——どうしてわたしがこんな目に……………みんな同じ目に会えばいいのに……………

——もう死にたい……………

様々な声が重なり合つて呪詛の様にリインの耳を犯す。

正気を失つてしまいそうな幻聴を振り払い、顔を上げるとそこには見知らぬ女性がいた。

「キーアちゃん？」

眩いて違うと否定する。

リインが知っている彼女は年下の女の子。目の前の女性は見るからにリインよりも年上で髪の色も違う。

女性はただリインに微笑みかけ、抱いていた布に包んでいた赤子をリインに差し出した。

「この子は？」

差し出されるがままにリインはその赤子を受け取ると、白い女性は嬉しそうに微笑む。

「遥かなりし異郷の果てに其方が立ち向かってくれたお陰でしょう……………

ありがとうございます——私の願いを聞き届けし者よ……………これで……………ようやく眠れます」

リインの疑問に応えず、女性は目を伏せ、満ち足りたような顔をして呟く。

「その子のことをどうかよろしくお願いします——」
そう言い残してその女性は光の粒子となって消えてしまう。

残ったのはリインの腕の中で目を瞑り、耳を塞いで震えている小さな赤子だけ。

「……………本当にまだまだ修行が足りないな」

自嘲するようにリインはただ戦って大きな力を排除しようとしていた自分を恥じる。

——いたい……………くるしい……………おなかすいた……………

——どうしてわたしがこんな目に……………みんな同じ目に会えばいいのに……………

——もう死にたい……………

周囲にはまだ怨嗟の音が木霊し続けている。

リインでも辟易して気が狂いそうな澱んだ感情の坩堝。

この子はただノーザンブリアの人々の声に応えただけに過ぎない。

リインは周囲の声から護る様に赤子を抱き締め——新たに生まれた《至宝の子》を祝福した。

・*

『君の影〜♪』

歌が頭に響く。

ただ呆然と二つの巨人の戦いを見守っていたノーザンブリアの人達に聞こえて来た場違いとも思える歌。

その歌が切っ掛けで巨人の戦いに変化が起きる。

勝ったはずの《虚神》は倒れた《騎神》の核を握り潰そうとしたまま動きを止めた。

剥き出しに抉り出され白く染まった“核”は、次の瞬間触れた《虚神》の腕を巻き込む様にゼムリアストーンの結晶を増殖させた。

その結晶は瞬く間に《虚神》を包み込む。

だが、その勢いはそれだけに留まらず《虚神》の足から「塩の大地」へと広がっていく。

「何やこれ……」

「塩の杭」の出現に伴い、いち早くそこに派遣されたケビン・グラハムはメルカバで空からその光景を見る事になり息を呑んだ。

《灰の騎神》を中心に広がっていくゼムリアストーンの結晶。

その勢いは留まることを知らず、ノーザンブリアの国土に広がっていく。

止める間もなくその結晶はハリアスクの街を飲み込んだ。

ケビンの脳裏に資料で見た「塩の杭の異変」の結末が通り、最悪の結果を考えてしまう。

しかし、その懸念はすぐに杞憂に終わった。

ノーザンブリアの全てを飲み込んだゼムリアストーンの結晶は次の瞬間、音を立てて砕け散る。

大気に溶けるように砂になるまで細かく砕け散ったゼムリアストーン
の結晶。

残ったのは「白」がなくなったノーザンブリアの景色だった。

「まったくどういう奇蹟を起こしたちゅうねん」

ズタボロのスクラップと化した《灰の騎神》の肩の上に何かを抱えているリインの姿を見て、ケビンは呆れるように息を吐き出した。

79話 塩の大地Ⅱ

帝国時報号外。

リン・シユバルツァーが通うトールズ士官学院に導入された《特別実習》を取材するべく当社はノーザンブリアへと赴いた。

中略

《ノーザンブリアの現状》

《不当な逮捕!?! ノーザンブリアの怪しい影!?!》

《塩の杭の再来!?!》

《『灰色の騎士』 ノーザンブリアを救う!》

《紅き翼カレイジャス、ノーザンブリアの救援にいち早く駆け付ける》

《憲兵団長シャトラールによるノーザンブリアの議員の告発!》

また当社の記者が《灰色の騎士》の戦いの一部始終を導力カメラに収めることに成功した。

その内容の公開は現在帝国政府に打診している。

・*

「ノーザンブリアの民よ。初めまして私はオリヴァルト・ライゼ・アルノールだ」

日が落ちたハリアスクの街。

通商会議後にお披露目するはずだった《紅き翼カレイジャス》の甲板でオリヴァルトは名乗りを上げる。

「この度は二度目の災厄に見舞われた君達に私達は少しでも何かの助けができないかとして馳せ参じさせてもらった」

堂々と演説する彼に対してノーザンブリアの人々は感謝の念よりも先に罪悪感から目を逸らす者達の方が多かった。

課外授業に来た士官学院生たちに対する私的な暴行。

貧困に喘ぎ、『減塩計画』の失敗のストレスの捌け口にした所業。

証拠さえ残さなければどうとも言い訳ができると考えていたが、その計画は色々な意味で破綻してしまった。

さらに言えばそれを主導した議員達は「塩の杭」が発生すると我先にとハリアスク基地に建築された地下シェルターへと逃げ込んでしまい、オリヴァルトを正式に出迎えることさえできないのが現状だった。

「紅き翼」に保護された学生たちの証言次第で自分達の未来が決まってしまうのだとハリアスクの市民は緊張した面持ちでオリヴァルトの言葉を待つ。

「ふっ……何やら些細な行き違いがあったようだが、そんなことよりも——」

そんな市民の不安を気にせずオリヴァルトは不敵な笑みを浮かべる。

「君たちは我が国の『英雄』の力をその目で見てくれただろうか？」

その言葉に市民たちはざわめき始める。

「帝国の伝説にある《巨人なる騎士》、それを駆ったのは帝国の最も新しい『英雄』リイン・シュバルツァー……」

彼の働きにより、君達を苦しめていた『塩化』という呪いは祓われた。君達はもう自由だっ！」

オリヴァルトの宣言によって、ようやくその事実を呑み込めた市民たちは一斉に歓声を上げる。

「しかし、ノーザンブリアに残された傷は深く君達にはこれからも苦難の日々が待っているかもしれない……」

だが今宵だけはこのめでたい日を私達にも祝わせて欲しい」

オリヴァルトの声に合わせてカレイジャスの下部ハッチが開き、中から紅い機械人形がコンテナを抱えて現れた。

「君たちを送る支援物資は十二分に持ってきた。ノーザンブリアの市民たちよ！」

今宵は宴だ！ 存分に食べて飲んで、この奇蹟の日を祝ってくれたまえ！」

機械人形は次々に食料を満載にしたコンテナを外に出していく。

その量は膨大で、とても一機の飛行艇に積める量ではないのだが、目の前に並べられた食料の数々に市民の思考は疑問に感じる余裕はなかった。

貧困に喘いでいたノーザンブリアの市民たちにとって夢のような光景。

それに耐えられるわけがなく、再び歓声は上がる。

こうしてオリヴァルト皇子によるノーザンブリア併合の第一歩が始まったのだった。

「ふう……」

演説を終え、祭りの始まりを見届けたオリヴァルトは艦内に入ると迷いのない足取りで格納庫へと向かう。

新造の格納庫には二つの不釣り合いなものが存在していた。

一つは《灰の騎神》ヴァリマール。

その姿は見るも無残に変わり果て、左腕は消失し上半身と下半身で二つに分かれていた。

さらにそれだけに留まらず美しい光沢を誇っていた装甲は風化したように崩れ中のフレームや《核》が剥き出しとなっていた。

《騎神》のダメージは起動者にフィードバックされる。

その事実を知っていると思わず目を背けてしまう惨状。

しかし、目を背けたその先には彼がいた。

「助かりましたオリヴァルト殿下」

格納庫に不釣り合いな二つ目のもの——《大樹》に背中を預けて蒼白な顔で赤子をあやしていたリインはやってきたオリヴァルトを出迎える。

「えつと………《魔獣の肉》をください」

彼の背後でカレイジャスの機関員が恐る恐ると言った様子で《大樹》に話しかけると、それは発光して彼が持つ箱に《魔獣の肉》を現出させる。

機関員はその光景に戸惑いながら、《大樹》が造り出した食料を外へと運び出す。

オリヴァルトにとっては《影の国》で経験したことなのだが、改め

て見るとシユールな光景だと他人事の様に感想を抱く。

「大丈夫なのかい？　いくらノーザンブリアの人達のためとはいえ、大樹”を使つて食料を供給するのは負担になるんじゃないかな？」

「いえ……今はむしろ霊力が飽和している感じで……こうやって消費してくれないとろくに休めないくらいに圧迫されているんです」

まるで食べ過ぎて胸焼けを感じるような素振りであり、リインは現状を簡単に説明する。

《幻の至宝》がノーザンブリアを再生する力を使ったのは良いが、ヴァリマールと自分をその触媒に使つた為、その余剰エネルギーがリインの中に渦巻いていた。

何らかの形で発散させなければならぬ程の負担であり、ヴァリマールの修復に使おうとしても何かが邪魔をしてそれもできない状況だった。

直接”大樹”を外に出現させるだけの力を得たが、それをやると混乱は目に見えていたのだが、そこにオリヴァルトがカレイジャスと共にやってきて回りくどくはあるが、霊力を発散する機会を得ることができた。

「やれやれ君は本当にノーザンブリアの救世主だな……ところでその髪と目は……」

「ええ……どうやら戻らないみたいです。でも、大丈夫です」

視界の端で揺れる白く染まった髪と、事前に鏡を見て知った赤い目にリインは苦笑する。

グノーシスを一度に大量摂取した影響として残ってしまった外見的な変化。

まるで《鬼の力》を使った時のような状態になっていることにリインは違和感を覚えて苦笑を浮かべて誤魔化す。

「それはそうと救世主はやめてください。ノーザンブリアを浄化したのはこの子に宿っていた《幻の至宝》の残留思念なんですから」

そう言つてリインは抱いていた赤子に視線を落とす。

すやすやと穏やかな寝息を立てている小さな女の子。

「ふむ……いろいろ改めて聞かなければいけないことがあるみたいだ

けどリン君。これだけは先に教えてくれないかな？」

「はい、何ですか？」

真面目な顔をしたオリヴァルトにリンは佇まいを改めて向き直る。

「その子はいつたい誰の子供なんだい!? ボクとのことは遊びだったって言うのかい!？」

その言葉は謙遜に満ちていた格納庫によく響いた。

「……………ミユラーさん」

足を投げ出すように座り込み、両手で赤子を抱えていたリンは静かに彼の名前を呼ぶ。

「承った。さあ、お前はこっちに来て配給の手伝いをしろ」

「あ、ちよつとミユラー」

「今日は無礼講なのだろう？ 特別に今日は歌うことは許可してやろう」

「それは嬉しい提案だけど待ってくれたまえ。まだリン君に破甲拳をされてないんだ……………あくれ」

ミユラーに首根っこを掴まれてオリヴァルトはその場から連れ去られるのだった。

・*

街が宴の喧騒に賑わう一方、ハリアスク基地の中を歩く三人がいた。

「えつと……………」

ケビン・グラハムは監獄の中を首を竦ませながら歩いていた。

「そ、それにしてもこんな美人なお二人にエスコートしてもらえるなんて役得やなあ……………なんて……………」

漂う空気を払拭させようとケビンは軽口を叩いてみせるがそれは逆に二人からの威圧感を強くさせた。

「口を開かないでもらおうか教会の犬。本来なら貴様をここに入れるなどとても容認できることではないのだから」

「同感ね。『塩の杭』を利用して武器を造っていたくせによくまあノーザンブリアにそんな顔で来れたわね」

前を歩くアプリリス。後ろを歩くサラ。

二人はケビン——教会の人間への不信感を隠しもせず嫌悪の念をケビンにぶつけてくる。

「とほほ……」

最初にリインがフォローしてくれなかったら合流して名乗った時の殺気を考えればまだ穏やかな対応。

クロスベル方面でいつでも動けるように待機していたからこそケビンは出現した『塩の杭』にいち早く駆け付けることが出来たというのにこの仕打ちはあまりに酷くないのかと嘆く。

と嘆いてもこれは全面的に七耀教会が根本の原因にあるのでケビンにできることは彼女たちの非難を甘んじて受け入れるしかなかった。

「先に言っておくが、教会はもちろん遊撃士にもゾラ先生を引き渡すつもりはない」

「本気で言ってるのアプリリス？ そいつは十中八九『D∴G教団』の幹部よ。奴等のでしてきたことはさっき話したはずよ」

「知ってるさ……だがあえて言わせてもらおうならゾラ先生はこの地に希望を与えてくれた。その恩を仇で返すつもりはない」

「そいつの目的があつた『虚神』だったとしても？ 実験だって何人死んだのよ？」

「126人だ」

「え……？」

まさか即答で答えが返って来るとは思ってたサラは思わず言葉を止めてしまう。

「当時の殲滅作戦のことに異を唱えるつもりはない。だが、この地で行われた実験は全員が志願者だ……」

例え非道な実験だったとしても、その結果『塩化』に対しての薬は作ってもらった。その事実は確かなんだ」

「……………志願者ってことはあんたもそうだったの？」

「ああ、正常な人間が『塩化病』を発症する原因を探るためにわざと塩の杭の残留物に触れた……」

あまりに浸食が早くて二度ほど失敗して腕と足を失ったのだがな……」

複雑な声をもらしてアプリリスはかつて義手だった傷一つない腕を撫でる。

「怪人は『塩の杭』の完成と共に死ぬはずだったのだがな」

「あはは、死に損なった気分はどんなものかしら？」

あえて揶揄う調子でサラは笑ってみせる。

前を歩くアプリリスの表情は分らない。

アプリリスはサラの問いに応えず、そこで会話は止まって三人は黙々と歩を進めた。

「……ここだ」

ハリアスク基地の地下。

《D∴G教団》の司祭が造り出した研究室を前にアプリリスは振り返る。

「もう一度言っておくが、彼をお前達に引き渡すつもりはない。武器はここで預からせてもらう」

「ま、とりあえず今はそれでええよ」

その指示に逆らわずケビンはボウガンをアプリリスに渡す。

今は話し合いだけで充分。

『塩の矢』についての案件も、聖具《グレイプニル》の使用許可を得てやって来ることになっている古株の守護騎士に任せるつもりで武装解除に応じる。

「あたしも異論はないけど……話次第では一発殴るからね」

サラもそれに応じてアプリリスにブレードと導力銃を渡す。

「確かに……」

アプリリスはそれをひとまとめに抱えてドアを開く。

「……………えっ?」

三人の目に飛び込んできたのは荒れた室内だった。

床に散らばった本に、割れた試験官のガラス。用途不明な術具らし

きものも無造作に床に散らばっている。

部屋に刻まれた刃傷。

刃がついた鞭を一閃して薙ぎ払ったかのような惨状。

そして荒れ果てた床には血の跡まであった。

「おい」

「アプリリス」

「ああ」

短いやり取りでアプリリスは頷いてそれぞれの武器が返す。

床についた血痕は奥の扉へと続いており、三人は足早にその後を追う。

壁に穿たれた無数の銃痕を横目にサラ達はとにかく急ぐ。

しかし、彼女たちの思いは空しく彼は無残な姿で発見された。

無数の巨大なガラス管が立ち並ぶ広い空間に、大きなレバーにもたれ掛かるように死んでいる男。

「あかん……背中から一突き。時間もだいぶ経っておる」

駆け寄ったケビンがすぐに診るが冷たくなっていた体に行き届くことはないと目を閉じる。

「そんな……」

「っ……誰がこんなことを？」

アプリリスは恩人の死に絶句し、サラは憤りを露わにする。

「ぱっと見ただけで判断するなら最低三人の下手人がいたことになるやろうな……」

「しかもその内の一人はおそらく教会の騎士や」

「何だと……」

誤魔化さずに告げたケビンの推測にアプリリスは瞋を上げて彼の胸元を掴み上げる。

「どういうことだ!? お前達はまた!」

「っ——この人に付けられた傷ときっきの部屋を荒らした一撃は『法剣』のもの。だけどそれ以上のことは——ぐっ」

「落ち着きなさいアプリリス。犯人は『法剣使い』だけじゃないわよ。その内の一人はたぶん猟兵に近い奴よ」

ケビンを締め上げる腕を横からサラが掴んで放すように促して、彼女の推論を述べる。

「壁にあった無数の銃痕はマシンガンかガトリングガンみたいな連射が利く導力兵器よ……」

「少なくともそれらは《七耀教会》が使う武器じゃないわ」

「サラ……っ——」

アプリリスは悔しそうに顔を歪ませてケビンから手を放す。

「三人目が何者かは分からへんけど、止めを刺したのは『法剣使い』じゃないのは確かや」

「『法剣使い』……それに連射の利く導力兵器……三人……まさかね……」

今の状況で読み取れる犯人にサラはあるテロ組織を思い浮かべるが、それを否定する。

ここはノーザンブリア。帝国を中心にテロ活動をしている彼らがここにいるとは思えない。

しかし、思う。

帝都で《暗黒竜》を復活させた彼らが、《虚神》を復活させた真犯人である可能性を。

「アプリリス、悪いけどその人を吊つたら、何か盗まれたものがないか確認してもらえる？ あんたができないならシャトラールかクレドに頼むけど」

「……………いや大丈夫だ」

唇を噛み締めアプリリスはゾラの亡骸を丁寧に寝かせてから、犯人に繋がる証拠を探し始めた。

結論から言えば証拠は見つからなかった。

そして『塩』からガーゴイルを作るための装置、正確には七耀石から『魔獣』を作り出す術式を刻んだクオーツがなくなっていることが判明した。

・*

「……今回の特別実習はハードだったね」

お祭り騒ぎの街をカレイジヤスの一室から眺めながらクリスはぽつりと呟いた。

「ハードなんてものじゃないわよ」

「そうだよ。もう何度ももうダメだと思ったよ」

クリスに反発するようにアリサとエリオットは疲れた返事をする。宛がわれた客室のベッドにだらしなく寝そべる二人は精魂尽きたように脱力してこれまでのノーザンブリアでの日々を思い返す。

「二人ともだらしない」

そんな力尽きた二人にフィーは容赦のないダメ出しをする。

「むしろ何で二人はそんなに元気なのよ」

「リインも配給を始めちゃうし、三人共どんな体力しているの?」

「いや僕達も割と限界なんだけど……」

エリオットのぼやきにクリスは苦笑しながら応える。

三日間の特別実習。

それも初日から牢屋に入れられたり、二日目は徹夜で戦い続けて今に至るためまともに休んでいない。

一般人よりも鍛えているクリスとフィーも体裁を整えるだけの余裕があっても、腹ごしらえをしてベッドに横になったら一瞬で深い眠りに落ちてしまうだろう。

「眠いなら無理して起きてない方が良いんじゃないかな?」

「そうなんだけど……何か目が冴えちゃって」

「分かります。あんな奇蹟を目の当たりしたわけですからね……ふふふ」

アリサに同意してクリスは顔をほころばせる。

苦しい戦いだった。

クリス達が戦ったシャトラールは強く、尖った部分のない万能型。

三人で繋げた戦術リンクの連携で何とか食い下がったものの、戦況は拮抗して最終的には“塩の杭”の錬成が始まり“魔人化”が解けて時間切れ。

勝敗は有耶無耶になってしまった。

しかし、その不完全燃焼を吹き飛ばすような奇蹟を目の当たりにしたこと。

そしてこうして一段落して落ち着いて振り返ると、「英雄」を目指してⅦ組に入ったクリスは興奮せずにはいられない。

「超帝国人の奇蹟……まさか本当にやるとは思わなかった……」

「流石リインさんですよ」

呟いたフィーに全面的に同意して何度も頷く。

「それにしても……」

エリオットが思い出すのは最終局面、ヴァリマールが「虚神」に倒された後のこと。

頭に直接響いてきたリインの歌。

プロのように技量が高いわけではないが、それでも心に響く歌にエリオットは場違いな嫉妬を覚えた。

「エリオット、どうかした？」

「ううん、何でもなし」

言葉を止めたエリオットにクリスは首を傾げる。

エリオットは適当に誤魔化してリインに感じた嫉妬を押し隠す。

あれ程に心を揺り動かす音楽を奏でたことはエリオットにはない。積み重ねる技術によるものではない、才能の発露。

リインが音楽の道に進まないことに安堵しているのか、憤りを感じているのかエリオットには分からなかった。

「——失礼」

不意にドアをノックして二人の青年が部屋に入ってきた。

「シャトラールさん、それにクレドさん……体の方はもう良いんですか？」

「ああ、おかげさまで……塩化のなくなった体がこんなに軽いものだったと久しぶりに思い出せたよ」

憑き物が落ちた様に微笑みを浮かべるシャトラールはそのまま一同に向けて膝を着いて頭を下げた。

「この度は君達に多大な迷惑をかけたことを謝罪させて欲しい……」

そして勝手な願いになるがこの咎は自分の首だけで納めてもらい

たい」

そう言つてシャトラールは携えていた剣を捧げるように差し出した。

「シャトラールさん……」

実際のところ、挑発するように言われていた帝国への宣戦布告は実際に行われていなかった。

あくまでもサラをその気にさせるためのブラフ。

彼らの計画では錬成された『塩の杭』はティアが塩化病で碎け散ると共に消失し、ノーザンブリアの人々に現在の体制がいかにも壊れやすいものかを知らしめるつもりだった。

『白の虚神』の出現はもちろん、彼らは『塩の杭』を完成させる費だったはずなのに生き永らえてしまった。

『塩の杭』の錬成にしても首謀者が死亡したとなれば他国からの責任追及も有耶無耶にできたのだが、生き永らえてしまった以上誰かが責任を取らなければならぬのはある意味必然だった。

「お前らがこいつの首を斬れないって言うならオレが代わりにやつても良いんだぜ」

シャトラールの背後に控えていたクレドは悪ぶった素振りで見抜く。

「裁かれるならラインさんに頼まなかつたんですか？」

「彼には既に話した。しかしこの一件については君に一任したと聞いている」

——ラインさん、それって丸投げじゃ……

無責任な押し付けにクリスは顔を引きつらせるが、すぐにそれを改めて仲間たちに視線を送る。

「みんな、僕に考えがあるんだけど任せてもらえるかな？」

「良いわよ。この中だと貴方が適任だし」

「うん。それで良いと思うけど」

「どんな風に落としどころを決めるつもり？」

クリスの意見に仲間たちは頷き、改めてシャトラールに向き直る。

「命は惜しくないんですか？」

「すでにこの身はノーザンブリアのために捨てる覚悟はしていた。それが少しだけ長引き、最後に希望が見れたのなら思い残すことはない……」

それにこれまで犠牲になってくれた者たちのことを思えば、次は私の番だと言うだけのこと」

「そうですか……」

差し出された剣を取り、クリスはそれを品定めするように眺める。

「良い剣ですね」

「気に入ったなら差し上げよう」

「いえ、それは結構です。それでは覚悟は良いですね？」

「——ああ」

顔を下げたままシャトラルは最後の時に備えて目を瞑る。

しかし、次に来た衝撃は首ではなく頭にだった。

「っ!？」

剣の腹でシャトラルの頭を強打したクリスは不敵な笑みを浮かべ宣言するように口を開く。

「捨てるというのならその命、僕がもらおう」

有無を言わせない一方的で高圧的な言葉。

「し、しかし——」

「自然発生した二度目の災厄、そう僕達が口裏を合わせれば良いだけのことだ」

洩るシャトラルにクリスはそう言い切る。

「僕達が目指したのは誰も失わない結末だ。だから貴公の献身は認めない……」

自分が許せないというのなら今後の働きで返してもらおう……

ノーザンブリアについてはできる限りの便宜を図る様に皇帝陛下と宰相に伝えておこう……

差し当っては僕の名を刻んで忠誠を誓ってもらおうか、クリス・レンハイム。これから君の主になる者の名だ」

そう言ってクリスは握った剣を返すように突き出した。

「——はっ」

シャトラールは見上げたクリスの顔に言いようのないカリスマを感じ、恭しくその剣を受け取るのだった。

そんな彼らを他所にアリサ達は顔を突き合わせて小声で言葉を交わす。

「ねえ、これって……」

「うん……シャトラールさん。クリスの正体を知っているわけじゃないから」

「なるほど……これが愉悦なんだ」

アリサ達はシャトラールに同情の眼差しを送るのだった。

・*
・*

「はあ……それにしてもしんどかったわ」

《ダンデリオン》の大きなテーブルに身を投げ出してサラは疲れを訴える。

「悪かったとは思っている」

「ああ、だがノーザンブリアや“北の猟兵”を生かすために俺達にできることはあれしかなかった」

申し訳なさそうにアプリリスは謝罪し、それに続いてシャトラールが言い訳をする。

「って言うか、結局あのリイン・シュバルツア―って奴は何だったんだ？」

配給された酒瓶をそのままラツパ飲みしているクレドが尋ねる。

「何って……どういう意味よ」

「そのままの意味だ。俺達が散々積み重ねたものをあっさりと乗り越えて行きやがって……」

いろいろ納得がいかねえがこの酒に免じて不問にしてやるがな」

「上から目線で言ってるんじゃないわよ」

偉そうにするクレドにサラはため息を吐く。

「でも私も気になります。本来なら私の命を使って出すはずだった結果を、それ以上にして叶えてくれた人だから……」

「まだちやんと御礼も言えてませんでしたから」

少し恥ずかし気にティアはあの時のことを思い出す。

終わりを覚悟して出て行ったのに、もう一度マヤと触れ合うことができたことに感極まって声を上げて泣いてしまった。

「そうよね。正直アタシも本当にみんなを連れ戻してくれるなんて思わなかったから少しときめいちゃったわ」

彼がもたらした奇蹟にシャンテは嬉しそうに笑う。

「って言われてもね……超帝国人といか言えないわ」

「超帝国人……」

「超帝国人か……」

「超帝国人……クカカ、おもしれえじゃねえか」

「そ、それで納得するの？」

サラの答えをそれぞれ受け止めるアプリリス達にティアは苦笑する。

「ふふ……それにしてもこうしてバレストイン教室のみんなでお酒を飲める日が来るなんて……」

実はあたしが《ダンテリオン》を開いたのはこれがやりたかったのよ」

「シャンテ？」

「旅立った綿毛たちがいつかこの場所に戻って来て花を咲かせる……」

そんなことを夢見ていたの」

「みんなと言うのには一人足りないがな」

シャンテの語る夢にアプリリスはそう返して、丸いテーブルに卓にわざわざ用意していた空席に目を向ける。

と、そこに――

「おいお前らー、これは何の騒ぎだ!」

頬に傷のある青年が《ダンテリオン》の扉を乱暴に開けて入って来た。

「なっ!?!」

「ほう……」

「え……?」

「うそ……」

「はっ……」

「あらやだ……」

彼の登場に一同は目を丸くする。

「せっかく大口の契約が結べたって言うのに “塩の杭” が現れたって聞いたから違約金を払って戻ってきたら、この騒ぎ……」

「いったい何があったって言うんだ」

青年は困惑した様子で状況の説明を求める。

「……………ぷ……………」

「……………くくく……………」

そんな彼の様子にサラ達は何だかおかしくなる。

「「ハハハハハハハッ！」」

「お、おいっ……………つていうか何でサラまでいやがる？」

突然笑い出したかつての同窓生たちに青年が困惑する。

「ねえ、みんな乾杯しましょう」

シャンテがそんなことを提案する。

「そうだな……………何に乾杯する？」

「アプリリスはその提案に乗る。」

「そうだな……………死んでいった奴等に」

率先してグラスを掲げたのはクレドだった。

「では私はこれからのノーザンブリアの未来に」

それにシャトラールが続く。

「マヤやヴァレリーちゃん、カンリリカちゃん……………子供たちの笑顔に」

「楽しそうにティアも続く。」

「お、おい！ ちゃんと説明しやがれ!？」

「はいはい、説明なら後でして上げるからがっちゃんもグラスを持つて」

「その呼び方はやめろって言ってるだろ！」

置いてきぼりにされた青年にシャンテは無理矢理グラスを持たせる。

そして最後にサラが――

「超帝国人の祝福に——乾杯っ！」
夜の《ダンデリオン》にグラスを打ち鳴らす音が鳴り響いた。

80話 特別実習を終えて

8月24日火曜日。

——これはどういうことなのだろうか？

帝国に今後のノーザンブリアとの関係を相談するため、カレイジャスに乗り込み訪れた帝都でシャトラールは困惑していた。

帝都へイムダルに着き、案内されるがままに通されたのはシャトラールには縁がないと思っていたバルフレイム宮。

さらに通されたのは巨大な円卓が設置された大型会議場。

そして出迎えたのはユーゲント皇帝と鉄血宰相ギリアス・オズボーンを始め、四大名門や《光の剣匠》などの他国でもその異名を轟かせている錚々たる顔ぶれ。

まだ若輩と呼ばれる若さで憲兵団の団長に上り詰め、ノーザンブリアの議長たちをやり込めたシャトラールだが顔を合わせただけで自分と彼らの格の違いを実感してしまう。

「良くぞ無事に戻った。そして二度目の『塩の杭の異変』の解決、誠に大義であった」

「勿体なきお言葉です」

皇帝の劳いの言葉をクリスは堂々と受け取り頭を下げる。

それを皮切りに求められた《特別実習》、については《塩の杭》の異変の状況説明を求められる。

先の約束通りノーザンブリアの降り掛かった二度目の自然災害だと帝国のトップが勢揃いするこの場で堂々と言い切るクリスにシャトラールは平静を装いながら安堵する。

「ふむ……災難だったなシャトラール殿」

「いえ、とんでもありません。彼らのおかげでこれまで苦しめられてきた国民が救われたと思えば不幸中の幸いと言えるでしょう」

「26年前、三日間と言う短い期間と言う事もあって私たちは何もすることはできなかつたが、誰にも成せなかつた奇蹟を我が国の子達が起こしたことは私も誇らしく思う」

「はい。彼らにはいくら感謝してもし足りないでしょう」

ライン達を褒める皇帝の言葉にシャトラールは頷く。

そんなやり取りを間に入れて会議の本題をユーゲントは切り出した。

「さて、我が息子から聞かされたのだがノーザンブリアは我がエレボニア帝国に併合されることを望むそうだな」

「——っ……はい」

出された話題にシャトラールは息を呑みながらも頷く。

本来ならクリスの父親を通して上申されるはずだった案件なのだが、何の巡り合わせかエレボニア皇帝に直接伝えることになった事実

にシャトラールは緊張する。
「こちらがノーザンブリアからの併合についての希望をまとめた報告書になります」

クリスがカレイジャスの船旅の間にまとめたレポートを女官経由に渡す。

そのレポートは皇帝の隣の席のギリアスに渡される。

「僭越ながら私が読み上げさせてもらいましょう……」

一つ、併合後にノーザンブリアの名を残してもらいたい……

二つ、レンハイム男爵家とシュバルツアー男爵家の傘下に入ること

……

三つ、《北の猟兵》を軍として受け入れること……以上です
「なるほど……」

ギリアスが挙げた条件にユーゲントは一つ頷き、シャトラールに疑問を投げかける。

「まず前提として聞かせてもらおうが、そなた達はそれで良いのか？」

ノーザンブリアの『塩化現象』が消えた今、君達はようやく自由を手に入れたはずではないのか？

そなた達がこれまで他国の援助を最小限にして、耐え忍んできたのはこの日のためではなかったのか？」

シャトラールは両脇に座っているⅦ組の面々を一瞥して、彼らが口を挟む素振りを見せないことを確認してから答える。

「ノーザンブリアは確かにリイン殿のおかげで救われました……

しかし元々『北の猟兵』が稼ぐ外貨に頼って糊口をしのいできた身、正常化した国土を立て直すための地力を私たちは持ち得ていません……

そして『塩化現象』が消えた今、各国に見過ごしてもらっていた『北の猟兵』の関係を追及されることになるでしょう」

「ほう……ノーザンブリアと『北の猟兵』の関係をこの場で認めると？」

シャトラールの理由にギリアスが不敵な笑みを浮かべて指摘する。「認めるも何も、この場に居られる方々にとっては周知の事実でしょう……」

だからこそ言わせて頂くなら、私たちは『北の猟兵』を切り捨てることはできません。それこそ彼らが祖国のために身を退こうとしたとしてもです」

「なるほどつまり君たちは我が帝国に『北の猟兵』が社会復帰する後見人をさせようというわけか」

「っ……その通りです」

あえて歪曲に表現していた希望をギリアスに暴かれシャトラールは息を呑みながら頷く。

「クリス・レンハイム。そしてリイン・シユバルツァー。君達はそれで良いのかな？」

「はい。これで大陸最大規模の猟兵団を軍として穏便に足を洗わせることができるのなら価値は十分にあると僕は考えます」

「この件はクリスに一任しています。後見人については父に相談しなければなりません……」

ですが帝国がノーザンブリアを支援する口実と、ノーザンブリアが忌避感なく帝国を受け入れてくれるタイミングは今しかないと考えられています」

クリスとリインの返答にギリアスはなるほどと頷いてユーゲントに向き直る。

「いかががしましょう陛下？」

「そうだな……」

ユーゲントは目を伏せて考え込み、その姿をシャトラールは固唾を呑んで答えを待つ。

三つの希望が全て通ると樂觀しているわけではない。

代わりの条件を突きつけられる可能性だってある。

だが、それでも最低限の条件を達成させてみせるとシャトラールは交渉の覚悟を決める。

「——では、この条件でノーザンブリアの併合を認めよう」

「え………あ、いや………ありがとうございます」

あまりにあっさり認められたことにシャトラールは拍子抜けしたものを感じながら礼を言っ頭を下げる。

「詳しい条約の締結は後日、ノーザンブリアの議員らを招いて改めて詰めるとして……」

こちらからもいくつか条件を提示させてもらおう

「っ——拝聴させて頂きます」

「我が息子、オリヴァルトの推薦と言う事でシャトラール君。君には一代限りではあるがノーザンブリア州辺境伯の地位を授けるとしよう」

「……………はっ」

「本来ならこのようなことはあり得ないが、元々のノーザンブリアの国土は四大名門が統治する土地と規模だけは同じ……」

ならば「爵位」を与えなければ示しが付かないだろうか？」

「そ、そうかもしれませんが……」

あまりに突然の申し出にシャトラールは思考が停止する。

「ふふ、あまり深刻に考えなくて構わんさ……」

我が息子のオリヴァルトが後見をするのに、君がただの平民だと外聞が悪いという理由もある……

ノーザンブリア州はまず復興から始めなければならなかったため三年の税の徴収は免除するが、その間に君が統治者としての才がなかったと判断されたなら与えた地位は他の者に譲ってもらうことになるだろう」

「っ……」

「無論軽々しく“爵位”を与えることに良く思わない者もいるが、ノーザンブリアは北方経路を担う重要な土地……」

それに加えて第三の“塩の杭”が現れた時に君達に防波堤となつてもらうことになることを加味してのことだ」

予想外のことだったが納得のいく理由でもある。

浄化されたとはいえ、本当の意味で第二第三の塩の杭が現れない保証はない。

また、ノーザンブリアでの事業は博打となる、ならばそこを統治する代表に名乗りを上げる貴族が二の足を踏むのは必然。

さらにはユーゲントもシャトラールについては何も知らないのだからそれを試す意味もあるのだろう。

「………一つ、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何かな？」

「辺境伯の地位と言うのは男爵位よりも低いものなのででしょうか？」

「いや……辺境伯の方が大きな権威を持っているな」

「それでしたら私は申し訳ありませんが、その申し出を受けることはできません」

「ほう……理由を申してみよ」

皇帝からの温情を断るシャトラールに会議室に集まった貴族達から非難の言葉が上がるが、それをユーゲントは手を上げて制して理由を問う。

「不躰な言葉になってしまふことを先にお詫びさせてもらいます……」

そう一言断って、シャトラールはユーゲントを真っ直ぐに見据えて口を開く。

「ノーザンブリアをエレボニア帝国に併合を望みましたが……私は皇帝陛下、貴方に忠誠を誓うことはできません……」

私が貴方を知らないということもありますが、すでに私はクリス・レンハイム様にこの命を捧げ忠誠を誓いました」

「ほう……クリス・レンハイムにか……」

シャトラールの言葉にユーゲントは目を細める。

同時に不敬だと騒いでいた貴族たちの空気が変わるが、シャトラールはそれに気付かない。

「本来なら私はこのような場に立つことができるとは思えないような高潔な人間ではありません……」

そんな私がクリス様や大恩あるリイン殿を差し置いてそのような“地位”を受け取ることはできません」

「なるほど……それで君はどうしたい？」

「私に与えられる地位は彼らにこそ相応しいと考えています」

「……と言っているが？」

ユーゲントはシャトラールの両脇に座っているクリスとリインに発言を求める。

「僕の家はこれ以上の爵位を求めるつもりはありません」

「クリスと同じです。父もユミルから離れてまで地位を欲しないでしよう」

口調は丁寧だが、顔色は対照的な二人はそう答える。

「しかし、本当ならクリス様の父君に面通しするはずだったはず。それを差し置いて——」

「なるほど」

シャトラールの言葉はユーゲントの厳かな言葉によって遮られた。

「改めて自己紹介をさせてもらおう」

「……は？」

突然そんなことを言い出したユーゲントにシャトラールは戸惑う。

「私は第87代皇帝、ユーゲント・ライゼ・アルノール三世……そしてクリス・レンハイムの父だ」

「………………は？」

「そしてボクが何を隠そうクリス・レンハイムの腹違いの兄。オリヴァルト・ライゼ・アルノールさ」

固まるシャトラールを他所に皇帝の隣の席にいたオリヴァルトが立ち上がってポーズを決めて名乗る。

「………………え……？」

静まり返った会議室にシャトラールの眩きは異様に大きく響いた。先程まで彼の事を不敬だと騒いでいた貴族達は呆けて言葉を失っているシャトラールの姿に何も言わずただ口元を手で覆い隠して震えていた。

「……………ク、クリス様。こ、これはいったい…………？」

理解が追いつかないシャトラールは横に座るクリスを振り返る。

「君は知らないだろうけど、代々皇族はトールズ士官学院に入学するのが慣わしでね…………」

クリス・レンハイムはお忍びの名前。本当の名前はセドリツク・ライゼ・アルノール」

「は…………？ なっ!? えっ!?」

カリスマを感じさせる鋭い眼差しからの名乗りにシャトラールの混乱は臨界を超える。

「あーシャトラールのこんな顔、初めて見たわ。この会議室って写真撮っても大丈夫?」

横からそんなことを呟いている同期の言葉などシャトラールの耳には届いていない。

彼の脳裏にはノーザンブリアでサラを焚きつけるつもりで彼らにしたことが走馬灯のように走っていた。

「君は皇太子である僕に命を預けて忠誠を誓った。つまり君は名実ともに帝国貴族の一員だ」

「っ————」

クリスの決定的な一言にシャトラールは凍り付くのがあった。

「さあ、皆の者。新たな同胞の誕生に温かい拍手を」

オリヴァルトの音頭に会議室の貴族達はシャトラールのことを拍手で祝福する。

元々“塩の杭”の出現で集まっていた貴族達。導力通信によってある程度の仕込みを終えていたため、この会議はほとんどやらせだったりするのだがシャトラールがそれを知る由もない。

「むげん…………」

《凍結》してしまった彼にリインは何もできない自分の無力さに目

を伏せる事しかできなかつた。

・*

「はあ……」

クリス達が会議室でドツキリを——もといノーザンブリアの今後についての極めて高度な話し合いをしている最中。

アルフインは別室で溜息を吐いた。

「これはやばいですね」

「ええ、これはヤバいです姫様」

アルフインの呟きにミルディーヌが頷く。

淑女らしからぬ言葉使いだったがそれを責める者は呆れかえっていた。

「あう〜」

大き過ぎるベッドに身を沈ませた赤子は小さな手を彷徨わせるように宙を泳がせる。

「……………」

「……………」

そんな赤子の仕草を覗き込んでいた二人は黙り込む。

何かを訴えるように差し出された手に二人は黙ったまま手を差し出すと、小さな手が指を憊い力で掴んで来る。

たったそれだけで二人は感激したように顔をほころばせる。

「私はミルディーヌと言います。ミュゼで良いですけど言えますか？」

「あ、ずるいわ。ミルディーヌ。私はアルフィンよ」

そのまま二人は赤子に自分の名前を呼ばせようと争い始める。

「姫様、ミュゼもはしやぎ過ぎです」

そんな二人の様子にエリゼは深々とため息を吐いた。

領民に寄り添うシュバルツァー家にとって赤子は珍しいものじゃない。
ユミルが大きな里じゃないこともあるが、子供が生まれたとテオに

挨拶しに来る領民は年に数回あるのでエリゼにとっては珍しいことではない。

が、皇女であるアルフィンと公爵家の令嬢であるミルディーヌは逆にそう言った赤子との触れ合いは経験したことはない。

そんな彼女たちの心情を察して、エリゼは強く諫めることはせずに見守るだけに留めて、対面に座る初対面だが初対面じゃない女性に向き直る。

「申し訳ありませんルフィナさん」

「フフ、良いのよ。部屋を貸してもらったのはこちらの方ですから」
柔らかな笑みを浮かべて言葉を返すのは成人した女性。

かつてリインの人形の「使い魔」として紹介してもらった彼女だが、今はどんな理屈なのか普通の人間の大ききでエリゼの前にいた。
曰くりインの「聖痕」の力が強まったことで人形を触媒にして外でも人間大の姿を取れるようになったらしい。

説明された内容の全てをエリゼは全て理解できたわけではないが、帝都に着いてすぐに会議室へと向かって見送った兄の姿に不安が大きくなる。

「ルフィナさん……兄様の身にいったい何があったんですか？」

白い髪に深紅の瞳。

まるで「力」を使っている時のような容貌だったが、それに反しては周囲を威圧するような獣のような重圧は感じなかった。

むしろ神秘的なカリスマを感じさせえる変化にエリゼは困惑した。

「そこまで気に病むことはないわ。あの変化は「鬼の力」によるものじゃないから……」

とはいえ危険はないと分かっているにしても詳しいことはこれからローゼリアさん達を交えて調べていくつもりだから今は気休めしか言えないけど」

「……………そうですか」

ルフィナの説明にエリゼは何とかそう返した。

「……………近頃不安なんです……」

リベールの事件に先月の帝都の事件、そして今回のノーザンブリア

……

このまま兄様がどこか遠くに行ってしまうような気がして……」
今回の外見の変化は切っ掛けに過ぎない。

浮遊都市で死んだと知らされた時に感じた絶望に近い不安。

俯くエリゼにルフィナは彼女をこれ以上不安にさせないように微笑む。

「安心して……なんて軽々しく言えないけど、最大限私はリイン君のサポートをするつもりよ」

「ルフィナさん……」

「でも私にできることは何でもするつもりだけど、エリゼさんにもお願いしたいことはあるわ」

「私に……ですか？」

「リイン君に、ちゃんと帰って来て欲しいって言葉にして伝えて上げて欲しいの……」

あの子は目の前の戦いに全力で立ち向かうけど、全力過ぎるところがあるから。待っている人がいるんだって言う事を忘れさせないで上げて欲しいの」

「それだけですか？ 私が兄様にできることはもつと他に——」

「それだけでもある意味一番重要なことよ」

焦燥に駆られるエリゼにルフィナはどこまでも落ち着いた様子で諭す。

それ以上は語らずただ微笑むだけのルフィナにエリゼは何かが胸に落ちた心地になる。

「フフ……エリゼが嫌だったら、わたくしが代わりにリインさんに言っただけでいいよ？」

が、それにアルフィンが口を挟んで来た。

「ひ、姫様？」

「ルフィナさん、リインさんを繋ぎ止めておく鎖は多い方がいいと思いませんか？」

「そうですね……数が多分には困らないと思うわ。アルフィン殿下」

何処まで本気なのか、いたずらめいた口調で尋ねるアルフィンにルフィナは笑顔でそう答える。

「むう……」

「エリゼ先輩、エリゼ先輩……」

頬を可愛らしく膨らませるエリゼに赤子を抱えたミルディーンがすり寄る。

「何ですかミルディーン?」

「はい。エリゼマーマですよ」

「あうあ?」

差し出された赤子がミルディーン言葉を繰り返すように呂律が回っていない声を発する。

「……………え?」

何と呼ばれたのか理解できなかったエリゼは固まり、数秒遅れてそれを理解して思わず口元が緩む。

「あらあら……」

「うふふふ……」

そんなエリゼの顔を正面から見たアルフィンとミルディーンは意味深な笑みを浮かべるのだった。

・*

鉄道憲兵隊司令部。

その一角ではカレイジャスから降ろされたヴァリマールが憲兵隊が所有する貨物列車へ運び込まれていた。

「これは……凄まじいな」

帝都で戦った時以上にボロボロとなり、元の美しい造形が見る影もない《騎神》の姿にガイウスは絶句する。

「きゆう……」

エマは奇妙なうめき声を上げてその場に蹲ってしまふ。

「どうやら二年前のリベールの異変に匹敵することが起きていたようだが……よくみんな無事だったな」

「あはは！ ボクもノーザンブリアの方に行ってみたかったな」

戦々恐々とした様子で唸るマキアスに対してミリアムが気楽な感想を言う。

「気軽に言わないでよ……もう何回死ぬかと思ったか……」

「牢屋に入れられたり、本当に大変だったよ」

改めて思い出したノーザンブリアの出来事にアリサとエリオットは疲れた溜息を吐く。

「ヴアリマールの姿もそうだが、フィーも大丈夫なのか？」

身体に至る所に包帯を巻いたフィーにラウラは尋ねる。

「ん……勝って来たから問題ない」

ブイと指で勝利を訴えるフィーは普段の無表情さがどこか誇らしげに笑っているように見えた。

「あれ？ クレドさんは俺が勝ったって言ってたけど？」

「あっちの勘違い。わたしの方が十発は多く当てたから」

見栄を張る様にフィーはそっぽを向く。

「ふむ……」

そんな彼女の珍しい反応にラウラは腕を組んで考え込む。

「私達のことよりそっちの実習はどうだったの？」

「俺達の《特別実習》は……」

アリサの質問にユーシスは答えようとして、彼には珍しく言葉を止めた。

「ユーシス？」

「何でもない。多少のイレギュラーはあったが、特に問題なく終わった」

「イレギュラー？」

「フィーの家族、《毘使い》と《破壊獣》の二人に遭遇する機会があった。戦ってフィーの前に連れて来るつもりだったが負けてしまった、すまない」

聞き返したアリサにラウラが答えて頭を下げる。

「あの二人と？ 別に気にしなくて良いけど、あの二人はわたしが直接ぶん殴るって決めてるから」

「しかし、手合わせをした感じから——」

ラウラは言いかけた言葉を思わず止める。

できるできないではなく、やる。

そんな気概がフィーの雰囲気から察することができる。

「みんなー」

クリスの声が聞こえて来て一同は振り返る。

そこにはクリスだけではなく赤子を抱え、黒かった髪を白くしたリインがいた。

二度目の相對にも関わらず、リインの変わってしまった風貌にラウラ達は思わず身構えてしまう。

「今回の特別実習、お疲れ様……」

僕とリインさんはこの後帝都に残ることになったからここで一旦お別れだね」

「帝都に残るだつて?」

クリスの言葉にマキアスが聞き返す。

「うん。ノーザンブリアでの報告と事後処理の手続きをすることになって、リインさんの場合はそのまま今週末のクロスベル通商会議に出ることになるから当分帰れないらしいけど」

「そうなのか? しかしそれではヴァリマールはどうするつもりなのだ?」

クリスの説明を確かめるようにガイウスが尋ねる。

「ヴァリマールについては博士たちに連絡はしてあるから問題ないよ……」

後残るのはノーザンブリアのこともあるけど、この子の事で両親と話すことになったから」

「両親って……君は犬猫を飼うんじゃないんだから育てることができないなら引き取って来るのはどうかと思うぞ?」

「まあ、確かにマキアスの言う通りなんだけど……」

常識的なマキアスの指摘にリインは曖昧な笑みを浮かべて言葉を濁す。

「大丈夫だ。託された以上学院を辞めることになってもちやんと育て

るから」

「いや、そうじゃなくてだな」

どこかズレた答えを返すリインにマキアスは唸る。

貧困の土地から保護した普通の赤子だと思っっているマキアスの誤解をその場で指摘する気はなかった。

「それよりエマ。悪いんだけどローゼリアさんに連絡を取ってもらえるかな？」

「お、おばあちゃんにですか？」

「ああ、俺の方で何度か機体を修復させようとしたんだけど、塩の因子が混ざってうまく修復できないんだ。だからローゼリアさんに――」

――オネガイ――

言葉の途中、リインは幻聴を聞いた。

「え……………？」

思わず振り返り、声の主を探して振り返るとそこには淡い光を宿した少女が佇んでいた。

「君は……………」

何処かで見えたことがある気がする少女は悲し気な、申し訳なさそうな眼差しで「ヴァリマール」を指差した。

今、貨物として積み込まれていたヴァリマールは――

「あゝ」

ぺちつと赤子に頬を叩かれて、リインは我に返る。

「リインさん？ おばあちゃんに――何ですか？」

唐突に言葉を止めたリインにエマは不思議そうに首を傾げる。

「いや……………」

リインはそんなエマに一言返して今見たことを考えて、すぐに決める。

「クリス、悪いけどクリアさんに頼んでヴァリマールの輸送は中止させてくれ」

「え……………」

「俺はこれからオズボーン宰相とオリヴァルト殿下の所に行つて、ク

ロスベルにヴァリマールを連れて行けないか頼んでみる」

「ちよつとリイン？」

突然言い出したリインの提案にアリサ達は困惑する。

「ローゼリアさんには帝都に来て欲しいって言ってもらえるかな？」

それから場合によってはクロスベルまでついて来てもらいたいって
も伝えてもらえるか」

「リインさん？」

「それじゃあ頼んだ」

一方的に言うだけ言つてリインは踵を返して足早に去って行く。

取り残されたⅦ組は呆気にとられ、最初に我に返ったアリサが吠え
た。

「何よあれ!?! 少しは見直したのに本当に自分勝手ね!?!」

まるで誰かを彷彿とさせるその背中にアリサは苛立ちを感じず
はいられなかった。

そして――

「おばあちゃんには頼るんですね……」

去って行くリインの背中をエマは哀し気に見送ることしかできな
かった。

81話 クロスベルに向けて

トワ・ハーシエルはツールズ士官学院の二年生である。

生徒会長をしており、この度はその優秀さを認められて『西ゼムリア通商会議』の随行スタッフに推薦されて参加することになった。

とは言っても会議で働くスタッフは帝国政府の優秀な文官たちであり、トワが求められる役割は雑用やその文官たちの補佐が主な役目になる。

「ごめんねアンちゃん。送ってもらって」

先日、拡張されたばかりのサイドカーから運転してくれるアンゼリカにトワは改めて礼を言う。

「ふ……これくらいトワのためなら構わないさ」

アンゼリカは役得だと言わんばかりに応える。

「しかし帝国政府も困ったものだな。いくら公休にしてくれるからと言っても登城を二日も早めるとは」

「しようがないよ。ノーザンブリアで大変なことが起きちゃったんだから」

先日に起きた『塩の杭の再来』。

幸いなことに26年前と違い、特に被害はなく鎮静化されたらしいがその影響は大きかった。

『通商会議も』一度は中止を検討されたが、帝国政府が異変の経緯を説明できると発表したこと、会議の際に説明すると公表したことで予定通り——ただし一日期間を増やして開催されることになった。

「たしか予定を繰り上げて30日から始まることになったらしいね？」

「うん、他の国も『塩の杭』について少しでも早く情報が欲しいからそういうことになったみたい」

本来なら30日に現地入りして31日に会議が始まるはずだった。

しかし30日に主にノーザンブリアの説明をすることとなり、その前に現地入りすることとなったためトワはそれに合わせて登城する

こととなった。

「それにしても大丈夫かなリイン君達……無事だつて聞いてはいるんだけど」

早まった予定よりも、トワが考えるのは《特別実習》としてその時のノーザンブリアに行っていたリイン達の事。

「ははは、彼なら心配ないさ。帝都で暗黒竜を討伐したようにもしかしたら『塩の杭』を退治したのはリイン君かもしれないぞ」

「あはは、まさか……でも……うーん」

暗黒竜は規模こそ桁違いだが魔獣災害に区分される災害であり、対象を討伐すれば解決する。

しかし『塩の杭』は天災。竜巻や地震など自然災害に近い分類による災害なので何かをすれば解決できる問題ではない。

「それでもリイン君ならつて思っちゃうのはなんでだろう？」

「ふ……それが超帝国人の成せる業というものさ」

「アンちゃん、リイン君はその呼び方嫌がつているんだから。言っちゃダメだよ」

「事実なのだがね……だが、まあ私はリイン君達が『塩の杭』を解決したと聞いても驚かないよ」

「うん……そうだね」

帝都で見た『暗黒竜』と『巨いなる騎士』との戦いを思い出してトワは頷く。

すでにリインはバルフレイム宮に登城しており、他のⅦ組はトワ達と行き違いでトリスタに列車で帰っている。

「よー」

リインが何かをしたとしても驚かないようにトワは気持ちを固めるのだった。

……

……

……

「あ、トワ会長。アンゼリカさんも」

「リイン君が不良になっちゃったっ!」

「リイン君! その子はいったい誰の子なんだい! まさかアリサ君、それともファイ君!? 言え! どっちを孕ませたんだっ!」

「はら——不埒だよリイン君っ!」

アンゼリカの叫びにトワは赤面してリインを叱る。

「人聞きの悪いこと言わないでくださいっ!」

混乱する二人にリインは思わず声を上げて言い返した。

・*

バルフレイム宮の地下。

かつてテスタⅡロツサを封印した広間にローゼリアは感慨深い懐かしさを感じ——ることを忘れていた。

「お……おおっ……」

口から出て来たのは言葉にならない呻き声。

大地と焔の眷属がその叡智を出し合って造り出した最高傑作の内の一つ、《灰の騎神》の姿に顔を両手で覆う。

「えっと……ローゼリアさん?」

「……よくもまあこれだけ派手に壊されてお主は無事だったのう」

膝を着いて崩れ落ちたローゼリアにリインは恐る恐る言葉を掛けるが、彼女はすぐに気を取り直したのかリインの身体の心配をする。

「ええ、正直今回もダメかと思いました」

因果逆転により、自分の斬撃を自分で受けることになったリインは死さえ覚悟した。

こうして五体満足でいられるのは《グノーシス》のおかげだと思ふと複雑な気持ちになる。

「……………で、これを直せと?」

「お願いします。今週中、できれば29日までに」

「29日までに、ははは……今日を入れて五日しかないではないか……ははは、できるかっ!」

笑ったローゼリアは当然のことながら咆えた。

「リアンヌがエンド・オブ・ヴァーミリオンにやられた時でさえここまで壊されたことなどなかったのだぞ！」

それをたった二回の戦闘で……ドライケルスだつてここまで無茶苦茶ではなかったぞっ！」

「そう言われても……」

「それに加えて二代目デミウルゴスじゃと……もう何から突っ込めばよいか……」

ああーとローゼリアは頭を抱えて蹲ってしまふ。

「ふむ、ここまで壊れているなら存分に中を見ることができな」

「くくく、《騎神》の技術。骨の髄まで解明させてもらおうとしようかの」
「その前に『塩の杭』の影響を調べるべきだろう」

悲嘆にくれるローゼリアなど関係ないと言わんばかりに三人の老人たちは楽しそうに《灰の騎神》を見下ろす。

何故、貴方達がここにとリインは問わない。

バルフレイム宮の地下であり魔女が封じた扉を超えたオリヴァルトでさえ知らなかった封印の間だが、彼らならば道理を押し通して現れることはすでに予想している。

「欠損部分は左腕か……時間が無いのならオルⅡガディアに着けたもの付け直すのが良いんじゃないかしら？」

「が、頑張つて直して上げるからねヴァリマール」

そして彼らがいるのなら当然エリカとティータも来ていた。

頼もしい布陣ではあるが、リインは水を差すように手を上げて進言した。

「すいません。この中でノーザンブリアに行つてもらえる人はいますか？」

「なんじやリイン君。藪から棒に？」

あからさまに嫌そうな顔をしてラツセル博士が振り返る。

「実はノーザンブリアの復興支援として技術提供をすることになつて、博士たちの誰かに行つてもらえないか説得するように政府からお願いされました」

「ふん、そんな雑事に使われてたまるか」

「珍しく気が合ったな。こんな面白いものを前にそんなことできるか」

「わしは政府とは関係ないから知らん」

予想通り、拒絶の言葉を返して来る老人たち。

「あたしも嫌よ。それに五日でこれを動けるくらいにするんでしょ？」

「あう……えっと……わたしは……」

ティータに言ったつもりはないのだが、ヴァリマールとリインを交互に見て迷ってくれることに思わず苦笑する。

「政府の思惑は別として、実は俺からもノーザンブリアに行つて欲しい理由があるんです」

そう言つてリインが取り出したのは一枚の写真。

「それは？」

水晶のクラスタールに見える写真に一番近くでそれを見ることになったエリカが聞き返す。

「これは今回現れた“塩の杭”の残骸です……」

塩化したものはゼムリアストーンを経て大地などに置換されたんですが、“塩の杭”は置換が不完全で見ての通り巨大な七耀鉱石の塊になつてしまつたみたいなんです……

いわば剥き出しの鉱脈ですね。当分の間、ノーザンブリアはこれを収入源に活用することになります」

「ほう……それは珍しい」

ヴァリマールに釘付けになつていた博士たちが興味を示して写真を見に来る。

「それでここからが本題なんですけど、ただこの鉱脈の二割ほどがゼムリアストーンのまま残っているんで、俺は貯金の3000万ミラでそのゼムリアストーンを買い取るだけ買おうとシャトラールさんと交渉したんです」

ゼムリアストーンは武器にするのに理想的な稀少金属。

万が一出回つて猟兵やテロリスト達の手に移ると厄介だという理由もあるが、新品の太刀を折つたりしたのでその補填が必要だと思つ

て購入したのだ。

それに自己修復機能はあっても無から有を作り出すには体力の消費は著しく機体にも負担が掛かる。

だがゼムリアストーンがあればその消耗を肩代わりできるだろう。「3000万ミラで……ゼムリアストーンを買ったですつて……」

リインの散財にエリカは絶句する。

「貴様……自分が何をしたのか分かってているのか？」

「何かおかしいですか？ ヴァリマールを修復したり太刀を直すならそれくらいは必要かと思っただんですが？」

そしてシュミットは呆れるようにリインにそれを教える。

「シユバルツアー。どうやら貴様は知らないようだがゼムリアストーンは鉱山ではクズ石の価値しかない」

「……………え？」

意外なシュミットの言葉にリインは虚を突かれる。

「ゼムリアストーンですよ？ ほら、武器とかで良く使われている。ラウラの剣だって……それがクズ石つてまさか……」

「それに価値を認めるのは武芸者や一部のコレクターだけじゃ……」

そもそもゼムリアストーンは加工法を《リベル・アーク》でわしが見つけてようやく注目されるようになった鉱石じゃからの」

「色彩は良くても硬すぎてアクセサリーに加工さえできないから宝飾としての価値もなかったな」

「それに七耀石・トリムに一粒あるかないかのものだ。そんな生産性の低いものは活用しづらい。研究材料としては優秀なのは認めるがな」

追い打ちを掛けるようにラッセルとヨルグ、シュミットが残酷な真実を突きつける。

「そ、そうですか……」

まさかゼムリアストーンに工業的に無価値だという事実に関心は肩を落とす。

「いや……所詮あぶく銭ですし、あの子の養育費は別にちゃんと取つてあるから良いんですけど」

七耀石を売ったミラに《Rの軌跡》の印税と押し付けられたミラ。暗黒竜の討伐の褒章金なども増えた預金残高は清貧の中で育ったリインにとってはあまり心地の良いものではない。

「……まあノーザンブリアの復興に寄付したと思えば——」

「ねえ、この写真の二割のゼムリアストーンを買い取ったって本当？」
自分を慰める言葉は写真を凝視しているエリカの言葉に遮られた。

「え、ええ……3000万ミラで相場は分からなかったから買えるだけって……」

足りなかつたらオリヴァルト殿下が国費で確保するって言ってましたけど」

「よし、シユミットの爺い。オーバルギア持って行って良いからちよつとノーザンブリアに行つてきなさい」

「何を言い出すかと思えば下らん。そんな誰にでもできるようなことは他の奴に——」

「かーこれだから頭の固いロートルは嫌なのよ」

拒否するシユミットにエリカは頭を振って説明する。

「たしかにゼムリアストーンは工業的な価値はほぼないわね……」

一つの鉱山で見つかる量じゃ飛行艇はもちろん導力車にだって使えない。加工法が出回っても量が量だから武器とかにしか使えないから仕方がないでしょうね。だけど——」

「エリカ先生？」

雲行きが変わった話題にリインは首を傾げる。

「ざつと見た感じ5トリムくらいは期待できそうね。これだけまとまった量が出回るのは市場でも初めてでしょうから元々相場なんてないわね……」

これを加工方法が見つかったって言ってもまだその技術は一部にしか広まっていないから価値が高騰することはないでしょう」

「何が言いたい？」

「良い？ 今のあたし達に足りないのは頭脳でも技術でもない。あたし達が逆立ちしても手に入らない古代の素材が目の前に現れたのよ。この意味は分かるわよね？」

「あ、あの……エリカ先生？ ゼムリアストーンが欲しいのはヴァリマールを修理するためなんですけど……」

リインの考えを言葉にするが、博士たちは自分の考えに没頭して聞く耳を持たない。

「ヴァリマールの総重量は6.5トリンですけど、実際どれくらいかゼムリアストーンがあるかは分からないけど…… “騎神” 一体分くらいになるかな？」

と、ティータが期待に満ちた目をする。

「パテルⅡマテルの素材で妥協するしかないと思っていたが……うむ」

と、ヨルグが腕を組んで頭の中で計算を始める。

「しかもこの鉱床は自然発生したものと違い、不純物の混じっていない七耀石が採れるなら……」

と、シユミットが別の側面から利点を考える。

「そうよ。ゼムリアストーンを回収するついでに、偶然動力源に使えそうな、質の良い七耀石がくつついていても仕方がないわよね」

と、エリカがさらに条件を追加する。

「そうじゃの都合よくゼムリアストーンだけを切り取るのは難しいから周りの七耀石から切り取ってしまうのは仕方がないことじゃの」

とラッセルが悪い笑みを浮かべた。

「あ、あの博士たち……」

円陣を組んで不穏な意見交換をしているマッドサイエンティスト達にリインは溜息を吐く。

夢想するのは勝手だが、ゼムリアストーンを買い上げたのは自分なのだからそれを何に使うのかを決める権利は彼らにないことは分かっているのだろうか。

ヴァリマールの修復の後なら構わないが、騎神一体分のゼムリアストーンが残るとは断言できないというのに。

「放っておけ……あんなった人種はもう止められん」

もはや慣れたと言わばかりにローゼリアは博士たちの放置を決める。

「それより提案があるのだが良いか？」

「……………何ですか？」

博士たちが落ち着く時間を取る意味も兼ねてリインはローゼリアと向き合う。

「あれから色々と考え “水鏡” を使って未来の因果を見てみたりして判断したことなのだがの」

そう断りを入れてローゼリアは提案する。

「ヴァリマールからテストタロツサを分離せんか？」

「ローゼリアさん、それは——」

「まあ聞くのじゃ…………」

妾が見た未来の因果ではセドリツクの小僧がテストタロツサに乗ってお主と戦っておった…………

これが “黒の史書” によるものか《七の相克》の因果の修正力によるものかは分らんが、どうやら《相克》のために “テストタロツサ” が復活することは間違いないと妾は考えておる

「《テストタロツサ》に選ばれる起動者は “アルノール” の者ですからね…………

ただそうなると俺は本気でセドリツクと戦うことができるか…………」

セドリツクでなかったとしても、アルフィンやオリヴァルトを相手に《相克》が成立する程の熱量を伴う戦いとなれば躊躇してしまう。

なあなあで済ませられるようなものではないだろう。

最悪を考えれば敗者は騎神ごと勝者の騎神に喰われる可能性だけである。

果たして自分は仲間を喰らってまで勝ち進む覚悟があるのか分からない。

それくらいなら多少のリスクを背負っても現状を維持していた方がマシではないのかと考えてしまう。

「お主の懸念は分かっておるが、今 “テストタロツサ” を解放する利点は三つある」

「三つもですか？」

「うむ。一つはヴァリマールの中からテストタロツサを分離すれば、

お主の中の《アークルージュ》と《ロストゼウム》の共振が止まり、ヴァリマール達の意識が正常に戻ることに

「……………ローゼリアさん、気付いていたんですか？」

「妾もこの一ヶ月何もしていなかったわけじゃないぞ」

悔るでないとローゼリアは胸を逸らして続ける。

「二つ目は修正力の主導権を取ることができると言う事じゃ……」

妾達が抵抗すればするほどに修正力が強くなり、被害は拡大するというのなら先に妾達で結果を作ってしまうえば修正力の被害は最小限に納めることができるじやろう」

「……………三つ目は？」

「今の段階ならば《相克》に負けた時、もしくは騎神が大破した時に“騎神”の傷が“起動者”を殺さないように防壁を作ることができると
じやろう」

「そんなことができるんですか？」

「本来なら無理だったが、お主とヴァリマールの関係を参考にしてそれ用の術式を作るとは可能じゃ」

挙げられた利点は確かにどれも有用な条件だ。

しかしそれでもリインはすぐに頷くことなく確認する。

「ユミルでクリスのことを邪険にしていたのに良いんですか？」

「まあ、まだ頼りないがそれは今後の成長に期待するでしょう……」

あやつを起動者にしてエマを宛がえば未熟者同士、刺激し合うじやろう……………それにそうすれば合法的に妾もあやつらにお仕置きできる
しろう」

「……………ローゼリアさん」

最後に小さく付け加えられた言葉にリインは真顔になる。

「もしかして怒ってます？」

「ははは、何を言うのだ？ 妾は別にレグナートの使いぱつしりになつた程度で目くじらを立てたりしないぞ」

「……………そうですか」

笑って言うが、明らかに目が怒っていることをリインは指摘せず、巻き込まれることになるクリスとセリーヌに対して心の中で手を合

わせて祈る。

「どちらにしろ今の状態でヴァリマールとテストロツサを分離するのは難しいでしょうから、その話はクロスベルから戻って来てからにしましょう」

「うむ、そうじゃの」

ラインの提案にローゼリアは頷き、まだ円陣を組んでいる博士たちに声をかけてヴァリマールの修復作業が始まるのだった。

82話 取引

本来、宰相直属の護衛官として西ゼムリア通商会議に同行するだけのリインには準備をすることなどほとんどなかった。

しかし先のノーザンブリアでの「異変」の当事者ということもあり、各国首脳への状況説明する役目を任されることになったリインは多忙な時間を過ごすことになった。

一日増えた日程でリインはノーザンブリアでの《特別実習》について報告することとなった。

その資料作りから講義の練習など護衛対象の鉄血宰相の監修の下で予行練習を何度も行うこととなった。

「——ふむ、まあそれで良いだろう」
「ありがとうございます」

三日かけてようやくもらえた及第点にリインは安堵のため息を吐いた。

学院で行っている仲間内での報告会とは違い、言葉尻一つ注意され、揚げ足を取られ、さらには言外の威圧を掛けられるなど、本番さながらの練習にリインも流石に疲れを感じていた。

「ところでリイン・シュバルツァー」
「はい。何でしょうか？」

厳かな口調で名前を呼ぶギリアスにリインは自然と警戒心を高めながら言葉を返す。

この三日間、鉄血宰相として厳格な態度で接して来たギリアスだったが、そんな彼らしくない態度でリインに質問をする。

「あの子……………いや、代わりの太刀はちゃんと準備できているのかね？」

てつきりナユタのことを追究してくると思いきや、ギリアスは言いかけた言葉を引っ込めて太刀のことを尋ねて来た。

「ええ、大丈夫です」

「そうか……………」

ギリアスはそれだけ返すと黙り込む。

リインも退出する機先を制されてしまい、奇妙な沈黙が二人の間に訪れる。

——気まずい……

先日の実技テストで剣を合わせた時に彼が実父だと確証を得たが、その時にはそれ以上のやり取りはなく改めてこれが実の親子の対面となった。

が、この数日はギリアスの方が毅然とした態度を取っていたため、リインもそれに合わせて帝国宰相と男爵の嫡男として接していた。

その一種の張り詰めた緊張状態はここに至って限界を迎えようとしていた。

「……………テオから聞いたが、あの子をシュバルツアー家の養子にするようだな？」

「ええ、少し出生が特殊なので施設に預けるわけにはいきませんから……………」

オリヴァルト殿下に保証人になってもらいましたから、今度は俺の時のような誹謗中傷を受けることはないでしょう」

「そ、そうか……………その子の事だが——」

「ナユタと名付けました。それ以上の事はプライベートになるので宰相閣下とは言えお話しすることはできません」

「そうか……………」

執務机に両肘を着いて組んだ手で口元を隠した姿勢を取っていたギリアスは心なしに落ち込んだ声を返して来る。

「しかし、書類上ではテオの養子だが君が育てるつもりらしいではないか。君はまだ学生、そこところはどうか考えているのかね？」

「俺には託された責任があります。とりあえずあの子を取り巻く環境が安定するまで学院を休学することも視野に入れています」

《幻の至宝》でもあるナユタを狙う勢力は想像するだけでも結社、教団、そして七耀教会と候補は上がる。

彼らがどんな行動に出るか分からないこともあるが、引き取った自分が後の世話を両親に任せて自分が学業に専念するというのはあま

りに無責任だろう。

「いや、そもそも退学させられる可能性もありますけど」

「その心配はないだろう。オリヴァルト殿下が学院の理事をしておられるのだから」

「いえ、これはオリヴァルト殿下にもどうすることも出来ない問題ですから」

確かに理事長であるオリヴァルトになら認められるかもしれないが、問題は周りの風評被害。

拾って来た子供を親に任せず、自分で育てようとするリインを周囲がどんな目で見るか。権力に頼れば悪評はそれこそオリヴァルトに波及してしまうかもしれない。

もちろんリインが身を退いて退学してもその風評は変わらないが、その場合はリインだけで納めることができるだろう。

「なるほど……よく考えているようだな」

「テオ父さんにはどちらにしろ迷惑を掛けることになってしまいますが、全てを丸く治める方法はありません……」

それに後二年しかないんですから、のんびり学生生活に浸っているわけにはいかないでしょう」

「いや……それは生き急ぎ過ぎではないのかな?」

覚悟が極まっているリインにギリアスは窘めるように進言する。

「君さえ良かったら私からも援助を上げてあげても良いんだが」

「御冗談を……」

ギリアスの申し出をリインは一言で拒絶する。

「鉄血宰相に援助されても自分には返せるものではありません」

「それは――」

ギリアスは咄嗟に出そうになった言葉を呑み込む。

「安心してください。貴方が何者であろうとも通商会議での仕事は全うします。では、そろそろ時間ですので失礼します」

言葉を濁らせたギリアスに好機と締め言葉の言葉を言って退出する。

その背中を見送ったギリアスは扉が閉じると同時に深々とため息を吐いた。

奇しくも執務室から退出したリインも同じタイミングでため息を吐いていた。

「何を考えているんだろうな……」

この数日間、ふとした拍子にナユタの事について探りを入れてくるギリアスにリインは警戒を強めていた。

彼女が《幻の至宝》の後継者だと言う事に気付いているのか、鉄面皮の表情もそうだがこちらを見透かしていると思う厳しい眼差しは対峙するだけでも精神力を疲弊する。

「……………あの子は《黄昏》に巻き込むわけにはいかない」

彼女は《黄昏》には関係ない存在。そして頼るには幼過ぎる。

「父さんたちに宰相をナユタに接触させないように頼むか……」

何をされるか分からない以上、不用意な接触は避けさせることをリインは決めて踵を返す。

「きゅん」

そこに宮殿の中だと言うのに鳥の鳴き声が響いた。

呼ばれたような気がして振り返ると、そこには見覚えのある青い鳥がいた。

「グリアノス？」

「きゅんっ！」

リインの呼び掛けにグリアノスはもう一度鳴くと、差し出したリインの腕に止まる。

「何でここに——手紙？」

足に筒状に止められた手紙をグリアノスは器用に啜えてリインに差し出した。

「もしかしてヴィータさんから——いたっ!？」

手紙を受け取ったリインはそのまま嘴で額を突いて来たグリアノスの不意打ちを受けるのだった。

・*

「のう、リインよ。放蕩娘が呼び出した店と言うのは本当にここで

あつておるのか？」

「ええ、ここで間違いありません」

夜の帝都。

ナユタをルフィナに任せ、グリアノスが持ってきた手紙に記されたレストランにやって来たリインとローゼリアは見るからに高級そうな佇まいの店に尻込みする。

「確かこういう店はドレスコードとやらが必要のはずじゃったな？」

まさかこんな方法で妾を除け者にするとは謀ったなヴィータめ」

「いや、ドレスコードを言われたら俺も似たようなものなんですけど」
今のリインの服装はラフなもの。とてもではないが目の前の店に釣り合う格好ではない。

「どうしましょうか？」

途方に暮れるリインとローゼリアだったが、彼らの様子を見越してなのかタイミング良く店の扉が開く。

「はあいリイン君、それに婆様。待っていたわよ」

リイン達に負けず劣らずのラフな姿のヴィータ、否ミスティが二人を出迎えた。

「ここは私が良く仕事で使っているお店でね。奥には個室があるから秘密の話をするのに重宝しているのよ」

「むう……こんな高そうな店に入り浸る成金になどなりおつて」

ローゼリアはヴィータに白い目を向ける。

「というかその恰好はらじおぱーそなりていーという奴だったか？」

オペラの歌姫と言い、結社の魔女と言い、ちよつと働き過ぎではないか？

ユミルの頃から少しやつれたのではないか？ ちゃんと食べているのだろうか？」

「あーあー聞こえない」

耳を塞いでヴィータは子供ののようにローゼリアの追及を無視する。

そんな微笑ましいやり取りを苦笑を浮かべて見守るリインだったが、それを横目で見たヴィータは不機嫌そうにリインを睨んだ。

「そもそも私がやつれたのはリイン君のせいよ」

「俺の？」

心当たりがないリインは首を傾げる。

「そうよ！ 先月の帝都でのエンド・オブ・ヴァーミリオンと言い、先週のノーザンブリリアでの《虚神》の現出と言い。何をやってくれているのかしら？」

「それは言い掛かりです。テスタ・ロツサが出て来たのは帝国解放戦線のせいですし、デミウルゴスも俺のせいじゃありません」

流石結社の一員、情報が早いと思いつながらリインは自分は悪くないと弁護する。

「……………」

「それに『劫炎』を喚びて来たのはヴィータさんですよ？ 暗黒竜の復活はもしかして……………」

「あれは彼らの独断よ。私だつて驚いたんだから！」

「……………嘘じゃなさそうですね」

弁明するヴィータにリインは疑いの眼差しを解く。

「ところでさつきグリアノスに嘴で額を思いつきり一突きされたんですけど？」

「ぶい」

リインの指摘にヴィータは明後日の方を向いた。

「誤魔化した」

「誤魔化したのう」

「今日の私はただの仲介よ」

白い目を向けてくるリインとローゼリアの視線を無視してヴィータは本題に入る。

「リイン君に用があるのは私じゃなくて彼女よ」

そう言つてヴィータは高級レストランの最奥の扉を開けた。

「よく来てくれました、リイン」

リイン達を出迎えたのは《鋼の聖女》アリアンロードだった。

・*

「まず小さな用事を済ませるとしましょう」

雑談を交えた食事の後。

アリアンロードは空気を引き締めるように用件を切り出した。

「貴方が《風の剣聖》から譲り受けた《黒耀石の鍵》を譲る、もしくは破壊してもらえないでしょうか？」

「いきなり随分な要求ですね？ この鍵の来歴を聞いても良いですか？」

予感があったから一度トリスタに着替えや代わりの太刀を取りに行く時に一緒に持ってきておいた《黒耀の鍵》をテーブルの上に置いてリインは尋ねる。

「今は失われた古代の遺跡を目覚めさせる本来の鍵の合鍵、と私は聞いています」

古代遺跡と言われて、影の箱庭でアリオスと巻き込まれて現出したもののことを思い出してリインは顔をしかめる。

「すでに本体は失われているようですが、万が一を考えてその遺跡にまつわるものは抹消しておきたいというのが盟主の願いのようです」
「そちらの事情は分かりました。壊すことについては異論はありません」

あの騒動によりアリオスも鍵の処分に関してはリインに一任している。

「ただ、結社にそんな鍵を譲渡するつもりはありません。かと言って破壊は難しいんですがどうするつもりですか？」

「失礼、鍵をこちらに」

差し出された手にリインは訝しみながら渡す。

アリアンロードはその鍵をじっと見つめると無造作に握り締め――そのまま握り潰した。

「これで問題ありませんね？」

「……………え？」

折ろうとしてもびくともしなかつた鍵を簡単に握り潰された事実
にリインは目を丸くする。

「リアンヌ……………」

「まさか本当にやるなんて」

力任せな解決に二人の魔女は呆れる。がそれを無視してアリアンロードは話を続ける。

「話が前後してしまいましたが、黒の鍵の放棄に対して結社が支払う対価としてこのようなものを用意しました」

そう言ってアリアンロードがテーブルの上に置いたのは拳大の「黒耀石」。

「……………リアン又さん……………それはまさか……………？」

「はい。結社が所有していた『時の聖獣』がこの世に生み出した黒耀石です。ブルブランに言われて半分に切断しておきましたがよろしかったでしょうか？

これが気に入らなければサンドロット家から唯一持ち出した——」
「いえ、それで良いです」

リインはこれ以上の何かを出そうとしたアリアンロードを止めるために妥協する。

とうとう揃ってしまった七つ目の聖石。

聖痕の触媒として欲しかったと喜ぶ半面、揃って欲しくなかったと嘆くのが半分。

「確かこれで七つの聖獣が造り出した七耀石が全て揃ったんじゃないでしょうか？」

「ええ、ブルブランから預かってきたけど。すごいわねリイン君」

ローゼリアの呟きを肯定するようにヴィータは傍らに置いてあったトランクケースを開け、中に整列させた六つの七耀石をその場に見せる。

「それについて盟主から御言葉と、貴方の偉業を称えてこちらを預かってきました」

「まだ何かあるんですか？」

さらに何かを取り出したアリアンロードにリインは嫌そうな顔を隠さずに聞き返した。

「こちらになります」

そう言って黒耀石の隣に置いたのは無色透明の石だった。

「これは？」

聖獣の石と違い、何の力も感じない——それこそガラスの塊にしか見えないそれにリインは首を傾げる。

「それはまさか」

大きな反応したローゼリアはテーブルに身を乗り出して、その無色透明な石を凝視する。

「分かるんですかローゼリアさん？」

「ううむ……七耀の力が欠片も感じない……これは自然にできるようなものではない代物じゃぞ」

「その通りよ婆様。それは盟主が『外の理』を用いて造り出した無色の七耀石。いわば蛇の聖石とでも呼べば良いのかしら？」

ローゼリアの考察をヴィータが肯定する。

「そんなものをどうして俺に？」

特殊な七耀石だと言う事は分かった。しかしそれを敢闘賞としてリインに差し出して来た意図が読めずに尋ねる。

それにアリアンロードは今日の本題とも言える太刀を石の隣に並べて続ける。

「貴方は聖獣達の加護をこの太刀にまとめるつもりだったそうですね？」

「ええ、貴女の槍。劫炎のアングバルと打ち合える武器が今後の戦いに必要になりますから、俺が用意できるものとして聖獣の石を使うつもりでした」

とは言えリインは七つの石を集めるつもりなどなく、聖石に見合う聖痕が完成したら行うつもりだったのでこうして七つの石が集まるのは予想外だった。

「盟主からの御言葉をそのまま伝えます。その試みは間違いなく失敗します」

「……………理由を聞いても良いですか？」

「単純に物理的な問題です。例えば話になりますが貴方の手が足りないそうです……」

貴方がやろうとしていることは七つの穴が空いている水道管を手

で塞ごうとしているようなもの……

せいぜい二つまでなら問題なく聖痕に落とし込めるそうです」

「そうですか……」

まるで全てを見透かしたような言葉。

ならば妥協して二つの聖獣の加護だけで良いかと考えたリインの思考にアリアンロードは続く言葉で待ったをかける。

「ですが、盟主も奇蹟的に集まった七の聖獣の加護を持った武具の誕生を見てみたいと仰っています……」

そのためにそれぞれの七耀石に内包する力をこちらの無色の七耀石に一度統合してから聖痕にすることを勧められました」

「そう……ですか……」

敵に問題を指摘され、その改善策まで提示されたことにリインは複雑な気持ちになる。

「ところでリイン」

「まだ何か？」

どうするべきなのか決めあぐねているリインにアリアンロードはさらに続ける。

「この太刀ですが実はまだ銘はありません」

「え……？」

対面に座っているはずのアリアンロードだが、心なしか身を乗り出して来たような圧を感じる。

「聖獣達の加護が合わさった一刀に相応しいと思える銘が私にあるのですが、もし良かったら受け入れてもらえないでしょうか？」

いつかの時のように聖女は無表情のまま、リインに有無を言わせないプレツシャーをかけてくる。

「リアンヌ……はしやぎすぎじや」

「ふふ、おかわいいいこと……」

魔女二人からの言葉にアリアンロードはこほんと、咳払いをして佇まいを直す。

「もちろん貴方がすでに決めた銘があるというのなら無視して構いません」

「いえ、まだ決めてないですけど……その銘を聞く前に、その太刀を受け取る交換条件を提示しても良いですか？」

このままだと押し付けられると考え、リインは強引に交換条件を提案する。

「そうですね……そういう話でしたね。では貴方がこの太刀を受け取るために、私に何をさせたいのですか？」

「まず前提として俺はノルド高原とブリオニア島にあった《ロストゼウム》と《アークルージュ》の器を回収しておきました」

リインの不意打ちの告白にヴィータとアリアンロードは思わず固まる。

が、それを無視してリインは続ける。

「今、ここに持ってきていませんが、それぞれの欠片を内包した騎神用の剣を俺は用意しています……」

俺からの要求は《銀の起動者》にその剣で俺との「相克」に臨んでもらうことです」

「至宝の欠片を剣に……？」

「リイン君……貴方は何を考えているの？」

「なるほど、そのためだったか……」

驚く結社の二人を他所に、ローゼリアはその目的を察する。

「もちろんその「相克」では俺も用意した片方の剣を使って戦うつもりです……」

机上の空論になりますが、この二つの剣を「相克」に紛れ込ませて一つの「鋼の剣」にできれば「黒」に對抗できる力になると俺は考えています」

リインがもたらした提案、黒への対抗策にアリアンロードとヴィータは黙り込んで考え込む。

「リイン君、確認させてもらうけどそれってもしかして「鋼の器」を錬成しようとしているのかしら？」

「そうです」

躊躇うことなく頷かれた肯定に三人は改めてリインの意図を理解する。

理解したからこそ頭を抱える。

「そうよね……器が錬成に取り残されていたと考えたら、そっちの方からアプローチを掛けるのは間違いじゃないわよね」

「どうやら私たちは騎神の存在に意識を取られ過ぎていたようですね」

「若いもんはこれだから怖いもう」

そんなリインの計画に三者三様で賞賛の言葉をもらす。

「リイン・シユバルツァー……」

是非もありません。その計画、むしろ私の方からお願いさせていただきたいくらいです」

武を高めること以外、大した指標もなかった己の道。

それを恥じるつもりはないが、明確な光明が見えたこと。それが「あの人」の子によってだと思おうと感慨も一入だ。

「《幻焰計画》……もしかしたら一度練り直さないといけないかもしれないわね」

「幻焰計画……」

ヴィータがこぼしたその名前にリインは直前のノーザンブリアで行われていた計画を思い出して微妙な気持ちになる。

「それで剣は今どこに？」

「トールズ士官学院の旧校舎にあります。今は忙しいのでクロスベルから戻ってから受け渡しで良いですか？」

「構いません」

リインの意見にアリアンロードは首肯する。

「ところでリイン君」

「何ですか、ヴィータさん？」

「貴方、明後日からクロスベルに行くらしいけど。何も起こさないわよね？」

「いや……だからそれを俺に言われても困るんですけど」

「お願いだから、これ以上不確定要素を増やささないでね、お願いだから」

「ですから文句はテロリスト達に言ってください」

凄んで念を押しして来るヴィータにリインは肩を竦めてそう答える
しかなかった。

「ふむ……話はまとまったようじゃが、リアンヌよ。結局お主はこの
太刀にどんな銘をつけるつもりだったのだ？」

最後にローゼリアが太刀の話題を引き戻す。

「リイン・シュバルツァーが持つに相応しい銘です……」

七つと一つの石の加護を得た一刀。その名は——“八耀”

83話 出立

8月28日。

帝都バルフレイム宮の一室では夜も遅いというのにまだ灯りがあつた。

机の上に山のように置かれた報告書や分厚い書物。

それをただひたすら黙々と読んでいく。

「――まだ起きていたのか」

不意の声にオリヴァルトが顔を上げるといつの間にも部屋に入ってきたのか、親友のミュラーが呆れ顔を向けていた。

「明日の出発は早い。いい加減、寝たらどうだ？」

「あー……うん……」

ミュラーの言葉にオリヴァルトはぼんやりとした返事をする。

「一応、こちらの報告にも目を通しておきたいからねえ」

オリヴァルトが持っていた報告書をテーブルの上に置いて一息吐く。

「士官学院か……まさかお前がそこまで真面目に職務に励むとはな」

「フフ、あくまで名目上の理事でしかないけどね……」

ライン君やセドリックがボクが用意した舞台で、ボクが想像していた以上の成果を出してくれているんだ。このくらいはさせてもらわないと」

「フ……まあいいだろう」

おどけた調子で言ったオリヴァルトにミュラーは苦笑する。

「しかしどうやら例の話は確かなようだな……」

カイエン公の手の者が密かに手を回しているようだ」

「あのヒトか……そんな所じゃないかと思っただけ。規模の方は掴めているのかい？」

「いや、そちらは不明のままだ……いや計り切れないと言った方が正しいだろうな」

「『暗黒竜』の復活か……まさかクロスベルで同じことをするとでも

？」

「分からん。だがあそこまで大それたことをした奴等だ。さしもの情報局もその辺りを掴み損ねているようだな」

「……………気付いているのはリイン君だけか」

書類の山からヴアリマールの修復についての報告書を取り出す。

第一装甲の修復は後回しにして上半身と下半身を繋ぎ合わせることを優先したと書かれている。

欠損した左腕は帝都事件の時に回収した左腕を繋げ直したが接続不良で動かなかつたため、デッドウェイトになるとして取り外されてしまった。

そのため欠損部が特に剥き出しになる左半身はエレボニアの国旗を用いることで隠すことになっている。

完全に修復されたとは言えない状況だが、あれ程の損傷から五日で動けるくらいに直ったことは流石としか言えないが、武器の修復も済んでいないのに彼をまた矢面に立たせないといけないことに罪悪感を覚える。

「ヴアリマールが必要になる事態か……できることならあと二年もあるんだ……」

今くらい彼には普通の学院生活を送ってもらいたかつただけだなあ」

「シユバルツァーはあの後に何か言っていたのか？」

「いや……白昼夢を見たのはその時の一回だけみたいで、具体的に何が起きるのかは分からないみたいだ」

「そうか……やはり第七師団からの護衛を増員した方がいいのではな
いか？」

ローゼリア殿や始祖様達の許可を取ったんだ、それに便乗して今から捻じ込む事も可能だろう」

「いや、それには及ばない……」

宰相ならともかく、ボクのキャラでそれをやったら築いたイメージが台無しだろう。それに——」

オリヴァルトは座ったまま、芝居っぽく求愛するようなポーズを

ミュラーに向ける。

「ボクにはキミがいるからね　　キミの腕の中で守ってもらえればそれだけで十分さっ！」

ミュラーは無言で踵を返した。

「——さて、俺も早く寝るか」

「スミマセン、調子に乗りました」

袖にされたオリヴァルトは秒も待たずに謝罪する。

通商会議を直前にしても緊張感のないオリヴァルトにミュラーはため息を吐いて、もう一度振り返った。

「いずれにしても、明日のうちに姫殿下と話をしておきたいかな。そちらの段取りはどうだい？」

「ああ、シュバルツアーに言付けを頼んだおかげで問題なく連絡は取れている。明日の昼食会の後、夕方くらいの時間になるだろう」

「そうか……フフ……一年振りくらいかな……」

エステル君達が残っていたら同窓会が開けたんだけどねえ。シエラ君も忙しそうだから出張できる余裕はなさそうだし」

「……そうだな」

「ま、せいぜいボクは最先端のアーバンリゾートを満喫させてもらおうとするさ……」

あ、キミと准佐殿の逢引きを邪魔するつもりはないから安心してくれたまえ、何だったら噂のテーマパークでデートしてきたらどうだい？」

「——余計なお世話だ、阿呆。しかし、いつも以上に下らん戯言が多いようだが……」

まさか良からぬことを考えているんじゃないだろうな？」

「ギクツ……ハハハ、ヤダナア。ソナナワケナイジヤナイカ」

わざとらしい片言にミュラーは肩を竦める。

「——まあ多分、これが最後の外遊になるだろう……」

宰相殿の狙いを探りつつ、大陸全土の動向も見極める……相変わらぬ苦勞を掛けるけどよろしく頼むよ——親友」

「フツ、無論だ」

相変わらずお調子者の態度と言葉だが、ミユラーは先程と違い苦笑して頷いた。

・*

8月29日。

帝都ヘイムダル中央駅。

ヴァリマールを貨物車両に積み込む作業の横でリインは家族たちの見送りを受けていた。

「それじゃあナユタのこと、よろしく母さん」

少し申し訳なきさそうにしてリインはナユタを抱えるルシアに頼む。

「ええ、ほらナユタちゃん。いつてらっしやいしましょう」

「あうあう」

ルシアに促されたナユタはリインに手を向けて喋る。

「エリゼもありがとうな。アルフィン殿下に離宮の滞在許可を取ってくれて」

「いえ、むしろ姫様の方から言い出したことですから」

礼を言われたエリゼはここにはいないアルフィンのはしやぎぶりを思い出してため息を吐く。

リインがクロスベルに行くことについて、ナユタをどうするか色々な意見が出た。

常識的に考えれば、各国の首脳が集う国際会議にまだ言葉も喋れない赤子を連れて行くことはできない。

リインは名目上護衛官なので、その仕事に支障を来たす要因を連れて行けるわけにはいかない。例えばオズボーン宰相やオリヴァルト殿下の許可があったとしてもである。

かと言って、今はまだ力を封じているとはいえ《幻の至宝》であるナユタを両親に任せるとするのは戦力的に不安があったのだが。

「護衛に関しては私に任せると良い」

家族の輪の中に混じってそこにいたヴィクターがその不安を晴らすように応える。

「アルゼイド子爵閣下……わざわざすみません」

「なに私も帝都に少々用事があったので構わぬさ。それにガラシヤールを鍛え直してもらった借りを返せると思えば安いくらいだ」所用で帝都に残ったヴィクターがナユタの護衛を引き受けてくれたことでリインの憂いはなくなった。

皇族が住まうカレル離宮の警備に加えて、ヴィクターがいるならば万が一もないだろう。

「ありがとうございます。それで……父さん、いつまでそうしているつもりですか？」

ヴィクターとの会話を切り上げて、リインは俯いているテオに声を掛ける。

「く……こんなに立派になって」

「そんな大袈裟な……」

涙を堪えるようにテオはリインの姿に感激する。

リインの格好はトールズ士官学院の制服でもなければ、正規軍の紫の軍服でもない。

《灰色》を基調としたオリヴァルト殿下の色違いの式服。

わざわざ帝国政府が用意してくれた高級品にリインは居心地悪く頬を掻く。

「大袈裟なものか……」

リイン、お前は私が思っているよりもずっと強くなっていたのだな」

顔を上げたテオは何かを決意したように目を伏せる。

「今のお前ならば……そう、今のお前ならば知っていいのかもしれないな」

「え……？」

「ずっとお前に話してなかったことがある……」

だが、もはや黙っている事もないだろう。クロスベルから帰ってきたらお前の出自について知っている事を教えよう」

「あ、あなた……」

「父様……？」

「すまないルシア。だがもう良い時期だと思っただ。エリゼも、驚かせてしまったようだな」

「父様は兄様がどうして捨てられたのか知っていたのですか？ それならどうして今まで——」

「エリゼ……」

テオの突然の告白に驚いて詰め寄ろうとしたエリゼをリインは宥める。

「父さん、それは俺を生んでくれた両親が誰かという話かな？ そのことだったらもう俺は知っているんだ」

「なっ……!?!」

「え………?」

「兄様っ!?!」

驚く三人にリインは気まずそうに苦笑する。

「むしろこちらから話すのが遅れてしまって申し訳ないと言うか……」

でも誰が本当の両親だったとしても、俺は揺るぎなく二人の息子、リイン・シユバルツァーです」

そう真つ直ぐに言い切ったリインにテオとルシアは息を呑む。

「そうか………ありがとう、息子よ」

「本当に立派になって……これも女神の導きなのでしょうか」

今度はルシアの方が感極まって涙ぐむ。

「むう……」

が、そんな中でエリゼは自分だけ除け者にされたようで拗ねる。

「悪かった。別に秘密にしておくつもりはなかったんだけど、タイミングがな」

そんなエリゼの頭をリインは優しく撫でながら言い訳を口にする。

「……子供扱いしないでください」

と言うが、エリゼはリインの手を払い除けることはしなかった。

「ふふ、これからエリゼはお姉ちゃんになるんですからね。ねーナユタちゃん」

「あー」

「母様!?!」

からかうルシアの言葉にナユタが同調するように声を上げる。

「うう……」

二人に文句を言えず、エリゼは代わりにリインを恨めしそうに睨む。

「……エリゼ、ナユタのことで不満があるなら言ってくれ。ちゃんと改めるから」

「不満などありません。私はお姉ちゃんですから」

見栄を張っているが無理はしていない。

妹の新たな顔にリインは思わず苦笑する。

「リイン君、そろそろ出発だって」

「分かりましたトワ会長」

トワが呼びに来た声に返事を返し、リインは最後に一同を見渡した。

「それじゃあ、行ってきます」

「ああ、しっかりと勤めを果たして来い」

代表する形でテオがそれに応え、リインは踵を返して乗車口に乗り込む。

警笛の音が響き、アイゼングラーフ号はヘイムダルを出発する。

窓越しに手を振って来る家族たちにリインは手を振り返し、誰に言うでもなく呟いた。

「……………ナユタがいるなら、俺がいなくなっても大丈夫か…………」

早くも仲睦まじい家族として受け入れられているナユタのことを思い、リインは「あと二年」に改めて思い耽るのだった。

・＊

テオ達の他にもヘイムダルに住む帝国の人達に見送られてアイゼングラーフ号はクロススベルへと出発した。

駅舎から見送った紅い列車が見えなくなれば、余韻が冷めるように集まった観客たちは解散していく。

「それではカレル離宮までは私が護衛として案内させてもらうとしま

しょう」

「申し訳ありません。子爵閣下」

自分よりも地位はもちろん知名度も高いヴィクターに丁寧な対応をされてテオは恐縮し切った様子で礼を言う。

「エリゼはこの後学院に戻ってから離宮に来るんだったわよね？」

「はい。兄様が戻って来るまでは私も離宮に泊めていただくことになりましたから」

まるで自分の妹か娘のようにこの数日間暇があれば可愛がり、学院ではエリゼの妹だと写真を触れ回って惚気る級友と後輩のことを思い出してエリゼはため息を吐く。

「フフ……良い友達みたいね」

「母様……」

皇女と公爵令嬢をたった一言で済ませる母の豪胆さにエリゼは項垂れる。

「それでは私はこれで失礼します。ナユタちゃんも、また後でね……ナユタちゃん？」

別れの挨拶をして、最後にナユタの頭を撫でようとしてエリゼの手は止まった。

「あら……っ？」

ルシアの腕の中にいたナユタは何を思ったのか、その中で身を振って彼女の身体を登ると肩越しにアイゼングラーフ号が消えた線路を見る。

「どうしたのナユタちゃん？」

ルシアはナユタを抱き直して振り返り、同じく線路の方を見る。

どうしたのだろうかと一同が首を傾げること数秒。

「うわああああああああん！」

これまで夜泣きを一度もしなかったナユタは声を上げて泣き出した。

「あらあら……」

突然泣き出したナユタをルシアは驚きながらも慣れた様子であやす。

特殊な子供で、自分達の言葉を正しく理解している。

まるで赤子の身体に大人がいるような錯覚を感じていたのだが、初めて聞くことになった泣き声に改めてナユタが普通の赤子だと認識する。

「パパと離れ離れになるのが寂しい？　大丈夫、すぐに帰って来るから。それまでは私達が一緒にいるから」

そう語り掛けるが、ナユタは疲れて眠るまで泣き止むことはなかった。

84話 西ゼムリア通商会議I

西クロスベル街道への門の前には早朝だというのに多くの人が集まっていた。

ロイドは通行止めのための柵の前に立ち、改めて集まった人だけに思わず感想をもらす。

「すごい人だからだな……」

「無理もないですよ。まさか今朝になって帝国がデモンストレーションをするなんて導力ネットに情報が流されてしまったんですから」

ノエルはぼやくロイドに苦笑しながら応える。

「それにその連絡は他の方達には既に済ませていたみたいね」

エリイは自分達を境界にした街道側に視線を送る。

導力車が通れるだけの道を確保しそれ以外は人がすし詰め状態の街の中と違い、一歩外に出れば数えるだけの者達が立ち並んでいる。

クロスベル自治州共同代表、ヘンリー・マグダエル議長。

同じくクロスベル自治州共同代表、データー・クロイス市長。

カルバード共和国政府代表、サミュエル・ロックスミス大統領。

リベール王国王太女、クロードイア・フォン・アウスレーゼ。

レミフェリア公国国家元首、アルバート・フォン・バルトロメウス

大公。

帝国を除く、通商会議参加国が揃っているのだがロイド達からでは彼らがどんな顔をしているか分からない。

「やれやれ、ただでさえ通商会議の期間が前倒しに増えて忙しいってこののにいい迷惑だぜ」

日も昇っていない早朝から作業をすることになったランディは愚痴る。

「で、いったい何をするつもりなんだ？ 帝国はアイゼンなんとかっていう列車で来るはずじゃなかったのか？」

「そうらしいね。ただオリヴァルト殿下がベルガード門から街道を歩いて来るって話らしい」

「はあっ!? 歩いて!? しかもその言い方だと一人でつてことか!？」

何考えてやがんだよ」

ワジの答えにランディは驚くが、ワジは呆れたように肩を竦める。

「皇子の身の安全なら心配はいらないさ。何せ——」

「来たわよっ！」

ちやつかり人だかりの最前列を確保していたグレイスがワジの言葉を遮るように叫ぶ。

彼女の助手がそれに合わせて導力カメラのシャッターを切る。

「来たか……」

事前には話は聞いていたが、それでも緊張を感じながらロイドは——そこにいる全ての人はそれを見る。

曲がりくねった道から見えたのは巨大な人型。

左肩にエレボニア帝国の国旗を纏った巨人は悠然とした足取りで西クロスベル街道を歩いて来る。

「な……な……な……」

「話には聞いていましたが、とんでもないですね」

一歩一歩近付いて来る騎神、その巨大さを改めて実感したノエルは感嘆の息を吐く。

「帝国の伝承にあるとされる『巨大なる騎士』……まさか実在していたなんて」

「にしては随分とボロボロみたいだね。先月の帝都の異変と、先週のノーザンブリア浄化の立役者とは思えないくらいに」

エリイとワジは予め集めていた情報を呟き、観察するように巨人を眺める。

「これをあのリイン君が動かしているのか……」

そしてロイドは顔見知りの少年がこれを動かしている事実に変更で驚いた。

巨人はその巨大な体躯にも関わらず、地響きを立てずに静かに歩いて各国首脳陣の前で足を止める。

「やあ、諸君。歓迎ありがとうございます」

巨人の手の上に乗っていた緋色の礼服を纏った金髪の青年がこやかな声を掛ける。

「知っている者も多いと思うが、自己紹介させてもらおう……」

エレボニア帝国、皇帝ユーゲントが名代、オリヴァルト・ライゼ・アルノールさ」

そう名乗りを上げると、巨人はその場に膝を着いてオリヴァルトを地面に下ろす。

「そして彼がこの帝国の伝承にある《巨大なる騎士》を操る——つてあれ？」

打ち合わせ通りに騎神の中から出て来ない操縦者にオリヴァルトは首を傾げて、膝を着いた巨人の胸に顔を寄せて言葉を掛ける。

「どうしたんだろう？」

「何かトラブルがあったのかな？」

ロイド達の位置からはオリヴァルトが巨人に何を言っているのか聞こえない。

しかし、数十秒の説得の末に巨人の胸元に光が灯るとそれはゆつくりと地面に降りて人が現れる。

「そして彼がこの帝国の伝承にある《巨大なる騎士》を操り、帝国を守り、ノーザンブリアを救済した《灰色の騎士》リイン・シユバルツアーだ」

オリヴァルト皇子の色違いの式服を纏い、太刀を佩いた白髪の少年は各国の首脳陣に堂々と向き直り——すぐに顔を引きつらせて一歩後ろに身を退くのだった。

・*

西ゼムリア大陸通商会議。

初日から会議は始まらず、その日はパレードとして首脳陣は導力車でクロスベルの街を巡回し、IBCビルのイベントホールでの昼食会。

その後は晩餐会まで各種懇談会、そしてアルカンシエルの観劇。

首脳たちは全員、ミシユラムの迎賓館に泊まる予定となっていた。

予定は滞りなく進む。

昼食会が終わり、同行した随行団は懇談会で積極的に人脈の輪を広げて国家の垣根を超えて交流を深めていく。

クロスベル側にとっては幸先のいいスタートだった。

閑話休題。

護衛官

それは帝国の中でも選りすぐりの猛者の中から選ばれたエリート。自治州とは言え、対立する大国カルバードとの会議では武力を有する武官の人数は厳しく決められており故に選抜された護衛官達は一流に恥じない実力を有している。

彼らはオズボーン宰相やオリヴァルト皇子を始めとした随行団の安全を守るため、昼食会も懇談会も気を抜かず仕事に徹していた。そんな彼ら、護衛官たちの現在の最重要かつ極秘任務は――

――捜索である！

・*

「ええい、こんな時にあいつは――」

ミシユラムの迎賓館に宛がわれた一室でミュラーは手の中の手紙を握り潰した。

それはミュラーが帝国の護衛代表として、各国の護衛の代表たちと顔合わせをするために主の下を離れたわずかな時間に起きた出来事だった。

戻って来た部屋はもぬけの殻。

乱雑に脱ぎ捨てられた緋の式服とテーブルの上に置かれた置手紙でミュラーはだいたい事情を察して、オズボーン宰相に宛がわれた部屋を訪れて報告した。

「なるほど皇子にも困ったものだな」

「申し訳ありません。すぐに連れ戻して来ますので、この場を離れる許可を頂きたい」

「まあ落ち着きたまえミュラー少佐。君が動けば場合によっては事が

大きくなってしまおうだろう……

会議を目前としたこのタイミングで各首脳を刺激するような真似は慎むべきだ」

「しかし、このままでは帝国の恥が——」

「何も放置しろと言っているわけではない……」

このクロスベルには遊撃士を真似した警察とやらがいるそうじゃないか。地の利のある彼らを使って皇子を探るのが得策だろう……

そういえば君の弟がそこに世話になっているんだったか？」

「いえ、愚弟は今エプスタイン財団の試験要員としてクロスベルを一時離れています」

「それはタイミングが悪かったようだな……」

なに皇子不在については私がフォローするでしょう」

「いかなさるおつもりですか？」

「昼食会の時にも話題になったが、彼に矢面に立って注目を集めてもらおうでしょう」

厳つい笑みを浮かべるギリアスにミユラーは顔をしかめた。

——すまん、シユバルツァー……

悪巧みを考えているだろう宰相の顔にミユラーは利用される少年に胸の中で謝罪することしかできなかつた。

・*

懇親会の会場に彼は突然現れた。

あらゆる意味で話題の中心となっていた彼は、懇談会の参加には護衛官の立場と明日のノーザンブリアの報告会の準備のために辞退したはずだった。

彼との交流は明日の夜会からが本番だと思っていただけに、突然の登場にそれまでの喧騒は静まり返る。

「あ、リイン君——」

「おお、リイン・シユバルツァー君ではないか」

真っ先に彼の姿を見つけたクロローディアが声を掛けようとするが、それを遮つたのはロックスミス大統領だった。

「明日の会議の準備をしていると聞いていたがどうしたのかね？」
「オズボーン宰相に何とか及第点を頂きましたので、その後せっかくだから見聞を広めて来ると良いと言われてしまつて窺わせていただけでした」

歩み寄り、親し気に接して来るロックスミスにリインもまたにこやかな笑みで応える。

しかし完璧な笑顔の下でリインはこうなる原因になった存在への不満を漏らしていた。

——オリヴァルト殿下、後で締める……

ある意味、リインの初めての社交界デビューはこんな形で始まるのだった。

「いや、せっかくの懇談会だと言うのにオズボーン宰相もオリヴァルト皇子も顔を見せないから、どうしたのか話していたところだね」

「オズボーン宰相には先程まで明日の報告のリハーサルを見て頂いていました……」

オリヴァルト殿下については先日のノーザンブリアの併合に伴う激務の疲れが出てしまったようで今日は既にお休みになられてしまいました」

用意していた言い訳をリインは淀みなく並べる。

嘘をつくのは心苦しいが、ここで正直に皇子は街に放蕩しに行きましたとは口が裂けても言えない。

そもそもリインが予定を繰り上げてこの場に駆り出されたのはその事実誰かが気付かないようにするための囷なのだから。

「ノーザンブリアの併合か……本来なら復興支援についても通商会議の議題の一つだったのだが」

「申し訳ありません……」

二度目の「塩の杭」の出現に偶然居合わせたので全力を尽くして対処した結果になりました、それもこれも全ては「騎神」のおかげです」

「デミウルゴスが起こした奇蹟と説明するのは難しいため、全ては「騎神」のおかげというのが公式の発表となっている。」

嘘を吐くことはあまり好かないが真実をそのまま話しても信憑性はないので、不思議なことは全部ヴァリマールのおかげにするという暴論。

もつともそれを相手側が立証する方法がないので、一番穏便に済む説明……なのだが。

——何だかクローゼさんからのプレッシャーが強くなった……

西クロスベル街道で出迎えてくれた時から感じる威圧感の圧力にリインは冷や汗が流れるのを感じる。

彼女にリインの嘘を見破るだけの根拠はないはずなのに、何でかばれているような気がして居たたまれなくなる。

が、それを顔に出さないリインにロツクスミスはそのまま話を続ける。

「ほう……先程見せてもらったが『騎神』というのはそれ程の代物なのか……」

是非我が国に来て、今問題になっている『龍脈の枯渇』問題に協力してもらいたいものだ」

「『龍脈の枯渇』……ですか？」

「うむ。今の共和国における最も重要な案件なのだ……」

そう言えばリイン君、君は帝国で随分と心のない誹謗中傷を受けていたそうじゃないか？」

「ええ……確かにそうです……」

「君さえ良ければ共和国に来ないかい？　うちには君の家族を含めて相応の地位を用意しても良いと思っっているのだが」

「それは……」

「共和国には身分制という人種差別は存在しない。ノルドを始めとする君の実績を考えれば十分にやっていけるだろう」

リインからすれば家族を巻き込む亡命・移住など論外なのだが、今回の身代わりのこともあり心がわずかに揺れる。

言いよどむリインに手応えを感じたロツクスミスは畳み掛けるように続ける。

「すぐに返事をしてくれとは言わないさ。それよりもどうかね？　ノ

ルドのことを含めた君の武勇伝を――」

「ロックスミス大統領、シュバルツアー卿を独り占めにされては困ります」

懇談会の会場から個室で話そうと画策したロックスミス大統領を止めたのはアルバート大公だった。

「改めて名乗らせてもらおう、リイン・シュバルツアー君……」

レミフェリア公国国家元首、アルバート・フォン・バルトロメウス大公

「リイン・シュバルツアーです」

「実は私も君とは直接会って話をしたかったんだが……」

話には聞いていたが本当にまだ学生なのだね。その歳であれ程の薬を開発したとは信じられないな

「おや、薬とはいったい？」

アルバートの話にロックスミスは思わず聞き返す。

「このクロスベルで我が国が協力して建てた聖ウルスラ医科大学で数ヶ月前からとある薬の効果を調べて欲しいとアリオス・マクレイン殿を通して依頼がありましたね……」

その薬はこれまでの治癒薬とは全く異なる成分と効果を発揮する画期的なものなのですよ……

私も医師免許を持っているし、これまで様々な新薬の開発に携わって来たのだがあの薬はいったいどうやって造っているのかね？」

「ほう、帝国の英雄殿は薬学にも精通しているとは驚きだ……アルバート大公。それはどれ程の薬なのだね？」

「詳しいことは省きますが、既存の薬とは全く違う画期的なものです……」

今は効果が強過ぎると言う事で実験段階の域を出ていませんが、将来的には怪我による死傷者の数を大きく減らすことは間違いないでしょう」

「それは凄いっ！」

会場にロックスミスの歓声が一際大きく響く。

周囲の注目が集まっているのを感じながらリインは答える。

「薬学というよりもあの薬は考古学の分野になります……」

現代医療の薬の代表として挙げられるのは「ティアの薬」つまりは水の力を宿した水薬になります。自分が造っているのは「大地」の力を宿した霊薬です……」

水は対象の回復能力を高めて促進させるものに対して、霊薬は損傷した器を直接修復、「治す」のではなく「直す」効果になります……古代人はこの薬を授かることで病気や怪我とは無縁、それどころか体を鍛える行為もこの薬で成立させていたとされています」

「ほう……つまり古代の薬を復活させた」と

リインの説明にアルバートは目を輝かせる。

「実に興味深い話だ。できることなら別室でもっとじっくり話をしたいものだが——」

先程ロックスミスを諫めた手前、アルバートはその提案を最後まで言わずに呑み込む。

「それはそうと一つ尋ねても良いかね？」

「何でしょうか？」

「君が医科大学に送ってくる薬を封入した試験管はどれも使い古したものだ。その気が気になってね。あれはいつたいていどうということなのだろうか？」

「大して理由はありません……」

自分の実験室はツールズ士官学院の旧校舎の化学室を利用しているので、そこにあった昔の試験管やビーカーを再利用させてもらっているんです」

「………使い古し？」

「ちゃんと洗っていますし、消毒もしていますよ？」

「………導力顕微鏡や純水の製造機は？」

「ありませんけど？」

リインの答えにアルバートは固まること数秒。

唐突に踵を返したかと思うと、レミフェリアの随行団に声を掛ける。

「今すぐ本国に連絡を！ 最新の導力顕微鏡と純水製造器、それから

最高品質の実験器具を送る様に手配しろっ！」

「ちよっ!？」

突然そんなことを言い出したアルバートを止めようとリインは手を伸ばす。

が、指示を出したアルバートは再び振り返ると伸ばしたリインの手を両手で掴む。

「リイン・シュバルツァー君！ 留学に興味はないかね!？」

君の太古の薬を復活させる偉業に我が国は全面的なバックアップを約束しよう、いや君のための研究室を——」

「おっとアルバート大公閣下それはずるいではないか。リイン・シュバルツァー君。カルバードの学院に興味はないかな？」

聞けば君の剣の流派は東方剣術の集大成と呼ばれる 八葉一刀流

“ …… ”

本国の首都の学院には様々な流派の学生が集まっているのだが興味はないかね？」

「え……ちよつと御二人とも……」

差し出した手はアルバートに取られ、いつの間にか逆の手はロツクスマスに取られて詰め寄られるリインは退くこともできずにたじろぐ。

「ククク、モテモテだなシュバルツァー。で、良いのか後輩？」

「……………何のことですか？」

『私のリイン君を盗らないでっ!』って、今あの輪の中に入って行けば好感度上昇待ったなしだぜ」

「相変わらずいい加減なことを……」

クローディアはため息を吐くが、リインの方へと踵を向けた。

「おっ? 何だかんだで乗り気じゃねえか？」

「違います。先輩が言わなくても助けて上げるつもりでしたから」

そう言い切るクローディアだったが、彼女よりも早く熱烈な勧誘をする二人を諫める言葉が響く。

「そこまでにして頂けますかね。御二人とも」

《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンが心なしか上機嫌な口調で続け

る。

「リイン・シュバルツァーは我がエレボニア帝国の『英雄』ではありますが、まだ十六の子供……」

そんな答えを強要するような交渉は謹んでももらいたい」

「おっと、これは失礼。つい気が逸ってしまった」

「う、うむ……申し訳ない」

ロックスミスとアルバートはギリアスの指摘にリインの手を放して謝罪する。

「いえ……」

それだけを言うのが精一杯でリインはため息を吐きたくなる気持ちをぐつと堪える。

「助かりましたオズボーン宰相」

「ふっ……まだまだだな」

礼を言うリインにギリアスはそんな言葉を返す。

その言葉にリインはむつと顔をしかめるが、ロックスミスが今度はギリアスに話しかける。

「それにしても羨ましいですね。エレボニア帝国にはこれ程の『英雄』が現れるとは宰相殿もさぞかし鼻が高いでしょう」

「いえいえ、彼にはこんな所で満足せずにもっと上を目指してもらいたいと思っておりますよ」

「宰相閣下は手厳しいですねえ。これ以上と言うと何を求めると?」「せめて私程度は超えてもらわなければ、帝国の未来を任せるわけにはいきません」

ギリアスのその一言に会場がざわめく。

聞きようによっては次期宰相を譲る様にも取れる言葉。

もつとも言われたリインは別の意味に捉えて、その表情を険しくする。

「オズボーン宰相……貴方は——」

「お歓談中失礼」

言い返そうと口を開いたリインの言葉はデーターター市長の声に遮られる。

何事かと一同が振り返る。

「実は本日の懇談会におかれましては皆様にスペシャルゲストを我がクロスベルは招いております」

「ほう……」

「スペシャルゲストですか」

データーのサプライズにギリアスとロックスミスは興味深いと言わんばかりに品定めする眼差しを向ける。

「本日の晩餐会の後に皆様にご覧いただくアルカンシエル……」

その看板であるイリア・プラティエとリーシャ・マオ。この二人に来ていただきました」

データーの紹介に合わせて彼の背後の扉が開き、パーティードレスで着飾ったイリアとリーシャが会場入りする。

「どうも市長に紹介されたイリア・プラティエよ」

「リ、リーシャ・マオです。よろしくお願いします」

二人の登場に会場の話題がリインから逸れる。

リインは息を吐いて逃げるように壁際に避難する。

「お疲れ様です。リイン君」

「クローディア殿下」

ろう様に差し出されたグラスをリインは受け取る。

「オリヴァルト殿下はもしかしていつものお病気ですか？」

「ええ、その通りです」

彼女には隠しても仕方がないとリインは素直に認める。

「ふふ、この後非公式に会うことにしているんですけど、お代わりないようで安心しました」

クスクスと笑うクローディアにリインは苦笑を返す。

「ところでリイン君」

が、穏やかな雰囲気はそこで終わり張り詰めたプレッシャーにリインは息を呑んだ。

「な、何でしょうか？」

鋭い眼差しでクローディアはリインを睨むこと数秒。

反射的に正座しそうになるのをぐつと堪えてリインは彼女の言葉

をじっと待つ。

「……………はあ……………体は大丈夫なんですか？」

しかしため息を一つ吐いて、クローディアは威圧するのをやめてリインの頭に手を伸ばす。

「髪も《鬼の力》を使っている時みたいにこんなに真っ白になってしまつて……………

ノーザンブリアを救ったことは確かに良いことですけど、もっと自分の体を大切にしないとダメですよ」

「ええ、それは分かっているんですけど……………」

真っ白の髪に触れ、真紅に染まった双眸を下から覗き込み、ふとクローディアの手がそのまま止まる。

「クローディア殿下？」

「フフ……………いつの間にか追い越されちゃったみたいですね」

「え……………ああ……………」

何のことかと考えて、すぐに思い至る。

2年前のリベールの時とは逆の構図。

あの時は見下ろしていたリインの顔はクローディアより少しだけ上にあつた。

彼の成長を改めて実感しながらクローディアは撫でる手を放して、クローゼではなくクローディアとして真剣な顔でリインに尋ねる。

「リイン君、貴方はどうしてヴァリマールを通商会議に——」

「アルカンシエルと言えば、知っていますかね？」

ロックスミスの良く通る言葉。

そこに含まれる嫌な予感にリインは体を震わせた。

「リイン君？」

「もしかして三月に行われた幻のプレ公演のことですかね？」

有名な話だとアルバートがロックスミスの言葉に頷く。

「ええ、大型新人のリーシャ・マオのデビューとして注目されていたその公演に何の前情報もなく出演した白き謎の語り部《空の御子》……………

経歴も名前も一切公開せず、そのプレ公演のみにだけ出演した幻のアーティスト……………」

そのプレ公演は今の成長を続けているアルカンシエルの中でも別格の演劇だったと巷で話題になっているのですよ」

「その劇なら私が観ました……」

ええ、ロックスミス大統領の言う通りあの劇は素晴らしかった……イリア殿とリーシャ殿の舞に目を離せなくなってしまうのに、《空の御子》が醸し出す神秘的な存在感によって物語に引き込まれる……こんなことを本人たちの前で言うのは申し訳ないが、今のアルカンシエルの劇よりもあの時のものが鮮明に焼き付いてしまっている程です」

ヘンリー・マグダエルが当時のことを懐かしむように語り、周囲の興味を煽る。

「《空の御子》についてはプレ公演の後でも何の発表もされなかったがいったい何者だったのかね？」

データーがイリアとリーシャに尋ねる。

「悪いけど、それは答えられないのよ」

「ご、ごめんなさい」

「ふむ……三月と言えば、君がちょうどクロスベルに滞在していた頃だったかな？」

と、話を振って来たギリアスにリインはギクリと体を震わせる。

「おお、何と言う幸運。君も噂のプレ公演を観たのかね？」

ロックスミスが興味深そうにリインに尋ねる。

「い、いえ……自分には縁がなかったので『観て』はいません」

「それは勿体ない」

ロックスミスの言葉に期待が高まった一同の視線が逸れる。しかし――

「そりゃあ『観て』ないよな。舞台上の上にいたんだから」

「なっ!?」

レクターの一言にリインは目を剥く。

「おっ……その反応はビンゴか……」

限定プロマイドってことで記念祭の時に買ったんだけどやっぱりこれってお前だったか」

そう言つてレクターはヒラヒラと現物を主張させて意地の悪い笑みを浮かべる。

「レクター先輩……それ、見せて頂けますか？」

「あ……」

「どうぞどうぞ」

レクターはクローディアにそのブロマイドを渡すと、ラインの首に腕を回して逃亡を防ぐ。

「……………」

クローディアはじつとそのブロマイドを見つめ、その背後にギリアスが並ぶと自然に列ができる。

「ああ……」

次々と回されていくブロマイドにラインは顔を蒼くする。

「あらら……」

「えつと……」

そんな国家代表たちが作る珍妙な光景にイリアは面白そうに笑い、リーシャは同情するように目を伏せる。

「いやはや、まさか帝国の英雄殿は薬学、考古学に続いて芸術面まで秀でているとは驚きですねえ」

「これには流石に私も認めざるを得ないでしょう」

《空の御子》のブロマイドとラインを見比べてロックスミスとギリアスは感嘆の言葉を漏らす。

「しかし、そうになると……」

「うむ……」

「そうですね。私は異論ありません」

顎に手を当てて考え込むアルバートにロックスミスとギリアスは何も聞かずに頷く。

「……………」

「おい何処に行くんだ？ お前はおっさんの護衛役だろ？」

「レクター・アランドール」

ラインは事の発端であるレクターを親の仇だと言わんばかりに睨み付ける。

「そんなに睨むなよ。まあ鎌を掛けたのは確かだが、お前も素直過ぎだぜ」

「くっ……」

そんな二人を他所にギリアスはイリアに向かって尋ねる。

「時にイリア殿、今日の観劇に彼を参加させてもらうことは可能かね？」

「何を言っているんですか閣下!? そんなオリヴァルト殿下みたいにノリで話すのはやめてください」

「巷で話題にされている幻の一幕とやらには私も興味が湧いてしまったのだよ」

抗議するリインにギリアスは動じることなく言い返す。

そしてイリアがギリアスの質問に肯定を返した。

「今日はちよつと無理かしらね。リイン君を入れるなら一度通しでリハをやりたいから明日だったら行けると思うけど」

「おおっ！ それはつまり明日なら幻の舞台と言われたあの舞台を観ることができると言うのかね？」

「いやしかし、あまりに急な予定の組み換えは警備を担当するクロスベルに大きな負担を強いることになってしまうでしょう」

歓声を上げるロックスミスに対してアルバートが流石に肯定的な二人を諫める。

「確かに少々はしゃぎ過ぎてしまったようですね。しかし最高の観劇を観賞できたなら明後日の本会議も大らかな気持ちで臨めるとは思いませんかロックスミス大統領」

「確かに気が逸り過ぎていましたな。しかし宰相閣下の言う通り、幻の舞台を観ることできたら本会議では口が軽くなってしまうかもしれませんね」

「おやおや大統領ともあろう御方が……フフフ」

「それにしても宰相閣下に演劇の理解があったとは意外ですね……ハハハ」

含みを持たせた言葉を交わし合ってギリアスとロックスミスは笑い合う。

そう言われてしまえばクロスベル側にとって、この予定変更は拒否し切れるものではない。

事の成り行きを見守っていたディーターとヘンリー、そして壁際に警護として今まで沈黙を保って立っていたアリオスにダドリー。

リインは順番に彼らと目を合わせていくが、彼らは一様に「頼む」と目で訴えていた。

「クロスベルとしましては、今日明日の予定の変更なら対処は可能です……」

ですがそれは御二人だけではなく、この場にいる全員の賛同があればの話です。あえて私の意見を言わせてもらうなら前市長が絶賛するその舞台を私も観てみたいものですね」

そしてディーターがそれを認め、しかも賛同する。

会場中の期待に満ちた視線がリインに集中する。

「いや……でも……そもそもですね！ 俺は今日の演目で何をやるかも知らないんですよ」

「あ、それならプレ公演でやったのと同じのをやるわよ」

咄嗟に思い付いた言い訳に出すが、そんなリインの主張をイリアは一蹴する。

「何で……？」

「何でって、そりや初めて観る人達ばかりなんだから一番最初の章をやるのは当然でしょ？」

多少台詞とか増えた場面はあるけど、前みたいに一晩あればリイン君なら余裕よね？」

「っ……いい、衣装はどうするつもりですか？ この半年で結構背が伸びて——」

「あ……それなら大丈夫です。元々体の線を隠すゆったりとしたロブですし、以前の衣装も本格的に仕立て直してありますから」

と、さらにリーシャが逃げ道を潰す。

「お、俺はオズボーン宰相の護衛ですから」

「護衛と言っても夜間の警備に関してはクロスベルの警察に一任することになっているだろう？ 観劇の間も特に移動を伴うわけでもな

いのだから問題はあまるまい……」

「明日はノーザンブリアの報告があるんですけど？」

「それは昼間の話であろう？　それが終わった後なら何の問題もあるまい……」

ああ、ここにいないオリヴァルト殿下については私から説明しておこう」

そしてさらにギリアスは外堀を埋めてくる。

この場にオリヴァルト皇子がいれば嬉々としてリインを舞台の上げようとしていただろうが、今の状況は彼がいなくても変わらないだろう。

——誰か味方は……

「クローディア殿下もリイン・シユバルツァーの《空の御子》を見てみたくはありませんか？」

「それは……」

レクターがクローディアに詰め寄り言質を取ろうとする。

クローディアは横目でリインに視線を送るが、レクターの言葉に一見躊躇っているがその目はどちらに天秤が傾いているのかはつきりと言っていた。

「モグモグモグ♪」

「流石クロスベルじやの、西と東の見たこともない料理がこんなにも……うむ、美味じゃ」

これまでの話題に全く我関せずと歓談の合間につまむ軽食を頬を膨らませる程に食べまくっている二人の少女——はらぺこ聖獣達は全く当てにならない。

「大丈夫、このリイン君はすっごくきれいだよ」

純粹な眼差しで褒めてくれるトワもリインの味方ではない。

——こんなことになるならルフィナさんを行かせるんじゃないか……

オリヴァルト皇子の捜索のため特務支援課に依頼を出すには顔が割れているミユラーではまずいということもあり、ルフィナにその代行を頼んだ。

空いた時間にクロスベルの教会に現在勤めている彼女の妹と食事でもして来たらと氣を利かせたのだが完全に裏目に出てしまった。「ですがそれは貴方達とクロスベルにとっての利点のほうです。俺にとっての利点は何ですか？」

「ほう……」

「以前舞台上上がったのは、遊撃士としてとある暗殺者に狙われていたイリアさんを守る意味もありました……」

今回のアルカンシエルにはそれだけの理由はないはず……

例え宰相閣下の御言葉だったとしても、護衛の任を疎かにするような我儘には従えません」

「いはやは、英雄殿はなかなか交渉上手ですなあ」

本来なら国家元首を始め、それなりの地位を持って随行団としてやってきた有力者達からの同調圧力に屈しかねない状況だというのに場の状況に流されずにはつきりと自分の意見を述べたリインにロックスマスは感心する。

「なるほど道理だな……」

リインの主張をギリアスは認める。

護衛官としてクロスベルに来たリインにアルカンシエルの舞台上がれというのはギリアス達の我儘でしかない。

クロスベル側にとってもリインに施しを受けて良い立場ではない。冷静な指摘にギリアスとロックスマスが扇動した流れに正氣が戻る。

「では、その時と同じように舞台上からの護衛を頼めるかね？」

「……………え？」

にも関わらず、抜け抜けとそう言ったギリアスにリインは間の抜けた返事をしていた。

「先月の帝都もそうだったが、私を狙ったテロリストが何処に潜んでいるかも分からない。ならば舞台の上の警備も必要だろう」

リインが漏らした舞台上上がった経緯を逆手に取ってギリアスは言い切る。

「おお、それは良い。大胆にも役者になりすまして暗殺するなどとい

う手口も聞いたことはあるが、舞台に英雄殿がいてくれるなら我々も存分に劇を楽しめるだろう」

「そんな恐ろしい事件があったんですか……」

「しかし、確かにそれなら……」

かつてあつた事件を槍玉にしてロックスミスは流れを引き戻す。

「くっ……でも……」

「リイン君」

何とか食い下がろうとするリインだがそこにイリアが笑みを浮かべて止めを刺す。

「この前の公開練習の『貸し』返して♪」

85話 ガレリア要塞Ⅰ

8月29日。トールズ士官学院Ⅶ組の教室。

「それじゃあホームルームを始めるわよ」

教壇に立ったサラがそう切り出す。

「知つての通り、明日から貴方達には今月二度目の『特別実習』に行ってもらうわ」

「聞いていたとはいえ、気が重いな」

サラの発表に前回の実習の疲れを感じてマキアスがため息を吐く。

「昨日がレポートの提出期限だったからね……正直だるい」

その呟きにフィーは同意する。

「残念だけど、どんなに愚痴つてもやることは変わらないわよ」

全体的な疲れ、そして『前の実習』から『次の実習』までうまく気を緩める事が出来ていなかった様子が容易に読み取れるがサラは特に指摘せず職務を全うする。

「じゃ改めて発表するけど、次の『特別実習』は全員でガレリア要塞に行ってもらうわ」

「《ガレリア要塞》……帝国正規軍の一大拠点にして東の脅威に備える巨大な防壁か」

「馬鹿馬鹿しいほどに巨大で大仰な要塞らしいな。かの《列車砲》が二門格納され、演習場も併設されているという」

「《列車砲》……グエン老が悔いていた兵器か」

ラウラとユーススの呟きにガイウスが反応する。

「ええ、東の共和国方面……」

正確には緩衝地帯である《クロスベル自治州》を射程に入れた化物じみた大きさの導力砲らしいよ」

「うーん、あれは凄いやねー。まさに鉄のカタマリって感じでボクも圧倒されちゃったもん」

「つてミリアム……？」

被せてきたミリアムの言葉にクリスは軽く驚く。

「《列車砲》をその目で見たことあるんですか？」

エマに聞き返され、ミリアムはうんと頷く。

「オジサンに案内されてクレアやレクターと一緒にね……」

『大崩壊以降、人が持つに至った最大級の破壊力を秘めた兵器だ。

それがこの場所に置かれたことの「意味」を考えてみるといい』

そんなことを言っていたかなー」

「この場所に置かれた「意味」か……」

彼女を通して尋ねられた言葉にラウラは真面目に考え込む。

「ふん！　「意味」なんてクロスベルへの恐喝行為以外あるわけない

じゃない」

不機嫌さを隠さずにアリサはその答えを出す。

「アリサ……」

「それは言い過ぎではないか？」

「言い過ぎなもんですか。兵器は所詮「人を殺す」道具よ……」

たった二時間で人口50万人のクロスベルを壊滅できる虐殺兵器

以外に何て言えばいいのかしら？」

「もちろんその側面を否定するつもりはない……」

《列車砲》に限らずガレリア要塞の戦力を高めることはクロイツエ

ン州へ睨みを利かせている意味合いもあるが、東の脅威を重く見てい

ることも事実だ」

荒ぶるアリサに対してユーシスは落ち着いた様子で自分の肯定的

な考えを口にする。

「それはどういう意味？」

気持ちはアリサと同じだったエリオットはユーシスの意見に思わ

ず聞き返す。

「《列車砲》がガレリア要塞に配備されたのは1199年の頃、おそら

くは開発はその数年前から始まっていたと考えるなら切っ掛けはや

はり《百日戦役》が切っ掛けなのだろう」

「《百日戦役》……リベールと帝国の戦争よね？　それがどうしてガレ

リア要塞の《列車砲》に繋がるのよ?」

アリサの質問にユーシスは肩を竦める。

「あの戦役においてリベールの智将、カシウス・ブライトによって飛行船を用いた戦略の有用性を証明してしまった。それが一番の理由だ」

「そうか。カルバード共和国の主力は『空挺機甲師団』……」

リベールの反攻作戦で痛手を負わされた帝国が、カルバードのその部隊を危険視するのは当然か」

「たったそれだけで結論に辿り着いたマキアスにユーシスは頷いて補足する。

「飛行船の発着場所はそのまま飛行距離、つまりは射程距離となる……」

クロスベルをカルバード側に抑えられでもしたら、クロイツェン州はもちろん帝都へイムダルにチエックを掛けられたことになる……」

「だからこそ、帝国はクロスベルを経済的な面以上にカルバードに取られるわけにはいかない。もしくは取られてもすぐに制圧できるような兵器が必要だった」

「しかし今はカルバードの首都と帝都を繋ぐ直通の飛行船があるではないか、その理屈はおかしいのではないか?」

ガイウスが疑問を挟む。

「今は飛行船の技術も向上し一度の飛行距離も格段に伸びているが、それでも《列車砲》の抑止力が大きな価値を持つのは変わらないだろう」

「で、でも……不戦条約が……」

「不戦条約がリベール女王の名の下に締結されたのは二年前、逆に言えばそれ以前は切っ掛けさえあればいつ戦争が起きてもおかしくはなかったということだ……」

現にクロイツェン州はその《列車砲》が配備されたおかげでカルバード共和国の侵略の可能性という目に見えない緊張から解放されている……」

「ルールに住んでいたお前には分からないかもしれないがな」

「なっ——何ですって!?!」

「はいはい、議論はその辺にしておいてもらおうかしら」

ユーシスの余計な一言で激昂したアリサをサラが手を叩き、機先を奪う。

「とにかく実習先はガレリア要塞……」

今話題になった《列車砲》の見学も予定しているから各自思うことはあるでしょうけど、実物を見て改めて考えてみると良いわ」

「むう……」

アリサは言葉を呑み込んで席に座り直す。

感情的にはサラもアリサ側だが、クロイツェン州出身のユーシスの意見も一理あると考えながらサラは続ける。

「今回の『特別実習』はこれまでと違ってⅦ組だけじゃなく、一学年全体が参加するわ……」

それについて貴方達Ⅶ組にはそれぞれ二人一組になってそれぞれのクラスのリーダーとして引率してもらうことになるわね」

「二人一組……今はリインさんがクロスベルに行つて、ミリアムが入ったから人数的には丁度良いかもしれないけど」

クリスの呟きに一同の視線はそのミリアムに集まる。

「うん？ どうしたの？」

無邪気に首を傾げるミリアムに一同は不安になる。

「サラ教官、大丈夫なんですか？」

ミリアムはまだⅦ組に編入してきてそれ程時間は経っていない。

学院にあつと言う間に馴染んでしまったが、それは小さな子供として扱われているからであり周りが大人な対応をしているから。

それに加えて性格的にもリーダー役が務まるとは思えない。

「そのところもちゃんと考えているわよ……」

とりあえず、組み分けを発表するわよ。まずはⅠ組、ユーシスとエマ」

「まっ順当だろうな」

「頑張らせていただきます」

貴族クラスでも地位の高い者が多いⅠ組にアルバレア公爵家のユーシスを宛がうのは当然として、エマは学院の首席という地位があ

るからこそその選定。

「Ⅱ組、ラウラとガイウス」

「うむ、承った」

「俺が貴族クラスを……果たして務まるだろうか？」

ユーシスと同じ理由で貴族クラスが納得できるラウラ。そして成績こそ平凡であるがⅦ組の中で一番とも言える懐の深さを持つガイウスならば貴族クラスでも対応できると期待しての選定。

「Ⅲ組、アリサとエリオット」

「はい、分かりました」

「精一杯頑張ります」

Ⅲ組以降は特に予想できる生徒の問題はなく、ここではむしろ積極性のあるアリサと消極的なエリオット。

「Ⅳ組、マキアスとファイ」

「よろしく頼む」

「ん……」

アリサとエリオットの組とは逆に、真面目なマキアスとサボリたがりのファイ。

「そうなると僕は……」

「ええ、Ⅴ組はクリスとミリアムに担当してもらおうわ」

サラの言葉にⅦ組の教室は静まり返る。

「正気か？ クリスにこれの世話を任せるなんて」

「考え直した方が良くないじゃないでしょうかサラ教官」

普段、ミリアムに散々振り回されているユーシスとマキアスはクリスの本当の身分のことも考えて再考を進言する。

「ブーブー、ボクだってそれくらいちゃんどできるよ」

唇を尖らせて抗議するミリアムだが、彼女が編入して来てから散々振り回された一同の評価は変わらない。

「だから考えてあるって言ってるでしょ。入ってきなさい」

「うーっす」

そんな気の抜けた返事が教室外から聞こえてくると緑の制服の上級生がⅦ組の教室に入ってきて来た。

「え……」

「あれっ……」

「2年のアームブラスト先輩……?」

一同の困惑を他所にクロウは悠々と教壇の前に立つ。

「——クロウ・アームブラストです。今日から《特別実習》のみ皆さんと同じ《Ⅶ組》に参加させてもらいます」

普段の彼を知る人から見れば信じられない程に丁寧な挨拶。

しかし、次の瞬間には素行を崩して笑みを浮かべる。

「てなワケで、よろしく頼むわ♪」

「ええっ!？」

「ど、どういう事ですか?」

突然のクロウの参加にアリサは驚きながら尋ねる。

「いや、これには非常に深刻かつ、デリケートな事情があつてだな」

「はあ、よく言うわよ」

勿体付けるクロウにサラはため息を吐く。

「ゴイツ、前期の期末テストでよりもよつてあたしのテストで赤点を取ってくれたのよ……」

しかも必修科目だからこのままじゃ卒業できないって慌てて泣きついてきたの……

まあ去年と帝都での《特別実習》に協力してもらつたわけだから、特例として今回以降の特別実習に参加することを補習扱いにすることにしたのよ」

「……なんだそれは……」

「思いつきりどうしようもない理由じゃないですか……」

「おいおい馬鹿にすんなよ。赤点を取っちゃまったのは解答欄が一つずつズレちまっていたせいで、俺が馬鹿なわけじゃないぞ」

蔑む目を向けられたクロウは慌てて弁解する。

「そういうことだからクロウにはクリスとミリアムと一緒にⅤ組の引率を担当してもらうわ……」

ああ、別に敬語とか使う必要ないわよ。もしかしたら来年はあんた達と同級生になるかもしれないし」

「怖いこと言わないでくれ」

サラの言葉を想像してクロウは蒼い顔をして肩を竦ませる。

「ま、そういうわけだからよろしく頼むぜ。坊ちゃんよ」

「え、ええ……よろしくお願いしますクロウ先輩。だけど坊ちゃんはやめてください」

突然のクロウの参加にクリスは驚きながら、差し出された手を取り握手を交わすのだった。

・*

8月30日。

鋼鉄の巨壁とも言えるエレボニア帝国最大の軍事基地、ガレリア要塞。

その巨大な建築物にツールズ士官学院の一年生たちは列車から降りて、外に出て整列し改めてその見上げる巨壁に圧倒される。

そんな生徒達の前にナイトハルトが立つ。

「ようこそ《ガレリア要塞》へ、士官学院の諸君」

一度言葉を切り、生徒達を見回したナイトハルトは学院にいる時とは異なる雰囲気纏って名乗る。

「改めて——帝国軍・第四機甲師団に所属するナイトハルト少佐だ……」

今回はⅦ組だけではなく、君達士官学院生には「軍隊」というものの本質、その「チカラ」がどういったものであるか見てもらおう」

その言葉に生徒達の空気に改めて緊張が走る。

「本日、14:00. 本要塞に付属する演習場で第四機甲師団、第五機甲師団による合同軍事演習が行われる。お前達にはそれを見学してもらおう」

第四機甲師団。

その名前が出て来たことにエリオットは驚く。

「それまでは各クラスに分かれて今回の演習で使われる兵器についての「特別講義」を行う。私の方からは以上だ」

そう締めくくり、学生たちはそれぞれの担当教官に先導される形でガレリア要塞へと入って行った。

・*

演習で使われる主力戦車《アハツエン》を始め、旧型の戦車に軍用飛行艇を始めとする講義を受ける。

昼には質素な食事に貴族クラスが騒ぐというアクシデントがあったものの、概ね大きな問題は起こらずカリキュラムは消化されていく。

そして今、クリス達は演習場にて“軍事演習”を目の当たりにしていた。

「うーん……すごいな。写真を撮るのはダメだって言われたけど、ラジオのネタにしても良いのかな？」

「写真……写真か……実際のとは違うけどこれが戦場の光景みたいなもんなんだよなあ」

「これが砲撃……」

「うーん……あの粗食、この基地の食事はあえてそういう風になっているみたいやけど、なら売り込める物は……ぶつぶつ……」

「これが帝国正規軍の軍事力ですか」

クリスが担当するV組の面々は体の芯に響く轟音と振動に戦々恐々と言った様子で圧倒される。

若干、一名は商魂たくましい方向に思考をやっているが、概ねそれがV組に限らず、他のクラスも同じようなものだった。

「すごいねー」

「あんなんが、正規軍には数百台も配備されてんだろ？ 正直やってらんねーよな」

そしてミリアムが歓声を上げ、クロウは愚痴を吐く。

「……………うん、そうだね」

「どうした坊ちゃん？ まさか漏らしたのか？」

「そんなわけないだろ！」

呆然としていたところからかかってきたクロウの言葉にクリスは猛然と抗議して睨む。

「ただ、あの新型戦車《アハツエン》も先月のテスト——『暗黒竜』に太刀打ちできなかったんだなって思い出しただけです」

「……………ああ、あれか」

「そしてそれに勝ったリインさんの《灰の騎神》……………」

僕達はこうして戦車の破壊力に驚いているけど、リインさんにはもしかしたら脅威でも何でもないのかもしれないと思ったんです」

「確かに……………《騎神》を使えば戦車がいくらあろうが簡単に蹴散らせるだろうよ」

「クロウ先輩？」

クリスの呟きに応えるクロウの言葉に違和感を覚えて振り返る。

「ん……………？ どうした？」

「……………いえ、何でもありません」

違和感の正体に気付かずクリスはその疑問をスルーする。

「リインって言えば、今頃クロスベルにいるんだよね？」

んー、やっぱりこつちからじゃ要塞の影になっちゃって見えないね」

「見えない？ ミリアム、何を見ようとしているんだ？」

「ほらほら、例の《オルキスタワー》って建物！ 通商会議が開かれる超高層ビルなんだけど」

「ああ……………帝国時報やラジオでも話題になっていた……………」

今日が除幕式だって聞いているけど、ここからでも見えるのかな？」

「《列車砲》の辺りならよく見えると思うよ。ねえねえ後で見に行かない？」

「馬鹿なことを言っていないで、今は軍事演習をちゃんと見なさい」

「えー少しくらい探検してもいいじゃん」

「おっ、面白そうじゃねえか。見学が終わったら自由時間らしいし、俺もオルキスタワーってのに興味があるから行くか？」

「二人とも」

自分達の立場を忘れて楽しもうとしているミリアムとクロウを諷めてクリスはため息を吐く。

「リインさんか……」

ガレリア要塞の鉄の壁を振り返ってクリスは考える。

明日が通商会議の本会議なのだが、今日はノーザンブリアの異変についてリインが各国への説明を行っているはず。

自分も関わっていただけに各国がノーザンブリアの併合に納得してくれたのか、気にならないわけではない。

「今頃何をしているんだろう……」

呟いてクリスは首を振って雑念を払い、まだ続いている軍事演習に集中するのだった。

・*
・*

特別実習一日目の終了が宣言され、就寝時間までの自由時間が許された中でエリオットは一人、オーラフ・クレイグに呼び出されて応接室にいた。

そして父の口から聞かされることになった言葉にエリオットは声を上げて聞き返した。

「どういうこと父さん?!? 何で急に……」

「言葉通りの意味だ。お前が望むなら今からでも音楽院への転入を認めよう」

戸惑うエリオットにオーラフは用意しておいた書類をテーブルに置いて繰り返した。

86話 西ゼムリア通商会議Ⅱ

「……………あ……………」

それを前にトワは言葉を失って見入ってしまった。

白いローブを纏った何者かの口上で始まった演目。

男なのか、女なのか、あえて分からないようにした衣装。フードと真つ黒の仮面で顔を隠したその存在は華やかな舞台に無理矢理空白を作り出す。

そこにいるのはトワが知っている後輩ではない。

そう感じさせる程に気配は曖昧でまるで「雲」のように不確かな存在としてそこにいた。

「す………」

彼の存在に目が惹きつけられ語る言葉はまるですぐ目の前から話しかけているようにも感じる。

それどころか舞台上で動く彼の動きに合わせて横から、背後から聞こえてきて否が応でも物語を聞き入ってしまう。

認識が狂う。

しかし、そのおかしくなつた感覚は彼女が舞台上に現れた瞬間に靄が晴れたように払拭される。

「………」

身体に溢れ出る生命力の躍動を漲らせた「太陽の姫」。

彼女が動く度に紅蓮の炎が帯のように揺らめき舞を華麗に彩る。

その彼女の背後に「太陽」を幻視してしまったのはおそらくトワだけではないだろう。

「……………」

次いで現れる「月の姫」。

静かに清らかに、彼女が動く度に銀の粒子が散り舞を清廉に彩る。

「太陽の姫」では分かりやすかつた生の気配はない。むしろ冷たく危うさを感じさせる。

語られる言葉の圧力が増して、舞よりも語り部の方に意識が向いて

しまう。

しかし、最後の一线で意識は舞に注目させられる。

危うい均衡。

さながら雲に覆われた「月」を探してしまうように惹きつけられているのはトワだけではないだろう。

「……………」

もはや言葉を忘れて、彼女たちは夢幻の一時を味わうこととなった。

・*

『そうか……今日はこちらには戻ってこないのか』

「ええ、今夜はアイゼングラーフ号の方に泊めさせてもらいます。ヴァリマールの最終調整もしておきたいですから」

西ゼムリア通商会議の二日目、全ての予定が終わったリインはミシユラムの迎賓館ではなく人気のない駅舎のホームで《ARCUS》を通じてミュラーと話していた。

『それは残念だな……殿下もアルカンシエルのことについて随分興奮していた……他の首脳陣も今は君の話題で持ちきりだ』

「でしようね……」

だからこそリインはミシユラムに戻らないことを決めた。

《空の御子》に関してはできるだけ吹聴しないで欲しいと、各首脳陣は納得してくれたし随行団の方達も呑み込んでくれた。

どこからか噂を聞きつけて来て忍び込もうとしていたクロスベルタイムズの記者も予め警察に突き出したのでおそらく大丈夫だろう。

「明日は先に現地入りして見回りをおきますので、そうオズボーン宰相には言っておいてください」

『ああ、了解した。今日は——いや昨日から世話になった……』

おかげで殿下とクロウディア王太女を秘密裏に特務支援課と話をさせることができた。礼を言わせてくれ』

「いえ、大丈夫です」

オリヴァルト皇子の初日の放蕩が、生の目でクロスベルの営みを見てみたかったと言われてしまえば咎めることはできない。

いや、こつそり一人で動いたことは十分に咎める事なのだが、過剰に怒ることは憚られてしまう。

『とにかく今日はゆつくりと休むと良い、明日が通商会議の本番だからな』

「はい、そうさせてもらいます」

最後の挨拶を交わしてリインは通信を切って息を吐く。

8月30日。西ゼムリア通商会議の二日目は無事に終わったことにリインは安堵の息を改めて吐く。

ノーザンブリアの「異変」の報告。

二日目の会議の議題でもあるそれについてはある意味リインが主導になって会議を進行することとなった。

対外的に決めた「異変」の内容を各国首脳に説明することには神経をすり減らし、帝国時報社から提出された当時の虚神との戦いや帝都での《緋》との戦いが上映された時のクロードディアの目を思い出して体を震わせる。

「……………さてと……………」

《ARCU》を閉じてリインは踵を返す。

しかし、その向く先は傍らに停車している《アイゼングラーフ号》の出入り口ではない。

ヴァリマールが格納されている最後尾の貨物車両も素通りしてリインは顔パスで通れる警備隊の目を盗んでクロスベル駅から抜け出した。

中央広場を通り、そのままリインは歓楽街へと抜ける。

「……………よし……………行くか」

裏通りの一等地に構える店を確認してリインは自分に言い聞かせるように呟き――

「どこに行くつもりですかリイン君？」

それに応える者がいた。

「っ!? クレアさん? どうしてここに?」

振り返ったそこには私服姿のクレアがいた。

「それはこちらの台詞です」

振り返ったリインの向こう側に見える店を一瞥してクレアはその眼差しを氷にする。

「貴方は閣下の護衛としてクロスベルに来てはいるはずですが。ミシユラムにいるはずの貴方がどうしてここに？」

「夜の警備は元々自分の管轄外ですから」

「確かにそうですね。ですがそれでも護衛官として閣下の傍を離れるのは自覚が足りていないのではないですか？」

ましてやあんないかがわしい店に……レクターさんですね？　レ

クターさんなんですかね？」

「えつと……」

思わず“うん”と頷きたくなったがリインはそれを我慢する。

「落ち着いて下さいクレアさん……これは……そう護衛の仕事の一環なんです」

「レクターさんみたいな言い訳をしないで下さい」

「ほ、本当です。あの店は“赤い星座”が経営しているお店なんです」

「そんな言い訳——」

クレアの言葉の途中でリインは唐突に身を翻す。

音もなく忍び寄り、屋根から両手を大型のナイフで武装した紅い《人喰い虎》の一撃を躲したリインは振り抜かれた腕を取り、頭を掴んで受け身を取らせないように落下の勢いを殺さず、地面へと叩きつけた。

「きゆう……」

「ね、本当でしょう？」

目を回して気絶した《人喰い虎》の首根っこを掴んでリインはクレアの前に差し出して、先程の言葉の証明をする。

「……………シャーリィ・オルランド……」

いつか見たような光景にクレアは何とも言えない顔をするのだった。

・*

「ほう、まさかお前がここに来るとは思ってたぞ」

《ノイエ・ブラン》。

かつてルヴァーチエ商会の事務所があった跡地を《クリームゾン商会》が買い上げて経営している高級クラブ。

店には滅多に顔を出さないシグムントは娘を引き摺って現れた珍客に独眼を細めた。

その気配だけで、店の従業員たちの気配があからさまに変化してリインに追従して店に入ったクレアは思わず腰の導力銃に手を伸ばす。

「その通りを歩いていたら、お宅の猫が襲い掛かってきました」

首根つこを掴んでシグムントの前に、それこそ猫のように差し出したリインに店内の殺気はさらに高まる。

「ふ……相変わらずのようだな」

周りが殺気立つ中でシグムントは特に気を悪くした素振りも見せずに笑う。

「だが用件はそれじゃないだろ？ 何が目的だ？」

とある依頼を受けてシグムント——《赤い星座》はクロスベルに来ているが、おそらくリインはその背景を知らないだろう。

通商会議の本会議を前に後顧の憂いを断ちに来たのかと、一番あり得そうな可能性を考え、一人で、しかも丸腰でやってきたリインに随分と増長していると顔に出さずに不満を感じる。

返事次第ではこの場で痛い目に合わせると言わんばかりに、シグムントはリインを睨み、その眼差しにクレアは息を呑む。

「情報を買いに来ました」

しかし、殺気交じりの視線を無視してリインは用件を切り出した。「情報……だと……？」

「はい」

リインは頷いて、懐から厚めの封筒をシグムントの前のテーブルに置く。

「情報に値段が付く。別に不思議なことではないはずですよね？ あとできれば朝までこちらにあるだろう導力端末を貸してもらえますか？」

「っ……」

ある意味、カチコミ以上の要求をしてきたリインにシグムントは意図が図り切れず、思考の時間を稼ぐためにはぐらかす。

「女を侍らせて酒場で酒も注文せずに情報が欲しいとは……随分と俺好みに育っているようだな」

「クレアさんが同行しているのはたまたまです。それに俺は未成年なのでお酒は飲めません」

「ふ……だがいくら積まれたとしても依頼人の情報売るつもりはないぞ」

「そんなものに興味はありません」

「なら何が知りたい？」

「知りたいのは兵器の情報です。それもできるだけ広範囲の、それこそカルバード共和国も含むものを」

返ってきた答えにシグムントは納得する。

「それなら《黒月》に行くことを勧めるが？」

「生憎ですが《黒月》とは特にコネもありません。それとも最大の猟兵团である《赤い星座》に兵器の質問をして答えられないんですか？」

「ふ……良いだろう。何が知りたい？」

「クロスベルを一発で消滅させることができる兵器について」

「なっ——」

「リ、リイン君っ!?!」

流石のシグムントもリインの口から出て来た言葉に驚愕し、クレアも同様に声を上げていた。

「貴様……自分が何を言っているのか分かっていいのか？」

「おかしなことを言っていますか？」

《列車砲》を用いてクロスベルを占領することを威嚇されている共和国がそれに対抗する兵器を開発しないと誰が言い切れるんですか？

帝国だって《列車砲》で現状の維持に満足しているとは思えません」
技術は常に進歩している。

《列車砲》は大雑把に言えば十年前に建造された旧式の大砲を拡大しただけの兵器に過ぎない。

今の導力技術を用いれば、それこそもつと効果的な戦略兵器が造り出されていてもおかしくはないだろう。

「ああ、その通りだ……だが、それを今このタイミングで切り出すことの意味を分かっているのか？」

《赤い星座》は通商会議中の《帝国解放戦線》の排除のために雇われている。

猟兵の情報網では既に彼らの兆候は確認が済んでおり、またカルバード側でも《黒月》を通して似たような動きを確認している。

たかが場末のテロリストと侮っていたが、先の帝都での『暗黒竜』の一件を考えると万が一にもあり得ると考えてしまう。

「分かっているつもりです……」

情報源は明かせませんが、それでそんな兵器はゼムリア大陸に本当に存在しているんですか？」

「………ある。具体的にどれ程のものかまでは知らないがカルバード共和国で秘密裏に開発しているという噂は聞いたことがある」

「カルバード……分かりました。それで導力端末の方は引き受けてもられますか？」

ここに至ってシグムントはリインの思惑に気付いた。

兵器の情報など二の次。

本命は足がついても構わない導力端末による情報収集。

この情報の真偽については《赤い星座》にとっても重要な価値がある以上、協力を拒めない。

「その前に一つ聞かせろ。本当にその兵器がこのクロスベルに持ち込まれているのか？」

「その情報に《赤い星座》はどれだけの値段を付けてくれますか？」
「っ……」

情報を買いに来たくせに、情報売りつける強かさにシグムントは

唸り、リインが差し出した封筒をそのまま投げ返す。

「情報の出所は曖昧過ぎて明かせません、強いて言うならそれを今から確かめるつもりです」

「そうか……」

シグムントは考える。

別に命の危険が増したから仕事を降りようなど弱気になったわけではない。

ただ相手が自爆覚悟の玉砕ができるのか、それともただのテロリストごっこなのかで《赤い星座》の対応も変わる。

ここでリインに自分達が《鉄血宰相》に雇われていると明かすかどうかさえシグムントは考慮する。

「ガレス。案内してやれ」

「はっ……」

シグムントの答えにガレスはカウンターの影に隠してあった導力ライフルから手を放す。

「こちらです」

丁寧な対応でガレスはリインを店の奥へと招く。

「そういうことですのでクレアさん、俺はここで情報収集をします……」

今の話は確定情報ではないのであまり吹聴しないで下さい。今の段階だといたずらに混乱させるだけでしようから」

「リイン君……」

ここで別れて、クレアはアイゼングラーフ号に戻れと言い出したリインにクレアはため息を吐いた。

「シグムントさん、使える端末はまだありますか？」

「ああ、好きに使い。ただし得た情報はこちらにも共有してもらうぞ」「分かりました」

「クレアさん？」

「そんな話を聞いてこのまま黙って戻れるわけじゃないですか」

「ここぞという所で変に遠慮するリインをクレアは睨み、彼を追い越すようにガレスに案内を促す。」

「くくくっ……女の扱いに関してはまだランドルフの方が上のようだな」

「そんなつもりはないんですけどね……」

怒るクレアの背中にリインはバツが悪そうに頭を搔いた。

「それで？　いったいどこからの情報でそんな大量殺戮兵器をテロリスト達が持つてくると知った？」

ため息を吐きながらガレスとクレアの後を追おうとしたリインの背にシグムントは興味本位から質問を投げかける。

「……………蛇が教えてきたんです」

アルカンシエルの舞台が終わった直後に見せられた生々しい白昼夢を思い出してリインは忌々しいと言わんばかりに顔をしかめる。

もつと早く、せめて今朝の時点で教えてくれれば明日の本会議を中止にさせるように動くこともできただろう。

が、ここに至ってしまったては何の証拠も提示せずに中止させることなどできない。むしろ半端な情報開示はクレアに言った通り混乱を招くだけだろう。

「そちらが誰に雇われているか知りませんが、場合によっては覚悟しておいた方が良いでしょう」

「ふん。俺達の心配など十年早い」

気遣ってくるリインにシグムントは余計なお世話だと答える。

そんな猟兵らしい対応にリインは苦笑して、店の奥へと消える。それを見届けたシグムントはおもむろに部下を呼び付ける。

「ザックス、”かかし男”と連絡を取れ。状況が変わったと教えてやれ」

87話 ガレリア要塞Ⅱ

8月31日、火曜日。

この日は丁度、向こう側の《クロスベル自治州》において通商会議の本会議がある日だった。

そんな中、トールズ士官学院生たちはまだ日が昇らない早朝から放送で叩き起こされ広大な演習場をパンパンに膨らんだ背嚢を背負い、導力ライフルを肩に下げ、ヘルメットを被って走らされていた。

「ゼー……ゼー」

「な……Ⅶ組は……いつも……こんな……ことをして……やがるのか……」

「いろんな所に行つて羨ましいと思つておつたけど……学院の軍事教練より……きついやろ」

「ふふ……いつも学院で偉そうにしている貴族生徒達のあの顔……うぷ……」

「えっと……みんな大丈夫？」

息も絶え絶えに、中には現実逃避をしているⅤ組の面々に同じ装備で身を包み、さらに腰に剣と導力銃を下げたクリスが声を掛ける。

「な……なんでクリスは平気な顔してるのよ？」

「く……Ⅶ組の体力は化物なのか？」

「いや、そんなことないと思うけど」

演習場を見回し、自分達の一団から離れて四つの集団が同じように走っている中のクラスメイト達の顔を遠目に観察してみるがみんな辛そうな顔をしている。

そしてⅦ組どころか学年全体で最も死にそうな顔をしているのは

「あーうー……ねえガーちゃんに——」

「ダメだつて言つてるでしょ」

自分達の集団の最後尾をフラフラした足取りで必死について来ているミリウムが何度目か分からない戦術殻の使用を求め、クリスは却

下した。

その答えにミリアムはがつくりと肩を落とす。

体力がないわけではないのだが、《アガートラム》で移動することに慣れ過ぎている彼女にとって限界まで体力を絞り出される持久走はまさに苦行でしかなかった。

「ミリアムちゃん、お水をどうぞ」

「わーい……ありがとうロジーヌ」

直前までの瀕死振りを忘れたかのようにミリアムはロジーヌが差し出した水筒を一気に呷る。

「くくく、だらしねえな後輩共」

「そういうクロウ先輩も遅れていますよ」

「うるせいぞ後輩。俺はお前達の倍の荷物を背負わされているんだぞ！」

「自業自得でしょ」

一人だけ先輩ということもあり、クロウは一年生たちの倍の重さの背囊を担がされている。

「でもクリスさんは……他の皆さんに比べて余裕そうですね」

「うん、いろんな人から体力だけは付けておけて言われたから……」

それに荷物は確かに重いけど、雪山の行軍訓練に比べたら……後ろから追い駆けて来る《人喰い虎》も《羅刹》もない持久走なんて天国だよ……うん」

他のみんなよりもやれていることに感激するよりも、銃弾も斬撃も背後から飛んでこない行軍訓練の温さにクリスは思わず涙をこぼす。

「——よしっ！ 走り込みはこれより最後の一周で終わりとするっ！ 各自身支度を整え朝食を摂れ！ その後は予定通りのローテーションで動くように！」

ナイトハルトの号令が広大な演習場に響き渡る。

歓声は上がらないものの、終わりの見えなかった持久走の終了に安堵の空気が広がる。

「やっと終わった……」

「今ならあのクソまずい食事も余裕で食えるぜ」

その場にへたり込みそうになるミリアムとクロウにクリスは苦笑し――

「生憎だけどV組は朝食の後は第四機甲師団との戦術訓練だから休んでいる暇はないよ」

「……………マジかよ？ 列車砲の見学は？ 導力戦車の運転とかもあつただろ!？」

「それは他のクラスが先だね。というかクロウ先輩は僕達の補佐なんですから、カリキュラムの予定はちゃんと把握しておいてください」

「あの……………クリスさん」

「ん？ どうしたのロージーヌ?」

「ガーちゃんさん……………」

振り返ったそこにはぴくりとも動かないミリアムを抱える《アガートラム》がクリスの意見を窺うように待っていた。

・*

クリスが率いるV組はその後、第四機甲師団に混ざつての体力トレーニングを始め、陣地を使ったフラッグ争奪戦などの実践さながらの模擬戦闘。

軍人が運転する導力戦車に乗せてもらうなど要塞ならではの様々なことを体験することになった。

それらを何とかこなして昨日と同じ内容のランチを無心の境地で平らげて、V組はようやく要塞内での座学を受けることになった。

その最中でそれは起きた。

要塞そのものを激しく揺らした轟音と地響き。

直後、教壇に立っていたナイトハルトの軍用ARCSに通信が入る。

「こちらナイトハルト。ワルター司令でしたか……………今の震動はいつた……………クロスベル方面の空を見る?」

突然の指示にナイトハルトは不信に思いながら、座学を中断する。「お前達はこの場で待機している」

「待つてください。ナイトハルト教官！ 僕も行きます」

「ボクもボクも」

「生徒代表として今のが何だったのか確認させてくれても良いんじゃないか？」

すぐに同行を名乗り出たクリスとミリアム、そしてクロウ。

「……時間が惜しい。ロジャーが中心としてV組はこの場に待機」

そう指示を出してナイトハルトは足早にブリーフィングルームから出て行き、クリス達はそれを駆け足で追い駆けた。

「な……何だこれは……？」

クロスベル方面を望む深い峡谷に面した左翼のテラスにてそれを目撃することになったナイトハルトは言葉を失う。

「空が燃えている……？」

同じく右翼のテラスで、ユーシスとエマを伴ってそれを目撃したサラも同じように絶句した。

「何だあれは……まるで太陽が増えたような」

「人が造り出した業火……お婆ちゃん……？」

蒼い空を真っ赤に染め上げる紅蓮の光。

クロスベルはもちろん、遠く離れた地表にまで届く熱波にエマは言いようのない胸騒ぎを感じる。

思わず見入ってしまった二つ目の太陽はそのまま収束して消え、残ったのは雲一つない蒼穹の空だけが残った。

「……………ナイトハルト教官！ 兄上と連絡は!？」

あまりの光景に取り繕うのを忘れてクリスはナイトハルトに詰め寄った。

「あ……ああ、待て……」

クリスの声で我に返ったナイトハルトはワルター司令に連絡を取ろうと軍用ARCUUSを取り出した。

「はい、こちらでも確認しました。しかし——ミユラーから通信ですか？ ええ、そのまま繋いでください」

司令と話している途中で割り込んで来たクロスベルにいるはずのミユラーからの通信。

ナイトハルトは司令部にも聞かせることを許可してそれを受ける。
「どうしたミュラー！　今の上空での爆発はいったい何だ？　クロスベルで何が起きている？」

生徒達の前だということを忘れてナイトハルトは通信機に向かって捲し立てる。

帝都での「暗黒竜」、ノーザンブリアでの「塩の杭」に匹敵する尋常ではない事態の予感を感じながらクリスはミュラーからの言葉を待つ。

「……………なんだと……………シユバルツァーが……………」

ミュラーからの報告にナイトハルトは絶句しながらも、続く報告に何とか言葉を返す。

「——分かった。こちらでも備えておこう。ああ……………ああ。くれぐれも気を付けるがいい」

険しい顔のままナイトハルトは通信を切って、クリス達に向き直る。

「クロスベルで異変が？」

「ああ、その通りだ……………」

つい先程、会議が開かれていた超高層ビルを《帝国解放戦線》とカルバード側のテロリストが襲撃をしたらしい」

「ふーん……………でもただの襲撃じゃあの爆発は説明付かないよね？」

ミアムの指摘にナイトハルトはいっそう表情を険しくしながら答える。

「カルバードで秘密裏に開発されていた戦略級の導力爆弾が飛空艇で持ち込まれたらしい……………」

その威力はクロスベルの街を呑み込む程の規模のもの。襲撃者達を制圧できたが時限式のそれを解除する暇はなくシユバルツァーがヴァリマールを使い、空へ……………」

「まさか……………」

ナイトハルトの口から出て来た言葉にクリスはもう一度空を見上げるが、そこにはやはり雲一つない空が広がっているだけだった。

「やったか《G》……………なら俺達も始めるとするか……………」

呆然とする一同を他所に昏い笑みを浮かべた「彼」はARCUSS
でどこかに通信をして、すぐに切った。

それを合図にガレリア要塞は再び揺れた。

・
*

ガレリア要塞の格納庫から最新の導力戦車が自動操縦で暴走を始める。

演習場で暴れ回り、外側からガレリア要塞へ向けて砲撃を始める戦車の群れの鎮圧に第四機甲師団が駆り出されたタイミングを狙い澄ましたように上空に帝国解放戦線の飛行艇が対空砲火がされないガレリア要塞に乗り込んだ。

「くっ……やはりこちらは陽動だったか」

その光景を下から見ることでしかできなかったオーラフは思わず歯噛みする。

とはいえ、隙あらば要塞に向けて砲撃をしようとする戦車たちを放っておくことはできない。

「頼んだぞナイトハルト……無事でいてくれエリオット」

陽動を警戒して残してきた部下と要塞内部で避難しているはずの息子のことを思い、オーラフは一刻も早く暴走する戦車を鎮圧するために声を張り上げる。

「中将っー！」

「どうした!?!」

戦車の上で仁王立ちして戦場を見回していたオーラフは中からの声に応える。

「街道から不審な男たちが三人、こちらに歩いて来ます」

「何だど?」

このタイミングで来るのならば帝国解放戦線の増援を疑うが、そうだとしたら最低限導力車で乗り込んで来るだろうと予想していただけにオーラフは虚を突かれる。

「ふう……随分と派手にやってるみたいだな」

黒いお揃いのジャケットを纏った三人の男たちの中で中央の男は煙草を吹かしながら騒然としているガレリア要塞を楽しそうに睥睨する。

「はは、帝国最大の要塞も意外と脆かったようやなあ」

「この程度の襲撃でここまで取り乱すとは情けない」

独特な口調の痩身の男とドレッドヘアの大男は辛口の評価をする。

「最新の導力機器が仇になった典型だな……」

しかし因果なものだな……フィーの奴がいるとなると……ま、運が悪かったと割り切ってもらうか」

中央の男は肩を竦ませ、久々の煙草を投げ捨てる。

「あれが《紅毛の猛将》オーラフ・クレイグか……なるほど噂通りの実力らしいな……で、嬢ちゃん。準備は良いか？」

男は自分の背後に付き従う小さな女の子に声を掛ける。

オーラフ達からは丁度男の影にいて見えなかった少女は無感情に男に応える。

「つたく……拾って来たばかりのフィーみたいな受け答えしやがって……まあいい」

徐に男は手を宙に翳す。

「来なっ！ ゼクトールッ!!」

その声に応えるように男の背後で光が溢れ、《紫の騎神》が現れる。「デュランダル——セットアップ」

そして少女もまた男と同じように手を空に翳す。

するとその背後に紫紺の戦術殻が現れると、それは少女を後ろから包み込むように抱き締め光を溢れさせる。

次の瞬間、紫紺の戦術殻は少女と共に巨大なバスターソードと化する。

「なっ!? ヴァリマール……いや 《紫の騎神》だど!？」
突然現れた《騎神》にオーラフは目を剥く。

「これも仕事でな……悪いがお前さんにはここで死んでもらうぜ」

《紫》は戦術殻が変化したバスターソードを構え、混迷極まる戦場に乗り込んだ。

・*

外で激しい戦闘が繰り広げられている中で、ガレリア要塞内部もまた激しい戦闘が行われていた。

「酷い……」

血と硝煙の匂いが立ち込める通路。

無造作に血だまりの中に倒れる兵士たちにクリスは思わず息を呑んだ。

「んー……ちよつとマズイかもねー」

「マズイつつーか、わりとピンチじゃねえか？」

ぼやいたミリアムにクロウも軽口を返すが緊張は隠しきれない。

「どうやら完全に隙を突かれたようだな。戦車の暴走も含めて全て囲か……」

「ええ、おそらく狙いは二門の《列車砲》——

まさかとは思うけどここからクロスベルの通商会議を狙うつもりかもしれないわね」

ナイトハルトの呟きに外で合流したサラが頷き、テロリスト達の目的を推測する。

「会議場はあの高層ビルですよ？ 万が一直撃したら……いいえ、当たらなかったとしてもあんなものをクロスベルの街に撃ち込んだら」

「被害はどれだけ出るか分からん……」

それどころか各国の首脳陣を巻き込めばどうなるかも分からないとは……なんて愚かな」

サラの推測に最悪の可能性を考えたエマとユースは解放戦線の正気を疑う。

「……なあ教官、他のⅦ組の奴もそうだけど後輩共は大丈夫なのか？」

「っ——Ⅰ組は外の兵舎に待機するように指示を出してあるけど」

「Ⅱ組からⅣ組まではそれぞれ演習場や襲撃されたのとは別の格納庫にいたはず」

「まずいわね。Ⅶ組の子達だけなら何とかするでしょうけど、流石にあの子たちには大勢を守りながら戦う術は教えてないわよ」

「くっ……御丁寧に通信妨害を敷いているか」

《列車砲》の下に急がなければならぬところに別の問題が上がってナイトハルトは歯噛みする。

軍人の卵である士官学院生とはいえ軍人が護るべき一般人。

軍人を優先するか、それとも教官としての矜持を優先するか、迷う。

「なら俺がひとつ走りして他の連中を外の兵舎に集めさせるぜ」

「クロウ？」

「俺一人なら機械の魔獣も簡単にやり過ごせるって、そんなわけで特別労働手当として単位の方に色を付けてくれると嬉しいんだけどなあ」

「こんなタイミングにも関わらず単位を無心するクロウにサラとナイトハルトは呆れる。

「それにあまり迷っている時間はないだろ？」

廊下の奥から聞こえてくる銃声と悲鳴を窺うようにしてクロウは選択を迫る。

「クロウ先輩の言う通り、時間がありません……」

敵は訓練された軍人たちを鎧袖一触に突破するほどの猛者です。

《列車砲》が起動する前に追い付かないと」

「クリスさん……」

「当然だな。このような暴挙見過ごすわけにはいかない」

「……………もちろんボクも手伝うよ」

クリスの発言にエマとユーススは真っ先に頷き、意味深な沈黙を挟んでミリアムも同じ意見を主張する。

「やれやれ、止めても無駄みたいね」

サラは肩を竦めナイトハルトに視線を送り、彼が頷くのを確認してから指示を出す。

「ユースとエマはあたしについて来なさい！ クリスとミリアムは少佐の指揮に従うこと！」

「それぞれ二手に分かれて右翼と左翼の《列車砲》を押さえる。途中の

敵はできるだけ無視して構わん……

これは訓練ではない——実戦だ！　くれぐれも気を引き締めるが
良い！」

「つて少佐は言っているけど、いざという時はラインが向こうで列車
砲の砲弾くらい斬ってくれるでしょうから自分達の安全を最優先に
考えなさい」

「——っ」

「サラ教官、それはいくらなんでも……」

「だがあいつならやりかねないか……」

サラのわざとおどけた言葉にエマとユーシスは強張っていた顔で
苦笑する。

「んーラインは——」

「ミリアム黙って」

先程の通信の事を言おうとしたミリアムの口をクリスは塞ぐ。

「ともかく一秒も惜しい。急ぐぞっ！」

そしてナイトハルトもそのことに触れずに号令を出した。

・*
・*

「エリクシルッ！」

電撃を纏った突進で通路を塞ぐように横隊を組んでいた人形兵器
の陣形にクリスが穴を開ける。

「今です二人ともっ！」

横隊を貫通したクリスを脅威とみなして振り返る人形兵器。

その背後からナイトハルトとミリアムとアガートラムが一斉に戦
技を使って一気に薙ぎ払う。

「足を止めるな！　進めっ！」

「そのまま先行してくださいっ！」

《エリクシル》から手を放したクリスは背中に背負った紅耀石の大
剣に持ち替える。

「ブリランテ——イクスプロージョンッ！」

振り下ろした炎剣から一直線に炎が地面を伝って走り、炎の刃は体勢を立て直した人形兵器を次々に呑み込み爆散させた。

「っ——それがシュバルツァーが造った魔剣の本領か……」

学院の教練では見ることのなかった魔剣の本領にナイトハルトは目を見張る。

「いえ……これは先日イオさんに精錬してもらったおかげです」

自分でも思った以上の威力が出たことにクリスは戸惑いながら答える。

本来ならそこで終わりだったはずの魔剣だが、セピスを用意することで剣の位階を上げられるとイオが教えてくれたことでまずクリスはブリランテを強化してもらった。

ブリランテでこれなら他の魔剣を強化したらどうなるのか、場違いながらもクリスはワクワクしてしまう。

「それより先を急ぎましょう。今のと同じ技は後一回使えますから、大物が出て来たらそれで潰します」

「——っ……頼もしいものだな」

槍を拾って駆け出したクリスにナイトハルトは苦笑する。

今回クリスが持ってきた三種の魔剣。

それらを駆使して自分の前を走るクリスの勢いは一向に衰えない。

魔剣の力もあるだろうが、人形兵器の種類に応じて素早く的確な攻撃手段を選択しているのは紛れもなくクリス自身の実力に他ならない。

剣と剣でならまだクリスに負けなれないと言い切れるが、何でもありの戦いとなればもしかしたら危ういかもしれないと場違いながら生徒の成長をナイトハルトは喜ぶ。

「それにしても魔剣か……」

クリスが剣を振るたびに巻き起こる風や炎、そして雷撃。

物語の中でしか見たことのないその存在にナイトハルトは少しだけ羨ましいと思ってしまった。

・*

「ようやく戻って来れたか」

つい先程、クロスベルの空を確認するために出た吹き抜けの回廊に戻って来れたことにナイトハルトが一息吐く。

「二人とも、問題ないな？」

「当然」

「はい、大丈夫です」

頼もしい返事にナイトハルトは頷き、激励するように続ける。

「ここを超えればすぐに《列車砲》の格納庫だ……先に伝えておくが《列車砲》の内部には緊急停止用のレバーがある……」

状況次第ではお前達のどちらかが——」

ナイトハルトの言葉を遮って重音が響く。

上を見上げればゲートが開き、その中から巨大な《列車砲》が姿を見せる。

「あ、あれが《列車砲》……なんて大きさ」

まだ見学をしていなかったクリスはその巨大さに圧倒される。

「相変わらずでつかいなー」

「くっ、起動が早過ぎる……まさか狙いも付けずに撃つつもりか」

「——ナイトハルト教官っ！」

上を見上げているナイトハルトにクリスは声を上げ、あらぬ方向に武器を構える。

すると中空から大型飛行人形が現れる。

「人形兵器の親玉!？」

「ちっ……時間が惜しい！ レンハイムとオライオンがこの場でこいつらを迎撃！ 俺は先行する」

「了解っ！」

「任せてよっ！」

明らかに手強そうな人形兵器にナイトハルトはすぐに判断を下す。クリスとミリアムはそれに応えて、大型人形兵器との戦闘を開始するのだった。

・*

「アルカデイスギアッ！」

「焼き尽くせブリランテッ！」

アガートラムを纏ったミリアムの拳のラツシユが人形兵器を滅多打ちにし、クリスが突き刺したブリランテが内部から最大火力で人形兵器を焼き尽くす。

「ふう……意外と手強かったね」

「でも何とか倒せた。早くナイトハルト教官を追い駆けよう」

そう応えるクリスの頭上で《列車砲》が再び重い音を上げて動き出した。

砲身を展開し、そのまま仰角を上げて角度を調節する。

「あ……」

「そんな間に合わなかった!？」

さらにジェネレーターの駆動音が響く。

今まさに《列車砲》が撃ち出されようとしたその瞬間――

「ミリアムッ！ 僕を投げろっ！」

ブリランテを投げ捨てて、リヴアルトを手に風を纏ってクリスは駆け出した。

「オッケーッ！」

彼の意図をすぐに読み取ったミリアムはアガートラムを纏ったままクリスの後に追従する。

「オオオオオオッ!!」

そのままクリスはテラスの手摺に乗り上げ、蹴りつけて崖から《列車砲》に向けて跳んだ。

当然、人が飛び越えられる距離ではなく、クリスは半分も届かず失速するが、そこでミリアムが空中で彼を掴んで《列車砲》まで運ぶ。

「いつくよー！」

《列車砲》の外側からそこに到着するとミリアムはクリスを思いきり振り被る。

「っ――」

振り回される視界の中で、クリスと同じように外から右翼の《列車

砲》に侵入したサラが見える。

「クリスブレイカーッ!!」

即興の名前を付けてミリアムは帝国解放戦線の幹部二人を相手にしているナイトハルトの戦場にクリスを投げ込んだ。

・*

「っ——やってくれたな」

それは完全な不意打ちだった。

まさかの《列車砲》の外側からの奇襲。

砲弾のような勢いで乱入して来たクリスの一撃を受けて怯んだ《V》の隙を逃さず、ナイトハルトは《列車砲》内の緊急停止レバーを下げることに成功した。

「全く無茶をする」

まさかあそこからそんなショートカットがあるとは思わず、生徒の無謀な行動に呆れる。

本来なら叱責するべきなのだが、そのおかげで《列車砲》の発射を阻止できたと思えばクリスを責めることはできない。

また同じように動いていた右翼の《列車砲》も沈黙し、サラ達が間に合ったことに安堵する。

「本当だよ。でもそのおかげで間に合ったからいいじゃん」

クリスに遅れて外から格納庫に入って来たミリアムがアガートラムを解いてナイトハルトの横に並ぶ。

彼女の軽い調子の言葉にナイトハルトはため息を吐き、改めて剣をテロリストに向ける。

「《帝国解放戦線》——幹部《V》並びに《S》。貴様らの暴挙は潰えた。大人しく投降しろ」

「フフ……これで勝ったつもりになるのは早いんじゃないかしら？」

ナイトハルトの勧告を《S》は余裕の笑みを持って応える。

「お前らを速攻でぶっ殺してもう一度《列車砲》を動かす。まだ俺達の負けじゃねえ！」

「往生際の悪い奴らめ……」

そんな二人にナイトハルトは侮蔑の眼差しを送る。

「……………どうして……………」

仕切り直して一触即発となる空気の中、クリスはおもむろに口を開いて尋ねていた。

「どうしてこんな酷い事ができる？」

周りにはナイトハルトが倒しただろう彼らの仲間の他にも《列車砲》を守っていたガレリア要塞の軍人たちの姿もある。

どれも激しい戦闘の痕が見え、ここに来るまでにいくつも見て来た無残な亡骸と同様に己の血の海に沈んでいる。

「レンハイム……………」

「フフ、貴方達がそれを言うかしら？ 私たちの仲間《G》を始めとする仲間たちはつい先程、クロスベルの地で皆殺しにされたというのに」

「やはり貴様らの仕業だったか」

「先程通信で連絡があつてな。《鉄血》のクソ野郎が雇った同業者に俺の猟兵団の時みたいは無残にやってくれたみたいだぜ」

「うーん、オジサンも結構えげつないからなあ」

「フン、自業自得だ」

気楽に応えるミリアムとナイトハルトは彼らの主張をその短い言葉で切り捨てる。

「……………そんなことのために……………あれだけの人を殺したって言うのか……………」

「全てはあの男がもたらす恐るべき反理想主義の到来を防ぐため……………なんて言っても貴方には理解できないでしょうね皇子様」

「世間知らずの皇子様は引っ込んでな」

「こいつら、クリスの正体を知ってるの？」

「どうやら余計に背後関係を吐かせる必要が出て来たな……………レンハイム切り替える」

「——はいっ！」

納得できないものを呑み込みクリスはリヴァルトを構える。

「気を付けろ。こいつらは——」

「うふふ、それじゃあ第二ラウンドと行きましようか」

「邪魔する奴は八つ裂きだ」

そう言う《S》と《V》は次の瞬間、示し合わせたように同じ言葉を叫ぶ。

「戦術リンク・オン」

「なっ!？」

《S》と《V》の間に繋がられた霊的なライン。

第四機甲師団のエースと呼ばれたナイトハルトが二人掛かりとは言え手こずった理由。

「ククク……いつまでもお前らの専売特許だと思ったら大間違いだ」

「これで貴方達とのアドバンテージはない。それならどちらが強いかは明白よね」

盗人猛々しく勝ち誇る《V》と《S》にクリスはミリアムの間で戦術リンクを結び、身構える。

そして——

『そこまでだ。目的は達成した撤収しろ』

唐突に外から響いた拡声器越しの声。

「あら残念」

「ちっ、命拾いしたな」

直後、《列車砲》の外からスモークグレネードが撃ち込まれてクリス達は煙に包まれる。

「しまった」

「うふふ、まあいいわ。全ては《C》の狙い通り……クロスベルの作戦についてもね」

「あばよ。世間知らずのおぼっちゃま」

煙の向こうで《S》と《V》はそんな捨て台詞を吐いて気配が遠ざかっていく。

「待て……リヴァルト」

風を巻き起こし煙を払うと二人は列車砲に飛び移り、そのまま峡谷に向かって走り——飛び降りた。

「なっ!？」

「死ぬ気か!？」

慌ててその後を追い駆けようと駆け寄るが、それよりも前に飛び降りた二人とは逆に漆黒の飛行艇が姿を見せる。

『——我が名は《C》。《帝国解放戦線》のリーダーを務めるものである』

飛行艇から拡声器を通じて名乗りを上げる。

『よくぞクロスベルと両面に渡った我らの波状攻撃を凌いだ……とでも言うと思ったか?』

「何だと……?」

まだ何かあるのかとナイトハルトは警戒を強める。

『ここからが本番だ……同志《G》が刺し違えて取った千載一遇のチャンス、その意思に報いるためにこちらの奥の手を使わせてもらおう』
「……そう、使うのね」

「くくく、奴等の度肝を抜かしてやれ 《C》」

《C》の宣言に気を良くする 《S》と《V》。

そして、その言葉と共にそれは現れる。

「来い——《蒼の騎神》オルディーネッ!」

ガレリア要塞とベルガード門を隔てる峡谷に《蒼》が現れた。

88話 西ゼムリア通商会議Ⅲ

8月31日。クロスベル、オルキスタワー。

13:00――

地上から35階に位置する会議場には各国の代表が席に着き、ヘンリー・マグダエルの進行で会議は始まった。

「――それではこれより『西ゼムリア通商会議』の本会議を開始いたします」

マグダエル議長はまず最初にオブザーバーとしてイアン・グリムウッド弁護士と遊撃士アリオス・マクレインを紹介する。

こうして始まった《西ゼムリア大陸通商会議》。

リイン達、帝国の随行団はそれを隣の控室からモニター越しに見守っていた。

「ふう……やっぱり緊張するなあ」

「トワ会長はそういうことに慣れていると思いましたがけど？」

「うん……でも学院とこんな国際会議と比べると……やっぱり私なんて場違いだったんじゃないかな？」

「そんなことありませんよ……」

十分な力があるからこそその推薦だったはずです。俺みたいに成り行きで参加しているわけじゃないですから……

トワ会長は俺達トールズ士官学院の代表なんですから自信を持ってください」

「……うん、そうだね。みんなを代表している以上、精一杯お手伝いしないとねっ！」

よしっと、トワを両手を握り気合いを込め直す。

「それじゃあ議事録のまとめに帝国時報への声明の草案をチェック――

そうだ、トリスタ放送からの取材の申し込みにも対応しないと！」
覚悟を決めた途端にトワは忙しなく働き始める。

その姿にリインは頼もしさを感じながら、視線を《ARCUUS》に

下ろす。

結局、あれから目的の情報を得ることはできなかった。

それはラインとクレアの能力の限界でもあり、今は遠い地にいる協力者からの連絡を待っている。

——できることなら通商会議が始まる前に証拠を掴んで起きたかったが……

こればかりは仕方がないとラインは割り切る。

連絡が来れば会議場に突入して中断させる覚悟も決めてあれば、最悪を想定しヴァリマールにローゼリアとイオを乗せいつでもタイムラグのない転移の準備もしてある。

「そう一人で気を張り詰めるなシユバルツァー」

控室の中で、一人だけ異質な気配を纏っているラインにミュラーが落ち着けと声を掛ける。

「ミュラー少佐」

「とはいえ、クロスベル入りしてから働きづめにさせてしまった俺達が言つて良い台詞ではないかもしれないがな」

「いえ……最終的には自分でやると決めたことですから」

「だが立場上、君は拒否することができなかったことも多いだろう……」

それにクロスベル入りする前からもヴァリマールの修復で不眠不休の作業だったと聞くが

「そんなことをしていたのか？」

ミュラーの言葉にユリアが口を挟む。

「う……そのことはくれぐれもクローディア殿下には内密に……それにラッセル博士たちが頑張ってくれたおかげで俺には余裕がありましたから」

「それでもその余裕の中で君は昨日のノーザンブリアの議題についてまとめていたのだろうか？」

少佐……いくら何でもライン君に頼り過ぎではないのか？」

「耳が痛いはその通りだ。本国に戻ったら特別手当が出せないか相談するつもりだ」

「あはは……特別手当の前にこの会議の後のことが怖いですね」

流石に会議直前ということもあって、合流した時には誰もそのことについては軽く触れる程度で済ませてくれたが果たして会議が終わった後どうなることか。

会議はおよそ五時間を予定している。

現在時刻は13時、終了予定は18時。

当然のことだが、クロスベルにはもう一泊して明日に帝国に帰還する予定になっている。

それも何事もなく終わればの話だが。

「お疲れ様です」

そんな三人の会話の中、控室にノックをして現れたのは特務支援課の面々だった。

「ふむ、支援課の諸君か。会場近辺のフロアを警戒してくれているそうだね」

入って来たロイド達をユリアが応える。

「はい、何とか捻じ込んでもらうことができました」

「それで何か異常はありませんか？」

確認するエリイにミユラーがロイド達の最後尾にいる少年の存在を一瞥して答える。

「決して油断は出来ないが至って平穏といったところか。首脳たちも声を荒げる様子もなく、会議自体も順調のようだ……」

このまま無事に終わってくれば、皇子の肩の荷も少しは軽くなるのだが……」

そこで言葉を止め、ミユラーは肩を竦ませため息を吐いた。

「もう少し堂々としたらどうだ？ どんな理由であれ、この場に警備の一人としているのならそんな顔をするな」

「っ——はい。申し訳ありません」

突然の叱責にバツが悪そうにしていたクルトは顔を上げる。

「ミユラー少佐、こちらの少年とはお知り合いですか？」

一昨日のアルセイユでの会合ではいなかった二人の内の一人にユリアは尋ねる。

「ああ、私の弟だ。いろいろあつて特務支援課に世話になっている……」

エプスタイン財団に行っていると聞いていたが戻っていたんだな」

「はい、テイオさんがロイドさん達が心配で帰国を早め——っ」

「余計なことは言わなくて良いです」

口を滑らそうとしたクルトの脛をテイオが蹴って黙らせる。

「はは、どうやらあれから随分腕を上げたみたいだな」

微笑ましいやり取りにリインは笑う。

教団事件の時は忙しく、落ち着いて話している余裕もなかっただけにクルトの元気そうな姿に安堵する。

「リインさん……」

クルトはリインに向き直り、何かを言いかけて言葉を呑み込む。

「クリスのことなら大丈夫だ。楽しそうに学院生活を送っているし、武術の腕もどんどん伸ばしている。それこそ君に負けない程にな」

「そうですか……いえ、それは良いんですが」

リインが教えてくれた彼の現状にクルトは安堵するが、次の瞬間にはリインを非難するように睨む。

「と言うかですね……帝都といい、ノーザンブリアといい貴方がいながらどうしてクリスを危険な目に合わせるんですか？」

「いや……そこを責められても……俺達はあくまでも巻き込まれただけだから」

それが理不尽な物言いだと言う事は分かっているが、レマン自治州に届いた帝国時報の二つの事件でリインの顔以上に彼の写真が乗っていることにクルトは心底驚いた。

「まあ……リインさんや今のクリスの立場も分かっているんですが……」

それでも一言申したかったとクルトは詫びて頭を下げる。

「ふふ、しかしこの部屋には相当な実力者が揃っているみたいだね」

話をそこで切って、ワジが部屋を見回して話題を戻す。

「ま、なんつってもほとんどが将校クラスの人間だからな」

「ええ、ここにいる方たちだけでも余程の事態に対処できそうですね」

「うんうん、それに何よりユリア准佐の剣は美しく苛烈と聞きますし」
ワジに同調するようにランデイとテイオ、そしてノエルが興奮気味にそれぞれの感想をもらす。

「それを言うなら超帝国人もいるしな」

「そうですね。やはり超帝国人がいるのが一番大きいでしょう」

「ランデイ先輩、テイオちゃん？ 超帝国人って何ですか？」

突然知らない単語を言い出した二人にノエルは首を傾げる。

「それはだな——」

「実は——」

「ランデイさん、テイオちゃん？」

にっこりと笑い、拳を固めて見せるリインにランデイとテイオはノエルに耳打ちしようとしていた動きを中断して、素早くロイドの後ろへと退避する。

「えつと……」

「気にしないで下さい。確か……クロスベル警備隊のノエル・シーカーさんでしたね。俺はリイン・シユバルツアーと言います」

「あ……覚えて頂き光栄です」

教団事件の時に名乗るだけでほとんどすれ違った程度の面識がないのに覚えていてくれたことにノエルは年下の少年に対して緊張する。

「フフ……とにかく、どのような者が現れようと殿下には指一本触れさせはしない……」

この場は我々に任せて、君達は周囲の警戒に努めてくれ」

「ええ、了解しました」

ユリアの言葉にエリイが答え、支援課は控室から退出していく。

が、最後に残ったロイドはジツとリインを見つめていた。

「ロイドさん？」

「リイン君、君は……いや何でもない」

ダドリーから聞いたリインの怪しい動き。

恩人を疑いたくないという気持ちとこの場で尋ねることは彼の立場を危うくさせるかもしれないと考え、ロイドは踏み込むのはやめ

た。

「……………ねえリイン君」

ロイド達がいなくなつたその控室でトワが徐にリインに声を掛けた。

「超帝国人って何？」

「気にしないでください」

リインは即答で答えるが、トワ以外の随行スタッフは何かを囁き合つて頷き合う。

「あのですね……………それは——」

妙な誤解が広がらないようにリインは黙殺を諦めて、言い訳を——
「それについてはこの俺様が答えようじゃないか！」

超帝国人とはリイン・シユバルツァーがリベールで名乗つたことが
起源の——」

「破甲拳ツ！」

脈絡なく出て来て来て戯言を喋り出した赤毛の書記官をリインは隣の
会議室を氣遣つて無音で沈めるのだった。

・*

15:30——

会議の前半が終了し、各国の首脳陣はそれぞれに宛がわれた部屋で
会議の熱を冷ますようにわずかな時間をくつろいでいた。

色々あつたが最初の名目である宰相付きの護衛官として、彼と共に
二人きりでクロスベルを一望できる部屋にいた。

「この光景、実に見事だ……………」

地上をこの高さから見下ろせるような建築物を人間が作り出せる
とは……………おっとりリベールの巨大な浮遊都市に乗り込んだ君に言うこ
とではなかつたかな？」

「いえ、あの時はみんな必死でしたから、こうして穏やかな気持ちでこ
の絶景を望めるのはまた違った趣があります」

クロスベルを一望できる窓辺に立ち話を振つて来るオズボーンに

リインは当たり前障りのない言葉を返す。

ノーザンブリアから戻って来て以降、すっかり定着したやり取りと距離感。

とりあえず今はあの時のようにナユタのことを探るような発言を
していいこないことにリインは安堵する。

「随分と上機嫌ですな……特務支援課を呼び出していったい何を御考
えなのですか？」

「ふ……単なるお喋りだ。もしくは意識調査と言い換えてもいいだろ
う」

「意識調査？」

「このクロスベルの地もまた古き因習と愚かな眷属の『呪い』が未だ
に残っている」

「『呪い』……」

「帝国を侵すものとは違い、愚かしい人の妄執と言った方が良好だろ
う」

「………貴方はいったい何を知っているのですか？」

「私が知っている事など大したものではない……」

それに分からない事があるからこそ世の中とは面白い。君がそれ
を体現しているようにな」

「買い被りです。俺は目の前の問題にただ全力で立ち向かっただけで
す」

「ふふ……君ならそう言うと思っていたよ」

リインの答えにギリアスは満足そうに笑う。

「——失礼します。オズボーン宰相閣下」

「クロスベル警察、特務支援課、お招きにより参上しました」

「入ってきたまえ」

会話を切り上げてギリアスはドアの向こうへと言葉を投げた。

リインは軽い会釈をしてロイド達を迎え、彼らとギリアスの邪魔に
ならないように壁際に移動する。

「フフ……エレボニア帝国政府代表、ギリアス・オズボーンだ……」

諸君のことはレクターから聞いている。そして我が国の家出少年

を保護してくれたことに礼を言っておこう」

「うぐ……」

ロイド達と一緒にやってきたクルトはギリアスの指摘に胸を押さえて頂垂れるのだった。

特務支援課と鉄血宰相のお喋りはそれ程長い時間は掛からなかった。

意識調査と称した、クロスベルがどれだけ持つかと言う話。

終始ギリアスに気押される形で、結局彼が一方的に話をするだけでその会話は終わってしまった。

「フフ、休憩時間も終わりだ。話はここまでしておこう……」

ああ、どうやら教団事件のことで共和国から勲章を授かるようだが帝国政府からは特に勲章を贈るつもりはない……

下手に『平民』に勲章を贈ったら貴族勢力がうるさいのでね……

それにあの事件は確かに君達が解決したことになっているが、それは我が国のリイン・シュバルツァーの功績の方が大きいだろうからな」

リインに視線をやってギリアスはそう締めくくった。

「オズボーン宰相……」

特務支援課が出て行って再び二人きりとなった控室でリインは先程の会話の中にあつた言葉を逆に質問する。

「クロスベルがいつまで持つのかという話ですが……」

逆にエレボニアはどこまで持つと貴方は御考えですか？」

「ほう……」

リインの質問にギリアスは嬉しそうにその厳しい表情を緩める。

「それを答えるには時間が足りないな……その答えは『宿題』としておこう」

会議の再開もあり、ギリアスはその場で答えることはしなかった。

・*

再開された会議は前半の貿易や金融などの議題からクロスベルの安全保障についての議案が提議され、白熱した論争が交わされる。

隣の控室でもその様はモニター越しに中継されており、誰もが固唾を呑み見守る。

が、そんな輪から外れてリインは一人窓際で《ARCS》で通信を行っていた。

「……………《フェンリル》。それがカルバード側で列車砲に対抗して開発された兵器の名前なんですか？」

『ええ、周囲の大气に満ちている翠耀と蒼耀を高圧縮して導力器の中に取り込み、加速させぶつけ合わせてその反発力を爆発力に変える反応爆弾……………』

あの子が調べてくれた資料が本物なら、破壊力だけならきつと至宝に届く程の威力があるらしいです』

簡潔なクレアの説明にリインは絶句する。

「それほどまでにガレリア要塞を警戒していたということですか？」

『そういうことでしよう……………』

幸いなことにロックスミス大統領は《フェンリル》の使用については否定的だそうです……………

ですが先日、共和国首都の軍事施設から嚴重封印されていたそれを反移民政策主義のテロリストに奪取されて、その足取りはまだ捕えていないようです』

「反移民政策主義……………帝国でいう所の解放戦線みたいなものですか？」

『とりあえずその認識で構いません……………』

反移民政策主義者は帝国解放戦線と接触を持った可能性があるというのが憲兵隊では予測されています……………

この場合、クロスベルに《フェンリル》を持ち込む方法は二つ』

「飛行艇を利用した空路か、鉄道を使った陸路のどちらかですね」

『ええ、威力が威力ですからクロスベルの何処で起爆しても、オルキスタワーを巻き込むことができますから……………』

ですが私は陸路の可能性は極めて低いと考えています』

「それはどうして?」

『帝国解放戦線のメンバーは閣下に強い恨みを持っています。ですからいくら威力のある爆弾でも閣下のすぐ近くで爆破したいと思っ
ているでしょう』

「そうなると空路……オルキスタワーの屋上か、前の広場……それともこの高層ビルにそのまま突っ込んでくる可能性もあるか」

可能性を考えればキリがない。

そもそも小回りが利く飛行艇が普及している社会ではこんな超高層ビルなど逃げ場のない空中の牢獄に等しく、テロの格好の標的になる気がする。

もしも飛空艇事特攻してくるようなことがあれば、それこそヴァリマールを呼び出して止めなければ各首脳陣を守ることとはできないだろう。

『私が知っているのは解放戦線のメンバーだけなので、反移民政策主義者の方はその限りではありません……』

ですが、鉄道を始めとする陸路は私に任せて下さい。クロスベル警察と共和国の待機要員に話を着けて、帝国と共和国側から来る列車は一時的に運休させます』

「助かりますクレアさん」

『それからもちろん《フェンリル》は起動させないのが一番なんですが、もしも起動させてしまっても場合によってはゴスペルによる無効化は試さない方が良さそうです』

「それはどうして?」

『一度加速させた二つの力の制御が外れるだけなら良いんですが、もしその二つを区切っているシステムまで停止することになれば即起爆する可能性があるみたいです……』

起動から停止までの猶予時間はおよそ十分。それを過ぎてしまえばゴスペルでの停止は逆に危険だそうです』

「つ……他に停止させる方法は?」

『起動した《フェンリル》を停止させるには26桁の暗証番号を入力する以外はないそうです……』

既存の導力爆弾とは構造も異なるので解体による無力化は難しいでしょう』

『そうなるとう方が一はヴァリマールを使って空に運ぶしかないか』

『リイン君、それはあくまでも最終手段です。良いですか、とにかく起動させる前にテロリストを制圧するんですよ』

『分かっています。俺だって危ない橋を渡るつもりはありませんから』

念を押して来るクレアにリインは頷く。

『それなら良いんですが……最後に一つ……あの子から言付けを預かっています。そのまま読みますね……』

『お願い、あの人達がいるクロスベルを守って』……だそうです』

『……分かりました』

クレアからの伝言を噛み締め、リインは通信を切る。

『さてと……まずは情報共有が必要か……』

まだ後半の会議は始まったばかり、テロリスト達が仕掛けて来るとするのならはこの会議が終わるまでの数時間の何処かだろう。

「レクターさん」

「おう？ クレアとのイチャイチャはもう良いのか？」

「向こうの控室に行ってキリカさん呼んで34階の警備の詰め所に来て下さい」

「へいへい、少しは慌てるよなあ」

つまらんと言わんばかりにレクターは帝国と王国の控室から出て行く。

「ミュラーさん、ユリアさん、ちよつとお話があるんですけど良いですか？」

そしてリインは二人を促した。

・*

「何だと!？」

各国の護衛官代表を呼び出し、クロスベルの警備側の代表であるダ

ドリーを交えてリインは己が調べた情報を開示した。

「……………何かをやっていると思つていたけど、こんな大胆なことをしていたとはね……………」

リイン君。君がやったことは国際問題になるわよ」

「お叱りは後で受けます。それよりもキリカさん、正直に話して下さい……………」

カルバードで《列車砲》に対抗する兵器が作られていたこと、それが先日テロリスト達に奪われていたことは真実ですか？」

脅しつけるようなキリカの物言いに動じずリインは事実確認を優先する。

その部屋に集まった一同の目がキリカに集中する。

キリカは肩を竦めて頷いた。

「どちらも事実よ」

「っ——」

肯定された兵器の存在にダドリーは眦を上げる。しかし彼が口を開くよりも先にキリカが続ける。

「言い訳をさせてもらうなら、私もロックスミス大統領もその兵器の運用に関しては反対よ……………」

カタログスペックだけでも分かる過剰な火力。戦争ではなく、ただ破壊と汚染を撒き散らすだけの非人道兵器、それが《フェンリル》よ……………」

ただ、共和国の中にはどうしても帝国を滅ぼしたいと思つている勢力も存在しているのも事実なの」

「だからと言って、そんな超兵器を寄りによつてテロリストに奪取されていくことを隠すなど……………」

「それは共和国内の問題だからよ……………できることなら秘密裏に解決しておきたかった。それだけよ」

「っ——」

「ダドリーさんの憤りはもつともです……………」

ガレリア要塞に《列車砲》なんて配備させている俺達《帝国人》が言つても気分を悪くさせてしまうだけかもしれないが、今は堪えて

ください」

「ぐっ……すまなかった。続けてくれ」

この場で誰がどう見ても最年少であり、有益な情報をもたらしてくれたリインに謝らせてしまったことにダドリーは何とか感情を呑み込む。

「おそらくテロリスト達は十中八九、新型導力爆弾の《フェンリル》を使っています……」

大きさは約一アージュの巨大な球体。なので運び込むには飛行艇を用いる可能性が高いでしょう。陸路に関しては既に鉄道憲兵隊にお願いして鉄道を封鎖してもらっています」

「いつの間になんか……」

手際よく自分の仕込みを明かしていくリインにミュラーは感心すると共に呆れる。

アルカンシエルの舞台に立つなど、予定外の行動が多かったはずなのに護衛官としての務めを十全以上に果たしていることに驚くしかない。

「ではリイン君は我々に何を求めるのかな？」

ユリアがわざわざ自分達を集めた理由を問う。

「できればアリオスさんも交えて話したかったです……」

すでに後半の会議が始まり、立ち会っているアリオスがこの場にならないことに不満を感じながらリインは今後の対処方法を提示する。

「この爆弾を止めるのはとにかく時間の勝負になります……」

本来なら仮にテロが起きたとしても、対処はダドリーさん達に任せ、俺達は首脳たちの直衛に専念するべきなのでしょうが《フェンリル》の対処は時間との勝負になります……」

なのでテロリスト達をどれだけ迅速に制圧できるかが重要だと思います」

「対象の暗殺は退路を考えない特攻が一番成功の可能性が高いと聞く……」

「もしも奴等が宰相閣下を殺すために自分の命を厭わないとするなら厄介だな」

「この爆弾を持ち出して来ている時点ですでに死を覚悟しているかもしれないわね」

「その事ですが、実はテロリスト側に一つ抜け道があります」

「リイン君、それはいったい？」

「このオルキスタワーの地下には万が一の備えとして、耐爆撃用の広大なシエルターが造られているそうです……」

それを利用して《フェンリル》の爆発をやり過ぎつもりなのかもしれないません」

「つ……地下シエルターのことまで……くっ……」

オルキスタワーの秘匿情報まで知っているリインにダドリーは歯噛みする。

「以上が俺が今日調べてクレアさんと協議した、《フェンリル》が使われることを前提としたテロリスト達の行動パターンです」

「十分ね……通常の爆弾だったとしてもそれなら解体は私にも可能よ」

「そもそも爆弾があるかないかを早期に確認するのは必要なことだろう」

「クロスベルの戦力を信用していないわけではないが、こちらから攻めた方が良さだろう」

リインの――クレアが考えておいた作戦にキリカやユリア、ミユラーは賛成してくれたことにリインは内心で胸を撫で下ろす。

「だけどリイン君、もしも爆弾にここに来る前に火が入れられていたらどうするつもり？」

「その場合は安全圏までヴァリマールを使って遠ざけます」

気になって尋ねたキリカの質問にリインは即答を返す。

「その意味は分かっているのよね」

「当然です」

念を押した確認にもリインは怯むことなく頷き、ダドリー達を見回す。

「テロリストが襲ってくるパターンとして飛行艇が使われると仮定した場合、特攻を除外して進入路はおそらく屋上からだと思います……」

ダドリーさん、屋上の警備体制はどうなっていますか？」

「屋上か……」

リインの質問にダドリーはバツが悪そうに俯いて眼鏡を直す。

「屋上には……人員を配置していない」

「は……？」

その答えにリインは耳を疑った。

「だから……屋上の警備に人は回していない」

「……………ばっ——」

思わず罵りそうになった言葉をリインは呑み込む。

ダドリーは元々捜査官であり、本業ではない。

加えてこんな超高層ビルを警備するノウハウなんてないのだから、責めるのはあまりにも酷だとリインは自制する。

「人員は配置していないが、オルキスタワーの屋上には各方面に監視カメラを設置してある……」

不審な飛行艇が近付けばすぐにその端末で確認することができ、それにタングラム、ベルガード門のレーダー施設が——」

「だからって目視の監視を蔑ろにして良い訳がないでしょう？」

危機管理のなさにリインは苛立つ。

最新の導力器に頼ることを否定するつもりはないが、各国の首脳陣を招いている自覚が足りないのではないかと思ってしまう。

40階建ての屋上という高所から一方的に視界を確保できる利点を捨てていることが信じられなかった。

「安心しろシユバルツァー。両門のレーダー施設は最新式だ。国境を超える飛行艇を見逃すはずは——」

「ダドリー警部。セルゲイ課長から緊急連絡です！ タングラム、ベルガードのレーダー施設が破壊されたようです」

「何だど!？」

警備室に詰めていたオペレーターが鳴った通信機を取り、報告を上げる。

あまりにもタイミングが良かったが、同時にそこにいる者たちはまづい状況に気付く。

「やばいな事態の把握と通信の誤差を考えると、もう近くに来てい
かもしれねえな……」

しかもこの外の監視カメラの映像……録画されたループ映像にす
り替えられているな」

「え……？」

レクターの言葉に端末の前で監視していたスタッフが驚く。

そして、まさにその直後34階の窓の外の下から二隻の飛行艇が
ライン達の目の前を過ぎ去って行った。

「ちっ——」

二隻の飛行艇はそこから一つ上の階の前にホバリングするとバル
カン砲による銃撃を始める。

「くっ——」

「安心しろ！ 砲撃にも耐えられる特注の強化ガラスだ。破られるこ
とはない」

ダドリーの言葉を最後まで聞いていたのはそれこそ、彼の部下たち
だけだった。

彼の言葉が終わるよりも速く、各国の護衛官たちは対策室から出
ていた。

エレベーターホールに向かわずに迷わず、非常階段を目指す。

「急げ！」

作動して降りてくるシャッターを一同は余裕を持って駆け抜けて、
35階の会議室に戻る。

「殿下、大丈夫ですか！」

いの一番に会議室に突入したユリアがクローディアの下へと駆け
寄る。

二隻の飛行艇はそのタイミングで銃撃を終えて、急上昇してその窓
の視界から消える。

「今のはラインフォルトの高速船か」

「もう一隻はヴェルヌ社の軍用ガンシップ……どうやらライン君の推
測は間違いなさそうね」

「皆さん、御無事ですか？」

ユリアたちに遅れてダドリーも会議室に突入して各首脳陣の安否を気遣う。

「ああ、何とか……」

「しかし連中はどこへ……」

『……ふむ。聞こえているな』

銃撃が止んだことにひとまずの緊張から解放されたところに突然会議室に設置されたスピーカーから声が流れる。

『会議に出席されている方々。我々は『帝国解放戦線』である』

『同じくカルバードの旧き伝統を守るために立ち上がった』『反移民政策主義』の一派の者だ』

「なんだと……!?!」

「帝国と共和国で活動しているテロリスト集団……!?!」

名乗りを上げたテロリスト達にアルバート大公とイアン弁護士が慄く。

『この度、我々は互いの憎むべき怨敵を討たんがため共に協力することと相なった——』

覚悟してもらおう! 《鉄血宰相》ギリアス・オズボーン! そして

ライン・シュバルツアーツ!』

『ロックスミス大統領!』

貴方にはここで消えていただく! 忌々しき東方人に浸食されたカルバードの伝統を守るためにはそのくらいの荒療治が必要なのだ!』

言いたいことを一方的に言つて、放送は切れる。

『………今の声は……《G》か……』

「おい、シュバルツアール。冷静に行けよ。ガチでクロスベルに血の雨を降らせるんじゃないぞ」

暗い光を目に宿したラインにレクターは釘を刺す。

「大丈夫です……ええ、何を優先するべきかを間違えるつもりはありません」

そういうラインにレクターは思わず肩を竦めて、テロリスト達の冥福を祈るのだった。

89話 西ゼムリア通商会議Ⅳ

会議場の襲撃を撃退した後、一同は二手に分かれる事となる。

ジオフロントへ逃げたテロリストをアリオスとダドリー、特務支援課が追い、リイン達はテロリスト達が乗り捨てた飛行船を調べるためにオルキスタワーの屋上へと向かった。

そこには二隻の飛行船の他に、導力爆弾を設置された台座が鎮座していた。

「どうやら後でリイン君を怒らなくて済みそうね」

屋上に出る前から肌で感じる霊力の昂りに似た、導力のうねりにキリカが呟く。

「ああ、俺でも分かる。これは危険だ」

「何ということ……クロスベルそのものを消そうだなんて。いったいどうしたらそんな考えに至ると言うのだ」

「真面目に考えない方が良し准佐……帝国、共和国に限らず籬が外れた奴のすることは理屈じゃ測れねえからな」

理解に苦しむともらすユリアにレクターが肩を竦めて答える。

「起動にはオルキスタワーの導力を使って火を入れたようですね……だとするとまだそれ程時間は経っていないはずです」

導力爆弾を設置された台座からは太いケーブルが伸びオルキスタワーの導力ソケットに繋がっている。

初期点火のための導力をそこから確保したとして、テロリスト達が強襲した時間と逃げた時間を逆算すればそれ程時間は経っていないだろう。

それはそれとしてリインは放置されているラインフォルト製の高速艇を見上げた。

「隠れてないで出て来たらどうだ？」

「くくく……流石鉄血の犬、鼻が利く」

リインの呼び掛けに応え、飛行船の中から一人の男が出てくる。

「帝国解放戦線の幹部《G》……」

その姿を見た瞬間、リインは射殺さんと言わんばかりに彼を睨み付ける。

「シユバルツァー」

「分かってます」

レクターの言葉に冷静な返事をする。

彼が先月帝都でエリゼにしたことへの憤りを抑え、リインは話しかける。

「お前は自分達が何をしているのか分かっているのか？」

「ふん、鉄血の犬風情が何を偉そうに……私は大義のためにここにいる」

「大義とは随分と図々しい台詞が出て来たな。貴様らがしていることはテロ活動以外の何物でもない」

《G》の言葉にミュラーは呆れる。

「何も考えていない皇族の腰巾着に言われる謂れはない！

これ以上あの親子を放置すれば帝国は滅茶苦茶になってしまう、誰かがそれを食い止めなければならぬと何故分からない！」

「そのために各国の首脳やクロスベルを巻き込んでも良いと言うのか？」

熱弁を振るう《G》に対してリインは冷めた目で聞き返す。

「クロスベルを爆破しようとしているのはやり過ぎだと認めよう……」

だが貴様たちを確実に討ち取るには必要な犠牲なのだ！」

「……随分と目の仇にされているな」

はつきりと言い切る《G》にレクターは肩を竦める。

「これ以上の問答は時間の無駄でしょう……」

お前達の思想なんて興味もなければ理解するつもりもない、その導力爆弾、解除させてもらう」

「ふん、やれるものならやってみるがいい！」

徐に《G》は腕を上げると、それを合図にリイン達の前に人形兵器が次々と現れる。

「結社の人形兵器か……」

「数だけが多いが問題はない」

「それより問題は時間の方でしょうね。殲滅ではなく突破を優先しましょう」

「だな……このメンツなら余裕だろ」

それぞれ武器を構えて臨戦態勢を取る。

「そのことですが、レクターさんキリカさん、二隻の飛行船の方には通常の導力爆弾もセットしているようなので対処をお願いします」

「了解したわ」

「やれやれ、随分と念を入れてやがる」

リインからもたらされて追加の情報にキリカとレクターは答える。

「ふ……粹がつていられるのも今の内だ……」

私にはとある連中からもらった秘密兵器があるのだから」

「秘密兵器だと……？」

《G》の自信に満ちた発言にリイン達は警戒する。

そんな彼らを睥睨して《G》は腕を空に掲げて高らかに叫ぶ。

「出でよっ！ 蒼穹よりもなお青い！ 雲海を切り裂く巨人よ！」

《G》の目の前にそれは転移する。

「……………えー……………」

現れたその存在にリインは微妙な気持ちになった。

「くっ……………これはまさか……………」

そんなリインの反応に気付かず、騎神にも劣らない巨大な体躯の機械仕掛けの巨人にミユラーは慄く。

「これはトロイメライか」

「おそらく結社で開発したものでしょうね」

「シユバルツァー？ どうかしたか？」

「すみません……五秒待ってください」

シリアスな場面であり一秒でも無駄にできない状況だと分かっているのだが、それでもリインは首を傾げるレクターにそう言って額に手を当てて天を仰ぐ。

「ふふふ……どうやら恐怖に震えて言葉も出ないようだな」

いつの間にかそれに乗り込んだ《G》は固まったリインに気分を良

くする。

それを無視してきつちり五秒でリインは気持ちを切り替える。

「速攻で片をつけます。皆さんは周りの雑魚の掃討をお願いします」
虚空に向けて拳を握り、リインはミュラー達に指示を出す。

「来いっ！ 《灰の騎神》ヴァリマールッ！」

その叫びに応じてリインの背後に傷だらけの《灰》が現れる。

「ふんっ！ そんなスクラップ同然の騎神などこの《G・トロイメライ》の敵ではない！」

傷だらけであり左腕もなく、^核も剥き出し、さらには武装も折れた太刀という様相の《灰》に《G》はすでに勝ったつもりで勝ち誇る。

「お願いしますローゼリアさん、イオ」

ヴァリマールの中へと搭乗したリインはすでに中で待機していたローゼリア達に言葉を掛ける。

「うむ、任せるが良い」

「うんうん、養ってもらってる分はちゃんとして仕事するよ」

操縦桿に手を当てたリインの左右の手にローゼリアとイオは自分達の手を重ねて、ヴァリマールに靈力を注ぎ込む。

目の前の端末に表示されていたぎりぎり歩く程度のことしかできそうもないほど消耗していた靈力の残量が急速に増えて行く。

「ありがとうございます」

「礼など良い！」

「それより来るよっ！」

律儀に労ってくるリインを叱責するようにローゼリアとイオは目の前の敵に集中しろと叫ぶ。

ローゼリアにとっては久しぶりの、イオにとっては初めての《騎神戦》。

しかも相手は騎神とは技術系等の違う存在。だからこそ未知の相手に警戒心を強める。

「問題ありません」

しかし、リインにとっては既知の存在。

ラッセル博士たちの開発を手伝ったこともあり、細部まで知り尽くした機体。

だけではなく、かつてジュニス王立学園で生身で戦った機体でもある。

ヴァリマールの損傷を差し引いても問題はないのだが、リインはその機体の奥底に存在する気配に気を引き締める。

「死ねっ！ リイン・シュバル——いや、リイン・オズボーンツ!!」

その叫びに動揺したのはリインではなく、雑兵と戦いを始めたミユラー達だった。

しかし勝敗は《G》の気合いに反して一瞬で着く。

突き出されたクロウを躲すと同時に《灰》は左肩に掛けていた帝国の紋章が入ったマントをトロイメライの頭にすれ違い様に被せる。

『なっ!』

視界を奪った次の一瞬でヴァリマールの腕は折れた刃にも関わらずトロイメライの両腕を斬り落とす。

返す刃で両足を順に斬り、背面のミサイルハッチを柄尻で潰す。

一連の動作はとても半壊した機体とは思えない程に滑らかで、ミユラー達は更に虚を突かれる。

「うわぁ……」

「何と言う……」

戦闘と意気込んでいたイオとローゼリアはあまりに一方的な蹂躪に張り詰めた緊張が霧散する。

『何だ!? どうなっている動け、動けこのポンコツが!』

トロイメライの中で何が起きたのかも分かっていない《G》が無様に騒ぐ。

「皆さん、今の内に制圧を」

だるまにしたトロイメライをヴァリマールで踏みつけて動けなくし、リインは外に出て固まっている一同を急かす。

そう言っている間にもリインは《疾風》で屋上を駆け抜けて残った人形兵器を瞬く間に斬り伏せて行く。

「……もうあいつ一人で良いんじゃないかね?」

「ううむ……」

レクターの眩きにミユラーは行き場をなくした剣を下ろして唸る。「無駄口を叩いてないで解放戦線の爆弾は任せたわよ」

呆れるレクターの背中を叩いてキリカが共和国側の飛行船に飛び込み、レクターも帝国側の飛行船へと足を向ける。

リインは屋上の中央に設置された《フェンリル》に取りつき、側面に表示された内部のパラメーターを読み取る。

「……………まだ初期臨界に達していない。リン」

オルキスタワーと繋がっているコードを力任せに抜いてリインは虚空に叫ぶ。

その声に応じてリンが現れてリインの願いを受け入れる。

「了解、導力停止現象を展開します」

黒い光がリンを中心に広がり、《フェンリル》を呑み込み。その機能を停止させる。

「やったか？」

「これで一安心か」

遅れてそこに駆け付けたミユラーとユリアは沈黙した《フェンリル》に安堵の息を吐く。が――

「シユバルツァー？」

厳しい顔をしたままのリインにミユラーは首を傾げる。

「どうした？ 《フェンリル》は止まったのではないのか？」

「この《フェンリル》は止まりました。でも……………」

言われて二人は気付く。

屋上に満ちていた荒れ狂う導力の波動はまだ消えていない。

『くくく……………どうやら《フェンリル》を止めることに成功したようだな』

《G》の声を響かせるトロイメライの身体の各所からワイヤーが射出されヴァリマールに絡みつく。

『だが本命の《フェンリル》はこっちにある！ 貴様には私と共に煉獄に堕ちてもらおうぞリイン・オズボーンツ！』

荒れ狂っていた導力の波動の中心がトロイメライに集約されてい

く。

「まさか二つ目の《フェンリル》だど!？」

「これはまずい……」

予め火を入れられていた《フェンリル》はすでに初期臨界を超えて、今まで隠されていた反動のように周囲の風と喰らって暴風を巻き起こす。

「いえ……共和国の基地から盗まれたのは一基だけです……二基目は複製されたものでしょう」

どこか諦観を感じさせる言葉でリインはミユラー達の疑問に答える。

あのビジョンを見せられ、一晩で出来る限りの策を講じてみたが結局未来を変えることはできなかった。

そういう因果なのだど何処かで感じながら諍ったが、やはりこの結末を変えることは最初からできなかった。

「シユバルツァー」

「大丈夫です。最初から予定していたことをするだけです」

呼びかけるミユラーにリインは振り向かず返して、ヴァリマールの下へと踵を返す。

ヴァリマールに再び搭乗しようとして、リインは視線を落としてトロイメライに——《G》に尋ねる。

「どうしてこんなことができる？ 人の——自分の命を何だと思ってるんだ？」

『私は憂国の士だ！ たとえこの身が果てようともお前達親子がもたらすであろう恐るべき反理想社会の到来を食い止められるのなら悔いはないっ！』

いつそう誇らしげに語る声にリインは肩を竦める。

「そうやって自分の命すら大事にできないから、人の命も軽んじられるんだ。お前達は憂国の士なんかじゃない、ただの外道だ」

リインは太刀を抜いて、呼気を整えてトロイメライに向けて構える。

「七の型——《暁》」

七つの斬線が走るとトロイメライのコックピットだけが綺麗に斬り抜かれる。

「ふんっ！」

リインはそれを蹴り、適度に潰す。

『むぎゅ……な、何が——』

ノイズ混じりの困惑の音が最後に外部スピーカーの音が途切れる。改めてリインはヴァリマールに向き直り、傍らに浮かぶリンに尋ねる。

「リン、行けそうか？」

「はい。リインの力とローゼリア、イオ、三人の力を合わせれば大気圏外にも届くでしょう」

「——っ」

「なっ——」

ブリーフィングの時に提示されていたが、改めてその方法にミユラーとユリアは息を呑む。

「一応聞いておくが、リンの絶対障壁では抑えられないのか？」

「この端末の出力では無理です。またこれだけのエネルギー体は《箱庭》に入れることもできないでしょう」

「そうか……」

リンの判断にリインは静かに頷く。

「俺が無理をすれば二人の分の力を——」

『皆まで言うなリインよ』

『そうそう、ここまで来たら一蓮托生だよ』

ローゼリアとイオを下ろそうと話題を振るが、リンがそれに応える前にヴァリマールの中から二人はそれを却下する。

「ですが……」

『既に後継はエマとセリーヌ、ヴィータにはグリアノスも残しておるから問題はない……』

というか、こんな爆弾よりもオヌシを一人で行かせたとリアンヌに知られた時のグランドクロスの方が恐ろしいわ』

「ローゼリアさん……」

『私は後継なんていないけど、何って言っても『聖獣』だからね……
旅は道連れって言うし。今は電池と盾くらいにしかなれないけど、
三人の方がみんな生きて帰れる可能性は高いと思うよ』

「イオさん……」

気負うことなく付き合うと言ってくれる二人の『聖獣』にリインは感謝する。

「二人とも……ありがとうございます。ノイは……」

「当然、わたしも一緒に行くの」

話を向けたノイは当然だと言わんばかりに現れ、定位置でもあるリインの肩に立つ。

「そうか……」

方石だけ独立させ、ルフィナと共にこの場に残すことも考えたが意志の固いノイをリインは受け入れる。

そしてルフィナからの言葉なき意志も聞き、リインはリンとノイを伴ってヴァリマールに搭乗する。

「待つんだリイン君！」

「何か他に方法があるはずだ！」

ここまで怒涛の情報量を消化し切れず、あくまで最終手段としか考えてなかった方法が現実となり、ユリアとミユラーは慌ててリインを止めようと声を上げる。

『霊力の充填を完了……術式を《空の翼》と定義……駆動解放まで60秒』

響くりンの声これが現実だと二人に突きつける。

「おいおい、まじかよ……」

導力爆弾を解体する手を止めずにレクターは外の様子に毒づく。

「っ……」

キリカは唇を噛み、目の前の作業に集中して己の役割を全うする。

『大丈夫です……』

黄金の光を宿したヴァリマールはその背に光を纏った翼を作り出す。

『俺は死にません……少なくとも二年……それまでは生かされてい

る。そういう因果が紡がれていますから』

ミュラー達には理解できない言葉をリインは安心させるように告げる。

いろいろ悩みはしたが、このどうしようもない局面だからこそいつそ開き直ってしまえとリインは笑う。

『必ず帰って来ます。宰相閣下にオリヴァルト殿下、クローディア殿下、他のみんなにはそう伝えておいてください』

ヴァリマールが飛び立つ。

ミュラー達にはそれを見送ることしかできなかった。

トロイメライを繋いだまま飛び立ったヴァリマールは空中で大きな光の翼を纏い、さらに加速して天高く飛翔する。

瞬く間に空の彼方へと行ってしまったヴァリマールにミュラーとユリアはただ唇を噛み締める。

「ミュラーッ！ リイン君は?!」

ただ立ち尽くしていたその場にレクターが連絡をしたオリヴァルト達が慌てた様子で駆け込んできた。

「シュバルツァーは……」

「申し訳ありません。殿下……」

言葉を濁すミュラー。ユリアはクローディアに向かって頭を下げる。

「リイン君……どうして……」

口を両手で覆い、クローディアはどこにいるかも分からないヴァリマールの姿を探す。

「リイン……」

ギリアスが静かに空を見上げ——その瞬間、空は紅く爆ぜ、クロスベルの上空に二つ目の太陽が現れて——消えた。

そして爆発の衝撃を示す重い轟音が光に遅れてクロスベルを震わせた。

・*

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

その少女は何処とも言えない場所で懺悔を繰り返す。

「ふむ……」

蛇は同じ場所ですらその結果を黙って観察する。

翠耀と蒼耀、〃風〃と〃水〃の力が荒れ狂う空の下で爆発の衝撃は木霊し——《鐘》が音もなく静かに震えたことに誰も気付かなかった。

90話 西ゼムリア通商会議V

「いったい何が起きてるんだろう?」

ユウナ・クロフォードは道を塞ぐバリケードの前でオルキスタワーを見上げていた。

街の中でも分かった二隻の飛行船による通商会議の襲撃。

それから程なくしてクロスベルの上空を覆った赤い光と轟音。

何が起きたのか、首脳たちは無事なのか。

その報道は未だに市井には公開されず、オルキスタワーは静かにそびえてそこにいた。

「ロイドさん達も警備に参加したって話だから大丈夫だと思うけど……」

オルキスタワーに入って行く彼らの背中を見送ったことを思い出し、そこに信頼を感じる一方でユウナは憤りを思い出す。

「だいたいクルト君はずるいのよ」

当然のようにロイド達と行動を共にしている帝国の少年を思い出してユウナは愚痴をこぼす。

自分と同じ年なのに、警察学校に通ってないのに、家出少年なのに、帝国人なのに、当たり前のようにロイド達から頼られている彼を思い出すたびにユウナはぐぬぬと悔しくなる。

ただの家出少年の時は一緒にいたクリスと共に仲良くできていたのだが、クルトが正式に特務支援課の一員となってからはユウナの方が一方的にクルトをライブル視するようになっていた。

「……………ロイドさん……………大丈夫ですよね……………」

百面相をしながらユウナは改めてオルキスタワーを見上げて彼らの——おまけでクルトの安否を祈る。

「おいつ! 何だあれは!?!」

そう叫んだのはオルキスタワーを背にバリケードの前に立つ警官だった。

「突っ込んでくるぞ!?!」

「え……………?」

ユウナが振り返ると同時に突風が吹き荒れる。

「あれは《灰の騎神》!?!」

一瞬見えた巨人にユウナは驚く。

帝国がデモンストレーションとして持ち込んだ巨大兵器。

その姿は《蒼》だったが、詳しい事情を知らないユウナを始めとしたクロスベルの市民にとっては人智を超えたその存在にまず《灰》を連想してしまう。

《騎神》はオルキスタワーの周りを螺旋を描くように猛スピードで飛翔し、駆け昇って行く。

「ミツケタ」

屋上まで辿り着き、《C》は呆然と立ち尽くす怨敵の姿を見つめる。

その瞬間、最後の籠が外れる。

「死ねよ。クソ野郎っ!」

そこに他の誰がいるのかも目に入らず、《C》はダブルセイバーに赤黒い闘気を纏わせて交差した剣閃が放たれる。

「殿下っ!」

「くっ——オリビエッ!」

突然の《蒼》の強襲にそれぞれの護衛官は主を守る様にその場に押し倒す。

「オッサンッ!」

「オズボーン宰相っ!」

立ち尽くすギリアスをレクターとトワが二人掛かりで押し倒し、《蒼》が放った剣閃は彼らの頭上を掠めて二隻の飛行船と起動を停止した《フェンリル》を薙ぎ払った。

起爆に時間が掛かる《フェンリル》は問題なかったが、飛行船の内部に仕掛けてあった爆薬がその衝撃によって爆発する。

「シユバルツァー以外にも騎神持ちはいると思ってたが……このタイミングで切るかよ」

可能性はあると考えていたが、例えば目立つジョーカーでもある。

躊躇わず切ってきた帝国解放戦線のなりふり構わない思い切りの良さに、これだから籠の外れた奴はと内心で罵る。

「だ、大丈夫ですかオズボーン宰相？」

「あ……ああ」

レクターとそして歳不相応な背丈のトワに助けられたギリアスは、らしくもなく呆然とトワの問い掛けに頷く。

「よかった……レクターさん！ 宰相閣下を連れて逃げてください！」

「逃げてっってお前——」

「ここは私が食い止めますからっ！」

立ち上がったトワはテロリストの襲撃に合わせて預けていた武器——魔導銃を構えて自分を睥睨する《蒼》にその銃口を向ける。

「リイン君みたいなきことはできないけど、私だって——」

勇敢にも真っ先に立ち向かうトワの身体は誰がどう見ても恐怖で震えている。

「そうかよ……お前はやっぱりそっち側かよ……」

《蒼》に——自分に銃口を向ける小さな少女の姿を《C》は冷めた視線で見下ろす。

奇襲から改めてその場を確認すればリインの姿も《灰》の姿もない。

さらに言えば、戦っただろう同志の姿もない。

命を賭けてリイン・シユバルツァーを排除してくれた彼の犠牲に報いるために、《C》はそれを振り払うようにダブルセイバーを振り上げる。

「だったらお前も——」

「あ……」

振り下ろされた巨大な凶刃にトワは立ち竦む。

「させんっ！」

ミユラーがその一撃を剛剣で逸らし、ダブルセイバーはトワの横を掠める。

「ひゃっ！」

「ここは私達が引き受ける！ 君も殿下達と共にタワーの中に逃げるんだ！」

「で、でも——」

「良いから行くんだっ！」

ミユラーを前にしてユリアがトワを下がらせようとする。

「行かせるかよっ！」

「ぐっ!？」

ミユラーが繰り出す猛攻を《蒼》は煩わしいと言わんばかりに弾き、タワーの中へと逃げ込もうとするギリアスに向けて《蒼》を走らせる。

「ちっ……だったら——」

しかし間に合わないと思った《C》は目の前のユリアを左腕で弾き、未だに前線から退こうとしなかったトワを掴み掲げる。

『逃げるなギリアス・オズボーンツ！ 逃げればこの女を殺すぞっ!』

「なっ!？」

「正気か!？」

殴られた身を起こしたユリアとミユラーは《C》の叫びに耳を疑った。

「貴様、女子供を人質に使うとは、帝国男児として恥ずかしくないのか!？」

『生憎だが、元々は帝国出身ではないのでね。既に煉獄に堕ちる覚悟などできている……貴様らもそこから動かないでもらおうか』

威嚇するように《蒼》は握り締めたトワを突きつけて、その手に力を込める。

「く……ああっ!」

全身を潰そうとする圧力にトワは悲鳴を上げ、そこで《蒼》は彼女を落とさない程度に力を緩める。

『さあ、どうする鉄血宰相？ お前が決めろ。この女を見殺しにするか、お前が命を差し出すかを』

《C》はトワをギリアス達に向けて選択を迫る。

「馬鹿馬鹿しい、一学生と宰相閣下の命を天秤に掛けるなど考えるまでもない」

「閣下、それに殿下も早く中へ。彼女も士官学院の一員です。誰を優先するべきか分かっているはずですよ」

帝国の将校は《C》の言葉を一考することなく切り捨てて、ギリア

スとオリヴァルトの安全を優先する。

「いや……それはダメだ」

オリヴァルトはそんな将校の働きを拒絶する。

善性であるオリヴァルトは、人質を取られて逃げられるほどに割り切ることはできなかった。

例え《C》の要求に自分が入っていないなかったとしても、この局面から尻尾を巻いて逃げることはできそうにない。

「ですが、ここは危険です！ あんな化物はリイン・シユバルツァーの《騎神》に任せるべきです」

「っ——」

将校の叫びにオリヴァルトは息を呑む。

「リイン君は……リイン君は……」

彼がヴァリマールで飛び立つ瞬間をオリヴァルトは見たわけじゃない。

だからまだその実感ができていないだけに、それを口にするのを躊躇ってしまう。

「殿下の言う通りですね。ここは私に任せていただきますよう」

「え………？」

「閣下!？」

「君たちはそこで待機していたまえ」

そう言って、ギリアスは軽やかな足取りで屋上へと舞い戻った。

『なっ………』

「さあ、要求通り来てやったぞ。まずはその少女を解放したまえ」

巨大な《蒼》の存在に物怖じすることなくギリアスはトワを放せと言いつ切る。

その堂々とした態度に、《C》の感情を示すように《蒼》はたじろぐ。

「どうした？ まさか本当に出てくるとは思っていなかったとも言うつもりか？」

『くっ………』

凶星を言い当てられて《C》は怯む。

悪逆非道な《鉄血宰相》ならまず間違いなく、一学生など見捨てて

我が身可愛さに逃げると思っていた。

そうしてくれれば大義名分を得たとして《C》は彼女を——そして彼女を見捨てた宰相を遠慮することなく殺せるはずだった。

なのにギリアスは《C》を始めとするそこにいる全ての人達が驚くほどに簡単に《蒼》の前に姿をさらした。

「ふ……《帝国解放戦線》の《C》か……」

騎神越しとはいえ、初めて顔を合わせるがどうやら思っていた以上に小物だったようだな」

『……何だと?』

失笑するギリアスに怯んでいた《C》の心に焰が宿る。

「事実であろう?」

理由を作らなければそのような婦女子一人も殺せない。どころか私を殺す千載一遇のチャンスだというのに棒立ちしている貴様をそう言わずに何と言えと?」

『ふ——つぎけんなっ!』

《C》は激昂と共にダブルセイバーを振り下ろす。

が、ダブルセイバーはギリアスから逸れてコンクリートを砕いて、石つぶてを彼に浴びせるだけに終わった。

「——つ……それが貴様の限界だ」

無数に浴びた石つぶてにギリアスは怯みもせず、目の前に迫った《蒼》を睨む。

「貴様は《騎神》という力を得た子供に過ぎん。騎神に選ばれ、世界に選ばれた特別な存在と浮かれ、自分の行いこそが正義と酔っているだけの子供だ」

『だまれ……』

「貴様の中には帝国のためだという大義などはない。私を選んだ理由も所詮取って付けたような理由に過ぎないのだろうか?」

『黙れっ……』

「その程度の心持ちでこの《鉄血宰相》の前に立とうなどとは十年早いわっ——」

『——っ』

ギリアスの一喝に《蒼》は今度こそ明確に一步後退った。

「あ……」

《蒼》の腕の中でトワは小さく呻き、《蒼》の顔を凝視する。

「もしかして……クロウ君？」

機械越しに変えられた声。それにテロリストのリーダーとして振る舞う口調は彼のものではない。

しかしそれでも、トワはその事実には直感だけで行きつき、確かめるように口にしていた。

それが聞こえたのは《蒼》越しの彼だけだったが、ギリアスに言葉攻めされた以上の反応を《蒼》の手の中でトワが感じて確信する。

「やっぱリクロ——ぐっ——」

『うるさい……うるさい……うるさいっ！』

テロリストのリーダーの顔を取り繕うのを忘れ、《蒼》の手に力を入れてトワの言葉を黙らせる。

彼女にそのままその名を口にされたら、これまで取り繕ってきたものが全て瓦解してしまう予感。

『俺は……オレは《帝国解放戦線》のリーダー。《C》だっ！』

これまで積み重ねてきたものを振り払うように《C》はトワを屋上の外へと投げ捨てた。

「なっ!？」

「何てことを……」

突然の暴挙にミユラーとユリアは絶句し剣を投げ捨て、トワを追い駆ける。

だが、追い付くことはできずトワは地上40階の空へと投げ出された。

「あっ——」

「っ……」

しかし、屋上の縁で足を止めてしまったミユラーとユリアの間をすり抜けてトワを追って飛び出した影が一つ。

「なっ!？」

トワを追って空に身を投げ出した存在にそこにいる誰もが目を

疑った。

「閣下!?!」

帝国の内外から畏れられていた《鉄血宰相》は臆することなくその身を投げ出した。

「どうしてっ!?!」

「黙っていたまえトワ・ハーシエル」

空中でトワの身体を捕まえたギリアスはその小さな体を抱える。

いかな超人でも物理法則に諍うことなどできず、二人はそのまま地上へと落ちる。

「どうして……私なんかを……」

「ふ……私は帝国を背負う者……帝国市民を見捨てることはありはしないさ」

そう建前を口にしながらギリアスは別の理由を考えていた。

——君もああしてリインを庇ったのだろうか……

誰よりも早く、自分を庇おうとした彼女の姿にギリアスは亡くした者の面影を見た。

そう感じてしまったのならギリアスにはトワを見捨てる選択肢はなくなっていた。

それにこの墜落もギリアスにとっては何の脅威にもならない。

「安心したまえ、当然私もこのようなところで死ぬことなどない」
「え……」

不思議そうに自分を見上げてくるトワにギリアスはいつもの不遜な笑みを作り、トワを小脇に抱えるようにして己の心臓に右腕を当てる。

「来るがいい——っ……!?!」

唐突に胸に走った痛みにギリアスは思わず呻く。

ギリアスの自業自得が招いたとはいえ、この窮地において拒否するような感覚。

「見放したか……いや……これは……」

繋がりを通して感じる《黒》の感情は拒絶ではない。何かに怯えるような恐怖。

前世を含め、あの哀れにも感じる傲慢な“存在”がそのような感情を見せたことなど一度もなかった。

「何故、今……？」

霊力の昂りを感じる、もう見えなくなった屋上では異様な霊力が高まっている。

だが、果たしてそれは《黒》が怯える程のものなのだろうかと困惑するギリアスの背後で——起動者にとって馴染み深く、滅多に見ることのない剥き出しの“核”が音もなく現れた。

・*

『くくく……はははは……はっはっはっはっはー！』

トワを投げ捨てた《C》は黒い陰の気を纏いながら笑っていた。

この二年で作り返してしまった余計なしがらみ。

思えば復讐を誓ったあの日から随分と余計な不純物が増えてしまったと振り返る。

『いらねえよ……俺には《蒼》とこの胸の中の《焰》だけあれば良かったんだ』

その不純物の最たるものを捨てた。

おかげで迷いがあった心を決める事が出来た。

それに伴い《C》の気に当てられてオルディーネにも変化が現れる。

装甲が開き、一時的に出力を向上させる形態とは違う、一本だった角が二本に増え、流線的なフォルムは禍々しいものへと変わる。

それは今の《C》の心境を表すかのような《修羅》——鬼の姿だった。

『それにしても……まさかあんたがこんな手で勝手に死んでくれるとはな』

もつともその力を使う機会がなくなったことがさらに笑いを誘う。

まさかあの血も涙もない怨敵が、何の関係もない少女のために身を投げ出すとは欠片も想像していなかった。

だが、肩透かしを喰らった気分だが、実に気分が良かった。

惜しむらくは彼が今どんな表情で地上までの最後の時間を過ごしているのか気になるところだったが、《C》はそれを確認するよりも《蒼》を振り返らせてその場にいる一同を睥睨する。

『この力は同志たちの仇討ちにでも使わせてもらおうとするか……どうやら派手に殺してくれたみたいだからな』

かつてスポンサーが語った《鉄血宰相》を殺した後の展望。

自身も同志たちも興味はなかったが、接待する気持ちで聞き流した『ゼムリア大陸統一計画』。

これまで支援してくれた礼としてせっかく得た力を振るつてやろうと衝動に突き動かされるまま、《C》はオリヴァルトやクロードイアに刃を向ける。

『……………ううっ……………その声は同志《C》か!?!』

『あん?』

何処からともなく聞こえて来た死んだはずの同志の声に《C》は周囲を見回す。

『その声は《G》か? まさか生きていたのか?』

『助けてくれっ! 暗くて狭くてここが何処か分からないが、私はここにいるぞ同志《C》!』

みつともなく喚き出した音源は屋上の一角に誰も見向きもせず放置されていたひしゃげたコックピット。

『まさかそれで生きているとはな。女神の——いやこれも悪魔の加護か』

一人でも生きていたことに《C》は安堵し、そのコックピットを《蒼》の左手で掴む。

『せめてもの情けだ。死ぬ順番くらいは選ばせてやるよ』

機嫌を良くした《C》は改めてオリヴァルト達に刃を向ける。

『何と身勝手に傲慢な……』

「オリビエ、今からでもクロードイア殿下を連れて逃げろ」

《C》の勝手な言い分にユリアとミユラーは憤りを感じるところか呆れる。

「はは、逃げろと言って何処へ逃げるんだい? 下手に逃げたらエレ

ベーターがボクたちの棺桶となってしまうよ」

「そうです。私も戦います」

ユリアとミユラーの進言を却下して、オリヴァルトとクローディアは勇ましく導力銃と剣を構える。

『くくく……勇ましいことだ』

「つ……貴方達は狂っています」

向けられた嘲笑にクローディアは屈するつもりはないと言わんばかりに睨み返す。

『ああ、そうだな。それがどうした？』

小人の批判など知ったことではないと言わんばかりに《蒼》はダブルセイバーを振り上げ——突然現れた“ソレ”の横撃を喰らった。

「……………え…………？」

「これは《騎神》…………」

くすんだ鋼色の装甲に光で構成される翼。

見たこともない。《灰》でも《緋》でもなければ、《銀》や《紫》、《黒》でもない新たな騎神の登場にオリヴァルト達は呆ける。

《蒼》を横撃して屋上から突き飛ばした《騎神》は振り返り、膝を着いて両手で守る様に抱えていたトワとギリアスを下ろす。

「宰相、それにトワ君も!? 無事だったのか!？」

「え、ええ……地上に叩きつけられる前にこの機体に助けられました」

ギリアスは二人の生還を喜ぶオリヴァルトに困惑しながら頷き、自分が知らない《騎神》を見上げた。

「何だ…………この機体は…………？」

胸に感じるのは恐怖。

《黒》を超える存在感を持つ、圧倒的な“格”を感じさせる存在。

一つ分かることはこの存在は人がどうこうできるものではない。

《黒》が怯えているのが何よりの証拠だろう。

「くくく……………」

「ははは……………」

ギリアスと同様に困惑するだけだったオリヴァルト達の背後で二つの笑い声上がる。

振り返るとこれまで懸命に《蒼》に向けて導力銃を撃っていたクロスベルの警備隊と警官が同じように腹を抱えて抑え切れないと言わんばかりに破顔していた。

「これだ……私が見たかったのはこれだ！ よもやこのようなものがこの世に誕生するとはっ！」

「はははっ！ その口調、話には聞いていたが貴方か！ 実に同感だ！ やはり君は最高の素材だ！ 超帝国人っ！」

二人の哄笑が響き、オリヴァルト達はさらに困惑する。

「貴方達はいったい……っ？」

「超帝国人……ってまさか……」

その事実に一筋の希望を持ってオリヴァルトは《騎神》に振り返る。だが《騎神》は何も応えずに浮き上がり、オリヴァルト達の前から残像を残して消えた。

「カルバード製の破壊力だけなら至宝に匹敵する『風』と『水』の導力爆弾……」

そして「人工の至宝が生まれる因果」を持つこのクロスベルの地」抑え切れないものを堪えるようにその警備隊員は叫ぶ。

「『風』と『水』が練成されることで誕生せし新たなる『巨イナル』っ！」

名付けるとするならば……そう『雲の至宝』っ！ 『雲の騎神』

アンヘル・ヴァリマルツ！」

「『巨イナル』だど……」

警備隊員の言葉にギリアスは絶句するが、同時に納得もする。

それだけあの《騎神》が持つ力は圧倒的だった。

「見ているか《黒》よ！ 《零の御子》よっ！ 《空の女神》よっ！！

これが、これこそが超帝国人リイン・シュバルツァーが紡ぎ出した『奇蹟』だっ！」

高らかに叫ぶ警備隊員の声が静かになったオルキスタワーの屋上に響き渡った。

・*

「くそっ！ いったい何が!？」

オルキスタワーの屋上から突き飛ばされた《C》は憤りを露わにして体勢を立て直す。

「がっ!？」

次の瞬間、《蒼》は見知らぬ《騎神》に頭を掴まれたかと思うとエルム湖に叩き込まれていた。

「何なんだっ!？」

苛立ちを募らせながら《蒼》は湖から飛び出して《C》は絶句する。正面に見えるのはクロスベルのテーマパークのシンボルである観覧車、背後には直前までいたはずのオルキスタワーが遙か遠くに見える。

体感にしてまだ十秒も経ってないはずなのに、一瞬で遠く離れたこの場所に引き吊られてきたことに困惑する。

「オルディーネの起動者よ」

「っ……」

目の前に立つ見知らぬ《騎神》が声を掛けてくる。

「悪いことは言わない。ここで退け。でなければ私の起動者が何をしでかすか分からない」

流暢な言葉で撤退を促す《騎神》に混乱していた《C》の思考は苛立ちと憤りに再び支配される。

「識別コード…… 《灰の騎神》……」

計器が示す目の前の存在の正体に《C》はその熱をさらに強くなる。「どこまでも俺の邪魔をしやがって……」

恨み言を漏らし、《蒼》はダブルセイバーを構える。

「お前が消えろっ!？」

計器が示す《騎神》の霊力はほとんどない。

下手をすれば量産している秘密兵器以下の力しかない見掛け倒しの《騎神》に《C》の苛立ちは加速する。

「……………警告はしたぞ」

そんな《蒼》の姿に《騎神》は憐憫を感じて黙り込む。

己の起動者と二人の準起動者はどちらも消耗が著しく、すぐにでも生命維持の機能を使わなければ危ない程に消耗している。

だが、それでもまだ意識をか細い糸として繋ぎ止めているのが、起動者である。

正直、ヴァリマールは自分の身に何が起きているのか少しも理解できていないのだが、この状態の起動者が最も危険だと言う事は身に染みて知っている。

「お……………オオオオオオッ！」

案の定、どこにまだそれだけの力が残っていたのか、起動者は雄叫びを上げて力を振り絞る。

そして何処からともなく《騎神》の前に二本の剣が現れる。

機械的な装甲で継ぎ接ぎされた武骨な剣は内部の欠片から漏れ出る「呪い」に染まり——《騎神》が触れたことで抑え込まれる。

鉄に覆われた二つの剣は内側から浸食するようにそれを染め上げる。

紅き焰の剣、黒き大地の剣。

その内の一つを起動者は投げ捨て、《焰の剣》を構える。

「うおおおおおおっ！ デッドリークロスッ！」

悪鬼と化した《蒼》が繰り出す十字の一撃。

「八葉一閃」

進化を遂げた《灰》が繰り出す八葉の一撃。

二つの力が交差し、その日クロスベル市民はエルム湖が二つに割れた姿を見る事となった。

・*

ほのかな計器の光が照らす「核」の中。

朦朧とする意識の中、自分が何をして、何と戦っていたのかも理解していないリインはただ衝動に任せるままに呟いた。

「……………たしかに守ったぞ……………キア……………」

それを最後にリイン・シユバルツァーは完全に意識を墮とすのだっ

た。

91話 西ゼムリア通商会議VI

「はあっ！」

敵の真つただ中にクルトが飛び込む。

導力を刃にした双剣が一閃、二閃して敵の連携をかき乱す。

「このっ！ ガキッ！」

「させるかっ！」

クルトの背中から斬りかかったテロリストの一撃をロイドが受け止める。

「テンペストエッジッ！」

攻撃を止めた一瞬でクルトはロイドと背中合わせに位置を入れ替えて双剣の乱舞を叩き込む。

「調子に乗るなっ！」

斬り伏せられた仲間と入れ替わるように新たなテロリストがクルトの双剣を大剣で受け止める。

「ロイドさんっ！」

「おおっ！」

阿吽の呼吸で、今度はロイドがクルトと位置を入れ替わりトンファーによる雷撃を伴った一撃が敵を昏倒させる。

「距離を取れっ！ 奴等を近付かせないように弾幕を張るんだ！」

近接戦闘では分が悪いとテロリストが声を上げる。

「はっ！ 遅え——っ！」

そのテロリストをランデイが大型のブレードライフルに装填した術式弾を撃ち込む。

着弾した弾丸はアーツのように導力魔法の起点となってピンポイントで術の効果を発生させ、テロリストの半身を氷で包みその動きを止める。

「何だあの化物みたいな獲物は!? 警察が持つ武器じゃないぞ！」

「それよりいったい何処から出て来た!? 隠し持てるような武器じゃ

ないのに!?!」

「言ってる場合か! こうなったら奥の手だ!」

テロリストが何かの端末を操作すると戦場にクラクションの音が鳴り響く。

「何だ!?!」

そこに撃ち込まれたミサイルにロイド達とテロリストは二分にするようにその場から跳び退く。

「ス、スマートミサイル!?!」

「クロスベル警備隊の装甲車がどうして!?!」

突然乱入して来た装甲車にノエルとエリィは驚きを露わにする。

「てめえら……どこで手に入れやがった!?!」

「はは、中々便利な協力者がいるものでな!」

「やれ! 奴等を轢き殺せっ!」

気分よくそう命じる声に伝えて、装甲車はロイド達に向かって猛スピードで発進する。

「皆さん、わたしの後ろに」

そう言っただけでティオが前に出ると導力杖を片手で構え、逆の手を突進してくる装甲車に向けて掲げる。

「《エイオンシステム》解放します。異層空間にアクセス。絶対障壁個別展開。ゼロ・フィールド!」

防御結界が突進を受け止めて抑え込み、ティオはそのまま結界越しに装甲車に触れる。

「アクセス………コントロールを奪い返しました」

「……へ?」

防御結界を破ろうとそのアクセルを吹かしていた装甲車は突然停まったかと思うと、上部に設置されている回転砲塔がぐるりと回ってその銃口をテロリストたちに向ける。

勝ち誇っていたテロリスト達は間の抜けた声をもらし次の瞬間、彼らの眼前に威嚇するようにガトリングの弾丸が掃射される。

「な……な………いたいどうなっているんだ!?!」

「撤退だ! これ以上こいつらに構ってられるか!?!」

そう叫んでテロリスト達は閃光弾を取り出して投げつける。

「くっ——」

閃光から目を守り身動きを止めるロイド達に背を向けてテロリスト達は最後の疾走と言わんばかりに全力でその場から離脱する。

「はい。残念」

ロイド達から離れて伏兵として身を隠していたワジがビリヤード球を投げてその出鼻をくじく。

「くっまでだな」

倒れたテロリスト達にロイドはトンファーを突きつけて宣言する。

「テロ活動、破壊工作の現行犯及び要人暗殺、大量虐殺未遂などの容疑であなただちを逮捕する！」

「くっ……」

「女子供ばかりの警察と油断さえしなければ」

「たかが自治州の警察ごときが我らの大義を邪魔するか！」

膝を着くテロリスト達は口々に不平不満を漏らし、ロイド達を罵る。

「ふ、ふぎけないで！ 貴方達こそ、どれだけの人を巻き込むつもりだったの!？」

「やれやれ、いるんだよね。大義名分と自分に酔っちゃって周りが見えなくなる連中って」

テロリストのあまりに身勝手な物言いにノエルは激昂して、ワジは呆れて肩を竦める。

「くっ、黙れ！」

「誇りを忘れて空しき繁栄を貪るだけの愚民どもがっ！」

「っ……」

「反省する気、ゼロみたいですわね」

「我々として無関係の者を巻き込むのは本意ではない。だが、これ以上あの親子を放置すれば帝国は滅茶苦茶になってしまう」

「あの親子……?」

あまりに身勝手な言葉だが、ロイドはその言葉を思わず聞き返していた。

「ギリアス・オズボーンとリイン・シユバルツアーの二人の事だ！

奴等を野放しにしておけば、事はゼムリア大陸全てを巻き込むことになる」

「なっ……!? オズボーン宰相とリインさんが親子……?」

テロリストがもたらしたその事実二人の事を知っているクルトが絶句する。

「おいおい、適当な情報で混乱させようたってそうはいかないぜ」

「ふん……これはある筋からの確定情報だ……」

奴等親子は皇族にうまく取り入って、帝国を乗っ取るつもりなのだろう……

「どうだ今からでも遅くない。我々と手を組まないか？ 奴等さえいなくなればクロスベルを独立させることも夢ではないぞ」

武力では敵わないと思いついたテロリストは懐柔と言う方法でその場から乗り切ろうと試みる。

「……………」

その提案にロイドは即答を返すことができなかった。

もちろん、クロスベルを独立させることを考えての事ではない。

リインの昨夜の不審な行動。

帝国政府と契約を結んでいる《赤い星座》との接触が意味することは何なのか。

リインがオリヴァルトと同じようにクロスベルの味方だというのなら、何故事情を予め説明してくれないのか。

様々な疑問がロイドの口を重くする。

「ロイド……?」

「大丈夫だ……貴方達の事情は署でゆっくり聞く。とにかく今は――」

「それ以上近付くな！」

手錠を掛けようと近付いたロイドを制するようにテロリスト達は一様にそれを掲げて威嚇する。

「戦術オーブメント……この期に及んでまだ抵抗するんですか？」

「往生際が悪いね」

「くくく、何とでも言え……」

すでに駆動は完了している。後は意志一つでこの自爆術がこの周囲を吹き飛ばすぞー！」

「なっ!?!」

「正気か!?!」

自身の命を盾にした脅迫にロイド達は絶句する。

「自爆アーツ……昔規制された導力魔法を何故……なんてテロリストに言っても意味ないか」

「お前達は自分の命を何だと思っっているんだ!?!」

「元より『捨石』になる覚悟はできている！ さあ、命が惜しければそこをどけっ!」

「くっ……」

迫られた選択にロイドは逡巡する。

テロリストを見逃すことは論外。だが十人近くのテロリスト達を駆動を完了させている導力魔法を発動させない一瞬で制圧する手立てはロイド達にはない。

しかし、答えは別の所から――

「――撃て」

横からの銃弾の雨がテロリスト達の末路だった。

無数の弾丸は容赦なく彼らを引き裂き、戦術オーブメントを砕き、一片の慈悲もなく彼らを蹂躪する。

「あ……」

瞬く間の一瞬で作り出された凄惨な光景に一同は呆然と立ち尽す。

「やめろ」

鳴り止まない銃声の中にも関わらず、聞こえてきた言葉で機銃の掃射はピタリと止まる。

ロイド達の前には一瞬前まで人だった者達が無数の銃弾に穿たれ絶命した姿で転がっていた。

「途中までは良かったが、テロリストなどの言葉に耳を貸してしまったことは減点だな」

そう言いながら、その戦場の跡に悠然とした足取りで踏み込んで来たのは隻眼の大男だった。

「シグムント・オルランド……」

「——叔父貴イイツー！」

呆然とするロイド達だったが、誰よりも早く立ち直ったランディが絶叫してシグムントの胸倉を掴んだ。

その声に反応してエリイとワジは吐き気を堪えて目の前の死体を確認する。

「だ……駄目……」

「どうやら全員、事切れてるみたいだ」

しかし一人として生存者がいないことに項垂れる。

「……………っ……………」

「くっ……………」

ひどい光景にテイオは口を押えて目を逸らし、ノエルはこの惨状を作り出した彼らを睨む。

「……何なんだアンタたちは……なんでこんな非道なことを！」

憤りを隠せずロイドはシグムントに向かって吠える。

だが、若者のそんな激情をシグムントは興味ないと言わんばかりに受け流して律儀に答える。

「言っただろう、ビジネスだと……」

帝国宰相、および皇族を狙った不屈きなテロリストを処刑する……

それが今回、帝国政府から俺達《赤い星座》が請けた依頼ってわけだ」

「帝国政府からの委任状もちゃんとあるよ」

これがあればシャーリイたちに手出しはできないんだよね」

シグムントの言葉を補足するように彼に付き従って来たシャーリイが楽しそうに答える。

「だからと言ってこんな一方的な虐殺が許されるなんて……」

「自治州法第19条3項……」

帝国、共和国政府によるクロスベルでの公的執行権はこれを認めるものとする」

反論するしようとするクルトを諫めるようにエリイがその委任状の意味を説明する。

「クク、その通りだ。つまりこの件に関しては俺達は帝国政府の代理——正式な処刑人ってわけだ」

「くっ……」

「用意周到じゃないか……」

大義名分を掲げるシグムントにロイドとワジは拳を意味もなく握りしめる。

だが、そこで我慢の限界を迎えたランディはシグムントに掴みかかり、激情を叩きつける。

「だからって……何で殺した！ 何で殺しやがったんだ!？」

あのタイミングなら……アンタなら殺さずに無力化できただろうが!?! なのにどうしてっ!?!」

そんなランディにシグムントは呆れたように肩を竦ませ、次の瞬間ランディをその野太い腕で殴り飛ばしていた。

「がっ——!?!」

「言っただろう。『処刑』を請け負ったと。それにこの程度の殲滅戦、貴様には珍しくもあるまい?」

「……………ッ……………」

すぐに身を起こしてシグムントを睨むランディだったが、その言葉に思わず目を逸らす。

「何より死を畏れぬ『死兵』だ……」

自爆術を仕込んでいた奴等が他に何の準備をしていないとでも? 確実に無力化するのなら殺すことが一番だと言う事はお前も分かっているはずだ」

「ぐっ……………」

「報酬で人を殺すことさえ請け負う。それが猟兵の在り方だ。まさかそれさえも貴様は忘れてしまったと言うのか?」

「それは……………」

それが猟兵だと言われてしまえば反論のしようはない。

例え、どれだけの力差があっても依頼人が殺せと命じれば女子供さ

え殺し、殺すなど言われれば己の感情がどうであつても依頼人に従うのが猟兵の在り方。

そこに私情を挟むようなことをしないということは、ランディが一番よく知っていた。

「そもそも、貴様らが奴等の時間稼ぎに付き合つて戦術オーブメントの駆動を見逃したのがそもそもその原因だ……」

俺達を罵るよりもまず自分達の無能さを反省するんだな」

「どうやら最初から見られていたみたいだね」

シグムントの言葉にワジはしてやられたと肩を竦める。

「ふん……それにこいつらがしでかしたことを思えばこの程度生温い……」

ましてや地下の警備をおざなりにし、俺達をここまで素通りさせてしまった貴様たちに責められる謂れなどない……」

俺達が帝国政府の代行ではなく、テロリスト側に着いていたらどうするつもりだった？」

暗にここでこうなつていたのはロイド達の可能性があつたと示唆され、遅まきながらその可能性に気が付く。

「むしろ感謝してもらいたいものだな……」

ここまで貴様たちがこいつらを捕まえるのを待っていてやったのだから。もしも取り逃がしていたらせつかく上げた特務支援課の評判もどうなつていたことか」

「……………ッ……………」

「ついでだ。これは貴様らにくれてやる」

そう言つてシグムントは分厚いファイルをロイドに向けて投げた。

「……………これは？」

「リイン・シユバルツァーが一晚で調べた。この一ヶ月の間にオルキスタワーに運び込まれた用途不明のコンテナを記したファイルだ……」

良かったな。運び込まれていたのは人形兵器だけで爆発物がなくて」

「なっ——!?!」

思わぬところで出て来た名前にクルトが絶句する。

「リイン君が貴方たちの虐殺を容認したと言うのか？」

「ああ、それとなく確認を取ったが黙認したな……」

「まあクロスベル消滅の危機を前にすれば当然の判断だろう」

「クロスベル消滅……？」

聞き捨てならない言葉にロイドはオウム返しに聞き返す――

その瞬間、ジオフロントを震わせる地響きがロイド達を襲った。

「何!? 地震!?!」

「かなりの大きさです。皆さん注意してください!」

クロスベルでは珍しい地震にエリイが驚き、クルトは一同に注意を促す。

「くっ……」

突然の地震に困惑し、揺れに対抗するように膝を着いてその場に堪えるロイド達に対してシグムントを始めとする《赤い星座》はまるで知っていたと言わんばかりに動じた様子はなかった。

「どうやらリインの方はうまくやってみたんだな」

「っ……それはどういう意味だ!?!」

お前達は――帝国はこのクロスベルで何をしようとしているんだっ!?!」

「フフ、それくらい自分で考えろ」

激昂と共にロイドが問い質すが、突き放すように応えろとシグムントは振り返って号令を出す。

「引き上げるぞ! 報酬も入ることだし、今夜はパーツと行くか」

「了解!」

シグムントの言葉に一糸乱れぬ返事が返る。

「それじゃ、まったね〜!」

無邪気に手を振って、未だに余震を警戒して及び腰になっているロイド達にシャーリー達は背を向けて歩き出した。

・*
・*

8月31日、18:00——オルキスタワー35階会議室。

「そうか……分かった。こちらはもう安全だ。安心してくれたまえ」
データーはエニグマから伝えられたダドリーからの連絡を切つて、ため息を吐く。

「テロリスト達の方は？」

黙り込んでしまったデーターを急かす様にマグダエルが尋ねる。
「共和国の二団は《黒月》という貿易会社の社員に囚われたそうです。何でも共和国政府の逮捕状を持っているとの事でした」

「おお、それは重畳！ 彼らは我々の友人でしてな。身分は保証しますから御安心を」

データーの報告にロックスミスが得意気になってその功績を自慢するが、会議室に満ちた雰囲気を払拭することにはならなかった。
「そして帝国からの二団は……帝国政府による委任状の下に《赤い星座》なる猟兵団に全員処刑されたそうです」

共和国側の報告以上に物騒な報告だったが、それに難色を示す者はいなかった。
唯一、それでも勢いはないもののオリヴァルトがギリアスを咎める。

「宰相。いったいどういうつもりか？ 帝国政府が処刑などの名目で国外で猟兵団を運用するとは」

「ええ、確実を期すために。私はともかく皇子殿下を狙った罪は万死に値すると言わざる得ません……」

先月の夏至祭での彼らの蛮行を考えれば当然の用意と言えるでしょう」

「くっ……」

引き合いに出された事件のことを思えばオリヴァルトは口を噤むことしかできなかつた。

「確かに自治州法では認めざるを得ませんが……」

「だが、これはあまりに——あまりに信義にもとるやり方ではありませんか!？」

「御言葉ですが皆さん。テロリスト達の凶悪さは身を持って体験され

たはずでは？

人命を尊ぶ考えは素晴らしいが、リイン・シユバルツアーがいなければこのクロスベルが消滅していたか、私達はこのオルキスタワーと共に瓦礫に埋もれていたことも考慮してもらいたいものですね」

「それは……」

「むう……」

ギリアスの言葉に難色を示したイアンとマグダエルに言葉を呑み込む。

空を赤く染め、二つ目の太陽と思えるほどの爆発を知らしめた導力爆弾。

そしてその直後に、街の警備隊を鎧袖一触にして強襲した《蒼の騎神》。

その脅威はギリアスが言う様に十分に理解できた。

「しかし、それらはともかくまさか逃げたテロリストさえ自力で捕縛できなかったというのには些か買い被っていたようですね」

「そうですねあ……凶らずとも証明されてしまいましたな？

この程度のアクシデントですらクロスベル自治州には自力解決できない事が」

ギリアスの言葉にロックスミスが示し合わせたかのように頷く。

「ふむ、まんまとテロリストを会議の場に近づけた挙句……

無様に取り逃がし、結局は我々の配慮によって逃亡を阻止できたわけか。確かに、先程の議案の良い事例と言えるであろうな」

「ええ、失礼ながら実際に命を狙われた皆様方にとって……

先程の駐留案、もはや真剣に検討せざるを得ないではありませんか？」

「宰相……貴方は——」

「帝都で襲撃したテロリストについて特に情報規制を敷いておりません……

奴等の襲撃を予見できなかったのはクロスベル側の怠慢としか評価できませんね」

行き過ぎた言い掛かりにオリヴァルトが諫めようとするが、ギリア

スはそれを制するように主張する。

「それに聞けばタワーのシステムを奪い返したのはクロスベルに所属している技術者ではなかったようですか？」

それに加え、遊撃士を除外すればテロリストを追って地下へ向かったのは本来ここを警備する者達ではなかった特務支援課と警察官が一人だけ……

「これでは人員の質も量も到底満たしているとは言えないでしょう」「くっ……」

クロスベルにとって痛いところを指摘され、今度こそオリヴァルトは反論を封じられる。

「教団事件に続き、今回のテロリストの襲撃、よもや次も我が国の英雄の助けを当てにしていると言うのなら相応の立ち位置を決めて頂きたいものですな」

そしてリインが挙げた功績を示してギリアスは言い切る。

「あ、あなた方は……」

「……なんと強引な……」

「ここまで悪辣な、それもリイン君の功績まで利用するのか……」

この場を支配するギリアスの言葉にそれぞれの首脳は口を挟むことはできなかつた。

が、それまで黙り込んでいたディーターは余裕の笑みを作り口を開く。

「宰相閣下と大統領閣下の御意見も拝聴に値しますが……ならばこちらからも一つ言わせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「ほう……」

「うむ……今回の襲撃に関してクロスベル市長の意見は是非ともお聞かせ願いたい」

まさか言い返して来ると思わなかつただけにギリアスとロックスミスは興味深そうに頷く。

「クロスベルの治安維持能力に疑問があると仰っておりますが……」

それぞれの国であれ程のテロリスト達を野放しにしている両国が誇る戦力とやらが果たしてどれ程役に立つのでしょうか？」

「これはこれは中々痛い所を突く」

「確かに今回の事件は早期にテロリスト達を国内で鎮圧できていない私たちの落ち度でもありますな」

「データー君……」

主張を納める切っ掛けを作り出したデーターの指摘にマグダエルは安堵の息を吐く。

「今回の件についてはクロスベル自治州だけに関わらず、帝国と共和国にとっても想定外過ぎる出来事が多かったと思います……」

共和国で開発された導力爆弾について、先程襲撃され一時的とは言え列車砲の制御をテロリストに奪われてしまったことについて……

それに先程少し話題になった特務支援課のリーダーから興味深い話を聞きました」

「興味深い話？」

強引な話題の転換にアルバートが乗る。

「ええ、テロリストが言っていた言葉だそうですが……」

ライン・シユバルツアールとオズボーン宰相閣下、貴方達が親子の間柄にあると」

「なっ!？」

「なんとっ!？」

「っ——」

「それは本当なのか宰相っ!？」

データーの口からもたらされたその真実に各首脳たちは一様に驚いてみせる。

その中でも予め本人からその可能性を聞かされていたクロードイアは動揺が少なく、逆にオリヴァルトは信じられないと言わんばかりにギリアスに詰め寄る。

「フフ……テロリストの情報網とやらも侮れないものですね……」

ええ、私にはかつてラインという息子がいたことは認めましょう」
ギリアスの認めた言葉に一同の中に先程まで感じていたラインへの感謝の気持ち揺らぐ。

「あえて言わせてもらおうとすれば、吹雪の雪山に彼を捨てた時から私

と彼はもはや無関係な他人ですよ」

その言葉を簡単に信じるには彼のこれまでの実績が邪魔をする。それこそ、ここに至るため息子をあえて捨てたと言われても納得してしまうのがこの怪物である。

「しかし惜しいことをしたと思っと思っていますよ……」

まさかあの呪われた「忌み子」がここまで使えるようになるとは完全に想定外でしたよ」

「貴方は——っ」

オリヴァルトが激昂しかけた瞬間、彼よりも早くクローディアがギリアスの前に出てその頬を張った。

「なっ——」

クローディアの国際問題になりかねない暴挙を見過ごしてしまったユリアは会議室に大きく響いたその音に絶句した。

「貴方は……貴方はリイン君のことを何だと思っっているんですか!？」

それまでのお淑やかな姫のイメージを払拭するかのような激怒の迫力に頬を張られたギリアスよりも各国の首脳陣たちの方が気押される。

「ふむ……クローディア王太女殿下。貴女は——」

「おっと宰相。それ以上の言葉はボクが許さない」

何かを言いかけたギリアスの言葉をオリヴァルトが遮る。

「君達親子の間に何があったのか、ボク達が口を挟むことではないのだらうけど……」

ボクもクローディア殿下も彼のことは掛け替えのない友人だと思っっている。そんな彼を貶めるような発言は慎んでもらおうか」

「……ふふ、確かに少々話し過ぎたようですね」

物怖じせずに見つめて来るクローディアとオリヴァルトにギリアスは何を考えているのか分からない笑みを浮かべたかと思うと踵を返した。

「申し訳ない。私も少々混乱していたようですね。この場に出す話題ではありませんでしたね」

そんな騒動になった話題の種を撒いてしまったデイーターが謝罪

する。

「議論が脱線してしまいました。それよりも襲撃によって邪魔された私の発言を再開させていただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

強引な話題転換、リインとギリアスの親子関係の話題から逸れるならとデーターの発言に各首脳は頷く。

「……して、どのような提議を？」

「いえ——提議ではなく決意表明というべきでしょうか。迷いもあつたのですがこの事件で決意は固まりました……」

今、この場をお借りして一つの提唱をさせていただきます」

データーは拳を握り締め、叫ぶように話す。

「我々はもはや、他国の思惑に振り回されるわけにはいきません……周辺地域の、いや大陸全土の恒久的な平和と発展のためにも——」

私はここに、市民及び大陸諸国に対して『クロスベルの国家独立』を提唱します！」

余談だが、この後クロスベルの市街ではリイン・シユバルツァーがギリアス・オズボーンの実子であるという噂が何処からともなく流布し、通商会議での活躍は全てやらせだったのではないかとまことしやかに囁かれることとなった。

92話 九月開始

九月――

ガレリア要塞での特別実習と西ゼムリア通商会議から一週間の時が過ぎようとしていた。

二つの現場を襲い《列車砲》を発射しようとし、さらには《騎神》での強襲もあり帝国解放戦線はもはや“単なる革命家気取り”の集団ではないことは明らかだった。

特に《紫の騎神》に襲撃されたガレリア要塞の被害は甚大だった。常駐している第五機甲師団と軍事演習に赴いていた第四機甲師団は共に壊滅的な被害を受け、現在はその復旧作業が進められている。

また今回のテロ事件によって多くの軍関係者に死傷者が出たことで帝都では合同葬儀が行われることとなり、改めてテロの被害を市民は実感することとなる。

そしてその影響は事件の渦中に巻き込まれたトールズ士官学院の一年生の中でも未だに消化し切れていなかった。

「――以上を持ちまして本年度・前期課程における運営報告を終わります」

トールズ士官学院の会議室において行われている理事会、ヴァンダイクはその言葉を持って自分の報告を締めくくる。

「なるほど……他の士官学校や高等学校と比べても学力・成績に関しては上回っている」

「二年生も負けていませんね。生徒会長を務める女子など成績以外の活動も目覚ましい」

一通りの報告を聞いてリーグニッツとルーファスはその結果に満足そうに頷く。

「フフ、先日の通商会議では勉強も兼ねて随行団に参加していたが本職の書記官顔負けの働きだったそうだ……」

まあ通商会議そのものはあんな幕切れに終わってしまったが」

そんな二人に同意するようにオリヴァルトは頷き、付け加えた言葉に肩を竦める。

「そうですね……私共のグループも株価が乱高下してしまいましたし」

「帝国経済にとっても由々しき問題でありますね」

企業人としての意見をイリーナが述べ、リーグニッツは困ったように顔をしかめる。

そこで奇妙な沈黙が訪れる。

「……ヴァンダイク学院長、前期の運営報告は了解した……」

では、先日のガレリア要塞の実習以後の生徒達の様子はどうでしょう？」

常任理事の三人が言及しなかった話題にオリヴァルトが切り込む。

「それについては良い報告と悪い報告の両方があります」

「では良い報告から聞かせてもらえますか」

迷わずオリヴァルトは良い報告を求めらる。

そんな即答にヴァンダイクは苦笑を浮かべて答えた。

「今回の事件を経て、どうやら貴族生徒と平民生徒の仲が多少緩和したようです」

「ほう……つまり危機的状況を手に手を取り合って乗り越えたことで友情が芽生えたということかな？」

「その切っ掛けとなったのはどうやらⅦ組の生徒達の様子……」

ガレリア要塞に放たれた人形兵器の残敵の掃討を始め、負傷者の救助など彼らが貴族生徒と平民生徒を分け隔てなく接して指示を出してくれたことが功を奏したようです」

「ふむ……そうになるとオリヴァルト皇子の試みは成功と言えるでしょうか」

「流石オリヴァルト皇子です」

「ははは、今回のことは偶々さ」

自分を持ち上げてくるリーグニッツとルーファスにオリヴァルトは笑みを返す。

「それで悪い報告と言うのは？」

「やはり本物の戦場を経験したことによる動揺が大きいようですね」
本物の戦場、そして多くの人の死はまだ子供と言える生徒達にとつて良くも悪くも衝撃的だった。

「特に父親を亡くしたエリオット・クレイグ君……」

そして生徒達の中で唯一の死亡者であるクロウ・アームブラスト君は学年を問わずに交流が広がったため、実習に参加しなかった二年生にもその動揺は広がっています」

「そうか……」

ヴァンダイクの悪い報告にオリヴァルトは目を伏せる。

「《紫の騎神》……ルトガー・クラウゼルか……」

今回の襲撃の主犯格は帝国解放戦線だが、主な被害はむしろ《紫の騎神》によるものの方が大きい。

オリヴァルトはその場に居合わせなかったが、その騎神と起動者には《影の国》で一度顔を合わせているだけにその力は良く分かってる。

「ルトガー・クラウゼルと言えば『獵兵王』の異名でその道では有名な人物だったはず……」

私でも名前を知っていましたが、少し前に亡くなり『西風の旅団』は解散したと聞き及んでいます」

「死んだという噂などいくらでも偽装できるでしょう……」

問題はⅦ組にはその『獵兵王』の娘が在籍していることではないでしょうか？」

「ルーファス卿？」

レーグニッツの言葉に被せるようにそんなことを言い出したルーファスにオリヴァルトは顔をしかめる。

「今回の襲撃、どうやら内部に手引きした者がいると考えるのが妥当でしょう……」

彼女がそうだとは言いませんが、不特定多数の平民を入学させてしまうことは今後控えた方がよろしいのではないのでしょうか？」

「しかしドライケルス大帝は身分に囚われない自由な士官学校を設立することに拘っていたとも聞いている……」

今では女子の入学さえ認められ、平民生徒の数は貴族生徒を大幅に上回っているのが現状です……

ようやく大帝の真の理念を実現できる状況だと言うのにルーファス卿は時代を逆行させるおつもりか？」

「レーグニッツ知事……」

今はテロリストの目と耳を封じることこそが重要でしょう……

現にテロリスト達は《ARCU S》の技術を盗み、加えてクリス・レンハイム君の正体を知っていた。一度生徒達の身元を洗う事は必要なはずです」

「つ……そのことについてイリーナ会長の見解はいかがなものでしょうか？」

不利を悟ったレーグニッツはイリーナに話題を振る。

「既に必要な資料は憲兵隊に提出しておりますが……」

《ARCU S》の運用は去年から多くのスタッフが関わっているので流出経路の特定は難しいでしょう……

とは言え、使われた戦術リンクが本当に《ARCU S》のシステムによるものなのか、それとも出来の悪い模造品だったのかは実物がなければ判断することは難しいでしょう」

「イリーナ殿もこう仰っておられます、ならば私達は私達ができる範囲でテロリストへの対策をすべきでしょう」

「そこまでにしておきたまえルーファス君……」

君の意見も一理あるが、学院の理事が真っ先に生徒を疑うのはあまり感心しないよ」

「おっと、それは失礼。どうやら柄にもなく焦っていたようです」

オリヴァルトに窘められ、ルーファスはそれまでの強気な態度を改める。

そんなルーファスの態度にオリヴァルトは肩を竦める。

「仮にルーファス君の考えが正しかったとしても、今学院でスパイ探しをしてしまえば生徒達を疑心暗鬼にさせて最悪は魔女狩りに発展してしまうだろう……」

せつかく苦難を乗り越えて歩み寄れた彼らにそれをさせるのは忍

びない……

テロ対策については憲兵隊に任せるとして、私達はあくまでも生徒達のケアに務めようじゃないか」

「しかし、今後テロリスト達が直接リイン君やクリス君を狙って来るかもしれないが？」

「それについて実は先に話しておかなければならないことがあるんだ」

そうやってオリヴァルトはヴァンダイクに目配せをする。

「先日のノーザンブリアでの《特別実習》からシユバルツアー君から休学届けが提出されました……

理由はノーザンブリアにおいて《D::G教団》の実験体にされていた赤子を引き取ったことでの育児とのことです」

「それは……」

「ふむ……」

学生が休学する理由としては意外なものが出て来たとルーファスとレーグニッツは目を丸くする。

「まだ学生なのに随分と軽率なことをしたのね……

育てる環境もないというのならそもそも引き取らなければ良いのに」

「イリーナ会長は手厳しいね。だが少々複雑な事情を持つ赤子でね……

ノーザンブリアに任せると迫害を受けるかもしれないのでリイン君が保護したのだよ」

対外的な理由を述べるとイリーナは興味がなかったのか、それ以上の追究はしなかった。

「まあ、そういう事もあってリイン君はケジメとして退学さえ視野に入れているそうなのだが、私としてはこのまま学院に通ってもらいたいと思っっているのだが、あなた方の意見を聞かせていただけないかな？」

「構わないのではないかしら？」

不純異性交遊だったなら問答無用でそうしても良かったかもしれ

ないですが、相応の事情があり、本人が考えての選択なら私たちが口を挟むことではないでしょう……

それにラインフォルトとしましても軍から対騎神兵器の開発を求められているのでシュミット博士にはそろそろ戻っていただきたいですから」

そう言つてイリーナはこれまでの半年に渡るシュミットの行動を思い出してため息を吐く。

彼は正式にラインフォルトの人間と言うわけではないが、技術開発と言う契約をルーレ工科大学と交わしているのでその関係は深い。

対騎神兵器についてはラインフォルトの技術者だけでは力不足と見ているイリーナにとってラインの提案は渡りに船とも言える。

「私としてもイリーナ君の休学については賛成です……」

というのも七月には一度断りましたが、テロリストや猟兵が所有する騎神に対抗するためにイリーナ君を憲兵隊の任務に参加してもらおうという『要請』をオズボーン宰相から提案されています」

「それはあまりにもイリーナ君に対して無体ではないでしょうか？」

彼は帝国、ノーザンブリア、そしてクロスベルと立て続けに英雄的な行動を行ってきました。賞賛こそしても、ここでイリーナ君の休学を認めれば、余計な邪推の矛先は我が校にも向かってくるかもしれないでしょう」

肯定的なイリーナとレーグニッツに対してルーファスは別の意見を述べる。

味方を得たことにオリヴァルトは安堵し、口を開く。

「ルーファス君が言った通り、イリーナ君は度重なるテロと異変に対し誰も成し得ないことを行って来た……」

そもそもの発端が私たちが用意した『特別実習』による事であり、イリーナ君はそれに私たちの予想を遥かに上回る結果で答えてくれた結果だとするのなら、私達にも責任の一端はあると言えるだろう……

そもそも君たちは迫害されるだろう赤子を放置したと報告されたら、どうイリーナ君を評価していたのだろうね？」

「それは……」

「……………」

もしもの話をされてしまえばリーグニッツとイリーナは口を噤む。それぞれ大きな立場の人間だが、だからと言って赤子を見捨てると言える程に人でなしと言うわけではない。

「しかし理事長。何の案もなくリイン君を特別扱いするのは私達はともかく他の生徒達が納得しないでしょう。それについてはどうお考えで？」

「その事なのだが——」

「失礼します」

それに答えようとしたところで会議室に一人の生徒が入って来た。

「おやトワ君、ナイスタイミング」

「そうですね……あのこれが頼まれていたものです」

朗らかに出迎えるオリヴァルトに対してトワは列席している学院の重鎮たちに恐縮した様子で頼まれたリストをオリヴァルトに渡す。

「理事長。それは？」

「実は生徒会長のトワ君に学生たちの署名を頼んだのだよ……」

ナユタ・シユバルツァー君を第三学生寮で育てることを認める、並びにリイン君が学院に残留することを願う生徒達のね」

ヴァンダイクの問い掛けに答えながらオリヴァルトは渡された署名のリストを素早く確認する。

「おや……この量はもしかして？」

「はい。全校生徒、みんなに署名を貰えました」

何処か誇らしげにトワはオリヴァルトの眩きに答える。

「それはそれは……てつきり貴族生徒は渋ると思っていたのだが」

「ええ、ですがクリス君やラウラさん、それにアンちゃ——アンゼリカさんが率先して説得してくれました……」

それにノイちゃんやリンちゃんの前例もありますし、何よりリンちゃんには生徒会の仕事だけじゃなくいろんな生徒、それに教官たちも悩みを解決してもらってましたから」

「はは、なるほど……確かにすでにリン君達が学院に馴染んでいるのだから今更な話だったか」

「では理事長？」

促すように声を掛けてくるヴァンダイクにオリヴァルトは頷いて常任理事の三人に向き直る。

「どうかね？ 生徒全員がナユタ君とリイン君を受け入れている……問題が起きたのなら、またこうして会議をすれば良いと思うのだがひとまずは私の顔を立てるということでリイン君の学院の残留を認めてもらえないかな？」

「良いでしょう。反対意見が上がらないと言うのならとりあえず様子見と言う事で」

「ですが、今後憲兵隊の任務を『要請』することがあるかもしれません。それが、それについてはどうお考えですか？」

「それにこのまま彼が学院に残るとなると、彼の故郷であるユミルにも警戒が必要ではないでしょうか？」

リイン君は二度に渡り、テロリスト達の暴挙を防いでいます。それを逆恨みしてユミルを襲わないという保障もないでしょうか？

リイン君に学業を全うしてもらいたいのならそちらの警備も強めておくべきでしょう」

イリーナは認めてくれたものの、リーグニッツは憲兵隊の要請のことで渋り、ルーファスは万が一を想定しリインが休学しない場合の懸念を提案する。

「うん……そのことについて先程のリイン君とクリス君の護衛について被ることもあるのだが……」

実は宰相閣下にこんな提案をされたのだよ」

そう言っただけでオリヴァルトはため息を吐く。

「ユミルに関してはノーザンブリアからかつて『北の猟兵』だった者達を数名警備としてユミルに派遣してもらおうように宰相閣下が直々に交渉するらしい……」

そして二人の護衛に関しては先月に続いてもう一人Ⅶ組に生徒を一人編入させてみないかと提案されたのだよ」

そう言っただけでオリヴァルトはトワに頼んで、その編入生の資料を配る。

「シャーリイ・オルランド……」

通商会議の際、宰相閣下が《帝国解放戦線》を警戒して雇っていた
猟兵団の一人だ」

「ああ、彼女ですか……彼女ならばユミルで二人と顔を合わせている
ので適任でしょう。実力も申し分ないですし」

「ルーファス殿はこの子のことを知っていますか？」

「ええ、私がリイン君とクリス君の家庭教師を引き受けた時にちよう
どユミルに慰安旅行に来ていた猟兵団が《赤い星座》でしたので」

「慰安旅行……《赤い星座》が……」

似合わない二つの言葉にレーグニッツは何とも言えない表情をす
る。

「で、ですが貴方は先程平民の入学を反対していたはずでは？」

「私は別に平民を蔑ろにしたいわけではありませんよ……」

ただ貴族生徒と平民生徒で区別をつけるべきだと、そう申ししてい
るだけです……

その点彼女はすでにプロとして猟兵団の中で活躍しているので弁
えてくれるでしょう」

「むう……」

譲歩とも取れるルーファスの言動の真意を探ろうとレーグニッツ
は唸り――

「――失礼します」

それを遮るようにベアトリクスが会議室に現れた。

「先程、帝都病院からリイン君が目を覚ましたと連絡が入りました」

・*

「つ……一体何が……」

覚醒して最初に感じたのは左目の疼きだった。

手で押さえながら体を起こし、辺りを見回せばそこは見覚えのある
病室。

帝都ヘイムダルの病院だと察するが、リインは何故自分がそこにい

るのか記憶を振り返る。

「確か……クロスベルでカルバード製の導力爆弾を処理するために空に行ったはず……」

周囲の水と大気を取り込み連鎖させる爆弾の処理に大気圏外まで出たことは覚えている。

しかし、そこから先の記憶が曖昧だった。

長い夢を繰り返して見ているような感覚。

しかも導力の炎に何度も焼かれるというあまり生きた心地のしない悪夢だった。

「ローゼリアさんとイオは……？ それにここは帝都の病院だけど通商会議はどうなったんだ？」

頭を振って悪夢の残滓を振り払い、リインはベッドから体を起こす。

「体は……」

軽い柔軟をして体の調子を確かめてみるが、特に異常はなくむしろ力が普段以上に漲っていた。

むしろ漲り過ぎている状態にリインは困惑する。

「ルフィナさん、これはいったい——」

《聖痕》に向けて声を掛けようとしたところでドアがノックされリインが返事をする前に開く。

「っ——」

気配察知を疎かにしていたこともあり、リインは思わず身構える。

「お、目覚めておったか」

病室に入って来たローゼリアは起きているリインを見て安堵の息を吐く。

「ローゼリアさんも無事だったんですね……」

ここは帝都の病院のようですが、あれからどうなったんでしょうか？ もしかしてクロスベルは——」

「そこは安心して良いようじゃな。妾も昨日目覚めたばかりなのだがクロスベルは無事に守れたようじゃ」

「そうですか……でもどうして帝都の病院に？」

「うむ。驚くべきことにあれから一週間妾達は意識を失っておったそうだな……」

目覚める気配がなく、霊力消耗による過労ということでこちらに搬送されたらしい……

イオは妾と同じ部屋だがまだ目を覚ましておらん」

「そうですか……」

一週間。

そこに実感は湧かないがひとまず護衛の役割を、そして何の罪もないクロスベルの市民たちや各国首脳陣を守れたことにリインは安堵する。

「それよりもお主は体は大丈夫なのか？」

「え……？ それはどういう意味ですか？」

徐に尋ねて来たローゼリアにリインは首を傾げる。

「ふむ……自覚はないか」

そう呟いてローゼリアは手鏡を取り出してリインに向ける。

「これは……」

ほのかな光を宿し、蒼く染まった左目にリインは困惑する。

「その場におったゲオなんとかとやらが言うには、『フェンリル』の爆発力を取り込み、『鋼』のプロセスをなぞらえて、『雲の至宝』へと昇華させた、そう叫んでいたと妾は聞いておるが」

「ゲオ……いや……『雲の至宝』……」

その場において命名した誰かから、意識を引きはがしてリインは左目を手で押さえて自分の内面に意識を向ける。

「………たしかに箱庭に今までなかった『力』の存在を感じます」

「大丈夫なのか？」

「ええ、幸いノーザンブリアでの一件でいざという時は箱庭の内包世界を大きくすることに設定させていたので力で体が破裂するようなことはありません」

リインは目を抑え、意識して『力』の源泉と体の繋がりを制限する。

左目に宿る光はそれに伴い小さくなって消える。

それを見届けてローゼリアはそれまで張り詰めていた息を大きく吐き出した。

「『鋼』と同等ならば『闘争の呪い』によって暴走するのかと思っただが、大丈夫そうじゃの」

「『闘争の呪い』は二つの眷属の願いがぶつかり合ってもたらされたものですからね……」

至宝級の力と言っても、力の原型は信仰のない爆弾ですから、そういった残留思念に突き動かされることはなさそうです」

「ぐふ……」

図らずも二つの眷属が『呪い』の原因だということを実証することになり、ローゼリアは胃痛を感じて蹲る。

「しかしあれじゃな。『黄昏』に向けて明確な切り札ができたことは喜ばしいことじゃの、うん」

「……………どうでしょうね」

「何じゃ浮かかない顔をしておるな？ もっと喜ばんか？」

「以前言われたことがあるんです。『鬼の力』に頼る様になったら俺の成長はそこで止まるって……」

確かにこの『力』を使えば今後の戦いは楽になるかもしれないですけど、そもそも『力』の規模が大き過ぎて扱い切れるか」

「……………たしかに妾も『聖獣』となつてからその力を十全に使いこなせるようになるまで十年掛つたのう」

浮かれていた思考を引き戻してローゼリアは反省する。

「十年……」

その実感の伴う言葉にリインは唖る。

「参考までに聞きますが、アリアンロードさんはそういう使いこなせていない隙を見逃すような人ですか？」

「うむ、それはありえん」

即答の断言にリインはですよねと頷く。

「しかし得てしまったものはどうしようもあるまい？」

「そうですね……」

この二年で果たしてこの『雲の至宝』の力を完熟させることがで

きるか。

「いつそのこと『雲』の力も七つに分割するか」

「うん?」

突然言い出したリインの提案にローゼリアは何を言っているのだと首を傾げる。

「『鋼』と同じ性質を持っているなら魔女の技術で『力』を分割できますよね?」

博士たちが新しい器を作っていますし、『核』にするのにはちょうど良いんじゃないでしょうか?」

「うん……待て」

あっさりときつい提案をしてくるリインにローゼリアは待ったをかけて深呼吸をする。

「それはつまり現代で『七の騎神』を造るということか?」

「別に騎神に拘らなくても良いんですけど、とにかく力を分割して少しずつ『雲』の力に慣らしていく方が現実的だと考えただけです」

七分割のされた内の一つなら、『鬼の力』とのバランスを崩さずに手綱を取れるだろう。

思い付きにしては良い提案なのではないかとリインは頷く。

「それに強過ぎる力は『塩の杭』のように空間を壊してしまえますから」

「ううむ……」

「それとも出来ませんか?」

「できる。できるのだがのう……妾一人でそれをやれというのは……」

簡単に言ってくれるが『七の騎神』を作り出した技術は魔女が持つる全てを費やして作り上げた術式。

それこそ長だけで作成し、起動させたわけではなく。

相応の人員を導入してようやく至らせた最高の魔法なのだ。

「それをやるならば最低限妾の他にヴィータクラスの魔女の補佐が三人は必要じゃな」

「エリンの里にはいないんですか? それにエマやセリーヌは?」

「残念ながら今の里に『鋼』を分割できるほどの術者はおらん。エマもセリーヌも無理じゃ……しかし、まあ何とかしてみよう」

渋るローゼリアだったが、それでもリインの提案を頭から否定せずに受け入れる。

「無理なら別の案を考えますが?」

「やると言っておるのだ! 言ってみればこれは先代への挑戦でもあるのだから」

ローゼリアは拳を握り締めて燃える。

先代の突然の死からなし崩し的に引き継いでしまった役割。

これまでずっと起動者や騎神たちのやかしの監視やら尻拭いばかりが仕事だっただけに新たな挑戦は、かつてできなかった先代を超えるモチベーションとなつてローゼリアはやる気になる。

「とりあえず今から妾は里に戻つて古文書を紐解くとするかのう。差し当っては一ヶ月くらい時間をもらえるか?」

「ええ、それは構いません」

「うむ……」

鷹揚にローゼリアは頷くと、徐にリインの肩に両手を置いて顔を近づけてこう言った。

「最後にこれだけ言っておくが……気をしっかり持つのだぞ」

「え……う?」

不穏な言葉にリインは疑問符を浮かべるが、関係なくローゼリアは続ける。

「すでに妾は昨日の時点で………がくがく、ぶるぶる………と、ともかく気をしっかり持つんじやぞ」

しかし最後まで言うことはできずローゼリアは同じような唐突さで踵を返して病室から出て行った。

「………何だったんだ?」

嵐のように去つていったローゼリアにリインは首を傾げ、その答えはすぐに現れる。

「お話は終わりましたか兄様?」

「っ!」

ローゼリアと入れ替わるように病室に入って来た義妹、エリゼの笑顔にリインは思わず緊張に体を固くする。

「え……エリゼ……どうしてここに？」

「何を仰っているんですか兄様？　ここは帝都の病院で今は夕方なのでからお見舞いに来るのは当然のことじゃないですか」

言葉は丁寧だがそこに込められたプレッシャーは筆舌に表現できない程の大きい。

「兄様……そこに正座をしてください」

「いや、エリゼ。俺は病み上がりで」

「正座をしてください」

「はい……」

エリゼの進言にリインは条件反射のように従って、お説教が始まった。

・*

時は遡り8月29日。

西ゼムリア通商会議が始まったその日の夜、ヴィータはトリスタの街にいた。

「まったくどういふつもりかしらね」

帽子に眼鏡とラジオパーソナリティーとしての姿をしているヴィータは相変わらず出ない導力通信の相手に愚痴をもらす。

「やっぱりこういう時は導力技術も役に立たないわね」

ため息を吐き、いつまでも繋がらない戦術オーブメントと一体となっている通信機から耳を放す。

先月の帝都の事件からどうにも連絡がうまく繋がらなくなっていくことにヴィータは言いようのない不安を感じる。

派手にやり過ぎた帝都での一件のことを諫めることと、当分は大人しくしているという念押ししているのだが三日前に交わした通信越しの言葉に不安が掻き立てらる。

「どうしてこうなったのかしらね……」

思わず愚痴を漏らし、三年前のことを思い出す。

あの頃はまだ可愛げがあった。復讐を誓ったとしても修羅になり切れていない人間らしさがあった。

しかし起動者になってから少しずつ、それこそヴィータが気付かないくらいに少しずつ彼は変わっていった。

果たして三年前の彼は自分の復讐のために、無関係な人間を貶め、誰が何人死のうが気にも止めない「外道」だっただろうか。

「私は「彼」をちゃんと導けたのかしら？」

思わずこぼした愚痴は彼へのもものではなく、自分に向けたもの。

らしくないとヴィータは苦笑してその思考を振り払い、自嘲する。

「らしくない。私は「悪い魔女」なのよ」

見えてきた目的地、トールズ士官学院第二学生寮を見てヴィータは魔女としての意識を切り替える。

目的は31日、通商会議の本会議に合わせて行われる帝国解放戦線のガレリア要塞襲撃について釘を刺すため。

籠が外れかかっている彼に魔術で精神を鎮静させる。

でないといの彼は「呪い」を発現させてしまう予感があった。

「ふふ、直接訪ねたらどんな顔をするかしらね」

いたずらつ気のある笑みを顔に作り、前から歩いて来る男とすれ違

い——小さな銃声が響くとヴィータはその場に膝から崩れ落ちた。

「なっ……」

不意打ちで撃たれた腹部を抑えヴィータは呆然とする。

「ふふ、こんばんは。《蒼の深淵》殿」

蹲ったヴィータを見下ろすのは、ヴィータにとって見覚えのある壮年の男。

「アルベリヒ……工房長……？」

「今君に《蒼の起動者》に接触されるのは困るのだよ」

ヴィータの呟きに応えず男は一方的に告げる。

「安心したまえ、流石に私も使徒を殺すつもりはない。ただ大人しく拘束されてもらえますかね？」

道化師たちには心労で倒れたと私の方から連絡をしておきましょう」

ぬけぬけと言葉を並べる男にヴィータは苛立ちを感じ、そして確信する。

「そう……そういうことだったのね……工房長。貴方が地精の——《黒》の奴隷だったわけね」

「奴隷とは人間きの悪い」

「ただどこかで私を抑えてどうするつもりかしら？」

《黒の史書》の預言を成就させるなら、内戦で私が凱歌を歌わなければいけないはず」

「それについても問題はない。出て来なさいイソラ」

「え……？」

彼の口から出て来た名前にヴィータは固まる。

そうしている間に彼の背後から現れたのは妹と同じ髪の色をした小さな女の子だった。

「紹介しよう。《OZ80》イソラ・ミルスティン……」

君の代わりに《蒼》の起動者を補佐し、武器となり、凱歌を歌える魔女の因子を持つホムンクルスだ」

幼い頃の妹の面影を持つ少女は無言無表情で佇んでいた。

そのホムンクルスが誰を由来にして造り出したのか、ヴィータから見れば一目瞭然だった。

故に——

「ア……ア……アルベリヒツ!!」

次の瞬間、傷を癒すための治癒術やそのための時間稼ぎの会話も忘れ、ヴィータは激昂して蒼い杖を手に呼び出し、一帯を覆い尽くす巨大な魔法陣を作り出す。

「ふっ……」

男は不敵な笑みを浮かべて指を鳴らすと、それを合図にしてヴィータは撃たれた傷から血が噴き出し、周囲を覆い尽くした蒼の魔法陣は霧散して消えた。

「がっ……がは……」

血を吐き出しヴィータはその場に倒れる。

「おやおや、無理をするからそうなる。だが安心すると良い。君の
“ 幻焰計画” は私が責任を持って引き継ぐのだから」

そう言って男は蒼い仮面を持ってヴィータに手を伸ばした。

93話 帰還

9月15日水曜日。

「すいません、クレアさん。わざわざ送ってもらって」

その日の診察を終えてようやく退院の許可を得たリインは憲兵隊の導力車で帝都からトリスタへ送迎されていた。

「いえ、リイン君は帝都での一件に引き続き通商会議でも『帝国解放戦線』の暴挙を阻止したんですからこれくらいは当然です」

「そう言われても」

居心地悪そうにリインは前を走るもう一台の導力車を一瞥してため息を吐く。

二台の仰々しいとも言える扱いに居心地の悪さを感じずにはいられない。

「俺なんかより父さんたちの安全の方を重視して欲しいんですけど」

「それは抜かりなく手配しています」

リインの進言にクレアは淀みなく答える。

「フフ……今のリイン君は現在の帝国で唯一の『騎神』に対抗できる重要人物なんですから有名税と思って我慢することね」

「ルフィナさん……」

後部席にナユタを抱いて座っているルフィナにリインは困ったと言わんばかりに肩を竦める。

「そういうことです……」

今後はリイン君達の邪魔にならないようにしますが、トリスタに憲兵隊を常駐させるか検討しているのでそのつもりでいてください」

「……………あの……………クレアさん……………怒っていますか？」

淡々とした凍てついた言葉にリインは恐る恐る聞き返す。

「……………気のせいです……………いえ、確かに怒っていますが今回の件について私はリイン君と共犯ですから……」

むしろそこまでやるはずがないと、心の何処かで『解放戦線』を

悔っていた自分に憤りを感じています」

クレアは言い直してラインの指摘を肯定する。

あの日、ラインからもたらされた情報をクレアは半信半疑のまま彼の行動を手伝った。

しかし本来ならその情報も通商会議の前に掴んでいなければならなかったと思うと、ヴァリマールで爆弾を処理するという最終手段を認めるしかできなかつた自分の不甲斐なさに今でも怒りを感じてしまふ。

「今回は運が良かっただけです」

「ええ、それは判っています」

ラインは左目を押さえてクレアの言葉に頷き、クレアは逡巡して尋ねる。

「……………いつから気付いていたんですか?」

「それはどのことを言っているんですか?」

返って来た即応の言葉にクレアは緊張する。

口調こそ以前のラインと変わらないはずなのに、どこか「あの方」を思わせるようになった言葉にクレアはクロスベルで知ることとなった彼の実父とその姿を重ねて納得する。

「閣下が…………オズボーン宰相が実の父親だとライン君は気付いていたんですよね?」

「…………はい」

数日前、らしくもない神妙な顔をしてその事実を明かしてきたオリヴァルトのことを思い出しながらラインは首肯する。

「意外ですね。クレアさんの能力ならとつくに気付いていると思ったんですけど」

「それは…………」

返って来たラインの言葉にクレアは言葉を詰まらせる。

「統合的共感覚」。

少ない情報を感覚的に結び付けて答えを導き出す異能ならば、確かにラインの指摘通り気付いていてもおかしくはなかった。

何故と言う疑問が頭に浮かぶが、そこから答えが出て来ないことに

クレアは自分のことながら戸惑う。

「……俺が気付いたのはクレアさんに貰ったオズボーン宰相の資料を読んだ時です……」

確信——と言うよりも確証を得たのは直後のオズボーン閣下と手合わせをした時ですね」

そんなクレアの戸惑いに気付かない振りをしてリインは彼女の疑問に答える。

「そんな前から……」

「オリヴァルト皇子から聞かされましたが、別にクロスベルである人が言っていたことが事情の全てだとは思っていません……」

俺を捨てた事情やそう振る舞わなければいけない事情もおおよそ見通せています。だから大丈夫です」

「リイン君……」

自分の頭脳を持ってしても読み解けないオズボーンのことをリインは察していると云われクレアは言いようのないモヤつとした気持ちを抱く。

果たしてそれがどちらに対しての気持ちなのかクレアはやはり分からなかった。

「もしも何かあったら相談してください。できる限り便宜を図る様に閣下に言われていますから」

「必要ないと言っておいてください……」

クレアさんもこれを機に俺とは距離を取った方が良いと思います」

「リイン君？」

突然の言葉にクレアは首を傾げる。

「今更あの人を『父親』として敬うつもりはありません。何より二年後には敵対することになるだろう相手ですから」

「え……あ、あのリイン君？ それは」

「失言でした。忘れてください」

口から漏れた言葉にリインは顔をしかめて取り繕う。

これまで特別実習と通商会議の準備で考えている余裕がなかったが、改めて鉄血宰相が《黒》の起動者、もしくは傀儡だったとした場

合の事を考えると今から頭が痛くなる。

「忘れるには少々不穏な言葉でしたね。ちゃんと説明してください」

敬愛するオズボーンを害する言葉を流石に聞き流すことはできず、厳しい言葉でクレアは問い質す。

頑として退かない気配にリインは肩を竦める。

「詳しいことは閣下に聞いてください」

そう言っつて説明を彼に丸投げすると同時にクレアのスタンスに線引きをする。

「……………リイン君。いくら貴方でも閣下を害すると言うのなら——」

「ええ、分かっています」

そう分かっていたことだとリインは自分に言い聞かせる。

クレアにとってギリアス・オズボーンは恩人であり、自分は亡き弟の代替でしかない。

彼と対立する場合、彼女がどちらに着くのかは今のやり取りでも明白だった。

対するクレアもリインの言動に警戒を募らせる。

先日の、帝国解放戦線の暴挙に対して神経を尖らせているのも理由だが、例え親しい少年であつても優先順位を間違えることは「氷の乙女」にはあり得ない。

それこそ彼にとつて捨てた父親への復讐であつてもそれを見逃すことはない。

——そう例えリイン君に恨まれることになつても……

リインが将来オズボーンに敵対すると言うのなら憎まれ役になつても構わないと、クレアは心を凍てつかせて——

「そう言えば……………」

「まだ何かあるんですかリイン君？」

「大したことじゃないんですけど……………互いに認知しているわけじゃないから違うんでしょうけど。クレアさんと俺は義理の「姉弟」ということになるんですかね？」

次の瞬間、クレアが運転する導力車は暴走した。

・*

「失礼しました」

学院長室から退出したリインは息を吐いて強張っていた肩から力を抜いた。

「あうく？」

「大丈夫だよ」

こちらを気遣う様に手を伸ばして来るナユタにリインは苦笑する。「オリヴァルト殿下から聞いていたけど、ここまであつさり話を通るなんてな」

ノーザンブリアの特別実習から学院に帰らず、それまで人伝にしか報告できなかったナユタの事、白く変色した髪的事などまとめてヴァンダイクに報告したのだが特にお咎めはなかった。

むしろノーザンブリアの内情把握を怠って、生徒を危険にさらしてしまったことを謝られてしまった。

ナユタのことも最大限の便宜を凶つてくれると約束してくれた。

至れり尽くせりの待遇。

代わりに要求されたことと言えば来月の学院祭でヴァリマールを展示させて欲しいというだけだった。

とりあえず本人の意思次第と言う事でその場での回答は避けたが、結局最後まで咎められることなく学院長への報告は終わった。

「はあい！ お勤めご苦労様」

「サラ教官……」

学院長室の前で待っていたサラに——その背後に控えている見覚えのある少女にリインは首を傾げた。

「シャーリイ・オルランド。どうしてここに？ いや、その格好は……」

「やつほーリイン。今日からよろしくね」

深紅の制服を着崩したシャーリイは気楽な挨拶をする。

「……サラ教官」

「テロ対策の一環でね……」

貴方とクリスの二人の護衛が半分、帝国解放戦線に対してのヘイトコントロールが半分って感じでⅦ組に在籍させてみようってオズボーン宰相に捻じ込まれたのよ」

「ヘイトコントロールって……たしかジオフロントに逃げたテロリスト達を一人残らず虐殺したらしいな」

「まあね。ラインの読み通りみんな戦術オーブメントに自爆術式を仕込んでいたから不意打ちで一気にやっちゃった」

「自爆術式……」

その言葉にかつてリベールで「あの子」の戦術オーブメントを調べた時のが脳裏に過る。

「ライン。あんた……いや、何でもないわ」

《赤い星座》の虐殺を容認していた事実にはサラは顔をしかめたが、言おうとした言葉を呑み込む。

危険なテロリストのことを考えれば、何もさせずに制圧するにはそれが一番効率が良いというのはサラも理解できる。

「まあ、そういうことで明日からこの子も貴方達Ⅶ組の一員よ。というわけでこの虎の世話は任せた」

「サラ教官……生徒に押し付けるのはどうかと思うんですけど」

責任を丸投げするサラにラインはジト目を返す。

「と言うか、シャーリイ。君もそんな風に制服を着崩してないでちゃんと着なさい」

「ええ、良いじゃん別に」

ラインの指摘にシャーリイは自分を見下ろして首を傾げる。

そんな彼女の様子にラインはため息を吐く。

九月に入り、夏服から冬服へと学院全体が変わった時期のため、シャーリイの服装も深紅の女子制服を纏っている。

しかしブレザーの前を止めず、タイを外しシャツは第二ボタンまで外している。

「結構服装は自由にして良いって聞いてたんだけど？」

「限度があるからな」

Ⅶ組のそれぞれの着こなしや一部先輩達の滅多に見ることのない制服姿のことを思い出すが、それを棚上げして言い切る。

「ま、そこら辺の教育はおいおいしていくとしてとりあえずⅦ組の教室に案内するわ……」

リンも今日の授業はもう終わってるけど、来月の学院祭の出し物の話をしているから顔だけでも出しておきなさい」

「それは良いですけど、ナユタはどうしますか？」

「そうね……今日だけは特別よ」

Ⅶ組の教室では10月に行われる学院祭の出し物を何にするのかという議題の話し合いが行われていた。

しかし、そこにいる誰もが会議の体を作りながらも何処か余所余所しく集中し切れていなかった。

九月の《特別実習》が行われるのかどうか、それによってできることが変わるからというのも理由だが会議が進まない理由は一人の少年が作る空気だと一同は気付いているがそれを指摘することは憚られた。

そんな陰鬱としたⅦ組の教室にサラは扉を躊躇わず開けて入った。

「ほらほら、しゃきつとしなさい」

「サラ教官……」

「えつと……自習だったんじゃないんですか？」

サラの登場にあからさまに黒板の前に立っていたエマとマキアスは安堵の息を吐く。

「あ……リンさん！」

そして続いて入ってきたリンの姿にクリスが嬉しそうな声を上げ——固まった。

「やつほー皇子様って……たしか学院では言っちゃダメなんだっけ？」

「シャーリイさん!? どうしてここに!? それにその格好は!」

Ⅶ組の紅い制服を着ているシャーリイにクリスは驚く。

「確か以前実技テストの時に乱入して来た娘か……」

「サラ教官。これはいったいどういうことなのでしょうか？」

ユーシスとガイウスは訝しむようにサラに説明を求める。

「ちよつと事情があつてね。ミリアムに続いて明日からこの子もⅦ組の一員になるからよろしくね。ちよつと特殊な出身だけどいじめちゃダメだからね」

「いじめつて……」

茶化するようなサラの言葉にアリスはシャーリーの凶悪な武器を思い出して顔を引きつらせる。

「ねえねえ、これつてつまりボクの後輩つてことだよね!？」

「ああ、確かに先月転入してきたミリアムの方が一ヶ月とは言え先輩だが……」

はしやぐミリアムを宥めつつラウラはシャーリーから視線をこれまでずっと黙り込んでいるフィーとエリオットの二人に移す。

「……………シャーリー・オルランド……………どうしてここに?」

時間を掛けて彼女の転入を呑み込んだフィーは敵愾心を多分に含めた目でシャーリーを睨むようにして問い質す。

「うくん……………本当はクロスベルに残るつもりだったんだけど、鉄血のオジサンにスカウトされたのも理由の一つだけど……………やっぱり一番は——

シャーリーはおもむろに目を閉じ、タメを作つて——

「——揉みに来ました」

カツと目を開き、両手を前に突き出してシャーリーはそんなことを宣った。

次の瞬間、ラインがシャーリーの頭を叩いた。

一連のやり取りで、澱んでいた教室の空気は弛緩する。

しかしそんな空気を読まずに、エリオットが立ち上がると一同は息を呑む。

「……………ライン」

「エリオット……………大変だったみたいだな」

幽鬼のような足取りで前に進み出て来たエリオットにラインは何と言葉を掛けるべきなのか迷う。

「中将のことはオリヴァルト殿下から聞いている。その——」

「リインツ！ 一生のお願いだ！ 僕にヴァリマールを使わせてつ
！」

その場に土下座してエリオットは懇願する。 彼の言葉はある意味予想通りのものだった。

94話 動き始めた意志

9月16日木曜日。

拜啓、天国にいるはずのお父さん。僕はもうすぐそちらに行くかもしれない。……

「あははははっ！ どうしたのこの程度でもうへばったの情けないなあ。ほらほらもつとペースを上げなよ！」

少しでも落としたら容赦なく撃ち抜くよ……ああ、大丈夫。実弾は使わないから」

言っている間にシャーリイは機銃を掃射してエリオットの背中を撃つ。

「いだだだだだっ！」

「ああああああっ！ 何で僕までっ!？」

両手に学院生用の機銃を持って追い回して来るシャーリイにエリオットとクリスは全力でグラウンドを駆ける。

「ほらほらまた補助アーツが途切れた。そんなんじや本当に撃ち抜いちやうよっ！」

「うわあああああっ！」

「このおとおおっ！」

二人は雄叫びを上げ、エリオットは走力を上げる導力魔法を、クリスは防御力を上げる導力魔法を維持しながら全力で走る。

「その程度でシャーリイを差し置いて『獵兵王』の首を取ろうなんて百年早いよ！」

彼らを鍛える理由を建前に、シャーリイは自分を差し置いて『獵兵王』に挑もうとしている素人にお灸を据える。

本来なら、拮抗した実力の中でギリギリの戦いをしたいという願望を持っていたが、最初は手が届く場所にいた少年が顔を合わせる度に自分を凌駕する成長をしてくるのを見せつけられてその心境に変化があった。

今は差を付けられてしまったが、その領域に追い付いた自分がどん

な殺し合いができるのか夢想してシャーリイは昂る。

「――これでグラウンドのポイントはクリアッ！」

エリオットがグラウンドの奥に設置されたスイッチを導力杖の一撃で叩き、振り返る。

「行くよエリオットッ！」

『《ARCUS》 駆動っ！』

追って来たシャーリイに向き直り、クリスとエリオットは迎撃態勢を取る。

《炎剣ブリランテ》に炎が宿り、そこにエリオットが駆動した炎の導力魔法が上乘せされる。

「あはっ！」

猛々しい炎の巨剣を構えるクリスにシャーリイは獰猛な笑みを浮かべると、それに怯まず走る速度を上げる。

『合技・エクスペロージョンッ！』

上段から振り下ろされたグラウンドを二分にする唐竹割りの一撃。触れば常人なら死に至りかねない一撃にシャーリイは一欠けらも恐れずに飛び込み、スライディングでその一撃を掻い潜りついでに二人の足を払う。

「はい。これで三周遅れ。あと二周でシャーリイの勝ちだよ」

先程エリオットが叩いたスイッチを悠々と叩き、クリス達が立ち上がる前にシャーリイは悠々と校舎へと走り出した。

「くっ……エリオット」

「待てっ！」

クリスの呼び掛けに応えるよりも早く、エリオットはシャーリイの後を追うために駆け出した。

校舎を使った猟兵風のチエイสบトル。

その光景をリインは屋上で見守っていた。

「どうだクレイグの様子は？」

その背中にナイトハルトが声を掛けてリインの横に並ぶ。

「まだ始まったばかりで何とも言えません」

昨日、エリオットから突然頼まれたヴァリマールの貸し出し。

詳しく聞けば、想像通り父を殺した《紫の騎神》への復讐だった。「しかし意外だな。てつきりお前は復讐など意味はないと論してくれると思っていたのだが」

「それは買い被り過ぎですナイトハルト教官。俺はエリオットの気持ちが良い分かりますから」

大切な者を理不尽に奪われた憤り。それがちよつとやそつとでは呑み込めないことをリインは良く知っている。

「そういう意味では『帝国解放戦線』の気持ちも分からなくはないんです……あ、だけど決して彼らの振る舞いを肯定するつもりはありませんよ」

「それは判っている」

取り繕うリインにナイトハルトはそんな邪推はしないと云う。

「お前がレンハイムに持たせた霊薬だが……本来はクレイグ中將に使うつもりだった」

「そう聞いています」

「生死の境を彷徨っていた者はクレイグ中將やクレイグ……エリオットだけではなかった……」

その中で最も生かすべき人物はクレイグ中將だと俺は判断した」

ナイトハルトはその時の光景を思い出す。

安全を確保した格納庫で演習場から運び込まれたオーラフの無残な姿は今でも瞼の裏に焼き付いている。

第四機甲師団を薙ぎ払った熱線により溶解した戦車から何とかマキアスとファイーによって救助された彼は本当に生きているのが不思議な程の重傷だった。

「だが私たちが格納庫に辿り着き、中將に霊薬を使おうとしたところでラインフォルトからの通信によりエリオットの負傷を知らされた」

「話には聞いていましたがクリスは中將よりもエリオットを助けたんですね」

「いや……」

リインの答えをナイトハルトは首を振って否定する。

「どんな奇蹟が起きたのか分からないが、その一瞬だけクレイグ中將

は意識を取り戻し霊薬を使おうとしたレンハイムを止めた」

『皇子、どうかその霊薬は息子に……エリオットに使ってください』

「そう言い残して中将は息を引き取った。結果的にはそうなって助かったわけだがな」

「と言うと？」

「その直後、格納庫に《紫の騎神》が乗り込んで来た……」

目的は中将の死の確認。どうやら通信を傍受されていたらしい。もしも中将の蘇生に成功していたら私たちはこの世にいなかっただろう」

「起動者と話をしたんですか？ その場にはフィーもいたんですよね？」

「ああ、中将の死を確認して《紫の騎神》は撤退したがクラウゼルが追い駆けたな……」

独断専行を止め切れず、私達はエリオットの方へと向かったが、その後の報告では撒かれてしまったとしか受けていない」

教室での消沈した様子を考えると、とてもではないがそれだけで終わったとは思えない。

「これがガレリア要塞で起きた一部始終だ……」

教官としては不甲斐ないがエリオットのケアに関しては君達に任せることになるだろう」

「やはり第四機甲師団の立て直しのために軍務に戻るんですか？」

「それも……が、先日中将の娘さんとエリオットの話し合いが少々拗れてしまつてな……」

音楽の道を捨てて軍人になると言い出したエリオットと彼女が言い争うことになってしまったので、私はそちらのケアをしようと思つている」

「そうですか……分かりました」

詳しく聞けばフィオナはエリオットに音楽院の転入を勧めた。

反対していた父が亡くなったこともあるが、それ以上に軍人となつてしまったエリオットがオーラフと同じ末路を辿るのではないかという恐怖からの言葉だったのだろう。

復讐的な思考に傾いてしまったエリオットと悲嘆にくれた思考に傾いてしまったフィオナが意見を対立、初めての姉弟の喧嘩へと発展してしまったのは当然の帰結だった。

「シユバルツァー。これだけは教えて欲しいのだが、この訓練を終えれば本当にエリオットを《騎神》に乗せるつもりか？」

「いえ、ヴァリマールには現状俺しか乗れません」

少し困った顔をしてリインはナイトハルトの疑問に答える。

当初の予定であればここからクリスの方を「テストⅡロツサ」の起動者として鍛え直すつもりだったのだが、エリオットが《騎神》に乗りたいと言い出したため状況は複雑化してしまった。

「テストⅡロツサ」はヴァリマール以上に起動者に制限があり、アルノールの血筋の者が選定される。

しかしその理屈を今エリオットに話してもどこまで伝わるのか怪しく、最悪はまだ空席の《騎神》を探して無謀な行動をしないかという懸念がある。

「ただヴァリマールは無理ですが、その代わりを用意できるかもしれません……」

復讐をさせるかは一先ず置いておくとして、それを理由に今は暴走を制御しようと思っています」

場合によってはフィーもその復讐に巻き込まれると考えると頭が痛い問題でもある。

「そうか……何か起きたらすぐに連絡して欲しい。エリオットはクレイグ中將が命を賭して生かした御子息だ……」

彼の将来を守ることは第四機甲師団の生き残りの総意でもある」

「ええ、最善を尽くします」

リインが頷くと、次の瞬間爆発音が響き渡る。

「つ——まさかあの猟兵の娘が……いやこの方角は旧校舎の方か」

一瞬身構えるがナイトハルトはすぐにいつもの事だと緊張を解く。

「そう言えば、クロスベルの独立宣言の影響でシユミット博士とラツセル博士たちはそれぞれ大学と国に戻る様に要請を受けたらしいな？」

「ええ、〃騎神〃がガレリア要塞とクロスベルを襲ったこともありま
すからその対策に……」

とは言っても学院祭に関わると決まっていたのでそれまでは残る
らしいですが」

「ふう……ようやくこの日常として刷り込まれてしまった爆発から解
放されるのか」

「そ……そうですね」

安堵のため息を吐くナイトハルトにリインはバツの悪い顔をして
頷いた。

・*

「やれやれ、とてつもないことをしてくれましたね」

ナイトハルトが屋上から出て行くと同時に、リインは〃匣〃の中
にいた。

「トマス教官。わざわざこんなことをしなくてもこの後部室に行くつ
もりだったんですけど」

「そうでしたか。ですがこちらも火急の要件なので」

「ごめんなさいリイン君」

怪しく眼鏡を輝かせるトマスの後ろに付き従ってそこにいた口
ジーンは申し訳なさそうに頭を下げる。

「副長と話をするのなら私も同席した方が良いかしら？」

と、〃匣〃の中にもう一人、ルフィナが現れる。

「あのルフィナ君。当たり前のように私の〃匣〃に干渉するのは……
いえ、リイン君の〃聖痕〃の一部だから入って来られるのは当然なの
は分かっているんですけど」

「ルフィナさん、ナユタは？」

「あの子なら今お昼寝中だから安心して良いわよ」

リインとルフィナのやり取りにトマスとロジーンは苦笑いを浮か
べる。

「聞きたいのはそのナユタという赤子のことなのですが……」

「ケビン神父から連絡は受けていませんか？」

「受けましたよ。受けましたけど、どうして《幻の至宝》と無関係なノーザンブリアの地で《幻の至宝》が新生するんですか!？」

「それを俺に聞かれても……」

それにノーザンブリアについては自分も《七耀教会》に尋ねたいことがあるんですが」

「っ……はて何のことですかね?」

「惚けないで下さい。回収した《塩の杭》の兵器転用。しかも女神の恩寵なんて崇めているそうですね……」

あの男の記憶から知っていましたし、俺に使うつもりだったことも、まあ良いですけど。ノーザンブリアへの落とし前はちゃんとしてください」

「それについては……はい……仰る通りです」

《塩の杭》の兵器転用は実働部隊ではない星杯騎士団の管轄ではないのだが、そんな派閥関係などリインには関係ないとトマスは言い訳を呑み込み謝罪する。

一部の過激な派閥の独断専行によるものなのだが、それを使用した前科がある以上他人の振りはできない。

「リイン君には感謝しています……」

もしもノーザンブリアが《塩の杭》のことを公開したら大変なことになるっていたでしょう……

なのにこの一件はまだもみ消せると上の方は考えているようで、困ったものです」

「《七耀教会》は、その……聖職者なんですよね?」

「所詮は人の組織ですよ。私は今ほどツールズ士官学院に潜入していることに安堵したことはありません」

定時連絡で殺気立っていた総長の声を思い出してトマスは身震いする。

《塩の矢》の件を知られたことで教会内ではリイン排除の主張が再び活発になっていた。

しかし帝国の後ろ盾がある以上、リインを秘密裏に暗殺できたとし

ても真つ先に疑われるのは七耀教会になる。

自分達の権威でそれをもみ消せると本気で思っている者たちがいることは、身内として恥ずかしい限りなのだが……

「ところでリイン君……」

その様子だとまた「聖痕」が成長したようですね。ケビン神父から報告は聞いていますが、《幻の至宝》と《塩の杭》の力の一端も取り込んだとか」

トマスは値踏みをするようにリインの変わった姿を観察する。

「はい。それと——」

「副長折角ですから、御自身でリイン君の実力を測ってみたらいかかでしょうか？」

自分の今の状態を話そうとしたリインの言葉を遮ってルフィナが提案した。

「ルフィナ君、それは……」

「ケビンもそうでしたが、「聖痕」の力は定期的に使っていないといざという時の反動が大きくなることは説明するまでもないですよね？」

副長の力はただでさえ全力を使う事が稀な能力ですから、ここで一つリイン君の試し斬りに使われて下さい」

「ほう……言いますね」

「ロジーヌも従騎士として本気の副長の力を見たくないかしら？」

「え……それは……」

「どうせ上からいざという時、副長の「匣」でリイン君を封じることもできるか試しておけると言われているのでしょうか？」

「あはは、流石ルフィナさんですね」

見透かされた教会の事情、そして自分の従騎士からの期待を含んだ視線にトマスは笑う。

「本当にうちの勝手で申し訳ありませんが、付き合ってもらって良いですかね？」

「俺は別に構いませんが……」

「それじゃありイン君、副長が快く引き受けてくれたから教会が望む

通り全力で試し斬りして上げるといいわ」

そう言つてルフィナはリインに「八耀」を差し出した。

「……………待つてください。その太刀は何ですか？ 見るからに普通じゃない気配を感じるんですが？」

鞘に納められたままでも分かる尋常ではない気配を帯びた太刀にトマスは静かに尋ねる。

「ふふふ、リイン君の新しい太刀ですよ。既にクロスベルでも使っています。が試し斬りという意味では副長の「匣」は良い素材ですよね……………」

ああ、それともやはり自信がないと？ 星杯騎士団随一の結界師でもリイン君は怖いと？

まあ仕方がないですね。でも安心してください。アインには私から報告しておきましょう」

「……………良いでしょう」

挑発じみたルフィナの言葉にトマスは覚悟を決めたように目を鋭くしてリインと向き直る。

「そこまで言われてしまえば星杯騎士団の副長として退くことはできませんね」

「あ、あの副長……………やめた方が良いと思うんですけど」

ロジャーが流石に止めるがトマスは拒絶する。
「安心してください。ロジャー……………」

ルフィナ君がああ言つて煽っているのは昔の私しか知らないからです。今の私の「匣」は総長の一撃さえも耐えることができます……………」

ふ……………ちようど良い機会です。ケビン神父との格の違いを教えてくださいましょう」

「えっと……………」

「さあ遠慮なく来てくださいリイン君。星杯騎士団副長の力を思い知らせて上げましょう」

「……………分かりました。それでは胸をお借りします」

リインは太刀を抜かずに、自然体となって力を解放する。

「鬼気解放……………」

「っ……」

既に白髪灼眼だったリインの姿に目に見えた変化は現れない。それでも纏う力の密度が上がったことにトマスは身構える。

リインは徐に手で左目を押さえて呟く。

「神気解放……」

「……………え……………」

左眼だけが灼眼から変化した蒼眼へと変化する。

神性を帯びた力がリインの身体から湧き上がり、《鬼の力》と絡み合い「匣」を内側から軋ませる。

「神鬼合一」

「な……………な……………」

リインが纏う力にトマスは絶句する。

「副長、実はですね。リイン君はクロスベルで「風」と「水」の力を利用した戦略級爆弾の力を「聖痕」に落とし込んで「鋼」の亜種である「雲の至宝」へと至ってます」

「へ……………」

ギリギリのタイミングでルフィナから明かされた新事実にとマスは固まった。

「——行きます」

納刀した太刀を居合の構えでリインは宣言する。

「ちよつと待つ——」

トマス・ライサンダー教官。

その日から数日、原因不明の体調不良により学院を欠勤。

また彼の「力」は一ヶ月ほど使用不能となった。

95話 迷い人

「あのリインさん。本当にフィーの事は何もしいつもりなんですか？」

夜。一日の学業を終えたクリスはリインの部屋を訪ねてそう切り出した。

「ああ、フィーの方から相談して来たら答えるつもりだけど俺の方から何かをするつもりはない」

「そんなどうして!?!」

言い切ったことに違和感を覚えクリスは反論する。

ガレリア要塞の事件を経て、VII組のメンバーはそれぞれに思う所があり塞ぎ込んでいる。

その中でも《紫の騎神》を追い駆けて戻って来たフィーの様子が一際おかしいのはクリスも把握していた。

「リインさんなら何とかしてくれると思っていたのに」

以前のシャーリイ襲来の時に調子を崩したフィーを立て直したこともあり、今度もそれを期待していたクリスは唖る。

「言いたいことは分かるが、今回ばかりは俺がフィーを慰めるわけにはいかないんだ……」

オリヴァルト殿下から《紫の騎神》の起動者については聞いてないのか？」

「……ルトガー・クラウゼル。死んだはずのフィーのお父さんが乗っていると言っていましたか？」

「ああ、おそらく追いついて話をしたんだろう」

「え……でもフィーは見失ったって言ってましたよ?」

「あのフィーだぞ? 見失ったくらいで素直に諦めるような子じゃないだろ?」

「それは……」

ラインの指摘にクリスは口ごもる。

「何を話したかは知らないが、俺はルトガーさんと近い未来戦うことになる……」

それこそ生き返ったファイのお父さんを俺が殺し直すことになるかもしれない。そんな俺がファイに言葉を掛けても余計に悩ませるだけだ」

「ラインさん。それは本当なんですか？」

「ああ……そしてこれはクリス。君にも無関係なことじゃない」

良い機会だと考えてラインはクリスにローゼリアの提案を告げる。

「実はヴァリマールと融合状態にあるテストパイロットを分離しようかと思っっているんだ……」

そしてその導き手と起動者はエマとクリスの二人で担ってもらおうかと思っっている」

「え……？」

突然の提案にクリスは問い詰めていた話題を忘れて呆然とする。

「これはローゼリアさんから言い出したことなんだ」

「ローゼリアさんが……」

その事実思わず頬が緩む。

ユミルでは素気なく袖にされたが、その評価を覆した事実には嬉しくなる。

「だけど『緋』の起動者になりたいなら先に幾つか説明しておくことがある……」

これはさつき言っていた『獵兵王』についても関係していることだ」
「それはつまりラインさんが背負っているものでもあるという事ですよね？ 聞かせて下さい」

浮かれそうになる気持ちを引き締めてクリスは改めてラインに向き直る。

そうして聞かされたのは『騎神の本来の役目』と『黒の史書による黄昏に至るための預言』。

「つまり『騎神』に選ばれた起動者は勇者でも英雄でもない。『分かれた鋼』を元の一つに戻すための生贄、言い方を悪くすれば騎神を

動かすための電池でしかない」

「あ……………」

わざと酷い表現をした言葉に期待の表情を隠し切れていなかったクリスは愕然と言葉を失う。

「それじゃあ『七の相克』が終わったら獵兵王は……………」

「これまでの『試しの相克』では不完全なノスフェラトウとなつてしまったが、全ての因果が収束した場合、そういった因果に縛られた存在は消滅する。というのが俺とローゼリアさんの見解だ……………」

例外があるとすれば『相克』に勝ち残った起動者だけだろう」

「それって獵兵王だけじゃなくてリインさんにも当てはまることじゃないですか!？」

「そうだ」

驚愕の声を上げるクリスにリインは静かに頷く。

「しかも分類としては、俺も不死者の側に片足を突っ込んでいる状態だ……………」

『雲の至宝』の力があつても方向性が定まっていない漠然とした力だから『黄昏』が終わった時にどうなるか俺にも分からない」

「っ……………」

「テスタロツサに乗ると言う事はそんな行き止まりの戦いに参加すると言うことだ……………」

戦つて死ぬ覚悟はもちろん、途中まで肩を並べて戦う事ができたとしても俺と殺し合いをする覚悟は君にあるのか、セドリック?」

「僕は……………」

本名で呼ばれてクリスは改めて考える。

「すぐに答えを返さなくて良い。どちらにしろ起動者には力を求められるから、これまでと同じように体を鍛えるのは必要なことだ……………」

ただその気があるのなら、旧校舎の地下ダンジョンを『緋』の試しの場に造り変えるし、こんなものも用意した」

そう言つてリインが取り出しのは見慣れない『劍』だった。

「それは?」

「今までと同じセピスで作った魔剣だ。だけどこれは今までとは違つ

て「鬼の力」——特に「緋」の力を持たせた……

それこそ「魔剣テストタロツサ」とでも言うべき剣だな」

リインはその場で軽く抜いて見せて、刀身に浮かぶ禍々しさをクリスに見せつける。

「「鬼の力」をクオーツに落とし込んだ技術を応用したものなんだが……

今のテストタロツサはイオさんから分離した陰の気と「黒」の呪いによって侵されている。だから最低限この剣を使って正気を保てなければ、乗ったところで機体に喰い殺されるだけになるだろうな……

まあ乗る気がなかったとしても、この魔剣を扱えるようになればクリスの力になることは間違いないだろう」

そう最後にフォローをするが、情報量が多過ぎたせいなのかクリスは黙り込んでしまう。

そんなクリスにリインは苦笑を浮かべる。

「さつきも言ったが答えを急ぐ必要はない……

戦わない道を選ぶことだって立派なことだ。だから——」

「リインさん」

慰めの言葉を遮ってクリスは浮かんだ疑問を口にする。

「テストタロツサはアルノールの血筋を起動者を選ぶと言っていましたよね？」

僕が起動者になることを辞退したら、もしかして代わりはアルフィンや兄上になるんですか？」

「「黒の史書」の揺り戻しを考えればその可能性は高いだろうな……でも安心して良い。今イオさんを間に仲介することでテストタロツサの起動者の血の縛りを誤魔化す方法も考えている」

あえて生者が不死者にならないようにする研究もしていることを、リインは伝えることはしなかった。

「幸いと言って良いのか分からないけど、リスクを承知の上で「相克」に巻き込まれても良いと言いそうな人がいるから、セドリック殿下が危ない橋を渡る必要はない」

「でもリインさんがこの話を僕に持ち出して来たってことは、そうした方が良いと言う利点があるからですよね？」

「……ああ、その通りだ」

しつかりと言わなかったことまで察したクリスにリインは頷く。

「だけどさつき言った通り、今のクリスでは『相克』に挑むのは力不足だ……」

相手は聖女や猟兵王だけじゃない。あの人に圧倒的な存在と言わせている《黒》という存在もいる……

いや、そもそも『七の相克』は《黒》にとつての出来レースのようなものだ。起動者になれば二年後の命に保証はない」

「あ……」

「クリスに『テスタロツサ』を渡すということは俺が負けた時の保険でもある……」

「けど今のクリスの実力では《黒》はもちろん『鋼の聖女』にだって勝算はない……」

「だから何か一つ勝算の片鱗を見せてくれなければ当然『テスタロツサ』に乗せることはできない」

「……それはリインさんを倒すことも含めてですか？」

「そうだ……」

「そんなこと急に言われても……僕は……」

「少なくとも『テスタロツサ』を一番うまく使えるのは、アルフィン殿下でもオリヴァルト殿下でもなくクリスだと俺は思っているよ」

「え……」

「テスタロツサの特殊な兵装に『千の武具』というものがある……」

「霊力で構成した武具を具現化する能力だが、多くの武器を使う才能があるクリスには丁度いい力だと思わないか？」

「それは……」

初めて言われた言葉にクリスは引き締めたはずの顔が緩むのを自覚した。

「本音を言えばやりたいです。でも僕にはリインさんを倒す覚悟が……」

初めて、それも憧れの人から兄弟よりも頼られていることにクリスは嬉しく感じるが、リインを倒すこと、そしてリインの代わりに務めることに尻込みをしてしまう。

「そんな大役……僕に務まるんでしようか？」

「それを言ったら俺だつて同じだ」

俯いてしまったクリスにリインは苦笑し、そこでドアがノックされた音が響く。

「リイン、ちよつと良いだろうか？　こちらにクリスは来ていないだろうか？」

「ガイウスか？　ああ、クリスならここにいるから入つて来てくれ」

リインが許可を出すとキャンバスを抱えたガイウスがリインの部屋に入つて来た。

「ガイウス？　僕に用？」

「ああ、実はあれからこんなものを描いてみたのだが……リインにも見てもらつても良いだろうか？」

険しい顔をして見せたキャンパスには《紫の騎神》が描かれていた。

「これはガレリア要塞を襲つた騎神!」

「《紫の騎神》ゼクトールか……」

リインは《影の国》で対峙した時のことを思い出しながら呟く。

「………やはりこれが《紫の騎神》だったか……」

「やはり？　あれ、そういうえばガイウスは基地内部に侵入した人形兵器をラウラと一緒に掃討していて、騎神は見てなかったはずだよね？」

「ああ……実はそのことでリインに相談したいことがあるんだ」

最初はクリスに《紫の騎神》の絵を確認してもらっただけのつもりだったが、この場にリインもいることでガイウスはこれまで半信半疑だった悩みを打ち明ける覚悟を決める。

「ガイウスが相談つて珍しいな」

「すまない。だが俺にもどうして良いのか分からないんだ」

憔悴を感じる態度にリインとクリスは意外なものを感じる。

「えつと、リインさんに相談なら僕は席を外した方が良いのかな？」

僕への用は絵の確認だけみたいだし」

「いやそこまで深刻なものではない。良ければクリスも聞いてもらえるだろうか？」

「ガイウスがそれで良いなら、聞かせてもらおうかな」

クリスは座っていた椅子をガイウスに譲る。

「実は……俺はガレリア要塞の襲撃を知っていたかもしれないんだ」

「知っていた？ それってどういう意味？」

「信じてもらえないかもしれないが、夢を見たんだ……」

帝国解放戦線にガレリア要塞が襲撃され、そこに《紫の騎神》が現れること。この絵も夢の内容を思い出しながら描いてみたのだが……

俺が夢の意味をちゃんと理解できていたら、クレイグ中將を始めとした軍の人達を俺は助けることができたのかもしれないと思うと……」

「ガイウスが責任を感じることにじゃない」

自分を責めるガイウスにリインははつきりと言い切る。

「しかし——」

「俺もクロスベルではそういう予知夢を理由に帝国解放戦線の爆弾に対処したけど、それは結局周りの人がその話を信じてくれるかどうか問題なんだ……」

俺は今までの実績を利用して無理を通したけど、ガイウスの言葉を信じてくれる人がガレリア要塞にいたとは思えない」

その意味では多くを説明できなかつたにも関わらず、疑うことなく信じてくれた彼らに改めてリインは感謝する。

「しかしこれがただの夢じゃないのは確かなんだ。ガレリア要塞のこどだけではない、以前ノルドで監視塔が襲撃された時にも見た……」

他にもこれまで何度も既視感を覚える様なことが起きている。これはいったい何なんだ？」

「ガイウス……」

いつも大らかに構えているガイウスの情緒不安定な様子にクリスは軽い驚きを覚える。

「原因はおそらくノルドで死にかけたことか、《大地の器》との干渉が原因でガイウス自身の資質が開花したからだと思うけど、ガイウスはその力をどうしたい?」

「どう……とは?」

「力を封じることならたぶんできる……」

“力”があることから目を逸らすのは欺瞞かもしれないけど、未来が見えてもそれが必ずしも良いこととは限らないと俺は思う……

確かに救えるものは多くなるかもしれないけど、相応の覚悟がなければ見えた未来に押し潰されるだけだ……

それこそ今回のように回避できなかった未来に心を痛め続けることになる」

「っ……」

「あまり深刻に考えなくて良い……」

“異能”を制限する技術はラツセル博士が既に形にしているから、明日改めて博士たちに相談しよう」

「………すまない」

ガイウスは溜め込んでいた息を吐き出して頭を下げる。

「こらっ! 君はそんな恰好で出歩くななんて何を考えているっ!」

と、そこにドアの向こうから怒鳴り声が響く。

「今の声……マキアスだけどうしたのかな?」

クリスが首を傾げると、数秒も待たずにドアが勢い良く開け放たれた。

「ねえねえリイン! せっかくだから夜のトリスタを案内してよっ!」

「待つてください、シャーリイさん。リインさんには私が話したいことがあるんです」

「ええ、そんなの早い者勝ちでしょ?」

シャーリイに続いてエマが乱入する。

「ふむ……クリス達との話が終わったのなら私も……」

さらにラウラも廊下から顔を出して主張する。

「はあ……とりあえず下に移動しようか」

リインの部屋に新しく増えたベビーベッドの中、この騒ぎにも動じずに静かに眠っているナユタを一瞥してリインはそう提案した。

その日は結局、消灯の時間までリインは多くの相談を受けることとなった。

・*

コンコン――

消灯の時間となり、身支度を整えてベッドに入ろうとしたリインは静かに窓を叩く音と気配に気付く。

「……普通にドアから入ってくれば良いだろファイー？」

気配の正体を察し、窓を開いてその少女を部屋に招き入れてリインは猫のように入ってきた少女に苦笑する。

「一応消灯時間だったから」

彼女なりに寮のルールを守っているのか、それとも確実に他の人の耳がないことを望んだのか。

どちらかを追究せずにリインは掛けておいた制服の上着をファイーに差し出した。

「とりあえずこれでも羽織ってくれ？」

「何で？」

首を傾げてファイーは聞き返す。

「まだ暑いと言ってももう九月だからな、その格好はどうかと思うぞ」

それがファイーの寝間着なのか、ほとんど下着とも言える格好から目を逸らしながらリインは答える。

「別に……わたしの身体なんて見てもおもしろくないでしょ？」

「良いから、着ないとルトガーさんの話はしないぞ」

交換条件を出されファイーは渋々と言った様子でリインの上着を受け取って袖を通す。

「それでルトガーさんと何を話したんだ？」

ファイーにベッドに座る様に促し、リインは椅子に座り卓上灯を点けて本題を切り出した。

「……………リインは知っていたの？ 団長が《紫の騎神》に乗っていることを？」

「ああ。とは言っても知っているのはそれくらいだ……」

細かい事情は知らないが、それでも何故「獵兵王」が生き返ったのか、原理とその代償も一通り説明できる」

「本当？」

「それを話すにはフィーにも覚悟してもらわなければいけないことがある……………だけど獵兵王に何を言われたんだ？」

「つ……………何のこと？ わたしは追い駆けたけど撒かれたつて——」

「そういう言い訳はここでは必要ないだろ？」

死んだと思っていた家族が生きていたんだ。撒かれたからつて素直に戻つて来るフィーじゃないだろ？」

リインの指摘にフィーは押し黙り、その沈黙が肯定の証拠だった。俯いてしまったフィーはそのまま微動だにせず、時間を掛けて重い口を開いた。

「騎神から団長の声が聞こえて来た時はまさかと思った。それで撤退した騎神を追い駆けた先にはゼノとレオもいて……………」

それを切つ掛けに語り出す。

ルトガー・クラウゼルは奇蹟の再会だというのに気軽に言葉を掛けて来た。

何故生きているのか、どうして教えてくれなかったのか、様々な事を問い詰めたがのらりくらりと飄々に答えははぐらかされてしまった。

そんな態度も懐かしく、死んだはずの父親ともう一度話せたことは何よりも嬉しかった。

だが、フィーにとつての幸せな時間は短かった。

「ガレリア要塞を襲った理由……………エリオットのお父さんを殺したのは、獵兵だからとしか答えてくれなかった」

「……………そうか」

「騎神の武器になっていた変な女の子がいたけど、お前には関係ないつて言われた」

「っ……そうか」

気になる言葉があったがリインは相槌を打つのに専念する。

「ゼノとレオも見物に、団長の復帰を見届けに来ただけって何も教えてくれなかった」

「とりあえずそれに関してはガルシアさんに報告しておこう」

ろくに説明をしようとしなかっただろう二人にリインはそう決意する。

「それで……ファイが今日までずっと悩んでいたことは何なんだ？」

言葉を止めてしまったファイにリインは促すように尋ねる。

「……………団長は……次に会ったら全力で殺しに来てってわたしに言った」

「それはまたどうして？」

突然飛躍した物騒な言葉にリインは首を傾げる。

「それは……団長が……わたしの仇だったから……」

「……………ああ、そう言う事か」

絞り出すように呟いたファイの言葉からリインは答えを推測して納得する。

ファイは戦災孤児としてルトガーに拾われた。

ならばその戦争を行ったのは誰かと考えれば真っ先に思い浮かべるのは彼の《西風の旅団》になる。

彼らが襲撃したのか、それとも巻き込んだのかどちらなのかは重要ではない。

「ファイにとっても、ルトガーさんは本当の両親や故郷を滅ぼした仇だったのか」

リインの推測をファイは小さく頷いて肯定する。

「そんなこと急に言われてもわたし……わたしは……」

手で顔を覆って嗚咽を漏らすファイにリインはそつと手を伸ばして彼女の頭を安心させるように撫でる。

「わたしは……わたしを生んでくれた親のことはもう思い出せない……」

わたしにとっての親は団長で、家族はゼノやレオ達だった……だけ

どみんなにとつてはそうじゃなかった」

「ファイ……」

「ねえリイン……わたしはエリオットみたいに団長たちを恨まないといけないの？」

わたしは団長の言う通り、顔も思い出せない人達のために復讐をしないといけないの？

団のみんなは家族だつて思っていたのはわたしだけなの!? ねえ教えてよっ!」

リインの胸倉を掴み、ファイはこれまで溜め込んで来たものを吐き出し答えを求める。

よく見れば目の下にはクマもあり、ろくに眠れていないのかもしれない。

「ファイ……」

ルトガーが何を考えてその真実を明かしたのか、当事者ではないリインには分からない。

「それはファイがちゃんと考えて決めないといけないことだ」

「やだ……リインが決めて……わたしはもう何も考えたくない……」

駄々をこねるように首を振り耳を塞ごうとするファイの腕をリインは掴んで止めると、ファイはリインの胸に顔を埋める。

「もう……やだ……」

「ファイ……」

体を預けて弱々しい声をもらすファイにリインは憤りを感じずにはいられなかった。

《西風の旅団》が何を考えているのかリインには分からない。

ファイをこのまま表側の世界に留まらせるための荒療治なのかもしれないが、だからと言ってそれまでの絆を一方的に切るようなやり方はとても容認できない。

「……ファイが望むなら……《西風の旅団》の記憶を消すことはできる」

それはリインにとつてもある意味禁忌としていた方法。

「え……?」

「ファイが彼らの事を覚えていることが苦痛だと言うなら……俺はそれを使ってもいい。良く考えて決めてくれ」

「わたしは………」

突然のラインの荒唐無稽な提案にファイは戸惑い、そして――

96話 踏み出す者たち

9月18日土曜日。

「うーん、あつと言う間に週末ね」

未だに重い空気が漂うⅦ組の教室にサラの気の抜けた言葉が響く。

「暑くもなく、寒くもなく、絶好の行楽日和でもあるし。明日の自由行動日は有意義に過ごすの良いわ……」

ま、来週の水曜日には実技テストが控えているんだけどね」

「サラ教官……」

「そして来週の週末には『特別実習』ですが、『学院祭』と言います。この状況で本当にやるんですか？」

飄々とした軽いサラの言葉にアリスが呆れるように肩を竦め、マキアスが尋ねる。

「あら？ 理事会では満場一致で両方ともやることが決まったけど、貴方達は反対なのかしら？」

「いやテロリストの問題もありますし、それにエリオットやクロウ先輩のこともありますから」

マキアスは言葉を濁して自粛するべきではないのかと提案する。

「確かにクロウのことは残念だったけど、だからこそ学院祭はやった方が良いつて私から進言させてもらったわ」

「何だど？」

無神経とも取れるサラの言葉にユースは顔をしかめる。

「あんたたちもそうだけど、一年生全体で以前とはだいぶ空気が変わっているのは判つてると思っけど……」

それは初めての戦場の空気に呑まれて日常にちゃんと戻って来れてないのが原因よ」

学院全体の空気の悪さをサラはそう結論付ける。

「修羅場を生き残って自信が付いたかもしれない。人の死に触れたことで畏れを抱いたかもしれない。非道なテロリストに憤りを感じたかもしれない……」

あの時こうしておけば良かったって後悔だっしてしてるでしょうけど切り替えなさい」

はつきりと切り捨てるようにサラは言い切る。

「何の因果か貴方達はテロリスト達と何度も相対することになっちゃったけど、本来なら貴方達はまだ子供で学ぶ学生なのよ……」

心を戦場から帰すためにも、学院祭はちゃんとやること……

一年生は義務みたいなものだから出し物が決められないなら特別実習のレポート展示でも良いわよ」

「むむ、それは流石に躊躇われるな……」

顔をしかめるラウラにサラは苦笑を浮かべて締めくくる。

「それじゃあHR終了。委員長、号令して」

「は、はい。起立——礼」

……

……

……

夕陽が差し込む教室の中、改めて教壇の前にリイン達は集まって、学院祭に向けて意見を交わす。

「さ、さすがに実習レポートの展示というのは冗談だろう」

「マキアスからすると黒歴史の展示にもなるもんね」

「うぐ……」

クリスの指摘にマキアスは凶星を突かれて唸る。

「と、とにかく来週明けにはどんな出し物をするか決めてしまおう」

「そうですね……水曜には実技テストがあつて週末は特別実習がありますし」

誤魔化すように話題を進めるマキアスにエマが頷く。

「そうすると、明日中には当たりを付ける必要があるな」

「他のクラスや有志の出し物も一通り調べた方が良いわね……内容がかぶったらお互いつまらないでしょうし」

ガイウスの言葉を補足するようにアリサが提案する。

「はいはいっ！ 出張《ノイエ・ブラン》っていろいろはどう？」

帝国の大都市にいくつか支店がある高級バーでさ、リインとかユースとかホストにすれば大繁盛は間違いないと思うけど……

お酒の仕入れはシャーリーの伝手でなんとかできると思うよ」

「却下だ」

そんな提案をしたシャーリーの意見をリインは一言で切って捨てる。

「じゃあ男女逆転劇は？ 二年前、レクターと一緒に行ったリベールの学園祭でそういうのやってて凄く面白かったけど」

「……あれか……」

「流石にそれは……」

「僕達の人数で劇の様な大掛かりなことはできないから無理だね」

先月のリベール旅行で学園祭を見学した組は唸り、クリスが固い意志の下でミリアムの提案を却下する。

「とりあえずアリスが言った通り、まず他のクラスが何をするのか手分けて情報を集めよう」

「二年生は進路もあるから有志限定でクラブ活動から参加して何かを出すって形で参加してくるって話だったな？」

「そこら辺はもう既に決まっている所もあるだろう。ちなみにチエス部は『チエス教室』を企画しているが」

ユーススの疑問にマキアスが頷いて答えてから視線はリインに向き、一同の目はそれに釣られて集中する。

「そういえばリインの同好会は何をするつもりなんだ？」

「ああ、それこそ展示だな……」

うちの同好会は元々人数が少ないし、帝国政府と学院側からも騎神の展示を頼まれていたからそれに因んで獅子戦役のレポートを何処かの教室を使って展示すると思う……

後はローゼリアさんが何か本を一筆書いてくれるとか言っていたけど……」

「お婆ちゃんか？ いったい何を？」

『実録、知られざる暗闘。ドライケルスを巡る十人の乙女たちの鞞当

て!』なんて言う題名の本らしいけど」

ラインの口から出て来た題名に一同は押し黙る。

「たしかエマのお婆ちゃんは『獅子戦役』を実際に経験した魔女だったんだよね?」

「そう考えると歴史書に語られなかった実話なのだろうか……」

「その……大丈夫なのか? あまり大帝のイメージを損なう本を出すようなら帝国政府に発禁にされるかもしれないが」

「そうだったらそうだったで構わないみたいだな。その判断は実際の本が来てから政府に任せれば良いさ……」

ローゼリアさんも面白半分でやると言っているだけだから」

「ともかく特別実習のレポートの展示をするとラインさんの同好会の展示に被ることになるからやっぱり何か出し物を考えた方が良いでしょうね……」

エリオットもそれで良いかな?」

「え………うん………」

会話の輪の中においても終始上の空なエリオットはクリスマスに話を振られても曖昧に頷く。

納得いかない。

一秒でも自身を鍛えることに時間を使いたい。

学院祭などそれぞれこそサラが提案した通りレポートの展示だけで良いじゃないかと、表情で不満を訴えているエリオットに一同は閉口する。

しかし――

「ちよつと辛気臭い雰囲気にならないでよ」

そんな空気を読まずシャーリイが文句を言う。

「おい、そんな言い方――」

マキアスが注意しようとするが、その言葉を遮ってシャーリイは続ける。

「パパが死んだからってシャーリイ達がその子に遠慮する必要なんてないでしょ?」

そもそも軍人なんて殺して殺されるのが仕事みたいなものなんだ

から、それくらいの覚悟はしていたんじゃないの?」

「そうだよね。ボクもそこら辺不思議だったんだよね」

これまでであえて黙っていたミリアムはシャーリーの言葉に同意する。

「人間なんてみんな死んじゃうのは決まってるんだし、何でエリオットはいつまでもそんなに拘ってるの?」

「なっ!?!」

猟兵のシャーリーの口からならばともかく、無邪気なミリアムからのドライとも言える死生観に一回は絶句する。

——そういえば、あの子も似たようなことを言っていたな……

命の重さや尊さを知らない無智さと死生観にリインはミリアムと“あの子”が改めて姉妹なのだと思わしむように認識する。

「あはは。意外だな学生の中で話が分かる人がリイン以外にいるとは思わなかったなあ」

「リイン……」

咎める様な視線を送って来るアリサにリインは肩を竦めた。

「二人とも、それくらいにしておくんだ。けどある意味では俺も二人と同じ意見だ」

「リインさん!?!」

驚くクリスを手で制してリインは続ける。

「エリオットの復讐の手助けをするのはやぶさかじゃない……」

「だけど、俺が気遣うのはそこまでだ。だから学生生活を優先させてもらおうし、エリオットも自分の復讐にみんなを巻き込むつもりはないんだろ?」

「それはもちろん」

「なら気が乗らないとしても俺達の学院祭の手助けをしてくれるよな?」

「う………ん………」

渋々と言った様子でエリオットは小さく頷いた。

・*

「あ、あのく、リイン君」

寮に帰ろうとしたリインは呼ぶ声に振り返る。

「トワ会長……それにアンゼリカ先輩とジョルジュ先輩……」

「やありイン君。少し時間をもらえるかな？」

「実は君に聞きたいことがあって待ち伏せさせてもらったよ」

「聞きたい事ですか？」

「ああ、ここでは何だから移動しても良いかな？」

そう言つてアンゼリカは下校している生徒達を横目に示して提案する。

「ええ、構いませんが。内密の話でしたらⅦ組の教室に行きますか？」

「いや、技術棟の人払いをしておいたからそこで話そう」

「分かりました」

深刻な話なのか、真剣さを感じられる申し出にリインは頷いた。

技術棟の大きな作業用のテーブルに着くと最初に口を開いたのはトワだった。

トワは改まったように姿勢を正してリインに頭を下げた。

「リイン君、改めてになっちゃうけどオルキスタワーではありがとう」

「トワから話は聞いたけど、僕達からも御礼を言わせて欲しい」

「まったく……超高層ビルから投げ飛ばされたと言われた時は流石に肝が冷えたよ……」

もしもリイン君がいなければここにトワはいなかったと思うと……」

「いえ、当然のことをしたまでです……と言いたいんですが」

「おや？ それはどういう意味だい？」

歯切れの悪い返答にアンゼリカは首を傾げる。

「実はその時のことはあまり良く覚えてないんです……」

俺の記憶ではフェンリル——最新の共和国製の導力爆弾をヴァリマールで成層圏の外に捨てて、逃げきれずに爆発に巻き込まれたところで途切れているんです」

「それは……」

「列車砲に対抗して共和国が開発していた戦略級導力爆弾のことだね……」

公開された破壊力を見たけど、本当によく無事だったね」

改めてリインの口から聞かされるその時の出来事にアンゼリカとジオルジュはリインの無事な姿に喜ぶ。

「護衛官としての務めを果たしたただけですから、あまり気にしないでください……」

それでわざわざ人払いをしてまで聞きたい事とはいったい何ですか?」

「あ……」

本題に切り込むリインにトワが口を開き——言葉を呑み込んで俯いてしまう。

「トワ会長?」

「トワが話せないなら私から聞こうか?」

言い淀むトワを案じてアンゼリカが提案する。

「ううん、大丈夫……」

リイン君に聞きたいことはオルキスタワーを襲った《蒼の騎神》のことなの」

「オルディーネの? でも俺が知っていることはトワ会長たちが知っていることと大差ないですよ」

リインがそれを知ったのはそれこそ目を覚ましてから、それ以上はヴァリマールからの報告くらいだろう。

「ああ、私達もそれは聞いている」

オルキスタワーを襲撃した《蒼の騎神》は腰から下の下半身を残して撃破された。

公式の扱いでは起動者は死亡したと扱われ、《蒼》の下半身は現在旧校舎に収容されている。

だがリインの感覚では《蒼》は生き延びていることは分かっている。が、それをトワ達に説明する理由はない。

「騎神のパイロット……起動者って言うんだよね?」

リイン君は《蒼の騎神》の起動者が誰だか知ってるの?」

「クリス達から帝国解放戦線のリーダーである《C》が起動者だったとは聞いていますが」

「そっか……」

期待していた答えではなかったことにトワは肩を落とす。

「いったいどういう事なんですか？」

「うん……僕達もまだ信じられないんだけど《蒼の起動者》がクロウだったんじゃないかってトワに相談されたんだ」

「クロウ先輩が？ でもクロウ先輩はガレリア要塞で」

「うん、それは判ってる……」

《蒼の起動者》の姿も直接見たわけじゃないし、声だって機械で変わっていたから本当にクロウ君だったのか自信がないんだけど」

「クロウの死体は損傷が激しく、身元は死体が持っていた装備と生徒手帳で判別された……」

つまり僕達はクロウの葬儀には立ち会ったけど、ちゃんと亡骸を確認したわけじゃないから」

ジョルジュもまた言い辛そうにトワの言葉に補足説明を入れる。

親友が本当に死んだのか、それとも生きているのか。

それを確かめたくてリインに一縷の望みを掛けて話しかけて来たのだとリインは察し、それに答える。

「《蒼の起動者》についてはオルディーネが見限っていない限り、まだ生きていますでしょう」

「本当っ!？」

「ええ、《騎神》は二年後の『黄昏』のために起動者を選定しなければいけません。例えば死んだとしても必要ならば不死者として蘇らせるでしょう」

「な、何だか途方もない話が出て来たけど……」

「ですが《蒼の起動者》がクロウ先輩だったとして、その意味を先輩達は分かっているんですか？」

「それは……」

「《蒼の起動者》は帝国解放戦線のリーダーである《C》だった。つまり《C》の正体はクロウ・アームブラスト先輩だったことになります」

「はつきり言ってくれるね」

齒に衣着せないリインの指摘にアンゼリカは苦笑を浮かべる。

「実はクロウの正体がテロリストだったとトワに打ち明けられた時、納得している自分がいたよ」

「アンちゃん!？」

「……………そうだね。言われてみれば一年の頃のクロウは何処か余裕がなくて何かしでかしそうな雰囲気があったね」

「ジオルジュ君も……………」

「トワもあり得ると思ったから《C》とクロウが同一人物でないかと悩んでいたのだろうか？」

「それは……………」

アンゼリカの指摘にトワは口ごもる。

「すまないがリイン君。この件に関しては帝国政府には報告しないでくれるかな？」

「それは構いませんが、どうするつもりなんですか？」

「なにテロリストの仮面の下が本当にあのバカなのか確かめに行くだけさ……………」

「もしもクロウならば帝都の地下で背中から私を撃つたのはあいつになるのだから、トワを危険な目に晒したことも含めて落とし前は付けてもらわないといけないだろ」

「そういうリイン君はもしまた《蒼の騎神》と対峙することになったらどうするのかな？」

「もちろん斬ります」

ジオルジュの質問にリインは即答する。

「俺はクロウ先輩と先輩達ほどに親しいわけじゃないというのもありますが、彼らはやり過ぎた……………」

先輩達には悪いですが、例えばクロウ先輩だったとしても俺は刃を鈍らせるつもりはありません」

本気を感じさせる凄みにトワ達は思わず唾を呑む。

そこにいるのは人の良い後輩ではなく、命のやり取りを知る剣士なのだと思知らされる。

「だけどもあ……誰かが彼を悔い改めさせて更生させるといふのならその限りではありません」

「おや？ てつきりエリゼ君を傷付けたテロリストなのだから問答無用で滅するのかもしれないのだけど」

「はは、何を言うんですかアンゼリカ先輩。もちろんそれはそれでちゃんと報復させてもらいますよ」

笑顔のリインに先程以上の凄みをトワ達は感じる。

「話はこれでおしまいですか？」

「うん、ごめんね忙しいのに」

「いえ、これくらいは構いません……」

大切な人が生きているかもしれない。それを確かめたい気持ちは良く分かりますから」

そう言つてリインは席を立とうとしたところで《ARCUS》が着信音を鳴らした。

一言断つて出るとサラが不機嫌そうな声で告げた。

『リイン、あんたにお客様よ』

そうして急かされて戻った第三学生寮には――

「遅いですわよっ！ リイン・シユバルツアーツ！」

《神速》のデュバライが待っていた。

・*

「っ……」

夕陽に染まった空。

旧校舎から飛び立ったヴァリマールを見上げてエリオットは悔しそうに歯ぎしりした。

「僕は……どうしてこんなに弱いんだ」

九月に入ってから始めた本格的な訓練。

クリスが個人的にリインから受けていた訓練に混ざってはみたものの、思い知らされるのは彼らとの違いだった。

「くそっ！」

旧校舎に近い森の中、エリオットは形見としてもらった父の大剣を振り回す。

「っ——この——」

二度三度、力任せに振り回すが一振りするごとにエリオットの身体は流れ、むしろ武器に振り回されていた。

「——あっ！」

その結果大剣は手からすっぽ抜け、エリオットは盛大に顔から地面に倒れ込む。

「何で……クリスはあんな簡単にブリランテを振り回していたのに……」

数ヶ月前、新しい魔剣をリインに貰ってはしゃいでいたクリスのことを思い出してエリオットは悔しがる。

彼は剣から始まり大剣に槍、果てには魔導杖さえも簡単に使いこなしてみせた。

聞けばクリスが本格的に鍛え始めたのは今年に入ってから、たった九ヶ月の下地の差にエリオットは途方もない差を感じてしまう。

「どうして僕はもっと早く鍛えてなかったんだろう……そうすれば父さんは死なずに済んだのに……」

どうして僕は音楽なんかに拘って——」

「ふっ……笑止っ！」

「え……？」

自分を振り返る悔恨の言葉は誰もいないはずの森の中で自分以外の声に遮られ、エリオットは起き上がって振り返る。

しかし声が聞こえてきた背後には誰もいない。

「どこを見ている私はこっちだっ！」

声を頼りに顔を上げれば木の上に腕を組んで一人の男が立っていた。

「はあっ！」

男は木の上から飛び降りてエリオットの前に着地する。

「わわっ！」

突然の闖入者にエリオットは後退り、足をもつれさせて尻もちを着

く。

「ふ……」

「な、何がおかしい!?」

笑われたことにエリオットは苛立つて言い返し、気付く。

まだ晩夏で暑い時期だと言うのに長袖のトレンチコートを着込み、顔には頭まで覆い隠す紅毛の鬘をつけた獅子のマスク。

一言で表現するならまごうことなき変質者なのだが、エリオットは怯みながら改めて睨む。

「その程度であの『獵兵王』を倒そうなどは片腹痛い」

「くっ……いきなり出てきて何を!」

エリオットは眈を上げ、立ち上がり改めて珍妙な格好をしている不審者に言い返す。

「だいたいお前は何なんだ!? ここは旧校舎の近くとはいえ士官学院の敷地内。部外者は立ち入り禁止のはずだ!」

「ふっ……私か……なに通りすがりのサラリーマンさ。単身赴任のな」

「ええ……」

返ってきた答えにエリオットは何とも言えない気持ちになる。

他の格好は良いが、顔を隠す紅毛の獅子のマスクが全てを台無しにしている。

エリオットは後ずさりして《ARCUS》を取り出し――

「待ちたまえ、私は君の父上であるオーラフ・クレイグに少々縁がある者だ……」

あまり表向きに君と会うことはできないため、このような姿になってしまったことは詫びておこう」

「父さんの?」

通報しようとした手を止めてエリオットは改めて男を見る。

「同じ理由で本名は明かすことはできないが、私のことは『紅獅子』。もしくはレオマスクと呼ぶが良い」

「は……はあ」

父オーラフは正規軍の中将だったのだから、身元を明かせない知り

合いがいてもおかしくないかもしれないとエリオットは一応納得する。

「……………それで父さんの知り合いが何の用ですか？ 貴方も僕に復讐をやめろと言うんですか？」

「そのつもりだったが、どうやら無駄のようだな」

紅獅子はそう言つて踵を返すとエリオットが放り投げてしまった斬馬刀を拾う。

「この武器を使いこなすには君では体格が足りないだろう。悪いことは言わん。身の丈にあつた武器を使うべきだ」

「そんなこと言われなくても分かっている。だけど僕は父さんの武器で仇を討ちたいんだ」

一度だけリイン達にも相談したが魔導杖を極めた方が良いと言われてしまい、こうして彼らの目から隠れるように斬馬刀の練習をしている。

「つ……………そうか……………」

紅獅子はおもむろに天を仰ぎ、何かを堪えるような素振りを見せてからエリオットに告げる。

「ならば君が良ければ私が斬馬刀の手解きをしようじゃないか」

「え……………？」

その日からエリオットは人目を忍んで紅獅子と会うこととなった。

97話 プロジェクト・テイルファイニング

9月19日、日曜日、自由行動日。

「やありイン君。おはよう」

「アンゼリカ先輩？ どうしたんですかこんなに朝早くから？」

「ちよつとリイン君に頼みたいことがあってね、ナユタ君もルフィナさんもおはよう」

「あうっ！」

「ふふ、おはようアンゼリカさん」

アンゼリカの挨拶にルフィナに抱かれていたナユタは元気よく応じる。

「ふむ……リイン君。やはりこの子は——」

「それ以上ナユタに近付いたら破甲拳ですよ。アンゼリカ先輩」

邪で真剣な顔をするアンゼリカにリインは拳を握って牽制する。

「ぐぬぬ……」

「それよりも朝食がまだでしたら用意しますが？」

「いやそれには及ばないよ」

「そうですね……あ、そういうえばアンゼリカ先輩達は今日の夕方から暇ですかね？」

「ん？ 私達ということは他にはトワとジョルジュのことかな？」

「ええ、実はノーザンブリアでの実習の時にサラ教官とある秘境の温泉に招待する約束をしたんです、だけどせっかくならⅦ組のみならず——」

あ、いえやつぱり聞かなかったことにしてください」

目を輝かせたアンゼリカにリインは失言だったと察して先の発言をすぐに撤回する。

「いやいやリイン君。何を水臭いことを言っているんだね。私とリイン君は共にリベールの武術大会に出た仲間じゃないか」

一步距離を取ったリインの間合いにアンゼリカはすかさず踏み込み、肩に腕を回してリインを捕まえる。

「いや、持つべきはできる後輩だね。トワに関しては私から言っておくよ。どんな手段を使っても時間を作らせてみせるさ」

「えっと……ジョルジュ先輩は——」

「男は知らん」

いつそう清々しい程にアンゼリカは言い切った。そして——

「おや？」

そしておもむろにリインの背後に視線を送り目を丸くした。

「どうかしましたか？」

リインはアンゼリカの視線を追って振り返るが、そこには誰もいない。

首を傾げつつ、リインは視線を戻す。

「アンゼリカ先輩、何か——」

「だーれだっ♪」

次の瞬間、リインの視界は背後から誰かに抱き着かれるようにして覆い隠された。

「こ、これはっ!?! まさか伝説の後ろから『だーれだっ?』——くっ

……リイン君そこを変わってくれたまえっ!」

「っ……」

視界が塞がれているが、きつと今のアンゼリカは血走った目をしているだろうことは容易に想像できる。

「その声はレンか?」

「ふふ、正解」

答えを告げるとレンは楽しそうに笑ってリインの顔から手を放す。

「リベールで会った時から一ヶ月くらいか……また綺麗になったな」

「ふふ、当然よ。なんたって今のレンは成長期なんですから」

自然と褒めてくるリインにレンは誇らしげに応える。

「通商会議の時はありがとう。おかげでみんなを守ることができたよ」

「御礼を言うのはレンの方よ。ありがとうリイン。あの人達を守ってくれて」

「……どういたしまして」

リインは微笑を浮かべてレンが礼を言って下げた頭を優しく撫でる。

「それでね。リイン、御礼なんだけど——」

次の瞬間、リインは一瞬でレンから距離を取り、口元を腕で隠す。

「お、御礼なんて別に良いよ」

「あら、リインたら何を想像したのかしら？」

レンはクスクスと笑い、意味深に自分の唇を指で触れる。

「リイン君。ちよつと話を聞かせてもらえるかな？ 場合によっては私はまた修羅を降ろさなければいけないと思うから心してくれたまえ」

「あ、アンゼリカ先輩？」

壁際まで逃げたリインを追い駆け、アンゼリカは壁に両手をついてリインの逃げ道を塞いだうえで血走った目を寄せてくる。

「リイン君っ！ 君は——」

「あら、お姉さんもレンの御礼が気になるのかしら？」

激昂しようとしたアンゼリカだったか、いつのまにか間合いを詰めていたレンが背伸びをして彼女の耳元で囁き、妖しく息を吹きかける。

「はふっ……いやいや、私はこの程度で屈したりは——」

「へえ……」

目に小悪魔な光を宿しレンはアンゼリカのうなじ、頬をゆつくりと撫でて行く。

「がっ——ぐっ……否っ！ 私は美少女を愛でたいのであって、私が愛でられたいわけじゃない！」

レンの手が動く度に身悶えしていたアンゼリカは気合いでその誘惑を跳ね除けて吠える。

「あら、残念。もつと凄いことをして上げようかと思っただけど……」

「もつと凄いこと……ゴクリッ」

「あーっ！ そこまでにしてくれナユタの前で変なことはしないでくれ」

エスカレートしそうな空気にリインは手を叩いて雰囲気を壊す。

「は〜い。また遊びましようねお姉さん」

「くっ……これで勝ったと思わないでもらおうか」

余裕の笑みのレンに対してアンゼリカは悔し気に負け惜しみを言う。

そんなアンゼリカにレンは背を向けて、ルフィナに抱かれているナユタを覗き込む。

「ふふ、この子がノーザンブリアの……くすつ、可愛い……」

「レン……」

「大丈夫よ。リイン……レンは大丈夫」

レンは笑顔で振り返り、持っていた鞆をリインに差し出した。

「これは？」

「クロスベルを守ってくれた御礼よ。中身はフェンリル——」

「なっ!？」

「——を基にしてレンが凶面を引いた騎神用のパーツよ。後はおじいさんの意見を聞いて造ってもらいましょう」

驚いたリインにいたずらが成功したと言わんばかりにレンは笑う。

「騎神のパーツ？」

差し出された鞆を複雑な気持ちになりながらリインは受け取る。

「そう……騎神の欠点は燃費の悪さ……」

過剰な力を流せばすぐにオーバーロードするし、全開の戦闘をすれば霊力が枯渇して動けなくなる。そうでしょ？」

「ああ……」

「フェンリルは言ってみれば導力ジェネレーターを爆弾に変えた物。その爆発の機構を取り除けば結構な出力の増幅器になるわ……」

これを騎神に取り付けければ、霊力の消耗を防げるし、過剰な霊力の供給に關しても回転体で受け流すことができるようになって機体への負担を減らせるでしょうね」

「それはありがたいな」

一秒でも長く、少しでも機体が頑丈になって戦えるという効果は《銀》の強化プランを聞いたばかりのリインにとってとてもありがた

い内容だった。

「そうでしょ？ それじゃあおじいさん達のところに行きましようか？」

「ああ……って先にアンゼリカ先輩の用が——」

「ふむ、面白そうだから私も一緒に行っても良いかな？ 私の用は特に急ぐことではないからね」

「まあ、来てもアンゼリカ先輩にとっては退屈な話になるかもしれないですけど」

アンゼリカが良いと言うのならとリインは受け入れて、一同は旧校舎へと向かうことになる。

「それじゃあ行つてきます。ルフィナさん、ナユタ」

「はい、いつてらっしやい」

「あうあう」

「ふふ、またねナユタちゃん」

「くっ……私にはトワがいるというのにこのときめきは何だ!？」

ルフィナとナユタに見送られて三人は第三学生寮を後にするのだった。

・*
・*

「まずは私からだな」

そう言って旧校舎の一室でシュミットは教壇に立ち、導力プロジェクトクターでそれを映す。

「これが私が図面を引いた新たな機械仕掛けの神 “ティルフィング”だ……」

ノーザンブリアから回収された7トリムのゼムリアストーンだが、一機を作るだけならともかく五機の機神を作るのは不可能だろう……

そこで骨格の重要部分のみをゼムリアストーンで作ることにした……

フレームだけをゼムリアストーンにすることで何とか五機のフ

レームを作ることが出来るだろう」

「次はワシじゃな」

続いてアルバート・ラッセルが教壇に立つ。

「ワシが用意したのはアルセイユに使っていたエンジンの改良型じゃ……」

本来ならリイン君が生成してくれる “雲のクオート” 待ちなのだが、《箱庭》の特殊重力環境を利用して生成した高純度のクオートをサブに搭載することでカレイジャスに使った導力エンジンを出力をそのままに半分の体積にさせることができた……

まだサンプルとして一基しか作れておらんが、ツアイスに送って残りの四基を組み上げてすぐに持って来てもらおう予定じゃな」

ラッセル博士と入れ替わり、ヨルグが教壇に立つ。

「わしからはシユバルツァーが考案したセピス鋼を利用して再生装甲を作ることになった……」

この装甲は例え損傷しても大気や大地から七耀の力を取り込み、自動修復する機能を持っている……

生産体勢についてもクロスベルの工房に用意し、必要なセピスに関する結社から貰っておいた」

「さあ、ティータ行きなさい」

「は、はいっ！」

そしてエリカに促されてティータが教壇に立つ。

「えとえと、お母——じゃなくてエリカ博士の代わりに報告させてもらいます……」

“テイルフィング” の操縦方法については導力車や飛行艇のような操縦桿を使ったシステムではなく、《ARCS》を利用して騎神の操作システムを採用しました……

これにより起動者は機体を操縦する必要はなくなり、機体と同調することで自分の身体のように使うことができますようになります……

ですがシステム上、全てをこの操作では行えないので、人体に存在しない機構については操作するための操縦桿は設置する予定です」

そして最後にレンが教壇に立つ。

「レンが用意したのはあくまでも草案と簡単な図面だけ……」

フェンリル式アクセラレータ。騎神を一秒でも長く戦わせ、起動者や機体の負担を軽減させて出力を上げて導力機関回復を促進させるシステムだけどきつと『テイルフィング』にも使えると思うわ……」

これによって今まで導力不足で搭載を断念していた兵装や装備を載せることができるはずよ」

以上、五名のプランが『雲の五機神』の製造プランだった。

「どうよう？」

一通りのプレゼンテーションが終わったところでエリカが爛々と目を輝かせて

「どうって言われても……楽しそうですね」

「ええ、すつごく楽しいわよ」

「……俺……雲の機神の話をしたのは木曜日だったはずなんですけど……」

たった三日で『雲のクォーツ』以外のものを用意した博士たちの手腕にリインは褒めて良いのか、呆れるべきなのか悩む。

「まあ俺としては仲良く喧嘩しないで開発してくれるなら文句はないんですけど」

釘を刺すようにリインは問題児四博士たちを睨む。

「何を言っておるシユバルツァー。私達は決して仲違いをしているわけではない」

「うむ。現にこうして握手もできるしいう」

「だから安心してお前は『雲のクォーツ』を作することに専念するといいい」

示し合わせたようにラッセル達は仲が良いとアピールする。

「あ、そのことなんだけどリイン君。こっちから一つ要望を出しても良いかしら？」

「エリカ先生？」

「まず前提の確認なんだけど造る『機神』は五体で良いのよね？」

雲の力〃は七分割にするって言ってたと思うけど」

「ええ、その内の一つはヴァリマールに組み込んで、もう一つに関して

は七耀教会に預けようと考えています」

「七耀教会……？ 何であいつらに？」

エリカは嫌そうに顔を歪めて聞き返す。

「古代遺物ではないですけど、『至宝』に準じる力ですからね。無視すると後々うるさくなるってルフィナさんが言っていました」

「それは……たしかに……」

「大丈夫です。何も本当に欠片を渡すつもりはありません。互いの折衷案は一応考えてあります」

「そう……なら良いけど、とにかく私達が造る『機神』は五体……」

そしてここには私を含めて、それなりの博士が四人いるのよね」

「……………何が言いたいんですか？」

嫌な予感を察しながらリインはエリカに先を促す。

「えつとね……五体目の機神はちゃんと合作にするから四体は私たちの自由裁量に任せてちょうだい」

手を合わせて、拝むようにエリカはそんなことを宣った。

「エリカ先生……」

「だってこれだけのものなのよ!? 一から十まで私色に染めた機体にしたいと思うのは当然よね!」

呆れるリインの視線を振り払い、エリカはラッセル達に同意を求め
る。

「ラッセルの娘のくせに中々良いことを言う」

「まあ確かに邪魔されずワシだけの一体を組みたいとは思うな」

「異論はない」

「ねっ！ 爺たちもこう言ってるからさ。何よりも私達にとっての仲良くって言うのはお手々繋いで一つのを造るとかじゃなくて、それぞれの技術のぶつけ合いのことを言うと思うのよ……」

もちろんさつき発表したそれぞれの技術プランは共通させた下地
にすることが前提よ……

その上で四体の機神でそれぞれの技術を擦り合わせしてから、五体
目を合作にする方が効率的にも技術的にも良いと思うの。だからお
願い」

「あう〜お母さん、ずるい……」

「仕方ないわよ。レン達じゃおじいさん達程の技術力はないんだから」

楽しそうな計画の蚊帳の外にされたティータはエリカを恨めしそうにいじけ、レンがそれを慰める。

リインはため息を吐き、博士たちを見回す。

誰も彼もエリカの提案に異を唱えることなく、むしろそうして欲しいと目が訴えている。

「分かりました」

「よしっ!」

リインの了承の言葉にエリカは拳を握って喜ぶ。

「あ、あと操縦系に《ARCU》を使うからⅦ組の中でテストパイロットしてくれる子を紹介してくれないかしら?」

「それなら俺がやりますよ?」

「それは良いんだけど、やっぱりできるだけ多くのデータが欲しいのよ」

「そうですか」

エリカの答えにリインは候補を考える。

真つ先に浮かぶのは《紫の騎神》への復讐心を抱えているエリオット。

次いで《緋》があるものの、操作そのものに慣らしておく意味がありそうなクリス。

他にはラウラやシャーリイ辺りが興味を持つかもしれない。

「だけど今は学院祭の準備もあるんですけど? とうか学院祭が終わったら帰るって話、忘れてないですよね?」

「大丈夫大丈夫。何とかするから」

気軽に言うエリカにリインはマードックに謝罪の手紙を送ることを決める。

「ふむ、ならば私が立候補して良いのかな?」

と、それまで黙って会議を聞いていたアンゼリカが挙手した。

「そういえば先輩達も《ARCU》を持っていましたね」

「ああ、私にも『騎神』と戦う理由があるからね。学院祭のことも二年生は有志での参加だからリイン君達ほど忙しくないからね」

「と言っていますか？」

「そこら辺は造りたい機体コンセプトと立候補者の数次第でしょうね」

「うむ、今はそれで良いさ。だがタダで候補者にしてもらうと言うのも些か心苦しいのでリイン君、君達Ⅶ組はまだ学院祭の出し物を決めていないんだっかね？」

「はい、そうですけど」

「ならその手伝いをするのを対価にさせてもらうのはどうかな？ちやうどⅦ組に合いそうな企画を私は知っているからね」

98話 親睦会

——追伸。二年前にレグナートから頂き、王家で買い上げた金耀石を同封しました……

来たるべきリイン君の戦いのためにお役立てください。

このような支援しかできず申し訳なく思いますが、リイン君が無事に帰って来ることを祈っています。

クローディア・フォン・アウスレーゼ

・*

「ううむ……」

夕方、届いた小包と同封されていた手紙を読んでリインは唸る。

——結局クロスベルではちゃんと挨拶をできなかったから……

通商会議で助けられた御礼と、無茶をしたことについてのお説教がしたためられた手紙にリインは気まずそうにため息を吐く。

「それにしても……」

手紙にあつたように同封されていた金耀石にリインはため息を吐く。

既にそれぞれの属性の七耀石の契約は終わっているため、これをブルブランに届ける必要はない。

「博士たちに毒されたかな」

少し前の自分なら畏れ多いと遠慮していたが、すぐに金耀石の活用方法を模索していたことに項垂れる。

「あれ？ どうしたんですかリインさん？ そんなところで座り込んで？」

二階から降りて来たクリスは郵便受けの前で正座しているリインに首を傾げる。

「クリス……いや、何でもない」

リインは立ち上がって首を振る。

クリスを先頭にⅦ組の一同が降りてくる。

「それにしても何なんだ？ 水着を持って玄関に集合とは？」

マキアスが朝食の時に言われた約束事に改めて尋ねる。

「ああ、ノーザンブリアでサラ教官と約束したって言うのもあるけど、Ⅶ組が発足して半年……」

ミリアムとシャーリイが新しく仲間になった歓迎会も含めて親睦会を——」

「リインツ!!」

リインの言葉を遮ってサラが寮の扉を全力で開け放った。

「この日を待ちわびたわよっ！ さあ早くっ！ 私を楽園に連れていきなさいっ！」

「サ、サラ教官!?!」

「何だこの異様なテンションは？」

荒ぶったサラにエマとユースは目を丸くする。

「落ち着いてください、サラ教官。ゲストも来るのもう少しだけ待ってください」

「そんなの後で連れて来ればいいでしょ？ 私は休日だって言うのに朝からビールを一滴も——」

「サラ教官——」

「はい……」

リインに凄まれて一瞬でサラはその荒ぶったテンションを落ち着かせる。

「いったい何なんだ？」

「“紫電”のこの取り乱し様……良く分からないけど楽しいことになりそうだね」

「うんうん、いったい何をするんだろうね」

戸惑うガイウスの眩きを他所にシャーリイとミリアムは期待を膨らませる。

「お邪魔しまーす」

「やあ美しいⅦ組の諸君。今日はよろしく頼むよ」

「お招きありがとう」

そうしている内に寮の扉が再び開き、トワとアンゼリカ、ジョルジュ。

「リインさん、お待たせしました。頼まれた映写機も持ってきましたよ」

「ふふ、Ⅶ組のお兄さんお姉さん久しぶりね」

さらにはティータとレンを始めとした四人の博士にダンが続いて入って来る。

「なっ!？」

広めのリビングでもⅦ組と来訪者で二十人を超えた人数では息苦しきを感じる密度となる。

「ふむ……この人数で親睦会と言うならキルシェに行くのだろうか？

いやそうなる何故水着が必要なのだ？」

ラウラが首を傾げる。

「それについては移動してから説明するよ」

リインはおもむろに方石を取り出す。

「少し光るけど、安全なものだから安心してくれ」

次の瞬間、方石が光を放ち集まった一同を呑み込んだ。

「——なっ!？」

眩しさに目を瞑ったユーシスが次に目を開いた時、星の海とも言える光景に言葉を失った。

「な……な……な……何だこれは!？」

「これは……異空間に強制移動させられた？」

マキアスが絶叫し、エマは冷静に務めようとしてその身に起きたことを分析しようとする。

「うわーなにこれすごいつ!」

「……………あれ？ 何か見覚えが…………」

「……………クリス達は驚いていないようだが知っていたのか？」

絶景に感嘆の息をもらしながらガイウスは動揺していないクリス達に尋ねる。

「ええ、僕はだいたい前に」

「わたし達はノーザンブリアの時に教えてもらった」

「牢屋からいきなりだったわよね……」

「僕達もガイウス達みたいに驚いたよ」

先にその存在を知っていたクリス達は改めて周囲を見回す。

「よっしやー！ 待ってなさい 《グランⅡシャリネ》 ツー！」

「落ち着け」

叫びながらどこかへと駆け出そうとするサラの首根つこをリインは掴み、一同に向き直る。

「ごほん………ようこそ 《影の箱庭》 へ。歓迎しますよ」

・＊

《影の箱庭》。

かつて《影の国》と呼ばれた高位次元の世界であり《空の至宝》のサブシステムを独立させてアーティファクト化したものだと言明されたエマはあまりの事に言葉を失った。

「改めてとんでもないですね。リインさんは」

「はは、ローゼリアさんにも同じことを言われたよ」

内心でエマとセリーヌをちゃんと入れることができたことに安堵しながらリインは応える。

「そこでどうしておばあちゃんの名前が出るんですか……」

嘆くようにエマは肩を落とす。

「まさかと思いますが。姉さんも関わってないですよね？」

「えつと……」

言い淀むリインにエマは更なる虚脱感に襲われる。

「と、とにかくエマもみんなと一緒に温泉に入ってきて来ると良い……」

ローゼリアさんに想念をもらったからエリンの里の温泉も再現できてるから」

「本当ですか？ 寮はシャワーしかなくて実は温泉が恋しかったー
ーってそうじゃなくて！」

誤魔化されそうになったエマは頭を抱えて吠える。

「何かいろいろすまない。とりあえず話は後で聞くから、温泉に行く

と良い」

「……………そうさせてもらいます。ところでリインさんは何をしているんですか?」

「俺はホストとして食事を作ろうかと思っただけ……」

大樹から食料は得られても直接料理は出せないから」

「料理って……あの人数をですか? 言ってくれたら手伝いますけど」

「大丈夫だよ。ほら、シャロンさんが手伝ってくれるし——」

「それにちよつとした裏技を使うから」

と、二人になったリインがエマの申し出をやんわりと断った。

「……………リインさん……もしかして《分け身》で料理をするつもりですか?」

「ああ、こういう細かい作業を別々にやらせるのが《分け身》の良い練習になるって教えてもらったから」

「そうなのかもしれないですけどね。体術の高等技術をそんなことに使うのはいかがなものでしょうか?」

魔女であるエマにとって専門外ではあるがそれでも高等体術と分かる技をそんなことに使おうとするリインを怒ろうとして——

「でもシャロンさんは三人になってやってくれているんだけど」

“大樹”の前に設置した調理スペースでは第三学生寮のスーパーメイドが三人になって調理を行っていた。

「……………寮の掃除や洗濯、食事の準備を完璧にしているのは……………もしかして……………」

「ああ、シャロンさんが分け身を使って分担しているからだな」
その事実にはエマは膝から崩れ落ちた。

・*

「いっちばーんっ!」

水着に着替えたミリウムは助走を付けて湯船に飛び込む。

「あははは、プールと違ってあったかいけど、なんかたのしー!」

そうして泳ぎ出すミリアムに一同はため息を吐く。

「この阿呆が……温泉で泳ぐなっ！」

ユーシスが一喝し、取り押さえるつもりで湯船の中に入って行く。

「あはは、ところで良いんですか？ リンさんに頼めばちゃんと男湯と女湯で分けられるのに？」

「ふむ、そうなのか？ 東方では裸の付き合いと言って男女一緒に入るものが温泉だと聞いているのだが……」

流石に裸になるのは抵抗があるが水着を着ているのだし、温かいプールだと思えばそこまで気にしなくて良いのではないだろうか？」

クリスの提案にラウラは首を傾げて聞き返す。

「それは偏見ですよ」

「湯着っていうのもあるんだけど、慣れてない人がいるから水着も可にしたのよね。本来なら邪道よ」

補足するようにエリカが付け加える。

「そうなのですか」

「まあ、本当の温泉じゃないから今回だけは固いことは気にしないで良いんじゃない？」

じゃあ私はあっちのミシユラムのリゾートスパを再現した区画に行くから」

早足で去って行くエリカを見送ってクリスとラウラは苦笑する。

「それにしてもクリスが夜にリンの部屋に入り浸っていたのはこういう理由だったのか……」

温泉……温かい湯に身を浸すのは確かに気持ちいいな」

「いえ、流石に寮の共同生活を無視して温泉を使うなんてしていませんよ」

「うん？ しかしリンは温泉好きだったはずでは？」

「まあ……一ヶ月に一回、ヴィクターさんが来た時に一緒に入るくらいですよ」

「待て。どうしてそこで父上の名前が出てくるんだ？」

「あ……」

失言にクリスは明後日の方向へ視線を泳がせる。

「この『影の箱庭』には温泉以外の秘密があるのだな？ 父上はここでいったい何をしているのだ!？」

「ラ、ラウラッ! 近いっ! 近いからっ!」

水着姿で詰め寄って来るラウラにクリスは後退りながら落ち着かせる。

そして――

「ずるい……」

温泉以外の箱庭の機能を知り、それを独占していた父にラウラは毒づいた。

・*

「むふふ……」

「嬉しそうだねティータちゃん」

「はいー!」

満面の笑顔で湯船につかるティータをトワは微笑ましく声を掛ける。

「この温泉はリベールのエルモ温泉を再現したものなんですけど、レンちゃんとまた一緒に温泉に入れたんだって思ったら何だか嬉しくって」

「何よティータ。そんなことで嬉しいだなんて随分と単純なのね」

「えへへ……」

皮肉を交えたレンの言葉にティータは特に気を悪くした素振りもなく笑みを深くする。

「ふん……」

そんな笑顔を向けられてむしろ逆に気恥ずかしくなったのかレンはそっぽを向いてしまうが、温泉から出て行くことはしなかった。

「レンちゃん、後で背中の中の流しっこしようね」

「はいはい、しようがないわね」

「ふふ……そうしているとまるで姉妹みたいだね」

そんな二人のやり取りにトワは笑みをこぼし――

「ぐふっ——」

そんな彼女たちのやり取りを少し離れた場所から見守っていたアンゼリカが膝を着いた。

「黄金郷は——ここにあった!」

拳を握り締めアンゼリカは断言した。

「ふーん、お姉さんの本命はあの二人なんだ？ 良かったどうやら獲物の取り合いにならないで済みそうだね」

「……………ほう、それはどういう意味かね、シャーリイ・オルランド?」
「シャーリイもそうだけどあんなぺたんこの胸触つても面白くないじゃん?」

他人の嗜好に文句をつけるつもりはないけどさ、やっぱり最低限ラウラくらいないと物足りないよね?」

「はあ……………君は美のなんたるかを分かってないようだな」
「うん?」

「確かに私もラウラ君やアリサ君、エマ君の立派なものを認めるのは吝かではない……………」

だが同時にフィー君を始めとしたトワやティータ君、レン君。もちろん君にだって彼女たちに負けない魅力があるのだよ」

「ええ……………でもこんな胸触つても面白くないでしょ?」

「否っ! 何故そこで諦める!?!」

「いやだってさ……………」

「心の目で見ろっ! 心の手で感じ取れっ! 今君は未来の巨乳を育てているのだっ!」

「はっ!?!」

アンゼリカの宣言にシャーリイは天啓を得たように身を震わせる。

「シャーリイが……………育てる……………? そんなこと今までも一度も考えたことなかった……………」

「ふ……………どうやら分かってくれたようだな。では共に行こうじゃないか我が黄金郷へ」

そしてアンゼリカはシャーリイを促してエルモの湯に——

「はい。そこまで——」

ルフィナの声と共に聞こえた指を鳴らす音に二人の視界は暗転した。

「なっ!？」

「これは!？」

「二人の視覚を遮断させてもらいました。二人とも静かに温泉に入りますよね」

「そんな殺生な!」

「あらら、残念」

あまりの仕打ちにアンゼリカはその場に膝を着く。

「ちよっ! レンちゃんどこ触ってるの!？」

「うふふ、赤毛のお兄さんのためにレンが良いこと教えて上げる」

「はわわわっ!」

「……………これはこれでありだな」

「ブレないなあ」

何だかんだで楽しんでいるアンゼリカにシャーリイは学生の中で初めて尊敬の念を抱いた。

・*

「はぁ……………最高……………」

温泉に浸かりながら飲む酒がこんなにうまかったのかとサラはノーザンブリアから溜め込んだ心労がほぐれていくのを実感する。

「ぶはー」

「サラ親父くさい……………」

「ふふん、何とでも言いなさい。私はこの日のために三日前から禁酒していたんだから」

ノーザンブリアに通商会議。

リインが意識不明だったこと、ノーザンブリアでの宴会のこともあって忘れていたのだが三日前にリインが約束を守ると提案してくれた日からサラはこの日を心待ちにしていた。

「いらっ」

東方の徳利と呼ばれる酒を入れる容器に手を伸ばそうとした
フィーの手をサラははたき落とす。

「けち」

「大人しくあと五年待ちなさい」

唇を尖らせるフィーにサラはこの子も随分と変わったともものだと
感慨に耽る。

「あーところでフィー」

サラは水着を着たフィーの肢体を観察する。

ルトガー・クラウゼルの復活を目の当たりにし、それを喜ぶ間もな
く突き放された結果フィーはひどく憔悴することとなった。

数日前の朝、ラインの部屋から出て来た騒動があつて持ち直したが
果たしてそこでいったい何があつたのか。

担当教官として、フィーの後見人として一夜の過ちを犯して慰めて
しまったのか気になるサラだった。

「……何？」

言い淀んだサラにフィーは小首を傾げる。

普段と変わらない仕草にも関わらず、疑った目で見ると妙に妖しげ
に見えてしまう。

「で、どうなの？」

「どうって何が？」

「それは……ほら形だけとはいえ私はあんたの保護者みたいなものな
んだし。少しくらい話なさいよ」

「……………んー」

絡んで来るサラにフィーは虚空を仰ぎあの時のことを思い出す。

「ラインは……あつたかかった……一緒に寝たらラウラ達とは違って
すごく安心できた」

「そういえば前にあんた達、中庭で昼寝してたわね」

真面目なラウラが珍しくフィーとミリアムに付き合つて昼寝をし
ていたことがあつたのを思い出す。

「うん……この人のそばにいれば安心できる……ああいうのが『お母
さん』なのかな？」

「……………そこはせめて『お父さん』にして上げなさい」
フィーの答えにサラは教育的指導をしなくて済んで安堵するが、
ラインのことを思っただけ訂正を入れるのだった。

・*

「古代遺物……人智では測れない力を持つものだ」と知識では知っていたがとんでもないな」

雪景色を一望できる露天風呂にガイウスは感嘆の言葉をもらす。

「『古代遺物』と言えば七耀教会が管理しているという話だが、大丈夫なのだろうか？」

「そこら辺はラインのことだ。既に話を付けているのかもしれない」

「まあ、確かに……」

ガイウスの意見にマキアスは唸りながら頷く。

「『古代遺物』に『騎神』……『魔女』……改めて思うが世界は俺が思っていた以上に広いものなのだな」

「それは僕も同じだ。トールズ士官学院に入学してⅦ組に参加して

……僕は自分の世界の小ささを思い知らされた……

そういう意味では僕は君よりも無智だっただろう」

「それは言い過ぎだ」

「いや、正直ガイウスに言われた言葉はかなり効いたよ」

貴族を敵視するあまり、自分がそれと同じになっていたことを指摘された時のことを思い出してマキアスは肩を落とす。

「いや、あの時は俺の方こそ軽率なことを言っただけ……」

愛するものを穢され、蔑ろにされることの怒りの衝動を俺は甘く見過ぎていた」

ノルドでの暴走を思い出し、ガイウスは何故マキアスが貴族に怒っていたのか分かった気がする。

同時に自分の中にも彼と同じ衝動があることも新たな発見だったと言えるだろう。

「しかしノルドか……ガイウスを取り乱させる程のものなら一度僕も

見てみたいものだな」

「そうだな……俺もあの時の別の班の者達にも見てもらいたい……」

リインに頼めば、ここでノルドの空を作ってくれるのかもしれないが、やはり本物のノルドを見て欲しいな」

「その時は案内を頼むよ」

「ああ、喜んで」

・*

「プロジェクト・テイルフィングですか？」

「何か物騒な名前の計画ね……」

シユミットとラツセル博士の二人から聞かされたリインが進めている計画を聞いてエリオットとアリサは違う反応を返した。

興味深いと、自分もそれに参加できるのかと目に険？な光を宿しながらも期待に輝かせるエリオット。

騎神と同等の人型の人形兵器という説明を受けて表情を曇らせるアリサ。

「その話を僕達にしてくれるって言う事は、僕も乗れるんですか!？」

「操縦系には《ARCU》を利用する予定だからな。それでなくてもクレイグに関しては推薦をシユバルツァーから受けている……」

後はこちらの条件と貴様の能力が合致すれば使ってやらんこともない」

「はい……それで良いです」

「うむ……そういえばリイン君に君の魔導杖を改造して欲しいと頼まれておったな」

激情を押し殺すように頷くエリオットにラツセルは思い出したように話題を変える。

「え……？」

「エプスタイン製の魔導杖にある機能らしいが導力を刃に変えるビームザンバーを作ってくれとな、何でも大剣を使いたいらしいな？」

「あ……はい……」

ラインが自分の知らない所でいろいろなことをしてくれていることにエリオットはこれまでの八つ当たりに近い態度をしていたことを恥じる。

「ワシはライン君が君に何を言ったか知らんが、君の今の気持ちは誰よりもライン君が一番分かっている。だから——」

「本当にそうなんですか？」

ラッセルの言葉を遮ってエリオットは感謝の気持ちを持ちながらも、これまでライン本人に言えなかった心情を言葉にする。

「帝国最強の猛者たちに一日置かれて、あんなに強くて、騎神やこんなアーティファクトまで持つていて……」

何だっけ守れるくらいに強いラインが理不尽に父さんを殺された僕の気持ちの何が分かるって言うんですか？」

「エリオット……」

溜め込んでいた暗い感情を吐き出したエリオットにアリスは何と声を掛けて良いか迷う。

「ふん……伝えることは伝えた。どうやら私の研究に貴様は合わないようだ」

「おいシュミット」

「義理は果たした。後は好きにしろ」

シュミットはそんなエリオットに興味はないと去って行く。

「やれやれ……」

相変わらずのシュミットのやり方にラッセルはため息を吐いて、エリオットに向き直る。

「ライン君が強いか……」

そんな評価をされていることにラッセルは納得しながらも、今の必死に背伸びをして強くなろうとしているラインの姿を思い出して遣る瀬無い気持ちになる。

「ライン君が君の気持ちを理解できているのは本当じゃよ……」

何と言ってもライン君はリベールで一人の女の子を守ることができなかつたからの」

「え……？」

「それって……」

予想していなかった意外なラツセルの言葉にエリオットとアリサは驚く。

「ちよつと待ってください！ その子つてもしかして銀髪の女の子じゃないですか!？」

「おお？ アリサ君は知っておったか？」

ワシも又聞きでしか知らないが、相当な悪辣な手段でリン君の目の前で殺されたらしい」

普段の超然としたリンからは想像できない壮絶な過去を不意打ちで聞かされエリオットとアリサは絶句する。

「一応その時、《鬼の力》に吞まれる寸前にまで暴走したがカシウスに諭されて何とか道を踏み外すことはなかったのだが、それからかろう……

元々そういうところがあつたが捨て身な戦い方をするようになったのは」

「捨て身の戦い方……？」

「もちろんリン君は自棄になつてるといわけではない……

大切なものを守るためにただ全力を尽くしているだけなのだろうが、全力を尽くし過ぎていると言うべきか……

なまじ「騎神」という大きな力を得てしまったが故にワシらはリン君の戦いを支えることが難しくなつてしまつた……

トロイメライもカレイジャスも「騎神」と比べてしまえばどうしても見劣りしてしまうからの……

この後、戦いがもつと激しくなると言うのなら「ティルフィング」は良いタイミングだったと言えるじゃろ」

「この後……リンはいったい何を見ているんですか？」

これまで漠然と感じていたリンと自分達の意識の違いをエリオットは思い切つて尋ねる。

「……ワシらも全てを把握しておるわけではないが「リベールの異変」と同じようなことを結社は帝国でも起こそうとしておる……

リン君はそのための準備をしておるのだ」

「ッリベールの異変」……」

「国中の導力が止まった浮遊都市が現れた……」

でもいくらリインが凄くてもあんな事件をリイン一人で解決できるわけないですよね？」

「だが帝国は全ての国民が手を取り合って一致団結するには問題が多過ぎる……」

ワシらがリイン君やオリヴァルト皇子に力を貸したいと思っても他所の国の人間である以上できることは限られてしまう……」

だからこそ、勝手なことと承知して言わせてもらおうとワシらは君達Ⅶ組がリイン君を支えてくれることを期待しておるのだよ……まあシユミツトの奴は完全に我欲じゃがの」

「ラッセル博士……何だかすみません」

何だか急に復讐心だけでリインとその周りを利用しようとしている自分にエリオットは自己嫌悪を抱く。

「家族を奪われたことがないワシが言える事ではないが、やはり復讐を呑み込むことはできんのかの？」

「……すみません」

言外に復讐などすべきではないと言うラッセルにエリオットは繰り返し、謝った。

・*

「すまないリイン。水をもらえるか？」

「ユースス？ どうしたんだ——ってミリアム？」

親睦会の料理の準備も大方終わったところで転移門からミリアムを背負ったユーススが現れる。

「きゅー……」

赤い顔をして目を回しているミリアムにリインは事情を察する。

「湯あたりか……ちよっと待ってくれ」

リインが指を鳴らすとボトルと石造りのベンチにタオルが敷かれる。

「っ——」

何もない空間からものが出て来たことに驚き、ユーシスはすぐに無駄なことだと割り切る。

「それじゃあこれを頼む」

「……………何だこれは？」

「団扇って言うんだけど知らないか？」

「それくらいは知っている東方の扇の一種だろ？ それを何故俺に渡す」

「湯あたりの時は扇いで上げると良いんだ」

そう言いながらリインは手慣れた様子で水で濡らしたタオルをミリアムの額や手足を冷やすように置いて行く。

「あははー……………つめたーい……………きもちい……………」

のぼせて思考が定まっていけないにも関わらず、ミリアムはその状況さえも楽しんでいるように笑う。

「やれやれ……………」

ユーシスは肩を竦め、舌打ちをしてうちわでミリアムに風を送る。

——何だかんだ言いながら面倒見は良いんだよね…………

リインはあえてそれを口に出さず、作業に戻る。

「お前は相変わらずのようだな」

「え……………」

「わざわざこんな親睦会を開いて、準備などあの有能なメイドに任せておけばいいものを」

ユーシスは団扇を動かす手を止めず、分け身で三人となつて調理をしているシャロンを一瞥する。

「この『箱庭』にしても、ノーザンブリア組には仕方がなかったとしても俺達にまで明かす必要はなかったはずではないのか？」

「そうだな……………」

「博士たちが新しく造ると言っていた『テイルフィング』という機械人形についてもテストパイロットを俺達にする理由はないはずだ……………」

「お前は俺達を巻き込むつもりはなかったはずではないのか？」

「……………そうだな」

かつてユーシスに話した「黄昏」についての心構えを指摘され、
リインは自問しながら口を開く。

「今回のノーザンブリアもそうだったが、通商会議とガレリア要塞の
解放戦線の二面作戦、そして帝都での戦い……」

改めて自分の限界を知ったからかな？」

「あれだけのことをしておいてか？ 今ではもう名実ともにお前を得
体の知れない浮浪児などと言う者などいないというのに」

「だけど今は「貴族派」と「革新派」の蝙蝠つて揶揄されているな」

「それは……知っていたのか？」

「学院の中であんなに堂々と話をされたならな」

リインの可聴領域を侮つて囁かれる陰口。

オズボーン宰相の息子であるといつの間にか浸透していた噂話に、
当然疑問に浮かぶのはリインが「貴族派」なのか「革新派」なのか。

ガレリア要塞の件で歩み寄った「貴族生徒」と「平民生徒」だっ
たが、リインの立場は新たな対立の火種となっていた。

「それにあれは運が良かっただけだ……」

「緋の騎神」から始まって「白の虚神」も「フェンリル」、そして
リインの記憶にはないが「蒼の機神」。

どの戦いも今生きていられることが不思議な程の戦いだっただ。

「俺が戦うことになるのはそれら以上の存在だ……」

場合によってはみんなのことを守る余裕なんてないかもしれない」

「っ——」

言外に足手纏いだと言われたユーシスは眦を上げて言い返そうと
するが、その言葉を呑み込む。

「どちらかと言えばクリスのためとも言えるな」

「クリスの？」

「クリスも俺と同じ戦いに巻き込まれることはほぼ決まっている……」

俺とは違ってクリスならみんなと一緒に戦う理由はあるはずだ。

「テイルフィング」はその時に必要になるだろう」

リインは彼が聖女と相対した時のことを思い出す。

自分の限界を受け入れて、助けを求めた姿は印象深かった。

——俺の時は……いや、そんなことを考えるのはみんなに失礼だ……

陰鬱な思考をリインは振り払う。

例え力を合わせたところでそれを凌駕する「巨大なる力」に対抗できる限界はある。

それから目を逸らし、みんなで力を合わせて戦えば何とかなるなどという楽観は「自己満足」と「欺瞞」でしかない。

「その言い方ではお前とクリスが「騎神」に乗って戦うと言っているように聞こえるが？」

「そう言っているんだ。俺達が戦うことになったらユーシスは俺とクリス、どちらに着く？」

「そんなのクリスに決まっている」
「ああ、その通りだ」

返って来た即答にリインは頷く。それが正しい答えなのだ。

「次期皇帝」であるクリス——セドリックと貴族でありながら革新派のトップの息子である半端な「蝙蝠」のリイン。

帝国民なら迷わず前者に付き従うのが自然の理だろう。

「『世の礎となれ』か……」

「ドライケルス大帝の言葉がどうかしたのか？」

「いや……もしかしたら大帝はこうなることを知っていたのかと思っ
てな」

「礎」とは家屋や橋などの柱の下に据える土台石。または物事の基礎となる大切なもの。

神の領域に進化させた《緋》と戦ったこと。

因果を操る《虚神》と戦ったこと。

そして「鋼」に迫る「雲」の力を得たこと。

その全てが「礎」となるものだとすれば、「灰」の役割は他の騎神の「土台」になるために存在しているのかもしれない。

——俺の役割はクリスやアリアンロードさんのために道を作る
とか……

未だに胸奥に残る小さな焰。

まるでいつでも殺せると言わんばかりに存在している魂に絡まった爆弾。

自分にできることは決して多くはないだろう。

「……………やはり俺はお前を認めることはできそうにない」

愁いを帯びた、どこか達観した顔をするリインにユーシスはあの時と同じ言葉を言った。

その言葉にリインは力ない笑みを浮かべるのだった。

99話 第六回実技テスト

「そう……私が推すのはずばり！ VII組女子によるアイドルユニット計画だ!?」

そんな戯言があったものの、先輩達のアドバイスによりVII組の出し物は講堂を使つてのミニコンサートに決まった。

細かな衣装や演出、楽器などの手配はアンゼリカとジョルジュの二人が協力してくれることとなり、VII組はようやく学院祭へのスタートを切ることができた。

そして改めてVII組一同は目前に迫つた九月の実技テストと特別実習に気を引き締めるのだった。

・*
・*

「今日は父上が来ないのでですか?」

「ええ、何でも急用ができてしまって時間が取れなかったと連絡があつたわ……」

まあ元々レグラムの領主として多忙な御方なんだからそういう日もあるわよ」

9月22日水曜日。

第六回目となる実技テストに武術指南役のヴィクターは現れなかった。

別段それは不自然なことではなく、いなければいけないで実技テストは行われることとなった。

「……………誰も乱入してこなかった」

「……………ああ」

ぼつりと呟いたエリオットの言葉にユーシスは静かに頷く。

「いや、まだ警戒を解くには早い」

「そうだね。まだ授業が終わったわけじゃないから油断しない方が良

い」

ガイウスとファイは気を抜かずに周囲の警戒に務める。

「ふむ、私は密かな楽しみにしていたのだが……」

「だよなー。残念」

「残念って……君が言うか」

エリオット達とは対照的に落胆を露わにするラウラとシャーリーにマキアスは呆れる。

「えつと……四月の『鋼の聖女』から始まって、『剣帝』に『赤い星座』」

「その次はオーレリア將軍とユーシスのお兄さんが来たわね。そして先月は『鉄血宰相』と『皇帝陛下』たち……」

「でも今日は今日で、リインさんにお客様が訪ねて来るんですけどよね？」

ミリアムとアリサの確認に続き、漏らしたクリスの言葉にⅦ組に緊張が走る。

「落ち着いてくれ、ちゃんと約束を交わしているから授業に乱入して来ることはないさ」

「ま、そこは学院にも正式な手続きで面会を求められているから安心して良いわよ」

鋭い視線を向けられてリインは困ったと頬を掻き、サラが補足する。

「とりあえず、ガレリア要塞での戦いのことを引き摺ってないようである。安心してわ」

話を戻し、戦術殻との戦いから今回のテストを評価してサラは褒める。

過剰な攻撃や、慢心による油断、恐怖を思い出して体を竦ませる。

訓練なら平気でも実戦で出てくるPTSDといった心理障害の傾向がなかったことに安堵する。

「これで心置きなく実習地を発表できるわね」

もはや恒例となった実習地の発表の瞬間に緊張が走る。

「さ、受け取りなさい」

差し出されたプリントにはこう記載されていた。

【9月特別実習】

A班：クリス、アリサ、フィー、マキアス、エリオット、シャーリイ。
実習地：鋼都ルーレ。

B班：リイン、エマ、ラウラ、ユーシス、ガイウス、ミリアム。実
習地：海都オルデイス。

「これは……」

二つの有名な都市にリインは目を丸くする。

「ルーレにオルデイス……それぞれ帝国の五大都市か」

「そうなんだけど……」

ガイウスの呟きにエリオットが頷き、マキアスは顔をしかめる。

「ル、ルーレもそうだがオルデイスといえば……」

「人口40万を誇る帝国第二の巨大海港都市……貴族派のリーダー的
存在、『カイエン公』の本拠地だな」

ラウラが説明を入れると、次の瞬間ユーシスが激昂した。

「じよ、冗談は止めてもらおう！ この状況で、貴族派最大の都にこの
ガキを連れて行けと言うのか!?!」

ユーシスはミリアムに視線を送り、アリサとフィーが頷く。

「た、確かに……」

「下手したら火あぶりかも」

「んー、大丈夫だと思うけど。オルデイスなら何度も潜入しているし、
みんなも一緒にいることだし♪」

「くっ……何を呑気な!」

緊張感のないミリアムの態度にユーシスは大きいため息を吐く。

「でもB班も心配だけど……」

そんなユーシスの嘆きを他所にアリサはもう一度プリントに視線
を落として、そこに並んでいる名前を確認する。

「あのサラ教官、エリオットさんとフィーちゃんを組ませて大丈夫な
んですか?」

同じことを考えたエマが挙手して質問する。

「って言ってるけど、二人はどう?」

「ん……別に問題ない」

「……僕も問題ありません」

フィーはともかく、返答への間があつたエリオットに一同は不安を感じる。

「本人たちが大丈夫って言ってるんだから好きにさせれば良いじゃない……」

っていうかき。シャーリイとリインとクリス、この三人でまとめないの？ 一応、シャーリイがツールズに来たのは二人の避雷針のためだったはずだけど」

「リインにあんたの護衛はいらないでしょ……」

それにB班に関しては半分、向こうから推薦されたのよ」

「推薦？」

聞き返すシャーリイの言葉にサラは頷く。

「ちよつと前倒してB班の《必須依頼》をここで発表するけど……」

特別実習期間に行われる武術大会にリイン、ラウラ、ユースス、この三名の出場をカイエン公からお願いされたってわけ……

あとこれは余談なんだけど、今度こそリインと同じ班にしてくれて委員長に泣きつかれちゃったのよね」

「サ、サラ教官！ そのことは内密に……お願いしたのに!？」

サラの暴露にエマは狼狽する。

「ま、そういう細かいことがあつて今回の編成になつたつて言う事よ」理由は分かりましたが、この時期に『武術大会』ですか？」

懐かしい響きの言葉にリインは首を傾げる。

「確かにテロリストが暗躍している今の時期に大規模な行事を行うのは不自然ではあるが……」

「大方、集めた戦力の格付けと言つた所か？ テロリスト対策として幾つもの『猟兵団』を領邦軍が雇つたという噂もあるしな」

ラウラとユーススは自分たちなりにイベントを開催する理由を考える。

「確かカイエン公は——」

リインはそこで言葉を呑み込んで、フィーをオルデイスに行かせな

い理由を察する。

「B班はそういう感じだけど、ルーレの方も安念とできる状況じゃないわよ」

「っ——」

サラの言葉にアリサが過剰な反応を見せる。

「ルーレと言えばRFグループ……だけど都市を管理するのは《四大名門》のログナー侯爵ですね」

その反応を横目にクリスが簡単にルーレの情報をまとめる。

「アンゼリカ先輩の父君で、《四大名門》の中でも強硬派路線と聞いています」

「……ええ」

アリサは肩を竦めて説明を引き継ぐ。

「だけどルーレ周辺には帝国正規軍の軍需工場なんかもあるわ……」

RFグループは中立だけど微妙な状況になっていると思う」

「けっこうキナ臭そう」

「父さん達もこの時期にどうしてそんな実習先を……」

「ふふ……こんな時期だからこそ、じゃないのかな？」

「む……それはどういう意味だ？」

「さあね」

水を差すようなシャリーイの言葉にマキアスは聞き返すが、はぐらかした言葉だけが返って来る。

食い下がろうとするマキアスだったが、サラが手を叩いた音で注目を集め、その場を締める。

「さつきも言ったけどそのあたりは一応考えているわ……」

来月は学院祭で、特別実習は無し。その意味で今回の実習もこれまでの《統括》とも言えるわね……

備えるべきは備えて、そして胸を張って臨みなさい。ただし——」

サラは言葉を切って気合いを入れ直し、告げる。

「リインみたいな無茶はくれぐれもしないように」

『はいっ！』

「……………解せない」

「あははははっ！」

こうして特別実習の発表は終わり、その日の実技テストは終了——
したはずだった。

「《ARCU》駆動」

部活動が終わった夕陽に染まる広大なグラウンドに大きな円を描いたエマが導力魔法を起動する。

線を簡易の結界の境界にして魔力を流し、五芒に分かれた者達の力を束ねる。

「《ARCU》駆動」

エマの駆動に合わせて仏頂面のラウラが、生真面目な顔のマキアスが、眠たげなフィーが、そして苦笑いを浮かべているリインが次々に導力魔法を駆動していく。

「……………サラ教官、準備できました」

結界の中、五人でそれぞれが駆動した“地”の導力魔法の結果を維持しながらエマはサラに報告する。

「ん、ありがとう。で、効果は30分くらい持つのよね？」

「はい、皆さんの《ARCU》の導力を戦術リンクで統一させているので、誰かの導力切れではなく私たちの導力切れが効果の停止になります」

「なるほどね…………」

サラは様変わりしたグラウンドの様子を見てこんな導力魔法の使い方があったのかと感心する。

土塊が無作為に隆起して障害物だらけとなったグラウンド。

本来ならすぐに霧散消滅する導力魔法の効果を結界で維持して固定するというのはプログラムされた魔法しか使ったことがないサラにとって初めて見る技術だった。

「じゃあ準備も整ったことだし、もうすぐ日も落ちるからさっさと始めるわよ…………ほらクリス。いつまでそうしているつもり？」

準備が整うまでの間、今月のゲストの一人を睨み、挑発の言葉をぶつけているクリスをサラは窘める。

「言っておくけど、今回の勝負は君と僕とのじゃないからノーカウン

トだよ……

まあもつとも僕はこの半年で凄いい修羅場を何度もくぐり抜けてきたわけだから、君なんて敵じゃないけどね」

品行方正なクリスから出て来たとは思えない口汚い挑発の言葉。

しかしその罵倒をぶつけられた少年は怯むこと言い返す。

「その言葉、そっくり返させてもらおうよ……」

もつとも僕は君と違って成果をひけらかすつもりはない。だいたいのその修羅場というのはリインさんの後ろについて回っただけじゃないのか?」

「言ってくれるじゃないか……」

煽り勝負は少年に軍配が上がる。

涼しい顔をしてクリスの挑発を受け流した少年の反撃にクリスは眦を上げる。

「落ち着けクリス。らしくないぞ」

「お前もだ、まあ気持ちは分からなくもないが」

額をぶつけ合うのではないかと思うくらいに睨み合う二人を、クリスをガイウスが、少年を赤毛の青年がそれぞれ力任せに引きはがす。

「がるるるっ」

「ぐるるるっ」

それでもなお睨み合うことをやめない二人に傍らのユーシスがため息を吐く。

「そのまま取り押さえておいてくれ。ガイウス」

どうやら顔見知りのようだが、おそらく少年はクリスの正体を知らないのだろう。

知っていればあんな暴言を吐くとは考えられない。

パトリックがクリスに絡む時以上の憐憫を感じ、ユーシスは制御不能となっているクリスにもう一度ため息を吐く。

「はいはい、いつまでもそうしていると制限時間も短くなっちゃうわよ」

ぱんぱんと手を叩き、サラが急かす。

「それじゃあ私を取り仕切らせてもらって良いんですね?」

「ああ、よろしく頼む」

サラは隣に立つ赤いコートを纏った長髪長身の男に尋ね、了承を得ると整列するⅦ組の七人と今月のゲストの七人の前に立つ。

「ええ……それではこれよりトールズ士官学院Ⅶ組以下七名とクロスベル警察特務支援課七名によるサバイバル戦を行います」

どこか投げ槍にサラはそう宣言するのだった。

100話 VII組VS特務支援課

「アリサツ！ 危ないっ！」

その言葉があの日から耳を離れない。

ガレリア要塞で人形兵器から自分を庇ってくれたエリオットの声。むせかえる程に広がったおびただしい血。

どんどん冷たくなっていく体。

あれが死なのだと、当のエリオットとはある奇蹟によって一命を取り戻せたが、アリサの中ではあの凄惨な光景は忘れられなかった。

否——

『アリサツ！ 危ないっ！』

あの時のエリオットの言葉に誰かの言葉が重なる。

「——リサさん——」

——あれは誰だったんだろう……？

思い出せない記憶を反芻しアリサは考え込んで——

「アリサさんっ！ 危ないっ！」

「へっ——？」

現実の声にアリサは我に返ったが遅かった。

「隙ありっ！」

エマの叫びとは別に声は背後から、そして同時に後ろから回された手がアリサの胸を鷲掴みにした。

「きやああああああっ!？」

「おお、委員長に次ぐ大きさ……先輩の見立ては間違いなかったか……」

悲鳴を上げるアリサを無視して、背中に抱き着いたシャーリイはこれまでガードが固かったアリサの胸を揉みしだき堪能する。

「うん、やっぱり触るとなると大きい方がいいな——」

「ちよ——やめ……このっ！」

「ああ、ついにアリサさんまでシャーリイさんの毒牙に」

「ラウラは手合わせの賭けでやられていたよね？」

「言うな」

「アハハ、僕も混ぜてっ！」

「ちょ!? ミリアムッ! ひゃ!？」

何とかシャーリイを振り解こうとするアリサの元に正面からミリ
アムが突撃する。

「何って言うか、ミリアムと同じで簡単に馴染んだな」

姦しくなった女性陣にマキアスはぼつりと呟く。

「現役 of 獵兵が転入してくると聞いた時はフィーのような子が来ると
ばかり思っていたが、随分と活発な子のようなな」

「はは、でもシャーリイさんも獵兵としてスイッチが入った時は怖い
所がありますよ」

ガイウスがもみくちやにされるアリサを微笑ましく見守り、クリス
は笑う。

「ちよつと男子達見てないでこの子を——いやあっち向いてなさいっ
！」

アリサの悲鳴のような指示にユーシスは肩を竦めて回れ右をする。

「長くなりそうだから先に行くか。確か今日の夕食の当番はエリオツ
トとラウラだったな」

「そうだけドリインは待たなくて良いの？」

「先に帰って構わないと言われていたのだから問題あるまい。アリサ
も見るなど言っているんだからな」

後ろから聞こえてくる嬌声を全力で聞かないふりをしてユーシス
は仲間たちの意見を聞かずに歩き出す。

「やめろって言ってるでしょ!? セクハラよっ! セクハラッ!!」

「セクハラじゃないよー。スキンシップだってば」

「うん……ここにいても僕達にできることはないね」

背後から聞こえてくる二人のやり取りにエリオットは無力な自分
を受け入れた。

「えっとそれじゃあ僕達は先に帰りますね」

そう言っつてクリスは男性陣たちだけで帰路に着く。

「あれ……?」

が、校門へと向き直った所で遠目に見える一団に首を傾げた。

「どうしたクリス？」

「ん……校門に見慣れない一団がいるな。随分と大所帯だがいったい？」

「クルト……それに特務支援課のみんな……どうして……」

他の男子達が見慣れない集団に困惑するが、クリスは入学する前にクロスベルで世話になった特務支援課のメンバーたちがいることに困惑する。

「もしかして今日の客というのは彼らの事か？」

「たぶんそうですね」

ガイウスの疑問にクリスは頷き、特務支援課の輪の中にロイドがないことに気付く。

おそらく彼は今学院長室でリインと対面しているのだろう。

そして街の喫茶店などで待っていない理由を察してクリスは声を掛ける。

「クルト！」

「——っ？ で——クリス？」

仲間たちと話していたクルトは呼ばれた声に振り返る。

「久しぶりだねクルト、それに特務支援課の皆さん……」

ノエルさんとワジさんも特務支援課に参加したとは聞いていましたが、ツアイトも連れてきたんですか？」

近付くまで気付かなかったが、警察犬として登録されている神狼までいることに目を丸くする。

「ええ、出張が決まったら自分も行くと言い出してしまつて」

クリスの疑問にテイオが疲れたように答える。

「元氣そうで安心しました。どうやら充実な学院生活を送れているようです——送れているみたいだな」

「まあね……」

みんな紹介するよ。彼らはクロスベル警察特務支援課という部署で働いている警察官だ」

「クロスベルの警察?! まさかりインの客つて——クロスベルで何か

やらかしたのかあいつは!?!」

警察と聞いてマキアスは驚愕して叫ぶ。

「あ、いえ……そうじゃなくてですね。通商会議でのリイン君の尽力についての感謝の意を伝えるための訪問です」

驚くマキアスにエリイがすかさず訂正を入れる。

「あ、ああ。そういう理由ですか」

ほっと安堵の息を吐いて――

「あれーランディ兄がいる?」

クリス達の背後からシャーリーの呑気な声が響いた。

「なっ!?!」

「《赤い星座》の――どうしてここに!?!」

「シャーリイッ! 何でお前がここにいやがるっ!」

絶句するノエルにいつでも動けるように拳を固めるワジ。

そしてランディが激昂して問い質す。

「どうしてって……そんなのここに通ってるからに決まってるじゃない」

絶句するノエルと剣呑な眼差しを向けて警戒するワジにシャー

リイは軽い調子で答える。

「通ってるって……お前が……ここに!?! リインの奴はそんなこと一言も言っただけだぞ!」

「何でリインがランディ兄にそんなこといちいち報告しなくちやいけないのさ?」

二人の言葉がすれ違う。

ずっと以前から、それこそ四月からシャーリイがトールズの学生として過ごしていたとランディは想像し、シャーリイはつい最近の近況報告のつもりで答える。

「リインとクリスのボディガードを受けてシャーリイだけこの学院に通うことになっただけだよ……」

これはちゃんとしたビジネスなんだからランディ兄に口出しされることじゃないよ」

「護衛だと……」

《赤い星座》から最も縁遠い言葉にランディは顔をしかめ、シャーリーでは意味がないとクリスに向き直る。

「おいクリス。こんな猛獣を傍に置いておくなんて正気か!」

「ランディさん?」

「こいつがクロスベルで何をしたか知ってるのか!」

「え……ええ、リインさんと協力して《帝国解放戦線》を撃退したんですよね?」

「撃退なんて生易しいものではありません。あれは虐殺でした」

「……虐殺」

その時のことを思い出して蒼褪めたティオの呟きにエリオットが顔をしかめる。

その言葉を聞いて思い出すのはガレリア要塞で《帝国解放戦線》の襲撃。

一方的ではなかったものの、多くの犠牲者が生まれた凄惨な光景はまだ記憶に新しい。

「悪いことは言わねえ。こんな奴学院から追い出すべきだ」

苦虫を噛み潰したような顔でランディがそう提案する。

その言葉を特務支援課一同は窘めることはせず、シャーリーへの警戒心を強める。

が、それとは対照的にⅦ組一同はそんな特務支援課一同に顔をしかめる。

「……………クルト、まさか君もランディさんと同じ意見なのかい?」

「ああ、彼女は君の傍には相応しくないと僕も思う」

クリスの質問にクルトは頷く。

次期皇帝になるクリスの近くにいるにはどんな悪影響があるか分かったものではない。

友として、守護役としての観点からも血生臭い現役の猟兵であるシャーリーがクリスの隣に当たり前のように立っていることに嫌悪感が拭えない。

「ふん、黙って聞いていれば随分と勝手なことを言ってくれる」

そんなランディ達の善意からの言葉をユーススが否定する。

「それが属州国の人間たちのやり方か？ クリスやリインから聞いていた特務支援課とやらは聞いていた程の存在ではなく程度の低い人間だったようだ」

「っ!？」

「言ってくれるじゃないか。僕達の何が程度が低いって言うのさ？」

痛烈な言葉にエリイは面を喰らい、ワジが挑発的な言葉を返す。

「俺にはお前達が自分達の無能を棚に上げてオルランドがしたことを必死に下げようとしているようにしか聞こえないが？」

その眼差しを怯まずに受け止め、ガイウスがユーシスに代わって応える。

「それは貴方達がその子の本性を知らないからです」

ノエルの言葉にⅦ組一同はシャーリイを見る。

「シャーリイの本性……」

「変態」

「おっぱい魔人」

「人喰い虎」

「狂戦士」

「えっと……ノークメントで」

「いやー照れるなー」

容赦のないⅦ組からの評価にシャーリイは照れる。

そんなシャーリイにラウラは苦笑を浮かべてクルト達に向き直る。

「そちらの善意による忠告は理解した……その上で大きなお世話だと言わせてもらおう」

「なっ!？」

「確かに私たちはまだ会ったばかり、リインとクリスと比べればシャーリイのことを知っているわけではない……」

だが猟兵だからと言う理由だけで彼女のことを不当に蔑むつもりはない」

「ま、わたしも元は付くけど猟兵だしね」

ラウラの宣言にフィーが頷き、クリスも続く。

「クルト、それに皆さん……心配してくれる気持ちはありがたいです

が、僕たちはシャーリイさんがそういう人間だって言うことは一応知っているつもりです……

僕達が聞いたクロスベルでの出来事も実際には少し違うのかもしれないけど、僕たちは前向きにシャーリイさんを受け入れるつもりだよ」

「クリス……」

突き放された言葉にクルトは何とも言い難い表情をする。

「って言うかユーシスが言った通り、シャーリイやリインが頑張ったのはお兄さんたち、クロスベルの警察があまりにも不甲斐なかったからでしょ？」

各国首脳陣が集まる会議を襲撃したんだよね？ 問答無用で銃殺して何が悪いの？」

「それにガレリア要塞であいつらがしたことを考えれば自業自得よ」

ミリアムとアリサは後になって聞いた《帝国解放戦線》の二面作戦を思い出して指摘する。

「だからって——」

「あんな奴等死んで当然だ。だってあいつらは……あいつらは……」

言い返そうとしたエリイの言葉を遮ってそれまで黙っていたエリオットが口を開いた。

その言葉は最後まで紡がれず、それでも詰まらせた言葉の重く、その場にいる一同の口を噤ませるだけの闇があった。

「——ちっ……リインやクリスのクラスメイトだからって期待していたが、どうやら典型的な帝国人だったみたいだな」

「むっ……何だその言い方は？」

ランディの舌打ち交じりの捨て台詞にマキアスが噛みつく。

「やめておけ、マキアス。こんな自分達が被害者であることをひけらかしている属州国の人間に何を言っても無駄だ」

が、詰め寄ろうとする前にその肩をユーシスが押さえる。

「聞き捨てなりませんね」

ユーシスの言葉にティオは眦を上げる。

「事実であろう？ 場も弁えずに独立すると言い出したディーター・

クロイツを未だに市長にさせている恥知らずな自治州の人間らしい傲慢さだと言っている」

「傲慢さで帝国人にとやかく言われたくありません」

売り言葉に買い言葉。

口調はどんどん強く、相手を責める様なものへと互いに変わっていく。

まるで何かに背中を押されるように二つの陣営は険悪に睨み合い、言論をヒートアップしていく。

『やれやれ』

その存在はそんな人間たちの頭に血が昇ったやり取りにため息を吐くように肩を竦め——

「ウオンツ！」

力を声に乗せて吠える。

「え……？？」

「む……？？」

狼の一声で急激に頭が冷えた一同はバツが悪そうに互いに距離を取り——その空いたスペースにⅦ組の足元を抜けて閃光弾が転がった。

次の瞬間、それはその役目通り目を眩ませる閃光を放って爆発した。

「くっ——」

「こんなところで閃光弾だ?! いったい誰が!？」

一様に閃光から目を守る二つの陣営が耳にしたのは彼の声。

「二の型《疾風・打》」

次の瞬間、総勢その場にいる者たちは男女平等に拳骨が降り注いだ。

「何をしているんだみんな……？？」

全員が倒れ伏した中でリインが怒っていますと言わんばかりに、頭を押さえて蹲る彼、彼女たちを見下ろした。

・*

「何をやってるんだみんな……」

一人、アリオスと一緒に学院長室に赴いてリインと会っていたロイドはリインに遅れて校門に着いて説教を受けていた仲間たちに頭を抱えた。

「悪い、ロイド……シャーリーの顔を見たら頭に血が昇っちゃった」「ランデイはそうかもしれないけど、他のみんなはどうして?」

「すいません。ランデイ先輩と一緒に完全に頭に血が昇っていました」

「はは、売られた喧嘩は買うに決まってるじゃないか」

恐縮して頭を下げるノエル達に対してワジは悪びれた様子もなく笑う。

「もう大半の生徒達が下校したからよかったものの、誰かに聞かれていたら大問題だったんだぞ」

「ごめんなさい」

珍しいロイドからのきついお叱りの言葉にエリイは穴があつたら入りたい気持ちで頭を下げる。

交渉事は支援課の中で自分の担当なのに、感情だけで喋っていたことに猛省する。

「ですが、ロイドさん。ランデイさんの前でこんなこと言っているかわかりませんが、あのシャーリー・オルランドが帝国の高等学校に通うなんてトラブルの予感しかしません」

「そうかもしれないけど、俺達が口を挟んで良いことじゃないだろ」

謝ってはいるものの自分達は間違っていないと主張する仲間たちにロイドは途方に暮れる。

「それにしても軽率なことをしたな」

「アリオスさん」

そんなロイドを見兼ねてアリオスが口を挟む。

「クロスベルの市民に認められたから帝国でも通じると増長したか?」

お前らの知名度などクロスベルを出れば意味のないものだ」

ぐうの音も出ない正論にランデイ達だけではなくロイドまで黙り

込む。

「それでどうするつもりだ？ お前達は不当にこの学院の生徒を批判したんだ。この落とし前をどうつけるつもりだ？」

「それは……」

「お前達がクロスベルで横柄に振る舞っている帝国人や共和国人に良い感情を持つていないのは分かる……」

「だがここでは、逆にお前達の振る舞いが帝国にクロスベルの人間はこうなのだと印象付けることになる。振る舞いにはくれぐれも気を付ける事だな」

「アリオスさん」

「リインか、そちらの話は終わったのか？」

「ええ、何とか落ち着かせることができました」

「そうか、すまないな。礼を言いに来たはずがこんなことになってしまった」

「いえ、本来なら警察に任せるべきことを俺が出しゃばって動いてしまったことが原因ですから……」

ただ通商会議の時、みんなはガレリア要塞において《帝国解放戦線》の襲撃に巻き込まれたんです。エリオットはそこで家族を殺されていたから……」

「なるほど、《帝国解放戦線》への虐殺をやり過ぎだと批難したこいつらと対立するわけだ」

ぐざりと《帝国解放戦線》を擁護していた特務支援課の胸にリインの言葉が矢になって突き刺さる。

「ねえ私達……」

「そうですね。別の場所で虐殺していた組織を擁護し、あまつさえ肉親を殺された人にそれを言う……」

「どう考えてもわたし達の方がやらかしてしまいました」

ティオの言葉にエリイたちはさらに項垂れる。

「気にしなくて良いですよ。皆さんは警察なんですからむしろ殺人者を肯定してはいけない立場でしょう……」

警察や遊撃士が猟兵や俺とは相いれない存在だと言うことはちや

んと分かっていますから」

嫌な顔せずに自分達のフォローをしてくれたリインに一同はさらに居たたまれなくなる。

「聞いたな？　これが大人の対応だ」

年下の学生を引き合いにした容赦のないアリオスの指摘に特務支援課はぐうの音も出なかった。

「いえ、そんな風に持ち上げられても困ります……」

ところでロイドさん、この後時間はありますか？」

「え……？　ああ、今日は帝都のホテルに宿を取ってあるから大丈夫だけど」

「なら折角なのでⅦ組のみんなと特務支援課の皆さんで手合わせをしてももらえませんか？」

「え……何を言ってるんだ？　さつき俺達は——」

「ここで別れても禍根だけが残って、みんなにクロスベル人に対する悪印象を残すだけですよ……」

ならいつそ、ちゃんとぶつかってみたらどうですか？　他のみんなは初対面でもシャーリイに言いたい事があるんですよね？」

「それは……」

「クルト、あれから半年……中間報告をするには良い機会なんじゃないかな？」

「あ……」

リインの言葉にクルトは思わずクリスの方を向いてしまう。

「……………あのリインさん、Ⅶ組の皆さんが凄く殺気立った目で僕達を見ているんですけど……」

「大丈夫だ。さっきの言い争いが原因じゃなくて、特務支援課のみんなと戦った時は《鬼の力》を使わされたって少し煽っただけだから」

「リインさんっ!？」

クルトが挙げる悲鳴に、はははと軽い調子で笑うリインにアリオスは兄弟子に似て来たなと思うのであった。

・*

突如として始まったⅦ組と特務支援課のサバイバル戦。

障害物を作ったが、「エイオンシステム」を持ち感応能力の高い
テイオが戦術リンクの繋がりを察知できるため先手の有利を取る。

かと思いきや、テイオの感知能力を知っているクリスが障害物の上
から単独で先行して強襲を掛けた。

「カラミニティホークツ！」

雷を纏った雷槍の投擲がまだ戦術リンクが遠いと油断していた特
務支援課のど真ん中に穿たれ、共に投げ込んだリヴァルトが竜巻を
作って支援課を分断する。

「あははっ！」

クリスなんかにしてやられるなんて本当に鈍ったんじゃないラン
デイ兄!？」

孤立したランデイに戦術リンクを切り変えて単騎となったシャー
リイがテストタロツサを唸らせて斬りかかる。

「シャーリイ…… temeエの仕込みか？」

「残念、ランデイ兄と一対一がやりたいって言っただけで後はクリス
がお膳立てしてくれたからシャーリイは作戦に口出ししてないよ」

「ちっ——少し見ない間にえげつない戦い方を覚えやがって」

「ここにはいないクリスに向かってランデイは思わず毒づく。

「それにしてもランデイ兄、相変わらずそのハルバード……ベルゼル
ガーなしでシャーリイに勝てると思ってるの？」

「は、抜かせ小娘」

そうランデイは不満そうなシャーリイを鼻で笑い、くるりと身を翻
すとまるで手品のようにスタンハルバードをブレードライフルに持
ち替える。

「ちゃんとこいつも持って来てるぜ」

「アハッ！ 何それ!? いつのまにそんな手品覚えたの!？」

「それは聞くな」

満面の笑顔で喜ぶシャーリイにランデイは真剣な顔でそう答える。
「それにしても意外だな。戦場じゃないこんなお遊びにお前が付き合

竜巻を背にクルトは冷静に聞き返す。

隣にはワジがいるが、他のメンバーの姿はない。

分断されてしまったことにクルトはクリスの奇襲を防げなかった自分を恥じる。

「俺の名はガイウス・ウォーゼル。ノルドからこの士官学院に留学している……」

ロラン・ヴァンダールが使っていた双剣術には以前から興味があった。手合わせ願おう」

「まさか彼のヴァンダールの子息がクロスベルに家出をしていたとはな」

ガイウスに並び立つのはユーシス・アルバレア。

「やれやれ、このメンバーっていうかクルトのところにはクリスが来ると思っていたんだけど当てが外れたな」

ワジは背後の風の壁を振り返って肩を竦める。

「そのクリスから伝言だ。『クルト、君と戦うのは二年後だから、今日はVII組として勝つことを優先させてもらう』と」

「……………それは本当にクリスの言葉なんですか？」

「ああ、女神と風に誓って嘘偽りはない」

真つ直ぐに頷くガイウスにクルトはクリスとここで戦うことのだと意気込んでいただけに、目の前にガイウスとユーシスが現れて落胆を感じていた。

「……………はは、やってくれる」

「クルト、大丈夫かい？」

「ええ、問題ありません」

ワジの言葉にクルトは気持ちを切り替えて頷く、落胆を感じながらクリスの思惑を肯定している自分を素直に受け入れる。

しかし――

「ワジさん、俺はクリスに舐められているみたいですね」

「ああ、そうだね。それじゃあどうする？」

この場では戦わない。

だがこれは七対七のサバイバル戦。

当然、目の前の敵を倒せば、次の敵と戦い、制限時間が許す限り最後の一人になるまで戦う。

クリスはこの中でクルトとは戦わないと言って別の誰かと戦いに行った。

つまりはガイウスとユーシスのコンビにクルトが負けると判断したのだろう。

「悪いですが、これ以上貴方達の思い通りにはさせません」

そう言つてクルトは剣帯から奇妙な導力器を両手に取る。

見た目は長めの筒。

側面のスイツチを入れることでクルトの身の丈程の導力の刃が筒の先に顕現する。

「魔導杖の剣タイプか……」

「ふむ……初めて見るが相手にとって不足はない」

「やれやれ、僕としてはもう少し肩の力を抜いて遊びたいんだけどな」

真面目な人間しかいない空気にワジは耐え切れず、やる気がなさそうに肩を竦めた。

・*
・*

「くっ——」

土塊の障害物から半身を出してアーツを連射する。

返答はマシンガンの掃射。

咄嗟に隠れた土の壁に弾丸が降り注ぐ衝撃を背中越しにエリオツトは感じて息を荒くする。

「うーん、近付けそうにないねー」

「そんな呑気なこと言つてないでミリアムも真面目にやつてよっ！」

「そう言われてもなー。ボクアーツは苦手だし——あつ、がーちやんっ！」

土塊によじ登つて頭を出したミリアムが見たのは、同じく土塊の障害物によじ登つて魔導杖を構えるティオの姿。

駆動の光を纏うティオの姿にミリアムは素早く土塊から降りてエ

リオットの首根っこを掴んで「アガートラム」を呼んで飛び乗る。

「え——なあっ!？」

「いつけえがーちゃん! 突撃っ!」

エリオットの悲鳴を引き連れて、火球が降り注いでミリアムたちが隠れていた土塊が爆散する。

「来ますっ!」

その爆発を背後に突撃して来る奇妙な傀儡にノエルは慌てずに両手のサブマシンガンを照準して引き金を引く。

が、銃弾はバリアに阻まれる。

「ノエルさん下がってっ!」

テイオは新たな導力魔法の駆動を中断して叫ぶ。

「とりやー!」

気の抜ける号令に合わせ、「アガートラム」はテイオの足場を殴る。

大きく傾いた土塊にテイオは空中に放り出される。

「もらったっ!」

「させませんっ!」

追撃しようとする「アガートラム」にノエルはサブマシンガンをスタンハルバードに持ち替えて横撃する。

「くっ——このっ!」

無理矢理引っ張られて来たエリオットは体勢を立て直し、ノエルに向けて魔導杖から水泡を飛ばす。

「っ——」

ノエルは咄嗟に身を翻し、スタンハルバードを一閃して水泡を弾くと、それを手放して両手にグレネードを持つ。

撃ち出したのは炸裂系の弾頭ではなく、暴徒鎮圧用の電磁ネット。

「アガートラム」とエリオットに向けて同時に撃ったそれは、それぞれの頭から覆い被さり、接触と同時に電気ショックを与える。

「がーちゃんにそんなの効かないよ!」

ミリアムは構わず「アガートラム」を操り電磁ネットを引きちぎる。

「ぎやつ!?!」

対してエリオットはそれを正面から受けて倒れる。

「あらら、やられちゃった」

「これで二体一ですっ!」

「っ——まだだっ!」

痺れる体をエリオットは無理矢理動かし、魔導杖に新たに追加した機能を起動する。

杖の柄が短く収縮され、杖の先端から導力の刃が形成される。エリオットはそれを使って無理矢理ネットを切り裂いて脱出する。

「あれはティオちゃんのビームザンバー!?!」

「不思議ではないでしょう。あれはエプスタイン財団から市販されているシステムですから……」

ノエルさん、紅毛のあの人はわたしに任せてください」

「了解しましたっ!」

「いっくよーっ!」

ノエルはスタンハルバードを、ミリアムは「アガートラム」を嗾けるようにして殴り合いを始める。

「エイオンシステム起動——エニグマ駆動……」

「っ………《ARCS》駆動っ!」

痺れる体に喝を入れて立ち上がったエリオットは歯を食いしばって導力魔法を駆動する。

少年と少女は足を止めて導力魔法の撃ち合いを始めた。

・*

「——腕を上げたみたいだなクリスッ!」

二本の何の変哲もない短剣と二つのトンファアが噛み合っただけでロイドはクリスに声を掛ける。

「はい、あれから半年。それなりの修羅場をくぐって来ましたから」

「それなら俺達もだっ!」

ロイドはナイフを腕ごと弾く。

が、弾く勢いに逆らわずに体を入れ替えたクリスはその衝撃を受け止めて、弾いたナイフは戻って来てロイドを襲う。

「くっ——これ程のナイフの腕前だったとは、流石は未来の皇帝と言わべきか？」

「無理に褒めなくて良いですよ。所詮ただ使っているだけの二流止まりの技ですから」

「そんな謙遜は——」

しなくていいという言葉は呑み込まされた。

間断なく責めてくる二つのナイフ。

手首をうまく使い変幻自在の軌道で狙って来る様は堂に張つていてとてもではないが二流の技とは思えない。

——いや、確かにヨシユアと比べればまだ分かりやすいかもしれないが……

「どうしましたロイドさん？ その程度ですか？」

クリスの攻めが途切れ、代わりに言葉をぶつけられる。

「買い被りすぎだ……特務支援課の中で俺はそこまで強い方じゃない」

むしろ単純な戦闘力では後ろから数えた方が良いのではないかとロイドは自嘲する。

ベルゼルガーを使う事を躊躇わなくなったランディは言うに及ばず、警備隊のノエルと正面から何度か手合わせしたことがあるが勝率は芳しくない。

ワジは手合わせをしようともしないが、何か奥の手を持っている感じがする。

体方面では流石にエリイやテイオに勝てるが、彼女たちには正確無比な射撃と大規模なアーツ攻撃はロイドには真似できない。

そしてクルトに至ってはランディに迫る実力を身に着けている。

「……………何ですかそれは？」

そんなロイドの自嘲にクリスは顔を歪めた。

「強くないって自覚があるならそんな顔をする前にやる必要があるでしょうっ！」

左右からのナイフをトンファーで防がせ、クリスはロイドの腹に前蹴りを叩き込む。

「がっ！」

「ロイド——っ！」

仰け反って倒れるロイドを援護しようと後方からエリイが銃を構えるが、アリサの矢がそれを阻む。

「ロイドさん……僕は前から貴方に聞きたいことがあります」

「クリス……」

「今のクロスベルの空気、あれはいったい何ですか？」

「それは……」

「独立したい？ ええ、その気持ちは分かります……」

二つの大国に挟まれていることでクロスベルに多くの不自由があることは、白々しく聞こえるかもしれませんが僕も心を痛めています」

「……いや……君にそう言ってもらえるのは——」

「だけど！ 今のクロスベルに流れている噂は何ですか!？」

ロイドの言葉を遮ってクリスは叫ぶ。

導力ネットや取り寄せたクロスベルタイムズのリイン・シユバルツァーの特集。

ギリアス・オズボーンの隠し子だったこと。

通商会議でのクロスベル上空で起きた大きな爆発はやらせであり、教団事件のことに遡って悪し様な噂が好き勝手に流れている。

「ロイドさん、今日はクロスベルの代表としてリインさんに御礼を言いに来たそうですね？」

「……ああ」

「ならロイドさん自身はリインさんに御礼を言ったんですよね」

「それは……」

思わずロイドはクリスから目を逸らす。

その反応にクリスは余計に抑え込んでいた憤りを爆発させる。

「っ——それが恩人に対する仕打ちなんですか!？」

それが貴方達がいとも言っていたクロスベルの“誇り”なのか!？」

「つ——俺だつてありがとうつて言いたかつたさつ！」

梅蔑の言葉にロイドは叫び返す。

「だけど……どうしても悔しくて……」

ロイドはこれまでの事件を思い出して歯を食いしばる。

教団事件、通商会議の襲撃。

どちらもリインがいてくれたから被害は最小限に留められ、クロスベルは救われた。

教団事件に至つてはその功績を特務支援課に譲ってくれる始末。

「あの時何もできなかつた自分が惨めで……」

警察学校で習つたことなんて何の役にも立たなくて俺がして来た努力は何だつたんだつて、思つたら俺は何も言えなかつた」

リインが譲つてくれた功績のおかげでクロスベルの特務支援課の見る目は大きく変わった。

だがその事を理由に「英雄」のように持ち上げられる度に後ろ暗い感情が胸にざわめく。

せめて成人している大人として役目を果たすことはできたが、どうしてもロイドはリインの顔を直視できなかつた。

「正直、羨ましいと思つたよ……」

俺にも《鬼の力》や《騎神》があればリイン君に頼つたりしないでクロスベルを守れたんじゃないかって何度も思つた」

特務支援課として様々な事件を解決して少しは憧れの背中に追い付けたかと思つていた自負も、リインの活躍によつて自分の至らなさを思い知らされる。

「幻滅しただろ？ 俺は恩人に向かつて浅ましい嫉妬をしている馬鹿な男だつたんだ」

「……………馬鹿になんてしませんよ」

クリスは二つのナイフを捨て、リインに頼み込んでこの模擬戦に持ち込んだ魔剣を抜く。

「他人の才能が羨ましい。自分の不甲斐なさが恨めしい。だけど周りには良い顔をしないといけない……その気持ちは僕も良く分かります」

「クリス……」

「結局、僕達のように才能がない人間ができることなんてせいぜい夢を見て “諦めない” ことくらいしかないんですよ」

「君は……本当にこの半年で見違えるほどに成長したみたいだな」

クリスが特務支援課にいた時は自分に自信を持ってない子供だった。

しかし、今はどうだろう。

相応の自信を身に着けた少年にロイドは自分以上の成長を感じずにはいられない。

「だけど “諦めない” か……ああ、そうだったな。俺にできることはその程度だった」

そしてクリスの言葉が胸に落ちたように心地を得る。

「クルト共々あの場に足踏みしているならそれで構いません。ただ今日、僕は貴方達を倒してもう一段上に行かせてもらいます」

「はは、生意気さも成長したみたいだな……だけど、そう簡単に負けるつもりはない」

ロイドは呼吸を整え、気合いを入れ直す。

——この戦いが終わったら、ちゃんとリイン君にこれまでの御礼を言おう……

そう決意をしてロイドは——

「エイドロングア召喚っ！」

「ガーちゃん！ アルカデイスギアッ！」

「うん？」

「え……？」

戦場に二つの声が響いたかと思うと、空中に無数の爆発が起きる。

「いっくよーっ！」

「スラスター射出」

白い鎧をまとい殴り掛かるミリアムを射出スラスターでテイオは迎撃する。

「ビットミサイル発射」

「なんのガーちゃんビームッ！」

無数のミサイルが光線に薙ぎ払われて更に空を彩る。

「エーテルバスター改——」

ティオが大型の導力砲のエネルギーをチャージして——

「ギヤラクシーカノン——」

ミリアムは白い鎧を纏ったまま両手を合わせてそれを砲に見立てて掌にエネルギーを収束させる。

「——ファイアツ!!」

「——発射あつ!」

二つの野太い導力砲の光線が空中でぶつかり合い、せめぎ合って膨張して爆発する。

結界に閉ざされたその空間をその衝撃は遍く蹂躪して、撃ち合った二人も含め全てを蹂躪するのだった。

・*

9月22日水曜日。

ロイド達との戦いが終わったその日の夜。消灯時間が迫る刻限にラインの部屋に珍しい来訪者が訪れた。

「ライン……ちよつと良いかしら?」

「アリサ? どうしたんだ珍しいな?」

「うん、ちよつと思ひ出したことがあって誰かに話しを聞いて欲しくて」

「俺で良いのか?」

「ええ……まあ正直誰でも良かったんだけど……こう言ったらラインに失礼なのは分かってはいるんだけど」

「いや、構わないよ。それで何を話したいんだ?」

「……前にラインには父様が亡くなったことは話したわよね?」

「ああ……」

「私は事故だって聞かされていた。私もずっとそうだって思っていた……」

「……
「だけど違った……私思ひ出したの……父様は私の目の前で『誰かに殺されたってことを』」

そう告白したアリスの目には暗い光が宿っていた。

101話 カレイジャス

「シャロンさん、少し良いですか？」

混乱していたアリサの話聞いて、宥め、部屋に送って寝かしつけたリインはそのまま学生寮一階の管理人室に足を向けた。

「リイン様？ どうぞ鍵は開いております」

許可を得てリインは部屋に入る。

「どうしましたかリイン様、こんな遅くに？」

いえ、皆まで言わなくても分かりました。つまり避妊のための薬か道具をご所望なのですね？」

「シャロンさん……」

妙にテンションを上げたシャロンはしたりと頷き、リインに小さな小包を差し出した。

「何ですかこれ？」

「それを私の口から言わせるだなんて……」

顔を赤らめて言葉を濁すシャロンにリインは首を傾げる。

「そんなことよりシャロンさん。アリサの話、聞いていましたよね？」

「……何のことでしょう？ このシャロン、お嬢様のプライベートを無暗に盗聴する趣味はありませんが」

笑顔を顔に張り付けていつもと変わらない様子でシャロンは答える。

「戯言に付き合うつもりはありません……」

単刀直入に聞きます。アリサのお父さんフランチ・ラインフォルトを殺したのはシャロンさんですね」

臆面もなく真っ直ぐに尋ねてきたリインにシャロンは笑顔を顔に張り付けたまま固まる。

「何故、そのような結論に至ったのですか？」

「《結社》の執行者である貴女が何故ラインフォルトのメイドをしているのか……」

今回アリサが思い出したことと照らし合わせてみれば自ずと繋が

る答えです」

もしかしたらラインフォルトと《結社》が繋がっている可能性もあるが今はそれは置いておく。

「とりあえずアリスが思い出したことは、当時フランツさんの誕生日プレゼントを渡すために彼の研究室へ行ったこと……」

そこでフランツさんが誰かと争っていて、アリスに逃げろと叫んだこと……

誰と争っていたかまでは思い出せていないようですが、フランツさんと入れ替わるようにシャロンさんはラインフォルト家で働くようになったんですね？」

「……………お見事です」

シャロンは肩を竦ませてリインの考えを肯定する。

「そうです。リイン様が推理された通り、私がフランツ様を殺めました……ですから私は——」

「ヨシユアさんみたいにアリスの前からいなくなると言うのなら、やめてください」

「っ——!？」

「シャロンさんはヨシユアさんと似ているところがありますが一応釘を刺しておこうかと思って……」

あの時のエステルさんは本当に見ていられなくて、アリスにも同じことをするつもりですか？」

「ですがそれは私にとって譲れない一線なのです」

「そのためにアリスを傷付けても良いと？」

その傷痕に付け込まれて悪い男に引っかけかかっても貴女は構わないと言うんですか？」

「それは……リイン様がフォローしてくれますよね？」

「生い先の短い俺ができることなんてたかが知れていますよ。何よりアリスは俺を嫌っているんですから反発が目に見えています」

「アリスお嬢様の嫌いは、嫌よ嫌よも好きの内によるものですわ」

「天邪鬼なのは認めますけど、俺だって忙しいんです」

「そんなっ！ リイン様はお嬢様と仕事、どちらが大切だと言うんで

すか!？」

「どうしてそうなるんですか?」

油断すると主導権を奪われ有耶無耶にされそうになる会話にリインはため息を吐く。

「ともかくアリサはまだ貴女を信じています……」

なのに今貴女がアリサの前から何も言わずに消えれば、それこそアリサへの裏切りであり、貴女がアリサに怪しまれるだけですよ」

「リイン様は分かっておられません。お嬢様が真実を思い出せばどれほど傷付いてしまうか。ヨシユア様のように心を壊しても良いと仰るのですか!？」

「その言い方……まだ何かがあるんですね?」

「それは……」

リインの指摘にシャロンは口ごもる。

「安心してください。これ以上女性の過去を詮索するつもりはありません……あくまでも俺は忠告に來ただけです」

リインは手を上げて、これ以上は踏み込まないと意志表示をする。「だけど軽率な行動や、焦った答えを出そうとしないで下さい……」

八年前の誓いを守りたいと思っているかもしれないかもしれませんが、この八年でシャロンさんも選べるかはともかく選びたい選択肢がいくつも手に入れたんじゃないですか?」

リインの言葉にシャロンは沈黙を返す。

「誰かに相談しづらいならルフィナさんを貸して上げます……」

彼女が見聞きしたものは俺に伝えないと約束しますし、元シスターですから懺悔をするには丁度いい相手ですよ」

「……………リイン様は本当にあの時からお強くなられたのですね」

動じず、感情的にならず、それでいて追い詰めないリインの交渉にシャロンはかつて言い争った少年の成長を実感する。

「そういうシャロンさんはあの時のままですね……」

いえ、もしかしたらラインフォルト家に仕えるようになってから変わらないようにしているんじゃないですか?」

「それは御想像にお任せします」

強情にも取れるシャロンのいつものメイドの対応にリインは肩を
竦める。

「意地を張るのも程々にした方がシャロンさんのためにもアリサのた
めに良いと思いますよ……」

他人の成長なんて案外、本人や当事者には分からないものなんです
から」

そう言い残して、リインは管理人室から出て行った。

シャロンはリインの気配が彼の部屋にまで戻っていくまでその場
に立ち尽くす。

「言えるわけ……ないじゃないですか……」

一人になったシャロンは小さく呟く。

「私自身がああの時の答えに未だに至ってないのですから」

何故、娘に向かって逃げろと叫んだフランツがアリサを殺そうとし
たのか。

何故、《虚ろな人形》が縁も所縁もない幼子をその身を挺して守った
のか。

どちらの答えが知りたくて、イリーナの提案を受け入れたのかシャ
ロンは未だに分からなかった。

・
*

9月25日

ノーザンブリアでの「塩の杭」の再来によりお披露目をせずに飛
ぶこととなったアルセイユ二番艦、高速巡洋艦カレイジャス。

改めて今日を「お披露目」の日として、《紅き翼》は帝国の空を舞
う。

オリヴァルト皇子の主導の下で建築され、艦長に《光の剣匠》ヴィ
クター・S・アルゼイド。

情報収集役として遊撃士トヴァル・ランドナーを迎え入れて、緊迫
する帝国の牽制役となるべき《皇族の船》。

そのお披露目の飛行にⅦ組は《特別実習》の現地への送迎として同

乗させてもらおうことになった。

「すごい！ おおきーいっ！」

「うちのガンシップよりもはーい！」

甲板の先端ではしゃぐミリアムとシャーリイを他所にリインは艦橋を見上げ、かつて乗ったアルセイユの事を思い出す。

「懐かしいですね」

「リイン君にとってはリベルⅡアーク突入の時と、影の国以来だったかな？」

ボクとしては君と一緒に凱旋したかったよ」

「はは、その節は御迷惑をお掛けしました」

リインは笑って誤魔化して、オリヴァルトに向き直る。

「これが殿下が考えていた《第三の風》ですか？」

「ああ、革新派にも貴族派にも属さない『皇族の船』。第三の風をもたらすための翼……」

この船の開発にあたっては様々な人々の力を借りてね。もちろんリイン君の寄付と《Rの軌跡》の印税のおかげでもあるよ」

「そ、そうですか……」

感謝してくるオリヴァルトにリインは複雑な顔をする。

「はは、そんな緊張することはないさ……」

リイン君はこの船に乗るのは二度目になることだし、それに出資のことを考えればリイン君はこの船のお母さんみたいなものなのだから……

むむ、ではボクはお父さんみたいなものか……リイン君っ！」

「何ですか？ ルーレまで船の先端に宙吊りにされたいんですか？」

拳を握り締めてリインは聞き返す。

「いえ、何でもありません」

リインに凄まれてオリヴァルトはすごいと言いかけた言葉を呑み込む。

「まあ冗談はさておき、『牽制役』としてこの船を用意してアルゼイド子爵に艦長を引き受けてもらったわけなのだが……」

リイン君、君さえ良ければツールズを卒業したらこの船に乗らない

かい?」

「オリヴァルト殿下?」

「地上部隊が主戦力である帝国の軍にとってカレイジャスは確かに大きなアドバンテージを持つが、白兵戦能力に関してはアルゼイド子爵に任せることになってしまう……」

それではこの船の働きは半減してしまうだろうか?

だからこそ《結社》の執行者のような実働部隊が必要になるとボクは考えている」

「確かにそうですね。艦長自らが白兵戦に出張ってしまったては本末転倒でしょう」

「だからこそ、リイン君がそこに加わってくれば最強の布陣が完成するだろう……」

ゆくゆくは閉鎖されてしまった遊撃士のように、各地で民間人の保護を最優先に行動できる権限を始めとした特権をボクは帝国政府に承認させるつもりだ……

VII組の運用を通してやはりこの国には遊撃士が必要なだとボクは確信したよ」

「殿下……」

「そして鉄血宰相が閉鎖させるように追い込んだ遊撃士の役割こそが、彼に対抗するために重要なのではないかという答えに至ったのだよ……」

まだ名称は決めていないが、アルノールの調停代行者と言った感じにしようかと考えているのだが、どうかね?」

「どうつと言われても……」

「もちろんリイン君が別の方法を考えているのならそれを優先して構わないさ。だけど少しでもリイン君の方法に協力できるならば是非利用してもらいたいと思っっているよ」

言葉を濁すリインにオリヴァルトは微笑んで答えを話題を変える。

「ところで『鉄血宰相』と言えばリイン君、君はオズボーン宰相の隠し子だったわけだが」

「ええ、そうなります」

あつさりと認めたリインにオリヴァルトはため息を吐く。

「水臭いな。聞けばクローゼ君には先に打ち明けていたそうじゃないか？」

やはりあれなのかい？ クローゼ君が本命になったということなのかい？

まあ確かに彼女はエステル君とは違った魅力を持つ女性だから、リイン君が惚れこんでしまうのも納得だ……

しかしボクとしてはリイン君には是非アルフィンの婿になって義兄弟の契りを交わしたかったのだが……

ううむ、リベールとの友好を考えるとありなのかもしれないね」

「あ……あの……オリヴァルト殿下？」

「それともツールズに來たらしいレンちゃんこそが本命なのかな？」

いやいや、彼女の積極性と行動力は目を見張るものがあるからね。我が妹にも是非見習ってもらいたいところではあるのだが……おや？」

何かを思い出したのか顔を赤らめて背けているリインにオリヴァルトは気付く。

「そうか……うんうん、とうとう次の恋の花を芽生えさせたのだね」

感無量にオリヴァルトは《ARCU》を取り出した。

「ちよつとオリビエさん？」

何処かに通信を繋げ、コールが鳴ること数秒。通信が繋がるとオリヴァルトは叫ぶように告げる。

「聞いてくれたまえシエラ君！ ついにリイン君が——」

「ちよ!? やめてください！ レンとはそういう関係じゃありませんから——」

《ARCU》を奪おうとするリインとその手から逃げるオリヴァルトとの追いかかけっこが始まるのだった。

102話 紺碧の海都I

カレイジャスから降りたりイン達を迎えたのは紺碧の海と蒼穹の空が織りなす風光明媚な景色と帝都の夏至祭を彷彿とさせる賑わったオルデイスの街の姿だった。

「武術大会を行っていると聞いてはいたが……」

「随分賑わっているのだな」

街の様相にユーシスとラウラは周囲を見渡して呟く。

話に聞いていた落ち着いた街並みは多くの人で賑わっており、道にはいくつもの露天や屋台が並び、行き交う人たちの中の多くには武器を携行している者たちが多く見て取れる。

「帝国で武術大会なんて珍しいからな。もしかしたら帝国中の人が集まっているのかもしれないな」

高揚を隠し切れていないラウラは様々な武人たちの姿に目移りする。

「あはは、何か美味しそうな匂いがする」

「待て。どこに行くつもりだ？」

フラフラと屋台の匂いに誘われたミリアムの首根っこをユーシスが掴まえる。

「えへへ、ちよつとそこの出店に——」

「大人しくしている。すぐに案内の人間が来ることになっているのだから」

「ブーブー良いじゃんちよつとくらい」

「ダメだ。先日もそう言ってラインが作ったアイスを食べ過ぎて腹を壊したのはどこのどいつだ？」

「シャロンさんやラインの作るご飯がおいしいのが悪い」

臆面もなく言い切るミリアムにユーシスはため息を吐く。

「誰でも良い。こいつの——どうした？」

ミリアムの世話を他の誰かに押し付けようと振り返ってユーシスは険しい顔をしているライン達三人に首を傾げた。

「むっ……どうかしたのか？」

武芸者の物色を切り上げてラウラもそんなリイン達の様子に気付く。

「エマ……」

「はい、どうやらオルデイス全体の霊場が乱れているようです」

「なるほど、これがそういう感覚なのか」

それを感じている二人にガイウスは唸る。

「何を言っている？」

「ユーシスさん達には分からないでしょうが、今この場は上位三属性が働いています……」

まだ目に見えた効果はありませんが、それも時間の問題でしょう」

「それはつまり街の中に魔獣が発生すると言うことか？」

「ラウラさんが先程仰っていた帝国で武術大会がないことにはちゃんと理由があるんですよ」

「む、そうなのか？」

思わぬところから解答が出て来てラウラは聞き返す。

「暗黒竜の討伐のために《緋》の封印が解かれたことを契機にそれぞれ管理を任せていたはずの豪族達が戦に「騎神」を用いるようになりました……」

本来なら「魔女」の導きがなければ解かれることがない封印なんです。が術に欠陥がありました……」

私たちは便宜上「闘争の儀式」と呼んでいました」

「「闘争の儀式」……」

「原因が分かったのはつい最近なんです、「鋼の呪い」に呼応させる形で「闘争」を行うことで当時は起動者を選定していたそうです……」

長期間の継続した「闘争の想念」と強い起動者を選出するのに武術大会というシステムは利に適っていました……」

ですがそこで流れた血は多く、当時の魔女とアルノールが旧校舎のような試練のシステムを改めて作るまでこの選出方法が続いてしまったんです」

「なるほどその名残が今も帝国では武術大会の類が開催されていない理由というわけか」

「はい……なので現在は武術大会を行ったとしても起動者の選出はできなはずです……」

いえ、そもそもどうして旧いとは言え、約定を破ってカイエン公爵は武術大会なんてものを開催したのか」

「そのことなんだがエマ。もしかしたらカイエン公は《蒼》を《緋》のように——」

考え込むエマにリインが別の解答を出そうとしたところでそれは聞こえて来た。

「おい聞いたか？ ブリオニア島の巨人像の話」

「ああ、いつの間にか跡形もなく消えてなくなっていたって話だろ？」

重機を使った形跡もなくして巨人像が練り抜かれた大穴だけが残っているって話だ」

「まあ、有名な観光スポットって訳じゃないけど観光資源が一つなくなつたわけだからな……」

今回の武術大会を巨人像の代わりに興行収入にするとかって話らしいぜ」

「つていうか結局あの巨人像って何だったんだらうな？」

もしかしたらあの《灰の騎神》と何か関係あつたりして」

オルデイス市民はそんな雑談を交わしながらリイン達の前を素通りして行った。

「……………リインさん？」

エマは振り返りにっこりと笑う。

リインはそんな彼女から明後日の方へと顔を逸らす。

「ちよつとあんた。ブリオニア島にあるのは《アークルージュ》の器なのよ！

確かにもう空っぽで何の役に立たないかもしれないけど、魔法の所有物なのよ！」

そんなリインの肩にセリーヌが飛び乗り、頬に猫のパンチを押し付けて非難する。

「いや、ちゃんとローゼリアさんの許可は取ったから……」

まあ流石にカイエン公の許可を取るのには説明できないことだから省いたけど」

「いつの間にそんなことを……あ、もしかしてあの時に」

リインの答えにエマは頭を抱え、以前エリンの里でリインと鉢合わせした時のことを思い出す。

「そう言えば谷に落ちたノルドの巨人像も消えていたと父さんから手紙で知らされたのだが」

ガイウスもそんなエマに便乗するようにリインを見る。

「ど、どっちも元はと言えばノイの体なわけだから大元の所有権はノイにあるはずだろ？」

「そうですけど……そうなんですけど」

「せめて一言——いや、俺が言える事ではないか」

リインの主張に一理あると納得してしまいエマは頭を抱え、ガイウスも不服を呑み込む。

とりあえず何の説明もしてくれなかった長を後でめる決意をエマは固めるのだった。

「その話は一先ず置いておいて、それよりも今はオルデイスのことだ……」

もしかしたら特別実習をやっている場合じゃ——」

リインの言葉を遮るように彼の背後で一台のリムジンが停まり、一人の少女が降りて来た。

「Ⅶ組の皆さん、ようこそ……」

ラマール州都にして西部沿海州の盟主たる海港都市 《紺碧の海都》オルデイスへ」

帝都の女学院の制服を纏った長いミント髪の少女——ミルデイー又は優雅な動作でスカートを広げて一礼してⅦ組を出迎えた。

・＊

ミルデイー又促され、リイン達は彼女が乗って来たリムジンに乗

り込み、そこで今回の特別実習についての説明を受ける。

「なるほど……今回の実習の課題を君が？」

「はい。叔父であるクロワール・ド・カイエンに代わってⅦ組の皆さんにオルデイスでの世話役と説明役として女学院から呼び戻されてしまいました」

少し困った様子の苦笑いを浮かべ、ミルデイーヌは特別実習の説明を始める。

「既に皆さんは聞き及んでいると思いますが、Ⅶ組の皆さんにはカイエン公爵が開催している武術大会に参加してもらうことになっております……」

四人一組のチームとなって、明日からの本戦にシード枠として参加していただく予定です」

「ふむ……シード枠か……」

「不服そうだな。大方予選から一戦でも多く戦いたかったという口か？」

「そ、そんなことないぞ」

不満そうに唸るラウラにユーススが揶揄う様に指摘する。

「ふふ、気にしないで下さい。《特別実習》の日程に無理な要求を出しているのは叔父の方ですから……」

それにシード枠は皆さんだけではありませんから」

「何だと？」

意外な言葉にユーススは聞き返す。

ミルデイーヌはクスリと笑ってその疑問に答える。

「何分初めての試みなので、出場者が集まらないことも想定して各州都の領邦軍から代表者たちを募っています……」

本戦ではⅦ組の皆さんを含めた全16チームでトーナメント方式で戦うことになっています」

「ほう……領邦軍の軍人たちと戦えるのか」

「はい。ラマール州からは代表として《黄金の羅刹》の異名でうたわれるオーレリア将軍が参加することになっています」

「それは……七月の実技テストに来てくださったルグイン伯爵ですよ

ね？」

当時の事を思い出してエマは苦い顔をする。

「サザーランド州からは『黒旋風』ウォレス・バルディアス准将が来ていただくことになっています」

「バルディアス？ その名は確か……」

知識にある家名にガイウスはもしかしてと考え込む。

「クロイツェン州からは変則的ではありませんが、ルーファス様が領邦軍人を率いる形で参加します」

「兄上が!？」

「ノルティア州からも先の御三方に劣らない武人が来てくださるようです」

「へえ、みんな帝国では知らない人はいない有名な名人だね」

「うむ……ここまでの規模の武術大会に参加できるとは、今から楽しみだ」

どれも帝国では名を知らない者などいない程の武人たちにミリアムが感心し、ラウラは高揚する。

が、それにリインが水を差した。

「ミルデイーヌ、その事なんだが武術大会を今から中止にすることはできないのか？」

「中止ですか？ それはいったい何故？」

突然のリインの言葉にミルデイーヌは首を傾げる。

「実は——」

そこでリインは先程と同じように言葉を止める。

「リインさん？」

言葉を止めたリインにミルデイーヌは首を傾げる。

「いや……帝都やクロスベルでテロリストがあんな事件が立て続けに起きているから少し軽率なんじゃないかと思っただけ」

咄嗟に口に出した建前にラウラ達が首を傾げるが、それをリインは黙殺する。

起動者選出の儀式に加え、Ⅶ組にはまだ話していないがオリヴァルト皇子と共有した帝国解放戦線を支援しているという情報もまだ裏

付けされたものではない。

後者に至ってはミルデーヌの一族の長が行っている醜聞だけにそれを直接言及してしまうことをリインは躊躇った。

「ええ、私も女学院から呼び戻された時に同じ疑問を叔父にしましたが、市民を安心させるために必要だと仰っていました……」

それに加えて各州都からこれだけの猛者を集めていますから万が一はないだろうと」

「だけど相手は《蒼の騎神》を所持しているし、《紫の騎神》の所在も定かじやないのに」

「それについても、テロリスト達の目的が本当に『鉄血宰相』なのかどうかを確かめるには丁度良いだろうと」

白々しい言葉にリインは齒齧みをするが、ミルデーヌの前ではそれを押し隠す。

本当にカイエン公がテロリストを支援しているのなら、テロリストの襲撃はないと確信しているのも当然だろう。

更には『闘争の儀式』の条件を整えるために各地の猛者を集めたとも取れる。

「あの……申し訳ありません。リインさん」
「いや、ミルデーヌが謝ることじゃないよ」

安心させるようにリインは恐縮するミルデーヌに微笑みを向ける。

「ところで武術大会の参加人数は四人一チームみただけど、俺達は六人いるんだがそれについてはどうなるんだ？」

「それについては先に皆さんの今後の行動を踏まえて御説明させていただきます……」

まず皆さんが今日から三日間、宿泊してもらうことになるのはジュノー海上要塞となります」

「へえ……あの要塞に……流石にボクもあそこに入るのは初めてなんだよね」

「聞けばリインさんはガレリア要塞での軍事教練を受けていないそうなので、それを補填するためにⅦ組の皆さんにはそれを改めて受けて

もらうことになります」

「それは……何だか悪いな。みんなを俺の補習に付き合わせてしまったみたいで」

「気にするでないリイン。別に教練など何度受けても構わん」

「そうだなガレリア要塞との違い、それこそ正規軍と領邦軍の比較ができると考えれば十分だろう」

自分のせいと言われて困った顔をしたリインにラウラとガイウスがすかさずフォローを入れる。

「軍事教練は今日から早朝に掛けて、大会に出場しない方にはスタッフとして運営に協力してもらう予定です……」

そして皆様が敗退した場合は、出場した四名もそのまま裏方に回っていたかどうかになっていきます」

「なるほど今回は貴族の興行について関わると言う事か」

「言われてみれば今までの特別実習で領邦軍と関わる事はあっても、貴族そのものに関わることはあまりありませんでしたね」

ユーシスとエマは今回の特別実習の主旨を受け入れる。

「あ……皆さん、外を——見えてきました」

ミルディーヌに促されリイン達は車窓の外に目を向ける。

徐々に近づいて来る巨大な城に一同は思わず見入ってしまう。

「ジュノー海上要塞。ラマール州領邦軍の本拠地か」

「流石に大きいな」

「ふむ……レグラムのローエングリン城に通じるものを感じるな」

「ふふ、歴史はかなり古いはずです」

リイン、ガイウス、ラウラと窓から見える要塞の姿に感想をもらす三人にミルディーヌはガイドとして簡単に説明をする。

「暗黒時代に築かれた巨大な城塞に近代的な改修が施されているとか」

「うんうん、大型飛行艇に対空砲も完備しているから潜入するのは諦めたんだよね」

「……いつは……」

ミリアムが気軽にしゃべる言葉にユーシスは眉を顰める。

「それにしても暗黒時代の城塞か……」

ミルデーヌの説明にあつた言葉にリインは考え込み、エマに視線を向ける。

「いえ、ラマール州の試練の場はここではないはずです……」

それに街で感じた澱んだ霊力もここには及んでいません」

「そうか……」

その情報が果たして良いものなのか、悪いものなのか考えながらリイン達はジユノー海上要塞に到着した。

・＊

「よく来たなシュバルツァー。そしてⅦ組の雛鳥たち」

司令室へと案内されたⅦ組を七月の実技テストに乱入してきたオーレリアが出迎える。

「お久しぶりです。オーレリア將軍」

「うむ、そなたの活躍は聞いているぞ」

挨拶を返すリインにオーレリアは早速値踏みをするようにリインを観察する。

「話には聞いていたが、黒髪が見事に白く染まったか……」

それに感じる「闘気」の質が変わっているな。それにその太刀……」

一つ一つ読み解く度にオーレリアはその表情を喜悦に染めて行く。

「モテモテだなリイン」

「ラウラの姉弟子だろ？ 何とかしてくれ」

まるで獲物を見つけた肉食獣の眼光に晒されてリインは肩を竦める。

「ふふ、明日からの武術大会がますます面白くなりそうだ」

一呼吸でオーレリアはその覇気を納めてみせる。

「オーレリア將軍も参加するそうですね。そのことなんですが今回の武術大会は誰の発案によるものなのでしょう？」

「ふむ……カイエン公が主催と聞いているが、大元は彼の相談役から

の発案らしいな」

「相談役？ 名前を伺っても？」

「たしかルーグマンという男だったな」

「ルーグマン……」

聞いたことのない名前にリインは唖る。

「さて……現時刻を持ってそなた達、Ⅶ組は領邦軍の一員となる」

挨拶を切り上げて、オーレリアは総司令としての顔でⅦ組を見渡す。

「ガレリア要塞の正規軍でどのような軍事教練を受けたかは知らんが、その時以上の厳しさを覚悟しておくのだな」

脅すような言葉に一同に緊張が走る。

「さて、ではまず——」

「失礼します。 武術大会本戦の出場者が決まりましたので報告に上がりました」

オーレリアの言葉を遮る形で一兵士がそう言って入室して書類を置いて行く。

「——丁度いい、そなた達も見るが良い」

渡された書類に目を通して笑みを濃くしたオーレリアはそれをリインに差し出す。

一言断つてそれを受け取ると、リインは顔をしかめた。

「チーム名『ファフニール』。ラクウエル出身の不良たち？ 俺達よりも年下なのによく予選を通過できたものだな」

「見ろ。『西風の旅団』の名前もある」

「《蛇》というチームにあの女剣士の名前がある。しかしチームリーダーがギルバートとは……むむむ」

「——げっ」

それぞれの感想を背後に聞きながら、リインは最後のチームに書かれた名前に顔をしかめた。

「どうかしましたかリインさん？」

「いや……何でもない」

「あれ？ このチームだけ一人だよ」

首を傾げるミリアムに答えたのはオーレリアだった。

「うむ。その男は四人一チームの所を一人で参加していた……」

一度だけ試合を見たがかなりの猛者だったな……そうか、やはり上がって来たか」

クククつと笑うオーレリアにリインは肩を竦める。

「彼が上がって来たのなら、提案しようと思っていたがそなた達の内
の二人……その男のチームに参加するつもりはないか？」

「え……それはどういうことでしょうか？」

突然の提案にラウラは聞き返す。

「これ程の猛者が集まった大会だ。折角来たのに人数合わせのために
不参加ではつまらないだろう……もちろん先方の了承があつてこそ
の話だがな」

「それなら俺が適任でしょう」

戸惑うラウラ達を尻目にリインが立候補する。

「ほう……もしや知り合いだったか？」

「さあ、どうでしょう？」

はぐらかした答えを返してリインはもう一度書面に視線を落とし
てその名前を読む。

ロランス・ベルガー。

耳に馴染みのない名前だがそれでもリインの中に印象に残ってい
る名前にリインは波乱の予感を感じた。

103話 紺碧の海都Ⅱ

ジュノー海上要塞からオルデイスに舞い戻り、リインとエマ、そしてミルディーヌは指定された《海風亭》へとやって来た。

「ここですか？」

「ああ、話は通してくれているらしいけど……」

リインはエマにそう答えて後ろを振り返る。

「案内してくれてありがとう。でも本当について来なくて良かったのに」

もうすぐ日が落ちる時刻。

士官学生でもない年若い少女を連れ歩くことにリインは要塞を出発する時にした謝罪を繰り返す。

「いえ、叔父からはできるだけリインさんと行動を共にするように言われていますので」

逆に申し訳なきようにミルディーヌは謝る。

彼女のその様子からリインは改めて事情を察する。

「俺の監視が目的ということか……」

ミルディーヌに聞こえない小さな声でリインは呟く。

彼女がカイエン公に組しているとは思えないが、彼女を利用して何かを企ている可能性は十分にあり得る。

何故ならカイエン公は帝国解放戦線を支援しており、リインは彼らの野望を何度も阻んでいる。

彼にとっては、オズボーンの息子だったことも相まって要注意人物と見做されていてもおかしくない。

「リインさん？」

「何でもない。それよりエマ、本当にこっちで良いのか？」

ミルディーヌが不信に思わないように取り繕ってリインはエマに話を振る。

「はい。ノーザンブリアといい、クロスベルといいリインさんは少し目を離れたらとんでもないことをしてくれましたから……」

「今度こそ近くで見極めさせてもらいます」

「エマ……」

決意を胸に眼鏡を光らせるエマにリインは肩をすくめる。

「ローゼリアさんも言っていたら？」

導き手の任は一時的に解く、今は学生生活に集中し里の中では得られなかった見聞を広めることに集中しろって」

「言われましたけど……でも私は巡回魔女として、導き手として……」
納得がいかないと不満を表情に出してエマは口ごもる。

Ⅶ組の中では常に一步退いて接しているエマにしては頑固な態度だが、それも無理はないのかもしれない。

出奔したヴィータを探すために巡回魔女となるために厳しい修練を乗り越え、それに伴う責任感もあつただらう。

「だからってあんなに鬼気迫らなくても」

「あの時のエマさんは凄かったですね」

誰がロランスチームへと交渉しに行くか決める時、誰がもう一人になるかで議論となった。

それを制したエマは決まった瞬間、彼女らしくない歓声にⅦ組一同は微笑ましい眼差しを送ることになった。

「あはは……それより早く行きましょう。先方を待たせてしまったては悪いですから」

二人の視線にその時の気恥ずかしさを思い出し、エマは誤魔化すように二人を急かす。

促されて入った店内は丁度夕食時で賑わっていた。

その一角にリインは見覚えのある背中を見つけて声を掛ける。

「やはり貴方だったか」

「……来たか」

リインの声にアッシュブロンドの髪の青年は振り返る。

元リベール王国情報部特務部隊隊長、ロランス・ベルガーこと、結社の《剣帝》レオンハルトがそこにいた。

「待たせてしまったみたいだな」

「ふ……気にするな」

リインの謝罪の言葉に、ロランスは軽く笑って応える。

「むむ……これは」

「随分と気安いやり取りですけど……それはそうとドロテ部長と同じ気配が」

たったそれだけのやり取りで目を輝かせるミルディーンに対して、エマは以前の実技テストでは気付かなかった二人の距離感に注目する。

「だが……」

ロランスは視線をミルディーンとエマに移す。

「紹介するよ。こちらはミルディーン。オルデイスでのⅦ組のお目付け役で、エマについては前に紹介できなかつたけどヴィータさんの義妹だ」

「ほう……ヴィータの……」

「っ——」

鋭い双眸に見つめられ、エマは緊張に背筋を伸ばす。

「一応名乗っておこう。ロランス・ベルガーだ」

「その名前を使うのか……」

臆面もなく偽名を名乗る彼にリインは肩を竦める。

「一応この名はリベールで正式に認可されているものだからな」

「それはどういう意味なんだ?」

「今の俺は《R & Aリサーチ》の契約社員という扱いになっている。分類とすればリベールの密偵だな」

「なっ!?!」

王国にも帝国にどちらも属する気はないと言って別れたはずのロランスの言葉にリインは驚く。

「勘違いするな。リベールに尽くすつもりは今もない。だが《彼》に關しては借りを返しておこうと思っただけだ」

律儀とも取れる彼の言葉にリインは彼らしいと苦笑し、何故わざわざ《ロランス・ベルガー》の名を名乗っているのか察する。

「それじゃあ武術大会に出場しているのも大佐の命令なのか?」

「いや、それは別件だ。ともかくカウンターの席では周りの邪魔だろ

う。奥に場所を移すぞ」

そう促され、リイン達は改めてテーブル席に着く。

「まずあの女將軍の提案、VII組を俺のチームメイトとして受け入れるという話だが、お前ならばこちらも文句はない」

「そう言ってもらえると助かる。とは言っても俺だけじゃなくエマもだけどそれは良いのか?」

「ああ、ヴィータの義妹なら構わん。足手纏いにはならないだろう」

「う……それじゃあ一体なんで貴方は武術大会に?」

ヴィータと比べられたことに気後れしながらエマは聞き返す。

「まず前提として尋ねるが、お前達は今のオルデイスの状況に気付いているか?」

「上位三属性が活性化していることなら」

リインは頷いて答える。

「それに気付いているのなら十分だ。どうやら《結社》はこの地で古の儀式を用いて《金の騎神》を呼び込むつもりようだ」

「金の騎神……やっぱり……」

「だがこれはヴィータの意向ではない」

「え……?」

意外な言葉にリインは聞き返す。

「帝国側の《幻焰計画》はヴィータさんが主導で進めているはずじゃないのか?」

「ヴィータは先日、結社の技術部門の工房長に襲われ重症を負い、計画は彼に乗っ取られた」

「姉さんが重症?!」

ロランスの口から語られた言葉にエマは思わず声を上げる。

「安心しろ。命に別状はない」

ロランスはその時のことを思い出しながら詰め寄ってくるエマを宥める。

「運良くその場面に遭遇してヴィータは俺が保護した……」

今はこのオルデイスにいるが潜伏先からは当分動かすことはできないだろう」

「あ……」

その言葉にエマは安堵の息を吐いて肩から脱力する。

それを尻目にリインはロランスに質問を重ねる。

「乗っ取られたと言うのは穏やかじゃないな……」

その工房長が裏切り行為を働いたって言うなら、貴方はもしかしてその粛清のために武術大会に？」

「いや、おそらく誰も工房長を咎めることはないだろう」

「……結社だからなあ」

ロランスの答えにリインは結社の知識から納得する。

「組織としてそれは良いんでしょうか？」

しかし結社を知らないミルディーヌは納得できず首を傾げる。

「ともかくヴィータから俺とお前に借りを返してくれと頼まれたと言うわけだ」

「ヴィータさんは命の恩人だから、結社とは別に手を貸すのは構わな
いけど何をすれば良いんだ？」

「武術大会でお前を優勝させる。そうすれば起動者の選定は失敗する
……」

仮に俺が選定されたとしても工房長に騎神を渡さないで済む」

「優勝か……なかなか難しいことを言ってくれる」

参加者たちのリストを思い出しながらリインは唸る。

「とりあえず全力を尽くすとしか言えないかな」

「それで良いだろう。ヴィータも俺達を囷にして裏で何かをやるつも
りらしいからな」

肩を竦めるロランスにリインは苦笑を返す。

「あの……リインさん、ロランスさん」

そこで話がまとまったと察してエマはおずおずと口を開く。

「姉さんは今どこに？ 会えるんですよね？」

我慢できないとそわそわした心情を隠し切れずエマは尋ねる。

「そうだな……義妹ならば顔くらい見せてやるといい」

「あ……」

ロランスからの了承を得られたことにエマは安堵した。

一同は《海風亭》を出てロランスを先頭に日が落ちたオルデイスの街を歩く。

その道中――

「すーちゃん、どこ？ ふええくん……もう、こーさんするから出てきてよう」

大きなぬいぐるみを抱えた小さな女の子にリイン達は遭遇した。

104話 紺碧の海都Ⅲ

「すーちゃん、どこ？ ふええくん……もう、こーさんするから出てきてよう」

ロランスの先導でオルデイスの街を歩いていたらリイン達の前に泣いている子供が誰かを探すように彷徨っていた。

「こんな時間に子供……？」

もう日が落ちてだいぶ経つ時分なのに家に帰ろうとしていない幼い女の子にミルデイーヌは首を傾げる。

「……心配だな。ちよつと声を掛けてみるか？」

「……はい」

「好きにしろ」

リインの提案にエマは躊躇いがちに頷き、ロランスも受け入れる。

リインは女の子に歩み寄り、膝を着いて視線を合わせて話しかける。

「君……どうしたんだ？」

「わわっ……お兄ちゃんたちは？」

女の子は怯えた様子で後退りしながらもリインの言葉に応える。

「ふふ……怪しい者じゃありませんよ」

微笑みを浮かべてミルデイーヌも安心させるように言葉を掛ける。

「うう……」

しかし涙目の女の子はそんなミルデイーヌに怯えたように体を震わせ、大きなぬいぐるみで顔を隠す。

「あ、あれ？」

「こんな夜遅くに一人でいちゃ危ないぞ。子供は家に帰る時間だろう？もしかして親御さんとはぐれてちゃったか？」

今のオルデイスは武術大会の事もあってまだ賑わっている。

その人混みで両親とはぐれてしまったのか尋ねるも、女の子は首を横に振る。

「う、うん……」

でもすーちゃんがどうしても今からかくれんぼしようっていうから……」

「かくれんぼ……こんな時間から？」

「うん、お昼にやった時になーちゃんにぐーぜん見つかったのによつぽどくやしかったみたいで……」

いつもはなーちゃんが見つけれなくてこーさんすることが多いんだけど……

それですーちゃんが今度こそ本気を出すからって……」

「本気のかくれんぼですか……実は私かくれんぼというものをしたことがないですよね」

女の子の言葉にミルディー又は興味深そうに呟く。

「いやいやそういう話じゃなくて、二人ともちゃんと家の人には伝えてあるんだよな？」

「うん……なーちゃんたちおうちがおとなり同士だから近くならかまわないって……」

「……うう……」

再び泣き出しそうになる女の子にリインは微笑みを浮かべ尋ねる。

「なーちゃんって言うんだよね？　ところで君は飴は好きかな？」

「え……うん……」

「それじゃあこれを上げる」

そう言っただけリインはこんなこともあろうかと用意していた飴玉を女の子に差し出す。

「良いの!?!　ありがとうお兄ちゃん」

泣き出しそうだった女の子は一転して上機嫌になる。

その間にリインは振り返って、ロランズ達に提案する。

「ちよつと心配だから俺はこの子と一緒にすーちゃんを探して来るけど、良いかな？」

「はい。それは構いませんが、それなら私達も——」

「いや、エマは先に行くといい……」

久しぶりの再会なんだろう？　積もる話もあるだろうし、その間に

俺はこの子と一緒にすーちゃんを探しているよ」

「ですが……」

リインの提案にエマは口ごもる。

特別実習として単独行動は控えるべきというべきなのだが、そもそもヴィータに会うことはエマの個人的な事情でしかない。

そしてリインの言う通り、会えば泣いてしまうかもしれないだけにその提案は魅力的だった。

——こんなことならセリーヌとキリシヤにも来てもらえば良かった……

オルデイスの現状をラウラ達に説明する役目としてセリーヌは要塞に、キリシヤの方は第三学生寮でナユタの傍にいさせる判断をした自分を悔やむ。

「エマのことを頼みます」

「ああ」

エマの葛藤を他所にリインとロランスがその方向で話をまとめてしまう。

「……ありがとうございます」

迷ったものの、かくれんぼうの相手をするだけなら大事にはならないだろうとエマは自分に言い聞かせてリインの提案を受け入れた。

「お兄ちゃん……いいの？」

不安そうに見上げてくる女の子にリインは振り返って頷く。

「ああ、君だって早く見つけてあげたいんだろう？」

その子だって、この暗い中、寂しい思いをしているかもしれないし「私もお手伝いしますわ。かくれんぼうなら土地勘が必要ですよね？」

「あ、ありがとう……」

どこかワクワクとした様子でミルディーヌが主張する。

そうしてエマとロランスは一足先に彼のセーフハウスへと向かい、リインとミルディーヌはかくれんぼうの手伝いをする事となった。

「さて、それじゃ隠れる場所についての手掛かりとかはあるかな？」
「えつとね……おうちの中にかくれるのはダメで……」

いままですーちゃんがかくれてたことがある場所はみんなさがしたんだけど、それでもぜんぜん見つけれなくなってる」

「変な場所に入り込んでいなければいいんだが」

「『本気』と言うからにはいつも隠れている場所ではないでしょう」

「楽しそうだなミルディーヌ」

やる気になっているミルディーヌにリインは苦笑しながら、ふと昔のことを思い出す。

かくれんぼうや鬼ごっこ。

そんな子供らしい遊びをしたことはもちろんリインにはある。しかしあの日から無心で遊ぶことはした覚えがない。

「エリゼに悪いことをしたな」

まだ遊びたい盛りの子供の時分に引き籠ってしまった自分に反省すると同時にノイやリンにそういった遊びを教えていなかったことに気付く。

「Ⅶ組のみんなに協力……いや、流石にみんなは巻き込めないか」

いい歳の自分達が鬼ごっこやかくれんぼうをしようかと提案することに気恥ずかしさを感じてリインは首を振る。

「それにしても見つかりませんね」

ぬいぐるみを抱える女の子と手を繋ぎながら隠れられそうな場所を探すミルディーヌは呟く。

「もう少し人がいなければ、気配を探れるんだけど……」

辺りを見回してリインは目を細める。

武術大会のお祭り状態のせいで夜のオルデイスはまだ賑わい、多くの人が行き交っている。

この中で子供の気配を探り当てるのは至難だろう。

しかし――

「……………ふむ」

細めた目をそのままリインは女の子に向ける。

泣いていた女の子は不安そうにしていながらもミルディーヌに手を引かれ、大人しく彼女と一緒にたすーちゃんを探している。

時折振り返る表情は無邪気な子供のそれだが、その目は蛇を想起さ

せる。

「たしかヨシユアさんは……」

頭に過る可能性にリインは唸り、首を振る。

何でも疑うのは良くないと思いつつも観察すれば女の子の違和感は大きくなる。

「……………ああ、レンに似ているのか」

無邪気さの奥に秘めた暗い瞳はリベールで出会った女の子を彷彿とさせた。

「ミルディーヌについて来てもらったのは失敗だったか」

単純な迷子の捜索のつもりだったので土地勘があるミルディーヌの協力を受け入れたが、女の子の目的次第では荒事になると考えて失策だったと気付く。

「どうするか……」

洞察力の高い子だが、スイッチが入っていないのかミルディーヌは女の子の違和感に気付いた様子はない。

何より彼女たちの目的がはつきりしない段階ではリインもどう動くべきなのか判断はできない。

「どうしようか」

そう再び呟くリインの横で一台のリムジンが停まる。

「やあ、リイン君。こんな時間に一人で何をしているのかな？」

窓が開き、咎めるような口調が半分とどこか楽し気な口調の半분을混ぜたツールズ士官学院の常任理事——ルーファスが声を掛けて来た。

・*

彼は息を潜め、気配を殺し物陰に隠れて対象を観察する。

その少年は帝国西部を主に活動の場に行っている殺し屋である。

今回の依頼は珍しくゼムリア大陸西部のエレボニア帝国での仕事。

現在帝国で最も名を上げているリイン・シユバルツァーの暗殺。

「ついてないな……」

溜息と共に少年は愚痴をこぼす。

本当なら少年は長年の計画を実行に移しているはずだったが、急なこの任務を受けることになり計画のために苦労して手に入れたリベール行きの手ケットは無駄になってしまった。

「いや……前向きに考えろ」

首を振って落ち込みそうになる気持ちを切り替える。

ここは帝国の最西部。

共和国を中心に動いている「組織」の影響から最も遠く離れている。

「……………今度こそ逃げ切ってみせる」

この遠く離れた地に派遣されたのは千載一遇のチャンスでもある。

唯一の懸念は監視役を兼ねている相棒だけ。

その目さえ誤魔化せば「組織」から逃げられるのではないかと希望を見出す。

「そう……オレは「自由」に……」

不意にパートナーの女の子の顔が過る。

しかし少年はそれを頭を振って追い払い、息を整えてターゲットに視線を――

「君がすーちゃんかな？」

声は背後から。

その事実少年は背筋を凍らせて固まる。

思考に没頭していたが、決してターゲットから意識を逸らしたわけではない。

それに気配も消していた。気付かれる要素はなかったはずなのに背後を取られるまで分からなかった。

「どうやら君たちの目的は俺みただけだ、あんな周りくどいやり方をして何の用だ？」

背後からの質問に少年は咄嗟に言い訳をする。

「な、何のことですか？ たしかにオレはあの子とかくれんぼうをしていたけど――」

「君の隠形は大したものだよ……」

ただこの人混みに対して気配を消し過ぎていたな。それこそ逆に目立ってしまうくらいに、まるで凶手みたいだ」

「——っ!？」

隠形へのダメ出し、それ以上に自分の存在を言い当てられて少年は息を呑む。

「あの女の子も同じだ……」

演技は完璧だけど。子供って言うのは大人の予想を上回る言動をするものだ」

——いや、成人してないのにどうしてそんな判断ができるんだよ!? そのツツコミを少年は何とか呑み込む。

「それで目的は俺か? それともミルディーヌか?」

答える気がないって言うなら、不審者として憲兵に——」

言葉の途中で少年はスタンスグレネードを背後に投げつけて駆け出した。

「くそっ……」

炸裂する閃光を背中に少年は駆け出し、真っ直ぐ相棒の下へと向かう。

「ナインツ!」

「すーちゃん!」

差し出した手を迷わず取り、少年は慣れた様子でそのまま女の子を横抱きにしてさらに速度を上げて疾走する。

「え? なーちゃん……?」

一瞬の出来事にミルディーヌは呆け、その目の前をラインが二人を追って駆け抜ける。

「ラインさんいったい何が——」

「ミルディーヌ君、君はこちらに」

そんな彼らを追い駆けようとしたミルディーヌをルーフアスが引き留めるのだった。

・*

「すーちゃん、演技だけじゃなくてかくれんぼうもヘタだったんだね」

相棒の腕の中で女の子はひどく緊張感のない、間延びした声で非難する。

「くっ……たしかにオレのミスなのは認めるが、お前の演技もバレバレだったみたいだぞ」

「ええ、そんなことないよ」

気だるい返答をしながら、女の子は少年の背後を覗き見る。

追い駆けてくるターゲット。

「うーん。まだ本気を出してないみたい。人気のないところに誘導するつもりかな」

すぐ追い付けるのにそうしないターゲットの心情を女の子は分析する。

「好都合だ。予定とは違うがこのままあの場所に誘導する。準備は出ているんだよね？」

「ばっちり」

少年の確認にやはり女の子は間延びした声で答える。

そのいつもと変わらない調子に少年は呆れると共に安堵して、動揺していた思考を冷徹に戻す。

奇襲の機会を逃してしまっただが、それでもまだ自分達の有利を少年は疑わない。

そのために少年は本来誘い込むはずだった準備を済ませた戦場へ向かう。

少年の名は《ソード・オブ・スリー》。

女の子の名は《ソード・オブ・ナイン》。

二人は、殺し屋であり、今回の任務は「グリーン・シユバルツァーの暗殺」だった。

・*

「誘われているか……」

オルデイスの波止場に立ち並ぶ倉庫の一つに駆け込んで行って少年を追い駆けてそこに辿り着いたリインは人気のない周囲を見回して呟く。

「さてどうするか」

《ARCCUS》を取り出してリインは考える。

特別実習としてオルデイスに来ている以上、単独行動のし過ぎはあまり良くない。

常任理事の一人の許可は得たとはいえ、深追いはするなど釘も刺されている。

「すみません。ルーファスさん」

目を伏せて謝り、リインは《ARCCUS》をしまう。

「せめて何故自分が狙われているのか、それが分からないとみんなの所に戻っても迷惑が掛かるからな」

追い払うだけでは意味がない。

凶手の狙いが自分ならなおのこと、Ⅶ組のみんなを自分の事情に巻き込めないとノーザンブリアでの特別実習を思い出す。

「さて、何を仕掛けてくるか……」

開きっぱなしの鉄扉から倉庫の中にリインは踏み込む。

「鬼ごっこは終わりか？」

月明かりが差し込むだけが光源の薄暗い倉庫の中をリインは真っ直ぐに歩き、通路の奥で堂々と待ち構えていた女の子に話しかける。

「ふふふくかくれんぼうはお兄ちゃん勝ちだね」

間延びした独特な口調で女の子は答える。

周囲には少年の姿はない。

「すーちゃんから聞いたけど、なーちゃんの演技に気付いていたんだよね？ どうして分かったの？」

無邪気な言葉に冷たい感情を含ませて尋ねて来る女の子にリインは律儀に答える。

「さっきの彼にも言ったが、君の演技は子供を演じきっていた……」

大人しい子供もいるだろうけど、子供を見守るっていうのは緊張す

るんだ。君にはそういう危うさがなかった……

それにそのぬいぐるみ、中にいろいろ仕込んでいるな？ 金属音がすれば警戒もするさ」

「あらら〜お兄ちゃんってば耳も良いんだ〜」

「改めて聞くが、君達は俺を殺すために雇われた暗殺者か？」

「うん、そくだよ〜」

「理由を聞いても？」

「そんなのし〜らない。なーちゃんたちは上司にただリイン・シユバルツァーを殺して来いつて命令されただけだから」

予想通りの答えにリインは肩を竦める。

「その命令をした君の上司は今何処にいるのかな？」

「さあ〜どこだろうね〜……」

それにしてもお兄ちゃんってこ〜んなところまでついて来ちゃうなんて油断し過ぎじゃないかな〜」

「子供相手に気を張る必要はないだろ？」

「むう〜言うね〜。《騎神》っていうお人形がないのにすごい自信だね〜」

子供と馬鹿にされ女の子は負けじと言い返す。

「自分よりも弱い敵に怯える理由はないだろ？ 痛い目を見たくなかったら知っている事を全部吐いてもらおうか……」

とりあえず君のことは何て呼べば良いんだ？」

リインは女の子に向かって一歩近付く。

「ふふ〜今から殺されちゃう人に名乗っても意味はないと思うけど〜、うん。せめてどんな相手に殺されるか知る権利くらいあるよね〜」

近付いて来るリインに女の子は無邪気に笑う。

「なーちゃんの名前はソードの9。だからナインって呼ばれてるの」
「ナイン……」

およそ人につける名前ではない呼び方にリインは眉を顰める。

「ねえお兄ちゃん。お兄ちゃんが強いのは認めるけど〜お兄ちゃんをなーちゃんたちが殺せるかはあんまり関係ないんだよ〜」

「それはどういう意味だ？」

ナインの言葉に首を傾げつつ、さらにリインは一步を近付く。

「——こういうことっ！」

ナインはリインに向けて素早く腕を振る。

抱えたぬいぐるみから取り出す勢いをそのままに投げつけた毒針をリインは難なく鞘に納めたままの太刀で打ち払う。

しかし——

「——この程度で——なっ!？」

毒針の奇襲を凌いだリインだったが次の瞬間、四方から巻き付いてきた鋼の糸が四肢に巻き付いていた。

「動かないほうがいいよ、下手に動いたら、肉片がたくさん出ちゃうかも」

幼い女の子の容貌や表情とはひどく不釣り合いな台詞。

それは単なる脅しではない。

「くっ——この程度」

リインは鬨気を練り、焰の鬨気を練って極細の鋼糸を焼き斬ろうとして——

「すーちゃんっ！」

元より長時間の拘束ができる相手だとは思っていない。

ナインがその名を呼ぶと、高い天井に張り付いていた少年が落ちてくる。

「しま——」

「遅いっ！」

少年はリインが焰を練るより早く、右の長剣と左の短剣を交差してリインを切りつける。

「ぐっ——」

寸前で鋼糸を焼き斬り、咄嗟に後ろに退いたが浅くない傷が深紅の制服を切り裂いて刻まれる。

「終わりだっ！」

少年は右の長剣に左の短剣を差し込み、一つの大剣にして交差した刻印を横薙ぎに切り払う。

その一撃が交差点に触れた瞬間、爆発が起きる。

零距离から爆発を受けたリインは吹き飛ばされてコンテナに叩きつけられる。

「あははくーなーちゃんたちは殺し屋だよーお兄ちゃんみたいな強い人に正面から戦うわけないよーふふ、勉強になった?」

《点撃爆発》を受けて無残な姿となったリインにナインは無邪気な言葉を掛ける。

しかし、倒れたリインはピクリとも動かず、ナインもそれが分かっ
ていて言葉を掛ける。

「すごく強いつて聞いていたけど、なーちゃんとすーちゃんに掛かれ
ばこんなものだよねー」

これだつたらこの前のマフィアの方がまだ歯応えがあつたよねー」
「ナイン、無駄口を叩いてないで行くぞ」

同意を求めるナインに少年——スリーは素っ気なく返す。

後は確実を期すためと自分達の痕跡を消すために外から点撃爆発
で倉庫を崩すのだとスリーは主張する。

「ねーねー、早く任務も終わったことだしさ、少しだけ遊んで行かない
?」

「何を言ってるんだ? そんなことできるわけないだろ」

「でもくせつかくこんな遠い帝国の端まで来たんだしーお祭りもやつ
てるんだからレミフェリアに帰る前に一日くらい良いでしょー」

「お前なあ」

脳天気なパートナーの主張にスリーは呆れ返り、同時に彼女がそう
言い出したことに好機と感じ——

「分か——」

「そうか。君達はレミフェリアから来たのか」

倉庫の鉄扉から出ると、そこで壁に背中を預けて待っていたリイン
がスリーの言葉を遮った。

「なっ!?!」

「うそ……」

思わず二人は倉庫の奥で倒れているリインを振り返り、その人影は

二人が見ている中で霧散して消える。

「まさか……分身っ!？」

「そんな!? 糸の手応えもあったし、なーちゃんとしやべってたのに!?! いつの間にもすり替わったの!?!」

「すり替わったも何も、最初から俺はこの倉庫に入ってないよ」

事もなげに言われた言葉に二人は絶句し、次の瞬間慌てて武器を構える。

「くっ——こうなったら直接やるまでだ。ナイン! 行くぞっ!」

「うん、すーちゃんっ!」

スリーは大剣を構え、ナインはぬいぐるみから取り出した針を構えてリインに向き直る。

「大人しく投降するつもりはないか? そうしてくれれば悪いようには——」

言葉の途中で二人は動き出す。

スリーが切り込み、それに合わせてナインが針と鋼糸を放つ。

「やれやれ……」

リインは肩を竦め——

「確か……こう——だったか?」

針と鋼糸を太刀を抜くと同時に切り払い、迫るスリーの大剣にリインは一息で二撃を交差して叩き込み、さらに一撃を当てる。

次の瞬間、スリーの導力剣は最後の二撃を受け止めた瞬間爆発して折れ飛んだ。

「……………え……?」

零距离の爆発を受けて柄だけを残して壊れた導力剣をスリーは呆けた様子で凝視する。

「うそ……今の……すーちゃんの『点撃爆発』」

「別に驚くことでもないだろ?」

見たところ君の剣は剣撃と導力魔法を融合させたものだった。それなら戦技でも同じことができるはずだ」

驚く二人を他所にリインは事もなげに言う。

もつともリインも即興でそれを模倣したわけではなく、以前に自分

が無我夢中で放った技だったからこそスリーの技を切っ掛けに自分のものにできたに過ぎないのだが、それを彼らが知る由もない。

「――逃げろナインッ！」

「すーちゃん!？」

自失から立ち直ったスリーが自棄を起こしたように叫ぶ。

「こいつはオレ達の手に負える相手じゃない！ お前だけでも逃げて

“管理人”に伝えろっ！」

「でも、すーちゃん！ 任務失敗は――」

「それでも俺達が生き残るのはそれしかない！」

躊躇うナインをスリーは一喝し、柄だけになった導力剣を捨て、予備の武器のコンバットナイフを抜いてリインに襲い掛かる。

「いいから行けっ！」

普段のどこか達観したスリーからは発せられた必死な声にナインは逡巡しながら、その場から逃げ出した。

「――別に俺は君達を殺すつもりはないんだけど」

「例えお前にそのつもりがなくても、任務を失敗したオレ達を “組織” が生かしておくわけがない」

唯一の例外があるとすればターゲットについて有益な情報を持ち帰った場合。

もともとナインが生かされる可能性は “管理人” の気まぐれではないが、そこは賭けるしかない。

「それに――まだオレは負けてないっ！」

果敢に攻めるがスリーのナイフは全て太刀を抜かないリインに簡単に捌かれる。

「戦術オーブメント起動！」

ナインが波止場から街へと逃げた背中を確認してスリーは叫ぶように導力魔法を起動する。

それは “組織” が最後の手段として下っ端に持たせた武器であり、証拠隠滅のための手段。

スリーはコンバットナイフをリインに投げつけると同時に突進してリインを掴む、が次の瞬間スリーの突進の勢いをそのままに投げ飛

ばされる。

そして投げる前に取られたスリーの戦術オーブメントは海に投げ込まれ爆発した。

105話 紺碧の海都Ⅳ

アウロス海岸道。

オルデイスの貴族街を抜けた先、ジュノー海上要塞へ行く道とは別の街道。

海水浴をするには時期が遅く、それに加えて深夜という時間帯にも関わらず海から砂浜へ一人の少年が息も絶え絶えにして上がってくる。

「はあ……はあ……はあ……」

オルデイスの港から潮流に逆らって泳ぎ切ったスリーは体力の限界を超えていた。

しかし今にも倒れそうな疲労を感じながらもスリーは高揚していた。

「は……はは……」

思わず笑みがこぼれる。

策謀が得意ではないスリーだが、ここまでうまく行けば気を良くしてしまおう。

「俺は……生きてる」

浜辺を見渡し、スリーは自分を両腕を見下ろして呟く。

うまくターゲットと戦い死を装い、死体の確認が困難な方法を用いて行方をくらませる。

ただ高飛びするよりも良いのではないかと思い、その時のためにパートナーの目を忍んでオルデイス周辺の潮流を調べ、この浜辺には逃走のための荷物を隠しておいた。

「俺は『自由』だっ！」

その事実を噛み締めるようにスリーは月に向かって吠える。

「ウオオオオオオオオオオッ!!」

その叫びはこれまで束縛され続けていた彼の魂の慟哭だった。

「……………ナイン」

力の限り咆えて、スリーの頭に過つたのは最初の逃亡計画——ではなくパートナーの顔だった。

何度も生死を共にしたパートナー。

自分よりも幼く、才能に溢れていながらもどこか抜けているような女の子。

そんな女の子を一人、あの血にまみれた煉獄の中に置き去りにして行くことへの罪悪感が不意にスリーの中で渦巻く。

「……………これで、いいんだ」

女の子の顔とかつての暗い過去をせめぎ合わせてスリーは雑念を振り払う。

「信じられるのは、自分だけだ」

スリーは顔を上げ、振り返り——そこには古びたローブを身に纏う「管理人」と大きなぬいぐるみを抱えたナインがいた。

「……………え？」

スリーは思わず間の抜けた言葉をもらす。

「弁明を、聞こうか」

呆けるスリーに構わず「管理人」は尋ねる。

「べん……………めい？」

「君の裏切りはすでに告発された。そのの《ソードの9》によってな」
「なっ!？」

スリーは言葉を失う。

振り払えたと思ったはずの絶望が襲って来た。

・*

「エマ、そろそろ機嫌を直してくれないか？」

「何のことですかリインさん？ 別に私は怒っていませんよ」

合流したエマは目に見えて不機嫌であり、リインは困惑した。

「あの……………エマさんはお義姉さんと再会することができたんですね？」

「ええ、お陰様で」

ミルディーヌの質問に頷きながらエマはリインを睨む。

「そのことについて聞きたいことがあるんですが、リインさん……
クロスベルに行く前にお婆ちゃんと一緒にヴィータさんと会って
いたそうですね」

「あ、ああ……」

でもその時のヴィータさんはアリアンロードさんとの仲介だった
し、それに——」

「それに？」

「ローゼリアさんが課題をクリアできてない未熟者は連れて行く必要
はないって」

「うぐ……」

「もし文句を言われたら、当事者をそっちのけにして自分の都合をエ
マは優先していたはずだと言い返しておけって」

「むう……」

反論とローゼリアへの恨み言が機先を制されてエマは唸る。

「確かにその場にいたらリインさんを押し退けてヴィータさんに詰め
寄っていましたけど……」

だからって会ったなら、それだけでも教えてくれていいじゃないで
すか」

ブツブツと文句を言いながら俯いてしまうエマにリインとミル
ディーヌは顔を見合わせて苦笑する。

「とにかく今日は早く戻って休もう」

これ以上はエマが持たないとリインは提案する。

「戻ったら台所を借りて焼き栗を作って上げるから」

「……リインさん、どうしてそこで焼き栗なんですか？」

「ヴィータさんの好物だからエマも好きだろ？」

「好きですけど、好きですけど……ああああっ！」

頭を抱えるエマを宥め、リイン達は装甲車で送迎をしてくれた軍人
の下に戻る。

「……………ん？」

ミルディーヌとエマを後部座席に先に座らせ、リインは助手席に座

ろうとして不意に何かを感じて空を見上げた。

「リインさん？」

いつまで経っても導力車に乗り込まないリインにミルデー又は首を傾げる。

「すみません、ちよつと確かめたいことができました……先に二人を送って行ってください」

「え……？」

「ちよ、リインさん」

止める間もなくリインは踵を返し、次の瞬間一足飛びで城壁の上へと跳び上がった。

追い駆けることもできず、そんなリインをエマ達は見送ることしかできなかった。

・
*

「いつから我が『照臨のレガリア』が揃っていないと錯覚していたのかね？」

カラスの宝珠を左手に『管理人』——エンペラーは目の前でカエルのように地面に這いつくばっている二人を睥睨する。

「そ………んな……壊れてなかったのなら………どうして最初から使ってなかったの……？」

唯一の突破口だった四揃いの古代遺物、直前までないと油断していた宝珠を持つエンペラーにナインは苦し気に問う。

「ふふ……君のような賢しい者はいつもこの手で簡単にこちらの罠にはまってくれる」

「罠……だと……」

全身を重くされ、それでも全力で立ち上がろうとしながらスリーは聞き返す。

「希望があるからこそ人はそこに縋りつき、それを失った時にこそ真の絶望を味わう事となる……」

君達が今まさに噛み締めているものがそれだ」

「く……きやあつ!？」

一瞬、重力が消え体が軽くなったと思った瞬間、エンペラーは加速してナインを蹴り飛ばす。

蹴りの衝撃に反してナインは高く飛ばされ、次の瞬間エンペラーの宝珠が光るとナインは重力場に囚われて地面に叩きつけられた。

「ナインッー！」

スリーはその光景を這いつくばって叫ぶことしかできなかった。

その姿にエンペラーは笑みを浮かべる。

「《ソードの3》よ。君が彼女にとどめを刺したまえ。そうすれば君の命を助けてやる。あの時のようにな」

「っ——エンペラーッー！」

その申し出にスリーは自分の中で何かが弾ける音を聞いた。

しかしその激昂など取るに足らないとエンペラーは動じずに続ける。

「兄妹仲良く同じ相手、同じパートナーに殺されるなら、それも本望だろう」

兜の陰に隠れているにも関わらず、その醜悪な顔がはつきりと目の前に浮かんでいるようだった。

「早くしなければ我が殺してしまうぞ」

仰向けに倒れたナインにエンペラーは王笏の石突を置く。

「があっー！」

軽い動作に反してナインの口から壊れた悲鳴が上がる。

接触した局部に強力な重力波を伝える杖の王笏により、ナインの身体は倍加した重力を受けて軋み。

「さあ、どうする 《ソードの3》 よ?」

ナインが悲鳴を上げられるギリギリの負荷を見極め、エンペラーはスリーに決断を迫る。

「あ……ああ……」

重力場に囚われ、それを見ていることしかできないスリーは絶望に震えることしかできなかった。

どうしてこんなにも無力なのか。

先の戦闘も刻剣がない自分ほろくに役に立てず、スリーは自分の不甲斐なさを呪う。

「……………た……すけて……お……にい……ちゃん……」

ナインの助けを求める声にスリーは俯いて、次の瞬間――

「――君のお兄ちゃんじゃないけど、助けに来たよ」

スリーとナインを捉えていた重力場がその言葉と共に斬断され、ナインの上にあったエンペラーは突然現れた少年の飛び蹴りを喰らって弾き飛ばされ、海へと叩き込まれた。

「え……う？」

通常の重力に戻った体を慌てて起こしてスリーが見たのは白髪に紅い学生服を纏った、ついさっきターゲットとして狙った少年――リイン・シユバルツァーの背中だった。

・
*

――いったいどういう状況なのだろうか？

勘の赴くままにアウロス海岸に来てみたリインが見たのは凄まじい戦闘痕だった。

爆発物を始め、高位アーツを連発した痕跡が残る戦場を探ってみれば、黄金の鎧を纏った不審者がリインを襲った二人の暗殺者を痛めつけて殺そうとしている所に遭遇した。

「……………た……すけて……お……にい……ちゃん……」

状況を把握しようと思った矢先に不思議と耳に届いた女の子の言葉にリインは思考を放棄して、一帯を包んでいる重力の結界を斬り裂き、不審者を蹴り飛ばした。

「……………え……う？」

「――君のお兄ちゃんじゃないけど、助けに来たよ」

呆然と自分を見上げて来る女の子にリインは安心させるように言葉を返す。

「……………どうして？」

ただそれだけを呟いたナインにリインは微笑みだけを返して頭を

撫でて顔を上げる。

「君は動けるな？ この子を連れて下がってろ」

「え……あ……何でアンタがオレたちを助けて——」

「いいから早くしろ！」

ナインと同じように困惑しているスリーをリインは反論は受け付けないと一喝する。

「は、はいっ！」

這うように駆け出したスリーはリイン達に駆け寄ってナインを受け取る。

「くくく……まさか君の方から来てくれるとは、探す手間が省けたというものだ」

エンペラーの声が聞こえて来たと思った次の瞬間、スリーはあり得ないものを見た。

「嘘だろ……」

せり上がる水の壁。

重力操作によって引き上げられた海水が津波の形で固まってスリーたちを見下ろし、その上にエンペラーが立っている。

「我が道具と共に死ぬが良い。超帝国人リイン・シユバルツァー——！」

重力場が開放され、高くそびえ立つ水の壁がリイン達に降り注ぐ。

スリーはナインを強く抱きしめて衝撃に備えることしかできず、リインは肩を竦めると——

「八葉一刀流、四の型《紅葉斬り》」

一閃は津波を斬り裂き、海さえも両断する。

自分達を避けた津波にスリーは絶句し、改めて自分達のターゲットとの実力差を思い知らされる。

「帰って飼い主に伝えるといい。この二人の身柄は俺が預らせてもらおう」

ゆっくりと降下して海の上に着地したエンペラーにリインが太刀を向けて宣言する。

「ほう？ そんな“人間のなり損ない”を庇い立てるつもりか？

先程、命を狙われたばかりだというのに随分と酔狂な人間のようにだ」

「〃人間のなり損ない〃……か……」

「そう！ それらは我が育て、我が管理している〃道具〃、人を殺すためだけに存在する〃凶器〃！」

だが我に使われないのなら価値はない。持ち主として処分するのは当然のことだろうか？」

仰々しく、演技が掛かったエンペラーの物言いに対するリインの眼差しは冷ややかになっていく。

「なら俺が引き取っても問題はないな」

処分するというなら構わないだろうと、言わんばかりにあっさりと提案するリインにエンペラーは何を聞いていたのかと憤る。

「物分かりが悪いようだな……」

その両手には拭いきれない程の血で染まり、数多くの命を奪って来た……

人間の〃フリ〃をしたがっている〃モノ〃に何故慈悲を掛ける？」

「生憎だが、俺は自分のことを立派な〃人間〃だなんて言えないな……」

唾棄するべき悪党なんかと手を組むことにしたし、少し前はそれこそ〃人間〃の皮を被った〃怪物〃なんじゃないかって悩んでいたくらいだ」

「ほう……」

「だいたい俺に限らず、この世界には様々な人がいる……」

嬉々として人を貶める外道、戦う事しか頭にない戦闘狂、平民を家畜としか思っていない貴族……そして零から道具の様に生み出された命……

お前が言う〃人間〃の定義はどこまでのことを言うんだ？」

「ふむ……なかなか哲学的なことを言う」

「だいたいお前のような人でなしの〃外道〃が〃人間〃を語るな」

はつきりとリインはそんな言葉を叩きつけた。

「……………不愉快だ」

そんなリインにエンペラーは冷ややかな言葉を作る。

「たかが暗殺対象の分際で私の邪魔をするというのなら、貴様もまとめてここで終わらせよう！」

エンペラーは光輝く王笏を掲げて叫ぶ。

「照臨のレガリアよ！」

黒い波動が広がるとリインに絡みつき、彼の重力を無くして浮き上がらせる。

「押し潰されるがいいっ！」

さらに近くの崖が重力場によって碎かれ、リインと共に宙を舞う。

「これで終いだ」

エンペラーが王笏と宝珠を構えると、リインを中心に重力場が生まれ、舞い上がった無数の岩礫がそこに目掛けて落下する。

その技は対象を空中に飛ばし、極大の重力場の中心にすることで相手の動きを奪って岩礫で押し潰す単純なもの。

例えばどれ程の達人であっても、重力には逆らえず、無防備な空中ではまともな身動きさえできない——はずだった。

「この程度か？」

四方から襲い掛かる重力にリインは顔色一つ変えず、太刀を振る。

太刀や腕の重さなど気にも留めず、無造作な一太刀が重力場を斬り、慣性のままに殺到する岩礫を体を捻り焔の一閃でまとめて薙ぎ払う。

「——なっ!？」

「嘘だろ……」

エンペラーと共にスリーは夜空に舞った火閃に言葉を失う。

「四つ揃いの古代遺物……どれ程のものかと思っただけただ石を投げるだけの古代遺物だったか」

危なげなく着地したリインは事もなげにエンペラーの力をそう評価した。

そんな眩きにエンペラーは眦を上げ、宝珠から重力の衝撃波を放つ。

リインはその衝撃波を正面から斬り払う。

「で、それだけか?」

「くっ——舐めるなっ!」

余裕を崩さないリインにエンペラーは激昂して王笏と宝珠を構えて、力を解放する。

「ぐっ——」

全身に掛かる重圧に距離を取っていたはずのスリーは思わず呻き、周囲の砂浜に街道がエンペラーがいる場所を除いて陥没する。

「こんな出力が出せるなんて……」

重圧だけで体がバラバラになりそうな圧力にスリーは効果範囲から逃げようとナインを抱えたまま這おうとするがまともに腕も動かせない。

そしてその重圧の中心地に近いリインもまた耐え切れずに膝を着く。

「はははっ! 潰れてしまえっ! ジオ・ラグナロクツ!」

その光景に気を良くしたエンペラーはさらに重力を強くして——

「鬼気解放」

リインの眩きと共に解放された力に重力場は弾け飛んだ。

「なっ——何なんだよいったい?」

二転三転する状況にスリーはただ驚くことしかできなかった。

「こ——これが超帝国人の真の姿なのか!?!」

圧倒的な存在感を纏うリインにエンペラーは慄き、リインはエンペラーの言動に眉を顰め——ため息を吐いた。

「これで分かっただろ? お前では俺は倒せない。さっさと消えろ」

「——何? 我を見逃すと言うのか?」

リインの言葉にエンペラーは悔しさを滲ませながら言葉を返す。

「さっき言ったはずだ。お前達の飼い主にこの子達は俺が引き取ると伝えろと」

「くっ——」

「それに分かったはずだろ?」

どこの誰に依頼されたか知らないが、割りに合わない依頼だと。理由が足りないって言うなら俺はまだ“変身”を二回残している。そ

の意味が分かるな?」

「それでまだ全力じゃないって言うのかよ?」

対峙していない自分まで委縮してしまいそうなオーラを纏っているリインの言葉にスリーは慄く。

「正直に言えばお前のような外道は今すぐこの場で叩き斬ってやりたいのが本音だ……」

リインは背後のスリーとナインを一瞥する。

「だけどそれをこの場でやるのは出しゃばり過ぎだろう」

エンペラーには「組織」とやらに先程の伝言を届けてもらわなければならぬ。

それに加えてあの二人がこの男との「因縁」から本当の意味で脱するにはそれこそ余計なお世話だろう。

「我を生かしておいたこと、後悔させてやるぞ」

エンペラーは捨て台詞を吐くと、重力を操って浮き上がる。

そして踵を返すと、夜の空へと飛び立って行った。

その背中を見送り、リインはぽつりと呟く。

「レミフェリアにもブルブランの同類はいるんだな……」

そんな感想を呟き、リインは早々にエンペラーが退散してくれたことに安堵して振り返る。

「がはっ——」

「ナインッ!? しっかりしろ!」

血の塊を吐く女の子に少年は狼狽えた声で呼びかける。

「……………すーちゃん……………ごめ……………ん……………なーちゃんは……………もう……………ダメみたい……………」

重力場で直接痛めつけられたナインは血を吐きながらも、痛みを感じない体に力のない笑みを浮かべる。

「弱気になるなっ! もう目の前に「自由」があるんだぞ! なのに どうして——」

「泣かないですーちゃん……………すーちゃんだけでも守れて……………なーちゃん はまんぞく……………だよ」

「違う……………違う……………守るって誓ったのは、俺の方なのに……………何で……………」

何でお前が……」

最後の言葉を交わす二人、リインは背中を向けているスリーの背後に立つ。

「おにいちゃん……すーちゃんをたすけてくれて……あり……が……とう……」

「待てっ！ 逝くな！ 逝かないでくれっ！ 俺はまだお前の本当の名前も知らない！ だから——」

そんな彼らの最後のやり取りにリインは胸を手を当てて感情を呑み込み、告げる。

「俺がその子を治してあげよう」

「……………え…………？」

スリーはそこでようやく顔を上げてリインを振り返る。

「……………ただし代償は支払ってもらおうよ」

106話 紺碧の海都V

『良いかつ！ 必ずだつ！ 必ず《騎神》をアルバレア家に取り戻すのだつ！』

「ええ、分かっております父上」

通信機から聞こえてくるヘルムート・アルバレアの声にルーファスはいつもと同じような言葉で対応する。

「はっ……大変だなあお坊ちやまは」

「待たせて申し訳ないね」

父との通信を終えてルーファスは自分に宛がわれたホテルの一室、招いた客人——マクバーンに謝罪する。

別に構わないと高いソファに身を預けるマクバーンは早速用件に入る。

「とりあえずあの工房長の言い分に嘘はないだろうな」

「では今回の武術大会を《金の起動者》の選定が本当に可能と……やれやれこれでは私も本腰を入れないといけないな」

カイエン公の相談役であるアルベリヒが暗黒時代の古文書の解読に成功したと言ってもたらされた情報は貴族派を大きく揺るがすものだった。

今では四大名門だが、かつては封印を守る士族として獅子戦役の頃にあったサンドロット家と合わせた五家が《騎神》の番人とされていた。

度重なる大戦によってその《騎神》はそれぞれの地から行方知らずになってしまったが、故に現代までそれを守り管理しているカイエン公が貴族派の代表となっているのは自然の流れと言えるだろう。

「貴族同士の内輪揉めか？ よくやるもんだ」

「そう言って上げないでくれたまえ……」

彼らは《騎神》を得れば四大名門になれると思っているのだから、特に四大名門のすぐ下の士族たちの動きが活発になっている。

多忙なルーファスが武術大会に出場することになったのも、アルバ

レア家の当主であるヘルムートが《騎神》があればカイエン公を押し退けて貴族派のトップになれると考えたからでもある。

「これまでのリイン君の功績、それに皇室との縁故を結べたこと、果てはリイン君の実力も《騎神》の恩恵があつてこそと嘯く者がいるくらいだ……滑稽だと思わないか？」

「《騎神》があれば自分にもシユバルツァーと同じことができるってか？」

「さらに言えば、身の程も弁えずリイン君を暗殺して《灰の騎神》の席には自分こそが相応しいと考えている者もいるようだ……」

オズボーン宰相の隠し子だったことが余程気に入らないらしいね」

「は……滑稽を通り越して憐れだな」

思わず嘲笑がこぼれる。

確かにリインの「異能」である「鬼の力」は《騎神》に由来しているが、その程度、もはや彼の力の一端でしかない。

帝都での《緋》との戦いは譲歩して認めても、その後の《虚神》との戦いとクロスベルでの《雲》の錬成はリインだからこそできた奇蹟だと言うのが結社内での共通認識になっている。

「しかしあれだな……あれだけ格好つけておいて工房長に先を越されちまつて、すまないな」

「それについては君が謝ることではないさ。むしろこうしてわざわざ情報の裏付けをしてくれているのだから礼を言うべきだろう」

秘密組織のエージェントらしからぬ態度にルーファスは苦笑する。

「ところでマクバーン。君はロランス・ベルガーという名前を知っているかな？」

「ロランス……？」

聞いたことがある気がする名にマクバーンは記憶を探る。が、それが出てくる前にルーファスが答えを告げる。

「《神速》の彼女は《剣帝》と呼んでいたね」

「ああ、あの阿呆の偽名か。それがどうしたんだ？」

「実は今回の武術大会に出場しているのだよ」

「……………へえ」

「付け加えるなら、一人で予選を突破した彼のチームにリイン君が入ることになった」

「何だと……？」

ルーファスからもたらされた情報にマクバーンは驚き、舌打ちした。

「ちつ……こんなことなら誘いに乗っておけば良かったな」

リインと戦えることは魅力的だったが、見世物になる気も窮屈な戦場で戦うのもごめんだと断ったことをマクバーンは悔いる。

「だがまあその二人が組んでいるって言うなら、向こうも《金》の選定の儀式は把握しているだろうな」

「やはりそう考えるのが妥当かな？」

「そんな理由でもない限り、あの阿呆が武術大会なんてものに出場するとは思えないから……」

シュバルツアーはあいつを《金の起動者》に宛がうつもりなのか、それとも儀式そのものを壊すつもりなのか……ま、俺には関係ないか」
惜しいことをしたと言わんばかりに不貞腐れるマクバーンにルーファスは笑みを濃くして提案する。

「ところで君はこの後暇かな？」

「あん……？」

「実は明日、私と共に出場するはずだった領邦軍の仲間たちが体調不良を起こすことになっていてね……」

急遽、私は三人のチームメイトを探さなければいけなくなってしまったのだよ」

「……………おい、テメエ……………」

明日という未来の出来事を当然とばかりに言葉にして困った素振りをするルーファスにマクバーンは顔をしかめる。

「アルバレア家が《起動者》になる妨害工作なのだろうが、困ったものに父にはどんな手段を使っても《騎神》をアルバレア家に取り戻せと厳命されている……」

それだけでなく競い合う相手に《黄金の羅刹》、《黒旋風》を始めとする帝国の猛者たちばかり……

それに《超帝国人》と《剣帝》となれば私が勝ち残るのは難しいのだが、君は誰か使える助っ人に心当たりはないかい？」

わざとらしい質問にマクバーンは呆気にとられ、次の瞬間笑った。

「良いのかよ？ 俺は——」

「おや、ユミルで偶然知り合った友人に協力を求めるのはおかしなことかな？」

先回りして答えるルーファスにマクバーンは口では勝てないと肩を竦める。

「もしも君に協力者に心当たりがあるのならこれを渡してもらえるかな？」

そう言っただけでルーファスがテーブルの上に置いたのは戦術オーブメント《ARCCUS》だった。

用意周到なルーファスにマクバーンはもう一度肩を竦めて、徐に戦術オーブメントを取り蓋を開ける。

ルーファスはその行動を黙って見守る。

マクバーンは中央にマスタークオートを取り出すと、握り締める。

「——ほらよ」

熱気が伴う風が部屋の空気を揺るがし、マクバーンは赤黒く変色したマスタークオートをルーファスに投げ渡す。

「——引き受けてくれるということの良いのかな？」

「いちいち口にさせるな」

肩を竦めるマクバーンにルーファスは苦笑する。

「さて後二人だが……今から“あの子”を呼び出すか」

マクバーンの引き込みからルーファスはすぐに残りの二枚について思案する。

そこで部屋に備え付けていた通信機が鳴り出した。

「——私だ」

『お休みのところ申し訳ありません。ルーファス様』

「前置きは良い。用件は？」

『はっ——実は現在リイン・シユバルツァーが先程の暗殺者の件でルーファス様に御相談したいことがあると取次ぎを願っているので

すが……』

「ほう……もう進展があつたのか」

先程、別れたばかりだというのに忙しないとルーファスは感心する
とともに呆れる。

「分かった。通してくれたまえ」

そう言つてルーファスが通信を切つて振り返つた時にはもうマク
バーンの姿はその部屋にはなかつた。

・*

「なるほど事情は理解した」

早朝のジュノー海上要塞の司令室でリインは昨夜のあらましを
オーレリア將軍に報告していた。

「本来なら単独行動——さらにこちらには無断で外泊したともなれば
厳罰に処するところだが……」

「しかしそうなると学院側からもラマルル州領邦軍には責任を追究さ
せてもらうことになりますよ」

リインに代わつてオーレリアと相對するルーファスがオーレリア
の言い分に真つ向から異を唱える。

「ほう……それはどういう意味でしょうルーファス卿？」

「Ⅶ組の特別実習は生徒にさえも直前まで実習先は伏せています……
ですが今回の暗殺者はレミフェリアからにも関わらず、トリスタで
はなくオルデイスで犯行に及んだ……」

つまりはリイン君がここに来ることを誰かが漏らしたとしか考え
られません……

基地内での安全が確認されない限り、リイン君と暗殺者の二人は口
封じの可能性も考慮して私に保護を求めたのは当然の危機意識で
しょう」

「道理だな」

ルーファスの、ひいてはリインの意見に肩を竦めてオーレリアはそ
の言い分を認める。

オーレリアも伯爵家の人間だけあって、貴族同士の足の引つ張り合
いについての理解は持ち合わせている。

このジュノー海上要塞に駐在している領邦軍も決して一枚岩では
なく、オーレリアの目が全てに行き届いているとは言いい切れない。

「加えてどうやらアルバレア家を妨害する勢力もあるようですね
……」

私と共に来ていたクロイツェン州領邦軍人たちは急な体調不良を
訴えて大会に出場できそうにありません」

「……………ちつ」

その報告にオーレリアは苛立ちを隠し切れずに舌打ちする。

「ではルーファス卿は大会を棄権するのか？」

「いいえ、幸い。以前ユミルで会った友人が武術大会の見物に来てい
たので彼に助っ人を頼みました……」

そして今回リイン君が捕らえた暗殺者の二人を私のチームに参加
してもらおうことにさせて頂きました」

「シユバルツァーはそれで納得したのか？」

「はい、ルーファス卿には二人をトールズで保護する一つの条件にさ
れましたので異論はありません」

確認をしてくるオーレリアにリインは頷く。

すでに彼らの処遇についてはリインとルーファスの間で話は着い
ているし、二人の了承も得ている。

リインとしては病み上がりであり、レンと同年代の彼らを戦わせる
ことに抵抗はあるがそこはルーファスに論破されてしまった。

「レミフェリアの暗殺者か……既に話が着いているのなら私から言う
ことはない」

気になることは多く。暗殺者に関しては領邦軍で引き取り、尋問を
したいところだがリインが被害届を出さずに下手人を保護してし
まったのならそれ以上のことはできない。

「しかしどうする？」

君の命を狙っている何者がいる以上、特別実習をやっつけられる
状況ではないだろうか？」

不本意ながら、心底不本意だと顔に出しながらオーレリアはそれを口にする。

暗殺者の二人にしても、追い払った重力使いにしても、彼らは所詮は雇われただけの存在でしかなく、このラマール州にラインの排除を望む者がいることには変わらない。

そんな存在にとって武術大会は格好の暗殺の場だろう。

「いえ、大会にはそのまま出場するつもりです……」

幸いなことに他の班員とは一人を除いて別行動になりましたし、ランスさんもこの件に関しては容認してくれています」

「そうか……」

ラインの言葉にオーレリアはほっと胸を撫で下ろし、すぐにその顔を引き締める。

「会場内については私の権限で警備を増やして対処しよう……」

そして特別実習の課題となっている《軍事演習》については予定通り行わせてもらおう……担当の者は私の直属の部下だ……

それとも私が暗殺の依頼者だと疑うのなら、取りやめても良いが？」

「いえ、オーレリア將軍に俺の抹殺をする理由があったとしても、貴女はそんなやり方よりも正面から俺を殺しにくる人ですからそこは信頼しています」

「やれやれ、全くもってその通りだが……その豪胆さは《鉄血宰相》譲りか？」

「さあ、どうでしょう？　俺はあの人のことについてはほとんど何も知りませんから」

探るような言葉にラインは惚けた言葉を返す。

そんなラインの対応にオーレリアは肩を竦める。

「話は以上だ。そなたは予定通り、VII組と合流して軍事教練に励んで来ると良い」

「寛大な配慮、感謝します」

ラインはオーレリアに促され軍人さながらの礼をして司令室から退出した。

「やれやれ、今年の士官学生は教育が行き届いているようだ」
今すぐ軍属にしても問題がなさそうなラインにオーレリアはぼやく。

「彼は例外ですよ」

オーレリアが言わんとしていることにルーファスは苦笑する。

「では私もこれで失礼します。私もこれから武術大会に向けて彼らとすり合わせなければならぬことがありますので」

「ルーファス卿」

その背をオーレリアは呼び止める。

「スウィン・アーベル並びにナーディア・レイン……」

そなたの目から見てどれ程使えると考えている？」

「そうですね……まだ拙い部分がありますが、『殲滅天使』ほどではないでしょう……」

ライン君に負けたことから、戦力として数えるにはいささか不安は多いでしょう」

「ならば何故、そなたは彼らを自分のチームに引き入れた？ 些か卿らしくないと私は見ているが？」

ルーファスはその質問に苦笑して振り返り、答える。

「ええ、貴女やライン君に勝つには彼らでは足りないでしょう……ですが彼らにはライン君と戦った経験があり、まだ伸びしろがある子供……」

なれば勝つための不確定要素として利用価値があると判断したまでのことです」

その答えにオーレリアは目を丸くし、次の瞬間——歪む口元を隠した。

「まさかそなたの口からそのような言葉が出るとはな……この度の武術大会、やはり愉しめそうだ」

クククつと声を漏らして笑うオーレリアにルーファスは笑みを深め——

「ああ、それと私のもう一人のチームメイトは《劫炎》のマクバーンにやって頂くことになりました」

「何だと——!?!」

驚き、オーレリアが顔を上げた時にはもうルーファスは司令室のドアを閉めていた。

・*

「時間ギリギリだな」

演習場に出たリインを迎えたのはユーシスの皮肉が混じった言葉だった。

「大変だったようだなリイン。無事で良かった」

「リインばかり面白そうなこととしてずるいよ!」

労ってくれるガイウスと抗議するミリアムにリインは苦笑する。

「俺だってまさかまた暗殺対象になるとは思っていなかったさ」

「お前は帝都の事件以来、良くも悪くも目立っているからな……」

暗殺者を差し向けた最有力候補はやはり《帝国解放戦線》か?」

「どうだろうか? 実行犯は依頼人のことについて何も知らされていないから、何とも言えないよ」

ユーシスの疑問にリインはスウイン達から聞き出した情報で答える。

「しかし、こんなことになるなら私達も同行しておけば良かったか?」

「どうでしょう……リインさんのことだからみんなで行ったとしても振り切って行ったんじゃないですか?」

ラウラの眩きにエマがいじけた反論をし、あり得ると一同は非難の目をリインに向ける。

「いや、でもこれはⅦ組とは関係ない俺の問題だったから」

「それでも水臭いじゃないか。俺達は何度もリインに助けられて来た。だから俺達にもリインの手助けをさせて欲しいと思っていることを忘れないで欲しい」

「ガイウス……」

その気持ちは嬉しいけど、逆の立場ならどうだ?」

「むっ……」

言い返されてガイウスは思わず言葉を詰まらせる。

逆の立場、つまりは自分が何者かに狙われた場合、Ⅶ組のみんなを巻き込むか、それとも自分だけで対処しようとするか。

考えた末に出て来た答えは後者であり、ガイウス以外の者達も同じだった。

「ま、そういうことだよ」

リインはガイウスの肩を叩いて、この話を切り上げて――

「でも本当に心配したんですよ」

切り上げようとしたのだが、ミルデイナーが怒った様子でそう言った。

「ミ、ミルデイナー……」

「追い駆けようとしてもリインさんったら屋根の上を跳んで駆けて行ってしまったからそれもできなくて……」

この事はエリゼ先輩にしっかりと報告させて頂きますね」

「そ、それはやめてくれないかな」

「どうしましょう……ふふ……」

怯むリインにミルデイナーはいたずらっぽく小悪魔のように笑った。

107話 紺碧の海都VI

第一回ラマール州武術大会。

最大四人の一チームによる四対四の集団戦。

シード枠である四大都市の領邦軍とトールズ士官学院のVII組、それに加え一週間に渡る予選を勝ち抜いて来た猛者たちが十一枠。

その内の一枠であるリイン達は本戦開会式の言葉を控室で聞き流して、最後の打ち合わせをしていた。

「俺達の目的は言わば陽動だ」

「陽動？」

ロランスの言葉にリインは聞き返す。

「ああ、ヴィータから求められた役割は俺達が大会で目立つことに尽きる……」

「そうやって工房長の目を俺達に引き付けて暗躍するつもりらしい」「らしいって……安静にしてないといけないはずじゃなかったのか？」

「あいつがやると言っているのだから、任せれば良い」

「いつそう冷たいとも取れる言葉だが、確かにそこまで心配をする必要はないかとリインも判断して頷き、エマの様子を窺う。」

「何ですか？」

「いや……エマはヴィータさんのことは心配じゃないのかなって思ってます？」

「知りません……あんな人がどうなっても私には関係ありませんから」

「……………いや……エマはそれで良いのかもしれないけど…………」

義姉さんから、ヴィータさん、そしてあの人と他人行儀になつていく呼び方にリインは苦笑いを浮かべる。

ヴィータがエマに何を言ったのか、どれだけ尋ねてもエマはそれに答えてくれない。

しかし、そんなエマの様子にリインはある疑問を過らせる。

「何か言いたそうですねリインさん？」

「いや……大したことじゃない」

「でしたら教えてください。あの人と私に隠れてまた取引でもしているんですか？」

凄んで来るエマにリインは仕方ないと頭を掻き、告げる。

「もしかしてヴィータさんはわざとエマを怒らせて、諸々の追究を誤魔化したんじゃないのかな？」

「……………」

リインの指摘にエマは固まった。

いや、まさか。と否定しながらもエマは自分が追究したかった疑問を何一つ義姉にぶつけていなかったことによりやく気付く。

「……………あ……………」

「まあ、何と言うか……エマはローゼリアさん似なんだな」

リインなりの精一杯のフォローの言葉にエマはぐぬぬと不本意だと反論しようとして――

「良いですこと。くれぐれもわたくしとシュバルツァーの戦いを邪魔するんじゃないやせんわよ、アルゼイドの小娘」

「また小娘と……私にはラウラ・S・アルゼイドという名が――」

「ふん、貴女なんて小娘で十分ですわ」

「何だ?!」

通路の先、先に控室に向かったはずのラウラの声が廊下に響き渡る。

エマとリインは珍しいラウラの怒声に顔を見合わせる。

「落ち着けラウラ」

「止めるなユーシス！ 私は落ち着いてる！」

控室に行くところには仲裁するようにユーシスに窘められているラウラがそっぽを向いて拗ねていた。

「どうしたんだ？ 廊下まで声が聞こえていたけど」

「リイン……………」

「来ましたわね。リイン・シュバルツァー」

振り返ったクラスメイト達を押し退けて、ラウラと言い合いをしていた女剣士——デュバリイがリインの前に進み出る。

「こちら側の控室に来たということは第一試合で当たることはないようですよわね」

「デュバリイさん……どうして貴方がここに……いや、出場することは知っていたけど——」

控室の中、赤い鎧をまとった一団の姿を確認してリインは尋ねる。

「よりによつて『アレ』をリーダーにするなんて本当に何を考えているんですか？ 正気ですか？」

「ふん、わたくしは優勝なんて興味ありませんわ……」

わたくしの目的はただ一つ、貴方との再戦ですわ」

「再戦つて……この大会は四対四のチーム戦。戦えるとは限らないと思うんですが？」

「そんなのわたくしと貴方が誰にも負けなければ済む問題ですわ」

本戦の出場者の顔ぶれを知つてか、知らずかデュバリイは強気な発言をする。

「まあ確かにそうだけど……」

「その上でリイン・シュバルツァー、貴方に一騎討ちを申し込みますわっ！」

声を上げてデュバリイはそう宣言する。

「一騎討ち……いやだからこの大会はチーム戦で——」

「ふ……雛鳥達などわたくしに掛かれば瞬殺ですわよ。せいぜいシュバルツァーの足を引つ張らないように……ように……」

デュバリイはリインの背後にいる彼に指を突きつけて——固まった。

「ああ、精々足を引つ張らないように気を付けよう」

ロランスは苦笑交じりにデュバリイの言葉を受け入れる。

「な……な……な……」

「あん？ 何だお前らもこっち側か？」

リイン達の後に控室に入って来た男——マクバーンはそこにいる顔ぶれにあからさまに落胆をする。

「なっ——何で貴方までここにいるんですの!？」

貴方は先日、メンドクサイと言つて拒否したはずじゃ」

「ああ、気が変わった」

狼狽するデュバリイにマクバーンはあっさりとその時の言葉を翻す。

「——っ、ま……まさか貴方のチームというのは《剣帝》と《劫炎》の二人が……」

直前まで粹がつっていたデュバリイは顔を蒼白にしてリインに振り返る。

「いや、マクバーンは俺達のチームじゃないけど」

「そういうことだ。悪いがこの二人と先に当たったとしても恨むなよ」

いつもの気だるさを感じさせず楽し気に笑うマクバーンにデュバリイは顔を引きつらせて叫ぶ。

「これだから『執行者』はっ!!」

そして——

「紳士淑女諸君、よく集まってくれた。私は本戦から審判を務めさせていただくことになったブルブランと申します。以後お見知りおきを」

「アアアアアアアアッ!」

司会進行として彼を紹介されてデュバリイは頭を抱えて悲鳴を上げ、リインはそんな彼女の肩を優しく、慰めるように叩いた。

・*

計十六チームからなる勝ち抜きの特ナメント戦において、そのチームは毛色が違った。

「ふふふ、戦闘データの解析は完璧だ。これで私のチームの勝利は揺るぎない」

ハイデル・ログナーは闘技場の門で中央に進んで行く機械人形を見送りほくそ笑む。

「この《レジエネンコフ》たちにはそれぞれ帝国の猛者たちのデータを
入力している。この私の最強のチームに誰も勝てるはずがない」

言ってみれば「光の剣匠」に「雷神」「風の剣聖」それに加えて
百式軍刀術の達人だった現役の頃の「鉄血宰相」。

この四人を従えたとも言える夢のチーム。

「超帝国人だか知らぬが増長が過ぎる浮浪児など、私の技術力の敵で
はないわ」

かつてノルディア州の社交界でテオ・シユバルツァーをなじったこ
とがあるだけにハイデルは危機感を強く感じて己を奮い立たせる。

この最強の機械人形の性能をこの大会で大々的にお披露目をし、ゆ
くゆくは現在貴族派が秘密裏に開発している存在に同じプログラム
を組み込めば最強の軍隊をいくらでも作り出させる。

さらにこの大会の優勝賞品になっていると噂されている《騎神》を
手に入れ、その技術を得ることができれば。

それこそ当主の兄を押し退け、カイエン公さえも超えて貴族派の頂
点に立てると夢想する。

「さあ！ 我が覇道の最初の礎となるのは誰だ!？」

すでに優勝したつもりで気を大きくしたハイデルが見たのは、試合
開始と同時に爆散する四つの爆炎だった。

・
*

ラクウエルの悪童と呼ばれるアツシユ・カーバイドの武術大会の出
場理由はただ面白そうだからという単純な理由だった。

武術を修めているわけではないが、喧嘩で鍛えた腕つぶしに自信が
あつたから。

それに普段偉ぶって好き勝手に振る舞っている領邦軍の鼻っ柱を
合法的に折って指差して笑えるチャンスだとも考えたからでもある。

予選では悪知恵を働かせ、開始前の挑発や土を使った目潰しなどを
始めとしたラフプレイで本戦出場に至った。

故に、アツシユは予選と同じように挑発するように彼に話しかける。

「アカい灰色のオモチヤ乗り回して、超帝国人なんて名乗ってそんなに気持ちいいんスカね？」

その言葉に朗らかに挨拶をしていたリインは固まり、アツシユは手応えを掴んだ。

「それでは双方位置に付いてくれたまえ」

審判の紳士に促され、アツシユは仲間を率いて移動する。

「ハハ、こりやあこの試合も楽勝だな」

「貴族ってのはどうしてあんなに煽り耐性がないんだろうな」

「本戦出場だけでも賞金は出るし、一回勝てばさらに倍。これもアツシユのおかげだな」

「……………ああ」

疼く左目を押さえながらアツシユは頷く。

「それにしてもあのリイン・シユバルツアーって奴、本当に弱そうだな」

「ああ、それ思った。噂話からどんなバケモンかと思っていたら、一緒に出ている女二人の方が強いんじゃないかねえか？」

「言ってる。あんな隙だらけな奴俺でも勝てそうだけ。あのロランスのチームに入ったのも勝ち馬に乗りたいたいからだって考えれば貴族らしいんじゃない？」

すでに勝った気にいる仲間たちに水を差さないようにアツシユはため息を吐く。

——たしかにシユバルツアーの方は全然大した奴には見えねえが、問題はあっちの兄ちゃんの方だ……

油断なくアツシユはリインから意識を外して予選を一人で勝ち抜いて来たロランスという男を注視する。

予選で見せた圧倒的な力。

しかし、どの試合もアツシユの目から相手の力量に合わせてあしらっていたようにしか見えなかった。

強さの底が知れない。

同時に彼の姿を見ていると左目が疼き異常に胸がざわつく。
——何だ？

その奇妙な感覚に首を傾げていると、審判の号令が上がる。

「双方、構えー！ 勝負開始っ！」

その宣言にアツシユは思考を切り替えて舎弟たちに指示を出す。

「よし！ 作戦Cで行くぞ——？」

言ってアツシユは奇妙な違和感を覚えた。

開始の合図と同時に向こうのチームはリインが無造作に前に踏み出して来た。

武の知識はないものの、喧嘩という場数はいくつもこなしているアツシユの目から見ても隙だらけな動きだった。

「は、やっぱり騎神が凄いだけで、中身は大したことねえな」

ゆっくりとした足取り。

余裕で先制攻撃を仕掛けられると舌なめずりしたアツシユは次の瞬間、自身の体のおかしさに気付く。

——体が動かねえ!?

リインは遅いくらいの普通の動きをしているのに対して、アツシユは金縛りにあったかのようにわずかにしか動けない。

彼が太刀を抜き、刃を返して峰にする。

アツシユの目にはしつかりとその動きが見えているにも関わらず、それに対応するための動きが取れない。

——何なんだ!?

ひたすらにアツシユは自分の状況に困惑する。

が、何が起きているのか理解することはできず、アツシユたちの目の前にはリイン・シユバルツァーがいた。

「これは忠告だが、挑発をするなら相手と言葉を選ぶんだな」

その言葉を最後にアツシユの意識は暗転した。

108話 紺碧の海都VII

武術大会本戦の初戦第八試合。

その日の最後となる試合にユーススをリーダーにして出場したVII組の相手は《黒旋風》の異名を持つウォレスが率いるサザーランド領邦軍だった。

「なんとしても勝つぞっ!」

ユーススは先月の特別実習から負け続きだったこと、そして兄が見ていることもあり気合いを入れて仲間たちを鼓舞する。

「学生如きに遅れを取れるか!」

対するサザーランド領邦軍も負けない気迫でVII組と相對する。

戦術リンクという最新の技術があったとしても、軍人の意地と長い時間を掛けて培ってきた連携や己の武力によって拮抗する。

「はああああっ!」

「——砕け散れっ!」

ガイウスの突撃に合わせ、その背後からラウラが跳び上がって強襲する。

「甘いっ!」

ラウラの渾身の一撃を正面から槍で受け止め、それを盾にすかさず銃撃が撃ち込まれる。

「させないよっ! がーちゃんっ!」

それをアガートラムが盾になって防ぐ。

しかし、そこで軍人たちは止まらない。

銃撃を続け、アガートラムをその場に釘付けにし、そこへ長い駆動が必要になる高位アーツが降り注ぐ。

「わわっ!」

「任せるが良いっ! クレセントミラーツ!」

慌てるミリアムを制して、ユーススが相手に合わせて備えていた防御アーツを駆動する。

野太い光線は幻の鏡の中へと吸い込まれ、次の瞬間術者に向かって反射される。

しかし、軍人たちは危なげなくその光線を回避する。

「つ……流石ウォレス准将の直属と言うべきか。以前戦ったうちの軍人よりも遥かに手強い」

思わずユーシスの口から愚痴が漏れる。

「戦術リンクの恩恵があつて何とか渡り合えている……」

西風の旅団が特別ではなかったと思ひ知らされるな」

仕切り直しとして戻つて来たラウラの眩きに一同はレグラムでのことを思い出して苦い顔をする。

「だがここで負けるわけにはいかない」

「そうそう、リインは簡単に初戦を突破したんだからボク達も負けられないよね」

改めて気合いを入れ直すガイウスとミリアムに合わせ、ラウラとユーシスもそれぞれの武器を構え直す。

「気を引き締めろ。おそろくここからが本番だ」

ユーシスはこれまで戦つていた三人の軍人の背後に佇んでいた浅黒い肌の男が動き出すのを見て忠告を飛ばす。

「ガイウスの武器と同じ十字槍……それにあの出で立ち」

「ああ、話には聞いていたがおそらく俺の同郷の者だろう……」

獅子戦役の頃、ノルドを離れてそのまま戻らず帝国に根を下ろした一族、その末裔がいると聞いている」

ラウラの眩きにガイウスは頷き、ユーシスがそれに補足を入れる。

「サザーランド州のバルディアス家のことだな。彼はそこの領邦軍の准将だ」

「へーそんな偉い人までこんな大会に来るなんて意外だね」

ミリアムは槍を携えて無造作に歩いて来るウォレスに油断なく観察する。

「ガイウス・ウォーゼルだったな？ お前の槍はその程度か？」

ウォレスは足を止め、徐に話しかける。

「なっ——いきなり何を？」

「故郷の槍の使い手が出場すると聞いていたが、思っていた程ではないと感じてな……出し惜しみをしているなら本気を出すことを薦めよう」

「っ——」

ウオレスの言葉を貴族特有の上からの目と感じたガイウスは己の槍を軽んじられたこともあり、あえてその挑発に乗る。

「ならば俺の全力、受けてもらおうっ！」

気合いを高めガイウスは雄叫びを上げる。

「風よ！俺に力を貸してくれ！」

大きく跳躍し、翠の風の鬨気を纏った槍と共に急降下——

「カラミニティ・ホークツ！」

「温いっ！」

ガイウスの必殺の一撃はウオレスの黒い風を纏った槍が受け止め、弾き飛ばされる。

が、それで終わりではなかった。

身体ごと弾き飛ばされたガイウスは槍をウオレスに投げつけて、手で印を組む。

「来たれ雷神っ！空と海の狭間よりっ！極技・雷神招来っ！」

リベールの槍使いから教わった方術によって生み出された雷が風と合わさって槍を加速させる。

「温いと言っているっ！」

しかしそれさえも黒い旋風が薙ぎ払う。

「そんな——」

あつさりと新技を防がれたガイウスは絶句する。

「我がバルディアス家はノルドの槍術を源流に帝国の武術を取り入れて洗練していたものだ……」

流派としての研鑽を積んでいないお前の槍がバルディアス槍術に通じると思ったか？」

そんな彼の動揺にウオレスは苦笑を浮かべ、弾いて落ちて来たガイウスの十字槍を危なげなく受け止める。

「多少のアレンジはあるようだが、そこがお前の限界のようだな」

「何ですって?」

見切りをつけた物言いにガイウスは顔をしかめる。

「ノルドの自由を体現した良い槍術だったが、感覚と才能に頼っただけの槍ではここから大きく伸びることはないだろう」

「ぐっ……ならばここで限界を超え、貴方に届かせて見せるまでだ」

「軽々しく言ってくれるな。獅子戦役から250年、バルディアス家が積み重ねた研鑽を随分と軽んじてくれる」

「あ……」

思わず出てしまった言葉を侮辱と取られガイウスは口ごもる。

だがウォレスは特に気を悪くせず、ガイウスに尋ねる。

「強くなりたいかガイウス・ウォーゼル?」

「いきなり何を?」

「リイン・シユバルツァーは俺の良く知っている者とよく似ている……」

凡人が少しでも足踏みをすればすぐさま取り返しのつかない差を付ける。彼はそういう類の人間だ」

「それは……」

思い当たるところがあるガイウスは思わず聞き入ってしまう。

「お前に本当に俺に届かせる気概があると言うなら、この戦いの中でバルディアス家が得た『真髄』を盗んで見せろ」

ウォレスはガイウスの槍を投げ渡し、自分の槍を構える。

「盗めと言われても……」

突然の申し出にガイウスは戸惑う。

『盗む』という印象の悪い言葉に言いたいことが分かるが、抵抗を感じてしまう。

「難しいことを言っているわけではない。俺の『風』を感じろと言っているんだ兄弟」

「『風』を感じる……」

ウォレスの一言にガイウスの中の戸惑いは一瞬で消える。

「分かりました。胸をお借りします兄弟」

短い言葉で頭ではなく心で彼の言葉を理解したガイウスは鏡合わ

せになるようにウオレスと同じ構えを取る。

「ガ……ガイウス？」

「うむ……ガイウスにこんな一面があったとは」

「あははー、何かおもしろくなってきたね」

突如として始まった二人だけの世界にⅦ組一同は困惑する。

「お前達の相手は俺達だ」

「准将の邪魔はさせない！」

「准将の手を借りずともお前達程度、俺達で倒すっ！」

残された彼の部下の動揺は少なく、むしろⅦ組とガイウスを分断するように陣形を組み直す。

「ウオオオオオオオオッ！」

「ハアアアアアアアッ！」

戸惑う仲間たちを他所に二人は互いの“風”をぶつけ合うのだった。

・*

「よく勝ち抜いた勇者たちよっ！」

公爵邸の大ホールにカイエン公爵の声が響く。

「君たちの活躍、誠に大義であった」

ホールに集まった勇者たちに労いの言葉を送り、さらに激励の言葉へと続ける。

「明日の試合のためにささやかな宴を用意させてもらった。今宵は英気を養い、明日の最後の戦いを大いに盛り上げてくれたまえ！」

カイエン公が用意した立食会が始まる。

「おおおっ！」

所狭しと並べられた豪華な料理にナーディアは目を輝かせる。

「すーちゃん、見てみて豪華な宮廷料理だよ！」

「おいナーディア落ち着け。こんなの潜入任務の時に見たことあるだろ？」

興奮する相棒を宥めスウインは肩を竦める。

「だってお仕事の時は食べれても味なんて楽しんでる余裕はなかったし、ねね本当にこの料理は食べても良いんだよね？」

「ああ、この宴は君達への正当な報酬でもある。明日に影響を出さない範囲で楽しんで来ると良い」

「やったあー！ 行こうすーちゃんっ！」

「お、おい引っ張るな。ナーディア」

歓声を上げ、スウィンの手を取って料理へとナーディアは突撃する。

引かれた手に戸惑いながらもスウィンは抵抗せず、大人しく彼女に付き従う。

「……暗殺者か。こうして見ると年相応の子供だと思わないか？」

「さあな……だがうちのヨシユアとレンと比べればまだマシな方だろう」

ルーファスが振って来た話題にマクバーンは適当に応える。

「あ、兄上……」

そんなチームの場に恐る恐ると言った様子でユーシスが声を掛ける。

「やあユーシス。それにリイン君も初戦突破おめでとう」

振り返ったルーファスは訪ねてきたユーシスと、彼と一緒に来たリインを笑顔で迎える。

「恐縮です、ですが俺の相手は街の不良とくじ運に恵まれたに過ぎません」

「俺についても同じです。今回はガイウスがウオレス准将を討ち取って得た勝利です。俺自身はまだ何もできていませんでした」

二人は対照的にルーファスの労いに答える。

「それよりも兄上。彼らと本当にこのままチームを組むのですか？」

「おいおい、いきなり言ってくるな坊主」

切り出しから不信を隠さないユーシスの言葉にマクバーンは楽し気な笑みを作る。

「当然だ。どこの馬の骨とも分からない怪しい輩たちにクロイツェン州の代表など……くっ出来る事なら俺が兄上のチームに」

「はは、それでは特別実習の意味がないだろ。それに彼らはよくやつてくれているさ」

悔やむユーススをルーファスが宥める。

「ですが、この男はともかくあんな年端もいかない子供たちは——とても暗殺者とは思えません」

「そうは言うが、数年前オーロックス砦に侵入し、当時の准将を殺した暗殺者も今の彼等よりも幼かったと聞く……」

裏側の世界は見た目の歳では測れないということだよ」

「オーロックス砦の事件……《漆黒の牙》のことですか？ あんな眉唾な証言を兄上は信じているんですか？」

「ぶっ——!?!」

「は——？」

思わぬ所で出て来た《二つ名》にリインとマクバーンは揃って目を丸くする。

「おや、その様子だと二人も名前くらいは聞いたことはあるようだね……」

その存在が帝国で幅を利かせていたのは少なくとも五年以上前のことなのだが」

二人の反応にルーファスは説明する。

今から七年程前に、帝国内ではとある《漆黒の牙》と呼ばれる暗殺者が存在し畏れられていた。

その活躍はまさに神出鬼没。

政府の要人、屈強な兵士が犠牲になり、被害の反面その目撃情報はほとんどなくその存在は闇から牙を突き立てる《漆黒の牙》と呼ばれるようになった。

「とはいえ、《漆黒の牙》が幅を利かせていたのは七年程前までのこと、今では一種の都市伝説のように語り継がれるだけの存在だがね」

「そ、そうなんですか……」

そういう可能性があるとは考えていたが、実際の被害を聞かされてリインは冷や汗をかく。

「——ところでシユバルツァー。あの阿呆はどこだ？」

話を逸らすようにマクバーンはホールに見当たらない青年の所在を尋ねる。

「ロランスさんなら気が乗らないって言うてもう帰りました」

「ちっ……その手があったか」

ロランスチームのスケープゴートにされたリインがそう答えるとマクバーンは舌打ちする。

「しかしそれはそうと……」

控室の時から改めてマクバーンはリインの姿を観察する。

「ククク……クロスベルで何かやって来たと聞いていたが良い感じに新しいものが混じっているじゃねえか……」

それにその太刀……まさか《内の理》で《外の理》に匹敵するもんを作つて来るとはなあ」

今にも襲い掛かつて来そうな癡猛な笑みを浮かべるマクバーンにリインは肩を竦める。

「まさかとは思うが、ここで——いやこの大会で本気を出すつもりじゃないだろうな?」

「安心しろ。流石にあの姿を見世物にするつもりはねえ。だが今のお前なら《箱庭》で俺の力を受け止められるんじゃないやねえか?」

「それは……」

マクバーンの指摘にリインは考える。

至宝級の力を注ぎ込まれ、昇華した今の《聖痕》ならば箱庭の維持とリインの戦闘を両立させることは不可能ではない。

「仮にできたとして、あの時と同じで無条件に俺が貴方と戦う理由はありませんよ」

「おいおい連れねえこと言うなよ」

馴れ馴れしく肩を組もうとしてくるマクバーンをリインは躲して距離を取る。

「ちっ……まあ今回は味見で我慢するか」

「おっと私もリイン君とは改めて手合わせしたいから譲ってもらえるかな」

マクバーンの発言にルーファスが異を唱える。

「兄上……?」

楽し気にしているルーファスの見たことのない顔にユーシスは困惑した。

・*

「モグモグ……おいしー! レグラムで食べた料理よりおいしーかも!」

「モグモグモグ♪ クロスベルで食べた料理もおいしかったけど、海の幸がふんだんに使われたこの料理もなかなか……うーん、改めて復活できて良かった」

「ミリアムちゃん、それにイオ様も。いくら立食会だからって言うてももう少しお行儀よくしてください」

好奇心と食欲が赴くままに豪勢な料理をがつつく二人の子供をエマが窘める。

「ミリアム、その言葉は聞き捨てならないぞ」

そしてラウラはミリアムの発言に聞き捨てならないと言わんばかりに咎めるが、当のミリアムは特に気にした様子はない。むしろ――

「ほら、ラウラも食べてみれば分かるよ」
「確かにレグラムにない海の幸……それにミラに物を言わせた料理だが……むう……」

勧められた料理にラウラは唸る。

悔しいが確かにミリアムの言を認めなければならぬ程の差がそこにはあった。

「イオ様……」

「様なんて気軽にイオちゃんって呼んでくれていいんだよ。同じチームメイトなんだから」

「そ、そういうわけにはいきません……リインさんからも言ってもらえませんか?」

気安く接して来るイオに困ったエマは戻って来たリインを振り返って懇願する。

「えつと……」

エマの小言をスルーして豪華な宮廷料理を幸せそうに堪能するイオを見てリインは苦笑いを浮かべる。

「大目に見て上げてくれ、イオさんは長い間封印されていたわけだから」

「だからと言ってお婆ちゃんと同格の存在なんですからもつとこう、威厳というものをですな」

「え……ローゼリアさんに威厳？」

「……………あれでもちゃんとしつかりしているんですよ」

フオローする言葉の前の間についてリインは追及しないことにした。

「それはそうとガイウスは……？」

VII組の輪の中にガイウスがいないことに気付いたリインは周囲を見渡し、すぐに彼の姿を見つける。

「ウォレスを倒した一撃、見事だったぞウォーゼル」

「きよ、恐縮です。オーレリア将軍」

オーレリアに賞賛の言葉を送られ恐縮し切っているガイウスはそのまま弁明する。

「ですが、俺がウォレス准将に勝てたのは全て准将のおかげです……」

あの人が俺を高みに連れて行ってくれなければ簡単に負けていたでしょう。俺が最後に競り勝てたのは運が良かっただけです」

「恥じることはあるまい。それを含めて君の伸びしろがウォレスの予想を上回ったということだ」

「しかし——」

「もしも恥じる気持ちがあるのなら、明日の戦いを勝ち抜くことこそウォレスの教えへの報いとなるだろう」

「っ——はいっ！」

試合が終わってから浮かない顔をしていたガイウスはオーレリアのその言葉に気持ちを切り替える。

「さて——」

話は終わったとオーレリアは振り返る。

「シユバルツァー。ロランス・ベルガーはどこだ？」

「もう帰りました」

期待に胸を弾ませた顔をしているオーレリアにリインは無情な答えを返した。

・*
・*

「よう、こうしてちゃんと顔を合わせるのは初めてだな」

近付いて来た気配にリインは気を切り替えて振り返るとそこには黒いジャケットがいた。

「ルトガー・クラウゼル……」

彼の後ろには取り巻き、腰巾着のようにゼノとレオニダスが付き従っている。

その姿にパトリックの取り巻きを重ねてしまうが、それをあえて口にせず、彼らと共にいる同じジャケットを来た女の子に目を向ける。

「………そっちの二人はともかく、貴方まで武術大会に出場するとは思っていませんでしたよ」

「ま、ちよつとした成り行きって奴でな」

喧嘩腰とも取れるリインの言葉にルトガーは飄々とした態度で応える。

「ガレリア要塞を襲撃した《紫の騎神》の起動者……テロリスト達との繋がりを認めているようなものだと思いますか？」

「おいおい俺がゼクトールの起動者だって証拠はあるのか？」

わざとらしい受け答えをするルトガーにリインは嘆息する。

「俺に何の用ですか？」

「いや、フィーの奴はちゃんと元気になっているかどうか聞きたくてな」
「それを貴方が訊くか？」

ルトガーの要件にリインは呆れる。

「お前さんの言いたいことは分かるが、これも俺なりのケジメでな。ま、その様子だとフォローしてくれただみたいだな」

「……フィーの故郷を奪ったと言うのは本当なんですか？ そっちの

二人は今までそんな素振りも見せていませんでしたが」

リインはルトガーから視線をゼノとレオニダスに移して尋ねる。

「それについては俺らも初めて聞かされたことだな」

「我らが西風に入ったのは団長がフィーを拾った後、そしてフィーが西風に正式に参加するようになったのが俺達が入った後だったということになる」

「……………そんな体たらくで兄貴風を吹かせていたのか」

「ぐっ…………」

「むっ…………」

リインの鋭い言葉に二人は唖る。

「ははは、まあこれは俺からフィーに送る最後の教えみたいなものだ……………」

本当ならフィーの奴が成人してから伝えるつもりだったんだが、不甲斐ないことに不死者になって俺も身の振り方を考えている最中ですね」

「真実を教えずにいればフィーは傷付かなかったと思いますが？」

「それでも……………まあこれは俺の勝手なケジメって奴だ……………」

しかし意外だな。ボースでやり合ったこともあるから仲違いしているかと思っていたが、どうやら仲良くしてくれているみたいだな」
「それは……………」

安堵するルトガーにリインは言葉を濁す。

ボースで戦った少年——女の子がフィーだったと最初の時点で気付いていなかったとは言えない。

「ところでそっちの女の子は……………」

話題を逸らすようにリインは気になっていた少女に視線を送る。

《西風》の試合ではミリアムと同じように戦術殻を操って戦っていた少女。

「ああ、こいつは《騎神》の武器だって渡されてな。お前には今更説明するまでもないだろう？」

ルトガーの答えにリインは顔をしかめる。

「フィーを捨てておいて、同じくらいの女の子を連れて……………控え

めに言って最低なダメ親父だと思いませんか？」

「ははは、違うない」

リインの皮肉にルトガーは笑って返す。その態度にリインは嘆息して女の子に改めて向き直る。

「俺の名前はリイン・シュバルツァー。君の名前を覚えてくれるか？」

「……………シオン」

女の子は短く、あの子を彷彿とさせる短い言葉で名乗る。

「そうかシオンちゃんって言うのか。よろしくな」

笑顔でリインはシオンの頭に手を伸ばし――

「おいボン、シオンに何しようとしとる？」

「シュバルツァー。まさかシオンに手を出すつもりじゃないだろうな？」

プレッシャーを掛けてくる二人にリインはため息を呑み込み、ルトガーに視線を向ければ彼は呆れたように肩を竦めるのだった。

・*

クロワール・ド・カイエン。

ラマール州を治める公爵、帝国西部を支配する大貴族であり貴族派の実質的なリーダー。

「リイン・シュバルツァー君」

宴も終盤に近付いた頃合いにクロワールはリインを別室に呼び出し、ミルディーヌを背後に控えさせて対面する。

「率直に言わせてもらおう。私と手を組まないかね？」

「え…………？」

「我々、貴族派が革新派と対立しているのは君の実父である《鉄血宰相》のせいだということとは説明するまでもないだろう」

「……………」

「宰相閣下のやり方はあまりにも理不尽だ……………」

陛下からの信任をいいことに伝統と慣習を軽んじ、帝国の全てを意のままに造り変えんとする傲慢さ――

「彼に捨てられた君なら分かるのではないかね？」

「それは……」

「あまりに剛腕かつ強引、敵を作っても顧みないやり方。それが帝国解放戦線のような存在を生み出す諸悪の根源となっている……」

「これ以上彼による被害を広げないためにも、君には是非貴族派に参加してもらいたい」

「御言葉ですが、俺を引き抜く理由には弱いと思います」

リインはギリアス・オズボーンの隠し子だった。

その事実は既に隠蔽できない程に広まっている。

そんな獅子身中の虫になりかねないリインの存在はシュバルツアー男爵という貴族の身分を持っていてもおいそれと触れられない爆弾だった。

「君は自分の評価を正しく出来ていないようだな……」

「もしも貴族派と革新派が争うことになった時、君という存在を獲得した陣営こそが勝者となる。それ程までに君と君の《騎神》の力は強大なのだよ」

「《騎神》の力を当てにしているのなら、申し訳ありませんがその話はお断りさせて頂きます」

「ふむ、何故かね？」

「《騎神》の力は閣下が仰った通り絶大です。だからこそ人同士の抗争に介入させるべきではないというのが自分の考えです」

「それは逆ではないのかね？」

「この激動の時代に“大いなる力”を得た意味。私には“女神”が宰相閣下を倒すために君に力を与えたのではないかと考えているのだが」

「それは考え過ぎと言うものでしょう」

「いや、ある意味正解なのかもしれないと考えながらリインはクロワールの言葉を否定する。

「君は君を捨てたオズボーン宰相を恨んでないのかね？」

「私の目から見たら君達是对立しているように見えたのだが、私達が手を組むには十分な理由だと思うがね？」

「《鉄血宰相》と対立しているのは事実です。ですが、それと貴族派に組するかは話は別です……それに——」

「それに？」

「公爵閣下は先程オズボーン宰相こそが諸悪の根源だと仰っていますが、果たして本当にそうなのですか？」

「君は違うと言うのかね？」

「俺は今日まで特別実習として帝国の各地や外国を巡って来ましたが、噂に聞いていた程のオズボーン宰相の悪事を耳にはしませんでした……」

むしろ貴族達の振る舞いの方が目に余ると感じたほどです」

「ふむ……」

貴族を批判するラインの言葉にも関わらず、クロワールは激昂することもなく、むしろ身内の放蕩者を思い浮かべ黙ってラインの言葉を促す。

「貴族の立場をいいことに平民というだけで人を軽んじ貶める。世界は自分を中心に回っているとやんばかりの傲慢さ——」

彼らの振る舞いが《鉄血宰相》を生み出したとしたのなら、例えここでオズボーン宰相を打倒したところで第二、第三の《鉄血宰相》が生まれるだけはないでしょうか？」

皮肉にもクロワールが最初に発した誘い文句をアレンジした言葉にクロワールは閉口する。

ラインの言葉に身内の放蕩者を浮かべてしまっただけに、クロワールは言い返す言葉を失う。

しかし、その内心とは裏腹にクロワールの中でラインの評価は上がる。

——あの狂犬たちとは違って扱い辛い面白い……

狂犬たちは簡単に自分の言葉を鵜？みにして墮ちるところまで墮ちたが、確たる信念を持っているラインを都合の良い鉄砲玉にはできないと、クロワールは早々にラインを貴族派に引き入れることを諦める。

しかし——

「気に入った」

「……………え？」

ぽつりと呟いたクロワールの呟きにリインは首を傾げる。

「リイン・シュバルツァー君。貴族派の引き抜きとは別に私の息子にならないかね？」

「は……………」

「叔父様？」

突然のクロワールの言葉にリインとミルデイナーは揃って疑問を浮かべる。

「君をこのままアルノールに渡すのは惜しい……………」

「このミルデイナー又は私の兄の娘なのだが、どうかね？」

「ど、どうって……………」

「叔父様っ!？」

突然のクロワールの提案にミルデイナー又は冷やややかな雰囲気をかながら捨てて狼狽えるのだった。

109話 紺碧の海都Ⅷ

壮行会とも言える宴が終わり、それぞれが明日の試合に向けて休む中ラウラは一人、新たな宿泊先となったオルデイスのホテルから抜け出していた。

「っ——」

人気がない砂浜でがむしやらに大剣を振る。

「——止まれっ」

震える腕から繰り出す乱れた剣筋に苛立ちを抑えきれずがむしやらに大剣を振る。

「私はっ！」

これは武者震いだと言い聞かせる。

強い敵とは戦えるのなら願ってもないはずなのに頭に浮かぶのは負ける事ばかり。

事実、勝ち進んで来たチームはどれもラウラが負けた経験のある猛者たちがいるチームがほとんど。

ラインとチームを別にして四月のリベンジと意気込んだものの、忍び寄ってくる敗北の気配に焦燥と恐怖を抑え切れない。

「……………私は……………こんなにも臆病だったのか……………」

負けることが怖い。

自分の中の気付いていなかった女々しい感情にラウラは項垂れる。

「っ——違う！ 何としても私は勝つんだ！」

呟いた言葉を振り払うようにラウラは大剣を振る。

「勝って！ あの女騎士に私の名を覚えさせるんだ！」

目的を叫び、ラウラは敗北の気配に震えそうになる体を鼓舞する。

「オオオオオオオッ！」

砂浜にラウラの雄叫びが響き——

「——何をしているんだラウラ？」

「ひゃっ!？」

背後から聞こえてきたラインの声にラウラは悲鳴を上げるのだっ

た。

振り返ったそこにはリインとスウインが不思議な顔をしてラウラを見ていた。

・*

「――以上が俺の『鏡火水月の太刀』の原理だ……」

それから残像攻撃と分け身、『刻剣』をこれからも使うつもりならこの二つの技も覚えておくといい」

「はい」

リインがスウインに実演して教えている光景をラウラは少し離れた場所で眺めていた。

スウインは砂浜に立てた丸太に打ち込みの練習を始め、リインは膝を抱えているラウラの下へとやって来る。

「それでホテルを抜け出して何をしているんだラウラ？」

「むう……ホテルを抜け出したのはそなたも同じではないか」

頬を膨らませてそっぽを向いてラウラは反論する。

「生憎だけど、俺は予めユースとガイウスに事情は説明してある

……

そう言うからにはエマとミリアムにちゃんと行ってあるんだよな？」

「う……」

その指摘にラウラは唸る。

「そ、そんなことよりリインは何をしているんだ？　というかあの暗殺者の少年に技を伝授しているようだったが、どういいうつもりなのだ？」

話を逸らすように打ち込み稽古をしているスウインの話題を振る。「ああ、その通りだ。スウイン達はこれから多くの試練が待ち構えているだろうから、二人で生き抜くために俺が教えられることを教えておこうと思っただけだ」

戦士としてスウインの戦い方は歪だ。

まだ幼い体躯という理由もあるが、その非力さを補う「刻剣」の剣技は斬ることよりもとにかく「当てる」ことを念頭に置いたもの。

その独特な剣技はエンペラーに剣筋を読まれてしまった一因でもあるため、早急な矯正が必要だった。

それに加え、人に対して殺傷能力があり過ぎる「点撃爆発」は暗殺稼業から足を洗おうとしている彼らにとつて大きな枷になることは容易に想像できる。

それでもナーディアを守るために「刻剣」を使い続けると決めたスウィンにリインは思い付く範囲で、流石に「八葉」は教えられないが武術に共通する基礎を教えることを決めた。

「だが彼は明日戦う敵になるかもしれないのだぞ？」

「スウィン達の追手はいつ来るか分からないからな。それにもし明日当たることになるなら実戦形式で今日教えたことを試せるから問題はないよ」

これが「結社」なら、去る者は追うことはないので安心なのだが、とリインは嘆息する。

「っ……」

軽く言つてのけるリインにラウラは閉口する。

「……リインは……明日負けると思つてないのか？」

恐る恐るラウラは尋ねる。

「ラウラにしては弱気な発言だな？ やるからには優勝する。ラウラならそう言うと思つていただけ」

「……そんなこと言えるわけないだろ」

ラウラは力のない言葉を返す。

対戦相手はどのチームもラウラに苦い敗北の経験を植え付けた者達ばかり。今度こそ私が勝つと言えれば良いのだが、数々の敗北から成長を実感できないラウラはとてでもないがそれを口にするにはできない。

肩を落とすラウラにリインは苦笑して言葉を掛ける。

「相手との力の差を測れるようになったのも一つの成長の証だ……」

負けることが怖いというのも力量差を理解しているからこそだろ

「？」

「それでも……負けることが怖いなんて、アルゼイドの娘が言って良いことじゃない！」

「焦らなくてもラウラは強くなれるさ。ラウラに足りないものがあるとしたら経験と場数、それを補えば自然といつか——」

「いつかでは遅いのだ！ 私は——私は今強くなりたいのだっ！」

父と同じようなことを言うリインにラウラは溜め込んでいたものを吐き出すように叫ぶ。

「いつかとはいつのことだ!? その時、私は強くなれたとしてもその時のそなたも《神速》も今以上に強くなっているのだろう!？」

それでは意味がない！ 適当な気休めなど言わないでくれっ！」

「ラウラ……」

目尻に涙を浮かべて叫ぶラウラにリインは言いかけた言葉を呑み込む。

「………すまない……私はまた無様な八つ当たりをしている……」

ラウラは乱暴に袖で目元を拭って踵を返す。

「ラウラ……」

「すまぬリイン。今は一人にしてくれ」

以前の暴走の二の舞になっていることに気付いて、ラウラはリインの呼び掛けを拒絶してその場を立ち去ろうと歩き出し——

「そこまで思い詰めているなら、一つラウラに使えそうな技を教えるも良いけど……」

「っ……」

その言葉に踏み出した足は止まる。

「この技はラウラの好みに反すると思うし、俺がアルゼイド流に異物を教えるのは筋違いだと思うけど……どうする?」

背を向けているラウラにリインは言葉を重ねる。

歩き出した足は一步目で止まっている。

背中を向けているラウラがどんな顔をしているか分からないが見えない獣の耳と尻尾がピンと起き上がっている雰囲気を感じられる。

「………私は……」

アルゼイド流であることを尊重してくれるリインにそこまで言わせてしまったことに申し訳なく感じながら、ラウラは横目で丸太に打ち込みをしているスウィンを盗み見る。

残像と分け身はともかく、鏡火水月の太刀”という技がどんなものか分からないが、他流でありながらラウラが最初に感じたのは羨ましいという羨望だった。

「……………教えてくれるのはもしかして《軽功》のことか？」

「《軽功》はラウラに向いてないってアネラスさん達に言われたんだろ？　なら俺が教えても仕方がないだろ？」

俺がラウラに教えられるのは《八葉》の技じゃなくてとある凶手が使っていた技だ」

「凶手……………暗殺者のことか……………」

リインの否定に少し気落ちしながらラウラはその言葉を吟味する。

少し前の自分なら“凶手の技”も“猟兵の技”も脊髄反射で邪道と拒絶していただろう。

「後は技として教えることじゃないが、知識として教えておくことが一つ」

「うむ……………」

いつの間にか去ろうとしていたラウラは振り返ってリインの言葉に聞き入っていた。

「俺にとっては《鬼の力》。ラウラにとっては《獣の力》……………」

この技は実は東方ではすでに技術として確立していて。それをした人——その凶手が使っていた技なんだ」

「何と!?　それは本当なのか?」

リインはかつて夢の中で戦った伝説の魔人と謳われた凶手のことを思い出しながら語る。

今代の彼女は会得することはできなかったが、半ば反則技を使ってその領域に踏み入っていたリインはみっちりとそれを使ってしごかれた。

自分だけの特権だと思っていた“相克”の力を使われ、密かな自信を粉微塵にされたことは苦い経験でもある。

「リイン？」

急に遠い目をしたリインにラウラは首を傾げる。

「っ——何でもない」

トラウマレベルの修行の記憶を振り払い、リインは続ける。

「技法の名前は《外気功》。東方人街の凶手が『魔人』と呼ばれる所以になった技の名前だ」

・*

「ふむ……これが今回の儀式の要になる宝珠とやらか」

オーレリアが案内されたのは闘技場の地下、大きな広間の中央に鎮座している巨大な宝珠を見上げて

「どうやら《金》の選定という話が真実味を帯びてきましたね」

オーレリアの呟きにルーファスは同意する。

昏い気配を纏う宝珠の中では黄金の『焰』が揺らめいている。

そこに感じる気配は導力の『焰』ではない神聖さと同時に禍々しさを感ずる。

「ええ、かつて『魔女』が選定の制御装置として作り出した宝珠……」

あの中『焰』を滾らすことができれば、『最後の試し』への道が拓かれます」

オーレリアとルーファスの疑問に答えるようにアルベリヒが説明する。

「なおかの『獵兵王』と『闘神』は三日三晩掛けて至った道でもありますが、これは余談ですね」

興味が引かれる話だがオーレリアは堪えて振り返る。

「公爵閣下、これを私達に見せる意味はいつたい何でしょう？」

アルベリヒを従えたクロワールにオーレリアは尋ねる。

「うむ、私は魔女の勧めによりカイエン家に伝わる《蒼》をクロウ・アームブラストに貸与しているわけだが……」

貴族派の命運をあのような狂犬に背負わせて良いと君たちは考え

「ているかね?」

「そうですね……見所のある青年ではありますが、底は見えていますね」

「いざとなれば彼は自分を優先する人間、目的のために他者を利用し貶める彼らは鉄砲玉に利用はできても重要な役割を任せるとはできないでしょう」

「うむ、宰相の暗殺に成功し、奴にその気があるのなら取り立てることも吝かではないが場合によっては《蒼》を取り上げることとも考えている……」

「これについては今論じる事ではないが、問題は《蒼》に代わる象徴が我らには必要だということだ」

何処の馬の骨とも知らない《蒼》の起動者とその仲間たちが貴族派の英雄になる事の内部の反発は簡単に予想できる。

その点ではルーファスとオーレリアの二人は問題なく領邦軍に受け入れられるだろう。

「公爵閣下は私達に《金》の起動者になれと仰るのですか?」

「少なくとも武勇においてそなた達が最も可能性は高いと私は考えている」

「過分な評価、痛み入ります」

クロワールの言葉にルーファスは頭を下げる。

「閣下、ここからは私が」

「うむ、任せたぞアルベリヒ」

背後に控えていたアルベリヒが前に出て説明をする。

「ご覧いただけただけの通り、儀式は順調に進んでいます……」

宝珠の“焰”はこの上の戦いに呼応して決勝戦に最高の猛りとなって燃え盛るでしょう」

「では優勝者が《金》の起動者になるということか?」

オーレリアは勿体付ける言い回しをするアルベリヒに対して単刀直入に尋ねる。

「いえ、申し訳ありませんが実は一つ問題があります」

「ふむ……問題とは?」

「このオルデイスは《蒼の騎神》の選定を行われた霊場であること……
そのため、ただ宝珠の条件を満たしたとしても、それだけではこの
地に《金》をこの地に呼び出すことはできません……」

道に關しても拓くかどうかはやってみないと分からないと言わせ
てもらいましょう」

「ではどうするん？」

前提を崩すアルベリヒの主張にオーレリアは聞き返す。

「少なくとも『門』が作れることは間違いありません。これは『紫の
騎神』で証明できています……」

ですので『降魔の笛』と魔獣を生み出す術を使って選定の番人を
現実界に受肉させ、顕現させる……」

それを打倒することができた者が《金の起動者》に選ばれる条件を
満たすことができるでしょう」

「ふむ、優勝賞品ではなく、その権利を自力で勝ち取れと言う事か……
なるほど実に好みだ」

「しかし『降魔の笛』……テロリストの一派がこちらに？ 彼らは
ルーレのザクソン鉄鉞山で作戦行動中では？」

「庇い立てもこれまでの積み重ねを考えると難しいだろう……」

ならばこちらも多少の被害を被っておけば言い訳もしやすいとい
うものだ」

事も無げにクロワールはルーファスの疑問に答える。

カイエン公がテロリストを支援している情報を基に目を光らせて
いる皇子とその取り巻きの追究を躲すための一手。

流石はかの《鉄血宰相》と正面から争っている政敵、抜け目のなさ
と先見の明、そして民を巻き込むことも見越しての言葉にルーファス
は感心する。

「流石は閣下、そこまで御考えでしたか」

「君達には期待しているよ……」

《金》は永遠を象徴する騎神。《灰》とは一線を越えた『格』を持つ
騎神なのだからね」

「ほう……シユバルツァーの《灰》を超える存在とは」

「ええ、実に興味深いですね」

もつとも、魔王と化した《緋》こそが最高だと信じて疑わないクロワールは内心でほくそ笑む。

「くくく……漲って来たな」

武術大会の闘争と延長戦に思いを馳せて笑みをもらすオーレリア。

「ははは……ではせいぜい公爵閣下の御期待に添えられるように頑張らせて頂きましょう」

愛想笑いを顔に張り付け、意気込みを語ってみせるルーファス。

「ああ、君達の働きを期待しているよ……ふふふ」

社交辞令を口にしてクロワールは笑顔で彼らを鼓舞する。

「実に良い想念ですね。これは明日の大会も盛り上がってくれるでしょう」

そしてそんな彼らをアルベリヒが見守る様に笑みを作るのだった。

110話 紺碧の海都IX

「ウオオオオオオ！」

気合いが十全に込められた少女の雄叫びと共に大剣が空を斬る。

第二回戦、第三試合。

《VII組》と《蛇》の戦い、その一端である二人の女剣士の戦いは一方的だった。

「せいっ！ やっ！ たあっ！」

二閃、三閃される大剣は《神速》で動くデュバリイを捉えることなく颯風だけを巻き起こす。

「そこっ！」

大剣を振り抜き隙だらけの胴体にデュバリイは剣を振るう。

峰打ちの一撃は確かにラウラの胴体を強打し――

「はあっ！」

デュバリイの一撃を防ぐこともできず直撃したはずのラウラは怯まず痛がりもせず大剣を薙ぎ払う。

「ちっ――」

逆に技後硬直を狙われたデュバリイはそれでも迫り来る大剣を冷静に見極め、紙一重で避けて距離を取る。

「……………今の手応え……………その様子……………」

デュバリイは冷静にここまで当てた斬撃の手応えと、まるでダメージを受けた様子がなく反撃に転じてくるラウラから解析を形にしていく。

「仲間たちのアーツによる補助ではなさそうですね……………」

おそらくは闘気法で自身の防御力を高めて、わたくしの剣を受けていますわね？！」

「むっ……………」

デュバリイの指摘にラウラは凶星を突かれたように顔をしかめる。

「東方武術で言う所の『硬気功』……………その極みの『金剛』という技が

あるとマスターから聞いたことがありますわ」

「流石に博識だな」

リインから教えてもらった技を言い当てたデユバリイにラウラは感嘆して頷く。

「そなたが言った通り、私が今使っている技は『硬気功』だ」

「はっ……何をしていたかと思えば地に堕ちましたわねアルゼイドの娘」

認められたラウラをデユバリイは嘲笑う。

「攻めのアルゼイドがよりによって防御を固めて戦うなど実に滑稽っ！ 傍流に堕ち、ついにはその理念も捨てたということですよ？」

「……………確かにリインがこの技を教えてくれると言ってくれた時は何故と思つた」

守護に重きを置くヴァンダール流と違ってアルゼイド流は敵を倒す、いわば攻めの流派。

それに加え、剣士としては邪道とも取れる防御法の『硬気功』はアルゼイド流の——ラウラの好みに反する。

が、実戦で使ってみてリインがこの技を推した理由は理解できた。

「だが見栄を張った所で今の私はそなたに触れることも、その剣を防ぐこともままならない……」

ならば防御を戦技に任せ、私はそなたを捉えることだけに集中すれば良い」

《神速》の名に違わず、ラウラが彼女の姿を捉えることは困難を極める。

攻撃に意識を集中してようやく目端に捉えることができる程度、文字通り防御に手と意識を回してはただ翻弄されるだけで戦いにならなかつただろう。

「そうしてようやくなのだ、そなたと戦える土俵に立てるのは……」

ならばその侮辱は甘んじて受けよう。その代わりこの試合は勝たせてもらおうっ！

「ふんっ！ 大言壮語も甚だしい……」

『金剛』に至ってない貴女の『硬気功』でわたくしの剣を完全に

防げてはいないでしょうに？」

「その通りだ」

デュバリイの指摘をラウラは潔く認める。

「だがそなたが《速さ》を誇る様に私も《力》にはそれなりの自信を持っている……

そなたが『硬気功』を抜くために何撃必要だ？ その間に私が一撃でも捉えることができれば十分勝機はある」

「……………はっ」

堂々と言い切るラウラをデュバリイは鼻で笑う。

「そこまで言うのなら良いでしょう……わたくしもシュバルツアールと戦うために用意していたこの技でその防御を抜いてやりましょう」

デュバリイは剣を縦に構え、闘気を高める。

本来はデュバリイのとある心情で使うことを毛嫌いしていた剣技。

「洗翼剣っ！」

「っ!？」

デュバリイの剣に宿った『洗翼』にラウラは目を見開く。

それはまさしくアルゼイド流の真髄である『洗翼』の刃。

「この技について貴女に説明する必要はないでしょう」

「む……」

何故、という疑問が当然頭に過る。

「この『洗翼』を持ってその無様な『硬気功』を破らせてもらいますわっ！」

嘘である。

無様と言いながらデュバリイは死ぬほどラウラのことを羨ましく思っている。

『硬気功』と『金剛』は彼女が敬愛するマスターも使っている技。

適正と体質からマスターがそれをデュバリイに教授してくれることとはなく、デュバリイの才能にあったのは『洗翼』だった。

故にデュバリイは改めて目の前の女を敵と認定する。

「ふんっ！ 父上に劣る程度の『洗翼』で勝った気にならないでもらおうか」

精一杯の強がりやラウラは返すが、嘘である。

デュバリイの「洗翼」の輝きは父に迫るものがあり、自分のそれよりも数段洗練されているのは一目で判る。

自分が「硬気功」という別の技術に頼らなければ戦いにすらならないのに、その相手が自分の分野で上を行っていた事実には死ぬほど悔しく歯噛みをせずにはいられない。

故にラウラは改めて目の前の女こそが自分の仇敵だと捉える。

「行きますわよっ!」

「来いっ!」

互いに負けたくない気持ちで胸に二人の女剣士が激突する。

戦いは傍目から見れば一方的なものだった。

しかし、それは決して勝敗を決するものではない。

圧倒的な速度で敵を翻弄し、一方的に攻め立てるデュバリイ。

対するラウラはどれだけ攻撃を受けても小動もせず、撃たれた攻撃に合わせて剛剣を振るう。

最初は大きく空振るだけの反撃も試合が進むにつれて、デュバリイに近付いて行く。

「ハアアアアアッ!」

「オオオオオオッ!」

怒涛の勢いで攻め立てるデュバリイに、徐々に《神速》に近付いていく剛剣。

どちらが先に相手の技を上回るか、意地のぶつかり合いとも取れる手に汗握る攻防に観客たちは沸き立った。

そして――

「待ってくれっ! すまなかった。この通りだっ!」

戦場のもう一方ではこの衆人環視の中、盛大な命乞いが行われていた。

「なっ!」

止めの一撃を放とうとしたユーシスは目の前の男の土下座に固まった。

彼の装備のアサルトライフルを前に差し出すように置き、無防備な

後頭部を晒すギルバートの姿にユーシスは困惑を隠しきれなかった。清々しく、あまりに堂々とした土下座。

それに加えて彼の全身から感じられる怯えた素振りと小物臭さ。

ユーシスはその立場から功名な家庭教師を始め、尊敬する兄から武術の手解きを受けて来たが、このような無様を晒してまでされる命乞いは初めてであり、降伏した相手に振るう剣をユーシスは教わっていない。

「審判、これは降参と判断すれば良いのか？」

ユーシスは振り返り、審判に判断を仰ぐ。

「ふむ？ まだ彼の口から『降参する』という言葉は出ていないが？」

「何……？」

審判の判定にユーシスは顔をしかめる。その背後でその男は目を光らせた。

「ひっかかったなっ！」

「っ——しま——」

土下座から身を起こしたギルバートはユーシスが振り返るより早く、目の前に置いたアサルトライフルに手を伸ばすことなくジャケツトのポーチから殺傷性を抑えたグレネードを取り出した。

ピンを抜いて投げる。

その一連の行動は澁みなく、ユーシスが振り返る一秒に満たない刹那。

いったいどれだけその行動を繰り返したのか、土下座から始まる不意打ちはまさに達人と呼ぶに相応しい早業。それは誰にも真似できない程に洗礼されていた。

「喰らえっ！」

投げつけられた爆弾にユーシスができることはなく、無防備な彼の目の前でそれは爆発を——

「ユーシス危ないっ！」

致命的な場面に割って入ったのは小さな体躯とその彼女が付き従えた白い傀儡。

ミリアムはユーシスを抱きかかえるように庇い、アガートラムはバリアを展開する。

「へっ……？」

投げつけた爆弾はバリアに弾かれ、頭を抱えて伏せたギルバートの前に落ちて爆ぜる。

「みぎやあああっ！」

そして炸裂した衝撃にギルバートは吹き飛ばされるのだった。

「へへーん！ 油断大敵だよユーシス」

「——っ……助かったミリアム」

得意気に笑いかけるミリアムにユーシスは胸の奥から沸き立つ苛立ちを呑み込み、目を逸らして拳を固く握りしめながら礼を口にするのだった。

一方に戻り——

「——っ——ここだっ！」

それまで躲すことを一切放棄していたラウラはデユバリーの一撃を見切り、身体を沈ませてその一閃を回避することに成功する。

「なっ!？」

これまで回避の動作を一切捨てていたラウラの行動にデユバリーは大きく剣を空振りしてしまう。

その作り出した隙を狙い、ラウラは大剣を横薙ぎにして《神速》を捉える。

しかしその一撃は刹那で間に合わせた盾によって受け止められる。

「くっ——ここで押し切るっ！」

千載一遇のチャンス。ここが決め所だと力を込め——

「ぐっ——舐めるなっ！」

盾ごと押し潰そうとする圧力に対抗するようにデユバリーは咆哮する。

彼女の技量なら片腕を犠牲にしてもその一撃を躲すことはできた。

しかし、退くことを良しとしなかったデユバリーが選んだのは前進。

大剣が盾を構えた左腕を押し潰し、身体ごと薙ぎ払おうと圧力が増す。

対するデュバリイは空振った剣を返す刃に《洗翼》を乗せ、もう一度振り下ろす。

その速度はまさに《神速》。

ラウラの一撃に圧倒的に遅れて後出した一撃にも関わらず、互いの剣がそれぞれの胴を薙ぎ払ったのは全くの同時。

アルゼイドの剛剣が《神速》を捉え、《洗翼》が《硬気功》を貫く。

「がはっ！」

「ぐふっ！」

互いに力の乗った一撃を受け、二人はぶつかり合い、弾かれるように吹き飛ばされて地面に転がった。

観客たちはその光景に静まり返り、立ち上がる気配のない両者に審判が《VII組》の勝利を宣言するのだった。

・*

第三試合の片付けも終わり、審判が観客に向けて声高らかに次の試合のカードを読み上げる。

「それではこれより第二回戦最終試合、ロランス・チームとクロイツェン州チームの試合を始めさせていただきます」

それは誰かの思惑が絡んだ組み合わせだったのか。それとも女神の巡り合わせなのか、悪魔の計らいなのか。

どんな理由があったとしても決勝戦を待たずに彼らはぶつかり合う事となった。

111話 紺碧の海都X

「みんな俺の後ろにつ！」

試合開始の合図と同時に闘技場を埋め尽くした熱気にリインは仲間たちに叫ぶ。

「え——？」

「はいはい」

エマが困惑して首を傾げるが、イオに促されて言われた通りリインの背後に避難する。

「そら——まずは景気づけだっ！」

そう叫んでマクバーンが放ったのは人を容易に呑み込み焼き尽くす巨大な火球。

骨まで焼き尽くす劫炎の焰にリインは“八耀”を抜いて捧げるように横に構える。

光り輝く太刀を盾にして迫る火球を受け止め——

「——避けるよっ！」

忠告を一つ入れてリインは劫炎の焰を宿した太刀を唐竹割りに振り下ろす。

焰の剣閃が闘技場を二分にするように一直線の斬痕を刻み付ける。

「いやいやいや……」

「すげえとは思っていたけど、あの焰をそのまま返すのかよ」

挨拶代わりのお返しと言わんばかりの一撃を回避し、ナーディアとスウインは絶句する。

「鏡火水月の太刀、話には聞いていたが君の必殺技まで返すとは恐れ入る」

ルーファスもまた手加減された焰の剣閃の威力に冷や汗を禁じ得ない。

「おいおい勘違いしないでくれねえか。あれは“ジリオンハザード

”じゃねえ。今のは“ファイアボルト”だ」

「すーちゃん、すーちゃん。なーちゃんの耳がおかしくなったのかな？ あり得ないことが聞こえてきたんだけどー」

「奇遇だな。俺も信じられない言葉を聞いた気がする」

同じ導力魔法をナーディアもスウインも使ったことはある。

確かに使用者の精神力次第で威力が変わるのがアーツだが低位アーツが高位アーツの規模のようになるのはどんな術者であっても見たことはない。

「俺は剣術もそうだったが、焰に関しても勘で使っているもんが多くてな……」

試しにこの戦術オーブメントの術式でアーツって言うのを使ってみたら見ての通りだ」

「ファイアボルト」を撃ったつもりで「ジリオンハザード」級の火球が出て来たのはマクバーンにとっても予想外であり、試し打ちした時は自分でも驚きあきれた物だ。

「では君の必殺技は……？」

「まだ試行錯誤中だな。安心しろ後ろからお前達を焼くヘマはしねえよ」

「魔人化」する気もねえしな。

そう付け加えられた言葉にチームメイトである三人は改めてマクバーンの力を実感する。

敵となれば恐ろしい存在だが味方であるならば頼もしい。

しかし、予めリイン達と交わっていた協定を考えると笑えない。

「ククク……レーヴェエの阿呆は当然として、もう一人のチビも全然動じてねえな。これは退屈しないで済みそうだ」

先程の「焰」の反応にするロランスチームの振る舞いを観察し、マクバーンは嬉しそうに頬を釣り上げる。

「あれくなーちゃんいつの間にか神話の世界に入ったんだらう」

「改めてとんでもない人を暗殺しろって言われていたんだな俺達」

リインは当然として、他の二人もマクバーンの「ファイアボルト」に感心こそしても怖気づく様子はない。

「さて、いつまでも尻込みしていいでそろそろ始めようか。ナー

ディア君、どの作戦で行くかね？」

「んー、付け入る隙があるのはⅦ組のあの女の人だね……」

あの人はさっきの「焰」になーちゃんと同じように驚いていたし、まだ気持ちが立て直せてないからできるだけ早く倒して数の利を――」

言葉の途中でロランスチームの方で動きがある。

イオと名乗った少女がロランス達の輪から前に踏み出し、こちらに歩いて来る。

彼女の身の丈を超える二つの曲刀を持った少女の戦闘スタイルはどういったものなのか。

第一回戦ではリインが無双してしまったため、情報収集ができなかったこともありナーディアは警戒心を強め――

「それじゃあ行くよっ！」

闘技場の中央、大きく振り被った曲刀をイオは地面に叩きつける。

それを中心に魔法陣が枝分かれするように広がる。

「この術式――エンシエントグリフツ!? 下から来るよ!」

大した駆動もなかったが広がった魔法陣から高位アーツと判断してナーディアは警告を飛ばす。

巨大な石柱を生み出し敵に叩きつけるアーツの起点は自分達の足元。

次の瞬間、石柱が地面から隆起する衝撃に四人は宙に跳ね飛ばされた。

「くっ――これ程の規模のアーツを一瞬で駆動するとは恐れ入る」

ルーファスは思わず言葉を漏らす、そのアーツはそこで終わりはなかった。

地面からせり出した石柱に、いくつもの魔法陣が浮かび上がると先程と同様に新たな石柱が隆起して彼らを襲う。

「しゃらくせいっ!」

襲い掛かる石柱をマクバーンが焰で薙ぎ払う。

しかし燃やされた石柱は崩れても、新たに増殖した石柱が彼らを呑み込んだ。

普段競馬場として使われていた広大な空間に突如として現れた石柱群の山。

「……………へえ……………」

石に呑み込まれた時はまとめて周囲を吹き飛ばすかと考え、チームメイトのことを考えて自重したマクバーンは石の中から吐き出されたその空間に笑みを作る。

観客席よりも少し高い位置の石柱群の頂上。

広さは駆け回るには十分あり、下に向かって撃たない限り流れ弾の心配をする必要がないのは彼にとつてありがたい配慮だった。

「で、お前さんが俺の相手か？」

いつの間にかそこにいた小さな少女に向かってマクバーンは尋ねる。

派手な見た目に反してほとんど痛痒を感じさせない脆い石柱攻撃の意図は分断。

石柱群の山から下を見下ろせば、横に突き出した石柱が重なる不安定な足場の中腹にはスウィンとナーディアが《剣帝》と対峙し、山下ではルーファスとリインが対峙している。

「意外だな。俺とタイマンをするならシユバルツアーかレーヴェのどちらかだと思っていたが」

チームの分断、各個撃破までは理解できる。

だが自分の力を知っているあの二人のどちらでもないことは意外だった。

もつともあの二人が送り出していること、足元の石柱の山を作り出したアーツのこと、それらから判断しても見た目通りの存在ではないことが目を凝らすまでもなく分かっている。

「あの二人はそのつもりだったけど、あたしがじゃんけんに割り込んで勝ったからね」

「おいおい、じゃんけんって…………マジかよ」

あの二人がじゃんけんをしている様と、そんな雑に対戦相手を決められたことにマクバーンは思わず喉を鳴らす。

「アタシの実力は今見てもらった通り、まあリインやロランスには劣

るけど不服かな？」

「いや……別に構わねよ」

それなりにできるだろうが「アツク」なるには足りないだろうとイオを品定めしながら彼女の申し出をマクバーンは受ける。

そもそもこの武術大会は「アツク」なるためではなく、「愉しむ」ために参加している。

もしも彼女がつまらなければそれこそ、早々に脱落させて改めて下の二人と遊べば良いだけの事。

「まつ……いつまでも喋ってないでおっぱじめるとしようぜっ！」

「いいね、ドーンと言ってみようっ！」

軽口を交わし合い、マクバーンは黒い剣を空間から抜き、イオは二つの曲刀を構える。

「執行者No. 1 《劫炎》のマクバーン」

「二代目『大地の聖獣』イオ・イクルシア」

その名乗りにマクバーンは虚を突かれるが、すぐに口元に笑みを作り——そして二人は激突した。

・*

「《剣帝》……」

「久しぶりだなスリー」

乱雑に詰まれた石柱の山の中腹でスウィンはナーディアと共にその男と対峙していた。

「すーちゃんの知り合い？」

「ああ……ずっと前に………エースと組んでいた時の最後の任務でターゲットが競合した相手だ」

強く緊張するスウィンは躊躇いながらもナーディアの疑問に答える。

「知り合いという程ではない。道ですれ違っただけのようなものだ……」

もつともお前達が「結社」に来る可能性もあつたがな」

「え……？」

「それって？」

《劍帝》の言葉に二人は疑問符を浮かべる。

“組織”と“結社”の繋がりはない。

故に脈絡のない《劍帝》の言葉を理解できないでいると、彼はそんな二人の様子に苦笑する。

「これはただの気まぐれだ」

そう言つて《劍帝》は背負っていた巨大な剣を構える。

それは彼が使っている“ゲルンバイター”ではなく、錆だらけのバスターソード。

「なっ——」

それを目にした瞬間、スウインは絶句する。

「何で……何であんたがその剣を……？」

「あの日、“エース”は“組織”の情報を手土産に“結社”に下るはずだった。俺は奴の横でその話を聞いていただけに過ぎない」

「っ——まさか……お兄ちゃんは——」

突然語られた兄の存在にナーディアもまたスウインと同じように言葉を失う。

「残念だが、奴が生きていたと言う事はない……」

俺がしたことはお前達が去つて行つた後、奴が事切れる瞬間に立ち会つて最後の言葉を聞いたただけだ。そしてこの剣は奴の墓標にしておいたものだ」

「墓標……お墓……」

その言葉をナーディアは呟く。

“組織”の実情を知つてから期待をしていなかったし、自分の末路もそれとは無縁だと思つていただけに兄の墓の存在に動揺する。

「すーちゃん……」

「……たぶん嘘じゃない。確かに俺はエースを殺したけど、あの時は無我夢中だったし、すぐにエンペラーが来たから……」

吐き気を呑み込み、スウインはその時のことを思い出す。

点撃爆発でエースの半身を吹き飛ばしたことは流石に刺激が強過

ぎると口を噤む。

死体の確認は、あの損壊で生きていることはないと自分もエンペラーもしなかった。

「……………あなたがお兄ちゃんの最後を看取った人だって言うのは分かった……………」

でも、貴方がこれ見よがしにお兄ちゃんの形見を持って来てなーちゃん達の前に立ち塞がる意味が分からないんだけど？」

「言っただろ気まぐれだと……………俺自身もエースのことなど昨日まで忘れていたからな……………」

それに最後の言葉もはやお前達には意味もないだろう」

思わせぶりの言葉を使う《剣帝》の真意を探ろうとナーディアは思考を回転させるが、早々に切り上げる。

「すーちゃん」

「ナーディア……………」

不安に振れているスウインの声にナーディアは苦笑する。

「状況は良く分からないけど、お兄ちゃんの形見を取り返すのを手伝って。話はこの試合が終わった後」

「っ——ああ。背中には任せた」

「ふふん、初めての共同作業だねすーちゃん♪」

「——っってお前なあ」

気の抜ける言葉にスウインは脱力しつつも気持ちを切り替える。

そんなある意味で裏社会の人間らしくないやり取りをする二人に

《剣帝》は目を細める。

《結社》と大差ない《組織》という煉獄の中で奇蹟的に維持している人間性。

その二人の姿を見ていると《剣帝》はもしもを考えずにはいられない。

弟分の本質を見抜けなかったこと、子を捨てた親に勝手に見切りを付けて真実から目を逸らしたこと。

クオーツの盤面しか見ていなかったのは自分だったのだと、全てが終わって痛感させられた。

「我ながら女々しいものだ」

こんな回りくどいことをして理由を作らなければ遺言も、『組織』に関する情報も伝えられない不器用な自分に《剣帝》は自嘲する。

それらの感情を呑み込み、《剣帝》は錆びた大剣を突き付ける。

「来い——《3と9》！」

・*

「これはしてやられたかな」

一瞬で積み上げられた石柱の山を見上げてルーファスは肩を竦める。

ルーファスの位置からでは上の様子は分からないが、戦闘音に客席の戸惑いから一転した歓声にどの戦場も盛り上がっているのだと判断する。

「それにしても私の相手が君とは……この前の学院ではユース達の相手をしていて時間がなかったからユミルの時以来か」

「ええ、その節はお世話になりました」

生真面目に頭を下げるリインにルーファスは苦笑し、開始位置から動いていないエマを一瞥する。

「彼女は？」

「エマにはやってもらうことがあります」

ルーファスの問いにリインはそれだけ答える。

「それにしても派手にやってくれる。後で整地するスタッフのことを考えて欲しいものだね」

「こうでもしないと闘技場が火の海になりかねなかったですから大目に見てください」

会話で探り合い、その間にもルーファスは後ろ手にアーツの駆動を試みるが、見透かされた眼差しに中断する。

「ふふ……」

「何がおかしいんですか？」

「失礼……こうやって勝つために試行錯誤するというのは思いの外

白くてね」

地味な駆け引きさえも面白いとルーファスは笑う。

「ところでリイン君、君はマクバーンと約束を交わしていたね……」

互いに《異能》は使わない。ロランス君も含めて」

「ええ、ここが無人の荒野ならともかく俺達の本気でぶつかり合ったら余波だけで観客が危ないですから」

「結構……ならば『私』は出し惜しみなく使わせてもらおうとしよう。

《ARCUS》駆動——」

これ見よがしにルーファスは戦術オーブメントを駆動してマスタークオーツに刻まれた術式を立ち上げる。

「『焰神招来』」

戦術オーブメントから『黒い焰』が溢れてルーファスの身体に纏わりつく。

「っ——思っていたよりもきついが……なるほどこれが君のしている

『世界』ということか」

「無茶をしますね」

術式として見れば火属性の補助アーツの『フォルテ』だろう。

『黒焰の加護』は従来のものを超える恩恵をルーファスに与えている反面、彼自身を焼いているようにも見える。

「私は自分の身の程を弁えているつもりだ……」

「こうでもしないと君との実力差を埋められない。だから彼の力を借りたまでだ」

「それでも——」

「これは私にとっての『試し』だよ。リイン君……」

この『力』に飲まれるか、それとも飲み干して『理』を掴むことができるのか。どうか付き合ってくれたまえ」

普段と変わらないルーファスだが、そこにオーレリアのような武人の影を感じてリインはため息を吐く。

「意外と熱い人だったんですね。ルーファスさん」

「はは、私も自分の意外な発見に日々驚いているよ」

『黒焰』に焼かれながらも優雅さを崩さないルーファスにリイン

は流石と褒めるべきか呆れるべきなのか悩む。

「さて、私達も闘いを始めよう……彼らばかり目立たせると父上から叱責を受けてしまうかもしれないからね」

「分かりました……」

リインは無駄だと割り切って太刀を抜く。

「ルーファスさんには悪いですが、その力は人の身に余るものです。なので出来るだけ早く終わらせませす」

「ならば私はそれに諍ってみせるとしよう」

112話 紺碧の海都XI

黒い焔で固められた剣が五つ、宙を舞う。

ルーファスが振る剣に合わせ縦横にリインを狙って虚空から振られる剣群。

その剣筋や力は目の前の本体には劣るものの、間違いなくルーファスの剣筋であり、まるで複数の彼と戦っているのではないかという錯覚を思わせる。

「流石だねリイン君。アルバレア家の秘剣術を初見でこうも簡単に捌くとは」

「こんな凄い技を持っていたなんて聞いていませんよ」

ユミルで何度か手合わせをした時にはなかったルーファスの技にリインは戦慄すると共に言葉を返す。

「はは、君にそう言ってもらえるとは光栄だね……」

私も聖女殿に惨敗をしてから何もしていなかったわけじゃないよっ」

左右から挟むように飛来する黒剣をリインが弾く、それに合わせてルーファスは正面から踏み込み連続突きを放つ。

一手早く、リインは後ろに跳んで、その切先は彼の眼前で止まる。

「ふっ——」

剣群を操作し、自分の突きに追従するように後方から撃ち出すように飛ばす。

リインが地面に着地するよりも早く二つの剣は彼を貫く——はずが、剣はリインの影を突き抜けた。

「二の型——」

代わりに声は背後から。

「——《裏・疾風》」

背後からの横薙ぎの一撃をルーファスは自分の剣と二つの剣群を交差させて受け止める。

「流石だねリイン君」

二度目の賞賛を繰り返し、ルーファスは冷や汗をかきながらも余裕

の笑みを取り繕う。

「しかしこれで君の剣腕は見切らせて——」

おおよそ三本分の剣を使えばリインの剣を止められる。

そう勝ち誇ろうとしたルーファスだったがリインは剣を防がれたままの体勢から足を組み替え——

「一の型——《螺旋撃・零》」

「っ——」

受けて止めたはずの一撃。

そこから振り被ることなく、刃を合わせたままリインは足の位置を踏み変える。

それだけで受け止めていたはずの太刀に力が生まれ、ルーファスは折り重ねた剣ごと纏めて薙ぎ払われる。

「はは……それが東方武術の発勁と呼ばれるものの真髓か」

大きく空中を舞うことになりながらも危なげなく足から着地したルーファスはリインの剣の秘密を冷静に分析する。

残像を残し目にも止まらない速度で動く《疾風》。

身体の連動を最大効率で運用し、剣を振るうことなく大の大人を吹き飛ばす《螺旋》。

どちらもユミルでの合宿の際に触り程度に教えてもらったが実戦での手合わせでは別物と思えるほどに鋭さを増している。

「つくづくユーシスが羨ましく感じるよ」

「ユーシスが羨ましい？」

肩を竦めて漏らした愚痴にリインは首を傾げる。

「自慢というわけではないが、私がトールズ士官学院の生徒だった頃はそれはもうつまらないものでね」

ルーファスは当時のことを思い出して苦笑を浮かべる。

アルバレア家の威光にすり寄ってくる貴族たち。

アルバレア家の家名を畏れて目を合わせようとしめない平民。

競い合えるような相手はおらず、座学も実技も主席として入学して卒業してしまった学院生活。

家臣やユーシスは流石だと賞賛してくれたが、ルーファスにとって

はひどく退屈な灰色の青春だった。

「その点今年は君がいる。ユースはさぞかし充実な学院生活を送れているだろう」

「はは、そうだと良いですが」

「そういう意味では去年の学院も中々面白いことをしていたね」

「トワ会長達ですか？」

「ああ、前代未聞の平民生徒の生徒会長。前生徒会長や反対する貴族生徒たち、アンゼリカ君を生徒会長へと支持する女生徒たち……」

熾烈な選挙争いがまさかあんな展開になるとは」

「あんな？」

気になる話の内容にリインは思わず聞き返す。

トールズ士官学院の理念は平等。

しかし、現実問題としてそれがうまく行っているわけではない。

現に入学式の時の四月の段階では貴族生徒の新生入生たちは平民が生徒会長だということに良い顔はしなかった。

「ああ、それはね——いやこの話は今度にしようか！」

言って、会話による時間稼ぎを完了させたルーファスは左手を号令として振り下ろす。

「ブルドガングレインツ！」

五つの焰剣がリインを取り囲むように上空から飛来して地面に突き立つ。

「アグリオス——」

五つの焰剣を起点に球状の結界陣でリインを包み込み、ルーファスはおもむろに自分の剣を傍らに突き立てる。

代わりに己の闘気で聖剣を作り出す。

「アイオロス——」

作り出した聖剣を結界陣に投げ放つ。

即興でアルバレア家の三つの奥義を組み合わせた必殺、名付けるとするならば——

「トリニティキャリバーツ！」

聖剣が結界陣を貫く。それを合図に五つの焰剣が一斉に同時に爆

発した。

・*

——これはダメだな……

イオを前にマクバーンの思考が乱れる。

それは決してイオが物足りないというわけではない。

最初から全力を出さないと取り決めていた大会の試合、自分の本領を制限して《剣》の二つ名を冠している二人と戦えば逆に不完全燃焼で負けると思えばイオはこの上ない適任でもある。

踊るように舞う剣技は物珍しいが、小さな体躯に反した膂力は侮れない。

強いて不満を上げるならまだ本調子ではなさそうという点とあえて属性が合っていない水の魔剣を使っている点だが、剣の腕がまだ未熟なマクバーンにとっては丁度いい相手でもあった。

何より自分の焰で焼かれないという点が良い。

一割の焰から徐々に釣り上げて行った焰は既に半分の出力に至っている。

だが、それでも焰に臆することもなければ彼女が使う曲刀も揺るがず、焼け落ちる気配もない。

まだ上があると思えば後の愉しみとして呑み込める。

——幻焰計画、思っていた以上に楽しい祭りになりそうだな……

イオと剣を交えながらそんなことをマクバーンは考える。

「しかし、これはどうしたもんかな？」

「お？　もしかして降参？」

マクバーンの呟きにイオが答える。

「いや、そうじゃなくてだな……」

頭を掻きマクバーンは胸を駆り立てる衝動を持って余しながら答える。

「この戦術リンクって奴はどうやら思考の共有だけじゃなく、表層の意識も感じさせるみたいだな」

直後、石柱群が下からの爆発で大きく揺れた。

「おお!？」

「あん？」

振り返った二人の目に入ったのは深紅の闘気を纏ったリインが打ち上げられ、そして落ちていく瞬間だった。

「……派手にやってるねー」

「は、良いのかよ。そんな感想で？」

「まあ見た感じ、五体満足だったし大丈夫じゃないかな？」

それよりそっちのお兄さんの方がむしろ危ないんじゃない？」

「それこそ気にする必要はねえだろ。暴走することも織り込み済みで使うつて言っていたからな」

「それにしては君はさつきから随分と下の戦いを気にしているみたいだけど？」

イオの質問にマクバーンはため息を吐く。

「さつき言ったろ。戦術リンクでルーファスの阿呆と俺はいま繋がっているわけだ……」

つまり景気よく俺の“焔”をぶっ放している快感とか解放感とか俺にまで伝わってくるわけだ」

「ふむ……つまり？」

聞き返すイオにマクバーンは沈黙を返す。

今はまだ自重できるがこれ以上、彼の想念に触れていては我慢が続くか自信がないマクバーンだった。

・*

「解析完了……したけど……」

読み取ったロランスのデータにナーディアは止まる。

「どうした……ナーディア？」

息も絶え絶えにその時を待っていたスウインは振り返らずに言い淀むナーディアに答えを求める。

「えつとね……これ無理」

「……………はっ？」

これまで聞いたことがない相棒の答えにスウインは思わず振り返る。

「力、速度、技……視野の広さに自分の弱点の熟知……」

地力の差は天と地ほど、残念だけどなーちゃんたちの勝機は今、消えた」

「おいおい……」

ドヤ顔からの敗北宣言にスウインは剣を構えながら肩を落とすが、その気持ちは誰よりも共感できていた。

ナーディアが解析するための時間稼ぎとして幾度も剣を交えていたからこそ分かる絶対的な実力差。

それこそあのエンペラーよりもずっと強いのではないかと思えるほどに。

「どうした、もう諦めたのか？」

「っ——」

「むっ——」

ロランスの言葉に二人は勝機を見出そうと考える。

「この程度の不可能を覆せないのなら、潔く『組織』に戻ることを勧めるぞ」

「何っ!？」

「あんな煉獄よりひどい場所に戻れだなんて、お兄さんひどいこと言うね」

「お前達がこれから歩むことになる表の世界、それが必ずしも安息なものだと誰が保証する？」

睨んで来る二人にロランスは容赦なく現実を突きつける。

「『組織』は『結社』と違い裏切り者を許さないのだろうか？」

その『組織』はお前達二人を始末できない程に脆弱な構成員しかないのか？」

「それは……」

「ましてや敵を傷付けることにさえ怯えている剣で逃亡生活を生き抜けると思っっているのなら、甘い」

「っ——」

内心を言い当てられてスウインは息を呑む。

「その程度の腕で『不殺』を貫けるとでも思っているのか？」

「それは……」

「それとも危機に陥るたびにシユバルツァーに助けてもらえば良いとでも思っているのか？」

ロランスの指摘にスウインとナーディアは黙り込む。

それは心のどこかで思っていた。

命を助けられ、温かい食事に仕事の斡旋。更には生き抜くための技まで教えてもらった。

人生を振り返るまでもない、初めての施しに心地よさを感じていたのは紛れもない事実だった。

『人殺し』はおろか、武器も捨てられるんじゃないかと思える淡い希望まで夢に見てしまった。

そんな、リインに負担しか掛けない『願望』——『欺瞞』をロランスは暴き立てる。

「ただ逃げ惑う事しかできないというのなら、ここで生き残ったとしてもお前達に未来はない」

「だからって……」

「はつきりと言うんだね」

スウインとナーディアはバツを悪くして俯く。

リインは自分達の事情を考えてエンペラーとの決着を譲ってくれたが、本音を言えばあの場でエンペラーを殺してくれて二人は一向に構わなかった。

彼にとつては脅威にならない相手でも、自分達はまだ彼の『重力』を攻略するための糸口さえも見つけられてない。

「エースも馬鹿なことをしたものだ……」

こんな足手纏いに拘らなければ無駄死にをさらすこともなかっただろうに」

「何だと……？」

「エースの死は無駄だったと言ったんだ」

「ぐっ——取り消せっ！」

「そうだよ！ お兄ちゃんのこと何も知らない貴方にとやかく言わないでっ！」

「いいや、エースは敗北者だ！」

それにお前達とて、あいつの真意を理解していたわけではないだろ？ 特にスリーの方は少し前まで恨んでいたんだろ？」

「それは……」

ロランスの指摘にスウインは凶星を突かれて黙り込む。

「もういい。すーちゃん、この人は『殺そう』」

「待てナーディア！ 落ち着け」

冷たい光を目に宿したナーディアをスウインは肩を掴んで止める。

自分達の業が深いものと自覚していたが、こいつも簡単にスイッチが切り替わってしまうことをスウインは痛感する。

「大丈夫だよすーちゃん、試合には勝てなくても殺す方法ならあるし、今なら事故として——」

その瞬間、足場になっていた石柱が揺れる程の爆発が起きた。

「何だっ!？」

立ち昇る黒煙の大きさにスウインは絶句する。

立ち位置的にはルーファスの攻撃によるものようだが、彼の相手をしていたリインの姿は見当たらない。

「リインさんは?」

「まさかやっちゃったの!？」

姿が見えないリインを二人は慌てて探し、ロランスは逆に上を見上げた。

「派手にやられたな」

直後、スウイン達とロランスの間にリインは着地する。

「死ぬかと思った……」

深紅の鬨気を纏ったリインは大きく息を吐いて安堵する。

「いやいや……」

「むしろ何で死んでないんだ?」

爆発の規模を考えれば肉片一つ残さなくてもおかしくない程の威力。

現に深紅の制服は見るも無残なものに変わり果てている。もつともリインの目に見えた負傷は頭から流れている血くらいなのだが。

しかし、エンペラーを圧倒したリインのそんな姿にスウィンとナーディアはリインが人間だったのかと確認する。

「手を貸すか?」

「いえ、大丈夫です」

ロランスの申し出をリインは短い言葉で拒否して、ルーファスを上から見下ろす。

ルーファスは爆心地にいないリインを探し、顔を上げて石柱の上にいるリインを見つける。

が、追撃を仕掛ける様子はなく、息を整えることに集中している。

「……レーヴェさん」

「何だ?」

「俺は本当に強くなっているんでしょうか?」

「何をいまさら?」

「《鬼の力》は使わない。思えば随分と傲慢な提案したんだと思って……

今まで俺は《鬼の力》に頼って死地を切り抜けてきたのに、見下していたわけじゃないのに相手が「結社」じゃないからって慢心していたのかもしれない」

「だったらどうする? 別にペナルティを決めた約束でもない。律儀に守る理由はないぞ」

ロランスの問いにリインは沈黙を返す。

そして短い逡巡の後に口を開く。

「……………いえ、ルーファスさんは俺がこのまま倒します。ただ後のことは頼みます」

そう宣言してリインはおもむろに振り返る。

「あと二人をあまりいじめないように」

その言葉にロランスは嘆息だけで応える。

「二人とも、この人は口は悪いし不器用だけど。決して悪い人じゃないから」

「お前はこいつらに甘過ぎる」

勝手なことを言うリインにロランスは言い返す。

「そんなことないと思うけど……まあとにかく二人も頑張れ」

敵なのに声援を送っている時点で甘いと思うスウィンとナーディアだったが、それを指摘する前にリインは足場から飛び降りる。

「……………リインお兄ちゃん……………」

「マジかよ……………って言うか審判は何してんだよ試合で使って良い様な技じゃねえだろう?」

尋常ではなくなっているルーファスに迷わず向かっていくリインにナーディアとスウィンは正気を疑う。

「それで、お前達は どうする?」

リイン・シユバルツァーは臆さず向かって行ったぞ、と言わんばかりにロランスは二人に問いかけた。

・*

「お待たせしましたルーファスさん」

「いや、こちらが良い休憩ができたよ」

石柱群の天辺まで吹き飛ばされたリインをルーファスは笑みを持って迎える。

「まさかアルバレア家の三つの秘奥義を駆使してもその程度のダメーシしか与えられないとは、恐れ入るよ」

「いえ、死ぬかと思ったんですけど……」

「というか明らかに反則を取られる過剰攻撃だと思いませんか?」
リインは審判に視線を送る。

が、しかし紳士の審判は何事もなかったかのように続行の意志を手に示す。

「ちっ……………」

使えない審判にリインは思わず舌打ちをする。

「反則と言うならその紅い闘気、《鬼の力》を使った君もルール違反で

はないのかな？」

「《異能》を使わないと言うのは俺達三人の中での話です。それにこれは《鬼の力》ではありません」

「それはそれは……ならば意地でも君の《鬼の力》を使わせたくなくなってきたね」

そう言つてルーファスは剣を掲げる。

「アルバレアの三秘剣では君に届かないと言うのならシンプルに行こう。ブルドガングレインツ！」

ルーファスは最初の戦技を使う、ただし数は五本ではない。数にすれば百に届くかという剣群。

「さあ、これを前にいつまで意地を張り続けられるかな？」

羅刹を彷彿とさせる獰猛な笑みにリインは肩を竦める。

「《鬼の力》は使いません……ですが、俺の力の全力で御相手します」

リインは太刀を正眼に構え、意識を集中する。

身体に纏っていた深紅の闘気が激しく燃え立つ。

「オオオオオオオオオオオオオツ！」

腹の底から雄叫びを絞り出し、深紅の闘気はその色彩を漆黒に染めていく。

「っ——」

ルーファスは高まる威圧感に息を呑む。

聖女の「神騎合一」に迫るのではないかと思えるほどに力強さに満ちた闘気。

これでもまだリインが力を出し惜しみしている事実にはルーファスは自分の感覚を思わず疑う。

「はあ……」

漆黒の闘気をその身に纏い、リインは呼吸を落ち着かせる。

「リイン君……それは……？」

「『ウォークライ』……猟兵が使う闘気法です」

「猟兵の技まで使うか……」

ルーファスは改めてリインの引き出しの深さに感嘆する。しかし

「まだこれで終わりじゃありません」

「何……う？」

「ラウラ、よく見ておくんだ」

その眩きは目の前のルーファスではなく、控室でこれを見ている少女に向けたもの。

「外気功——」

大気に満ちる「外気」をリインは取り込み、極限まで高めた「内気」と体の中で混ぜ合わせ、高め合わせる。

これが《銀》が一代で「魔人」と呼ばれるに至らせた技。

「神気——」

その瞬間、どこからともなく「蒼き歌」とそれに遅れて「魔の笛」の音が闘技場全体に響き渡った。

113話 紺碧の海都Ⅱ

蒼と黒の気がぶつかり合って、蒼が押し負ける。

それを契機に闘技場に巨大な魔法陣が展開され、導力で造られた石柱群がその魔力を浴びて崩壊していく。

「おおっ!」

「ちっ——」

その頂上で戦っていたマクバーンとイオは驚きながらもそこから跳び上がり、巻き込まれるのを回避する。

「っ——」

「すーちゃんっ!」

「ぼさつとするな! さつさと逃げろ」

頭上から降って来たブロックが目の前で一刀両断されて呆然とするスウインとナーディアにロランスの喝が飛ぶ。

石柱群を押し退け、地面の魔法陣からまず現れたのは巨大な腕。

霞のような輪郭の腕は魔法陣の外に出ると、鋼の腕へと置換される。

「——ああ、そう言えばこれがあったか……しかし無粋な」

前もってそういうこともあると聞かされていたルーファスだったが、良い所で水を差されて不快そうに顔を歪める。

「何かよく分からないけど、試合どころじゃないよね?」

「ああ、儀式〴〵を始めたようだな」

それを落下しながら見ていたイオとマクバーンが言葉を交わす。

「お前達は下がっている」

ロランスはスウインとナーディアを逃がし、錆びた大剣から黄金の剣に武器を持ち帰る。

「邪魔をするな」

静かに呟きルーファスは現れ出でようとする〴〵に剣群の切先を向け——唐突に彼の胸が爆ぜた。

「ルーファスさん!」

仰け反って倒れていくルーファスにリインは慌てて駆け寄って抱

き留める。

苦し気に呻くルーファスに、リインは爆発が起きた胸元を調べる。そこには爆ぜた《ARCU》があった。

「マクバーンの力に耐え切れなくなったのか」

「……まさかこんな初歩的なミスをしてしまうとはな」

決して長くないだろうと言われていた制限時間が過ぎてしまったことによる《ARCU》の暴発。

ルーファスはため息を吐き、横槍が入ったことをむしろ幸いだっただかと悩む。

展開した焰の剣は《ARCU》の暴発により霧散して消える。

もしもこれがリインとの相対で起きていれば、どんな無様な負け方をしていたか簡単に想像できる。

「とりあえずここから避難します」

降って来る瓦礫を避けるため、リインはルーファスを横抱きにしてその場から跳躍する。

そして――

「邪魔してんじゃねえよ！」

「竜気解放――」

「第一拘束解放――」

マクバーン、イオ、そしてロランスの三人がルーファスがしようとしたように魔法陣から現れる。『ソレ』に向けてそれぞれの攻撃を仕掛けるために、『力』を解放する。

しかし、彼らの眼前に導力機雷が展開された。

「ジェノサイドレインツ！」

撃ち込まれた弾丸が機雷を起爆し、連鎖爆発がマクバーンを呑み込む。

「ディザスターアームツ！」

マシンガントレットによる杭打ちがイオを横撃して吹き飛ばす。

そして何処からともなく飛んできた鎖鎌がロランスを捉え、地面へと叩きつけた。

「なっ――」

場外からの不意打ちを喰らう三人にリインは息を呑み——その背後を黒い仮面をつけたウォレスが現れる。

「しま——」

「リイン・シュバルツァーを殺せ」

ウォレスはうわごとの様にそう呟くと十字槍を引き絞る様に溜める。

「っ——」

腕にはルーファスを抱えており、リインは反応に遅れる。

ウォレスは全身に黒い鬨気を纏い、Ⅶ組が戦った時以上の力を込め、必殺の突きを放つ。

いくらリインでも無防備な背中に喰らえば致死に至る一撃は躊躇なく放たれ——《神速》の剣がその一突きを弾いた。

「デュバリイさん!?!」

「何をしていますのシュバルツァーッ! この程度の相手に後ろを取られるなんてっ! 修行が足りませんわよ!」

ウォレスを足蹴にして突き飛ばし、デュバリイは背中越しにリインを罵倒する。

「そんなことを言われても……」

理不尽な罵倒にリインは肩を竦め、抱えていたルーファスを降ろす。

「ブルブラン」

「ふむ、どうやら試合どころではないようだね」

審判は周囲を見渡して、唸る。

異常は西風やウォレス達だけではない。

無秩序な歓声を上げていた観客たちは今、空ろな表情で虚空を見上げ、何処からか聞こえてくる笛の音に合わせて唸るような合唱を響かせる。

その誰もが黒い「呪い」を纏い、更にはウォレス達に遅れ、これまでの敗退者たちが黒い仮面を纏い、武器を持って観客席から次々と降りてくる。

「二応聞きますがこれは「結社」の実験じゃないんですよね?」

「ええ、少なくともわたくしはこの様なことは何も聞いていませんわ」
ラインの質問にデュバリイは堂々と答える。

「ならどうしてデュバリイさんはこの精神汚染の中で無事なんですか？」

小さな衝動を刺激して突き動かすのが「闘争の呪い」。

その強制力には例え高潔な心を持つていても争う事はできない、つまりデュバリイもまたラインを襲う側になる可能性があるということのだが、彼女に「呪い」の兆候はない。

「ふっ……」

ラインの疑問にデュバリイは不敵な笑みを浮かべて懐に手を入れる。

「わたくしにはマスターの加護がありますから」

ラインに見せつけるように取り出し掲げたのは徽章。

「わたくしにはこのマスターから頂いた徽章の加護がありますから、こんな精神汚染など通用しませんわ」

「……そ、そうですか」

二度繰り返し、自信満々に、誇らしげに、そして羨ましいだろう、と自慢するデュバリイ。

ラインは腰に差した「八耀」を一瞥してそれ以上は何も言わなかった。

「ラインさんっ！」

「兄上っ！」

そしてこの異常事態に闘技場内にいたエマと控室にいたユーシス達がラインの下に集う。

「なんか大変なことになっちゃったみたいだね」

「これがラインが言っていた『異変』なのか……まさかウォレス將軍まで」

観客にまで及ぶ異常にミリアムが感心し、ガイウスは仮面を付けて槍を身構えるウォレスに戸惑う。

「そなたは……むう……」

ラウラはラインを守ったデュバリイに何かを言いかけて口を噤む。

「兄上！ 大丈夫ですか兄上っ！」

そしてユーシスは普段の冷静な振る舞いから考えられない程に狼狽えてルーファスに縋りつく。

「ユーシス、私は大丈夫——ぐっ」

立ち上がろうとしたルーファスは体に走る激痛に顔を歪め、膝を着く。

「自業自得です。むしろその程度で済んで良かったと思ってください」

《鬼の力》を使った後の虚脱感や激痛。

今でこそ慣れたものだが、身体の耐久力を無視した強化の代償だとリインはルーファスの現状をその一言で済ませる。

「リイン——」

そんな侮蔑さえ感じる突き放した言葉にユーシスは眦を上げ——

「エマ、儀式の場所は見つけられたか？」

「は、はい」

リインに話を振られ、エマはユーシスの眼差しに首を竦めながら頷く。

エマが試合中に行っていたのは《闘争の想念》の行き着く先を探っていた。

「リインさん達の想念はこの闘技場の地下に送られていました、遠見の術で内部構造も把握できています……」

それからこの笛の音は《降魔の笛》。今回の儀式で集まった想念の一部を利用して彼らを操っているのだと思います」

エマは周囲を取り囲むように集まって来る猛者たちを見回す。

西風の二人に、オーレリアのチーム。それに敗退したウォレスや昨日の不良チーム、ついでにギルバート。

それだけではなく、リイン達が知らない予選敗退者達まで観客席から降りて黒い仮面越しにⅦ組を——否、リイン個人に殺意を向けている。

「笛を演奏しているのは帝国解放戦線の《S》でした」

「あつあのオバサンなんだ」

エマの言葉にガレリア要塞で彼女と遭遇した経験があるミリアムが声を上げる。

「『降魔の笛』は人まで操れるのか……」

リインは落ち着いた感想を漏らす。

元々の持ち主であった《G》よりも教会騎士の関係者であるだろう《S》の方が適正があると考えれば、それができても不思議ではない。

「ユース、みんな。ルーファスさんを連れて避難してくれ」

「リイン？」

リインの提案にラウラは顔をしかめる。

「エマは悪いけど付き合ってくれ。俺達はこの『異変』を止めるために地下に行く……」

その前にあれもどうにかしないとイケないけどな」

現出しようとしている存在。

それを守る様に立ち塞がる仮面の猛者たち。

それだけで激戦は予想できる。

「ラウラ達は大丈夫なのか？」

「おそらく《ARCU》のおかげでしょう。私達には《灰》の加護により『降魔の笛』を介した『呪い』に抵抗できているんだと思います」

ふと頭に過ったリインの疑問にエマが答える。

「そうか……それは一安心だな」

VII組のみんなが敵に回らないことに安堵してリインは太刀を抜く。

「退路は俺が作る。準備は良いな？」

「待ってくれリイン。私も戦える」

「そうだ。二人を残して逃げるなどできない」

勝手に方針を決めるリインにラウラとガイウスは異を唱える。

「二人だけじゃない。デユバリイさんは何処まで一緒に戦ってくれるつもりですか？」

「ま、乗りかかった舟ですから付き合ってあげますわ。せいぜい感謝しなさい」

「っ——」

「それにここにいる人達はみんな観客からの『闘争の力』を供給されている……」

簡単に言ってしまったえばあの人達は《鬼の力》を使っているようなものだ。ラウラ達には荷が重い」

恩着せがましいデュバリイに続くリインの言葉にラウラ達は悔しそうに歯を食いしばる。

ただでさえ格上の猛者たちばかりが立ち並ぶ無秩序な戦場。

数の利もあり、自分達が彼らの足を引っ張るだけだということは言われなくても理解できてしまう。

「それでも——くっ……」

「俺達には本当にできることはないのか？」

この大会で新たな一步を進めたと思っていたラウラとガイウスは改めてリインの背中が遠いことを思い知らされる。

「できることならさつき言った通り、ルーファスさんを避難させてくれ」

当然の様に言ってくるリインの提案に、ラウラは反発しようとしてその言葉を呑み込んだ。

「分かった。リインがそう言うなら——」

「いや、それには及ばないよ」

「兄上っ!？」

ラウラの言葉を遮ったのはルーファスだった。

ユーシスからの治癒術を受けてある程度回復したルーファスは自分の足で立ち上がってリインに向き直る。

「リイン君、君はこれから周りに立ち並ぶ猛者たちを突破し、あの魔法陣を破壊、そして地下で儀式を行っている《S》を取り押さえに行くということの間違ってないかな？」

「ええ、概ねそうなります」

改めてやることを並べてリインはため息を吐きたくなる。

「一人で達成するには無謀な計画だ。どうだね、ここはユーシス達に地下の《帝国解放戦線》の制圧を任せては？」

「ルーファスさん？」

「どうかね君達？　ここでただ何もできず避難するだけで納得できるかな？」

「やります！　やらせてくださいっ！」

ルーファスの提案にラウラは真っ先に乗る。

「それでリインの負担が減るのなら是非もない」

「そうだね。ボクもこのまま逃げるだけって言うのはちよつと納得いかないかな」

「ガイウス、ミリアムまで……」

「しかし兄上を置いて行くな」

「私のことなら心配はいらない。頼もしい護衛が来てくれたからね」

「護衛つてもしかしてなーちゃん達のこと？」

「ま、依頼人だから護るのは良いけどな」

いつの間にかそこにいたナーディアとスウインをルーファスは振り返る。

「ユースス、多くを語る暇はない。だからこれだけ言わせてもらおう
“貴族”としての義務を果たせ」

「っ——分かりました。兄上のこと、頼んだぞ」

苦渋に満ちた顔をしながらもユーススはルーファスのプランを受け入れる。

すつかりやる気になってしまった仲間たちにリインは嘆息する。

「ですがルーファスさん。これは——」

「《帝国解放戦線》の目的はオズボーン宰相の実子であるリイン君の抹殺。だからユースス達を巻き込みたくない、そう言いたいのかい？」

機先を制するように言われたルーファスの言葉にリインは黙り込む。

「だが君がどれだけ力を持っていても、この局面を一人で解決することは不可能だ……」

そして《帝国解放戦線》との因縁は既に君だけの問題ではなくなっている。ユースス達にも戦う理由はあるはずだ」

「ああ、奴等にはガレリア要塞で良いようにやられた借りがある」

「あの時のリベンジだよね！」

「これ以上エリオットの様に身内を亡くすことがないように、俺達で奴等を捕まえる必要があるだろう」

「聞けばケルディックの事件にも彼らが裏で糸を引いていた……もはやⅦ組にとつても奴等は因縁の相手なのだ」

ルーファスに促されてユーシス達はそれぞれ戦う根拠を示す。

「リインさん、どうします?」

伺うエマにリインは息を吐き、切り替える。

「エマはユーシス達と一緒に地下に、俺はここで『アレ』の召喚を止める」

ルーファスの案に妥協しながらも、リインは一つ肩の荷を下ろす。

召喚の阻止、仮面の軍勢、それに帝国解放戦線。

全てを一人で対処するには手が足りず、かと言ってデユバリイや彼らにこの場を任せてしまえばどれだけの死者が発生するか分からない。

リインが取れる対処は最初から多くはなかった。

「決まったようですわね。では——」

律儀に待ってくれていたデユバリイだったが、「彼女」が人の壁を飛び越えて吠える。

「王技——《剣爛舞踏》!」

無数の剣が地面から隆起してリイン達に押し寄せる。

「っ——」

ただでさえ凄まじい剣気を帯びた攻撃。それが《闘争の呪い》で更に高められた必殺にリインは太刀を抜いて前に出る。

「六の型《飛燕》——」

「その必要はねえ」

リインが技を繰り出す直前、空から降って来た一撃が剣の波をまとめて強引に押し潰す。

「ルトガー・クラウゼル……」

「よう、シユバルツァー。手が必要か?」

飄々とした調子でルトガーは振り返る。

「どういうつもりですか?」

「何、うちの馬鹿二人も呪いに囚われちまつてな」

ルトガーは不敵に笑い、サングラスの上に仮面が重なっている珍妙な姿になっているガキ達を振り返る。

「それにお前さん達にはファイのフォローを任せっきりにしちまつてるからな……ま、その報酬だと思っておけ」

彼の背後に紫の戦術殻に乗って来たシオンが降り立つ。

「あ……ねーねー、キミ。ちよつと思っただけだ。ひよつとしてボクの『妹』だつたりする？」

「いきなり何を？」

そんなシオンにミリアムが場違いな馴れ馴れしきで話しかける。

「妹……似ているようには見えないが——」

「いつまでも喋ってないで行きますわよっ！ 『獵兵王』わざわざ来たからには足を引つ張るんじやありませんわよ！」

グダグダになりそうな空気をデュバリイが一喝する。

「おうおう気の強い嬢ちゃんだ——なっ！」

デュバリイの言葉に応えるようにルトガーは大剣を一閃、舞い上がった土煙を破って突撃して来た仮面をつけたオーレリアの一撃に一撃で応戦する。

「ハハハッ！ あの名高い『獵兵王』とこうして剣を交えることができるとはなっ！」

剣をぶつけ合い、オーレリアは狂ったような笑い声と共に叫ぶ。

「貴様も、『劍帝』もリイン・シユバルツァーも、全て私が斬るっ！」

「こつちはこつちで物騒な姉ちゃんだな。本当に貴族か？」

獐猛な肉食獣のような雄叫びにルトガーは呆れ、その背後でリインが号令を上げる。

「トールズ士官学院、VII組B班——」

これよりオルデイスの『異変』に介入する。各自、健闘を祈るっ！

オルデイス武術大会はこうして『帝国解放戦線』の企みによって中断される。

代わりに行われることになったのは、もはや試合とは言えない大乱

闘。

ただ、その光景は「魔女」が規制する前の「選定の儀」と変わらぬ闘争」がそこにはあった。

・*

「……始まったわね」

「呪歌」にあっさり打ち負けたヴィータは特に気にした素振りもなく息を吐き、魔力行使によって体に走った鈍い痛みを顔にしかめる。

「っ——厄介なことをしてくれたわね」

未だに体内から消えていない呪毒。

魔力行使をしようとする度に体に激痛が走り、先程の「蒼の歌」も見た目に反して力は籠っていない。

「でも問題ないわ」

「蒼の歌」で高まった「想念」に横槍が入ると焦ってくれたのか、それともロランス達の戦いで想定以上の「想念」が溢れたのか。

ヴィータにとってはどちらでも構わない。

わざわざ体を痛めてまで「歌」を紡いで儀式に水を差したのは、少しでも混乱を煽るため。

ヴィータの目的はただ一つ。

儀式場にいるだろうアルベリヒ。それとその近くにいるだろう「彼女」を殺すこと。

「エマや婆様に知られる前に私が——」

魔術行使ができない代わりに用意した導力銃を確かめながらヴィータは決意を胸に闘技場の地下へと足を向け——

「あら……っ？」

不意に感じた気配にヴィータは振り返る。

しかし、そこには何も無い。あるのはオルデイスを示すような紺碧の海だけ。

「気のせいかしら？」

呪毒の影響で靈感も狂っていることに自覚があるヴィータはそれを気のせいと判断し、今度こそ地下へと踏み入れるのだった。

海の底に存在する“ソレ”が“闘争”と“起動者”の気配によって動き出したことに気付いているのは“一人”だけ。

114話 紺碧の海都XIII

「燃え尽きな——」

「させんわっ！」

焰を放とうとしたマクバーンにゼノは用意していたスイッチを押す。

予めばら撒いていた導力地雷が起動し、マクバーンの前に飛び上がると内蔵された火薬をばら撒き、焰で引火する。

連鎖する爆発がマクバーンの周囲を囲み、爆炎の中ゼノはマクバーンをライフルで狙い撃つ。

しかし隙を突いた弾丸は彼が纏う焰に焼かれて届く前に焼き尽くされる。

「はっ——やるじゃねえか《罨使い》」

劫炎を誘爆して防ぐ。

意外な方法で防ぐ猟兵らしい戦い方にマクバーンは気分を良くする。

「ちっ——邪魔や！　ワイはシュバルツアーに用があるんや！」

「はっ！　最初に俺に奇襲をくれたのはお前の方だろ！　それにしても……」

マクバーンは周囲を見渡し口角を釣り上げる。

ゼノに合わせて自分を取り囲む仮面の戦士たち。

次に起きるのは一斉砲火。

マシンガンが、導力砲がライフルが、導力魔法がマクバーンに殺到する。

「ククク……」

豪雨のような勢いの攻撃にさらされながらマクバーンは喉を鳴らす。

弾幕や導力魔法は全て届く前に彼が纏う焰に触れ、等しく蒸発する。

「良いじゃねえか……」

意味のない攻撃をしながらも決して戦意を衰えさせない仮面の戦士たちにマクバーンはテンションを上げていく。

観客たちから「闘争」のエネルギーを供給されている彼らが纏うのは言うなれば、結社で開発した疑似的な《鬼の力》と同じ。

「はっ——」

「へぶしっ！」

近付けば問答無用で焼かれる焔に臆することなく背後から襲い掛かって来る誰かをマクバーンは見向きもせず無造作に裏拳で叩く。

「撃て撃て！」

「これでも喰らえオーバルエネルギー最大出力っ！」

「あの導力砲を防ぐかつ!? くそ化物めっ！」

怯まないのは彼だけではない。

自分に群がって来る者たちは実力差も理解してもなお、戦う事をやめようとしなない。

それが「呪い」に侵され、退くという思考を奪われているが故の無謀。

雑魚には興味のないマクバーンだが、たまにはこういうのも悪くないと笑う。

「簡単に焼かれるんじゃねえぞ——」

そう期待の言葉を呟き、マクバーンはここぞとばかりに魔法の試し打ちをする。

「ヒートウェイブ」

地面から溢れた火柱が纏めてゼノ達を呑み込んだ。

・*
*

ロランスはその少年を相手に困惑していた。

「くそがっ！」

口汚い悪態を吐きながら金茶頭の少年は鎌を振り回してロランスを追い立てる。

技は稚拙、基礎の鍛錬も不十分、ただ才能と思いい切りの良さに任せ

た荒々しい攻撃をロランスは余裕で捌いていく。

その気になれば一瞬で斬り伏せられる程度の相手。

にも関わらずロランスは全方位から襲い掛かって来る有象無象を“金の剣”の峰打ちで叩きのめしている片手間に少年の相手を続ける。

「あわびっ!?!」

「もうやめておけ、お前では俺にもシユバルツアーにも勝てない。お前には分かっているはずだ」

何故、そんならしくもない忠告を少年に言っているのか、ロランスは平然な顔を装い困惑する。

「舐めやがってっ!」

小物のような男を一撃で倒していながら、自分には手加減している。

それを少年は正しく認識し、侮られている事実には憤り、さらに彼を見ていると込み上げてくる激情を“呪い”にくべて力を上げていく。

「オオオオオオオオオオオオオッ!」

獣のような雄叫びを上げて少年は人間離れた速度でロランスに斬りかかる。

左目に走る鈍痛を無視し、怒涛の勢いで繰り出される無数の斬撃。そして繰り出されるのはハルバードを変形させた鎖鎌。

明らかに少年の限界を超えた攻撃、だがロランスはやはり余裕を崩すことなく投擲された鎖鎌を斬る。

「——くそっ!」

刃を失った仕込みハルバードを投げ捨て、少年は両手に爆薬を仕込んだダーツを纏めて掴み投げつける。

しかし投げつけた先にはもうロランスの姿はなく、声が背後から聞こえる。

「寝ている」

「——がっ!?!」

背後からの強打に少年は意識を飛ばす。

しかし“呪い”が強制的に意識を繋ぎ止める。

「この野郎——」

もつとも受けたダメージまですぐに回復できるわけではなく、少年は地べたに這いつくばらされ——

「——あ……」

見上げたその光景が、銀髪の青年が自分を見下ろす姿に失った記憶が刺激される。

燃え盛る家屋に村。

血に塗れた彼が自分を見下ろしている光景が脳裏に走る。

「お——」

少年の身体に更なる瘴気が集まり、彼の激情に応えるようにそれを力を漲らせる。

「オマエカアッ!?!」

仮面の奥の瞳を黒と金に染めた獣がハルバードだった棒を拾い、《剣帝》に襲い掛かる。

「オマエガコロシタノカッ!?!」

「っ——」

その一撃を受け止めたロランスは予想外の衝撃に飛ばされる。

「お前は……そうか……」

彼の言葉と向けられた憎悪にロランスは驚きながらも自嘲する。

少年の言葉から結社時代の負債が巡って来たのだと、ロランスは考える。

「トウサン、カアサンヲ……ムラヲヤイタ……」

「……ああ、その通りだ」

少年の言葉にロランスは静かに頷く。

ロランスは彼がどの時期での生き残りかは思い出せていない。

だがそれでも己が背負うと決めた業を素直に認める。

そして——

「オマエガ——カリンネーチャンヲコロシタノカッ!」

「っ——!?!」

それは予想外の言葉であり、ロランスの——レオンハルトの中に残っていた後悔と言う傷に何よりも突き刺さる言葉だった。

「お前は——」

動揺は隙を生み、少年は彼の言葉を聞かずただ激情の赴くままに棒を振り下ろす。

少年、アツシュ・カーバイドの一撃は《剣帝》を捉えた。

・*

「ぶぎやつ!?!」

仮面の兵団の一人の顔を踏みつけてイオは大きく空に跳躍する。

「いつけええええっ!・ 玄煌破碎陣っ!」

空中で展開される魔法と戦技を織り交ぜた必殺技をイオは放つ。

召喚された巨大な無数の岩が降り注ぎ、イオに群がる敵を蹂躪する。

「ひぎゃああああああっ!?!」

「うおおおおおおおっ!?!」

情けない悲鳴とレオニダスの困惑が混じった雄叫びが重なる。

妹分と同じくらいの容姿から繰り出される絶技にレオニダスは驚愕しながらマシンガンレットを振る。

迫り来る岩石を杭打ちの一撃で破壊するが、壊した岩の背後に次の岩が降って来る。

「ウオオオオオオオオオツ!!」

大きな岩は杭打ちで、小さな——と言っても自分の身の丈ほどもありそうな岩は左腕で殴って砕く。

幸いなことに岩の強度はそこまで硬くない。

両手を駆使し、更には同じ敵を狙う即席の仲間と共闘し、レオニダスは岩の豪雨を何とかやり過ごす。

「おおっ!・ 結構生き残ったね」

いつの間立っていた細い石柱の上でイオは無邪気な笑みでレオニダス達を見下ろす。

「それじゃあ——おかわり行ってみよう!」

そう言うイオの背後、終わったはずの岩の雨が再び召喚される。

「……………女神よ」

その光景にあまり信心深くないレオニダスは思わず女神に祈るのだった。

・*
・*

「ばらけるなっ！ 各個撃破されるぞ！ 横隊を組んで迎撃しろっ！」

誰かの号令が響き渡り、各地の領邦軍人たちはそれに応え、素早く陣形を組む。

目の前の敵を斬り伏せたデュバリイは周囲を見渡して、その集団に気付く。

彼我の距離はおよそ百アージュ。

この距離ならばどれだけ速くても銃の方が有利、男は勝利を確信しながら号令を重ねる。

「撃——」

整列して構えた導力ライフルの引き金に指が掛けられる。

女剣士はそれに対して伏せるように体を前に倒す。兵隊たちは伏せる女剣士に照準を修正する。

「——てっ！」

その号令に一齐に数十の導力ライフルの引き金が——引き切られるより速く、デュバリイは横隊の壁を盾を前にした突撃で突き破る。

「がはっ！」

突撃の勢いのまま、横隊の背後にいた指揮官をすれ違い様に一閃。「化物かっ!?!」

あまりの速さに驚愕しながらも彼らの反応は早く、振り返り地面を削る様に止まったデュバリイにもう一度銃口を集中させる。

「シユバルツァーッ！」

向けられた数十の銃口に怯まず、デュバリイはその名を叫ぶ。

「四の型——《紅葉斬り》」

振り返った彼らの背後、リインは太刀を鞘から抜き放ち、一閃。

その太刀は誰にも触れていないにも関わらず、彼らの仮面を断ち斬り、それを切っ掛けに彼らは糸を切られたかのように倒れ伏す。

しかし、それも束の間。

倒れた彼らは新たな仮面を纏い直して立ち上がる。

「——っ」

その結果に目もくれず、その集団を突破したリインは前へと駆ける。

「六の型《孤影斬・三連》」

群がる仮面の戦士たちを突破してようやく辿り着いた射程圏内。

リインは分け身を使って極大の剣閃を三撃、体の半分を魔法陣から顕現させた「ソレ」に放つ。

「あゝれ〜！」

三つの斬撃がぶつかり合って作り出す竜巻に仮面の戦士たちは高く舞い上がって地面に叩きつけられる。

「——やりましたの!？」

凄まじい風を伴う嵐に伏せていたデュバリイは顔を上げて、結果を確認する。

あれ程の剣戟を受ければ例え大型魔獣でも一溜りもない。

そう思っていたが、リインの剣閃は「ソレ」の前に生じた青白い光の壁に防がれていた。

「何ですのあの光の壁は?！」

「……どうやら魔術的な障壁みたいだな」

デュバリイの疑問にリインは推測を口にする。

「貴方のその「太刀」でも斬れませんの?」

「できると思いますが、それにはもつと近づかないと——」

振り向き様にリインは太刀を横薙ぎにして振り切ったはずのウォレスの突きを受け止める。

「リイン・シユバルツァーッ！」

「っ——」

強烈な突きはそのまま薙ぎへと変化してリインを弾き飛ばす。

さらに追撃を仕掛けようと弾き飛ばしたリインに追い縋り——そ

の目の前にデュバリイが割って入って十字槍を盾で防ぐ。

「ふんっ！」

ウオレスはデュバリイに狙いを変え、弾かれた槍をそのまま薙ぎ払ってデュバリイを両断する。

両断されたデュバリイは霞となって消え、分け身と共に三人となつてウオレスを取り囲む。

「プリズムキャリバーッ！」

「黒き竜巻よっ！ 薙ぎ払えっ！」

洗刃を近付けまいと、黒旋風が巻き起こって三方向から襲い掛かって来るデュバリイを等しく吹き飛ばす。

「ちっ——厄介ですわね」

速度を人間離れた力でねじ伏せられデュバリイは顔をしかめる。盾で受け流した感触からも直撃すればただでは済まないだろう。

「ふん、アルゼイドもどきの小娘の分際でそれなりにやるようだな」

品定めするウオレスの言葉にデュバリイは眦を上げる。

しかし、激昂することなくリインに冷静な声で話しかける。

「シユバルツァー。ここは任せて貴方は先に行きなさい」

「デュ、デュバリイさん？」

「ドライケルスの取り巻きでしかなかったノルドの槍 “如き” があるうことか、マスターがわたくしに教えてくれた剣をよりによつて “アルゼイドもどき” ですって……万死に値しますわ！」

背を向けているデュバリイの表情はリインには分からない。

しかし、彼女がこの上なく燃えていることだけは察する。

ウオレス准将はかなりの猛者であり、今は《鬼の力》の補助まで受けている。

とても一人で相対して良い様な相手ではないのだが、ここで手を貸せばデュバリイはリインにまでその刃を向けるだろう。

「——なら任せますが、先に行けと言われてもな……」

入り乱れる戦場を見渡してリインは唸る。

この状況がある程度想定していた自分達のチームは顕現しようとする魔法陣を破壊するために動いているが、他の二人の状況は芳しく

ない。

イオは派手な術法で岩を降らせているが、手加減したその技は決定打になっていない。

ロランスは意外なことに一人の少年に手こずっている。

そしてチームとは違うが、マクバーンとルトガーはそれぞれ向かって来る《罨使い》と《黄金の羅刹》の相手をしてきているが積極的にこの儀式の解決に尽力する素振りはない。

「っ——」

そうしている内に戦場に響いている笛の音に変化が生じる。

変化した音色に観客たちの合唱も更なるうねりとなって耳障りな音楽を奏でる。

それに伴って、召喚の儀式も佳境に入ったのか、光の障壁は一際強く輝く。

「——早くしてくれ、みんな……」

その気になれば障壁もその中身も斬れるかもしれない。

しかし、それをした場合、より深く霊的なリンクが繋がった観客たちへの影響がどれほどになるのか、試す気にはなれない。

リインにできることは群がる仮面の戦士たちを相手にしながら、地下に向かったクラスメイト達が笛の演奏を止めるのを待つことだけだった。

115話 紺碧の海都XIV

「剣よっ！」

「風よっ！」

竜巻に魔力で編まれた剣が踊り、蒼い巨鳥に殺到する。

「キュイイイイッ！」

美しい翼を傷付けられるものの巨鳥は負けじと傷付けられた翼を羽ばたかせて光の波動を放って剣と風を押し返す。

「エマ、俺の後ろに！」

そう言いながら既にガイウスは光の波動からエマを庇う様に前に出て、エマもそんなガイウスに合わせて防御のアーツを駆動し、付与する。

「——隙ありだっ！」

壁を駆け上がり、ラウラは重力の加速を合わせて大剣の一撃を見舞う。

その一撃は根元から翼を断ち切り、巨鳥は悲鳴を上げる。

「たたみ掛けるよ、がーちゃん！」

血の代わりに霊力を傷口から噴出する巨鳥をアガートラムが殴り倒す。

「今だよーシスッ！」

「任せるが良い」

音を立てて横倒しになった巨鳥にユーシスは練り上げた水の闘気を解放する。

翼を再生しようとさせる巨鳥が氷で包み込み、その動きを止める。

「《ARCU》の霊的リンクを強化します！ 皆さん止めを！」

ガイウスとの戦術リンクを切り、エマが二つのリンクの強化に徹する。

戦術リンクの感応を意図的に最大にし、ラウラとガイウスが、ユーシスとミリアムが渾身の力を込めた必殺の連撃を折り重ねるように

繰り出す。

その隙間のない波状攻撃に巨鳥は耐え切れず、膨らませた風船が破裂するように光を伴い爆発した。

「ピュイ」

巨鳥は消え失せ、小さな蒼い鳥は一度エマ達の上を旋回すると、どこかへ飛び立って行ってしまった。

「まさかあのような魔獣まで現れるとはな」

難敵を退け、ガイウスは残心を解いて息を吐く。

「ノルドでもそうだったけど、上位三属性が働く場所だとああいう大きな魔獣が育つのかな？」

「……ええ、そうですね」

感想を呟くミリアムにエマは目を逸らしながら頷く。

「気を抜くのは早いぞ。各自治癒や応急処置を済ませたらすぐに行くぞ」

ユーシスの指摘に一同は緩みかけた意識を引き締める。

まさにボスとも呼べる巨大な敵だったが、本命は“降魔の笛”で異変を起こしている帝国解放戦線。

むしろここからが本番だと改めて気を引き締めて、ラウラが気付く。

「待ってくれみんな」

「どうかしましたかラウラさん？」

ラウラは目を瞑り、聴覚に集中する。

それに合わせ、上位三属性の場であり発現している獣の耳が動いて音を聞く。

「やはり笛の音が消えている」

「む……言われてみれば、戦いに集中していて気付かなかったがいつものまに？」

確かめるようにガイウスも耳を澄ませて探るが、ずっと聞こえていた禍々しい音色は消えていた。

「それに――」

スンッとラウラは鼻を鳴らす。

「この先から血の臭いが漂って来る……どういうことだ?」

「ボクたち以外でも誰かが動いてるってことかな?」

「……分らん。間に合わなかったのか、それとも……上で戦っているリイン達が負けたとは思えないが……急いだ方が良いだろう」

与えられた任務をこなせなかったという不安にユーシスは顔を歪め、それでも状況把握のために一同を促す。

大敵との事後処理を手早く済ませて、一同は地下道を進む。

辿り着いた最奥。

そこは先程蒼い巨鳥と戦った広間と同じくらいの広さの空間だった。

中央には黄金の焰が溢れるように燃え盛っている宝珠。

そしてその前には倒れている《S》と帝国解放戦線のメンバー、そして呆然と立ち尽くす女の子。

彼女たちと対峙しているのは帽子を深く被った女性だった。

「……………まさか私達を裏切ると言うの?」

「勘違いしないでくれるかしら? 私は最初から貴女達の味方になつたつもりはないわ……」

私は「彼」と契約をしていただけ、その契約も勝手に破棄してくれて、私はこれでも怒っているのよ」

導力銃を《S》の額に突きつけ、ヴィータは言葉とは裏腹に微笑む。

味方を装って近付き、《S》とその仲間たちを背後から銃撃して無効化したとは思えない程にその笑みは穏やかだった。

「そんなことは今はどうでも良いの。それよりアルベリヒはどこ?」

「アルベリヒ……さあ、何処だったかしら? 詳しくは聞いてないけど——がっ!?!」

会話に応えながら、落とした《降魔の笛》ではなく腰に差した法剣にゆっくりと手を伸ばす《S》は至近距離から肩を撃ち抜かれた。

「まあ良いわ。元々貴女達に期待なんてしていなかったから」

更にヴィータは《S》の仲間たちの手足を撃ち抜く。

その都度、悲鳴が上がるがヴィータは無視して導力銃のバッテリーを交換して女の子と向き合う。

この状況において不気味な程、無反応な女の子にヴィータは銃口を突きつけ、穏やかな笑みを歪める。

「……………ごめんなさい。どうか安らかに」

多くの言葉が脳裏に過つたものの、グリアノスの足止めを突破した彼女たちが近付いていることもありヴィータはそれだけを言っ引き金を――

「にやあつー」

「っ――」

跳びかかった白猫の爪に引つかかれ、導力銃から撃たれた弾丸は地下広場の天井を穿つ。

「姉さんっー」

そのタイミングでエマ達は広場に突入する。

そして転移術で呼び出し先行させていたキラシヤの目を使って見て姉の凶行を止めるべく、エマはアーツを放つ。

「くっ――」

ヴィータは後ろに跳び退きながら、銃を連射する。

「フシャアアアアアアッ！」

女の子を狙った凶弾はキラシヤが張った障壁に弾かれる。

「ちっ――」

思わず舌打ちしたヴィータの前にエマは立ち塞がり導力杖を構える。

「姉さん……………貴女はたった今、自分が何をしようとしたのか分かっているの!?!」

義理の姉の蛮行を咎めるようにエマは叫ぶ。

「どきなさい。その子は殺しておかないといけないのよ」

グリアノスが足止めた広間から、予想以上の早さで迫り着いた義妹の成長にヴィータは感心しながら、冷えた言葉を投げかける。

「姉さん……………」

先日の再会では気付かなかった姉の変わりようにエマは沈痛な面持ちになる。

「ふむ……………この者がエマの姉君なのか、聞いていた人物像とは随分違

うが……」

遅れてエマの横に並び、ヴィータと相對したラウラは想像していた印象と異なるヴィータに首を傾げる。

「姉さん、いえ……背信者ヴィータ・クロチルダ……魔女として私は貴女を止めますっ！」

こんな場所にいるのだから彼女が普通の女の子ではないことはエマも察している。

だが、それを差し引いても幼子さえ手に掛けようとする義理の姉を止める決意をしてエマが宣言する。

「うゝ、いた……えま……」

「もう大丈夫ですよ。貴女は私が——」

「ダメッ！ エマ！」

女の子に振り返ろうとしたエマにヴィータの叫びが飛ぶ。

しかし、そんなものにエマの動きを止める力はなく、妙に焦ったヴィータの声を不思議に感じながらエマは振り返って女の子の顔を見た。

「………え？」

無感情な目で自分を見上げる女の子と面識はないはず。

なのにエマが感じたのは懐かしさだった。

「うゝ、いた……えま……うゝ、いた……えま……うゝ、いた……えま……」

うわ言のように女の子は二人の名前をたどどしく繰り返し、徐々に足元の白猫を見下ろして呟く。

「あなたが……せりーぬ？」

「……え？」

ここにはいない、闘技場の監視に務めているはずの使い魔の名がその口から出て来てエマは困惑し、エマ以上にヴィータが驚く。

「お師様……？」

「え……？」

そして驚きの余り漏らしてしまった言葉にエマは耳を疑った。

「貴女は……」

思わず尋ねるが、女の子はおもむろにエマに背中を向け、黄金の焰が燃え盛る宝珠を見上げる。

その宝珠が音を立てて砕けると、何かを解放するようにその地下の広間に風が吹き荒れる。

「儀式の見届けを確認、これより帰投します。アロンダイト」

機械的な呟きが女の子の口から流れ、手をかざすと少女の背後に蒼い戦術殻が現れる。

「くっ——」

ヴィータはⅦ組一同がその光景に目を奪われている間に横に回り込んで女の子を銃撃する。

「姉さんっ!?!」

エマが叫ぶが銃弾は戦術殻が張ったバリアに受け止められる。

女の子は戦術殻の腕に跳び乗り、踵を返して——そこでエマは振り返った。

じつと無言で見つめてくる女の子の顔にエマはやはり奇妙な感覚に襲われる。

「貴女は……貴女は……」

「エマやめさない!」

ヴィータの叫びがエマを止めるが、それを無視してエマは女の子に尋ねていた。

「貴女は……誰……?」

「わたしは《OZ80》イソラ・ミルステイン……」

「っ!?!」

「エマ、ヴィータ……次に会う時は私を殺しなさい」

そう言い残してイソラは姿を消した。

「イソラ・ミルステイン……姉さん! これはどういうことっ!?!」

激昂するエマにヴィータは肩を竦め、蒼い羽を取り出した。

「そんなの私の方が聞きたいくらいよ。今見たことは忘れなさい。それが貴女のためよ」

「姉さんっ!?!」

止める間もなく、羽に宿った魔力を使つて転移術を起動したヴィー

夕はその場から消える。

「エマ……」

後に残ったのは事情を全く理解できずに途方に暮れるしかないVII組と、撃たれて呻く帝国解放戦線の者達。

そして――

「そこまでだテロリスト共っ！」

気まずい空気を破って現れたのは兵を自ら率いてやってきたカイエン公爵だった。

・*

激しい闘争の想念の渦から《金の起動者》が選定される。

250年前からの《銀》に、この時代で初めて選定された《黒》。

そしてこの数年で《蒼》《灰》《紫》が続き、ここに《金》まで揃った。

《緋》の選定はまだだが、既に条件は整った。

眠りにつくことおよそ千年。

《黄昏》を“鋼の至宝”の復活を阻止するために、人を捨てたその存在は役目を果たすために海の中から浮上する。

それは巨大な球体。

海から浮上したそれは当たり前のように空に浮かび上がる。

「何だ……あれは？」

《金》の起動者は達成感に浸る間もなく現れたその存在に困惑する。

そして、その球体の内側から殻を破る様に鋼鉄の腕が出て来た。

その球体はまさしく卵だった。

球体から突き出た腕は殻を破るように広げられ、それは産声を上げる。

「おいおい、こりやたまげたな」

ルトガーはその巨大さに思わずため息を吐く。

卵から這い出た“ソレ”は海の中に立つ。

沖合にも関わらず、平然とたたずむ巨人の姿に、儀式が終わり正気

を取り戻した市民たちは至る所で悲鳴を上げる。

「あれは……魔煌兵なのか？」

それを見上げたリインは目を疑いながら呟く。

大ききにしておよそ百アーージュに届く超大型魔煌兵。

幻想移動要塞《トウアハルデーダナーン》から生み出された、千年の月日を費やして生まれた魔煌兵が《黄昏》を阻止するために動き出した。

116話 紺碧の海都XV

「はあ……本当にバルデルを女にしたみたいな嬢ちゃんだな」

爛々と目を輝かせ、必殺を次々に繰り出して来るオーレリアにルトガーは呆れる。

「どうした猟兵王!? 貴様の力はその程度ではないだろっ!？」

やる気を見せないルトガーに対してオーレリアは留まることを知らないと言わんばかりにその勢いを激しさを増していく。

「そう言われてもな……」

苛烈さを増していくオーレリアの攻撃に対して、ルトガーはどこか覇気がなく積極的な反撃もせずに防戦に徹していた。

「むう……ならば——」

「くっ——」

不愉快だと言わんばかりの唸り声を仮面の下から漏らしたオーレリアはさらに剣戟の回転数を上げる。

本気にならないと言うのなら、無理矢理引き出してやると言わんばかりの攻勢にルトガーは苦悶の表情を浮かべる。

——まさか俺がここまでセンチメンタルだったとはな……

激しい攻撃を受けているにも関わらず、いつもなら昂っているはずの本能が大人しいことにルトガーは自嘲する。

今回の大会だけではない、帝国最大の基地であるガレリア要塞を強襲した時もルトガーの胸中には熱は灯らなかつた。

——原因はおそらくバルデルとの戦いで満足しちまったせいだろうな……

血湧き肉躍る魂の削り合い。

例えそれが仕組まれたものであったとしても、ルトガーにとってあの一時は最高の瞬間だった。

そんな好敵手との逢瀬と比べてしまえば、例え《黄金の羅刹》が相手であっても物足りなさを感じてしまう。

それに思考の隅にこびりつく疑問がルトガーの動きを鈍らせる。

——俺は本当にあいつに勝ったと言えるのか？

猟兵の界限では、最終的に生き残った方が勝ちだという風潮がある。

だが今の自分は果たしてあの戦いを生き残ったと言えるのか。

相打ちという結果に満足して死んだはずなのに、気付けば不死者となって現世に舞い戻ってしまった。

唯一の心残りだったフィーとのケジメを付ける機会を得られたのはありがたいが、果たして今の自分の姿をバルデルが見たらどんな顔をするだろうか。

「『猟兵王』の実力はその程度か!? ならば『闘神』とやらも噂だけの猟兵と言う事か?」

期待外れだとオーレリアは失望を滲ませ、意識はルトガーから別の場所で戦っているリインへと思考が誘導される。

「まあ良い。ならば早々に叩き斬り、今度こそシユバルツァーと心行くまで死合おうとしよう」

オーレリアは宝剣を構え、全身に鬼気を漲らせる。

いつもより漲っている力にオーレリアは疑問を感じず、むしろ気分を高揚させて必殺の一撃を繰り出す。

「王技——破邪顕正っ!」

繰り出すのはヴァンダールの剛剣の一撃。

「闘争」の想念のバックアップを受けたそれはオーレリアにとって生涯で最も力の乗った一撃となる。

例え期待外れであったとしても慢心なく、『猟兵王』を一刀両断するつもりで宝剣を一閃する。

しかし——

「物足りねえよ、嬢ちゃん」

生涯で最高の一撃をルトガーは正面からバスターソードで受け止めた。

「なっ!?!」

踏ん張ったルトガーの足元の大地に放射状の亀裂が走り、隆起して

オーレリアの一撃の威力を物語る。

だが、その一撃を受け止めたルトガーは特に痛痒を感じさせずに剣を合わせたバスターソードを一閃してオーレリアを押し返す。

「——っ、ようやくやる気になったか」

空気が変わったルトガーにオーレリアは驚愕を振り払い、仮面の下で頬を釣り上げる。

しかし、ルトガーはその言葉に答えずやれやれと肩を竦めて独り言を呟く。

「まさかあんな言葉でやる気になるとはね……ここまで女々しかったとは」

むしろスイッチの入ってしまったことにルトガーは嘆く。

自分の事は何と言われても構わない。

しかし好敵手だった彼の事まで貶されたことが引き金となってルトガーの意識を変えたことに我が事ながら嘆く。

「ルトガー、援護は必要ですか？」

「いらんいらん、お前さんはあの二人が死なないように見てやってくれ」

「了解」

ルトガーの指示に紫紺の戦術殻に抱えられたシオンは踵を返す。

「随分と余裕だな？」

「世界の広さを知らないお嬢様にあまり目くじらを立てるもんでもないだろ？」

「……世界の広さなら知っているさ」

「そうか？ それにしては随分と物言いが小物臭いように聞こえるが」

「何だと……？」

「“弱い犬程良く吠える” ってな……」

“羅刹”なんて大層な二つ名を名乗っているみたいだが、二年前のシユバルツァーより弱いんじゃないのか？」

軽薄な態度から出て来た言葉にオーレリアは深く深呼吸をする。

「私にそのような言葉を言ったのはそなたが初めてだ」

「そりゃあ嬢ちゃんは偉い貴族様だから気を使ってくれてたんだらう？」

「……………良いだろう。ならばそなたの首印を取って我が力の証明としよう」

侮辱の言葉に動揺することなく、オーレリアは宝剣を構え鬨気を漲らせて宣言する。

「だから、あまり強い言葉を使うなって、弱く見えるぜ」

凄みを増したオーレリアに対してルトガーの態度は変わらない。

そんな態度にオーレリアは「呪い」に煽られて苛立ちを感じる。

「そこまで言うのなら——」

「だから喋ってないでさっさと来いよ」

無駄話と言わんばかりに言葉を遮り、手招きまでされた挑発にオーレリアは宝剣の刃に黒い洗を迸らせる。

「受けてみる！ 王技——洗刃頭正っ！」

先程の最高を超える一撃をオーレリアは柱にも見える洗剣を掲げて振り下ろす。

《聖女》との戦いで得た敗北の経験を呑み込み、編み出したアルゼイド流とヴァンダール流の剛剣を合わせた王の技。

「はっ！」

極光の刃にルトガーは鬨気を漲らせる。

その色は黒ではなく、紅と翠。

好敵手と殺し合い、まさに言葉通り死線を越えた互いに喰い合って辿り着いた「オーガ」を超えた息吹。

そこから繰り出される一刀に名前はない。あえて付けるとするならば——

「クリティカル・ワン」

極光と双色の刃がぶつかり合い、互いを滅する鬨気はせめぎ合い、余波は衝撃波を生み出し風は荒れ狂う。

「悪いな嬢ちゃん——」

鏢迫り合いの中、ルトガーはやはり軽薄な声で話しかける。

「——この程度だ」

「っ——!？」

そう言つてルトガーは一気にバスターソードを振り抜いた。拮抗は崩れ、オーレリアは極光の刃を折られて猟兵の一撃に吹き飛ばされた。

「『黄金の羅刹』……聞いていた程じゃなかつたな」

闘技場の壁に埋まったオーレリアを一瞥し、ルトガーは踵を返す。

「さてと、そろそろバカ息子たちを躰に行くか」

歩き出そうとした一步を止め、ルトガーは振り返った。

見向きもされずに去つて行くルトガーにオーレリアは――

「ああ……」

壁に埋もれながら歓喜の吐息を漏らす。

「ああ………私が求めていたのはこれだったのか……」

その体には黒い瘴気が集まり、漆黒の仮面は蠢くように目元から顔全体へと広がって行く。

全身に走る痛みはその瞬間にも癒えて、更なる活力を与える。

――殺せ――

オーレリアの意志に呼応するように黒い瘴気は囁く。

それに身を委ね更なる力をオーレリアは――

「――黙れ」

囁きに諍う言葉を返した。

「邪魔をするな……」

広がる仮面の蠢き止まる。

「お前は必要ない」

オーレリアは宝剣の石突を勢いよく自分の顔に打ち付ける。

その衝撃に仮面は割れ、オーレリアは力任せに自分を覆い隠そうとしていた黒い仮面を剥ぎ取って捨てる。

「これは私が求めた『闘争』だっ！ 誰にも邪魔はさせないっ！」

《黒》に塗りつぶされていた闘気に《黄金》が戻る。

むしろその輝きは浸食を受けていた以上の絢爛な光となって、彼女が埋まっていた壁を吹き飛ばす。

身体を芯を熱くする衝動にオーレリアは叫ぶ。

「何処だ獵兵王っ！ 私はまだやれるぞっ！」

しかし叫びは空しく、そこにもう獵兵王はいない。

「っ——」

見向きもされなかったことにオーレリアは齒噛みし、彼の姿を探そうと——

『《起動者》候補に告ゲル——』

頭の中に直接響く声にオーレリアは振り返る。

闘技場の中心、魔法陣の中に顕現したのは黒い巨人。

そこでオーレリアは儀式のことを思い出す。

『コレナルハ “巨イナルチカラ” ノ欠片——』

後ろ髪を引かれながらもオーレリアは宝剣を手に疾走を始める。

『手ニスル資格ガ汝ニアリシカ——』

その顕現に合わせて闘技場で渦巻いていた瘴気はそれに呑み込まれて、正気を取り戻した暴徒は呆然と立ち尽くす。

そんな中を駆け抜け、誰よりも早くそこに辿り着いたオーレリアは叫ぶ。

『コレヨリ 《最後ノ試シ》ヲ——』

「その首もらったっ!!」

口上を遮ってオーレリアは宝剣に極光を纏わせて襲い掛かった。

・*

「ここまで避難すれば大丈夫か？」

まともに身動きができないルーファスをスウィンとナーディアは両側から支え、闘技場の出入口に辿り着く。

「どうやらすーちゃん達は完全に眼中にないみたいだね」

「不幸中の幸いだな」

恩人のリインが戦っていることに思う所はあるが、正直人智を超えた乱戦に割って入る度胸はスウィンにはなかった。

「って言うか、何であの人数差ですり潰されないんだ？」

「うーん……《八葉一刀流》……噂通りの一騎当千ぶりだね……《理》

に至るってあそこまで凄かったんだ〜」

噂に違わないリイン達の実力に感嘆しながら、ナーディアは治癒術を駆動させてルーフアスの体に掛ける。

「ふふふ、なーちゃんの治癒術は高いですよ〜」

「いや……それには及ばない」

冗談交じりの言葉だったが、返って来た答えは意外な程に覇気のないものだった。

「どうかしたのか？ 頭でも打ったのか？」

スウインは無遠慮に尋ねる。

スウインが知っているルーフアスは貴公子の顔をした野心家。

今の状況もルーフアスは知っていた素振りもあり、まだ何かを企んでいるのではないかとさえ考えていた。

「……私は負けたのだな」

ルーフアスに眩きにスウインとナーディアは顔を見合わせる。

「もう試合どころじゃないと思うが」

「なーちゃんは賞金とか報酬がどうなるか気になるんだけどな」

呆然と自分の腕を見下ろすルーフアスにはスウイン達はこれからのことを考える。

「報酬は約束通りの額に色を付けて払おう」

「よしっ！」

ルーフアスの言葉にナーディアは拳を握る。

「この『異変』に関しても程なくして終わるだろう」

「何だ、やっぱりあんたの仕込みだったのか」

ルーフアスの言葉にスウインは納得する。

リインやVII組に対しての的確な指示を出していただけに疑っていたが、自分から言い出したルーフアスに目を丸くする。

「うーん、それじゃあこれってどういう状況なの？」

控室にいた前の試合の勝者たちに観客席にいた敗者だけに関わらず、様々な戦士たちが入り乱れる大乱闘。

渦巻く濃い『闘争』の想念に気を抜けば酔って自分達もその輪の中に飛び込んでいきたい衝動をナーディアは感じる。

それを誤魔化すために頭を働かせて状況把握に努める。

「あそこに見えている巨大な魔法陣から現れようとしている存在……あれはリイン君が持つ『騎神』の乗り手を決める選定者のようなものだ……」

あれを倒した者が《大いなる騎士》の一つの乗り手になることができる。私はそう聞いている」

「それで？ 貴方はどうするつもりなの？」

治療術を受けることを拒否してただ闘技場の乱闘の観客になっているルーファスにナーディアは尋ねる。

「どう……とは？」

「事情は良く分からないけど貴方はリインお兄ちゃんに対抗心を持っているでしょ？」

そんな貴方が《騎神》っていうリインお兄ちゃんに並び立てるものを前に大人しくしている理由は何？」

「よく見ているな」

ナーディアの観察眼をルーファスは褒める。

「大したことではないよ。ただ自分の限界を思い知らされたというだけだ」

冷えた思考で振り返り、ルーファスはため息を吐く。

武人で言う所の《理》に至ること。

マクバーンの力を借り、至っているだろうリインと手合わせして自身をその領域に引き上げようと考えていたルーファスが得たものは何もない。

《鬼の力》という異能を埋めればリインに劣っていないと思っていたのは自惚れだった。

そしてルーファスは優秀だからこそ気が付いてしまった。

「器」というべき格の違い。

「やはり『贗物』では『本物』に勝てないということか」

自嘲してその事実をルーファスは受け止める。

「私の敗因は何だったのだろうか？」

それは誰に向けたものではなく、自嘲めいた自問自答。

あのまま戦って例え《ARCS》が壊れていなかったとしても、おそらくリインに《鬼の力》を使わせることはできなかっただろう。

「私にいったい何が足りないのだろうか」

「あんたとリインさんに差があるとは思えない……」

「だけど、強いて言うならあんたは一人でやりたがっていたからじゃないのか」

「それを言うならリイン君だって私から見れば完璧だと思うが？」

「うまく言えないけど、あんたを見てみるとエースを思い出すんだ」

「お兄ちゃんを？」

突然出て来た名前にナーディアが口を挟む。

「俺にはエースって相棒がいた。ナーディアの兄さんでもあるんだけど、あの人は強くて頭が良くて何でもできる、それこそ完璧で、憧れていた」

ナーディアを伺い見ながらスウィンは続ける。

「だけどエースは死んだ。俺が殺した……」

でも今思えば、俺はエースに頼りっぱなしで、エースもそれ以上のことを俺に求めなかったからああいう結末になったんだと思う」

今まで振り返ることさえ苦痛だった最初の逃亡。

互いを監視し合う間柄だったこともあり、エースは自分を誘いはしたものの段取りは彼が全て行つた。

彼の能力の信頼もありスウィンは全てを彼に任せてしまっていたが、もしもその時もう一歩ずつ互いに歩み寄れていれば別の結末を迎えられたのではないかと今なら思える。

「すーちゃん」

「そう考えられるようになれたのはナーディアのおかげだ……」

結局、人間が一人でできることなんてたかが知れている。たぶん俺一人で逃げていてもきつとすぐに追い付かれて殺されていたと思う」「そういう意味だとなーちゃんも本当にすーちゃんのことを信じ切れなかつたんだと思う……」

だからあんな中途半端な策でエンペラーに勝てると思って返り討ちにされた」

「なあルーファス様。あんたが何を考えて、何を目的にしているかは知らないけど、それって本当にあんた一人でやらないといけないことなのか？」

スウインは顔見知りとなったルーファスがエースの二の舞にならないようにと思つて尋ねる。

「それは……」

偉大なる父を超えること。

それがルーファスの目的であり、生き甲斐だった。

今回のリインとの試合はある意味その試金石であり、突如として現れ急成長を続ける彼の實力を測るためでもあった。

しかしスウインに指摘され、ルーファスは今まで思考していなかった可能性を考える。

「……………は……まさか私がこんな感情があるとは」

兄貴分として肩を並べ、二人で偉大な父に挑む姿を想像し悪くないと感じてしまったルーファスは愉快そうに自嘲する。

「……………スウイン君、ナーディア君。これからもう一つ仕事を引き受けてくれないかな？」

壁を背に座らされていたルーファスは立ち直つて、二人に焚きつけた責任を取れと笑いかけるのだった。

・*

『《起動者》候補に告げる——』

頭の中に直接響く声。

闘技場の中心、魔法陣の中に顕現したのは黒い巨人。

『コレナルハ、巨イナルチカラ、ノ欠片——』

闘争の想念が昇華され、顕現した選定者に向かって走るのは三人。「額の部分に力が集中しているかな？　そこを貫けば倒せるはず、たぶん」

「聞いたな？　俺が何とかして引き摺り倒すからあんたは力を溜めておけ」

「ああ、任せたよ」

正気を取り戻し、呆然と立ち尽くす暴徒たちの間を駆け抜けてルーファス達は黒い巨人を目指す。

「十時方向からリインお兄ちゃん、四時方向からオーレリア將軍が来てる——つて速過ぎ!?!」

抜け目なく周囲の状況を拾得していたナーディアは壁際にいたはずのオーレリアの爆走を察知して声を上げる。

「すーちゃん、將軍の足を止めるからその間に早くっ!」

「分かったっ!」

「良いるーちゃん、成功したら報酬上乘せだからねっ!」

「ああ、期待しておきたまえ」

「報酬を払ってくれるまで死んだりしたらダメだからね」

ナーディアは抱えていたぬいぐるみにワイヤーを絡ませて回転させる。

自分達の位置を巨人から六時の方向として、四時の方向。

自分達に目もくれず追いついて抜いて誰よりも早く黒い巨人に斬りかかる彼女の姿を予想し、予測する。

『手ニスル資格ガ汝ニアリシカ——』

「そこっ!」

ナーディアはスリングショットの要領でぬいぐるみを投擲する。

『コレヨリ 《最後ノ試シ》ヲ——』

「その首もらったっ!!」

巨人の口上を遮り光の大剣——否、光の巨大剣を振り被り跳躍するオーレリアの顔にぬいぐるみが抱き着くように着弾し、爆ぜる。

「すーちゃんっ!」

「オオオオッ!」

横目でリインの姿を確認しながらスウインは巨人の足元に辿り着く。

暴徒に集中狙いにされていたリインの距離は遠い。

彼に悪いと思いつつ、スウインは仕事だと割り切り、彼が教えてくれた技を使う。

「二つ——」

双剣で右脚に小さな斬線を刻む。

「三つ——」

更に身を躍らせ左脚にも交差した斬線を刻む。

「三つ——四つ——」

巨人の身体を足場にしてその体躯を駆け上がり、胴体と首の後ろに斬線を刻む。

本来ならここで双剣を合わせて一つの長剣にするのだが、まだ刻剣は修復できていないので双剣のまま、機能を自分自身の戦技で補う様に四つ目の刻印に最後の二撃を喰わせる。

「刻剣《四煉》」

四つ目の刻印に当たった一撃を合図に、その場所を含め刻印を刻んだ逆順に連鎖して爆発が起きる。

威力は導力剣を使っていた時よりも小さいが、巨人のバランスを崩させるには十分だった。

「崩した——ルーファスさんっ!」

「ああ、よくやってくれた」

痛む体で無理をしてそこに辿り着いたルーファスは自分に向かって倒れてくる巨人に剣を構える。

ルーファス・アルブレアは目的のためならあらゆるものを捨てられる。

故に、一人で全てを成そうとする己を捨て、ナーディアとスウィンを信じて任せた今に不思議な高揚を感じる。

疲労困憊で今にも倒れそうなのに、構えた剣の動きに澱みはない。むしろ今までの生涯で最高の一撃を繰り出せる。そんな予感を胸に抱く。

「昏き力よ——」

剣気を研ぎ澄まし、黒く染まった剣をルーファスは渾身の力を込め、ナーディアが示した巨人の額に跳んで斬りかかる。

両手に握り締めた一刀両断。

その一撃は巨人の額を割り——弾き飛ばされた。

「がつ——」

技の反動を受け止め切れなかったルーファスの手から剣が弾き飛び、彼もまた弾むように吹き飛ばされる。

目の前で浮き上がったルーファスに巨人は叩き潰そうと手を振り上げる。

「——ここまでか」

最後は自分の力が足りなかった。

花道を作って送り出してもらったのにもう一押しが足りなかった己の力不足にルーファスは自嘲する。

そして無情にも巨人はその巨大な手をルーファスに振り下ろした。

「ルーファスッ!」

スウインが手を伸ばすがその手はあまりにも遠く、ルーファスは——

「クラウソラス」

何処からともなく飛来した剣に乗る少女が叩き潰されようとしていたルーファスを空中でかつさう。

「なっ——!?!」

「危ないところでしたね」

自分を抱え込む少女はジト目になってルーファスを非難する。

「君は……何故ここに?」

クロイツェン州で留守番を命じていたはずの彼女がここにいることにルーファスは驚く。

「……………何となく、来ないといけない気がしました。不合理的な理由ですが、来て正解だったようです」

命令を待っただけの少女の曖昧な答え。

少女は困惑しながらも、むしろ表情とは対照的によくやっただろうと言わんばかりに胸を張る。

「ルーファス・アルバレア。オーダーを」

そして無表情のまま指示を仰ぐ。

その様にルーファスは呆気にとられ——

「は……ははは……」

突然笑い出したルーファスに少女は首を傾げる。

「……………突然何を…………やはり不埒なことを考えているのですか？」

「いや、すまない」

なんとか笑いを治め、ルーファスは宣言するように彼女に命じる。

「あの巨人を倒す。私が割った額に連れて行ってくれたまえ」

「それは良いのですが、剣は？」

少女の確認にルーファスは剣を取り落としてしまったことを思い出す。

「ああ、そうかまずはそれを回収しなければ…………」

しかしルーファスが下を見れば、乱闘の末に闘技場に散らばった武器の山からルーファスが落とした剣は見当たらない。

「……………フラガラツハ」

表情に出さなかったが途方に暮れたルーファスに少女は足元の大剣となっている戦術殻とは別の名を呟く。

少女の背後に灰色の戦術殻が現れると、それは変形して細身の剣と変身する。

「どうぞ」

「あ…………ああ、ありがとう」

差し出された剣を受け取ってルーファスは思わず礼を述べる。

「では行きます」

少女は乗っている大剣を操縦し旋回させる。

巨人の正面に回り込むと、そのまま速度を上げる。

「——っ」

呼吸を整えてルーファスは剣を構える。

巨人は正面から突撃してくる二人を迎撃するために手を前に出し黒い球体を作る。

「回避を——」

「その必要はありません」

咄嗟の指示に少女は首を振り、その答えは巨人の背後にあった。

《鬼の力》を解放したリインによる背後からの強襲により、巨人は肩口から両腕を斬り落とされる。

「——っ」

《鬼の力》の凄まじさをその目で見せつけられたルーファスは息を呑むが、すぐに気持ちを切り替える。

霧散するエネルギー球の中を突っ切り、目の前に巨人の顔が迫る。

「オオオオオオオオオオオッ！」

彼を知る者なら耳を疑う雄叫びを上げ、ルーファスはクラウソラスの加速を乗せた突きを割れた額に突き刺した。

・*

コレニテ『最後ノ試シ』ヲ終了スル——

《起動者》ヨ、心セヨ——

コレナルハ“巨イナルチカラ”ノ欠片——

世界ヲ呑ミ込ム“焰”ニシテ“顎”ナリ——

・*

気付けばルーファスは見覚えのない操縦席に座っていた。

「……………ああ、やったのか……………」

見覚えはないはずなのに、そこがどこで目の前の端末が何なのか自然と理解する。

胸の中にあるのは手に入れて当然という気持ちはない。

「私もまだまだ研鑽が足りなかったようだ」

一人でも試練を乗り越えられると高を括っていた自分の未熟さを思い知らされた。

この席に座れているのは多くの者達の手助けがあったからこそ。

他者など利用するだけのもの。

それがルーファスの考えであり、協力者たちも純粋にルーファスを思っ手を手を貸したわけではない。

しかし、それでも胸に感じる充足感は今までに感じたものとは異なり心地よさを感じさせる。

「感謝するよ。君達のおかげで私は手に入れることができた……」

この《七の騎神》の最後の一騎——永遠を表す黄金の《エルⅡプラド》を！——ん？」

達成感に身を浸すルーファスだったが、《エルⅡプラド》がそれに気付く。

水平線の彼方。

海から浮上する巨大な球体。

「何だ……あれは……？」

困惑していると球体は中から割れて、巨大な魔煌兵が生まれる。

《魔煌兵》。

中世の錬金術師が騎神を模して作り出したゴーレム。

騎神から得た知識からそれが何なのか理解したルーファスは不敵な笑みを浮かべる。

「——ふっ、目覚めたばかりの機体には御誂え向きな相手か」

《金》は巨大化した「フラガラツハ」を手に海の向こうの魔煌兵を見据え——次の瞬間、別の魔煌兵が《金》の前に転移して現れる。

「むっ——」

そして、それは《金》の前だけではない。

別の場所で二体。

ラインとルトガーの前に色違いの魔煌兵が現れる。

故に二人はそれを呼ぶ。

「来いっ！ ヴァリマルツ！」

「来なっ！ ゼクトールツ！」

そして——

「フラガラツハが取られた……やはり不埒な人のようですね。ルーファス・アルバレア」

黒い戦術殻に抱えられた少女は飛んでいく《金》の背に小さく呟いた。

117話 紺碧の海都XVI

その魔煌兵たちは知識として与えられたものとは違っていた。

鈍重そうな太めの体躯はより細く流線的になり騎神に近い形となり、その動きも一定の動きを行うプログラムではなく柔軟な思考を伴う武道の動き。

「っ——」

繰り出された槍の一撃を《金》は受け止める。

慣れない空中戦だということはい言いつてもならない。

知識と感覚のすれ違いに瞬く間に順応したルーファスだったが、それでも魔煌兵の猛攻に防戦を強いられていた。

「魔煌兵……まさかこれ程とは……」

その槍捌きは達人級に迫る。

しかし《金の騎神》を駆るルーファスは決してそんな魔煌兵に引けを取っていないかった。

今は一人で戦っていても、誰かと協力した経験は確実にルーファスの中の何かを変えていた。

「だが今の私とこのエル＝プラドの敵ではないっ！」

劇的な変化があったわけではない。

しかし体は疲弊し切っていたにも関わらず、その動きに澱みはない。

神速の一突き、その切先を《金》は剣で叩き落とし返す刃で魔煌兵の胴体を両断する。

「——良い肩慣らしだった。礼を言わせてもらおう」

両断されて海へと落ちて行く魔煌兵にルーファスは黙禱を捧げ、巨大魔煌兵に向き直る。

「さあ、次は君の番だ」

剣を向けて通じるか分からない宣言をして、《金》を飛翔させる。

その瞬間、《金》は背後から貫かれた。

「がっ——!?!」

胸を貫通した刃を見下ろし、ルーファスはフィードバックした痛み

に呻きながら背後を振り返る。

そこには――

「《エルⅡプラドー》だと……?」

そこにいたのは《金》と同じ姿をしたモノクロの「騎神」。

《金》の目で解析した情報によれば「騎神」により近付けた「魔煌騎兵」。

その魔煌騎兵は《金》の背中を蹴り飛ばして、剣を引き抜く。

「ぐっ――プラドー、損害は?」

『幸いにも「核」は外れた……しかしこれ以上の戦闘は危険と判断、戦域からの離脱を推奨する』

「そうしたいが、君の贗物は逃がしてくれそうにないようだ」

モノクロのエルⅡプラドーから感じるのは尋常ではない敵意。

そして改めて向き直ってルーファスは魔煌騎兵が持つ二つの剣に気付く。

「聖剣《イシュナード》と《エルヴァース》だと……」

もちろんルーファスが知っている剣は人間が扱うサイズであり、贗物のエルⅡプラドーが持つ物とは関係はない。

だが、それでもアルバレアの兄弟剣を模した剣にルーファスは少なからず動揺する。

『――』

その隙を逃さず、贗作のエルⅡプラドーは《金》に襲い掛かる。
「くっ――」

《金》と同等の速度で接近してきた双剣の連撃を《金》は大きく後ろに飛んで回避し――背後からの狙撃に《金》の背中が爆ぜた。

「っ――今度は何だ!?!」

目の前の魔煌騎兵を気にしつつ、背後を伺えば大型魔煌兵の周囲に展開した弓を持った魔煌兵たちが十数体で隊列を組んでいた。

「プラドー、オルデイスまで後退するっ!」

戦いは数だと言わんばかりの戦術にルーファスはすぐに撤退を決める。

だが、それを阻むように魔煌騎兵は《金》の前に立ち塞がり、双剣

を突き付ける。

「——まさか私がこんな簡単な策に陥るとは……」

“騎神”を得た達成感や高揚はもはやなく、前に金を模した魔煌騎兵、後ろに弓兵隊。

さらに大型魔煌兵の背後の球体からは更なる魔煌兵が次々に発進しているところだった。

そして、ルーファスが見ている中で唐突に大型魔煌兵はその姿を消した。

・＊

人がごった返す闘技場では戦えないと、《灰》と《紫》は示し合わせたかのように別の場所へと魔煌兵を引き連れて移動する。

《灰》はオルデイスの湾岸へ。

《紫》は街道へ。

「ルーファスさんっ！ 戻って下さいっ！」

魔煌兵の猛攻を捌きながらリインは海の方こうで戦いを始めた《金》に呼び掛ける。

だが当然のことながらルーファスにその声は届かず、彼は沖合の海上で槍を持つ魔煌兵と戦い始める。

「リインッ！」

同乗しているイオが警告の声を上げ、リインは振り下ろされた巨槌を弾く。

「お前達は何なんだ？ 何が目的で俺達を襲う!？」

今度は目の前の魔煌兵に向かって尋ねる。

目の前の巨槌を武器にする魔煌兵はあの巨大な魔煌兵の端末。それを通して敵意を向けてくる存在の視線は帝国解放戦線とは異なる。

しかし、魔煌兵はそれに応えることはなく、代わりに雄叫びを上げる。

「っ——」

湾岸とは言え、街からそれ程距離を取っていたわけではない。

魔煌兵の咆哮によって周囲の場が乱れ、上位三属性の働きが現れる簡易的な異界となる。

そしてそれは魔煌兵側にとっても意外な効力を発揮した。

「あ、まずい」

「イオさん？」

「今の影響で周囲のオーブメントがオーバーロードして壊れたみたい」

弾け飛んだ街灯や煙を上げる導力車の画面を見ながらイオは周囲の被害状況を報告する。

「それは……範囲はどれくらいですか？」

悪化した状況にリインは息を呑み、最悪が起きないことを願う。

「正確には分からないけど、ゼクトールの方に行ったのが同じことをすれば——」

応えている間に遠くの方から先程と同じ咆哮が木霊する。

「っ——イオさん。ラウラ達に連絡を！ オーブメントが壊されたなら魔獣が街に溢れかえる！」

《ARCCUS》をイオに投げ渡す。

魔獣は街の中でも下水道などには存在している。

それが街中に出て来ないのは外には魔獣除けが存在しているからであり、それが機能をなくせばオーブメントが入り乱れている現在の街では魔獣にとって格好の餌場になる。

ルーファスの事もあり、悠長に対話を試みる暇はないと判断したリインは目の前の魔煌兵を倒すことを決める。

「行くぞヴァリマール」

『応っ！』

踏み込んで太刀を一閃。

魔煌兵の反応は速く、巨槌の長い柄でその一撃を受け止めるが、それを両断してその刃は魔煌兵の胸を掠める。

「遅いっ！」

たたらを踏んで体勢を立て直そうとする魔煌兵にヴァリマールは返す刃を振り抜き——後ろから何かに引かれて空振りする。

「何っ!？」

振り返れば海から伸びた鋼の触手がヴァリマールを背後から絡み取っていた。

そしてリイン達は鳥形の魔獣が内側から七耀石が増殖して巨大な魔煌の獣へと変異していく光景を見せつけられた。

ヴァリマールを絡めとる触腕も生物的なものよりも硬質的な魔煌兵のそれに近い材質に見える。

そのことが意味することは。

「魔獣を魔煌兵にしているのか!？」

とんでもない力に驚くのも束の間、ヴァリマールは抵抗する間もなく海の中に引きずり込まれるのだった。

・*

「ちっ——」

街道で戦うルトガーは思わず舌打ちした。

「何だお前は?」

最初に出て来た魔煌兵はすでに倒した。

しかし次に出て来たモノクロのゼクトールは先の魔煌兵とは一線を画す強さを持っていた。

「答えないか……ま、期待はしちゃいないんだけどな」

気になるのはモノクロのゼクトールが使う武器。

両手に斧を持つ姿はルトガーの知る誰かを彷彿とさせるが、それは

《紫》も同じだった。

『まさか《ベルセルグ》なのか?』

「なんだゼクトール知り合いか?」

『《獅子戦役》の頃の起動者だ。確か《赤い星座》という猟兵団の副団長を務めていた男だ』

「おいおい、マジかよ……」

確かに歴史の浅い《西風の旅団》と違い《赤い星座》は暗黒時代から続く歴史のある猟兵団。

250年前の起動者が猟兵团だったと聞いて、ルトガーも真つ先にその可能性を頭に思い浮かべたがそれを肯定され、ルトガーが感じていた既視感の正体に笑う。

「差し詰め、こいつはシグムントの御先祖様ってことか。はっ、これは良い」

適当に相手をして適当に撤退するつもりだったが、ルトガーはそれを改めてバスターグレイブを構える。

『ルトガー、私もデュランダルで——』

「必要ない。シオンはそのままゼノとレオを連れて避難していな」

オーブメントを介した通信にルトガーは突き放すような指示を出して突撃する。

バスターグレイブと二つのバトルアックスが激しい火花を散らせてぶつかり合う。

大剣が閃き、斧が受け止め、反撃する。

一流の猟兵に引きを取らないモノクロのゼクトールだったが、徐々にその戦況は傾いていく。

「はっ——所詮は魂の乗ってない木偶か！」

ルトガーは叫ぶと共にバスターグレイブを薙ぎ払い、モノクロのゼクトールの手から二つの斧を弾き飛ばす。

「じゃあな。少しは楽しめたぜ」

無防備になったゼクトールのルトガーはバスターグレイブを突き出し——その突きは斧によって弾かれた。

「——何っ!?!」

モノクロのゼクトールの両手は弾いた反動で上がっている。

それでも《紫》の一撃を防いだのは、モノクロのゼクトールの背中に生えた二本の腕に握られた斧。

「四つ腕のゼクトールだど!?!」

人間の構造ではありえない四つ腕のゼクトールにルトガーは虚を突かれ——《紫》の背中に弾き飛ばしたはずの斧が飛来して突き刺さる。

「ぐっ!?!」

怯む《紫》に四つ腕のゼクトールは新たな斧を両手に作り出して襲い掛かる。

四つ腕から繰り出される怒涛の攻撃に《紫》は歪な動きをしながらもバスターグレイブを盾に後退して凌ぐ。

「くそっ……」

フィードバックした背中の中の深手にルトガーは歯噛みしながら反撃の瞬間を探る。

が、何を思ったのか四つ腕のゼクトールは突如として攻撃を中断し後ろへ跳躍、《紫》から距離を取る。

「何を——」

ルトガーがそれを不信に眉を顰めるが、時はすでに遅かった。

退いた四つ腕のゼクトールの背後に空間転移で現れた大型魔煌兵。

大型魔煌兵は現れるやいなや、騎神の十倍の体躯のそれは手に握られた巨大な剣を《紫》に向かって振り下ろした。

「——っ!？」

まるで空が降って来るような一撃。

身を竦ませることなくルトガーは咄嗟に《紫》を走らせるが、巨大な剣の軌道から逃れることはできず《紫》はその半身を潰され、衝撃に残った手足をバラバラにして宙を舞って地面に叩きつけられる。

操縦席では赤いアラートが明滅して機体の損傷具合を知らせて来るが、ルトガーにそれを確認している余裕はない。

「……………生きているか、ゼクトール？」

『起者——からの——脱を推——る』

ノイズ交じりの言葉。

どうやら撤退を促しているのだろうが、全身をバラバラにされて何を言っているのだとルトガーは苦笑する。

「そんなことは良い。それより早く機体を直せ」

ルトガーの指示に帰って来たのは沈黙だけ。

「……………おいゼクトール？」

いつまで経っても機体を修復させようとしないうゼクトールをルトガーは訝しむ。

『そ——うな機能は——ない』

「そんな馬鹿な《灰》はそうやって戦闘中に直してただろ？」

『……………』

ルトガーの指摘に《紫》は沈黙する。

「ちっ——」

当てが外れたと言わんばかりにルトガーは舌打ちをして、全身に振動を感じ浮遊感を感じた。

「おいおい……………」

割れて半分が黒く染まったモニターの中でルトガーは思わず顔を引きつらせる。

頭と胴だけが残った無惨な姿の《紫》を大型魔煌兵は拾い上げる。

「まさか、叩き潰すってか？ 念入りなことだ」

手足を失い、背中の飛行ユニットも壊れた《紫》に抵抗する術はなく、されるがままに大型魔煌兵の眼前に連れて行かれる。

大型魔煌兵は《紫》を観察するようにジッと見つめ——おもむろに胸の装甲を左右に開いた。

そこにはまるで口のような穴があり、大型魔煌兵は《紫》をそこに投げ込み装甲を閉じた。

「ゼクトールを喰っただと…………？」

「団長オー————っ！」

大型魔煌兵は足元で叫ぶ二人の存在を意に介さず、踵を返して新たな獲物を見る。

・*

刻一刻と減って行く霊力のゲージにルーファスは焦りながら目の前のエルⅡプラドールに斬りかかる。

しかし、モノクロの騎神は着かず離れずの距離を保ち、《金》の逃走を防ぎ、もしくは弓兵を倒そうと背を向ければ襲い掛かる。

「どうやらこの敵は戦いと言うものをよく分かっているようだ」

実にルーファス好みの方法で敵を追い詰めていく相手にルーファ

スは苦笑する。

敵は焦ることなく、《金》の霊力が尽きるのを待てばいい。

後から出て来た魔煌兵の大群も、遠巻きに包囲網を作り《金》の逃げ道を封じている。

「チエックをされたのは私の方だったか……」

魔煌兵が騎神もどきと侮った故のミス。

《金》の起動者になって舞い上がってしまったことは言い訳にもならない。

「いつの間にかゼクトールとヴァリマールの反応がなくなっている……」

ゼクトールはともかくリインが乗るヴァリマールがいなくなっていることにルーファスは軽く驚く。

だが、同時に納得する。

人の良い彼の事だ。舞い上がっている自分を諫めようと注意力散漫になっているところをやられてしまった姿がありありと思いつく。

「私が他人の足を引っ張る側になってしまおうとは……」

すまないね。エルⅡプラドー、こんな未熟者を起動者にさせてしまったて」

『諦めるのかルーファスよ?』

「現状では既に詰んでいる。これ以上の戦闘は——」

言いかけた言葉をルーファスは止める。

言葉を呑み込んで思わず見入ったのは索敵の画面で明滅するヴァリマールの反応。

「……………君は諦めていないのか……………」

その光点の瞬きにルーファスは心が揺れる。

リインもまた詰んだ状態に陥っているのだろう。だがそれでも諍っている事実にはルーファスは目を伏せて、弱気を振り払う。

「エルⅡプラドー。君の“力”を私に送り込むことはできるな?」

『何を…………?』

「リイン君や《鋼の聖女》——《銀の起動者》が扱っている《鬼の力》

はおそらく「騎神」から供給された「力」を自分の力と合わせて増幅したもの……

それができたのなら、君の贗物を倒すだけの「力」を得ることができるとは思えない」

『我にそのようなプログラムはない……』

仮にあつたとしても我の「力」を人の器で受け入れるなどできるはずがない』

「だが事実、ヴァリマールは出来たぞ。ならば最上の騎神である君にできないはずがないだろう。それともここで果てるかね？」

堂々と言い切るルーファスに《金》は沈黙する。

『ならば精々諍って見せるが良い』

次の瞬間、その言葉と共にルーファスの中に「力」が流れ込む。

「ぐっ——これが《鬼の力》……」

激流を体に流し込まれたような力の躍動、湧き上がる力に理性が削れる。

「ぐ……ぐぐ……」

憎悪が殺意が増幅され、目の前が真っ赤に染まって闘争を求める。動きを止めた《金》に贗物のエルⅡプラドールが襲い掛かる。

「——リイン・シユバルツァーにできて——」

走馬灯のように脳裏に浮かぶのは先程のリインの姿や《鋼の聖女》の姿。

それを思い出し、ルーファスは叫ぶ。

「私にできない道理などないっ！」

動かない《金》に向かって交差するように二振りの聖剣が振り下ろされ——空を斬る。

剣戟を最低限の動きで躲し、背後を取った《金》は先程のお返しだと言わんばかりに無防備な背に剣を突き立てる。

一拍遅れ、重なり合ったエルⅡプラドールに矢が降り注ぐ。

次の瞬間、その射線から《金》は消え矢を置き去りにして弓兵隊との距離を詰めていた。

「墮ちろっ！」

剣の一振りですべての魔煌兵をまとめて両断し、返す刃で更に三体の魔煌兵を斬り伏せる。

そしてその場から離脱。

遅れて殺到した矢が両断された魔煌兵たちに降り注ぐ。

「ぐっ——」

殺人的な加速に身が軋む。

それでもルーファスは《金》を操作することを緩めない。

弓兵たちが捉えられない速度で空を駆け巡り、《金》は一つまた一つと小隊を落としていく。

だがそれはさせないと背中を貫かれたはずの贗作のエル・プラドーが《金》の前に立ち塞がる。

「邪魔だっ！」

加速の勢いをそのままに剣を突き刺す。

霊剣の一撃は交差した二つの聖剣を砕き、贗作のエル・プラドーの

胸——“核”を貫いた。

その瞬間、それは笑ったようにルーファスは感じた。

贗作のエル・プラドーは大きく腕を広げ、《金》を抱き締める。

そして内包する霊力が霧散する前に暴走させ——

「まさか自爆する気か!？」

逃げる間もなく、贗作の自爆に《金》は呑み込まれた。

・
*

アウロス海岸道の砂浜に墜落した《金》に大型魔煌兵が一步、また一步と大地を轟かせ歩み寄る。

しかし、それが辿り着くよりも先に《金》は小型の魔煌化した魔獣に群がられて、その身を喰われていく。

「——ここまでか……」

もはや指一本動かすこともできず、《金》を通して自分が喰われる体験をしていることにルーファスはまるで他人事のように感じた。

「私は全力を尽くした。ならばこの結末は潔く受け入れるしかあるま

い」

身体の痛みと装甲を剥ぎ取られ咀嚼される音。

赤いアラートが明滅して起動者に危険を知らせるが、ルーファスも《金》ももはや動くことはできない。

そして画面一杯に移った魔獣がその顎を大きく開き——風の弾丸が横殴りに吹き飛ばした。

「兄上っ！」

アーツを放ち、群がる魔獣の一体をユーシスが斬り伏せる。

「ここは任せろユーシスッ！」

「エマも一緒に行くがいい！」

群がる魔獣たちをガイウスとラウラが蹴散らして牽制する。

「もうくなーちゃん達に報酬を払わないで死んだりしたら許さないんだからね」

「おいおい、そんなこと言ってる場合か……」

ナーディアとスウィンがラウラ達の逆側を守る。

「行くよがーちゃん！ あーちゃんとかーちゃんにボクたちの力を見せて上げよう！」

「何ですか貴女は？ 初対面なのに馴れ馴れしい……それから変な呼び方をしないでください」

空から襲って来る魔獣はミリアムと銀の少女が対応する。

「君たちは……」

自分を守る彼らにルーファスは目を丸くする。

「大丈夫ですか兄上っ！」

ユーシスは横たわる《金》の顔を覗き込んで叫ぶ。

焦って不安に胸がはち切れそうになっている初めて見る弟の顔にもやはりルーファスの反応は芳しくない。

「な………何をしているユーシス！ すぐに逃げるんだ！」

「嫌です。兄上を置いて行けるわけありません！」

「駄々を捏ねるな！ あれが見えてないわけではあるまい！ 生身で敵う相手ではない！ お前達は逃げて——」

「だからできるわけがないと言っているんですっ！」

兄の言葉を遮ってユーシスは叫ぶ。

「あの大型魔煌兵は先程《紫の騎神》を食べました……」

おそらく次の狙いはその《金の騎神》です。だから早くルーフアスさんはそこから出て来てください。一緒に逃げましょう」

叫ぶだけのユーシスに代わってエマが状況を説明する。

その間にも外部からの操作で起動者を降ろそうと試みるが、《神騎合一》の影響なのか初めての搭乗とは思えない霊的リンクの強度にエマは苦戦する。

「エマ君、それはおそらく違うだろう……」

あれは《起動者》と《騎神》の両方を取り込もうとしている。だから君たちの抵抗は無駄なのだよ」

「だったらなおさら兄上を置いて行くわけにはいきません」

「ユーシス……」

聞き分けのない弟にルーフアスは苦笑する。

思えば彼が自分の言葉にここまで反発したのも、感情を剥き出しにして叫ぶ様も初めて見る。

それだけではない。

自分を守ろうとする者たちの背中。それさえもルーフアスにとって新鮮で胸が詰まる。

「兄上の主張は後でいくらでも聞きます。だから今は——」

「まずいつ！ 下がれっ！」

ユーシスの言葉にラウラの声が被り、モノクロ色のゼクトールが彼らの前に立つ。

「もう一度言う、私を置いて逃げるんだユーシス」

「嫌ですっ！」

ユーシスはそれを拒絶して剣を抜いてモノクロのゼクトールの前に出る。

魔煌騎兵はⅦ組とスウィン、ナーディア、そして銀の少女を睥睨して斧を振り被る。

その瞬間、海が爆ぜ、一本の杭がモノクロのゼクトールに突き立ち、瞬く間に白く染まって崩れ落ちる。

「何が――」

呆然と立ち尽くす彼らに残った魔獣たちが襲い掛かろうとするも、雪の様に降り散る塩に振れると魔獣たちもまた塩の塊となって崩れ落ちて行く。

「これは……いったい……」

目の前の現象にラウラ達は困惑する。

「まさかこれは『塩の杭』!?!」

エマだけがその場で起きたことを言い当て、爆ぜた海を振り返るとそこには光の翼を広げたヴァリマールがいた。

その姿は《金》に劣らず酷いものだった。

深海に引きずり込まれたせいで装甲は水圧で歪み亀裂が無数に走っている。

見るからにボロボロな姿なのに、剥き出しになった胸の装甲の内に納められたオーブは起動者の高ぶりを示すように唸りを上げて回転する。

「オオオオオオオオッ!」

ヴァリマールからラインの雄叫びが響き渡り、凄まじい霊力が迸る。

『――』

巨大魔煌兵が手を挙げるとそれに合わせて、無数の魔煌兵たちがヴァリマールを取り囲み、弓を構える。

一閃。

白い刃を伸ばした剣が振り抜かれ、白い風が巻き起こる。

両断された魔煌兵たちはもちろん、その風に触れた魔煌兵たちもまた体を白く染められ崩れ落ちていく。

「何だ……これは……?」

あまりに一方的な戦いにユーススは立ち尽くす。

そこに影が差す。

何事かと振り返れば巨大魔煌兵が振り上げた剣がユースス達の頭上で太陽を隠し――ヴァリマールの横撃が巨大魔煌兵をよろめかせた。

たたらを踏んだ巨大魔煌兵は追撃を掛けてくるヴァリマールを視認して、次の瞬間その場から掻き消えた。

「転移術!？」

あの巨体を一瞬で転移させた術にエマが驚く。

「エマツ！ ルーフアスさんを連れて早く避難を！」

ヴァリマールから聞こえてくるリインの声。

彼はエマ達に背を向け、海へ転移した巨大魔煌兵に向き合う。

「いいや、それには及ばない」

わずかに回復した霊力を使ってルーフアスは《金》を立ち上がらせる。

「兄上……?？」

「意地を張らないで下さいルーフアスさん。そんな体で戦うなんて無茶だ」

「《永遠の金》。最高の騎神とも言われた存在がここで退くのは彼のプライドに関わるのでね」

「だからって……」

「それに無策ではない」

渋るリインにルーフアスは不敵な笑みを浮かべ、虚空に向かって呼び掛ける。

「見ているのだろうか？ 約束通り準起動者として君の力を借りたい。

そして思う存分、戦うと良い！」

「ルーフアスさん?？」

誰に向かって言っているのかリインが訝しむと、すぐに返答がその場に響き渡る。

「はっ——待ちわびたぜ！」

いつの間にか《金》の足元にいた彼は嬉しそうに頬を釣り上げ、光になって《金》に吸い込まれる。

変化は劇的だった。

剥き出しになった「核」を中心に血管を思わせる管が全身に広がり、背中が燃え上がり焔は赤い翼となる。

そして焔が羽衣のようにたなびく。

『ククク、良いじゃねえか』

《金》を殻にして己を解放した彼は50年待ち望んだこの瞬間に嗤う。

『さあ、引き出してもらおうじゃねえか——喪った記憶と、この世に現れた理由を！』

“劫炎”を纏った《金》は飛翔すると巨大魔煌兵に殴りかかった。

118話 紺碧の海都XVII

それは遠い過去の出来事。

「私が言うのも何だが……もう楽になって良いのではないか？ この上、お前は何のために諍う？」

深々と雪が降る中、黒いフードとマントで全身を覆い隠した存在は祭壇で祈りを捧げる少女の背に話しかける。

男とも女とも取れる問い掛けに少女は立ち上がり、背中を向けたまま応える。

「私には……私にはまだ助けられる人が残っているから……」

「一体誰の事だ？ 地精たちは既に——」

「ううん、そうじゃない」

言葉を遮って否定する少女に黒装束は首を傾げる。

「……………」

「遠い未来で《黄昏》と対峙するローゼリアさんやアルノールの子たち……

そして《アルベリヒ》という呪縛に捕らわれてしまった——」

少女は振り返って黒装束を真っ直ぐに見据えてその思いを伝える。

「サライちゃん……あなたたちを助きたい」

「……気付いていたのか」

その少女の言葉に黒装束はフードを外す。

「……………」

「だがお前の指摘は的外れだ。この《器》は確かにサライと呼ばれていたがその魂は既に存在しない……」

私の呪縛から解放するなど意味のないことだ」

「ううん、そんなことはない……」

貴方は確かに《アルベリヒ》だけど今はサライちゃんでしょう？

サライちゃんが助けてくれたから私は真実に辿り着くことができた。だから、ありがとう」

「……………まさかそこまで気付いていたか」

少女の言葉に黒装束は肩を竦める。

それが言外の肯定だった。

「だが私にできることはそこまでだ……」

お前も《黒》が紡ぐ因果に諍う事はできないと思いい知ったはずだ」

「……うん」

「《アルベリヒ》の言う通り、《黒》は「魔女」ではなく「地精」を選んだ……」

それは《鋼》が「地精」を選んだことと同義……

この呪縛はいわば私たち「地精」の罪の証、呪縛から解放するなんて意味のない話だ」

「サライちゃん……」

「それにお前が作り上げた《魔煌兵》は《灰》にすら及んでいない。そんなもの千体あつたところで《黒》に届きはしないだろう」

「分かっている……でも、それでも「それ」が必要になる時が来る」

少女は黒装束に微笑むと、徐に目を閉じ、人差し指を自分のこめかみに突きつける。

「な、何を……まさか——」

黒装束が止める間もなく、少女は靈力で撃ち抜いた。

意識を失い倒れる少女に黒装束は息を呑む。

「な、なぜそこまで出来る……」

その問いに少女は答えることはなく、精霊回廊の門が開き少女の身体は呑み込まれ、消えた。

・*

その日、オルデイスの市民は死を覚悟した。

水平線の上に浮かぶ巨大な要塞。

そこから現れる数え切れないほどの鋼の人形の侵攻。

それは海の魔獣を従え、軍勢を増やしながらオルデイスに向かって来る。

それに加えて陸からも魔獣除けの気配が失い、上位三属性の活性化による場の影響で狂暴化した魔獣たちがオルデイスへと集まって来

る。

導力文明により魔獣除けの技術が発展した現在では見ることもなくなつた魔獣の暴走。

陸には魔獣、海には魔煌兵。

逃げ場などどこにもない。市民はただ祈ることしかできなかった。そして、それは現れた。

「はっ——」

《金》が愉し気な声を響かせ、その中心に突撃する。

正面からの突撃を魔煌兵たちは一糸乱れぬ動きで距離を取り、《金》を陣形の中央に配置するように広がり、一斉に矢を放つ。

「それがどうした?」

《金》は両手を振り広げて熱波を全方位に放つ。

それに触れた魔煌兵は一瞬で焔に包まれ灰も残さず焼滅する。雲の様に纏まつていた陣形に穴ができる。

「次はどうだった?」

吠える《金》に襲い掛かったのは海から飛び出した巨大な触手。

触手は《金》を掴むと水面に叩きつけ、そのまま水中へ引きずり込み——巨大な火柱が海中の魔獣を焼き払う。

「ははー! どうしたその程度か!? そんなんじゃ足りないぞっ!!」

無数の火球を狙いもつけずに乱れ撃ち、命中した魔煌兵は抵抗することもできずに焼き尽くされる。

しかし、それでも怯まず突撃して来る魔煌兵に《金》は嗤う。

「イグナプロジオン」

二つの火球が魔煌兵の眼前でぶつかり合つて巨大な爆発を引き起こす。

突撃した魔煌兵は防御に己の霊力の全てを費やして、その爆発を突き抜けて灰となる。

「あん?」

その通り道をモノクロの翼を持った魔煌騎兵が先の魔煌兵とは比較にならない速度で駆け抜ける。

ランスの一撃が《金》を捉え——咄嗟に反応した《金》は左肩を抉

られる。

「はっ——その突き。まさか聖女か!？」

左腕をもぎ取られながらも《金》は振り返って突き抜けて行った魔煌騎兵を振り返る。

魔煌騎兵は大きな弧を描いて方向転換する。

それに合わせ、盾となる魔煌兵たちがそこに集まる。

「良いぜ来いよっ!」

先程の焼き直し、放たれた火球を魔煌兵が盾となって道を作り魔煌騎兵は神速の突きを《金》に——

「その程度か?」

槍の一突きを紙一重で躲し、《金》は魔煌騎兵の頭部を掴む。

「そこそこの再現度だが、あの女の突きはもつと速くて強かったぞ」

比べるまでもないが、それでも彼女を彷彿とさせた一撃を褒めて

《金》は頭を掴んだ手に焰を込める。

「ヒートエンドッ!!」

頭部から焰を叩き込まれた魔煌騎兵はその体を内側から膨張させて爆発した。

「さあ! 次はどいつだっ!？」

左腕を失ったにも関わらず劣ろうことのない咆哮に、魔煌兵もまた怯むことなく《金》に殺到した。

・*

上位三属性の活性化による、オーブメントのオーバロードは魔獣除け以外にも深刻な状況を作り出していた。

「くそっ! こんな時に導力銃が壊れるなんて」

軍や憲兵隊に配備されている導力火器の故障。

それに加え、街道への門の開閉器も壊れ、押し寄せる魔獣の群れに軍人たちは剣や槍での応戦を余儀なくされた。

また通信機もその例にもれず、門番たちは少ない人数で防衛線を構築するしかなかった。

「これもテロリストの仕業なのかよ!」

「泣き言を言うな! バリケードが完成するまで何としても持ちこたえろ!」

仲間の叱咤激励が飛ぶが、最前線で魔獣を食い止める役割を任された者達の士気は低い。

領邦軍の中でも平民出身、去年まで士官学校に通っていた新人たち。

死んで来いと聞こえる命令だったが、街を守る使命感で誤魔化して剣を振るう彼らは途切れることのない魔獣の増援に心が折れそうだった。

「ちくしょうっ! 俺はこの戦いを生き残ったら《海風亭》で働いているあの子に告白してやるっ!」

「ははっ! なら俺はこれが終わったら貯金を使ってあの《グランII シャリネ》を買ってやるっ!」

現実逃避するように叫びながら新兵たちは必死に魔獣を倒して行く。

彼らは気付いている、バリケードが完成しても自分達は中に戻れないことを。

それでも戦うのは無様に引き籠ろうとしている貴族の上司のようにはなりたくないという意地と家族や友人、隣で戦う戦友のため。

「女神様……」

だがそれでも士気を保ち続けられるものはおらず、剣が折れた兵士は死期を悟って天を仰ぐ。

そして、それを見た。

「え……っ?」

降って来たのは巨大な剣。

魔獣の群れの中心に突き立ち、白い結晶の津波が溢れて魔獣の群れを呑み込んだ。

「え……っ?」

死を覚悟した兵士たちは思わず目を疑った。

そして巨大な剣に遅れて飛来するのは帝国時報で連日記載されて

いる《灰の騎士》。

「無事ですな〜!」

大地に突き立った剣を拾って振り返る巨人から聞こえてくるのは少年の声。

「あ、ああ……」

何が起きたのか、自分が助かったことに実感できず兵士は頷く。

「よかった……失礼します」

安堵の言葉を吐き、《灰の騎神》はおもむろに城門に近付く。

「お、おい……」

巨人の歩みを兵士たちが止めることはできず、《灰の騎神》は城壁に触れる。

《灰の騎神》の背中への光の翼が輝き、素人目で見ても分かる力の奔流を感じさせる。

「我が右手に在りし星の杯よ。天より授かりし輝きを持って我の盾となれ——グラールスファイア」

変化は劇的だった。

《灰の騎神》が触れた場所を起点に白いゼムリアストーンが結晶が溢れ出し、城壁を覆い尽くしていく。

瞬く間に城壁は結晶群の壁へと変化する。

「——『虎威』のクオーツの効果が付与した結晶です。これで外からの魔獣は大丈夫なはずですよ」

「え……は……何を……?」

何を言っているのか分からず、兵士は呆然と振り返れば城門に集まってきた魔獣の群れが蜘蛛の子を散らせるように逃げ出していた。「とは言っても、それでも向かって来る魔獣もいるかもしれないので決して油断はしないで下さい。残敵の掃討と街の中の魔獣の排除をよろしくお願いします」

返事を待たず《灰の騎神》は光の翼を広げて飛び去ってしまった。た。

「……………これは夢か?」

その眩きはゼムリアストーンで覆い尽くされた城門がそれを否定

する。

「《灰の騎神》って言えば貴族だよな……？」

「あ、ああ……」

聞こえて来た声は彼らが知っている偉ぶっているだけの貴族ではなかった。

その態度と、見せつけられた奇蹟の力に兵士たちは噂で語られている存在が真実だと知る。

「あれが……『超帝国人』」

眉唾で平民の目からも増長と不敬と思わせる呼び名だったが、オルデイスの兵士たちはそれが彼に相応しいものだったのだと受け入れ、この奇蹟を語り継ぐことを決意した。

そうとは知らず、リインはオルデイスを上空から見下ろして状況を観察する。

「外の魔獣はあれで何とかなるはず……」

街の中は……オーレリアさんが動いているか、それなら「安心だ」状況を把握したオーレリアの指揮の下で街の中に現れた魔獣たちは排除されている。

そして顔を上げたリインが見たのは海上で数多の魔煌兵に囲まれて戦っている《金》の姿。

そして《金》の背後にモノクロのヴァリマールが忍び寄る。

「リイン『空の翼』を」

「了解」

白い光の翼はリインの力によって黄金に染まる。

そして刹那で数十セルジュの距離を疾走した《灰》はその勢いのまま、贖物のヴァリマールを両断した。

「背中ががら空きだ」

「ちっ——」

遅れて気付いたマクバーンは舌打ちで応える。

「街はもう良いのかよ？」

「ああ、外壁に応急処置をしておいた街の中はオーレリアさん達に任せれば良いだろう」

《金》と《灰》は敵のど真ん中で平然と言葉を交わす。
そこにあつたのはまさに理不尽な“焰”と“塩”。

二つの力が満ちた場は弱い魔煌兵が近付くだけで燃え上がり、白く染まって崩れる煉獄のような光景が広がる。

「なら雑魚は任せた。俺はあのデカブツをやる」

「それは良いけど、ルーファスさんは……?」

「私なら……問題ない……」

《金》から聞こえてくるもう一つの苦し気な声。

本来ならサポート程度の準起動者の役割をあえて逆転させ、準起動者にメインに機能の大部分を譲渡しても戦力低下にしかならない。

数百の魔煌兵に囲まれながらも蹂躪する様に戦えていたのはその準起動者が規格外の存在であるから。

「ルーファスさん……それ以上マクバーンに戦わせたら取り返しのつかないことに——」

「邪魔をしないでくれたまえリイン君。もう少し、もう少しで何かを掴めそうなのだから」

取り付く島もないルーファスの言葉にリインはならばと《金》に背中を向ける。

「あの大きな魔煌兵は俺が倒します」

一方的に宣言してリインは《灰》を飛ばす。

「なっ——待ちやがれっ!」

遅れて《金》が焰を背面ユニットから放出して加速する。

空間圧縮による超加速からの飛翔と焰の勢いに任せた超加速の突撃。

我先にと、《灰》と《金》は大型魔煌兵に突撃し繰り出した必殺の刃と焰は——空を斬る。

「っ——」

突然、目の前から消失した大型魔煌兵は体を横に入れ替える転移をして間合いを調節し、剣を振り被る。

剣はその大きさから《灰》と《金》にとって巨大な壁が迫ると同じ。

《灰》は光の翼を前に盾にするように動かし、《金》は焰を身に纏い

防御の姿勢を作る。

次の瞬間、身体がバラバラになりそうな衝撃が二つの騎神を襲い、水面を何度も跳ねて二機は岩壁に叩きつけられる。

「ぐっ——なっ」

身体を揺さぶる衝撃に耐えることも束の間、リインは眼前に転移で現れた大型魔煌兵に息を呑む。

氷の霊力を纏い、霜のベールを纏う剣が真っ直ぐに振り下ろされる。

リインは傍らでまだ倒れたままの《金》を一瞥し、白い太刀と光の翼を折り重ねて落ちてくる剣を受け止める。

「うぐっ——」

「そのまま止めてろっ！」

遅れて動き出した《金》は《灰》に背を向けて駆け出した。

彼が逃げるとは思わない。

リインは言われた通り自分達を凍てつかせて押し潰そうとする刃を全力で受け止める。

「——良いもん落ちてるじゃねえかよ」

《金》は大地に突き刺さって放置されていた騎神用の剣を残った右腕で取る。

「こうか？」

柄に隠すように設置された引き金を引き、剣の刀身が二又に開く。

「俺の“力”を増幅してバスターグレイブに乗せる。やれるなエル＝ブラドール」

返事を待たずにマクバーンは“力”を昂らせる。

二又の剣、その根元の内蔵された導力砲に“力”が注ぎ込まれ、ゼムリアストーンで造られたバスターグレイブは赤く染まる。

赤熱する剣に《金》の腕は溶解する。

しかしそれに構わずマクバーンは切っ先を頭上を覆い隠す剣に向けて引き金を引く。

「灼熱砲——イフリート！」

一条の熱線が巨大な剣を蒸発させ、その先の大型魔煌兵の肩を吹き

飛ばした。

「ちっ——外したか」

元々視界が剣で覆われてせいで狙いが定まっていなかったがマクバーンはその結果に舌打ちする。

大型魔煌兵はまるで騎神の起動者が痛みを感じるように吹き飛ばされた肩を押さえて後退る。

「プラドローもう一発だ」

その姿に気を取り直してマクバーンはもう一度バスターグレイブに“力”を注ぎ込もうとして——彼の意に反して《金》は膝を着いた。「何だ？」

『過負荷状態だ。復帰には時間がかかる』

「ちっ——使えねえな。《灰》を見習えよ」

『むう……』

動かなくなってしまった《金》をマクバーンは罵るが、《金》は唸るだけで反論はできなかった。

白刃と光翼。

今の灼熱砲と同等の出力の防御結界を行使しているというのに《灰》にオーバロードの兆候は見られない。

それどころか剣の一撃から解放された《灰》は飛び上がり、靈力で伸びた巨大な剣を一閃し、体格差をもともせず大型魔煌兵を海に押し戻す。

『この度の大戦は魔境なのか？』

彼が知る《灰》ではないその姿に《金》はこの数百年の間にゼムリア大陸はどうしてしまったのか思いを馳せるのだった。

・*

海上を滑るように走る《灰》に大型魔煌兵は無数の氷塊を撃って迎え撃つ。

一つ一つが騎神の全長の倍もある氷の礫。

にも関わらず《灰》は一切怯むことはなく、突撃し直撃しそうな氷

塊は難なく白刃で両断して突き進む。

』

大型魔煌兵は残った左腕を海面に叩きつける。

そうして巻き上がった海水が《灰》の上から降り注ぎ、次の瞬間には瞬く間に海ごと氷漬けにされる。

『オオオオオオオオオオッ！』

しかし、全身を氷で覆い尽くされても《灰》は止まらない。

機体の内側から立ち昇る焰が氷を溶かし、《灰》は大型魔煌兵の眼前に辿り着く。

振り下ろした刃は掲げた腕の装甲に受け止めれる。

「大した強度だ。だけど『塩化』までは防げないだろ!」

渾身の一撃を受け止められるが《灰》は接触を保って、触れた腕を『塩化』させ——モノクロのオルディーネに横撃された。

「くっ——」

《灰》に組み付いたオルディーネは次の瞬間、内包する霊力を暴走させて自爆する。

極大の爆発が《灰》の半身を奪う。

大型魔煌兵は黒い煙をなびかせて落ちて行く《灰》に安堵する気配を滲ませ——硬直した。

氷の大地に叩きつけられるはずだった《灰》はその直前に内側からゼムリアストーンを増殖させ、次の瞬間には傷一つない姿となって着地する。

『オオオオオオオオオオオオオオッ！』

大型魔煌兵もまた雄叫びを上げ、その前に六騎の魔煌騎兵を再召喚する。

「——っ」

《灰》は太刀を構え直し——過負荷状態から回復した《金》が全てを置き去りにして弾丸の様に大型魔煌兵にバスターグレイブを突き刺して着弾した。

「くたばりやがれっ!」

マクバーンは叫び、剣の刀身を開放する。

突き刺された傷を強引にこじ開けられ、痛みに悶えるように大型魔煌兵は体を揺らす。

体格差からわずかな身動きでも激しく揺さぶられる《金》は剣と腕が溶解して一体化していなかったら瞬く間に振り解かれていただろう。

「ちっ——」

導力砲へのエネルギーの供給が遅いことにマクバーンは舌打ちをする。

このままでは体が壊れる方が先かと懸念する。

その背後に黄金の翼を背にした《灰》が一瞬で現れ、《金》の肩に背後から触れる。

その瞬間、半分も溜まっていなかったエネルギーが臨界を超え、マクバーンは迷わず引き金を引く。

零距离、しかも傷の中に直接灼熱砲を叩き込まれた大型魔煌兵はその身を膨張させ破裂し、貫通した熱線はその先の要塞の半分を吹き飛ばした。

召喚された魔煌兵たちは主の消失に合わせて霧散するのだった。

こうして戦いは終わった——

「足りねえ……」

——はずだった。

「まだ足りねえっ！」

そう叫び、《金》は背後で己を支えている《灰》を振り解くようにバスターグレイブを薙ぎ払った。

119話 火焰魔人

「やめろマクバーン！ それ以上はルーファスさんと機体が持たないぞっ！」

「はっ、知ったことか！」

リインの叫びを無視して《金》は右腕と一体化した剣を振る。

何もかも焼き尽くす黒焔は白刃に受け止められる。

「は——」

たった一合、剣を交えた。

それだけで感じる高揚にマクバーンは笑みをこぼす。

大型魔煌兵も良い感じだったが、それを超えた闘争の予感に胸がアツクくなる。

「マクバーン……」

惜しむらくは当のリインがやる気になっていないこと。

故にやる気を出させるためにマクバーンは言葉を作る。

「《幻焔計画》もルーファスの命も知ったことか」

「なっ!?」

絶句するリインに構わずマクバーンは続ける。

「俺が誰か忘れたのかリイン・シユバルツァー？」

俺は《身喰らう蛇》の執行者。No. I 《劫炎》のマクバーンだっ！

「あ……」

名乗りを上げるマクバーンにリインは気押されながらも、彼が誰だったのか思い出す。

「そう……だな……」

近頃“結社”と近付き過ぎていたせいで忘れていた事実を再認識する。

いくら他の執行者と違って良識的でも同じ穴の貉。

マクバーンも自分の目的のためなら他人を平気で殺せる“外道”

の一人であることは変わりはない。

「リイン……?」

「大丈夫だ、イオさん……それよりも——」

同乗しているイオにあることを頼み、リインは《金》と向き直る。

「そうだ……それで良いっ!」

「っ——」

襲い掛かる《金》に《灰》は白刃で応戦する。

「マクバーンッ! どうしてもここで戦わないといけないのか!」

「盟主は《黄昏》で俺の望みは叶うって預言してくれたが、それに何の意味がある!」

そんな不確かな未来なんて知るか! ようやくだ! 五十年待って、それが今目の前にあるんだよ!」

《金》を通して作り出される焔はマクバーンの意気に呼応してより激しく燃え盛り、ついにはその装甲を粟立たせ溶解を始める。

再び陥った過負荷状態にも関わらず動かされ、《金》は剣を振るう度に装甲が剥落していく姿は痛々しい。

そしてその反面、胸を中心に広がるマクバーンの浸食はその範囲を広げていく。

それに《識》の目で見れば、ルーファスの気が刻一刻と擦り減って行く。

「っ——」

その事実にはリインは歯噛みする。

「まだやる気が足りねえならこれでどうだっ!」

剣では埒が明かないと《金》は《灰》から距離を取り、右腕の剣を掲げる。

刀身が二又に開いて焔が立ち昇り、その切先の上で火球が生み出される。

「……………何のつもりだ?」

ジリオンハザードは通じないことは分かっているはずなのに、これ見よがしに火球を作り出したマクバーンをリインは訝しむ。

しかし、その答えはすぐに理解することになる。

火球は際限なく膨れ上がり、騎神を——果ては先程の大型魔煌兵を呑み込むほどに巨大化する。

そしてマクバーンが利用しているのは自分の焰だけではない。

大量の魔煌兵が霧散して拡散したはずの霊力さえも取り込んで火球の糧にして自身の力以上の火球を生み出している。

「外気功……」

それは奇しくもリインが今回の実習でラウラに教えた技でもある。

「はっ——顔は見えねえがその様子だと正解みたいだな」

マクバーンが考えた「鏡火水月の太刀」への答えの一つ。

それは至ってシンプルにリインが吸収し切れない規模と威力によるゴリ押し。

その答えは正しく、リインはこの火球は「鏡火水月の太刀」では返せないと判断する。

そして《灰》の背後にはオルデイスがある。

「マクバーン……お前はここで倒す」

「殺すって言えよ……まあその殺気は悪くねえ……戦いはこうでなくちやな」

向けられた殺気にマクバーンは気を良くする。

軋む《金》の身体の脆さにマクバーンは不満を感じながら、それでも生涯初めての規模の「焰」を振り被る。

「ジリオンハザードッ！」

劫炎の極技。

術式によって密度と規模を共に強化した灼熱の火球が《灰》に投げつけられる。

「——八葉一刀流」

《灰》の背後にはオルデイスの街。

逃げる選択肢はなく、喰らえばリインの加護の上からでも焼き尽くされる究極の焰を前にリインは心を落ち着かせ、ただ無心になって太刀を振る。

「——八葉一閃」

火球と剣閃。

二つの極技がぶつかり合い、鬨ぎ合い、拮抗する。

「オオオオオオオッ！」

その拮抗する力の中にリインは《灰》を突撃させる。

『な、何を——!?!』

《灰》の驚く声を無視してリインは拮抗する剣閃に二の太刀をなぞる様に放つ。

拮抗が崩れ、剣閃が押し勝ち《金》を呑み込む。

もつともジリオンハザードによって威力の大部分を失っていた剣閃は《金》を両断するには至っていない。

だが、それはリインが求めたものでもある。

「っ——リイン・シユバルツァーッ！」

全身を溶解させながらも《金》は戦意を損なわず叫ぶ。

リインはそれに応えず崩れた《金》の頭を掴んで背後に叫ぶ。

「イオさんっ！」

「まってましたっ！」

騎神の操縦席の後ろで《八耀》を構えたイオが応え、祝詞を上げる。

「彼は我、我は彼……なれど汝は我等に非ず……」

「っ——テメエ何を——」

「七の聖獣の加護をここに！ 悪しき《焰》を封じる《檻》となれ」

《金》に触れた手にリインは手応えを感じて掴み、引き抜く。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ……!!」

「顕現せよ！ 《大地の檻》!!」

マクバーンの悲鳴にイオの詠唱が重なり《聖獣》から引き継いだ秘術を起動する。

《灰》が掴んだ《焰》に黄金の縛鎖が絡みつく。

しかし《焰》は猛り狂い、戒めの鎖を拒むように燃え盛る。

「ぐっ——」

《灰》は太刀と《金》から手を放し、両手を使ってその《焰》を抑え込む。

《焰》と《聖獣の気》が鬨ぎ合い。

そして——そこに《黒》の瘴気が混じる。

「ガアアアアアアッ！」

未来永劫封じられる予感に“彼”は藁に縋る様に手を伸ばし、まるで導かれたようにその“存在”を掴む。

「何だっ!？」

騎神を通じて胸に感じた違和感にリインは声を上げる。

だが、それが何なのか考える間もなく全身に痛みが走り——《灰》の胸にゼムリアストーンが結晶が増殖し激しい光を輝かせる。

「ああああああああああっ!」

悲鳴を上げるリインを他所に、それは《灰》の中から溢れ出した緋色の結晶が手の中の“焰”の呑み込み——人型を作る。

それは竜を象った“緋色の騎士”。

元の騎士の姿に竜の翼と尾を持って新生した怪物——《緋の騎神》テストロツサが“異界の焰”と“大地の檻”を取り込み、ここに復活した。

・*

「……………」

マクバーンは己の腕となった緋い鋼の腕を呆然と見下ろした。

確かめるように手指を動かせば、その意思に応じて見慣れない腕が動く。

念じればいつものように焰が現れる。

だが、それはこの世の《理》から外れた焰ではない。

「は……………は……………」

胸の奥、《灰》から複製した加速器が炉心となって、顕現させる焰がこの世界に適応させる。

掌の上で燃え盛る焰はどれだけ勢いを増しても周囲の空間を歪ませない。

そして、己の焰に耐えられる“器”。

——タタカエ——

耳元で囁く声に背中を押されたわけではない。

「恐怖なんて感じたのはいっつ以来だろうな……」

以前に《影の箱庭》で《鋼の聖女》と戦った時でも感じなかった感情にマクバーンは苦笑する。

何の《因果》か、本来ならマクバーンを受け入れるはずがない《緋の騎神》。

元々《暗黒竜》の力を与えられ、更に《大地の檻》で強化されたその《器》は《金》のような頼りなさはない。

「ククク……ハハハッ！ 感謝するぜ女神様よっ！」
自分の全力を出せる。

そう確信できる手応えにマクバーンは堪え切れず哄笑する。

そしてその全力をぶつけられる相手が目の前にいることにマクバーンはらしくもなく女神に感謝する。

「さあ！ シュバルツアーツ！ 第二ラウンドだっ！」

そう意気込み、挨拶代わりのファイアボルドを放とうとした《緋》に《灰》は両手を上げていた。

「あん？」

降参のジェスチャーにマクバーンは顔をしかめる。

「おい……萎える様な事してんじやねえよ」

出鼻をくじかれた《緋》は右手に溜めた焰を放つのをやめて文句をつける。

「どうせ言ってもやめるつもりはないんだろ？」

戦うのは良い、だけどせめて場所を移させてくれ」

「あー」

無防備をさらして交渉して来る《灰》に《緋》は彼の背後の街を伺い見る。

先程までは《金》とルーファスの限界もあり無視したが、器を《緋》に変えたことでその制限はなくなった。

確かに気は逸っているが、その程度の自制が効かない程切羽詰まっているわけではない。

むしろその提案はマクバーンにとってはありがたい申し出でもあ

る。

「そうだな。だが、どこでやる？」

「この先にブリオニア島という島があります……」

あそこには二年後の相克のため、騎神を戦わせるための霊窟がある。そこでなら俺達が全力で戦っても大丈夫なはずです……たぶん……」

少し自信がなさそうにリインは最後の言葉を付け加える。

「は、それで良いぜ。ここでやり合うよりかはマシだろ」

特に異を唱えることなくマクバーンはそれに同意する。

リインは安堵の息を吐き、上げた両手を降ろして次の提案を同乗者にする。

「イオさん、ルーファスさんのことを頼めますか？ 先に戻ってエマ達に事情の説明も」

海に浮かぶ無惨な姿の《金》を見下ろして頼む。

「それは良いけど、大丈夫なの？」

「……………何とかしてみます」

諦観の念を滲ませるリインにイオは思わず同情するのだった。

・
*

ブリオニア島、陽霊窟。

それは今から二年後の《黄昏》のために地精が用意した人工の霊場。

“相克”における熱を効率よく留め、騎神同士を融合を補助するための錬金の釜。

五分程前、本来の目的を前倒しするように二体の騎神が霊窟に入り、陽霊窟は二年早くその役割を果たすために――

次の瞬間、内側から膨れ上がる二つの焰に陽霊窟は消滅した。

舞台を霊窟から外に変え、二体の騎神は霊窟の消滅を意に介さず、戦闘を続行する。

「オラオラオラオラッ！」

無数の火球が空に撃ち上がる。

大空を舞う《灰》はその隙間を縫うように飛び、速度を緩めることなく《緋》に接近して太刀を一閃する。

その一閃は《緋》の胸に小さな斬痕を刻む。

「ちっ——」

「ちっ——」

互いに舌打ちをして《緋》はそれ以上の追撃を拒むように焰の壁を《灰》の間に作り出して放つ。

押し寄せる全てを焼き尽くす焰の壁に《灰》は焦ることなく手を前に翳す。

光の翼が黄金に輝き、《灰》の前に障壁が展開する。

《灰》が焰の壁を受け止めている隙に《緋》は距離を取って、火球の再装填を行う。

しかし、その背後から《灰》の分け身が二体、隠形を解いて襲い掛かる。

「はっ——」

尾を一閃、二つの分け身は纏めて両断される。

《緋》はまだ壁の余波にその場から動けない《灰》に向かって火球を放つ。

壁で相殺した《灰》はその向こうから降り注ぐ火球の弾幕に後退しつつも、難なく回避する。

「くそっ——ファイアボルドじゃ遅過ぎるか」

思わず《緋》は悪態を吐く。

火力に反して《緋》の攻撃は《灰》を捉えることはできない。

敵が相手の攻撃を棒立ちで受けるわけなので当然のだが、かすりもしない火球の弾幕に《緋》は焦れる。

「かと言って半端に範囲を広げた攻撃は返される。つくづく俺と相性が悪い奴だな」

攻撃を振り切る速度にエネルギー攻撃の反射技を持つ《灰》に迂闊な攻撃をすれば手痛い反撃を喰らう。

しかし悪態を吐くが、彼の声は愉しさに満ちていた。

「どうやって当てるか……………ん？」

いつそう手にした火球を極限まで圧縮してカウンターで叩きつけてやろうかと考えた彼の思考にノイズが走る。

掌の火球は彼の意志に反して、凝縮されその姿を変える。

武器で言う所の戦輪——チャクラム。またの名を円月輪。

「これを使えつてか？」

投擲する武器。それがせいぜい彼に分かること。

機体に促されるままに《緋》は円月輪を——否焰月輪を投擲する。

焰の戦輪は大気を斬り裂き、火球と比べものにならない速度で《灰》を捉える。

「っ——」

咄嗟に盾にした太刀と回転する焰月輪が激しい火花を散らし、《灰》をその体ごと大きく弾く。

「ははっ！ 良いじゃねえか！ 気に入ったぜ ッテスタロツサ！」

その結果に気分を良くした《緋》は両手に合わせて六つの焰月輪を作り出し、射出する。

弧を描いて《灰》に殺到する。

先程まで余裕をもって回避していた《灰》は火球と比べものにならない速度で飛来し、更には追尾して来る焰月輪を必死で回避する。

「くそっ—— ッテスタロツサ」め、変な芸を教えて——」

《灰の起動者》は突然変わった戦術の原因に思わず悪態を吐く。

「——捕まえたぜっ！」

焰月輪を焰を纏った刃で両断した《灰》の目の前に拳を振り上げた《緋》が迫る。

腕を一回り大きくした《緋》は太刀を盾にする《灰》にそのまま拳を振り抜き——打撃の瞬間、籠手に仕込まれた鉄杭が炸裂して太刀を砕き、さらに《灰》の胸を穿つ。

「ちっ——浅いか」

《緋》は籠手を投げ捨て、パイルバンカーの衝撃以上に飛ぶ《灰》に追撃するべく両腕を頭上に掲げる、

生み出された火球は瞬く間に巨大化する。

「ジリオンハザードッ！」

太刀を失い、体勢を崩している《灰》に“鏡火水月”はないと判断し《緋》は必殺を繰り出す。

それに対して《灰》は太刀を修復させずに折れた太刀を投げ捨て、虚空に向かって手を伸ばす。

「来いっ！」

声と共に現れたのは“紅い剣”。

「鏡火水月の太刀——」

《灰》は身の丈を遥かに超える火球を剣の一閃で両断し、霧散する力を己の剣に乗せる。

「——鳳凰烈波っ！」

更には全身に焰を纏って突撃する。

「っ——」

《緋》はその手にバスターグレイブを生み出し、正面から灼熱砲でそれを迎撃する。

「オオオオオオオオオオッ！」

「ハアアアアアアアアッ！」

二つの焰がぶつかり合い、その勝敗は《灰》に傾く。

灼熱砲を斬り裂き、鳳凰の羽ばたきは《緋》の半身を削り取る。

「は——はは、クハハハッ！」

一体化している彼にその痛みはダイレクトに伝わっているにも関わらず、その哄笑には痛痒を感じない。

「良いぜ。シユバルツァー！ もつとだ！ もつと俺を“アツく”させろ！」

削り取られた腕の切断面からゼムリアストーン of 結晶が増殖する。

無秩序に折り重なって生えた結晶は音を立てて砕け散ると、そこには損傷を修復した《緋》の姿があった。

「ちっ——なんて理不尽な……」

『……………』

思わずリインは悪態を吐く。《灰》は意味深な沈黙を保つ。

「こうなったら再生する間も与えずに——」

方針を決め、彼が気持ちを切り替えたその瞬間、唐突に《灰》の内
部で小さな爆発が起きる。

「何だ!？」

急速に落ちる出力にリインは戸惑い、見えない攻撃を警戒したが原
因はすぐに分かる。

試験的にE x オーブとして設置した加速・増幅器が過負荷に耐え切
れず暴発。

「っ——」

そしてそれを契機にこれまでに蓄積した疲労と負担が一気に噴き
出し、リインの意識が朦朧となる。

「隙ありだぜっ!」

突然動かなくなった《灰》を殴り、《緋》はそこで《灰》の突然の不
調に気付く。

ブリオニア島に墜落する《灰》を追って島に着陸した《緋》は焼け
焦げた剥き出しの加速器と急速に小さくなっていくリインの闘気を
見て原因を悟る。

「ま、ここままで良く持った方か」

途中で《緋》に乗り換えたからマクバーンに余裕はまだあったが、
《金》ではそれが原因で堕ちそうになっていただけに他人事ではない。

「だがま、運が悪かったと思ってくれよ」

《緋》はその手に黒い剣「アングバル」を生み出し、膝を着く《灰》
に悠然と近付いて行く。

「あと一步……あと一步で全てを取り戻せるんだ」

封じられる恐怖に白熱した戦い。

その感情は大きくマクバーンを揺さぶり、失われた記憶を感化させ
ていた。

少々戦いに夢中になり過ぎていたが、あと一步で全てを取り戻せる
予感にマクバーンはここで剣を納める気は起きなかった。

「愉しかったぜシュバルツァー。ありがとうよ」

長々とした口上は苦手だと、マクバーンは言い訳をして黒焰を纏つ
た剣を振り下ろし——

膝を着いたままの《灰》が振り下ろされた刃を両手で——白羽取りで受け止める。

「おいおい、往生際が——」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

達成感で記憶を取り戻すはずだったのに水を差され、文句を口にす
る。

しかし、雄々しい雄叫びがそれを掻き消し、黒焔に両手を焼かれながらも《灰》は最後の一滴の力を振り絞る。

「——ああ、そうだな……お前はそうでなくちやなっ！」

その覇気にマクバーンは面を喰らい、そして次の瞬間には彼の足掻きを受け入れて嗤う。

全力で斬ると《緋》は改めて剣を握る手に力を込め——次の瞬間、
《灰》と同じように胸の加速器が爆発した。

「ぐっ!？」

《緋》もまた《灰》と同様に一気に各部に過負荷が掛かり、出力が大幅に下降する。

衰えた力と火勢に《灰》は力任せに両手で掴んだ刃を折る。

「このっ——ぐお!？」

折れた刃をそのまま《緋》の胸の中央に突き刺す。

「——破甲拳」

それでも倒れない《緋》に《灰》は突き立った刃を杭に見立てて右の拳を叩き込む。

「離れろっ！」

《灰》を突き放すために《緋》は乱暴に腕を振る。

頭を下げ、その腕を躲した《灰》は左の拳を刃に叩き込む。

「——破甲拳」

装甲に突き刺さった刃は一撃ごとに深く打ち付けられ、《緋》は殴られた衝撃にたたらを踏んで後退る。

《灰》は離れた距離をすかさず踏み込み、さらに拳を重ねる。

「——破甲拳っ」

「こ——のっ！」

念じれば出るはずの焰が出せない。ゼムリア大陸に発現して初めて感じることになった体力切れにマクバーンは困惑している間に更に拳が打ち込まれる。

「――破甲拳！ 破甲拳っ！ 破甲拳っ!!」

何度も打ち付けた拳に《緋》はついに岩壁に追い込まれる。

「――どうして、そこまでお前は――?」

体力も精神力も共に限界を超えているにも関わらず突き進む《灰》に――リインの気迫にマクバーンは呆然と尋ねる。

「《黄昏》を乗り越えると誓った!」

《緋》を岩壁にめり込ませ、更に拳をぶつけながらリインは咆える。

「あの子たちの未来を守ると誓った!」

左の拳が幾度目かの衝撃に亀裂が走る。

「だから! お前如きに立ち止まっているわけにはいかないんだっ!」

右の拳も同様に亀裂が走る。だがそれでもリインは止まらない。

「八葉一刀流――」

左の拳が打ち込んだ衝撃で肩まで弾ける。

「八の型――」

左右の連打で練り上げた螺旋の闘気を全て右の拳に集め、引き絞る。

「リイン・シユバルツアアアア!」

マクバーンの叫びは路傍の石と言われた憤怒か、それとも記憶を取り戻した歓喜によるものか――

リインは構わず拳を刃が埋まった《緋》の胸に拳を叩き込む。

「――無尽拳っ!」

全身全霊の渾身の拳は《緋》の胸を貫いた。

岩壁を背に動かなくなつた《緋》を確かめ、《灰》は後ろに倒れるのだった。

120話 謁見再び

——やめろ……

心の中の俯瞰して自分を見ている己が警告を発している。

「どうして……」

——それは言っではいけない……

言っってしまうば、自分はこれまで特別実習で見て来た墮落した貴族達と同じになってしまう。

理性では彼には何の責任もなければ落ち度もないことは分かっている。

「どうして兄上を助けてくれなかったんだ、リイン!？」

口にしてしまった理不尽な訴え。

彼の胸倉を掴み、それがどれだけの外れなのか分かっているのに黒い衝動は止まってくれない。

「お前が兄上を止めてくれていれば、こんなことにはならなかった!」

なんと醜い責任転換だろう。

《金の騎神》の起動者になることを選び、《劫炎》の力を借りて戦う事を決めたのはルーファス自身でありリインには何の落ち度もない。それどころか儀式を止めることを成せなかった自分達の無能を差し置いて彼を責めるなど、貴族としてあってはならないことだ。

しかし、ユーシスの頭に過るのは直前の父の一方的な言葉。

『ルーファス、お前には失望した。次のアルバレアはユーシスに継がせる。貴様はもう好きにしろ』

長く美しかった髪は焰に焼かれたこともあり、短く切り揃えられ、一命を取り留めたが左腕が動かなくなったと言うルーファスの身を案じる素振りもなく告げられた冷たい言葉。

元はアルバレア家が所有していた《金の騎神》を取り戻したことを褒めることもなく、むしろスクラップにしたことを責め立てた。

そして左腕が使えなくなったことを理由に、先の言葉を告げた。

確かにアルバレア公爵家として下の者に示しを見せるためにも完

壁を求められる。

ルーファスに何かがあつた時のための自分だということもちゃんと理解できている。

しかし、それでも家族の情を一欠けらも見せないヘルムートに普段は委縮するだけのユーシスは反論した。だが……

『ルーファス・アルバレアは私の本当の息子ではない』

腹違いの兄が本当は従兄だった。

ヘルムートの弟と彼の妻の不貞によって生まれた不義の子。

その真実はユーシスの根幹を大きく揺るがした。

それ以上は止める気力もなく、去って行く父。

アルバレア家から実質勘当されたようなものなのに笑っている従兄。

——貴族とは何だ？

ルーファスが不義の子だとすれば、ヘルムートが平民のメイドに産ませた自分はいったい何なのだろうか。

その後ルーファスと交わした言葉は覚えておらず、皇帝陛下への謁見が控えているユーシスはルーファスが個人的に雇っている三人の子供達に彼のことを任せて逃げるように病室を去った。

正直、彼らに自分以上の信頼を向けている従兄の顔を見ていられなかった。

その表情にユーシスは、彼にとってアルバレア家——自分は厄介者——だったのではないか、そう思ってしまった。

そんな様々な煩悶を抱えたまま、彼の顔を見て感情の籠が外れた。

「お前にならできたはずだっ！ 兄上を止めることも守ることも！
なのはどうして!?!」

「ユーシスさん、落ち着いてください！ リインさんは最善を——」

「そんな言葉で済むかつ!」

フォローしようとしたエマにユーシスは叫び返し、怯む彼女の顔を見て水を浴びせられたように急激に頭が冷える。

「……………リイン……………す——」

「すまない」

ユーシスが謝るよりも早く、リインが謝罪する。

——最低だ……俺は……

「くっ——」

「お、おいユーシス!？」

何の非もないはずのリインに謝罪させてしまった罪悪感に耐えかねてユーシスはその場から逃げ出した。

本来ならⅦ組として皇帝陛下への謁見がこの後にあつたのだが、とてもではないがそんな余裕はない。

——どうせ俺はリインのオマケで、俺もアルバレア家の不貞の子なのだから……

誰も自分の事など見ていない。

謁見の主役もリインとクリスなのだから、自分などいてもいなくても変わらない。だから——

「おや? 君は確かアルバレア家の次男だったかな?」

適当に走った末に、これから皇帝陛下に同伴するはずの《鉄血宰相》に出くわした。

「なっ——」

貴族にとって不? 戴天の敵にユーシスは思わず身構え——

「あーやっど止まった! もうユーシスってばどうしたのさ——って……オジサン久しぶり! オルデイスのお土産買って来たよ」

追い駆けてきたミリアムが文句を言った後に、彼を見て歓声を上げる。

「はいっ!」

アガートラムが一度消え、もう一度現れた時には大きなイルカのぬいぐるみを持って現れ、ミリアムはそのままそのぬいぐるみをギリアスに渡す。

「ふむ……」

「——っ」

されるがままにぬいぐるみを受け取ったギリアスのその似合わない姿にユーシスは思わず吹き出しそうになるのをぐっど堪える。

「どうやら気は紛れたようだな」

「え……？」

そんなユーシスの様子にギリアスは外交用の笑みを持って気遣う。

「そろそろ謁見の時間だが……ふむ……」

ギリアスはユーシスとミリアムを見比べて提案する。

「君には申し訳ないが、ミリアムの面倒を少し見ていてもらえるかな？　今見ていた通りの子供でね。正直、陛下に無礼を働くのではないかと心配していたのだ」

「ぶーぶー、ボクだってちゃんとできるよ」

ミリアムの文句をギリアスは聞き流して頭を撫でる。

「陛下からは私から言っておこう。何悪いようにしない、安心したまえ」

そう告げてギリアスはユーシス達がやってきた通路をぬいぐるみを抱えたまま歩き出した。

「……………あれが鉄血宰相……」

彼の宰相としての厳しきは知っていたが、政敵の子供に対して気遣える大人としての器の広さを見せつけられた。

そしてミリアムに垣間見せた“父性”。

ラインの実父だったと納得してしまうカリスマ性は下手な貴族よりも貴族らしく、その後姿はアルバレア家に引き取られた時の父に対しての期待を思い出させた。

「あ……あのっ！」

「ユーシス？」

気付けば去って行くはずのギリアスにユーシスは声を掛けていた。

「ふむ……何かね？」

ぬいぐるみを抱えたまま振り返るその姿にはやはり吹き出しそうになるが、ユーシスは呼び止めたものの言葉は続かなかった。

そんなユーシスの様子にギリアスはふと懐かしむように目を細めた。

「やはり兄弟か……」

「え……？」

「かつて君の兄であるルーファス・アルバレアもそうやって私を呼び

止めたことがあるのだよ。それこそ君くらいの歳の頃にね」

「兄上が……？」

昔の事とはいえ、アルバレア家の一翼を担うルーファスがギリアスと接点を持つていたことにユーシスは少なからず驚く。

「謁見の後にミリアムから個別で報告を聞くことにしている。話があるならそこで語らうとしようじゃないかユーシス・アルバレア君」

「あ……」

言葉にしなくても意志を汲み取ってくれたギリアスにユーシスは思わず安堵し、今度こそ彼の背中を見送るのだった。

そして余談だが、当然ギリアスは謁見の間にイルカのぬいぐるみを抱えたまま参上することはなかった。

・
＊

謁見はユーシスとミリアムの二人が不在だったが滞りなく進む。

ルーレではザクセン鉄鉱山を占領した《帝国解放戦線》から取り戻したこと。

オルデイスでは《帝国解放戦線》の幹部の捕獲と、彼女たちが引き起こした“異変”の鎮圧。

それだけに留まらず報償が決まっていなかった帝都での活躍。

ガレリア要塞での尽力、ノーザンブリアでの活躍なども合わせ、ひとまず労を労うという理由でユーゲントは提案した。

「ささやかではあるが、我が皇帝家ゆかりの湯治場への小旅行を用意した……」

「ここ最近の心胆を寒からしめる事件の疲れを癒すがよかろう」

「父上、それはもしかして……」

「うむ、無論《ユミル》のことだ」

鷹揚に頷くユーゲントにクリスはあの郷にもう一度赴くことになるのかと苦笑する。

年の初めから約十ヶ月。

様々な出来事を体験して、あの時の特訓がもう遠い過去のようによさえ思える。

「さて——」

郷愁に耽るクリスを他所にオリヴァルトが声を上げる。

「この場を借りる形ではあるが、まずログナー侯。御息女のアンゼリカ殿が我が弟の我儘に付き合ってくれたことに感謝の意を伝えたい」
「——いえ、四大名門として当然のことです」

オリヴァルトの感謝にゲルハルト・ログナーは恭しく頭を垂れる。
本音を言えばノルティア州領邦軍を無視して独断で鉄鉱山に侵入した娘を怒鳴りつけたかった。

しかし、そこに次期皇帝であるクリスこと、セドリックがいるとなれば話は変わって来る。

鉄鉱山は皇帝家の直轄地であり、ラインフォルト社とノルティア州で共同管理している。

そこでテロリストへの対応があまりにも消極的であったため、殿下自らが頼りない領邦軍を差し置いて鉄鉱山を解放したとなればログナー家にとつては外聞が悪い話になる。

しかしアンゼリカが同行したことで、ログナー家としては面目が立つことになる。

「ふふ……」

計算通りとほくそ笑んでいる娘にゲルハルトはただぐぬぬと唸ることしかできなかつた。

セドリックさえいなければこれ幸いと、自由奔放に好き勝手やっている学院生活を終わらせることもできたのにと臍を噛む。

そんな親子の無言のやり取りにオリヴァルトは苦笑して続ける。

「話を戻すが我が弟の我儘に協力してくれたアンゼリカ殿のその学友、VII組の担任の分も手配した……」

ログナー侯、バレストイン教官、よろしいかな?」

「ええ、私に異論はございませぬ」

「ご配慮、光栄に存じます」

オリヴァルトの配慮にゲルハルトもサラも恭しく承る。

「陛下、一つ宜しいですかね？」

そこに――今まで黙っていたクロワールが発言した。

「その小旅行ですが、我が姪のミルディーヌを同行させても宜しいでしょうか？」

「カイエン公？」

突然の提案にオリヴァルト達は首を傾げる。

「いや、この度はⅦ組の諸君に我が領地は救われた。私からも是非その礼をしたいと思っておりますね……」

ささやかではありますが、オルデイスの名産品で彼らを持って成させて欲しいと思っております」

「ふむ……カイエン公の言い分は分かるが……」

「なに食べ盛りの子供達です食べ物はいくらあっても足りないくらいでしょう……」

それに私も個人的にリイン・シュバルツアー君のことは気に入らしてね、彼にはミルディーヌとの婚約を勧めたのだが素気無く断られてしまいましたよ」

ざわりと、謁見の間に奇妙な緊張が走る。

視線が集中したリインは針の筵のように感じて閉口する。

「………カイエン公。シュバルツアー家への縁談の申し込みに関しては皇帝家から控えるように通達しているはずだが？」

「ええ、存じております。ですがその通達には一つ穴があるのに御氣付きでしょうか？」

「ほう……それは？」

興味深い意見にオリヴァルトは答えを促す。

「リイン・シュバルツアーの方から婚約を申し込めば、問題はないと言いますよ陛下」

「それはつまりミルディーヌ君はリイン君を口説き落とせると思っているのかな？」

「さて、それは当人同士の問題かと、ただ姪はリイン君との婚約の話は満更でもない様子でした……」

ならば交流の場を整えてやることこそ、叔父の務めかと思いましたが

ね」

「なるほど……」

クロワールの言い分にオリヴァルトは一理あると認め、振り返る。

「父上、私からも一つ提案を宜しいですか？」

「うむ、申してみよ」

鷹揚にユーゲントは頷くが、リインは嫌な予感を感じた。

「ユミルと言えば今年の初めにセドリックが受験合宿に行っていたという事でアルフィンが羨ましがっていました……」

Ⅶ組にはセドリックもいるのだから、姉弟水入らずで旅行というのも良いのではないかな？」

「あら、それは良いですわね」

「あ、兄上!？」

オリヴァルトの提案にユーゲントの傍らに控えていたアルフィンは嬉しそうに顔を綻ばせ、クリスは逆に狼狽する。

「ふーん……」

「あはは、モテモテだねリインってば」

リインはすぐ背後から突き刺さって来る視線を無視する。

「アルフィン殿下が同行するのならば麓までは《アイゼングラーフ号》を使うと良いでしょう。それに郷での護衛を兼ねてクレア大尉も同行させましょう」

さらに便乗するようにオズボーンが新たな提案を重ねた。

「おやおや、御自身が邪魔だと捨てた子が大物になった途端、引き込もうとはそれは人としていかなるものでしょうかね？」

「ここぞとばかりにカイエン公は嫌味を言う。」

「クレア大尉を同行させることに邪推があるようですが、それとは別にオリヴァルト殿下もカイエン公も肝心なことを知らないようですね」

「ほう……?？」

「それはいったい……?？」

「リイン・シュバルツアーは年上が好みだということですよ」

真顔でギリアス・オズボーンは言い切った。

「年上が好みなの？」

背後から尋ねて来たファイアの小さな声は謁見の間に異様に大きく響き渡った。

「ノーコメント」

囁く声でリインは無回答に徹する。

「ふ……情報がいささか古いようだねオズボーン宰相」

奇妙な沈黙を破り、オリヴァルトが言い返す。

「今リイン君が気になって意識しているのは、ちよつと年下の小悪魔な女の子なのだよ！」

オリヴァルトは力強く言い切った。

「ふむ……年下が好みなのか？」

「ノーコメント」

今度はラウラの質問にリインは無回答に徹する。

「むむむ……」

「ほほう……」

「ふっ……」

睨み合う三人にリインは心を綱にして耐える。

もしもここが謁見の間ではなく、そして皇帝陛下の御前でなければ、相手がどんな身分だったとしてもしばき倒していただろう。

そんな彼らを見兼ねてユーゲントはため息を吐く。

「三人共、そこまでにしたまえ」

皇帝の言葉に三人はすぐに佇まいを直す。

「此度は小旅行はあくまでⅦ組の労を労うもの。そなた達の見合いに利用するものではない。自重したまえ」

——流石、皇帝陛下……

暴走する三人を諫めるユーゲントにリインの尊敬の念はより一層強まった。

「二人の参加については無理強いせずⅦ組全員の了承を得たのなら許可しよう。それはそうとセドリツクよ」

「はい」

三人の話を打ち切り、ユーゲントはクリスに話しかける。

「近い内にそなたとアルフィンの誕生パーティーを行おうと思っ
てる」

「パーティーですか？　ですが僕は今……」

「対外的にはセドリック皇子は病気で療養していることになってい
るが、それでも一年で一度も公の場に顔を出さないのは市民を不安にさ
せるだろう……」

テロリスト達が壊滅した今がまたとない機会だろう。もちろん学
業に障らぬように配慮しよう」

「そういうことでしたら、分かりました」

ユーゲントの提案にクリスはセドリックとして了承する。

「それからⅦ組諸君、その席には君達も招待させてもらおう」

そう言つてユーゲントは締めくくつた。

・
*

10月1日金曜日。

特別実習の後処理も終わり、リイン達は早朝から帝都へイムダルの
駅にいた。

「ついにこの日が来てしまったか……」

特別実習が終わつて週末。

様々な事後処理に追われたリインはこの日が来たことを複雑な気
持ちで受け止める。

オルデイスからヴァリマールの他に《緋》と《金》、そして《紫》の
残骸を旧校舎に持ち込んだ時の彼らの荒ぶり。

試作の加速・増幅器を壊したことにお咎めはなかったのは幸いだつ
たがレンに正座させられて説教されたのはなかなか堪えた。

「あはは、今週はいろいろ凄かつたですからね」

疲れた様子のリインにクリスは苦笑いを浮かべる。

劇的な変化は昨日。

病院から意外と早く退院したルーファスのこと。

事情は詳しく教えてもらえなかったが、《金の騎神》をスクラップに

したことでヘルムートの怒りを買い、次期アルバレア家の当主はユースに確定したということ。

もつとも、家名まで取り上げられたわけではなく変わらずツールズ士官学院の理事を務めているのだが。

「まさかルーファスさんが教官になるとは……」

一部の仕事がなくなって暇ができたルーファスはあるうことか士官学院で教壇に立つことを選んだ。

事件の後遺症として動かなくなった左腕を補うための助手として、ナーディアとスウインの雇用を継続し、来週からは主に社会学を担当することになる。

他にも学院祭で展示するように要請されていた騎神が大破したこと、誕生パーティーに向けてシユバルツアー家としてのプレゼント兼献上品の選定など、細かいことを上げれば切りはない。

「とにかく今週は疲れた……早く《ユミル》の温泉に入りたい」

リインは現実逃避するようにぼやく。

その気になれば《箱庭》の温泉もあるのだが、やはり故郷の本物の温泉には《箱庭》にはない何かがあるとリインは思うのである。

「本当にお疲れ様です。ところでアルフィン達はまだですかね？」

これ以上はあれなので、クリスは話題を変える。

「ああ、それなら今駅前に来ていぞ」

「むむ……」

当たり前のように言うリインにクリスは対抗するように気配察知を試みる。

「……………あれ？」

ふと気配の人数が多いことにリインは首を傾げる。

別段、護衛として周辺の警戒をする人員と考えればおかしくはないのだが違和感がある。

しかし、その違和感の正体はすぐに現れる。

「皆さん、本日は兄の提案を受けていただきありがとうございます」

やって来た聖アストライア女学院の制服を纏ったアルフィンは代表するように礼を述べる。

追加で小旅行に参加するのはアルフィンとミルディーヌ、そして彼女たちの案内役としてエリゼ。さらに護衛官としてクレア。

その四人の他にもう一人、聖アストライア女学院の制服を纏った見慣れない少女がいた。

「ご紹介させていただきます」

VII組の一同が少女の存在に首を傾げているとミルディーヌが紹介する。

「こちら、わたくしの親戚のお姉様になります。先日の『異変』でライン様に助けていただいた是非、御礼がしたいとお願いされてしまった」

「ダ、ダーナ・イーグレットと申します——で、ですわ」

明らかに言い慣れないと分かる口調と仕草で蒼い少女は一礼した。

121話 温泉郷I

ふとリインは空を見上げる。

アイゼンガルド連峰に続くユミル溪谷道の中腹。

川辺に座り込み、釣糸を垂らしてリインはその場所を懐かしむ。

——修行に焦る俺に老師が無理矢理釣りを教えて来たんだっとな……

あの頃は釣れた試しがなかった。

しかし、今はこのゆっくりと時間が過ぎて行くひと時を悪くないと感じる。

空を見上げれば澄み切った蒼い空。

頬を撫でる風は懐かしい匂いを含んでリインは郷愁を強くさせる。

「……………平和だ……………」

《帝国解放戦線》が帝都で宣戦布告してから怒涛になった数ヶ月を振り返ってリインは小さく呟いた。

「そうだな……………」

同じくリインの横に座って釣り糸を垂らすテオがその呟きに同意する。

屋敷をとある事情で追い出された二人は哀愁を漂わせながらも、穏やかな親子の一時を堪能する。

「時にリインよ。あの子のお墓にはもう行ったのか？」

「いや、《鳳翼館》に荷物を置いて、父さん達に会いに行つたからまだ行ってないよ。母さんたちがノイやナユタを預かっていてくれたから夕方にも行くつもりだけど」

「そうか……………」

特に無理をしている素振りを感じない息子にテオは安堵する。

「それにしてもどうして母さんたちは……………」

「耐えろリイン。これは男親の宿命みたいなものだ」

まるで経験があるかのような父の物言いにリインは閉口する。

「そう言えば先日、ユン老師が訪れたぞ」

「ユン老師が？」

「ああ、二ヶ月ほど前にな……」

リインに会いにトリスタへ行くと仰っていたが、その様子だとまだ会っていないようだな」

「ええ……」

二ヶ月前と言えば、リベールに訪問した頃くらいだろうか。

あの時、アネラスやカシウスに彼の所在を聞いても知らないという答えが返って来ただけに遅れてやって来た肩透かし感にリインは微妙な気持ちになる。

「だけど二ヶ月前か……」

特別実習もあってトリスタを留守にしていることも多いが、不在による言付けを受けた記憶はない。

「ユン老師の事だから、気ままに帝国を放浪しているのだろう」

「そう……ですね。ユン老師らしいです」

真っ直ぐトリスタにやって来ない様は容易に想像できてリインは苦笑する。

と、その背後で――

「いやっほー！」

リイン達の背後をシャーリイが声を上げて駆け抜けた。

「次のコーナーで追い抜くっ！」

「まだまだっ！」

それに遅れてフィーとクリスが走り抜け――

「ふう……ふう……ふう……」

「ひー、ひー、ひー」

「ちっ――」

さらに遅れてラウラとエリオットを始めとしたⅦ組のメンバーが団子状態でリインやテオに目もくれずに山道を駆け上がって行く。

「ふふ、元気なクラスメイト達だな」

「……………平和だな……………」

テオの苦笑にリインは改めて空を見上げて、その言葉を呟くのだった。

・*

「これがオルデイスの地下からリインが回収して来たクオーツよ」

温泉宿《鳳翼館》のダイニングバーの片隅でサラはテーブルの上に小箱を置く。

「大変だったらしいわよ。領邦軍が占拠していて、まあこれがあったのは偶然だったみたいだけど」

「そうか。ノーザンブリアといい、彼には借りを作ってばかりだな」

小箱を手に取り、中を検めるのは黒い髪の女性、アプリリス。

ノーザンブリアからユミルの警護として派遣された一人として、滞在していたアプリリスはその中身を確認して頷いた。

「間違いない。あの日、研究室からなくなっていたクオーツだ」

「勝手で悪いけど、中の結晶回路はこちらで壊させてもらったわ……」

七耀石から魔獣を錬成するなんて機能は流石に危険すぎるっていうのがあたしやラツセル博士たちの意見よ」

「ああ、それは構わない……」

ノーザンブリアを守るための“力”だったとはいえ、テロリストに利用されてしまったのはこちらの落ち度とも言えるからな」

拳大のクオーツに刻まれている術式は“魔獣の錬成式”。

これを利用してかつてはノーザンブリアに佩いて捨てるほどに存在していた“塩”を材料に古代のガーゴイルを錬成して無限の兵団を作り出した。

「それにしても意外ね。ユミルの警備に元北の猟兵が来ているのは聞いていたけど、あなたまで来ていたとは思ってなかったのよ」

「ノーザンブリアの復興で私ができることは少なかつたからな……」

計画の首謀者の中核を担っていたこともあるからほとぼりが冷めるまで外国に追い出されたんだ……」

それにゾラ先生を殺した下手人について調べるといって私が一歩動きやすかつたに過ぎない」

「下手人……もしかしてと思っていたけど、どうやらノーザンブリア

で暗躍していたのは《帝国解放戦線》で間違いなさそうね」

アプリリスの手の中の小箱を一瞥し、サラはそう結論をまとめる。七耀教会由来の法剣と猟兵が使う連射の利く導力ライフル。それにゾラの身体に残っていた刺し傷。

どれも《帝国解放戦線》に符号する武器だっただけに、その可能性もサラは考えていたが今回のオルデイスで回収されたクオーツが何よりの証拠だ。

「《帝国解放戦線》か……随分と傲慢なテロリストだな……」

いやテロリストなどどんな主張を掲げていたとしても傲慢なものか」

「元はオズボーン宰相の被害者の会みたいな印象だったけど、あれは完全に籠が外れているわね」

サラとしては《帝国解放戦線》の気持ちに共感できる部分はある。帝国内での遊撃士活動の排斥。

それはミラ目的で遊撃士をしていたサラにとっては死活問題の政策であり、学院に拾ってもらわなかったら逆恨みを拗らせて彼らの仲間入りをしていた可能性を考えてぞつとする。

「ま、ひとまずはこのほとぼりが冷めるまでは奴等も息を潜めるでしようね」

「《帝国解放戦線》は先日壊滅したと報道されたが？」

「あれは領邦軍が勝手に発表したのよ……」

そもそも組織の規模やリーダーの正体すら不明なのに、壊滅もあったもんじやないわよ」

「仮面のテロリスト、替え玉なんて簡単に作ることができるからな」

「それもあるけど、その場にはあたしの生徒たちもいたし、シャーリイが領邦軍の目を盗んで墜落現場を見て来たから間違いなく奴等は生きてるんだけど——」

「どうかしたのか？」

「何か隠しているのよね」

クレアが主導で行ったⅦ組に対しての事情聴取、そして学院での各班のレポート報告。

それらの中でサラはクリス達が、アンゼリカも含めて示し合わせて何かを隠しているように感じた。

「はあ……パパやあの時の教官たちの偉大さが今になって分かるわあ」

隠し事をする生徒たちにユースとリインの間で生まれた不和を思い出し、サラは愚痴りながらテーブルに突っ伏す。

今のVII組だけではなく、その前身となったトワ達に関してもクロウが死んだフォローができていないことにサラは項垂れる。

「何を言う。道を踏み外した私たちと比べればお前は十分に立派だ」
空になったグラスにアプリリスは酒を注いで言葉を重ねる。

「そう……お前は私の自慢の妹だ」

「ちよ——やめてよ、そういうの」

いきなり褒め殺しに来たアプリリスにサラはむずがゆそうに身を振る。

そんな反応にアプリリスは苦笑する。

「ところでリイン君は何処に？」

このクオーツとは別に、ノーザンブリアの復興支援の件で改めて礼を言いたいと思っていたんだが」

てつきりクオーツを回収したリインも来ると思っていたため、アプリリスは恩人の所在を尋ねる。

「リインならシュバルツァー家を訪ねた時にお父さんと一緒に追い出されて、釣りに行ったわよ」

「追い出された……それは穏やかではないな。いったい何があったんだ？」

テオとルシアの人柄はアプリリスも知っているため、首を傾げる。

「大したことじゃないわよ。ルシアさんがノイとリン、それからナユタの服を作っていたみたいで、それのお披露目のためにリインは時間を潰して来いって言われただけよ」

外部参加の女学院のお嬢様たちはそれに乗り気になり、文字通り彼女たちは着せ替え人形と化しているのだろう。

「それに……リインも一人になりたい時間はあるでしょうしね」

この地には「あの子」の遺灰を納めた墓がある。

リベールの慰霊碑と同様に一人になりたいと思うだろうルシアの配慮でもあるだろうとサラは察していた。

本人は釣りをして来ると単独行動を早速取っていたが、それも含めて考えると夕方頃まで戻ってこないだろう。

「……どうやら複雑な事情があるようだな」

「まあ、そういうことよ……まあリインはそれで良いんだけど……」

「何か懸念があるのか？」

「Ⅶ組の他の子たちがね……折角の慰安旅行だって言うのに山岳訓練を始めちゃったのよね……」

切っ掛けは道中のクリスの話。

今年の初めに彼が行ったトールズ入学のための強化合宿について話題に上り、Ⅶ組の武闘派たちが興味を示したことだった。

「まさか全員でやるとはね……」

ラウラやフィーは分かる。

エリオットも近頃の様子から納得するが、他の者達、更にはトワ達先輩陣も参加するのは意外だった。

「これもリイン効果なのかしらね」

いつからトールズ士官学院は熱血系になったのだろうかサラは嘆く。

「あんまり無茶して体を壊さないと良いんだけど……」

「ふふ……やはりお前は教官に向いているよ」

何だかんだ言いながら、教え子たちを心配するサラにアプリリスは微笑んだ。

・*

《鳳翼館》の食堂にアイゼンガルド連峰まで走って戻って来たⅦ組一同は用意された食事に驚く。

「これは凄いな」

「どれも自然豊かな場所ならではの料理だね……それに海の幸まであ

る」

「はい、カイエン公から今回のⅦ組B班の活躍を労うために、たくさん用意させていただきました」

感嘆をもらすガイウスとフィーの眩きにミルデー又はにこやかな笑顔で応える。

「野鴨に川魚の料理……たしか男爵閣下が仕留めたものでしたね？」

「ええ、折角来てもらったのだからユミルのものを仕留めて持て成さなければと思ってね」

「父さんの一番の趣味でさ。俺も何度も連れていかれたな」

ラウラの疑問にテオが答えリインが補足して、昔を懐かしむ。

「料理に使われている野菜やハーブも瑞々しくて彩り豊かですね。こちらはリインさんのお母さんが育てられたとか」

「ええ、皆さんの御口に合えば良いんですが」

「母様は小さいですが菜園をやっていて、郷にいた頃は私も良く手伝っていました」

エマの疑問にルシアが答え、エリゼもまたリインと同じように口を挟む。

「ええと、それじゃあ……」

《鳳翼館》でも一番広い宴会場でクリスはアルフィンに目配せをして音頭を取る。

「シユバルツアー卿、この度は父の申し出を引き受けていただきありがとうございます」

「恐縮です殿下」

まずはこの場を用意してくれたテオに感謝の意を伝える。

「Ⅶ組の皆さん、帝都での異変から始まり各地での《帝国解放戦線》の策略の阻止。皇族を代表して改めて御礼を申し上げます」

アルフィンが続いて労いの言葉をかける。

「僕達がⅦ組の仲間となって約半年……」

まだまだ学院生活は続くし、《帝国解放戦線》の脅威はまだ完全に払拭されたわけじゃない……

「ただ今骨休めとしてこの小旅行を楽しんでください」

「ふふ、来月にはトールズ士官学院の学院祭があるそうですね……
わたくしも都合がついたら行きたいのですが」

アルフィンにはクレアを伺い見るが、彼女は苦笑を浮かべて答える。
「今回の学院祭はオズボーン閣下とオリヴァルト皇子も参加する予定
ですので、恐らく問題はないかと思えます」

「まあ、それは良かったですわ」

クレアの答えに喜ぶアルフィンにクリスは微笑みを浮かべて続け
る。

「そういうわけだから僕たちは目前に迫った学院祭を成功させること
に集中しよう」

「出し物の内容は決まったから後は練習あるのみ、なんだが……」

「どうしたのライン？」

「エリオット達に関しては学院に戻ったら“テイルフィング”の操縦
訓練も始まるからそのつもりでいてくれ」

「う……うん」

過密になるだろうスケジュールを想像しエリオットは顔を蒼くし
ながら頷く。

「……………そうだね……………」

クリス達の言葉にトワは何かを振り払うように頷く。

「みんなのためにも学院祭は楽しいものにしなとね」

「トワ会長？」

笑顔を取り繕うトワにラインは首を傾げ、すぐに事情を察する。

「ともかく僕達は今できることを一步一步進めて行こう。だから今は
――」

徐にクリスはグラスを掲げる。

それが何を意味するのか、察した一同は同じようにグラスを持つ。

「まだまだ先は長いけど、これからもよろしくって言う所で――乾
杯っ！」

クリスのその言葉を合図に夕食会が始まった。

・*

夕食が終わり、シュバルツアー家に帰って行くテオ達を見送り一同は男女に分かれて温泉を堪能する。

風呂上りにはビリアードや枕投げに興じつつ、普段ではしないような話やミルデーヌが語るオルデイスでの戦いに一同は耳を傾けていた。

そして皆が寝静まった頃、リインは部屋を抜け出していた。

「みんなと入る温泉も良かったけど、やっぱり——」

久しぶりの故郷の温泉。

《箱庭》で再現したものとは何かが違う本物を貸し切りで堪能するためにリインは動く。

「あれ……?」

しかし、その足を途中で止めリインはロビーでグラスを傾けるアンゼリカを見つけた。

「アンゼリカ先輩?」

「やあ、君か。こんな時間まで夜更かしかい?」

「実は露天風呂にもう一度入ろうかと、そういうアンゼリカ先輩こそ、ロビーで何を?」

「なに、ひとつ風呂浴びたら夜景が見たくなってるね。せっかくだから君も一緒にどうだい? 飲み物くらいは奢らせてもらおうよ」

「……それじゃあ御馳走になります」

アンゼリカのいつもと違う雰囲気を感じ取り、リインはその提案を受け入れる。

メニューを見ることなく注文をし、飲み物が来たところでリインは口を開く。

「悩んでいるのはクロウ先輩のことですか?」

「流石リイン君、お見通しか」

リインの指摘に苦笑を浮かべ、アンゼリカはグラスを傾ける。

「トワから聞いたただけではまだ半信半疑だったが、まさか本当に《C》がクロウだったとはね」

「サラ教官やクレア大尉には報告していないんですね?」

「ああ、私の我儘でクリスマス君達に黙ってもらったことにした……」

父上への執り成しといい、クリスマス君には足を向けられないね」

鉄鉦山解放に介入したことは父、ゲルハルト・ログナーの怒りを買うことだとアンゼリカも理解していた。

あの父のことだから士官学院を退学にさせられることも覚悟していたのだが、主導がクリスマスだったことにしたため首の皮一枚という所で許された。

まだ学院に通えることは喜ばしいものの、鉄鉦山で確かめることになつた悪友の正体に動揺している自分にアンゼリカは驚いていた。

「やれやれ、この一年半。私も随分とあいつに心を許していたようだ」
「アンゼリカ先輩……」

「私の導力バイクなのだがね……あれは一年の時にトワ達と一緒に作つたものなのだが……」

自分にとってはそれも含めて楽しい学院生活だった。

しかし、彼はそれを捨てテロリストとなつた。

「私は楽しかった……だがクロウにとっては違つたのかもしれないと思うとね」

「それはどんな“力”を持っていたとしてもクロウ先輩にしか分からないことです」

「そう……だな……」

リインの言葉を受け止めてアンゼリカは頷く。

「状況的にはエステルさんを振り切って飛び出して行つたヨシユアさんと同じですけど」

「おいおいリイン君おぞましいことを言わないでくれたまえ」

リインの軽口にアンゼリカは身を震わせて反論する。

「はは、少しは調子が戻つたみたいですね？ クロウ先輩を殴りたいというならその手助けはするつもりですから遠慮なく頼ってください」

「やれやれ……君は本当に強くなつたね……」

二年前のリベールでクレア大尉の胸に飛び込んだ頃が懐かしいよ」

「ちよ——」

突然の昔話を引き合いに出してきてリインは動揺する。
そんな子供らしい反応にアンゼリカは笑って席を立つ。
「君には大きな貸しを作ることになるが頼りにさせてもらおう……差し当っては一つ忠告だ」

「――何ですか？」

リインは警戒心を高めて聞き返す。

「今から露天風呂に行くのはやめておきたまえ。私と入れ違いでアリサ君とラウラ君の二人が入って行ったからね……」

いや、リイン君にその気があるというのなら止めはしないがね」

「御忠告ありがとうございます」

リインはアンゼリカの忠告を素直に受け入れるのだった。

・*

「ああ……今戦ったら負ける……」

無人の露天風呂を確認して入ったリインはじんわりと広がる熱に唸る。

《箱庭》で再現したものは何かが違う充足感が満たされるのを感じ、リインは改めて故郷の湯を堪能する。

帝都での特別実習、《帝国解放戦線》の宣戦布告から激化した“騎神”を用いることになった戦闘の数々に思いを馳せる。

「このまま本当に俺は相克まで生き残れるのだろうか？」

まるで“黒の史書”の修正力が襲い掛かって来たような理不尽な戦い。

預言を回避しようとするれば必ず現れると聞かされていたその大きな流れをリインは振り返り実感する。

「切り抜けられたのは運が良かったからだ」

騎神の修復能力がなければ何度死んでいただろうか。

激化していく戦いに、彼らなりの理由があったとしても果たして本当にクラスメイトを巻き込んで良いのか悩む。

悩むリインを他所に、脱衣所の戸が開く音が聞こえて来る。

「こんな時間に……誰が……」

誰も入って来ないだろうと思っていたリインは気を緩ませたまま振り返る。

「お、お邪魔します」

そこには湯着を纏いながらも恥ずかしそうな作り笑いを浮かべる蒼い髪の少女がいた。

「あ——」

咄嗟にリインは前に向き直り彼女から身体ごと視線を外す。

「えつと……ダーナさんでしたよね？ 露天風呂はこの時間は混浴で

——混浴って言うのは——」

「だ、大丈夫です。分かっていますから」

捲し立てるリインにダーナは彼と同じように勢いに任せて喋る。

「貴方とは誰にも邪魔されずに話をしたかったんです。リインさん

……いえ『灰のライザー』」

「え……？」

122話 温泉郷Ⅱ

「姫様、ミルディーヌ、本気ですか？」

何かを企んでいた二人を警戒してついて来たエリゼは呆れと後悔を交えながら尋ねる。

「あら？ エリゼ先輩、リインさんを労って上げようというのはそんなにおかしいことでしょうか？」

「そうよエリゼ。これまで帝国そのものを守り抜いて下さったリインさんを労うためにお背中くらい流して上げなければエレボニア皇女として名が廃りますわよ」

「ですよ姫様、何と言ってもオルデイスを救われたばかりですから「だからって……水着まで用意して……」

理論武装を固めるアルフィンとミルディーヌにエリゼはため息を吐く。

湯着では抵抗があるのか、自分に黙ってそんなものを用意していた二人に面白くないものを感じずにはられない。

「エリゼだって、この数ヶ月のリインさんの働きは知っているでしょ？」

「ええ……それは……」

帝都での《暗黒竜》との戦いに始まり、ノーザンブリアに発生した《塩の杭》の再来。

クロスベルの《帝国解放戦線》、そしてオルデイスの異変。

先日ドライケルス広場で放映された巨大なゴーレムと戦う《灰》と《金》の姿には無事な兄の姿を見た後だというのに肝が冷えた。

「やはりリインさんは私の読み通り、一人で露天風呂を堪能したいと、二度風呂に来ていましたね」

「ふふ、流石ねミルディーヌ」

女性用の風呂場の先、露天風呂に通じる入り口から外の様子を窺い見るミルディーヌをアルフィンは褒める。

「むう……」

兄の行動を正確に予測する後輩にエリゼは頬を膨らませる。

「それでエリゼはどうしますの?」

アルフィンが振り返って尋ねる。

「私は……」

エリゼは二人と違って水着ではなく、湯着を着ている。

慣れたエリゼにとっては湯着も水着も似たような様なものだが、そのままリインがいる露天風呂に出るとなれば話は変わって来る。

一緒に入るのはいそひそひ五年ぶりくらいになるだろうか。

リインが血の繋がらない兄だと知り、一人の男性として意識するようになったからこそ、そこに今まで感じたことのない羞恥心を感じて躊躇ってしまふ。

「やっぱり私は——」

「あ——リインさんだけではなくダーナお姉様も一緒みたいですわね」

「え……?」

外を覗き見ていたミルディーヌの言葉に踵を返そうとしたエリゼの動きが止まる。

「あらあら、どうするエリゼ?」

クスクスとまるで計画通りと言わんばかりにアルフィンは笑うが、エリゼはそれを無視してミルディーヌの上から露天風呂を覗き見る。

そこには背中合わせて、楽し気に——エリゼの視点で談笑している男女の姿があった。

ダーナ・イーグレット。

ミルディーヌの親戚の娘と先日紹介され、オルデイスでリインに命を助けられたらしい。

その御礼をしたいということでミルディーヌを頼り、更にはこの数日で聖アストライア女学院に転入までして来た上級生。

会ったその日に混浴をして距離を詰めて来るダーナの行動力と積極性にエリゼは恐ろしいものを見る。

「ふふふ、これは足踏みしている暇はなさそうですね」

ダーナの目的、そしておおよその会話の内容を予測できるミル

デイーヌはそれをおくびにも出さずに自分達は出遅れを咄く。

「これはいけませんね。エレボニア皇女として遅れを取るとは女が廢ります」

矛先が自分達に向かないと分かっているのか、アルフィンはミルデイーヌの言葉に乗って煽る。

リインの背中を流すというミッション。

アルフィンとミルデイーヌだけでは困難かもしれないが、そこにエリゼが加わってくれるなら成功の目が出てくる。

もちろん打算だけではなく、一喜一憂するかつて《氷の乙女》と呼ばれたエリゼの反応を面白がっている部分もある。

「このままではダーナお姉様にリインさんのお背中を取られてしましますよエリゼ先輩」

「それは大変ね。このままエリゼはリインさんが盗られてしまっても良いのかしら?」

「——っ、私は……」

二人の言葉にエリゼは一度目を伏せ——

「私は——」

「あら? 何しているの貴女達?」

半端に開いた戸にエリゼが手を掛けた瞬間、背後からの声に三人は振り返る。

「あらアリサさん? どうかしましたか?」

そこには風呂場だというのに服を着て入って来たアリサがいた。

「ちよつと髪留めを落としたみたいで探しに来たんです、殿下たちはそこで何を?」

周囲を見回しながらアリサは聞き返す。

湯着ではない水着を着たアルフィンとミルデイーヌにアリサは首を傾げ——外から不気味な咆哮が響く。

「今のはまさか!?!」

「そんな勢いよく立ったら危な——」

「きやあつ!?!」

「なあつ——」

咆哮に続いて半開きの戸の向こうから聞こえて来た盛大な水音。

「兄様っ!？」

「え——リイン?」

勢いよく戸を開け放って露天風呂へと入って行くエリゼ達にアリスは首を傾げながら続く。

「ぶくぶくぶく——ぷはっ!」

エリゼ達が突入すると、上から押し掛かれて水中に沈められたリインがダーナの身体を押し上げて顔を出した。

「あらあら……」

「ダーナお姉様……なんて大胆……」

その光景にアルフィンとミルディーヌは感嘆をもらす。

「殿下……ミルディーヌ……それにエリゼとアリス?」

濡れかけたリインは声に反応して顔だけで振り返る。

「……………」

「……………リイン……貴方……女湯で何をしているのかしら?」

沈黙するエリゼに顔を引きつらせて尋ねるアリス。

「何って……女湯?」

リインは疑問符を浮かべながら、正面に視線を戻す。

「あ……あはは……えっと……ごめんね」

すぐ目の前には困った風に笑うダーナの顔があり、転んだ拍子に結び目が解けた湯着はかろうじてリインの手に支えられて彼女の肢体を隠している。

「——いや待ってくれ! これは違うんだ!」

迂闊に動けばまずい状況でありながら、このままダーナの何処とは言えない部分に触れ続けることもまずい状況の板挟みにリインは狼狽えて固まる。

しかもアリスは混浴の時間となっている露天風呂を女湯だと勘違いしている。

「いの——」

アリスは桶を手に取り振り被る。

「――不埒者っ！」
全力の投擲は狙い違わずリインの顔面を捉えるのだった。

・*
・*

夜、誰もが寝静まるはずの深夜。

ユミルには季節外れの雪と山の奥から木霊する不気味な咆哮が住民たちを不安を煽る。

領民たちはその不安を払拭しようとシュバルツァー家を尋ねるも、テオも何が起きているのか分からず無根拠な慰めで応対することしかできなかつた。

「――では、確かなのかな？」

その《魔煌兵》とやらが郷に向かっているというのは「

シュバルツァー家の一室でテオはエリゼの先輩である少女と向き合っていた。

「はい……霊力の動きから……まだ距離はありますが確実に近付いてきています」

テオの質問にダーナははつきりと頷く。

「《魔煌兵》……先日オルデイスに現れた巨人か」

テオはダーナの説明にその背後のリインに視線を向ける。

額を赤く腫らしたリインはテオの視線に彼女の言葉を肯定するように頷く。

「《魔煌兵》の目的はリイン君です……」

元々この地には起動者を排除するための《魔煌兵》が配置されました。今回の異変はリイン君にその《魔煌兵》が反応して目覚めたのだと考えられます」

何故、君がそんなことを知っているのか。

息子と年恰好が同じくらいだというのに威厳に満ちた堂々とした振る舞いテオは違和感を覚える。

「そうなるユミルもオルデイスのようになるのか？」

「いえ、この地の《魔煌兵》はあそこまでの“力”はありません……」

それにこの《魔煌兵》の目的は「騎神」に関わる者を遠ざけるための存在ですから」

断言するダーナにテオは何故そこまで言い切れるのか不信に思う。「大丈夫だよ父さん。《魔煌兵》の目的が俺なら、先にこちらから行けば済む話だから。今から行つて日の出までには終わらせてくるよ」事も無げに言うリインに頼もしさを感じるがテオは異を唱える。「せめて夜が明けるのを待ちなさい……」

この雪の勢い、すぐに歩くのも困難なくらいに積もるだろう。夜の雪山の恐ろしさはお前も良く分かっているはずだ」

「それでも、だよ……このままここで朝まで待つていたら《魔煌兵》が郷まで降りてきてしまう。それは避けなければいけないはずです」

「それは……」

リインの主張にテオは閉口する。

領主としてはユミルを巨人の戦場にするわけにはいかない。

しかし、父としては危険な夜の雪山に息子を送り出すのにも抵抗がある。

葛藤はするもリインの提案が妥当だとテオは折れる。

「分かった、行つて来るといい」

「私たちは郷の住民たちにいざという時の避難を呼び掛けておきましよう」

テオの決定をルシアも認めて、自分達にできることを提案する。

VII組一同は顔を見合わせて頷き、代表するようにエマが口を開く。

「それならリインさんには私たちも一緒に——」

「いや、みんなは父さん達と郷に残つて方が一に備えて欲しい」

しかし、エマの——VII組の提案をリインはにべもなく遮った。

「リインさん……ですが——」

「さつき父さんも行つていたが夜の雪山は慣れていない人間にとつて歩くだけでも危険だ……」

それに今回の《魔煌兵》に関しては俺とダーナさんだけで十分だろう」

「はい、リインさんの実力なら《灰》を呼ばなくてもこの《魔煌兵》

に遅れを取ることはないでしょう」

訳知り顔で補足説明を加えるダーナにエマは思わず息を呑み、きつい視線を返す。

「じゃあ、その理屈ならシャーリイとクリスマスならリインについても良いんだよね？」

しかし、そんなエマの憤りを他所にシャーリイが新たな提案をする。

「あ……そうですね！ 僕たちは雪山での訓練もしたし、リインさんの足を引つ張ったりはしません」

シャーリイの提案にクリスマスは悪気なく乗っかり、同行を主張するのだった。

123話 温泉郷Ⅲ

「オオオオオオオオオオッ——」

断末魔の声を上げ、魔煌兵は消滅していく。

「ええーこれで終わりなの？」

図体だけ大きく、歯応えがなかった魔煌兵にシャーリイは不満を露わにする。

「だから言っただろ、俺とダーナさんで十分だつて」

油断をしているつもりはないが、全員でぞろぞろと訪れる程の脅威というわけではない。

むしろ暗い夜道と吹雪による二次被害の方が危険なくらいだ。

「でも《魔煌兵》は倒しましたけど、吹雪は止みませんね？」

油断なく周囲を見回すクリスは元凶と思わしき存在を倒したにも関わらず、勢いの衰えない吹雪に警戒を強める。

「吹雪の原因はこっちだから」

リインから譲ってもらった双剣を納め、ダーナは峡谷の奥に進んで行く。

そこにあつたのは淡い光を宿す石碑。

「それは——」

「知っているんですかりインさん？」

「ああ、八年前。俺が《鬼の力》を使えるようになった切っ掛けの石碑だ……」

そうだ。俺が触れたことで石碑は光出して、湧水がみるみる凍り付いて今日みたいな大雪が降り始めて、そして——」

言葉を遮り、場の霊力の密度が濃くなる。

リインが振り返る過去になぞらえるように、石碑の前に光が収束し現れるのは氷の魔獣。

頭は牛、身体は人間。

御伽噺の中でミノタウロスと呼ばれる魔獣は敵意を込めた眼差しでリインを睨み——

「大丈夫……この人はそうじゃないから」

昂る凶悪な角を持つ魔獣に臆することなくダーナは向き直る。

「久しぶりだね、ミノス」

『……………ダーナ。どうやら無事に目覚めることができたようだな』
「魔獣が喋った!？」

凶悪な形相の魔獣の口から出て来た人間の言葉にクリスは驚きの声を上げる。

『だがどうしてお前が“黒の墮とし子”なんかと一緒にいやがる?』

「黒の墮とし子…………」

それが自分を指している言葉だとリインは理解する。

「ミノス、リイン君は大丈夫だよ」

『何をもってそんな事が言える?』

しかも以前よりも遥かに力を付けている上に、起動者にもなったようじゃねえか。やっぱりあの時無理をしても殺しておけば——』

「ミノスッ!」

不穏な言葉をダーナは遮る。

氷魔は肩を竦めるようにため息を吐く。

『とにかく墮とし子を“あれ”に近づけるわけにはいかねえ…………』

ダーナに免じて今日は見逃してやるが、二度とこの地に近付かないことだな』

唸って威嚇する氷魔にリインは肩を竦める。

「随分嫌われたものだな…………」

その理由もおおよそリインは察することができる。

この八年、トラウマもあって近付くことはなかった場所だけにリインも好き好んで来るつもりはない。

しかしその範囲がユミルにまで及ぶとなると躊躇うものがあるが、それでも父たちを無用に巻き込まないためにも——

「分かった。俺は——」

「ミノスッ! いい加減にしてくれないかな」

リインの言葉を遮ってダーナは声に怒りを滲ませ氷魔からリインを庇う様に立つ。

「貴方たちが《黄昏》に向けて、因果から逃れるために精霊になったこ

とは尊敬しています……

ですが、だからと言ってリイン君を不当に扱って良い理由にはならないはずですよ」

『不当？ 断言するが、それはいつか必ず『贄』として世界を滅ぼす引き金を引くだろうよ！ 生きている方が害悪だ』

「ミノスッ！」

『——っ』

二度目の叱責に氷魔は怯むように後退る。

「私だってリイン君を信頼して良いのか、まだ見極めている最中です……」

「だけどこの地はリイン君にとっての故郷。人の理から外れた私や貴女がリイン君の日常を奪う権利はないはずですよ。違いますか？」

『……』

「もちろんミノスの言いたいことは分かります……」

ですが、ここに来たのは『樹』を見せるためではなく、貴方がリイン君の気配を感じて起こしているこの吹雪を止めるため……」

目的を果たしたら私たちは下山します。それで文句はないですよね？」

顔だけでも人の倍以上ある巨大な魔獣に臆することなくダーナは言葉をぶつける。

『……………ちっ……分かった』

魔獣はダーナとリインを交互に見て、諦めたようにため息を吐く。

そのまま氷魔はリイン達から距離を取る様に後退り、空に向かって鳴く。

すると吹き荒れていた吹雪は見ている間に弱くなり、数秒も立たずにやんでしまう。

『最後にもう一度言っておくけど、くれぐれもこの場所に近付くなよ』『墮とし子』』

そう言い残してミノスと呼ばれた氷魔はその姿を光の粒子に変えて、石碑の中へと還って行く。

吹雪がやみ、溪谷に満ちていた上位三属性の気配も静まり、溪谷は

元の穏やかな空気に戻る。

「何あれ……？」

沈黙を保つ一同の中でシャーリイが呆れ切った様子で口火を切る。

「ごめんなさいリイン君」

シャーリイの呟きを切つ掛けにダーナは振り返つて深々と頭を下げる。

「いえ、ダーナさんが謝ることじゃないですよ。それより彼はいったい何だったんですか？」

光が消えた石碑を一瞥してリインは尋ねる。

「彼はミノス、私が千年前、真実を探していた時に知り合った精霊です」

「精霊……」

「私よりも前の時代、まだ《黒》の因果が不完全だった時に諍っていた人達です……」

人の身では《黒》が紡ぐ因果に諍えなかったため、その身を精霊に昇華させ《黄昏》に対抗する手段を守る道を選んだ世界の守り人」

「千年前って……ダーナさん、貴女はいったい何者なんですか？」

「何か独特な空気を纏っているお姉さんだと思っていたけど、そういうことなんだ」

ダーナの説明にクリスとシャーリイは対照的な反応を示す。

そんな二人にダーナは苦笑して、先にリインに名乗ったように二人にも名乗る。

「私はダーナ……千年前、騎神を作り出した片割れの大地の眷属。その長を勤めていた者です」

その名乗り二人はリインを振り返る。

「事実だ」

そんな二人にリインは頷いて見せる。とは言えリインも露天風呂で自己紹介をされただけで、彼女の目的などはまだ知らない。

「とりあえず郷に戻りながら話しても良いかな？　ここで話すとミノスに怒られそうだから」

そう促されてリイン達は郷への帰路に着くのだった。

・*

道中で語られたのはダーナの半生。

若い身空で大地の眷属の長となり、当時起きた《暗黒竜の事変》をヘクトル大帝と共に戦い、呪われてしまった《テスタ・ロツサ》を封印した。

一連の事件に違和感を覚えたダーナは《魔女》と別れ、《暗黒竜》が生まれた原因を探るため帝国各地を放浪することにした。

その旅の最中で気付いた《黒の騎神》の暗躍。

「そのことを当時のローゼリアさんやアルノール家に伝えようとしたんだけど、《黒》が紡いだ因果に私たちは囚われてしまったの」

一人、また一人と旅をした家族たちが不幸な事故で喪われていく光景をダーナは瞼の裏に思い出す。

「それでどうなっただんですか？」

荒唐無稽な御伽噺にも聞こえる千年前の出来事にクリスは前のめりになって続きを促す。

「最初の異変は経過報告をしようと帝都に戻った時だった……」

一緒に戦ったはずのヘイムダルのみんな、それにヘクトルさん達は私達こそが《暗黒竜》を世に放った邪教だって宣言して石つぶてで私達を出迎えたの」

「……………え……………？」

「それが《黒》の力だった……」

頼りになりそうだったローゼリアさん達——《焰の眷属》は既に帝都を離れていたから私達はただ逃げる事しかできなかった……

もちろんそのことを責めるつもりはないよ」

フオローするような言葉をダーナはリインに向ける。

「そうして帝国中を逃げ回っていた私たちはその中でミノス達と出会ったの」

ダーナと同じように《黒》の存在に気付いてた彼女の時代にとっても過去の偉人たち。

人であることを捨て精霊になることで、《黒》が紡ぐ因果から逃れることに成功した存在。

「私も《黒》の因果に囚われて次代のアルベリヒの“器”にされそうだったんだけど、私は私自身を封印してその戒めから逃れて、この時代に辿り着いたの」

「そうだったんですか……なんだか僕の御先祖様が申し訳ありません」

「ううん、ヘクトルさんが悪いんじゃないって言うのは分かっているから……」

それにこの時代に来て良かったと思ってるんだよ」

いつの間にか不死者となっていて、仲間の——家族の死を最後の一人になるまで看取り続けて来た絶望。

せめて《黄昏》に諍おうとする未来の誰かの一助になるための悪あがきは良い意味で無駄になった。

「リイン君、改めて貴方をお願いします」

「はい、何でしょう?」

数多の絶望に屈さずにそれでも前に進み続けて来た大地の長にリインは敬意を抱き聞き返す。

「貴方の一族の長であるローゼリアさんに取次ぎをしてもらえないでしょうか?」

「はい——ん?」

ダーナの申し出にリインは頷いてから違和感に首を傾げる。

「あ、別に“禁”を侵したことを責めるつもりはないから……」

ただローゼリアさんも《黒》の存在に気付いているなら情報交換をしたいと思います……

ローゼリアさんならミノス達も“切札”の話をできるから」

「んん?」

まるでリインが“魔女”の一員だと言わんばかりのダーナの言葉にリインはどうしてそんな誤解が生まれたのか頭を捻る。

「えつと……リイン君が乗っていたのは《灰の騎神》ヴァリマールだよね?」

ダーナも食い違いに気付き、確かめるように尋ねる。

「はい……」

「えっとね……私達『地精』と『魔女』の対立から始まった被害からいくつかの取り決めを交わしたの……」

その一つにどちらの陣営も騎神を管理することは良くても、起動者になってはいけないという契約があるの」

「起動者にならない？」

「靈力の扱いに長けた眷属が起動者になった場合、『騎神』は想定していた以上の性能を発揮することができる……」

リイン君がオルデイスで想定以上の機能を発揮させていたでしよ？

だから焰と大地の至宝の衝突を繰り返さないために交わした古き盟約の一つなの」

「なるほど……」

「でも『黒』がもたらす『黄昏』の前にはそんなことは言ってもらえない……」

だからローゼリアさんは貴方を『灰』の起動者にしたんだよね？」
確認してくるダーナにリインは彼女の勘違いを理解する。

自分も気付いたのだからローゼリアも『黒』の暗躍に気付いており、その対策の一環として本来なら禁忌にした『魔女の起動者』がその対抗手段の一つだと結論に至ったのだろう。

だが真実は違う。

リインは『焰の眷属』の血を引いていないし、そもそも『魔女』はヴィータを除いて『黄昏』に全く気付いていなかった。

「えっと……ダーナさん……」

二人の間にローゼリアへの認識の大きな違いが生じている。

片や、偉大な先代の長と聖獣を継いだ尊敬できる『大人』の先達。

片や、孫や友人にハブられて泣いてしまう『子供』の先達。

「俺は『魔女』の血族じゃありません。VII組にいるエマって言う子がダーナさんの言っている『魔女』の末裔です」

「え……？」

予想が外れていたダーナは目を丸くする。

「それから——」

一瞬、ローゼリアの名誉を守ることも思い浮かぶが、どうせ会ったらずぐにばれることだとリインは取り繕うことをやめる。

頭の中で思い浮かべたローゼリアが涙目になって首を横に振って抗議して来るが、リインは嘘は良くないと割り切る。

「ローゼリアさんは最近まで《黒》の暗躍に気付いていませんでした」
「……………え……………」

ただその事実を突きつけられて呆然とするダーナの表情にだけはとても申し訳なく思うリインだった。

「気付いて……………なかった……………」

「はい、全く……………」

「全く……………」

オウム返しにダーナはリインの言葉を繰り返す。

余程にシヨックだったのか、ダーナはそこからユミルに到着するまで一言も喋ることはなかった。

無理もないとリインはダーナの心中を察しそつとしておくことにする。

そして徐にリインは降りて来た道を振り返る。

「『墮とし子』……………それに『贄』か……………」

ミノスが向けて来た敵意。

あの場所でリインとエリゼが——否、自分だけが狙われた理由を知ることができた。

そして同時にこのユミルがどうして皇族から目を掛けられていたのか、その本来の理由に触れることもできた。

「あの時はただいなくなりたいと思っていたけど……………」

その一心でリベールまで家出をし、帰って来れば懐かしさを感じる故郷だとリインは改めて実感することができた。

しかし精霊の敵意を経験し、今『識た』ユミルの空気はリインに対して冷たいものだった。

「リインさん、あんな無礼な奴の言う事なんて気にする必要ないです

よ」

「そうそう、年を重ねているだけで自分達の方が無条件に偉くて正しいってどうせ思ってるんだよ。せいぜいロートルの鼻を明かして上げなよリイン」

「……………ああ、そうだな」

物憂げなリインを気遣うクリスとシャーリイにリインは強がるように笑うのだった。

124話 温泉郷Ⅳ

季節外れの吹雪は夜が明ける前に納まりユミルの郷はいつもと変わらない一日が始めることができた。

解決に尽力したであろうリイン達は特に何も語らず、Ⅶ組もリインのすることなら間違いはないだろうと特に追及はしなかった。

また今回同行できなかった一同は程よく積もった雪で雪上戦闘の訓練をしようとしたものの、二日連続の訓練にサラ教官の雷が落ちた。

皇帝のメンツも潰すことになりかねないと、ちやんと慰安しろと説教された一同は思い思いに長閑な一日を過ごすことになった。

ある者は積もった雪を利用した遊びであるスノーボードに興じ、ある者は足湯を堪能し、ある者は大自然に向けて一心不乱にバイオリンを掻き鳴らす。

またある者はサラ教官に注意されたが、それが一番の息抜きだと言わんばかりに雪上で模擬戦を行う者もいた。

そして――

「リイン、起きてる?」

鳳翼館の男子部屋をアリサがノックする。

既に時刻は正午。

正午まで仮眠を取ると言っていたこともあり、それに合わせて来たのだが返事はない。

アリサはため息交じりに振り返ると、廊下の先からアルフィンとミルディーヌが期待に満ちた眼差しを送って来る。

「……どうしてこんなことになったのかしら?」

二人の背後にいるエリゼとクレアの眼差しも含めてアリサは自分の手に下げられたバスケットを見下ろしてため息を吐く。

と、そこでドアが音を鳴らして開く。

「ようやく起きたみたいね……」

これ――エリゼさんや殿下たちと一緒にランチを作ってきたんだ

けど、良かったら食べて――

勘違いしないでよ！　これは……そう昨日、桶をぶつけちゃったお詫びなんだから――」

「――アリサ」

バスケットを押し付けるように突き出しながらそっぽを向いて捲し立てるアリサに困惑の声が応じる。

「……………えつとリインさんならもう起きて出て行ったみたいなんだけど」

差し出されたバスケットを抱えたクリスは申し訳なさそうに目を伏せるのだった。

「姫様、見ましたか？　あれがツンデレって言うんですよ！」

「ふふ、興味深いですわね」

「二人とも……………」

「アリサさん……………」

・*

ユミルの郷の外れに位置する共同墓地。

その一角のまだ真新しさを残す墓標の前にリインは一人、何をすることもなく佇んでいた。

墓標には昨日供えた花と先程彼が作った「雪うさぎ」が添えられている。

「……………俺は……………」

何かを言おうと思っただけ来たはずなのにそれ以上言葉は続かない。

そのまま時間だけが無為に過ぎて行く。

「こんなところにいたのね」

どれだけの時間そうしていたのか、すぐ背後で声が掛けられた。

「アリサ……………」

振り返って手が届きそうな場所にいるアリサにリインは少し驚く。

「ふふん、隙だらけよ」

何処か得意気にアリサは声を掛けるまで気付かれなかったことを

誇る。

「……そうだな」

そんな彼女にリインは苦笑と共に強張っていた肩の力を抜いて息を吐く。

「……えつと邪魔しちやった?」

うるさくしたわけじゃないが、死者を悼んでいる相手にするには不謹慎だったかとアリサは首を竦ませる。

「いや、そんなことない」

リインは首を振る。

落ち着きのある普段の姿とはまた違った様子にアリサは居たたまれない気持ちになりながら話を振る。

「実はエリゼさん達とランチを作ったのよ、昨日のお詫びとして私も手伝ったんだけど良かったらどう?」

「ランチ……ああ、もうそんな時間か」

空を見上げ、夜の吹雪が嘘だったかのような晴天の空を見上げてリインは呟く。

「もう……って、いつからいたのよ」

非難する眼差しでリインを睨み、アリサは彼の背後の墓石に刻まれた名前を読む。

「アルティナ——って、え……?」

刻まれた名前にアリサは首を傾げる。

アルティナ。

それはかつてリベールに家出したアリサをアーツを使って追い回した銀の髪の子の名前。

ラッセル博士は殺されたと言っていたが、先日帝都ですれ違いアリサはどういうことかと困惑した。

「それじゃあ帝都で会ったのは……」

「あの子は同じ名前だけど、この子の妹みたいなものだ」

愁いを帯びた声にアリサは押し黙る。

リインの言葉でも複雑な事情があることは察することはできる。

しかし、意外だったのはその死者を悼む態度だった。

てつきり母の様に親しい人が死んでも涙一つ見せない冷血漢だと思っていただけにリインの雲った顔はアリサの中でこれまでの印象が揺れて戸惑う。

「えっと……」

言葉を選ぼうとしているアリサにリインは苦笑する。

「行こうか、エリゼ達もその様子だと心配させてしまったみたいだから」

「……………うん」

フォローする言葉は出来ず、逆にリインに気遣わせてしまったことにアリサは肩を落とす。

踵を返して歩き出したリインに遅れて、アリサも郷に向かって歩き出す。

そして何を思ったのか、墓石を振り返る。

「アルティナ・シュバルツァー。ここに眠る……」

帝都で同じ顔の少女と会っていただけにアリサはあの時の少女が既に亡くなっていた事実に驚く。

同じ顔の少女と出会ったリインの心境も推し量ることはできない。ただ自分だけが家族に恵まれず不幸だと思っていたことをアリサは恥じる。

「あ……………『雪うさぎ』……………」

ふと、墓に供えられた雪と葉っぱで作られたうさぎを見つけてアリサは言葉を漏らす。

「……………あ……………」

思わずアリサは振り返り、歩き出した背中を見る。

「どうかしたかアリサ?」

「……………うん、何でもない」

足を止めて振り返るリインにアリサは平静を装って首を横に振る。リインは首を傾げながら、前に向き直ると歩き出した。

「……………本当にあの時の男の子だったんだ」

母に指摘されても半信半疑だった幼い日にこのユミルで迷子になっていたアリサを助けてくれた男の子とリインがようやくアリサ

の中で重なるのだった。

・*

「それじゃあクレアさん、エリゼ達のご事は頼みます」

カレル離宮駅。

小旅行を終えたⅦ組はそのままトリスタへ戻るのではなく、皇族の住まいであるカレル離宮に寄り道をしていた。

「はい、お任せ下さいリインさん」

警備と時間の都合上、今日は女学院に戻らずアストライア女学院の女子たちは一泊を過ごすことになっている。

既に駅は皇帝家の敷地内ではあるが、クレアはリインの頼みを快く引き受ける。

「皆さん、今回はお兄様たちの無茶な我儘を聞いて下さり、ありがとうございます……」

おかげで皇族としてではなく、ただのアルフィンとしていろいろな経験をさせていただきました。この思い出は一生の思い出になるでしょう」

「そんな恐縮です」

アルフィンの畏まった礼にリインは苦笑する。

「そうだよ、アルフィンはいつも大袈裟なんだから」

「ふふ、本当にセドリックが羨ましいわ……いつそ来年はわたくしもツールズ士官学院に進学してしまおうかしら？　クリス先輩」

「うっ——じよ、冗談だよね？」

「さあ、どうかしら」

含みのある笑みを浮かべるアルフィンにクリスは顔を引きつらせる。

そんな姉弟のやり取りにリインは苦笑し、彼もまた妹に向き直る。

「それじゃあエリゼ」

「——っ……はい、どうかお元気で……学院祭、楽しみにしていますから」

向けて来る変わらない笑顔に何かを感じながらもエリゼは平静を装い応える。

「ああ、待ってるよ……それじゃあ、また」

リインは微笑み、エリゼの頭をそつと撫でる。

「あ……」

その手が離れるとエリゼは自然と声を漏らしていた。

踵を返して、仲間たちと《アイゼングラーフ号》へ乗り込んでいく彼らの背をエリゼは見送り――

「兄様っ！」

リインが乗り込む直前、エリゼは駆け寄って彼の服を掴んでいた。

「エリゼ？」

「……………」

目を丸くして驚くリインにエリゼは躊躇いながら、己の内を吐き出す。

「兄様がどれだけ重いものを背負っているか私には分かりませんが……でも二度目は嫌です」

「エリゼ……」

「リベールの時のように、兄様がいなくなる事なんて私も、父様も母様も望んでいません……それだけは忘れないでください」

「――っ……ああ、分かってる」

エリゼの訴えにリインは一瞬驚き、少しだけ気持ちが軽くなった。

「それでは兄様……また今度」

「ああ、また」

改めて二人は別れの言葉を交わす。

発車し遠ざかって行く《アイゼングラーフ号》をエリゼは万感の思いで見送り――

「ふふ、よく言えましたエリゼ」

「ああ、流石エリゼ先輩。たったあれだけの言葉でリインさんの心を持って行くだなんて、やっぱり一番のライバルはエリゼ先輩のようですね姫様」

「姫様……ミルディーヌも茶化さないでください」

子供にするように頭を撫でてくるアルフィンと頬に両手を当てて身悶えるミルディーヌにエリゼはため息を吐いた。

・*

トリストタ。第三学生寮前。

「お帰りなさい皆さん」

学生寮が違う先輩達と別れ、ユミルの小旅行から帰った一同をシャロンは玄関先で待ち構えていたように出迎える。

「シャ、シャロン……このパターンはもしかしてまた……」

「リインのお客様だとしたら……オルデイスの魔煌兵が女の子になつて会いに来たとか？」

「はは、そんなまさか」

いつぞやのように出迎えたシャロンにアリス達は警戒を露わにする。

「………ガイウスさん、そのイベントはもう終わってるんです」

肩を落として誰にも聞こえない声でエマはガイウスが上げた可能性を肯定する。

「下らん、そんな二度も同じことなど起きるはずが——」

ユーシスがそんな仲間たちの警戒を一蹴し、さっさと寮に入ろうとして——

「はい、皆さんが旅行に行っている間にリイン様のお客様が訪ねて来られました」

「……なん……だと……？」

ノブに掛けた手を放し、一歩二歩とユーシスは後退る。

「俺に客ですか？ でも中には誰もいませんよね？」

気配を探り、学生寮の中に誰もいないことをリインは指摘する。

「はい、今日帰って来るとお伝えしたのですが縁がなかったと手紙だけ渡して欲しいと頼まれました」

「手紙……？」

「こちらになります」

差し出された手紙をリインは受け取って、中を検めると差出人はリインが想像していた者からの手紙だった。

「リイン？」

「あ、ああ……ユン老師、俺の剣の師匠からの手紙だった」

仲間たちの好奇の眼差しにリインは答える。

「それはもしかして八葉一刀流の開祖であるあのユン・カーファイ殿のことか!？」

父から聞いたことがあるその名にラウラが真っ先に反応する。

「リインの剣の師匠……」

「どんな超帝国人なんだろうな……」

「東方出身だから超共和国人じゃないの？」

それぞれが勝手な想像を浮かべていることにリインは苦笑を浮かべ、手紙をとりあえず流し読む。

「そのユン老師はリインにいったいどんな言葉を？」

やはり武芸者として興味があるのか、恐る恐るラウラが質問を重ねる。

「——どうやら近況報告と後は……」

最後のページを捲り、リインは目を細める。

「リイン……?」

「どうかしましたか？」

黙り込んだリインにクリス達は首を傾げる。

「いや、何でもない」

リインは手紙を仕舞い、話を切る。

「むう……」

明らかに不満そうにラウラが頬を膨らませるが、流石に他人の手紙を詮索することは自重する。

「それじゃあ——」

気を取り直して、リインは学生寮に入ろうとして——振り返った。

「リイン……?」

「悪いみんな、俺は用事ができた」

「え……?」

「ちよつとリイン!？」

仲間たちが首を傾げている間にリインは寮の中に旅行鞆を投げ込み、彼らの間をすり抜け、アリサの制止にも振り返らずトリストアの街へと繰り出した。

遠くから聞こえて来るのはハーモニカの音色。

別に珍しいわけでもない日常の音の一つ。

吹かれている曲も、誰かが創作したオリジナルではなく一般に普及しているありきたりな一曲。

誰がそれを吹いているのか、想像は簡単にできる。

そしてそれに意味がないことも分かっている。

しかし、それでもリインはハーモニカの主を確認するために動いていた。

「あ……」

公園のベンチで一人で座ってハーモニカを吹いていたのはリインが想像していた銀髪の少女だった。

少女はリインや公園の人々の注目を気にも止めずにハーモニカを吹くことに集中する。

やがて少女はその一曲を吹き終わると顔を上げて、リインを見て一言。

「不埒ですね」

「何でそうなる?」

ジト目から繰り出された開口一番の非難の言葉にリインは思わず項垂れる。

「ほぼ初対面の人間をまじまじと凝視するというのは不埒では?」

「まあ、それはたしかに……」

不躰な視線だったことはリインも認めるしかない。

同時に「ほぼ初対面」という言葉にかすかな胸の痛みを感じる。

「いつもここでハーモニカを吹いているのか?」

「はい、いいえ……ハーモニカは毎日吹いていますが、特定の場所は決まっていません」

リインの質問に少女は淡々と答える。

「ルーファスさんは学院で教官をするそうだけど君はどうするんだ？」

「機密事項なのでお答えできません」

「そうか……」

「そうです……」

「……………」

「……………」

奇妙な沈黙が二人の間に流れる。

そんな中、少女は何を思ったのかリインに歩み寄り、服の裾を引いてリインをしゃがませる。

「ん？ どうし——ひゃ？」

何の予告もなしに少女はリインの頬を押し潰す。

「不埒なことを考えていますね？」

「そんなにやことはにやい」

頬を潰されながらリインは少女の言葉を否定する。

「いいえ、不埒なことを考えています」

勝手に断定し少女はリインの頬を押さえた指を上下に動かす。

「……………」

リインは少女の手を振り払うことなく、むしろ手から頬に伝わる熱に彼女がそこにいること、それを実感して無性に泣きたくなる。

少女のしたいように、されるがままにされていたリインは凝り固まっていた何かはほぐれて行くように感じた。

「ん……」

リインの頬を散々弄んだ少女は満足したように頷くと、その手を放す。

その時にはもう澱んでいた心は晴れていた。

「はは……」

思わず笑みがこぼれる。

改めて自分が何を守りたくて、何のために戦おうとしているのか思
い出す。

「むっ……」

そんなリインに少女は顔をしかめる。

「ありがとう、アルティナ」

お返しとばかりにリインは少女の頭を優しく撫でる。

「何故御礼を言うのか理解不能です……それからこの行為に何らかの不埒な意味は？」

ジト目で睨んで来るアルティナにリインは苦笑を浮かべる。

「そう思うならやめるけど、どうする？」

その言葉にアルティナは沈黙を返すのだった。

125話 プロジェクト始動

「それじゃあヴァリマールを学院祭に出すことは無理ですか？」

小旅行から帰った翌日、リインは放課後の旧校舎でエリカの報告を聞いていた。

「ええ、今回も予想外の事態でヴァリマールを使うことになったでしょう？」

またいつヴァリマールが必要になる事態が来るか分からない以上、できるだけ早くフェンリルの組み込みを済ませておくべきだっていうのが私達の見解よ」

「言いたいことは分かりますが……」

仮にも帝国政府のそれも皇帝からの勅命としての要請だけにリインの一存だけでどうにかなるものではない。

「だいたい今の状態のヴァリマールを学院祭に出してもねえ……」

エリカが見上げたヴァリマールに両腕はない。

それどころか胸には内部から爆発した痕といい、全身に走った亀裂といい、下手に触れたら壊れてしまいそうな危うさがある。

「下の祭壇は一番損傷が激しかったエルⅡプラドローを置いたから、短期間での修復はまず無理でしょ？」

テロリスト達のことを考えるとヴァリマールを先にするべきなんでしょうけど、理事長の腕の治癒も絡んでいるとなるとねえ」

「……………そうですね」

本来なら一番功績を上げているリインのヴァリマールを一番に修復させるべきなのだが、エルⅡプラドローを優先したのには訳がある。

一番の理由は左腕が麻痺しているルーファスの治療のため。

激しい戦闘で喪失したエルⅡプラドローの腕に連動して、起動者になったルーファスの腕も機能不全になったのなら逆説的に言えばエルⅡプラドローの腕を直せば、ルーファスの腕も治るかもしれない。

そういう理由でエルⅡプラドローはもつとも霊力が満ちている旧校

舎の最奥に安置されることになった。

「ま、そういうわけで当分、奥の間が空かないっていうならこのタイミングでヴァリマールの改修を済ませちゃおうってことになったのよ……」

幸い、オルデイスでの戦闘でフェンリル式加速器のデータは取れたから、リイン君達が旅行に行っている間にもう完成品の図面は引いちやったから」

「はは、相変わらず仕事が早いですね」

「まあね……加速器はティルフィンクにも組み込むつもりだから気にしないで」

「それは良いですけど……今日は何徹底目ですか？」

リインの指摘にエリカは明後日の方を向いた。

そんな彼女の反応にリインはため息を吐く。

「博士たちは大人だからとやかくは言いませんが、ティータやレンを巻き込むのだけはやめてくださいよ」

「分かってるわよそれくらい……」

リインの睨みにエリカはもちろんだと頷く。

「ともかくヴァリマールの改修については了解しました……」

どの道、この状態で人前に出すのは得策じゃないでしょう」

テロリスト達がこれ見よがしに自滅を装った。

それはつまりいつ、どこから奇襲をするのか、それを決められる圧倒的なアドバンテージを取ったことになる。

それに加えてテロリストのリーダーの正体はクロウ。

地の利があり人混みもある。

オズボーン宰相も顔を出す噂も流れているので損傷が激しいヴァリマールを人目に晒すことにデメリットの方が多いだろう。

「となるとこれから皇宮に顔を出さないとダメか……」

一度引き受けた要請を謝りに行かなければならないと、オズボーン宰相と面談することになりそうでリインはため息を吐く。

「同好会の出し物も考え直さないといけないか」

「それだけリイン。レンに良い考えがあるんだけど」

頭を悩ませるリインにレンが声を掛ける。

「良い考え？」

「うふふふ……」

楽し気に笑うレンの提案にリインは首を傾げた。

……

……

……

「えっと……歴史研究同好会の出し物の変更？」

代わりの出し物は……『君も機神に乗って帝都を守ろう！ プロ

ジェクト・テイルフィング』？

どういう企画なんだろう？」

申請された書類に生徒会長は首を傾げた。

・*

「お——おおっ！」

狭いコックピットブロックに搭乗し、ヘッドセットを装着。

目の前に広がった光景にラウラは感嘆の声をもらす。

『どうかしら違和感はある？』

「いえ、問題ありません」

耳元から聞こえて来るエリカの声にラウラは答えながら視線を下に動かす。

自分の身体は動いていないが、それでも確かに動かした感触を得ながら首はラウラの意志通り動く。

見下ろしたのは機械の腕。そして機械の体。

周囲を見渡してみれば自分と同じくらいの背の高さの木々があり、視点は生身よりもずっと高い。

「これがリインが見ている光景か……」

『ふふ、できれば感動の余韻に浸らせて上げたいけど時間がないから

早速テストを始めるわよ』

「——はい」

『そんなに硬くならなくて良いわよ。まずは好きなように歩いてみて』

「歩く……歩く……」

言われた通り、歩くことを意識して体を動かす。

ラウラの意思に反応し、《ARCUUS》を通じて機械の足が規則正しく動く。

「——っ——随分揺れるな」

『それは慣れなさい』

無情なエリカの言葉にラウラは閉口する。

『武器を出すからそれを使って一通りの型で動かしてみて』

「了解した」

目の前に光が溢れるとラウラが慣れ親しんだ大剣が巨人のサイズで顕現する。

「——はっ！」

繰り出した技は鉄砕刃。

機神はラウラの動きを忠実に再現して、骸骨の案山子を両断する。

『次——』

両断された骸骨が消えて、機神の周囲に新たな骸骨が現れる。

「これは凄いですね」

「ラウラの動きをあそこまで再現できるなんて」

ラウラが乗っているコックピットブロックの横に設置されているモニターで機神の動きを外からの視点で観戦していたアンゼリカとフィーは感嘆の言葉をもらす。

「まあ、私が作ったんだからこれくらいはね」

二人に褒められてエリカは胸を張る。

エリカが担当する「蒼耀石」を装甲にした「テイルフィング・ブルー」。

機体コンセプトはより人体に近い動きの再現。

《ARCUUS》とのリンク強度を突き詰め、より騎神に近づけた自律

制御システムによりラウラの生身の動きを忠実にトレースする。

「あつ……転んだ」

「うむ、紛れもなく人間の様な動きだな」

派手に転んだ蒼い機神の、それこそ人間と寸分違わない転び振りにファイとアンゼリカは感心するのだった。

・*

「凄いな……これは……」

眼下に広がる広大な大地を見下ろしてガイウスはこれまで体験したことのない感動に震える。

とてもオーブメントで再現した仮想世界とは思えないほどのリアリティ。

機神の身体を通して感じる風は本物としか思えず、ガイウスは改めて技術の深淵の深さを思い知る。

「俺は今……“風”になっている」

『いつまで遊んでいるウォーゼル』

しかしその感動にシュミットの冷めた言葉が水を差す。

『機体の運用に慣れたのなら、次の行程に進め』

「シュ、シュミット博士……」

『遊びのつもりでいるのなら今からでも遅くない。さっさとそこから降りろ』

「いえ、申し訳ありません。テストを続行します」

ガイウスは誘惑を振り切って、飛翔を止め空中に滞空して翠耀石の機神テイルフィング・グリーンに長大なライフルを構えさせる。

ライフルの教練は授業で行っているが、ガイウスの射撃の点数は決して高いものではない。

しかし、ライフルを構えると視界の中に様々な情報が浮かび上がる。

予測される弾道のコースに、ターゲットまでの距離、風向きに風力や温度に湿度。

様々な情報をガイウスはどう処理して良いのか分からず、とりあえず弾道の線をターゲットに合わせて引き金を引く。

「くっ……外した」

『無駄口を叩いていないで撃ち続けろ』

「了解しました」

シュミットは気にした素振りもなく、続けることを促す。

離れた的に向かって規則正しい間隔で機神はライフルを撃つ。

命中率は悪く十発撃って、一発掠る程度。

『次——』

シュミットの声に合わせて、狙っていた的は左右に動き始める。

「っ——」

難易度が上がったことに歯噛みしながらガイウスは先程と同じように的を狙って引き金を引く。

「ふむ……やはり機甲兵の射撃管制システムをそのまま流用することはできないか」

ガイウスに行かせた悲惨なテストの結果にシュミットは起伏に乏しい呟きをもらす。

剥き出しのコックピットから降りたガイウスはそのあまりの結果に彼には珍しく肩を落としていた。

「あ、あのシュミット博士……」

「何をしているハーシエル。次はお前だ」

「は、はいっ！」

フオローしようとトワがシュミット博士に声を掛けようとするが、それより先に叱咤されてトワはコックピットに乗り込む。

「シュミット博士……」

「何だラインフォルトの娘？」

トワが操縦する機神が映るモニターから目を逸らさずシュミットはアリサの呼び掛けに応える。

「こう……労いの言葉はないんですか？」

項垂れて落ち込むガイウスに追い打ちを掛けるような放置。

まるでこちらの心情を意に介さないシュミットの背中にアリサは

不快感を感じずにはいられない。

「それに何の意味がある？」

「意味って……」

「貴様は本当にフランツとイリーナの娘か？　グエンの奴はいつたい何を教えたというのだ」

嘆かわしいと言わんばかりにシュミットはアリサの在り方のため息を吐く。

「なっ!？」

返つて来た侮蔑の言葉にアリサは絶句する。

「文句があるのなら辞退すればいい。お前達がここに来ているのはお前達の意志のはずだ……」

甘やかして欲しいというのなら、ここにお前の居場所などない。さっさと帰るが良い」

「そ、それが——」

「アリサ」

激昂するアリサの肩をガイウスが掴んで止める。

「ガイウス！　貴方は悔しくないの!？」

「それは……」

「何を馬鹿なことを言っているウォーゼルは十分に役目を果たしている」

言い淀むガイウスだったが、言い返したのはシュミットだった。

「……………え？」

「機神越しの射撃など本人の問題ではなくシステムの問題だ。こんなものまだ当たらなくて当然だ……」

それを修正していくのが研究と開発というものだ。的当ての点数だけが評価の基準だと誰が言った？」

「な……な………だつたら最初からそう言えば——」

「だから貴様はアホなのだ」

呆然とするアリサにシュミットはやはり振り返りもせず、続ける。

「目先のことにはかり囚われ、言われなければ何も理解できない愚鈍さ……ラッセルやヨルグの孫を見習え」

「——っ」

「アリサ……」

「……………大丈夫……大丈夫よ。ガイウス……」

言いたい放題のシュミットの言葉にアリサは反射的に反発しそうになる口を何とか抑える。

「ふん、私はイリーナの様に貴様を甘やかすつもりはない。くれぐれも邪魔だけはするなよ」

「ぐぬぬ……」

一方的かつ偏見に満ちた言葉にアリサは耐える。

あくまでも『機神の開発』に関われるのはリンやシュミットたちの善意であり、絶対にアリサやⅦ組が必要というわけではない。

午後の授業が一教科増えたが、それも自由参加の授業。

出来る事ならエリカの下がアリサにとっては好ましかったのだが、この人選をした誰かをアリサは恨む。

「はふー」

そうこうしている間にトワを乗せたコックピットブロックが開く。

「アリサちゃん！　アリサちゃん！」

「どうかしたんですかトワ会長？」

興奮するトワにアリサは首を傾げる。

「私、機神に乗って大きくなつてたんだよっ！」

機神の身体を体感したトワが見た目相応にはしゃぐ。

「何をしているラインフォルトの娘、次はお前の番だ」

そんなトワに癒される間もなくシュミットの叱責が飛ぶ。

「……………見てなさいよ」

あまりに一方的かつ独善的なシュミットにアリサは対抗意識を燃え上がらせる。

射撃システムの構築のために外しても良いなどと言っているが、ならば満射を出して喰らせてやろうとアリサは企む。

「アリサちゃん、頑張って」

「ああ、アリサならきつと俺達より上手くできるはずだ」

純粋な二人の声援を受けてアリサはコックピットに乗り込み、『機

神”と一体になって仮想世界を体感する。

なお結果は前の二人よりも少し良い程度のもだった。

・*

「うう、何で僕だけ……」

他のⅦ組が一階の大ホールで作業している中、クリスは一人別の教室に案内されていた。

本格的に始まった“機神” テイルフィングの操縦訓練に心を持って行かれ、クリスはそわそわと落ち着かない様子で椅子から立って座つてを繰り返す。

「これが焦らしプレイと放置プレイという奴なんですね兄上」

いつか兄が語ってくれた境地の一つ。

当時は理解できなかったがクリスは今なら兄の教えの意味を理解できる。

「——待たせたな」

「リインさん!？」

教室の扉が開き、クリスはびっくりと身を竦ませて振り返る。

「あれ……? ルーフアス理事——じゃなくてルーフアス教官も?」

入って来たのはリインだけではなく、今週から教官として士官学院で働き出したルーフアスとその付き人の少年少女の四人だった。

「どうも……」

「やーお坊ちゃん、すーちゃんたちのことは空気だと思っていよいよ」
小さく会釈をするスウィンと気の抜けた声で自分達はオマケだと主張するのはナーディア。

二人はオルデイスでリインの命を狙って返り討ちにされた“暗殺者”。

今は左腕が動かなくなったルーフアスの補助と、ここの旧校舎の警備員として雇われている。

「……………」

「……………」

クリスとスウインは無言で睨み合う。

そんな張り詰めた空気をリインは手を叩いて霧散させ、さっそく本題に入る。

「二人に来てもらったのは他でもない。『騎神』についての知識を教えるためだ——いえ、ためです」

「なるほど、それはありがたい。それと敬語は不要だよ。今は私が君から教えを乞う生徒なのだから」

リインの目的にルーファスは頷き、敬語に言い換えたリインにフオーローする。

ありがとうございます。とリインは一礼を返して、続ける。

「しかし、起動者になった私は分かるがクリス君は何故この場に？」

「それも含めて説明します……」

俺達が『騎神』という大きな流れの中に巻き込まれた行き着く先、敵が誰なのか、どうしてこんな因果が生まれてしまったのか……

以前にクリスには触り程度には話したが、ルーファスさんが起動者になったこともあるので、改めて情報を共有しておこうと思っす

「その言い方だとクリス君も起動者になるということかな？」

「まだ確定しているとは言いませんが、『緋』の起動者はアルノールの血を引くものになるのは確定事項のはずだ」

「僕が……騎神に……テストパイロットに乗れる……」

先程まで『機神』のテストパイロットから除外されていた不満を忘れ、クリスは拳を握り込む。

「ただし情報共有の代償として二人にはこちらの要求を一つだけ飲んでもらうことになります」

「ふむ……」

「……よろしくお願いします」

リインの尋常ではない表情にルーファスとクリスは気を引き締め向き直る。

そうして語られたのは帝国史の以前から始まる『焔』と『大地』、二つの眷属の争いから始まる話。

二つの至宝の衝突から生まれた《鋼の至宝》。

争いの末に協力するも、その後の眷属たちの「騎神」を巡る覇権争いが原因によつて《鋼の至宝》は帝国に「闘争の呪い」を掛けたこと。その影響を一番に受け《鋼の至宝》の負の意志に染まってしまった《黒の騎神》によるこの地に《鋼》を呼び戻す儀式となる「黄昏」。

そしてあと二年で「黄昏」が起きること、そして誰が《黒の騎神》の起動者なのか。

「そんな……まさかオズボーン宰相が……」

「まだ彼がそうだと確証があるわけじゃないけど、十中八九間違いないだろう」

オズボーン宰相が《黒》の起動者、もしくはその関係者だという真実にクリスは愕然とする。

彼に憧れを抱いていたこともあり、クリスの動揺は大きかった。

対するルーファスは表面的には静かに受け止めながら、自分の予想とほぼ変わらない状況に内心でほくそ笑む。

「以上が俺が知っていることになります……」

騎神に選ばれた「英雄」なんて巷では俺のことをそんな風に評価されていますが、実際は「黄昏」で鋼を錬成するための生贄に過ぎないんですよ」

「なるほど……リイン君は今からでも遅くないから私に「エルⅡプラドー」の起動者を辞退しろと言うのかい？」

「いえ、例えここでルーファス教官に起動者から降りてもらったとしても他の誰かが「黄昏」の時までに選定されるだけです……」

もちろんこの話を聞いて怖気づいたというのなら、契約を切る手伝いをしますよ」

挑発的なリインの言葉にルーファスは微笑を浮かべる。

「いや、そんなまさか。世界を滅ぼしかねない「黄昏」。その中心に身を置けるといふのに退くなんて勿体ないことはしないさ」

「ええー、なーちゃんたちは流石にそこまで付き合いたくないかなあー」

「ナーディア……」

乗り気なルーファスに対して、乗り気ではないナーディア。

背後の声を気にせずルーファスは尋ねる。

「そうなる就先程リイン君が求めた要求というのは《黒の騎神》に対しての共同戦線を張りたいという提案かな？」

「いえ、違います」

思わぬ即答にルーファスは首を傾げる。

「ではリイン君は私達に何を要求するのか？」

「騎神の機能の宝珠を一つ。こちらが指定する術式に固定させてもらいます……」

効果は《相克》における戦闘においても、起動者にフィードバックされる死への安全装置です」

「リインさん……」

「やれやれ流石はリイン君と言うべきか……しかしそれでは私達が貰い過ぎというものだ」

値千金の情報を出し惜しみせずに公開して引き出す対価が敵となる相手の身の安全だということにルーファスは苦笑する。

ルーファスには想像もできない善性。

突き抜けたお人好しが彼の強さの秘密だと言うのなら興味湧いて来る。

「てつきり私は六の騎神、そして今下で開発している《雲の騎神》で《黒》を取り囲むのだと思っていたのだが？」

「いいえ、恐らく馴れ合いでまとまった所で《黒》には絶対に届かない」

「っ——」

「それ程の相手と言う事か」

断言するリインに気迫にクリスとルーファスは息を呑む。

「リアンロードさんが言うには六の騎神を《相克》で合わせてようやく戦いの土俵に入ることができる。《黒》はそういう存在なんです……だから——」

リインは少し躊躇って、はっきりと宣言する。

「《黄昏》が起きた時、俺は迷いなく貴方達を倒します。安全装置はそのためのものです」

はつきりと宣戦布告するリインにクリスとルーファスは「鉄血宰相」の面影を見た。

.....

.....

.....

「ルーファスさん」

ふらふらとした足取りで教室から退出するクリスを見送り、それに続こうとしたルーファスをリインは呼び止める。

「先程、貫い過ぎと言っていましたね？」

ならこちらからの質問に一つ答えてもらえますか？」

「ふむ……何かね？」

ルーファスは振り返り、質問を促す。

「どうして嘘なんか吐いたんですか？」

リインは吊り下げた左腕を見て尋ねる。

「あちやーやつぱりリインお兄ちゃんにはバレバレだったみたいだねー」

ルーファスより先に反応したのはナーディアだった。

もつともそれを怒り、訂正する素振りもなくルーファスは肯定するように動かせなくなつたと公言している左腕を動かして見せる。

「このことはできれば内密にしてもらえるかな？」

「どんな意図があるかまで見通すつもりはありません。でもせめてユーシスクらいには教えて上げてても良いんじゃないですか？」

「そういうわけにはいかないよ。これは私なりの「対決」いや「黄昏」への仕込みでね……」

それにアルバレア家を始めとする貴族としての私の価値を測るために必要なことだったのだよ」

左腕を首から下げた帯に戻しながらルーファスは答えをはぐらかす。

「ルーファスさん——」

そんなルーファスを説得しようとしたところで、リインの《ARC

US》が鳴る。

「……………出ないのかい？」

ルーファスに促され、リインはため息を吐いて《ARCS》を開く。

「もしもし——」

『リインッ！ 良かった繋がったっ！』

聞こえて来たのは聞き覚えのある少女の声。

その鬼気迫る声は教室に大きく響き、こっそりと抜け出そうとしたルーファス達の足を止めた。

「その声はシュリか？ どうしてこの番号を知っているんだ？」

『それはリーシャ姉が教えてくれて、リインなら助けてくれるはずだからって……………だから、だから……………』

「シュリ、落ち着いて。深呼吸して何があつたのか教えてくれ」

リインは通信越しにシュリを宥めるが、大した効果はなく嗚咽交じりの声でシュリの叫びが響く。

『イリアさんを助けてっ！』

126話 幕間 クロスベル炎上

「がっ!？」

巨大なブレードライフルベルゼルガーの一撃をベルゼルガーで受け止め罅迫り合いの力比べとなる。

「く……まさかお前がベルゼルガーを使って来るとはな——それに随分と力を上げて来たじゃねえかザックス」

「お褒めに預かり光栄です。しかし隊長、貴方は弱く——いえ何も変わっていませんね」

「言ってくれるじゃねえか!」

強引にベルゼルガーを弾き、ベルゼルガーを一閃。

だが、ザックスは弾かれた力に逆らわず身を翻してその一薙ぎを危なげなく回避する。

「っ——何があった? どうしてそこまで強くなってやがる?」

かつて自分の部下だった男の目覚ましい躍進にランディは歯噛みしながら尋ねる。

「何があった? それはランドルフ隊長も良くご存じのはず」

大剣でありながら、見るからに機構が付いたSウェポンを構え直してザックスは答える。

「あの日、私達はまだ年端もいかない子供に惨敗した」

「……嫌なこと思い出させてくれやがるな」

ザックスが上げた話はすぐにランディも思い浮かぶ。

「最強の猟兵団、その誇りは彼に完膚なきまでに壊された……」

それに加えてバルデル団長も西風の団長と相打ちに逝ってしまった。ならば次代の《赤い星座》を担う私達がここで奮起せず、いつ立ち上がる?」

「ザックス……」

「ランドルフ隊長……いや、ランドルフ・オルランド。私は今日、貴方を超えて見せるっ!」

叫び、ザックスはベルゼルガーで銃撃する。

「ちっ——」

舌打ちをしながらランディはベルゼルガーを盾にして銃撃から身を隠す。

「覚悟っ！」

銃撃をしながら肉薄したザックスがベルゼルガーの刀身を展開して振り被り、一閃。

「くっ——舐めるなっ！」

真正面からの唐竹割り。

駆け引きのない真つ向勝負にランディもまた同じようにベルゼルガーの刃を展開して正面から打ち合う。

「オオオオオオッ！」

「ハアアアアアッ！」

獣のような咆哮を上げ、二人はぶつかり合う。

「なっ!?!」

砕けたのはランディのベルゼルガーだった。

そしてそこでザックスは止まらない。

長大なブレードライフルをスライドさせるように分解して二つに分ける。

大剣から二つの長剣。どちらにも機関銃が仕込まれているブレードライフルを両手にザックスは引き金を引く。

「——っ!?!」

自分のベルゼルガーにはない機構にランディは目を剥く。

咄嗟にベルゼルガーの残骸を盾にするが、二つの機関銃からなる集中砲火に盾にしたベルゼルガーは見る間に削れ——

「くそ——ここまでなのか?」

「ゼロ・フィールドッ！」

終わる覚悟を決めたランディを防御結界が護る。

「むっ——」

「はあっ！」

銃撃を止めたザックスにエリイとノエルの射撃が降り注ぎ、クルトが先行して斬りかかる。

「潮時か——撤退するぞ」

「イエス・サーツ！」

クルトの猛攻を双剣で受け止めながら、ザックスはランデイの下に集う援軍を見て素早く判断した。

・*

オルキスタワーの前、《赤い星座》の雑兵を蹴散らしていたアリオスの前に彼女は悠然とした足取りで現れた。

「先日の湿地帯ぶりですね。《風の剣聖》」

「貴女は……」

中世の鎧に身を包んだ女性。

結社《身喰らう蛇》の使徒、《鋼の聖女》アリアンロード。

「何故、ここに……？ 《赤い星座》の襲撃にやはり《結社》も関与しているのか？」

「互いのため、この場での問答は無用でしょう」

アリオスの質問に答える気はないとアリアンロードは拒絶する。

「手合わせを」

短い言葉で要求を突きつける。

「アリオス……」

背後からダドリーの震えた声が聞こえて来る。

彼だけではない、そこにいた警察官たちは軒並み彼女が纏う覇気に当てられて膝が折れている。

幸いなのは彼女の登場に合わせて《赤い星座》が退いたことだがせめてもの救いなものかもしれないが、果たしてどちらが良かったのか判断は付かない。

「やるしかないか……」

アリオスは太刀を構え、闘気を練る。

「感謝します」

短い謝辞を述べ、アリアンロードは右手を虚空に翳す。

光を伴って彼女の右腕に騎兵槍が現れ——さらにもう一つ、左腕に

体を覆い隠すほどに巨大なタワーシールドが顕現する。

「っ——」

高まる圧にアリオスは息を呑む。

“人の域”を超えた存在。槍を見た時に見抜いて当たりを付けていた彼女の実力が的外れだったと気付かされる。

「リイン・シュバルツアーの兄弟子の実力、とくと見せて頂きましよう」

ここに《風の剣聖》と完全装備の《鋼の聖女》がぶつかり合う。

・*

その男が現れたのは突然だった。

「何やってんだテメエ？」

「え……？」

アルカンシエルの舞台上で《月の姫》として没頭して踊っていたリーシャはすぐ目の前から聞こえてきた声に呆けた反応を返してしまふ。

「しっ——」

「きゃあっ!?!」

無造作に繰り出された拳がリーシャを捉え、吹き飛ばす。

「リーシャッ!?!」

共に踊っていたイリアは驚きの声を上げ、公演中の舞台に乗り込んで来た男を睨む。

「アンタッ！ 何してくれるのよっ！」

舞台を穢されたイリアは尋常ではない怒気を漲らせるが、その男は無視して辺りを見回しリーシャに話しかける。

「何の冗談だこれは？」

「ぐ……《痩せ狼》……」

壁に叩きつけられたリーシャはその壁を支えに立ち上がって乱入者、《痩せ狼》ヴァルターを睨む。

「どうして……」

「どうしてはこっちの台詞だ。《銀》」

「っ——」

突然の出来事に固まっている観客たちや出演者を前にヴァルターはリーシャの秘密を暴露する。

「東方人街の魔人《銀》。伝説の凶手——『殺し屋』であるお前がこんな場違いな場所で何をしているんだ？」

その言葉は静まり返ったホールに大きく響き渡る。

「リーシャが殺し屋……？」

「あの男、いったい何を言っているんだ？」

戸惑う観客たちの声にリーシャは足元が崩れて行く感覚に陥る。

その反応にヴァルターは口角を上げる。

「少し見ていたがお前何様のつもりだ？」

「——めて」

「煌びやかな舞台の上で別の誰かになれたつもりか？ はっ！ その骨の髄まで染まった人殺しの技で賞賛を得るのがそんなに楽しいのかよっ。」

「やめて……」

耳を塞ぎリーシャは突き付けられた欺瞞から耳を塞ぐ。

「お前、弱くなったな」

そしてヴァルターは更に現実を突きつける。

「技術とかの問題じゃねえ。心構え、さっきの一撃もお前が《銀》なら余裕で躲せていたはずだ」

「それは……」

言いたい放題になっているリーシャにヴァルターは肩を竦める。

少しは反発してくると思っていたが、予想以上にナマクラになっていた彼女に失望する。

「まあいい」

そう言っつて無造作にヴァルターは震脚をその場に打つ。

その一撃は壇上に亀裂を走らせ、アルカンシエルそのものを地震が起きたと錯覚させる程に震動させる。

「何を——」

「今からここをぶっ壊す」

言いながらヴァルターは《銀》の降魔刀を何処からともなく取り出し、彼女の前に投げる。

そしてホールの入り口から結社の兵が雪崩れ込んで来る。

「ふはははっ！ アルカンシエルはこの僕っ！ ギルバート・ステインが占拠した！」

彼らはアサルトライフルを掲げると天井に向かって威嚇射撃を始める。

「きゃああああああっ！」

「じゅ、銃だっ!？」

「銃を持っているぞ!？」

それまで何処か舞台上での芝居だと思っていた観客たちは彼らの銃撃に驚いてようやく逃げ始める。

「はーはっはっはっ！ 僕は今、輝いているぞっ！」

逃げ惑う観客たちにギルバートは悦になり、ヴァルターはそんな彼を一瞥することもなくリーシャに向き直る。

「それが嫌なら本気で来な」

リーシャはヴァルターと降魔刀、そして出入り口に我先に殺到する観客たちを順番に見回す。

——いつかこんな日が来るのではないかと思っていた……

《銀》の部分がリーシャの領域を壊す。

兆候はあった。湿地帯でロイド達に仮面の下の素顔を見られてしまった時、以前は《銀》の秘密を守るために迷わず殺すことを考えられた。

しかしロイド達を見逃し、舞台に拘ってしまった。

無理を通じた結果、受け継がれてきた《銀》の秘密を衆人環視の白日に晒すことになってしまった。

ロイド達の口封じをできなかつたように、今のリーシャには《銀》の秘密を守るため、ここにいる全ての目撃者を殺し尽くすことはできない。

——ごめんなさい。お父さん……

心の中で《銀》を託してくれた父に謝る。そして、リーシャはイリアに視線を向けて――

「イリアさん?」

向けた先に彼女の姿はなかった。

探してみればすぐに見つかる。

「イリアさん?!」

「ちよつとアンター! うちのリーシャに何やってくれてんのよ!」

ヴァルターの背後を取ったイリアは彼の肩を掴み、強引に振り向かせると同時に腕を一閃。

強烈なビンタがヴァルターの頬を叩き、彼のサングラスを弾き飛ばした。

「イリアさん?!」

狂暴な猛獣に手を上げたイリアにリーシャは血の気が引く。

「――先に死にたいみたいだな」

「っ――」

ヴァルターの目に危険な光が宿る。

それを見てリーシャは駆ける。

ヴァルターが無造作に、それでも常人なら容易く殴殺できる拳を放つ。

その魔の手から救うべく、リーシャは手を伸ばし――二人は揃って天井まで投げ飛ばされた。

「なっ!」

「え……?」

高く舞った二人は何が起きたか理解できず、それでもすぐに姿勢を制御して危なげなく着地する。

「テメエ……」

「イリアさん……」

「どうしてくれるのよ、あんたのせいで舞台が台無しよ」

その言葉にリーシャは息を呑み、俯く。

「はっ――」

ヴァルターは鼻で笑い、警告もなくイリアに殴りかかる。

「あ——」

リーシャが止める間もなく肉薄したヴァルターは先程と同じ速度で拳を放つ。

「役者におさわりは厳禁よ」

対するイリアは半身を逸らしてヴァルターの腕を取り、舞うように体を入れ替え、次の瞬間ヴァルターを床に叩きつけていた。

「——どんなものよ？　リーシャとリイン君に教わった『化勁』って奴は」

「……………そんな『化勁』、私教えてません」

誇らしげに胸を張るイリアにリーシャは呆然と首を振る。

「クク、なかなかやるじゃねえか」

床に勢いよく叩きつけられたヴァルターは何の痛痒も感じない動きで立ち上がるとイリアに向き直る。

「今の『銀』よりもよっぽど食い応えがありそうだな」

「——っ」

ここまでリーシャに向けられていたヴァルターの殺気がイリアに向けられる。

それまでの遊びではない殺意に流石のイリアも息を呑むが、余裕の顔を崩さずに応える。

「それはどうも——って言うかさつきと帰ってくれないかしら？」

これから私たちは《月の姫》が実は暗殺拳の使い手だって設定を付け加えないといけないんだから」

「イ、イリアさん!?!」

突然の提案にリーシャは狼狽える。

「何よりリーシャ？　あなたもしかして舞台を降りるつもり？」

「それは——だって仕方がないじゃないです！　私は《銀》で、これは私の因果が巡って来たせいで——」

「そんなの関係ないわ」

リーシャの言い訳をイリアは遮る。

「リーシャ、あなたは舞台を続けたいの？　続けたくないの？　どっちなの？」

「イリアさん……」

二択を迫るイリアにリーシャは即答できなかった。

「おいおい、俺を無視してんじゃねえよ」

しかし、答えを出す前にヴァルターが二人の邪魔をする。

「ふん！ 暴漢と話すことなんてないわよ。来なさい足腰が立たなくなるまで転がして上げるわ」

ステップを踏みイリアはヴァルターを挑発する。

戦闘面においては素人のはずなのに、醸し出す空気は一流と変わらない。

普通なら敵わない相手。

しかしイリアならと、リーシャは淡い期待をしてしまう。

“舞”が“暗殺拳”を上回るリーシャが舞台に感じた可能性。

「強気な女だ……嫌いじゃねえぜ、お前みたいな女は」

「私は芸術を分らない男はお断りよ」

「はっ——」

三度、ヴァルターがイリアに向かって拳を振る。

軌道も速度も同じ。

イリアは臆することなく、突き出された拳を舞いで吸収し——切れなかった。

「なっ!？」

「素人が、調子に乗り過ぎだ」

ヴァルターの拳はイリアの“化勁”を物ともせず突き破り、彼女の身体を捉え大きく吹き飛ばす。

「……………イリアさん？」

壁に叩きつけられたイリアにリーシャは呆け、すぐに眈を上げる。

「ヴァルターッ！ よくもイリアさんを——」

「はっ……何をそんなに憤っているんだ？」

これはお前がリン・シュバルツァーにしようとしていたことと同じことだぞ」

「っ——」

ヴァルターの指摘に降魔刀を掴んだリーシャの動きが鈍る。

その動揺の際にヴァルターは肉薄し、リーシャの剥き出しの腹を叩く。

「がは——」

膝を着くリーシャをヴァルターは見下し、再び震脚を放った。

「あつ——」

先の震脚以上の鳴動が建物全体に響き、ヴァルターを中心に走った亀裂は地面だけではなく壁や柱にまで及ぶ。

「次の時までにはちゃんと『凶手』に戻っておけ《銀》」

そう言つてヴァルターは踵を返す。

そして崩落が始まった。

「ま、まずいつ！ 撤退だ、逃げろっ！」

崩れ始めた天井に真つ先に反応したギルバートは部下を引き連れ、歩くヴァルターを追い越して我先にアルカンシエルから脱出する。

「……………私のせいだ……………」

去つて行く無防備な背中があるのに、リーシャは打たれた腹を押さえて蹲る。

ヴァルターの指摘は正しい。

依頼されたからという理由だけで幼子の命を狙ったことは何もリンだけではない。

リーシャとして、そして引き継いだ『銀』として様々な命を刈り取つて来た『業』。

ヴァルターはその『業』に引き付けられてきたに過ぎない。

「……………これが罰……………」

そして舞台の上に設置されていたシャンデリアが建物の崩壊に合わせてリーシャの頭上に落ちた。

「リーシャ姉っ！」

「リーシャ君っ！」

シュリや劇団長の叫びに反応することなくリーシャは——

「リーシャッ！」

誰かが叫び、リーシャを突き飛ばした。

・*

クロスベル国際銀行前。

煌々としたビルをバックにシグメントは彼らを睥睨する。

「どうした？ この程度か？」

「くっ——」

「まあ、こんな所か。非力ながらも食い下がった根性は褒めてやろう」
這いつくばり、膝を着く特務支援課の面々にシグメントは期待外れ
だったとため息を漏らす。

「やはりリイン・シュバルツアーのような男は早々現れないか」

その眩きに特務支援課の面々は体を震わせる。

「まあいい。時間だ……」

気を取り直してシグメントは振り返る。

次の瞬間、IBCのビルの最上階が爆発し、それに連鎖するように
次々とビル内部で爆発が起こる。

「きゃああつ……!?!」

「っ……!」

爆風と熱は特務支援課の元まで届き、ガラス片が雨の様に降り注
ぐ。

「叔父貴イイイイツ!!」

「ククク……ハーツハハハハツ!!」

哄笑するシグメントに特務支援課の面々は圧倒されるように気押
される。

「くそっ!」

「ロイドさんっ!?!」

飛び出したロイドにクルトは声を上げる。

圧倒的な力の差。止められなかった暴挙。そして年下の少年を引
き合いに出されて比べられた惨めさ。

それらの憤りと己の無力さを痛感し、それでもと言わんばかりの無
謀な突撃。

「うおおおおおおっ!」

最後の抵抗は――

「――え……?」

「どうしたそれで終わりか?」

仁王立ちでロイドのトンファーを腹で受け止めたシグムントは微動だにせず、彼を見下ろした。

「くっ……兄貴、俺に力を貸してくれ」

闘気を燃え上がらせてロイドはトンファーを押し込むように力を込める。

「今、家族の名前を口にしたか?」

そんなロイドを嘲笑うかのようにシグムントは話しかける。

「まずいロイド離れろっ!」

「覚えておけ。戦場で家族の名前を叫ぶというのは、甘ったれがすることだ」

ランデイの忠告は空しく響き、シグムントの斧がロイドに振り下ろされた。

「――あ――」

がくりと膝を着き、ロイドはその場に崩れ落ちる。

「ふん」

シグムントは踵を返すと、上空を駆け抜けていく飛行艇に飛び乗った。

「あれはヴァルド!」

「マインツ山道でランデイ先輩と戦っていた男もいます」

「それにあれは……まさか《槍の聖女》?」

甲板に佇む今回のテロの首謀者たちをワジ達は見送ることしかできなかつた。

そして、倒れたロイドに仲間たちが集まる。

「ロイド、ロイドっ!」

「おい、しっかりしろ!」

「返事をしてください」

仲間たちの声は遠くにして、ロイドは意識を失った。

127話 欺瞞

猟兵によるクロスベル炎上事件。

その被害は市街だけに留まらず、最初に占拠されたマインツ鉱山はもちろん東西の門にも襲撃は行われ、街道や鉄道にも破壊工作が行われた。

もはやクロスベル全域とも言える被害。

そしてそこで生まれた大小様々な負傷者は自治州に一つしかない聖ウルスラ医科大学に集中することになる。

病院としての機能は持っているものの、施設の目的はあくまでも近代医療の研究。

元々の入院患者がいることもあり、病床の数、医師の人手、物資、クロスベルの全てを賄う程のキャパシティは持ち合わせてはいなかった。

「大丈夫だから気を確かに持つてください」

セシルは泣きそうになるのを堪えて怪我人の手当てに奔走する。

手を動かし、懸命に患者を励ましながらセシルの気持ちは手術室に向いていた。

明け方近くに搬送されてきた二人の男女。

どちらもセシルにとって縁が深い友人と義弟。

重篤な患者としてすぐに二人とも手術室へと運び込まれ、身内であり動揺が大きかったセシルは立ち会うことは許されなかった。

「ああ、女神よ」

少しでも手が空けば、まだ終わらない手術室の前にやってきてセシルは手を合わせて祈る。

思い出してしまうのは恋人の死。

「せめてあの薬がもつとあれば良かったのに」

思わず漏らしてしまう愚痴。

研究資料として帝国から送られてくる「霊薬」。

早くに運び込まれ、彼らと同じく重篤と診断された警官たちや、二

次被害として導力車に轢かれた双子を瞬く間に治してしまった『奇蹟の薬』がもつとあればと願わずにはいられない。

もつとも手の施しようがなかった患者を五人も救えたことは奇蹟なのだが、やはり怪我人の数に対しては焼け石に水だった。

セシルはすぐにその『霊薬』の製造元に連絡を取るべきだと主張したものの、セイランド教授はその進言に聞く耳を持つてくれなかった。

「イリアさん……」

「大丈夫だ、シユリ……イリアはこんなところで終わったりしない」
手術室の前のソファでひたすらに祈るシユリと劇団長の姿は痛々しい。

手術の成功率は低く、仮に成功したとしても後遺症が残る程の怪我。

特にシャンデリアに押し潰されガラス片まみれとなっていた両足は切断も検討されているとセシルは聞いている。

「イリア……ロイド……」

それにロイドもイリア程ではないが、それなりの重傷を負っていた。

脳裏にちらつく三年前の『彼』を思い出し、セシルはシユリ達に言葉を掛けずに踵を返す。

ロイド達は気掛かりだが、危険な患者は彼らだけではない。

揺れる思考を無理矢理に集中させ、セシルは彼女の戦場に戻る――

「あ……あのセシルさん」

そこでシズクが恐る恐る声を掛け、セシルを呼び止めた。

「あら……シズクちゃん、どうしたの？」

笑顔を顔に張り付けてセシルは不安がらせないように対応する。

「ごめんなさい、今日のお散歩はできなくなっちゃったの」

「それは良いんです。それよりも……」

幼くても、目が見えなくても今の病院の様子を理解できているシズクはセシルの謝罪を受け入れる。

ならばなんだろうとセシルは首を傾げる。

「外から変な音が聞こえるんです」

「変な音……?」

「はい……飛空艇みたいな……だけど普通の飛空艇とは違うような……」

「飛空艇の音……っ——」

シズクの言葉にセシルはすぐにその可能性に気付く。

クロスベル市を襲ったテロリスト達は飛空艇を使って逃亡している。

「そう……それじゃあ私が調べておくからシズクちゃんは病室に戻っていてくれるかしら?」

・*
・*

「あれは何だ……?」

病院の中に納まり切らず、駐車場に簡易テントで診察を受けていた怪我人は聞こえて来たエンジンの音に空を見上げる。

そこには空を飛んでいる導力車が二台。

正確には飛空艇なのかもしれないが、サイズは導力車よりも小さく、運転手はごつい服を着込んで剥き出しその空飛ぶ導力車に跨っている。

「まさか……」

未知の飛行艇に昨夜の記憶が刺激され、恐怖の感情が走る。

空飛ぶ導力車はそのまま病院の屋上に着地する。

「あ、貴方達っ!」

セシルは屋上に着地した不審な導力車とその運転手に向け、モップを構える。

「ここには怪我人と病人しかいないわ!」

相手はクロスベル市を襲った凶悪なテロリスト。

それも親友と義弟を生死の境に彷徨させた相手。

怒りと病院を守らなければという義務感に己を奮い立たせてセシルは声を張り上げる。

「帰ってっ！　ここは貴方達が来るような所じゃないわ！」
対する答えは――

「しゅごおー……………」

「しゅごおー……………」

分厚い整備服を着込み、丸いヘルメットの奥から聞こえて来たのは声にならない呼吸音。

年恰好は青年男性より少し下くらいの背丈が一人、もう一人はだいぶ小さい。

不釣り合いな二人にセシルはよりいっそう警戒心を強め――

「あ、ああー。落ち着いて下さいセシルさん」

手を挙げて無害だと主張する不審者のくぐもった声はセシルが思っていた以上に若かった。

「私を知っている？　貴方達はいったい――」

その質問は横合いから聞こえて来たランディの声にかき消された。

「おい！　ワジなんで止める!?!」

「そうですよティオちゃん！　何かされる前に速やかに制圧しないと」

「落ち着きなよ二人とも」

「そうです。かなり不審な登場でしたが、むしろ心強い援軍です」

今にも奇襲を掛けそうなランディとノエルを止めるのはワジとティオ。

「援軍って…………」

導力銃を手にしたエリイは二人の主張に困惑し、それでも納得がいかない銃をホルスターに戻すことはしなかった。

そんな彼女たちの様子にワジはやれやれと肩を竦める。

「昨日の襲撃で気が立っているみたいだから、さっさとそのヘルメットを外して顔を見せてくれないかな？」

一目で判る独特な気配の持ち主にワジは声を掛ける。

「ああ、そうだな」

不審者はそれに頷き、後頭部の留め金を外してヘルメットを脱ぐ。

「あ…………」

中から現れたのは白い髪。

彼に続いてもう一人の不審者もヘルメットを脱ぐ、そちらから現れたのはスマイレ色の髪の女の子。

「リイン・シュバルツァー」

そして女の子は《殲滅天使》と呼ばれていたレンだった。

ランデイが絞り出した声は決して歓迎するものではなく、むしろ顔をしかめる者の方が多かった。

「何しに来やがった？」

棘のある口調でランデイが尋ねる。

「イリアさんを助けて欲しいって頼まれて……」

リインはランデイ達に背を向け、小型飛行艇の中に固定しておいた荷物を取り出しながら答える。

「シュリとセイランド教授は何処ですか？」

・*

「浮かない顔をしているな」

「アリオスさん……」

荷物を渡し、クロスベル市へと向かったレンを見送ったリインは手持ち無沙汰になり、セイランド教授の研究室にいた。

「……ええ、自分の軽率さを思い知らされたと言うか……」

苦笑してリインはため息を吐く。

最初は怪我人の手当てや力仕事で作業を手伝おうとしたが、帝国人であるリインにクロスベルの市民からの視線は冷たかった。

通商会議の時に帝国が《赤い星座》を雇っていたこともあり、今回の襲撃は帝国の《暗闘》に結び付けたのが原因だった。

「ユウナの言っていたことならあまり気にするな。あの子の弟妹もお前の《霊葉》があつたからこそ助かったんだ。今は気が動転しているだけだ」

「……ええ」

病院に入った瞬間、殴りかかって来た少女のことを思い出してリイ

ンは俯く。

クルトが割って入ったおかげで殴られることはなかったものの、彼女の言葉はロビーに響き渡り、帝国への罵詈雑言をリインに浴びせた。

もつともそれは彼女だけではなく、彼女の言葉に賛同するような非難の眼差しが集中し、針の筵の悪意はリインの足を竦ませるには十分だった。

その目はランディ達も同じで、レンが有無を言わさず手を引いて動いてくれなければ暴動が起きていたかもしれない。

「もつと人目を忍ぶやり方もあったはずなのに……」

「だが、それをしていたらイリア・プラティエを始め、手の施しようがなかった重症者は五人命を落としていた」

「だけど助けられたのは五人だけです……それ以上は……」

「リイン……」

まるで自分が悪いと言わんばかりに思い詰める弟弟子の姿にアリオスは罪悪感を覚えずにいられない。

「俺が一言、頼むって言うだけでこの病院にいる全ての怪我人を癒すことだってできるんです……」

「だけど俺はそれをしなくせに、『霊薬』の奇蹟を振る舞う……本当はイリアさんを見捨てなくちゃいけないのに……」

己の半端な行動に悩むリインにアリオスは閉口する。

『霊薬』以上の奇蹟がどんなものかアリオスには想像もつかないが、奇蹟の行使に苦悩する少年の姿に複雑な思いを感じずにはいられない。

「リイン。それでも——」

「それにシユリに言われたんです……」

『ノーザンブリアを救ってくれたんだったらオレ達の事も助けくれたっていいじゃないか』って

「……………」

その言葉にアリオスは言いかけた言葉を呑み込む。

「俺はただ、降り掛かって来た火の粉を払っていただけなのに、どうし

てこんなことになったんでしょね」

リインの独白の重さにアリオスは目を伏せる。

「それは……」

その気持ちはアリオスも理解できる。

親友を裏切り、娘の治療費のために遊撃士の仕事に没頭していただけなのにいつの間にかクロスベルの守護神などと祭り上げられていた。

そう呼ばれるたびにアリオスは後ろめたい気持ちになる。

「すまない……」

「いえ、俺の方こそすみません。こんな愚痴を……」

「………ところでリイン。お前は《赤い星座》を雇ったのは誰だと思う？ やはり通商会議に続いてあの《鉄血宰相》が怪しいと俺は考えているのだが」

強引な話題転換をしてアリオスはリインの推測を尋ねる。

「いえ、それは可能性が低いと思います」

しかし、返って来た答えにアリオスは顔をしかめる。

「それは何故だ？」

「理由はいくつかあります……」

アリオスさん達にとつては不快に聞こえてしまうかもしれませんが、クロスベルと言う自国民を虐殺する行為は帝国にとつてはタブーになります……

そんな後で真相が漏洩してしまった時に、『悲劇』を繰り返した帝国に対する風当たりを考えるとリスクとメリットが釣り合っていない……

仮に《鉄血宰相》が今回の黒幕だったとしたら、こんな中途半端な被害で済ませるはずはないでしょう」

「中途半端？…この被害で？」

「ええ、半端です」

聞き返すアリオスにリインは頷く。

「人的被害に対してクロスベルにおける重要な施設はほぼ無傷。これは明らかに不自然です」

派手に爆破されたIBCもその機能のほとんどが新設されたオルキスタワーに移動が完了しており、クロスベルの機能そのものを損なう打撃にはなっていない。

「アリオスさんがオルキスタワーを防衛していたと言っていました
が、クロスベルにはジオフロントという隠し通路が網の目に広がっています……」

《赤い星座》や《結社》がそれを見逃すはずはないでしょう……

本当にこれが《鉄血宰相》の引いた絵図なら、一手でクロスベルにとって致命的な傷を与えているはずです」

「……………そうか」

「それから通商会議では《赤い星座》を雇うのに一億ミラを支払っています……」

あれはオリヴァルト皇子とオズボーン宰相を守るための護衛としての値段だとしたら、今回の襲撃は少なく見積もってもその三倍は必要だと思えます……」

そしていくら帝国が広く豊かな国だったとしても、そんな予算をこの短い期間で用意する余裕はないはずですよ」

「なるほど……………確かに筋は通っているな」

予想以上に真相に近付いているリインにアリオスは平静を装いながら相槌を打つ。

ノーザンブリアで《鬼の力》を暴走させて戻らなくなってしまった
としかアリオスは聞いていなかったが、リインの白い髪にグノーシス
で変色したヨアヒムの髪の毛の印象が重なる。

この話題を選んでしまったことにアリオスは後悔する。

「どうやら思っていた以上に根が深い——」

コンコンー、アリオスの言葉に重なるタイミングでドアがノックされる。

「あのーリイン、おきてる?」

「その声はキーアか。どうした——」

「入るなキーアッ!」

迎え入れようとしたリインの言葉を遮り、初めて聞いたアリオスの

一喝が室内に響き渡る。

「え……う？」

しかしその制止は空しく、キーアが開いてドアが開く。

片手に缶ジュースを抱え、ノブを捻った手を固めたままアリオスの声に碧の少女は立ち尽くして固まっていた。

「——っ——」

碧の少女を見た瞬間、リインの目の奥に激痛が走る。

それに伴いキーアの体に淡い光が灯る。

「キーアちゃん……君は——っ!？」

背後に感じた殺気にリインは咄嗟に身を捻り、その斬撃を躲す。

「——アリオスさん」

「どうやら気付かれてしまったようだな」

空振りに終わった一撃にアリオスはため息を吐く。

「リイン、これ以上踏み込むな。これはクロスベルの問題だ」

「アリオスさん……それは本気で言っているんですか？」

峰を返していた太刀を戻し、その切先を突きつけるアリオスをリインは睨み返す。

アリオスの言葉が、態度が、暴走した《識》で辿り着いた真実は紛れもない本物だと裏付ける。

「ああ、俺は本気だ。ようやくここまで来たんだ……邪魔をするのなら——斬る」

凄むアリオスにリインは——動揺を抑え込み切り替える。

「どうしてこんなことを？」

「それは——」

「だって……しかたがなかったんだもん……これが一番マシだったんだから」

答えたのはアリオスではなく、目に一杯の涙を浮かべたキーアだった。

・*

その後、ツアイス工房製の有人着陸装置の空路でクロスベルを訪れたリインはハイワース夫妻の無事を確認したレンと陸路で導力車を使って迎えに来てくれたダン・ラッセルと合流してトリスタへの帰路へと着く。

短い間とはいえ遊撃士として活動していた期間があつたにも関わらず、リインを好意的に見送る者は誰もいなかった。

「真実というものは容易く隠蔽され、人は信じたい現実のみを受け入れるか……」

「それはレーヴェの言葉よね？　それがどうかしたの？」

不意に呟いたリインの言葉にレンは首を傾げる。

何でもないというリインは首を振りながら力無く笑う。

「それが本当だつたと思いきや知らされただけだ」

「……………自己欺瞞に覆われた都市。この街にエステルみたいな強い人はいるのかしら？」

明らかに憔悴した様子のリインにレンは思うところはあつたが指摘せずに気付かない振りをする。

「どうだろうな……」

言われて思い浮かべたのは今日は会えなかったロイドだが、果たして彼は「真実」に折れることなく立ち上がれるかどうかリインには判断できなかつた。

「はあ……人を信じてって言ったのに……俺の方が信じられなくなりそうだな……」

レンに聞こえないように小さな声で愚痴を漏らし、リインは頭を抱えた。

「——ん？」

そこで鳴り響いた《ARCS》の音にリインは定時連絡をしていなかったことを思い出す。

「サラ教官からかな？」

今日は平日、ルーファスに事情は説明してあるが授業をサボったことに変わりはなくサラの小言を想像してリインは余計に鬱な気持ちになる。

「もしもしサラキよ——」

『大変だリイン・シユバルツアーツ!』

耳に当てた通信機から聞こえて来た大音量にリインは思わず仰け反る。

「あら? その声はブルブランね」

「はあ……一体何の用だ? 俺は今、お前達《結社》とこれ以上馴れ合いたくは——」

『そんなことはどうでも良い。大変なのだよリイン・シユバルツアーツ』
焦った珍しいブルブランの声にリインとレンは顔を見合わせて首を傾げる。

「あんたがそんなに動揺しているのは珍しいな」

『ああ、私も柄にもなく動揺しているのは自覚している。だから落ち着いて聞いてくれたまえ。実は——《聖獣の至宝》が盗まれたのだよ』
「《聖獣の至宝》ってリインが聖獣のみんなから貰った聖石を集めて造っていたアクセサリーよね?」

「ああ、ブルブランにバリアハートの職人を紹介してもらって……最初は一つだけのはずだったのになにいつの間にか七つ揃って……」

リインはため息を吐き、ブルブランに言い返す。

「それで、この通信は予告状の代わりなのか?」

「あらあら、ブルブランの遊びはレンもちよつと興味あつたのよね」

『違う……そうじゃない』

本気で取り合ってくれないリインとレンへブルブランによる必死の説得が始まった。

128話 執行者たちの日々

「すまなかつたっ！」

かつて特別実習で訪れた宝飾店に入ったリインを迎えたのは見るからに職人といった風貌の男の土下座だった。

「お、落ち着いてください。ちゃんと事情は聞いていますから」

そんな歓迎を受けたリインは困った顔でまず土下座をやめさせる。

「それで盗難にあつたらしいですけど……」

周囲の棚を見回してリインは顔をしかめる。

特別実習の時はあまりそちらの方に興味を持たないリインも見事だと感嘆させた宝石たちはない。

割れたガラスケースに壁際の棚も全て中身は空であり、荒らされた店内はまさに物盗りの跡だった。

「領邦軍に連絡は？」

「もちろんした……だがおそらく無駄だろう」

工房主のダボスは諦観を滲ませたため息を吐く。

「レン……？」

「ダメね。時間が経ち過ぎていることもだけど、いろんな因果で踏み荒らされてるからここだけで見通すことはできないわね」

「そうか、俺もだ」

《識》の目で店内を見たリインも既に憲兵隊の調査が入ってしまった室内から手掛かりを見つけることはできなかつた。

「ええいっ！ 何をそんなに悠長にしているんだね」

そんな二人のやり取りに、珍しく焦った様子のブルブランが声を上げる。

「完成し、お披露目を控えた至宝を人目に発表する前に盗み出すなど

『美』の冒険でしかない！

領邦軍など当てになるものか！ 私自ら罪深き下手人から至宝を取り戻してやろうっ！」

もうこいつ一人で良いのではないかと思う程のやる気に満ちてい

るブルブランだが、そうすると今回の犯人を文字通り八つ裂きにしような気もする。

「マイスター！ 何か犯人に繋がる手掛かりはないのかね!？」

「実は犯人そのものは誰かは既に分かっているのだ」

「そうだったんですか?」

意外そうに聞き返したリインの言葉にダボスは頷く。

「ああ、領邦軍は一応捜査するとは言っていたが、相手が相手だけに戻って来るのは絶望的だと言われてしまったがな」

領邦軍の怠慢ではなく、それ程の盗人だということにリインはやはり意外なものを感じる。

「それでおじいさん、犯人は誰なのかしら?」

「レンも同じことを感じ、その答えを促す。」

「うむ、犯人は《怪盗B》だ」

「……………」

「……………」

リインとレンは揃って白い目をブルブランに向ける。

「ま、待ってくれたまえマイスター。それは何かの間違いではないのか?」

「いや、《聖獣の至宝》をしまっておいた金庫がなくなり、そこに犯行声明のカードが『怪盗B、参上っ!』と残されておったから間違いないだろう」

「……………」

「…………そのカードはどちらに?」

「領邦軍が証拠として持つて行ってしまったわい」

「金庫ごと持ち出したのね…………これだけの大きさの金庫を盗み出すのは確かに《怪盗B》じゃないとできないかしら、クスクス」

店の奥を覗き込み、レンはなくなっただろう金庫の跡を確認し、リインから借りたオーバルカメラで現場の写真を撮って行く。

「奴は『美の解放』と称して帝国の各地で盗みを働いておる…………」

「今回は《聖獣の至宝》に目を付けたとしてもおかしくはあるまい」「そ、そうですね…………」

ダボスの言動を見るに、彼は目の前のブルブラン男爵の正体は知らないのだろう。リインは目を逸らして頷く。

「なんて罪深いのかしら 『怪盗B』 は……ふふふ」
わざとらしく仰々しい声音でレンは笑う。

「くっ……誰だか知らぬがどうやら命知らずがいたものだな」

「有名税みたいなものだろ。この前帝都の実習でも 『怪盗B』 の模倣犯が——」

言いかけてリインは口を噤む。

帝都の特別実習でハーシエル雑貨店から盗みを働いた自称 『怪盗B』 。

その事件は彼だけに限らず、『瘦せ狼』と『幻惑の鈴』、そして『殲滅天使』の模倣犯もいた事件だった。

その時と同じような犯行声明を残している今回の盗難事件にリインは冷や汗をかく。

「リイン？ どうかしたの？」

「いや、何でもない」

首を傾げるレンにリインは平静を装って応える。

——この事件、二人の先を超して解決しないと死人が出る……

まだあの時の猟兵崩れたちと決まったわけではないが、最悪をリインは想定する。

「仕方がない。レン、悪いが先にトリストタに戻ってサラ教官に当分戻れないって伝えておいてもらえるか？」

「あら、そんなの『ARCU』で連絡すれば済むことじゃない」

「そうだけど……」

リインはレンに耳打ちする。

「もしかしたら帝国解放戦線が盗んだ可能性がある。あまりこの事は通信でやり取りしたくないから」

「帝国解放戦線……」

「彼らはノーザンブリアから魔獣創造のクオーツを盗み出した……」

それそのものはオルデイスで回収しているけど、コピーを作られている可能性もある。だから——」

「聖獣が作り出した七耀石を触媒にして造られた魔獣が現れるかもしれないってリインは考えているのね？」

「可能性だけならな」

嘘であるが、その可能性も決してゼロではない。

先の模倣犯の可能性、聖石の御利益を狙ったの可能性、他にも可能性ならいくらでも想像できる。

「……………何か隠してないリイン？」

「そんなことない」

レン達の出来の悪い模倣犯のことなどおくびにも出さずにリインは言い切る。

「でも、リインは今週末のあの実験の準備にトリスタにいないといけないでしょ？」

それにリインは早く帰って休むべきよ。だからこの事件はレンとブルブランで解決して上げる」

「いや……………それは……………」

気遣ってくれることは嬉しいがレンの指摘にリインは狼狽える。

今週末に行く《雲》の力の分割と封印。

そのために不本意ながら《結社》と《七耀教会》から手伝いを派遣してもらおうことになっている。

それに合わせた準備もあるので確かに、先行きが見通せないこの事件に関わっている暇はない。

「いや、その予定は延期に——」

「その必要はないよ！」

リインがそう決めたところで、店の扉が勢いよく開く。

「この事件っ！ 美少女名探偵なーちゃんが引き受けたっ！」

「ナーディア……………お前は……………」

そこにはトリスタでルーファスの助手をしているはずのナーディアとスウィン、そして——

「……………どうも」

二人に遅れて店内に入って来た銀髪の少女はリインに向かって小さく会釈をした。

「アルティナ……どうして君が……」

「命令です。リイン・シユバルツァーは早々に学院に戻れとの伝言です」

咎めるようにじつと見つめて来るアルティナの視線にリインは思わず怯む。

「ルーファス教官が今回の事件を独自の情報で知って先回りするように俺達を派遣したんだ」

「ふふふ、特別報酬のためにがんばっちゃうよー」

代わりにスウインとナーディアが簡単に理由を説明する。

「だからリインさんは安心して学院に戻ってくれて良いですよ」

「いや……でもな……」

リインは一同を見回し、増えた少年少女に目を丸くするダボスの様子を窺う。

「ふむ……事情は知らんがどうやら普通の子供ではなさそうだな。儂は構わんが」

自分の主張を封じられた現状にリインは肩を落とす。

「安心してリイン……あの子はレンが護るから……」

「レン……」

決意を新たにするレンにリインは複雑な気持ちになる。

彼女が《殲滅》ではなく《守護》を意識してくれると言うなら一安心だが、それでも不安は残る。

「スウイン、もしもの時は君だけが頼りだ。ブルブランとレンの暴走を止めてくれ」

「え!?! 俺っ!?!」

突然のリインの懇願にスウインは困惑するのだった。

そしてここに帝国探偵団《ナンバーズ》が結成した。

・*

「はっ——ブルブラン達のものまねとは面白いことをする奴もいたもんだな」

「笑いごとじゃないんだけどな」

ため息を吐き、リインは構えた“それ”を振り下ろす。

マクバーンは待ち構えてリインの一撃を受け止め、重ねるように彼が持つ“それ”を続けて振り下ろす。

「それでその話はどうなったんだ？」

「それより何であんたがここにいるんだ？」

確かテストタロツサから分離した後、盟主やカンパネルラに話を付けに行くとか言い残して後始末を全部押し付けて行つたくせに」

続きを促してくるマクバーンにリインは白い目を向ける。が、手はそのまま動かす。

「それか……まあまだ《結社》にしていることにはなったな」

「そうか、なら敵ということだな？」

「まだオルデイスでのこと根に持つてるのか？」

だからこうしてその借りを返すために、ヴィータの誘いを受けたんだが——つな！」

睨まれても気にしないマクバーンもまたリインと同じように喋りながらも腕を止めない。

二人の間で鉄を打つ音が鳴り響く。

「……本当にどうしてこんなことになっているんだ？」

旧校舎の裏庭を改造して作られた即席の鍛冶場で何故かマクバーンと鉄を打っている現状にリインはひたすらに困惑する。

「どうしてって、その《聖獣の至宝》がまだ見つかってないんで皇子様たちへのプレゼントを用意しないといけないんだろ？」

「ああ……剣はダメだけど東方の太刀——もダメかもしれないから懐刀って呼ばれている短剣を作るつもりだったのは確かなんだけど……」

当初は“魔剣”を作る方法と同じ導力加工器を使うつもりだったのだが、クロスベル襲撃の煽りでリインは預金を引き出せなくなり、そのため十分なセピス買い付けることはできなかった。

その時点で断念するはずだったのだが、そこに現れたのがマクバーンであり軽く話を聞いた彼は何を思ったのか旧校舎裏にこの即席の

鍛冶場を博士たちに造らせた。

「ふむ……これが東方の鍛造と言うものか興味深い」

「工業加工では再現できないものが往々にして作られるという話だが、ふんお手並み拝見とさせてもらおうか」

「マクバーンの『劫炎』で鍛えた鉄か……実に興味深い……」

「ほらリイン君、腰が入ってないわよ！ 手を抜かない！」

「が、頑張ってください二人ともっ！」

見学する博士たちの野次に混ざるティータの声援のみが唯一の癒しに感じながらリインは感じる理不尽な苛立ちをマクバーンが押さえる真っ赤に焼けた鉄に叩きつけるつもりで槌を振り下ろした。

「はっ——その意気だ」

快音を鳴らす鉄にマクバーンは活き活きした様子で片手のハサミで鉄を押さえ、もう一方の手に持った槌をリインの一撃の合間に入れて行く。

普段の気怠そうでチャライ空気はどこに行ったのか、焰と鉄に向き合う彼の目は至って真面目だった。

そして普段の行いから想像できない程に鍛冶姿は様になっているのが妙に腹立たしい。

「ここまで本格的にやるつもりなんてなかったのに……どうして……」

「おいおいこの程度で本気とか言ってんじゃねえよ」

「だからどうしてそんなにやる気になっているんだ!？」

鍛冶を片手間にいかに焰に空気を送り込んで大きく熱くするコツを語るマクバーンにリインはやはり頭痛を感じる。

「——それで結局ブルブラン達は どうしてんだ？」

話を戻すマクバーンにリインはため息を吐いて答える。

「犯人はすぐに見つかった。だけど《聖獣の石》で作った首飾りはまだ見つかってないみたいでみんなはそれを追い駆けている」

《聖獣の至宝》と共に根こそぎ盗まれたダボス工房の宝飾品は取り戻すことができたが、その中には《聖獣の至宝》は存在しなかった。

盗んだはずの模倣犯たちもいつの間にかなくなっていたそれに困

惑しており、いよいよよきな臭くなってきた。

「そうか……しかしブルブラン達のものまねか、少し見て見たかったな」

「そいつらの写真はないけど、『怪盗B』に『聖獣の至宝』を盗まれて荒ぶっているブルブランの写真ならあるぞ」

「はっ——そいつは良い。後で見せてくれよ」

「明日の『儀式』で教会の人達と喧嘩をしないって約束してくれるなら」

リインは特に躊躇わずそれを売りつける。

「ああ、それは構わねえが……確か教会からは第五位と第八位が来るんだったか？」

「ええ、そして『結社』からはあんたとヴィータさんの二人だ」

ローゼリア曰く、高位の術者は三人で済むはずだったのだが教会と結社が張り合う様に協力を主張してきたため、それぞれ二人ということになった。

「教会の第二位はどうするんだ？」

「正体を隠しておきたいみたいだから、今回は参加しないらしい」

当たり前のように認知されている守護騎士第二位にリインは誰に對して忍んでいるのだろうかと首を捻る。

「あとは確実を期してこっちから三人の術者を用意している」

三人と言うのはあくまでも最低限の人数。

四人外部から集められたとなれば、七つに分割するのに合わせて七人の術者を用意した方が確実と言う事でイオとダーナ、そしてアプリリスの三人に来てもらうことになっている。

ダーナに関してはその時にローゼリアと引き合わせる予定でもある。

「しかしもったいねえな……その『雲の力』をわざわざ封印しちゃうなんて」

「下手に力を解放したらあんたみたいに空間を壊してしまうからな……」

ただそこにいるだけで壊してしまうあんたと違って、こっちは制御

が効かないから壊してしまうんだ」

「へえ……つまりオルデイスでの戦いは全力じゃなかったって事か？」

「全力だったさ。俺が扱い切れる範囲で……そういう意味ではテスト
Ⅱ ロツサの拘束があつたあんたと条件は同じだっただろ？」

「ま、そうなるか……クク……」

喉を鳴らして笑うマクバーンにリインはどうせ碌でもないこと考
えているのだろうと嘆息する。

「ところで……」

「あん？」

「もうそろそろ良いんじゃないか？」

《識》の目で見た鉄の様子からリインは進言する。

「いいや、あと一時間。鉄が俺の焔に馴染むまでこのまま叩き続ける」
「い、一時間っ!？」

槌を振り上げ、振り下ろしながらリインは絶句する。

「その後は半分に分けておいた鉄を同じ時間叩くぞ」

「……最初にわざわざ分けていたのは気になっていたけど、どうして
？」

「皇族の双子に贈るもんなんだろう？ だったら一つの鉄鉱石から二つ
に分けて造る姉弟刀にするのが良いんじゃないやねえか？」

「……………まあ、たしかに……いや、だからなんでそんなに乗り気なん
だ？」

割とまともな言い分にリインは納得しかけるが、やはり妙に乗り気
になっているマクバーンに抗議の声を上げる。

「そうだな……強いて言うなら浪漫だ」

「浪漫じゃ仕方ないのう」

「そうだな……浪漫と言われたならやるしかあるまい」

「拘ってこそその芸術……まさか『劫炎』がその機微が分かるとはな」

「やるからには徹底的に、よねー」

「えつと……頑張ってくださいリインさん」

マクバーンの言い分に賛同する博士たちにリインは槌を振りなが

ら器用に肩を落とす。

その槌の音に本校舎で鳴った下校時間を告げる鐘が重なる様に鳴り響くのだった。

129話 交渉と儀式

10月16日土曜日。

来週に迫った士官学院祭に向け生徒達は自由行動日にも関わらず学院に登校して準備を進める中、普段は職員が使う会議室に異質な一団が集まっていた。

「……………」

「……………」

「えつと……………」

「ふふ、私達のことには気にしないでちょうだい」

「そうだな。別にここであんたらとやり合うつもりはねえからな」

まるでリインの味方だと言う風に装って煽るヴィータとマクバーンにリインは頭痛を感じる。

いつそう強くなった相手の視線にリインはため息を吐く。

「話には聞いていたがどうやら《結社》に身を委ねたというのは本当のようだな」

「ちよ、爺さん」

棘を含んだ巨漢の老人の言葉に彼の隣に座るケビンが慌てる。

「人間きの悪いことを言わないで下さい。《結社》とは利害が一致している部分があるのは認めますが、敵同士なのは変わりません……………」

ただ貴方達、《七耀教会》が俺の味方なのは分かりませんが」

「ふむ……………」

「リイン君……………」

「ケビンさん、呼び出しておいて申し訳ありませんが貴方達を手放しで信用することはできません」

顔をしかめるケビンにリインは容赦なく突き放す。

「随分と嫌われたものだな」

「嫌われたと言うよりも、俺は貴方達《封聖省》の存在をワイスマンの知識でしか知りません……………」

その点《結社》の人間とはこれまで何度も剣を交えて来たので、その人となりや組織の方針は理解できています……………」

少なくとも今回の儀式において、俺の邪魔はもちろん、あるがままを観察するためにも余計なことはしないでしよう」

「我々が余計なことをするとでも?」

「何もしないという言葉信じられる程に、俺は貴方達のことを知りません」

一度はワイスマンの《聖痕》を理由に外法認定され暗殺されそうになったこともあるだけに警戒する。

《雲の至宝》という今になってはオリジナルを超えた《聖痕》となったリインの“力”を《七耀教会》が外法と認定する可能性は決して小さくない。

もちろん個人としてケビンは信頼できることは知っているが、《七耀教会》についてはトマスも特に語ることはなく信頼構築はそれこそ《結社》以下なのである。

「貴方達はそのつもりはなかったとしても、その考えは上層部と同じとは限らない……」

未だに、ノーザンブリアやクロスベルの事件から俺の力を《外法》と認定するかでまた揉め出しているんですよね?」

「まあ否定はせんよ。《雲の至宝》などと名乗ってくれたおかげで上は烏滸がましいと目くじらを立てておる者も多い……」

これ以上何かが起きる前に“外法”と認定して狩るべきだと主張するくらいにな」

「やはりそうですか」

帝都の実習からヴァリマールを使って派手にやり過ぎたのだとリインは改めて振り返る。

「ですが、全てが終わってから駆け付ける《七耀教会》に咎められる筋合いはありません……」

それに帝国解放戦線の《S》、スカーレットは元は七耀教会の従騎士だったそうですね?」

「ああ……」

「オルデイスで捕らえられた彼女を法国は司法取引を行ってまで引き渡しを要求している……」

これでは法国がテロリスト達を支援していたとも疑われても仕方がないと思いませんか？」

「ううむ……」

痛い所を突かれてバルクホルンは唸る。

秘密主義の守護騎士。

テロリストに身を投じた従騎士。

それを有耶無耶にしようとする法国の動き。

それに手打ちにしてもらったとは言え、一度は暗殺を強行したと。

あらゆる要素がリインの教会への不信感に繋がってしまっている。

「あーリイン君、一応フォローしておくことやな……」

オレのあの時の、次の任務は《S》を狩ることやったんや」

「そうだったんですか？」

ケビンが言うあの時と言うのは《影の国》の事件の事。

「ああ、後任を決めずにオレが『外法狩り』をやめたせいで汚れ役がいなくなつて優先度の低い奴は見逃されておつたんや」

「《降魔の笛》に《騎神》……」

何より臆面もなく『法剣』を使っていること。最悪、帝国と法国の戦争になりかねない火種なのに優先度が低いんですか？」

「それは……」

言い淀むケビンにリインはため息を吐く。

「とりあえず一つ、答えて下さい……スカーレットは《聖痕保持者》ですか？」

法国が司法取引をしてまで引き戻そうとする人材としてリインは疑問をぶつける。

もしもそうなら、まだテロリストの脅威が本当に拭えていないことを考えると相応の覚悟をしておく必要はあるだろう。

しかしリインの懸念を晴らすようにバルクホルンは首を横に振つた。

「いいや、スカーレットは《聖痕保持者》ではない……」

だが、《聖痕》の受け皿になれる稀少な人材でもある」

「聖痕の受け皿？」

聞きなれない言葉にリインは首を傾げる。

「《聖痕》は本来ならいくら霊能力が高い人間でも現出するものではない」

「爺さん、その話は——」

「良い、話さねば彼が向けてくれた信用に不誠実だ」

止めようとするケビンを制して、バルクホルンは続ける。

「《聖痕保持者》は死ねばその《聖痕》は空席となり、次の候補はゼムリア大陸のいずこかに無垢の《聖痕》として現れることになる……」

だがスカーレットの様な体質の者は消えるはずの《聖痕》を継承することができる……

法国が司法取引をしても取り戻しておきたい人材と言うのはそういうことだ」

「それはもしかして……」

「察しが良いな……」

君が考えている通り、彼女が七耀教会に留まっていれば第八位を受け継ぐことになっていた……

そうなる前に彼女が出奔したことは幸運と見るか、不幸と考えるかは悩ましいものだがな」

嘆くバルクホルンのため息は年相応の疲れた老人の嘆きに見えた。

「とりあえずスカーレットにはそれだけの潜在能力があるとだけ認識しておきます」

「ああ、それは間違っておらん」

リインの答えにバルクホルンは頷く。

「話を戻そう。単刀直入に聞かせてもらおう……リイン君、君が《七耀教会》に求めるものは何かな？」

「特に何もありません」

バルクホルンの質問にリインは即答した。

「おいおいリイン君、ここまで引っ張っというそれはないやろ？」

「そうは言っても……」

組織の全容を把握できないのは《結社》と《教会》も同じで何処ま

で信用して良いか」

「ふむ、儀式には相応の術者が必要ではなかったのかね？」

「結社から二人、ヴィータさん達とは別に三人の術者を用意しています……」

それだけいけば儀式そのものは滞りなく完了できます……

これまで何もしてくれていない、むしろテロリストの側だと疑われともおかしくない貴方達をその場に立ち合わせる……

それだけでも十分に譲歩して、《教会》の顔を立てていると思います
が？」

誠意は見せた。

そう言わんばかりのラインにバルクホルンとケビンは《七耀教会》と名乗れば無条件の信頼が得られるというのが甘い考えだったと思
い知らされる。

「大事よね。日々の積み重ねの信用って」

「違いねえ」

そんな二人を煽る様にヴィータとマクバーンが笑う。

「ならば『雲』の力の一端を《七耀教会》に預けると言う話はどうする
つもりだね?」

「まあっ！ 何も役に立ってないのに見返りをせびるなんて!」

「《塩の杭》やラインの暗殺の前科があるつてのによくもまあそんなこ
とを要求できるな? 感心するぜ」

バルクホルンの質問に野次で応えたのはわざとらしく驚いた
ヴィータとマクバーンだった。

「……………」

「あら、ごめんなさい……」

でも《結社》は見返り無しでライン君に手を貸して上げているのに、
まさか《七耀教会》が……」

「そう言っただけでやるな。こいつらは結局教会の狗、むしろハイエナに過
ぎねえんだから」

ヴィータの言葉にマクバーンも乗っかりさらに煽る。

「ヴィータさん……マクバーン……」

きつくなつたバルクホルンとケビンの視線にリインは注意する。

「でもさつきから聞いていればリイン君の質問をはぐらかしてばかりなのに自分達の利益だけは通そうだなんてあまりに見苦しくつて……」

そんなだから典礼省に嫌われるのではなくて?」

「まあこいつらは文字通り教会の狗——いやハイエナだから仕方ねえだろ」

しかしリインの注意を無視して二人はさらに煽る。

その嘲笑に教会側の二人の空気が一気に張り詰める。

「二人ともいい加減にしてください」

「あら出過ぎた真似をしちゃったわね、ごめんなさい」

ヴィータは素直に謝り、マクバーンは大きく肩を竦めて口を噤む。

「置物が失礼しました……」

それで『雲』の欠片についてですが——」

「いや、そちらの要求は全て呑もう」

「え……?」

「君に差し出した七耀石はあくまでも口止め料だった……」

ノーザンブリアでの『塩の杭』の後始末、オルデイスでのスカーレットの暴走も本来なら私達が然るべき対処をすべき問題だった……

業腹だが結社の者達の言葉は正しい……

リイン・シュバルツァー。教会を代表し謝罪と感謝を言わせてくれ」

潔く認め、バルクホルンは頭を下げる。

「オレからも改めて謝らせてもらおうわ」

それにケビンも続く。

「……………どうするつもりですか?」

会話の主導権を取るだけのつもりだったが、それを完全放棄してしまった教会組にリインは非難するようにヴィータ達を睨む。

「あらら……」

「はっ……」

二人は笑って誤魔化す。

「はあ……」

リインは思わずため息を吐く。

博士たちはこの際だから、教会の飛行艇の設計図をかつぱいで来いと言っていたが、そんなことをすればそれこそ法国に正面から喧嘩を売る様なものだろう。

どうやって路線を戻そうかとリインが考え込んだところで——会議室のドアがノックされる。

「失礼します」

「え……う？」

聞き覚えのある声にケビンは驚き顔を上げる。

「遅くなりました……ってケビン、何をしているの？」

「リース……何でお前ここに？」

クロスベルの教会に潜入しているはずの己の従騎士の登場にケビンは目を丸くする。

「リイン君にとある理由で呼ばれていました……」

それから大司教から許可は得ています……まずはリイン君。これを返させてもらいます」

ケビンへの説明を省き、リースはリインに小箱に入れたクオーツをリインに差し出した。

「このクオーツのおかげで多くの負傷者達が救われました、ありがとうございます」

「わざわざ持ってきてなくても良かったのに」

リインはクロスベルに行った時、レンにリースへ渡すように頼んでおいたクオーツを受け取る。

効果は「大地の霊薬」を導力魔法に落とし込んだもの。

効力は劣るが、患者の体力に依存せず使用者の精神力と導力が続く限り人体を修復できる。

「そういうわけにはいきません。それとこれを——ミシユラム名物のみっしいチョコです。クラスメイトの子たちと一緒にどうぞ」

そしてついでとばかりに大きな旅行鞆から包装に包まれた手土産を差し出すのだった。

「それで……グラハム卿、バルクホルン卿。これはいったいどういう状況でしょうか？」

リインへの挨拶が終わったリースは頭を下げていた二人に状況の説明を求め――

「――とりあえず菓子折りの一つも持って来ていないのはどうかと思います」

古株の守護騎士と、上司の守護騎士に対して容赦のないダメ出しをリースは指摘し、ヴィータは声を忍ばせて、マクバーンは声を上げて笑うのだった。

・*

旧校舎・地下。

本来は起動者を選定する試練の場はローゼリアの手によって「始まりの地」を模した空間になっていた。

円形の空間の周にはフレームを剥き出しにした巨大な機械人形が五つ、同じくフレームが剥き出しにされているヴァリマールが並び、博士たちはこれから始まる儀式の準備に余念はなかった。

他にも見学者として学院長や理事長などもその場に立ち会っている。

その博士たちの手伝いをしていたⅦ組はリインが連れて来た協力者たちに目を向ける。

「あ、あれってまさか――ヴィータ・クロチルダッ!?」

「バルクホルン神父? どうしてここに?」

「っ――あの男は……」

「シスター・リース……いったい何故……」

「へえ……あれが教会の守護騎士か、歯応えありそうじゃない」

それぞれが驚きなどの感想を抱く中、リインは中央で待っていたローゼリアに声を掛ける。

「お待たせしました」

「うむ、その様子だと交渉はうまくいったようだのう」

「えつと……うまくいったかはどうかはともかく納得してもらいました」

曖昧な答えを返してリインはローゼリアの側で待っていたイオとダーナ、アプリリス。そしてルフィナを紹介し、続けて結社と教会の四人を紹介する。

それが終わるとローゼリアは一同を見回して宣言する。

「では、これよりリイン・シユバルツァアの『雲の至宝』の聖痕の分割作業を始める……」

具体的には妾がリインから『力』を取り出し、それを分割する……
汝らには分割した『力』を捕まえて用意しておいた『核』に押し込んでもらう、作業としてはこの程度だのう。何か質問はあるか？」
「そうね。なら婆様。『機神』と『騎神』は全部で六つ。残りの一つの『核』がないみたいだけどそれはどうということかしら？」

ヴィータの質問にローゼリアはルフィナに視線を送る。

「最後の一つはこのルフィナ・アルジェント、そのもの……」

『力』を中心に妹を触媒にして分け身を作り受肉させる。これはイオに担当してもらうことになっておる」

「よろしくね。ルフィナそれにリースも」

「ええ、こちらこそよろしくお願いします」

「ふふ、頼りにさせてもらうわねイオ、リース」

にこやかな挨拶を交わす三人にケビンは会議室で驚かされた教会の取り分に頭を痛める。

それが七耀教会に対してリインが提示した、『ルフィナ・アルジェント』の受肉による復活。

《影の箱庭》の住人であり、リインの力に依存して存在を保っているルフィナを完全な形で現実世界に固定する。

元従騎士の復活。

それがリインが提示した《七耀教会》に貸与する『力』の使い道。

「受肉……そないなこと、本当に可能なのか？」

「理論上は可能だと、第二位のお墨付きも貰っています」

《至宝の力》に《影の箱庭》、リインがクロスベルで手に入れたホム

ンクルスについて書かれた『錬金術の書』、そして『大地の聖獣』で
あるイオがいるからこそ離れ業。

箱庭の管理者としての役割も、外で過ごすことが多くなったノイや
ナユタのこともあり、あまり必要がなくなってしまう。

だからこそルフィナには現実での独立のために『力』の一枠に
なってもらうことになった。

「変わらず俺の使い魔に近い存在だと言うことに変わりはありません
が、従騎士の復活のメリット、それも『至宝の世話役』ともなれば教
会も静観を選ぶでしょう」

「うん……まあそうやろな」

リインの説明にケビンは歯切れ悪く頷く。

外法ギリギリのグレーゾーンなのだが、ルフィナの身内であるケビ
ンやリースにとってはありがたい提案であり、教会も認めざる得ない
メリットが多い。

「なら数は揃っているようだが、他に担当は決まっているのかね？」
バルクホルンも改めてその条件を受け入れ、ローゼリアに先を促
す。

「いや、特に担当はおらん。好きに決めて良いぞ」

「ならレオン。貴方の——」

「じゃあ俺はレーヴェの——」

ヴィータとマクバーンは揃って同じ方向へ踵を返して睨み合う。

「ふむ……では俺は顔見知りがあるところを担当するでしょう」

バルクホルンは翠の『機神』に向き直り、ガイウスに向かって手を
挙げる。

「それじゃあ私は地属性の『機神』を担当させてもらおうかな」

「ならば私は『蒼』の機械人形を引き受けよう」

次いで挙手したのはダーナであり、それにアプリリスが続く。

「ちっ——なら俺は火の『機神』に行くか」

ヴィータとの小競り合いに負けたマクバーンがそれを決める。

「ちゆうことはオレが『灰』か……それは……」

先程の会議の手前、リインの力に直接関わる事にケビンは遠慮して

しまう。

「構いませんよ」

その葛藤を見透かしてリインはケビンに声を掛ける。

「守護騎士ならともかく、ケビン・グラハムという個人はちゃんと信頼しています。ケビン神父ならヴァリマールを任せられます」

「ハハ、そう言ってもらえるなら応えないわけにはいかないなあ」

全幅の信頼を寄せてくれるリインにケビンは苦笑を浮かべ、その大役を引き受ける。

「ところでリイン君、一つ聞いて良いかしら？」

と、改めて分担が決まり儀式を始めようとしたところでヴィータが声を上げた。

「これから分割した“力”を私達がそれぞれ封印するわけだけど、一つ細工をして良いかしら？」

「細工って……《鋼の至宝》の二の舞をやるつもりですか？」

「別に守護騎士たちを出し抜きたいとかそういうものじゃないわよ。ただ——リンちゃん」

ヴィータは見学に控えていたリンを手招きして呼ぶ。

「何ででしょうか？」

「レオンの乗る機体に《空》の至宝の力の一端を混ぜたいんだけど協力してくれないかしら？」

その提案にリンはテイルフィンングとレーヴェ、共に《空》の力を色濃く持つ存在を観察し、リインにやる気になった眼差しで振り返る。

「……………まあ、良いですけど」

出来るのは“絶対障壁”か、別の何かができるようになるテイルフィンングを想像しながらリインはヴィータの提案を受け入れる。

「へえ……それなら俺も少し気合いを入れるとするか。まあサービスって奴だ」

そしてヴィータの提案に乗ってマクバーンが口角を釣り上げた。

「ふむ……混ぜるか。俺の力がどのような影響を及ぼすかは分からんが、先程の言葉の手前、全力を尽くさせてもらおう」

挑発するようなマクバーンの視線にバルクホルンが対抗する。

「えつと……魔煌兵の技術で応用できそうなものはあったかな？」

そしてダーナもそれに煽られるように自分の中の知識を引き出す。

「やれやれ、そう言う事をされると何も持たない私の肩身が狭くなるから見えないところでやって欲しいものだが——ん？」

嘆息したアプリリスの手——かつて失い再生された手に《幻》の力が宿る。

「えつと……リイン君？」

流れるように一味つけるように方向になった状況に自分もやらなければいけないのかとケ빈は顔を引きつらせる。

「もう勝手にして下さい」

リインは頭を抱えて、投げ槍に答えるのだった。

130話 紅と琥珀

10月20日水曜日。

週末の学院祭に向けて準備が進む中、VII組は過密とも言えるスケジュールを過ごしていた。

「ハアアアアアアッ！」

紅耀石の装甲を持つテイルフィングの中からユーシスの気合いが入った声が響き渡る。

その想念に呼応してテイルフィングもエンジンを始動する。

ラッセルは振れ動く計器の針に注目し、その瞬間を待ち構える。

「よしっ！」

機体に満ちる闘気が「核」から供給される霊力と結びつく。

二つのエネルギーが互いを高め合い、その力が規定値を超えると胸と両大腿部の三ヶ所の装甲が開き、取り付けられたフェンリルの加速器が回転を始める。

火が入った加速器によって機体各部に補助系アーツが常駐され、機体性能を補助され余剰エネルギーが「焰」となって機体に纏わりつくように揺れる。

「よし、もう降りて良いぞ」

ラッセルの指示にユーシスは呼吸を落ち着かせて、システムを落とす。

「うむ……」

最初に想定していた「核」の出力では増幅器としての役割にしかないと思うていたが、これならヴァリマールと同じようにしても良いかもしれんの」

「と言っただけ」

テイルフィングから降りたユーシスはラッセルに聞き返す。

「『テイルフィング』と『ヴァリマール』では同じフェンリルでも、最初は用途が全く違ったのだよ……」

ヴァリマールはリイン君から供給される力を受け止めて機体の負

担を軽減した上で、機体の機能を増幅する……

対してティルフィングは騎神に匹敵するだけのエネルギーを確保するためにフェンリルを使うつもりじゃった……

だが新たに組み込んだ「核」の出力が予定を超えておったからの、ティルフィングのフェンリルもヴァリマールと同じタイプにしても良いかもしれん」

「「核」が想定を超えた出力を出しているというのはやはり……」
「うむ。「劫炎」のマクバーンのおかげじゃな」

出て来た名前にユーシスは複雑そうに顔を歪める。

以前の実験ではユーシスは「フェンリル」の性能を引き出すことはできなかった。

もつともそれはユーシスだけに限らずⅦ組のほとんどが同じ結果だった。

出来たのはⅦ組ではシャーリイとラウラ、それと外部協力者としてリインが連れて来たロランスの計三人だけ。

「——ちっ」

が、その事にユーシスは大きく舌打ちをしてしまう。

「ユーシスさん」

「失礼した。ラッセル博士」

エマに窘められてユーシスはすぐに謝る。

「よいよい、聞けばあの男のせいで君の兄の左腕が動かなくなっちゃったのだから、思う所があつて当然じゃ……」

むしろわしの方こそすまんの、少々はしゃぎ過ぎたみたいじゃ」

「いえ、それこそ貴方を責める言い訳にはならないでしょう」

リインがああ男を連れて来たことは業腹だが、それにユーシスが文句を付ける筋合いはないのは分かっている。

自分はいくまでもリインの好意で協力させてもらっているテストパイロットでしかない。

一度はリインに感情のまま当たり散らしてしまっただけにユーシスは強く自身の心を戒める。

「それにしてもまさか本当に「騎神」に匹敵する機体を作り出してし

まうなんて……」

「やはり『魔女』の立場から見ても、あいつは異常なのか？」

「……………はい……………って言いたいんですが……………」

ユーシスの質問に頷き、エマは表情を曇らせる。

一年前までは何も知らない一般市民だったと聞いているだけにリインに対してエマは複雑な気持ちを抱かずにはいられない。

「私はまだ魔女として半人前で、そんな私がリインさんのことをとかく言う資格はあるんでしょうか？」

もしも仮にリインが何も知らずに旧校舎の試練を、リインではなくⅦ組の誰かが《灰》に選ばれていたとして、果たして自分に何ができたのだろうかと近頃エマは考える。

義姉と再会するためのダシにしていた自分が『騎神』という大きな力を得る誰かに何を語れたというのか。

「それに……………」

儀式の後、ローゼリアに隠れてヴィータに《イソラ》と名乗った少女のことを問い詰めに行ったが、逆に覚悟を問い返されて黙ってしまった自分に項垂れる。

魔術も知識も覚悟さえ未熟。

《灰》の導き手もローゼリアが引き受けてしまい、《緋》の導き手になるかの覚悟を問われてもエマはまだ悩んでいた。

「私にリインさんに関わる力はあるんでしょうか？」

目の役割を任せてくれたレグナートには申し訳ないが、先日の《雲の儀式》からエマは自身の未熟さを思い知らされることになった。

リインが呼び集めた術者達はエマの目から見ても猛者たちだった。

結社と教会は当然として『大地の聖獣』であるイオ、『大地の眷属』の長だったダーナ。

ノーザンブリアの民であり《塩の杭》をその身に受け入れた経験があるアプリリス。

みんな自分以上の術者であり、何よりも下心なくリインに協力しようとしている姿にエマは恥じる思いを感じてしまった。

「私はこれまでずっとリインさんやⅦ組の人達を自分の都合で利用し

ようとしていたんです」

懺悔するように弱音を漏らすエマにユーシスはティルフィングを見上げて語り始める。

「それを言うならば、今俺がしようとしていることもリインを自分の都合で利用しようとしていることになるだろうな」

初めからリインと自分の間に明確な力の差があることは理解していた。

それを更に顕著に感じるようになったのは八月の帝都の特別実習から。

《帝国解放戦線》が起こすテロの規模の大きさが人智を超えたものとなったことで、誰もリインの戦いについていけなくなってしまうた。

《貴族の義務》だとあれだけ息巻いておきながら、逃げ惑う民を避難させることしかできなかった。

たった一人に戦いを任せてしまう虚無感。

戦いが終わった後に、重傷を負ったルーファスを見た時の無力感。

それらはユーシスの心を大きくかき乱した。

「俺は……この機体を使ってリインにはできなかったことをできると証明したい」

「ユーシスさん？」

険しい顔で誓いを立てるユーシスにエマは首を傾げ――

「――とりやつ！」

「なっ!？」

背後から飛び掛かってしがみ付いたミアムにユーシスは悲鳴を上げる。

「ねーねーユーシス。もう一回ボクにも乗せてよ！」

「それを言うためにわざわざしがみ付くなっ！」

強請るミアムを強引に引きはがしユーシスは叫ぶ。

「それに何度やっても結果は変わらないという結論になったはずだ」

「そうだけどさー」

ユーシスの反論にミアムは唇を尖らせて不貞腐れる。

「『テイルフィング』の開発についてミリアムもまたテストパイロットに立候補していたのだが、機体との間に戦術リンクを張ることができずに除外されてしまった。」

博士たち曰く、機神の自律システムには既存の量産型戦術殻の技術を転用しているため、すでに《アガートラム》とのリンクがあるミリアムとは適合しないらしい。

結果的に仲間外れとなってしまうたミリアムは気が向くままにそれぞれの機神の所に行ってはちよっかいを掛けていた。

「すまんの……何とかしてやりたいが——そうじゃならば《アガートラム》を分解させてくれんかの？」

「え——やだ」

「そこを何とか、少しだけ。ほんのちよびつとで良いから」

迫るラツセルにミリアムはユーシスの背後に隠れる。

「博士、戯れはそこまでにしていたどころ……」

エマ、次のテストは魔導杖と《ファクトの眼》のテストのはずだ。さつさと今日の試験項目を終わらせるぞ……

その後には演奏会の練習もあるのだから悠長にしている時間はないはずだ」

「は、はいっー」

ユーシスの指摘にエマは返事をしてテイルフィングに乗り込む。

「ミリアムも、これが終われば学院祭の準備がある……」

そちらでは存分に働いてもらうから安心しろ」

「は——い」

聞き分けの良い返事をするミリアムをエマはテイルフィングのモニター越しに見て苦笑を浮かべる。

「それにしても……」

改めてエマはテイルフィングのコックピットを見回して感嘆する。

まだ機体そのものは未完成で、実働テストは《影の箱庭》を利用している部分を差し引いても導力技術の進歩には驚かされる。

「なんだか複雑ですね……」

仮想世界で動き回るテイルフィングの姿に、伝え聞いていた『騎神

“と大きな差を感じない。

むしろ装備も含め“機神”の方が優れているのではないかと疑ってしまう。

「技術の進歩って凄いですね」

里を出て気付いた人の進化をエマは改めて感じるのだった。

「ねえねえ博士！ どうせならさガーちゃんみたいな変形ってできないの？」

「ほう、それは興味深いっ！ “戦術殻”は以前リン君の武器となつたことがあつたからのう……」

武器に合わせて装甲の転換ができれば面白そうじゃな」

ミリアムの思い付きの様な提案にラッセルは嬉々として応える。

「……………大丈夫ですよね？」

張り切るラッセルに一抹の不安を感じながら、エマは“テイルフィング”用の魔導杖のテストを始めるのだった。

・*

「もういい降りろ」

「あ…………」

視界がブラックアウトしてエリオットは気の抜けた声をもらった。

コックピットから這い出たエリオットは怒られると思つて首を竦ませるが――

「次、オルランド」

「はいはい」

特に関心も向けずにヨルグはシャーリイを促し、シャーリイはテイルフィングの前で立ち尽くすエリオットを押し退ける。

「あ…………」

「やる気がないなら、さっさとやめた方が身のためだよ」

すれ違い様に囁かれた言葉にエリオットは言い返すこともできずに彼女を見送ることしかできなかつた。

「大丈夫かエリオット？」

「うん……僕は大丈夫だけど……ごめん足を引っ張って」

気遣ってくれる声を掛けてくれたマキアスにエリオットは謝る。

「僕は別に構わないが……」

恐る恐ると言った様子でマキアスはヨルグの様子を窺う。

気難しい職人気質な老人なだけに毎回きつい厳しい言葉をぶつけてくるため、今回のエリオットのミスを我が事のようにマキアスは身構える。

「では、ダブルバスターキャノンのテストを始める」

「りよーかい」

しかし幸いなことにヨルグはシャーリイとのテストに集中しエリオットに見向きもしなかった。

「やっぱりリイン達から聞いたオルデイスの一件が原因か？」

安堵の息を吐き、マキアスはエリオットの不調の原因を切り出す。

オルデイスで巨大な魔煌兵に倒されて行方不明となった《紫の騎神》。

エリオットの父を殺した男の生死不明の報はエリオットにとって寝耳に水だった。

それでも厳しい訓練を惰性のように続けていたが、その緊張が今切れた。

「うん……まさかこんなにあっさり僕の知らないところで終わってたなんて思わなくて……」

「相手は猟兵だ。そういう事もある。それにリインは生き残っている可能性が高いつて言っていたじゃないか」

「そうなんだけど……」

複雑な胸中をどう言葉にして良いか分からない。

「僕はいったい誰を恨めば良いのかなって改めて思って」

「誰を恨む？」

「うん……」

父さんを直接殺した《猟兵王》、それとも猟兵を雇ってガレリア要塞を襲った《帝国解放戦線》——つまりはクロウ先輩たち」

父を殺したのはルトガーであることは間違いない。

だが彼は猟兵であり突き詰めて考えれば、彼に殺せと命じた者こそが元凶とも言える。

そしてエリオットはその元凶にルーレでの特別実習で遭遇し、彼らの主張を知ることになった。

「マキアスは《V》の話聞いてどう思った？」

「彼の境遇には同情はできる。だけど自業自得でしかないし、八つ当たりという彼の主張も的外れだ」

「そうなの？」

「僕達が最初ファイを猟兵だというだけで恐れを感じただろ？」

《猟兵》が傭兵と区分されて《死神》と呼ばれて畏れられているのはそれだけ多くの人の命を奪った実績があるからだ」

「……………そうだよね……………」

あの《V》と一緒にいるってことはクロウ先輩もそれを容認しているわけだから」

「それにこれは父さんから聞いた話なんだが——」

そう前置きを置いてマキアスは語る。

「オズボーン宰相はかつて貴族が雇ったとされる猟兵団に御家族を殺されたらしい」

「それってリインのことだよな？」

「ああ、真実は少し違うのかもしれないが……………」

ここで重要なのはオズボーン宰相が今の貴族の体勢を憎み、一つの猟兵団を壊滅させた理由が復讐なのかもしれないということだ……………」

《V》の復讐が正当化されるなら、オズボーン宰相の復讐もまた正当化されなければ公平とは言えない」

「復讐……………」

「もちろんこれは《V》だけに当てはめた考えであって、クロウ先輩や他のテロリスト達には当てはまるとは限らないがね」

「クロウ先輩の事情か……………」

「その……………あまり考え過ぎない方が良くぞエリオット」

考え込むエリオットにマキアスは紛らわせるように話しかける。

「復讐の是非はひとまず置いておくとして、一度頭が冷えたなら今は

この滅多にない機会を楽しんだ方が良いんじゃないか？」

「楽しむって……」

「帝国にまつわる『大いなる騎士』。それを模した巨人のテストパイロットをやれるなんて普通の学生では体験なんてできなかつたことだろ？」

復讐ばかり意識してやるには勿体ないとは思わないか？」

後ろ暗い理由でプロジェクトに参加することになったマキアスはエリオットを責めることはできない。

復讐を下心しているエリオットに対して、マキアスは父、カールの要請による理由がある。

先にそういう話が来たとりインに許可を得たが、マキアスは父を通じた革新派のスパイという立ち位置になる。

真面目に誠実に実験に協力しているが後ろめたさは付いて回る。

だがそれでも帝国に伝わる『大いなる騎士』、その模造品に乗れることを楽しんでいないわけではない。

「……………そうだね」

マキアスが言わんとしようとしていることを察してエリオットは頷く。

復讐と言う根拠を別として考えれば巨大な機械の巨人を自分の意のままに操ることは純粹に楽しいと思える。

「ありがとう、マキアス。少し気が楽になった」

「なら良いがな」

「ところでもう一つだけ悩みを打ち明けても良いかな？」

「ああ、構わないが」

エリオットの提案をマキアスは快諾する。

「実はリインがクロスベルに行っていた時、僕は帝都の実家に帰っていたんだけど……」

「……………ああ、猟兵王のことでフィオナさんに話を？」

「それもあるんだけど、学院祭で演奏会をやることになったし、父さんの葬儀に喧嘩別れをしてそれっきりだったからちゃんと話をしないといけないって思ったんだ」

「なるほど、それは良いことだ。それで？」

しかしエリオットは浮かない顔をしている。

大方、仲直りできなかったのだろうとマキアスは考える。

もしかしたら今日の不調の原因はそっちだったのかと思考を巡らせながらエリオットに続きを促す。

「うちに——ナイトハルト教官がいた」

「そうか、ナイトハルト教官が………え？」

「いや父さんの部下で、あれから僕や姉さんのことを気に掛けてくれているのは知っているんだよ？」

僕や姉さんの近況をそれぞれ教えてくれて、素直になれないけど感謝はしてるんだよ？

だけど二人の間にある空気に居たたまれなくなって、どうしたら良いか分からなくて、結局何の話もしないで帰って来ちゃったんだ」

その上、何故か真っ先に相談しなければいけないと思った《紅獅子》は先週から表の仕事が忙しくなったという理由で相談できなかった。

「そ、そうか……」

思っていたものと違うエリオットの苦悩にマキアスは既視感と共感を得る。

「……………エリオット、強く生きるんだ」

「え、マキアス？」

「いや、その前にナイトハルト教官の身辺調査をするべきか？」

「ちよつとマキアス？」

明後日の方向に思考を飛ばすマキアスにエリオットは声を上げるのだった。

131話 士官学院祭I

10月23日、土曜日。士官学院祭一日目。

「――学院生の皆さん、そして来場者の皆様方。大変長らくお待たせいたしました……」

これより第127回トールズ士官学院・学院祭を開催します……どうぞ心行くまで楽しんで、みんなで盛り上がってください！」

生徒会長のトワの挨拶を合図に士官学院の門が開かれ、学生たちや来場者たちからの歓声と拍手で士官学院祭は始まりを告げる。

「――さてと、僕達の出番は明日の午後だ……」

今日一日、ステージのことは忘れて学院祭を満喫することにしよう

訪れた来場者たちを眺め、副委員長のマキアスが仕切る。

「……忘れるなんてそんなの無理ですけどね」

遠い目をして肩を竦ませるエマだが、すぐに取り繕わせる。

「ごめんなさい……」

え、えっと、クラブの手伝いをする人もいるでしょうから今日は終日、自由行動になります……」

ですが、備品のチェックもあるので帰りには一旦集まりましたようマキアスから引き継いでエマが本日のVII組の予定を決める。

「そうだね。導力楽器の搬入タイミングも確認したいし」

「ジョルジュに任せているとは言え、簡単なチューニングくらいは自分でやった方が良さだろうからね」

そんなエマの方針にエリオットとアンゼリカは同意し、アリサとラウラも頷く。

「ええ、分かったわ」

「得物の手入れは重要だろう」

「んー、それにしてもみんなけっこう冷静だねー？」

クロスベル方面で結構大きなニュースがあっただばかりなのに」

その会話の流れを空気を読んでいるのかいないのか、ミリアムは昨

日のニュースのことを切り出しぶった切る。

「クロスベルの独立宣言だね」

ミリアムが言わんとしていることをフィーが答える。

それに対してマキアスは腕を組んで考え込む。

「確かに気にはなるが……正直、現実味が薄いからな……」

《国防軍》などと言ってもまともな軍隊すら無いはずだし」

「そして、誇りと独立とは実力をもって勝ち取るもの……」

口先だけで独立を宣言してもすぐに撤回するのがオチだろう」

「それにしたってあまりに急過ぎる。この後の動き方次第ではクロスベルの状況に同情的だったリベールやレミアフェリアさえも敵に回しかねないと思うけど」

「ふむ、一理あるが……」

ユースの主張にクリスが自分の考えを補足してラウラが頷く。

「ま、シャーリイ達には関係ないでしょ。そんなことよりお祭りを楽しもうよ」

「他人事みたいに……」

《赤い星座》による襲撃事件も今回の独立宣言に関わっているというのに無関係を装うシャーリイにアリサは呆れ、振り返る。

「そうですか……アリオスさんが……」

VII組の輪から外れ、《ARCS》を使って何処かと連絡を取っているリインの表情はVII組と違って焦燥に駆られていた。

「……リインの《ARCS》だが、以前も疑問に思ったがどうしてクロスベルまで繋がるんだ？」

連絡先はクロスベルの遊撃士協会。

本来ならそこまで導力波は届かないことにガイウスは首を傾げる。

「なんか博士たちに改造してもらったみたいよ。導力波を単純に飛ばすんじゃなくて、導力ネットを介して通信しているから国際通話も可能なんだって」

勝手に仕様変更をしているリインにアリサは呆れたため息を吐く。

「………実はミシエルさんに話したいことがあります。通信越しでは話せないことなので今からそちらに——」

「はい、そこまで」

ラインの手からサラが《ARCUS》を抜き取り、強引に会話を止める。

「久しぶりね、ええ……そうよ……先週のクロスベルで何があったか聞いているわよ……」

そういうことだからラインは行かせないから、貴方達で何とかしなさいよ。——うん、それじゃあ」

「サラ教官」

勝手に話をまとめ、通信を切ってしまったサラにラインは顔をしかめる。

「弁えなさいライン。これはクロスベルの内政に関わることよ……」

遊撃士はそれに関わる事はできないし、だいたいあんた士官学院生っていう身分なのよ」

「だけど——」

「前の時は人命が掛かっていたから見逃したけど、今回のクロスベルの問題は国同士の問題よ……」

それにあなたの我儘で今日までの頑張りを台無しにするつもり？」
「っ……」

サラが差したVII組の仲間たちを見せられてラインは齒噛みする。

教官の言い分は理解できる。

対岸の火事のように危機感の薄いクロスベルのことで温度差ができていくことも分かる。

しかし、ラインは知っている。

クロスベルが強気な暴挙に出た理由を。

アリオスやキーンアは任せてくれと言っていたが、果たしてそれを信頼して良いのか葛藤が揺れてしまう。

「明日のライブのこともあるけど、同好会の出し物に明日は妹さんも来るし、ノイヤリンも楽しみにしていたんでしょ？」

クロスベルのことはそこにいる人達に任せておけば良いの。分かった？」

「……………分かりました」

サラの念押しにリインは葛藤を押し込めて頷く。
アリオスは《劍聖》。そしてキーマも決して悪い子ではない。
だからこの二人が揃っているのなら最悪なことにはならないはず
だとリインは無理矢理自分を納得させるのだった。

・*
・*

士官学院祭は様々な展示や屋台が並び、盛り上がりを見せていた。
校舎の周りの屋台には様々な飲食物が揃って来場者たちを呼び込
む。

グラウンドでは二年の有志による乗馬体験と簡単なタイムアタッ
クレース。

一年Ⅱ組による教室を使った庭園。ステラガルテン。

一年Ⅲ組は巷で流行っている「ブレード」というカードゲーム場。

一年Ⅳ組は帝国では見ることもない東方風の喫茶店、東方茶屋。

その他にも吹奏楽部による音楽教室など、様々な模擬店は来場者た
ちを楽しませた。

そして、その中にそれはあった。

「これはいったい……」

廊下には《灰》の騎神の様々な角度から撮られた写真が張り出され、
さらには四つのモニターが設置された一室には物々しい五つの機械
の塊が並んでいた。

「ここって《灰色の騎士》様の出し物があるって話だけど」

噂の英雄の姿を一目見ようと集まった来場者たちは用途不明な導
力器の部屋に首を傾げる。

「ようこそおいで下さいました」

教室に入ること躊躇っている一団に対して、リインが教室から迎
え出る。

「歴史研究同好会による出し物は《プロジェクト・テイルフィング》と
いう、《騎神》の搭乗体験のアトラクションになります」

「え……？ 俺達もあの《大なる騎士》に乗れるって言うのか？」

「正確には《騎神》ではなく、こちらの《機械仕掛けの巨人》になります」

リインの説明に合わせて廊下に設置したモニターが起動する。

そこに映し出されたのは蒼い装甲の機械人形が佇んでいた。

「皆さんにはあれに乗って仮想世界の帝都を脅かす《暗黒竜》と戦ってもらいます。頑張って帝都の平和を守って下さい」

「いや……いきなり乗って戦えって言われても、俺は導力車も運転したことはないのに」

「安心してください。テイルフィングは操縦する必要はありません……」

こちらが用意している《ARCS》という戦術オーブメントを介して、機体と貴方達を繋げることで身体を動かす感覚で動かすことができます」

その言葉を示すようにモニターの中の機神は体操を始める。

腕を回し、脚を屈伸させる。

大剣を構えた、振り回す様は機械とは思えない程に滑らかだった。

「でもボク、剣なんて使ったこともないし、けんかもつよくないんだけど」

「大丈夫だよ」

興味はあるが自信がなさそうにする子供にリインは笑いかける。

「フイー。やってくれ」

「ん、了解」

教室の中、稼働しているオーブメントにリインが呼びかける。

少女の声に合わせて、モニターの中の機神が大剣を構え――

「――洗刃乱舞」

静かな声と共に機神が連続で大剣を振る。

「今のはあの有名なアルゼイド流の技です……」

音声入力によって決まった動作を繰り返してくれます。また機体に搭載した人工知能が間合いやタイミングを合わせてくれるので戦ったことがないという人でも大丈夫です」

「じ、人工知能？」

『はーい!』

聞きなれない言葉に戸惑う来場者たちに応えたのはスピーカー越しに聞こえて来た少女の声。

『みなさんの戦いはボクたちがサポートさせてもらいます』

ラインの背後に突然現れてそう言ったのは、彼らが授業で使っている戦術殻。

ふわふわと漂う不思議なそれは両手らしきものを動かしてアピールする。

「武装は大剣、ライフル、魔導杖を用意しています……」

導力魔法についても音声入力式で使用することができます」

「でも、戦うなんてやっぱり怖いわ」

「そういう方はこちらをどうぞ……」

飛行ユニットを搭載したテイルフィンングにより、三分間の帝都の空の自由飛行を楽しんでいただけます」

モニターが切り替わり、翠の機神が蒼い空を自由に飛び回る姿が映し出される。

「戦闘シミュレーションの方にはハイスコアを取れた方には景品も用意していますので、頑張ってください」

『がおーっ!』

そして最後にモニターは漆黒の竜が映し出され、その咆哮が廊下に響き渡った。

・*

「それにしても凄い人だったね」

「ええ、俺一人だったら捌ききれなかったかもしれない。ありがとうございます。うございますゾルジュ先輩」

教室の前の受付でラインとゾルジュは使われたばかりの《ARCC US》の初期化と次の参加者への調整に勤しんでいた。

「はは、別に構わないよ。博士たちに表側で働いてもらうわけにはいかないからね……」

それに開発に関わらせてもらっているから、先輩としてこれくらいはしないと」

朗らかに笑うジョルジュにリインは恐縮する。

今頃隣の教室では稼働データからのバグ取りやシステムの最適化のためにティータを含めた開発陣がリイン達以上の作業量で動いているだろう。

それでなくても、士官学院の出し物なのだからリインが受付をするのは当然なのだ。

「それにリイン君自身も凄い人気だね」

「それは……」

ジョルジュの指摘にリインは困ったように頬を掻く。

列の整理中など、事あるごとに写真を撮らせてもらえないかとお願いされているだけに否定できない。

「なんかミシユラムのみっしいになった気分ですよ」

時の人となっている自覚はあるが、ある日のトラウマを刺激される視線に生きた心地はしなかった。

「ともかくトワ会長には感謝ですね」

「そうだね」

学院祭開始早々に長蛇の列を作ることになった歴史研究同好会のブースにいち早く対処して、解決策を提示してくれた生徒会長に二人は感謝する。

リインへの撮影の申し込みに関しては貼り紙をして対処。

長蛇の列はタイムテーブルを作って整理券を配布して解消された。

廊下に設置したモニターは端末室や外の開けた空間に映写機を用意して人だかりを緩和させてくれた。

それらの手配を素早く振り分けた仕事ぶりにリインは改めてトワが生徒会長なのだと思感させられた。

「技術棟の裏で展示することになった『蒼』のティルフィングの管理も生徒会に任せてしまいましたし、本当に悪いことをしてしまいました」

「はは、トワは頼られると嬉しいみたいだから大丈夫だよ。その代わ

り後で何か差し入れをして上げるといい」

「そうですね」

今日は屋台のもので差し入れを済ませるしかないが、明日の差し入れにはちよつと気合いを入れて用意しようと決意するリインだった。

「それはそうと翠の操作アシストはノイちゃんとリンちゃんに任せて本当に大丈夫なの？」

「ええ、あの子たちがやりたいと言って言い出したことですから」

暗黒竜に四人で挑む戦闘はこれまで実技テストやクリスの随伴などをやってくれていた戦術殻たちに。

空の旅をナビゲートするのはノイとリンの二人。

最初は人見知りだった二人も、今では知らない人間と接することができるようになった成長にリインは嬉しくなる。

「意外だったのは戦術殻たちの方だね。あの子たちも自分達から協力したいって言って来てたんだよね？」

「どうやら二人が彼らに自慢したみたいで、それで自分達も何かやりたいって言い出したんです」

「おかしいなそんな判断機能はついていないはずなんだけど」

戦術殻の思わぬ行動にジョルジュは首を傾げる。

「エリカ先生が人の言葉を喋れるように改造してから、好奇心旺盛になったと聞いていますよ」

「それにしたってねえ……」

納得がいけないとジョルジュはしきりに首を傾げる。

「……………でも、これでクロウと向き合えるのかな」

ジョルジュは教室の中で駆動しているオーブメントを眺めてぼつりと呟く。

「ジョルジュ先輩」

物思いに耽るジョルジュにリインは何と声を掛けて良いのか迷う。

クロウ・アームブラストとはあまり接点もなく、不真面目な先輩だというのがリインの印象でしかない。

もつとも不真面目と言っても、人となりは良く表向きでは死んだことになっている彼を悼んだ先輩達が多い。

そんな彼が何故テロリストになったのか——とは疑問に思わない。リインも一度復讐の焰に身を委ねようとしたことがあるからこそ分かる。

「復讐は理屈ではないんです。ただそれでも、守らなきゃいけない一線があるんだと俺は思います」

「リイン君……はは、ごめんね。せつかくの学院祭だって言うのに変なことを言ってる」

「いえ、俺の方こそ生意気を言ってしまったって、すみません……」

でもクロウ先輩に届くとすればそれは俺の声ではなく、先輩達の声だと俺は思います」

「そうだね、届くと良いな……おや？」

廊下の方から聞こえて来た喧騒にジオルジュは首を傾げる。

「この気配は……」

近付いて来る覚えのある気配にリインもまた意外そうな顔をする。

賑わう来場者たちは彼女のために自然と道を開け、そのまま彼女を先頭に引き連れてやってくる様は異様の一言に尽きるがそれだけのカリスマがあると納得させられる。

「これが噂の『テイルフィング』という機神か」

「来ていたんですかオーレリア將軍」

「ああ、何とか今日までに仕事を纏めてな……」

一目《灰の騎神》を見物するつもりで来たのだが」

「申し訳ありません。ヴァリマールは現在修復中で展示することはできませんでした……」

でも技術棟の裏の広場でこの『テイルフィング』の展示しています。十二時にはラウラが殺陣を披露するので是非見て行ってください」

「うむ、妹弟子の晴れ舞台というわけか。後で見せてもらうとして、シユバルツァー」

「申し訳ありません。今日の分の整理券の配布は終了しています」

機先を制するようにリインはオーレリアの申し出に対して頭を下げた。

「え……いや……」

当てが外れたオーレリアは珍しく狼狽えてリインと今暗黒竜と戦っているティルフィングが映るモニターを交互に見据える。

「整理券はないのか？」

「はい。伯爵でも、皇子だろうと特別扱いはできません」

「……そうか」

しよんぼりと肩を落とすオーレリアにリインは安堵する。

帝国貴族だから、そして戦うことに見境がない故に、今並んでいる人達の整理券を譲ってもらおうと言い出さないと警戒したが、杞憂で済んだようだった。

故に――

「ただ一般参加はできませんが、特別枠に関しては先方次第ではオーレリア将軍に参加してもらっても構いませんよ」

「何!？」

その提案に勢いよく顔を上げたオーレリアはリインに詰め寄る。

「それはどういう意味だ？」

「ラウラの殺陣の後に、ゲストとしてヴィクター・アルゼイド子爵に乗ってもらう予定です……」

子爵閣下はマテウス卿に声を掛けて来るとは言っていました。他に参加者がいなかったらⅦ組から――」

「シユバルツァー。師たちは何処に？」

がしりと肩を掴みオーレリアはリインにさらに詰め寄る。

「えつとヴィクター卿なら先程ラウラと一緒にギムナジウムの方に――」

「ギムナジウムだな。了解した」

最後まで聞かずにオーレリアは踵を返し、共闘の許可を得るために親子水入らずの場に突撃しに行くのだった。

「あ、あれが《黄金の羅刹》？　なんか聞いていた印象とは随分と違うね」

「ええ、そうですね」

ジョルジュの戸惑いにリインは深く同意した。

132話 士官学院祭Ⅱ

「《緋の騎神》テストⅡロツサか……」

士官学院祭の一日目が終わり、クリスは日課になった《テストⅡロツサ》を見上げる。

話しかけるでもなく、何かをするわけでもなくただ見上げる。

「思えば遠い所まで来たんだな」

一年前の自分は果たして今の自分を想像することはできただろうか。

一年早めたツールズ士官学院への進学はまさにクリスが望んだ刺激的な学院生活だった。

最初はラインに監督されていた料理も今ではちゃんと一人で作れるようになった。

料理だけではない、離宮に住んでいた頃は使用人に任せていた雑事も全て一人でできるようになった。

「僕の願いは叶ったはずなのに……」

兄の話を聞いて憧れていたラインと一緒に戦う事もできた。

まだ背中を預けてもらえる程ではないが、それでも一步一步強くなれている実感は充実感としてクリスの自信になっていた。

「《相克》と《黄昏》か……」

二年後に訪れる災厄。

その中心にいられる権利が目の前にあるというのに思っていた以上に高揚していないことにクリスは戸惑う。

「オズボーン宰相にアリアンロードさん、猟兵王、ルーファスさん、そしてラインさん……あとついでにクロウ先輩」

並べた戦うべき相手はどの人物もクリスよりも格上。

片腕を負傷しているルーファスやクロウならまだ戦いになるかもしれないが、他の四人に関してはどうしようもない。

そもそもラインはイオやマクバーンが操った《テストⅡロツサ》に

勝っている。

その時点で自分に課せられた条件は彼女たちよりもうまく《緋》を使いこなせなければ勝機さえないという悪条件。

「『雲の機神』は僕の味方作りに使って良いって言われたけど……無茶振りが過ぎますよ」

アリアンロードの対決において、味方がいることが自分の強みだと豪語したがクラスメイト達を最前線に付き合わせることに躊躇いを覚える。

「リインさんは僕達を『礎』に……踏み台にするつもりなんだろうな」

別にそのことに屈辱を感じているわけではないのにクリスの胸中には言い知れない不快感が湧き上がる。

その気持ちは何なのか分からずクリスはリインが全てを明かしてくれた日から、何度も《緋》の前で自問自答を繰り返していたが答えは未だに出ない。

「クリスさん？」

「——エマ？」

呼びかけに振り返るとそこにはエマが立っていた。

「どうしたんですか？ 明日の本番に向けて寮で最後の打ち合わせをするはずでしたよね？」

「ごめん、もうそんな時間か……」

意外に時間が経っていたことに驚き、クリスは踵を返す。

「緋の騎神……テストⅡロツサ」

「エマ？」

しかし寮に戻ろうと歩き出したクリスに対して、エマが《緋》を見上げてその名を呟く。

「クリスさんは私達がテイルフィングのテストをしている時、いつも彼を見上げていましたよね？」

もしかして起動者になるつもりですか？」

「……………」

その問いにクリスは沈黙を返してエマと並んでもう一度《緋》を見

上げる。

「消去法で考えれば僕が適任だと思ってる……」

エマは《黄昏》のことをどこまで教えてもらっているの?」

「大まかなことはだいたい教えてもらいました」

それなら良いかと、クリスは自分の胸の内を吐露する。

「《緋》はアルノールの血筋を起動者を選ぶ……」

僕以外だとアルフィンか兄上、それから父上が候補なんだろうね

……

アルフィンは女の子だから論外だと思うし、兄上はきつと《黄昏》の先の世界に必要な人だと思うから、僕が適任のはずだ」

《黄昏》の後の闘争が支配する世界というのがどんなものかは想像もつかない。

それでもオズボーン宰相が主導となるなら帝国だけは安泰だろうという信頼もある。

逆にリインが勝てば、帝国から偉大な《鉄血宰相》という柱が失われた時の混乱を考えると、旧体の体制の象徴にしかならない自分よりも新しい風の象徴として認知され始めているオリヴァルトこそが皇帝になるべきだとクリスは考える。

「クリスさん、それはもしかして——」

「ああ、別に死んでも良いと思ってるわけじゃないよ……」

だけどリインさんが安全装置を作っていてくれたとしても最前線に立つならそれくらいの覚悟は必要だって話さ」

「なら良いんですけど……」

「僕は……今年のトールズ士官学院に入学できて本当に良かったと思っているんだ」

命の危機を本気で感じた修羅場を何度も体験したが、それでもやはりクリスは振り返るとそう思う。

皇宮では知ることができなかつた生の情報はとても刺激的で様々な苦悩に頭を悩まされた。

「貴族派と革新派の溝が深いことを改めて知ったし、オズボーン宰相がただ強いだけじゃなく、怖い人なんだってことも知ることができた

……

何よりⅦ組と言う仲間たちとの日々は本当に夢のようだった」

現実を知ったが、同時に未来への希望もそこにはある。

ユーシスとマキアスがそうであったように、時間は掛かるかもしれないが貴族派と革新派が仲良くできるのだとクリスは思う。

「エマは二年後……いやトールズを卒業したらどうするつもりなの？」

「どうって……」

クリスの質問にエマは口ごもる。

「ローゼリアさんはリインさんと一緒に《黒》と戦うつもりみたいだから、聞いておくべきかなって」

「私は……お婆ちゃんには卒業した後は里に戻って万が一に備えておくように言われています」

「もしかして次代の長になるとか、そういうの？」

「はい……」

クリスの言葉にエマは頷く。

「それが必要なのは分かっているんですけど、正直実感は湧きません。

何よりお婆ちゃんがいなくなる事なんて考えたくもないんです」

「うん、それは凄く分かる」

帝国と魔女。

立場は違うが、次代を期待される重みに気後れするエマの気持ちはクリスも良く分かる。

「そう言えば、エマとこうして落ち着いて話をするのはもしかして初めてかな？」

「言われてみたらそうですね。クリスさんも起動者候補として最有力だったのに」

クリスの言葉にエマはどれだけリインのことしか見ていなかったことに恥じる。

「実はお婆ちゃんからは《テスタ||ロツサ》の導き手にならないかとも提案はされているんです」

「導き手？」

聞き慣れない言葉にクリスは首を傾げる。

「魔女は選定された《起動者》を正しい方向へ導くことを使命にしていたんです……使命にしていたんですけど……」

「うん、それ以上は言わなくて良いよ」

二度繰り返し返すエマの悲壮感にクリスはそれ以上の言及を避ける。

「でもエマと一緒に戦ってくれるなら心強いかも」

「クリスさん？」

「ユーシスは卒業したらアルバレア家を継ぐことになるだろうし、ラウラだってアルゼイド流の後継者なんだ……」

他のみんなだってそれぞれ進路を考えているだろうから、《黄昏》のために戦ってくれとは言えないよ」

今はテストパイロットとして協力してくれていても、それはまだ学生だから。

生きるか死ぬかの戦いに、クラスメイトだったからというだけで付き合っただけではない。

その点に関してはクリスもリインの気持ちは理解できる。

世界を巻き込む事件に無関係も何もないかもしれないが、本業の片手間で関われるようなものではない。

「一人当てはあるんだけど、エリオットやアンゼリカ先輩達を最後まで付き合わせるの少し躊躇うからね」

復讐を目的としているエリオットはそれこそ獵兵王を仮に倒せたとして、そこで戦意を喪失させてもらっては困る。

アンゼリカやトワ達、先輩陣もクロウとの決着の仕方次第でどう転ぶか分からない。

「まあシャーリイさんはミラを積みあげ、負け戦でも付き合ってくれるかもしれないけどさ」

「でもそれはリインさんと……お婆ちゃんたちと戦わなければいけないですよね」

「……………うん」

エマが絞り出した不安の言葉をクリスは誤魔化すことなく肯定する。

結局のところはそこなので、《相克》において果たして自分は本気でリインやオズボーンと言った憧れた存在に剣を向けられるのか。

「いや、もうそんなことは言ってられないのか」

《黒》は1200年。アリアンロードは250年。

それだけの時間を二年後に積み重ねている存在達に対して、リインでさえ出遅れていると焦りを感じている。

だと言うのに未だに尻込みしてしまっている自分にクリスは自嘲する。

「二年もあれば覚悟は決められるかな?」

どちらにしても家族の誰かが《緋》の起動者になることは避けられないと言うなら、せめて自分の意志でそれを引き受けようとクリスは決める。

「エマ……」

「な、何ですか?」

「僕の『導き手』となつて一緒に戦つて欲しい」

「それは……」

「うん、《テストタロツサ》の起動者になるって決めて気付いたよ……」

僕はリインさんと肩を並べて一緒に戦いたかった。でもそれと同じくらいに今はこう思う……

リインさんを倒して僕が《黒》を倒す。大それたことを言っているけど、きつとリインさんが僕に望んでいることはそういうことなんだと思う」

もちろんリインだけではなく他にも倒すべき強敵は多い。

しかし最初から負けると思つて戦つてはいけないのだとクリスは知っている。

「私は……」

「だいたいリインさんも酷いと思わない?」

リインさんだつて余裕はないはずなのに、何だかんだで振り返つて僕たちのことを気遣つてくるとか……

そりゃあ僕はまだ全然不甲斐ないけど、必死に追い付こうとしているんだから、そのまま先に行つてくれれば良いのに」

道を定めたら詰まっていた言葉が出てくる。

巡り合わせによつてリインと一緒に戦う事はできないが、それでも彼の足枷になることも、ただの雑魚と簡単にあしらわれて「礎」にもなれないことをクリスは望まない。

憧れた背中に追い付き、追い越してやると無理矢理自分を奮い立たせる。

「……………そういう風に考えられるクリスさんが羨ましいです」

「僕のはただの子供の我儘だよ」

自嘲するクリスがエマにはむしろ眩しかった。

そこまでエマは楽天的に《相克》を受け入れることはできない。

顔見知りの仲間たちが命を懸けて争う。

そのどちらかに加担するのには抵抗がある。

何よりその《黄昏》の戦場にはどの勢力にもエマの家族が関わっている。

ローゼリアにヴィータ、そして母の名を持つ少女。

「もちろん無理強いをするつもりはないよ。でも僕達は《黄昏》から逃げられない」

「っ——」

クリスの指摘にエマは息を呑む。

「残念だけどそれじゃあ他を当たるかな…………オーレリア將軍は乗ってくれるかもしれないし」

否定的なエマにクリスは軽い調子で引き下がる。

「クリスさんは怖くないんですか？」

「怖いよ。でもそれがアルノールの責務と呪いなら、僕はそこから逃げられるわけにはいかないんだ」

「…………クリスさんは立派ですね。リインさんもそうですが、とても私には真似できそうにありません」

「そうかな？ エマだってローゼリアさんの反対を押し切ってツールズに進学したんでしょ？」

「だったらエマの中にも譲れない何かはちゃんとあると思うけど」「私の譲れないもの…………ああ…………」

言われて振り返り、エマは自分の中の根拠を思い出す。

何故ローゼリアの指示を無視してトールズに進学したのか。

「私はただ置いて行かれたくなかったただけなんです」

帰って来れなくなるとローゼリアが語った母。

里を何も言わずに出て行った姉。

そして、使命を果たすために災厄に立ち向かおうとしている祖母。

みんなエマを残して行ってしまふ。

それが嫌で、エマはヴィータを追い駆け、ローゼリアを取って行くとするリインを認められなかった。

「あ……………ああっ！」

「エ、エマッ!？」

突然頭を抱えて叫び出したエマにクリスは驚く。

「それじゃあ私はまるでシスコンでマザコンみたいじゃないですか?!？」

「はは、何言っているんだい？」

エマはどこからどう見てもヴィータさん大好きっ！ ローゼリアさん大好きって感じだったじゃ——いひやいいひやい」

朗らかに笑うクリスの頬をエマは引っ張って黙らせ、こほんと仕切り直す。

「本当は魔女の使命とかどうでも良かったのかもしれませんが……」

ただ姉さんがいて、お婆ちゃんが、セリーヌが、里のみんながいてくれるだけで私は…………」

血筋は確かでも幼い頃は街で育ったエマにとっては魔女の使命よりも家族の方が大事だった。

それをヴィータやローゼリアには見透かされていたのかもしれない。

だから常に彼女たちはエマに対して優しく、今は戦いから遠ざけようと突き放そうとしている。

欺瞞を捨てて向き合えば、自分がどれだけ二人から愛されているのかが分かる。

「今もそう思っている。」

「それは……」

クリスの問い掛けにエマは返事を窮する。

最初こそ一線を引いていたが、半年に及ぶ学院生活はエマにとって掛け替えのないものになっていった。

「ふふ、その反応だけで十分だよ」

その内心を見透かしたクリスの物言いにエマは頬を膨らませることしかできなかった。

「僕としてはせっかく繋がった縁なんだから、どんな形で《黄昏》が終わってもエマとは仲良くしたいと思っっているよ」

「クリスさん……何だか言動がリインさんに似て来ましたね」

「はは、それは光栄だな」

褒めてないのに嬉しそうに笑うクリスにエマはため息を吐く。

「クリスさん、《導き手》についてですが、はつきりと断らせてもらいます」

「ええ、今の話の流れで？」

決意を新たにしたエマの顔にクリスは肩透かしをくらう。

「はい、私は《導き手》にはなれないって痛感しましたから。それに……」

エマは《緋》を見上げて続ける。

「何が正しくて何が間違っているのか、それを決められる程に私は賢くもなければ、偉くありません……」

だから《導き手》ではなく、Ⅶ組の仲間としてクリスさんの戦いに協力させてください……」

つて言ってもリインさんの《テイルフィング》に頼らないといけないのはちよつと締まらないですけど」

苦笑するエマにクリスも同じ笑みを浮かべる。

「今は先にいる人達の助けを借りないと立てない僕達だけど、だからこそリインさんやローゼリアさんがせめて安心できるくらいに強くなろう」

そう言つてクリスはエマに握手を求めるように手を差し出す。

「……はい」

エマは静かに頷いてその手を取って握手を交わす。

VII組に対して、どこかで一線を引いて真の意味で通じ合えないと思っていた隔絶が取り払われるような感覚に満たされ――

『汝ノ覚悟、見セテモラッタ』

不意にクリスでもエマでもない声はその場に響く。

『コレヨリ《緋ノ試シ》ヲ執行スル』

「この声まさか――」

「ちよつと待つて、テスト――」

制止の声は最後まで紡げず、空間が歪み二人は異界へと取り込まれた。

そして旧校舎の鐘が鳴り響く。

133話 士官学院祭Ⅲ

士官学院祭二日目。

「ふあ……」

講堂に導力楽器を運び込み、午後の演奏会の準備が終わったクリスは欠伸を噛み殺す。

「なんだだらしない。そんな調子で本番は大丈夫なのか？」

それをマキアスが見咎めた。

「リインのお説教がそんなに長かったわけじゃないよね？」

エリオットは窺うようにリインに視線を送る。

「いや、日付が変わる頃には二人とも解放したけど……」

じろりと睨むリインにクリスとエマは身を竦ませる。

「うう……あれは《テストタロツサ》が勝手にやったことなんですよ」「始まってしまったからには試練を受けないわけにはいかなかったんです」

「だからって二人だけで進むことはないはずだ。外に脱出するとか、その場で待つ選択肢もあっただろ」

「はい……」

「その通りです」

リインの指摘に二人は仲良く肩を落とす。

《緋の試練》が始まり、覚悟も決めたばかりだったこともありクリスはやる気を全開にして異界化した旧校舎に挑戦した。

エマも同じように自分の行く先を定めたこともあり、クリスと共に前に進むことを選んだ。

広大なダンジョンを走破して辿り着いた先に待ち構えていた《ロア・エレボニウス》との戦い。

拮抗した状況を打破したのは、二人の後を追い駆けて来てくれたVII組だった。

そして仲間たちのおかげで無事に試練を乗り越えることができた。

「あれ？　そういえば聞きそびれていたんですけどリインさんはどうして中に入って来なかつたんですか？」

ふと思いついてクリスが尋ねる。

「むう……」

その質問にリインは顔をしかめ、他のⅦ組メンバーは吹き出すのを堪えるように身を震わせる。

「実はさ——」

「シャーリイ」

にやにやと笑いシャーリイはリインに窘められるのを無視して説明する。

「旧校舎の鐘が鳴って、その一帯が光の壁に覆い尽くされてさ……」

『導力停止現象』を使ったら異空間に二人を置き去りにすることになるって話だったんだけど」

「ぶっ……」

「くすくす」

笑いを堪え切れていないⅦ組にリインはため息を吐く。

「えつと……」

「いったい何が？」

「自信満々に二人を連れて帰るって言って、結界に弾かれたんだよ。それも顔から——あはは！」

「リインさん」

「笑いたければ笑え」

一生の不覚と言わんばかりにリインは吐き捨てる。

「そ、そんなことはしませんけど『テストⅡロツサ』にきつく当たっていたのはそれが原因ですか？」

「………そんなことはない」

クリスの問いにリインは首を横に振る。

「それより、改めてになるが『テストⅡロツサ』に乗る覚悟はできたんだな」

「はい……」

たくさん悩んで、たくさん考えて、でも最初から誰かがやらなければ

思わせぶりなガイウスは首を横に振る。

「それはそうと……《鉄血宰相》は本当に来るのか？」

奇妙な沈黙の間にユーシスがマキアスに質問を投げかける。

「ああ、今朝父さんから連絡があつて、オズボーン宰相も同行するつて」

「クロスベルの独立宣言に加えて、独立を認めなければIBCが預かる国外資産を凍結という話があるのにか？」

「むしろ帝国政府はそれをクロスベルの強硬姿勢による自爆だつて判断したみたいだ」

「それはどういうこと？」

フィーの質問にマキアスは半分は自分の憶測だと付け加えて続ける。

「今回の独立宣言は前の通商会議に出席したりベールやレミフェリア、特に不戦条約を二つの大国と結ばせたりベールの顔を潰すようなものだ……」

それに資産を人質にした脅迫。そんな独立の仕方をどの国だつて認めるはずがない」

「でも、だから判んないんだよねー」

マキアスの説明にミリアムが頷く。

「このまま帝国と共和国を怒らせたら自治州自体が消えちやいそうなのに」

「それも覚悟の上、それとも別の狙いがあるのか……」

「別の狙い？」

唸るガイウスにクリスが首を傾げる。

「あ、もしかして帝国と共和国に暴走の責任を押し付けるつもりじゃないの？ 宗主国の管理責任みたいな感じで」

「要するに冤罪を吹っ掛けるつてことね……リインはどう思う？」

シャーリーの案にアリサはなるほどと頷き、黙っているリインに質問を投げかける。

「リイン？」

「……………あ、いや俺にはクロスベルが何を考えているのは想像はで

きないな」

「リインでも?」

いつも明確な意見を持っているリインの意外な答えにアリサは首を傾げる。

「それよりマキアス。本当にオズボーン宰相は来るのか?」

「ああ、それは間違いないらしい」

「となると兄上たちも来るのかな?」

「くっ——」

リインはクリスの呟きに齒噛みする。

「あと気になるのはリベールから来るクローディア殿下のことだが、リインは何か聞いてないのか?」

「クロスベルの宣言があつたからな。もしかしたら中止になつたかもしれないけど、特に連絡は来てないな」

律儀にもクロスベルで助けられた御礼を言いに来る名目でオリヴァルトの招待を受けたらしいが、この時勢ではどうなるか分かつたものではない。

「午後からオリヴァルト殿下達が来るそうだから、そこで聞けば良いだろう」

考えても仕方がないことだと、リインは割り切る。

『——学院生の皆さん。そして来場者の皆様方。大変長らくお待たせしました……』

これよりツールズ士官学院・学院祭二日目を開催します!」

講堂にも流れたトワ会長の学院祭の開始を告げる放送が流れる。

「どうやら時間みたいだな……本当に今日の受付は二人に頼んで良いのか?」

リインはクリスとアリサに振り返り、確認を取る。

歴史研究同好会の出し物はリインだけで回していたが、今日はクリスとアリサの二人が受け持ってくれると提案してくれた。

「はい、僕は昨日十分に学院祭を堪能しましたから」

「そうそう、エリゼさんも来るんだからちゃんとエスコートして上げなさいよ」

「だけど、それを言ったらアリサだってイリーナさんやグエンさんが来ることになってるだろう？」

「良いのよ。どうせあの人は……」

リインの指摘にアリサは不貞腐れたようにそっぽを向いて愚痴をこぼす。

「あはは……ともかく最後まで気を抜かずに頑張ろう」

変わらないアリサの態度にクリスは苦笑いを浮かべ、Ⅶ組のみんなに宣言するのだった。

・＊

「さてと……エリゼが来るのは10時か……まだ少し時間がありそうだな」

解散したⅦ組を見送り、リインは時間を確認して考える。

「エリゼが来る前に一通り見て回るか」

昨日は自分の出し物を見て回る余裕がなかった祭りをエリゼをエスコートするためにも下調べをしようという講堂が出る。

「あれ……イオ？ それにローゼリアさんも？」

そこには難しい顔をして対面する二人の幼子がいた。

「お……う？ リイン」

「ふむ」

自分達を呼ぶ声に二人は振り返る。

「どうしたんですか二人とも？」

深刻そうな顔をしていた二人にリインもまた緊張の糸を引き締め尋ねる。

「うむ……実はのう」

「ちよつと重大な問題に直面しちゃったんだよね」

「それはいったい……？」

「氷菓《花園》にするか、バナラジェラートにするか、それともレモンジェラートにするか考えておったのだ……」

普段あまりミラを持ち歩かないから、食べる物を厳選せねばならな

いのだ」

「うん……？」

真面目な顔から出て来たローゼリアの言葉にリインは首を傾げる。

「私は昨日、食べ過ぎてミラがもうないんだよね。十連ステーキ串……はあ……」

昨日の余韻を思い出してため息を吐くイオ。

「このはらぺこ聖獣たちは……」

盛大な肩透かしを喰らったリインは呆れるようにため息を吐く。

もつともクロスベル問題などで張り詰めていたリインは二人の脳天気さに毒気を抜かれたように苦笑する。

「そういうイオには昨日の御礼をちゃんとしていなかったな」

「お……？」

「ローゼリアさんも『雲』の分割でかなり頑張ってくれたそうですね……」

お詫びと言うわけじゃないですけど、二人で使ってください」

リインは財布から一万ミラの紙幣を取り出して、二人に差し出す。

「いやいや、昨日お祭り用のお小遣いはちゃんともらってるから、そんな悪いよ」

と、言いながらもイオは差し出されたミラに目が釘付けになっていた。

「う、うむ。別に妾も別に恵んで欲しいというわけではないんじゃないぞ」
「それじゃありませんか？」

見栄を張る二人にリインは差し出した紙幣を戻す素振りをして――

「いるっ！」

「うむ、労働の対価なのだから正当な報酬じゃな」

臨時収入を得た二人はテンションを上げる。

「ふふふ、十連ステーキ串にあらびきソーセージ、ターキーレッグ……
じゅるり」

「くくく、これだけあればいつそ八段重ねのジェラートタワーに挑戦するのもありか」

「二人で仲良く使ってくださいね……」

まあ、楽しみ方をとやかく言うつもりはありませんが、ローゼリアさん朝から八段重ねのアイスはお腹を壊しますよ」

「ふふん、聖獣である妾は腹痛などとは無縁なのじゃ」

誇らしげに胸を張るローゼリアにリインは言いようのない不安を感じる。

だが、見た目に反してちゃんと大人なのだから大丈夫だとリインはそれ以上追及はしなかった。

「お婆ちゃんっ！」

「む、いかん……ではなリイン」

「それじゃあ、また後でね」

何処からともなく聞こえて来たエマの声にローゼリアは逃げ出し、イオもそれに続く。

そして少し遅れてリインの下にエマが駆け寄って来る。

「リインさん、お婆ちゃんがさつきここにいませんでしたか？」

「ああ、さつきあっちの方に走って行ったけど」

口止めされていないので素直にリインはローゼリア達が走り去って行った方をエマに教える。

「ああ、もう……」

「何でそんなに怒っているんだエマ？」

憤るエマにリインは尋ねる。

「こんなお祭りにお婆ちゃんを自由にさせてたら、ミラがある分だけ食べ物に使うに決まってるじゃないですか……」

ただでさえ偏食だって言うのに……」

「えっと……」

祭りの軍資金を渡したのはまずかったかと考えて、リインは黙っていることにする。

「とにかく私はお婆ちゃんを追い駆けます……」

偏食を窘めることもですが、改めてお婆ちゃんにはクリスマスさんと一緒に戦うと決めたことを報告しないとイケませんから」

そう言っつてエマはその場を駆け出す。が、何を思ったのかその足を

止めて振り返る。

「エマ？」

「リインさん、これまでたくさんの非礼、本当に申し訳ありませんでした」

そう言つてエマは深々と頭を下げた。

「いきなり何を？」

「クリスさんにも話したんですが、私はリインさんやⅦ組の皆さんを義姉さんに追い付くために利用しようとしていたんです」

「そのことか……俺もそうだけど、みんなだつて気にしていないはずだ」

「それでもちゃんと謝つておかないといけないって思つたんです」

エマはどこか後ろめたい、自嘲を浮かべて続ける。

「もしもリインさんが《騎神》のことを何も知らなかったなら……」

私はきつと最後まで何も語らず、義姉さんに追い付くために利用していたでしょう」

ローゼリアの指示を無視してツールズ士官学院に入学し、触り程度の知識を勿体付けて喋らない秘密主義の自分の姿が容易に思い浮かぶ。

そして戦う理由のない起動者をそれとなく《蒼》と戦わせるように誘導していただろう。

「だから、ごめんなさい」

「……反省しているなら俺から言うことはないさ」

気にする必要はないと言つても無駄なので、リインはエマの謝罪を受け入れる。

「その分クリスのことを支えて上げてくれ。エマが付いてくれるなら俺も安心だ」

「はい……つて言つてもリインさんから借りた“力”でリインさんと戦うつて言うことに抵抗があるんですけど」

バツが悪そうに苦笑するエマにつられてリインも笑う。

「それは気にしなくて良いよ。それよりローゼリアさんを追わなくて良いのか？」

「あ、はい……それでは失礼しますリインさん」

リインの指摘にエマははっと思いついて駆け出した。

「……………平和だな」

その背中にリインは小さく呟いくのだった。

・*

「ううむ……………」

人気のないグラウンドの倉庫の影に隠れてリインは唸る。

「これは予想外だったな」

思い出すのは散策を始めたところで浴びた周囲からの注目。

どこに行っても来場者たちの視線が集まり、果てには写真やサインを求められ他のクラスの出し物を見て回る余裕はなかった。

「これは由々しき問題だな」

もうすぐエリゼが来る。

彼女と学院祭を回ることを邪魔されたくないリインにとって、それは大きな問題だった。

「……………仕方がないか」

リインは気が進まないが交渉するために気配を消して、職員室へと向かった。

……………

……………

……………

「エリゼ、待たせたな」

正門に立って待ち人を待っていたエリゼは平静を装って振り返る。

「リイン兄さ……………ま……………?」

振り返ったそこには白髪に灼眼、真紅の制服を着た兄はいなかった。

代わりにいるのは黒くて長い髪の中性的な女性。

兄のクラスメイトのラウラに似た凛々しきを持つその女性に思わずエリゼは目と意識を奪われて呆然と立ち尽くす。

「どうしたんだエリゼ？」

「その声……まさか兄様!？」

女性の口から聞こえて来て慣れ親しんだ声にエリゼは我に返って驚く。

「はは、エリゼが分からないなら変装は成功かな？」

驚く妹にリインは笑い掛ける。

アンゼリカがとある目的で用意した黒髪のウィッグ。それと私服。あとは立ち姿や歩き方などを少し女性的にするだけで、先程のリイン・シユバルツァーへの注目を消すことに成功した。

「成功って、兄様その格好はどういうことですか!？」

「そんなにおかしいかな？ 普段使っている私服なんだけど？」

「い、いえ……格好はおかしくはないので……」

一目見た瞬間、女性かと思ったが改めて見れば服装は男物。

せいぜい髪が長いくらいが女性的に見える要素なのに、それだけで女性だと兄を見違えてしまったことにエリゼは困惑する。

「その髪はいつたい？」

白髪に染まってしまった黒髪が元に戻ったのかとエリゼは話を逸らすように尋ねる。

「これはウィッグだよ。変装をしておかないとすぐに人が集まって学院祭を落ち着いて回ることができそうになかったから」

「まあリイン兄様は今時の人ですから、そうなってしまってもおかしくはないのですが……」

リインの言い分にエリゼは動悸を落ち着かせながら納得する。

「あの、兄様。そこまでしていただかなくても私は一人でも——」

「随分賑わっているわね」

「やっと着いたっ！ すーちゃん、れーちゃん、早く行こうっ！」

「落ち着けナーディア。まずはリインさんに報告だろ」

「そうです。お祭りに参加するならその後にすべきかと思えます」

エリゼの言葉を掻き消すように来場者の四人の子供がトールズ

正門を潜った。

「あら？ 貴女はリインの……」

「もしかしてれーちゃんを知り合い？」

エリゼを見つけたレンは足を止め、ナーディアとスウィンもそれに
つられて足を止める。

「レンちゃん……」

顔見知りの名前をエリゼも呟いて向き直る。

「こんなところで何を——って聞くまでもないわね。リインと待ち合
わせかしら？」

「は、はい」

「れーちゃん、この人は？」

「エリゼ・シユバルツァー。リインの義理の妹よ」

「へえ……リインお兄ちゃんの」

「そう言えば家族構成で妹がいるって話だったな」

「私も資料で確認したことがあります……あれ？」

レンの紹介にナーディアとスウィンは納得したと領き、アルティナ
は既視感を覚えて首を傾げる。

「……………リイン……お兄ちゃん？」

そしてナーディアが漏らした呼称をエリゼは繰り返し、言いようの
ないプレッシャーがその場に満ちる。

「おおっ!」

「何だ!」

「っ……………」

「ふふ、ブラコンは相変わらずみたいね。ところでそっちはリンよね。
随分と大きく……あら？」

レンだけは余裕の笑みを浮かべ、エリゼの隣にいる女性を見て首を
傾げる。

「四人共お帰り。怪我がなくて何よりだ」

「え…………？」

「その声はまさか……」

「もしかしてリイン？」

「……やはり……」

リンに似た女性からの突然の労いの言葉。

しかし、発せられた声は彼女ものではなかったことに三人は先程のエリゼと同じように目を丸くする。

「ああ、俺が出歩くとそれだけで騒がしくなるから少しだけ変装をな」

「あー確かに今、リインお兄ちゃんは有名人だもんねー」

「改めて見ればリインさんで、リンにそっくりだと言えばそっくりなんだけど……」

立ち姿が普段とはまるで違って本当に女性としか思えないな。どこでそんな技術を？」

「とある劇団で女形の振る舞いっていうのを教えてもらったことがあるんだ……」

「こんな風に役に立つとは思わなかったけどな」

「……もしかしたらなーちゃんとすーちゃんよりも変装上手かも？」

「どれだけ多芸なんだよ」

ナーディアとスウィンも雰囲気だけの変装の効果を知っているだけに、リインの振る舞いの完成度に慄かずにはいられない。

「ふふ、それじゃあ今日だけリインお姉ちゃんって呼んだ方が良いのかしら？」

「やめてくれ、そこまでする必要はないから」

茶化すレンにリインは肩を竦め、彼女たちの手荷物を見る。

「その様子だと見つからなかったみたいだな」

「はい、バリアハートからオルデイスに行っただんですが、そこで《至宝》に目をつけた泥棒などと戦うことになりました」

リインの問いにアルティナが頷き、ナーディアが続ける。

「いやー大変だったんだよねー。三代目大泥棒とか盗賊団とかにも目をつけられちゃって、なーちゃんはつかれました、まる」

「なんとかそいつらに勝って取り返したと思っただけど、いつの間にか偽物にすり替えられていたみたいだな」

「その行き先を改めて調べたらクロスベルに送られたみたいだったんだけど、独立宣言のせいでそれ以上の追跡はできなかったの」

「盗品を捌くならクロスベルって言われるくらいだからな。それにしても何だかすつかり魔性のアクセサリーだな」

彼女たちの報告にリインはどうしたものかと唸る。

「とりあえずあーちゃん、あれを」

「人を変な呼称で呼ばないでくださいと何度言わせるんですか?」

ナーディアに促され、アルティナは小さな小箱をリインに差し出した。

「これは?」

「マイスターからは《至宝》の片割れと言えれば分かると言われています」

「ああ……なるほどありがとう」

アルティナから小箱を受け取って、そのままリインは彼女の頭を労う様に撫でる。

「これから君たちはどうするんだ?」

「とりあえず雇い主のルーファスさんにこれまでの経緯を報告だな」

「右に同じです」

「レンはとりあえずティータやおじいさんの所にでも行くつもりよ」

「ああ、今回もお仕事は失敗か……ちよつと自信を無くしそうなーちゃんなのでした、まる」

「はは、君達が頑張ってくれたのはルーファスさんだって分かっているはずさ」

落ち込むナーディアをリインは慰める。

「……ところでリイン、ブルブランのことは聞かないの?」

「あれは別にどうでも良い」

レンの問いにリインは即答する。

「ふふ、リインならそう言うと思ったわ。それじゃあレン達はそろそろ行くわ……」

もっとおしやべりしていたかったけど、エリゼお姉ちゃんの邪魔は良くないもんね」

「ああ、ともかく四人共ありがとう。ああ、そうだ——」

最後にリインは四人にそれぞれ学院祭のためのお小遣いを振る舞

い、彼女たちと別れた。

「すまない、エリゼ。話し込んでしまつて」

「いえ……それは良いんですが」

遠ざかつて行く小さな背中を見送りエリゼは困惑に首を傾げる。

「あの子……アルティナちゃんでしたよね？　彼女は亡くなつたはずでは？」

二年前、家出をした兄に会うために赴いたりべールで会つた少女と同じ顔と名前を持つ少女。

兄が行方不明になつたことと合わせて、彼女も《リベールの異変》の際に亡くなり、ユミルには彼女の遺灰を納めた墓も建てられている。

「ああ、二年前のアルティナとさっきのアルティナは別人だ……」

事情はちよつと複雑だけど……いつかちゃんと説明するよ」

「……………判りました」

曇つたリインの顔にエリゼはそれ以上の追及はやめる。

「それではまずどこに連れて行つてくださるんですか？」

「そうだな。まずはⅡ組がやっている屋内庭園なんかどうだ？　その後俺の同好会の出し物の整理券の時間だから、寄つて行こう」

「兄様の同好会の出し物ですか？　それはどんなものなのでしょう？」

「それは行つてみてからのお楽しみだな」

そう言つてリインは微笑みエリゼの手を取つて歩き出した。

なお変装により別の意味で注目を集めてしまうことにリインはまだ気付いていなかった。

・*

そして時間はあつという間に過ぎる。

「こ、これで勝つたと思うなよっ！」

本校舎の前、何故か頬を赤く染めて捨て台詞を吐いてパトリックは足早に去つて行く。

「何だつたんだ？」

「兄様……」

パトリックの奇行に小首を傾げるリインにエリゼは思わず彼に同情する。

その仕草さえもまるで計算されつくしている振る舞いにエリゼはため息を吐く。

リインの振る舞いにエリゼも何度意識を奪われそうになったことか。

「私は兄様の将来が心配です」

「エリゼ？」

「まさか女装趣味に味をしめたと言い出しませんよね？」

「いや、少し髪を伸ばした程度でそんなことを疑われてもな、髪の長い男だっていないわけじゃないだろ？」

「それは、そうですけど……」

そんなことはエリゼも良く分かっている。

髪を長くして女性的な物腰で振る舞っているが、決して男の部分が消えているわけではない。

むしろ一人の人間に男性と女性が混合されることで、それぞれが際立って相乗効果を生み出している。

これを何と表現して良いのかエリゼは頭を悩ませ、皇女や公爵令嬢が嗜む物語が現実であり得てしまう可能性に更に悩む。

「エリゼ、大丈夫か？」

「……………兄様、男の人同士はダメだと思います」

「エリゼ!？」

突然何を言い出す妹にリインは困惑し——本校舎の鐘が正午を告げた。

「もうこんな時間か……」

そろそろステージの準備にいかないといけないんだが、考えてたらお前を一人にするのもちよつとマズいな……

今日は特に悪い虫が多いからな」

これまでエリゼと共に歩いてきた時の事を思い出してリインは唸る。

「あら？　もしかしてエリゼ、一人？」

そんな彼らに背後から声が掛けられた。

「もしかしてリインさんに振られてしまったんですかエリゼ先輩？」

さらにもう一人。茶化すように言葉が続けられる。

「この声は……」

振り返るとそこにはアルフィンとミルディヌ。

更に鉄道憲兵を始めとした護衛を背後に控えさせたオリヴァルトとオズボーン、リベール王国の王太女のクローディアがそこにいた。

「お久しぶりですエリゼさん」

「姫様……それにクローディア殿下。話には聞いていましたが、クロスベルのせいで来れないかと思っていました」

「そのことについて、帝国の意見を知ることが名目に来ました」

エリゼの疑問にクローディアは答える。

クロスベルの独立宣言に合わせた資産凍結の影響はリベールにも大きな影響を与えることになった。

本来ならこの重要な事件に次期女王であるクローディアの外交は取り止めるべきなのだが、クロスベルの宣言に対する帝国の考えを知ることが名目に送り出された。

「……………」

「やあエリゼ君。その様子だとリイン君はもうステージの準備に行ってしまったのかな？」

「いえ……あの……」

隣のリインを横目にエリゼは気さくに声を掛けて来る皇族と公爵令嬢に何と言って良いか悩む。

「そちらの御婦人はエリゼ君の友達かな？　私は――」

「何を言っているんですかオリヴァルト殿下？」

「へ……？」

見知らぬ女性から出て来た聞き覚えのある声にオリヴァルトは目を丸くする。

「クローディア殿下もお久しぶりです」

リインは恭しく頭を下げる。

「あ……もしかして……」

一度、舞台の上でそれを見たことがあるクローディアがそれに気が、遅れてオリヴァルトもエリゼの隣に立っている者が誰なのか気付く。

「ま、まさか……リイン君？ その髪は？ それにど、どうしてそんな格好を？」

茶化し、賑やかすのを忘れてオリヴァルトは尋ねる。

「制服だと目立ち過ぎて学院祭を回ることができなかつたので教官たちに許可を貰って少し変装を試みただけです……」

別に女装しているわけじゃないですよ」

「少し……いや、確かに髪と制服だけなのだが」

たったそれだけなのに醸し出される色香はいったい何なのだろうかとオリヴァルトは戦慄する。

「凄いですね姫様」

「ええ、これは本格的に女装をさせてみてくださいですね」

「アルカンシエルの時は遠目だったから判りませんでした、近くで見るとちよつと反則ですね」

絶賛する姫たちにエリゼは激しく同意する。

「ふう……これが公の場ではなかったら、今すぐハグをしたいくらいに魅力的だよリイン君」

「やめてください」

一周回って二の足を踏んでしまったオリヴァルトにリインは拳をチラつかせて釘を刺す。

「はは、流石のオズボーン宰相も驚いて言葉も出ないかな？」

オリヴァルトは振り返り、これまで沈黙を保っているオズボーンがどんな顔をしているのか確かめるため振り返る。

「おや………宰相？」

オリヴァルトの声にオズボーンは何も応えない。

常日頃から厳格な態度を崩さず、何事にも動じない鉄血宰相はリインを見据えたまま、それこそ鉄の様に硬直していた。

「オズボーン宰相？」

「……………カーシャ……………」

リンという戦術殻については前情報を得て覚悟はしており、割り切る自信はあった。

しかし、目の前の存在はさしもの鉄血宰相の想像の上を行っていた。

立ち振る舞いの雰囲気。それは一瞬で若き日の頃を思い出させる程の衝撃を彼に与えた。

そして何より、生まれて来ることさえできなかった「娘」の存在を思い出してしまい涙腺が崩壊しそうになる。

「弟君っ！」

自制が崩れそうになった瞬間、護衛団の中から一人の少女が飛び出しリインの手を掴む。

「リボンを付けよう、ねっ！　ねっ！　ねっ！」

「アネラスさん」

「ふふふ、髪を三つ編みにしてリボンで飾ればとつてもかわいくなると思うよ！　みんなもそう思うよね？」

ライバル達を破り、クローディア殿下の護衛役を勝ち取ったアネラスは振り返り、同意を求めぬ。

「うむ、アネラス君の言う通りだね」

「是非、やりましょうアネラスさん」

「うふふ、リインお姉様とお呼びした方がよろしいでしょうか？」

「あ、あはは……………アネラスさん少しは自重してください。でも確かに見てみたいかもしれません」

アネラスの意見にオリヴァルト達は揃って同意する。が――
「やめたまえ遊撃士。その組み合わせは私に効く」

これ以上亡き妻に似せる所業にオズボーンは待ったを掛けるのだった。

・*

『――お待たせしました。まもなく、士官学院一年Ⅶ組のステージが

始まります』

暗くされた講堂が一転して光に染まる。

ライトアップされた舞台上でクリス、アリサ、ガイウス、ラウラ、そしてエリオットの五人の激しい伴奏からステージは始まる。

伴奏によって観客たちの意識を高めたところで舞台の左右からマキアスとユースの二人がデュエットしながら現れ、黄色い声援を浴びる。

マキアスとユース。

学院生の中では犬猿の仲、来場者から見れば平民と貴族の好対照が作り出す歌はそれぞれの良さを際立たせるように場を盛り上げる。

続く二曲目はクリスと、新たに出て来たシャーリイがギターを掻き鳴らしながらの熱唱。

ギターと歌。

一人二役をこなす二人の息の合った合唱と合奏は先のマキアスとユースに負けず劣らずの勢いのある一曲は観客を更に熱狂させる。そして——光を溢れさせていた舞台が突然暗くなる。

これで終わりなのか、観客の中にそんな思考が過った所で舞台にスポットライトの光が灯る。

三曲目はそれまでの激しい演奏と打って変わって静かな曲だった。

「星の在り処……」

舞台の上でスポットライトの光を浴びるのは一人の髪の長い少年。

男子の衣装でも女子の衣装でもない、中性的なローブ。

ピアノと歌だけの静かな演奏。

男とも見える、女とも見える少年はまるでオペラ歌手のように朗々と静謐な歌声を紡ぐ。

上がり過ぎた熱狂を冷ますように響く歌声と、神秘的な振る舞いは観客を問答無用で魅了しその心を奪う。

続く四曲目はⅦ組の中でも年少のフィーとミリアムをバックダンサーとして従えたエマによる軽快な歌。

これまでの三曲とは違う、軽やかな歌とそれに合わせた自由奔放なダンサーが披露され、三曲目で静まった勢いを取り戻すように歓声が

響く。

『これにてⅦ組のステージを終了します』

申請された四曲が終わり、トワはアナウンスを流す。

『皆様、ご静聴ありがとうございます——』

「アンコール!!」

それを遮り、観客の一人が叫んだ。それを皮切りに来場者たちは呼応して言葉を重ねる。

「アンコール！ アンコール！ アンコール！ アンコール！」

『え、えつと……あ——』

興奮覚めやらぬ観客たちにトワが戸惑っていると、横からアンゼリカがマイクを彼女から奪う。

『皆さん、ご声援ありがとうございます。アンコールにお応えして五曲目、行かせてもらおう』

アンゼリカの宣言に歓声上がり、最初から用意していたように音楽が流れ始める。

「もうアンちゃん。仕込んでたでしょ？」

「はは、何のことやら」

頬を膨らませて怒るトワにアンゼリカは笑って惚ける。

そんな彼女の様子にトワは仕方がないなと苦笑し、講堂を見回して——

「っ——アンちゃん、後をお願い！」

トワはアンゼリカに返してもらったばかりのマイクを押し付けて静かに駆け出した。

・*

「……………はっ」

その男は華やかな舞台を鼻で笑って踵を返す。

アンコールの途中にも関わらず男はそのまま講堂を出て行き、そのまま正門へと足を向ける。

「クロウ君っ！」

背後から聞こえて来た己の名を呼ぶ声に男は振り返らずに進む。

「待ってクロウ君っ！ 待っててば！」

足早に歩く男にトワは走って追い駆ける。

追い駆けて来る少女に男は逃げるように正門を抜けて――

「良いの？」

正門の影に彼を待ち構えていたヴィータが尋ねる。

「お前……どの面下げて――」

「貴方の人生なんだから私は口出ししないわ。だけど貴方にとっては偽りの縁だったかもしれないけど、それを本物と思っている人達がいる。あの子みたいに」

「魔女のくせに説教か？」

「ええ、私が言うことじゃないことは分かっているわ……」

でも女として言わせてもらおうなら、今の貴方はかなり最低よ」

「っ――」

これまで全てを受け入れてくれていた女の初めての罵倒に男は狼狽え、それを誤魔化すように声を荒げる。

「だから何だっ?! 俺はもう選んだんだっ！」

捨て台詞を吐いて青年はその場から逃げるように駆け出した。

その背にヴィータはため息を吐く。

「そんなだからカイエン公に良いように使われているのに気付かないのよ」

憐れむように自分が導いた男の背をヴィータは見送るのだった。

・*

「ぐっ――カーシャの姿でカーシャが子守歌に歌っていた《星の在り処》とは……危ういところだった」

134話 士官学院祭Ⅳ

馬術部の出し物が片付けられたグラウンドには二つの篝火が灯る。学院祭の締めとなる後夜祭。

篝火の炎に疲れ切っていた学生たちはようやく学院祭が終わったのだと安堵する。

「ではアルフィン。まずは景気づけと行こうか？」

「ふふ、承知しましたわ」

オリヴァルトの誘いを受けアルフィンは彼の手を取ってダンスを始める。

「さあ諸君たちも参加してくれたまえ」

理事長として、皇族として先陣を切ったオリヴァルトは呆けている生徒達やこの時間まで残っている来場者たちを促す。

「ふふ、無礼講ですからとにかく楽しませよう」

アルフィンの言葉にようやく生徒達が動き出し、来場者たちもそれに続く。

グラウンドの至る所で即席のカップルができて、ダンスを始めていく。

「クローディア殿下、良ければ私と最初に踊って頂けないでしょうか？」

「え……？？」

「弟君!？」

意外な人物の、普段とは違う紳士的な振る舞いにクローディアは目を丸くする。

「リイン君、いったい……？」

「リベールからの賓客を持って成すのは当然でしょう。本来ならオリヴァルト殿下がお相手すべきなのでしょうが、御二人は……」

リインは言葉を濁す。

オリヴァルトとクローディア。

この二人は一度、縁談の話が巷に流れたことがあるだけに過渡な交流は周りに邪推されてしまう。

そこでオリヴァルトの代理に個人的な交流があるリインに白羽の矢が立った。

「殿下をお借りしてもよろしいですか二人とも？」

リインは卒なくクロローディアの護衛であるユリアとアネラスに尋ねる。

「ああ、君なら私達も安心だ」

「くっ……こんなに立派になつて、お姉ちゃんは嬉しいよ」

リインの人柄をよく知っている二人は快く二人を送り出す。

「それではクロローディア殿下、御手を——」

「は、はい……」

リインに促されてクロローディアは初めて見るリインの紳士的な対応に面を喰らいながらエスコートされる。

「……………まったく、随分と女たらしになつたんですねリイン君？」

オリヴァルト達とは別に周囲の注目を浴びながらクロローディアは手を取り合つたリインに文句を呟く。

「人聞きの悪いこと言わないでください」

先程までの紳士的な物腰から一転して情けない顔でため息をつくリインのギャップにクロローディアは思わず笑う。

「リイン君、改めてクロスベルでは助けて頂きありがとうございます
た」

「御礼なら会つた時に聞きましたよ？」

「あれはクロローディアとしてです。今のはクローゼとしての言葉だと思つてください」

「……………あの御礼ならどうしてそんなに凄んでいるんですか？」

「あら、何のことですか？ 私はちゃんと笑顔ですよ」

外交用の笑顔を向けて来るクロローディアにリインは思わず腰が引ける。

しかしダンスのために取つた手の力は思いの外に強く意味はない。
「本当に心配したんですよ」

「で、でも《灰の起動者》は二年後の《黄昏》のために生かされている因果があるから、生き残れる可能性は高かった——」

「リイン君」

「はい、ごめんなさい」

言い訳を撤回してリインは素直に謝罪する。

「ふふ、冗談です。でも本当に自分も大事にしてくださいね。リイン君が死んで悲しむ人は沢山いるんですから」

「クローゼさん」

クローディアの言葉に少しだけ肩の荷が軽くなった気持ちになる。

「それにしても学院祭と言えば初めて会った時を思い出しますね」

「そう言えばクローゼさんと初めて会ったのはジェニス王立学園の学園祭の時でしたね」

「あの日はいろいろあつて後夜祭に出られませんでしたけど……」

ふふ、まさかリイン君とこうして踊る日が来るなんて思っていました」

「俺にとつてあの時の記憶も出来事もできることなら抹消したいんですけど」

正確には学園祭の記憶ではなく、その後の事件の記憶。

徹夜明けのテンションと、勢いに任せた若さの暴走により今でも付き纏う黒歴史を作ってしまった瞬間でもある。

「そうですか？ そう名乗るのに相応しい実績を重ねているような気がしますが、《超——》」

「やめてください」

懇願するようにリインはクローディアの言葉を遮る。

年下の少年らしい反応にクローディアは微笑み、切り出すべき本題に入る。

「実は無理して来たのはクロスベルの問題とは別に個人的に確かめておきたいことがあったんです」

「確かめたいこと？」

「はい、あの時ゲオルグ・ワイスマンはリイン君のことを『雲の至宝』と呼んでいました……」

ライン君の聖痕が《フェンリル》を呑み込んで進化したそうですが、二年後のあの話はどうなったんですか？」

クローディアの質問にラインはまず周囲を確認する。

注目こそ集めているが会話は聞かれていないことを確認して答える。

「どうなるかは結局、その時になってみないと分かりません」

「そうですか……」

「術の全容を解明するために、俺を解剖するなんていうのは本末転倒ですから」

「……………ライン君、リベールに亡命するつもりはありませんか？」

「クローゼさん？」

「帝国に《リベルルーク》に相当する至宝が存在していること、ライン君がその因果の中に囚われてしまっているのは分かっています……」

でもだからってライン君が全部を背負う必要はないはずです」

「……………」

クローディアの指摘にラインは沈黙を返す。

「投げ出して逃げ出しても良いじゃないですか……」

オリヴァルト殿下はライン君の味方かもしれないですが、オズボーン宰相のようにライン君の敵の方が帝国には多過ぎます」

「ありがとうございます、その気持ちだけで十分です」

「……………そういうところは変わってないですね」

最初からその答えを予想していたクローディアはため息を吐いて肩を落とす。

「こればかりは性分ですから」

ラインは微笑を返して続ける。

「確かに俺は最初から起動者を選ばれる因果を持っていました……」

でもヴァリマールに乗ることを拒否することはツールズ士官学院に進学する前にできたんです」

リベールで交わした彼との契約は正式なものではなく、旧校舎で正

式に契約を交わすまでリインは仮の起動者だった。

「俺がこの道を選んだのはノイを受け入れたからとかじやないんです……」

同じ後悔をしないために、あの子や大切な誰かを二度と見殺しにしないために戦うって決めたんです……」

だからこればかりは逃げるわけにはいかないんです」

「ええ、リイン君ならそう言うと思っていました」

そこで一巡目の音楽が終わり、リインとクローディアはどちらともなく離れる。

「でもこれだけは忘れないで下さい。リベールはリイン君の味方だと言う事を」

「……はい」

クローディアの申し出にリインは素直に頷くのがだった。

「さて、ではクローディア殿下。次はボクと踊って頂けるかな？」

「リインさん、よろしければ次はわたくしと踊って頂けないでしょうか？」

最初の相手のダンスを互いに済ませたと言う事で、オリヴァルトがクローディアを誘い、アルフィンがそれに便乗してリインを誘う。

二曲目は互いのパートナーを入れ替える形で踊り――

「ねえねえリイン君。良かったら私のお姉ちゃんと踊ってくれない？」

「ちよつとヴィヴィ」

三曲目には平民クラスの双子の姉妹が姉を押し出す形でダンスの相手に立候補させる。

それを皮切りに音楽が一巡する度に貴族、平民問わずリインをダンスに誘う。

「ぐぬぬ……リイン君、ボクと言う者がありながら」

その光景にオリヴァルトが悔しそうな怨嗟を漏らす。

「くっ……私の小猫ちゃん達が……」

「あはは、まるで去年のアンちゃんみたいだね」

「確かに、つていうか乱闘はやめてよね」

先輩達はその光景に悔しがる者と、懐かしむ者に分かれる。

「やれやれ……まさかここまでの人気とは、いったい誰に似たのだろうな？」

ヴァンダイクが隣に立つて、共に後夜祭を楽しむ生徒達を見守りながらギリアスに話しかける。

「ハハ……シユバルツァー卿の薫陶があればこそでしょう」

苦笑交じりにギリアスはヴァンダイクに返す。

「閣下」

そんな独特は空気のやり取りをする二人に割って入ってクレアが話しかける。

「どうしたのかね？　もしや君も彼と一曲踊りたくなっただかね？」

護衛については、帝国の猛者たちが集う場だ。一曲くらい席を外しても問題はないだろう」

茶化すようにギリアスはクレアにそう提案してみる。

「いえ、リインさんとはユミルで練習相手をしていましたから結構です。それより憲兵隊本部からクロスベルで動きがあったと報告がありました」

「ほう……」

ユミルでの出来事に興味はそそられるが、ギリアスは宰相としての顔でクレアに向き直る。

「私は席を外した方がよろしいかな？」

「いえ、できればヴァンダイク学院長にも聞いて頂きたいと思います。後夜祭を締めくくる時に来場者たちに注意を促して頂きたいですから」

クレアの進言にヴァンダイクは顔をしかめる。

「どうやらただ事ではないようだな」

「はい。本日夕刻、東部国境にある《ガレリア要塞》が壊滅……」

「いえ、原因不明の異変により『消滅』してしまったそうです」

クレアの報告にギリアスとヴァンダイクは息を呑む。

その報告は彼らだけではなく、この場にいる軍関係者や帝国の重鎮たちにもそれぞれ個別の連絡が届き、後夜祭の和やかな空気は物々し

いものへと変わって行く。

ヴァンダイクが後夜祭の締めくくり、来場者たちへの注意を促す。それを尻目にギリアスはクレアを伴い、一人の士官学院生の前に立つ。

「《灰色の騎士》リイン・シユバルツァー。帝国政府を代表して君に要請しよう」

「っ——」

厳格の言葉にリインよりもその周囲にいたⅦ組の仲間たちが気押しされるように息を呑む。

「子細はまだ掴めていないが、ガレリア要塞を『消滅』させたクロスベルの兵器に対抗するために君の力を貸してもらいたい」

その要請にリインは瞳を揺らし、諦めたように肩を落とす、頷いた。「その要請——しかと承りました」

135話 開戦

「ルフィナさん。留守はよろしくお願いします」

学院祭が終わった翌日、早朝の学生寮でリインは見送るルフィナを振り返る。

「ええ、こちらのことは気にせず自分のことに集中してちょうだい」

ナユタを抱えてルフィナは心配ないと応える。

しかし、彼女とは対照的にローゼリアとイオは不安そうに応じる。

「ううむ、やはり妾かイオのどちらかでも同行した方が良いのではないだろうかのう?」

「相手は“幻の至宝”を基にした“人工至宝”なんですよ? いくら改修したからってヴァリマールだけで戦えるの?」

「お気持ちではありますが、二人が出て来た場合“神狼”が出てくる可能性もありますから……」

互いに人工の“至宝”。ぶつかり合って“大崩壊”の再来の危険性がある戦場で聖獣同士の戦いまで始まったらどうなってしまうか

ローゼリアとイオの提案をリインは改めて拒否する。

「しかしだな……」

リインの意見に一理を感じるが、それでもオルデイスで力を貸すことができなかったローゼリアは負い目を感じて渋る。

「確かに“至宝”が関わっている事件ですが、これは人の業が生み出した戦いです……」

《聖獣》に頼ってしまっている場面じゃありません……って言うても前回のクロスベルで手伝ってもらったから説得力はないかな?」

「いや、言いたいことは分かるのだが」

「そもそもあの時のヴァリマールはリインだけだと動かさなかったからねー」

「ええ、ですがとりあえずクロスベル侵攻作戦まで一週間の猶予がもらえましたから、その間に修復と改修はできる計算です」

リインがヴァリマールの修復を盾にオズボーン宰相から与えられ

た時間。

それは言葉通り、リインが戦う準備のための時間ではあるが、同時にクロスベル側に対しての援護でもある。

ルフイナと話し合って詰めたクロスベルの現状は独立に成功してもしなくても詰んでいる、

全ての戦争を否定し、自由な経済活動を保障するクロスベルを盟主とした『ゼムリア大陸諸国連合』なるものを提唱しているが、それは「至宝」の力を背景にした脅迫行為でしかない。

それに賛同する小国や自治州は多いが、肝心の帝国や共和国。それに法国に遊撃士協会さえも敵に回す政策でしかない。

「クロスベルが生きる道は内部の人間がディーター大統領の不正を正し、独立宣言を無効化させることだけでしょうね」

「きつとロイドさん達やクルトも今の状況を分かっているはずですよ。真っ直ぐな眼差しの青年を思い出しリインは彼の働きに期待する。

「レンとレオンハルトさんが一足先にクロスベルに潜入してくれるみたいですから、二人が特務支援課とうまく協力してくれれば「神機」との戦いも回避できるかもしれません……」

だから、きつと大丈夫ですよ」

「随分と信頼しておるのだな？」

「……………ええ」

正直に言えば、通商会議の後や《赤い星座》の襲撃の後に会った彼らを思い出すととてもではないが信頼することはできない。

むしろディーター大統領に同調して国防軍になっている可能性の方が高いかもしれない。

だが欺瞞であってもリインにできるのは彼らを信じることだけだった。

「それじゃあ、そろそろ行きます。列車が来るまでにヴァリマールをトレーラーに載せておかないといけませんから」

「うむ、危険と感じたらすぐに《ARCUS》で知らせるといい」

「いつでも呼んでくれて良いからね」

「ありがとうございます——んっ？」

「あーうー」

何も追及せずに引き下がってくれたローゼリアとイオにリインが頭を下げていると、ルフィナに抱えられたナユタが行かないでと言わんばかりに彼の服を掴む。

「ごめんな。でも俺が行かないと、たくさんさんの命が失われてしまうんだ」

ナユタの手を取り、諭すように語り掛ける。

帝国は総力戦でクロスベルを制圧する気にいる。

そこで多くの血が流れ、流されることは容易に想像できる。

「大丈夫だ。ちゃんと帰って来るから」

「うーうー」

ナユタの頭を優しく撫でて言い聞かせる。

「大丈夫、リインの事はわたしとリンが護るから」

「はい、当然です」

さらにノイとリンが人形の姿でナユタの前に浮き上がり言い聞かせる。

それでようやく納得したのか、ナユタは愚図りながらもリインの服から手を放す。

「それじゃあ、行ってきます」

そうしてリインは第三学生寮を後にした。

・*

学院祭が終わった翌日。

トリストタは祭りの後だと言うのに校門の前には多くの人々が溢れていた。

「凄い人ばかりだな」

「もしかしたら学院祭の時よりも多いのではないだろうか」

屋上からその光景を見下ろしたマキアスとガイウスはその人の多さに驚く。

「昨日の今日だと言うのに、随分と集まったものだ」

ため息を吐いてその呟きにユーシスは頷く。

「それだけみんな不安だつてことだよ」

広げた帝国時報を読み返し、クリスは集まった市民の気持ちを察する。

ガレリア要塞が巨大な球状にくり抜かれた報道写真。

それは大半の帝国人を戦慄させるほどの衝撃だった。

それとほぼ同時にクロスベルが提唱した、クロスベルを盟主とした『ゼムリア大陸諸国連合』の設立。

「周辺の小国や自治州はクロスベルを支持する流れになっているんだけど……」

「ありえない……」

全ての戦争を否定し、自由な経済活動を保障すると言っているが、クロスベルが行ったのは資産凍結の人質と暴力による脅迫に過ぎない……

とてもではないが賛同者の気が知れないな」

「クロスベルの独裁を聞こえの良いものにしたに過ぎないな。フン……自治州風情が随分と調子に乗ったものだ」

ミアムの呟きにマキアスとユーシスは吐き捨てるようにクロスベルを非難する。

「そのせいで皇族主催の誕生会の話も流れてしまいましたからね」

残念そうにクリスが嘆く。

「しかし信じられないな。あの巨大なガレリア要塞が『消滅』してしまつたとは」

記憶にある巨大な要塞が報道写真の様になっていることを受け入れられないガイウスは唸り、フィーも頷く。

「あのでっかい《列車砲》も消えてなくなつたんだ……ちよつと信じられないかも」

「しかし一体どんな兵器で……いやリンならでできるのか？」

ふとラウラがこぼした疑問に一同は沈黙する。

「できそうなのは共和国が開発した《フェンリル》っていう導力爆弾がそれだけのスペックを持っているって話ね」

「人の科学がここまでの力を発揮する。恐ろしい話ですね」

目を伏せて可能性を上げるアリサにエマは複雑な胸中を吐露する。「少なくとも共和国と共謀し、侵攻して来ると考えるには十分な理由だと思う」

「っていうかこのまま戦争になったらわたし達も兵士として召集されるのかな？」

クリスの考えに続いたファイアの呟きにシャーリイが哄笑を上げる。

「良いじゃん。帝国と共和国の戦争！ あはは、どれだけ派手になるのか今から楽しみだな！」

「シャーリイ、思うのは勝手だが自重しろ」

「何言ってるの？ ここは士官学院なんですよ？ そういうことをするのを教わっているのに温いこと言わないですよ」

「それでもだ」

笑って喜ぶシャーリイをユーシスが咎める。

屋上にいるのはⅦ組だけではなく、他の生徒達もいる。

それだけにシャーリイの物騒な物言いに、身体を震わせるものは決して少なくない。

「だがシャーリイの言葉にも一理あるだろう……現にリインが召集されたのだから」

ラウラの考えにⅦ組の間に再び沈黙が訪れる。

「共和国の兵器にしろ、クロスベルの兵器にしろ、人智を超えた力に對抗できるのは帝国ではリインだけなのよね」

これまで特別実習の中で起きた数々の異変を思い出してアリサが呟く。

「だからこそ、民衆はリインが動いてくれると聞いて、見送るために集まったのだろう」

改めて屋上から校門の人だかりを見下ろしてユーシスは拳を握り締める。

「そうだね。民衆が『英雄』を求める気持ちは僕も理解できるけど……

それはそうと、あれからリインさんの様子が少しおかしく感じませ

んでした？」

リンならクロスベルの暴挙もどうかしてくれろという期待を感じながら、クリスは昨夜のオズボーン宰相から要請を受けた後からのリンの様子を思い出して仲間たちに尋ねる。

「おかしいって何がよ？」

「今朝も普通だったと僕は思うが……」

クリスの質問にアリサとマキアスは首を傾げる。

答えは他も同じなのか、クリスの違和感に賛同する者はいない。

「僕の気のせいかな？」

「そう言っている内に来たよ」

考え込むクリスにミリアムが旧校舎からやってきたトレーラーを指差す。

あえてコンテナ部分を剥き出しにして運び出されているのは、膝を着いた《灰の騎神》。

「ああ……《七の騎神》をあんな風に見せびらかすなんて」

「今更じゃない？」

嘆くエマにフィーは冷静な突っ込みをする。

「しかしまだ改修は完了していなかったはずだが、どうするつもりなのだ？」

「双龍橋で組み立てるってシユミット博士が同行することになったらしいよ」

マキアスの疑問にアリサが答える。

「ラッセル博士たちとヨルグ博士たちが悔しがっているだろうね」

「流石に他の博士たちを軍事基地に招くわけにはいかないだろう」

彼らの顔が容易に想像できるとミリアムは笑い、ユーシスは肩を竦める。

「せめて『テイルフィング』が完成していればわたし達も一緒に行けたのに」

悔しそうにラウラが唇を噛み、シャーリイが同調する。

「だよねー、坊ちゃん達の護衛がなかったらシャーリイも行きたかったなあ」

そうこうしている間に遊歩道を低速で走行するトレーラーは校門に辿り着く。

《灰の騎神》がその姿を見せた瞬間、民衆達は歓声を上げる。過激な言葉があるものの「英雄」の出立に民衆は沸き立つ。

屋上でリインを見送るVII組にはそのトレーラーの助手席に座っている彼がどんな顔をしているのか確認することはできなかった。

・*

10月30日土曜日、正午。

リインの期待は空しく、クロスベルの内部では何の動きがないままに時間は過ぎ、ドライケルス広場においてオズボーン宰相の演説が始まった。

『帝都市民並びに帝国の全国民の皆さん——ご機嫌よう……』

エレボニア帝国政府代表、ギリアス・オズボーンである』

その演説をリインはガレリア要塞にほど近い線路の上でラジオ越しに聞いていた。

『——諸君も、ここ数日の信じ難い凶報はご存知かと思う……』

歴とした帝国の属州であるクロスベルが独立などという愚にも付かない宣言を行い、あろうことか帝国が預けていた資産を凍結したのである！』

それは帝国や共和国だけに限らない多くの国や自治州を巻き込んだ暴挙とも行為でしかない。

大統領と名乗りを上げたデーター・クロイスは本来なら切り離すべきIBC総裁という地位を政治に利用して悪用した。

それは社会からの「信用」を裏切る行為であり、それまで好意的だったリベールやレミフエリア、アルテリアにさえも唾を吐きかける行為に他ならない。

預けた資産を勝手に凍結する銀行。

それを人質に独立を迫り、更にはクロスベルを盟主に据えた『ゼムリア大陸諸国連合』の提唱がそれに拍車をかける。

『当然我々はそれを正すために行動した。それは侵略ではない。宗主国としての権利であり、義務ですらあると言えよう』

再三に渡る資産凍結の解除は話し合いの場を設けることさえなかった。

そうなれば帝国は自ずと国家の自国民の生命と生活を守るために武力による制裁は当然の帰結だった。

『しかし彼らは余りにも信じ難い暴挙に出た……』

《ガレリア要塞》——帝国を守る鉄壁の守りを謎の大量破壊兵器を持って攻撃……これを“消滅”せしめたのである！』

一層熱が籠った声でオズボーン宰相は続ける。

『諸君、果たしてそのような“悪意”を許していいのか!? 偉大なる帝国の誇りと栄光を傷つけさせたままでもいいのか!?』

目を伏せれば熱弁を奮う彼の姿が容易に想像できる。

『否——断じて否!! 鉄と血を贖ってでも正義は執行されなければならない!』

「やっぱりこうなるのか……」

愚痴る様にリインはため息を吐く。

結局、この一週間クロスベルの内側の動きは何もなかった。

アリオスとキアアがそうであったように、ロイドやクルトはこの状況に対して何もせず傍観を決めているのか、それとも国防軍になっているのか。

リインには遠い地の出来事を見通す目はない。

「くそ……」

思わず毒づく。

オズボーン宰相の演説が終われば、自分が先陣を切ってクロスベルへ侵攻しなければならない。

自分の役目は“神機”への対応だけだが、双龍橋で迎えられた領邦軍とガレリア要塞の生き残りから向けられた期待の熱はそれだけは済まなかった。

何より“神機”との戦いの後に起こるだろう人間同士の戦いを想像するだけでも心が痛くなる。

例え帝国側の主張に筋が通っていたものだとしても、侵略の尖兵になることに抵抗を感じてしまう。

『クロスベルの超兵器に不安になる者も多いだろう。だが安心すると良い。帝国には《リイン・シュバルツアー》がいる！』

ラジオ越しにドライケルス広場の歓声という熱狂が聞こえて来る。

『皆も知っているだろうか？』

帝国に降り掛かった“災厄”の数々、それを見事に振り払い帝都をノーザンブリアを、そしてオルデイスを救った《英雄》を！』

自分を持ち上げる演説にリインは陰鬱な気持ちになる。

「アークルージュやロストゼウムもこんな風に戦わされたんだろうな」

当時の至宝にそこまでの意志があつたかは分からないが、ラジオ越しに聞こえて来る熱狂にそう思わずにはいられない。

『さらに言わせてもらえば、リイン・シュバルツアーはこれまで《教団事件》や《通商会議》においても身を挺してクロスベルを守った……

だが、彼らはあるうことその恩を仇で返した！ こんなことが許されて良いのだろうか!?!』

何故か、その言葉にリインは先程以上の熱を感じた。

『リイン・シュバルツアーの存在はこの《激動の時代》に“女神”が遣わせた祝福と見えよう！』

それに同調するように自分の名前を連呼する声が聞こえて来る。

今すぐにもラジオを消したい衝動にリインは駆られるが、我慢する。

『既にリイン・シュバルツアーはガレリア要塞の跡地でクロスベルの兵器に牽制してくれている』

その言葉に多くの民が安堵する。

『本来ならまだ学生である彼を召集することはあつてはならない。だがこれはそれほどの“国難”である！』

熱狂が最高潮に至る。

『そして“国難”の前に、あらゆる対立は乗り越えられるべきものであろう！』

『革新派』に『貴族派』——俗に言われるそうした名前の何と空々しいことか！ 既に皇帝陛下からも、心強いお言葉を頂いている』

オズボーン宰相は言葉を切つてタメを作つて声高らかに告げる。

『このギリアス・オズボーン、帝国政府を代表し、陛下の許しを得て、今ここに宣言させていただこう！』

この言葉が終わればいよいよ覚悟を決めなければいけないのだとリインは気持ちを切り替える。

『正規軍、領邦軍を問わず、帝国全ての“力”を結集し、クロスベルの“悪”を正し、東からの脅威に備えんことを——』

「っ——ヴァリマールッ！」

オズボーン宰相の言葉を遮る様にリインが叫ぶ。

次の瞬間、オズボーン宰相の宣戦布告を待っていたかのようなタイミングでリインに——ヴァリマールに光子の雨が降り注ぐ。

衝撃と爆炎に包まれながらもリインはヴァリマールを動かして飛び出す。

「あれが《パテルⅡマテル》の後継機 “アイオーン”」

大空を舞う紫紺の巨大な人型兵器は《灰の騎神》を睥睨し、その翼から無数の光弾を撃ち出す。

「っ——何!?!」

それを回避した先の空間が歪み、巨大な杭を振り上げた《青の神機》が顕現すると同時にパイルバンカーの一撃を《灰》に叩き込む。

「くっ——」

太刀を盾に受け止め、更に全力で背後に飛んで衝撃を半減させ、《灰》は体勢を立て直す。

「二機の“神機”か……いや——」

《灰》は大空を旋回する《紫の神機》から視線を外して、天頂を見上げる。

太陽を背にした《白の神機》はその周囲に小さな黒い球体を作り出し——解き放つ。

ガレリア要塞を消滅させた“力”が容赦なく《灰》に降り注ぎ、エレボニアの《灰》とクロスベルの《神機》の戦いの火蓋は切つて落と

された。

136話 焰上

「——言わせるかよ」

ドライケルス広場の熱狂が2000アージユ離れたビルの屋上にも聞こえて来る。

スコープ越しに怨敵の姿を金に染まった眼で捉え、《C》——クロウは長大なライフルの引き金を躊躇することなく引く。

その手応えは軽く、反動もほとんどない。

高性能ライフルは彼の狙撃能力を補ってあまりある性能を発揮し、遙か遠くの目標に弾丸を届ける。

銃声は熱狂に掻き消え、傍らのラジオから聞こえていた彼の演説は途切れる。

命中したかどうか、クロウはスコープを覗き込んだままギリアスの反応を伺う。

『クク——』

ラジオ越しにその声は聞こえて来る。

スコープの中の彼は膝を落とし、血が溢れ出した胸を押さえながら緩慢な動きで顔を上げる。

『見事だ……《C》……クロウ・アームブラスト……』

「っ——」

スコープ越しに目が合い、聞こえて来たラジオの声にクロウは飛び退くようにライフルを投げ捨てる。

「キヤアアアアアアッ!!」

「うわああああああっ!!」

一瞬の静寂から蜂の巣をつついたような悲鳴と怒号が飛び交う。

「は——」

ラジオと遠くから聞こえて来る阿鼻叫喚の騒乱にクロウは嘲笑を浮かべる。

「呆気ないものだな」

あまりにも薄い手応えにクロウは不満を覚える。

この瞬間のために帝国各地で様々な事件を起こしていたが、解放戦線の活動とは別の形で訪れた機会だっただけに不完全燃焼が付き纏う。

「まあ良い。これが終わりじゃねえしな」

クロウはラジオとライフルをその場に放置して踵を返す。

「あいつが築き上げた全てを『無かった』ことにするまで俺達の戦いは終わらない」

仲間の一人が言っていた言葉をクロウは自身の口で繰り返す。

最初に顔を合わせた時は、猟兵のくせに八つ当たりで勝手な憤りを募らせる彼に呆れていたはずなのにいつからだろうか、彼の戦う理由はいつの間にかクロウのモノになっていた。

「そうだ……あいつの息子も殺さねえとな……」

痛む目を抑え、クロウは昏い笑みを浮かべる。

「動くなっ!!」

次の瞬間、屋上の扉を蹴破り数人の鉄道憲兵隊が手狭な屋上に一斉に雪崩れ込み、一人一人がクロウに導力銃を突きつける。

「やはり生きていたか。帝国解放戦線リーダー《C》——いや、旧ジュライ市国出身、クロウ・アームブラスト！」

激昂するリーダー格の男にクロウは薄ら笑いを浮かべて応える。

「やれやれ、出身は完璧に偽装したつもりだったがアランドールあたりに嗅ぎつけられたか？」

だが意外だな。来るなら《氷の乙女》だと思っていたんだが、どうやら運が良かったみたいだな」

「っ——黙れ！」

銃口に囲まれながらも飄々とした態度を崩さないクロウにミハイルは顔を歪める。

ミハイルの部隊がここに辿り着けたのは偶々、この近くに配置され、狙撃の後に彼の姿を見ることができたからに過ぎない。

もしもここに優秀な従妹がいれば狙撃される前にこの場所に辿り着いて止めることができたのではないかと思考に浮かぶが、ミハイル

は自己嫌悪を呑み込んで叫ぶ。

「よくも——よくも閣下を！」

「ま、八年前にジュライが併合された時と同じさ……」

気を抜いた方が負け、これはそういうゲームだろ？ アンタたちの親玉が好きだった”な”

「は……？」

嘲笑し見下す眼差しにミハイルは呑み込もうとした怒りがさらに膨れ上がるのを感じた。

が、鉄の精神で抑え込むが、周りの部下たちはそれに失敗して激昂する。

「ゲームだと!? ふざけるなっ!？」

「テロリスト風情が閣下を語るなっ!？」

「落ち着けっ!？」

今にも引き金を引きそうな部下たちをミハイルは抑え、クロウに降伏を促す。

「その場に腹ばいになれ……これだけの仕込み、必ず背景を喋ってもらうぞ」

「ああ、それは無理だ」

意味深な笑みを浮かべ、クロウは空を見上げる。

次の瞬間、巨大な人型の機械が空から降って来た。

「貴族連合に取り込まれた『ラインフォルト第五開発部』が完成させた人型有人兵器——

古代の機体を元に大量の鋼鉄から組み上げられた現代の騎士。通称《機甲兵》ってやつだ」

巨大な鉄の巨人。

それを運搬して来ただろう巨大な貴族の飛行戦艦。

機甲兵は空から着地すると、演説のための飾りのために配備されていた戦車をその手に持つ巨大な剣と導力ライフルで破壊していく。

「な、何でもものを……」

クロウに銃口を向けながらも機甲兵に蹂躪される戦車部隊に憲兵隊は啞然とする。

そこにミハイルの声が上がる。

「動くなっ！」

「遅えっ！」

ミハイルの警告より速く、クロウは何処からともなく抜き出したダブルセイバーを一閃し、呆ける憲兵隊を薙ぎ払う。

「っ——」

一人、その剣閃を仰げ反って紙一重で回避することに成功したミハイルはたたらを踏んで導力銃を構え直す。

「じゃあな」

そう言葉を残すとクロウはあろうことか屋上から飛び降りる。

「なっ——!?!」

慌てて駆け寄ろうとしたミハイルだったが、それより早くクロウが飛び降りた下から小型の「蒼い飛行艇」が上昇し、そのまま東の空へ飛び去るのを指をくわえて見ていることしかできなかった。

・*

「っ——」

ラジオの放送が途切れると同時にそれを触媒にしていたエマの遠見の術が中断される。

「にゃあ」

「大丈夫……サポートありがとうキシヤ」

本来なら帝都までエマの術は届かないが、空間を司る力に特化してサポートしてくれた白猫の使い魔にエマは礼を言い、振り返る。

そこには呆然と、一様にⅦ組のみんなが立ち尽くしていた。

「今見えたのは……本当の事なの？」

「はい、私の遠見の術をキシヤに増幅してもらって映し出した現在のドライケルス広場の状況です」

「あ……エマの力を疑っているんじゃない……」

「信じられないが、間違いなく現実だろうね」

アリサの疑問に答えたのは教室に入って来たアンゼリカだった。

「アンゼリカ先輩？ どうしてこちらに？」

「私も教室でオズボーン宰相の演説を聞いていてね、狙撃された後にこちらに来て廊下でエマ君の遠見を盗みさせてもらった」

「普通に入ってくれば良いのに……」

「ははは、それよりも問題は今の宰相が狙撃され、帝都が占領されたことだ」

「ええ、アンゼリカの言う通りよ」

アンゼリカの指摘にサラが頷く。

「エマの能力は疑うまでもないけど、問題は宰相が狙撃されて——帝都が占領されたことだわ」

「っ——父さんだけじゃなくオズボーン宰相まで……」

「まさか、今頃父さんも……」

エリオットが憤り、マキアスが帝都にいる父の事を案じる。

「あの巨大な飛行船に《機甲兵》という『ティルフィング』に似た兵器……用意したのは間違いなく《貴族派》というわけか」

「わたしの身内もあれに乗っていた……」

「オルデイスの武術大会に参加していたカイエン公が雇った猟兵だったが……」

フィーの呟きにラウラは気遣い様に言葉を掛ける。

「それよりも……あんだ達、クロウが生きていることを知っていたわね」

サラは教壇に立って生徒達を見回して確認する。

「すまないサラ教官、彼らには私が口止めしていてね。あまり彼らを責めないで上げてもらえるかな」

「あんだねえ……」

バツが悪そうに俯くVII組をフォローするアンゼリカにサラはため息を吐く。

「まあ良いわ。貴方たちはここに待機、あたしは今見たものを学院長に——」

サラの言葉を遮る様に彼女の《ARCS》の着信が鳴る。

「はい、こちらバレストライン。ナイトハルト教官、これから緊急会議で

すか？

実は話さなければいけないことが——なんですつて!？」

クロウの生存を報告しようとしたサラは逆に驚きの声を上げる。

「当然あたしも手伝います！ ええ、ええ……それでは正門で」

「サラ教官？」

「少し出掛けてくるわ。君達は絶対に学院から出るんじゃないわよ」

そう言い残してサラは足早に教室から出て行った。

「な、何だったんだ……？」

「どうやら尋常ではない出来事があつたようだな」

教官の突然の行動にマキアスは目を丸くし、ユーシスは顔をしかめる。

「ねえねえアンゼリカ先輩」

戸惑う彼らを他所にシャーリイは猫なで声でアンゼリカに話しかける。

「ん？ 何だい？」

「アンゼリカ先輩達の “テイルフィング” だけどちよつとシャーリイに貸してくれない？」

「“テイルフィング” を？ それは何故？」

「それはもちろんシャーリイのお仕事のためだよ」

「仕事？ シャーリイの仕事っていえばクリスとリインの護衛だったわよね？ どういうこと？」

「いや、僕に言われても……」

シャーリイの突然の言葉にアリサはクリスを振り返るが、クリスも何故それを持ち出されたのか分からず首を傾げる。

「まだまだ甘いなあお坊ちゃん。あのクロウっていうテロリストが《蒼い飛行艇》で飛んで行ったのはどっちだった？」

「それは……東……」

シャーリイの問いにクリスはその場面を思い出して答えを呟く。

そして帝都から東に位置しているのは考えるまでもなく。

「西の方から何かが近付いて来る」

「……導力車数台。この駆動音は……あの人型兵器も来てるね」

窓を開けたガイウスがそれを示すように唸り、フィーがさらに細かく付け加える。

「まさか帝都に続いてトリスタまで……というかこの学院を押さえるつもりだって言うの!？」

「んー可能性は高いかも。貴族派、革新派の子弟とか学院長みたいな重鎮もいるし、今はクロスベルの方に行っているリインの人質にルフィナもいるもんね……」

保護するか人質にするか……ま、どっちもありそうかな？」

驚くアリサにミリアムが危機感の薄い呑気な調子で応える。

「もしかしてサラ教官たちはそれを喰い止めに行つたんじゃ？」

「その可能性は高いね」

エリオットの気付きをクリスが肯定する。

「もしも『機甲兵』の性能が『テイルフィング』と同じならいくら教官たちが強いって言っても限界がある」

「そういうこと、だからシャーリイに今使える『テイルフィング』を貸してよ」

「……いや、そういうことなら『テイルフィングB』には私が乗る」

「ええ〜」

「クロウがこちらに向かっているのだから、ちょうど良い機会だ。ラウラ君、フィー君もそれで良いかな？」

「ええ、構いませんが」

「ん、了解」

同じ班員の了承を得て、アンゼリカは唇を尖らせているシャーリイに向き直る。

「シャーリイ君、君にはやって欲しいことがある」

「やって欲しいこと？」

「ああ、私の導力バイクを貸すから君は学院から脱出して帝都へ、聖アストライア女学院に向かって欲しい」

「女学院？」

「ああ、女学院にはリイン君の妹のエリゼ君やアルフィン皇女殿下がいる……」

おそらく貴族派は彼女たちもこの子弟と同じように確保するつもりだろう。その魔の手から彼女たちを救って欲しい」

「……言いたいことは分かるけどさ……」

「街道はおそらく通れないだろう。ヘイムダルまで獣道を通ることになるが、それを走破できるのはこの中では君だけだ」

「だけどさつきも言ったけどシャーリーの役目はクリスの護衛なんだけど、猟兵は仕事の途中で別の仕事は引き受けないんだけど」

アンゼリカの理屈をシャーリーは猟兵の理屈で却下する。

さらに言えば実力が近しくに見えた《C》と騎神戦ができるとなればシャーリーの中の狂戦士の血が騒ぎ始める。

「いえ、僕からもお願いします」

が、アンゼリカの案に当のクリスが賛成する。

「ええーっ！」

「ね、ねえだったらシャーリーとクリスを脱出させれば良いんじゃない？」

本気で嫌そうな顔をするシャーリーを見兼ねてアリサが別の案を出す。

「いえ、テロリスト達は僕の正体を知っているでしょう。だから僕はここに残らないと残された生徒達がどんな目に合わされるか分かりません……」

「だけどエリゼさんの安全を確保するのは、クロスベルと戦いに行ってくれているリンさんに対して僕達ができる義務のはず……」

「だからシャーリーさん、どうかエリゼさんやアルフィンを守ってください」

「………しょうがないなあ………帝国政府にはちゃんと口利きしてよねみんな」

戦いたい衝動と猟兵として仕事に徹するか、それともVII組として動くかを考え、シャーリーは折れる。

「ありがとう、それからエマ」

「は、はいっ！」

「《テストタロツサ》を使う。サポートをお願い」

「え……でもまだ加速器の調整が終わってないって」

「だからって敵がそれを待つてくれるわけではない。今僕達が持っている戦力で《機甲兵》に対抗できるのは《テストタロツサ》と《ティルフィングB》だけなんだから」

「……………判りました」

決意が固いクリスに説得は無意味と察してエマは頷く。

「では、私たちは先行して教官たちに合流し時間稼ぎをしよう」

「そ、だね。シャーリーの脱出を気付かれないようにできるだけ派手にやろう」

「えへへ、ガーちゃんのチカラどこまで通用するかなー」

「ラウラ……ファイ……ミリアムも……ええ！ そうね！」

物騒なことを言い出す二人にアリスは慄きながらもすぐに気を取り直して頷く。

「どこまで力になれるか分からないけど」

「こうなった以上はとにかく全力を出すだけだ！」

「フン、立場はどうあれ、無礼者に遠慮するつもりはない」

「ああ、ここにいないリインを失望させるわけにはいかないからな」

意気込む女性陣に続いて男性陣も肚をくくる。

「これからも共に学び、高め合う場所——トールズ士官学院を守るために、各自全力を尽くしてくれ。そして女神の加護をつ！」

そんなクラスメイト達にクリスが宣言する。

「トールズ士官学院VII組、これより作戦を開始するっ！」

・*

「何が……何が起きたと言うの……？」

目の前に広がる光景にクレアは呆然と立ち尽くす。

彼女の優れた頭脳をもってしても、その光景はあまりにも常識からかけ離れていて理解ができない。

もつともそれは彼女だけではなく、その周囲にいる領邦軍と正規軍の混線部隊の誰もが一樣に同じ顔をしてそれを見ていた。

「ガレリア要塞が……いやガレリア山脈が……消えた……」
クレアの感想を誰かが呟く。

「こんなことがあり得るのか……?」

「クロスベルはいつたい何を造り出したんだ!」

恐怖が伝播する。

戦っていたはずのヴァリマールは開けた景色の中の何処にも存在しない。

山を空を覆い尽くした消滅の力に呑み込まれたのをクレア達はその目で見ている。

「勝っていただろ!?! なのに何でっ!」

そうヴァリマールは勝ったはずだった。

《青の神機》の四肢を斬断し、《紫の神機》はその翼をもぎ取り墜落させ、《白の神機》は頭を潰して動かなくなった。

なのに再起動した《白》が他の二機を黒く染まったゼムリアストーンにして砕き、その光を吸収し変化した。

「もうおしまいだ……」

空に浮かぶ一機の人型兵器。

光の円環と四対八枚の光の翼を持つ超越存在。

《白》は《黒》に染まり、《零》から生み出された《一》。

《黒の神機》にして《零の騎神》ゾアールギルスティンがここに誕生した。

そして、何処からともなく消滅したとクレア達が思っていた《灰》が《零》に斬りかかった。

137話 暗き想い

「はあはあ……やったか？」

膝を着く機甲兵に手応えを感じラウラが呟く。

「やはりジョルジュ先輩が言っていた通り、関節部が狙い目だったよ
うだな」

自分達の方が通じたことにガイウスは安堵の息を吐く。

「だが、気を抜くのは早いぞ。次はあのデカブツだ」

余裕を見せつけて単騎で挑んで来た機甲兵を倒した緩みをユーシ
スは激励して引き締める。

「っ……改めて見ると何て大ききさだ」

「『テイルフィン』の倍くらいある……《第五開発部》なんてものを
造ったのよ」

見上げる巨軀にマキアスとアリサは慄く。

『くくく、リイン・オズボーンがいなくせに頑張るじゃねえか』

両肩に巨大な導力砲を二つ担ぎ、肉厚で巨大な機甲兵から嘲笑の声
が聞こえて来る。

「その二下っぽい声……」

「《帝国解放戦線》の《V》か……やはり生きていたんだ」

その声の主に心当たりがあるフィーとエリオットは思わず顔をし
かめる。

『ハッ！ あの生意気な皇子様はいないみたいだがお前達にはリイ
ン・オズボーンの人質になってもらうことになっている……』

ま、殺すつもりはねえが死んじゃったらリイン・オズボーンを恨む
んだな』

「うわあ……すごい自分勝手」

「フン、与えられたオモチャで遊ぶのはそんなに楽しいか、これだから
テロリスト風情は」

《V》の言い分にミリアムは呆れ、ユーシスは辛辣な言葉を返す。

『ククク、弱い犬程良く吠えるな。じゃあこの《黒のゴライアス》の力、
思い知らせてやるぜっ！』

両肩の導力砲と、両腕の導力機関銃が一齐に火を噴く。

「散れっ！」

言葉を発する前に戦術リンクで思考は共有され、一同は散開する。放たれた暴虐の雨は街道の石畳を砕き、導力灯を薙ぎ払う。

「っ———こんなの当たったら一溜りもないぞ」

その威力にマキアスは慄く。

前に戦った《ドラツケン》もそうだが、機甲兵の身体に合わせた規格外の大口径の導力銃は戦車の砲に匹敵する。

特に《黒のゴライアス》の武装は《ドラツケン》よりもさらに一回り大きい。

もしもあれが直撃すれば、粉々にされることは容易に想像できる。

「怯むなっ！ 《機甲兵》の運動性能は『テイルフィン』よりも低い！

戦術リンクで互いに注意し合えば躲せない動きではない！」

ラウラの指示に戦術リンクが組み代わる。

ラウラはアリスと。フィーはエリオット、ガイウスはマキアス、ユースはミリアム。

前衛の四人が射線と射撃のタイミングを読み、戦術リンクでそれをパートナーに共有して《黒のゴライアス》の初動を抑え込む。

『ちっ———ちよこまかと！』

取り付こうとしてくれるラウラとフィーを《黒のゴライアス》は腕を振り回して牽制する。

「ミリアムッ！」

「らじやー！」

フィーの声にミリアムは応え、渡されていたフラッシュグレネードをアガートラムで《黒のゴライアス》の顔に向けて投擲する。

『っ———』

「今だっ！ 総員全力で畳み掛けろっ！」

閃光で外部モニターを白く焼かれた《黒のゴライアス》に向け、ユースの号令が上がる。

「セブンラプソディ！」

「マキシマムショット！」

「カラミティホーク！」

「シヤドウブリゲイド！」

「クリスタルセイバー！」

「ギガントブレイク！」

「奥義・洗刃乱舞っ！」

「エレトリックアローツ！」

それぞれの必殺が畳み掛けるように左右から隙なく《黒のゴライアス》に殺到する。

「やったわ！」

ダインスレイブの一撃の手応えにアリサは拳を握る。

「残心を怠るなアリサ」

「何言ってるの？ 私たち全員の必殺技よ。いくら《機甲兵》が凄いからってこれだけの攻撃を受けて無事じゃ——」

地面を揺らす大きな足音にアリサは言葉を呑み込む。

「まさか……」

「そんな……」

「この手応え……こちらの攻撃が全て跳ね返された？」

『リアクティブアーマー。操縦者の意志で展開できる防御結界みたいなもんだ……』

ま、戦車に使われるものとは根本から違うから《フェイズシフト装甲》なんて別名もあるが、導力が尽きるまであらゆる攻撃を弾き返す優れモノだ』

勝ち誇る《V》の言葉に一同は哑然とする。

「何だそのふざけた性能は!？」

「さ、さすがに反則だよ」

理不尽な機能にユースとミリアムが愚痴を漏らす。

『はっ！ 勝てば良いんだよ勝てばっ！ 死にたくなかったらとつとと武器を——』

《V》の降伏勧告は何処からともなく飛来した砲弾によって途切れ

『みんな、待たせたね』

クリスの声と共に空から降りて来たのはエマを手に乗せた《緋》。

“暗黒竜”の呪いが浄化され、竜の翼と尾を宿した《緋の騎神》テスタ＝ロツサ。

仲間たちを守る様に《緋》は《黒のゴライアス》とⅦ組の間に降り立つ。

『私もいるよ』

街道の森から“テイルフィングB”が跳び出し、《緋》の隣に並び立つ。

「アンゼリカさんも……」

「形勢逆転のようだな」

絶体絶命の窮地から、目的の時間稼ぎが達成されⅦ組の空気が弛緩する。

『ちっ——《騎神》を使えるのはリイン・オズボーンだけじゃなかったのかよ?』

よろけた態勢を直しながら《V》は情報が違うと愚痴をこぼす。

『これ以上の戦いは無意味だ! 西口を攻めている連中とまとめて撤退してもらおうぞっ!』

《緋》は剣を《黒のゴライアス》に剣を突き付けて宣言する。

しかし、それに応じる声は空から来る。

『オイオイ、勝ち誇るにはまだ早いんじゃないかねえか?』

次の瞬間、蒼い風が吹く。

彼らの頭上を通過した“蒼い飛空艇”は大きく旋回する。

その間に“飛行艇”は変形する。

まるで凝縮していた固めていた状態を解くように飛行形態から人型へと変形し現れたその姿は——

『蒼の騎神。オルディーネ』

かつてクロスベルの通商会議を襲い、下半身を残して消え去った《七の騎神》の一つ。

自己修復が間に合わなかったのか、旧校舎で分解された下半身や腕は機甲兵によく似たパーツで補われている。

『クロウか……』

『ようゼリカ。まさかお前がそんなガラクタに乗って俺の前に立ち塞がるとは思わなかったぜ』

唸るアンゼリカにクロウは嘲笑が含む言葉を浴びせる。

『ガラクタとは言ってくれるな……』

それよりもクロウ、どうしてこんなことを!? 何故宰相を撃つた!?』

『答える必要はないな。ザクセン鉄鉱山で言った通りだ』

『っ——クロウッ！ 君は今、自分達が何をしたのか分かっているのか!?』

『……………ククク』

激昂するアンゼリカに返って来たのは隠しきれない笑い声だった。

『何がおかしい!?』

『そうだそれで良い！ 俺を憎めっ！ そして俺の憎しみを思い知れっ！ 帝国人っ！』

『クロウ……』

聞いたことのない怨嗟の言葉にアンゼリカは思わず後退る。

『どうしてそこまで、君はいったい何を抱えているんだ?』

『さあな……これから殺し合いをする相手にこれ以上の問答は必要ないだろ』

先程の憎悪を潜め、クロウはアンゼリカの問いに拒絶で応える。

『……………そうか……答えるつもりがないと言うのなら、その騎神から引き吊り出してトワの前で土下座してもらおうとしよう……』

クリス君、手伝ってもらえるかな?』

『はい、すぐに倒して教官たちの援護に行きましょう』

『はっ、見縊ってくれるじゃねえか……』

お前はそいつに乗ったばかり。だが、俺は三年前からコイツを乗りこなしている。どうせ体が重くてうまく動かせていないんだろ? 強がってんじゃねえよ』

『っ——』

クリスの状態を経験で見透かして来るクロウに思わず息を呑む。

『だが、お前達に粘られると後々面倒だな。だから“奥の手”を出させてもらうぜ』

クロウの言葉にクリスは身構える。

《蒼》の“奥の手”。

一時的な過剰エネルギー状態を超して性能を激増させるシステム。それを警戒して身構える《テスタロツサ》と《テイルフィングB》に対して、クロウは叫ぶ。

『行くぞっ！ 《V》、《S》！』

『おおっ！』

『分かったわっ！』

新たな声がそこに響き、空にゴライアスに劣らない大きさの《紅のケストレル》が舞う。

それに《蒼》が続き、《黒のゴライアス》もその鈍重そうな体に反して空高く飛び上がる。

『いったい何を!?!』

空に縦に並んだ騎神と機甲兵にクリスは困惑する。

その答えは目の前で示される。

『戦術リンク、フルコンタクトッ！ 導力フィールド、オンッ！』

《S》の叫びに応じて三機が一つの力場に包まれる。

『フェンリルエンジン、フルドライブ！』

《V》の叫びに応じて、《黒のゴライアス》と《紅のケストレル》に内蔵された《焰》と《大地》のオーブが共鳴するように唸りを上げる。

『行くぜっ！ オーバーライズッ!!』

そして《C》の合図によって三機はそれぞれ新たな動きを見せる。

二つの機甲兵の色が消え、灰色に変わる。

《蒼》は飛行形態になるように腕を背中に折り畳み、腰を折る。

《ゴライアス》は両肩のキャノンをパージし、手を腕の中に格納し変形して胸を開き、その中に《蒼》を包み込むように接続する。

次いで大型飛行ユニットから分離した《ケストレル》がその細い手足を折り畳み腰となって《ゴライアス》の下に接続される。

分離された飛翔ユニットもまた変形して脚に、導力砲は腕になって

砲門から手が現れる。

最後に剥き出しの《蒼》の顔を覆い隠すヘルムが装着される。

そして《焰》と《大地》のオーブが“相克”して生み出す導力が灰色の装甲に通って蒼色に染まる。

『これが究極のゴルディアス最終機体——《蒼の神騎》オルカイザーだっ！』

『なっ——!?!』

『合体した……だと?!』

ゴライアスの時点で騎神の倍はあった体躯がさらに大きくなり《蒼の神機》は《緋》と《ティルフィングB》を見下ろす。

呆然と自分を見上げる間抜け面を晒すVII組にクロウは嗤って絶望にはまだ早いと告げる。

『ククク、驚くのはまだ早いぜっ！』

『何……?』

『来いっ！ 《G》！ イソラッ！』

『ああっ！』

『……………アロндаイト』

クロウの声に応じて現れたのは《蒼の竜機》。

複雑な変形はしないものの、竜機はオルカイザーの背中に接続して翼となり、さらにオルカイザーの手に“剣”が現れる。

『みんなの“力”……俺に貸してくれっ！』

『ふっ、言われるまでもない』

『ああ、俺達の底力、鉄血の狗共に教えてやれっ！』

『《C》いえ、クロウ。貴方にならできるわ！』

オルカイザーが掲げる“剣”が黒い波動を発し、波紋を広げる。

『この光は……リインさんが帝都で使った《ゴスペル》?』

『いったい何が起きているって言うんだ!?!』

目まぐるしく変わる状況にクリスとアンゼリカは呆然と立ち尽くす。

『みんなの“想い”がオルカイザーに集まって来るっ！』

黒い波動が広がるのとは逆に、大地や空から“黒い想念”が“剣”

に集まり黒い霊力の刃が天を衝くように顕現される。

それはクロウと仲間たちの「想念」が結集した「力」。

『この霊力——まずいわ、逃げなさいっ！』

見入ってしまったクリスとアンゼリカにセリーヌが櫓を飛ばす。

『いや、ダメだっ！ 防げ《テスタロツサ》！』

クリスはセリーヌの指示に反して、前に進み出る。

《緋》の霊力が背後の仲間とトリスタを守る様に壁を作る。

『喰らえっ！』

生け捕りとは程遠い《蒼》の一撃と《緋》の障壁がぶつかり合ってトリスタを激震させた。

・*

『四の型——音断ち』

その瞬間、《白の神機》に憑依していたキアアの知覚は音も光も消え失せた。

「何……何なの？」

さつきまで優勢に戦っていた。

三対一の状態。

うまく連携させ、ようやく決定打を繰り出せると思った矢先、まるでその気の逸りを見透かしたように八葉の技が振るわれ、キアと《神機》の繋がりが切れた。

「そんなことができるなんて……」

キアは原因を「識り」、敵の脅威度を引き上げ、《神機》とのリンクを三体同時に結び直す。

原因の究明から再接続まで約十秒。

それぞれの機体にはまだ霊力が十分に満ちており、多少の反撃を受けても十秒ならば耐えられるとキアは判断した。

しかし、彼に——武芸者に無防備な十秒を晒すことの意味を理解できていなかった。

「……………えっ？」

しかし、再接続した《白》の目で見た光景にキアは言葉を失った。
《青の神機》は四肢を失い崩れ落ち、空を飛んでいた《紫の神機》は翼をもがれ墜落し、そして目の前にはゼムリアストーンの太刀を峰を返して振り上げる《灰》。

『お仕置きだ、キア』

「っ——」

咄嗟に機体に力を漲らせ、装甲の表面に防御結界を展開、《灰》の頭部への一撃を受け止める。

「——っ!？」

太刀の一撃は確かに結界が受け止めた。

しかし、頭部で受け止めた太刀から触れたままもう一度衝撃が走る。

「そん……な……」

防御結界は機能している、破壊されたわけでもないのに中身だけが破壊される。

それが東方の拳法の《徹し》と呼ばれる技術の応用だと理解することなく、キアの意識は暗転した。

——負けちゃった——

何をどうされたのか分からず、キアは自分の敗北を悟る。

——未来がなくなる——

決してリインが嫌いなわけではない。

ただエレボニアの《至宝》を倒さなければクロスベルは地獄となる未来を《識て》しまったからこそ、キアは持てる力を使って《灰》に挑んだ。

——どうして……どうしてなの——

欲しかったのは決して大それた未来じゃなかった。

ただ大切な人に生きていて欲しかった。

彼らが彼ららしくクロスベルで生きる、そこに自分の居場所はなくても構わない。

それ程の覚悟でキアは《灰》と戦った。

卑怯だと分かっている、確実に勝つために三体掛かりで戦い、不

意打ちまでした。

——誰か教えて——

《至宝》が奇蹟を求め、願う矛盾。

——ロイドやみんなを守れるなら、キーンは何でもするから、だから——

『——ソノ言葉ヲ待ツテイタゾ、零ノ御子——』

暗い闇に同化するような黒き存在がその願いに応えた。

少女は自分から望み、自分からその存在を受け入れる。

少女の意識は黒に呑まれ、新たな《器》が生まれる。

その新たな《器》こそが少女が未来で見た“悪魔”だと最後まで気付くことはなかった。

138話 狂いし至宝

「ああ……これが……」

キーアは――

私は――

僕は――

俺は――

吾は――理解した。

心の奥底に封じられていたこれまで理解できなかった感情。

《グノーシス》により、数多の被験者の知識と人格を統制して生み出された存在。

それがキーアであるが、今までのキーアは《至宝》に至ってもなお《幻》のような“全能”にはなり得なかった。

「ようやくわかったよ、ロイド……みんな……これがみんなの気持ちなんだね……」

分からなかった感情が理解できることにキーアは喜びさえ感じる。人を含めたクロスベル全土と繋がったような一体感。

そこにはキーアにとつて愛しい彼らの思いも含まれる。「うん……うん……そうだね……」

腹の底から湧き上がる帝国や共和国への怒りがキーアの中に封じられていた被験者たちの感情に共感する。

すなわち“憎悪”。

クロスベルの中心では黒焰のプレロマ草が咲き乱れ、報道される《零》の戦いにみんなが声援を送ってくれているのが分かる。

それが心地よくキーアは妖しく微笑む。

「待っていてねロイド……キーアが全部消して上げる。帝国も共和国も、クロスベルを傷付ける全てを消しちやえば、ふふ……平和になるんだよ」

キーアはまだ消えていない《灰》を見下ろす。

その姿の奥の彼の存在を見据えてキアは湧き上がる憎悪を吐き出す。

「リインが悪いんだよ。リインがみんなを苦しめるから」

——エレボニアが悪いんだよ。帝国がみんなを苦しめるから——

「リインが悪いんだよ。リインがクロスベルをみんなから奪おうとするから」

——帝国が悪いんだよ。世界がみんなから奪っているから——

「これが『憎しみ』………うん、みんなの気持ち。受け取ったよ……ああ、こういう時は何って言うんだっけ……？」

うわ言の様にキアは空に尋ね、その言葉を思い出す。

そしてクロスベルの意志に応えるように言葉を作る。

「はい、よろこんで」

・
*

無数の消滅の力から上空へ退避し、急降下から繰り出した斬撃は《零》の右腕に宿した霊力の刃に受け止められる。

「キアアッ！ 今すぐその機体から降りろっ！」

尋常ではない気配を纏う新たな《騎神》に危険を感じたリインはキアに呼び掛ける。

が、返答は力任せに薙ぎ払われた一撃だった。

「っ——キアアッ！」

弾き飛ばされながらもリインは呼び掛ける。

しかしやはり答える声はなく、《零》は《灰》に向けて手を翳し、消滅の力を使う。

漆黒の球体が《零》の周辺に浮かび上がり、空中から弾丸の様に射出される。

「くっ——」

触ればガレリア要塞の様に消滅する力に対してリインは太刀に『力』を注ぎ込む。

《灰》の各所に設置された加速器が唸りを上げて、その力を増幅す

る。

「二の型《疾風》」

放たれた七つの弾丸の隙間をリインは縫うように駆け抜けると同時に球体を切り捨てる。

“消失”と同等の概念で相殺された力の塊は何も消すことなく霧散する。

「加速器の調子は問題ない……だけど、つくづく俺はっ——」

とりあえず戦闘を維持できることに安堵しながらもリインは自分の軽率さに腹を立てる。

「結社の《幻焰計画》……」

《福音計画》とは規模も完成度も比じゃないって言うのに偽りなしか……どうして俺は《雲》を分割して、ローゼリアさん達と一緒に来なかつたんだ」

帝都の時や、ノーザンブリアの時のように準備を怠る学習しない自分を罵る。

「帝国の“焰”をクロスベルの“幻”で再現する……」

三つの《神機》を《騎神》へ昇華させる。これが結社の、アリアンロードさんの《黒》に対抗するための切り札って言う事だったのか」その結論を聞いていたら、彼女は激しく否定していただろう。

もつともリインも結社もそんなことは互いに察することはできないのだが。

「リイン……」

「キーン……」

ようやく答えてくれた声にリインは息を吐き——

「消えて」

次の瞬間、《零》は霞むように消えると《灰》の目の前に現れる。

「ぐう!？」

咄嗟に太刀を盾に《零》の刺突を受け止めるが、その衝撃を受け止め切れず《灰》は撥ねられたように吹き飛ばされる。

「まずい——」

大地を削る様に制動を掛けながら、今の一撃で太刀に纏わせていた

霊力の大半が吹き飛ばされたことにリインは息を呑む。

「バンッ！」

《零》は左手で鉄砲の形を作り、指先に黒の球体を生み出し撃つ。

見切る間もなく球体は《灰》に命中し、着弾と同時に膨張し一瞬で《灰》の全身を呑み込んだ。

「っ——!!」

身体を全方位から捩じり切って絞ろうとする痛みによりリインは歯を食いしばって耐える。

「——って、あれ？」

痛みは一瞬、消滅する覚悟を決めるよりも早く全身に掛かっていた圧力は消え失せ、視界を覆い尽くした黒も晴れる。

「自己判断で『消滅』の力は相殺しました。申し訳ありません」

声はリインの背後から。

金の光を纏ったリングが事後承諾の報告を事務的に謝る。

「いや助かった。ありがとうリン」

短く感謝を伝えてリインはクレーターの中心にいる自分の姿と相手の姿を改めて確認する。

「……………霊力の総量からして桁違いか……………」

至宝自身の力に加えてクロスベル50万人の想念で満ちている圧倒的な存在感はもしかすれば《黒》に匹敵するかもしれない。

対する自分は多少強化をしているとはいえ、《騎神》の中では最も“格”の低い機体。

「だけど退くことはできないか……………」

今はまだガレリア山脈を消滅させる程度でしかなかったとしても、放置すれば文字通り、世界を滅ぼす程に成長することは容易に想像でききる。

それ程の圧が《零》からは感じ取れる。

「だけどどうして……………」

あの無垢な少女がどうしてこれだけの《騎神》を錬成に至らせたのかがりインには理解できない。

自分を通して向けるエレボニアへの憎悪。

「っ……本気で戦わないと消されるか……」

“神機”と戦った時の余裕はない。

リインはひびが入ったゼムリアストーンの太刀をその場に突き刺し、虚空へ手を翳す。

「来い——」

召喚するのは《焰の剣》。

出来る事なら“相克”以外には使いたくない武器なのだが、今更だと割り切る。

「……………キア、一つだけ教えてくれ。これはロイドさん達も望んだことなのか？」

「そうだよ」

返って来たのは即答。どこか楽し気にキアは笑顔を想像させる調子で応える。

「ロイドもエリイもランデイもテイオも、みんな心の奥ですつとこうしたかったって思ってる……」

「だけどみんな“気持ち”だけしかなくて、“力”がなかった。だから私がみんなの代わりに消しちゃうことにしたの」

「…………それはロイドさんたちの本当の望みじゃない」

「お前がロイド達を語らないで」

リインの言葉をキアは否定する。

「ロイド達のことは僕が一番よく知っている……」

ロイド達は弱いからすぐに死んじゃうの……

だからあたしが大切に、大切に、このクロスベルの中で守ってあげないといけないんだよ」

「キア…………クロイス家、アリオスさん。貴方達はっ——」

ころころ変わる一人称に狂気を感じ取り、キアをこんな風にした元凶にリインは歯噛みする。

「だからそれを邪魔するリインは邪魔なの、だから消えて——」

《零》は腰溜めに右手の霊剣を左の腰に添える。

「紅蓮刃」

居合の構えから放たれた紅蓮の焰を剣閃が放たれる。

「っ——孤影斬っ！」

二つの剣閃がぶつかり合って衝撃を撒き散らす。

その余波が納まるよりも速く、《灰》と《零》は互いに距離を詰める。

「百鬼斬」

「裏・疾風っ！」

目にも止まらない速度で疾走し、二つの《騎神》は高速の斬撃を交わし合う。

「ロード・レグナリオン」

距離を取った《零》はアーツを駆動し、霊力で錬成された剣が六つ空中に現出し、それぞれが意思を持つように舞って《灰》に縦横から襲い掛かる。

「六の型《裏・飛燕》」

《灰》は地面に剣を突き立て、剣閃を枝分かれさせて刃を地面に這わせ空中から降り注ぐ剣を迎撃——迎撃された霊剣が爆発に合わせ更なる遠隔斬撃を《灰》は《零》に放つ。

「オオオオオオオッ！」

が、地面を這う剣閃は《零》の咆哮の波動によって呆気なく吹き飛ばされる。

「っ——いない。どこに——」

爆煙が晴れたそこには《灰》の姿はなく、慌てた《零》はその姿を探し——声は背後から。

「四の型《音断ち》」

“紅葉斬り”を試行錯誤して発展させた音を始めとした霊力を斬る斬撃を《灰》は無防備な《零》の背中に放つ。

キーンと《零》の繋がりを一時的に切断する刃は——無情にも何もしていない背中に受け止められる。

「——あ……アハハッ！」

その結果にキーンは声を上げて笑う。

背後の《灰》に余裕の佇まいで振り返る。

「いくらリインが強くても、今のキーンはクロスベル50万人の想念を宿している……」

そんな《器》でこの《零の騎神》に勝てるわけないよ

「そうか……」

キーアの勝利宣言をリインは剣を構え直す。

「……………何のつもり？」

「ただか50万人の想念の密度。本気で俺に斬れないと思ったのか？」

「っ——」

強気な言葉にキーアは息を呑む。

「八葉一刀流を舐めるな」

剣を正眼に構え、《灰》が纏っていた“力”が消える。

無防備になった《灰》だが向けて来る威圧感はこれまで以上に張り詰め、キーアは緊張に震える。

「どうして……………どうして……………」

キーアは困惑する。

勝つパターンは幾通りも存在し、見ることができている。

その至宝の力に反して、キーア自身は勝てる気がしないと言う矛盾に二の足を踏んでしまう。

「どうした来ないのか？」

「うう……………」

挑発の言葉にキーアは迷いを抱えたまま、一番勝てる確率が高い突撃を選択する。

両手に刃を展開し、《灰》の斬撃は機体の防御力に任せて防ぎ、カウンターでその刃を突き刺して内側から“消滅”の力を解放する。

「大丈夫……………キーアにならできるっ」

例え未来を見通せる力があつたとしても、それは火中の栗を拾うに等しい行為。

それでもこの恐るべき侵略者を倒すためならと、キーアは己を奮い立たせて突撃する。

「っ——！」

躊躇わず向かって来る《零》にリインは顔を歪ませながらも太刀を振り被る。

二つの刃が交差する刹那――

「あ――」

《零》は《灰》の間合いに踏み込む寸前、軌道を強引に逸らす。地を這うように滑空していた《零》は己の刃を振ることなく、《灰》の刃を掠めてすれ違い上空へ逃れる。

「――何だ!？」

空振りに終わった一太刀を引き戻しながら、《灰》は振り返って《零》を見上げる。

無防備な背中を晒し、あらぬ方向を向いて微動だにしない《零》にリインは眉を顰める。

キーアが正気を取り戻したというわけではない。

変わらず狂気の気配を纏っている《零》は中空に浮いたまま振り返る。

「今日はここまでにしてあげる」

「え……?」

「消されたくなかったらこれ以上、クロスベルに関わらないで」

一方的に告げると《零》は転移術を使ってその場から消える。

あまりに勝手に一方的な撤退振りにリインは空を見上げたまま、数秒呆ける。

「――はあ……助かった」

『リインよ……もしましや……』

伝わって来た安堵の感情にヴァリマールは恐る恐るという調子で尋ねる。

「ああ、あのままやっていたら多分俺達は負けていただろうな」

『しかし、斬る。つもりだったのだろうか?』

「それはもちろん。だけど本当に斬ることができたかはちよつと自信はないな」

『……………』

リインの弱気な答えにヴァリマールは思わず押し黙る。

繋がっていたヴァリマールだからこそ分かる。

あの瞬間、リインは本気で《零》を斬るつもりでいた。

戦いの後の言葉から察するに、本当は斬れないだろうと判断していたにも関わらず、あれほどの強気で命を懸けたということにヴァリマールは呆れるべきか、付き合わされたことに恐怖するべきか悩む。『勝ち目はないのか?』

「とりあえずローゼリアさんとイオの二人に“力”を貸してもらわないと——」

ヴァリマールの疑問への答えを遮って、遠雷のような轟音が東の空から聞こえて来る。

「東の——カルバードの方から《零の騎神》による爆発……これがキアが撤退してくれた理由か」

おそらく自分と戦いクロスベルの防備が手薄になったと判断した共和国が送り込んだ爆撃機を撃墜したのだろうとリインは察する。

「何をやっているんだアリオスさん！ ロイドさんも！」

苛立ちを言葉にしてリインは吐き出す。

ガレリア要塞に続き、共和国の爆撃機の撃墜。

もちろん大量殺戮兵器など撃墜して咎めるつもりはないが、あの純粹無垢だった少女を矢面に立たせて戦わせているクロスベルに憤りを感じずにはいられない。

『リインよ……』

「……分かってる。一旦陣地に戻ろう。キアはああ言っていたけど、あの《騎神》を放置するわけにはいかない」

リインは《灰》を動かして振り返る。

「ん……?」

振り返ろうとした視界の隅で気になる者を見つけ、リインは顔を戻す。

「あれは……」

激しい戦闘だったにも関わらず、クロスベル側のベルガード門には目立った損害はない。

問題はその線路から走ってこちらに向かって来る三人の男たち。

「止まれっ！」

「止まらないと撃つぞっ！」

139話 岐路

「オズボーン宰相が演説中に狙撃された？」

双龍橋と元ガレリア要塞の中間地に仮設された駐屯地に戻って来たリインはクレアから告げられた。

「はい……ちよどりイン特務官がクロスベルの兵器に襲撃されたタイミングで閣下は……狙撃犯はおそらくクロウ・アームブラストです」

「……そうですか」

「やはりリイン君はクロウ・アームブラストが《C》だったと知っていたんですね？」

「……はい。確証はなかったんですが」

先輩達に相談されたことを明かさずにリインは首肯する。

そんなリインをクレアは疑うようなジト目を向け、ため息を吐く。

「そういう事しておきます」

「すみません」

察してそれ以上の追及をしないでくれたクレアにリインは頭を下げる。

「それで状況はどうなっているんですか？」

「現在ラジオは中断され、憲兵隊の通信も妨害されて全容は掴み切れていませんが。狙撃に合わせて貴族連合の飛行戦艦が現れ、帝都を制圧したそうです……」

ただ途絶した通信からは《機神》——ティルフィングのような人型機械が使われたそうです」

「人型機械……」

「それは貴族連合の《機甲兵》だろう」

リインが何かを言うよりもシュミットが割り込んで一方的に説明をする。

「貴族連合に取り込まれたラインフォルトの第五開発部で《蒼の騎神》

を基に私が設計・開発したものだ」

「だからテイルフィングの開発の時に妙に慣れた様子だったんですね」

「そういうことだ。守秘義務があったが、もう良いだろう」

勝手な言い分だが、一応の筋を通してしているシュミットにリインは思わず苦笑する。

「もつとも私がしたことは基礎部分の一部だけだがな」

「それは良いんですが、その《機甲兵》というのは“テイルフィング”と比べてどれくらいの性能があるんでしょうか?」

「ふん、そんなもの比べるまでもなく“テイルフィング”の方だろう……」

あえて優れている面を上げるなら量産性くらいだろう」

「そうですか……でもどうしてこんなタイミングで……」

クロスベルの問題は貴族派にとっても見過ごせない事件だと思っただけに、このタイミングでの武力決起をする理由にリインは悩む。

「あの……リイン君、閣下が撃たれたんですよ? その……もう少し動揺を上げてても……」

「そう言われても……」

ラジオ越しとは言え、その瞬間を聞き逃してしまったためリインは父親だからと言っててもそこに実感が伴わない。

「そう言うクレア大尉こそ、オズボーン宰相が撃たれたのに冷静ですね?」

「私は……その場にいたら冷静ではいられなかったでしょう。でも……」

クレアはラジオで聞いた彼の最後を思い出す。

『クク——見事だ……《C》……クロウ・アームブラスト……』

そこに恨みつらみではなく、不敵な笑みを浮かべていた彼の姿が簡単に想像できる。

学院祭で確保を見送ったことが悔やまれるが、それよりもクレアの能力は無用の心配だと訴えていた。

「閣下が狙撃されたことは事実ですが、まだその死を報じられたわけではありません……」

「ならば私たちは私たちが為すべきことをするだけです」

「クレア君の言う通りだ」

クレアの言葉を肯定して、天幕の中に入って来たのはヴィクターを付き従えたオリヴァルトだった。

「オリヴァルト殿下、どうしてこちらに？」

オブザーバーとして部隊の後方にカレイジャスと共に双龍橋で待機していたはずのオリヴァルトとヴィクターの登場にリインは首を傾げる。

「いや、そもそも双龍橋にもここにも領邦軍はいるはず……」

帝都で貴族連合が決起したのに、ここでは何も起こっていないんですね？」

そしてリインがここに帰投してからも目立った騒ぎが起きていないことに首を捻る。

「ははは、それはもう《超帝国人》の威光というものだろう。双龍橋ではリイン君の戦いを中継していたからね」

「何を戯けたことを言っているんですか」

オリヴァルトの言い分をリインは一蹴するが、その場に奇妙な沈黙が満ちる。

「リイン君、あんな戦闘を見せられたら決起するはずだった領邦軍も大人しくなりますよ」

「彼らも『灰の騎神』と事を構えたいとは思わないだろう」

クレアとヴィクターの言葉にオリヴァルトはうんうんと相槌を打つ。

「フフフ、いい加減認めたらどうかね？」

そしてそれに同意するようにワイスマンも頷いた。

「……………話には聞いていたが、本当にゲオルグ・ワイスマンなのだね？」

リベールで見た時とは違う姿と恰好。

報告は聞いていたが対峙して一目で判るワイスマンの雰囲気は才

リヴァルトはいつものお調子者の顔を潜ませて顔をしかめる。

「初めましてになるかなオリヴァルト皇子」

そんなオリヴァルトに我が物顔でその場に居座っていたワイスマンは不敵な笑みを送る。

「リイン君」

「言いたいことは分かります。でもクロスベルの情報提供者として彼の言葉は無視できません」

こちらの身を案ずるオリヴァルトの気遣いにリインは割り切るべきだと進言する。

「オリヴァルト殿下が来る前に一通りの事情聴取は終わっています。こちらをどうぞ」

クレアはこれまでリインがワイスマンから引き出した情報をまとめたレポートをオリヴァルトに渡す。

「失われた《幻の至宝》を再現した《零の至宝》か……人の業とは恐ろしいものだね」

リインが戦った者の正体にオリヴァルトは唖る。そしてため息と共にオリヴァルトはリイン達を見回して告げる。

「実はここに来る前、ドライケルス広場の演説に立ち会ってもらいに行ったトヴァル君から連絡があつた……」

狙撃されたオズボーン宰相は胸を撃たれたものの一命を取り留めたらしい」

「本当ですか!？」

オリヴァルトの報告にクレアが声を上げる。

「ああ、とはいえ貴族連合に見つかればどうなるか分からないということだ。それで正規軍の手の者によって秘密裏に移送されたそう……」

それ以上のことは同行を拒否されてしまったので分からないそうだ」

「そうですか……」

ほっと胸を撫で下ろすクレアにオリヴァルトは笑いかけてから、表情を引き締める。

「しかし、残念なことに問題はオズボーン宰相の事だけではなくなっ

てしまったのだよ」

「と、言いますと？」

「帝都を制圧した貴族連合は、次にトリスタに侵攻し、更には各地の鉄道憲兵隊の詰め所を制圧して回っているらしい」

「なっ!？」

「トヴァル君にはアストライア女学院に向かってもらってアルフィンとエリゼ君の安全を確保してユミルに向かってもらうことにした……」

かく言うボク達もすぐにカレイジャスで向かおうと思っっているのだが……」

そこで言い淀んだオリヴァルトはリインの顔色を窺う。

「正直、ボクはこのままクロスベルのことを放置して良いのか迷っている……」

あの《零の騎神》と戦ったリイン君の意見を聞きたい」

「そうですね……」

意見を求められ、リインは考え込む。

「ワイスマンの情報が正しければ、《零の至宝》はオリジナルである《幻の至宝》に加えて《時》と《空》の力を行使できるそうです……」

ただその「力」も俺との戦いの中で進化させ、どこまで強力になったかまでは測り切れないそうです」

「今の《零の至宝》である彼女の意思はクロスベル市民らの悪意に染まっている……」

対抗戦力を持たない共和国は放置するとしても、リイン・シユバルツァーがいる帝国に対してはもしかしたら先程と同じように攻め入って来るかもしれないね」

リインの補足にワイスマンが付け加える。

「もつともその可能性は低いだろうね」

「と言うと？」

「現在のクロスベルを牛耳っているのはディーター・クロイスかもしれないが真の黒幕は別に存在している……」

その者の名をここで明かすのはフェアではないが、彼らが目論んで

いる《碧き零の計画》について少し話をしようか」

そうしてワイスマンの口から語られたのは荒唐無稽の壮大な計画だった。

「因果律を操作して世界を組み替える、『世界を紡ぐ』」

「歴史を改竄し、クロスベルを二大国の『宗主国』に君臨させる。にわかには信じ難い話ですね」

ワイスマンの説明にオリヴァルトとヴィクターは現実味の無いクロスベルの野望に困惑する。

「おそらく真実でしょう……それに関係する現実への事象の書き換えを俺は何度か経験したことがあります」

リインの証言に一同は絶句する。

「ともかくこれで決まりですね……」

クロスベルには俺が行きます。オリヴァルト殿下達は帝都へ戻って下さい」

「リイン君？」

「《碧き零の計画》は放置できませんが、帝国で起きてしまった内戦も同じように無視できないはずでしょう？」

「こんな時のために造った《カレイジャス》ではないんですか？」

「それは……」

「だがクロスベル国防軍の戦力には《風の剣聖》。外部から《赤い星座》そして《結社》も協力しているという話ではないか……」

どの陣営も《達人級》の猛者たちばかり、それを君一人で行くと言うのはとても承服できないが、勝算はあるのかね？」

「口ごもったオリヴァルトに代わってヴィクターが懸念を上げる。

「もちろんクレア大尉にはこのまま軍の統制をしてもらって後詰に来てもらいます……」

その前に俺が先行してクロスベル市を覆う結界を解除する必要があるありますし、《零の騎神》を相手にするなら誰が一緒に来ても意味はありません」

「カレイジャスにはトロイメライがあるが？」

「あれでは《零の騎神》の消滅の力には耐えられません……」

ヴァリマールでもリンの加護がなかったら危なかったですから」
「現状の導力技術ではあの『消滅』の力を防ぐことはできんだろ
うな」

「それに《機甲兵》の存在が確かならトロイメライはそちらに必要な
るはずです……」

アリオスさん達と一人で戦うのは苦しいですが、だけど人手が足り
ないのだからどうしようもないでしょう」

「リイン君……確か先にレン君とレーヴェがクロスベルに潜入してい
るという話だが」

「彼らに協力を求めるのは筋違いでもあるでしょう……」

《碧き零の計画》の前に、これはエレボニア帝国としての侵攻ですか
ら、それに彼らの力を貸してもらおうわけにはいきません」

淀みなく言い返されてオリヴァルトは今度こそ閉口する。

確かにリインの主張は理に適っている。

《零の騎神》を始めクロスベルに何が待ち構えているのか分からな
い。

単純な武力で戦える相手ならまだしも、『神秘』が相手ではどんな
屈強な猛者も軍も意味をなさないのはガレリア要塞の有様から考え
れば一目瞭然だ。

その上、帝国で起きた内戦についても迅速な対応が求められる。

「本音を言えば俺だって早く帝都に戻ってエリゼ達の安全を確認した
いです。だけどオリヴァルト殿下達が帝都へ向かってくれるなら俺
も安心して戦えます」

決意が固いリインにオリヴァルトは深々とため息を吐く。

「仕方がないか」

どちらかを選ばなければいけないのではなく、どちらも選ばなけれ
ばならない。

「ただし、決して無茶だけはしないでくれたまえ」

「……ええ、それは——」

「その話、待ってもらえませんか？」

方針が決まった所で、割って入って来たのは第三者の声。

天幕にやって来たのはクルトとロイド、そして彼らを案内したミユラーだった。

「クロスベルに行くなら俺達も連れて行ってもらえませんか？」

「ロイド君……」

「殿下、僕からもお願いします……」

僕たちはこの事件に対して何もできていない。ここで全てをリインさんに任せて帝国でほとぼりが冷めるまで待つことはできません
「クルト……」

「なるほど君達二人がリイン君についてくれるなら——」

「必要ありません」

信頼できる二人の意見を快諾しようとしたオリヴァルトを遮って
リインは二人の申し出を拒絶する。

「リイン君？」

「これは既に警察が対処できる問題ではなく、国家間の戦争です……
いや《歴史改竄》の企みはそれ以上の問題ですが、警察の一部署でしかない貴方達に今更何ができると言うんですか？」

「……俺達は……俺は一番知りたい真実をまだ確かめていないんだ」

「真実とは何ですか？」

「力や生い立ちに関係なく……あの子が、キアアが本当は何がしたい
かって事だ……」

そのためにもどうか俺に帝国の力を貸してください」

ロイドはその場に土下座して帝国の重鎮たちに懇願する。

「僕からもお願いします」

クルトも同じようにロイドの隣に膝を着き、土下座をして懇願する。

「……………リイン君」

そんな彼らの姿にオリヴァルトは受け入れても良いのではないかとリインに目配せする。

「ロイドさん、確かめたいと言っていましたか……」

それはキアアの答えによっては、帝国と敵対することも辞さないという意味ですか？」

しかしリインの口から出て来た言葉は冷たかった。

「なっ!? ちが——」

誤解され、慌てて否定しようとロイドは顔を上げるが、それよりも先にリインが続ける。

「通商会議の時、俺は《赤い星座》のテロリストへの虐殺を黙認しました……」

それを貴方達はそうするほどに彼らは罪深くはなかったと責めましたが、ならキアが消し去ったガレリア要塞の軍人たちはあんな殺され方をしなければいけない程に罪深かったと言うんですか?」

「それは……」

「もうどちらが悪かったとは言えない状況なんでしょうが、キアはどんな形であつても《人を殺す》という一線、壁を越えたんです……そこから目を逸らす『欺瞞』を抱えた貴方達を俺は背中を任せる相手として信用できない。いや——」

頭を振ってリインは言い直す

「この期に及んでキアを叱ると言えない半端な正義でアリオスさん達に勝てると本気で思っているんですか?」

「っ——!」

リインの言葉に言い返そうとするがロイドの口は言葉を作らずに空しく動くだけに終わる。

「……………リインさんはキアを斬るつもりなんですか?」

そんなロイドに代わってクルトが尋ねる。

「ああ、後悔するとしても必要ならば躊躇うつもりはない」

「リイン君、それはあまりにも君らしく——」

「フフ、今のアルティナを殺せなかったせいで前のアルティナを死なせてしまった者は言う事が違うね」

過激なリインを諫めようとオリヴァルトが口を開くが、ワイスマンがそれを遮って笑う。

「っ——」

お前のせいかと一同がワイスマンを睨むが、むしろその反応に彼はいつそうに笑みを濃くする。

「——でしたら私はどうでしょうか？」

更にその場に新たな声が響く。

ミュラーの案内があつたロイド達と違い、帝国の駐屯基地となつて
いるその場に誰にも気付かれずに侵入した彼女は隠形を解いて姿を
現す。

「何者だっ!？」

ミュラーがいち早く反応して闖入者とオリヴァルトの間に立つて
剣を構える。

しかし東方の独特な服を纏つた少女はそれに目もくれずリインに
真つ直ぐに告げる。

「私はクロスベルがどうなろうと、キアちゃんがどうなつても関係
ありません」

恐ろしいと感じる程に冷たい声音の言葉に彼女を知っているロイ
ドとクルトは耳を疑う。

「《瘦せ狼》を殺す。そのためなら私はあらゆるものを殺し尽くしま
しょう」

伝説の凶手《銀》としてリーシャ・マオは言い切つた。

そこに《月の姫》、アーティストとしてのリーシャ・マオは存在しな
かつた。

・
*

ベルガード門の屋上にて、平らにされたガレリア山脈だつたものを
見下ろしたその存在は唸るように呟いた。

「いかん……タイミングを逃したか」

彼らのピンチに颯爽と登場し、正体を明かすつもりだつた彼は国防
軍と同じように空で繰り広げられた《騎神》の戦いに目を奪われてし
まつたことを嘆くのだつた。

140話 交渉

それは一枚の色紙だった。

この半年ですっかり慣れたものとなったそれをリーシャは呆然と見つめる。

「どうして……」

色紙の一番上に書かれた言葉はそれとは似つかわしくない題目と文面。

「借用書……」

それがリインからリーシャに渡されたものだった。

内容はイリア・プラティエの治療に対して、劇団アルカンシエルは代金として以下の対価をリイン・シュバルツアーに払うこと。

リーシャ・マオを含めたアルカンシエル一同での帝都の劇場での出張公演。

なおこれが為されなかった場合、十億ミラの違約金を払うことを約束する。

「なんで……」

規則正しい契約文に書き加えられているのはそれぞれのサイン。

『早く戻ってこないとオレがリーシャ姉の役を奪っちゃうからな』

「シュリちゃん……」

『リイン君のおかげでイリア君は元気だ。帝都で公演ができれば壊れた劇場を建て直す資金にもなる』

「アバン劇団長……」

『隠すものがなくなったなら、リーシャ・マオの本気の動きをみせてくれるんだよね？ 待ってるよ』

「先輩……」

そして――

『あんたにとって、一番大切なものはなに？ その大切なものを前にして頑張らずにいられるの？』

「イリアさん……」

契約書に書かれた寄せ書きにリーシャは俯き、震える。

復讐を理由に飛び出したが、それは半分劇団から離れる口実に過ぎなかった。

かつて《銀》の正体を知られたことでリーシャはリインを殺そうとした。

《痩せ狼》によって劇団員に観客たち、不特定多数の人間にリーシャの本質を知られることとなった。

「どうして……こんな……」

一番怖かったのは、あの暖かだった劇団の人達からの恨み言。公演を滅茶苦茶にされ、劇場は倒壊、イリアは瀕死の重傷。

その全ての原因は《銀》であるリーシャの存在に他ならない。

そして身勝手なことにリーシャは復讐を理由に、その責任から逃げ出した。

しかし、リーシャに届いた劇団の言葉は彼女が想像していた言葉は一つもなかった。

「どうして私なんか……全部私のせいなのに……」

血塗られた私が……闇の中に生きて来た私なんかがこんな温かい言葉を貰って良いはずがないのに……」

「そんなのみんながリーシャさんのことが好きだからに決まっているじゃないですか」

思わず零れたリーシャの弱音にリインが彼らの言葉を代弁する。

「リーシャさんが凶手だったとしても、それは変わらなかつた。それはいけないことなんですか？」

「リイン君……それでも私は……」

「復讐を否定するつもりはありません……」

「だけど、自分が死ぬための復讐だと言うなら、はっきり言って邪魔です」

「っ——」

「俺からはそれだけです」

一方的に言って背中を向けたリインにリーシャはただその場に立ち尽くした。

・*

「随分と厳しいことを言うんやな」

リーシヤを置いて歩き出したリインに独特な訛の声がかげられる。

「だけど誰かがちゃんと言わなければいけないかったことだと思えます
……」

リーシヤさんは無意識に凶手である自分が誰かに好かれるはずがないと思いついでいるところがありましたから」

「……………なるほど……………あの別嬪さんが凶手とはなあ……………」

それにしてもリイン君、すっかり説法も板についているやないか、ルフィナ姉の薫陶の賜物か？」

「そんな大層なことは言っていないですよ。ケビン神父」

らしくないことをしているとリインは自嘲しながらケビンに向き直る。

「それで帝国のクロスベルの侵攻に七耀教会が協力するとはどういうことなんですか？」

「それはなあ」

明らかに無理をしている顔のリインにケビンは彼にこそ、神父のありがたい言葉を告げるべきだと理解しつつも、守護騎士として答える。

「君のお父さんが頑張ったせいや」

「……………この場合、テオ父さんではなくギリアス・オズボーンのことですよ？」

リインの確認にケビンは頷いて続ける。

「クロスベルの独立宣言から色々調べ取ったみたいで……………」

うちには協力要請、遊撃士協会には《風の剣聖》のことで抗議文を送りつけてな。今は連絡が取れなくなったクロスベル支部のことでエステルちゃん達はレマン自治州に出頭させられとるんや」

「そんなことになっていたんですか……………」

ケビンが教えてくれた外の国の動きにオズボーン宰相の周到さに

感心する。

「ここだけの話やけど、ディーター大統領は《幻の眷属》の末裔みたいでなあ……」

失われた《幻の至宝》を復活させるために《D∴G教団》を影から操っておつたらしい」

「それは俺も知っています」

「ま、オレ個人としてもクロイス家のやり方は気に食わんのや……」

他人の手を汚させて、自分はその罪とは無関係な顔をしてヒーロー気取り、これならあのワイスマンの方がなんぼかマシちゆうもんや」

「ほほう、それは嬉しいことを言ってくれるね。ケビン・グラハム」

「げっ——」

噂をすれば影と言わんばかりに現れたワイスマンにケビンは顔をしかめる。

「ふふ、君とこうして顔を合わせるのには《リベル・アーク》のあの時以來かな？」

「なあリイン君、本気でこんな奴と手を組んどるのか？」

「言いたいことは分かります。だけど現在のクロスベルの内部の情報を持って来てくれたのは彼ですから」

「せやけどな……」

「そう邪険にしないでくれたまえ。今の私はリイン・シユバルツァーに誓って殺生は控えているのだから」

「俺に誓われてもなあ……」

ワイスマンの言葉にリインは思わず遠い目をする。

「まあこんなことを言っても信じてもらえないのは分かっているよ……」

しかし、ならばここはお近づきの印として君が知りたい情報を一つ提供しよう」

「な、なんやと？」

ケビンは思わず身構える。

「クロスベル独立国は民間人に《グノーシス》を服用させている。名はヴァルド・ヴァレス……」

旧市街にたむろしていた所謂街の不良で、これは関係ないかもしれないが友達にワジ・ヘミスフィアと言う青年がいるらしい」

「……………は……………？」

ワイスマンの言葉にケビンは二重の意味で驚く。

「なあリイン君……………《教団事件》の時に押収した《グノーシス》ってどないしたん？」

「クロスベル警察が責任をもって保管・処分すると言っていたので任せました」

「そうかそうか……………ワジが何か隠しとると思っただけどそういう事やったんやな」

リインの答えにケビンはうんうんと頷く。そして――

「アホかクロスベルっ!？」

ケビンの叫びが蒼い空に響き渡った。

・*

クロスベル市を覆う半球状の不透明な結界。

許可された者だけの通行を許し、認められない者は拒む。《零の至宝》の力によって作り出された絶対障壁。

例えば帝国軍や共和国軍が《神機》を潜り抜ける事が出来たとしても、その《結界》が彼らの侵攻を阻む最強の盾となっていた。

「ソーニャ司令、本当にベルガード門を放棄して良かったんですか？」

結界の境界に防衛ラインを構築したノエルは指揮官であるソーニャを振り返る。

「アリオス長官からの指示よ。帝国の《灰の騎神》に対して国防軍の通常戦力ではベルガード門は護り切れないという判断は間違っていないわ」

「それは……………そうかもかもしれませんが……………」

理屈は理解できるが、結界に立ち往生する敵を撃つだけの一方的な陣形にノエルは強い違和感を覚えずにはいられない。

「心配し過ぎだノエル。俺達には《勝利の女神》がついているんだ。

帝国の悪魔になんて負けるはずがないだろ」

「そうだぜ。共和国の爆撃機を落とすために撤退するしかなかったけど、あのままやっていけば《神機》が勝っていたのは間違いないなかつただろ」

「ああ、戦車なんかなくても俺達は二大国に勝てるんだ」

「みんな……そう……ですよね」

気軽い調子で笑っている同僚たちにノエルは浮かない顔をする。

「ノエル少尉、切り替えなさい」

「ソーニャ司令………はい」

呑み込み切れない不安をソーニャの一言でノエルは思考から追いつ出す。

「私たちが……私たちがクロスベルを帝国から守らないと」

何度もノエルは言い聞かせ、落ち着きなく導力ライフルに触れる。

帝国は列車砲では飽き足らず、それ以上に恐ろしい《騎神》を造り出していた。

その力をクロスベルに向けられることに憤りを感じずにはいられない。

「来たぞっ！」

誰かが街道の向こうを指差して声を上げる。

西クロスベル街道を我が物顔で歩いて来るのは二ヶ月前に同じことをした《灰の騎神》。

「合図を出すまで撃たないように」

ソーニャが逸る軍人たちを諫める。

その言葉に導力ライフルを構えようとしたノエルは引き金から指を外す。

「……まで帝国軍は結界まで辿り着けなかった……これに阻まれて引き返してくれるなら良いけど」

果たしてデーターが絶賛していた結界は彼にどれだけ通じるのか、ソーニャは不安を感じながらマイクに向かって言葉を作る。

『こちらは『クロスベル独立国』、ベルガード門司令ソーニャです……帝国軍に告げます、貴方達がしていることは領域侵犯であり、直ち

に引き返さなければ武力を持って迎撃させてもらいます』

半分は強がりです。ソーニャは警告する。

国防の要だった神機達が彼によって撃破されてからまだ時間は経ってない。

新生した《神機》についても大統領からの情報はなく、結界越しに一方的に攻撃できる利点がなければとてもではないがただの人間に相手ができるわけがない相手。

『こちらは帝国軍臨時武官リイン・シユバルツァー』

ソーニャの呼び掛けに《灰》は足を止めて応える。

『帝国政府はクロスベルの独立を認めておらず、『独立国』を認めていない。よってその要求には正当性はないと判断する……』

エレボニア帝国の要求は今回の事件の扇動者であるデーター・クロイスの引き渡し……』

彼には《D∴G教団》の繋がりがある可能性を疑われている……』

資産凍結から始まる非を認め、速やかな武装解除を宗主国であるエレボニア帝国代表としてクロスベル属州国に要求する』

聞こえてくる少年の言葉にソーニャは眉を顰める。

陣形を保つ軍人たちはあまりにも一方的な帝国の言い分に憤りを露わにしてソーニャに射撃の許可を求める。

『あ、あー。こちら七耀教会の者なんですが』

一触即発の空気を破ったのは独特な調子の声で《灰》の肩に立ち上がった七耀教会の神父だった。

彼はその手にマイクを持ち、少年に代わって交渉を始める。

『クロスベルの独立を認めておらんのはアルテリア法国も同じではない……』

根拠としては色々あるんやけど、貴方達が国防の要として使っている《神機》などの技術が《D∴G教団》に由来する代物であることが一番の理由や……』

更にはその結界に閉じこもって儀式を行おうとしているという情報をオレらは独自のルートで入手しておる……』

クロスベルが潔白だと言うなら、すぐにこの結界を解いて調査に協

力して欲しい』

『……………アルテリア法国は帝国に組したと言う事かしら？』

『エレボニアとクロスベルの関係にアルテリアは口を挟むことはあらへん……………』

せやけど《D∴G教団》の問題は別や。これに関しては教会も遊撃士も強制捜査を行う権利を有しておる……………

正式な令状だつてここにあるんやで』

その令状を掲げて見せる神父にソーニャは唖る。

本来なら国家元首となつたディーターを狂信者と見做すことに異を唱えるべきなのだが、《神機》の存在、クロスベルを守る「結界」。

そして半年前の教団事件の中心にいたキアアが存在が七耀教会の神父の言葉に信憑性を感じてしまう。

『あんたらにとつて今は自分達を中心に世界を変えているええ気分なのかもしれへんけど、冷静に考えてもらえんかな？』

『残念だけど警備隊にせよ、国防軍にせよ《文民統制》の原則は変わらないわ……………』

問題があるとはいえ、『クロスベル独立国』が成立して大統領という国家元首がいる以上、私たち軍人は、勝手な判断で武力を行使することは許されない』

『それはちやうやろ。大統領が間違っていると思つたのなら他の誰でもないクロスベルの中の誰かが立ち上がつて正さなければならぬ……………』

オレやリイン君ではディーター・クロイスを捕まえることはできても、クロスベルが第二の《D∴G教団》となつていないことを証明することはできへん……………

あんたら軍人が護るべきものは国家の体裁じゃなくて、そこに住んでいる人じゃないんか？』

『それは……………』

『それからな、あんたが言つとるディーター大統領はクロスベルの市民に《グノーシス》を使わせておる』

その言葉に国防軍がざわめき出す。

「そんな馬鹿な！」

『デタラメを言うな！』

『デタラメとちやうで。ヴァルド・ヴァレスってディーター大統領の私兵の男がそうだってちゃんところちも調べとるし、裏取りもしてある』

「どうしてそれをつ!? あ——」

神父の言葉に反応してしまったノエルは失言だったと口を噤むが、吐いた言葉は戻せない。

同僚たちの視線がノエルに集中し、思わず立ち竦む。

『これで分かったやろ?』

ディーター大統領に国家元首としての『正当性』はあらへん……

せやからもう一度言わせてもらおう、冷静に何が正しいのか、間違つとるのか、クロスベルの市民を護るための判断をして欲しい』

真摯に訴えかけてくる神父にソーニャは苦虫を噛み潰したように唸る。

「ソーニャ司令! 構うことないですよ! 所詮は帝国に組した奴等なんだ!」

「そ、そうだ七耀教会がなんだって言うんだ。元はと言えばあいつらがクロスベルを属州国として認めたせいでもあるんだ」

「クロスベルを盟主にした新しい秩序が生まれようとしている今、七耀教会は必要なんですか!」

「クロスベルの独立を認めない国なんて全て滅べば良いんだ!」

『やめなさいっ!』

暴走しようとする国防軍人たちにソーニャはマイクを使って制止する。

「何で止めるんですかソーニャ司令?」

ソーニャの背後でノエルが疑問をぶつける。

「あたしたちは警備隊で《国防軍》で……あたしたちがクロスベルを護らないといけないんですよ?」

「ノエル少尉?」

ゆらりと覚束ない足でにじり寄って来るノエルにソーニャは悪寒

を感じる。

「帝国軍は本当にあの恐ろしい列車砲を撃つたんですよ？ 命中したら何百もの犠牲者が出たかもしれない大量破壊兵器を……」

そして今、その列車砲よりも恐ろしい『悪魔』がクロスベルを滅ぼそうとしている」

気付けばいつからだろうか、彼女たちの足元には黒焰色の不気味な花が咲き乱れている。

「ソーニャ司令はクロスベルを帝国に売るって言うなら、あたしは……あたしは……」

ノエルは体を震わせながら導力銃を固く握り締め、その銃口をソーニャに向ける。

「貴女……その目……」

ノエルの目に赤い色が揺らぐ。

資料で知っている《グノーシス》を服用した者の特徴。

ベルガード門で怪しげな薬は出回っていなかったと断言できるのに、ノエルだけではない国防軍たちの瞳は程度の差はあっても次々に赤に染まっていく。

「まさか本当に……」

それが《グノーシス》を服用したせいではなく、クロスベルの結界内に充満した《零の至宝》の神気による充てられたせいだとは何の知識もないソーニャには判断することはできなかった。

ただはつきりしているのはノエルを始めとした国防軍はもはや正気ではないこと。

「あたしがクロスベルを護る……あたしが……わたしが……俺達が……《零の至宝》がクロスベルを護ってくれる……だから邪魔しないで」

何かに背中を押されるようにノエルはソーニャに向けた導力銃の引き金を――

その瞬間、凄まじい轟音が響き渡る。

「何が!？」

音に振り返れば、いつの間にか《灰》から降りた少年が結界を斬り

つけていた。

「あ、あはは、見てくださいソーニャ司令！ あのライン・シュバルツアーにもクロスベルを護る結界は破れないんですよ！」

「だったら何を畏れる必要があるんですか!? もう帝国にも共和国にも法国にも遊撃士協会にも畏れる必要なんてないんですよ！ あはははっ！」

「ノエル少尉……」

「狂ったように笑うのはノエルだけではない。」

「ノエルと同じように哄笑を上げる部下たちにソーニャは恐ろしいものを感じずにはいられない。」

「身に余る“力”を振りかざした反動。」

「かつて帝国で錬成された《鋼》のように、《零》もまた人の手の中で納まる道理はない。」

『聞きなさいライン・シュバルツアー！ この結界の解き方は——』

「ソーニャは手に持っていたマイクに向かって叫ぶ。」

「それに反応してノエルが、国防軍が一斉に導力ライフルを向けて来るが、ソーニャは構わず続ける。しかし——」

「ヴァリマールツ！ ケビン神父っ！」

『応っ！』

「どうなっても知らんからな！」

「ラインの力強い声が彼女の声を掻き消し、彼は斬り損ねた結界に構え直す。」

「その背後で《灰》が両手を前に突き出し、装甲をスライドさせて増幅器を回転させ、生み出された“力”を起動者に送る。」

「我が深淵に煌く蒼の刻印よ……天に上りて煉獄を照らす光の刃と化せ」

「神父の背に青白い《聖痕》が浮かび出現し、彼が纏う光はラインへと送られる。」

「——っ」

「胸を押さえるラインは注ぎ込まれた“力”に苦し気に呻く。」

「——神気………合っ！」

自分の力、騎神の力、そこにオリジナルの《聖痕》の力を混ぜ込み昇華させる。

禍々しい聖痕がリインの胸から広がり、顔まで浸食する。

ソーニヤに見えたのはそこまでだった。

遠目にも関わらずリインの姿を見失い、結界を斬りつける音と衝撃が連続して炸裂する。

どれだけの斬撃を繰り出したのか、一息の呼吸の限界かりインは斬撃を止める。

目にも止まらない無数の斬撃を受けたにも関わらず、結界は依然とクロスベル国防軍とエレボニア帝国軍を隔てていた。

しかし――

「――八葉一刀、無刃剣・滅」

リインが太刀を納めた瞬間、クロスベルを護っていた絶対障壁は音を立てて砕け散った。

「……………え？」

無敵を誇るはずだった結界の消失に国防軍たちは我が目を疑う。

「あれ……………あたしは……………何でソーニヤ司令に銃を向けて……………」

“結界”が壊れたことでその衝撃により足元の花草は吹き散らされて正気に戻ったノエルは直前に自分がやろうとしていた“愚行”に震えて導力銃を取り落とす。

「司令……………あたし……………あたしは……………」

頭を抱えてノエルは狼狽する。

いくらソーニヤがケビン神父の、ひいては帝国の侵攻を受け入れようとしていたとしても、そこにあるのはクロスベルの安寧のためだった。

それは分かっているはずなのに、ノエルは“魔が差した”ようにソーニヤを裏切り者として撃とうとした。

短絡的に尊敬する上司を手に掛けようとした“自分が信じられない”。

それはノエルだけではなく、国防軍も同じで――その明確な隙をリインは――リインと彼女は逃すことはしなかった。

「合技・比翼鳳凰撃っ！」
ラインとリーシャの合わせ技が国防軍たちを蹂躪した。

141話 支援課の真実

「今頃リイン君はクロスベルに突入している頃か……」

クロスベルへの侵攻準備で慌ただしくなっている帝国軍を尻目にロイドは更地となったガレリア要塞から結界が消えた空を眺める。

時刻はロイドの気分を示すような黄昏時。

東に位置するクロスベルの空には既に夜の帳が落ち始め、もうすぐ夜が訪れることが分かる。

「ロイドさん……」

「すまないクルト、折角帝国に脱出させて上げられたのに——」

「それ以上言わないでください」

何度目かになる謝罪にクルトは嘆息する。

「氣遣つてくれてるのはありがたいですが、いつまでも子供扱いしないでください……」

「僕だってまだ特務支援課のつもりですから」

「……そうだな」

クルトの言葉に頷いてロイドはクロスベルに向けて出発した戦車を振り返る。

「クロスベルはどうなるんだろうな？」

「………こんなこと本当は言うべきではないんでしょうが」

ロイドの呟きにクルトはそう前置きをして答える。

「クロスベル問題の根本の原因は二つの大国がその権利を主張し合っていたことが原因です……」

どちらか一方に統治が委ねられれば、僕達が憤りを感じていた問題の大部分は解決するでしょう」

「そうか………そうだな……」

「そしてどんな形であれ、民衆はデューター大統領を選び、帝国と共和国に弓を引く道を選びました……」

その選択に、僕達が口を挟む権利はないでしょう」

「ああ……」

「帝国政府はクロスベルの《零の至宝》を《D∴G教団》の御子と既に公表して各国に働きかけています……」

恐ろしいことにオズボーン宰相はもうクロスベルを占領するための絵を描き切っていたんでしよう」

アルテリア法国や遊撃士協会を巻き込み、もう帝国が内戦を理由にここから手を引いたとしてもクロスベルはその二つと戦わなければならぬ。

果たしてクロスベルの独立に賛同した小国や自治州は帝国と共和国に敵対する覚悟があつても、七耀教会と遊撃士協会の二つと争う覚悟はあるのだろうか。

そして本当に恐ろしいのは、オズボーン宰相が倒れても各国がクロスベルを第二の《D∴G教団》と認識する流れを変えることはできないと言う事だろう。

「リインさんがいるから、とかそういう次元の話ではありません……もう準備の段階で帝国がクロスベルを占領する大義名分が整っているんです」

「……………本当に俺達にできることはもうないんだな……………いや……………」

この期に及んで逮捕するべき敵はアリオスとディーターしか見れない自分にロイドは呻く。

「クルトはこれからどうする？」

さっきの話とは別に、帝国でも内戦が始まってクリスが狙われているかもしれないんだろ？

護衛役として気にならないのか？」

「もちろん気になりますが今は護衛役の任は解かれていますし、自分が関わった子供を放り出して駆け付けたら、それこそセドリックや父に逆に怒られるでしょう」

「……………羨ましいな」

「え……………」

「離れていてもちゃんと通じ合っている。俺は……………あんなに近くにいたのにキーアのことを何一つ理解して上げることができなかつたの

に」

「ロイドさん……」

「あの時、俺はロクな言葉を返せなかっただけじゃない……」

キーアが思い詰めていたことにさえぜんぜん気付いていなかった。キーアの素性や兄貴を殺した犯人もちゃんと突き止めようと誓ったはずだったのに……

ノエルの事にしたって、俺は彼女の気持ちに共感して上げることができなかった」

「……それは僕達も同じです……」

特に僕は一番キーアと一緒に時間が長かった……

それに教団事件の時、あの人を呼んだのはレンちゃんですが僕たちはあの人頼らなければ事件を解決できなかった……

それなのに実際の手柄は特務支援課に譲ってもらった形にしてもらって……」

その悔しさもあって、特務支援課は各自のスキルアップを目指すために一時解散した。

キーアは解散の日に合わせて日曜学校に通うことになったが、振り返って見ればあの時から自分達のことばかりを優先していたかもしれない。

「……つくづく保護者として失格だな」

「ロイドさん……だったら貴方の踏んばりどころは“ここ”じゃないんですか？」

憔悴して、自嘲するロイドを見兼ねてクルトは激励するように告げる。

「クルト？」

「何もかも投げ捨てて逃げ出したい気持ちは良く分かります」

かつてリインに負けて誇りも自信も砕け散ったことがあるからこそ、クルトは今のロイドの気持ちを理解できる。

「僕達にできることは限りなく少ないのも事実です……」

でも、リインさんにキーアを斬らせないのは僕達にしかできないことじゃないんでしょうか？」

「キアを斬らせない……?」

「ロイドさん、まさか本気でリインさんがキアを斬りたいと思っ
ていると考えているんじゃないでしょうね?」

間の抜けた言葉を返すロイドにクルトはジト目を向ける。

あの日、特務支援課に残されたリインがキアに贈ったジャケット
やアクセサリー。

そこに込められた導力魔法で施された加護の数々。

教団事件の時にキアの身を案じたリインの過保護な装備に彼が
無条件でキアを護る対象だと思っっていることは間違いない。

「帝国軍人としてのリインさんにとっては戦うしかない相手だとして
も、僕たちはそうじゃない……」

話し合いは通じないかもしれないし、説得ができたところでクロス
ベルを取り巻く情勢はもう変えられない。だけど、まだ失われてもい
ないのに「護る」ことを諦めるなんてヴァンダールとして認めるこ
とはできません」

「クルト……そうだな。俺達がキアを諦めるわけにはいかないよ
な」

真っ直ぐな眼差しを向けて来るクルトにロイドは言葉を失う。

特務支援課設立から間もない頃に家出少年として保護した少年の
成長にロイドは感慨深いものを感じずにはいられない。

そしてそれはロイドだけではなかった。

「アハハ、君も隠れ熱血少年だね。全く誰に似たんだか」

「え……?」

「この声は……」

二人が振り返るとそこには、自分達が捕まったあの日にも別行動をす
ると姿をくらませていたワジが蒼い騎士装束を纏って立っていた。

「ワジ、どうしてこんなところに……その格好、もしかしてお前——」

「フフ、七耀教会、星杯騎士団所属。守護騎士第九位《蒼の聖典》ワジ・
ヘミスフィアさ。改めてよろしく頼むよ」

「なっ——!?!」

「まさかあのワジさんがケビン神父と同じ七耀教会の守護騎士!? 聖

職者!? ワジさんが!」

「ハハ、良いリアクションしてくれるね、クルト」

驚愕する二人にワジは楽しそうに笑う。

「改めての自己紹介は時間がないから後にするとして、君達がリイン・シュバルツアーを追い越してキーアと話したいと言うなら僕が足を用意しよう」

「ワジ……」

突然拓いた道にロイドは戸惑う。

「ワジ、ランディ達の事については何か知っているか?」

「一通り彼らがどこに監禁されているかは調べはついているよ。ただ集合は諦めてもらえるかな?」

悠長にみんなを集めていたら、リイン・シュバルツアーが先にキーアの所に辿り着いてしまうからね」

「無事なんだな?」

「それは保障するよ」

その答えにロイドは安堵し、改めて考える。

ワジが七耀教会の守護騎士だったことにはロイドも驚いたが、特務支援課としての仲間であることには変わらない。

相変わらず説明は少なく斜に構えた態度だが、彼ができると言うならば信用しない理由はない。

「分かった。俺達をキーアの所に連れて行って——」

「それは待ってもらおう」

一度は挫けたはずの心に火が灯る。

しかし、そんなロイドに水を差す新たな声がその場に現れる。

「お前はコアヒム——いや、ゲオルグ・ワイスマン……」

「貴方はリインさんと一緒に行ったんじゃないのか?」

現れたワイスマンにロイドとクルトは警戒心を露わにする。

「ふふ、生憎と私はリイン・シュバルツアーに背中を任せてもらえる程に信頼はされていなくてね……」

それに見学するならやはり最前線より特等席の方が良いだろ?」

同意を求めるワイスマンに三人は一様に顔をしかめる。

「もしかしてリイン君に俺達が動くなら止めるように頼まれたのか？」

「いやいや、むしろそれに関しては好きにするようにと言っていたさ……」

むしろ出発するまでに立ち直っていれば、彼も君達を受け入れるつもりでいたくらいだからね」

「っ——」

キーアに至るための可能性を自分から潰していた判断の遅さにロイドは今日何度目になるか分からない後悔をする。

「だったら僕達に『最悪の破戒僧』が何の用だい？」

「『碧き零の計画』……先程君達に歴史改竄の計画だと説明したが実はそれは全てではないのだよ」

「何……？」

「これはリイン・シュバルツァーにも話さなかったことだが……」

歴史改竄はあくまでも黒幕が求めたクロスベルのための計画。《零の御子》の望みは別に存在しているのだよ」

「……………キーアの望み、それはいったい？」

思わずロイドは前のめりに尋ねていた。

その反応にワイスマンは口の端を釣り上げて笑みを浮かべる。

「ロイド・バニングス。クルト・ヴァンダール、そしてここにはいないがランドルフ・オランダ、エリイ・マグダエル。そしてティオ・プラトーの計五人」

順番に名前を上げて行くワイスマンにロイドは首を傾げる。

クルトは少し時期はずれるがほぼ初期の特務支援課メンバーである五人。

「キーアにとって最初の特務支援課メンバーだね、それがいったい何だつて言うんだい？」

呼ばれなかったワジは急かすように続きを促す。

「君たちは既に死んでいるのだよ」

ワイスマンは促されるまま、あっさりと答えを告げた。

「……………はっ？」

「僕達が……死んでいる?」

名指しされたロイドとクルトは思わず顔を見合わせる。

当然のことながら、二人の顔は至って健康的である。

「正確に言うならば、因果の段階で既に死ぬ運命だった存在という事だよ」

「因果……死ぬ運命だった……?」

「それはいったい……」

「……キアの力は歴史の改竄……成程、そういうことか」

意味深な言葉に首を傾げるロイド達に対してワジはワイスマンの言葉の意味を理解する。

「流石第九位と言った所かな……」

そう、本来の歴史において特務支援課は教団事件の際に皆殺しにされるはずだった」

「だけどロイド達は生きている。つまりキアが歴史改竄を行ったというわけか」

「そう本来なら、身の程を弁えずにヨアヒムの逮捕に向かった君たちは成す術なく殺されていた……」

君達がこうして生きていられるのは、彼女がレンを切っ掛けにリン・シユバルツァーを因果に巻き込んだおかげだ」

「そんな……」

「確かに僕達はヨアヒムに負けそうだったけど……」

その時のことを思い出して二人は苦い顔をする。

「残念なことにそれだけではないのだよ」

そんな彼らにワイスマンは更に追い打ちをかける。

「カルバード共和国に逃げた私の元憑代だったアーネスト・ライズにロイド・バニングスは殺されるはずだった」

「なっ!?!」

「通商会議の時、帝国解放戦線の凶弾から仲間を庇ってクルト・ヴァンダールは死ぬはずだった」

「っ——」

「ランドルフ・オルランドはシャーリイ・オルランドに……」

他の二人はもちろんヘミスファイア卿、君も一人で《鋼の聖女》に挑み、彼女の部下たちに負けて命を落とすはずだった……

君達が生きてこうしていられるのは《零の御子》が君達を護り導いて来たからに他ならなかったのだよ」

「それじゃあキアにとつての《碧き零の計画》というのは……？」

「因果律の修正力と言うべきものなのかな？」

さながら帝国の黒の史書による預言の様に、君達の死を回避すればする程、その後の事件では多くの人を巻き込んで君たちは死に至る……

《零の御子》の目的はそんな死の因果の鎖に囚われている君達を解放すること」

ロイド達は明かされた真実に一様に言葉を失う。

「フフ、どんな気持ちだい？」

護るべき少女に護られていた気持ちは？

もつと言えば特務支援課が民衆に認められたことさえも、彼女が人々の感情をそう仕向けたからに他ならないのだよ」

そんなロイド達にワイスマンは愉悦の笑みを浮かべて追い打ちをかける。

「……………ここで僕達がキアの所に向かっても大死すると貴方は言うのか？」

何かを言わなければ折れると、クルトは思いついたことをそのまま口にする。

「いやいや、君達が今回の事件で死ぬことはないだろう」

「それはやっぱりキアが俺達を守ってくれているからか？」

「いいや。《零の御子》が《鋼の聖女》や《赤い星座》にロイド達を傷付けないで、とお願ひしているからだよ」

「……………」

今度こそロイド達は完全に言葉を失う。

「ふふ、そういう意味では確かにリイン・シユバルツァーよりも君たちの方が彼女たちを倒せる可能性は高いかもしれないな……」

何と言っても彼女たちは《零の御子》に手加減をお願いされている

のだから」

「っ——」

「くっ……」

「言ってくれるじゃない」

その三人の表情にワイスマンは満足そうに頷き、さらにもう一つの
真実を明かす。

「フフ、実は《碧き零の計画》には一つの問題がある」

「……………問題…………？」

「帝国には《零の至宝》と同じ《幻》の力を持つ存在がいる……」

その「力」を預かっている代行者を排除しない限り、完全な因果の
改変を確定させることが《零の御子》にはできなかつた」

「それは……………まさか……………」

「そう、君達を生かす因果を成立させるためにはリイン・シユバル
ツアーという存在が邪魔なのだよ」

142話 大乱戦

「オオオオオッ！」

異形の鬼がオルキスタワーの前の広場で暴れる。

「ふぎけんなっ！ ふぎけるなっ！ 前座の分際でっ！」

憤りを露わにし鬼——ヴァルドの攻撃は激しさを増していく。

剛腕から繰り出された掌打の衝撃波も、颯風を巻き起こす木刀も、巨大化した体を利用した体当たりも。

繰り出す攻撃は掠めることさえできず、それでいて抜く素振りのない太刀がヴァルドを苛立たせる。

そして何より——

「俺を見下してんじゃねえっ！」

リイン・シユバルツアーの目にヴァルドは更に攻撃を激しくする。

だが、どれだけ攻撃してもヴァルドの攻撃は紙一重で届かない。

「くそ、くそ、くそっ！」

「大した力だが、パワーだけか……」

失望したと言わんばかりの呟きがさらにヴァルドの心をかき乱す。

「ガアアアアアアッ！」

彼がヴァルドにとつての本命の前座だということのを忘れヴァルドは全力で潰しにかかる。

「ヴァルド・ヴァレス。一応聞いておくが君にその“力”を……いや

“グノーシス”を与えたのはディーター大統領か？」

激しさを増す攻撃の嵐の中、顔色一つ変えないリインは攻撃の代わりに言葉を投げかけて来る。

「舐めてんじゃねえっ！」

そんなリインに激昂してヴァルドは手を伸ばし——半身をずらしたリインに脛を蹴られてつんのめって転ばされる。

「ちっ——がっ!？」

次の瞬間、リインはヴァルドの胸に震脚を叩き込み、その鬼の身体をまだ真新しい広場の地面にめり込ませる。

「もう一度聞く。君に“グノーシス”を与えたのはディーター大統領

だな？」

「っ——」

見下ろされた眼光にヴァルドは息を呑む。

数々の喧嘩に明け暮れて来たから判る、本気で切れた者の凄み。

太刀を抜かれていないのに、刃を突きつけられていると錯覚してしまう程の濃密な殺気にヴァルドは思わず答えていた。

「あ、あの青いクスリなら……大統領の娘からもらった……」

「大統領の娘……マリアベルさんか……紅色の方じゃないんだな？」

「あ……ああ……間違いない——ぜっ!!」

屈辱を噛み締めながらヴァルドは領き、隙をついて寝転んだ姿勢から木刀を振る。

死角からの一撃だったにも関わらずリインは見えていると言わんばかりにその一撃も紙一重で躲す。

「くそっ——」

ヴァルドは身を起こしながら悪態を吐き、スカした表情に憎悪を滾らせる。

「気に入らねえ……」

以前クロスベルの街で見かけた時があるが、その時ワジが舎弟の様に下手に出てへりくだっていた時に感じた以上の不快さが心をかき乱す。

その直後の記憶は何故もなく、今回は彼の姿を見た瞬間に武者震いを感じて問答無用に襲い掛かったが結果は今に至る。

「あのアマ、適当なこと言いやがって」

“グノーシス”を使えば最大限の“チカラ”が得られると言ったマリアベルにヴァルドは恨み言を呟く。

確かに“チカラ”を得ることはできた。

その“チカラ”は大陸横断鉄道の列車よりも強く、ワジとそのおまけの特務支援課を蹴散らし、過去と弱さの象徴を喰らったことで更に高めて来た。

なのにその“チカラ”は目の前の小僧に全く通用していない。

どころか憐れみの眼差しを向けられている始末。

「その目で俺を見るなっ！ 俺は《鬼砕き》ヴァルド・ヴァレスだぞっ！」

「それがどうした？」

侮蔑するように吐き捨てリインは目の前で昂るヴァルドを無視して在らぬ方向を見る。

その態度にヴァルドはそれまで以上に爆発する。

「ガアアアアアアッ！」

獣のような咆哮を上げ、渾身の木刀の一撃をリインに叩きつける。当たると思った一撃は残像であり、リインは危な気なく木刀の上に着地し、そのまま踏み砕く。

「なっ!？」

「眠れ」

リインは静かに語り掛け、折れた木刀に目を剥くヴァルドの懐に入り込み、拳を繰り出す。

「破甲拳」

まるで導力車に撥ね飛ばされたようにヴァルドは吹き飛び、オルキスタワーの前の坂から転がり落ちていく。

そんな彼に目もくれず、リインは油断なく先程見た建物に注意を向け――

「お待ちせしました」

夜の空からリーシャが舞い降りる。

「リイン君の言った通り、隠れていた《赤い星座》の狙撃兵達を無力化して来ました……」

ただ《赤の戦鬼》の姿はありませんでしたが

「お疲れ様ですリーシャさん」

リインは一仕事してきてくれたリーシャを労い、振り返る。

「どうですかケビン神父？」

「あーうん、どうみても《グノーシス》中毒者やな」

気を失ったヴァルドに寄り添って診断したケビンはため息交じりに応える。

「アンタら、これがどういうことか本気で分かっとなるやろな？」

「っ——」

遠巻きに先程の戦闘に見守ることしかできなかった国防軍たちはケビンに睨まれて顔を曇らせる。

もつともそれだけで国防軍の軍人たちは彼らの手の中にある導力ライフルをラインに向けることはなかった。

それを確認し、リーシャは一定の警戒心を残したまま、私服に着替えたラインに向き直る。

「それにしてもこんな方法で国防軍を無力化できるとは思いませんでしたね」

「何で国境から軍服を脱いできたのか気になってはいたんやけど、まさかこんな『手』を使こうて来るとはな」

「ええ、正直俺も半分くらい無理だと思っていたんですけどね……」

ヴァリマールを郊外に待機させ、直接クロスベル市街に乗り込んだライン達を国防軍はすぐに包囲した。

一応は軍なので降伏勧告を告げられ、ラインは先の防衛線と同じように帝国政府が用意した定型文ではなく別に用意していた言葉を返した。

『帝国軍人としてではなくIBCに資産を預けていた顧客のライン・シユバルツァー個人として資産凍結について抗議に来た。責任者の所に連れて行け』

それが単独でクロスベルに先行しようとするラインを引き留めようとしたクレアを納得——否、困惑させた秘策。

IBCの利用者が国など関係なく資産凍結に文句を言い殴り込みに来た。

顧客が持つ当然の権利を主張するラインに国防軍は困惑し、その動揺に付け入ってあの手この手で押し切りオルキスタワーまで案内させた手腕にケビンはルフィナの影を感じる。

「それにしてもクロスベル独立国というのは街の中で違法薬物中毒者の暴漢が暴れていても誰も助けてくれないなんて随分と治安が悪いんですね」

更にラインは非難の眼差しを送り、委縮する国防軍たちにプレッ

シャーをかける。

「おいおいリイン君、ちよう落ち着こうな」

「俺は冷静ですよ。だからこんな手の込んだ方法を使っているんです。当てが外れた代案でもありますが」

「てつきり市街に近付けば《零の騎神》が現れると思っていたため、オルクスタワーに直接乗り込まなければならなくなった。

「ヴァリマールに乗って直接空から乗り込むという方法もあったが、できるだけ穩便に事を進めたかったのだが、その氣遣いはあまり意味はなかった。」

「まあオレもここまであからさまとは思つたらなかったけど」

「目を見て話さないリインにケビンはいよいよ導火線が短くなっているのを感じる。」

「——あかん、エステルちゃんかアネラスちゃん助けて……」

「心の中で思わずケビンはリベールの女神達に祈る。」

「帝国で起きた内戦。」

「今すぐVII組の仲間たちと義妹の安否を今すぐ確認したいという念がリインの中で高まっているのが分かる。」

「リインは確かにお人好しではあるが聖人というわけじゃない。」

「ただでさえ不本意なクロスベル侵攻の先兵をしていることもあり、フラストレーションが溜まる一方だろう。」

「大丈夫ですよケビン神父……俺は平気です」

「そう言う感情のない表情はケビンに見覚えがある。」

「それは綺麗だと夢を見て従騎士となった自分が現実を目の当たりにした時の顔だった。」

「なあリイン君——」

「さあ、行きましょう。おそろくここからが本番——」

「ハーハッハッハ！」

「リインの言葉を遮ってその笑い声が広場に響き渡った。」

「待っていたぞリイン・シユバルツァー！……ここで——」

「良し——殺そう」

「彼が何かを言い切る前にリインは腰の太刀に手を掛ける。」

「待て——待ってリイン君、早まったらあかん！ 気持ちも良く分かるけど」

この極限までストレスが加えられている中で空気を読まずに登場したのは結社のギルバート・ステイン。

「ふ……オルデイスでは縁がなかったが、そもそもあの大会では僕の真の力を見せることはできなかった……」

さあ今こそ見よつ！ 超結社兵を超えた超結社兵Ⅱの姿を——ウオオオオオッ！」

「待ちやがれですわっ！」

「あわびっ！」

胸を押さえて雄叫びを上げたギルバートは何処からともなく神速で飛来したデュバリイの飛び蹴りに吹き飛ばされた。

「あああああーっ！」

「ふん」

高台に位置するオルキスタワーの広場の柵を乗り越えて落ちて行くギルバートを一瞥するだけで済ませ、デュバリイはリインに向き直る。

それに合わせ、アイネスとエンネアが転移術で彼女の背後に現れる。

「久しいなリイン・シュバルツァー」

「ふふ、オルデイスではデュバリイがお世話になったみたいね」

軽く挨拶をしてくる二人だが、纏う気配は決して友好的なものではない。

「リイン・シュバルツァー。オルデイスで果たせなかった対決ここで——」

「いいや、リイン・シュバルツァーの相手は俺に譲ってもらおう」

今度はデュバリイの言葉が遮られ、オルキスタワーから出て来たのは大剣を背負った猟兵だった。

「久しぶりだなリイン・シュバルツァー。俺の事は覚えてるのか？」

「……確かザックスという名前でしたね」

「ああ、その通りだ」

以前戦った時は、歯牙にもかけずに蹴散らされた雑兵に過ぎなかった自分の名を覚えてくれていたことに、ザックスは口元を少し緩めた。

「俺はあの時程、悔しいと思ったことはない。だからその雪辱を濯ぐために再戦を——」

「ちよつと待ちなさい！ 後から出て来て何を勝手なことをほざいてやがりますのー！」

大剣を抜いたザックスにデュバリイが抗議の声を上げる。

「いいや、リイン・シュバルツアーとやるのは俺だ」

しかし、デュバリイの抗議に応えたのはまた別の声だった。

市街へと繋がる坂から歩いて上がって来たのは《瘦せ狼》と呼ばれる結社の執行者、ヴァルター。

「おいおい、そりゃあいるのは分かつたけど……」

勢揃いする《結社》の戦力と《赤い星座》。

彼らに便乗するようにオルキスタワーまで案内させた国防軍が遠巻きにリイン達を囲み、導力ライフルを向けて来る。

「俺は平和的に話し合いがしたいと、言っただけなんだけど……」

I B Cの顧客、帝国軍の大使などあらゆる立場を利用し、先制攻撃を喰らった憤りを呑み込んで対話を願ったのに、あくまでも武力を向けて来るクロスベルにリインはため息を吐く。

せめてもの救いは市街地で戦闘をしようとしなかったことくらいだろうか。

「ヴァルターッ！」

《瘦せ狼》の登場にリーシャが眦を上げる。

「クカカ……少しはマシな顔をするようになったじゃねえか」

心地の良い殺意を向けて来るリーシャにヴァルターは笑う。

「だが今はお前はお呼びびじゃねえんだよ」

「なっ!？」

リーシャに興味を向けず、ヴァルターはリインに獰猛な笑みを浮かべる。

「クカカ、まさかリイン・シュバルツアーがこのタイミングでクロスベ

ルに来るとは思ってたなかったぜ」

「ちよつと！ 《痩せ狼》！ シュバルツァーの相手はわたくしたちが——」

「貴様らは引つ込んでいろ。リイン・シュバルツァーは俺が——」

「何が《超帝国人》だ！ クロスベルはお前の様な侵略者なんかに——」

ヴァルターに合わせて、デュバリイが、ザックスが、そして国防軍が騒ぎ始める。

「全員黙れ」

そんな彼らにリインは静かに告げる。

「リイン君……あかん……」

異様に静かな言葉と、胸を押さえるリインの姿にケビンは慌てる。

「神気——」

「その必要はないわ」

力を解放しようとしたリインを諫めるような声がある。その場に響き、何処からともなく飛来した偃月輪と大鎌がヴァルターとザックスをそれぞれ襲う。

そして、それに続くように鉄機隊に銃弾が降り注ぐ。

「ちっ——」

「むっ——」

その場から飛び退くデュバリイとアイネスに二人の遊撃士が襲い掛かる。

さらに市街と繋がる坂を数台のパトカーが猛スピードで駆け上がり、リイン達の背後で横向きに急停車し、その内の一つからダドリーが現れる。

「クロスベル警察だ」

「アレックス・ダドリー」

リインは振り返って顔をしかめるが、ダドリーはリインを無視するようにその横をすり抜けて国防軍と対峙する。

「国防軍が民間人に銃を向ける。それが貴様らの信念か？」

静かな怒りを声に込め、ダドリーは向けられた銃口に怯まずに尋ね

る。

「何のつもりだ!? 警察風情が誇り高い国防軍の邪魔をするつもりか!?!」

「それに遊撃士のリンさん達まで……警察と遊撃士は帝国人の味方をするのか!?!」

「この裏切り者が!」

国防軍たちは口々にリインを庇う様に立つダドリーや遊撃士のリン達には非難の言葉を浴びせる。

「ふざけるなっ!」

そんな彼らをダドリーは一喝する。

「警察の仕事は街の治安と平和を維持することだ! そこにクロスベル人も帝国人も関係あるものか!」

「遊撃士も同じです」

ダドリーの言葉に鉄機隊と睨み合う三人の遊撃士とは遅れて現れたエオリアが同意する。

「私たち『支える籠手』は『民間人の安全と地域の平和を守る』事を最優先の目的に掲げています……」

例えば国防軍の長にアリオスさんが就任したとしても、私たちはクロスベルの味方ではなく、いつだって民間人の味方です……」

その点では警察と同じでクロスベル人も帝国人も関係ありません」
「……………ダドリーさん……………エオリアさん……………」

まさかの味方にリインは思わず呆然と立ち尽くす。

「ふん、勘違いするなよシユバルツァー。我々はあくまでも国防軍の無法を正しに来たに過ぎん……」

貴様が帝国軍人として、武力でクロスベルを制圧すると言うのならクロスベル警察はその瞬間から敵になると思え」

「ふふ、リイン君が穏便に話し合いをしようとしてくれたから私たちが介入することができたんだよ。ありがとうね」

「……………はは、まさかこう繋がるとは」

リインの建前だけでも民間人を装い、血が流れることを嫌った回りくどい方法で警察と遊撃士を動かした事実にはケビンは笑いをこぼす。

「それに……」

「相変わらず外れた道を歩いているみたいねヴァルター」

ヴァルターを一撃して戻って来た偃月輪を手に納めたのは黒髪の美女。

「ちつ……何でてめえがクロスベルにいやがるキリカ」

「私が何処にいようと私の勝手なはずよ。貴方が未だに《結社》にいるようにね」

齒噛みするヴァルターにキリカは悠然とした佇まいで返す。

「今ではカルバードに身を置いているけど、私は今でも遊撃士の理念を忘れたつもりはないわ……」

そして短い間だったけど、遊撃士としての理念を仕込んだ教え子が体を張ってより良い落とし所を探そうとしているなら、力を貸さない道理はないわ」

「は、てめえにしては随分と入れ込んでいるじゃねえか」

「当然でしょ、誰かさん達と違ってリイン君は素直で良い子なんだから」

キリカの「達」という言葉にヴァルターは兄弟弟子のことを思い浮かべ、違いないと失笑する。

「邪魔をするな！」

最初の投擲から始まり、無数の大鎌に追い立てられたザックスは大剣を二つのブレードマシンガンに分け、銃撃で迫り来る大鎌の群れを撃ち落とす。

その背後に音もなく忍び寄ったレンが大鎌を一閃。

「っ——」

勘が働いたザックスは咄嗟にその場に伏せ、首を狙った一撃を間一髪で避ける。

「あら、よけられちゃった」

「子供……いや……」

他と違い、初手で殺しに来た少女にザックスは戦慄すると共に気を引き締める。

「レンツ!?!」

「ふふ、お待たせリイン。手伝いに来たわ。もちろん彼もね」

驚くリインにレンはいたずらが成功したような小悪魔な笑みで応えた。

・
*

「ふ……お前がリイン・シュバルツアーに届くか、見極めさせてもらうぞザックス」

広場を一望できる民家の屋根の上でシグムントは高みの見物に興じていた。

依頼人からはリイン・シュバルツアーの排除を依頼されているが、それは若手のザックスに一任している。

もちろん彼が敗北するか、このままリイン・シュバルツアーをオルキスタワーに素通ししてしまうようならすぐに介入するつもりであるが――

「暇そうだな」

そんな彼の背中に声が掛けられる。

「む……」

シグムントは軽い驚きと共に振り返ると、そこには一人の剣士が佇んでいた。

「……まさかこの俺がこんなにも簡単に後ろを取らせるとはな……」

自分の不明さをシグムントは反省する。

彼にその気があったなら、彼が無造作に下げている黄金の剣によってシグムントは気付くことなく絶命させられていただろう。

「アッシュブロンドの髪に、象牙色のコート、そして黄金の剣……なるほどお前が『結社』の《剣帝》か」

「人違いだ。今の俺は民間調査会社の一社員に過ぎない」

「は……抜かせ」

下手な惚け方をする青年にシグムントは苦笑を浮かべる。

もつともここで彼の正体を問い詰めることに意味はないと、それ以上シグムントは追及しなかった。

レンはこいつらに、これ以上あの人達が暮らす地を勝手に荒らされるのが許せないだけよ」

「レン……」

勇ましくザックスと対峙するレンの後ろ姿にリインは感慨深いものを感じる。

「さあ、ここはレン達に任せてリインは先に行つて」

「そうそう、こいつらには湿地帯でやられた借りを返さないと気が済まないからね」

リインに先を促すレンの言葉に遊撃士のリンがデユバリイと剣と拳を交えながら声を上げる。

「レン……リンさん……」

「行つてくださいリイン君。今、この場でデーター大統領の不正を暴けるのはリイン君しかないでしょう」

「エオリアさん……」

帝国人として納得できる大義名分があつても、決してクロスベルの制圧作戦に乗り気ではなかったリインだが想定外の援軍に強張つていた肩の力が緩む。

「みんな、気を付けて」

短くリインは言葉をかけて駆け出し、ケビンとリーシャがそれに続く。

ヴァルターはキリカが。

ザックスはレンが。

国防軍は警察が。

鉄機隊は遊撃士達が。

そしておそらくシグムントにはレーヴェが。

それぞれが戦い、オルキスタワーへの道を作る。

しかし、鐘の音が響き渡り虚空から魔導兵がオルキスタワーの前に現れる。

「っ——」

リインが太刀を、ケビンがボウガンを、リーシャがクナイを構えるが——

それが撃たれる前に魔導兵の頭上に高位アーツが顕現した直後の魔導兵たちを狙い撃ちにして霧散させる。

「——爆っ！」

リーシャはすぐに目標を切り替え、クナイをオルキスタワーのガラス張りの扉に放つ。

強固な特殊ガラスの玄関にクナイは円を描くように突き刺さり、リーシャの合図に合わせて爆発し、オルキスタワーへの穴を開ける。

そこにリーイン達は迷わず飛び込み——

「よう、シユバルツァー。お兄ちゃんが助太刀に来てやったぜ」

リーイン達を出迎えたのは手に戦術オーブメントを持ったレクターだった。

「誰がお兄ちゃんですか……」

リーインはレクターに白い目を向け、オルキスタワーの中を見渡す。

外の歓迎に対して、異様に静まり返った室内。

レクター以外の人影はない。

「レクターさん、俺達を待っていたという事は……」

「ああ、30階までエレベーターで行けるセキュリティパスだ」

そう言ってレクターは一枚のカードを見せびらかすように取り出す。

「随分と手回しが良いですね。それにこの異様な静けさはいつたい？」

「さあな？ お前さんとガレリア要塞で《神機》と大暴れした特務支援課のちびっ子が戻って来てからどうにも様子がおかしくてな」

「でしようね」

タワーの中に入ってすぐに分かる上位三属性が働いている気配。

それにレクターは見えていないのか、建物の中だというのに所々に黒焰のプレロマ草が咲いている。

「どうやらここから先は文字通り魔境みたいやな」

「ええ、クロスベル側に残っている戦力はおそらくアリオスさんと……」

鉄機隊がいたことからおそらく彼女もいるのだろうと、リーインは考

えて口を噤む。

「リイン君？」

「何でもありません。それより行きましょう、大統領執務室はおそらく39階にあるはずです」

頭を振って、気を取り直してリインは一同を促す。

「リイン君、すみません」

しかし、エレベーターホールへと歩き出したリインにリーシャが突然頭を下げた。

「勝手なことだと分かっていますが……」

「ヴアルターですか？」

聞き返すリインの言葉にリーシャは迷いながらも頷く。

「『飛燕紅兎』に任せるべきなんでしょうけど、やはり私は……」

思い出すのは直前のやり取り。

アルカンシエルでは散々人の事をなじり、挑発して来たというのにリインに夢中な態度でリーシャの事など眼中にないと言い切った。

彼への怒りを呑み込んだが、ぞんざいな扱いに別の怒りの焰がリーシャの中で燃え盛っていた。

それを察してリインはリーシャの進言に頷く。

「分かりました。ここまでありがとうございます」

リインはあつさりとしてリーシャの願いを受け入れる。

「良いんですかリイン君？ おそらくこの上で待っているのは——」

「アリオスさんは……俺がケジメを付けなければいけない相手ですから」

あの時、彼と彼女の言葉を信じて任せた後悔。

自分の甘さが招いた結果。ガレリア要塞で消滅した軍人たちを思えば、避けてはいけな戦いだとしてリインはもう一度自分に言い聞かせる。

「……………リイン君、アリオスさんとの間に何があつたか私には分かりませんが、あまり思い詰めないで下さいね……………」

その感情は戦いの場で判断を鈍らせますから」

「その言葉はそのままお返しします。キリカさんならリーシャさんに

合わせてくれますが、くれぐれも刺し違えても殺そうだなんて思わないで下さいよ」

「はい……今の私には帰りたいと思える場所がありますから」

リインの言葉にリーシャは微笑み、そして背中を向けて外へと舞い戻った。

「それじゃあ、俺達も行きましょう」

改めてリインはケビンとレクターを促し――

「え？　俺も行くの？」

「お兄ちゃんなんですよね？　だったらちゃんと働いて下さい」

当然のようにここに残ってサボるつもりだったレクターの首根っこをリインは掴んで引き摺りながらエレベーターに乗り込んだ。

143話 《風の剣聖》

オルキスタワー21階から30階に至る中枢区画。

表向きにはタワーのメンテナンス用のフロアと公開されていたが、実際はクロイス家の錬金術と最新の導力技術が融合した《魔導科学》の結晶とも言える施設だった。

四色の光子が無数に立ち昇る幻想的な光景の中、二人の剣士は吹き抜けを縦横無尽に駆け回り刃を交わす。

「ちっ——これじゃあ援護もできないやないか」

「相変わらず超帝国人してやがるなあ……いや、この場合は超八葉一刀流か？」

ボウガンで狙いを付けることさえできない程にフロアを上下に動き回る二人に歯噛みするケビンに対してレクターは呆れた調子で言葉をもたず。

そんな彼らを他所にリインはアリオスが放った剣閃に吹き飛ばされる。

「っ——」

受け止め切れない衝撃に乗ってリインは対面の壁に着地し、呼吸を整える。

「アリオスさん……」

睨みつけるのは中央の昇降機の先に空ろな表情で太刀を無造作に握って脱力しているアリオスの姿。

明らかに正気ではなく、エレベーターを外部から止められ、21階から中枢区画に入ったリインを警告もなしに襲ってきたのはあまりにもアリオスらしくない。

「まさかアリオスさんにもグノーシスを使ったのか？」

敵対しているというのに自分を見ていないアリオスの尋常ではない様子にリインはその可能性を考える。

「もしそうだとしたら……」

リインも《グノーシス》を使って一時の能力の向上させたことがあ

るが、あれは武術で培った感覚が壊れてしまう。

自分は《鬼の力》のおかげで事なきを得たが、アリオスがもしそうだとすれば彼の剣士としての命はここで死んだことになる。

「そこまでするのか……」

アリオス程の人間が自分から《グノーシス》を使ったとは思えない。果たして使わせたのはキータなのか、ディーターなのか、それともマリアベルなのか。

誰がそうだったとしても、傀儡としてアリオスを使う黒幕にリインは苛立ちを覚える。

「でもいったいいつから？」

そう考えると次に疑問に浮かぶのはいつからアリオスが操られていたか。

多くの《グノーシス》患者を診たからと言って自惚れるわけではないが、アリオスには以前に会った時もそして今も《グノーシス》の気配はない。

「アリオスさん、目を覚ましてくださいっ！」

「……………」

やはり呼び掛けにはまるで反応せず、アリオスはフロアの中央の昇降機を飛び越えるために、その場を踏み切り――

「え――？」

気付けば風が吹き、アリオスはリインの背後を取っていた。

「な――」

振り返ると同時にアリオスの太刀は横薙ぎの一閃がリインを襲う。

太刀を盾にするが凄まじい膂力から繰り出された一撃にリインは先程と同じように身体ごと弾き飛ばされる。

「くそっ!? 何なんだいったい!?!」

《グノーシス》の気配はなく、それでいて《グノーシス》とは比べ物にならない程の強化。

まるで《鬼の力》を相手にしているようで、以前手合わせしたアリオスとは別人としか思えない程に速く、強い。

「……………これが《剣聖》か」

しかし考えてみればリインは《理》に至った《劍聖》の戦場の本気を体感したことはなかった。

「出し惜しみはしません」

言葉は通じず、気を抜けば斬られる状況にリインは肚を括る。

「神鬼合一」

力を開放し、リインの身体に《聖痕》の文様が広がる。

「……………」

対するアリオスはやはり無言。

それでも力を解放させたリインに応じるように、彼もまた“力”を解放する。

「——っ」

翡翠の風のオーラを纏うその姿にリインは息を呑む。

《鬼の力》に勝るとも劣らない、アリアンロードに匹敵するほどの闘気量。

“人の域”を超えた力を宿したアリオスは無言、無表情のまま太刀を構える。

「——行きます」

「……………」

床を同時に蹴り、リインとアリオスは昇降機の上で激突する。

一合を打ち合わせた瞬間、リインは体を捻り、流れる動作で《一の型》に繋げる。

「螺旋撃っ！」

先程までのお返しだと言わんばかりにリインはアリオスを階下へと叩き落とす。

墮ちるアリオスをリインは昇降機の下の歪な塔を垂直に駆け下りる。

それを迎撃するようにアリオスは一息で二つの風の刃を放つ。

リインは余裕を持ってその隙間を縫うようにすり抜け——風の刃に追従して来たアリオスの突きを逸らすように防ぐ。

「——えっ?」

アリオスの一撃を防ぎ、すり抜け上下の位置関係を変えて振り返っ

たりインはあり得ないものを見た。

空中にいるのは二人のアリオス。

それだけならただの「分け身」に過ぎないのだが、アリオス達はあることか彼が先に放った風の刃に着地した。

「……………」

そして当たり前のように風の刃を蹴り、二人のアリオスはリインに向けて風の刃を乱れ撃つ。

「ちっ——」

リインを取り囲むように風の剣閃が尾を引くように翠の道を空中に描く。

即席の足場を作ったアリオスは風の回廊を駆け抜け、二人で縦横からリインに襲い掛かる。

「滅茶苦茶だ」

アリオスの攻撃を受け止め 悪態を吐きながらリインは焔の刃で周囲の風の道を纏めて斬り払う。

足場を無くしたアリオスだが危な気なく21階のフロアに着地する。

リインもまたアリオスが着地したフロアに降り立ち——次の瞬間にはリインとアリオスは鏝迫り合いをしていた。

「くっ——」

速さは仕方がないとしても、《鬼の力》の膂力で押し切れない事実リインは歯噛みする。

アリオスはリインより一手早く、刃を外して蹴りを放つ。

その場から飛び退いてそれを避けたリインは跳躍して中央の塔に逃げ、アリオスがそれに続く。

刃を交わしながら、二人は落ちたフロアを逆に駆け上る。

そうして辿り着いた30階の広場。

二人はそこに辿り着くと示し合わせたように一呼吸の間を置き—

「二の型——《裏疾風》!!」

同じ動作で同じ技を繰り出す。

同じ技は互角、返す刃で――

「もうやめてっ！ お父さんっ！」

「――っ」

その声には彼は刃を鈍らせ、彼は躊躇することなく刃を振り抜く。

「あ……………」

リインの手から“八耀”は弾き飛ばされ、アリオスは更に刃を返し――

「お父さんっ！」

その声は届かず、アリオスは振り上げた太刀を振り下ろす。

その刹那、ボウガンの矢がアリオスの足元の影を穿つ。

がくりと一瞬アリオスの体が石になったように硬直する。

《影縫い》の拘束は一瞬、影を縫い留めたボウガンの矢はへし折れ、拘束は解けてアリオスの太刀は振り抜かれる。

「っ――」

そして一瞬の硬直にリインは臆することなく前へと踏み出す。

身を屈め、振り下ろされる刃を掻い潜り拳を――

「破甲拳っ！」

太刀の間合いの内側から繰り出した拳。

防げないはずの拳打をアリオスは太刀の柄で受け止めてみせる。

「まだだっ！」

リインは咄嗟に拳を開き、受け止めた柄を掴む。

そしてさらにアリオスの間合いの中に入り込み、背中を向けて――

背負い投げる。

「……………」

硬い床に叩きつけても呻き声一つ漏らさないアリオスにリインは彼から奪った太刀を左手に、押し掛かるように体で抑え込んで――

「破甲拳っ！」

二度目の拳をリインは今度こそアリオスに叩き込んだ。

「がはっ！」

流石のアリオスもその一撃に肺から息を絞り出す。

「がはっ！ ゲホゲホ――ゴホッ！」

しかしそれだけでは治まらず、アリオスは床に転がったまま胸を掻きむしり、まるでそれまで呼吸をすることを忘れていたかのように悶え苦しむ。

「アリオスさん……？」

「お父さん……？」

どちらの声に反応してか、アリオスは咳き込むのを強引に止めると顔を上げ――

「その声はシズクか？」

誰もいない方向を向いてアリオスはようやく言葉を話した。

・*

「すまなかった」

オルキスタワー36階。

かつてゼムリア大陸通商会議に使われたフロアの一室でアリオスはリインに向けて土下座をしていた。

「謝罪よりも先に状況を説明してもらえませんか？」

口に出た言葉は思いの外冷たく、アリオスにしがみついていたシズクが体を震わせる。

その反応にリインはため息を吐き、アリオスの背中に触れて診察しているケビンに視線を送る。

「とりあえず話をしても大丈夫なんですよね？」

「ああ、身体の中の七耀の流れをかき乱されとるけど、とりあえず命に関わるようなことはあらへんやろ」

ここに来るまでに聞いたアリオスの状態。

キーアの《識》の力で五感を奪われていたらしく、今のアリオスは耳以外の感覚はほぼ機能していない。

「なあシユバルツァー」

「何ですかレクターさん？」

「このオツサン、五感が効かない状態でお前をボコボコにしていたんだよな？」 八葉一刀流ってそんなこともできるのかよ？」

「はは、俺はそんな化物じみたことはできませんよ」

笑って答えながらリインは少し落ち込む。

先程のアリオスとの戦闘で、彼は相手がリインだったことを認識しておらず、それに加えてあらゆる感覚が麻痺させられている状態だった。

その状態で《鬼の力》を全開にして互角だったという事実には《剣聖》とそうでない者の差を改めて思い知らされた気持ちになる。

「とりあえず一つずつ整理して行きましょう」

ため息を一つ吐いて気持ちを切り替え、リインは質問を始める。

「まず最初に、キアはこのオルキスタワーにはいませんね？」

「ああ……」

リインの質問にアリオスは素直に頷く。

「《碧き零の計画》はここで行うのではないんですか？」

「そこまで掴んでいたのか……」

リインの口から出て来た《クロスベル独立》の次の段階の計画の名前が出て来たことにアリオスは感心する。

「《碧き零の計画》はクロスベルでもっとも霊力が活発な土地で行われることになっている……」

俺が聞いた話に偽りがなければ《湿地帯》がそうだ。ここにいないのなら彼女たちはそこにいるはずだ」

「湿地帯か……」

クロスベルの地図を思い浮かべながらリインは次の質問をする。

「あの21階から30階の魔導科学、おそらくクロスベルと《零》を繋いでいるシステムは停止させることはできますか？」

「残念だがあれはリアベルたちの領分だ。俺にはその権限はない」

「……次、何故キアは貴方をそんな状態にしたんですか？」

その質問にアリオスは沈黙を返す。

「答え辛いなら別の質問をしますが、貴方はあれから何をしていたんですか？」

それにもアリオスは口を閉ざす。

「貴方とキアは悪いようにはしないと云っていた……」

だから俺はクロスベルのことに口を出さないと決めた。だけど貴方達を信じた結果起きたのはガレリア要塞の消滅だ……

俺はまんまと貴方達に騙されたわけだが、帝国人をうまく騙してさぞかし気分が良かったんだろうな」

「リイン君……」

治療のためアリオスの背後にいるケビンがリインの苛立ちに満ちた顔を正面から見ることになり、らしくない彼の姿を見兼ねて口を挟む。

「なあアリオスさん。あんたは全部言い訳になると思っておるんやろうけど、リイン君が聞きたいのはそういうことやない……」

リイン君を騙して本当にすまんと思っておるなら、あんたにはリイン君に答える義務があるやろ？

何度もリイン君がクロスベルを助けてくれたのは、宗主国の住人としての「施し」じゃないのはアリオスさんも分かっとなるはずや」

「……………リイン、俺は……………」

「もう良いです」

口を重くするアリオスにリインはため息交じりに話しを切り上げた。

「話す気がないのなら、もうそれで良いです……」

まだ外でみんなが戦ってくれているんですから、ここで悠長にしている時間はありませんから」

「ちよ、リイン君!？」

「俺の役割はあくまでもキアを抑えることです……」

ここにいないと言うなら後は帝国軍に任せれば良い。まあ、建前は果たしますけど」

リインは天井を一瞥してから踵を返す。

「ま、待てリイン！」

歩き出したリインにアリオスは気配だけで振り返り声を上げるが、リインは無視して扉を開き――

「落ち着きたまえ、リイン・シユバルツァー」

扉の先にはワイスマンが立っていた。

「……………何の用だ？」

駐屯基地に置いて来た彼が何故ここにいるのかは問わず、リインはワイスマンを不機嫌な目で睨む。

「フフ、そう邪険にしてくれないでくれたまえ。ロイド・バニングス達が動き出したことの報告と、耳寄りな情報を一つ持って来たわけだが……………」

その前にあの権利をここで使っても構わないかね？」

部屋の奥を一瞥してワイスマンは嗤う。

「……………勝手にすれば良い」

「フフ、感謝するよ」

リインに道を譲ってワイスマンはその部屋に入る。

「やあ、久しぶりだね。《風の剣聖》」

「その声はヨアヒム……………ということはゲオルグ・ワイスマンか」

聞こえて来た声の主にアリオスはまだ見えない目を向けて睨みつける。

「フフ、ロイド・バニングスから話を聞いて君には一つ聞いておきたかった疑問があったのだよ」

ロイドという名前が出て来てアリオスは思わず身構える。

「聞きたいことは一つ、サヤ・マクレインを殺したのは君かな？」

「……………は？」

「……………お母さん？」

ワイスマンの言葉にアリオスは思わず呆けた返事をしてしまう。

そして言われた内容を理解した瞬間、アリオスは体の奥から熱が吹き上がるのを感じた。

「貴様、何を——」

「おっと失礼。この言い方は誤解を招いてしまうね」

激昂しようとしたアリオスの機先を制して、ワイスマンが続ける。

「君はガイ・バニングスを殺したそうだね？」

今回のクロスベルの独立のため、裏で張り巡らせた《暗闘》の犠牲者を君はどれだけ積み上げたのかな？」

「な、何を……………言っている……………？」

怒りの熱は急速に冷め、アリオスは逆に寒気を感じる。

このままこの蛇の言葉を聞いてはいけない。

そんな予感があるが、腕にしがみついている娘がいてそれはできない。

ワイスマンはそんなアリオスに笑みを浮かべて、その事実を突き付ける。

「果たしてサヤ・マクレインが亡くなった事故は本当に帝国と共和国の『暗闘』によるものだったのかな？」

「……………あ……………」

アリオスがずっと目を逸らして来た『欺瞞』を突き付けられる。

「君がその事故を理由に警察を去り、ガイ・バニングスが一人でクロイス家の陰謀に迫った末に殺されたのだとしたら彼女の死で一番得をした者は誰なのだろうね？」

「……………やめろ……………」

「確かに帝国と共和国の諜報戦ではあったが、それを誘導した真犯人は別にいた」

「……………やめてくれ……………」

アリオスの懇願は聞き届けられることなくワイスマンは続ける。

「その真犯人は母親が身を挺して守った娘にとある『クスリ』を投与し、その体を壊し光を奪った……………」

これが私が『識』の力で過去を遡って観測した『因果』だ。さて、この真実について『風の剣聖』殿の感想を頂けるかな？」

「……………あ……………」

アリオスの脳裏に浮かぶのはこれまでクロイス家に言われるがままに従って行って来た後ろめたい工作活動の数々。

「……………ああ……………」

亡き妻のため、光を奪われた娘のため、裏切ってしまった親友のため。

後戻りができないと言い聞かせ、クロイス家に従った結果が先の『赤い星座』を使ったクロスベル襲撃の『暗闘』だとするならば。

第二、第三のサヤを生み出したのが誰なのか。

その罪の重さを理解したアリオスは――

「――アアアアアアっ!!」

腕にしがみつくシズクを振り払い、頭を抱えて絶叫を上げる。

「お父さんっ!?!」

「おやおや、ここからが本番なのだが……」

「ワイスマン、それ以上は……」

愉悦の笑みを浮かべるワイスマンをリインは肩を掴んで止める。

「誓って言わせてもらうが、この話は真実だ……」

彼女たちクロイス家は《D∴G教団》の実験結果からどれだけ《グ
ノースス》を投与すれば人体が壊れるか理解していたようですね……

まさしく、あの掃討作戦でクロイス家に辿り着けなかった我々の失
点だよ」

珍しく本気で反省しているワイスマンにリインはため息を吐き、ア
リオスを一瞥する。

「アアアアアアアアアアアアっ!」

壊れたように悲鳴を上げ続けるアリオスはケビンの術によって眠
らされる。

その姿にリインはワイスマンに何て権利を与えてしまったのかと、
後悔する。

「君が気に病むことではない。これは彼が積み重ねた罪なのだから」

「そうだとしても……」

ワイスマンの白々しい慰めにリインは齒噛みして――

「問い質さないといけないことが増えたな」

リインはもう一度天井を仰ぎ、拳を握り締めた。

144話 クロスベルの行方

「やれやれ、招かざる客がここまで来てしまうとは」

オルキスタワー39階の大統領執務室の扉を開けたリインを迎えたのはそんな言葉だった。

「それにしてもこんな子供に負けるとは、『風の剣聖』も思っていたよりも大したことはなかったと言う事か」

期待外れだったと言わんばかりの語調にリインは眉を顰めるが、内心の感情を押し込めて応える。

「アポイントなしの訪問は申し訳ありません……」

ですがそういうのは国交を開いて窓口を正常に機能させてから言うべきでしょう……

帝国はもちろん、カルバード共和国、リベール王国、それにアルテリア法国からの話し合いを拒否し続けているようですから」

「フフ、話し合いならいつでも受け付けると表明はしているさ……」

『ゼムリア大陸諸国連合』の記念すべき初の世界会議、もっとも帝国は今それどころではないみたいだがね」

ディーターの含みを持たせた言葉にリインは肩を竦める。

「本気で大陸を統一できると思っているのか？」

「できるさ。そのための『零の至宝』だ。君が偶然手にした半端な至宝とは『格』が違うのだよ」

「半端……否定はしませんけど……」

幼気な女の子に自治州の未来を背負わせるのはどうかと思いますか？」

「フフ、君は何か勘違いしていないかな？」

我々は別に、キアア君——いやキアア様に無理矢理協力してもらっているわけではない……

君達、帝国からの圧政に苦しむ我々のため、彼女は進んで立ち上がってくれたのだよ」

「白々しいですね……」

《赤い星座》を影で操り市街を襲わせ、その罪を帝国に被せ市民の独立への気運を煽る……

資産凍結を行うことで、実質の宣戦布告をしたのはクロスベルの方だと言うのに」

「フフ、あの程度の政治工作ならばむしろ手ぬるいくらいだろう……十二年前、帝国がリベールに侵攻する時に起こった悲劇を君は知っているかね?」

「ならば貴方もその時の首謀者達と同様に極刑にされる覚悟があるということですか?」

「っ——」

思わぬ返しにディーターは息を呑む。

「むしろ彼らよりも貴方の方がずっと罪深いと思いますよ……」

《D::G教団》を生み出し、利用して《零の至宝》を完成させたこと……

他にも市民に「グノーシス」を与えて私兵にしている。クロスベルはいつから教団に染まっていたんですか?」

「それは勝手な憶測——」

「残念ですが、自分達は既に貴方が個人的に雇っていた「グノーシス」を服用していた市民から証言は取っています……」

もしかしたら国防軍も既に「グノーシス」で操り人形にしているんじゃないですか? それこそ以前の《教団事件》の時のように」

「っ——あれは娘が勝手に与えたものに過ぎない!」

「それを誰が信じる?」

一人でもやっている。それ以上はないなんて麻薬のブローカーの典型的ないい訳でしょう……

仮にそうだったとしても貴方の娘がそんな勝手な無法を働いているというのに貴方は何もしなかったんですか?」

「ぐっ……」

子供だと思って油断していたが、随分と弁が立つリインにディーターは齒噛みする。

もつとも絶対的な優位にいるのは自分の方だと信じて疑わない
データーは負けじと言い返す。

「君に《奇蹟》を使うことでとやかく言われる筋合いはないと思うがね
……」

リイン・シユバルツアー君……

《大いなる騎士》を操るノーザンブリア併合の立役者。クロスベル
に恩を売って併合しようとしている鉄血の手先である君にね」

「……………そんな風に思われていたんですね」

データーの言葉にリインは落胆する。

「君は所詮宗主国の人間だ。クロスベルを下に見る君に私たちが味
わってきた苦悩は理解できまい」

「確かに俺は帝国の人間です……」

ですが一時期とはいえこの地で遊撃士として活動したこともあり
ます。帝国がこの自治州に迷惑をかけていることにもどかしさを感じ
ていたのは俺も同じです」

「ならば——」

「ですが、全ての帝国人がそうではなかったはず……」

オリヴァルト皇子を始め、クロスベルの問題を平和的に解決しよう
と尽力していた人達がいなかったとは言わせません……」

皇子だけじゃない、マグダエル市長がこれまで地道に積み重ねて来
たものさえ貴方は台無しにした」

「マグダエル元市長は善人だったが善人過ぎたのだよ……」

あの様な甘いだけの人に何ができる？

彼のような政治理念が二つの大国に擦り寄る者達を出すならそれ
は害悪でしかない！

クロスベルに必要なのは圧倒的なカリスマを持つ、指導者なのだ
よ」

「カリスマ……《零の至宝》の威を借りているだけの貴方が？」

はつと鼻で笑うリインにデーターは眦を上げる。

「現に私はクロスベルの政治状況に風穴を開けて幾つもの改革を成し
遂げた！ 何もできなかった元市長とは違うのだよ！」

「そうですね。確かにそれは貴方の確かな功績でしょう。それで？」
「む……う？」

「それはどこの誰にアドバイスしてもらったんですか？」

挑発も兼ね、黒幕の存在を示唆する言葉をリインは投げかける。

「なっ——君はっ！」

そんなリインの言葉にディーターは目を剥いて絶句し、顔を赤くして言い返す。

「私の改革が他人のアドバイスの結果だと言うのか！」

「少なくともオズボーン宰相は貴方は根っからの銀行員だと評価していました……」

パフォーマンスに関しては一flowでも独立国を成立させるだけの根回しができるような能力はないと」

「ぐぬぬ……」

「言い返さないんですか？」

冷やかな眼差しを向けてリインはディーターの答えを待つ。

口を噤んでしまったディーターにリインはため息を吐き、別の質問をする。

「貴方は独立宣言の演説の時に、帝国と共和国による『暗闘』を話題にしていますね」

「そ、そうだ！ 君が何と言おうと帝国や共和国がクロスベルに行っていた罪は消せない！」

「ええ、そうですね。それを否定するつもりはありませんが……」

でも、貴方達がクロスベルに行っていた『暗闘』の冤罪を擦り付けられる謂れはありません」

「私たちの『暗闘』だと……そんな言い掛かり——」

「惚けないで下さい。先程『赤い星座』の襲撃を政治工作と認めただじやないですか」

「ぐ……」

「俺には貴方達が行った『暗闘』がそれだけとはとても思えない……」

現に三年前、警察官であるガイ・バニングスとアリオス・マクレインの二人を殺し合わせるように仕向けている」

「何故それを？」

「それにマクレイン母娘が巻き込まれた交通事故、それもクロイス家が帝国と共和国の工作員を誘導して引き起こしたものだっただんですよね？」

「っ——」

リインが突き付けた答えにディーターは絶句する。

「くっ……………君の様な勘の良い子供は嫌いだよ」

「認めるんですね？」

「ふ……………だから何だと言うのだ？」

ディーターはリインを睨みつけ、捲し立てる。

「例え真実がどうであつてもクロスベルが二大国に虐げられてきた事実は変わらない！」

「……………だから貴方達が行ったことは正当化されると？」

「正当化は『される』ものではない。力と意志をもって『する』ものだよ」

「それをクロスベルのみんなは認めると？」

「民衆に真実など関係はない。愚かな彼らはただ信じたい現実だけを受け入れる……………」

君が民衆に真実を訴えたところで、誰が信じると言うのだ？」

「そうですね……………」

ディーターの指摘にリインは頷く。

「確かにクロスベルの人達に俺と貴方の言葉、どちらを信じると聞けば貴方を選ぶでしょう……………ですが」

「む……………」

「貴方はやはり政治家には向いていないようです」

「何……………」

「だからこんな簡単に言質を取られるんですよ」

そう言つてリインは右手に握っていた《ARCCUS》をディーターに見せつけるように差し出した。

「それは……………戦術オーブメント？」

「ええ、帝国で開発している第五世代戦術オーブメント《ARCCUS》

……クロスベルでの《ENIGMA》と想ってくれて良いですよ」
「それが何だと言うのかね？」

察しの悪いデーターにリインは肩を竦め《ARCU》を操作せず、そのまま話しかける。

「レクターさん、首尾は？」

『おう、順調だぜ。途中でハッキングして来た支援課のお嬢ちゃんが手伝ってくれたおかげで、もう完璧だ』

聞こえて来たお調子者の声にデーターはそれに気付いて顔を蒼くする。

「ま、まさか……君は……私たちの会話を……」

「ええ、ここでの会話はこの下の34階の端末室にいるレクター・アランドール秘書官に頼んで導力ネットを通して、クロスベル市全域に流してもらいました」

「な——」

「俺の言葉はクロスベルの人達には届かない。ですが貴方の言葉なら届く……ええ、その通りでしょう」

「な、な……何てことをしてくれたんだ！ いったいいつから!？」

「それはもちろん『ぜんぶ』です」

「——っ」

絶句するデーターを他所に、リインは《ARCU》に向かって話しかける。

「俺ができることはここまでです……」

これでもまだ貴方達はデーター・クロイスを支持して受け入れると言うならそれで構いません……

ただ帝国人の俺が言って良いことではないと承知で言わせてもらいます。貴方達の在り方は本当に『正しい』のですか？」

そう言つてリインは《ARCU》を閉じて、立ち尽くすデーターを一瞥して踵を返した。

「ま、待てっ！」

呼び止めるデーターにリインは扉のノブに手を掛けて止まる。

「そ、そうだ！ 君とキア様の力があれば大陸全土に『正義』を遍

く広められる、どうだね今からでも私たちと——」

「貴方達の言う『正義』が何かは知りませんが、『至宝』の力で導かれる世界を俺は受け入れることはできません」

勧誘して来るディーターに振り返らずリインは答える。

「こんな塔を作って地上を見下ろしているから、人としての営みの尊さが見えないんですよ……」

《空の眷族》を見習って地に足を着けて生きてみたらどうですか？

そうすれば『デミウルゴス』が自分から消えた意味が分かるかもしれないですよ」

そう言い残してリインは大統領執務室から退出した。

そして閉めた扉を背にリインはその場にへたり込む。

「はぁ……」

溜め込んだ息を大きく吐き出し、頭を抱える。

「あれで良かったのか？」

自分なりに考えた行動を振り返ってリインは唸る。

ディーターがあまりにも気分よくこちらの誘導に従って話してくれるため、やり過ぎたのではないかと思えてしまう。

「フッフ、中々にえぐい手を使うじゃないか、ルフィナ・アルジエントの薰陶かね？」

廊下で待つていたワイスマンは実に良い笑顔でリインを労う。

「どうだろうな……ルフィナさんやカシウスさんならもつとうまい落とし所を見つけられたかもしれない……」

選択をクロスベルの人達に委ねた以上、今よりももつと酷いことになるかもしれない」

考えれば考える程、本当にこれで良かったのかリインは悩む。

ここまでやったのだから、自分の手でディーターを拘束して帝国軍に引き渡せば懸念の芽は確実に潰すことができる。

だが、それをすれば完全に今後のクロスベルは一切の主張を認められないだろう。

「ふむ……私としては今の彼の顔が見えないことが不満なくらいで完璧だったと思うが？」

「完璧な答えなんて存在しない……」

完璧に近い答えを探し続けて落とし所を見つける……それが俺がルフィナさんに最初に教えてもらったことだ」

ふとリインが振り返ると、そこに駆け込んできたのはベルゼルガーを抱えるランディだった。

「遅かったですね」

「リイン……お前、さっきの放送は……ロイド達は一緒じゃないのかよ？」

リインの周囲に自分の仲間たちがいないことに当てが外れたとランディは唖る。

「ここは任せます」

「お、おい？」

リインはランディの横をすり抜けて歩き出す。

「何処に行く気だ!? それにキー坊はどこにいる?」

「……………あの子に関しては、もう貴方達の手に乗る。後は俺に任せてください」

もつともその前に話を付けなければいけない人がこの上にいると、

リインは天井を仰ぎ見た。

フロアにして一階の隔たりしかないが、執務室から出た瞬間から挑発するように発し始めた覚えのある気配。

結社《身喰らう蛇》の最高幹部である《蛇の使徒》の第七柱《鋼の聖女》アリアンロードが待つ屋上に向けてリインは歩き出した。

145話 相克のクロスベル

夜の帳が落ち、見上げれば満天の星の空に見下ろせば満点の星の海が広がるオルキスタワーの屋上にまるで一枚の絵画のように一人の女性が佇む。

「来ましたか——」

兜面はなく、アリアンロードはやって来たリインを出迎える。

なお、彼に我が物顔で付き従っている男からは全力で意識を逸らす。

「まずは賛辞を贈らせて頂きましょう……」

ガレリア要塞で三機の《神機》を退けたこと、クロスベルを護る結界を解いたこと、そして先程のディーター・クロイスの真実を白日の下に暴いた手腕……どれも見事でした」

「世辞は結構です」

褒めてくるアリアンロードにリインは素気無い言葉を返す。

「そんな言葉を聞くために貴方の誘いに乗ったわけじゃありません」

はつきりと告げ、馴れ合いはしないと意識しながらリインは問い質す口調で尋ねる。

「ワイスマンの言葉を信じるなら、結社の計画は既に帝国に移っているそうですね？」

帝国で何を企んでいる？ あと二年は時間があるはずなのに帝国でもクロスベル以上の《異変》を起こすつもりなのか？」

「……………そうですね」

リインの問いにアリアンロードは一度遠くを見つめる。

「帝国の《幻焰計画》は既に魔女殿の手から離れていますので私からは何とも……」

それにこの時点での預言はほぼ消化されてしまってますので、結社としては……何をすれば良いんでしょうか？」

「何ですかその答えは？」

歯切れの悪い返答にリインは顔をしかめる。

「失礼……」

そもそもこの計画の破綻がリインによるものなのだとする言葉を呑み込み、アリアンロードは続ける。

「帝国の内戦は貴族派が起こしたこと……」

結社はそこに戦力を提供しただけに過ぎません、そういう意味ではこの地で行っていたことと同じです」

「その点はリベールの時とは違うということですか……」

リインは深々とため息を吐く。

純粹にリベールで暗躍していた時と違い、クロスベルの独立も帝国の内戦もどちらも突き詰めればそこに住まう人達が溜め込んだ業の発露でしかない。

帝国と同じようにクロスベルにも《幻の眷族》という地雷が埋まっていただけに過ぎない。

その対立や決起を全て結社のせいにするのは傲慢なのだろうとリインは不満を呑み込む。

「それでクロスベルでの計画が終わっているというなら、何故貴方達はまだここに留まっているんですか？」

「確かに厳密にはもう必要はありません……」

《零の至宝》が錬成された段階で既に我らの計画から外れてしまっています。後はクロイス家の方々とクロスベルに住まう者達の問題でしょう」

「それで済まないから、俺がこうしてここにいますか？」

「《碧き零の計画》ならば心配は無用です……」

こう言うのはあまり好ましくありませんが、帝国には《黒》が紡いでいる預言の“因果”がありますので歴史の改竄は不可能……

それにどうやら御子殿は《黒》の気に汚染されてしまったようですので、帝国にとって不利な改竄がされる心配もない。二つの預言が覆ることはないでしょう」

「あれはそういうことだったんですか……」

三つの《神機》を倒してからの異常現象。

情報が足りないことと因果にもやが掛ったように見通せなかったわけにリインは納得する。

「それより二つの預言……?」

《零の騎神》よりも気になる言葉を繰り返す。

「ええ、盟主の予言では《零の至宝》はここで消滅することは決まっているそうです」

「……………それは……………」

「そして《黒の史書》においても“大樹”は現れるだけ、世界を変革させる預言はありません……………」

「ですから、貴方はここで帝国へ戻っても構わないということになります」

「それを信じる根拠は? それにキーアちゃんはどうなる?」

「盟主と我が名に誓って……………」

御子殿については先程の言葉通り、《零の至宝》として消滅するでしょう」

「……………《身喰らう蛇》の盟主がそう予言したんですか?」

「《至宝》の器となるべくして造られたとは言え、それは《幻》だけだったはず……………」

それなのに《空》と《時》を更に与えられて錬成された《零》は極めて危ういバランスの上に成り立っていた存在になります……………」

“人の手に余る力”……………二つの《至宝》が融合した《鋼》を知る貴方には今更な話でしょう」

「今はその危ういバランスの均衡が《黒》に染まったことで崩れた」「遠からず御子殿は“力”に呑み込まれてこの世界から存在ごと消滅するでしょう……………」

もつとも《揺り籠》から出てしまった以上、御子殿の運命は《至宝》にならなかつたとしても変わりませんでしたが」

「それは……………?」

「彼女は500年前にこの地の錬金術師によって《至宝》の器となるべく造り出された存在ですが、後世に技術を残すための試験体でもありました……………」

結社の《黒の工房》でもホムンクルスの生存限界の問題が解決したのは50番台になってからと聞き及んでいます」

「……………そうか……………」

ミリアムやアルティナに生存限界がないことにリインは安堵しながら、キーアがどうしてこんな暴挙に手を貸したのか理解する。

「あの子にはもう時間がなかったのか……………だからこんな生き急いだことを」

《至宝》となればその“力”によって壊れ、《至宝》にならなかつたとしても古代のホムンクルスの欠陥により自分に未来がないと知つたキーアの気持ちは少しだけ共感できる。

「クロイス家の末は御子殿を先祖の遺産と割り切り、使い潰すつもりなのでしよう」

「聞いているだけでワイスマンに劣らない人でなしのようですね……………
そういう貴女は何故、キーアちゃんに手を差し伸べなかつたんですか?」

「私が錬金術について門外漢だと言うのもありますが、“因果を組み替える”《零》の力が《黒》に通用するかどうか……………」

それを見極め、利用しようとしていた私にクロイス家を責める資格はありません……………」

ですからせめて、御子殿の意に沿うように協力していただくまでです」
「だから貴方は俺にここで手を引けと? 歴史の改竄は失敗すると

キーアちゃんには教えたんですか?」

「いいえ、何も知らず全力を尽くし、夢想の果てに散ることがせめても彼女の救いでしょう」

「キーアちゃんを見殺しにすると?」

「ならば貴方に何ができますか?」

ここまで質問ばかりを投げかけていたリインにアリアンロードは逆に問う。

「《零の騎神》は《黒》の呪いを得て、その存在に近い“格”を手に入れています……………」

それに加えて盟主の予言、《黒の史書》の預言、そして古代ホムンクルスとしての寿命、その全てが御子殿はここで果てると示しています」

「それでも——」

「多少の“力”を得て増長でもしましたか？」

「貴方にこの折り重なった“因果”の鎖を断ち切れると？」

「そうですね……今の俺には《零の騎神》に勝つ手段は正直ありません」

「アリアンロードの問いにリインは静かに頷く。

「貴方の命の懸け時はこの地ではありません。貴方には二年後にもっと大きな戦いがあるのですから……」

「それに貴方はこんなところにいるべきではありません、すぐに帝国に——ナユタの下へ帰って上げるべきです」

諭すようにアリアンロードは慈愛を込めて続ける。

「せめて彼女が儂い夢を見ながら果てることができるよう、ここで退いてもらえませんかリイン・シュバルツァー」

頭を下げて頼むアリアンロードにリインは沈黙を挟み、口を開く。

「……………貴女の言っていることはおそらく正しい」

《零の騎神》への対抗手段はない。

古代ホムンクルスの知識もない。

今のリインに“因果”を断ち切る力はない。

「キーアちゃんにとって、俺は帝国人でクロスベルを脅かす敵ではない……」

失敗すると分かっている儀式を止めたとしても、彼女を絶望させて死なせることしかできないんでしょう」

クロスベルで最低限のことは成した。

儀式が成功しないのなら、後はクレア達に任せて帝国に一秒でも早く戻るべきなのだ、リインの冷徹な部分の思考が訴えている。

「何より俺にはキーアを助けなければいけない“根拠”がない」
「……………」

「だけどナユタと同じ顔をした女の子を……それもナユタのお姉ちゃんを見殺しにするなんて俺にできるわけないですよ」

「ですが彼女は貴方を都合の良いように利用しました」

「それでも、です……」

人は決して綺麗なだけの生き物じゃない……

無償で施された《奇蹟》に対して人は何処までも欲深くなるのが、このクロスベルに関わって良く分かった」

自嘲するように言いながらも、リインはならばイリア達を見殺しにできなかったことは間違いだったとは思わない。

「それでも何もなかった結果、考えていた通りの後悔をするくらいなら恨まれても良い……」

死なれて後悔するよりもそっちの方がずっと良い」

「リイン……」

「それに俺には刃を交えたあの子は、帰りたい場所に大きな岩が帰り道を邪魔して帰れない泣いている迷子……そんな風を感じたんです」
「だとしても……」

「他に理由が必要だと言うなら、《黒》に染まったあの子の“力”が奪われるかもしれないから……」

そんな理由ならば納得してもらえますか？」

「ですが、《零の騎神》と戦えば貴方もただでは済まないでしょう……」

今の貴方は《黄昏》に対抗できる唯一の“希望”だと言う事を忘れないで下さい」

「そんな大げさな……」

アリアンロードの言葉にリインは苦笑する。

目の前のアリアンロードもそうだが、ダーナのように《黄昏》に気付き準備を整えている者たちは少なからず存在している。

例え《相克》で彼女たちに負けてしまったとしても、リインは安心して託すことができると考えている。

「だけど、確かにあの子が本当に頼りたいと思う人は俺達ではないでしょう……」

そして口では遠ざけようとしても、傷付いて欲しくないと思っ
ていてもそれと同じくらい来て欲しいと思っ……

俺にできることはせいぜいあの子と彼らの間を阻む、岩を取り除く
ことなんだと思います」

「……………彼らが御子殿の下に辿り着けると？」

「これで黙って諦める人達ではないでしょう」

果たして自分はカシウスのように彼らの反骨心を煽れたか悩む。

もつとも彼らは彼らの意志でキーアの下に辿り着かなければいけないとリインは思う。

「そこまで分かっているなら、何故……何も言わないのですか？」

意志が固いリインにアリアンロードは疑問を投げかける。

「貴方には一つだけ、《零の騎神》に刃を届かせる可能性に心当たりがあるはず。何故それを言わないのですか？」

「ありません。ここで貴方と《剣》を錬成することはおそらく不可能でしょう」

「それは何故……？」

「貴女はキーアちゃんを本気で救いたいと思っていないからです……」

半端な気持ちで《相克》は成立しません」

「それは……」

リインの指摘にアリアンロードは口ごもる。

そんなことはないと言ったのは使徒としての矜持から。

しかし、思い出すのはキーアの諦観に満ちた目。

そしてナユタを抱いた時に感じた温もりが、アリアンロードの衝動を揺らす。

——これは御子殿が私に植え付けたまがい物の感傷……しかし……

《呪い》と同じでその感情は零から生み出されたものではない。

振り払おうとする心は250年の間に捨てたはずの騎士としての誇りか、あるはずがない母性なのか。

外道に堕ちた身には過ぎた感情と分かっているても、アリアンロードはこのままキーアを見殺しにしたいとは思えなかった。

それ故にリインを待ち、《零の騎神》に対抗できるだろう《剣》の錬成に臨むつもりだったが、当の彼はアリアンロードが乗り気ではないと誤解していた。

「リ、リイン・シュバルツア……その……ですね……」

やる気は十分にある。

しかしそれを口にするには秘密組織の幹部のイメージを崩してしまうので憚られる。

「くっ……」

「アリアンロードさん……?」

様子がおかしいアリアンロードにリインは首を傾げる。

——そんな鈍感なところまで似なくても良いのに……

思わず内心でリインを罵り、アリアンロードは考える。

リインならば何も言わなくても「剣」の錬成のために挑んで来ると思っていただけだが、如何にして彼の口からそれを言わせるか思考する。

「な、何ですか?」

強い眼差しで睨まれてリインは思わず身構える。

使徒として戦うことは容易い。

しかし、《大地の剣》をこの戦いで持ち出す理由はない。

どうすれば良いか悩むアリアンロード。無言のまま圧が強くなる彼女から視線を外せなくなったりリイン。

不毛な睨み合いが続く中、その男が動く。

「一つ宜しいかね、鋼の聖女殿?」

「何ですか《白面》?」

「この茶番はいつまで続けるのかね?」

「……………茶番とは何のことですか?」

惚けた答えを返すアリアンロードにワイスマンは肩を竦める。

「《零の御子》を救いたいなら救いたいと素直に言えば良いものを……

そんなにリイン・シュバルツァーに助けて欲しいと言ってもらいたい……いや、頼りたいのかね?」

「……………そんなことはありません」

アリアンロードは平然を装いワイスマンの言葉を否定する。

しかし、そこにいるのは人の認識に関してはプロのワイスマンとわずかな因果から結果を導き出せる《識》を持つリイン。

口だけの嘘は容易に見破られる。しかし——

「貴女がどこまで本気か分かりませんが、さっきも言った通り俺を倒

してキアちゃんを救いたいという思うくらいの本気でなければ、
相克”は成立しないでしょう……

そういう意味では俺もこの戦いでどこまで本気になれるのか自信
はありません」

キアとの薄い関係性。

クロスベルと言う魔の都市の在り方。

帝都やノーザンブリア、オルデイスとは違って命を賭して戦う理由
が今のリインにはない。

それに加えて例え勝てたとしても、リインにはホムンクルスの寿命
を解決する術もない。

何よりリインが優先するのは、帝国に残して来た家族や仲間たちで
ありクロスベルではない。

「やれやれ……どちらも何をつまらないことに拘っているのやら」

煮え切らない態度のリインとアリアンロードにワイスマンは肩を
竦める。

「ならばこうしよう。リイン・シユバルツァー、君が《零の騎神》に勝
てたなら私が責任を持つてキアを助けて上げよう」

「……………それで、代償に何を支払わせるつもりだ？」

「フフ、代償などんでもない。私と君の仲ではないか」

「おぞましいことを言うな！」

リインの反論をワイスマンは軽く聞き流してアリアンロードに向
き直る。

「そして鋼の聖女殿、貴女は私の言葉を聞いてリイン・シユバルツァー
と戦う気になるだろう」

「……………何を言い出すかと思えば、貴方の甘言に惑わされる私では——」

「負け犬の分際で何を偉そうにしているのかね？」

「……………」

「あ…………」

ピシッ、アリアンロードが小脇に抱えていた兜面に亀裂が走り、
リインは言葉を漏らした。

「私が主導する《福音計画》に勝手に介入しておいて、当時十五歳の子

供に負けたことに関しての弁明をまだ聞いていないのだが？

これが結社の中でも一番とふんぞり返っていた《最強》だったとは、同じ使徒として恥ずかしい限りだよ」

「……………」

兜面の亀裂は瞬く間に広がる。

「それも《影の国》でのことも含めれば二回！ そう二回も同じ子供に負けているというのに “格上” を気取るとは武芸者として恥ずかしくないのかね？」

「……………」

次の瞬間、兜面は砕け散った。

「リイン・シュバルツァー、今からでも遅くない……………」

こんな半端な負け犬に切り札となる《剣》を預けるよりも《蒼》の起動者を “相克” の相手とするべきではないかな？」

「なっ!？」

ワイスマンの提案に固まっていたアリアンロードは声を上げる。

当然、ワイスマンはそれを無視して捲し立てる。

「あれは実力は確かに聖女以下だが、ギリアス・オズボーンへの復讐心は目を見張るものがある……………」

感情による戦闘能力の増減は君が身を持って証明しているだろう？ 彼ならば “相克” の良い薪になってくれるだろう」

「何を勝手なことを——」

好き放題言うワイスマンにリインは呆れたため息を吐き、アリアンロードを見て言葉を止めた。

「……………確かに今の《鋼の聖女》ならそっちの方が良いかもしれないか」

「リ、リインッ!？」

まさかの同意にアリアンロードは狼狽える。

あえて彼女がどんな顔をしていたかは語らないが、リインがそう判断する程のものだった。

「《鋼の聖女》アリアンロード、君は最近少々弛んでいるのではないかね?」

「っ——」

「見極めるなどと悠長なことを言わずに《零の至宝》の力を奪うくらい
言えないのかね？」

「それは……」

「はつきり言わせてもらおう……」

君は余りに甘く見過ぎている。千年に及ぶ呪いの元凶である《黒
》という現象のおぞましさを」

「そんなものは私が一番良く分かっています！」

「果たしてそうかな？」

今は時期ではないから、預言を覆すことができないから……

そう言い訳して《黒》の呪いを見逃している君が二年後の《預言
》にどう諍おうと言うのかね？」

「わ、私は……」

「リイン・シュバルツァーは既に示したぞ……」

《真なる鋼》と言う方法とその身に宿した聖痕を《至宝》にまで
昇華させた、それに対して君は何をしているのかね？」

「っ——」

「あと二年、絶望的なまでに時間がないというのに——」

「ワイスマン、もう良い」

畳み掛けようとしていたワイスマンは肩を竦め場所を譲る。

「正直、今は《黒》の呪いについては俺はどうでも良いんです……」

キーアちゃんを救おうという意志がないのなら、ただ見ているだけ
で満足というなら、俺の前に立たないでください」

「リイン……」

「ただ一つだけ教えてください……」

今の貴女は結社の使徒《鋼の聖女》なのか、それともエレボニアの
救国の使徒《槍の聖女》なのか、どちらなんですか？」

《修羅》か《理》か、それを問いて来るリインにアリアンロードは目
を伏せる。

「……………認めましょう……」

厚かましい話ですが、私は御子殿を——キーアを《黒》の手から救

い出したいと思っています」

「それだけ答えてくれれば十分です」

リインは満足そうに頷き、アリアンロードの——リアンヌ・サンドロットの前に立つ。

「ふふ……あの日、《修羅》となることを誓ったと言うのに……」

まだ私の中にこのような感情が残っていたとは思いませんでした」自嘲するように笑うリアンヌは肩の力が抜けたように自然と微笑む。

「はは……正直、余計なことを言ったと後悔しています。さつきよりもずっと強そうだ」

修羅として『黒』を討ち滅すために全てを捧げる《鋼の聖女》。

誰かを護ることを思い出した《槍の聖女》。

果たしてどちらが強いのか、リインには分からない。それでもキアを助けるための最低条件がここに整った。

「こちらは手を抜くつもりはありません……」

貴方を倒し、キアを『黒』から、そして呪われたクロスベルの地から解放させましょう」

「そうは行きません。俺はキアに言いたい事や叱らなければいけないことがたくさんありますから」

保護者をそっちのけにして、二人は意気込みを語る。

そして——

「来い——」

「出でよ——」

それ以上の言葉は不要と、どちらともなく右手を空に掲げて、彼の存在を呼ぶ。

「灰の騎神ヴァリマルツ！」

「銀の騎神アルグレオンツ！」

オルキスタワーの屋上に二つの《騎士人形》が出現する。

睨み合うように現れた二つの騎神にそれぞれリインとアリアンロードが取り込まれるように乗り込む。

起動者が搭乗したことで、二つの騎神はその体に力を漲らせる。

《灰》が握るのはゼムリアストーンの太刀ではなく、*“焰の剣”*。
《銀》が構えるのはランスではなく、*“大地の剣”*と巨大な盾。
二つの騎神はそれぞれの*“剣”*を構え――
「七の太刀《暁天》！」
「神技《ナインライブズ》！」
挨拶代わりと言わんばかりに一瞬の九撃を放ち、クロスベルの空へと舞い上がった。

・*

「螺旋撃っ！」
「鉄砕刃っ！」

一の型に対して《銀》は見覚えのある技をぶつけて来る。

「くっ――」
「っ――」

力の剛剣同士のぶつかり合いは互角。

大きく弾き合った《灰》と《銀》はすかさず次の一撃を繰り出す。

「――よし」

まだ決定打を与えたわけではないのにリインはそこに確かな手応えを感じる。

《影の国》では一方的に蹂躪されていたが、十全の《銀》と戦えていることにリインは己の成長を感じる。

「――よくぞここまで」

リアンヌは場違いと分かっているながらも、感動せずにはいられたかった。

《影の国》では一方的に打ちのめしたが、今の《灰》に自分の本気を受け止める*“力”*があることに胸を昂らせずにはいられない。

「ハアアアアアアアアッ！」

「オオオオオオオオオッ！」

エルム湖上で《灰》と《銀》が剣を交える度に激しさを増す。

「っ――」

次の瞬間、四体に増えた《灰》にリアン又は息を呑む。

一体目の《灰》は無手で拳から気功弾を連発し――

二体目の《灰》は両手に火球を作り出し投げつけるように撃ち――

三体目の《灰》が竜巻を纏った剣閃を放つ。

「くっ――」

容赦なく降り注ぐ極大の攻撃の数々に《銀》は盾を構えて受け止める。

凄まじい衝撃が連続して盾を叩き――

「アルティメットブローツ！」

拳打を放っていた《灰》は撃ち出した気功弾と共に飛び込み《銀》の懐深くまで踏み込み、盾を下から殴り上げる。

盾を腕ごと跳ね上げられ、《銀》は無防備な姿を晒す。

竜巻が《銀》を呑み込み舞い上げる。

「ジリオンハザードツ！」

騎神を軽く呑み込める程の巨大な導力魔法の火球を両手に掲げるように生み出し、竜巻に囚われている《銀》に向けて投げつける。

竜巻ごと《銀》を呑み込んだ火球は大きく膨張し――次の瞬間、内側から両断された。

「もらったー！」

それを待ち構えていた《灰》の本体は突撃して太刀を一閃。

しかし、その刃は《銀》の胴体を捉えるものの両断はおろか、傷一つ付けることはできなかった。

「この手応え――まさか《金剛》!?!」

「その程度の攻撃で私たちを傷付けることはできませんよ」

胴体で受け止めた剣を《銀》は乱暴に弾き、盾で《灰》を殴り飛ばす。

「まだですよ――」

《銀》は鬨気の気流を操り、吹き飛ぶ《灰》を捕まえ引き寄せる。

「聖技――グランドクロスツ！」

剣を槍のように構え、繰り出す技は最高の一撃。

「八葉一閃っ！」

あえて引き寄せられる戦技に身を任せた《灰》は短い集中から最高の一撃を持って迎撃する。

二つの必殺の一撃がぶつかり合い、エルム湖の水がその衝撃に高い、高い水柱を作る。

「……リイン……本当に強くなりましたね……」

「……だとしたら……貴女が目標になってくれたからでしょう」

「……フフ、そのように言われる資格などないはずなのに……」

リインの言葉にリアンヌは抑え切れない笑みをこぼしてしまう。

「ですが、まだですね……」

「ええ、まだ足りませんね」

二人はどちらともなく己の《剣》に視線を落とし、《相克》の熱量にはまだ足りないと言ふ。

「ならば挑戦者として私が先に切札を切らせてもらおうとしましょう」

そう口火を切ったのはリアンヌ。

「アングリアハンマーツ！」

剣を頭上に掲げて《銀》が叫ぶ。

その戦技は敵に雷を落とす技。

《灰》は咄嗟にその場から飛び退くが、雷は《灰》には降らず、《銀》に落ちた。

「何を……？」

雷を剣で受け止めた《銀》はその力を押し留める。

抑え切れない雷が《銀》の体全体を走り、帯電した空気が激しく音を立てる。

七耀の力を操り生み出した雷と聖女の闘気が絡み合って、雷の力が膨れ上がる。

「受けてみなさい！これが私の鏡火水月っ！」

「え——？」

リアンヌの叫びにリインは耳を疑う。

次の瞬間、《銀》はまさに雷の踏み込みで《灰》に肉薄していた。

「——っリンッ！」

咄嗟にリインは叫び、背中の空の翼が光を広げて《灰》と《銀》の

間を“絶対障壁”で隔てる。

「グラントブレイクツ！」

雷と闘気を纏った一撃は“絶対障壁”を紙を裂くように断ち切り、《灰》に届く。

剣戟が触れた瞬間、凝縮した雷と闘気は解放され《灰》の装甲を焼き砕いて轟雷を撒き散らす。

「——むっ」

両断されることなく舞い上がった《灰》にリアンヌは顔をしかめる。

「まだまだ改善の余地がありますね」

雷撃と剣撃のインパクトのタイミングがずれたことにリアンヌは不満を漏らす。

天高く舞い上がった《灰》はそのまま動くことなくクロスベルの湾岸公園に墜落。

その姿は無惨の一言に尽きる。

装甲は焼けただけ増幅した胸の増幅器は見る影もなく“核”が剥き出しにさらされている。

「……………リイン？」

返事はない。《灰》も仰向けに倒れたまま身じろぎ一つしない。

その惨状を改めて正面から見たリアンヌはやり過ぎたと冷や汗をかく。

奇跡的に“核”の破壊は免れたものの、従来の騎神戦ならば起動者の死が確定している程の損傷にリアンヌは焦る。

『リアンヌ……………やり過ぎです』

「で、でもまだ“片手”ですよ？」

咎める言葉を発した《銀》にリアンヌは言い訳を口にする。

『片手だとしてもグラントクロスを超える技ですから……』

しかし、やはり《黄昏》が起きない限り“相克”は成立しないのでしよう』

「……………口惜しいですがそのようですね。ですが“グラントブレイク”は《空》の“絶対障壁”を断ち切れることが分かっただけでも良しとしましやう」

『それより早くリイン・シユバルツァーの手当てを——』
「がはっ——」

突然《灰》は痙攣するようにその身を弾ませる。

《灰》の中から咳き込む音と痙攣するように微震する《灰》にリアン
又は安堵し、顔を引き締める。

「勝負あったようですね。『相克』は成立しませんでした。私の新
たな技は《至宝》にも通用することが分かりました」

果たして聞こえているのか怪しく。

咳き込む音が沈黙に代わり、《灰》の微震もそれに合わせて大人しく
なる。

「キーンについては私が責任を持って最後まで諍ってみせましょう」

そう言つてリアン又は踵を返す。

しかし、背後の音と気配にその足を止める。

「それ以上動けば死にますよ」

直撃ではなかった、本来の得物でもなかった。

しかしそれでもその破壊力は今の《灰》が物語っているのだが、無
惨な姿になりながらも《灰》は剣を杖にして立ち上がる。

「う……う……あああっ！」

言葉にならない唸り声を上げ、《灰》は体の損傷を修復せずに斬りか
かつて来る。

か細い焔を纏った斬撃は攻撃と言えるようなものではなく、ただ朦
朧とする意識の中でがむしやらに振り回しているだけ。

その姿を無様とは笑わない。

《銀》は《灰》の悪あがきを盾で受け止めながら呼び掛ける。

「リイン、聞こえていますか？」

返事はなく、《灰》は機械のように焔を纏った刃で盾を何度も叩く。
ただ闘争本能に突き動かされているかのうように斬りかかつてく
る《灰》だが、それも数合で力尽きたのか剣に纏っていた焔が燃え尽
きる。

それでもまだ剣を持ち上げる《灰》にリアン又は目を伏せる。

「その意気やよし——ですが、今は眠りなさい」

小突けばそれで終わると《銀》は燃え尽きた剣に盾を翳し、
“大地の剣”を軽く構える。

そして、盾で“焰の剣”を——盾が斬り裂かれた。

「なっ——!?!」

両断された盾は一瞬で焰に吞まれ、その焰の勢いは《銀》の左腕にまで及ぶ。

「っ——」

咄嗟に盾の残骸を手放し、距離を取る。

その動きに合わせ、それまでの覚束ない足取りをしていた《灰》は距離を詰めてやはり焰を宿さない剣を振り下ろす。

「まずい——!」

叫びながらリアンヌは剣で受けるより回避を選択。

湾岸区から湖に飛び出して空を斬った剣は湖面に振り下ろされ——爆発した。

「なっ!?!」

ただ剣を振り下ろしただけでは済まない水柱の巨大さにリアンヌは目を剥く。

そして異常なのは舞い上がった水が雨の様に降る気配がなく蒸発して消え去ったこと。

「焰は消えたわけではないということですか……」

盾越しに燃やされ消し炭となった左腕を一瞥してリアンヌはおおよその術理を理解する。

刀身に凝縮された焰の熱。

焰を纏わず、ただ一瞬の刹那に全てを焰を開放する戦技。

「それでこそ《灰の起動者》——あの人の子供」

即興で編み出したのか、それとも自分との戦いのために用意していたのか、どちらだったとしても神業とも言える妙技にリアンヌは口元をほころばせる。

“星火燎原”という名が脳裏に浮かぶがリアンヌはそれを振り払うように《銀》に剣を掲げさせる。

「相手にとって不足はない」

雷が再び「大地の剣」に落ちる。

盾を失い消し炭となった左腕は一瞬ゼムリアストーンに覆い尽くされると、次の瞬間元の姿を取り戻し、両手で雷光を纏う剣を握り締めめる。

「まだだ……まだ……俺は……戦えるっ！」

《灰》の大腿部に設置されている副増幅器が唸りを上げ、「焰の剣」に焰が一瞬灯って消える。

それぞれが「雷」と「焰」を剣に装填し睨み合う。

二人には予感が生まれる。

「さあ、始めるとしましょう。誰にも邪魔はさせない。私と貴方の「相克」を」

「ああ、望むところです。真つ白になるまで互いの魂が燃え尽きるまで！」

《銀》は漲る雷光を更に靈力を漲らせ——

《灰》は不気味な程に静謐な靈力を研ぎ澄ませ——

「ハアアアアアアアッ！」

「オオオオオオオオッ！」

二つの騎神は同時に動く、それまでの駆け引きを忘れたように正面から必殺をぶつけ合う。

雷が焰を吹き飛ばし、焰が雷を吹き飛ばす。

剣は軋みを上げて鏢迫り合い、両者はどちらともなく退いて——落雷を、焰を剣に宿らせて再びぶつけ合う。

「もつとです！ アルグレオン！ もつと速くっ！」

雷撃と剣撃の最高のタイミングを探るように《銀》は全力の一撃を繰り返す。

「もつとだ！ ヴァリマール！ もつと研ぎ澄ませっ！」

一秒の解放を更に突き詰め半分に、それでも足りないとして《灰》は一瞬を追究する。

「雷」の余波がただでさえボロボロの《灰》を更に壊していく。

「焰」の余波が精巧な《銀》に確かな傷痕を刻んでいく。

狂ったように連続して落ちる落雷。

劍が内包した熱が劍を交える度に凝縮され周囲の水を消滅させていく。

全力を繰り出し続けているにも関わらず、二つの騎神は衰えるどころかその技の冴えを研ぎ澄ませていく。

雷の劍が《灰》の左腕を斬り裂き、爆散させる。

焰の劍が《銀》の翼を斬り裂き、焼き尽くす。

「っ——まだまだ!」

「この程度で!」

機体を修復することを忘れてフィードバックされた痛みを無視して二人は咆える。

「神技——グランドブレイクッ!」

「刹那の焰よ——我が劍に集え!」

「極大の雷」と「刹那の焰」が最高の一撃に昇華されてぶつかり合い、喰らい合い、呑み込み合う。

その結果——

「なっ!」

「あっ!」

二つの騎神の力に耐え切れず「焰の劍」と「大地の劍」は示し合わせたように同時に碎け散る。

行き場を失った技の衝撃は二つの騎神を吹き飛ばした。

閃光が深夜のクロスベルを真昼なのではないかと錯覚させる程に強く照らし、消える。

そこにはもう二つの騎神の姿はなく、それと入れ替わるように湿地帯から青白い光が天に昇り、巨大な大樹が現出するのだった。

146話 《零の至宝》

そこは一面の白で覆い尽くされた場所だった。

「私はこう思うのだよ……」

何処とも言えない場所に佇んでいたリインに話しかけてくるのはゲオルグ・ワイスマン。

しかしその姿はヨアヒム・ギユンターのものではなく、元の姿だということこそそこが《影の国》に近い世界だとリインは判断する。

「不思議に思わないかね？」

何故《雲の至宝》は《鋼》や《零》のような力を持っていないのか

「それは結局、《雲の至宝》はお前が言っているだけでそこまでの《力》がなかっただけなんじゃないのか？」

「いいや、それはないだろう……」

人工的に造られたという点では突発的という差はあっても、《零》の錬成陣を利用して生まれた《力》なのだから

「だとしても《雲》の力は《零》程の力を持つてはいなかった」

「持つていないのではなく、《雲の至宝》はまだ完成に至ってないのだよ」

「完成していない……？」

「《焰》と《大地》は守護神を、《幻》は文字通り神を眷族たちは望み……」

《零》はおそらく今のクロスベルの人間たちの願い、すなわち帝国と共和国を打倒することを望まれて生まれた存在だと言えるだろう

「それが正しかったとしたら、そもそもあの《力》は至宝と呼ぶには相応しくないんじゃないか？」

「フフ、それがそうでもない……」

私の仮説では《七の至宝》は女神より賜れた時、その姿は全て同一のものだったのではないかと考えている……

《輝く環》も《紅き聖櫃》も《黒き巨槌》、そして《虚ろなる神》も

全て眷属たちが望んで、それぞれの姿や形になったことがそれを物語っている……

故に《鋼の至宝》が闘争を、《零の至宝》はクロスベルの独立を人々が願ったからこそ、今の形になったと言えるだろう」

「……つまり『雲の至宝』はまだその無垢で、何にも染まっていない状態だって言いたいのか？」

「その通りだ。だから《鋼》と違い『力』を分割することが簡単にできたのだろう」

クククとワイスマンは喉を鳴らし、続ける。

「話は変わるが、私が提示するキーアを救う手段は難しいことではない……

人の器を捨てさせ、私と同じようにプレロマ草を触媒にした精神体として生かす、ただそれだけだよ」

「それは……」

その方法にリインは顔をしかめる。

「十三工房の力を借りれるならば、ホムンクルスを作り新たな器にその精神を移す手段もあるのだが、ホムンクルスの技術はアルベリヒが独占していて私ができることはここまでだよ……

もつとも、これ以上の奇蹟はそれこそ女神の御業に縋るしかないのだがね」

「……………俺にキーアちゃんのようになれと言うのか？」

前の話題からキーアの話。

そこに込められた意図をリインは確認するように口に出す。

「《雲の至宝》はキーアと違い、ただ一人を眷族として、本体でもある……

彼女の様に他者の想念に侵されることはなく、不特定多数の願いをすり合わせた漠然とした『力』を超越する可能性を秘めていると私は確信している……

私が提示した結末を超える最良を求めるならば、《雲の至宝》を完成させることだけが唯一の可能性だろう」

「……………」

無表情を保つリインにワイスマンは笑みを深めて告げる。

「私は《雲の至宝》を完成させるのは《黄昏》まで温存しておくべきだと思うが、決めるのは君だよ」

その言葉を最後に周囲の白に意識が溶け込むように視界が白に染まり——リインは暗闇の中、目を開いた。

「……………ここは……………」

頭を振ってリインは直前の記憶を思い出す。

「たしかリアンヌさんと《相克》を行って……………ヴァリマール、無事か？」

『……………ああ、各部の損傷は激しいが動くことはできる』

「そうか……………」

改めて周囲を見回し、ヴァリマール越しに感じる水の感触に自分の現在地を理解する。

「エルム湖の底か……………」

閃光で眩んでいた視界も、雷鳴で潰された聴覚も回復していることからそれなりに時間が経っていると考えてリインは《ARUCS》の時計を確認する。

時刻はまだ深夜の零時を過ぎたばかり。

それ程の時間が経ってないことに安堵しながら、その《力》に気付く。

「どうやら《碧の大樹》が錬成されたみたいだな……………」

リインは倒れたまま、周囲を見回し気配を探る。

手には《焰の剣》はなく、周囲にそれらしい気配もなければ《銀》の姿も見えない。

「……………失敗か……………」

元々必ずできると思っていたわけではないので落胆はない。

「後は……………」

夢で交わしたワイスマンとのやり取りを思い出す。

《鋼の剣》の錬成は不発に終わってしまったが、《零の騎神》を倒す方法は存在している。

「……………行くぞヴァリマール」

『リインよ。まさか《零の騎神》とこのまま戦うつもりなのか？』
「ああ、いくら自滅すると分かっているもやっぱり見過ごすわけには
いかないからな」

『……………しかし……………了解した』

何か言いたげな沈黙の後に了承してくれるヴァリマールにリイン
は感謝する。

ぎこちない動きで立ち上がり、背中の《空の翼》を広げるが展開さ
れるのは片翼だけ。

「飛ぶにはこれでも十分か……………」

機体を直すことを考えるが、《零の騎神》の攻撃力を考えれば“力”
を温存した方が良くリインは判断する。

「行くぞー！ ヴァリマールッ！」

『応っ！』

リインの言葉に《灰》は頷き、夜のエルム湖から光が飛び立った。

まだ暗い空に飛び出すと、青白い光を宿す巨大な大樹がすぐ目の前
にあった。

それを見てリインは……………

「ヴァリマール、一つ頼みたいことがある……………」

『むっ……………』

唐突に口に出して来たリインのお願いにヴァリマールは戦々恐々
という様子で言葉を返すのだった。

・*

「これが真実よ、ロイド」

クロスベル市から南西に位置する湿地帯に突如出現した幻想的な
大樹。

その最奥で、ミシユラムに軟禁されていると聞いていたエリイに突
きつけられた真実にロイド達は愕然とする。

「そんな……………」

「キーアちゃんが……………もうすぐ死ぬ？」

「……………」

言葉を失うロイドとクルトに対して、ワジはあり得ないことではないと無言でその真実を受け入れる。

「う、嘘ですっ！ そんな馬鹿な話があるはずがありません！」

ノエルは怯みながらも声を上げて否定する。

「あら失礼ですわね……」

貴方達を知りたいと喚くからせつかく教えて上げた真実だと言うのに、人を嘔吐き呼ばわりするなんて」

やれやれとエリーの傍らに立つマリアベルは肩を竦める。

「ロイド君、真実は決していつも納得できるものではないのだよ……」

だが悲観することはない。《零の至宝》はリイン・シュバルツアールとの戦いを経て新たな領域へと進化しつつある……

それこそ寿命の問題という因果なども、君達を助けて生まれた因果の歪みを断ち切ることも可能になるだろう」

イアンは背後に膝を着いて鎮座している《零の騎神》を振り返り、興奮した様子で語る。

「だからって……」

「でしたら貴方達はとうすると？」

先程キーアさんを返せなどと言っていました、とんだ筋違いですわ……

今のキーアさんは進んでわたくしたちの計画に協力してくれているのですから」

「やれやれ、大した面の皮の厚さだね……」

だけどエリーがそつちについたって言う事はあながち間違いじゃないのかな？」

肩を竦めるワジに睨まれ、エリーは身を竦ませるものの気丈を振る舞って言い返す。

「だって……だって仕方がないじゃない……」

キーアちゃんが私たちのために……そして私たちのせいでクロスベルが滅んでしまうって言うんだから」

「ええ、エリーは何も悪くない。そうですね」

「ベル……」

蒼褪めた顔をしていたエリイはマリアベルに耳元で囁かれて空ろな瞳になって安堵する。

「っ——エリイに何をした!? まさか《グノーシス》を使ったんじゃないだろうな!?!」

陶醉し切った様子のエリイにロイドは声を上げる。

「人聞きの悪いことを言わないでもらえます?」

エリイとわたくしは親友同士、この数週間じっくりとお話して分かってもらった。それだけですわよ」

クスクスと笑うマリアベルにロイドは強い不快感を覚える。

「キーアさんについてもあなた方よりもわたくし達の方が良く知っていただけの事……」

むしろ表面的な部分しか見ずに理解したつもりになっていただけのあなた方がキーアさんの何を語れると言うのかしら?」

「それは……」

「第一、キーアさんの“力”の恩恵を一番受けているあなた方がわたくし達のしていることを批難する資格があると言うのかしら?」

「ぐ……」

「キーアさんの“力”を否定するならまず、あなたが自害するべきではないのかしら?」

フフ、そうすればクロスベル全土に広がった滅びの因果を解くことができるかもしれませんわよ」

「そんなことできるわけないだろ!」

自殺を示唆する言葉にロイドが言い返すと、マリアベルは深々とため息を吐く。

「本当にあなたは不愉快な人間ですわね」

「——っ」

「口を開けば“真実”や“正義”……」

でも実際はその言葉の裏にあなたの信念なんてない。ただ綺麗な言葉を口にしていただけ……

賢しげに粗を見つけるのが得意みたいですが、何も出来ないまま、

何もしないまま、ただ誤りだと囃し立てることがあなたの「正義」だと言うのだとしたらわたくし達はあなたのことを買い被っていたようですわね」

「な、何を……」

「それにこれはあなた達が望んだことでもあるはずですよ」

「俺が望んだ？ デタラメを言うなっ！」

反発するロイドに MARIAABEL は妖艶な笑みを浮かべ、禍々しい杖を振るう。

そうして彼女たちにロイドの幻影が現れる。

「——っ」

その場から飛び退いてロイドはトンファーを構える。

しかし幻影のロイドは襲い掛かることなく、口を開く。

『憎い……』

「なっ——!?!」

『兄ちゃんを殺した犯人が……帝国と共和国が……憎い……』

「これがあなたが警察官になろうとした切っ掛けですわよね？」

楽しそうに笑う MARIAABEL にロイドは言葉を返す余裕はなかった。

それは確かにロイドの胸の奥で燻ぶっていた負の感情。

幻影はロイドが目を逸らして来た感情を白日の下にさらけ出す。

『クロスベル警察は役に立たない……なら俺が……俺が事件の真相を暴いてやる』

「ああああ、もしかしたら他の誰でもないあなたが一番クロスベル警察を信用していなかったのかしら？」

「っ——」

MARIAABEL に突きつけられた言葉をロイドは否定できなかった。

「あなた方も、心の底ではキーンアさんがガレリア要塞を消滅させたことに胸が空いた気持ちになったのではないかしら？」

「それは……」

「くっ……」

「……勝手なことを言わないで欲しいね」

ノエルはまさに凶星を突かれ、クルトは目に余る同胞の暴力の象徴

が、そしてワジも立場を超えてあの威圧的な列車砲がなくなったことに心の何処かで安堵を感じていた。

「キーンさんに一番影響を与えていたのはクロスベルの民衆ではなく、特務支援課の方々……」

あなた達が心の底で溜め込んでいた憤りや憎悪をキーンさんは代弁して立ち上がってくれたに過ぎないのですわよ」

「ベル……それ以上は……」

「エリイもずっと帝国と共和国を憎んでいましたものね……」

二つの大国のせいでマグダエル家は離散、恩師のアーネストさんまで歪んで壊れてしまった。そう全ては帝国のせい——」

「やめてベルッ！」

「ああ、かわいそうなエリイ。大丈夫、大丈夫よ……」

全部キーンさんに任せておけば、おじ様もおば様もきつと戻って来てくれるわよ」

マリアベルはエリイを抱き締めて、あやすように優しい言葉を言い聞かせる。

「それはどうだろうね」

言葉を失い立ち尽くしてしまっているロイドに代わってワジが質問を投げかける。

「既に君たちの悪行はリイン君が暴き、導力ネットでゼムリア大陸中に知れ渡っている。この期に及んで君達に何ができると言うんだい？」

「フフ、分かっていますわね……」

キーンさんの「力」を使えば、そんなこといくらでも「なかった」ことにできるんですわよ」

「限定的とは言え、特務支援課を救うことで因果を組み替えることが実際に可能であることは証明されている……」

これを利用すれば帝国と共和国にクロスベルが従属・翻弄されている現実を組み替え、クロスベルがその二国の上位にある「宗主国」として君臨する現実にも組み替えることも可能だろう」

「うふふ、素敵でしょう？」

こんな素敵なものがあればもう何も恐くない！

世界の全てに幸福を与え、哀しい思いをすることもない！

人はあらゆる不安から解放され、善きものだけを追求できる！

まさしく錬金術の奥義——《大いなる秘法》というものですわ！」

「……………やれやれ、ここまでとは……………」

あまりにも簡単に言い切るイアンに、悦楽に笑うマリアベルにワジは肩を竦める。

守護騎士として何度も見て来た「アーティファクト」の全能感に酔った典型的な狂信者の目。

根本的な問題として、ラインが存在する限り改変は確定されない問題点が残っているはずだが、もはや話し合いは無意味だとワジは判断する。

しかし、戦闘態勢を取るよりもワジはロイドの背中に視線を送った。

「ロイド、どうする？」

「……………」

ワジの質問にロイドは沈黙を返す。

「ロイドさん……………」

「……………」

クルトとノエルの視線もそこに集まるが、その視線を感じながらロイドは重くなった口を開き——

「もういいよ。ベル……………」

マリアベル達の背後の《騎神》が光ると、その胸から光の塊が降りて来てキーアがその場に現れる。

「キーア……………」

「ふふ……………」

呆然とするロイド達を他所にキーアは無邪気な笑みを浮かべ、マリアベル達が立っていた祭壇を駆け下りてロイドの胸に飛び込んだ。

「どーんっー！」

「うおっ!?!」

場違いな無邪気な声と共に飛び込んで来たキーアにロイドは狼狽

えながらもなんとか踏んばって受け止める。

「キ、キア……？」

「えへへ……」

青白い光と黒い近未来的なスーツを纏ったキアは嬉しそうに笑う。

その特務支援課にいた時とは変わらない笑顔にロイドは思わずほっと胸を撫で下ろす。

「キア、よか——」

「もう大丈夫だよ。もうロイド達が因果に殺されることはないから、キアが護るから」

「……………キア」

無邪気な声の中に狂気を感じてロイドは背中が冷たくなるのを感じる。

「リイン・シュバルツァーを消滅させるための力は十分に溜まったから、キアはもうロイド達に守ってもらわなくてもいいくらいに強くなったんだよ」

「キア……」

「その力も、ロイドがお願いしてくれたら何倍も大きくなるの……」

だから願って帝国と共和国を「ホロボセ」って、クロスベルを《樂園》にしよう」

「キアッ！」

無邪気な声のまま、紡がれる言葉を掻き消すようにロイドは声を上げる。

そんな反応にキアはきよとんと目を丸くする。

「どうしたのロイド？　だってそれはロイド達がずっとずっと誰かにして欲しかったことですよ？」

やはり無邪気なまま首を傾げるキアにロイドは自分達がいかにキアに間違ったことを教えていたのか実感する。

何も直接、帝国と共和国を悪し様に語ったわけではない。

些細な愚痴や態度。

そんな小さな積み重ねがキアの中で蓄積され、歪んだ世界観を持

たせてしまった結果が目の前にある。

「……………ダメだ。ダメなんだキーア……」

「ダメじゃないよ。リインを消さないとロイド達が死んじゃうんだから、だから——」

「っ——」

こんな理不尽な選択を強いてしまった弱い自分に怒りが湧き上がる。

「もう良い……もう良いんだ。俺達なんかのためにキーアが道を踏み外して——」

「良くないっ!」

ロイドの言葉を遮って、キーアは悲鳴のような声を上げる。

「キーアにはロイド達が必要な! ロイド達がいればそれで良いの! 他に何もいらない!」

痲癩を起したように捲し立てるキーアの初めて見る姿にロイドは息を呑む。

「キーアの“力”を使えば、もう誰も哀しい思いをしない世界を作れるんだよ?」

みんなが幸せになれるんだよ? 誰にも侵されることがない自由がそこにあるんだよ?

キーアが“力”を使わないとロイド達はみんな死んじゃうんだよ!?

それでも……それでもキーア達がしようとしていることは間違っているって言うの!?!」

「っ——」

「答えてよ——ロイドッ!」

胸ぐらを掴み、縋りつくように訴えかけるキーアにロイドは目を伏せ、長い沈黙の末に応える。

「それでも……それでもキーア達は、間違っている」

「——あ……」

「もつと早く、キーアには教えなくちゃいけなかった……」

キーアが知っているのはクロスベルという小さな世界の一部だっ

た……

帝国や共和国にもちゃんと良い人はいる。逆にクロスベルの人だからってそれが全て善人だとは限らない」

「違う……」

「キーアが作る自由はクロスベルだけの平和だ。どうして帝国と共和国も含めて平和にしようって言えないんだ？」

「それは……」

口ごもるキーアに「力」にも限界があるのだとロイドは予想する。そしてロイドは目を伏せて、留置場でのことを思い出す。

——兄貴はマフィアさえも守ろうとしていた。それなら……

「クロスベルだけの平和なんて俺は認められない。今は無理でも本当の意味で帝国と共和国と共存できると俺は信じている」

はつきりとロイドはキーアの目を見て告げる。

「そこに俺がいなかったとしても、必ず俺の代わりは現れる」

「なっ——」

ロイドの言葉にイアンが息を呑む。

しかし、ロイドはそれを無視して続ける。

「だからキーアが作ろうとしている『平和』は間違っている」

真っ直ぐな眼差しで否定されたキーアは呆然と立ち尽くし、後退する。

「……………ちがう……………ちがう……………」

頭を抱えてキーアはロイドの言葉を拒絶する。

「あらあら……………」

その様子にマリABELは意味深な笑みを浮かべると漆黒の翼を広げた。

「ベル!？」

「離れますわよエリイ」

有無を言わさずマリABELはエリイを抱えて祭壇から飛び降りる。

「ちがう……………ロイドはそんなこと言わない、ロイドはそんなこと言わない、ロイドは——」

「キーア……………?」

「お前はキーンアじゃない。何をどうやったか知らないが、家族の問題に部外者が出て来るなっ！」

「っ——ゾア・ギルステインツ！」

凶星を刺されたのか、黒の少女はムキになったように叫ぶ。

祭壇の上の《騎神》はそれに応えるように立ち上がり、その手に光を宿し——

「うりゃあああああああああああああああっ！」

何処からともなく降って来た焰の翼の強打が《零の騎神》の頭を直撃した。

「なっ——」

蔓の拘束がわずかに緩む、そこにすかさず無数の斬撃が走りロイドやワジ達の拘束が斬り刻まれ、宙に投げ出されたイアンを彼が受け止める。

対して、《騎神》の頭を強打した少女は危なげなく身を回転させ態勢を直して着地を決める。

「お待ちせ、ロイド君達！」

振り返った援軍の二人にロイドは驚きの声を上げる。

「エステル……それにヨシユア……」

「遅くなってごめんね……っていかどういいう状況なのこれ？」

黒く良くない気を纏って一目で正気ではないキーンアにエステルは困惑する。

「チツ……余計ナゴミガ増エタトコロデ無駄ダ……マトメテ全テ滅ボシテヤル」

黒の少女の声に呼応して、たたらを踏んだ《零の騎神》は立ち直して再び光球を掲げる。

「エステル！ ヨシユア！ 君達だけでも逃げろ！」

「大丈夫よロイド君。だつてわたし達には——」

次の瞬間、破壊を振り撒こうとする《零の騎神》の背後に音もなくボロボロの《灰の騎神》が現れる。

「桜花一槍っ！」

全身の力を一突きに込めた一撃は、ラインの予想に反して《零の騎

神を容易く貫いた。

147話 《碧の虚神》

「なっ——!?!」

背後からの強襲。

ダメもとの一撃は予想外な軽い手応えで《零の騎神》を貫いたことにリインは驚く。

「どうして……」

黒に染まったキーアもまた、その瞬間は正気を取り戻したように胸を背中から貫かれた《零の騎神》を呆然と見上げる。

「これは……」

触れて分かる《零の騎神》の歪さ。

外側の霊力は漲っているが肝心の中身はスカスカ。まるで張りぼてのような木偶人形にガレリア要塞で戦った時の凄みはない。

「……………遅かったか」

既に《黒》によつて《零》の力は奪われ、残りカスとも言える状態にリインは歯噛みする。

「……………だめ……」

貫いた刃が引き抜かれ、《零の騎神》は膝を着き、光の粒子を立ち昇らせるように消え始める。

「ダメッ！ 消えないで！」

悲痛な叫びを上げてキーアは手を伸ばす。

「キーアはまだロイドを、エリイを、ランデイもテイオもクルトも誰も助けてない！」

そこにロイドを痛めつけた時の狂気はない。

「キーアが……キーアがみんなを助けないと……守らないといけなの！ だから……だからっ！」

ただ純粹に救いを求める女の子は祈るように光に手を伸ばす。

その悲鳴に応えたのか、《灰の騎神》に流れていた光はその方向を捻じ曲げるようにしてキーアに注ぎ込まれる。

「あ……アアアアアアアアアッ！」

「キーアッ！」

光が爆発し、そうして現れたのは《碧の神》。

「碧いデミウルゴス……」

かつてノーザンブリアでリインが遭遇した色違いの《虚神》。

しかしその姿は歪で今にも崩れ、内部のコアが剥き出しに、それに纏う《神気》も頼りない。

「……………たおす……………りいんを……………」

《碧の虚神》はうわ言を漏らしながら朽ちた体を《灰》に向ける。

「きーあが……………ろいどたちの……………みらい……………まもる……………まもる……………まもる……………」

「キーア……………くっ——」

繰り返される言葉にロイドは彼女にどれだけのものを抱え込ませてしまったのか、自身に憤りを感じずにはいられない。

そんな彼らを他所に《碧の虚神》は何を思ったのか自分の胸に手を突き刺し、コアを抉り出して掲げる。

「キーアちゃんっ!」

「いけませんわエリイ」

そして飛び出そうとしたエリイの手をマリアベルが掴む。

「放してベル!」

「フフ、どうやらキーアさんは覚悟を決めたようですわね」

「それはどういうこと!?!」

明滅するコアにマリアベルはキーアがしようとしていることを察して、転移の魔法陣を作る。

「キーアさんはこの場を自爆させて《灰の騎神》を倒すつもりのようにですわね」

横目で確認すれば、《灰の騎神》は足元を木の根に呑み込まれ、その場から動けなくされている。

少し契約とは異なるが、問題はないだろうとマリアベルは逃げる準備を整える。

「じ、自爆っ!?!」

「《灰の騎神》を倒すために“大樹”に内包する霊力を全て使った“大崩壊”……………」

本当に愚かですわね。敵を倒すために守りたい者を巻き込むなんて、所詮は道理を知らない人形だったということかしら、それとも「魔」が差したのかしら？」

「ベル……貴女……」

まるで他人事のように振る舞うマリアベルにエリイは顔をしかめる。

「エリイ、貴女がキアさんに感じている愛情は偽物ですわよ」

だから気にするなとマリアベルはキアの真実を告げる。

「『あれ』はクロイス家が《教団》に託した本物の魂を持たない人造人間……」

教団が犠牲にした数多の魂を継ぎ合わせただけの紛い物の人形……

そして彼女には無意識のうちに周りの人間の心と魂を掴む力がある」

「力……？」

「誰もがキアさんを愛し、守るよう。因果と認識を操作する。エリイがあれに感じている『愛』はそういう紛い物なんですわ……」

だからエリイがあれの死に心を痛める必要なんて欠片もありませんの」

「ベル……」

「ふふ、良い子ですわねエリイ……」

貴女が望むなら、後で貴女だけの『キア』を造って差し上げますわよ」

この実験が終われば結社の《人造人間》の技術を譲ってもらうことになっている。

それとクロイス家に伝わる秘術、そして今回の実験結果を用いれば、第二第三の《零の至宝》を造ることは決して不可能ではない。

既にマリアベルはこの場から次のステージに心を躍らせている。

「ベル……」

抵抗がなくなった手にマリアベルは転移の魔法陣を起動する。

「ベルッ！」

「え——っ!？」

不意打ちの様にエリイの怒りに満ちた声が上がり、初めて聞く親友の声にマリアベルが顔を上げた瞬間——快音が広間に響き渡った。

・*

唐突だがエリイ・マグダエルはお嬢様である。

ゼムリア大陸各国に留学し、帰国後にクロスベルを別の視点から見る社会勉強のため警察官を志望。

クロスベル警察学校への入学はしなかったものの、警察官採用試験においては筆記と射撃で満点を獲得していたことなどから警察官として採用され、特務支援課に配属されることになる。

正規の教練をうけていなかった彼女は、支援課の発足当初一時間街道を歩き通しただけでバテてしまうくらいにひ弱だった。

しかし、数々の事件でクロスベル各地を歩き回り、ノエルと言う警備隊員の手解きを受けた体力作りの結果、仲間たちの中ではワースト二位であるものの彼女は警察官として立派なフィジカルを手にしていった。

そして今、この一年の結果がマリアベルの頬に——炸裂した。

・*

霊力が荒れ狂う広間に、場違いとも言える快音が鳴り響く。

エリイに頬を叩かれて仰け反ったマリアベルは彼女の手を放して倒れていくが、その姿は転移術の光に覆い尽くされていく。

「ベル……今の貴女は最低よ」

果たしてその言葉は届いたのか、次の瞬間マリアベルの姿は転移してその場から消える。

「……………」

エリイはやるせない気持ちに唇を噛む。

親友だと思っていた彼女の知らなかったおぞましいとさえ感じた

一面。

大抵のことはそれも彼女の魅力の一つだと割り切ることもできたかもしれないが、キアを人形として扱うこと。

そんなキアをまた造れば良いと臆面もなく言い切るマリアベルをエリイはとでも受け入れることはできなかつた。

「エリイ……」

「ごめんなさい、ロイド……」

声を掛けて来たロイドにエリイはバツを悪くしながら応える。

「話は後でしょう。それよりも今はキアを助けよう。力を貸してくれエリイ」

「っ——ええ」

弁明を後回しにするロイドにエリイは頷き——

『邪魔です、下がっててください』

そんな空気を一蹴するように《灰》は根の拘束を太刀で切り払い、《虚神》が溢れさせる霊圧から彼らを守るように間に立つ。

「リ、リイン君……だけど……」

『だけどじゃありません。あの存在に貴方達に何ができると言うんですか?』

「ただどあそこにキアがいるのに——」

『自惚れるな』

食い下がろうとするロイドにリインは冷めた言葉をぶつける。

『気持ちだけで何ができると?』

失敗したら、ここにいる全員の命が消える。その責任の重さを貴方は分かっているのか?』

『それは……』

『キアの狙いはあくまでも俺です、もう貴方達の出る幕じゃない……』

『そもそも貴方達に何ができると言うんですか?』

「言ってくれるね……」

『まともな手段では近付くことさえもできないのは認めるけど、そういう君に対抗手段があるとでも?』

《碧の虚神》からの圧力に対してワジは自分達の無力さを認めたと上
でリインに尋ねる。

『……………俺にできることは“斬る”だけです』

“大崩壊”を起こす前に本体を斬る。

単純明快な答えにロイド達は絶句する。

「そんな……………」

「それじゃあキアは……………」

『っ——だったら、他に方法があるんだっけ言ってみろ！』

責めるような眼差しにリインは苛立ちを爆発させて言い返す。

『何もできないくせに文句ばかり。お前達クロスベルはいつもそうだ
！』

「リ、リインさん……………」

温厚なリインが激情を露わにする様にクルトは面を喰らう。

『それに言ったはずですよ。キアを“斬る”覚悟は既にしてあると
……………』

そういう貴方達はキアとクロスベル、どちらを取るつもりでここ
にいるんですか？』

コアに集まる“力”をざっと見積もれば《フェンリル》を軽く凌駕
する力が集まっている。

もしもマリアベルの言った“大崩壊”として炸裂しようものなら、
被害は自分達や湿地帯だけに留まらない。

風は激み、水は腐り、大地は不毛となつてとても人が住める土地で
はなくなってしまう可能性も十分に考えられる。

「それは……………それでも……………俺は……………」

『ましてやキアをここで助けたとして貴方達にあの子の寿命の問題
はどう解決できるんですか？ それならいつそう——』

「リイン君……………」

言い淀むロイドにリインが捲し立てようとしたところで、エステル
が口を挟む。

「お願い、少しだけ私たちに時間をちょうだい」

『むう……………』

エステルの上張りにリインは眉をひそめて唸る。

『……………五分だけなら……………』

向こうもすぐに自爆はできないみたいですし、それまでなら俺も“力”を溜めますから好きにしてください』

「うん、ありがとう」

あつさりと拍子抜けするほどにリインは妥協し、エステルはロイド達に向き直る。

「ほら、ロイド君。五分だけ好きにして良いって。急いでキアちゃんのもとに行きましょう」

「あ……………ああ、ありがとう」

あまりにもあつさり前言を覆したリインに釈然としないものを感じながらロイドは《碧の虚神》に向き直る。

《碧の虚神》と彼らの間には無数の魔獣のような何かが現れ、ロイド達の前に立ち塞がる。

「エステル、君はここでヨシユアと一緒にあの魔獣たちをリイン君に近づけさせないようにしてくれ」

「うん、こっちは任せて！」

「一匹たりともリイン君の邪魔はさせないから」

頼もしい言葉を背にロイドは仲間たちに向き直る。

「みんな……………これは無謀な突撃だ」

「ロイド……………」

「リイン君が言う通り、俺にはキアを止める力なんてない……………」

それにあそこまでキアを思い詰めさせてしまったのは俺だから、例え辿り着けたとしても何て言葉を掛けて良いか分からない」

「それはあたしも同じです」

ロイドの言葉にノエルは目を伏せる。

都合の悪いことに目を瞑り、キアの恩恵をただ享受しようとしていた己を改めて恥じる。

「私もベルの言葉に一理でもあると感じてしまったから、ロイドは責められないわ」

「僕達も教会の秘密主義が招いた結果でもあるからね」

エリイとワジもそれに同調するように己の不徳を感じる。

「元を糾せば、僕達帝国人の高圧的な振る舞いとも言えますが……」
自分の事ではないが、これまでクロスベルで見て来た帝国人の振る舞いを思い出してクルトは自分の事のように恥じる。

「ここにいるみんなが今、ロイドと同じことを思っている。そしてそれはここにいないランディとテイオちゃんも同じはずよ」

「ああ……」

ロイドは改めて一同を見回して、告げる。

「俺達の中の誰でも良い。俺達の思いをキーンに——」

「何を言っているのさ」

最後の締めを言おうとしたロイドをワジが苦笑交じりに否定する。

「あの子が誰よりも待っているのは君の言葉のはずだ……」

そういうわけだから、僕が先陣を切らせてもらおうよ」

そう言ってワジは無数の魔獣の群れに向き直り、力を解放する。

「我が深淵にて煌めく蒼金の刻印よ」

ワジの背中に金色の《聖痕》が浮かび上がり、彼の両腕は異形の物へと変容する。

「大いなる腕となりて我が両腕に集え」

両腕を引くように構え、そこに魔法陣が広がって二つの球体が生まれる。

「オオオオオオオオオオオ！」

ワジは両手に顕現した黄金の砲弾を、目の前で叩きつけて合わせ、一筋の閃光として放つ。

「貫け！ アカシックアームズッ!!」

金色の砲撃が魔獣の群れを呑み込み、一直線に薙ぎ払う。

「くっ——」

「ワジッ!？」

「僕の事は良いから、早く行けっ！」

力の放出による虚脱感に膝を着いたワジは叱咤するように走れと叫ぶ。

「っ——」

心の中で感謝を叫び、ロイドはワジが拓いた道を駆け、仲間たちもそれに続く。

しかし、その道もすぐに周りの魔獣たちが押し寄せて塞ぎにかか
る。

「させません」

ノエルは何処からともなくミサイルランチャーを取り出して狙いを大雑把に付けて引き金を引き、撃ち出したそれを投げ捨て、次のミサイルランチャーを取り出して撃つ。

四連式ミサイルを三度使い、道を塞ごうとする魔獣たちを吹き飛ばし、ロイド達を追い越して魔獣のど真ん中に身を投げ出し両手のサブマシンガンを回転しながら乱射する。

「ノエルッ！」

「ここはあたしに任せてくださいっ！」

電磁ネットを乱射しながらノエルは叫ぶ。

とにかく派手に立ち回り、魔獣たちの目を自分に向けることこれがロイドを先に進ませる援護だと信じてノエルはスタンハルバードを振り回す。

しかし、それで全ての魔獣を引き付けられたわけではなく、ロイド達の前にはまだ多くの魔獣がいる。

「ここは僕に——」

そう言ってクルトが先行する。

抜き放つのは導力の刃を展開する双剣。

「ヴァンダールの双剣、とくと味わえっ！ ラグナストライクツ！」

双剣の乱舞が押し寄せる魔獣の波を押し返すように次々と斬り伏せ、斬り払われる。

さらに剣を振るう度に雷光は迸り、魔獣たちを焼く。

しかし、大型の魔獣がその雷光に耐える。が、クルトは止まらない。

「我が全霊を持って無双の一撃を成す」

双剣の刃を消して、柄を直列に連結し一つの大きな刃をする。

「うおおおおおおおっ！ 破邪顕正っ！」

巨大な魔獣を一刀両断。

勢い良く突っ込んだクルトを脅威と判断して魔獣が殺到する。

「クルトッ！」

「問題ありませんっ！」

ロイドの声に応え、クルトは刃を消したオーブメントを逆に連結し直す。

「見よ、これがヴァンダールの風だっ！」

殺到する魔獣たちをクルトは一息に薙ぎ払う。

その手に握られているのは導力の刃を穂先にした薙ぎ刀。

一つの武器を三種に使い分け、クルトはノエルと同様に道を切り開く。

「行ってくださいロイドさん、キアはきつと貴方の言葉を待っているはずですよ」

その言葉に背中を押されるようにロイドは駆ける。

「キアアッ！」

《碧の虚神》が目前となる。

しかし、まるでロイドの接近を拒むように結界が展開される。

「エリイッ！」

「任せてっ！」

短いやり取りだけでロイドは飛び上がり、その背中にエリイは導力銃の銃口を向ける。

「ノスターブラストッ！」

導力の砲撃に背中を押されて加速したロイドが結界にトンファアを叩き込む。

「オオオオオオオオッ！」

雄叫びを上げロイドはトンファアを押し込み——結界を貫通してロイドは《碧の虚神》の身体を駆け上がる。

「キアアッ！」

コアを掲げる腕の頂上に辿り着き、コアの中のキアに呼び掛ける。

しかしキアはそれに応えることはなく、《碧の虚神》の腕はそれを握り潰そうと力が籠る。

『因果ヨリ滅却サレシ幻トナレ——』

「っ——させるものかつ！」

ロイドはその腕にトンファーを叩きつけ——砕け散った。
「なっ!？」

あと一步のところで武器が砕ける事態にロイドは言葉を失う。

「そんな——」

『いえ、まだです』

絶望するロイドに応えたのは勝手に回線が開いたエニグマから。

『エイオンシステムと戦術リンクの同調——クロツシング良好……』

エイドロンギアとベルゼルガーとの接続完了。エネルギー臨界1

20%——視覚情報並びに狙撃座標をランディさんに送ります』

『悪いなガレス。お前の記録は塗り替えさせてもらうぜ』

聞こえて来るのはここにいないはずの二人の声。

『それじゃあ——狙い撃つぜっ!』

次の瞬間、大樹の壁を貫き一筋の光が臨界を待たずにコアを握り潰そうとしていた《碧の虚神》の頭を撃ち抜いた。

荒れ狂っていた霊力が静まりかえり、群れの魔獣たちが一斉に動きを止める。

そして彼らの目の前で《碧の虚神》は体を崩壊させていく。

投げ出されたコアに包まれていたキーアはそれで解放されず、まるで全てを拒絶するように“白い闇”に呑み込まれ——

「キーアッ!」

「キーアちゃんっ!」

そこにロイドとエリイは躊躇わずに飛び込んだ。

148話　それでも俺は。

——ヨコセ……ヨコセ……

その囁きが聞こえて来たのは教団事件が終わってしばらくしてからだった。

——吾ノモノダ……ソノカノ統テ……

初めは気のせいだと思っていた声は毎晩毎晩、悪夢と共にやって来る。

時にはランデイが樹海の中、崖から足を踏み外し——

時にはテイオが実験中の事故で——

時にはクルトが暴走する導力車の事故に巻き込まれ——

時にはエリイが諸外国を回っている最中に飛行艇のエンジントラブルで——

時にはロイドが知らない女の人に刺されて——

結末はいつも同じ、誰かが一人、また一人といなくなり、独りぼっちになる。

相談したくても、特務支援課は一時解散してそこにはいない。

「ロイド……エリイ……」

日に日に不安だけが大きくなる。

日曜学校でできた友達と遊ぶ気になどなれず、ただひたすらに誰もいない支援課ビルの端末の前で誰かの連絡が来るのを膝を抱えて待つ毎日。

「寂しいよ」

弱音を吐くのは一人きりの時だけ。

特務支援課を一時解散し、充実した日々を過ごしていると楽しそうに話してくれるロイド達の邪魔をしたくなくて、キーアはいつも取り繕う。

「みんなの声が聞きたいよ……」

耳を塞ぎ、囁きを押し出すようにキーアは毛布を被る。

——ヨコセ……

いくら拒んでも聞こえて来る声。

近頃はそれだけに留まらず、昼間でもロイド達の断末魔が聞こえて来るようになっていた。

「ロイド……キアは何なの？」

いつか必ずキアの出生の真実を見つけてみせると言ってくれた言葉も今は不安でしかない。

「誰か……誰か……わたしを——」

「あらあら……」

そんな日々の中、彼女は唐突に現れた。

「お久しぶりですわねキアさん。わたくしのこと、覚えていますか？」

エリイの友達と、彼女が連れて来た綺麗で険しい顔をした女騎士によりキアは自分の真実を知り、罪を教えられた。

・*

落ちていく。

漆黒の闇に覆い尽くされた無の世界。

キアは全身を黒く染めながら落ちていく。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

ずっと誰にも届かない懺悔をキアは繰り返す。

マリアベルが告げた真実と、いつの間にか思い込まされていた対処方法、すなわちリインの排除。

身勝手だと分かっている、悪夢から解放されるにはそれに縋ることしかできず、何度も助けてもらった彼に多大な迷惑を掛けていると分かっている、止まってくれない自分に何度も死にたくなった。

「ごめんなさい……」

存在が希薄になって行く奇妙な感覚。

自分と言う《器》が壊れて、底から水が零れ落ちていくような虚脱感。

「悪いのはキアだから……お願い、せめてロイド達だけは……」

誰にともなくキーアは願う。

自分に纏わりつく《黒》はこれまで修正した《因果》の負債。
黒い鎖はキーアを虚無の闇の更に奥へと引きずり込む。

「っ——」
お腹を刺された鈍痛に、全身を焼かれる、潰される痛みが同時に走る。

それはキーアが改変し、ロイド達が受けるはずだった痛み。
何度経験しても慣れることはなく、それでも自分が犯した罪ならばとキーアはその痛みを受け入れることしかできなかつた。

「——あ……」
意識が遠のく。

それがいつもの覚醒の合図だが、今回は終わりの予感がする。

「まって……まだ何もできてない……キーアができることならなんでもするから、だからロイド達だけでも助けてよ……」

虚空に向けて手を伸ばす。しかし、そこに今まで応えてくれていた存在の気配はない。

「っ——」
煉獄の様な日々の中、唯一の救いの蜘蛛の糸はいつの間にか消え去っていた。

「あ……」
虚脱感に身を侵され、伸ばした手は落ちキーアの意識は闇に——

「——見付けた」
闇の中に沈むキーアの手をロイドが掴んだ。

その体にはキーアと同様に黒い因果の鎖が巻き付き、身じろぎする度に死の可能性の痛みをロイドに与えて来る。

「しっかりとしろキーアッ！」
全身が痛いはずなのにロイドはそれを感じさせずに叫ぶ。

「……………どう……………して……………？」
「っ——声が、聞こえたからさ。ごめん、キーアの苦しみに今まで気付いて上げられなくて」

ここに来るまでにキーアが教団事件から秘密にしてきたものを垣

間見たロイドは己の不甲斐なさを恥じるようにキアに謝る。

「……………もう遅いよ……………」

因果は既に収束しつつある。

《大樹》を使って捻じ曲げた因果はその消滅と共に世界は正しい形に修正される。

ロイド達支援課を始め、奇蹟的に生き残った人達も何らかの不幸な事故で、その生を世界に否定される。

その規模がどれ程のものはキアには分からない。

もしかしたら次の瞬間にでも、隕石がクロスベルに降り注ぐ可能性だってある。

「遅くないっ！ まだ俺はキアに何もしてやれていないっ！ だから諦めないでくれっ！」

今更ながら、一課に外向したことを後悔する。

成長を実感できる充実した日々が、キアの変化を見逃していた理由だっただけに自責の念は大きくなる。

「やめて……………キアは……………ロイドにそんな風にしてもらう資格なんてない……………」

だってキアは……………キアは本物の人間じゃない。心や魂も本物じゃないから……………」

「それは違う、生まれがどうであろうと——」

「ちがわないよ……………だってキアは痛くなかったんだもん」

「キア……………？」

「《赤い星座》がクロスベルの人達をたくさん殺した時も、キアの力で《神機》にガレリア要塞を消させた時も……………」

キアの心は全然痛くなかった……………だからキアは“ヒト”なんかじゃない。ベルが言っていた道具で、人形で、兵器なんだよ」

「っ——」

次の瞬間、ロイドは掴んでいたキアの手が血で真っ赤に染まったことに息を呑む。

「だからキアは本当はこの世界にいちやいけない存在だったの……………それなのに……………キアは……………」

「キアア……」

何かを言わなければいけないのに、ロイドは言葉に詰まる。それ程にキアアが抱えているものはロイドが想像できない程に大きかった。大き過ぎた。

人工的に造られ、女神の祝福を受けなかった人工物。そして優しい顔の下にある無機質な感情。

どれも普通の人生しか送っていなかったロイドには答えられるものではなかった。

「キアア……」

意味のない呼び掛けを繰り返し、ロイドは意気が萎えて握る手から力が抜け――

「馬鹿言ってるじゃねえ！」

叱咤の声と一緒に、キアアの手を新たな手が掴む。

「生まれが普通の“人”と違うから、キア坊は“ヒト”じゃねえってか？

冗談きついで。俺の身内は人から生まれたって言うのにどいつもこいつも“人でなし”の“ろくでなし”なんだぜ」

「ランディッ！」

ランディはロイドに目配せで笑いかけ、キアアに向かって叫ぶ。

「よく聞けキア坊っ！」

俺だってなあ、猟兵の頃は誰かを殺したところで痛む“心”なんてなかったんだよ……

だけど今の俺はこうして誰かの命を大切だと思えるし、奪いたいとも思わない……

だからキアア！ お前は今からでも好きなだけ変われるんだ！

だから勝手に諦めてんじゃねえ！」

「ランディ……」

「そうです。教団の実験でわたしは一度心を壊しました」

新たな手がキアアの血に塗れた手を掴む。

「ティオッ！」

「わたしはずっと恨んでいました……」

教団を《グノーシス》を……わたしのそれまでの全てを壊した存在が許せなかった……

「だけど、今はあの時の苦しみを全て許しても良いと思っています」
ティオは慈愛の眼差しをキーアに向けて微笑みかける。

「あなたがわたし達の感情や命を糧にして生まれた命だと言うなら、キーアはわたしにとって『娘』です……」

「だから無条件でわたしはキーアを愛して良いんです」

「ティオ……」

そしてまた新たな手がキーアの手を掴む。

「エリイ！」

「キーアちゃん、私は……私はキーアちゃんの気持ちを分かって上げることができないかもしれない……」

でもね、私にとっては造られたとか、そうじゃないとか関係ない。ただキーアちゃんのが好きだから、それだけじゃダメかな？」

「エリイ……」

呆然とキーアは自分を引き上げようとする四人を見上げる。

しかし、引き上げようにも彼らにも黒い因果の鎖は巻き付き、キーアと一緒に黒い闇へと沈んでいく。

「ダメ……ダメだよ……因果はキーアが全部引き受けるから……キーアのこととはただの『夢』だったと忘れて良いから——」

「忘れられるはずないだろ！」

キーアの言葉をロイドは一喝する。

「俺達が聞きたい言葉はそんなものじゃない！ キーア、本当はどうしたい!? どうして欲しい!?」

道理も、因果も関係ない！ キーアの本当の気持ちを教えてくれ
！」

「キーアの……本当の気持ち……」

「言え、キー坊っ！」

「キーア！」

「キーアちゃん！」

降り注がれる期待の言葉。

それを拒絶しないといけないとキーアは己を殺して――

「――いきたい……」

口について出た言葉は思考とは真逆のものだった。そして一度堰を切った思いは止まらない。

「……いきたい……みんなと一緒にもつといたい」

キーアは力の限り叫ぶ。

「死にたくないっ！ もつと……もつと生きたいっ！」

その叫びに応える声が一つ。

「その願い、聞き届けた」

光の一閃が、闇を因果の鎖ごと薙ぎ払った。

それはこれまでのキーアの苦悩を一蹴するかのように、あっさりと全てを吹き飛ばす。

「……あれ……？」

「因果の鎖が……消えた……」

全身を駆け回る痛みが唐突に消えたことにロイド達も困惑しながら顔を上げると、そこには呆れた顔のラインがいた。

ラインは太刀を納めてため息を吐き、特務支援課の四人とキーアに言う。

「とりあえず、全員正座」

そして一人ずつ容赦なく拳骨を落とした。

・*

白い空間にランディとテイオは倒れ伏していた。

「……………これが超帝国人の力か……………」

「どこまでも常識外れなんでしょう……………」

「……………二人とも……………」

「二人とも、もう一発欲しいんですか？」

ラインが拳を握って凄んで見せるとランディとテイオは飛び起き、首をぶんぶんと振ってラインから距離を取る。

「別に俺の力が強かったからじゃなくて、それ程にキーアの力が弱

まっていただけの話なんだけど……」

言い訳を口にしなからリインはキアアに向き直る。

「ここまで随分と振り回してくれたな」

「あう……」

キアアは首を竦めて俯く。

ロイド達の影に隠れようとしないことにだけは評価しながら、あまり長い時間説教をしていられないとリインは本題に入る。

「ロイドさん達にまつわる『因果』。それは一応ここで払う事はでき
た……」

「だけど君の問題がまだ残っていることが分かっているな？」

「……………うん」

小さくキアアが頷くと、その姿は淡い光に包まれ、その姿は薄れていく。

「キアアッ!？」

「リイン君！ 何か方法はないの!？」

キアアの消滅に縋るよう振り返る一同の視線にリインはため息を吐き、答える。

「方法はありません。ただどこそのまま消滅させて上げた方がキアアのた
めになるんじゃないですか？」

「なっ!？」

「何を言っているんですか、あなたは!？」

非情とも言える答えにロイドは絶句し、テイオがすかさず反論す
る。

「そつちこそちやんと考えて物を言っているのか？」

キアアは今回の事件の要となった存在です。仮に生き残れたとし
ても帝国と共和国はその子の存在を放っておくことはない」

「だけどそれはキア坊のせいじゃないだろ」

ランデイの言葉にリインはため息を吐く。

「貴方達は教団事件の時から何も成長していないんですね」
「っ——」

それは痛烈な皮肉だった。

「実力の成長じゃない、精神的な話です……」

キーアが関わった途端、貴方達は合理的かつ論理的な思考ができなくなつて、キーアを最優先にする私情で動く……

「マリアベルが言っていた洗脳を疑われても、当然だ」

「それは……」

「でもまだキーアは未成年で、未成年保護法というものが——」

「被害が子供だからどうこうできる範疇を超えている……」

あれ程の被害を造り出した罪を、子供だからという理由で有耶無耶にすると言うなら、俺はこれから一生貴方達を軽蔑します」

リインに睨まれてロイドは言いかけた言葉を呑み込む。

指摘されなければ、確かにロイドは一連の事件は全てクロイス家の陰謀と区別し、キーアの罪を有耶無耶にしていただろう。

そして至宝の守りを失ったクロスベルは帝国と共和国の侵攻に対抗する術はない。

どちらの陣営に占領されたとしても、キーアが存在を把握している二国が黙つて見逃してくれるはずもなく、彼女が不当に扱われることを拒んでジオフロントに潜伏する自分の未来の姿を容易に想像できてしまう。

「その上でキーア。君はまだ生きたいか？ それともここで終わりにしたいか？」

リインは太刀を抜き、その切先をキーアに突きつけて問う。

「なっ!? 何を!？」

「リインさん、いくら何でも——」

「全員動くなっ!」

すかさずキーアを庇おうとした支援課の動きを魔眼が縛る。

「どうなんだキーア?」

罪を受け入れ償う気があるのかとリインは問う。

もつともその答えは《幻》の力を共鳴させたリインは既に分かっている。

そして、キーアもまたリインがどうしてこんなことをするのか分かっていて、バツを悪くしながらも頷く。

「キーアはまだ死にたくない。もつとロイド達と一緒にいたい……
そのためならキーアは何だって我慢する。だから助けて」

ようやく口にした言葉にリインはため息を吐き、太刀を納めた。

その姿に支援課一同はホッと胸を撫で下ろす。

「ワイスマン」

「フフ、呼んだかね？」

リインの呼び掛けに空間が歪み、ゲオルグ・ワイスマンが現れる。

「聞いていた通りだ。キーアを助けるための補助をしろ」

「それは願ってもない。しかし、良いのかね？ 君の切り札とも言える手札をここで切っても？」

彼女にそこまでする価値があるとはとても思えないのだが」

リインの選択に異を唱えるワイスマンにロイド達は顔をしかめる。

「お前の期待を裏切って悪いが、《雲》の力をここで完成させるつもりはない」

「ほう、ではキーアを私と同じ存在にして生き永らえさせると？」

「いいや、それも違う」

「ふむ……？」

先に提示した二つの選択肢を否定するリインにワイスマンは首を傾げる。

「キーアを『眷属化』させる……」

さつきヴァリマールに流れたように見えた零の騎神の力だが、あれはヴァリマールじゃなくて俺に流れて来た……

この事件の因果が『《零》の力が《黒》に吸収されることに収束する』なら、『《黒》予備にして《墮とし子》の俺にも適応されるということな
んだらう」

もう残りカス程の力しか残っていなかったとしても、キーアはまだ『《零の至宝》』である。

故に『《黒の墮とし子》』を通して、『《零の至宝》』の力を『《雲の至宝》』に取り込ませれば、『預言通り』《零》は消滅することになり、『理論上可能』なはずだとリインは考える。

「『眷属化』した後はヴァリマールの力でキーアを『不死者』にする

……
それで当面の時間を稼いで、キアをダーナさんとローゼリアさんに診せる……

これが俺が提示できるキアを救うためのプランだ」

「……………」

「何とか言ったらどうだ？」

呆けるワイスマンにリインは声を掛ける。

「——ク……ハハハハハハハハハハッ！」

次の瞬間、ワイスマンは声を上げて笑った。

「リイン・シュバルツァー。君は自分が何を選択したか分かっているのか!？」

いつかの様にワイスマンはリインに問う。

リインはそれにただ肩を竦めるだけで答えにする。

リインの中には既に《鋼》と《雲》、四大属性の至宝の力が存在している。

そこに残りカスとは言え《零》の上位三属性の力を注ぎ込めば、どうなるかワイスマンにも想像がつかない。

「そんなこと、言われなくても分かっている」

今まで経験した《聖痕》の拡張による負荷も果たしてどれ程になるのか測り切れない。

二、三日寝込むだけならまだいい。

一ヶ月、それともそれ以上に昏倒する可能性もある。

「それでも俺は……」

キアの叫びを聞いて、全然違うと分かっているてもあの子を重ねて見てしまった。

造られた命。

感情が希薄だったあの子とは真逆に感情を持って余して暴走したキアをこれ以上責める気にならなければ、見捨てるという選択肢も選ぶことはできない。

「エリゼやナユタの事はエステルさん達に依頼という形で任せて来た……」

不本意だけど、これが今できる俺の限界だ……それに《鋼の剣》を造るのに失敗したんだ。これくらいしななければ付き合わせたリアン又さんに合わせる顔がないだろ」

そう言っつてリインはキアアに向き直る。

「君にはエステルさん達と一緒に帝国に行ってもらおう。自分……いや、最悪二度とクロスベルには戻れないことも覚悟してくれ」

「うん、それで良いよ」

一度は我が身を引き換えにしてロイド達だけでも因果から解放しようとしたキアアはリインの提案に頷く。

先程はロイド達と一緒にいたいと言ったが、リインの提案をキアアは受け入れる。

「キアアッ！」

「ごめんねロイド……でもキアアはちゃんと罪を償わないといけないから」

ロイド達の所においてしまえば、きっと彼らに甘えてしまう。

だがそれではいけないのだとキアアは思う。

一番の願いはロイド達と一緒に生きる事だが、それが叶って良いのはキアアが罪を償ったと思えた時だろう。

「だから、その時まで……またね」

キアアはロイド達に笑いかけ、リインの前に進み出る。

そんなキアアにリインは手を翳し——その瞬間、世界が揺れた。

「え……？」

疑問符を浮かべるキアアの背後で黒い瘴気が《ゾア・ギルステイン》となり、その拳を振り上げる。

「っ——そう来たか！」

キアアを押し退けて、リインは太刀を抜刀して振り下ろされた拳を逸らす。

リインはキアアの身体を抱えてその場から離脱しようとして——胸に現れた《ゾア・ギルステイン》と繋ぐ鎖に顔をしかめた。

「——受け取れっ！」

リインは特務支援課の魔眼を解くと同時にキアアをロイドに投げ

る。

「くっ——」

その間にも《ゾア・ギルステイン》はリインに対して攻撃を仕掛ける。

「リ、リイン君!?!」

突然の出来事にロイドは動揺しながらも飛んで来たキアを受け止める。

「ワイスマンッ!」

「ああ……」

リインの意を汲み取ってワイスマンは杖を翳し、転移術を利用したこの世界からの帰還術を自分と特務支援課達に掛ける。

「なっ——これはどういうことなんだ!?!」

光に包まれながらランデイはワイスマンに状況の説明を求め。

「君達には関係のない《黒》の置き土産、と言った所かな」

効果はキアへの干渉をトリガーに起動者の“因果”を組み替える。

今やキアが《ヴァリマール》の起動者であり、リインが暴走する《ゾア・ギルステイン》の起動者にされた。

更にはこの《零の世界》にノイズが走り、閉じようとしている。

「やれやれ、それ程までにリイン・シユバルツァーを畏れているということか……それでどうするかね?」

「やることは変わらない。ヴァリマールにはもう話は付けている。だから——さっさと行けっ!」

振り返らずにリインはワイスマンに一方的に告げる。

「そうかね。では遠慮なく——」

「待てっ! それは——」

ロイド達が何か言おうとするが、ワイスマンはそれを無視して術を起動する。

「ふっ……帝国の内戦については私に任せたまえ。君が望むだろう結果に尽力することを約束しよう……」

その代わり、君との再会を楽しみに待たせてもらおうよ」

「待って、ダメツ！ それはキアが！ キアのはずだったのにつ
！」

キアの悲鳴は空しく響き渡り、リイン・シュバルツアールと《ゾア・
ギルステイン》を残して《零の世界》は閉ざされた。

・*

風が吹く。

「——う……」

清涼な風が頬を撫でる感触にクリスは強張っていた瞼をゆつくり
と開く。

「……………ここ、は…………？」

身体を起こして辺りを見回せば、そこは崖の狭間。

遠くでは鳥の——鷹の鳴き声が聞こえてくる。

「……………僕は……………いきたい…………」

気だるい虚脱感を感じながらクリスは直前の記憶を振り返る。

「たしか……………今まで……………戦って…………」

その戦闘と今自分がいる場所が結びつかず、クリスは困惑したまま
思ったことを口にする。

「…………………………夢……………？」

「そんなワケないでしょ」

クリスの独り言に応える声が背後から。

振り返るとそこには《緋》がいた。そしてその肩に乗った黒猫——
セリーヌは偉そうに告げる。

「ようやくお目覚めね、クリス・レンハイム。いえ——セドリック・ラ
イゼ・アルノール」

あとがき

あとがき

約二年間、閃の軌跡Ⅰ　く鋼の意志　空の翼くにお付き合っていた
きありがとうございます。

まさか閃Ⅰだけで二年、150話も掛かるとは思っていませんでした。

閃Ⅱからは寄り道を少し自重しようと考えています。

閃0から続いて初期プロットを彼方に投げ飛ばす展開の数々に我ながら狂っているなと思う所存であります。

最初のプロットあと完全受肉した暗黒竜VSヴァリマールだけだったはずなんですけどね。

反省点はやはりⅦ組や特務支援課の成長描写を描き切れなかったことですね。

Ⅶ組はこの時点ではまだ子供、殻が取れてさえない雛鳥としているので、ラインとの関わらせ方もちよつと無理矢理な部分が多かったと感じています。

閃Ⅱの話はクリスを中心に内戦を通して彼らの成長を描けていたら良いと考えています。

特務支援課については彼らの物語を書いていないという点も大きい
いですね。

それに、彼らの軌跡がキアが描いた軌跡に沿って動いている印象
が強いので黒幕を凌駕する爆発が想像できなかつたことも原因で
しょう。

あくまで個人的にですが自分はロイド達の碧のラスト以降の行動
がぶれ過ぎていると感じています。

プレイヤーの視点だと気にならないと思いますが、第三者の視点を
想像すると

1、地下活動のため、行方をくらませる

——時期がマリアベルの失踪とほぼ重なるため、彼女と共に結社にスカウトされたのでは？

2、キーンとアリオスを見逃す

——ディーター大統領から計画の要である《至宝》を受け取って身を隠していると疑われるのでは？

3、閃Ⅱにおいてジオフロントのデータの初期化

——《零の至宝》の錬成の方法や秘密裏に隠し持っていた《グノーシス》を隠匿するための証拠隠滅？

4、二年がかりの不透明な地下活動

——逆巻のバベルを造っていたのでは？

と大まかに分けてもこれくらいにロイドを疑われる要素があると自分は考えています。

最終リザルト

《黒の騎神》イシユメルガ

《零の至宝》の力を吸収し、更なる高みへと至った存在。

《銀の騎神》アルグレオン

起動者が新たな戦技を編み出し、また準起動者を揃えて戦力の拡大に努める。

その手には《はがね》の剣があるとか、ないとか。

《金の騎神》エルⅡプラドール

残留した加具土命の力が馴染み、焰の翼として残る。

《緋の騎神》テストⅡロツサ

暗黒竜の呪いが解け、EOVとしての姿で騎神として固定される。

しかし、要求される霊力の消費は高く、常人では数分も維持できない程に燃費が悪い。

《蒼の騎神》オルディーネ

半壊状態から、修復の短縮を図るため機甲兵のパーツを使って修繕され、その際に《神機》との合体機構を搭載される。

時間制限はあるものの、一時的に《鋼》としての相克パワーを引き

出せるが、その性能は起動者達の間の絆によって性能が変動する。

《紫の騎神》ゼクトール

不明

《灰の騎神》ヴァリマール

■■■■からキアに起動者は変更。

ヴァリマールに乗った時のみ、《零》としての力はわずかに使えるが現状では機体性能は高いが最弱の騎神となる。

霊力量、燃費問題に関して黒を除いて一番に位置しているが、戦闘経験がなさすぎるのが問題。

周りの人間はキアが《相克》に臨むことは望んでいないが、本人が頑なに誰かの代わりにならなければと罪悪感で戦おうとしている。

閃Ⅲではロイド達の庇護から離れてトールズ士官学院、Ⅶ組に参加するかも？

その場合はキアに戦い方を教えるという名目で恩赦をもらったアリオスが教官になるかも？

なお、この辺の設定に関してはあくまで未定になります。

《■の騎神》ゾア・ギルスティン

世界の狭間である《零の世界》に取り残され、何者かによって調伏された八番目の騎神。

少しだけ語ると、内部の七耀の力が相殺状態になっているため、常時デバフを受けておりそれが解消されないかぎり機甲兵よりも鈍重な機体となっています。

上と同じくこの辺の設定はあくまで未定となります。

以下、少しだけ今後のプロットを公開します。

この予告はあくまでも未定であり、本編においては予告なく変更する可能性もありますのでご了承ください。

七耀歴1206年、6月某日――

エレボニア帝国、西部ラマルル州、海都オルデイスより120セル
ジユの地点、旧貴族連合軍本拠地《ジユノー海上要塞》。

至る所で銃声が鳴り響く戦場の中、二つの陣営が今まさにぶつかり
合おうとしていた。

「ク、クク……いいでしょう。飛んで火に入る何とやらですわ……」

至高の存在に挑まんとする不遜、この場で斬り捨ててくれます。行
きますわよ旧VII組——」

闘気を漲らせ《神速》は彼らに今にも斬りかからんと一步を踏み出
し——

不意に戦場に場違いなりユートの音色が響く。

「フツ……哀しいことだね」

「は……？」

「え……？」

「争いは何も生み出さない。虚しい亀裂を生み出すだけさ」

それは奇妙な出で立ちの少年だった。

漆黒のコートに赤いマフラーで口元を隠し、更に目元を鬼の面で隠
した長い白髪の少年はリユートを掻き鳴らして、場の空気を読まずに
悦に入った様子で続ける。

「さあ、振り上げた拳を開いて、お互いの手を取り合おう……」

愛を失いかけた君達に、歌を贈ろう。心の断絶を乗り越えてお互い
に手を取り合えるようなそんな優しくも切ない歌を……」

戦場に場違いな歌がその場ではなく、城の放送機器を乗っ取ってい
るのか要塞全てに響き渡る。

そのあまりの場違いさに戦士たちはただ呆然と彼の歌に聞き入っ
てしまう。

「フツ……みんな感じてくれたようだね……」

ただ一つの真実……それは愛は永遠ということ。今風に言えば
ラブ・イズ・エターナルツ！」

「だああああああつ！ 貴方はまた！ この空気、どうしてくれる
んですのっ!?!」

……

……

「カンパネルラとマクバーンから聞いてはいましたが……」

「……そうですか、次元の狭間に落ちながら自力で……これは負けていられませんね」

・*

「レーヴェ！ どうしてこの期に及んでまた教授に協力してこんなことをしているんだ!？」

「あの時と同じだヨシユア！ 俺は世界に問いかけるために、奴の剣としてここにいる」

「奴……教授のことじゃないの?」

「人は試されなくてはならない！ 世界が望む答えが『闘争』か、それとも『愛』なのか!」

「あ、愛?!？」

・*

「フフ、彼に代わって宣言しよう……」

「《巨いなる黄昏》はこの瞬間を持って乗っ取らせてもらった。そう、ここから先は預言に記されていない未来——《創の黎明》だ」

番外編

ラウラのアルバイト修行

「すう——」

ラウラは鏡の前で身構える。

呼吸の度に心を落ち着かせ、頭のとっぺんから手足の指先まで意識を集中させ、一挙手一投足に全神経を集中させる。

そして——

「い、いらっしやいませっ!」

鏡の前でラウラは精一杯のぎこちない笑顔とポーズを作るのだった。

「……………いらっしやいませ」

一息を吐いて、少しでもポーズを変え、もう一度作り笑顔を作る。しかし鏡の中の自分は引きつったぎこちない笑顔を浮かべる。

「いらっしやいませ——いらっしやいませ——いらっしやいませ——むう…………」

何度繰り返ししてみてもこれと言える手応えを感じない営業スマイルにラウラは唸る。

「…………やはり私には無理なのか?」

はあ、とため息を吐いてラウラは項垂れる。

「ううむ…………どうせなら店長が言っていたあれも試してみるか…………」
うまく行かない状況に対して、ラウラは別の提案も試してみようかと割り切り——

その瞬間、背後の扉が開く音にラウラは反射的に振り返り、出向の言葉を発する。

「いらっしやいませ、御主人様!」

「え…………?」

第三学生寮、共用の洗面所に入ってきたリインはラウラの突拍子な出迎えに虚を突かれて固まる。

またラウラもまた、反射的に出してしまったアルバイトでの応対を、場違いな場でクラスメイトにしたことに固まる。

「えっと……」

リインは頬を掻き、何故ラウラが自分を御主人様と言ったのか考える。

——オリヴァルト殿下みたいな病気か？

まずはそれを疑い、次にラウラがとある事件で背負ってしまった借金の返済のためにアルバイトを始めたことを思い出す。

「……………ラウラ……」

どんな結論に至ったのか、形容しがたい眼差しを向けて来るリインにラウラは大いに慌てる。

「ち、違う……違うのだリイン！ これは……その……始めたアルバイトで今度メイドサービスというものがあつてだな」

「ラウラ、いくら自分の手で借金を返したいからってそんないかがわしいお店でアルバイトをするなんて、もっと自分の身体は大事にしないといけないだろ！」

顔を真っ赤に弁明をしようとするラウラにリインは諭すように説教を始める。

「とりあえず、そのアルバイトはすぐにやめよう……」

ヴィクター子爵閣下にもすぐに連絡をするから、三人でもう一度冷静に話し合おう」

「待ってくれ、リイン！ 説明を！ 弁明をさせてくれっ！」

ラウラは必死に優しい目をするリインに言い訳をするのだった。

・*

「えっと……アルバイト先が《キルシエ》なのは一安心だけど、何でも笑顔の練習を？ それに御主人様……」

一階のリビングルームにてラウラの弁明を聞いたリインは首を傾げる。

ラウラも武闘派の一族とは言え、貴族の一人。

社交界に出る機会もあるのだから笑顔の一つや二つは取り繕うことなど簡単にできるだろうとリインは尋ねる。

「実は……」

肩身を狭くしながらラウラはリインの疑問に答える。

「給仕の仕事そのものはそれ程難しいものではないのだが……昨日の客に愛想がないと言われてしまい……」

「そんなことくらい気にしなくても良いと思うけどな」

しよんぼりと肩を落とすラウラにリインは慰めの言葉を掛ける。

「ウェイトレスの仕事なんて極端に言ってしまうえば、お店のメニューを覚えて相手を不快にしない程度の挨拶や立ち振る舞いができればそれでいいはずだろ？」

「そうなのだが……」

項垂れるラウラにリインは唸る。

確かにラウラは固いところがあるが、言う程に無愛想だとは思えない。

むしろ同級生の女子からの人気は高く、二年生の男子の一部からは第二のアンゼリカと畏れられているが、彼女と比べれば遥かに常識的だ。

「いや、そもそももの切っ掛けが私の不出来が原因でもあるんだ」

ラウラはいっそう体を縮こまらせて話す。

「トールズ士官学院がある故にトリストアの飲食店ではこの時期になると貴族風がブームになるらしいのだ」

「貴族風のブーム？」

聞き慣れない単語にリインは首を傾げる。

「うむ、毎年各地方から貴族の子女が入学してくることもあって平民も店内だけでも侍女などに世話をされてみたいという願望というものがあるらしくて……」

私には理解しづらいものなのだが、ともかく《キルシエ》でのアルバイトではメイド服を着て紅茶やコーヒーをテーブルで直接入れるサービスを行っているのだ」

理解しがたいと言う渋面のまま語っていたラウラは項垂れて続け

る。

「実は昨日、私も一人のお客様に紅茶をお出ししようとしたのだが……」

「したのだが……？」

「……………ゴミだと言われた」

ずんつとラウラはその時の言葉を思い出して肩を落とす。

「ゴミ……？」

「紅茶なんて、お湯に茶葉を入れるだけで誰が淹れても同じじゃないか！

それなのにあの男はネチネチと……終いには愛想が足りないと……

くつ……思い出しただけでも腸が煮えくり返る」

「ああ、なるほど……」

珍しく悔しそうに悪態を吐くラウラにおおよその事情をリインは察する。

「誰が淹れても同じは流石に言い過ぎだと思うけど」

「いや、そこは確かに言い過ぎなのは認める……」

爺の紅茶は別格だがそれはその道のプロが淹れてくれるからであって、《キルシエ》のような大衆の喫茶店でそれを求めるのは間違っていると思うのだ……

現に一緒に働いているモニカには文句を言わないのに……ぶつぶつ」

——大雑把そうだからなあ……

モニカとラウラの評価の違いの答えにリインは行き着くものにあえてそれを口にはしなかった。

それに加えて使用人がいないシュバルツァー家は例外だが、貴族の子女であり振る舞われる側のラウラが紅茶のゴールデン・ルールを知っているとは思えない。

大衆の喫茶店でそこまで拘る相手が悪いのか、それともラウラの仕事ぶりがそこまで酷いのか今ある情報だけでは判断が付かない。

「とりあえずラウラ、もしかしたらアドバイスができるかもしれない

から紅茶を淹れてみてくれないか?」

なのでリインは無難な提案をする。

第三学生寮には紅茶派筆頭のユーシスとコーヒー派のマキアスの対立、互いに勢力拡大を図っているためその手の銘柄が充実している。

なのでどちらも好きに使って構わないとされている。

「うむっ!」

めらりと背後に炎を燃え上がらせてラウラは早速紅茶を淹れる準備を始める。

「まずは湯を沸かして……」

「……………」

無造作に薬缶に水をたつぷりと入れるラウラにリインは口を出したくなるのをぐつと堪える。

「ポットに茶葉を入れて……」

「……………」

スプーンに山盛りにした茶葉をポットに入れるラウラにリインは目を覆う。

「お湯を注いで……」

「……………」

「……………」

十分に沸騰したお湯をそのままポットに注ぐラウラにリインとシャロンは言葉を失う。

「自信作だ。試してみてください」

そして早々にポットからティーカップに紅茶を注ぎ、ラウラは自信満々に差し出した。

「ゴミですわね」

いつの間にかそこにいたシャロンはまさしくゴミを見る様な眼差しで口も付けずに言い切った。

「なっ!?!」

「はあ……紅茶のなんたるかを欠片も理解していないでよくまあそんな自信に満ちた顔ができますわね」

深々とため息を吐き辛辣な言葉を発するシャロンにラウラは怯み、一縷の望みをラインに求めるように視線を向ける。

「点数をつけるなら0点かな？」

慈悲のない点数にラウラは膝を着く。

「し、しかしだな。私に爺やシャロンさんの腕前の紅茶を求められても……困るといふか……うう……」

へたくそだと言うことは仕事の一件で自覚していたが、少しも良い所がないという点数にラウラは項垂れる。

「まずはお湯の入れ方です」

「そ、そこから!？」

シャロンの指摘が想像もしていなかった部分だったことにラウラは驚く。

「良いですかラウラ様、紅茶を淹れる場合は空気を含ませるように水道の水を入れます……」

それからまず先にポットとカップを温めていないことも減点です。それから——」

「ま、待ってください。シャロンさん、メモを——」

矢継ぎ早に改善点を指摘していくシャロンにラウラは慌ててメモを取る。

「うん……まずい」

ラインはそんな二人のやり取りをラウラが淹れた薄い味の紅茶をすすりながら傍観する。

もしもこの場にお茶会好きの仔猫がいたら容赦なく首を狩って来るだろう。

「むう……紅茶を淹れるだけでこれだけ注意をしなければいけないことがあるのか」

シャロンのダメ出しに一通り書き出してラウラは唸る。

「しかしそこまで変わるものなのか？ 正直紅茶の味と言うのは値段の差だとばかり思っていたのだが」

第三学生寮に常備されている紅茶はユーシスが選んだ一級品ばかり。

対してラウラが今使ったのは二段は落ちる安物。

味に違いがあるとしたら、そこではないかとラウラは疑う。

「あら、それは聞き捨てなりませんね。では——」

シャロンはラウラが使った紅茶の缶を手に取り——

「ゴールドエンドロップです。お熱いので御気を付けてお召し上がりください」

「え……？」

気付けばラウラはいつの間にかテーブルに着いてシャロンが淹れた紅茶を飲んでいた。

「あ……ありのまま、今起こった事を話そう……」

ちよつと不貞腐れて言い訳を口にしていたら、いつの間にか私は椅子に座ってシャロンさんの淹れた紅茶を飲んでいた……

な……何を言っているのか分からないと思うが、私も何をされたのか分からなかった」

誰に言っているのか、混乱をそのまま言葉にするラウラは手を震わせながら二口目の紅茶を含み——動揺して震えていた体が一瞬でほぐされる。

「ほう……これが私が淹れた紅茶と同じものだと言うのか？」

アルバイトでの失態と、今のシャロンからの叱責によってささくれた心がその一口に癒されて行くような感覚にラウラは恍惚の感情に満たされる。

「良いですかラウラ様……」

ラウラ様の淹れ方は剣で例えれば、全力で握り、相手との間合いを考えず、刃筋を意識せず、力任せに剣をただぶつけようとしていただけです」

「シャロンさん、紅茶の淹れ方を剣に例えるのはどうかと思いますが？」

リインは口直しと言わんばかりにシャロンが淹れ直してくれた紅茶を頂きながら冷静に突っ込む。もつとも——

「そんな……私はそんな無様な剣を振るっていたと言うのか……」

ラウラはその例えに先程のダメ出しでは実感できなかった己の未

熟さをこれ以上ないくらいに理解できていた。

「ですがラウラ様、恥じることはありません……」

人には誰しも初めてと言う時期はあります。ラウラ様にその気があるのです。不肖このシャロン・クルーガー、この技をラウラ様に伝授して差し上げましょう」

「それは本当か!？」

「ただしわたくしの教えは厳しいですわよ」

「うむ、厳しい特訓はむしろ望むところだ」

「よろしい、では導くとうしましょう《ゴールデン・ドロップ》への道を」

「……………リイン、何があったの?」

その光景をリビングに入った途端に見せられたアリサはメイドとクラスメイトの良く分からないノリに困惑し、リインに助け船を求め

「……………さあ、何なんだろうな……………」

最初から最後まで見ていたものの、リインにはそう答えるだけが精一杯だった。

しゃきーん!

ラウラは『ブロンズ・ドロップ』を覚えた。

「よろしければリイン様も一緒にどうですか?」

「お気持ちだけ受け取っておきます。俺はリベール式ではありませんが

《シルバー・ドロップ》の認定はもらっていますから」

「なん……………だと……………」

「だから何をやってるのよ!？」

戦術殻の日々、その1

「うわーんっ！」

トリスタの街の公園で子供が泣いていた。

「大丈夫、お姉ちゃんに任せて」

声を上げて泣く男の子の頭を優しく撫でて笑いかけてトワは上を見上げる。

ライノの花が散り終わった、青々とした葉が目立つようになった木。

その枝に引つかかっているのは黒いネコのような風船。

クロスベルのテーマパークで買ったみつしいと言うらしいが、男の子はそれを持って駆け回り、転んだ拍子に手を放してしまったのが事の顛末だった。

「さて……」

どうしようかと木を見上げながら考える。

風船が引つかかっている場所は決して高くない。

とは言え、トワの小さな背で届くことはなく、風船は持ち手の紐が枝葉に掛かるように引つかかっている。

強い風が吹いてしまえば、それだけで飛んで行ってしまいう程に頼りなく悠長に援軍を呼べる時間はなさそうだった。

「おねえちゃん……」

「大丈夫だから」

不安そうにする男の子にもう一度笑いかけ、トワは木の幹に触れる。

幸いなことに今日の街のお手伝いは全て済んでいる。

スカートだと言う事に抵抗はあるが、男の子の涙には代えられないと割り切ってトワは軽く跳躍して、木に枝を掴む。

「よいしょ……」

こういう時、自分の小さくて軽い体ありがたいと少しだけ思いながら、トワは器用に枝を掴んで木を登って行く。

「おねえちゃん……」

はらはらとした様子で男の子はその様子を見守り、トワは目的の枝に辿り着く。

「そーつと、そーつと……」

ゆっくりと枝に体重を預け、その先へと這うように進む。

「もう少し……」

身を乗り出してトワは手を精一杯に伸ばす。

その手が枝葉に引っかけた風船の紐を捉える。

「よし捕まえ——」

手に確かな手応えを感じると同時に背後で木が軋む音が響く。

「あっ——」

次にトワが感じたのは浮遊感。

枝が折れ、トワの小さな体が宙に投げ出される。

「わわ……」

まずい——腹ばいになっていたため頭から落ちて行く景色にトワは危機感を強くする。

——受け身を取らないと……あ、でも風船が……

手の中の風船の紐にトワは一瞬迷う。

それが致命的になり、トワの眼前には地面が迫っていた。

「っ——」

わずかな抵抗にトワはきつく目を閉じて衝撃に備える。

「……………あれ?」

しかしいつまで経っても衝撃はなく、トワは恐る恐る目を開く。

「大丈夫ですか?」

目の前には今年で一番目立っている後輩の顔をすぐそこにあつた。

「りりりり、リイン君!」

「人違いです。意識があるのなら態勢を直してください」

狼狽えるトワに“それ”は淡々と応えて、促す。

「え……?」

言われ、今の状況にトワは気付く。

まるで重力の枷から解放されたように地面の少し上に浮かんでい

た。

「えつと……」

言われた通り、トワは身を振り、四苦八苦しながらも下にあつた頭を空の方へ、足を地面の方へと態勢を入れ替える。

「では解きます」

“それ”が指を鳴らすとトワを浮遊させていた力が消える。

軽く驚きながらトワは危なげなく着地する。

「では、私はこれで……」

「あ……」

それで用は終わったと、30リジュ程度の小さな後輩は音もなく消えた。

「……………妖精さん？」

泣いていた男の子はトワと並んでその小さな存在が消えた空間を呆然と見上げて立ち尽くす。

そしてトワは――

「リ、リイン君が小さくなっちゃった!?!」

・*

「ふむ……………なるほど……」

翌日、校門の前でトワと合流したアンゼリカは事の顛末を聞いて頷いた。

「それは本当にリイン君だったのかな？ ノイ君やルフィナ君ではなく？」

「うん……………ちゃんと見ていたわけじゃないけどリイン君と同じ黒い髪で、ノイちゃんやルフィナさんとも違ったよ」

話題は先日、木から落ちたところを後輩に助けてもらったという話。

その話を聞いて、泣いている男の子のために体を張った親友らしい行動を褒めるべきか、無茶をしたことを諫めるべきか。

その場において下から見物することができなかったタイミングの悪

さを嘆くべきかアンゼリカは悩む。

「しかし……ふむ……」

何かと話題が絶えない後輩とアンゼリカは実は学生となる前から少ないが交流はあった。

彼もログナー家が治めるノルティア州の中の貴族なのだから、自然と面識ができるはずだったが、複雑な事情もありアンゼリカが彼のことを知ったのは遠いリベールの地でのこと。

そんな彼に髪を白髪にする“超帝国人化”という特技はあるものの、流石に体を30リジユ程に縮める特技まであったとは聞いたことはない。

——普通に考えれば、三つ目の戦術殻人形があったというだけの話だと思うのだが……

ちらりとアンゼリカは自分よりも小さい後輩の存在に浮かれているトワを盗み見る。

「これはこれでありか」

聡明な彼女がその可能性に気付いていないことにアンゼリカは微笑ましさをもって見守ることにする。

本来ならあり得ないと思ってしまう出来事も彼ならばと思えてしまう誤解もまだ入学から時間が経っていない今だからの特権だろうとアンゼリカは納得する。

「アンちゃん？ どうかした？」

「いやいや何でもないさ」

昨日の御礼をちゃんとしたいと校門の前で待っている、30リジユのラインが来ると疑っていないトワの反応を想像してアンゼリカは彼女と一緒に待つ。

そして、程なくして彼は現れる。

「おはようございます。トワ会長、アンゼリカ先輩」

「ああ、おはようライン君」

朝の挨拶を交わし、アンゼリカはトワの様子を伺い見る。

トワはその小さな体軀を震わせ、ラインを見上げ——

・*

「あ、シュバルツァー君。この間は生徒手帳を見つけてくれてありがとう」

「リインさん、先日は薬の材料を集めてくださりありがとうございます」

「お、シュバルツァーか。この前は誤配された図書の整理、御苦労だったな」

「シュバルツァー。あの事だが、誰にも話していないかね？ あ、いや忘れてきているのならそれでいい。呼び止めてすまなかった」

.....

.....

.....

「何なんだいったい？」

朝の通学路、リインは数日前から始まった身に覚えのない感謝に首を捻る。

今日も学院の通学路で教会の教区長から感謝の言葉を貰い、御礼がしたいから放課後に来て欲しいと誘われた。

しかし、リインにはそれらを解決した記憶はない。

落ちていた生徒手帳を拾った記憶もなければ、教会に薬の材料を届けたこともない。

学院で誤配された図書を配ったことも、ハインリツヒ教頭の手帳を拾って口止めされた記憶もない。

「どうなっているんだ？」

ただひたすらに困惑しながらリインは週明けの通学路を歩く。

今日はいつも一緒のクリスは部活の朝練があると言う事で一人での通学になる。

VII組として同じ寮で生活しているものの、まだ一ヶ月。

全員揃って仲良く学院に行くにはまだまだ時間が掛かるだろう。

「.....一度、ちゃんと調べてみるか？」

リインが有名になったことで、その名を貶めようとする輩が現れるかもしれないとルーファスやクレアから注意を受けていることもありリインは調査を行う事を考える。

「誰かが自分の名を騙って、何か企んでいるとなれば見過ごす理由はない。」

旧校舎の騎神に先日やって来た《トロイメライ》開発のためのラツセル博士たちの世話などで忙しいものの、それは決して見過ごせない事件だった。

そこまで考えて、リインはツールズ士官学院に辿り着き、校門の前で誰かを待っているような二人を見つける。

「おはようございます。トワ会長、アンゼリカ先輩」

「ああ、おはようリイン君」

リインの挨拶にアンゼリカが挨拶を返す。

普段はライダースーツでいることが多いが、流石に授業を受けるならば貴族の白い制服を着ているアンゼリカにリインは新鮮なものを感じ――

「トワ会長？」

何故か固まって、挨拶を返してくれなかったトワに首を傾げた。

「リ……………」

「り？」

「うむ」

「リイン君が大きくなっちゃったあ！」

「……………え？」

「くっ——そう来たか」

意味不明なことを叫んだトワにリインは面を喰らい、アンゼリカは体を震わせる。

そして朝の通学の中、生徒達の注目を浴びていることに気付かずトワは叫ぶ。

「裏切ったね!? わたしの気持ちを裏切ったんだねリイン君っ!？」

「校門の前で人聞きの悪いことを叫ばないで下さい！」

目に涙を浮かべて胸倉を掴んで揺さぶるトワにリインは困惑しな

がら言い返す。

「アハハハハハハ！」

そしてアンゼリカの笑い声が朝のツールズ士官学院に響くのだった。

・*

「なるほど、昨日俺に木から落ちた所を助けられたんですか……」

まだ始業の鐘に余裕がある時間、リインは人目を避けて選んだⅦ組の教室でトワとアンゼリカの話聞いた。

「うん、あの時はちゃんと御礼を言う前にリイン君が何処かに行っちゃったから、今日校門で待っていたの」

「私はその付き添いだよ」

ぬけぬけと高みの見物を気取っているアンゼリカをリインは一睨みし、トワに向き直る。

「申し訳ありませんが、それは人違いです。昨日、その時間はまだ俺は旧校舎にいましたから」

「え……でもあれは間違いなくリイン君だったよ？」

「いやいや……」

純粋な眼差しにリインは居心地の悪さを感じながら、指摘する。

「その俺は髪が長かったんですよ？」

「うん、一瞬女の人かと思ったけどそれでもリイン君だったよ」

「うぐっ……その人は浮いていたんですよ？」

「うん、でもリイン君もできるでしょ？」

「いや、跳ぶことはできても浮くのは無理です。それでその人の身長は30リジユくらいだったんですよ？」

「うん、一緒にいた男の子が妖精さんって凄く喜んでいたよ」

「………トワ会長……俺はそんなに小さく見えますか？」

リインの質問にトワは少しだけ考え込み、口を開く。

「でもリイン君だから、それくらいできたりしない？」

「そんなことできるわけ——」

その一瞬、リインの脳裏には分け身で行う方法と、体型操作の気功術を使える暗殺者が思い浮かんでいた。

「——できるわけではないですよ」

「今の間は何かね？」

言い淀んだリインにアンゼリカは突っ込みを入れる。

リインはそれを無視して叫ぶ。

「つていうか、何で30リジユになっている時点で他人の空似を疑わないんですか!？」

帝国人だからですか!？ 帝国人はみんなそう言う頭のネジがなくなっているんですか!？」

トワから詳しい話を聞いてリインはおおよその事情を把握する。

しかし、それでもトワだけではなくこの一週間、30リジユの人形をリインだと疑わずに受け入れた帝国人たちのいい加減さにリインは抗議する。

「えっと……」

「ふむ、ではやはり三体目の戦術殻ということの良いのかな？」

困惑するトワ。アンゼリカはリインの反応に当たりを推測する。

「分かっていたなら、説明しておいてください」

リインはそんなアンゼリカに批難の眼差しを送って、ため息を吐く。

「二人とも昼休みに時間を頂いても——」

「おお、ありがとうリイン君。これは失くなったと思っていたワシの筆だ」

「お役に立てたなら幸いです」

VII組の教室の前、開けっ放しの扉から聞こえて来たやり取り。

リインは無言で立ち上がり、静かに駆け出し廊下に飛び出す。

「《オーリオール》！ 何をやっているんだ!？」

「あつ——」

「むっ——リイン君が二人だと!？」

リインの登場に30リジユのリインに良く似た人形とヴァンダイク学院長が驚く。

そして人形は一度、光沢を誇るように瞬くと、その場から消えた。
「逃がすかつー！」

姿を見えないように消しただけでその場にいることが分かってい
るリインは手を伸ばし——人形はその手を躲して廊下を飛翔する。

「リ、リイン君!?!」

「すみません、学院長。話は後で——」

光学迷彩は無意味と判断した人形は姿を現して逃亡を開始する。

リインはそれを追い駆ける。

始業直前の生徒達は何事かと首を傾げ、
“魔王”と“妖精”の鬼
ごっこを見守るのだった。

・
*

「申し訳ありませんでした、ヴァンダイク学院長」

一時限目が始まった時間、リインは自分によく似た戦術殻人形を片
手に頭を下げる。

「いや……その子も悪気があったわけではないのだから君が謝らなく
ても」

「いえ、これは俺の監督不行き届きです。ルフィナさんとノイの学生
寮での滞在許可を貰ったというのにこんなことになってしまった」

先日の《鋼の聖女》の襲来が切っ掛けでノイ達の存在が学院側にはば
れてしまった際に一悶着があった。

曰く、学生寮でのペットの飼育は認められないと言う意見と、戦術
殻である彼女たちはあくまでもリインの所有物でしかないと言う意
見。

学院でも戦術教練の際に戦術殻を使用していることもあって、その
時は学生寮、並びにリインが管理を任せられた旧校舎以外での活動のみ
が認められ、本校舎には持ち込まないことを厳命された。

真面目に頭を下げるリインにヴァンダイクは誰に似たのだろうか
と苦笑する。

「そもそもそのカー……いや君に似た戦術殻は何者なんだね？ ノイ

君やルフィナ君とは違うのかな？」

謝罪ばかりでは状況が理解できないとヴァンダイクはリインに頭を上げさせて説明を求める。

「この子は二人とは違って、俺とは無関係に動ける子なんです……いやこの子の体そのものは元々、ノイ達の身体の予備だったんですけど」

何と説明すれば良いのだろうか、リインは頭を悩ませながら話す。

「トロイメライ開発スタッフとして俺が呼んだのは確かなんですけど……どうして本校舎にいるんだ《オーリオール》？」

「ラッセル博士たちが夢中になっていてやるのが無くなっていたこともありますが……困っている人の気配を感じました」

悪びれた様子もなく胸を張って応える人形にリインはため息を吐きたくなる。

「気持ちとは分からなくもないけど、今は自重してくれ」

リインの訴えに人形は意味が分からないと首を傾げる。

そんな人形の様子にどんな風に言い聞かせようかとリインは頭を悩ませて――

「リイン君、一つ良いかね？」

「学院長？」

ヴァンダイクは人形に一つの提案をする。

「もし良ければ、その子を学院の用務員として雇い入れることはできるかな？」

「この子を雇う？」

「うむ、私の筆を探してくれたことと良い。その子自身は決して悪気があって本校舎に入って来たのではないということとは分かった……」

しかし見たところ随分と世間知らずであり、融通が利かないようだ

「解せません。何故その様な評価を受けるのでしょうか？」

物怖じせず人形は首を傾げる。

そんな様子にリインは何も言い返せなくなる。

そんな二人の様子にヴァンダイクは苦笑を浮かべて続ける。

「この一週間、その子のおかげで助けられた人間は学院の内外問わずに多い……」

だが、このまま無作為に人助けをさせてしまえば、いずれ心無い人間が物珍しさを理由にその子やルフィナ君たちを盗み出そうとする輩が現れるかもしれないだろう……

それを防ぐための一環として、士官学院が彼女を雇うことにすれば一定の安全を確保できるだろう」

「確かにそれはありがたい話ですが、だからと言ってこの子を用務員とするといういろいろと問題があると思いませんか？」

「用務員と言っても、その子にやってもらいたいことはハーシエル生徒会長の補佐なのだよ」

「トワ会長の？」

「うむ、実は学内の雑用や、街での奉仕活動など学院から生徒会に任せている仕事があるのだが、今期の生徒会長はどうにも抱え込む癖があるようだな……」

他人に割り振れば良いものを、頼るのではなく自分でやってしまうという気質の持ち主のようだ」

「それは……」

ラインの脳裏に、手伝うと言っても遠慮するトワ生徒会長の姿がありありと想像できてしまう。

「そんなことを続けていけば、自ずと許容量を超えて破綻するのは目に見えているのだが、彼女は優秀過ぎる……」

おそらく倒れるまで人を頼ろうとはしないだろう」

「つまりトワ会長の負担を減らすことと、倒れることを前提としてその時のための監視を《オーリオール》に頼みたいと言う事ですか？」

「ああ、そう取ってもらって構わない」

ラインの要約にヴァンダイクは頷く。

「……できそうか？」

ラインは人形に向かって尋ねる。

「良く分かりませんが、求められたのならそれに応えます」

自信満々の言葉を返す人形にリインは不安を大きくする。

《オーリオール》とリインの間にはノイヤルフィナのような繋がりがあるわけではない。

本来なら《オーリオール》の行動を諫める資格などリインにはないのだが、彼の保護者気質が《オーリオール》を放置することはできなかった。

「ではやってくれるかね?」

「ええ、お任せください」

ヴァンダイクの申し出に無表情ながらも意気揚々に人形は頷く。

「いえ、ちよつと待つてください」

しかし、そこにリインが待ったを掛ける。

「ヴァンダイク学院長、《オーリオール》を用務員として雇う事は当然給金が出るんですよね?」

「うむ、そのつもりだが?」

「だけど《オーリオール》は見ての通り、今は戦術殻の一種です。その根源も人とは別の価値観を持っている存在ですから」

「別に私は報酬など求めません。必要ならばリインが受け取ってください」

「それはダメだ」

「うむ、リイン君の言う通りだな」

無報酬で構わないと言い出す人形にリインとヴァンダイクはそれを却下する。

「しかし、確かに《オーリオール》君に差し出せる報酬が想像できんな」
相手が戦術殻であることを忘れるくらいに流暢に喋るため、人間ではないことを思い出してヴァンダイクは考え込む。

何やら不思議な響きの名前をしていることもそうだが、少し話しただけでもその戦術殻の歪さはヴァンダイクにも理解できた。

そしてリインが《オーリオール》との距離感を測りかねていることは分かる。

「リイン君はその子を用務員として働かせること、そのものは認めるのかね?」

「ええ、俺もこの子にはもつと人と接して世界の広さを知ってもらいたいと思っています……」

ただ今回のように無作為に人を助けるのはその人のためにならない場合もありますし、《オーリオール》にその気がなかったとしても犯罪の片棒を担がされる可能性を考えると慎重に考えなければいけないことだと考えています」

「なるほど……」

教育者としてラインの主張をヴァンダイクは理解できる。

「それにこのままトワ会長の補佐にこの子を置いても、それは会長の負担を押し付けているだけで根本的な解決にはならないと思います」
「たしかにその通りだ」

ラインの思慮深さにヴァンダイクは自分の浅慮を恥じる。

同時に教育者として、学院の生徒ではなくても未熟な《オーリオール》を正しく導く手助けをしたいと考えてしまう。

「それにこれ以上、俺に関することで特別扱いを増やせば他の生徒達に示しが着かないでしょう」

「ううむ……」

それを言われてしまえばヴァンダイクは提案を下げるしかなかった。

「しかし、その子はそれで納得するのかね？」

「納得させます。最悪は命令すれば、聞き届けてくれますから」

ラインは不本意だがと顔に出しながら人形を見下ろす。

今回の騒動はこの子の人の願いを聞き届け、叶えるという至宝の習性が暴走したようなもの。

ラインがそれについて厳しく言い聞かせれば、再発することはないだろう。

だが、彼女の自由意志を縛るような誓約で戒めることはラインも本意ではないが、ツールズやトリスタに大きな不和をもたらすなら、仕方がないと割り切り――

「話は聞かせてもらった！」

――そこでアンゼリカが学院長室に乱入した。

「アンゼリカ先輩!? どうして……授業中ですよ?」

「まあまあリイン君、そんなことよりも今は《オーリオール》君のことだ」

リインの疑問を宥め透かして、アンゼリカは《オーリオール》を指さす。

「私も常々トワのオーバーワークに気になっていた。その子がトワの補佐をしてくれることは歓迎だ」

「それは俺も賛成です。トワ会長ならこの子に悪い影響を与えないと思いますから……だけど無償の施しを振る舞うのはこの子のためにならないんです」

「無償でなければ良いのだろうか?」

アンゼリカはしたり顔で頷き、リインに向き直る。

「実はリイン君に顔繋ぎをして欲しいという私のクラスメイトがいるんだ……」

彼女たちはどうも先日、見掛けたノイ君やルフイナ君に興味津々だね。もちろんオーリオール君のことも知れば、その子にも関わりを持ちたいと言うだろう」

「む……それはラッセル博士たちのように分解したいとか言う興味ですか?」

アンゼリカの言葉にリインは警戒を強める。

「いやいや、そんな無粋な興味じゃないよ。言ってきたのは写真部や手芸部の子達だよ」

「写真部に……手芸部?」

「ふふ、普段は戦術教練で苦しめられているあの戦術殻がこんな可憐な人形となっているんだ。興味を持たないはずがない!」

拳を握って力説するアンゼリカにリインとヴァンダイクは黙り込み、《オーリオール》は理解できないのか首を傾げる。

「私が提案するのは彼女たちへの報酬を課外活動、つまり部活動への参加の許可を出すことです……」

そうすれば生徒会で《オーリオール》君に頼り切ることにはなくなりますし、彼女たちも多くの人と交流することができます……

そして学院にとっても妖精をこき使うという風聞を防ぐことに繋がるでしょう」

「部活動……」

「なるほど、それは一考してみても良いかもしれないな」

意外とまともな案にリインとヴァンダイクは悪くないと考える。

「写真部、手芸部に限らず、彼女たちの参加を認め受け入れてくれる部活はこれだけあります……」

後は教官たちの許可を得られれば、彼女たちが本校舎で過ごすことに問題はなくなるでしょう」

そう言つてアンゼリカは署名のような紙を執務机の上に置く。

手回しが良いことに二人は呆れるが、流石四大名門の令嬢だと納得もする。

そしてアンゼリカはダメ押しと言わんばかりに主張を重ねる。

「学院長、リイン君。こう考えることはできませんか？」

ノイ君やオーリオール君、彼女たちはその特殊性から普通の教育を受けることは不可能。彼女たちを正しく教え導けるのは士官学院以外にない」と

「……なるほど、君の熱意は分かった。どうかねオーリオール君、それにリイン君」

「どうつて……俺に言われても……」

まさか擁護されると思つていなかっただけにリインは戸惑いながら話の中心となつている人形に言葉を掛ける。

「《オーリオール》はどうしたい？」

「どうしたいとは？ 私はリインの決定に従います」

「いや、そうじゃなくてだな……」

判断を全て自分に投げて来る人形にリインは困り顔をする。

こういう自分に依存している部分はどうにかしたいと常々思つているので、ヴァンダイクやアンゼリカの生徒会や部活動に参加させる案は人の輪を広げると言う意味では悪くない方法だとリインも思う。

「でも、どうしてアンゼリカ先輩がそこまでしてくれるんですか？」

「ふ、君は君の偉大な姉弟子の言葉を忘れたのかい？」

「それは……まさか——」

「そう、かわいいは正義、っ！」

アンゼリカはいつかのように高らかに叫び——

「そして何よりも——」

「ん？」

「君がノイ君やルフイナさん、そしてオーリオール君の美少女を人形であることを良いことに夜な夜なその服を脱がせて——」

「……………」

リインはアンゼリカに白い目を向ける。

「……………」

ヴァンダイクはやれやれと嘆くように肩を竦める。

「……………」

人形は意味が分かっていないのか首を傾げる。

「今日はこんなに汚しちゃったんだね。ぐへへ……」

と言いながら三人のあんなところやこんなところを好き放題にしている！

そんな蜜月をこれ以上一人で独占していると言うのなら私は君を許すことはできない！」

「そうですか……言いたいことはそれだけですな？」

清々しい邪な欲望を叫ぶアンゼリカにリインは拳を握り締めるのだった。

・*

「——と言う事があつたんです」

第三学生寮の自室。

一日の授業を終えたリインはルフイナとノイに今日の顛末を話した。

「そんなことになっていたのね……」

トロイメライの開発のために旧校舎に行っていると思っただけだ」

「リインに迷惑かけちゃダメなの」

「解せません。私はただ人の願いを叶えていただけなのに……」

ノイに怒られてオーリオールは納得がいかないと首を傾げる。

「まあ、悪気がなかったのは分かっているよ……」

むしろ今回の事は自分とオーリオールを区別してくれなかった帝国人に問題があった気もするし」

ははは、とリインは乾いた笑いを浮かべる。

「でも良いのかしら？　オーリオールだけが生徒会で働くのに、私たちまで本校舎での行動の許可を貰っても？」

ルフィナは間に合わせで作られた自分達のための三枚の書類の上に立って唸る。

「アンゼリカさんが言うにはノイやルフィナさんも是非、部活動に来て欲しいって……」

ああ、そういえばベアトリス教官がルフィナさんに話があるから今度連れて来て欲しいとも言っていましたけど？」

「あら、そうなの？　分かったわ」

リインからの伝言を受け取り、ルフィナはノイに向き直る。

「それでノイちゃんはどうする？　せつかくの機会だから学院見学を試してみる？」

「う……」

ルフィナに話を振られ、ノイはあからさまにたじろぐ。

「い、いい。わたしはここで十分だから」

そう言うとなイはその姿を消して、《箱庭》へと逃げてしまう。

「あらあら」

「ノイの人見知りを直すのには時間が掛かりそうですね」

そんな彼女の反応を二人は微笑ましく見守り――

「じー」

そんな二人に物言いたげな視線を人形が向ける。

「ん？　どうしたんだオーリオール？」

「……オーリオール……《輝く環》の総称……」

既に知っている情報を呟く人形に二人は揃って首を傾げる。

「ノイ……この名前は《鋼の至宝》である《巨いなる一》の総称ではありませんね？」

「ああ、そうだな」

《巨いなる一》を《輝く環》のように呼ぶならどんな呼び方になるのだろうか？とリインは考える。

——《グレートワン》？ それとも……

「つまりノイは《鋼の至宝》の端末である戦術殻人形を現した呼称……」

そう言つてオーリオールは自分を見下ろして黙り込む。

「……もしかして《オーリオール》もノイみたいな名前が欲しいのか？」

彼女の呟きを彼女に合わせるのなら、今の戦術殻の身体は《空の至宝》の端末であり《輝く環》そのものではない。

「……別にそんなことは言っていないません」

そつぽを向きながら人形は言い訳を続ける。

「ただ“力”を十全に使えないこの端末では《輝く環》と呼ばれることに不適切だと感じています」

そう理屈を付けて言い訳をする人形の意外な言葉にリインとルフィナは顔を合わせて笑い合う。

「それじゃあ今日は《オーリオール》の——君の新しい名前を考えようか」

その提案に人形は大きな反応はしなかったものの、名前を厳選するのに日付が変わる程の時間を有するのだった。

・*

トールズ士官学院生徒会室。

「はい、では今日はみんなに新しい生徒会のメンバーを紹介します」
生徒会役員が集まったその一室でトワがそう切り出す。

それに応えるように人形はふわりと彼女の前に浮かんで、並んだ生徒会員たちに向かって名乗る。

「本日付で着任しました。生徒会長補佐リン・オーリオールです」

B a d ルート注意 修羅に堕ちて

「はっ——はっ——はっ——」

息を切らせてロイドは階段を走る。

その後をエリイやテイオ、ランデイが追い駆けるが、元々の体力の差、武装の重さもあってその差は見る見る広がって行く。

「ロイド……待って……」

ペースを緩めて欲しいと懇願する声が背中に掛けられるが、ロイドは走る速度を緩めない。

オルキスタワーの魔導区画。

幸いなことに彼らの疾走を阻むものはいないが、逆にそれが焦燥を掻き立てる。

「先に行くっ！」

それだけ言うとロイドは更に走る速度を上げる。

ロイドは倒れた魔導ゴーレムの間をひたすらに走る。

ロイドが走る先に散らばっているのは、両断されて機能が停止したクロイス家の施設を護るガーディアン。

どれも一刀の下で斬り伏せられ、それ以外にない戦闘痕は“彼”の実力を物語っている。

「間に合ってくれ……」

ただそれだけを念じてロイドはひた走る。

「っ——」

魔導区画を抜けた先、30Fからの非常階段には分厚い隔壁がロイドの行く先を阻んでいた——はずだった。

「うそだろ……」

隔壁に走る縦横に刻まれた斬痕と斬り抜かれた穴。

中を覗き込めばどれだけ分厚い鉄の扉なのか分かる。

かつて通商会議ではロイド達もこの隔壁に閉じ込められたのだが、それをものともしない存在にただロイドは畏れを感じる。

「無事でいてくれ、キーン」

「待てロイド！」

特務支援課にとつての娘のことを祈り、ロイドが先に進もうとしたところでランデイが追い付く。

「待てって言うてるんだロイド！　ちっ——ベルゼルガーが引つかかって通れねえ」

ただでさえロイドよりも体格のいいランデイは隔壁の穴を通り抜けるのに四苦八苦する。

もがくランデイを振り返らず、ロイドは隔壁の穴を抜けて階段を登り、同じように穴がある隔壁を通り抜けて階を上がって行く。

その隔壁も36Fに辿り着くとなくなっていた。

そして、その代わりに一人の女の子が踊り場で立ち尽くしていた。

「シズクちゃん？」

「その声は……ロイドさん？」

振り返った女の子にロイドは違和感を覚える。

「そつか……こんな顔をしていたんですね」

「っ！　もしかして目が見えるようになったのか？」

「はい、キーンちゃんのおかげです。不思議な力で、目の神経を繋いでくれたみたいで……」

もう光だけじゃなくて、色と形もちやんと分かります」

「そうか……こればかりはキーンをちゃんと褒めて上げないと」

理解できなかった少女が自分達が思い描くままであることにロイドは安堵する。

「はい……本当にキーンちゃんにはいくらお礼を言っても足りないくらいで……でも……でも……うううっ！」

シズクは涙を堪え切れずに嗚咽をもらす。

「シズクちゃん、どうしたんだ？」

「キーンちゃん、笑っていたけどとっても辛そうでした！」

これが自分の役割なんだって、自分の望みなんだって無理矢理言い聞かせてるみたいで！　お父さんも——」

「……………シズクちゃん。俺達はキーンを取り戻しに来たんだ……」

あの子や、アリオスさんたちがどこにいるか知っているかい？」

「——はい。今日は二人ともディーターさんの所にいるはずです……でも、さつき凄いい怖い人が——」

「ああ、分かっている」

怯えるシズクを安心させるようにロイドは笑いかける。

「シズクちゃんはここで待っていてくれ。キアとアリオスさんは俺が連れて来るから」

「あの……ロイドさん、わたしも連れて行ってください」

「シズクちゃん……」

「何だか良くない予感がして、お願いです。ロイドさんの邪魔はしませんから！」

縫りつくシズクを邪険に扱う事を躊躇ったロイドは少し考えて頷く。

「分かった。一緒に行こう」

ロイドが想像する彼ならば、大丈夫だと自分に言い聞かせてシズクの手を取る。

そして二人はオルキスタワーの屋上へと出る。

「っ——」

回廊から顔を覗かせたロイドは飛んで来た何かを反射的にトンファーで叩き落とす。

「大丈夫かシズクちゃん!？」

「は、はい——ひっ!？」

目の前に転がった人の腕にシズクは悲鳴を上げる。

早速、彼女を連れて来てしまったことに後悔するロイドだが、その腕が握っている太刀と残っている赤い袖に息を呑む。

「——ま……まさか……」

顔を上げれば、屋上の中央に倒れた誰か。

そしてその向こうに《白い神機》と戦う少年がいた。

「八葉一刀、無刃剣——滅」

ロイドには何が起きたのか理解できなかった。

彼が太刀を納刀したことを合図に、彼の何倍も大きな《白い神機》は

内側から爆ぜる。

「ば、馬鹿な！ 《零の御子》が直接搭乗している《神機》が生身の間、間に何故?!」

高みの見物をしていたデーターは《風の剣聖》と《零の御子》が敗れたことに声を上げて狼狽する。

そちらを彼は一瞥だけして、崩壊した《神機》に足を向ける。

彼が足を向けた先には《神機》のコアから光となって、白い光を纏う少女が現れ、崩れ落ちる。

「……………何か言い残すことはあるか？」

「キーン達はただ自由が欲しかっただけなのに……………それはいけないことなの？」

「その自由は他の誰かから奪った君達だけの自由だ……………」

そしてその「力」で君は……………ナユタやノイたちを消そうとした」

「それは……………でも——」

「君の存在は人には過ぎたものだったんだ」

少年は一步、少女に踏み出す。

「ひっ——」

少女は息を呑み後退るが、背後には《白い神機》の残骸。

「や、やだ……………死にたくない。キーンはもつとロイド達と一緒にいたい！」

「君が消滅させたガレリア要塞の人達にも帰りを待っている人がいたんだ」

「……………あ……………」

初めてそれを知ったと言わんばかりに少女は顔色を変える。

そんな彼女に少年はため息を吐き——

「せめて苦しませずに——」

「やめろっ！ リインツ!!」

納刀した太刀の柄に少年、リインが手を掛ける。

ロイドは血だまりに倒れた父に縋りつくシズクを脇に疾走する。

しかし、その疾走は届かず、少年の太刀は抜かれ——血が舞った。

「あ……………」

胸から血を吹き出し、仰け反って倒れる少女がロイドにはゆつくりと見える。

「ろ…………い…………ど…………」

白い少女はそれだけ眩くと、己の血で作った血だまりに碧の髪を広げて崩れ落ちた。

「……………キア…………」

それを前にロイドもまた膝から崩れ落ちる。

血に汚れることも構わずロイドは少女の手を取る。

急速に温もりを失っていくその手の冷たさにロイドは拒絶するよううに頭を振るが、そんなものは何の役にも立たず少女の手はロイドの手を握り返してくれない。

「おとうさんっ！ おとうさんっ！ お願い目を開けておとうさんっ！」

シズクの声が遠くに感じる。

そして背後には無言で立つ少年の気配。

「何で…………何で殺したっ！」

胸の中にあつた彼女への「愛情」が爆発するように「憎悪」へと染まる。

その衝動にロイドは諍わず、むしろ同調するように少年に掴みかかる。

「がっ——」

しかし、気付いた時には伸ばした手は掴まれ、足を払われロイドは無様にしりもちを着く。

「言い訳はしない。だけどこれは貴方達、警察が「無能」だったからこうなったんだ」

「ふざけるなっ！」

少年の言い分を受け入れることはできず、ロイドは叫ぶ。

「殺してやる！ お前を殺してやる！ リイン・シュバルツアーツ!!」
その叫びはクロスベルの空に空しく木霊した。

・＊

その後、国防の要だった《零の至宝》を失ったクロスベルは帝国軍の侵攻に成すすべなく占領——されることはなかった。

帝国によって奪われたアリオス・マクレイン。

そして誰からも心の底から「愛」していたキーアを奪われたクロスベルは《黒月》から供給される武器を手に取り、大人から子供に至るまで徹底抗戦する道を選んだ。

中立を保っていた七耀教会はワジ・ヘミスファイアがリイン・シユバルツアー抹殺派に鞍替えしたことを切っ掛けに、《籠》が外れたように帝国の糾弾を始めた。

そして遊撃士協会は激化する戦場を見兼ねて——

「ねえ弟君、どうしてアリオスさんを殺したの？」

弟君ならもっとうまくできたはずだよね？　ねえどうして？」

I F 閃の一步先へ（閲覧注意）

「女神よ。どうか俺に人を信じさせてください……」

ノイ、リン、ナユタ……そしてキーン……見ていてくれ。これが「人間」だ」

・*

『外部からの干渉により《デウス・エクセリオン》の機能が停止。

封印機構の喪失により、異空間へと封じた《鋼》は《七の騎神》を起点に現世へと復帰します』

黄昏が始まるその日、世界が忘れた破滅が目覚める。

「……は……？」

気付けばオズボーンは何処までも広がる空と海の狭間に立っていた。

「私は確か……戦っていたはず……何故こんなところに？」

何故こんな場所にいるのか理解できずオズボーンは困惑する。

「ドライケルス？」

その困惑の中、同じような戸惑いを声に宿した女の声にオズボーンは振り返る。

「リアンヌ……？」

「これはいったいどういう事でしょう？ 私たちは「相克」を始めたはずなのに」

「分かん。いや、これが「相克」の末路なのかもしれない」

戦いの結果がどちらが勝ったのかは覚えていないというのは別に珍しいことではない。

それだけ激しい戦闘だったのだと、彼女との「相克」ならばと理解できる。

「つまりこれは「相克」における最後の逢瀬と言うことでしょうか

「……しかし……」

どこか納得がいわずにリアンヌは言葉を濁す。
それもまたオズボーンも同じだった。

「……………だがしかし、結局何も変えられなかったか」

困惑を脇に置き、澄み渡った蒼穹の空を見上げてオズボーンは愚痴を漏らす。

息子の命を繋ぐため、《黒》に膝を屈しながらも未来の若者たちが自分を乗り越えてくれるとはずだとそう願っていた。

前世の系譜のであるセドリックも《緋》を乗りこなし、仇敵だったエンド・オブ・ヴァーミリオンを使いこなすに至った事実は感慨深い。今世で父と慕ってくれるようになったルーファスも、あまりある才覚から孤立していた彼も絆を繋ぎ、人としての器を広げ、最高の格である《金》に恥じないだけの成長を見せてくれた。

《蒼》も《紫》も、そして《灰》もかつてよりも遥かに強くなった。「ですが、それでもまだ足りませんでしたね」

無念と言わんばかりにリアンヌは目を伏せる。

あらゆる手を尽くしたはずなのに、結局《黒の史書》の預言を覆すことはできなかった。

記憶は定かではないが、本能的にリアンヌは負けたのだと無力感に苛まれ、落ち込む。

オズボーンもまた胸に空虚を感じて——違和感に気付く。

「これは……………」

「ドライケルス？」

そんなオズボーンにリアンヌは首を傾げ——

「大丈夫」

二人はその声に振り返る。

「なっ!？」

「貴女は……………」

絶句する二人にその女性は微笑み、無造作に歩み寄り。

それは武人ものではない。

ただの街娘に過ぎない歩み寄り。

にも関わらず、歴戦の戦士であるオズボーンとリアンヌは反応できず、女性は手を伸ばし二人を子供にするようにまとめて抱き締める。

「大丈夫、あの子を信じて上げて」

「カ……カーシャ……」

オズボーンは嗚咽を漏らすようにその名前を呟く。

これは夢だと言いつ聞かせる。

《黒》が自分の全てを掌握するための汚い罫だと言いつ聞かせるが、彼女の温もりは鋼にしていた彼の心に亀裂を走らせる。

「人を繋ぐのはオーブメントでも、貝殻でも、呪いでもない。貴方達はそれを知っているはずよ」

「カーシャ殿……何を？」

「この人のことをよろしくね」

戸惑うリアンヌに女は微笑みを向ける。

二人はその抱擁にただ立ち尽くし——幸福に満ちた《福音の夢》から覚める。

「どうか空を見上げて、想って上げて。あの子が世界に撒いた言葉を——」

・*

「っ——ここは!？」

目を覚ますとそこは《黒》の中だった。

「今のは……夢か……？ くっ——」

最後の戦いの中、いくら感慨深くても、いくら現実逃避をしたくても亡き妻の白昼夢を見たことにオズボーンは恥じる。

「……………ドライケルス？」

戸惑いの声が近くから聞こえる。

《黒》の顔を上げればすぐ目の前に《銀》がいた。

「っ——」

慌てて距離を取ろうとしたが、霊力が尽きていたのか反応は鈍く、騎神はその反射に動かない。

もつともそれは目の前の《銀》も同じなのか、無防備な《黒》に攻撃を仕掛ける様子はない。

「今の夢はいつたい……?」

「夢……? まさか……」

リアンヌの眩きにオズボーンは直前に見た白昼夢を思い出す。

「……そうだ。『相克』を始めようとした瞬間、黒い光が——っ!」

「何ですか……あれは?」

振り返るとそこには太陽と見間違う巨大な光があった。

起動者だからこそ本能的に分かる。

あれは人の手に負えられるものではない。あれこそが《鋼》だと。そしてそれだけでは終わらない。

大地から七耀の光の帯が溢れ、折り重なり『大樹』となつて《鋼》へと繋がる。

「っ——」

「これは——」

それを合図に《鋼》が膨張する。

世界大戦のために用意されたオーブメントの導力を——

『闘争』と『夢』からなる人の想念を——

騎神や機神の霊力さえも——

福音の光を持つて一つの《黒き大樹》として《鋼》へと注ぎ込む。

手に負えないと思っていた『力』がさらに増すのを感じる。

「それがお前の答えなのか……?」

「世界を焼き尽くす……《黒》に支配された世界になるくらいなら……しかし……」

《鋼》の中の《焰》が《空》をふいごにしてさらに燃え上がり、際限なく『熱』を上げて行く。

見間違うのではなく、もはや地上に現れた太陽と言って差し支えない程に大きく膨れ上がった《鋼》の絶望に二人は立ち尽くし——その音が響く。

「これは……」

「鐘の音……?」

それはまるで鉄を叩くような《槌》の《鐘》の音。
一つ、音が響くと膨張を続けていた《鋼》が止まる。

二つ、音が響くと《鋼》はその姿を変える。

「まさか……クロスベルの鐘……？」

リアンヌは膨張とは逆に、鐘の——槌の音が響くと共に収縮して行く《鋼》に目を剥く。

世界に響く幻の《鐘》が響く度に、《鋼》はその姿を変え、《鋼》の内から澱みが消えていく。

「まさか至宝の錬成を大陸規模で行うと言うのですか!？」

「では先程の黒い光は《ゴスペル》か!？」

リアンヌの呟きにオズボーンは驚愕の声を上げる。

二人の驚愕を他所に錬成は進む。

《幻》の鐘が《大地》の槌に代わって鉄を打つ。

《空》が集めた力は《焰》にくべられる鉄を燃やす。

それはまさしく《幻焰計画》と呼ぶに相応しい儀式。

ただ二人は間の抜けた顔を晒して、空を見上げ——

オズボーンは——

リアンヌは——

世界中の人々は——夢の言葉をその口にもらす。

世界の人々を繋ぐ、彼が撒いた言葉……

「この地に平和を——」

「——そして慈しみを……」

《空》から《幻》へ——

《幻》から《鋼》へ——

《大いなる黄昏》を経て《鋼》は錬成され、ここに預言は成就する。

そして《鋼》は終わった預言の先に踏み出し——《雲》が夢を繋い

で人の願いを繋ぐ。

《巨いなる一》と《形なき虚無の零》が合わさり、ゼムリアの全ての人々の「願い」の中から生まれる。

閃の至宝——世界を呑み込む竜にして白の騎神《ラグナロク》。

戦術殻の日々、その2 園芸部のリン・オーリオール

季節は夏。

トールズ士官学院の校舎裏にある園芸部の花壇を前にして部長のエーデルはにこやかな笑顔で整列した部員たちに告げた。

「皆さん、今日は新しいお友達を紹介します」

そう言つてエーデルは肩に乗っている人形に呼び掛ける。

30リジュ程度の小さな人形はまるで生きているかのようにエーデルの呼び掛けに頷いて、ふわりと浮き上がりエーデルの前に移動して宙空に止まる。

「ご紹介に預かりました《リン・オーリオール》です。以後お見知りおきを」

ペコーリと人形——リンは頭を下げる。

「ようこそ園芸部に」

「本当にリン・シュバルツァーにそっくりだな……」

「かわいいっ！ 《魔王》と同じ顔だなんて信じられない」

自己紹介したリンに園芸部員たちは沸き立つ。

明らかに人と違う存在でありながらも、予め通達されていたこともあり、混乱もなくリンは園芸部に歓迎された。

「ねえねえリンちゃんって呼んで良い？」

「あなたとシュバルツァー君はどういう関係なの!？」

「ノイちゃんとルフィナ様はどの部活に参加するの!？」

矢継ぎ早に、特に女子たちからの質問攻めにリンはたじろぐ——かに思えたが、迫る部員たちにリンは淡々と答える。

「呼称は好きに呼んで頂いて構いません……」

リンは「私」の眷属です……

現在ノイは部活動に参加する意思はなく、ルフィナは医務室の補佐官として活動することになりました」

流暢な受け答えに一同は驚く。

サイズが小さいからこそ人形と分かるが、その顔や体の構造はそれ

こそ人と遜色なく、話すときも口が動き、それこそまるで人と話していると思えない。

「とてもじゃないけど、あの戦術授業の戦術殻とは思えないな」

「しかしあれはもしかして……」

「どうかしたんですか先輩？」

リンに殺到する女子たちの背後で二人の平民生徒と貴族生徒が会話をする。

「あれはもしかしたらローゼンベルク人形かもしれない」

「ローゼンベルク人形？」

「ああ、その業界では有名な人形師の作品なんだが、昔帝都の競売会で500万ミラで落札された人形のことだ」

「500万ミラ!？」

貴族の先輩が口にした値段に後輩の生徒は驚きの声を上げる。

その声に今にもリンに触れようとしていた女子たちは一斉に手を引っ込めた。

「500万ミラ……」

「これがあの有名なローゼンベルク人形……」

「その人形が三つって事は1500万ミラ!? シュバルツァー君って男爵家なのにお金持ちなんだ……ゴクリ」

いろいろな意味で気後れする部員たちだったが、エーデルが手を叩いて場を切り替える。

「はい、リンちゃんとまだお話したいでしょうけど、まずは今日の部活動を始めましょう」

「あの、部長。それなんですけど、シュバ——じゃない。そのリンって子は本当に園芸部で引き受けるんですか？」

園芸部は土仕事の主ですから、その……」

男子生徒は言い辛そうに言葉を濁す。

しかし、言いたいことは何となく他の部員たちも理解する。

500万ミラの人形、それに着ている服も精巧で美しく、とてもではないが土仕事に適しているとは言い難い。

「ああ、リンちゃんの服の事ね」

「それもありますけど——」

「それなら心配には及びません」

男子生徒の言葉を遮り、リンはどこか自慢げにそれを差し出した。
「土仕事用の装備としてこちらの装備を準備してもらったので問題は
ありません」

差し出したのは生徒達にとっても馴染みの深い、運動用のジャージ
だった。

「……………リンちゃん、このジャージはどうしたの？」

一人の女子が沈黙する一同の中から代表して質問する。

「リンが作ってくれました」

無表情、淡々とした感情が希薄な口調だがどこか嬉しそうに見える
リンに園芸部一同はほっこりして——

「リン・シュバルツァー君が夜なべしてリンちゃんのジャージを
縫っていた？」

ピンクの髪の少女が誰も思っても口にはしなかった想像を呟く。

「ぶっ——」

誰かが嘔き出すのを切っ掛けに笑いが広がる。

「ちよつとヴィヴィ！ 変なこと言わないでよ！」

「やべえ！ 想像しちゃった！」

「あの《魔王》が人形遊びが趣味なんて……………ククク……………」

「何故、皆は笑っているのでしょうか？」

その笑いの理由が分からずリンは首を傾げた。

そして——

「むう……………」

その笑いの輪から離れ、一番端に気配を消して整列していたフィー
は彼らとは逆に面白くないと言わんばかりに唸った。

・*

そうして始まった園芸部の活動だったが、部員たちの懸念は驚くほ
ど簡単にあっさり裏切られることになった。

30リジュしかない体長だが、流石は戦術殻と言うべきなのかその小さな体軀からは信じられない力で重い荷物を運んでくれる。

それでいて細かな作業は念動力でシャベルや如雨露を動かして園芸の作業そのものにはまるで支障はなかった。

最初こそ、過剰に気遣っていたものの、リンが一人で作業ができると分かると部員たちは肩の力を抜き、自分達の作業を進めながらリンに構い出す。

「むう……」

その光景にやはり面白くないものを感じてフィーは唸る。

「あれ、どうしたのかなフィーちゃん？ ご機嫌斜めみたいだけど」

「……別に何でもない」

「うんうん、分かるよ」

素気ない返事をするフィーにヴィヴィはお姉さん風を吹かすようにしたり顔で頷く。

「昨日まで園芸部のマスコットは自分だったのに、リンちゃんにその座を奪われて悔しい、そして寂しいって思ってるんだよね？」

「……全然違うし——」

「みんなっ！ フィーちゃんが寂しがってるよー！」

人の話を聞かず、ヴィヴィは大きな声で叫ぶ。

「だから違うってっ！」

「ええ、ほんとかなー？」

からかうようにヴィヴィは含みを持たせた笑みを浮かべる。

普段は気だるげで他人なんて興味がないと言わんばかりの態度を取っているフィー。

四月にあったとある事件のこともあり、幼い外見ながらも元猟兵と言う肩書に彼女を畏れた者は多い。

もつとも園芸部ではエーデル部長の気質もあり、蟠りが生まれることはなかったのだがフィーは積極的に人間関係を作ろうとすることはなかった。

それでも入部してから数ヶ月。

それだけあればフィーの気質も部内では知れ渡り、猟兵と言う肩書

を持っていても園芸の素人として四苦八苦している彼女の姿に絆されてしまった部員たちも多い。

「大丈夫、フィーちゃんもリンちゃんと同じでかわいいよ！」

「フィーもそういうことを気にするんだな……ふふふ、やっぱり猟兵って言ってもそういうのは変わらないんだね」

広い園芸スペースからヴィヴィの声に応える形で次々にフィーを気遣う声が掛けられる。

「むう……」

先程とは違う理由でフィーは唸り、反論することはやめて雑草抜きに没頭することでフィーは周囲の声を無視することにする。

その姿もまた微笑ましさを誘う者であり、園芸部員はフィーに生温かい視線を送るのだった。

・＊

「それではフィーちゃん、それにリンちゃん。貴女達に課題を出します」

今日の雑草取りを終え、一通りの作業を終えたところでフィーはリンと共にエーデルに揃って呼び出された。

「フィーちゃんはこの数ヶ月、リンちゃんはまだ一日目だけど園芸部の活動は分かってくれたと思います」

園芸部の活動は簡単に見えて難しいものだと言うのがフィーはこの数ヶ月で体感した。

毎日のように生えてくる雑草の除去。

どこからか現れ葉を食い荒らす虫の始末。

ただ水をやれば良いと思っていただけのフィーは楽ができないことに不満を感じながらも、それらの仕事に手を抜くことはしなかった。

今日、入部したばかりのリンと並べられることにそれこそ不満を感じながら、それでも課題と言う一人前への試験を受けられることにフィーは喜ぶ。

「そこで二人にはこの苗を一週間、世話をしてもらいます」
そう言つてエーデルが二人に差し出したのは一抱え程の植木鉢に生えたトマトの苗だった。

「見て分かる通り、この苗のトマトはまだ収穫できないの」

エーデルはそこに実つた緑色の実を指して説明を続ける。

「私がお世話をすればおよそ一週間でこの身は赤く熟すでしょうね……」

だから二人も一週間、その苗を枯らさず、実を赤くさせて収穫できるようにお世話することが課題になります」

「なるほど……」

「実を育てるだけなら、今すぐでも可能ですが？」

課題の内容を理解したフィーの横でリンがそんなことを宣つた。

「リンちゃん、リイン君から伝言です。部活動をするにあたり『至宝の力』を使わないようにとのことですよ。お願いします」

「……………むう」

エーデルの伝言にリンは顔をしかめて苗に向けた手を下ろす。

「良いでしょう。例え『力』を使えなくても私に『リベル・アーク』の庭園を維持していた実績があります……」

この程度の課題など私にとって簡単な課題に過ぎません」

リンは自信満々にそう言つた。

・*
・*

——二日後の早朝活動の集まりにおいて、リンの苗は見るからに萎れ、枯れようとしていた。

「……………何故、こんなことに……」

隣に並ぶフィーの苗とは違って見るからに元氣のない自分の苗にリンは首を傾げる。

「ん……………何をしたの？」

打ちひしがれるリンにフィーは同じ課題を受け取った身として尋ねる。

「昨日は一日中、日当たりが良い場所に苗を移動させ、土を乾かさないように絶えず水を与え続けていました」

「日当たりの良い場所……一日中？」

フィーは空を見上げて、蒼い空に浮かぶ太陽を見る。

昨日に引き続き、夏真っ盛りの快晴な空。

今日も暑くなりそうだとげんなりした感想を抱きながら、日中は日当たりの良い場所を探して彷徨い、夜は寝ずの番で水を与えているリンの姿を想像する。

——この子、ラインの顔をしているけどけっこうポンコツだ……

フィーは入部したての頃、水のやり過ぎで根腐れをさせて苗を一つダメにしたことを棚に上げてリンの評価を改める。

「何がいけなかったのでしょうか？」

そんな生温かい視線に気付かずにリンは思案する。

フィーは助けを求めるように視線を巡らせて——

「あー忙しい忙しい」

「うーん、如雨露で虹を作る最適な速度は……」

「……………」

わざとらしい言葉を呟き、フィー達からあからさまに視線を逸らす先輩や同級生たちの態度にフィーはため息を吐く。

この二日間ですっかりマスクットと化していたリンに手助けをしないと様子にこの状況は作られたものだと察する。

放置しても良いのだが、課題を与えられた時のエーデルの言葉をフィーは思い出す。

『頑張つてね、フィー先輩』

学院でも団でも一番年下扱いだったことを思い出すと、その響きは新鮮でありフィーは動かされていることに不満を感じながらリンに声を掛ける。

「それ……たぶん根腐れしたんだと思う」

「根腐れ？」

「それと日光にも当て過ぎだから、葉焼けもしていると思う」

「葉焼け？」

「えつと根腐れは水の上げ過ぎで、葉焼けは人で言う日光で火傷した感じ？」

知識不足のフィーはしどろもどろになりながらリンに考えられる原因を伝える。

「……………何故、それが原因になるんですか？」

「それは……………」

「水と日光は植物育成のために必要不可欠な要素のほうでは？」

「えつと…………それは人と同じで食べ過ぎとか良くないってことじゃないのかな？」

「人と同じ……………」

フィーの説明にリンは萎れた苗を見て考え込む。

「えつと……………」

「この苗はどうしたら元気を取り戻すのでしょうか？」

落ち込んでいるのかと声を掛けようとしたら、リンは前向きな質問をフィーにして来た。

「えつと…………わたしには良く分からないんだけど……………」

「ですが、フィーの苗は私のものとは違って元気です……………具体的にはどんなことをしているんですか？」

眼前に迫って質問攻めをしてくるリンにフィーはたじろぎ、助けを求めするように視線を彷徨わせる。

「あー忙しい、急がないと授業に遅刻しちゃうなあ」

「見て見て、この虹うまくできたでしょ」

振り返ったフィーに反応してそっぽを向いて手が放せないというアピールする先輩と同級生たちの態度にフィーはため息を吐く。

「えつと……………」

自分がやらかした時に教えてもらったことを思い出そうとフィーは必死に記憶を遡る。

しかしこの状態の苗を持ち直せるのかフィーには判断はできなかった。

「そう言えば一昨日、〃力〃を使えばどうかかって言ってなかった？」
言い訳を考えながら、フィーは時間を稼ぐために話題を振る。

「ええ、七耀の力を作用させて植物の成長を促すことが可能です……
これを用いて《リベル＝アーク》内での限られたスペースで効率よ
く食料を増産し——」

えっへんと誇らしげに胸を張るリンだがフィーは話の半分を聞き
流し、提案する。

「それってわたしが使うことはできるの？」

「直接は無理ですが。貴女の戦術オーブメントを利用すれば可能かも
しれません」

「それじゃあそれをやろう」

普通的手段では無理だと早々に見切りを付けてフィーはリンに提
案をする。

「しかし——」

「良いことを教えて上げるリン」

フィーは聞き耳を立てているくせに助け舟を出そうとしてくれな
い先輩や同級生たちに聞こえないように声を潜めて言った。

「ばれなければオツケー」

・*
・*

そう助言したフィーは早くも自分の発言を後悔することとなった。

授業の合間の昼休み。

昼食を済ませたフィーはリンから「力」の内容を聞き、既存ではな
いクオーツを製作するために技術棟にいた。

「むう……クオーツくらい作ってくればいいのに」

「そうしたかったのですが、私はセピスを所持しておらず、この課題に
ついては「力」の使用は禁止されています」

フィーの屁理屈に乗ったものの、律儀に約束を守ること拘るリン
にフィーはため息を吐く。

「まあいつか……誰も来ない内に済ませちゃお」

士官学院の授業の中で、クオーツの精練の経験はある。

技術棟の使用も申請を出せば認められるため、疚しいことはないの

だが昼休みは有限のためフィーは急ぐ。

「えつと地のセピスを7に水のセピスを2、それから空のセピスが1の割合で……何で空属性？」

「それは私の属性だからです」

「そう……」

意味の分からない答えにフィーは首を傾げつつも作業をする手を止めない。

出来上がったクオーツに今度はリンが術式を刻んでいく。

そんな共同作業にフィーはふと懐かしさを感じる。

「ゼノ達と昔、こんな風に弾丸を作ってたことがあったっけ……」

薬莢に火薬を詰め、弾丸を詰め、マガジンに詰める。

分業した作業や、それ以外でも導力銃の分解などの思い出をフィーは想起する。

「——できました」

思い出に耽っているとリンがクオーツの完成を告げる。

「ん……それじゃあ放課後、部長たちが来る前に済ませようか」

今すぐにと言いたいところだが、昼休みが終わる予鈴がなったことでフィーはそう提案した。

・*

最後の授業が終わるやいなや、フィーは教室を気配を消して一番に出て、中庭に面した窓を開けると飛び降りた。

「ん、お待たせ」

「では行きましょう」

そこでフィーを待っていたリンが応え、二人はすぐに行動に移る。

誰よりも早く園芸部の菜園に辿り着いた二人は周囲を警戒しつつも、萎れた苗の鉢を更に奥まった場所に移動させる。

「それじゃあ行くよ」

「はい、お願いします」

「《ARCCUS》駆動」

初めて使う導力魔法をフィーは駆動する。

攻撃用でも補助でもない、分類とすれば治癒術の導力魔法。

フィー自身は決して導力魔法は得意ではないが、それでも難しい大規模な魔法ではないのでそれは無事に発動する。

《グロウアップ》

大地の力に働きかけ、植物に活力を与える導力魔法。

その効果はまさに劇的だった。

萎れた葉や、下を向いてしまった茎が、力を得た様にみずみずしきを取り戻し、項垂れていた姿が上を向き、緑の実が赤く染まって行く。

「成功のようですね」

「うん、やったね」

二人は復活したトマトの苗の前に手を合わせ——次の瞬間、赤く熟した実が落ちた。

「あ……」

「……………もしかしてやり過ぎた？」

肝心の実が落ちてしまったことにリンは呆然とし、フィーはバツを悪くして失敗の可能性を口にする。

詰めを誤り失敗したことを責められるかとフィーは警戒するが、リンはただ落ちた実を見つめたまま立ち尽くす、いな、浮き尽くす。

「えっと……」

慰めの言葉を掛けようとフィーが頭を悩ませていると、それは起こった。

「あ……」

「ん？ どうした——」

リンの呟きにフィーは周囲を警戒する。

まさかエーデル部長がもう来てしまったのかと身構え——

「危ないっ！」

警告の声をリンが発し、フィーは脅威を確認するより早くその場を飛び退き、襲い掛かって来た赤い球を避ける。

「赤いポム!? どうしてこんなところ!?」

魔獣除けの導力灯がある街の中で現れた魔獣にフィーは驚くが、リ

ンがそれを否定する。

「違います。あれは……」

「こんな魔獣みたことないけど……」

しかし見覚えのある外見にフィーは戸惑い、リンが答えを告げる。

「あれは先程のトマトです」

「トマト……」

言われ、改めてその姿を観察してフィーは納得する。

気付けば先程落ちた実はなくなり、代わりに赤いポムもどきが現れた。

その体も、大きな赤い頭に緑のヘタを体にして自立しており、全体的にトマトだった名残が見て取れる。

「キシヤアアアアアアアッ！」

トマトから生まれた魔獣は頭を半分に割いて雄叫びを上げる。

戦う気概を見せるトマトマンにフィーは双銃剣を抜く。

「目標を確認、制圧を開始する」

「サポートします」

フィーとリンが並び、トマトマンとの戦闘が始まる。

・*・

「制圧完了」

「お疲れ様です」

思わぬ生命力を見せたトマトマンの猛攻をフィーとリンは連携して撃破して、息を吐く。

「手強い相手だった」

「何がいけなかったのでしょうか？ 帝国の土に私の《空》の力が馴染まなかったのでしょうか？」

半分に潰れたトマトマンを前にリンは失敗の考察をする。

「そんなこと良いからシャワー浴びたい」

疲れたと言わんばかりにフィーはトマトの汁まみれになった自分の姿を見下ろしてため息を吐く。

しかし、二人の戦いはむしろここからが本番だった。

「二人ともこれは何かな？」

トマトマンとの戦闘で荒れた園芸部の菜園を前にエーデルは凄みを感じさせる笑顔で二人に話しかけた。

「エ、エーデル部長……」

「こ、これは……その……」

彼女の圧にフィーとリンは怯み、その背後で体が半分潰れたトマトマンは力を振り絞り――

「しゃあああああつ！」

「あ……」

「逃げた……」

脇目も振らずトマトマンは森に向かって一直線に逃げ出した。

菜園を荒らした罪を擦り付ける魔獣に逃げられたことに二人は固まり、エーデルはそんな二人に笑みのまま無情に告げる。

「二人とも、正座」

なお、フィーが浴びたトマトの汁は涙が出る程に苦かった。

・*

「きしゃああ……」

トールズ士官学院から逃げ出したトマトマン――否ニガトママンは短い生涯を森の中で尽きようとしていた。

しかし、例えば彼がそこで朽ちたとしてもその身に宿った種は帝国に根付き新たなトマトマンが生まれる《世の礎》となるのだった。

注意：外来種はむやみに放逐してはいけません。

I F ■ の軌跡

七耀歴1206年 エレボニア帝国帝都ヘイムダル。
再開発から取り残された東部の旧市街のオスト地区。
その一角に場違いな清楚な少女が歩いていた。

戦術オーブメント兼多目的端末として普及した《ARCS》に導
力ネットから地図を表示し、時には人に尋ねて少女は旧市街の奥へ奥
へと入って行く。

「……この建物で間違いないみたいですね」

目的地に辿り着き、少女は何の変哲もない建物を見上げる。

特に外に看板が出ているわけではない。

あるのは剥き出しの階段だけで、地下の方には《ノイエ・ブラン》と
いう看板があるだけ。

少女の目的地はそちらではなく、二回へと進む。

その先の扉には表札のような質素な看板でこう書かれていた。

『ジークフリート解決事務所』

訳アリ客以外はお断り』

「……………ここが……………」

少女はその名前を確かめて頷くと、意を決してノックする。

その音に反応して、扉の向こうで動く気配を感じる。

そのまま待つこと数秒、徐に扉は開く。

「……………あ……………」

寝起きだったのか、出て来た青年は少女を見て呆ける。

「……………あ……………」

対する少女も出て来た青年の姿に淑女らしからぬ間の抜けた言葉

を漏らしていた。

青年は一言で表すなら《白》。

真っ白な白髪に灼眼の瞳。

着ている服も白を基調としたものであり、どこか貴族然とした姿は旧市街とは場違いなものだった。

——何故、貴族がこんなところに？

そんな感想を抱きながらも少女は彼を目の前にして奇妙な胸がざわめきに困惑する。

「……………もしかしてお客様かな？」

青年は目を細め、固まる少女に尋ねる。

「は、はい……………」

少女は青年の眼差しに胸の鼓動を高鳴らせながら頭を下げる。

「こちらのジークフリート解決事務所にお問い合わせしたいことがあって伺いました！」

自分の内心を誤魔化すように少女は用件を切り出した。

・*

廊下から部屋の応接室に場所を変え、少女は改めて名乗る。

「——初めまして。エリゼ・シユバルツァーと申します」

黒髪の少女はそのまま自分の身分を明かす。

「サント地区にある——」

「帝都きって、いや帝国きっての名門女学院《聖アストライア女学院》の生徒会長……………」

「……………御存じでしたか」

言葉を遮って告げられた肩書にエリゼは驚く。

「君については隣にいる人がとにかく目立つからね」

青年は苦笑してエリゼの疑問に答えを出し、なるほどエリゼは納得する。

半ば付き人と周囲から公認されていることもあり、エリゼの知名度は男爵家の令嬢でありながら有名である。

「俺は……………」

「……………」

てつきり名乗ると思ったのに、不自然に固まる青年にエリゼは首を傾げる。

「いや……………僕のごとはジーク……………そう呼んでくれ」

「はあ……………」

名乗ることにどこか諦観を滲ませる青年にエリゼは困惑する。

が、その疑問を押しやるようにジークは本題——彼にとって仕事の話を切り出す。

「どういうツテでここに辿り着いたかは知らないけど、僕の肩書が何かも知っているんだね？」

「はい……………」

エリゼは頷き、続ける。

「鉄道憲兵にも、今はない遊撃士協会にも相談しにくい事を引き受けてもらえるという『請負人』……………」

『裏解決屋』——そう呼ばれていると伺っています」

「半分アタリで、半分外れだね」

エリゼの答えにジークは苦笑を浮かべて訂正する。

「『相談しにくい事』だけじゃない……………」

『相談できない事』を引き受ける時もある……………」

非合法ストレスのグレーな稼業……………そういう人種だって分かっているのかな？」

「……………」

軽い惚けた口調の中に混じったかすかな威圧。

裏の世界に踏み込もうとしているエリゼを咎めるように、引き返せと言わんばかりの気遣いに息を呑み込みながらエリゼは毅然と言葉を返す。

「分かっています」

「なら構わないよ。まずは話すだけ話してもらえるかな？　引き受け

るかどうかは話次第だからね」

「はい——」

エリゼはジークに促され、テーブルの上に八枚の写真を並べる。

「これは……指輪と首飾り？」

「お願いしたいのは他でもありません……」

「こちらの宝飾品の搜索を手伝って頂きたいんです」

写真に写っているのはそれぞれ大きな七耀の宝石を中心に据えた指輪とそれらの宝石を円のように配置された首飾り。

「その内の指輪の方は先日、わたくしの後輩の姉がバリアハートで購入した物になります」

「……………」

エリゼの説明にジークは沈黙を返し、写真を睨んでいる。

「ですが、一週間前それらの宝石を受け取る前に盗難されてしまったそうです」

「この首飾りは？」

「そちらは二年程前に同じように盗難されてしまったものになります」

「……………そうか……………」

ジークは目を伏せて写真をまとめると、エリゼに差し返す。

「悪い事は言わない。鉄道憲兵隊にでも相談した方が良い」

「え……………」

「写真越しでも分かる。それらはただの宝飾品なんかじゃない……」

盗まれたことを含めて厄介な連中が絡んでいる可能性が高い。君が個人で人を雇うというには危険が大きいだろう」

「……………流石ですね」

仕事の拒否の言葉にエリゼは動じず、むしろ賞賛する。

「これらの宝飾品に使われているものは全て《女神の聖獣》が作り出した七耀石だと聞いています」

「……………そうか……………」

「最悪指輪の事は良いんです。一番重要なのはこちらの首飾りの方でした……………」

後輩のお姉様の話ではこれが世界の命運を握る鍵になるという話だそうです」

「……世界の命運とは大きく出たね」

「何分二年前に盗難された首飾りなので帝国国内にあるか分かりません……」

ただ特殊な魔法——導力魔法を用いれば、私が持っている宝飾品とこの七つの指輪から首飾りを見つけていることができるそうなんです」

「そうか……そうか……」

エリゼの説明を吟味するようにジークは同じ言葉を繰り返す。

「帝国の国外への出張に掛かる費用はこちらで負担します……」

私は男爵家の令嬢でしかありませんが、この話はアルフィン皇女殿下からの依頼でもありますので依頼料なども心配ありません……」

ですからどうかお願いします」

無茶な依頼だと言う事は承知でエリゼは頭を下げる。

指輪だけならともかく、二年前に盗難された首飾りまで探し当てるなど雲を掴むような依頼だとエリゼも、彼女たちも理解している。

しかし、それでも探さなければいけない。

後輩の姉が言う世界の終焉を防ぐため。

それ以上にエリゼにはこれが大切なものだという何かを感じずにはいられないから。

「……………分かった」

長い沈黙の末、ジークは短い言葉でエリゼの依頼を引き受ける。

「本当ですか？」

「ああ……」

ジークは立ち上がり、壁に掛けたあった木剣を手に取って腰に佩く。

帝国では珍しい東方の“太刀”を模した木剣——木刀。

柄の部分に“崑崙”と達筆な字が特徴的のだが、エリゼは一抹の不安に駆られる。

「あの……それは？」

「僕の武器だよ。文字は姉弟子が書いてくれたものだけ……まあそこらの剣には負けたりしないから安心してくれて良いよ」

「はあ……」

鉄や特殊な合金が武器の素材で使われる世界で木が素材の武器など訓練用にしかない。

木刀を佩いた青年の佇まいはお世辞にも強そうには見えない。

護身術目的でエリゼも多少は剣を扱えるが、自分よりも弱いのではないかと思えるジークに彼に依頼したことを早くも後悔しそうになるエリゼであった。

AP 来訪者

そこは何もないただ白だけの無の世界。
何も存在せず、誰からも認識されない。現世の中にあつて現世ではない狭間の世界。

そんな無の世界に今は二つの存在があつた。

「あああああああつ！」

白い髪に灼眼の少年が雄叫びを上げて太刀を振るう。

「オオオオオオオツ！」

黒い機械人形が唸りを上げて拳を振るう。

二つの存在は気の遠くなるほどの時間をただひたすらに争い、その果てに――

「これで――終わりだつ！」

剥き出しになった“核”に少年の太刀が突き刺さる。

そして――

「うっ……」

日の光を瞼に感じ、リイン・シユバルツァーは目を開く。

「ここは……？」

当たりを見回せばそこは森の中だった。

「俺は……助かったのか？」

黒に染まったゾア・ギルスティンとの戦い。

無限とも言える悠久の時間をずっと戦い続けていたような気もすれば、一瞬の出来事だったような気がする。

「そうだ……帝国に戻らないと」

帝国で起きた内戦。

妹や仲間たちはどうなったのだろうかとリインは不安を抱えながら森の中を当てもなく歩き、倒れた青年を見つけた。

「おい！ 大丈夫か!？」

慌てて駆け寄りリインは赤毛の青年を抱き起す。すると――
「うわあああああツ！」

青年はリインの顔を見るなり悲鳴を上げた。

「男の声で目覚めてしまったアアア!!」

そして、涙を散らして走り去って行った。

「え……………」

「おしまいだああああああああ」

青年の嘆きの悲鳴が森に木霊して消える。

「あ……………待ってくれ」

我に返ったリインは慌てて青年を追い駆けた。

青年が無事ならばそれで構わない。

だがここがどこで、街の方角が知りたいリインは走り去った赤毛の青年を探す。

「……………見失ったか」

余程森の中を走り慣れているのか、リインは結局青年を見つけることはできなかった。

「でも川を見つけられたのは僥倖だな」

クロスベルの地図を頭に思い浮かべながらリインは川に沿って下流へと歩く。

すると先程とは違う、リインにとって見知った青年の姿を見つけた。

「ヨシユアさん!?!」

黒髪の青年は川辺に膝を着き、川底を覗き込んでいる。

彼には戻れない自分に代わって妹たちの保護を頼んでいただけに、気持ち逸らせて駆け寄る。

「ヨシユ——」

「ふつ……………今日も僕はなんて美しいんだ」

水面に映る自分の顔にヨシユアは悦に浸って酔いしれていた。

「……………」

リインの存在に気付かず、ヨシユアは顎に手を当て角度をつけてみたり、髪をかき上げて様々なポーズを水面に移して一番美しく映るポーズを模索する。

「オレはナニもミていない」

リインは回れ右をしてその場を後にした。

「まさかヨシユアさんにあんな趣味があったとは……」

幸いなことにヨシユアに気取られることなくあの場から逃げ出すことに成功した。

「人とは分からないものだな」

リインが知っているヨシユアは確かに女性に変装しても違和感のない端正な顔立ちをしている。

だが、今まで一度も彼はナルシストであることをリインに気取らせろことはなかった。

「流石は元執行者と言うべきか……」

かつて同じ女性を好きになった男同志としてはちよつと複雑な気持ちになるリインだった。

「いや、それよりヨシユアさんがいたと言う事は近くに——」

「おや、リイン君じゃないか」

青い空、森の中、リインの前に、全裸の男が現れた。

「破甲拳っ！」

「ぐふっ!」

リインの先制攻撃、クリティカル。全裸は倒れた。

「あれ……?」

拳の手応えにリインは若干の違和感を覚え、打たれた腹を抑えて蹲る全裸に声を掛ける。

「オオオオオオオオ……」

「オリヴァルト殿下ですよね?」

リインの呼び掛けに全裸のオリヴァルトは唸るのをやめると、見せつけるようにポーズを極めながら名乗る。

「そうさ。何を隠そうボクはエレボニア帝国の皇子、オリヴァルト・ライゼ・アルノールさ」

「……………本当に?」

「ふ……………この二つとない美しい肉体美こそ何よりの証拠だろ?」

ところでリイン君、イメージチェンジでもしたのかい? その白髪と灼眼の瞳、なかなか似合っているじゃないか?」

「はぁ……」

《鬼の力》が発現していた状態をオリヴァルトは何度も見ているはずなのに、まるで初めて見たような反応にリインは首を傾げる。

彼に感じる違和感が大きくなる。

「でも先程の腹を殴った感覚が……」

「うん……?」

「随分柔らかかったですね」

「やわらかいつ!?」

リインの眩きに全裸はくわつと目を見開く。

「いつもはもつと固い手応えと言うか……引き締まっていると言うか……今は随分と腹筋が落ちているような?」

「ぐはっ!? ぐふっ! かはっ!?」

思索して違和感の正体を突き止めようとするリインが言葉を呟く度にオリヴァルトは致命傷を負わされたように痙攣する。

誰に見せても恥ずかしくない肉体美だからこそ、オリヴァルトは惜しげもなく全裸でいた。

しかし、リインの指摘はオリヴァルトの自信を真つ向から打ち砕く暴力だった。

「り……リイン君のばかああああっ!」

「オリヴァルト殿下!」

「ミューラーに言いつけてやるうううううっ!」

捨て台詞を残して走り去る全裸にリインは呆然と立ち尽くした。

とりあえずオリヴァルトが去っていた方角にリインは歩を進めることにした。

「いったい何なんだ?」

ヨシユアとオリヴァルト。

その二人にとつともない違和感を覚えずにはいられない。いや、平常運転なのかもしれないが、ともかく何かがおかしいと考える。

「おはようございますっ! ティータ先輩っ!」

「はわわっ……やめてください! アガットさん! あ、でもこれはこれで……」

「ふふ、今日も愚民どもが囁いていますね」

「ふへへ、かわいいものがいっぱい……しあわせ……」

「何だこれは……」

街の中にはリインのよく知っている人達がいた。

しかし、彼らはそれぞれ立場があり、多忙な身。

もうリベールの異変の時のように一堂に会する場がないとさえ思っていた仲間たちにリインは驚き――

「あれ？」

黒髪の少年がリインの前で振り返った。

その少年はアメジストの瞳で白髪灼眼のリインをジッと見つめる。

そして――

「俺がいるっ!？」

黒髪紫眼の少年は《鬼の力》を顕現させた自分の姿に死ぬほどの驚愕の声を上げるのだった。

・*

「なるほど……」

リインの前でピツカードと呼ばれる食用獣が腕を組んで唸る。

「本来の流れとは別世界のリイン君ですか」

知患者のように振る舞うピツカードの名前はラツピイ。

リインは彼からこの世界について一通りの説明を受ける。

「異世界ザナドウか……にわかには信じられないな」

「それは俺も同じだ」

リインの呟きにリインは頷く。

「まあ、私たちもこの空間の全てを把握できていないのでそういうこともあるでしょう……」

現に、ゼムリア大陸以外の世界からもやって来る人達は多いですし、時間軸さえ違いますから」

ラツピイはよくあることだとリインの疑惑を流す。

「それで俺は元の世界に帰れるんでしょうか？」

「ちよつと待つてくれるかな。君の情報を探してみよう」
そう言うとならっぴいは分厚い辞書のような本を開く。

彼の邪魔をしてはいけないと、リインは口を噤みリインと目が合った。

「えつと……」

「はは……」

色違いとはいへ、同じ顔を鏡以外で見ると複雑な気持ちになる。

「君は俺なんだろうけど、随分違うみたいだな？」

「俺と君の違いは老師に修行を打ち切られた時、リベールに家出したことだろうか」

「家出……もしかして……その髪と……《鬼の力》と関係があるのか？」

リインの瞳に縋るような光が宿るのをリインは見逃さなかった。

年齢は同じであるが、辿った軌跡が違う二人の心の持ちようには決定的な差がついていた。

「まあ……いろいろあつたからな……」

彼はおそらく初恋さえ経験していないのだろう。

《鬼の力》に畏れを抱いている彼にそんな余裕がないことは誰よりも理解しているが、自分の話ではアネラスがしてくれたようにその蟠りを解きほぐすことはできないだろう。

「教えてくれないか」

真つ直ぐに自分を見つめるリインに自分はエステル達にこんな風に見られていたのかと表情に出さないように苦笑いする。

語った所で意味はない。

それでも自分が一步でも前に進める切っ掛けになるのならと、リインは懐かしむ気持ちで言葉を選ぶ。

「そうだな……何から話そうか……」

リインは出された紅茶を口に含み――

「分かりました。君は超帝国人リイン・シユバルツァー君ですね」

次の瞬間、リイン（超）はむせた。

「ゴホッ！　ゴホッ！」

「超帝国人……何ですかそれは!？」

「ちよ、ちよつと待て俺っ!？」

目をキラキラさせて興味津々に詰め寄って来るリインにリイン(超)は本当に彼が自分なのか疑う。

どちらかと言えば、それはクリスに近い興奮。

こんなだったかとリイン(超)は頭を悩ます。

「もしかしてこれが《理》の歪み?」

「かもしれないね……」

このザナドゥに来た者はその時点で《理》を歪まされていますから、貴方にも少なからず変わったところがあるでしょう?」

「ああ、それなら大丈夫です」

ラツピイの言葉にリインは問題ないと答える。

「と言うと?」

「その歪みってこの猫を肩に乗せたような重さのことですよ?」

この程度の「歪み」にどうこうされるほど、軟な鍛え方はしていません」

「ネコ……」

数多くの者達がザナドゥを訪れているのだが、「歪み」をちよつとした荷物と表現して諍えている者などラツピイは見たことはない。

「なるほどこれが《超帝国人》!」

「ラツピイさんっ!？」

果たして、リイン・シュバルツァーは元の世界線のゼムリア大陸に戻れるのか。

このキャラが歪んだザナドゥの地で何を得て、何を失うのか。

この時のリインはあんなことになるとは想像することもしていなかった。

こんな一幕

「リイン・シュバルツァー。手合わせをしませんか?」

「アリアンロードさん?」

鎧を着込んで槍をブンブンと振ったアリアンロードが現れた。

「このザナドゥで巡り合ったのも何かの縁……」

立场上、私の世界の貴方とは馴れ合う事はできませんが、良ければ《騎神》の使い方と言うものを教えて差し上げましょう」

「それはありがたいですね」

凜々しい顔で提案するアリアンロードにリインは嬉しそうに快諾する。

（見たところ、このリイン・シュバルツァーは内戦が始まったばかりの頃……）

なかなかの使い手に育っているようですが、《騎神》を使った戦闘には慣れていないでしょう……

フフ、ここで先達である起動者の威厳を見せ手解きをすれば、私はリイン・シュバルツァーの師匠……あわよくばお母さんと……フフ

「うぐぐ……マスターがちゃんと鎧を纏ってくれたのは良いですが……ぐぬぬぬ」

凜々しい顔を保つ内心で歪んだことを考えているアリアンロード。

そしてその背後で頭を抱えて嫉妬を燃やすデユバリイ。

「出でよ、《銀の騎神》アルグレオンツ！ さあリイン！ 貴方も《騎神》を出しなさい！」

「ええ……降臨せよっ！ 《零の騎神》ゾア・ギルステインツ！」

「……………リイン・シュバルツァー……それは何ですか？」

「キーアが《零の至宝》の力で三つの《神機》を融合させてつくった八番目の《騎神》です」

「……………そうですか……………」

アリアンロードは凜々しい顔を保ちながら訳が分からないと思考を停止させる。

「俺はこの《騎神》を調伏したばかり、250年も乗りこなしている貴方には圧倒的に劣りますが、ですので胸を貸して戴きます」

「良いでしょうっ！ 来なさい！ リイン・シュバルツァーっ！」

*

その後、何とか威厳を保つことに成功したアリアンロードはリインとお茶会をする。

リイン、リベルの四輪の塔でアリアンロードと初めて会った時のことを話す。

アリアンロードは微笑んでいる。

リイン、リベルのアーキでアリアンロードとガチで戦った時のことを話す。

アリアンロードは微笑んでいる。

リイン、影の国でアルグレオンと戦った時のことを話す。

アリアンロードは微笑んでいる。

リイン、温泉郷ユミルに結社が慰安旅行に来た時のことを話す。

アリアンロードは――

リイン、〃八耀〃の太刀のことを話す。

アリアンロードは――

リイン、クロスベルで本気のアルグレオンと戦った時のことを話す。

アリアンロードは――

リイン、自分は《黒》にしてやられたことを嘆く。

アリアンロードはリインを慰めた。

リイン、話を終えて去って行く。

アリアンロードは微笑んでリインを見送った。

「フフ、どうやら私はまだ《黒》の存在を甘く見ていたようですね……《理》などに歪められている場合ではないですね……鍛え直す必要があるようです。待っていなさい……《鋼の聖女》」

アリアンロードは《黒》――ではなく別の世界の自分に対抗意識を燃やした。